
英雄伝説 空の軌跡 - ソラノキセキ - FC・SC・the 3rd

伊集院龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 空の軌跡 - ソラノキセキ - FC・SC・the 3rd

【Nコード】

N3106L

【作者名】

伊集院龍也

【あらすじ】

導力機器と呼ばれるオーブメント……。その機械は人々に豊かな暮らしをもたらすが、その逆があることも然り……。ゼムリア大陸にあるリベール王国と呼ばれるオーブメント技術が発達した国。この国で大陸全土を震撼させる大事件が発生する……。そして、人々はその真価を問われることになる……。これは、若き少女と少年の長編冒険物語。FC編完結しました。続いてオリキャラを含んだSC編もお楽しみください。

FC編完結しました。続いてオリ

第1章 父、旅立つ(1) (前書き)

英雄伝説 空の軌跡 - ソラノキセキ - FC・SC・the 3rd

開幕です！

これからどんどん楽しませていきたいと思いますので、ぜひ楽しんで
しく願います！

第1章 父、旅立つ(1)

ブライト家

「……………う……………まぶし……………」

栗色の髪の毛と赤い瞳を持つエステル・ブライトは窓から差し込んでくる日光の眩しさのために目を覚ました。

「ふわあああああああ……………」

背伸びをしてベッドから体を起こす。

「ん……………つ、よく寝たあ……………つ！」

少し寝すぎたせいか体が鈍っているような気がした。

「……………えっと……………今朝の当番は父さんだったっけ」

ブライト家では家族が朝食等の準備は当番制になっている。

「それじゃあ……………ヨシユアはまだ寝ているのかな？」

その時、外からハーモニカの音が聞こえてきた。

「あは、起きてるみたいね？ よーし……………あたしも早く支度しよつと……………」

そう言つて、エステルはベッドから出て支度を始めた。

ブライト家 テラス

ヨシユアはハーモニカを奏でていた。

「ひゅーひゅー！ やるじゃない、ヨシユア」

エステルは拍手をした。

「おはよう、エステル」

漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つ少年、ヨシユア・ブライトは起きてきたエステルに挨拶した。

「ごめん。もしかして起こしちゃった？」

ヨシユアが申し訳なさそうに言った。

「うっん。ちょうど起きたところよ」

そう言うと、エステルはヨシユアの横に立った。

「でも、ヨシユアってば朝っぱらからキザなんだから。や、お姉さん、思わず聞きほれちゃったわ？」

そう言つてエステルはヨシユアをからかった。

「なにがお姉さんだか。僕と同年のくせにさ」

ヨシユアは呆れた顔をした。

「チツチツチツ、甘いわね。同年でも、この家ではあたしの方が先輩なんだから。言うなれば姉弟子ってやつ？」

エステルは指を振りながら自慢げに言った。

「はいはい、良かったね」

ヨシユアはどうでも良さそうに言った。

「あ、なんか投げやり」

エステルは不満そうに言った。

「でも、ホント良い曲よね。明るいんだけど、どこか切なくて……。他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな。あれ……。何て名前だったっけ？」

エステルは考え込んだ。

「星の在り処だよ」

ヨシユアが言った。

「そうそう、『星の在り処』。あーあ、あたしもハーモニカ、うまく吹けたらいいんだけどな。簡単そうに見えてこれがけっこう難しいのよね」

エステルは溜息をついた。

「君がやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……。要は集中力の問題だと思うよ」

ヨシユアは説明した。それだけではないと思うけど……

「うーん、全身を使わない作業って何だか眠くなるのよね」

エステルは苦い顔をした。

「ヨシユアも、ハーモニカもいいけどもっとアクティブに行動しな

くちや。ヨシユアの趣味って、あとは読書と武器の手入れくらいでしょ？今時インドアばかりじゃ女の子のハートは掴めないわよ？」

エステルは威張りながら言った。上から目線が嫌ですね。

「悪かったね、ウケが悪くて。そういう君こそ趣味に偏りがあると思うけど。釣りとか虫取りとかスポーツシューズ集めとか」

ヨシユアは言った。

「むぐっ……いいじゃん、好きなんだもん。って言うか、虫取りなんかとつくの昔に卒業したってば」

エステルはヨシユアを軽く睨んだ。

「うーん、本当かなあ？」

ヨシユアが疑った。

その時、バルコニーの下から男の声がした。

「おい。エステル、ヨシユア」

「あ、父さん、おはよ！」

「おはよう父さん。朝食の用意、もう出来たんだ？」

2人が返事をした。この男性がエステルとヨシユアの父、カシウス・ブライトである。

「ああ、バッチリだぞ。2人とも、冷めないうちにとっと降りてこい」

カシウスが2人を呼んだ。

「りょーかい！」

「すぐに行くよ」

2人はすぐに食卓へと向かった。

「ごちそうさま〜！うーん。お腹いっぱいになっちゃった」

エステルはお腹をさすりながら満足げに言った。

「朝からよく食べるなあ……」

ヨシユアは半ばその食事っぷりに呆れている。

「いいじゃん。食う子と寝る子は良く育つよ」

エステルは自慢げに言った。太ることは気にしていないのか？

「まあ、しっかり喰ってせいぜい気合いを入れるんだな。お前たち、今日はギルドで研修の仕上げがあるんだろう？」

カシウスが2人に尋ねた。

「うん。今までのおさらいだけどね」

ヨシユアが言った。

「それが終われば、あたしたちも父さんと同じ『遊撃士』よ。もう、子供扱いさせないんだから！」

エステルは高らかに言った。

「フフン、まだまだ青いな。最初になれるのは《準遊撃士》。つまり見習いにすぎん。一人前になりたかったら早く《正遊撃士》になることだな」

カシウスがまだまだと言わんばかりに説明した。

「むむつ、上等じゃない」

エステルはむつとした。

「見てなさいよ。いっぱい功績を上げまくって父さんを追い越してやるんだから！」

エステルは負けじと言った。

「はっはっはっ。やれるもんならやってみろ」

カシウスは高らかに笑った。

「なに張り合ってるんだか……。エステル、油断は禁物だよ。今日は最後に試験だつてあるんだからね」

ヨシユアは言った。

「え？」

「……………試験つて、ナニ？」

エステルは何も分かっていない様子だった。

「ま、まさか……覚えていないとか言わないよね？研修が身に付いているかどうか確認するためのテストだよ。合格できなかつたら補

習だってシエラさんが言ってたじゃないか」

ヨシユアは完全に呆れ顔だ。

「やっぱ……カンペキに忘れてたわ……。そういえばシエラ姉がそんなこと言ってたような気も……。まーでも、何とかなるって」
エステルは樂觀的だ。

「はあ、君って子は……ノンキというか、そそっかしいというか」
ヨシユアは溜息をついた。

「まったくもって嘆かわしい。この楽天的な性格はいったい誰に似たんだろうな」

カシウスも溜息をついた。

「し、失礼ね。父さんほどじゃないってば！」

エステルは反論した。

「まったく、似たもの父娘だな。まあいいや。エステル、そろそろ町に行こう。ギルドでシエラさんが待ってるよ」

ヨシユアが言った。

「ん、わかった。シエラ姉を待たせると恐いもんね」

そう言つて、エステル、ヨシユアは席を立った。

「あ、そうだ父さん。今夜の食事当番、あたしだけど何か食べたいものもある？リクエスト、受け付けとくよ？」

エステルが言った。

「ふむ、食べたいものか……」

カシウスは考えた。

「………………。ルーアン風、魚の蒸し焼きバルサミコ酢風味なんてどうだ？」

カシウスが考えた末に言った。なんだよ、その食べ物は!?

「な、なにソレ？」

エステルは全く訳が分からなさそうだ。いきなり言われたら、当然そうなるね。

「それはエステルにはちょっと無理だと思っけど……」
ヨシユアは苦笑した。

「うむ、言ってみただけだ。いつもと同じ、魚のフライかオムレットでいいさ。無理をしないで喰えるものだけ作ってくれ」
カシウスは笑って言った。ちよつと失礼だな。

「し、失礼なオヤジねえ。反論できないのが悔しいけど……」
エステルは不満顔だ。

「ああ、そのかわり頼みがある。雑貨屋で『リベール通信』というニュース誌を買ってきてくれ。今日、最新号が入荷するはずだ」
カシウスが言った。

「わかった。雑貨屋で『リベール通信』ね」

そう言うと、カシウスはエステルにお金を渡した。

「残ったら小遣いにしていいぞ。ただし、無駄遣いはするなよ?」

カシウスが言った。

「やった、ありがと!」

エステルは喜んだ。

「それじゃあ父さん、行ってくるよ」

ヨシユアは言った。

「おお、すっかりやれよ。シエラザードよろしくな」

カシウスがそう言うと、2人は家を後にした。

第1章 父、旅立つ(1) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

準遊撃士になるため、最終試験に臨む2人。エステルは無事合格できるのか!?

第1章 父、旅立つ(2)

地方都市ロレント

「ちようどいい時間だね。早すぎもせず、遅すぎもしいってとかな」

ヨシユアが言った。

「うう、教会の日曜学校を卒業したばかりなのに……。遊撃士ブレイサーになるためにこんなに勉強させられるなんて夢にも思わなかったよ」

エステルは気だるそうに言った。

「それも今日が最後じゃないか。好きで志望したんだからこのくらいは苦勞して当然だよ」

ヨシユアは言った。

「それもそっか」

「……よし！最後までいい気合いを入れてシエラ姉のシゴキに耐えるぞっ！」

エステルは気合いを入れた。前向きでいいですね。

「気合い、入ったみたいだね」

「それじゃあ、すぐそこにある遊撃士協会ブレイサーギルドに入るっか」
ヨシユアが言った。

遊撃士協会ロレント支部

「あら、おはよう。エステル、ヨシユア」

遊撃士協会の受付をしているアイナである。

「アイナさん、おはよう！」

「おはようございます」

2人が挨拶した。

「シエラ姉、もう来てる？」
エステルがアイナに尋ねた。
「ええ、2階で待ってるわ。今日の研修が終われば晴れてブレイサーの仲間入りね。2人とも頑張って」
アイナが励ました。
「うん、ありがとう！」
「頑張ります」
2人は2階へと向かった。

遊撃士協会2階

「……………」
「『星』と『吊し人』……………」
「『隠者』と『魔術師』……………」
「そして逆位置の『運命の輪』……………」
「これは難しいわね。どう読み解いたらいいのか……………」
タロットの前で考えている銀髪の女性こそシエラザード・ハーヴェイである。「銀閃」の異名をもつ正遊撃士である。
「シエラ姉、おっはよー！」
エステルが元気良く現れた。
「あら、エステル、ヨシユア。めずらしいわね。こんな早くに来るなんて」
シエラザードは意外そうな顔をした。
「えへへ、最後の研修くらいはね。とっとと終わらせてブレイサーになってやるんだから！」
エステルは言い張った。
「はあ……………いつも意気込みはいいんだけど。ま、その心意気に応えて今日のまとめは厳しく行くからね。覚悟しときなさい」
シエラザードは言った。

「え〜っ、そんなぁ……………」

エステルは疲れた顔をした。萎えるのが早すぎるよ、エステルさん……………」

「お・だ・ま・り。毎回毎回、教えたことを次々と忘れてくれちゃつて……………」

「そのザルみたいな脳みそからこぼれ落ちないようにするためよ」
シエラザードはエステルに厳しく言った。

「え〜ん、ヨシユアぁ！シエラ姉がいぢめるよ〜！」

エステルがヨシユアにすがった。

「大丈夫ですよ、シエラさん」

「確かにエステルは物覚えが悪くて。ついでに無闇とお人好しで余計なお節介が大好きだけど……………」

「カンの良さはピカイチだからオーブメントも実戦で覚えます」

ヨシユアがシエラザードに言った。

「はぁ、こうなったらそれに期待するしかないわね……………」

シエラザードは溜息をついた。

「ちよつとヨシユア……………」

「なんか全然フォローしてるように聞こえないんですけどっ？」

エステルがヨシユアを白い目で見た。

「心外だな。君の美点を正直に言ったのに」

ヨシユアは笑った。

「まったくもっ……………」

エステルが肩をすくめた。

「あ、ところでシエラ姉。タロットで何を占ってたの？なんだか難しい顔してたけど」

エステルがシエラザードに尋ねた。

「ああ、これね。近い将来、身の回りで起きる事を漠然と占つてみたんだけど……………」

「ちよつと調子が悪いみたい。読み解くことが出来なかったわ」

シエラザードはタロットカードを見つめた。

「読み解くことが出来ない??」

「へえ……そんな事つてあるんですか?」

2人は不思議そうな顔をした。

「あまりに意味深な形になると逆に解釈に困ることがあるのよね」

「まあ、それはいいわ。最後の研修を始めるわよ」

「今まで習ったことを一通りおさらいするわよ。ブレイサーとして活動するのに必要な最低限の常識だからね」

「特にエステル。ちゃんと聞いておきなさい」

シエラザードはエステルに釘を刺した。

「ういゝっす」

適当な返事をエステルはした。大丈夫かいな。

「まず、オーブメントについて」

「《導力》と呼ばれるエネルギーで動く機械仕掛けのユニットが《導力器》よ。七耀石^{セブチウム}を加工した結晶回路^{クォーツ}が中に組み込まれていて、

その機構に応じてさまざまな現象を引き起こすことができるわ。最初に発明されてから50年くらいしか経っていないけど……今では証明、暖房などの日用品から兵器、魔法、飛行船まで、あらゆるものにオーブメントの力が利用されているのよね。ちなみに、この技術革新は一般的に《導力革命》と呼ばれているわ」

「次に、遊撃士について」

「遊撃士^{ブレイサー}というのは、地域の平和と民間人の保護のために働く調査と戦闘のスペシャリストよ。魔獣退治や犯罪防止だけでなく荷物の護衛から落とし物の搜索まで様々な形で地域に貢献する仕事ね。各地

の遊撃士を束ねているのが大陸全土に支部を持つ遊撃士協会よ」
フレイサーギルド

「最後は、リベール王国についてね」

「あたしたちの住む、このリベールはゼムリア大陸の西部に位置する豊かな自然と伝統に育まれた王国よ。大陸でも有数の七耀石セブチウムの産地で、それを利用したオーブメントの開発でも高度な技術を誇っているわ。リベールにとってオーブメント技術は周辺の大国と渡り合いながら独立を守っていくための重要な柱ね。10年前、エレボニア帝国に侵略された時も最後に王国軍を救ったのは、導力機関オバルエンジンで空を駆ける飛行船を利用した作戦だったわ。まあ、帝国とは今も微妙な関係だけどアリシア女王陛下の優れた政治手腕もあって今のリベールは、おおむね平和と言えるわね」

「さてと……復習はこれくらいで勘弁してあげるか。今日はやるこ
とが山ほどあるんだからとっとと実地研修に進むわよ」

シエラザードが言った。

「ねえ、シエラ姉。実地研修って今までの研修と何が違うの?」

エステルがシエラザードに尋ねた。

「実地ってというのは現場を体験してもらうってことよ。これから2
人には遊撃士の仕事に必要なことを一通りやってもらおうわ」

シエラザードが説明した。

「……それってつまり。机でお勉強、じゃないってこと?」

エステルが目を輝かせた。

「ええ、もちろん違うわよ。あちこちに出かけていって実際に体を
動かしてもらおうわ。たっぷり汗かいてもらうつもりだから楽しみに
してなさい」

シエラザードが言った。

「えへへ、助かったわ」。体を動かせるんなら今までの研修よりず

「っつとラクよ。もう、心配して損しちゃった」

エステルは楽しそうだ。この変わり身は素晴らしい。

「なんだか急に元気になったね」

ヨシユアが言った。

「その笑顔が最後まで続くといいんだけど……」

シエラザードが先行き不安そうな顔をした。

「……さて、と最初の実地研修に行きましょうか」

シエラザードが席を立った。

「おう！」

エステルが元気良く言った。

第1章 父、旅立つ(2) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ始まる最後の研修。エステルは余裕の気持ちが出てきたが、果たして!?

第1章 父、旅立つ(3)

遊撃士協会1階

「最初の研修は仕事内容の確認よ。……その前に、まず2人に渡すものがあるわ。アイナ、もう用意できてる?」

シエラザードはアイナに尋ねた。

「ええ、いいわよ」

アイナが答えた。

「じゃ、2人とももらってきなさい」

そうして、エステル、ヨシユアはアイナのところにいった。

「大切なものだからなくさないようにね」

2人は手帳のようなものを受け取った。

「それはブレイサー手帳といって仕事の記録を残すための公式な手帳よ。どんな話を聞いたのか、どこで何を見つけたのか……。些細な出来事が手掛かりになることも多いわ。細かいことでも必ず記録を残すようにね」

シエラザードは説明した。

「分かりました」

とヨシユア。真面目ですね。

「げっ、ちよつと面倒かも……」

とエステル。こっちは不真面目。

「あら?気のせいかしら。返事がひとつしか聞こえなかったけど?」

シエラザードはエステルを見た。

「あ、あははは……」

エステルは苦笑した。

「記録を残すことはブレイサーの大事な義務よ。面倒くさがらず、しっかりとやりなさい」

シエラザードは念をおした。

「はあくい、分かりました」

エステルは渋々返事をした。

「ふむ、分かれればよろしい。じゃあ、その掲示板に依頼が載っているから、手帳にメモしなさい。その次は、工房で勉強するわよ」

メルダース工房

「ここでは工房の利用法を勉強するわ。工房では、オーバルアイツ導力魔法を使うための専用のオーブメントを改造したり支援用のクオーツを合成したりできるの。アイツには多彩な効果があるから使いこなせるようになるれば色々と便利よ。ブレイサー稼業っていうのは危険と隣り合わせの職業だから工房とも長いお付き合いになるわ」と、シエラザードが説明した。

「……ま、工房で説明できるのはこれくらいか……。あとは自分達で色々試してみるのがいいわ。さあて、次はいよいよお待ちかねの認定試験ね」

シエラザードが言った。

「……え？し、試験って、なにそれ？」

エステルが不思議そうな顔をした。もう忘れているエステル……。

「……まさか、本気で忘れたの？今朝も話したばかりじゃない」
ヨシユアは呆れ顔だ。

「あ……。そういえば、聞いたような聞いていないような……」

エステルは顔を赤らめた。

「はあ……。ホント期待を裏切らない子ねえ。まあいいわ。とにかく試験場に行くわよ」

シエラザードが言った。

「えっ！？も、もう！？ちょ、ちょっと待って、まだ心の準備が……」

エステルは慌てた。

「ほらっ、きりきり歩きなさい」

シエラザードが有無を言わず、エステルを首を掴んで引きずって工房を後にした。

「ヨシユア、お助け〜」

外からエステルの声が聞こえる。

「メルダースさん、フライデイさん。色々ありがとうございます
た」

ヨシユアはエステルを無視した。

「こらー、ヨシユア！覚えときなさいよ〜！」
外からエステルの叫び声……。

ロレント市 地下水路入口

「ようやく研修も大詰めね。これから2人に認定試験を受けてもら
うわ。今までの研修の成果が発揮されることを期待しているからね」
と、シエラザード。

「はい」

ヨシユアが返事をした。

「……………」

エステルが口を開けたまま周りを見渡した。

「エステル、どうしたの？」

ヨシユアが尋ねた。

「……ねえ、シエラ姉」

エステルがシエラザードに尋ねた。

「なに？」

シエラザードが答えた。

「……もしかして、試験つてペーパーテストじゃないの？」

エステルが不思議そうに聞いた。

「はあ？エステル、あんたさっき掲示板を見たでしょ」

シエラザードは呆れ顔だ。

「うん、見たけど？」
と、エステル。

「地下水路の搜索をするって書いてあったと思うんだけど。あれが最終試験よ」

とシエラザード。

「……………」
「はああく、良かったあく。ああ、空の女神さま……………。地下水路を作って下さった情け深いお心に感謝を捧げます」

エステルは安堵の息をついた。そんなことで感謝された女神は呆れ顔をしているだろう。

「ひよつとして…………筆記試験だと思ってたの？だから工房であんなに騒いでたのか…………」

ヨシユアは呆れていた。

「ふつ、懐かしいわね。今となつてはいい思い出だわ」

エステルは調子が良さそうに言った。

「はあ、本当に僕たち、ちゃんと卒業できるのかな……………」

ヨシユアは不安そうだ。

「なくによ、失礼しちゃうわね」

エステルは噛み付いた。

「はいはい、2人ともお喋りはそこまで。試験前なんだから、もっと緊張感を持ちなさい。試験に落第したらキツイ補習を受けてもらうわよ」

シエラザードは言った。

「えへへ、大丈夫だつてば。さつ、早く試験しちゃいませよ！」

エステルはさつきとは打って変わって調子が良さそうだ。ホンマ、色々と表情を変える忙せわしない人ですね。

「ま、自信があるなら結果で証明してもらいましょうか。…………さて、掲示板にもあった通り、試験の課題は地下水路内の搜索よ。搜索対象はどこかにある宝箱の中身でそれを回収することが目的になるわ。水路の構造はすごく単純だから迷う心配はないと思うけど…………。本

「あ、それはそうかも……」

エステルは納得した。

「どうしても気になるなら、あとでシエラさんをお願いしてみれば？……さて、それじゃ、帰り道も集中していこう」

ヨシユアが言った。

「オツケー！」

2人はさっさと地上へと戻った。

ロレント市 地下水路入口

「2人ともお疲れ。一応、規則があるんで搜索対象を確認させてちょうだい」

そうして小箱を2つシエラザードに渡した。

「……うん、本物ね。途中で開いた形跡もなし、と」
シエラザードが小箱をチェックした。

「（あ、あぶな〜）」

「（……やっぱりね）」
と2人。

「2人ともおめでとう。実技試験は合格よ」

シエラザードは労った。

「ふふん、あのくらい楽勝よ。……で、シエラ姉。その小箱には何が入ってるの？」

エステルは尋ねた。

「それは研修が終わってからの楽しみ。さあ、お喋りはこれくらいにしましょう。まだ研修は終わったわけじゃないんだから」

シエラザードは言った。

「あれ、そうなの？だって試験は合格なんですよ？」

エステルは不思議そうに言った。

「最後に報告についての研修が残っているわ。お疲れのところ悪い

けど、このままギルドに戻るわよ」

シエラザードが先に歩きだした。

「はあ、まだあるのかあ。でも、仕方ないわ。ここが踏ん張りどころね」

「そうだね。あとちょっとみたいだし」

エステルとヨシユアもついて行った。

遊撃士協会 ロレント支部

「最後の研修は報告の仕方についてね。どんな仕事でも、達成したら必ずギルドに報告しないとだめよ。どう解決したのか、その経過を報告するのもブレイサーの仕事なんだから。報告を受け付けるのは各ギルドの窓口よ。このロレントなら、2人ともよく知ってるアイナがその担当ね。あ、ちなみに報酬もそこで支払われるから」

シエラザードが説明した。

「今後ともよろしくね、お2人さん」

アイナが言った。

「じゃ、とにかく自分達で報告してごらんなさい」

2人は受付へ向かった。

「お疲れさま。無事に目的を達成できたみたいね。仕事の手際によつては報酬が増減することもあるから注意してね」

アイナが説明した。

「さあ、残るは最後の仕上げね。ようやくギルドの2Fにもどれるわ。じゃあまたね、アイナ。忙しいトコごめん」

と、シエラザードはアイナに言った。

「ううん、気にしないで。大事な戦力を育てるためだもの。2人に

はバリバリ働いてもらうつもりだし」

アイナは爽やかに言った。

「ば、バリバリ……」

「……覚悟しといた方がいいみたいだね」

2人は呟いた。

ギルド2F

「2人とも、お疲れさま。これで研修の全課程は修了よ。あとは実際の経験で身に付けるようにね。さて……と」

シエラザードは2つの小箱を取り出した。

「あ、その箱は……」

エステルが身を乗り出した。

「そう、さっきの試験で回収してもらった小箱ね。中に何が入ってるのか随分、気になってたみたいけど」

シエラザードは言った。

「ひよつとして、もう開けていいの？」

エステルが尋ねた。

「ええ、いいわよ。2人とも中身を確認めてご覧なさい」

と、シエラザード。

「えへへっ、やった」

エステルは喜んだ。

「それでは……」

2人は小箱を開けた。

「この紋章は……」
エンブレム

「じゃあ、これで僕たちも？」

2人は驚いた。

「……コホン。エステル・ブライト。ヨシユア・ブライト。本日もって兩名を『準遊撃士』に任命する。以後は遊撃士協会の一員と

して人々の暮らしと平和を守るため、そして正義を貫くために働くこと。……2人ともおめでと。これからはお仲間ってわけね」
シエラザードが言った。

「やったねヨシユア！これで晴れてあたしたちもギルドの一員よ」
エステルは喜んだ。

「そうか、僕がブレイサーか……。………………。はは、少し不思議な気分だな」

ただ、ヨシユアは複雑な気持ちのようだった。

「もう、ヨシユアだったら。しみりしてないで、もっとパーツと喜ばないと！ひゃっほー、やったあつ」

エステルはいきなり騒ぎ出した。正直、うるさい。

「はしやぎすぎだよ、エステル」

ヨシユアはエステルを制した。

「ふふ、さてと……。あたしはそろそろ失礼するわ。たまつてた仕事を片付けなくちゃいけないしね」

シエラザードが席を立った。

「そっか、忙しい合間に毎日付き合ってくれたんだ。シエラ姉、ホントありがとね」

「お世話になりました」

エステルとヨシユアが礼を言った。

「ま、新人を育てるのもブレイサーの義務ってやつよ。あたしも昔、カシウス先生に研修でお世話になったもんだわ」

シエラザードが昔を振り返った。

「あ、それで父さんのこと先生なんて呼んでるんだっけ？」
と、エステル。

「それだけが理由じゃないけどね。あんた達も早く一人前になって後輩を指導できるようになんなさい。そして、ゆくゆくは先生みたいな立派なブレイサーになれるようにね。それじゃあ、またね」
そういつて、シエラザードは降りていった。

「うーん、判らないわね」

エステルは唸った。

「なにがさ？」

ヨシユアが尋ねた。

「『銀閃のシエラガード』といえは若手ブレイサーの中でも1、2を争う凄腕って聞いているけど。どうして父さんのことあんなに高く買っているのかな？娘のあたしが言うのも何だけど、しょっちゅう家を留守にしている不良中年にしか見えないんだけど」と、エステルは言った。

「不良中年ね……。まあ、エステルから見れば、そう見えるのも無理はないけど」

ヨシユアは目を瞑って言った。

「えっ？」

エステルはヨシユアに聞き返そうとした。

「……いや、何でもない。さあ、今日は早く家に帰ろう。無事にブレイサーになれた事を父さんに報告しなくちゃ」

ヨシユアが言った。

「うん、そうね！」

そうして、2人は遊撃士協会を後にした。

第1章 父、旅立つ(3) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

見事、準遊撃士資格を得てブレイサーの仲間入りを果たした2人。しかし、その矢先に事件が起こる！

第1章 父、旅立つ(4)

ロレント市内

「おい、早く来いよ〜！」

活発に走り回っている少年はルックだ。

「ま、待ってよ〜！」

一方でルックを追いかけている少年はパットである。

「あれ、あんたたち……」

エステルがルックとパットに話しかけた。

「げげっ、エステル!？」

ルックが驚いて飛び跳ねた。

「あ、ヨシユアお兄ちゃん」

パットは冷静だ。

「失礼ね〜。なによ、その『げげっ』ってのは？急いでるみたいだけど、どこかに遊びに行くつもり？気をつけないとダメよ〜。街道には魔獣もいるんだからね」

エステルが言った。

「ふんだ、うっさいな。オトコのやることにオンナが口を出さないでくれない？ブレイサーでもないくせにさあ」

ルックはエステルに噛み付いた。

「ふっふっふっ……甘い！甘すぎるわよ、ルック！パーゼル農園のミルクより甘いわ！」

エステルは胸を張った。なんやねん、そのたとえば!？」

「へっ……?ま、まさか……」

ルックが後ずさりした。

「ホホ、つい先程をもちまして、あたくし遊撃士資格を得ましたの。

真正正銘、本物のブ・レ・イ・サ・あ」

エステルはしてやったりといった顔だ。

「見習いみたいなもんだから威張れるような立場じゃないけどね」

ヨシユアは後ろから言った。

「そこ、水をささないの！」

エステルはヨシユアをたしなめた。

「わ、すごいすごい！お姉ちゃんたち、やったね！」

パットは拍手をした。

「あー、パットはいい子ね。小生意気な悪ガキやヒネクレたお兄さんと違って」

エステルはルックとヨシユアを見た。

「そ、そんな……オレの方が先にブレイサーになるはずだったのに……。ヨシユアにーちゃんならともかく、エステルなんか先を越されるなんて……」

ルックはうなだれた。

「なによー！その『なんか』ってのは！大体ねえ、16歳以上じゃないとブレイサーにはなれないんだから！教会の日曜学校に通ってるお子ちゃまには無理なんだからね！」

エステルは頭にきて、怒った。

「大人げないなあ。本気で張り合ってるし……」

ヨシユアは呆れて溜息をついた。

「くっそ、覚えてるよ！オレも秘密基地で特訓して、すぐにブレイサーになってやる！」

ルックはいきり立った。

「パット、行こうぜ！」

ルックはパットの手をとった。

「う、うん……」

「お姉ちゃんたち、またね！」

そう言うとルックとパットは行ってしまった。

「まったく、ルックったら……すぐ突っかかってくるんだから。あたし、嫌われてるのかなあ？」

エステルは疲れた顔をした。

「いや、むしろ逆だと思うけど」

ヨシユアが言った。

「ギャク？」

エステルは不思議そうに言った。

「ま、男の子ってことさ」

ヨシユアは分かっているみたいだ。

「それにしても秘密基地か。ちょっと気になるな……」

ヨシユアが暗い顔をした。

「うんうん！なんか、そそられる響きよね。幼いころのピユアなハ
ートを揺さぶられるっていうか……」

逆にエステルは楽しそうだ。

「いや、気になるってのは、そういう意味じゃないんだけど……」
ヨシユアがエステルの方を向いて言った。

町を出ようとしたその時、後ろからアイナの声が出た。

「エステル、ヨシユア！いいところで見つけたわ！」

アイナが走ってきた。

「あれっ、アイナさん？」

「どうしたのですか？やけに慌ててますけど」

2人は息を荒げているアイナに尋ねた。

「少し面倒なことになったの。今日はカシウスさん、自宅にいらっ
しゃるのかしら？」

アイナが尋ねた。

「うん、家で書類の整理をするとか言ってたけど」

「ねえ……何かあったの？」

エステルは深刻そうに聞いた。

「ルックとパット、知ってるわよね？」

アイナが聞いた。

「もちろん。さっき会ったばかりだし」

エステルが答えた。

「彼らがどうかしたんですか？」

ヨシユアがアイナに尋ねた。

「それが……ユニちゃんが教えてくれたんだけど」

「2人して、北の郊外にある《翡翠の塔》^{ひすい}に行ったらいいのよ」

アイナが重苦しく言った。

「《翡翠の塔》！？あそこ、たしか魔獣の住み処になっていなかったっけ!？」

2人は驚いた。

「ええ、その可能性が高いわ。シエラザードも出かけているからカシウスさんに保護を頼みたいの」

アイナが言った。

「なに言ってるんの、アイナさん！今すぐ追いかけてなくちゃ！あたしたちが連れ戻してくるよ！」

エステルが即答した。

「でもねえ……あなたたちは資格を取ったばかりだし……」

アイナは苦い顔をした。

「アイナさん。ここはエステルが正しいと思います。急げば、塔に着く前に追いつけるかもしれません」

ヨシユアが冷静に言った。

「………………。わかったわ。責任は私が持ちます。遊撃士協会からの緊急要請よ。一刻も早く子供たちの安全を確保して」

アイナは少々考えたが後、決断して2人に頼んだ。

「了解っ！」

「わかりました」

2人は答えた。

「翡翠の塔は、マルガ山道の途中を西に折れた先にあるわ。私はギルドで待機しています。何かあったら連絡してちょうだい」

そう言うと、アイナはギルドへ戻っていった。

「さっそくの初仕事ね……。ヨシユア、急ぎましょ！」
エステルはヨシユアに言った。

「ああ！」

そうして、2人は急いで翡翠の塔へ向かった。

第1章 父、旅立つ(4) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ルックとパットが危険な状況に遭うかもしれない。エステルたちは無事ルックたちを救えるのか!?

第1章 父、旅立つ(5)

翡翠の塔 入口

「翡翠の塔まで来たけど……。山道にいなかったってことは、あの子たち、中に入っちゃったのかな？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「その可能性が高そうだね。中に入ろう。……急ぐ必要があるそう
だ」

「うん……。そうね！」

エステルは頷いて翡翠の塔へと入っていった。

翡翠の塔 1階

奥の方から声が聞こえてきた。

「く、暗いよ〜っ……。こわいよ〜っ……」

パットの声だった。

「……。そんなに恐がるなよ〜！……。まだ最初の階じゃないか……。そして、ルツクの声も聞こえた。」

「やっぱり入ってたか……。すうう〜っ……」

突然、エステルは大きく息を吸い込んだ。

「エステル？」

「ルツク！パット！聞こえるなら返事しなさい！」

エステルは思いつきり叫んだ。しかし、返事はなかった。

「あ、あんにやろども〜！あたしを無視するつもり!？」

「いや、ひよつとしたら……。2階に上がったのかもしれない。とにかく奥に進んでみよう」

2人は2階へと向かった。

翡翠の塔 2階

2階に上がると、突然奥から悲鳴が聞こえた。

「うわわわわわっ!?!」

「た、助けてええっつ!」

ルックとパットが魔獣に囲まれていた。

「ヨシユア!」

「了解!」

2人は武器を構え、声のする方向に突入した。

「あ、あっち行けよ、おまえら!」

「うわあああん。来ないでよ、バカあああつ」

ルックとパットが魔獣に詰め寄られている。

その時、エステルたちが突入し、魔獣の一部を倒し、ルックたちの前に立った。

「エステルねーちゃん!?!」

「ヨシユア兄ちゃんだあ!」

2人は喜ぶが、まだ危機が去ったわけではない。

「あんたたち!危ないから下がってなさい!」

「すぐに片付けるからね!」

そうして2人は魔獣に立ち向かった。

しばらくして、エステルたちは魔獣を倒した。

「よっしゃ、片付いたわね」

「うん、みんな無事でよかった」

2人はルックたちの無事を確かめ、安堵した。

「それに、突入のタイミングもなかなか良かったと思うよ」
ヨシユアがエステルを褒めた。

「えへへ、そっかな？」

エステルは褒められて赤面した。

「お、終わったの……？」

「すっげえええっ！」

ルックたちが後ろから出てきた。

「エステル、けっこう強いんだなあ！オシナのくせにやるじゃんか
！」

ルックは騒いでいる。

「このオバカ！」

エステルがルックを叩いた。

「いつてえ、何すんだよー！」

ルックが言った。

「まったく、あんたはもう！乗り気じゃないパットまでこんな所に
連れてきたりして……！」

その時、ルックが蒼い顔をして逃げようとした。

エステルは逃げようとするルックの首を掴まえた。

「反・省・し・な・さ・い！」

「いたた、やめろってば！暴力オンナ！馬鹿エステル！」

ルックはあんまり反省していない様子だった。

「おまけに命の恩人に対して、その口の利きよう……きついオシオ
キが必要みたいね〜」

エステルは手に力を入れた。

「いたたたたたたたつ。エステルねーちゃん！許して、ボクが悪か
つたです！」

ルックが謝った。

「あ、あの……お姉ちゃん。そのくらいで許してあげてよ」
パットはルックを不憫に思い、言った。

「いーのよ、この悪ガキにはこれくらいした方が身のため……」
その時、エステル^{エステル}の背後から魔獣が忍び寄ってきた。

「エステル、後ろ！」

それに気づいたヨシユアが叫んだ。

「え……」

魔獣はすぐそばまで来ていた。

「やば……」

エステルは武器を出そうとするが、間に合いそうになかった。

「……ちいッ！」

ヨシユアが踏み出そうとしたその時、魔獣の背後から男性が神速の如き速さで魔獣を一蹴した。エステル^{エステル}の父、カシウスだった。

「……へ？」

エステルは状況が飲み込めない様子だった。

「よかった、来てくれたんだ」

ヨシユアは、ほっとした。

「まだまだ甘いな、エステル。見えざる脅威に備えるため、常に感覚を研ぎ澄ませておく。それが遊撃士^{ブレイザー}の心得だぞ」

カシウスがエステルをたしなめた。

「と、父さん！？ど、どうしてここに？」

エステルはカシウスに尋ねた。

「なに、アイナから話を聞いてな。すぐに塔に向かった行動力と、とっさの判断は評価できるが……。詰めが甘かったようだな、ん？」

「うっ、面目ないです……」

エステルが頭を垂れた。

「助かったよ、父さん。ゴメン、僕が付いていながら」

ヨシユアが申し訳なさそうに言った。

「まあ、守ることに關してはお前もまだまだだということだ。精進すればそれでいい」

「うん……」

ヨシユアは頷いた。

「それでは帰るとしよう。おーし、坊主ども、歩けるな？」

カシウスはルックたちに聞いた。

「は、はい……！」

「か、かっくいい……。カシウスおじさん！エステルは何倍もかっこいいよ！」

ルックは目を輝かせて言った。

「はっはっは、あたりまえだ。それじゃあ町に戻るぞ」

カシウスはそう言って、ルックたちと先に行ってしまった。

「……む…………。助けてくれたのは感謝するけど……。なんで父さんが、いいところを全部持っていつちゃうのよ……!? 納得いかなーい！」

エステルは悔しそうに言った。

「はは、それは仕方ないよ。何といっても……カシウス・ブライトだからね……」

遊撃士協会 ロレント支部受付

ロレントに戻ったときは既に夕方になっていた。

「ふふ、大変だったみたいね」

「まったく父さんたら……。町に到着するなり、『報告は任せた』とか言つてとつと家に帰っちゃうし……。ホント、いい性格してるよね」

エステルは疲れた声で言った。

「まあ、いいじゃない。あの子たちも無事だったんだし……とりあえず、報告は以上です」

「初任務、お疲れさまでした。報告を聞いた感じだとあなたたちも頑張ったみたいね。胸を張ってもいいと思うわよ」

「そ、そうかな？」

エステルが恥ずかしそうに言った。

「大丈夫、次はもっと上手くやれるわ。また何かあったらよろしくね」

アイナは笑った。

「……ン」

エステルは泣き出しそうだった。

「………………。それじゃあエステル帰ろうか？」

ヨシユアは切り出した。

「そうね……。帰って夕飯の支度をしなくちゃ」

エステルたちは帰ろうとしたその時、アイナが2人を呼び止めた。

「あ、ちよつと待って。カシウスさんに手紙が届いてたの。さつき

渡しそびれてしまったから届けてもらえないかしら？」

アイナは手紙を渡した。

「…………。仕事関連の連絡かな？」

手紙を見て、エステルは言った。

「そうだと思うわ。外国の支部からみただけど」

アイナは言った。

「外国の支部…………。ですか？」

ヨシユアは不思議そうに言った。

「遊撃士協会があるのはリベールだけじゃないからね。カシウスさ

んは顔が広いからそういう手紙は時々届くのよ。それでは、よろし

くお願いね」

2人は気を取り直して遊撃士協会を後にした。

エリーズ街道（ロレント市とブライト家を結ぶ街道）

「ね、ヨシユア…………。」

エステルは元気なくヨシユアに尋ねた。

「ん、なにさ？」

「………………。あたし…………遊撃士に向いてるかなあ」

エステルが下を向きながら言った。

「………………。まあ、父さんゆずりの武術の腕もそれなりのレベルだと思うし…………。困っている人がいたら放っておけないお節介な性格にも合ってると思うけど」

「えへへ、そっか…………」

エステルは微笑んだ。

「ひよつとして…………塔での出来事を気にしてる？」

「うん…………。あの時、あたしの不注意でルックまで巻き込むとこだった。父さんが来てくれなかったら、大ケガを負わせてたかもしれない。これから先、こんな調子でやっていけるのかなって…………」

エステルは小さな声で言った。

「………………。何、らしくない事言ってるかな」

ヨシユアが微笑んだ。

「えっ…………」

「今日の失敗は、明日取り戻せばそれでいいじゃないか。明日より先のことを考えて尻ごみするなんて君らしくもない。ずっと憧れていた仕事だろ？この程度でへこたれてどうするのさ」

ヨシユアが慰めた。

「ヨシユア………………。うん、そっだよね…………」

こんなの、あたしらしくないよね！」

エステルは元気になったようだ。

「そうそう、エステルに深刻な顔は似合わないから。能天気になんか笑ってる方が自然だよ」

「って、どういう意味よっ！まったく、一言多いんだから…………」

エステルがむくれた。

「はは、それは認める」

ヨシユアは笑った。

「まあいいや…………ありがと、元気づけてくれて。それじゃあ、早く家に帰りましょ。なんか急にお腹が減って来ちゃった」

エステルには、さっきまでの深刻そうな雰囲気はまったくなくなかった。

「（やっぱり能天気だ）」
ヨシユアは心の中で呟いた。エステルの本質「能天気は決定的のよ
うだ。」

ブライト家

書齋にカシウスがいた。

「ただいま、父さん。報告、終わらせてきたよ」

エステルがカシウスに言った。

「うむ、ご苦労だった。報告内容は、各支部で検討されて報酬や昇給などに影響してくる。これからも忘れずにな」

カシウスはエステルに念を押した。

「分かってますって。そうだ父さん。『リベール通信』買った
から。それと、ギルドからの預かり物」

そう言つて、エステルはリベール通信とカシウス宛の手紙を渡した。

「ふむ、手紙か……」

カシウスは手紙を受け取った。

「それじゃ、あたしは夕飯の支度があるから」

そこで、エステルは足を止めた。

「あ、そうだ。……今日はありがとね。危ないところを助けてくれ
て」

エステルはカシウスに礼を言った。

「ほう、いつになく殊勝だな？ようやく父の偉大さを理解してくれ
たようで嬉しいぞ。さあ、遠慮するな。どーんと胸に飛び込んでく
るがいい」

カシウスが笑いながら言った。この父親もお調子者だ。

「調子に乗らないの！まったく、うちの男どもは減らず口ばかり達
者なんだから……」

エステルはぶつぶつ言いながら書齋を出て行った。

「思っていたよりも落ち込んだでいないようだが……ヨシユア、お前のおかげか？」

カシウスはヨシユアの方を見て言った。

「大した事はしてないよ。ちよつとハツパをかけたただけさ。もともと強い子だからね」

ヨシユアが言った。

「ふん、まだまださ。ブレイサー稼業をしていれば、迷ったりすることは幾らでもある。それを乗り越えてこそ一人前だ」

カシウスが真面目に言った。

「くす、相変わらず娘想いだね」

その時、厨房からエステルの声が聞こえてきた。

「あっちゃあ〜っ……もう1回やりなおしだよ……。いきなり挑戦するのは、さすがに無理があつたかも……。否、料理は気合い！何度でも挑戦あるのみよっ！」

これを聞いて、カシウス、ヨシユアは呆れた。

「まったく……落ち着きのないやつだ」

カシウスは呟いた。

「少し手伝ってくるよ。あの調子じゃ、いつ食事にありつけるか分からなさそうだし」

そう言つて、ヨシユアは厨房へと向かった。

「ふふ……。さてと」

カシウスは手紙の封を切つた。そして、その内容に目を通す。

「ふむ……帝国方面からの連絡か……」

しばらく目を通していると、カシウスの顔が陰しくなつていった。

「……………」
そして、カシウスは突然声をあげた。

「……………」
「なんだと……………」

第1章 父、旅立つ(5) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

カシウス宛に届いた手紙。その内容に驚いたカシウス。この後、カシウスはどうなるのか？また、エステルたちの取る行動は！？

第1章 父、旅立つ(6)

ブライト家 夜の食卓

「ほう、驚いたな……」

カシウスがエステルで作った料理に感心した。

「どうよ、エステル特製、ふわふわ玉子のチキンオムライス！心して味わいなさいよねっ」

エステルは胸を張った。

「うん。美味しくできてるよ、これ。やるじゃない、エステル」

ヨシユアも満足そうだ。

「ふふん、これが真の実力よ。やー、色々あったけど今日はすごくいい一日だったなあ。遊撃士の資格も貰ったし……初めての任務も経験したし……。オムライスも成功したしね」

エステルは満足げに頷いた。
「ふむ……初めて作ったわりには喰えるな。覚悟していたのに拍子抜けだ」

カシウスは笑った。

「失礼ね〜。素直に美味しいって言ってよ」

エステルはカシウスを睨んだ。

「いや、こんな上出来なものが出発前に喰えるとは思わなかった。やるじゃないか、エステル」

カシウスはエステルを褒めた。

「えへへ……。……………出発前？」

エステルはカシウスの言葉に疑問を持った。

「父さん、ひよっとして……」

ヨシユアはカシウスを見た。

「うむ。急な仕事が入ってな。しばらく家を留守にするぞ。カシウスは2人に言った。

「ちよ、ちよっと待ってよ！それって……いつからなの？」

エステルは驚いて問い返した。

「明日からだ」

カシウスは答えた。

「あんですって〜っ!? いくらなんでも急すぎるわよ!」

エステルは叫んだ。

「さっきの手紙だね…… なにか事件でも起こったの?」

ヨシユアはカシウスに聞いた。

「なに…… 単なる調査だ。色々な場所を回るから1ヶ月くらいはかかるだろう。そういう訳で、留守を頼んだぞ」

カシウスはそう言った。無責任だな、オイ……。

「なにが『そういう訳で』よ!」

エステルは怒って声を荒げた。

「まったくもう、いつもいつも勝手なんだから……」

エステルは落胆した。

「仕方ないよ、エステル。頼まれたらそれに応えるのが遊撃士の仕事なんだから」

ヨシユアが言った。

「それは判ってるけど…… ロレント支部の仕事はどうすんの? 依頼とか、受けてるんじゃない?」

エステルはカシウスに尋ねた。

「5、6件ほどな。そこで考えたんだが……。お前たち、俺の代わりに幾つか依頼を受けてみないか?」

カシウスは2人に提案した。

「えっ……。それって、父さんがやるはずだった仕事のこと?」

エステルは驚いた。まさかこうなるとは思いつかなかったからだ。

「うむ、新米のお前たちでもやれそうな仕事を回してやろう。難しいそうなのはシエラザードに頼むことにする。どうだ?」

カシウスは2人に聞いてみた。

「やってみたいけど…… 失敗した時のことを考えると……。本当に、あたしたちみたいいな新人でもできるような仕事なの?」

エステルは不安そうだ。

「比較的簡単なものばかりだが、中には人の命を預かる仕事もある。強制はしない。よく考えてみることだな」

カシウスは言った。

「………………。ヨシユアはどう思う？」

エステルは隣に座っているヨシユアに尋ねてみた。

「僕は賛成だよ。良い経験になると思うしね。たしかに僕たちは半人前だけど2人合わせれば1人前くらいにはなる。お互いにフオロし合えば、何とかこなせるんじゃないかな？」

ヨシユアはやる気だ。

「2人合わせれば1人前……。うん、そうだよね！父さん！あたし、やってみるよ！って言うか、凄くやってみたい！」

エステルの迷いは吹き飛んだようだ。

「決まりだな。明日、出発前にギルドに話を通しておこつ」

カシウスは言った。

「ところで父さん。明日はどっちの飛行船に乗るの？王都行き？それともボース行き？」

ヨシユアはカシウスに尋ねた。

「王都行きだ。朝の10時に出発だな」

カシウスは答えた。

「だったら明日はちょっと早起しなくちゃね。目覚まし時計、セツトしとこつと」

エステルが言った。結構、話が決まるのが早いですね、この家は……。

ブライト家 外

「…………父さん」

エステルが寝た後、ヨシユアが、外で酒を飲んでいたカシウスに話

しかけた。

「ヨシユアか」

カシウスは振り向いた。

「あんまり飲み過ぎると、またエステルに叱られるよ」

ヨシユアがカシウスを窘めた。

「旅立ち前の景気づけさ。どうだ、お前も付き合わんか？」

カシウスがヨシユアに酒を勧めた。

「遠慮しとく。ていうか、未成年に酒を勧めないでよ。シエラさんじゃないんだから」

ヨシユアは断った。

「はは……あれは俺以上のウワバミだからな。……………」

……

カシウスは突然黙った。

「……………かなりの事件みたいだね？」

ヨシユアが沈黙を切り出した。

「まだ確証はないが……帝国の方で動きがあるらしい」

カシウスは重く言った。

「エレボニア帝国で……。キナ臭いね、それは」

ヨシユアが言った。

「目立った動きではないが……それが却って気にかかる。まずは帝国大使館に探りを入れてみるつもりだ」

カシウスが言った。

「わかった。エステルのことは任せてよ」

ヨシユアは言った。

「あまり甘やかすんじゃないぞ？遊撃士になったからには自分の面倒くらいは見られないとな」

カシウスは忠告した。

「エステルなら大丈夫だよ。天性のカンを持っているし、荒削りだけど、武術も天才的だ。きっと一流の遊撃士になれる」

ヨシユアはカシウスに言った。

第1章 父、旅立つ(6) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

帝国に向かうことになったカシウス。エステルたちは本格的なブレイサー稼業を開始することになる。

第1章 父、旅立つ(7) (前書き)

カシウスが帝国へ向けて出発します。それと同時にエステルたちの遊撃士としての仕事が始まる！

第1章 父、旅立つ（7）

次の日 ロレント発着場

エステル、ヨシユア、シエラザードとカシウスがいた。

「さて……そろそろ時間だ。エステル、あまり無茶をしてヨシユアの手を焼かせるんじゃないぞ」

カシウスがエステルを見て言った。

「もう、耳タコだってば。父さんも無理しちゃだめよ。もう若くないんだからね」

エステルが言った。

「ふん、まだまだ若いもんには負けられんさ。シエラザード、お前にも急な仕事を押しつけてすまん」

カシウスがシエラザードに言った。

「いえ、気にしないでください。先生の代わりに務まるか、自分ではちょっと心配ですけど」

シエラザードは控えめに言った。

「謙遜するな、銀閃の。ついでに悪いが、何かあったら2人を頼むぞ」

カシウスはエステルたちを見て言った。

「フフ、それは任せてください。決して甘やかさずに厳しく見守ればいいんですね？」

シエラザードはさりと怖いことを言った。

「さすが判ってるじゃないか」

カシウスは笑いながら言った。

「なによそれえ……」

エステルはむくれた。

「はは、このあたりが師弟だね」

ヨシユアが言った。

その時、案内放送があった。

・王都方面行き定期飛行船、《リンデ号》、まもなく離陸します。
ご利用の方はお急ぎください。

「おっと、いかんいかん……」

カシウスが慌てて飛行船に乗った。

「父さん、行つてらっしゃい。こっちの事は心配いらぬから」
ヨシユアが言った。

「仕事が終わつたら遊んでないでとつと帰ってきてよね」

エステルが言った。

「人聞きの悪いことを言うな。だがまあ……なるべく早く帰ってくるさ。それでは、2人とも元気でな」

カシウスがそう言うと、飛行船は離陸した。

「行っちゃったね」

ヨシユアが空を見て言った。

「うん……」

エステルは悲しい顔をした。

「寂しそうな顔しなさんな。どうせすぐに戻ってくるわよ。何の調査かは知らないけど、先生だったらあつと言う間だわ」

シエラザードはエステルに言った。

「さ、寂しくなんか無いってば！父さんが留守にするなんていつもの事だもん」

エステルはシエラザードに言い返した。

「はいはい。そういう事にしといてあげる。それじゃ、あたしは先生から引き継いだ仕事を片づけるけど……」

「困ったことがあつたら遠慮なく頼ってきなさいよ？」

シエラザードは2人を見て言った。

「うん、でも最初のうちは自分たちの力で頑張ってみるよ。どこまでやれるか試してみたいし」

エステルは言った。

「フフ、ナマ言っちゃって。まあ、ヨシユアが付いていれば、それほど心配することもないか。2人とも頑張りなさいよ」

そう言うとシエラザードは発着場を後にした。ヨシユア君、期待度大ですね……。

「うんっ！」

「頑張ります」

2人はそう言った。

「さてと……どうする？ さっそくギルドに行こうか？」

ヨシユアがエステルに尋ねた。

「うん、どんな仕事をするのかアイナさんに聞いて確かめなきゃ」

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エステルは元気良く言った。

遊撃士協会 ロレント支部

「あら、エステル、ヨシユア。カシウスさん、もう出発したの？」

アイナが尋ねた。

「うん、さつきね。それで早速、父さんがやるはずだった仕事を紹介してもらおうと思って」

エステルが仕事について聞いた。

「わかったわ。あなたたちをお願いする仕事は全部で3つあるんだけど……」

「まず最初は西にある農園に行つて欲しいの」
アイナが言った。

「西の農園つて、テイオの家に？」
エステルが驚いた。
「テイオ？聞いたことがあるような……」
アイナが首を傾げた。
「僕たちと同級生だったテイオ・パーゼルのことです。パーゼル農園の娘なんですよ」
ヨシユアが説明した。
「ああ、そうだったの。ええ、そのパーゼル農園で魔獣退治をしてもらいたいのよ」
アイナが2人に説明した。
「ええっ……魔獣が出たの!？」
エステルがまた驚いた。
「幸い、ケガ人は出てないけど、畑が荒らされて困ってるらしいわ。それでギルドに要請があつたのよ」
アイナが経緯を説明した。
「そんな事があつたんだ……」
「うん、わかつた！すぐにでも向かってみるわ！」
エステルが言った。
「では、これを渡しておくわ」
アイナが封筒を渡した。
「あなた達が、ギルドから派遣されたという証明書よ。農園のご主人に渡してちょうだい」
エステルはギルドの紹介状を受け取った。
「テイオのお父さんたちなら知ってるから必要ないと思うけど……」
「まあ一応、受け取っておくわね」
そう言うと、エステルたちはパーゼル農園に向かった。

「はあく。いつ来ても、のどかな場所よね。魔獣に襲われるなんて、ちよつと信じられないけど……」

エステルは背伸びをした。

「たしかに今は、それらしい気配は感じないな……」

「とにかく事情を聞いてみよう」

ヨシユアが周りを見て言った。

「テイオ、どこにいるのかな？」

エステルはそう言うと、テイオを探し始めた。

「やつほー、テイオ！」

「やあ、久しぶりだね」

2人はテイオを見つけると、挨拶した。

「エステル？それにヨシユアまで……」

「もしかして遊びに来てくれたの？」

テイオは驚いて2人に聞いた。

「ううん、ブレイサーの仕事よ。なんでも魔獣が出たそうじゃない？」

エステルはカシウスの仕事を代わりに引き受けた事を説明した。

「研修が終わったんだ……おめでとう、良かったじゃない」

「うん、あなた達だったら何とかできるかもしれないわね」

テイオはエステルたちを賞賛した。

「やつぱり出るの、魔獣？」

エステルはテイオに尋ねた。

「ええ、ここ数日ずっとよ。おかげで私まで寝不足になっちゃって……」

テイオは眠そうにした。

「という事は……魔獣は夜に出没するんだね？」

ヨシユアが言った。

「ご明察。まあ、詳しい話はお父さんたちに聞いてみて。そろそろ

配達から戻ってくると思うんだけど……」

テイオの家

そこにはテイオの両親がいた。

「こんにちは！おじさん、おばさん」

「ご無沙汰しています」

2人はハンナおばさんとフランツおじさんに挨拶した。

「おやまあ…… エステルとヨシユアじゃないか」

「こりゃ久しぶりだね。テイオに会いに来たのかい？」

ハンナとフランツは2人に言った。

「あ、テイオとはさつき会ったばかりよ」

エステルが言った。

「今日は、遊撃士協会の用事で来ました」

エステルたちは紹介状を渡して、カシウスの仕事を代わりに引き受けた事を説明した。

「……なるほど、事情は分かったよ」

フランツは説明を聞いて言った。

「でも、あんたたちだけで魔獣退治なんて、ちよいと危険じゃないかねえ？」

「そうだなあ。君らにケガをさせるわけには……」

2人は渋った。

「心配しないで。これでも一応ブレイサーだもん。魔獣退治だったらお手のものよ」

エステルは言った。

「ギルドの許可も得ています。どうか任せてもらえませんか？」

ヨシユアが頼んだ。

「うーむ……」

「よし、それではお任せしようか」

フランツは少々考えたが、納得した。

「ありがとう、おじさん　それで……どんな魔獣が出たの？」

エステルは尋ねた。

「正体はよく判らないが……丸っこい猫のような魔獣だね。夜中に3、4匹くらい現れて畑の野菜を喰い散らしていくんだ。凶暴じやなさそうだけど、とにかく動きが素早くってねえ。捕まえようとしてもすぐに逃げられちまうんだよ」

フランツとハンナは説明した。

「ふーん、なんか変な魔獣ね」

エステルは考えて言った。

「夜中に現れるということは、それまで待つ必要がありますね」

ヨシユアが言った。

「ああ、夜になるまでゆっくりと寛いでいてほしい」

「もちろん2人とも夕食に付き合ってくれるだろう？」

フランツたちが言った。

「えへへ、もちろん　ハンナおばさんの料理ってとっても美味しいから楽しみ」

エステルは嬉しそうだ。

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか。それじゃ、期待に沿えるよ
うはりきって作るでしょうかねえ」

ハンナが気合を入れて料理の支度を始めた。

夕食後　ティオの寝室

「はあ、美味しかったなあ。ハンナおばさん、相変わらず料理が上手よね」

エステルは満足そうに言った。

「ふふ、うちの母さん、お客さんが来ると張りきるから。それより、ヨシユアには悪いことをしちゃったわね。チビたちの相手をさせち

やって」

テイオが言った。ヨシユアはリビングで子供の相手をしている。

「あはは、いいんじゃない？ヨシユアって意外と子供になつかれる事が多いし。どちらかと言うと、堅苦しいタイプなのに不思議よね」
エステルが言った。

「あら、そんな事ないわよ。たしかに礼儀正しくて他人行儀な雰囲気もあるけど……。いざ知り合ってみると、けっこう面倒見がいいのよね。さりげない気配りがまたポイント高いつていうか」

テイオがヨシユアのことを分析した。やたらと詳しいですね……。

「そ、そうかなあ？」

エステルは不思議といった感じた。

「加えて、整った顔立ちと神秘的な琥珀の瞳、漆黒の髪……。女の子に好かれるのも当然よね」

テイオがうつとりとした。

「……………」

「ヨシユアってモテるの？」

エステルは呆然とした。

「なにを今さら……。交際を申し込んだ子は1人や2人じゃないって噂よ。彼、全部断つたみたいだけど」

テイオは呆れ顔だ。

「し、知らなかった……。ヨシユアってばあたしに何の相談もしないで……。まったく秘密主義というか、水臭いというか、薄情なんだから！」

エステルはむくれた。

「ま、同性ならともかく異性に相談する話でもないし。それに……
エステルには尚更ねえ」

テイオが言った。

「へっ……。なんで？」

エステルは全く理解できていない様子だ。

その時、扉をノックする音が聞こえた。

「エステル、いいかい？そろそろ見回りの時間だよ
ヨシユアだった。」

「あ、うん……わかった。それじゃ、お仕事を片付けてくるわ。今
の話、また後で聞かせてね？」

エステルがテイオに言った。

「あー、はいはい。気を付けて行ってきなさい」

そうテイオが言うと、エステルは部屋を出て行った。

「相変わらずこの手の話には疎いと言うか、鈍いと言うか……。こ
りゃ、ヨシユアも苦労してるわね」
テイオは呟いた。

「どうやら魔獣はいつもこの時間に現れるみたいだ。さっそく見回
りを始めようか」

ヨシユアがエステルに言った。

「……………(じーっ)」

エステルはヨシユアを睨んでいる。

「な、なにさ？」

ヨシユアは焦った。

「ねえ、ヨシユア。あたしに隠しごとしてない？」

エステルはヨシユアに言った。

「え……。なんだよ、やぶから棒に？」

ヨシユアは意味が分からないようだ。

「ヨシユアが家に来てから……あたしたち、いつも一緒だったよね
？いっぱいケンカもしたけど、それだって、いい思い出だし……」。

あたし、ヨシユアのこと本当の意味で家族だと思ってる」

エステルがしんみりと言った。

「エステル……」

ヨシユアが微笑んだ。

「だから……何かあったら相談に乗るからね！ええとその……例え

ば……青春の悩みとか」

エステルは恥ずかしそうに小さく言った。

「ハア？」

ヨシユアは拍子抜けな声を出した。

「は、話はそれだけ！とつと見回りを始めましょっ！」

そう言つてエステルは先に行つてしまった。

「ティオに何か吹き込まれたのかな？」

「……………」

「……………隠しごと、か……………」

ヨシユアは下を向きながら呟いた。

パーゼル農園 夜 外

「うわゝ、さすがに暗いわね。ねえ、ヨシユア。どついつ風に見回ればいいと思う？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「そうだね……。家の周り、畑、牧舎、温室を一通り回つてみるといいかもね。農園全体をカバーできると思う」

ヨシユアが言った。

「ん、わかつた。それじゃレッツ・ゴー！」

2人は見回りを開始した。

- 畑

「静かね〜……虫の音しか聞こえないわ」

エステルが言った。

「まだ農園の中に入ってきてきてないみたいだね。僕たちを警戒してるのかな」

ヨシユアが言った。

「ねえねえ、ヨシユア。小さいころ聞かされなかった？赤ちゃんってキャベツ畑で生まれるって」

エステルがヨシユアに聞いた。

「また唐突だね……。僕は、銀の翼を持つ天使が届けてくれるって聞かされたけど」

ヨシユアが答えた。

「ふーん、土地によって違うのね」

エステルは黙った。

ヨシユアも何も言わない。お互い何も言わず沈黙が流れる。

「見回り、続けようか？」

ヨシユアが切り出した。

「うん」

そうして再開した。

- 牧舎

「……魔獣、いないみたいね」

「そうだね、他を回ってみよう」

- 温室

「さすがに中には入り込んでないか」

ヨシユアは周りを見て言った。

「でも、オーブメントの光が幻想的な雰囲気でいい感じよね。ちょっと得した気分かも」

エステルは緊張感がない。

「ノンキだなあ、君って……」

ヨシユアが言った。

「ヨシユアがトーヘンボクすぎるの!」

エステルが怒った。そうではないと思うが……。

温室の外を出ると、エステルが声を上げた。

「あつ……」

魔獣が農園に入ってきた。

魔獣はこちらに気づくと、すばやく逃げた。

「あつ、逃げたっ! 待ちなさいよ、こらあつ!」

エステルが追いかけた。

「まだ気配は消えていない……。農園内に留まっているみたいだ」

ヨシユアが言った。

「ふん、上等じゃない……。絶対に捕まえてやるんだから!」

エステルは魔獣の背後から忍び寄って追い詰めた。

「やった、捕まえたわ! あとは懲らしめてやるだけね!」

エステルは笑った。

「ここからが本番だ。気を抜かないようにね!」

そうして、2人は魔獣に立ち向かった。

魔獣を捕獲した2人はパーゼル一家を外に呼び寄せた。

「いやはや、さすが遊撃士だ。このすばしっこい連中を見事、捕まえてしまうとはね」

クランツは2人を賞賛した。

「えへへ、それほどでも。ところでコイツら、どうしようっ?……退

治しなくちゃダメかな？」

エステルが悩んだ。

「あたりまえだよ、エステル。僕たちは魔獣退治に来たんだからヨシユアは言い張った。」

「で、でも……」

エステルは納得いかない様子だ。

「ブレイサーの使命は人を守り、正義を貫くこと……。魔獣に情けをかけるのは筋違いだよ」

ヨシユアはエステルに言った。

「うっ……そうなんだけどさあ……」

エステルは悩み続けている。

「……………」

「ま、被害にあったのはうちの野菜だけなんだし……。見逃してもいいんじゃない？」

テイオが言った。

「そうだねえ。これだけ痛い目に遭ったらさすがに懲りるってもんだろう」

ハンナが言った。

「テイオ、おばさん……」

エステルが2人を見た。

「ですが……」

ヨシユアは反対のようだ。

「……私も殺すのは反対だ。彼らも私たちも同じ土地で暮らしている存在だ。ある程度、折り合いをつけて暮らしていく必要があると思う。ヨシユア君……今回は見逃してくれないかな？」

克蘭ツがヨシユアに頼んだ。

「……………」

「……わかりました。被害に遭われたみなさんがそう仰るのなら反対はしません」

ヨシユアがしばらく考えて言った。

「すまないね。せつかく来てもらったのに。私たちも、柵を強化したりして被害が起こらないように工夫しよう」
クランツが2人に礼を言った。

「それじゃ決まりね」

エステルが魔獣の方を向くと、

「そういう事だから、みんなに感謝しなさいよ？今度やつたら地獄
見せるからね！」

エステルが魔獣に向かって棒を振りかざした。

そうすると、魔獣は悲鳴を上げて帰っていった。

「さて、これで一件落着だ。今夜はもう遅いから寝るとしよう。君
たちもぜひ泊まって行ってくれ」
クランツが2人に言った。

「はい」

「お世話になります」

2人が答えると家の中に入っていった。

パーゼル家 寝室

「はい、もうクタクタだね。もう夜も遅いし、さっさと寝るとしま
すか」

エステルは疲れた様子で言った。

「……………」

ヨシユアは俯いている。何か悩んでいる様子だ。

「あれ……。どうしたの、ヨシユア？」

エステルは俯いたままのヨシユアに聞いた。

「……………ごめん。みんなに嫌な思いをさせた」
ヨシユアが謝った。

「え、さっきのこと？バカね、そんなこと思ってる人なんていな
いわよ。普通に考えたらヨシユアの意見が正しいもんね」

エステルは気にしていない様子だ。

「正しいわけじゃない。……ただ、心が冷たいだけさ。今だって、情けをかけずに退治すべきだったと思っっている。エステルやティオたちと違って可哀想という気持ちがないんだ」

ヨシユアが下を見たまま重く言った。

「……………」
エステルは黙って聞いている。

「こういう時……自分がたまらなくイヤになる。人として不完全じゃないかって。はは、心のどこかが壊れているのかもしれないな……」

ヨシユアは自虐的に言った。

それを聞いたエステルは、ヨシユアに向かって怒って叫んだ。

「ヨシユアのばかっ！勝手に自分のこと決め付けるんじゃないわよっ」

ヨシユアはびつくりして後ずさりした。

「エ、エステル？」

かまわずエステルは続ける。

「この5年間、あたしはヨシユアのことをずっと見てきた！良いところ、悪いところは誰よりも知っている自信がある！たぶん、ヨシユア本人よりもね！」

力強く言った。

「……………」
ヨシユアは驚いて声が出ない。

「そのあたしを差し置いてふざけた事、言わせないからね！壊れるだなんて……絶対に言わせないんだからっ！」

エステルは泣きかけだ。

「……………」
「ごめん、バカなことを言った」

ヨシユアは小さく言った。

「分かればよし」

「……………」

「……………」

「ふふ、でも……………」

「ちよつと嬉しかったな」

エステルは微笑んだ。

「えっ？」

ヨシユアが驚いた。

「ヨシユアってさ。いつも一人で溜め込むじゃない。苦しい時も、悩んでいる時も……………。平気そうな顔をしながら一人で解決しようとするのよね。それって…………。やっぱり家族としては寂しいよ」

エステルが悲しそうに言った。

「……………」

「エステル、僕は……………」

ヨシユアが苦しそうに言った。

「でも今日は、自分をさらけ出して弱い部分を見せてくれたじゃない。少しは、あたしのことを頼りにしてくれたんでしょ？だから、ちよつと嬉しいんだ」

エステルは笑った。

「な、何言ってるんだか…………。そんな恥ずかしいセリフ、よくさらつと言えるもんだね」

ヨシユアは呆れている。

「ふふん、任せなさいってさ、今日はもう寝ましょ？さんざん走り回って疲れちゃった」

エステルが言った。

「そうだね…………。おやすみ、エステル」

「…………。それから、ありがとう」

ヨシユアが言った。

「どういたしまして」

「おやすみなさい、ヨシユア」

そうして、夜が更けて行った。

第1章 父、旅立つ（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

初めて本格的な仕事を終えたエステルたち。このまま順調に依頼をこなせるのか！？

第1章 父、旅立つ(8) (前書き)

仕事がつつ終わり、次の仕事が始まります。

第1章 父、旅立つ（8）

次の日 パーゼル農園

「ありがとう。今回は本当に助かったよ。それと悪かったね。中途半端な結果にしてしまった」

克蘭ツが礼と謝罪をした。

「気にしないでください。色々と勉強させてもらいました。また困ったことがあったら遊撃士協会に連絡してください」

ヨシユアが言った。

「是非、そうさせてもらおうよ」

克蘭ツが言った。

「エステル、ヨシユア。今度は仕事抜きで遊びに来てね」

「また泊りがけでおいで。」馳走させてもらおうからさ
ティオとハンナが言った。

「ありがとう、ティオ、おばさん」

「必ずお邪魔させてもらいます」

2人が言った。

ミルヒ街道

「さてと、ギルドに戻ろうか。今回の報告をしてから次の仕事を紹介してもらおう」

ヨシユアが言った。

「おう、がってんだ！次もこの調子で行くわよっ！」

エステルが返事した。自信がついてきたようだ。

遊撃士協会 ロレント支部

「ご苦労様、農園での仕事うまくいった？」

アイナが尋ねた。

「うん、色々あったけど……」

「一応報告しておきます」

2人は報告した。

「なるほど。魔獣を逃がしてあげたのね。甘いとは思っけど……それは不問としておきましょう」

アイナは言った。

「え、いいの？」

エステルは驚いた。

「遊撃士の使命は人を守り、正義を貫くこと……。だけど守り方は色々だし、正義も星の数だけ存在するわ。それを見極めるのもあなただちの仕事ってわけ」

アイナは説明した。

「なるほど……ずいぶん奥が深いんですね」

ヨシユアが頷いた。

「まあ、魔獣退治だけじゃなくて国家間の争いも調停する組織だから。上位ランクの遊撃士だと戦闘力以上に、総合的な判断力と柔軟な問題解決能力が要求されるのよ」

アイナが言った。

「判断力と問題解決能力、ですか」

ヨシユアは難しい顔をした。

「ひよええ〜……一流への道は険しそうだわ」

エステルはいかにも大変だ、という顔をした。

「ふふ、日々精進あるのみよ。さてと……次の仕事をお願いしようかしら」

アイナが言った。

「待ってました！どーんと来いってもんよ。それで、今度も魔獣退治系？」

エステルが尋ねた。

「いいえ、物品運搬の仕事よ。依頼主は、何とクラウドス市長」

アイナが言った。

「えっ、市長さんからの？」

エステルは驚いた。

「いいんですか？僕たちに任せてしまって」

ヨシユアが言った。

「簡単な仕事と聞いているわ。まあ、詳しい仕事内容は市長さんから伺ってちょうだい」

アイナがそう言うのと、2人は市長邸に向かった。

ロレント市長邸

「さてと……市長さん、いるかしら？」

「忙しい人だからどこかに出かけてるかもね」

2人が話していると、階段から男性の声が聞こえた。

「おお……エステル君とヨシユア君か」

クラウドス市長だった。

「あっ、市長さん」

エステルが言った。

「お邪魔してます。今日は遊撃士協会から来ました」

ヨシユアが説明した。

「うむ、話は聞いておるよ。カシウスさんの代わりに仕事を引き受けてくれるそうじゃな？」

クラウドス市長が言った。

「うん、そのつもりだけど……。ごめんね、市長さん。父さんがいい加減な約束して」

エステルが謝った。

「いやいや。カシウスさんほどの人であれば、多忙を極めるのは当

然じやろう。それより……こんな所で話をするのもなんだな。詳しい話は書齋でさせてもらうよ」
そうして、エステルたちは2階の書齋へ行った。

ロレント市長邸 2階 書齋

「……頼みといっても、そんな難しい事じゃあないんだ。正直、ギルドに頼むのも厚かましいとは思ったんだがね。なかなか手が空かないものでな。つい頼んでしまったんじや」

クラウド市長が言った。

「運搬の仕事と聞きましたけど、なにを運べばいいんでしょうか？」
ヨシユアが尋ねた。

「うむ、北のマルガ鉱山から七耀石セプチウムの結晶をここに届けて欲しいんじや」

クラウド市長が依頼の説明をした。

「セプチウムっていうと……。あたしたちが良く手に入れる『セピス』と同じものよね？」

エステルが考えた後に言った。

「正確には、宝石にするほど大きくない七耀石セプチウムの欠片をセピスっていうんだ。このセピスを精製・加工したものがオーブメントに付ける結晶回路クォーツってわけ」

ヨシユアが説明した。

「なるほど……。なんとなく理解できたかも」
エステルが頷いた。

「昔から、マルガ鉱山では、そのセプチウムの一種である翠耀石エスメラスが採れるんじやが……。大きな結晶が採掘されたので鉱山長に保管してもらっておるのさ」

クラウド市長が言った。

「その結晶を、鉱山長から受け取ってここまで運んでくればいいん

ですね？」

ヨシユアが言った。

「その通りじゃ。どうか、頼めるかね？」

クラウス市長が尋ねた。

「宝石の運搬か……。魔獣退治とは違って、別の意味で緊張しそうだけど……」

「うん、でも何とかやってみるわ！」

エステルは承諾した。

「ありがたい。それではこれを持っていってもらおうかの」

クラウス市長は喜んで、市長の紹介状を渡した。

「それを見せれば鉱山の中に通してくれるじやろ。よろしく頼んだよ」

クラウス市長が言った。

そうして、2人はマルガ鉱山へと向かった。

マルガ鉱山

入口には、鉱員ラングがいた。

「よう、ここはマルガ鉱山だ。関係者以外は遠慮してもらおうか」

鉱員ラングが言った。

「ふっふーん、関係者だもんね」

「ロレントのクラウス市長に頼まれて、七耀石の結晶を受け取りに来ました」

エステルたちは市長の紹介状を見せた。

「ふーん、なるほどなあ。そういうことなら話は別だ。悪いが、中に入って親方に直接聞いてくれないか？俺は、ここで番をしてるからよ」

鉱員ラングが言った。

「いいけど……親方って？あたしたち、鉱山長に会いに来ただけ

ど」

エステルが不思議そうに尋ねた。

「へへ、その鉱山長つてのが俺たち鉱員を束ねるガートン親方よ。七耀石の鉱脈を発見するのが三度のメシより好きな穴掘りだ。今日も地下の坑道に潜つてると思うぜ」

鉱員ラングが言った。どれだけ好きやねん！

「わかりました。それでは捜してみます」

ヨシユアがそう言つて、2人は鉱山の中に入った。

マルガ鉱山 地下

奥に親方らしき人がいた。

「おや、嬢ちゃんたちは……」

ガートン親方が振り向いた。

「あなたが鉱山長さん？よかった、やっと見つけたわ」

「遊撃士協会の者です。クラウス市長の代理として来ました」

2人は市長の紹介状を鉱山長に渡して、経緯を説明した。

「ほお、なるほどねえ。お前さんたちが遊撃士か。若いのに大したモンじゃないか」

ガートン親方が褒め称えた。

「えへへ、それほどでも。それで……結晶はどこにあるの？」

エステルは早く結晶を見てみたいそうだ。

「ああ、ちよいと待ってくれ。なにぶん、滅多にお目にかかれない貴重なシロモノだからなあ。肌身離さず保管しているわけさ」

そうして、ガートン親方は懐から大粒の結晶を取り出した。

「うわ〜っ……。こんな大きな結晶、見たことないわ」

「すごい……。内部から光が弾けているみたいだ」

2人は幻想的な緑の輝きに見惚れている。

「セプチウムの1つ　風の力を秘めた翠耀石^{エスメラス}の結晶だ。これだけ

大きいと宝石としての価値は莫大なものになる。間違いなく市長さんに届けてくれよ」

そう言つて、ガートン親方はエステルに結晶を渡した。

「う、うん……」

「はあああ……キレイ……。妖精を持つてるみたいな感じね……」

そう言つてセプチウムを手のひらの上に乗せながら、エステルは辺りを歩き回つた。

「あはっ、面白い！見て見て、ヨシユア！」

エステルははしゃいでいる。

「たしかに綺麗だけど……。そのくらいでストップ。落したりしたら大変だよ」

ヨシユアがエステルに注意した。

「ちえっ。張り合いがないんだから」

エステルはそう言つと懐に結晶をしまった。

「これでよしと……。それじゃあ親方さん。間違いなく市長さんに届けるわね」

エステルが言つた。

「おう、よろしく頼んだぜ」

「ん……？」

その瞬間、ガートン親方が何かを感じ取つたようだ。

「どうしたの？」

エステルがガートン親方に聞いた。

「……………。妙だな。空気が変わりやがった……………」

ガートン親方が呟いた。

「空気の流れ…………？」

エステルは分からない顔をした。

「（この匂いは…………）」

ヨシユアは顔を引き締めた。

次の瞬間！

地震のような揺れが襲った！

「んなつー！！」

「きゃあつー！？」

「……………」

数秒後、揺れは収まった。

「お、収まったみたいね……………」

エステルはほっとした。

「今のつて、ひよつとして地震？」

エステルが尋ねた。

「いや…………坑道のどこかで崩落が起きたらしい。地盤の緩い場所に
ブチ当たったか？こりゃあ、被害状況を確認しないと……………」

ガートン親方が言った。

その時、ヨシユアが武器を構えた。

「エステル、気をつけて！」

ヨシユアがエステルに言った。

「えっ……………」

魔獣が突然襲い掛かってきた！

難なく魔獣は退治できたが、

「ど、どうして魔獣が……………」

「親方さん、ここつて魔獣とか出るの？」

エステルはガートン親方に尋ねた。

「こんな奥に出たのは初めてだ！魔獣はセプチウムの輝きに惹きつ
けられる性質がある…………。だから、今までも入口近くに迷い込んで
くることはあったが……………」

ガートン親方が説明した。

「ひよつとしたら…………さっきの崩落で、坑道の一部が魔獣の巣に繋

「がったのかもしれない」

ヨシユアが言った。

「ま、魔獣の巣ですって〜!?!」

エステルが声をあげた。

「考えられない事じゃない……。こ、こりゃいかん、作業している連中を脱出させねえと!」

ガートン親方が慌てて言った。

「そういう事なら任せてよ!あたしたちも手伝わせてもらおうわ」
エステルが言った。

「な、なにい!?!」

ガートン親方は驚いた。

「魔獣退治ならお手のものよ。一刻を争う時だから遠慮しないで」
エステルが言った。

「すまん……力を貸してくれ」

ガートン親方が言った。

「ちなみに、鉱員さんたちは全部で何人くらいいるんですか?」
ヨシユアがガートン親方に尋ねた。

「地下で作業していたのは……たしか4人だったはずだ」

ガートン親方が言った。

「了解、大急ぎで助けに行きましょう!」
エステルたちが助けに向かった。

しばらくして、4人の鉱員を救出したエステルたち。地上に上がる
うとしたその時、

「ひいひいっ!」

「こ、こんなつもりじゃ……!」

「助けてえ〜〜〜っ!」

奥から悲鳴が聞こえた。

「なんだと！まだ残っていやがったのか！？」

ガートン親方が言った。

「早く助けに行かなくっちゃ！」

エステルたちは声のした方向へ向かった。

最後の1人を助けたエステルたち。

「た、助かったぜ……」

鉱員見習いがそう言った。

「安心して、もう大丈夫だからね。遊撃士ブレイサーの手にかかれば、魔獣の

1匹や2匹、軽いもんだわ」

エステルが言った。

「ブ、ブレイサーあ！？どうしてこんなところに……」

鉱員見習いが驚いて言った。

「おや、お前さんは……たしか昨日入った新入りだったな。どうして地下に掘りに来てるんだ？」

ガートン親方が鉱員見習いに言った。

「そ、それが……。少しでも先輩がたの仕事ぶりを見学しようと思っただんですよ……。そしたら、いきなり壁が崩れて向こうの方から魔獣がドバーツと！」

鉱員見習いが言った。

「やはり魔獣の巣に繋がったのか……兄ちゃんの推測通りだったみてえだな」

ガートン親方が言った。

「ええ……」

ヨシユアが頷いた。

「こ、この先は危険ですぜ。魔獣がウヨウヨしてますからね。そ、それじゃあ俺はこれでっ！」

鉱員見習いは脱兎のごとく走り去った。

「すっごい逃げ足……よっぼど恐かったみたいね」
「……そうだね」
2人は言った。

地下エレベーター前

「親方さん、もう全員助けた？」

エステルはガートン親方に聞いた。

「ああ……大丈夫なはずだ」

ガートン親方は答えた。

「それじゃあ僕たちも上に登りましょう」

ヨシユアが言った。

地上エレベーター前

「親方、大丈夫ですか!？」

「ひええ〜っ、よく無事だったなあ!」

鉱員達は口々に言った。

「この嬢ちゃんたちのおかげだよ。ところで、全員揃っているな？」
ガートン親方が鉱員達を見回した。

「へい、全員いますぜ」

「さつき、見習いのヤツが慌てて走り去っていきましたが……」

「よっぼど恐かったんだなあ、あいつ」

鉱員達が出た。

「そうか……こんな事で挫けなきゃいいんだが。とにかく、地下にはまだ魔獣が残っている可能性が高え。安全の確認が取れるまでエレベーターは使っんじやないぞ」

ガートン親方が鉱員達に言った。

マルガ鉱山 入口

そこには鉱員見習いが1人いた。

「まったくんだ誤算だぜ……。魔獣は湧き出してくるわ、遊撃士まで出張ってくるわ。はあ、仕方ねえ……。正直に報告するしかないさそうだな」

そう言つと、どこかへ行つてしまった。

マルガ鉱山内

「今回はすまなかつたな。余計な仕事までさせちまつて。そのうちギルドに連絡してちゃんと礼をさせてもらうからな」

ガートン親方が2人に礼を言った。

「あはは、気にしないで。当然のことをしたまでもん。これも修行のウチつてやつよ」

エステルが笑いながら言った。

「ところで……。地下はどうするつもりですか？」

ヨシユアが聞いた。

「何とか自分たちでケリをつけるさ。爆薬を使って魔獣の巣穴を塞いじまうつていう手もある。ま、よほど困ったことがあつたらギルドの手を借りるかもしれねえ」

ガートン親方が言った。

「うん、その時は任せてね。それじゃあ、あたしたちは市長さんに結晶を届けるわね」

エステルが言った。

「エステル……。落としたりしてないよね？」

ヨシユアがエステルに言った。

「失礼しちゃうわね。そこまでウツカリしてないってば。ほーら、ここに……」

「……………」
エステルは黙ってしまった。

「ま、まさか……」

「お、落としたのか!？」

ヨシユアとガートン親方は青ざめた。

「なーんちゃって。ちゃんとありますよーだ。さ、とっとと届けに行きましょ」

エステルは笑いながら結晶を取り出して言った。お調子者だ。

「まったく君ってヤツは……」

ヨシユアは呆れている。

「心臓に悪いぜ、嬢ちゃんよう……」

ガートン親方は胸を押さええている。

そうして、エステルたちはロレント市に帰って行った。

第1章 父、旅立つ(8) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

なにやら不穏な鉱員見習い。一体何者なのか!?

第1章 父、旅立つ(9)

ロレント市長邸

市長邸の書斎には制服姿の少女がいて、クラウス市長と話をしていた。

「なるほど……あの時計台にはそんな逸話が。わたくし、とても感動しましたわ」

制服の少女が言った。

「戦争の悲惨さを語るのはたやすい。大切なのは、哀しみを乗り越えて平和を築こうとする強さだと思っのじゃ」

クラウス市長が厳かに言った。

「……………おや？」

クラウス市長がエステルたちを見つけた。

「例の品を届けに来たんだけど……………」

「えっと、お邪魔だったかな？」

エステルが遠慮がちに言った。

「おお、エステル君たちか。邪魔なんて事があるもんかね。ちょうどいい、紹介しよう。こちらはジヨゼット君。ジェニス王立学園の学生さんじゃ」

クラウス市長が制服の少女を紹介した。

「ジェニス王立学園……………」

エステルが言った。

「聞いたことがあります。ルーアン地方にある全寮制の高等教育学校ですね」

ヨシユアが言った。

「ええ、その通りですわ。お初にお目にかかります。ジヨゼット・ハールと申します」

ジヨゼットが挨拶した。

「あたしはエステル。よろしくね、ジヨゼットさん」

「ヨシユアです、よろしく」
2人も挨拶した。

「実はこの2人、ブレイサーでの方。個人的なことで仕事をお願いしていたところなんじゃ」

クラウス市長がジョゼットに説明した。

「ブレイサー!? あの、いかなる権力にも屈しない、平和を愛する誇り高き自由騎士!? ああつ、感激ですわ! 本物の遊撃士に巡り合えるなんて!」

ジョゼットが感動した。大げさな……。

「そ、そんなに感激されるとくすぐったくなっちゃうわね……。ところで……あ、ジョゼットって呼んでいい?」

エステルがジョゼットに言った。

「ええ、そう呼んでくださいな」

ジョゼットが笑って言った。

「ジョゼットはどうしてここに? 市長さんと知り合いなの?」

エステルがジョゼットに尋ねた。

「いえ、お目にかかったのは今日が初めてですわ。わたくし、自主研究の一環として各地の重要文化財を調べているんです。それで、お忙しいとは思ったんですが市長にお話を聞かせていただくことと……」

……」
ジョゼットが説明した。

「ふーん、勉強熱心ね。それじゃあ、邪魔しちゃ悪いかな?」

エステルが遠慮がちに言った。

「いえいえ。もう充分お話は伺いましたから。それより……わたくしの方がお邪魔でしょうか?」

ジョゼットが言った。

「いやいや、そんなことはないよ。エステル君、せつかくの機会じやから、例の品を彼女にも見せてくれないかね?」

クラウス市長がエステルに言った。

「あ、うん。ちょっと待ってね……」

エステルは懐から結晶を取り出した。

「まあ……！それはセプチウムですわね。なんて素晴らしい輝きかしら……」

ジヨゼットは見惚れている。

「うむ、見事な大きさじゃ。まさにロレント市民全員の感謝を表すにふさわしい贈り物じゃ」

クラウス市長が高らかに言った。

「贈り物？」

エステルが疑問に思った。

「感謝を表すにふさわしい……。なるほど、生誕祭の贈り物ですね？」

ヨシユアが言った。

「鋭いのう、ヨシユア君。これを使ったオーブメント細工をアリシア女王陛下に贈るつもりじゃ。60歳におなりになる陛下へのロレント市民の感謝のしるしとしてな」

クラウス市長が言った。

「ええっ、女王様への贈り物！」

エステルが驚いた。

「まあ、素晴らしいですわ！」

ジヨゼットが言った。

「我々リベール国民は、女王陛下にいつもお世話になっておるからなあ。定期飛行船が簡単に利用できるのも王家が援助してくれているおかげじゃ」

クラウス市長が説明した。

「リベール国内の遊撃士協会も王家の援助を受けていると聞きます。確かに……色々な形でお世話になっていますね」

ヨシユアが言った。

「うわっ！それってなんかすごい！ねえ、ヨシユア、どうしよう！？。あたしたち、女王様への贈り物をこの手で運んじやったよ！？」

エステルが騒いだ。そこまで感動するか？

「あまつさえ、思いつき振り回してたもんね」
ヨシユアが言った。

「あ、バラしちゃだめだってば！」

エステルが焦った。

「くすくす……」

「はは、エステル君らしいのう」

ジヨゼットとクラウス市長が笑った。

「も、もう……」

エステルがしゅんとした。

「それじゃあ、市長さん。間違いなく渡しておくわね」

エステルはセプチウムの結晶を市長に渡した。

「うむ、確かに受け取った。それでは謹んで……」

クラウス市長は席を立った。

そして金庫の中に結晶をしまった。

「……これでよしと。あとはメルダース工房でこれを使ったオーブメント細工を仕上げてもらっただけじゃな。今から仕上がりを楽しみじやのう」

クラウス市長が笑った。

「あ、ずるい市長さん！完成したら、あたしにもみせてね？」

エステルがクラウス市長に言った。

「ああ、残念ですわ……この目で確かめられないなんて。でも今日は、お話に加えて素敵なものを見せていただきました。もう、お礼の言葉もありませんわ」

ジヨゼットが言った。

「いやいや、これくらい市長の務めじゃよ」

クラウス市長が言った。

「本当にありがとうございます。それでは……わたくしはこれで失礼します」

そう言っただけでジヨゼットは帰ろうとした。

「待つて、ついでだからあたしたちも失礼しちゃうわ」

「そうだね。市長、それでは失礼します」

2人が言った。

「うむ、お世話になったのう」

クラウド市長が礼を言った。

ロレント市長邸 外

「それじゃあ、明日にはもう定期船で帰っちゃうんだ？」

エステルがジヨゼットに言った。

「ええ、そうなんですの。すぐに学校も始まってしまいますし」

ジヨゼットが言った。

「なるほど、学校の休みを利用して調べに来てたんだね」

ヨシユアが言った。

「あーあ、残念だな。せつかく仲良くなれそうだったのに。また会

えるといいね？」

エステルは残念そうだ。

「はい……わたくしもそう願っております。それではご機嫌よう。

エステルさん、ヨシユアさん」

そう言ってジヨゼットは行ってしまった。

「やー、いい子だったわね。良い所のお嬢さんっぽいのにそれを鼻にかけたところがないし」

エステルが品定めするように言った。

「……………うん……………」

ヨシユアは悩んだ顔をしている。

「ヨシユア？あれね、ひよっとして。今みたいなのがタイプだっ

たり？」

エステルが言った。

「えっ……!!」

「な、なに変なこと言ってるのさ!」

ヨシユアが言い返した。

「あせってる、あせってる やー、お姉さん驚いちゃったな。ヨシユア君の好みがお嬢様タイプだったなんてね。今度会う時まで、気の利いた口説き文句を用意しとかなきゃね」

エステルがはしゃいでいる。

「フン、勝手に盛り上がったなよ。まったく、人の気も知らないで

……」

ヨシユアが重く言った。

「えっ？」

エステルが聞き返した。

「……なんでもない。それより、ギルドに報告に行こう。父さんの代理の仕事も次で終わりだよ」

ヨシユアが話題を変えた。

「あ、そっか……。うん、気合を入れて行こうね!」

そう言つて、2人はギルドへ戻った。

第1章 父、旅立つ(9) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

無事、結晶を届けた2人。しかし、ヨシユアは暗い顔だった。果たして、その理由とは!? また、最後の依頼とは何なのか!?

第1章 父、旅立つ（10）

遊撃士協会 ロレント支部

「ご苦労さま。鉱山では大変だったみたいね」

アイナが言った。

「え、なんで知ってるの？」

エステルが不思議そうに言った。

「鉱山から連絡があったのよ。あなたたちにとっても感謝していたわ。そのあたりも含めて報告をよろしくお願いするわね」

2人は鉱山での出来事を報告した。

「ふふ……期待以上の仕事をしてくれたわね。突発的な事故に対処するのも、ブレイサーとしての使命の1つよ。これからも頼むわね」
アイナが褒め称えた。

「うん、どーんと任せてね」

エステルが胸を張った。

「まあ、エステルの場合は頼まれなくても首を突っ込むけどね」

ヨシユアが横で言った。

「そうそう……。って、人のことをお節介みたいに言わないでよ！」
エステルが怒った。

「見たいも何も、ズバリそのものだし。お人好しと、野次馬根性と直情的性格のなせるワザだろうね」

ヨシユアがエステルの性格を分析した。

「う……ヨシユア、なんかツツコミ激しくない？」

エステルがヨシユアをじつと見た。

「気のせいじゃないの？」

ヨシユアがさらりと言った。

「ほらほら、ケンカしないの。じゃあ、カシウスさんの代理の最後の仕事を紹介するわね。《リバー通信》って知ってる？あそこの取材に協力して欲しいのよ」

アイナが言った。

「えっ、それって……この前買ったあの雑誌じゃない。へっ、面白い偶然もあるもんねえ」

エステルが感嘆した。

「取材協力という……具体的に何をすればいいんですか？」
ヨシユアがアイナに尋ねた。

「危険な場所に取材に行くから腕の立つ案内人が欲しいそうよ。詳しくは、本人たちから聞いてみて。雑誌社の記者とカメラマンが《ホテル・ロレント》に滞在中だから。あ、これはギルドからの紹介状ね」

アイナは説明して、ギルドの紹介状を渡した。

「それじゃあ、早速ホテルを訪ねてみよっか？」

エステルがヨシユアに言った。

「そうだね、行ってみよう」

ヨシユアが言った。

ホテル・ロレント

エステルたちはホテル・ロレントに着くと、受付のヴィーノに尋ねた。

「ヴィーノさん。ちょっと聞きたいんだけど……。雑誌社の記者さんってここに泊まってるってホント？」

エステルがヴィーノに聞いた。

「おや、よくご存知ですね。なにかご用件でも？」

ヴィーノは2人に尋ねた。

「実は、ギルドの仕事で取材に協力することになったのです」

ヨシユアがヴィーノに言った。

「ほう、それはそれは。ですが、今はお2人ともお出かけになっていますよ」

ヴィーノが言った。

「そうなんだ。どこに行ったか知ってる？」

エステルが聞いた。

「記者の方は、酒場に行つてくると仰っておりますね……。そちらを訪ねてみてはいかがですか？」

ヴィーノは言った。

「酒場ね、ありがとう」

「失礼しました」

2人はそう言つて、酒場へ向かった。

居酒屋 アーベント

2人はカウンターにいた無精髭の男に話しかけた。

「あん、何だお前さんたちは？」

不精髭の男は面倒くさそうに言った。

「あなた、ひよつとして……《リベール通信》の記者さん？」

エステルが言った。

「その通りだが……なんで知つてやがるんだ？俺は人を取材するのは好きだが、人から詮索されるのは嫌いだね。どついう用件だ、いたい？」

不精髭の男が言った。

「遊撃士協会から来ました。護衛の依頼をされたそうですね？」

ヨシユアが言った。

「おお、ようやく来たか！ホント待ちくたびれちゃったぜ。それで……」

「カシウス・ブライトはどこだよ？」

不精髭の男は辺りを見回して言った。

「それなんだけど……本人、別の仕事が入っちゃったの。それで口レントを離れちゃって……」

エステルが申し訳なさそうに言った。

「な、なんだとお!？」

不精髭の男が愕然とした。

「せっかくだから。噂の遊撃士に取材してやろうと思ったのに……。ちつくしよう……アテが外れちまったじゃねえか!」

不精髭の男はがっくりと肩を落とした。

「よく判らないけど……まあ、そんなに悲観しないでよ。あたしたちがしつかりと代わりを務めさせてもらうから」

エステルが言った。

「ちっ、仕方ねえな……今回はそれで手を打つか……。……
……。……いま、なんて言った?」

不精髭の男は聞き返した。

「『そんなに悲観しないでよ』?」

エステルが言った。

「そうじゃねえ! 『代わりに務めさせてもらう』だ! どういうことだ、そりゃあ」

不精髭の男が言った。

「だから、あたしたちが代理のブレイサーなんだけど。あ、これ紹介状ね」

エステルが紹介状を渡した。

「おいおい、冗談キツイぜ……。お前らみたいなガキどもがブレイサーだっというのかよ?」

不精髭の男が言った。

「ガ、ガキですってえ? 乙女に向かってなんて言い草よ!」
エステルが怒った。

「なーにが乙女だ。色気のねえ格好をしゃがって。悔しかったらスカートでもはいて、年頃の娘らしくしてみやがれ」

不精髭の男は言いたい放題言っただ笑った。

「これは棒術用の服装なの! スカートだと見えちゃうでしょ! まったく、失礼なオジサンね……」

エステルが言った。

「お、俺はまだ20代だつ。オジサン呼ばわりするんじゃない！」「不精髭の男も怒った。コントみたいな様子だ。

「……とにかく記者さん。僕たちがブレイサーでギルドから派遣されたのは確かです。他の人を紹介してもいいですけど、その場合、いつになるか判りませんよ？」

ヨシユアが耐えかねて言った。

「う、うむむ……これ以上、締切は伸ばせねえし……。仕方ない、背に腹は替えられねえか。喜べガキども、お前らに任せてやるよ」「不精髭の男が上から目線で言った。

「偉そうなオジサンねえ……」

エステルは不満顔だ。

「まあまあ……。僕はヨシユアといいます。こっちの女の子はエステル。あなたの名前も教えてくださいますか？」

ヨシユアが紹介した。

「ナイアル・バーズ。《リベール通信》きつての敏腕記者だ。短い付き合いとは思うがよろしくな」

不精髭の男はナイアルと名乗った。

「ふんだ、そう願いたいわね。で……どこに案内すればいいの？たしか危険な所に取材に行くから腕の立つ案内人が必要ってことよね？」

エステルがナイアルに聞いた。

「《翡翠の塔》^{ちほくのとう}って遺跡だ。名前ぐらい聞いたことあるだろう？」

ナイアルが言った。

「な〜んだ。聞いたことがあるどころかこの前、仕事で入ったばかりよ」

エステルが言った。

「おつ、そりゃあ都合がいいな。具体的には、その塔の屋上に俺たちを案内してもらいたいんだ。雑誌に載せる写真を撮りたいんでね」
ナイアルが仕事内容を説明した。

「ふーん、ずいぶんと物好きねえ」

エステルが言った。

「俺たち』っていうことは他にも同行する人がいるんですね？」

ヨシユアが言った。

「相棒のカメラマンがいる。オーバルカメラの調子が悪いんで工房に行っているはずなんだが……。つたく、ずいぶん遅いじゃねえか」
ナイアルが舌打ちした。かなり待たされている様子だ。

「急いでるんだったら、工房まで迎えに行った方がいいんじゃない？ どうせ、このまま取材に行くんでしょ」

エステルが提案した。

「それもそうだな……。よし、工房でヤツを拾ってから、そのまま塔に向かうとするか」

3人は工房へと向かった。

メルダース工房

そこには、眼鏡の女性が騒いでいた。

「ああ、どうかそれだけはっ！ どんな事でもしますから、カメラだけは返してください！ 命よりも大切なものなんですっ！」

かなり必死だった。カメラが命より大事とはスゲエなあ、オイ。

「なぐんか揉めてるわね」

「ひよっとして、あの人か？」

2人はナイアルに尋ねた。

「……………まあな」

「こら、ドロシー！ いつまで待たせやがるんだ！？」

ナイアルが眼鏡の女性 - ドロシー - に怒鳴った。

「ああ、ナイアル先輩！ いいところに来てくれましたあー！ うっ、どうか助けてくださいいっ！」

ドロシーがナイアルにすがった。

「今度は何をやらかした？無駄遣いして、カメラの修理代が足りなくなっただんじゃねえだろうな？」

ナイアルがドロシーを見据えた。

「わっ、びっくりですう！どうして分かるんですか？先輩、ひよつとして超能力者！？」

ドロシーは驚いた。そんなワケあるか！

「同じことを繰り返されればアホでも分かるに決まってるだろ！」

ナイアルがまた怒鳴った。

「お客さん、この人の関係者？それじゃあ悪いけど修理代、立て替えてくれますかね？」

工房のフライデイが言った。

「仕方ねえ……経費で落とさせてもらっぜ。いくらだ？」

ナイアルが財布を取り出して聞いた。

「ええと……。カメラと飾り時計の修理でしめて2000ミラですね」

フライデイがナイアルに請求書を見せた。

「ちよつと待て！カメラはともかく……飾り時計ってのはなんだ！？」

ナイアルがお金を出すところで手を止めて言った。

「あの、修理してもらっている間、店内を見学させてもらったんですよ。で、キレイな置き時計があったんで手にとって見てたら壊しちゃって……」

「でもでも、よかつたあ。それも経費で落とせるなんて〜」

ドロシーが笑いながら言った。

「そんなもん経費に入れられるか！ち、ちくしょう……自腹切って立て替えるしかないか」

ナイアルは怒ったり悲しんだり忙しそうだ。

「ほらよ、2000ミラだ」

ナイアルがお金を払った。

「はい、これは領収書」

フライデイがナイアルに領収書を渡した。

「（な、なんか……すごい組み合わせのコンビね）と、エステル。」

「（たしかに。でも、立て替えてあげるあたり、わりと面倒見がいい人みたいだね）」
と、ヨシユア。

「おお、待たせたな。ちよいとトラブっちまった」

ナイアルが疲れた顔をして戻ってきた。

「あれ、先輩、この子たちは？」

ドロシーがナイアルに尋ねた。

「護衛兼、案内役のブレイサーだ。予約していたカシウス・ブライトの代理だよ」

ナイアルが説明した。

「わっ、こんな若い子たちが……」

ドロシーが驚いた。

「あたしはエステル、よろしくね」

「僕はヨシユアといます」

2人は自己紹介した。

「エステルちゃんにヨシユア君か。若いけど頼もしい感じねえ。わたし、ドロシー・ハイアット。《リベール通信》に入ったばかりの新人カメラマンなの。目下、ナイアル先輩の下で鍛えてもらっている最中でーす」

ドロシーが笑いながら言った。

「なんで俺様が、こんなトンチキ娘の面倒を見なくちゃならねえんだ……。まったく、あのヒゲ編集長め……」

ナイアルが肩を落とした。

「まあまあ。そのうち良いことがありますよ」

ドロシーがナイアルの肩を叩いた。

「お前が言うな、お前が！ハア、まあいい……。メンツも揃ったことだし、とっとと取材に向かうとするか」

ナイアルが言った。

「目的地は《翡翠の塔》ですね」

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

「おーっ！」

エステル一行は翡翠の塔へと向かった。

第1章 父、旅立つ（10）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

最後の代理の仕事を請けたエステルたち。クセの強い人達と共に翡翠の塔へ向かう！

第1章 父、旅立つ(11)

翡翠の塔 入口

「わあ……けっこう高い建物ですねえ。これって、何階建てなのかなあ?」

ドロシーが感嘆した。

「うーん、この前は2階までしかいかなかったから……」

「でも、規模からいって5〜6階くらいじゃないかしら?」

エステルが言った。

「5階建てのはずだよ。ウチにある資料に書いてあった。かなり前に調査されたけどその後、放置されたみたいだ。そういえば、他の地方にも似たような塔があるみたいだけど」

ヨシユアが言った。

「ああ、その通りだ。ボース、ルース、ツァイスにも同じ様式の塔が建っているらしい。なんでも、リベール王国が建国された時代のものらしいぜ」

ナイアルが言った。

「へ〜、そうだったの。歴史のロマンを感じちゃうわね」

エステルが感心した。

「それを伝えるのが今回の仕事だ。ドロシー、ローアングルで何枚か撮れ」

ナイアルがドロシーに命じた。

「はい!」

ドロシーはそう言ってカメラを構えた。

「さあ……行くわよ」

「……………」

「……………」

ドロシーは集中しているようだ。

「(す、すごい気迫……カメラを持つと性格が変わる?)」

「(さすがプロだね)」

2人は感心している。

「……………」

「……………」

「……………」

「すか〜っ……………ZZZ……………」

どうやら、ドロシーは立ちながら寝ていたようだ。

怒ったナイアルが近づいて、ドロシーを思いっきり叩いた。

「しくしく……………」

「先輩、痛いですよ……………」

ドロシーは痛がっている。

「お約束すぎるんだよ！格好つけてないでいつものスタイルで撮りやがれ！」

ナイアルが叱った。

「てへ、やっぱり慣れないことをするもんじゃありませんね〜。それじゃあ……………」

ドロシーは再びカメラを構えた。

「おおっ、いい顔してますねー」

パシャッ！

「セクシーですねえ。とつてもキュートですう！」

パシャッ！

「行きますよー、ハイ、チーズ！」

パシャッ、パシャッ！変な撮り方しますねえ……………」

「な、なんで？人物を撮るわけじゃないのに……………」

「でも、違和感はないよね……………」

2人はその様子を眺めている。

「景色の”表情”が見えるんだとき。あんなアホなやり方で息を飲むような写真を撮りやがる。ま、一種の天才だわな」

ナイアルが呆れながら言った。

「はあ……………人は見かけによらないわね」

エステルが言った。

「はい、お待たせしましたっ」

ドロシーが、翡翠の塔の外観を撮り終えたようだ。

「よしっ、中に入るとするか。目指すは塔の屋上だ。頼んだぞ、新米ブレイサーども」

ナイアルがエステルたちに言った。

「ふふん、任せなさいって。どんな魔獣が現れたってあんた達には爪一本触れさせないから」

「僕たちの後ろから離れないようにしてくださいね」

そうして、4人は翡翠の塔の中に入って屋上を目指した。

翡翠の塔 屋上

「まぶし……」

「やっと屋上に到着したわね」

エステルが体を伸ばした。

「うわー、いい景色ですねえ！」

「ほう、こりゃ驚いた。予想以上にいい絵が撮れそうだな」

ナイアルたちは喜んでいる。

「そして、あっちが例のブツか……」

ナイアルが目の前にある何かの装置を見た。

「あれって、何なのかな？」

エステルが見て言った。

「なんか、オーブメント仕掛けのどっかいお釜って感じですねえ」

ドロシーが言った。

「資料によるとどうやら古代の装置らしいぜ。使用目的は判っていないらしいがな」

ナイアルが言った。

「ふーん……」

「ねえ、ヨシユア。こんな物があるって知ってた？」

エステルがヨシユアを見て尋ねた。

「……………」
ヨシユアは目を瞑って黙っている。

「ヨシユア？」

エステルが聞いた。

「……………隠れても無駄です。出てきた方が身のためですよ？」

ヨシユアが柱の方に向かって鋭く言った。

「へっ……………」

エステルが柱の方を向いた。

「で、出て行きます！今すぐ出て行きますからっ！」

そこから、男性が慌てて出てきた。

「な、なにこのヒト……………」

「なんと、先客がいたのかよ」

「うわあ、びっくり。ヨシユア君、よく気付いたねえ」

「……………あなたは……………」

一同は驚いた。

「すみません、ごめんなさいっ！手持ちのミラは全部あげますから、どうか命だけは助けてくださいっ！」

眼鏡の男性が焦りながら言った。

「ちよっとオジサン……………盗賊か何かと勘違いしないでよ。この紋章を見れば分かるでしょ？」

エステルはギルドの紋章を見せた。

「おお、それは遊撃士協会の……………」

「ひょっとして……………君たちはブレイサーですか？」

眼鏡の男性が言った。

「えへへ、その通りよ。あたしは、エステル。こっちの男の子はヨシユア」

「で、俺たちは《リベル通信》の記者だ。この塔の取材をするためにこいつらに護衛してもらっている」

各自挨拶した。

「はあ〜っ。もう、驚かさないでくださいよ……」

「こんな場所に入り込んでくるから怪しい人達と思ったじゃないですか」

眼鏡の男性が息をついた。

「そういうあなたも充分、怪しいと思いますけど……」

「いったい何者なんですか？」

ヨシユアが男性に尋ねた。

「これは申し遅れました。私、考古学者のアルバと言います。古代文明の研究のために、この塔を調べに来たんですよ」

眼鏡の男性は、アルバと名乗った

「たった1人で？よくここまで無事でしたねえ」

ドロシーが感心した。

「いや、ははは。遺跡調査は慣れていきますからね。魔獣から逃げ回る足腰には自信があるんです」

「……さすがに今回は死にそうな目に遭いましたけど」

アルバ教授が溜息まじりに言った。

「む、無茶苦茶な学者さんね〜」

エステルが呆れた。

「しかし、考古学者ってことはこの塔の由来には詳しいのかい？」

ナイアルがアルバ教授に尋ねた。

「まあ、人並み以上には……」

「調査を始めたばかりなので判っていない事も多いのですが」

アルバ教授が言った。

「それでいい。何か面白そうな話はないか？記事のネタにさせてもらうぜ」

ナイアルが言った。

「ふむ、そうですね……」

アルバ教授が少し考えた。

「皆さんは『セプト』『テリオン』という言葉を知ることがあります」

すか？」

アルバ教授が言った。

「それって、教区長さんから教わったことがあるような……」

エステルが思い出そうとする。

「古代人が女神エイドスから授かったという、力を秘めた『七の至宝』のことですね？」

ヨシユアが言った。

「ええ、その通りです！彼らは、この至宝の力を借りて海と空と大地を支配したそうです。さらに、生命や時間の神秘すら解き明かしたと伝えられるのですが……」

「およそ1200年前、謎の災厄によって古代文明が滅びた時、『セプト・テリオン』も失われました」

アルバ教授が説明した。

「七耀教会しちようきょうかいの聖典にも記されている伝説だな。で、それがこの塔とどう関係するんだ？」

ナイアルがアルバ教授に尋ねた。

「七至宝の1つが、このリベールに眠っているという伝承があるんです」

「その名も『輝く環』（オーリオール）」

アルバ教授が言った。

「『輝く環』……なんだか不思議な響きの言葉ね」

エステルが言った。

「その伝承が本当ならば、リベール最古の遺跡である、この塔に何か手がかりがあると睨みましてね。それで調査に来たわけなんですよ」

アルバ教授が説明した。

「はー、夢のあるお話ですねえ」

ドロシーが感心した。

「そうでしょう！？古代のロマンを感じますよね！？いやあ！判つてくれる人がいて嬉しいなあ！」

アルバ教授が喜んだ。

「それで……手がかりは見つかったんですか？」

ヨシユアがアルバ教授に尋ねた。

「い、今のところは……」

「その装置の謎が解明されれば、何か分かるとは思っていますがねえ」

アルバ教授がしどろもどろ言った。

「面白いと話とは思うが、現状では憶測止まりってことか。話してもらって悪いが記事にするにはイマイチ弱いな」

ナイアルが言った。

「そうですか……ガックシ」

アルバ教授が肩を落としました。

「ふーん、意外。案外マジメに記事書いてるのね？」

エステルがナイアルに言った。

「不確実なニュースソースを記事にするわけにはいかねえからな。ゴシップ載せてもヨタは載せねえのが、《リベール通信》のポリシーなんだ。まあいい、予定通りに行くとするか。ドロシー。ロレント全景を収めたショットを数枚。それ以外は、お前の感性に任せた。あちこち動き回って思う存分、いい絵を撮りまくれ」

ナイアルがドロシーに言った。

「わかりました！不肖ドロシー・ハイアット、おもいつきり撮りまくります」

そう言つて、ドロシーは歩き回りながら写真を撮りはじめた。

「学者先生、せっかくだから俺たちと一緒に町まで帰らないか？この2人、見てくれはガキだが、護衛としてはそこそ役立つぜ」
ナイアルがアルバ教授に言った。

「引つかかる言い方ねえ……」

エステルは不満顔だ。

「はは、ご一緒させて頂けるなら、私としては願ったり叶ったりです」

アルバ教授が言った。
「決まりだな。それじゃあ、撮影が終わるまで、しばらく休憩することにしてよう」
ナイアルが言った。

「うわー、いい眺めねえ。この高さからだ、ロレント地方全体が見渡せるわ。こんなに景色が良いんだから観光名所にしたら儲かるかも……」

エステルがヨシユアに言った。

「うん……そうかもね」

ヨシユアは小さく言った。心なしか元気がない。

「……………」

「どうしたの？なんか、元気がくない？」

エステルがヨシユアの様子を見て言った。

「はは、君はごまかせないな。屋上に出てから……ちょっと気分が悪くなってるね」

ヨシユアが言った。

「だ、大丈夫なの？」

エステルが心配そうに言った。

「うん、少し風に当たったら、すぐに良くなると思うから……」

「せっかくの機会だから、君はいろいろと見学してきなよ」

ヨシユアが言った。

「で、でも……」

エステルは迷った。

「こつした機会に見聞を広めるのもブレイサーとしての心構えだよ。何か面白いことがあったら、あとで僕にも聞かせて欲しいな」

ヨシユアが言った。

「もう、口が上手いんだから……」

「わかった、少しうるついでくる。ただし……辛くなったら、ちやんと呼んでね？」

エステルが言った。

「了解」

ヨシユアが笑って言った。

エステルはアルバ教授に話しかけた。

「おや……エステル君といただきましたか。お連れの方はどうしたんですか？」

アルバ教授が尋ねた。

「うん……少し風に当たりたいんだって」

エステルが言った。

「そうですね。ここは良い風が吹いてますからね。しかし、君とい彼といい、その若さでブレイサーとは凄いですね。たしか遊撃士資格が取れるのは16歳以上だったと思いますが……」

アルバ教授が感嘆した。

「へー、よく知ってるわね。うん。あたし達もちょうど16歳よ」

エステルが言った。

「いいですねえ、若いという事は。それだけで無限の可能性につながる。私も、あと10歳若ければ、大陸全土に眠る古代遺跡の謎をこの手で解き明かしてやるんですが」

アルバ教授が言った。

「大陸全土とは大きく出たわね。ということは、教授ってリベールのひとじゃないんだ？」

エステルが指摘した。

「ええ、北方の生まれです。あ……エレボニア出身ではありませんよ？」

アルバ教授が言った。

「あはは、心配しなくても大丈夫よ。戦争は絶対にイヤだけど……帝国の人が憎いわけじゃないしね」

エステルが悲しそうに言った。

「……誰か大切な方を？」

アルバ教授が察した。

「……………」

「うん……お母さんをね」

エステルが言った。

「申しわけない……立ち入った事を聞きましたね。」

アルバ教授はすまなさそうに言った。

「ううん、気にしないで。10年も前のことだもん。あれから新しい家族も増えたしね」

エステルが言った。

「なるほど。それが、先程の少年ですか」

アルバ教授が言った。

「えへへ、弟みたいなものね。ヨシユアにしてみればお兄さんのつもりかもしれないけど」

エステルが言った。

「フフ……………」

アルバ教授が小さく笑った。

「やだ、なんでこんな事まで喋っちゃってるんだらう……………」

「他の人に聞かせる話でもないのに」

エステルが照れた。

「いいじゃないですか。仲良きことは美しき哉、ですよ」

アルバ教授が言った。

「ところで教授……この塔のこと、何か判りそう？」

エステルが教授に尋ねた。

「いえ、今のところサツパリ。どうやら他の塔とあわせて比較調査

する必要がありそうです」

アルバ教授が言った。

「他の塔っていうと……ロレント以外にある3つの塔ね」

エステルが言った。

「ええ、その通りです」

「ボース地方の《琥珀こはくの塔》……」

「ルーアン地方の《紺碧こんへきの塔》……」

「ツァイス地方の《紅蓮くれんの塔》……」

「どの塔も、この《翡翠ひすいの塔》と同じ時代に建てられたそうですよ
アルバ教授が説明した。

「さすが詳しいわねえ。でも、調査するのはいいけど、あまり無茶
しないでね。少し費用はかかると思っけど、ブレイサーを雇った方
がいいわよ？」

エステルが言った。

「はは、貧乏学者なもので……」
アルバ教授が苦笑した。

次にナイアルに話しかけてみた。

「ふわ〜、タバコが美味しいな。ロレントなんて田舎の取材、最初は
気乗りがしなかったが……。たまには悪くないかもしれん」

ナイアルが言った。

「む、失礼しちゃうわね。だったら来なきやいいのに」

エステルがむくれた。

「編集長の命令なんだよ。トンチキ娘の教育も兼ねてな。そうじゃ
なかったら、今ごろスクープを求めて王国全土を駆け回ってる最中
だぜ」

ナイアルが面倒くさく言った。

「ふん、スクープって言っても、どうせゴシップ記事じゃないの？」

エステルが馬鹿にしたように言った。

「ゴシップも嫌いじゃないが報道記事の方が圧倒的に多いぜ」

「……そういう意味で今一番興味があるのはボースだな」

ナイアルが言った。

「ボース地方？何か事件でもあったの？」

エステルが尋ねた。

「でかい強盗事件が相次いでいる。犯人の正体は判ってないが、どうやらアシを持った連中らしい」

ナイアルが説明した。

「アシ……飛行船のことね。ひょっとして、空賊ってヤツ？」

エステルが言った。

「その可能性が高いな。だが、エレボニア帝国による偽装工作というセンもありえる」

ナイアルが言った。

「ええっ……そんな！平和条約だって結ばれたのに！」

エステルが驚いた。

「確かに10年前の戦争じゃ帝国も痛い目にあったからな。大陸諸国の目もあるし、滅多なことは出来んだろうが……。イヤガラセの可能性はありえる」

ナイアルが考えた。

「……………」

エステルは悲しい顔をした。

「いまだ真相は闇の中さ。そして、それを明らかにするのが、俺たちブン屋のお仕事ってわけだ」

「他にも、王国軍方面で新しい動きが色々あるしな。まったく、いくつ身体があっても足りないくらいだぜ」

ナイアルが言った。

「新しい動きって？」

エステルが尋ねた。

「若手の将校にキレ者がいてな。人材不足で、旧態依然の王国軍に色々と新風を吹き込んでいるらしい。なんとかアポを取りたいんだが……」

ナイアルが言った。

しばらくして、エステルはヨシユアに話しかけた。

「ヨシユア、まだ気分が悪い？」

心配そうに尋ねた。

「いや、だいぶ良くなった。もう普通どおりに動けると思う」
ヨシユアが言った。

「よかった……一体、何が原因だったのかな？塔の中で酸欠になっただけでは、あたしたちは大丈夫だったし……」

「突発性の高所恐怖症だったりして」

エステルは笑った。

「そ、それは無いと思うけど」

ヨシユアが否定した。

その時、ドロシーが撮影を終えたようだ。

「エステルちゃん、ヨシユア君！」

ドロシーたちが来た。

「あれ、撮影終わったの？」

エステルがドロシーに聞いた。

「まっかせて！いっぱい撮りまくっちゃった」

ドロシーは楽しそうだ。

「これで取材は終わりだ。そろそろ町に引き上げるとしよう。新米ども、帰りもよろしく頼むぜ」

「よろしく願います」

そうして、翡翠の塔を後にした。

ロレント市

「いやあ、助かりました。こんなに安全に遺跡から帰れたのは初めてです。エステル君、ヨシユア君。本当に何とお礼を言ったらよいやら」

アルバ教授がエステルとヨシユアに礼を言った。

「いえ、当然の義務ですから」

「できれば、次の調査では最初からブレイサーを雇ってよね」

エステルたちが言った。

「はは、財布と相談してみます。それではみなさん……またどこかで合えるといいですね」

そう言つて、アルバ教授が行つてしまった。

「さてと……俺たちもここで失礼させてもらうぜ。最初はどうかと思つたが、なかなか良い働きをしてくれたな。一応、礼を言っておこう」

ナイアルが礼を言った。

「ふふん、これが実力よ」

エステルが胸を張った。

「アホ、勘違いするんじゃない。俺が知っているブレイサーと較べたら、お前なんざヒヨっ子もいいところだ。せいぜい精進するんだな」

ナイアルが言った。

「う……肝に銘じておくわ」

エステルがしゅんとした。

「ところでお2人はすぐに雑誌社に戻るんですか？」

ヨシユアがナイアルたちに尋ねた。

「いや、今日1日くらいはロレントでゆっくりするさ。原稿も書かなきゃならねえらしいな」

第1章 父、旅立つ（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

最後の代理の仕事を終えた2人。しかし、この後、事件が起こる！

第1章 父、旅立つ（12）

遊撃士協会 ロレント支部

そこには意外にもシエラザードがいた。

「あら、エステル、ヨシユア」

シエラザードが振り向いて言った。

「あれ、シエラ姉？」

「珍しいですね。いつも飛び回ってるのに」

2人が言った。

「先生から引き継いだ仕事がようやく終わったところでね。ちょうど報告をしてたってわけ」

シエラザードが説明した。

「あ、シエラ姉も終わったんだ」

エステルが言った。

「まあ、なんとかね。アイナから聞いたんだけど、あんたたちも頑張ったみたいね？やれやれ、毎日苦勞してシゴいた甲斐があったもんだわ」

シエラザードが言った。

「えへへ、感謝してます。それじゃあ、あたし達も報告しちゃおうかな？」

エステルたちが報告しようとした。

「いいわよ、話してちょうだい」

アイナが言った。

エステルたちは記者たちの護衛について報告した。

「はい、ご苦勞さまでした。どうかしら、シエラザード。なかなか頑張っていると思わない？」

アイナがシエラザードに聞いた。

「新人にしてはやるわね。でも、ここで満足しちゃダメよ。特にエステル。あんたはすぐ調子に乗る夕子なんだから」

シエラザードが2人に言った。

「はいはい。ちゃんと分かってますってば」

エステルが言った。

「ふふ、エステルとヨシユアもシエラザードもご苦労さまでした。

カシウスさんの抜けた穴がこんなに早くカバーできるなんてね。これではらくはのんびり出来るんじゃないかしら？」

アイナが言った。

「それはそれで少しタイクツな気もするけど……」

エステルが言った。

「街道の巡回や魔獣退治みたいな細かい仕事はあるから大丈夫だよ」
ヨシユアが言った。

「むふふ……久しぶりにゆっくりできるわね。よし、今夜は思いっ切り飲むぞお！エステル、ヨシユア。あんたたちも付き合いなさいよね」

シエラザードが宣言した。

「え〜っ……酔っ払ったシエラ姉の相手すんの？」

エステルが不満の声をあげた。

「あら、エステル。あたしの誘い、断るつもりね？ふーん、いい度胸してるじゃない」

シエラザードがエステルを睨んだ。

「だ、だってシエラ姉って酒グセ、めっちゃめっちゃ悪いんだもん！騒ぐし、踊るし、脱ごうとするし……」

「確かに……目のやり場に困るんだよね……」

2人は嫌がっている。相当酒グセが悪そうだ。

「シエラザード……未成年相手に何をしているのよ」

アイナがシエラザードを窘めた。

「なによ、酒の余興じゃない。ふんだ、そんなにイヤならエステルは勘弁してあげるわよ」

シエラザードが仕方なさそうに言った。

「え、ほんと？」

エステルはほつとした。

「ええ」

「かわりに、あなたの分までヨシユアに付き合ってもらおうから
シエラザードがヨシユアの肩の上に置いた。

「え……」

「あ、あの、シエラさん……？」

ヨシユアが後ずさりした。

「ちょ、ちよつとお！」

エステルが怒った。

「んふふ、どうもヨシユアはしっかりしてそうで奥手だからね。酒
にしても、その他にしてもお姉さんが色々仕込んであげよっか？」
シエラザードの目が危険だ。

「い、色々……？」

ヨシユアが言った。

「ちよつとヨシユア……なに鼻の下伸ばしてんのよ？」

エステルがヨシユアを見て言った。

「ご、誤解だつてば！」

ヨシユアが焦つて否定した。

その時、ギルドに人が駆け込んできた。

「た、大変じゃあ！」

クラウス市長だった。

「あれ、市長さん？」

エステルたちが振り向いた。

「ぜいぜい、はあはあ……」

「エステル君とヨシユア君……おお、シエラザード君もいるか！
クラウス市長が息を切らしている。かなり慌てて来たようだ。

「（ちよつと助かった……）どうしたんですか、そんなに慌てて？」

ヨシユアがクラウド市長に尋ねた。

「い、一大事なんじゃ！」

「家を強盗している時に、私が留守に入ったらしいのじゃ！」

クラウド市長が言った。かなり慌てているため、言葉がおかしい。

「へ？」

エステルが素っ頓狂な声をあげた。

「市長さん、まずは落ち着きなさいよ。大きく息を吸って、ゆっくり吐いて」

シエラザードが言った。

「う、うむ……」

「す……っ……はあ……っ……」

クラウド市長は深呼吸をした。

「……」

「……」

「……実は、私が留守にしている時に、家に強盗が入ったらしいの

じゃよ」

クラウド市長が言った。

「えええ……っ!？」

「……」

「穏やかじゃないわね、それは」

3人が驚いた。

「教区長と話すことがあって、先程まで教会におったんじゃが……」

「家に帰ったら誰も出てこないの、おかしいと思って調べてみた

ら、強盗が押し入った後だったんじゃ」

クラウド市長が説明した。

「ちょ、ちよつと……ミレー又おばさんたちは!？」

エステルが慌てて言った。

「大丈夫、全員無事じゃよ。屋根裏に閉じ込められていただけじゃ」

クラウド市長が言った。

「よ、よかつたあ……」

エステルが安心した。

「人に被害がなかったのは不幸中の幸いだっただわね……」
「ここにいてもラチが明かない。市長さん、現場を見せてもらえる？」

シエラザードがクラウドス市長に言った。

「うむ、よろしく願います」

クラウドス市長が頼んだ。

「待って、あたしたちも行く！」

「そうですね。何か役に立てるかもしれない」

2人が言った。

「ふう、仕方ないか……」

「アイナ、あたしたちは事件の調査に入るわ。何か面倒が起こったら全部リッジに押しつけてやって。酒場でノンビリしてるはずだから」

シエラザードがアイナに言った。

「ええ、わかったわ。みんな気をつけてちょうだい」

アイナが言った。

そうして、3人はロレント市長邸に向かった。

ロレント市長邸

2階の書斎は見事に荒らされていた。

「うわ、メチャクチャだわ」

「これはまた……見事なほどの荒らされっぷりね」

一同は驚いた。

「ああつ、金庫が!？」

セプチウムの結晶をしまっていた金庫が空けられていて盗まれていた。

「……女王陛下に贈るはずだったセプチウムも盗まれてしまったよ。せっかく君たちが運んでくれたのに申し訳ない……」

クラウド市長が謝った。

「謝ることないですよ。悪いのは犯人たちなんですから」
「ところで……他の部屋の様子はどうですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「他の部屋はほとんど荒らされておらんよ。家内たちが押し込められていた屋根裏部屋が散らかった程度じゃ」

クラウド市長が説明した。

「ふむ……」

「……………」

「エステル、ヨシユア。頼みたいことがあるんだけど」

シエラザードが2人に言った。

「なに？」

エステルが答えた。

「あたしは市長さんから事情聴取をさせてもらっわ。その間、あんなたちは屋敷の内部を調べて欲しいの」

シエラザードが言った。

「え、それって……いわゆる現場検証ってやつ？」

「僕たちに任せていいんですか？」

2人が言った。

「せっかく人数がいるんだもの。分担した方が効率的でしょうが？」

シエラザードが言った。

「わかった。できるかぎり頑張ってみるわ！」

エステルが張り切った。

「慎重に、そして確実にね。それじゃあ市長さん。応接間で話をきかせてくれない？」

シエラザードがクラウド市長に言った。

「うむ、何から話したものが……」

そう言っつて、シエラザードとクラウド市長は書斎から出て行った。

「現場検証か……なんかドキドキしてきちゃった」

エステルが言った。

「早速、この部屋から調べてみようか。それと、屋敷の人たちから、犯行当時の証言を聞いてみよう」
ヨシユアが言った。

「うん、オツケー！」

そうして、2人は現場検証を始めた。

第1章 父、旅立つ（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

最後の依頼を終えた2人。しかし、その矢先に市長邸に強盗が入った。

果たしてその犯人とは！？

第1章 父、旅立つ（13）

書齋 金庫

「ああ、せっかく届けた女王様への贈り物があゝ……。犯人ども、ぜったいに許すまじ！」

エステルがセプチウムのなくなった金庫の前で憤慨した。

「こうして見てみると……。扉を壊したわけじゃなさそうだ。暗証番号を解析して開けたのか、それとも……」

ヨシユアが金庫を見て言った。

「解析なんてできるの？」

エステルがヨシユアに聞いた。

「不可能じゃないけど、プロの技術者じゃないと難しい。もっと簡単な方法で番号を調べたとしか思えないな」

ヨシユアが言った。

「簡単な方法……？」

エステルが考えた。

「そうだな……。たとえば、特殊なパウダーをボタン全体にまぶしてやるんだ。そのパウダーは、吸着性があって、しかも微細なため目には見えない。ただ、青い光に当てると発光する」

ヨシユアが考えられる方法を説明した。

「ふんふん」

エステルは頷いている。

「そのパウダーが付いている状態で、市長が暗証番号を入力するとしよう。すると、ボタンの上のパウダーが指にくっついて取れてしまう。これで、どのボタンが押されたのか分かるっていう寸法さ」

ヨシユアが説明した。

「ちよつと待って。それ、順番までは判らなくない？」

エステルが指摘した。

「いや、そうでもないんだ。指についたパウダーが増えると、ボタ

ンから取れる量が減っていく。つまり、発光量が少ない順からボタンを押していけばいいんだ。数字が重複していたら難しいけど、大体の番号は予測できるはずさ」

ヨシユアが言った。

「なるほど……ヨシユアって天才？」

エステルが言った。

「こんなのは基本だよ。とにかく、ボタンを調べてみよう」

ヨシユアが金庫のボタンを調べた。基本ではないと思うが……。

「……やっぱりあのパウダーだ。さっき説明した方法で開けたのは間違いないと思う」

ヨシユアが断言した。

「そ、そっか……」

「問題は、誰がそのパウダーをボタンにまぶしたかってことね。少なくとも、この屋敷を訪れたことのある人だろうけど」

エステルが言った。

「そっだね……それが問題だ」

ヨシユアが頷いた。

書斎 床

本が大量に散らばっている。

「メチャクチャに荒らされているわね。リタさんが見たら卒倒しちゃいそうだわ」

エステルが言った。

「本棚に並んでいた本が散らばっているみたいだ。あまり意味のある行動とは思えないけど……」

ヨシユアが言った。

屋根裏部屋

そこには何かの葉が落ちていた。

「あれ、これって……」

エステルが葉を拾った。セルベの葉だった。

「こんな所に葉っぱなんて、ちょっとおかしいかも……」

「しかも、このあたりの木に生えているものじゃないわ」

エステルが葉を見て言った。

「鋭いね、エステル。ここは屋敷の人たちが閉じ込められていた場所だ。閉じ込める時、犯人たちが落としたものかもしれない」

ヨシユアが言った。

「重要な証拠物件ってヤツね」

エステルがセルベの葉をしまった。

テラス

そこには手すりに傷があった。

「あれ、手すりに傷がある」

「本当だ……しかもまだ新しいね。金属製の何かを引っかけたような跡みたいだ」

屋敷の人たちの証言（ミレーヌ夫人）

「ミレーヌおばさん、大丈夫？」

エステルがミレーヌ夫人に尋ねた。

「ええ、心配いりませんよ。乱暴されたわけじゃありませんからね」

ミレーヌ夫人が言った。

「あの、侵入者たちについて何か気付いた事はありませんか」

ヨシユアが尋ねた。

「覆面をしていたから特徴とかは分からないけど……」

「そういえば、たしか玄関には鍵がかかっていたはずなのよ。ウチの人が教会に出かけて女2人だったから用心のためにね。あの人たち、いったいどこから入ってきたのかしらねえ？」

ミレーヌ夫人が言った。

屋敷の人たちの証言（リタ）

「もう、びっくりですよ！屋根裏を掃除していたら、いきなり覆面の男たちが入ってくるんですもん！」

リタが興奮して言った。

「覆面の男たち……ってことは、単独犯じゃないんだ」

エステルが考えた。

「何人ぐらいの集団でしたか？」

ヨシユアがリタに尋ねた。

「そうですね……3、4人だと思いましたけど。あ、そういえば1人は背が低かったんですよ。女性だったかもしれませんね」

リタが思い出しながら言った。

一通り調べ終わると、応接間へと2人は向かった。

「市長さんから一通り事情を教えてもらったわ。あんたたちは、何か収穫あった？」

シエラザードが2人に聞いた。

「うん、色々判ったわ」

エステルが言った。

「それじゃあ……1つ1つ確かめて行くわよ」

「まず、犯人たちが狙ったのは？」

シエラザードが尋ねた。

「金庫の中のセプチウムね」

エステルが答えた。

「犯人たちの規模は？」

シエラザードが尋ねた。

「3〜4人のグループです」

ヨシユアが答えた。

「どこから侵入したの？」

シエラザードが尋ねた。

「2階のテラスよ」

エステルが答えた。

「ずばり、今回の犯行に関係すると思われる人物像は？」

シエラザードが尋ねた。

「最近訪ねてきた旅行者だと思われます」

ヨシユアが答えた。

「へえ、よく調べたじゃない。これで犯人は特定できそうだな」

「……市長さん。ここ2、3日の間で初対面の人物を書斎に通した？」

シエラザードがクラウド市長に尋ねた。

「そ、そうじゃな。何人かいることはいるが……」

「雑誌社の記者諸君もそうじゃ」

クラウド市長が答えた。

「なんだ、あの人たちも市長さんを訪ねていたんだ」

エステルが言った。

「犯行当時、彼らは僕たちと《翡翠の塔》に行っていました。容疑者からは除外できると思います」

ヨシユアが言った。

「なるほどね……市長さん、それ以外には？」

シエラザードが再び尋ねた。

「それ以外という……ジョゼット君しかおらんが」

「ははは、でも、まさかのう」

クラウド市長が笑って言った。

「あはは、さすがにあの子が犯人つてのは無理があるよね。何と言つても王立学園の生徒だし」

エステルは笑った。

「犯罪者が分かりやすい格好をしているとは限らないわ。制服なんて、その気になればレプリカを作ることできるしね」

シエラザードが言った。

「でも、本当にいい子なんだつてば。人当たりが良くてお嬢様ばくつて……」

「ね、ヨシユア？」

エステルがヨシユアに同意を求めた。

「生憎だけど、僕の意見は逆だよ」

ヨシユアが言った。

「へっ……」

エステルが意外そうな声をあげた。

「あの時　市長さんがセプチウムを金庫に入れた時、あの子、まるで狩人のような獲物を見る目をしていたんだ。もちろん確証はなかったから問い質せなかったけど……。少なくとも、僕の目にはただの女学生には見えなかった」

ヨシユアが言った。

「そ、そんな……」

「信じられんのう……」

エステルとクラウド市長は信じられないといった様子だった。

「どちらにせよ、その女の子には話を聞いてみる必要があるそうね。その子、どこにいるか知ってる」

シエラザードは2人に聞いた。

「たしかホテルに泊まっているはずだけど……」

「でも、今日あたりにロレントを発つって言ってたわ」

エステルが言った。

「フン、急ぐ必要があるそうね。エステル、ヨシユア。まずはホテルを当たってみるわよ」

シエラザードが言った。

「う、うん……」

「分かりました」

2人は返事をした。

そして、エステルたちはホテル・ロレントへと向かった。

第1章 父、旅立つ（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

強盗の犯人はジヨゼットと思われる。しかし、信じられないといったエステル。

ジヨゼットが本当に犯人なのか!?

第1章 父、旅立つ(14) (前書き)

この14部目で第1章が終了します。感想お待ちしています。
それでは、お楽しみください。

第1章 父、旅立つ（14）

ホテル・ロレント

エステルたちは受付のヴィーノに尋ねた。

「エステルさん、ヨシユアさん。おや、シエラザードさんまで……。どうかなさいましたか？」

ヴィーノが3人に聞いた。

「ジョゼットって知ってる？ここに泊まっているはずの王立学園の学生さん」

エステルが聞いた。

「もちろん存じていますが……。つい先ほど、チェックアウトされたばかりですよ」

ヴィーノが言った。

「ちっ、一足遅かったわね」

シエラザードが舌打ちした。

「発着場に行きましょう。まだ間に合うかもしれませんが」
ヨシユアが言った。

「うーん、悪い子には見えなかったんだけどなあ」

エステルが落胆した。

「????？」

ヴィーノは首を傾げている。

ロレント発着場

受付のアランに話を聞こうとした。

「た、大変申しわけありません！まもなく到着すると思しますので今しばらくお待ちください！」

アランは慌てて言った。

「アランさん、あたしたちだつてば」

エステルが慌てているアランに言った。

「なんだ、エステルたちか。おや、シエラザードさんまで。いったい、どうしたんだい？」

アランが尋ねた。

「このあたりで制服姿の女の子を見かけませんでしたか？」

ヨシユアが尋ねた。

「制服姿の女の子？それって、どこの制服？」

アランが尋ねた。

「ジェニス王立学園だけど……」

エステルが言った。

「ああ！あそこの制服は可愛いんだよね。清楚で可憐な白のスカートと、紺のハイソックスのコントラスト。うーん、ロマンだよねえ。男子の制服は忘れちゃったけど」

アランが持論を展開した。ただのエロだな、こりゃ。

「り、理解不能なこだわりね……」

エステルが呆れた。

「それが男のサガってやつよ。で、その王立学園の制服を着た子を見なかった？」

シエラザードが気を取り直して聞いた。

「いや、ここ一カ月ばかりはお目にかかってないけど……。乗客の出入りはチェックしてるから少なくとも飛行場には来てないよ」

アランが言った。

「ということは、飛行船を使わずに街道沿いでロレントに来たのか……」

「ふむ、困ったことになったわね」

シエラザードが苦い顔をした。

「一気に搜索範囲が広がりましたね。考えてみれば、仲間がいるはずだからそいつらが潜伏する場所があるはず……」

ヨシユアが考えた。

「あ、そういえば……!!」

エステルが突然声をあげた。

「どうしたの、エステル？」

シエラザードがエステルの方を向いた。

エステルは屋根裏部屋で見つけたセルベの葉を取り出した。

「コレ、拾ったのを忘れていたわ。何かの手がかりにならないかな？」

エステルがセルベの葉を見て言った。

「そうか……それがあつたね。シエラさん、この近くでセルベの木が生えている場所を知りませんか？」

ヨシユアがシエラザードに聞いた。

「セルベの木か……。たしか、ロレントの南にあるミストヴァルドに生えていたわね」

シエラザードが言った。

「ミストヴァルド……家の反対方向にある森ですね」

ヨシユアが言った。

「行ってみる価値がありそうね。そうと決まれば、町の南口から街道に出ましょ！」

エステルが言った。

「盛り上がってるねえ。よくわからないけど頑張りなよ」

アランが3人に言った。

発着場を出たところで、娘の声が聞こえてきた。

「先輩、危ないですってばあ。そんなに無理して走ったら……」
次に男の声。

「こ、これが……走らずにいられるかってんだ！」

ドロシーとナイアルだった。

「はあはあ、せいぜい……」

「ち、ちくしょう……タバコを減らすべきかも……」

ナイアルは息苦しそうだった。

「何やってるの、お2人さん？」

エステルが話しかけた。

「おお、お前たちか。実はな、これからボースに行かなきゃならねえんだ」

ナイアルが言った。

「でも、定期船はまだ来てないみたいですけど？」

ヨシユアが言った。

「ああ、知ってる。だから街道を通っていくんだよ。さすがに時間はかかるが、歩いて行けない距離じゃねえしな」

ナイアルが言った。

「そりゃ、ご苦労さまね。ひよつとしてスクープ狙いなのか？」

エステルが聞いた。

「ああ、とびつきの極上物だぜ」

「こうしちゃいらねえ！なんとか今日中に着かねえと！」

そう言っつて、ナイアルは走り出した。

「先輩、ほんとに大丈夫かなあ」

「あ、それじゃあまたね！エステルちゃん、ヨシユア君」

そう言っつて、ドロシーもナイアルを追いかけて走り出した。

「にぎやかな連中だこと。あんたたちの知り合いなの？」

シエラザードが2人に聞いた。

「例の雑誌社の記者たちよ。父さんの代わりに塔に案内した。何か事件でもあったのかな？」

エステルは首を傾げた後、再びミストヴァルドへと向かった。

ミストヴァルド

「ここからがミストヴァルドね」

暗くて湿った森である。

「シエラさん、なにか判りますか？」

ヨシユアが尋ねた。

「……………」

「……間違いはないわね」

「ほんの少し前に、複数の人間がこのあたりを通った気配があるわ。十中八九、アタリかもしれない」

シエラザードが道を調べて言った。

「そ、そんなこと判るんだ？」

エステルが感心して声をあげた。

「逃亡犯の追跡もブレイサートレースに必要な技術だからね。とにかく森の中を調べるわよ。あんまり大きな声を出さないようにね」

シエラザードが言った。

「らじゃ〜！」

「了解しました」

そうして、3人は森の中を探索し始めた。

ミストヴァルド 奥

「ふっふっふ……まったくチヨロイもんだよね。あの程度の下準備で、こんな極上品が手に入るなんて。これで兄いたちに自慢できるよ」

ジヨゼットの声が聞こえてきた。

「しかし、お嬢にはビックリだぜ。いくら制服着てたからって、あんな演技ができるなんてよ」

仲間の1人と思われるレグが言った。

「さすが元・貴族令嬢だねえ」

同じくデイノが言った。

「フンだ……昔の事はどうだっていいだろ。しかし、この格好をし

てりや大抵のヤツは騙せるから助かるよ。あの、お人好しの市長と
いい、脳天気な女遊撃士といい……。あはは、おめでたいヤツら！」
ジヨゼットが高笑いした。
他の3人も笑った。

「（あ、あんですって〜っ!?!?）」
陰に隠れたエステルがむかつとした。

「（落ち着いて……。もうちょっと話を聞いてみよう）」
ヨシユアが制した。

「（むう……。仕方ないわね）」
エステルはとどまった。

「でも、あのガキどももけっこう手強そうでしたぜ？ 鉱山に現れた魔
獣をことごとく退治してたし……」

鉱員見習いだった男は強盗のライルだった。

「鉱山？ ああ、キミが失敗したやつか。成功してたら、ボクがわざ
わざ猿芝居を打つことなかったのにさ」

ジヨゼットがライルに言った。

「す、すまんお嬢……」
ライルが謝った。

「まあ、そう気にすんな。終わり良ければ全て良しだよ。それにし
ても……。あんな連中が遊撃士とはまったく笑わせてくれるよね。特
に、あのノーテンキ女！ ボクのことを毛ほども疑わずに『仲良くな
れそう』だってさ！ あはははは！ 笑いをこらえるのに必死だったよ
！」

ジヨゼットが笑うと、3人も盛大に笑った。

「……何がおかしいのよ」

エステルたちが武器を構えながら姿を現した。

「ア、アンタたちは……」

ジヨゼットが驚いた。

「黙って聞いてりゃあ脳天気だの、おめでたいだの好き放題言ってくれちゃって……」

「覚悟はできてんでしょーね!？」

エステルは怒り心頭といった様子だ。

「遊撃士だと!？」

「どうしてここに……」

強盗たちは焦った。

「屋敷からセプチウムを盗んだ手際は見事だったけど……」

「フフ、詰めが甘かったみたいね?」

シエラザードが言った。

「遊撃士協会規約に基づき、家宅侵入・器物損壊・強盗の疑いであなたたちの身柄を拘束します。抵抗しない方が身のためですよ?」

ヨシユアが言った。

「あわわ……」

「お、お嬢、どうすんだ!？」

強盗たちが後ずさりした。

「ビビることはないよ!いくら遊撃士とはいえ、しょせんは女子供の集まりさ!ボクたち《カプア一家》の力を骨の髄まで思い知らせてやるんだ!」

ジヨゼットが叫んだ。

「なにが女子供よ!自分のことを棚に上げておいて!もくアツタマきた!絶対ギャフンって言わせてやる!」

エステルがキレた!

「それはこっちのセリフだね!キミたち、やっちゃんいな!」

ジヨゼットが言った。

「がってんだ!」

強盗3人が叫んだ。

しばらく後、エステルたちはジョゼットたちを打ち負かした。

「そ、そんなバカな……」

ジョゼットが地面に手をつきながら言った。

「ふふん、参ったか 遊撃士を舐めるんじゃないわよ。さて、アレは返してもらうからね」

エステルはジョゼットからセプチウムの結晶を奪い返した。

「ああ、ボクの七耀石……」

ジョゼットが未練がましく言った。

「あんたのじゃなくて、ロレントの人たち全員のもの！まったく図々しいんだから……」

エステルが呆れながら言った。

「さて、結晶も取り戻したことだし、告白タイムと参りましょうか。面白い名前を言ってたわね？たしか《カプア一家》とか……」

シエラザードはジョゼットに近づいた。

「ギクッ……」

「さ、さあね、なんのことやら」

ジョゼットははぐらかした。

「フフ、強情じゃない。そういう子は嫌いじゃないわよ」

シエラザードはジョゼットの目の前で鞭を打った。

「ひゃあっ！あ、危ないじゃないのさ！」

ジョゼットが飛び退いた。

「口を開くつもりがないなら、身体に聞くしかないじゃない？大丈夫、優しくしてあげるから」

シエラザードが微笑みながら言った。

「ひ……。ち、近寄るな、あっちいけーっ！」

ジョゼットが青ざめながら喚いた。

「（シエラ姉、絶対楽しんでるよね）」

「（触らぬ神にたたりなし、だね……）」

2人はその様子を眺めている。

その時、ヨシユアが叫んだ。

「シエラさん、あぶない！」

シエラザードが素早くよけた。

「オハルガン導力砲!？」

シエラザードが驚いた。

「シエラ姉、大丈夫!？」

エステルが聞いた。

「平気よ!それより上に注意しなさい！」

シエラザードが言った。

上から飛行艇が降りてきた。

「ひ、飛行艇!？」

エステルが驚いた。

「あはは、形勢逆転だねっ！」

ジヨゼットが笑いながら言った。

中からジヨゼットと同じ姿をした男が扉から出てきた。

「ジヨゼット、大丈夫か!？」

その男が言った。

「キール兄!ずいぶん遅かったじゃないか!まあいいや、早く加勢

してよ！」

ジヨゼットは兄であるキールに言った。

「いや、ロレント進出はお預けだ。お前がない時にポーズで面倒

な事が起きたんだ」

キールが言った。

「め、面倒なこと?」

ジヨゼットが不思議そうに言った。

「いいから早く乗りな!グズグズしてると置いていくぞ」

キールが急かした。

「く……」

ジヨゼットが飛行艇に乗った。

「ま、待ちなさいよ、こちらあ！」

エステルが叫んだ。

「勝負はおあずけだ！これで勝ったと思わないでよ！いずれ決着をつけてやるからね！」

ジョゼットがそう言うのと飛行艇が飛んで行ってしまった。

「……………」

エステルは黙った。

「参ったわね……………あんなモノまで出してくるとは。あはは、一本取られちゃった」

シエラザードが苦笑した。

「笑い事じゃないってば！うっつ、くやしいよっ！！」

エステルが顔をしかめた。逃がしたことより、馬鹿にされた事の方が悔しそうだった。

「まあ、いいじゃない。セプチウムも取り戻せたんだし。それにしても……………彼らは空賊だったみたいですね」

ヨシユアが深刻そうに言った。

「ええ、間違いなさそうね。どうやらボース地方を根城にしてる連中みたいけど……………」

「まさかロレントみたいな田舎に出張してくるとは思わなかったわ」
シエラザードが言った。

「空賊だろうが山賊だろうがどうだっていいわよ！あの生意気ボクっ子、今度会ったら、ギタギタのパーにしてやるんだから！」

エステルが言った。山賊とは古い……………。

「ギタギタのパーって……………」

ヨシユアが苦笑した。

こうして市長邸から強奪されたセプチウムの結晶は無事に取り戻された。
結晶を市長に返したエステルたちは事件の報告をするため、ギルドに戻った。

遊撃士協会 ロレント支部

「大変なことがあったわね。まさか空賊が現れるなんて……。逃がしてしまったのも無理ないわ」

アイナが言った。

「いや、今回はあたしのミスだわ。もっと用心してしかるべきだった。まだまだ先生の域には遠いわね……」

シエラザードが悔しそうに言った。

「シエラ姉の責任じゃないってば。頭に血が上ってたあたしのせいだと思う……」

「……僕も迂闊でした」

2人がシエラザードをかばった。

「いや、あんた達はよくやったわ。市長邸の現場検証も完璧だったしね」

「アイナ……推薦してもいいんじゃない？」

シエラザードはアイナに向き直って言った。

「そうね、私もそう思います」

シエラザードとアイナは意味深なことを言った。

「推薦？」

「どういうことですか？」

2人も意味が判らないようだ。

「その前に、まずは今回の調査の報酬を渡しておくわね」
アイナが言った。

「それと……これを受け取ってちょうだい」

アイナは《正遊撃士資格の推薦状》を2人に渡した。

「こ、これって……」

2人は驚いた。

「今のあなたたちは準遊撃士。つまり見習いみたいなものね。正遊撃士になるためには王国にある全ての地方支部で推薦を受ける必要があるの。これはロレント支部の推薦状よ」

アイナが説明した。

「い、いいの？そんなもの貰っちゃって……」

「正遊撃士になるにはそれなりの実績を上げる必要があるって聞きましたけど……」

2人が言った。

「代理の仕事、今回の活躍。実績としては充分だと思うわ」

「……ただし、あくまでロレント地方での実績だけだね」

アイナが言った。

「他の支部でも実績を上げて推薦をもらう必要があるってわけ。ボース、ルーアン、ツァイス。そして王都グランセル……。まだまだ道のりは長いわよ」

シエラザードが言った。

「でもでも、すっごく嬉しい！一生懸命やった甲斐があったわ！ねえヨシユア、こうなったら他の地方にも行くっきゃないよね！」

エステルが喜びながら言った。

「はは、言うと思った。賛成だけど……僕たちだけじゃ決められないよ。父さんが帰ったら相談してみよう」

ヨシユアが言った。

「うん！」

その時、支部の電話が鳴った。

「あら……」

「あ、それって通信器よね？」

索をしているそうよ。そのせいで、他の定期船も運航を見合わせているらしいの」

アイナが説明した。

「なるほどね……それで発着場が混雑してたのか」
シエラザードが言った。

「そ、それで……」

「……………」

アイナが急に閉口した。

「アイナさん？」

エステルがアイナの顔を見た。

「エステル、ヨシユア。気をしっかりもってちょうだい」

「……行方不明になった定期船にカシウスさんが乗っていたらしいの」

アイナが重苦しく言った。

「……………」

「……………え」

「まさか……!!」

「う、嘘でしょう!？」

エステルとヨシユア、シエラザードは信じられないといったばかりに驚いた。

「乗客名簿に名前があったらしいの」

「リベール遊撃士協会、ロレント支部所属、正遊撃士……」

「カシウス・ブライト、45歳って……」

一同は静まり返った。

第1章 父、旅立つ（14）（後書き）

これで、「第1章 父、旅立つ」は終了です。

ここまでの感想や文の構成、内容の分かり易さ、良い所・悪い所など、この小説の批評、評価をお願いします。皆様の評価をもとに、次の第2章を書き進めたいと思います。

どうか、よろしく願います。

第2章 消えた飛行客船(1)

ブライト家 夜

エステルは自分の部屋に籠っていた。

「……………」
ヨシユアがエステルの部屋の前で立ち尽くしている。どう声をかければいいのか迷っているようだ。

「エステル、いいかな？」

ヨシユアが扉をノックした。

「……………ヨシユア？」

エステルが返事した。

「食事の用意、出来たから。ちなみに今夜は、ローストチキンのバジル風味とオニオンスープのグラタン」

ヨシユアが言った。

「……………美味しそうだね……………」

「うん、後で行くから先に2人で食べててよ……………」

エステルは部屋から出ようとしなない。

「そっか……………。わかった。冷めないうちにおいでよ」

そう言うと、ヨシユアはリビングに降りた。

「『運命の輪』……………またこのカードが出たか。やはり、何かが起きているのは疑いようのない事実……………。その何かはまだに見えてこない」

シエラザードがタロットで占っていた。

「あら、エステルはどうしたの？」

シエラザードがヨシユアの方を向いて聞いた。

「先に食べててくれって……………あまり食欲がないみたいです」

ヨシユアが俯きながら答えた。

「そっか……。さすがにあの元気娘も今回ばかりは応えたみたいね」
シエラザードも俯いた。

「……無理、ないですよ。なんだかんだ言って、仲のいい父娘ですから……」

ヨシユアが言った。

「そうね……」

「……………」

ヨシユアが席に着いた。

「シエラさんはどう思います？ 今回の件、事故なのか、それとも事件なのか……」

ヨシユアがシエラザードに尋ねた。

「……正直、何とも言えない。先生は一流の遊撃士よ。こと危機管理に関してはケタ外れの能力を持っている。事故だろうが、事件だろうが、その場に先生がいるんだつたら、すぐに解決されているはずだわ。だけど実際、定期飛行船は先生ごと行方不明になった……」
シエラザードは考えて言った。

「ありえない事が起きた……つまりそういう事ですよね」

ヨシユアがまたも難しい顔をして俯いた。

「ふふ、そんな顔しなさんな。あなたはどつしり構えてエステルを支えてやんなさい。明日、あたしの方で動いて……」

その時、エステルの声が聞こえた。

「はあく、いい匂いっ。もうガマンの限界だよ」

エステルがリビングへやってきた。

「えっ……？」

「エステル……あなた、大丈夫なの？」

2人は意外そうな顔をした。

「もーダメダメ。お腹空いて倒れる寸前よ。うわ、美味しそーじゃん！」

そう言って、エステルは席に着くと食事を始めた。そういう意味で聞いたのではないと思う。

「いったただきまーす！あれ、2人とも食べないの？美味しいよ、スープレタタン。オニオンの甘みが利いてて。さっすがヨシユア。いい仕事してるじゃない」

エステルは元気そうにヨシユアに言った。

「そ、そりやどうも……」

ヨシユアは相変わらず呆然としている。

「ほらほら。シエラ姉も遠慮しないで。あ、父さんが隠し持ってる秘蔵のブランデーでも飲む？確か《スタインローゼ》の20年物だったかなあ……」

エステルがシエラザードに言った。

「ス、スタインローゼ？しかも20年物ですってえ！」

シエラザードが飛びついた。

「ちよつと、シエラさん」

ヨシユアがシエラザードに言った。

「……はつ。コホン、遠慮しときます」

シエラザードが我に返った。酒には目がないらしい。まあ、大酒のみなら当然だろう。

「ところで、何をしてたのよ？ヨシユアが呼んでも降りて来なかったじゃない」

シエラザードがエステルに言った。

「んー？ああ、替えのパジャマを探してたの。奥にしまったお気に入りが見つからなくてさ」

エステルが言った。

「パ、パジャマあ？」

ヨシユアが意味が分からない様子だ。

「それと旅行用具一式。どれだけかかるか判らないし、備えあれば憂いなしってやつよ」

エステルが言った。

「あ……」

ヨシユアが意味を理解したようだ。

「あんだ、もしかして……」

「先生の消息を確かめに、ボースに行ってみるつもり？」
シエラザードが言った。

「モチのロンよ。あの悪運の強い父さんに何かあったとは思えないけど……。じつとしてるのは性に合わないし、ちよっくら行って確かめてくるわ」

エステルが言った。

「はは……まったく君って子は……」

「前向きっていうか、神経が図太いっていうか……」

ヨシユアが苦笑した。

「なによ、失礼しちゃうわね。どうせ、ヨシユアも付き合ってくれるんでしょ？」

エステルがむっとしながら言った。

「あたりまえだよ。でも、定期飛行船は軍の搜索活動が終わるまで運航中止になってるみたいだ。ボースまで、街道を使って歩いていくしかなさそうだね」

ヨシユアが言った。

「歩いてボースまでか……どのくらい時間がかかるのかな？」

エステルが考えた。

「遊撃士の足だったら、急げば半日くらいのもんよ。しかしまったく……そういうことなら話は早いわね。その話、あたしも乗せてもらうから」

シエラザードが言った。

「えっ……シエラ姉も来てくれるの？でも、仕事が忙しいんじゃない……」

……

エステルが言った。

「こら、あたしは先生の弟子よ？師に何かあったと聞いて、留守番なんかしてられますかっての。協会の仕事は、アイナに頼んで他のメンバーに回してもらおうわよ」
シエラザードが言った。

「シエラ姉……」

「シエラさん、ありがとう」

2人がシエラザードに感謝した。

「礼を言われる筋合いはないわ。これだけの事件を新人だけに任せるわけにはいかないってこと」

シエラザードが2人に言った。

「む、悔しいけど、その通りかもしれない。まあいいや、シエラ姉が一緒だったらすごく心強いし」

「よろしくお願いします」

2人が言った。

「フフ、こちらこそ。とりあえず、明日の朝、出発前にギルドに寄りましょ。アイナに事情を説明しなくちゃね」

シエラザードが微笑みながら言った。

こうして、慌しい事件が解決し、一日が過ぎていった。

第2章 消えた飛行客船（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちが父、カシウス・ブライトの旅に出た。カシウス・ブライトはどうなったのか!?

第2章 消えた飛行客船(2)

遊撃士協会 ロレント支部

エステル、ヨシユア、シエラザードの3人は、アイナに事情を説明した。

「話はわかりました。正直、カシウスさんに続いてシエラザードに抜けられると、かなり人手不足になるけど……」

「他ならぬカシウスさんの事だもの。遠慮せずに行ってきてちょうだい」

アイナが言った。

「恩に着るわ、アイナ。ま、せいぜいリッジのヤツをめいっぱいコキ使ってやって。普段の仕事量の3倍は行けるはずだから」

シエラザードは笑いながら言った。

「さ、さすがに可哀想じゃない？」

エステルが苦笑した。

「ふふ、いざとなったら王都支部に応援を頼むから心配しないでね」

「ところでシエラザード。少しだけ時間をもらえない？あなたが請けるはずだった仕事についてちょっと……」

アイナがシエラザードに言った。

「ん、わかったわ。エステル、ヨシユア。2階で待っていてくれる？すぐに終わらせてきちゃうわ」

シエラザードがエステルたちに言った。

「はい、わかりました」

ヨシユアが頷いた。

「……………」

「ね、シエラ姉。待つんだったら、時計台の前でもいいかな？ちょっと……挨拶したい人もいるし」

エステルが言った。

「……………」

ヨシユアが首を傾げた。

「そつか……うん、そうだったわね。それじゃあ、時計台の前で待ち合わせという事にしますか。用事が済んだら、すぐにあたしも行くからね」

シエラザードが言った。

「りょーかい。ヨシユア、行こ？」

エステルがヨシユアに言った。

「あ、うん……」

そうして、エステル、ヨシユアは時計台へと向かった。

ロレント時計台前

《七耀暦1075》

リベール王家、七耀教会、ロレント市の合同で建立される。

《七陽暦1192》

百日戦役中、ロレント攻囲にてエレボニア帝国軍の砲撃により倒壊。

《七陽暦1197》

市民の協力により再建される。

時計台にはそう刻まれていた。

「この時計台を見るたびに思うんだけど……」

「戦争でいったん壊れた後、よくここまで直したものだね。ロレント市民の気概を感じるな」

ヨシユアが感心しながら言った。

「……………」

エステルは目を閉じながら黙っている。

「エステル？」

ヨシユアがエステルを見て言った。

「……ね、ヨシユア。シエラ姉が来るまで、ちょっと上に登ってみない？」
エステルがヨシユアに言った。
「時計台の上？別に構わないけど……」
ヨシユアが不思議そうに言った。
「それじゃ、行きましょ」
2人は時計台の上に登った。

「はあ。朝の空気が気持ちいい……。ねえ、ヨシユア。ここからだと家が見えるよ」
エステルは楽しそうだ。

「本当だ、屋根が見えるね。でも、いつもはここに登りたがらないのに、どういう風の吹き回しだい？この場所、君はあんまり好きじゃないと思ってたけど」
ヨシユアがエステルに尋ねた。

「……」
「この場所は好きだよ。でも、気軽には登れないんだ」
「お母さんが……亡くなった場所だから」
エステルが重く言った。

「……え……」
ヨシユアが絶句した。

「10年前の戦争の時ね……」
「ロレントを包囲した帝国軍が市民の降伏をうながすために象徴である時計台を砲撃したの」
「その頃、父さんは王国軍の軍人として戦っていて……」
「あたし、父さんが戦っている相手がどういう人たちなのか見たくてこの時計台に登っていて……」

「逃げるヒマもなく巻き込まれてい」

「でも、気付いた時には、あたしはほとんど無傷だった」

「お母さんがね、助けてくれたの」

「腕の中にあたしを抱き締めて、たくさんの瓦礫から守ってくれて

……」

「それから泣きじゃくるあたしに大好きな子守歌を唄ってくれて…

……」

「それで……それで……」

「瓦礫が取り除かれた時には……」

」

「……戦争が終わって、ここは元通りになったけど、あまり来ないようにしていた」

「辛い思い出があるからじゃないの」

「この場所に来ると、心のどこかでお母さんに頼っちゃいそうで…

……」

「頼ってばかりじゃ、お母さんみたいに強くなれない気がする……」

エステルが目を閉じながら言った。

「エステル……」

ヨシユアはかける言葉が見つからない。

「でも、いいよね？今日くらいは頼っても……」

「父さんが無事に帰ってくるようにお母さんをお願いしても……」

「父さんを守ってあげてってお母さんをお願いしても……」

エステルが言った。

「……当たり前だよ。大丈夫……父さんはきっと無事にいる。君のお母さんが守っているんだ。無事に決まってるじゃないか」

ヨシユアがエステルに近づいて言った。

」

エステルは黙っている。

「万が一、無事じゃなくてもエステルが助けてあげればいい。お母さんに助けられた君が、今度は、父さんを助ければいい。僕も一緒に手伝うからさ」

ヨシユアがエステルを励ました。

「……ヨシユア……」

エステルが呟いた。

「君の悲しみを、完全に分かち合う事はできないけど……」

「こうして……側にいることはできるから。僕の胸でよかったらいくらでも貸してあげるから」

「だから……」

ヨシユアが言った。

「……」

「……ふふっ」

エステルが笑い声を漏らした。

「えっ？」

ヨシユアが驚いた。

「あははははっ。ヨシユア、カッコつけすぎー！もー、そんなこと軽々しく言ったりしないのっ」

エステルが思いつきり笑った。

「えっ、ええっ……」

ヨシユアは後ずさりした。

「他の女の子だったら完全に誤解してるところだっ。ヨシユアって、将来絶対、色恋沙汰で苦労するタイプよね。はっ。お姉さん、心配になってきちゃった」

エステルは溜息をついた。

「わ、悪かったね、軽々しくて！なんだよもう……人がせっかく心配してるのに」

ヨシユアががつくりした。

「えへへ……ありがと、励ましてくれて。なんだか元気、出てきちゃった」

エステルが喜んだ。

「フン、そう言ってくれれば、カッコつけた甲斐がありますよ。まったくもう……ブツブツ」

ヨシユアはかなり不満そうだ。

「いじけない、いじけない。これでも感謝してるんだから。さてと……そろそろ下に降りよっか？。シエラ姉が待ってると思うし」

エステルが言った。

「そうだね、戻ろうか」

そう言っていると、ヨシユアは先に降りていった。

「……………」

「（ねえお母さん。あたし、やっと気付いたよ……）」

「（あたしが遊撃士を目指したのは、お母さんみたいに、誰かを守るくらいに強くなりたいからだって……）」

「（だから待っててね）」

「（絶対に……父さんを連れて帰るから!）」

エステルは心の中で強く誓った。

時計台前

シエラザードは先に待っていた。

「むふふ、お2人さん。良いムードだったわねえ。おねーさん、思わず赤面しちゃったわ」

シエラザードがからかった。

「えっ……。ま、まさか覗いて……!？」

ヨシユアが青ざめた。

「なにを人聞きの悪い。時間を見ようと上を見たら目に入ってきただけよ。あー、オーバルカメラでも持っていれば良かったわあ」
シエラザードが後悔混じりに言った。

「うっっ……」

ヨシユアは目を伏せた。

「もく、何言つてんのよ。単なるスキンシップじゃない。酔っ払ったシエラ姉の抱きつきグセと同じだってば」

エステルが気にしていないとばかりに言った。

「……………ふう……………」

ヨシユアが大きな溜息をついた。

「ん、どうかしたの？」

エステルが不思議そうに言った。

「はあ、あんたつて子は本当からかい甲斐がないわね。まあいいわ。レナさんに挨拶してきたの？」

シエラザードがエステルに言った。

「……………うん。ちゃんとお願ひもしてきたよ。父さんを、守ってあげてって」

エステルが言った。

「そう、だったら大丈夫。レナさんの加護は空の女神にも匹敵するからね。カシウス先生の無事は保証されたようなもんだわ」

シエラザードが言った。

「あはは、それは幾ら何でも持ち上げすぎだと思っけど……………」

エステルが苦笑した。

「そっいえば、シエラさんはエステルのお母さんと会ったことがあるんですよね？」

ヨシユアがシエラザードに尋ねた。

「ええ……………子供の頃にお世話になったの。あたしがまだ一座にいた頃ね」

シエラザードが言った。

「一座？」

ヨシユアが首を傾げた。

「巡業サーカスの一座よ。シエラ姉、踊り子やってたんだ。もうずいぶん前、ロレントに巡業に来た時に知り合いになったの」

エステルが説明した。

「正確には12年前ね。あたしが11でエステルが4つ。その時の縁で、遊撃士になる時にカシウス先生に弟子入りしたわけよ」

シエラザードが言った。

「そうだったんですか……」

ヨシユアが聞き入った。

「ま、そのあたりのことは、いずれゆっくり話すとして……。そろそろボースに出発するとしますか。定期船が運休している以上、ボースに行くには街道を通るしかないわ。まずは、ボース地方との境にあるヴェルテ橋の関所に行くわよ」

シエラザードが言った。

「西のミルヒ街道の終点ですね」

ヨシユアが言った。

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

そうして、エステル、ヨシユア、シエラザードによるカシウス・ブライト探しの旅が始まった。

第2章 消えた飛行客船（2）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちはボースに到着する。果たして事件はどうなっているのか！？

第2章 消えた飛行客船(3)

ヴェルテ橋

「やあ、ご苦労さん。ボースまで行くつもりかい？」

兵士のスコットが言った。

「その通りだけど……どうして分かるの？」

エステルが言った。

「君たちみたいいな連中が、今日は何人も通っているからさ。普段の通行量の数倍はあるね」

スコットが言った。

「ボース上空の飛行制限が行われているのが原因ですか？」

ヨシユアがスコットに聞いた。

「その通りだよ。忙しいったらありゃしない」

スコットがぶつぶつ言った。

「ま、飛行制限をしているのは、あんたたち王国軍なんだから。文句を言える立場じゃないわね」

シエラザードが意地悪そうに言った。

「うっ、その通りなんだけどさ……」

スコットがたじろいだ。

「そっだ、この関所でも一応通行規制が行われているんだ。通りたいんだったら、隣の受付で隊長から通行許可証を貰ってくれ」

スコットが言った。

「ん、オツケー」

そう言って、エステルたちは通行許可証をもらいに、兵舎へと向かった。

・ヴェルテ橋 兵舎

「エステル君……それにヨシユア君じゃないか」

アストン隊長が驚いた。

「アストンさん、こんにちは」

エステルがアストンに挨拶した。

「そちらの人は……確かシエラザード君だったか？」

アストンがシエラザードの方を向いて言った。

「ごきげんよう、隊長さん。ボース地方に渡りたくて通行許可証を貰いたいんだけど」

シエラザードが言った。

「ひよつとして……例の事件に関係しているのかね？」

アストンが言った。

「うん……」

エステルは目を伏せて頷いた。

エステルたちは行方不明になった定期船にカシウスが乗っていた事を説明した。

「なんと、カシウスさんが……」

「それは一大事だ。すぐに通行許可証を発行しよう」

アストンはそう言って大急ぎで通行許可証を発行した。

「ありがと、アストンさん。でも、いいの？こんな簡単に発行しちゃうって」

エステルがアストンに言った。

「なに、君たちは顔見知りだ。それに、王国軍としても遊撃士協会に協力は惜しまない。ああ、ただ……」

アストンは急に喋りにくそうにした。

「え？」

エステルはアストンを見た。

「……北にあるハーケン門に用事がある時は注意したまえ。君たちが遊撃士であることは伏せていた方がいいかもしれん」

アストンが言った。

「どういうことですか？」

ヨシユアがアストンに言った。

「すまない、これ以上は私の口からは言えないのだ。だが、事件を調べるつもりなら、くれぐれも慎重に行動したまえ。私もカシウスさんの無事を空の女神に祈っているよ」
エイドス

アストンは3人に言った。

通行許可証を貰ったエステルたちはスコットにそれを見せた。

「はい、貰ってきたよ」

スコットが通行許可証を受け取った。

「お、ずいぶん早く済んだな。それじゃあ開けるとしようか」
スコットはリモコンを操作した。

「さあ、通つてもいいぞ。一度通つたら、向こう側で通行許可証を貰わないかぎり、こちらには戻ってこれないからね。そこところ、注意してくれよ」

スコットが説明した。

「りょーかい」

そうして、エステルたちはヴェルテ橋の関所を通過して、ボース地方へ入った。

東ボース街道 途中

「あれ……」

エステルは前から運搬車が来るのを見つけた。

「よう！シエラザードじゃないか」

グラッツがシエラザードに言った。

「グラッツ、久しぶりね。何してるの、こんなところで？」

シエラザードがグラッツに尋ねた。

「見ての通り、護衛の仕事さ。例の事件のおかげで定期船が運休してるのは知ってるだろう？それで積荷を、こうして陸路で王都まで運んでいるってわけさ」

グラッツが説明した。

「なるほど、ご苦労さまね」

シエラザードが言った。

「そういうお前さんは若いの連れてどうしたんだい？まさか……例の事件を調べるつもりかよ？」

グラッツが言った。

「そのつもりだけど。……何かあるの？」

シエラザードは不思議そうにグラッツに聞いた。

「まあな……」

「詳しくは、ボース支部にいるルグラン爺さんから聞いてくれや。

それじゃあ、またな」

グラッツはそう言って行ってしまった。

「アストンさんといい……なんか引つかかる言い方よね」

「事情がありそうだね。それも遊撃士協会からみで」

エステル、ヨシユアが言った。

「ま、彼の言うとおりボース支部で聞けば分かるわ。さあ、先を急ぐわよ」

シエラザードが言った。

そうして、3人は再びボースを目指した。

商業都市ボース 北街区

「やっと到着したわね。ここがボース地方の中心地、商業都市ボースよ」

シエラザードが言った。

「うわ〜……いかにも都会って感じね」

エステルが感心している。

「リベール五大都市の中では、王都に次いで大きな街らしいね。確かにロレントと較べると、建物が石造りで大きい感じだな」

ヨシユアが言った。

「ね、あそこにでーんとあるめっちゃめっちゃ大きな建物、何かな？」

エステルが指差した。

「あれはボースマーケット。色々な店が集まった屋内市場ね。食料品、衣類、雑貨、家具、書籍……。武器やオーブメントを除いた、大抵の買物はあそこでできるわよ」

シエラザードが説明した。

「さすが商業都市って言われるだけはあるわね〜。あーあ……買物目的で遊びに来たかったな」

エステルが残念そうに言った。

「それはまたの機会にね。まずはギルドの支部に寄って、事件がどうなったか確かめよう」

ヨシユアが言った。

「うん……」

エステルが頷いた。

「ちなみに、遊撃士協会のボース支部はこのすぐ近くよ」
シエラザードが言った。

遊撃士協会 ボース支部

受付には年輩の老人がいた。

「おお、シエラザード。思ったよりも早く着いたな。わざわざロレントから歩いてご苦労さまだったのう」

その老人がルグラン爺さんだった。

「ルグラン爺さん、久しぶりね。もしかして、あたしたちが来るっていう連絡があつたの？」

シエラザードがルグラン老人に言った。

「うむ、先程アイナからな。それでは、その嬢ちゃんたちがカシウスの子供たちというわけか」

ルグラン老人がエステル、ヨシユアを見て言った。

「ええ、お察しの通りよ」

シエラザードが頷いた。

「えっと、初めまして。エステル・ブライトです」

「ヨシユア・ブライトです。よろしくお願いします」

2人がルグラン老人に挨拶した。

「わしはボース支部を預かる、ルグランというジジイじゃ。お前さんたちの親父さんとは色々懇意にさせてもらっている。ルグラン爺さんと呼んでくれ」

ルグラン老人が言った。

「うん、ルグラン爺さん。それで……例の事件がどうなってるのか、さっそく教えてくれないかな？」

エステルが言った。

「ウム、それなんじゃが……」

ルグラン老人が口ごもった。

「王国軍による搜索活動はいまだに続けられておるらしい。じゃが、軍の情報規制によつて状況が全く伝わって来ないのじゃ。一般市民だけでなくギルドにも何の音沙汰なしでなあ」

「ええっ！？なんでよ、軍とギルドって協力関係にあるんじゃないの？」

エステルが驚いた。

「ま、それはあくまで建前ってヤツよ。実際には、様々な局面で両者が対立することは多いのよね」

シエラザードが言った。

「つまり、縄張り争いですね」

ヨシユアが言った。

「残念ながらその通りじゃ。しかも、今回の事件に関しては、モルガン将軍が絡んでいるらしい」

ルグラン老人が言った。

「げ、モルガン将軍……それは面倒な話になってきたわね」

シエラザードは驚いて言った。

「なに、そのモルガン将軍って？」

エステルが言った。

「10年前、帝国軍の侵略を撃退した功労者として有名な人さ。歴史の教科書にも出てたはずだよ？」

ヨシユアがエステルに説明した。

「うーん、見事なくらい記憶にないわねー。で、その有名人がどう問題なの？」

エステルが言った。

「聞いた話だと、その将軍……大のブレイサー嫌いらしいのよ。遊撃士協会なんか必要ないって日頃から主張してるらしいわ」

シエラザードが溜息をつきながら言った。

「む、無茶苦茶なオツサンね。じゃあ何、その将軍のせいで情報が入ってこないってわけ？」

エステルが不満そうに言った。

「……それどころではない。軍が調査している地域にはブレイサーを立入禁止にしよる。おかげで、他の仕事にも支障を来しておるのじゃよ」

ルグラン老人が言った。

「そ、そんなあ……せつかくロレントから来たのに。こうなったら、その将軍と勝負して、どっちが事件を調べるか決めるしかっ！」

エステルがいきり立った。

「なに無茶苦茶言ってるかな……」

ヨシユアが呆れた。

「まあ、そう焦るでない。実は、今回の事件に関してポースの市長から依頼が来ておる。軍とは別に、ギルド方面でも事件を調査して欲しいとの話じゃ」

ルグラン老人が言った。

「あら、それは心強いわね。ポース市長の正式な依頼があれば、こちらが動く大義名分になるわ」

シエラザードが言った。

「なるほど、渡りに船ってやつね。ルグラン爺さん。あたしたち、その依頼を受けるわ」

エステルがルグラン老人に言った。

「うむ、いいじゃろう。と、その前に……お前さんたちは準遊撃士じゃろ」

ルグラン老人はエステル、ヨシユアに言った。

「ん、そうだけど？」

エステルは不思議そうな顔をした。

「準遊撃士とは、言うなれば、各支部に所属している見習いじゃ。

つまり、それぞれの支部に監督されている身分なわけじゃ。そして、現在のお前さんたちは、ロレント支部の所属になっておる」

ルグラン老人が説明した。

「と、いうことは……」

「こちらの仕事を引き受けるには所属を変える必要があるんですね？」

エステル、ヨシユアが言った。

「その通りじゃ。ほれ、この転属手続きの書類にサインするがええ」
ルグラン老人は転属手続きの紙をエステルとヨシユアに渡した。

「う、うん……」

「ここに名前を記入と……」

エステルとヨシユアは転属手続きの書類にサインした。

「うむ、よかるう」

「遊撃士エステル、ならびにヨシユア」

「本日をもって両名のボース支部所属を承認する」

「……これで、お前さんたちはボース支部所属となったわけじゃ」
ルグラン老人が言った。

「ちなみに、正遊撃士になったら所属に関係なく仕事ができるわよ。ま、義務と責任が増えるんだけどね」

シエラザードが言った。

「なるほど……」

「まだまだ半人前ってことかぁ……」

エステルたちが言った。

「まあ、これで市長の依頼をお前さんたちに任せられるわい。市長の屋敷は西口の近くにある。行って話を聞いてくるとよかるつ」
ルグラン老人が言った。

「うん！」

「了解しました」

そうして、エステルたちはボース市長邸に向かった。

第2章 消えた飛行客船(3) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

事件の状況の把握のために動き出したエステルたち。一体、事件はどうなっているのか!?

第2章 消えた飛行客船（4）

ボース市長邸

「うわ、豪華なお屋敷……。みてみて、あのシャンデリア！」
エステルが興奮している。子供だな。

「はしゃがないの、エステル」
ヨシユアが窘めた。

「どうやら、ここがボース市長のお屋敷みたいね。当の市長さんはいるのかしら？」

シエラザードが周りを見渡した。

その時、屋敷から執事らしき人物が現れた。

「おや、お客様ですか？」

「いらつしやいませ。ボース市長邸へようこそ。どちら様でいらつしやいますか？」

執事メントスが尋ねた。

「遊撃士協会の者よ。こちらの市長さんに依頼されて詳しい話を伺いに来たただけ」

シエラザードが言った。

「おお、話は伺っております。しかし申しわけありません。市長は留守にしております……。教会に礼拝に行っているのです」

執事メントスが謝った。

「いつごろお戻りになりますか？」

ヨシユアが尋ねた。

「左様でございますね……。実はもう、お戻りになってもおかしくない頃合なのですが」

執事メントスが言った。

「あ、それじゃあさ。あたしたちが教会に行つて市長さんと呼んでくるのはどう？」

エステルが言った。

「し、しかし……お客様の手を煩わせるわけには」
執事メントスは焦った。

「気にしないで。お互い手間が省けるんだし。ところで……市長さんってどういう外見？やっぱり金持ちそうなヒト？」

エステルが尋ねた。

「外見ですか……うむむ」

「ご立派と申しますか、美しく成長されたと申しますか。これで良いご縁があれば、わたくしも安心して隠居が……」

執事メントスが想いを馳せた。

「は？」

エステルは何を言っているのか分からない様子だ。

「はっ……失礼しました」

執事メントスが我に返った。

「ああ、それよりも市長にはメイドが1人同行しております。それを目印にされた方が宜しいかと」

執事メントスが言った。

「メイドさんを連れられた人……それは判りやすそうですね」

ヨシユアが言った。

「早速、教会に行きましょう」

3人は教会に向かった。

七耀教会 ボース礼拝堂

そこにはメイド服を着た女性がいた。

「メイドさん、みーつけた！」

エステルが言った。いきなりそれはアカンやる。

「貴方がたは……？」

メイドが言った。

「エステル、いきなり失礼だよ」

「すみません、遊撃士協会の者です。依頼内容の確認のために、市長さんを探しているんですが」

ヨシユアが溜息をついて、改めて言った。

「ああ、なるほど……。申し遅れました。私、メイドのリラと申します。市長の身の回りの世話を仰せつかっております」
リラが自己紹介をした。

「身の回りの世話……。なんか住む世界が違うわね。それで、当の市長さんは？お祈りに来てるんじゃないの？」

エステルが感心して言った。

「……サボリです」

リラが小さく言った。

「へ？」

エステルが聞き返した。

「おそらく、マーケットの視察をなさっている最中だと思います。

私に、ご自分のぶんまでお祈りするように申しつけてから、先ほど出て行かれたばかりですので」

リラが説明した。

「何ていうか……。けっこうユニークな人ですね」

ヨシユアが苦笑した。確かに、そのような人は相当珍しいと思う。

「ふふ、面白そうな人じゃない。市長が務まるかどうかは別にして」
シエラザードが言った。

「有能な方には違いありません。少々、破天荒な所はございますが」

「……そろそろ私、市長を迎えに行こうと思います。大変申しわけないので、市長邸の方でお待ちいただけませんか？すぐに市長をお連れいたしますので」

リラが言った。

「うーん、ここまで来て手ブラなものもつまらないし……。よかつたら付いて行ってもいい？」

エステルがリラに言った。

「市長を迎えにですか？私の方は構いませんが……。ではさっそく、

町の中央にあるボースマーケットに参りましょう」「
リラがそう言うと、4人はボースマーケットに向かった。

ボースマーケット

「はー、ずいぶん広いよね。市長さんはどこにいるのかな？」
エステルが辺りを見回した。

「何しろ目立つ方ですから、すぐに見つかると思います……」

「……ああ、やっぱり思ったとおり」

リラが言った。

リラの視線の先には若い女性が何か言っていた。

「貴方たち、恥を知りなさい。この大変な時に食料を買い占めて、
値をつり上げようとすると……。ボース商人の風上にも置けなく
てよ」

若い女性が2人の商人に叱っている。

「し、しかしお嬢さん……」

「僕たちはボースマーケットの売り上げアップを考えてですね……」
2人が言い返した。

「お黙りなさい！他の品ならいざ知らず、必需品で暴利を貪ったと
あつては、わがマーケットの悪評にも繋がります。即刻、元の値段
に戻しなさい！」

若い女性が有無を言わせず言い放った。

「は、はい……」

「わかりました……」

2人が頷いた。

「……わたくし、貴方たちのボースマーケットにかける情熱を疑っ
ているわけではありませんわ。ただ、判って欲しいのです。商売と
いうものが、突き詰めれば、人と人の信頼関係で成立している事を。
大丈夫、貴方たちだったら立派なボース商人になれますから」

若い女性が2人を諭した。

「お、お嬢さん……」

「はい、頑張ります!」

2人は感動しながら去って行った。

「ふう……」

若い女性が一息ついた。

「お嬢様……」

リラ達が若い女性に近づいた。

「リラ……来ていたの。恥ずかしい所を見せてしまったわね」

若い女性が照れた。

「いえ……相変わらず見事なお手並みです。それよりお嬢様。こちらの方々が用がおありだそうです。すぐにお屋敷にお戻りくださいませ」

リラが言った。

「あら、その紋章は……。ひよっとして依頼したブレイサーの方々かしら?」

若い女性が言った。

「うん、そうだけど……」

「ひよっとして貴女が……」

エステルたちが勘付いた様だ。

「ふふ、申し遅れました。わたくしの名は、メイベル。このマーケットのオーナーにしてボース地方の市長を務めています」

若い女性がメイベルと名乗った。

レストラン アンテローゼ

「た、高そうなお店……こんなところで打ち合わせするの?」

エステルが肩身狭そうにしている。

「よく商談に使いますの。味の方も、なかなかのものですわ」

メイベル市長が言った。

「しかし、ボースの市長が女性なのは聞いていたけど……。ここま
で若いとは思わなかったわね」

シエラザードが感心した。

「見たところ、あたしと4、5歳くらいしか違わなさそう」

エステルが言った。

「実際、まだ若輩者に過ぎません。亡くなった父が前市長で、ボ
スマーケットの事業権と共に政治基盤を引き継いだだけですわ」
メイベル市長が言った。

「何というか……ずいぶん率直な自己評価ですね」

ヨシユアが言った。

「所詮は商人の娘ですし、気取っても仕方ありませんから。それで
は改めて、依頼内容を確認してもよろしいでしょうか？」

メイベル市長が言った。

「うん、オツケーよ」

エステルが身構えた。

「お願いしたいのは言うまでもなく、定期船消失事件の調査と解決
です。わたくし、今回のような事件では軍よりもブレイサーの皆さ
んの方が結果を出してくれると思うのです」

「戦争をするわけではなく、謎を解き、解決するわけですから」

メイベル市長が言った。

「あら、光栄ね。買いかぶってくれるじゃない？」

シエラザードがメイベル市長を見て言った。

「商人としての目利きですわ。実際問題、消えた定期船にはボース
の有力商人が乗っています。それにこのまま、王国軍によるボース
上空の飛行制限が続いたら、こちらの商売が成り立ちません。せつ
かく、女王生誕祭を前に景気もかなり好調でしたのに……」

メイベル市長が残念そうな顔をした。

「なるほど。経済的な要請という事ですね」

ヨシユアが指摘した。

「ええ、とても軍だけに任せておくわけにはいきません。どうか、お願いできないでしょうか？」

メイベル市長が言った。

「こちらにも理由があるし、引き受けたい所ではあるけど……。今回の事件に関しては軍が、あたしたちブレイサーを締め出そうとしてるみたいなのよね。そのあたり、市長さんの立場から何とか働きかけられないものかしら？」

シエラザードが溜息をついた。

「モルガン将軍ですわね……。あの方、昔からブレイサーがお嫌いであらうから」

メイベル市長が言った。

「あれ、市長さん。その将軍のことを知ってるの？」

エステルが言った。

「亡くなった父の友人ですの。一応、顔見知りではありませんわ。ですから……。何とかできるかもしれません」

メイベル市長が言った。

「と言うと……」

ヨシユアが尋ねた。

「リラ」

メイベル市長がリラを呼んだ。

「はい、お嬢様」

リラは懐から万年筆と便せんを出してメイベル市長に渡した。

「……………」

「……………」

「……こんなものですわね」

「では、これをお持ちください」

メイベル市長は手紙を渡した。

「なに、この手紙？」

エステルが尋ねた。

「モルガン将軍への依頼状です。ボース地方の責任者として今回の

事件についての情報を請求する旨をしたためました。ある程度なら、軍が掴んだ情報を教えてくださると思いますわ」

メイベル市長が言った。

「なるほど……。でも、ブレイサー嫌いの将軍があたしたちに会ってくれるかな？」

エステルが言った。

「もちろん、皆さんの身分は伏せた方が無難だと思いますわ。ただ、市長からの使いだと名乗るだけでいいかと存じます」

メイベル市長が言った。

「う、ちよつとイヤかも。なんか騙しているみたいで……」

エステルが嫌そうな顔をした。

「騙してるわけじゃないよ。本当のことを言わないだけさ。一刻を争う状況なんだから、ここは割り切るべきだと思う」

ヨシユアが言った。

「うーん、確かにそうね。ところで、モルガン將軍ってどこに行けば会えるのかな？」

エステルがメイベル市長に尋ねた。

「ボースの北、帝国方面の国境に《ハーケン門》という砦があります。そこに將軍はいらっしゃいますわ」

メイベル市長が言った。

ボース市 北街区

「……それでは皆さん。どうかよろしく願います」
メイベル市長がお願いした。

「うん、任せといて！何か判ったら知らせに行くから」
エステルが言った。

「朗報に期待していますわ。それでは、ごきげんよう」

「……失礼いたします」

メイベル市長とリラは行ってしまった。

「さて、さっそく行くとしますか。ハーケン門は、東ボース街道から北のアイゼンロードに抜けた先よ」
シエラザードが言った。

「つまり、東口から出て、北に向かえばいいんですね」
ヨシユアが言った。

「それじゃ、レッツ・ゴー！」

3人はハーケン門へと向かった。

第2章 消えた飛行客船（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ハーケン門へと向かったエステルたち。遊撃士嫌いのモルガン將軍から情報を得られるのか！？

第2章 消えた飛行客船(5)

アイゼンロード

そこには、王国軍兵士が2人立っていた。

「ちよつと待て。この先、ハーケン門方面は現在、通行禁止となっている」

「関係者以外は通行禁止だぜ」

王国軍兵士たちがエステルたちの前を遮った。

「残念でした、関係者だもんね」

エステルは得意気にメイベル市長の手紙を見せた。

「これは、メイベル市長の……」

王国軍兵士がそれを見て驚いた。

「市長の依頼で、モルガン將軍に搜索状況をうかがいに来ました」
ヨシユアが言った。

「ちなみに正式な依頼書だから。通してくれなかったら、後々、面倒なことになるわよ？」

シエラザードがダメ押しで言った。

「う、うーむ……。仕方ない、通行を許可しよう」

「おい、いいのかよ？」

「メイベル市長といえば、ボース地方全体の責任者だぞ？さすがに無視はできないだろう」

「そりゃ確かに……」

「……おい、あんたたち。許可してやるが、くれぐれも問題は起こすなよ？」

「大変な時期だし、何ととっても帝国との国境にある場所だからな」
王国軍兵士たちは仕方なしに言った。

「はいはい、分かりました」

「それじゃ、通らせてもらうわね」

そうして、エステルたちはアイゼンロードを通った。。

ハーケン門

「こ、これがハーケン門……。メチャメチャ大きいわね〜！」
エステルがハーケン門を見上げて言った。

「帝国への唯一の玄関口にして、その脅威から王国を守る防壁……。10年前の戦争で破壊されてから、さらに堅牢なものが築かれたのよ」

シエラザードが説明した。

「ってことは、この向こう側はもう、リベールじゃないんだ……」
エステルが言った。

「そうだね……。《黄金の軍馬》を紋章に掲げるエレボニア帝国の領土だよ」

ヨシユアが言った。

「エレボニア帝国……」

エステルが呟いた。

「……………」

「さてと。早速、モルガン將軍と面会しようか。門の脇に兵舎がある……。あそこにいるんじゃないかな？」

ヨシユアが言った。

「ん、オツケー！」

エステルが向かおうとした。

「その前に……。2人とも、胸に付けている遊撃士の紋章を外しておきなさい。モルガン將軍に見つかりと面倒だからね」
シエラザードが言った。

「あ、忘れてた……」

エステルたちは準遊撃士の紋章を外した。

「な、なんだかしくりしない気分かも……」

「確かに、少し違和感があるね」

エステルとヨシユアが言った。

「ふふ、それだけあなたたちが遊撃士として馴染んだ証拠でしょうね」

シエラザードがそう言ったあと、エステルたちは兵舎の脇にいる王国軍兵士に声をかけた。

「あなたたち……いったいどこから入ってきた？アイゼンロードの検問はまだ解除されてないはずだろう」

衛兵が不審者を見る目で言った。

「自分たちは、ボースのメイベル市長の使いで来ました」

「モルガン將軍への取り次ぎをお願いできないでしょうか？」

遊撃士の身分は明かさずに市長から依頼された事を話した。

「なるほど……。そういう事なら取り次げるけど、あいにく、將軍閣下は不在だね。搜索活動の陣頭指揮を取ってるのさ」

衛兵が言った。

「タイミングが悪かったわね……」

「いつごろ戻ってくるのかしら？」

シエラザードが衛兵に聞いた。

「うーん、今日中に戻るとは思いますが。向こうにある休憩所に酒場があるから、そこで待っていてくれ。閣下が戻ってきたら教えてあげるよ」

衛兵が言った。

「酒場って、さっきの所ね。どうしてあんなものがあるの？」

エステルが衛兵に聞いた。

「なにせ帝国との国境だからな。入国・出国共に審査が厳しくて足止めを喰らう旅行者が多いんだ」

衛兵が答えた。

「なるほど、そういう事なら宿酒場のような施設は必要ですね」
ヨシユアが頷いた。

「それじゃ、お言葉に甘えて酒場で待たせてもらおうとしますか」
3人は酒場へ向かった。

ハーケン門 宿酒場

カウンター前に座っている金髪の青年がいた。

「フツ、驚いたな……。本場のリベール料理を食べるのは初めてだが、なかなかの美味だ」

金髪の青年が言った。

「ほう、嬉しいことを言ってくれるじゃねえか。街に行きや、美味いリベール料理を食わせてくれる店は色々あるぜ。旅行中、楽しみにしてるこつたな」

マスターのノーランが言った。

「もちろん、そのつもりだよ。場末の酒場の料理でこれだ。今から期待できるというものさ」

金髪の青年が言った。

「へッ、場末の酒場で悪かったな。ついでにワインでもどうだ？安物だけど、けっこうイケルぜ」

ノーランがワインを注いだ。

「フム、いただこうか……」

金髪の青年がグラスを受け取った。

「（この人、ひよつとして……）」

「（帝国から来た旅行者みたいだね）」

エステルとヨシユアが耳打ちした。

「やあ、ごきげんよう。リベールの人のようだが、帝国には旅行に行くのかな？」

金髪の青年が尋ねた。

「うっん、あたしたちはヤボ用でここに来ただけなの。帝国に行くわけじゃないわよ」

エステルが言った。

「そういうあなたはエレボニアの人みたいですね。王国には旅行に来たんですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「フツ、仕事半分、道楽半分さ」

「しかしヤボ用ときたか……君たちの正体が見えてきたよ」

金髪の青年が意味ありげに言った。

「え、正体？」

エステルが首を傾げた。

「ずばり、遊撃士だろう？」

金髪の青年が言い切った。

「ど、どうして……遊撃士の紋章は外してるのに！」

「もしかして、あんたも同業者？」

エステルたちが驚いた。

「確かに帝国にもギルドはあるが、生憎、ボクは遊撃士ではない。

ただ、ギルドに何人か知人がいてね。彼らと似たような匂いがしたからひよつとしたらと思っただけさ」

金髪の青年が言った。

「大した観察力ですね……とても素人とは思えない。本当にただの旅行者ですか？」

ヨシユアが金髪の青年を睨んだ。

「フフ、そんな風に睨まないでくれたまえ。冷たく煌めく琥珀の瞳……まるで極上のブランデーのようだ。思わず抱き締めてキスしたくなってしまうよ」

金髪の青年が怪しい目でヨシユアを見た。

「なッ……！？」

ヨシユアが後ずさりした。

「ま、大胆」

シエラザードが絶句した。

「ちよ、ちよつとお！あんたそーいう趣味のヒト!？」

エステルが怒った。

「フツ……美しいモノに目がないだけさ」

「玲瓏たる美女。水もしたたる美少年」

「天上の調べ、心洗われる風景。匠の傑作、魂震わせる物語」

「そして極上の酒と料理……」

「そうしたもの全てがボクの興味の対象たりえるのさ」

金髪の青年が言葉を並べ立てた。

「単なる節操ナシじゃない！」

「呆れ果てた快楽主義者ね」

エステルたちは言葉を失った。

「ハア、いつの時代でも天才は理解されないものだね。ガラスのよう
に繊細なボクのピュアハートはブロークンだよ。黒髪のキミ……
どうかボクを慰めてくれたまえ」

金髪の青年はヨシユアに向かって言った。

「謹んでお断りします」

ヨシユアがきつぱりと言った。

「（妙に話が弾んでやがるな……）」

ノーランは静観している。

その時、外から衛兵の声が聞こえた。

「おーい、あんたたち」

衛兵が宿酒場に入ってきた。

「あら、さっきの兵士さん」

エステルたちが振り向いた。

「つい今しがた、将軍がお戻りになったぞ。あんた達のことを話したら、すぐに会ってくださるそうだし」

衛兵が言った。

「え、ホント!？」

エステルが言った。

「至急、兵舎まで来てくれ」
そう言つて、衛兵が先に行つてしまつた。
「思ったよりも早かつたですね」
「ええ、ようやく情報が手に入るわね」
エステルたちが兵舎に向かおうとしたその時、
「フツ……それでは行つてみるとしようか」
金髪の青年まで付いてきた。
「つて、なに自然に付いてこようとしてんのよっ？」
「また絶妙のタイミングで会話に割り込んできたわね……」
エステルたちがオリビエの方を見た。
「フツ、バレたか。何だか面白そうだから見物させてもらおうと思つてね」
「さ、ボクのことには気にしないで將軍とやらと話してくれたまえ」
金髪の青年はさも事も無げに言つた。
「気にするに決まつとるわー！」
エステルが頭にきて叫んだ。
「ほら、さつさと戻りなさいつてばー！」
エステルは金髪の青年を追い払つた。
「ケチ」
金髪の青年はしぶしぶ宿酒場に戻つていった。
「とんでもない人だな……本当に、何者なんだらう？」
ヨシユアが呆れて言つた。
「タダ者じゃないのは確かね。何というか、色々な意味で」
シエラザードが言つた。確かに……。
「あんな変人、放置した方が世のため人のためだつての！とつとつと將軍に会いに行こつ！」
エステルたちは気を取り直して兵舎へ向かつた。

第2章 消えた飛行客船（5）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよモルガン將軍と対面することになったエステルたち。情報を得ることができるとか!?

第2章 消えた飛行客船（6）（前書き）

モルガン將軍と初対面。

第2章 消えた飛行客船（6）

ハーケン門 兵舎前

「言い争っているのが聞こえたが、他の旅行者とケンカしたのかい？」

衛兵が尋ねた。

「そ、そんな大ごとじゃないわよ。それよりも……將軍さんにあわせてもらえる？」

エステルが言った。

「ああ、入ってくれ。閣下の執務室は、廊下の左奥だ。関係のない場所には、なるべく入らないでくれよ」

衛兵はそう言っておエステルたちを兵舎の中に通した。

ハーケン門 兵舎内

「廊下の左奥……どうやらここが將軍の部屋みたいだね」
ヨシユアが言った。

「一応ノックしてと……」

エステルがノックした。

「……メイベル嬢の使いか？」

男性の声が聞こえてきた。

「あ、はい、そうです」

エステルが答えた。

「うむ、入ってくるがいい」

男性が言った。

「では、失礼します」

3人は中に入った。

「よく来たな。わしの名はモルガンという。アリシア女王陛下から

ハーケン門を任されておる者だ」

威厳がある風格に兵士たちとは異なる王国軍の服に身を包んだ老男性。この男性こそがモルガン將軍だった。

「初めまして。メイベル市長の代理の者です」

「ご多忙な所を失礼します」

エステルたちが挨拶した。

「なに、メイベル嬢のことは彼女が幼いころから知っておる。まして市長としての話ならば尚更、聞かぬわけにはいかんだろう」

モルガン將軍が言った。

「えっと、それじゃあ、まずはこれを読んでください」

エステルはメイベル市長の手紙を渡した。

「……………」

「ふむ…………やはり例の事件についてか。本来ならば部外秘なのだが、あの子の頼みとあつては仕方ない。判っていることは全て教えよう」

モルガン將軍が言った。

「やった、ラッキー」

エステルが喜んだ。

「……………？どうしてお主が喜ぶのだ？」

モルガン將軍がエステルを見て言った。

「（まずっ……………」

エステルが焦った。

「市長も今回の事件については、ずいぶん心配されているようです。それで、僕たちもできるだけ力になりたくて……………」

ヨシユアがうまくカバーした。

「そうか、メイベル嬢も良き協力者に恵まれて何よりだ。早速、捜索状況について説明しよう」

モルガン將軍が言った。

「謹んで拝聴させていただくわ」

エステルたちは身構えた。

「……………定期船の《リンデ号》はポーヌ国際空港を離陸してからロレ

ントに向かう途中で失踪した。現在、各方面の部隊が捜索中だが、いまだに発見されてはおらん」

モルガン将軍が言った。

「ということは、魔獣の被害や事故の可能性は少なそうですね。わりと大きな船ですから、墜落したら初期の捜索活動で発見されているはずですし……」

ヨシユアが言った。

「その通りだ。実際、ボース ロレント間の空路は比較の見晴らしのいい平原の上にある。ヴァレリア湖はもちろん、海に落ちた可能性も少ないはずだ」

モルガン将軍が言った。

「はっつ、よかったあ。最悪の事態になってなくて……」

エステルが安堵した。

「そうなるよ、人為的な理由で飛行船が奪われた可能性が高そうですね。考えられる目的は、積荷の強奪と乗員乗客を人質にした身代金要求……」

シエラザードが言った。

「いわゆる、ハイジャックですね。あと、地理的条件を考えると帝国軍による秘密工作の可能性もあるかもしれません」

ヨシユアが言った。

「は、話が大きくなってきたわね」

エステルが言った。

「……………」

モルガン将軍は黙っている。

「どうしたの、将軍さん？」

エステルが向き直って言った。

「いや、民間人にしてはなかなか見所があると思っただけ。我々も、帝国軍が関与している可能性もあると判断したため、徹底した情報規制を行っていた。国際問題、いや下手をすれば戦争まで発展しかねんからな」

モルガン将軍が言った。

「戦争……」

エステルが俯いた。

「だが、不幸中の幸いと言うべきか。今朝になってその可能性は消えた。ある組織が、王家と飛行船会社に犯行声明を送りつけた上で乗客の身代金を要求してきたのだ。その組織の名は《カプア一家》」
モルガン将軍が言った。

「《カプア一家》？そ、それってまさか……」

エステルが気付いたそうだ。

「……間違いなさそうだね」

ヨシユアも同様だ。

「首領の3兄妹に率いられたボース地方で暗躍する空賊団だ。どうやら、名前くらいは聞いたことがあるようだな？」

モルガン将軍が言った。

「聞いたことがあるどころかロレントでやり合ったばかりよ。あいづらく、まさかここまで大きな事件を起こすなんて……」

エステルが口を滑らせた。

「エステル……！」

ヨシユア、シエラザードが制したが、手遅れだった。

「あ」

エステルがしまったという顔だ。

「ロレントでやり合った？奴らの一味が、ロレント地方に出没したという話は聞いたが……」

「……」

モルガン将軍はエステルたちの正体に気付いたようだ。

「あっちゃあ……」

「はあ、おバカ……」

エステルたちは落胆した。

「……なるほどな。素人とは思えぬ口を利くからおかしいとは思っていたが……。まさか、こんな女子供が遊撃士だとは思わなかった

ぞ」

モルガン将軍が言った。

「な、なによ、女子供って！」

エステルが怒った。

「一応、メイベル市長から依頼されたのは本当ですけど……」

ヨシユアが言った。

「黙れ、姑息なマネをしおって！者ども、出会えいッッ！」

モルガン将軍が怒鳴った。その声に、エステルたちは飛び上がった。

「す、すごい大声……」

「これは筋金入りみたいね」

エステルたちがある意味感心している。

「閣下、どうしました!？」

「この連中が何か!？」

王国軍兵士が入ってきた。

「遊撃士諸君がお帰りだ！即刻、外につまみ出せ!!」

モルガン将軍が兵士に命じた。

エステルたちはつまみ出された。

「ちょ、ちょっと何よ！犬を追っ払うみたいにしてっ！」

エステルが怒っている。

「フン、同じようなものだ。わざわざ身分を隠して、情報を盗み出

そうとするとは……。そういう姑息な真似をするから遊撃士など信

用できんだ！」

モルガン将軍が言った。

「ぬ、盗むってなによ!？そもそも、そっちがギルドに情報をくれ

ないのが悪いくせに！」

エステルも相当頭にきているようだ。

「たわけ、これだけの事件をたかが民間団体に任せられるか!まっ

たく……メイベル嬢にも困ったものだ。このような女子供を雇って
搜索活動の邪魔をさせるとは……」

モルガン將軍は呆れている。

「……いい加減にしなさいよ。どうしてあたしたちがわざわざロレ
ントくん dari から出張ってきたと思っっているわけ？あんたたち軍人
が、肝心な時に役に立たないからでしょうがっ！」

シエラザードが完全に切れた！

「な、なにいいいいい！？」

モルガン將軍が真っ赤になった。

「（うわ……）」

「（シエラさん、マジギレだね……）」

エステル、ヨシユアは見守っている。

「ここ数ヶ月、ボース地方で空賊の仕業と思しき強盗事件が相次い
でいたのはご存じよね？それを、ロクに捜査もしないでギルド任せ
にしていたのはどちら？今回みたいな事件が起こったとたん、偉そ
うな態度で仕切ったりして……。しかも未だに、人質はおるか船の
行方すら掴んでいない始末。恥ずかしいと思わないのかしら？」

シエラザードが挑発した。

「黙るがいい、小娘！組織の規律に支えられた軍隊は気軽に動かせ
るものではないのだ！後先考えず動いたあげく、連中の一味を取り
逃がしたくせに小生意気な口を叩くでない！」

モルガン將軍も切れた。

「言ってくれるじゃない……」

シエラザードが怒鳴ろうとした。

その時、後ろから青年の声が聞こえた。

「フツ、悲しいことだね」

金髪の青年がリュートを携えていた。

「争いは何も生み出さない……ただ不毛な荒野を広げるのみさ。そ
んな君たちに、歌を贈ろう。心の荒野を潤して、美しい花を咲かせ

られるような、そんな優しくも切ない歌を……」
そう言つて、金髪の青年はリュートを奏で始めた。

「流れ行く 星の軌跡は……」

「道しるべ 君へ続く……」

「焦がれれば 思い寂しさと」

「苦しさを 月が笑う……」

「叶うことなどない はかない望みなら」

「せめてひとつ 傷を残そう……」

「はじめての接吻くちづけ さよならの接吻くちづけ……」

「君の涙を 琥珀にして……」

「永遠の愛 閉じ込めよう……」

全員呆れた。

「フツ……みんな判つてくれたようだね。何よりも大切なもの……それは愛と平和だということを。今風に言えば、ラブ&ピース」

金髪の青年は自己陶醉している。その瞬間、全員があきれ果てた。

「ゴ、ゴホン……。そろそろ各地の搜索部隊から報告が入ってくる頃合だな？」

モルガン将軍がわざとらしく咳払いをして、衛兵に聞いた。

「は、はい。仰るとおりであります！」

衛兵は我に返つて言つた。

「では、わしは任務に戻る。そやつらを二度と入れるでないぞ」

モルガン将軍が衛兵に言つた。

「それから……アイゼンロードの検問は解除しろ。いつまでも、この連中に居着かれたら目障りでかなわん」

モルガン将軍がそう言い残し、兵舎へ戻つていった。

「りよ、了解しました！」

衛兵が言つた。

「（あ、逃げた……）」

「（気持ちは判るけどね……）」

エステルたちは溜息をついた。

「フツ、どこの国でも軍人が無粋なのは同じだな。やはり、キミたちの方がボクの審美眼に叶っているよ」

金髪の青年が言った。

「さ、さーと。あたしたちも帰ろっか？」

「そ、そうだね」

「トラブルはあったけど、一応、情報は入手できたし……。一旦、ボースに戻ってから今後の対策を立てるとしますか」

そう言つて、エステルたちはそそくさとボースに戻ろうとした。

「おや……。ちょっと、キミたち。どこに行こうというのかね？ま、待ちたまえ。いや、どうか待つてください！」

金髪の青年がエステルたちを追いかけた。

ハーケン門 宿酒場

金髪の青年は何かエステルたちを引き止めて、宿酒場に入った。

「改めて自己紹介をしよう。オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして演奏家だね。知つての通り、エレボニア人でリベールには巡業旅行に来たのさ」

金髪の青年がオリビエと名乗った。

「あたしはエステル……」

「つて、なんで自己紹介なんかしなくちゃいけないのよっ!？」

エステルがつっこんだ。

「まあ、やり方はともかく、あの場を仲裁してくれたんだし。あ、僕はヨシユアといいます」

ヨシユアが自己紹介した。

「あたしはシエラザードよ。さっきは、あたしも頭に来て熱くなりすぎてたから助かったわ。いちおう、礼をいっておくわね」

シエラザードが言った。

「フツ、礼には及ばないよ。美と平和を愛するものとして、当然のことをしただけさ……。しかし是非にと言うのであれば、ボクと一日デートに付き合って、」

オリビエが言った。

「そういっなのはお断り。第一、そんなヒマは無いしね」

シエラザードが一蹴した。

「それは残念だ。では代わりに、ヨシユア君に付き合ってもらおうとしようか」

オリビエがヨシユアの方を向いて言った。

「なんでそうなるんですか……。夕子の悪い冗談はやめて下さい」ヨシユアは呆れている。

「心外だな。冗談のつもりじゃないんだが」

オリビエが何でと言わんばかりの顔だ。

「余計に夕子が悪いですね」

ヨシユアがひいた。真剣にそう言えるところがすごい……。

「ちょっと待ちなさいよ。なんで、あたしは誘わないの？」

エステルがむくれた。誘ってほしいのか、こんなヤツに？

「キミ？素材は申し分ないが、色気に欠けているのが問題だな。少しは、この2人を見習うといい」

オリビエが言った。

「むっかー！色気がなくて悪かったわね！しかも、男の子のヨシユアを見習えってどういうことよっ！？」

エステルが怒った。

「お、落ち着いて。エステルは充分可愛いと思うよ。まあ、確かに……色気は少ないかもしれないけど」

ヨシユアが言った。あまりフォローになっていない。

「あ、あんですってー！？」

エステルがヨシユアを睨んだ。

「やれやれ……。まあ、さっきも言った通り、あたしたちは忙しい

身なのよ。ロクにお礼も出来なくて悪いけど、そろそろ失礼させてもらうわ」

シエラザードが席を立った。

「ふむ、だったら……。ボクも、ボースという街まで同行させてもらえないだろうか？何しろリベルは初めてでね。道案内を頼みたいのだよ」

オリビエが言った。

「ま、そのくらいだったら別に構わないけど……」

シエラザードが言った。

「ちよつと、シエラ姉！」

エステルは嫌そうだ。確かに、普通は嫌がるわな。

「そのくらい良いじゃない。どうせ目的地は一緒なんだし。それに道案内というのも遊撃士の仕事のひとつよ」

シエラザードが言った。

「うー、しょうがないなあ。でもでも、コイツの毒牙にヨシユアが狙われたりしたら……」

エステルが不安そうに言った。毒牙って……。

「あの、エステル？」

ヨシユアが言った。

「ヨシユア、心配しないで！間違いが起こらないよう、あたしが守つてあげるからね！」

エステルが言った。

「何の心配をしてるのさ……」

ヨシユアが呆れた。

「人をケダモノみたいに言わないでくれたまえ。どちらかというと愛の狩人と呼んで欲しいね。恋泥棒も悪くないが、フフ……」

オリビエがまたも自己陶醉した。

「のーみそ濃んでる？」

エステルたちが呆れた。

「さてと、それでは早速ボースに出発するのでしょうか。キミたち、

よろしく案内を頼むよ」

オリビエが言った。

「さりげなく仕切ってるし……」

「っていうか、あんた！少しは人の話を聞きなさいよっ！」

エステルが怒った後、4人はボースに向かった。

第2章 消えた飛行客船（6）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

メイベル市長たちに報告するためにエステルたちはボースへ帰る。
これで飛行船を見つけることはできるのか!?

第2章 消えた飛行客船（7）（前書き）

オリビエ、ボースで豪遊を始める！

第2章 消えた飛行客船(7)

ボース市 北街区

「ほう、ここがボースか。思ったよりも都会じゃないか。あそこにある大きな建物がボースマーケットというわけだね？」

オリビエが辺りを見渡して言った。

「ふーん、詳しいわね。リベールは初めてなんじゃないの？」

エステルが言った。

「フツ、旅に出る前に観光ガイドブックを買ったのさ。《リベール通信社》とかいう、こちらの出版社が出しているヤツ」

オリビエが言った。

「ガ、ガイドブック？そんなものまで売ってるの？」

エステルが驚いた。

「なんていうか……便利な時代になったもんだね」

ヨシユアが言った。

「それで早速、マーケットで買物するつもり？」

シエラザードがオリビエに尋ねた。

「ああ、一通り冷やかしてからディナーと洒落込もうと思ってね。

ガイドによると、この街には三ツ星のレストランがあるそうだが？」

オリビエが見渡した。

「あー、あたしたちが市長と打ち合わせしたところね。てゆうか、

この建物がそうだけど」

エステルが言った。

「《アンテローゼ》ですね。本格リベール料理を出すっていう」

ヨシユアが言った。

「うん、ここで間違いなさそうだ。フッフ……今から楽しみだよ」

オリビエは楽しそうだ。

「でも、まともに食事をしたら、かなりのミラを取られるはずよ？普通の酒場をお勧めするけどね」

シエラザードが言った。

「心配ご無用。路銀はそれなりに持つてきたさ。それに余裕が無くなったら、ボクの特技で稼げばいいからね」

オリビエが言い張った。

「特技つて……あの歌と演奏のことですか？」

「あ、あれでミラを稼ぐつもり？」

エステルたちが怪訝そうな顔をした。

「フツ、帝都の大劇場ではオペラの主演を務めた事もある。あの時はたしか、一晩だけで百万ミラを稼いだものだった……」

オリビエが過去を振り返った。

「（ウソくさ……）」

エステルは全く信じてない様子だ。

「では諸君、ご苦労だったね。運命が再びボクたちを巡り合わせるまでしばしの別れだ。アディオス・アミ〜ゴ！」

そう言つて、オリビエは楽しそうにどこかに行つてしまった。

「は……とんでもないヤツだったわね。エレボニアの人間つて、みんなあんな変人なのかなあ？」

エステルは疲れたような呆れたような顔をした。

「あ、あれを一般的な帝国人と思われても困るけど……」

ヨシユアが言った。

「え？」

エステルが聞き返した。

「いや、もうちよつと真面目な人間が多いと思うよ。質実剛健を尊ぶ気風つて何かの本で読んだことがあるし」

ヨシユアが言った。

「ふーん……。それじゃあ単に、芸術家だから変わり者つていうだけなのかな？」

エステルが言った。

「こらこら。世の芸術家が聞いたら怒るわよ。さてと……將軍から聞き出した情報をルグラン爺さんに報告しなくちゃね」

シエラザードが言った。

「あと、メイベル市長にも知らせた方が良さそうですね」
ヨシユアが付け足した。

「ギルドと市長邸か……。それじゃ、早速行きましょ」
エステルたちはギルドと市長邸へ向かった。

遊撃士協会 ボース支部

「おお、お前さんたちか。何か事件のことは判ったかね？」

ルグラン老人が言った。

「えへへ……重大な情報を手に入れたよ！」

エステルたちは將軍から入手した情報をルグラン老人に詳しく説明した。

「空賊団の《カプア一家》……それは確かに重大な情報じゃな！これで遊撃士協会としても方針が決められるというものじゃ。しかし、モルガン將軍というのも噂以上に遊撃士嫌いらしいのう」
ルグラン老人が言った。

「うん、ビックリしちゃった。遊撃士つて、ロレントじゃみんなに親しまれてる職業だから、あそこまで嫌われてるなんて……」

エステルが肩を落とした。

「まあ、モルガン將軍は例外じゃ。普段は王国軍とギルドも、それなりに協力関係を保つておる。ただ、今回はかりはお前さんたちに余計な苦勞をかけることになりそうじゃのう」

ルグラン老人が言った。

「ま、こちらが出来ることを地道にやっていくしかないわね。しかし、近ごろの強盗事件も例の空賊団の仕業だったみたいね？」

シエラザードがルグラン老人に尋ねた。

「うむ、ロレントの事件と合わせて考えると決定的じゃろう。しかし、強盗とはいつでもセコイ事件が多かったんじゃないか……。まさか、

これほど大胆不敵な犯罪を犯すとは思わなんだぞ」
ルグラン老人が言った。

「言われてみればそうかも。ロレントで起きた事件だって割としよ
ーもない強盗だったし」

エステルが言った。しょーもない事件か？

「それが、定期船を乗っ取って王家を相手に身代金要求か……。た
しかにリスクが高すぎますね」

ヨシユアが言った。

「ふむ、そのあたりを踏まえた上で捜査すべきかもしれないわね」
シエラザードが結論付けた。

ボース市長邸

ボース市長邸の前にナイアルとドロシーがいた。

「なあ、お譲ちゃん。頼むからそこを通してくれよ。市長から一言、
コメントをもらうだけでいいんだからさ」

ナイアルがリラに言った。

「そうそう、ついでに写真も撮っちゃいますけど」

ドロシーが言った。

「そう仰られましても……市長は多忙を極めておりました。アポイ
ントメントのない方はお引き取り願っているところです。どうかご
了承ください」

リラが言った。

「そこを何とか！これほどの大事件なのに判つてることがロクにね
え……。読者に何か伝えてやりたいんだ！」

ナイアルは食い下がらない。

「ですが……」

リラは困った顔をした。

「そうそう、そうですね。噂の美人市長が表紙を飾れば部数倍増

も間違いナシですし〜」

ドロシーが言った。

「……………」

リラは黙った。

「こ、こらドロシー！なに失礼なこと言っやがる！」

ナイアルが慌てた。

「え、ナイアル先輩が言ったんじゃないですかあ？ネタがないんだつたら美人市長を客寄せのアイドルに仕立てて紙面を稼いじまえてっ」

ドロシーが気にせず喋り続ける。軽い口ですね。

「わ、バカッ！」

ナイアルがドロシーを制した。

「……………」

リラは相変わらず黙って聞いていた。

「あ、あの、メイドさん？」

ナイアルがリラの様子を見た。

「ずいぶん面白いお客様ですね……。お2人の話は、出来るだけ詳細にメイベル市長に伝えておきますので。今日のところはお帰りください」

リラが言った。

「ま、待ってくれ！これはちよつとした誤解なん、」

ナイアルが誤解だと言おうとしたが、

「お・帰・り・下・さ・い」

リラが有無を言わせず言った。

「はい……………」

ナイアルはしゅんとした。

「あれ、美人市長の写真、撮らなくていいんですかあ？」

ドロシーは状況を分かっていない。

「頼む……………頼むから……………これ以上喋らないでくれ……………」

ナイアルはものすごく疲れた顔をして1人で去っていった。哀れなり、ナイアル・バーンス……。

「セ、センパイ！待ってくださいよ〜！」
ドロシーが追いかけた。

「ふう……」

リラが溜息をついた。

「……………あら？」

リラがエステルたちに気がついたようだ。

「こんにちは、リラさん」

エステルがリラに挨拶した。

「まあ、ブレイサーの皆さん。ハーケン門からお戻りになったのですか？」

リラが聞いた。

「うん、まーね。ところで今の人たちって…………」

エステルがリラに聞こうとした。

「不届き者です」

リラが言った。

「へ…………」

エステルが素っ頓狂な声を出した。

「お嬢様を利用しようとする不逞ふていの輩だと申し上げたのです。私の目の黒いうちは指一本たりとも触れさせません」

リラがきっぱりと言った。

「あ、あはは……………そう」

「し、仕事熱心なんですわ……………」

エステルたちは呆れた。

「それが私の務めですから。さ、皆さんはどうぞ中へ。市長がお待ちになっています」

リラが案内した。

ボース市長邸 執務室

「市民からの苦情の処理……」

「ボース上空の飛行制限によるマーケット商品の納入遅れ……」

「下水道設備の修理について……」

「女王陛下への贈答品の選定……」

「アンセル新道での魔獣被害……」

「もう、いつになったら書類の処理が終わるんですのー！」

メイベル市長が叫んだ。彼女の頭のキャパシティーを超えたようだ。

「あの一……」

エステルが割り込んだ。

「あ、あら……？オホホ、皆さん。戻っていらしたんですか？」

メイベル市長が気まずそうに言った。

「お忙しそうですけど……お邪魔してもよろしいですか？」

ヨシユアが言った。

「コホン、もちろんですわ。モルガン將軍からの情報ですね？早速、

伺わせていただきます」

エステルたちはメイベル市長の所へ近づいて、モルガン將軍から得た情報を詳しく説明した。

「……ご苦労様です。大体の状況は飲み込みました。空賊団によるハイジャック。そして身代金の要求ですか……。思った以上に深刻な事態ですわね」

メイベル市長が話を聞いた後、言った。

「遊撃士だつてバレなければ、他にも掴めたと思うんだけど……」

エステルが肩を落とした。

「いえ、墜落事故でないことが判明しただけでも助かりましたわ。」

これでボース市としても対策が立てられるというものです。早速、市民へのアナウンスと乗客の家族への対応を考えないと……」

メイベル市長が満足げに言った。

「大変ですね……ただでさえお忙しそうなのに」

ヨシユアがメイベル市長の様子を見て言った。

「ふふ、それが市長の責務ですわ。ところで、犯人の正体は明らかになったわけですが……。引き続き、事件の調査と解決をお願いしてもよろしいでしょうか？」

メイベル市長が言った。

「もちろん、そのつもりよ。あたしたちも例の空賊団とは一度やり合った因縁があるからね。遊撃士協会のメンツに賭けて、王国軍だけに任せてはおけないわ」

シエラザードが言った。

「うん、そうだよね！父さんのこともあるし、今度こそ決着をつけなくちゃ！」

エステルが言った。

「……………」

ヨシユアは黙っている。

「ん、どうしたの？難しい力オしちゃって……」

エステルがヨシユアの方を向いて言った。

「うん……色々と考えてみたんだけど。どう考えても信じられなくてさ」

ヨシユアが言った。

「信じられない？」

エステルが聞き返した。

「あの父さんが空賊に遅れを取ったことだよ。ロレントに現れた連中だけで実力を判断するのも何だけど……」

ヨシユアが腑に落ちない様子で言った。

「確かにそれは言えるわね。あの程度の集団だったら、先生なら軽くあしらえるはずよ」

シエラザードが頷いた。

「もー、ヨシユアもシエラ姉も父さんを買いかぶりすぎだつて。確かに、けっこう腕は立つけど、集団相手じゃキツイと思うし……」

エステルは手をひらひらさせた。

「……………」

「あの、ちよつと宜しいかしら？」

メイベル市長が言った。
「エステルさんたちのお父様も例の船に乗っていらっしやっただの？」

メイベル市長が尋ねた。

「あ、話してなかったっけ……。恥ずかしながらそうなの。しかも遊撃士つだったりして。カシウス・ブライトっていうんだけど……」

エステルが言った。
「カシウス・ブライト……今、そうおっしゃいまして!？」

メイベル市長が驚いていきなり席を立った。

「え……うん??ひよつとして知り合いとか？」

エステルはたじろいだ。

「直接の面識はありません。ですが、お話は何っていますわ。そう……そうだったのですか……。これはひよつとして軍との交渉に使えるかも……」

メイベル市長は独り言を言い出した。

「市長さん？」

エステルが不思議そうに言った。

「……失礼しました。皆さんの胸中、お察ししますわ。事件の解決に役立つのなら、どのような協力でも惜しみません。何かご入用になった時には遠慮なく申しつけてくださいませ」

メイベル市長が言った。

「うーん……市長さん、どうしたのかな？父さんの名前が出たとたん、やたらと驚いてたみたいけど」

エステルが言った。

「そうだね……何となく想像はできるけど。市長さん、モルガン將軍と昔からの知り合いらしいからね」

ヨシユアは分かっているようだ。

「????」

対して、エステルは全く分からない様子だ。

「ま、それは置いておきましょう。それよりも問題なのは、これからどう動くかってことよ」

シエラザードが言った。

「うん……。ただ飛行船や空賊団の行方を闇雲に捜してもしょうがないよね。そんな事で見つかるくらいなら軍がとっくに発見してるはずだし」

エステルが考えて言った。

「……………」

「……………」

ヨシユアとシエラザードが驚いた様子をしている。

「ん、どうしたの2人とも？」

エステルがヨシユアとシエラザードを見て言った。

「エステル、成長したね……。これまでの君だったら『しらみ潰しに探せばいいのよ』とか言ってるところだけど……………」

「まさかエステルの口からそんな言葉が聞けるだなんて……。おねーさん、感無量だわ……………」

ヨシユアとシエラザードが感動している。

「どーいうイミよっ！まったく失礼しちゃうわね！」

エステルが怒った。

「はは、誉めてるんだってば」

ヨシユアが言った。

「確かに、ロレントとは違ってボース地方はかなりの広さよ。何か

手掛かりが欲しいところね」

シエラザードが言った。

「手掛かりかあ……。そうだ、さっき市長邸の前でナイアルたちを見かけたよね？記事のネタには困ってたみたいだけど……。何か知ってる可能性ないかな？」

エステルが言った。

「確かに、僕たちより一足先にボース入りしているはずだからね。

聞いてみる価値はあると思うよ」

ヨシユアが言った。

「あの2人、どこ行ったのかなあ？」

エステルたちは事件の手掛かりを探すため、ナイアルたちを探し始めた。

第2章 消えた飛行客船（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ第2章も中盤突入です。空賊団の手掛かりを探すため、エステルたちが行動を起こす！

第2章 消えた飛行客船（8）（前書き）

ナイアルの情報がエステルたちにきっかけを与えることになる！

第2章 消えた飛行客船(8)

居酒屋 《キルシエ》

そこには酔っ払ったナイアルが机に臥せっていた。

「うーん……チクシヨウ……。まったく冗談じゃねーぞう……。……
うーん……ヒック……」

完全に酩酊状態だ。

「見つけはしたけど、ベロンベロンに酔ってるわね。取材拒否されたことがそんなにシヨックだったのかな？」

エステルが言った。

「男のクセにだらしないわね。酒は呑むものであって、呑まれるものじゃないのに」

シエラザードが言った。あんたが言っても全く説得力なし。

「底なしのシエラ姉と一緒にされてもねえ……」

エステルが溜息をついた。

「失礼ね、底なしっていうのはアイナみたいな女を言うのよ。あの女、いくら飲んでも顔色変わらずに平然としてるしね。あたしみたいに気持ちよく酔っ払う酒飲みと一緒にしないでちょうだい」

シエラザードが言った。

「よくゆーわよ。いくら酔っても潰れずに、ひたすら周囲を巻き込むくせに」

エステルが言った。

「シエラさんがザルとしたら、アイナさんはタガって感じかな。どちらも底なしには違いないと思いますけど……」

ヨシユアが言った。

「むっ……」

シエラザードが黙った。

「……うーん……」

「うー。ここは……?」

ナイアルが目を覚ました。

「目、醒めたみたいですね。飲み過ぎは体に良くないですよ？」
ヨシユアが言った。

「く……頭がズキズキしやがる……。……ってなんだあ？新米遊撃士どもじゃねえか。おいおい、なんで俺がロレントなんかにいるんだ！？たしかボースまで歩いて……」

ナイアルはボケている。

「なに寝惚けてんのよ。あたしたちもボースに来たの」
エステルが言った。

「ふいーっ……。まったく驚かせやがるぜ……。おっと、こらまた色っぽい姉ちゃんと一緒にだな」

ナイアルが言った。

「初めまして、記者さん。シエラザード・ハーヴェイよ。この子たちの先輩にあたるわ」

シエラザードが自己紹介した。

「シエラザード……。おい、もしかして『銀閃のシエラザード』か？」

ナイアルが尋ねた。

「あら、光栄ね。あたしの名前を知っているの？」

シエラザードが嬉しそうにした。

「ああ、噂くらいだがな。若手遊撃士の中じゃあ、1、2を争うらしいじゃねえか。となると、お前さんたちも例の事件を調べに来たわけだな？」

ナイアルが言った。

「まあ、ね。そっちは何か情報集まった？市長さんちの前で見かけたけど、なんだか困ってたみたいじゃない」

エステルたちが言った。

「くそ、あれを見られてたのか……。ああ、そうだよ！ネタが無くて困ってたところさ！」

ナイアルが逆ギレした。

「あ、やつぱり？」

エステルが言った。

「なにせ、軍による情報規制のせいで事故かどうかも判らない状況なんだ。直接、モルガン將軍に会いにハーケン門に行こうとしたら検問に引っかかるし……ならせめて、噂の美人市長にインタビューしようと思つたら、メイドから門前払いを喰らうし……。おまけに、あのトンチキ娘は事あるごとにへマをしでかすし……。おお、女神エイドリスよ！俺が何をしたっていうんですか！」

ナイアルが悲壮な顔をした。もはや、貧乏神つきだな。

「追い詰められているわね。そんなに情報が知りたければ、教えてあげないでもないけど……」

エステルが言った。

「へ……？」

ナイアルが振り向いた。

「あたしたち、メイベル市長に協力する形で事件を調べてるの。市長さんの紹介があつたから一応、モルガン將軍にも会つたわよ」
エステルが説明した。

「……………マジで？」

ナイアルが驚いた。

「うん、マジで」

エステルが得意げな顔をした。

「おおおおおお！これぞ女神の助けだぜっ！どうか頼む！その話、俺にも教えてくれっ！」

ナイアルが目を輝かせ、深々と頭を下げた。

「それは構いませんけど……。ナイアルさん、こういう時のルールを忘れていませんか？」

ヨシユアが言った。

「……………え？」

ナイアルがぼかんとした。

「フフ……情報はタダじゃないってこと。代価が必要だって言うて

るわけ」

シエラザードが言った。

「ミ、ミラを取るつもりかよ？ 自慢じゃねえが、取材費なんざとっくに使いきっちゃったんだ！」

ナイアルが青ざめた。

「情報屋じゃないんですからミラを取ったりしませんよ。ナイアルさんは事件直後にボース入りしてましたよね？ 色々と、面白そうな話を耳にしているんじゃないですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「チツ、大人しそうな顔をして、なかなか喰えない小僧だぜ。言っておくが、こつちのネタはそれほど大したもんじゃねえぞ？」

ナイアルが言った。

「事件に関係あることだったら、どんな些細な情報でも構いません。ただし……出し惜しみは止めてくださいね？」

ヨシユアが冷ややかに言った。

「わかった、わかりましたよ！ こちらが出せるネタは2つある。そいつで手を打ってください！」

ナイアルは必死だ。

「決まりですね」

ヨシユアが言った。

「（ヨシユア、ノリノリだわ）」

「（フフ、こういう駆け引きはなかなか向いているみたいね）」

エステルとシエラザードはやり取りを眺めていた。

改めて座り直したエステルたち

「最初のネタは、西の方にあるラヴェン又村での目撃情報でな。ちようどボースを訪れていた村人から聞いた話なんだが……。事件があった夜、空飛ぶ大きな影がある村人によって目撃されたらしいん

だ

「ナイアルが言った。」

「空飛ぶ大きな影？そ、それって……」

エステルが身を乗り出した。当然、定期船のことだろう。

「ああ、例の定期船だって誰が聞いたって思うだろう？だが実際、軍の部隊が行っても何も見つけられなかったらしい……」

ナイアルが言った。

「なーんだ。期待して損しちゃった」

エステルが席に座った。

「つまり、単なる見間違いない？」

シエラザードが言った。

「だから言っただろうが！大したネタじゃないって！こんなネタでも、情報規制下じゃ集めるのに苦労したんだからな！」

ナイアルが吠えた。

「ご苦労さまです。それで、もう一つのネタは？」

ヨシユアが尋ねた。

「くっ……。……もう一つは、軍の情報部が動き始めているらしいってことだ」

ナイアルが言った。

「情報部？」

エステルが聞いた。

「噂は聞いたことがあるわね。最近、王国軍に新設されたばかりの情報収集・分析を行う集団だって」

シエラザードが言った。

「ああ、王室親衛隊と並ぶほどのエリート組織だって触れ込みだけ。司令を任されているリシャル大佐という人物がこれまたキレ者っていう噂でな。今回の事件も、彼にかかったら解決確実と囁かれているらしい」

ナイアルが言った。

「ふーん……。でも、あたしたちの捜査には役に立たない情報のよ

「な」

エステルが言った。

「悪かったな、役に立たなくて！だが、約束は約束だ！お前たちも喋ってもらうからな！」

ナイアルが言った。

「ええ、それはご心配なく」

ヨシユアが言った。

エステルたちはロレントで起きた事件やモルガン將軍から聞いた情報を一通りナイアルに伝えた。

「空賊団の《カプア一家》……王家と飛行船会社に身代金要求……。

それだ！そーいう決定的なネタが死ぬほど欲しかったんだよっ！」

ナイアルが満面の笑みを浮かべた。

「気に入ってもらえましたか？」

ヨシユアが尋ねた。

「おうよ！これで記事が書けるってもんだ！こうしちゃいらねえ

……ドロシーのヤツを見つけないと！それじゃあ、またなッ！」

ナイアルは居酒屋を飛び出していった。

「す、すっごい勢い……」

エステルは驚いている。

「よっほどネタに困って追い詰められてたんだろっね。協力できて良かったよ」

ヨシユアが言った。

「よくゆーわね。ノリノリで交渉してたクセに。まったく、人が悪いんだから」

エステルがちよっかいをかけた。

「心外だな。ギブ&テイクを前提にしたネゴシエーション（交渉のこと）ってやつさ」

ヨシユアが笑いながら言った。

「ふふ、一理あるわね。遊撃士あたしたちが相手にするのはまっとうな善人ばかりじゃない。クセのある相手との交渉ではしたたかさも必要になつてくるわ」

シエラザードが言った。

「うー、あたしには向いてないような気がする……。……。あ、それよりもさ！空飛ぶ大きな影の話、なんだか気にならなかった？」

エステルがヨシユアとシエラザードに尋ねた。

「ラヴェン又村の目撃情報だね。軍の調査が入ったってことは何もない可能性が高いと思うけど」

ヨシユアが言った。

「でも、その調査が完璧とは限らないじゃない？モルガン將軍じゃないけど、軍人ってアタマ堅そうだから見落としてることもありそうだし」

エステルが言った。

「確かに……。ダメもとで調べてみる価値はありそうだね」
ヨシユアが言った。

「ふふ、あんたたちも色々身に付いてきたじゃない。ラヴェン又村は、西にある果樹栽培が盛んな小さな村よ。西ポーヌ街道の途中から北に向かう山道の先にあるわ。さっそく行ってみるとしますか」
シエラザードが説明した。

「うん！」

そうして、エステルたちは空飛ぶ大きな影の真偽を確かめるため、ラヴェン又村へと向かった。

第2章 消えた飛行客船（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちはラヴェンヌ村へ向かうことになった。手掛かりを得ることはできるのか!?

第2章 消えた飛行客船(9)

ラヴェン又山道

「あれ……？」

エステルが声を上げた。

「おっと……」

前から赤毛の青年が現れた。

「シエラザードか。珍しいところで会うもんだな」

赤毛の青年がシエラザードに言った。

「それはこっちの台詞だね。王都方面にいたと思ったけど、あんたも事件を調べに来たクチ？」

シエラザードが尋ねた。

「いや、ヤボ用でな……。そーいや、例の事件は空賊の仕業だったらしいな？しかし、お前が来たんだったら安心して任せられるってもんだ。せいぜい頑張ってくれよ」

赤毛の青年が言った。

「なによ、冷たいじゃないの。先生が捕まったかもしれないって、あんたも聞いているはずでしょう？」

シエラザードはむっとした。

「捕まった？あのカシウス・ブライトか？はははッ、冗談キツイぜ！あの喰えないオツサンが空賊ごときに遅れをとるもんか！なんかの間違いに決まってるさ」

赤毛の青年が笑って言った。

「あたしもそう信じたいけど……」

シエラザードが溜息まじりに言った。

「（何なのかしら、この人……）」

「（分からないけど……遊撃士であるのは確かみたいだね）」

エステルとヨシユアが囁いた。

「ところで……そのガキどもはなんだよ？見たところ、新入りみ

「ただが」

赤毛の青年が言った。

「ふん、聞いて驚きなさい。カシウス先生のお子さんよ」
シエラザードが言った。

「こりや驚いた……あのオッサンの子供かよ。ふん、こいつらが
ねえ……」

「……………」

赤毛の青年がエステルとヨシユアを見回した。

「な、なによ？じろじろ眺め回しちゃって……」

エステルが言った。

「黒髪の小僧はともかく……そっちの娘はドロウトだな。本当に、
オッサンの娘なのか？」

赤毛の青年が言った。

「あ、あんですってー!？」

エステルがむかつときて言った。

「彼女は真正正銘、カシウス・ブライトの娘です。僕の方は、養子
ですけど」

ヨシユアが言った。

「ふん、そうなのか？ま、そんな事はどうでもいいか」

赤毛の青年は興味なさそうに言った。

「ど、どうでもよくないッ!」

エステルが言った。

「じゃあな、シエラザード。ガキどもに足を引っ張られないよう、
せいぜい気を付けるんだな」

赤毛の青年はエステルの言葉を無視して言った。

「はいはい。あんたこそ突っ張りすぎて痛い目に遭わないよう注意
なさい」

シエラザードが言った。

「はは、肝に銘じとくぜ」

そう言っつて、赤毛の青年が去って行った。

「な、なんなのアイツ!?めっちゃめっちゃムカつくんですけどー!」
エステルが頭にきて言った。

「なるほど……今の人が《重剣のアガット》か」
ヨシユアが言った。

「《重剣のアガット》?」

エステルが聞き返した。

「アガット・クロスナー。遊撃士協会の正遊撃士よ。特定の所属支部を決めずに各地を回りながら活動してるわ。得物は、魔獣を一刀両断できるほどの質量のある大剣……。言っておくけど、かなりの凄腕よ」

シエラザードが説明した。

「ふん、凄腕だろうが失礼なヤツには違いないわよ。そういえば、アイツも父さんの知り合いみたいだったけど……」

エステルが言った。

「父さんの実力は認めているけど、好意的とはいえない態度だったね」

ヨシユアが言った。

「色々と事情があつてね……。先生に対して突っ張ってるのよ」
シエラザードが言った。

「ふーん……。まあ、どうでもいいか。あんな失礼なヤツのことなんか。ラヴェン又村へ急ぎましょっ!」

エステルたちは再びラヴェン又村へ向かった。

ラヴェン又村

「ここがラヴェン又村……ずいぶんのどかなところよね。あ、果樹園があるんだ」

エステルが辺りを見渡して言った。

「果物の生産で知られてるけど、その昔は採掘で賑わったそうよ。」

北の方に、廃坑になった七耀石の鉱山があるって聞いたわ」
シエラザードが説明した。

「ずいぶん詳しいですね。前にも来たことがあるんですか？」
ヨシユアがシエラザードに尋ねた。

「正遊撃士になるために、修行の旅をしていた頃にね。あの時は、飛行船に乗らずに王国全土を歩き回ったもんだわ」
シエラザードが過去を振り返った。

「え、どうして？飛行船を使った方が便利なのに」
エステルが言った。

「『飛行船は確かに便利だが、五大都市しか行き来していない』」

「『その便利さに慣れてしまつと他の場所に目が行き届かなくなる』」

「『まずは、自分が守るべき場所を実際に歩きながら確かめてみる』」

「……』」

「『そんな風にカシウス先生に勧められたのよ』」
シエラザードが言った。

「へえ、父さんが……」

エステルが感心した。

「確かに、事件が起こった時、そこが行ったことのない場所だと手遅れになる可能性もありますね。あと、犯罪者を追いかける時にも地理を知っていた方が有利ですし……」

ヨシユアが言った。

「ふふ、そういうこと。さてと、それはともかく……。例の目撃情報について調べてみるとしでしょうか」
シエラザードが言った。

「とりあえず、村の人全員に声をかけてみればいいのか？」

エステルが言った。

「いきなりだと不審に思われるよ。まずは、ここの村長さんに話を聞いてみた方がいいと思う」

ヨシユアが言った。

「ん、わかった」

エステルたちはラヴェンヌ村の村長に話を聞いてみることにした。

ラヴェンヌ村・村長宅

「ほう、見かけない顔じゃな。果物の買付にでも来たのかね？」

ラヴェンヌ村の村長であるライゼン村長が言った。

「いいえ、商人じゃないわ。遊撃士協会から来た者よ。あなた、この村の村長さんね？」

シエラザードが言った。

「うむ、まあ一応、そういう事にはなつとるが……。遊撃士協会と言ったな。もしかしてアガットの仲間かね？」

ライゼン村長が尋ねた。

「ま、たしかに同僚ではあるけど、一緒に行動してるわけじゃないわ。顔見知りといったところかしら」

シエラザードが言った。

「そうか……。相変わらず1人でいるのか」

ライゼン村長は寂しげに目をつむった。

「????どうしたの、村長さん？」

エステルが尋ねた。

「や、こりゃあ失礼した。それで、ブレイサー諸君がこの辺鄙な村へんびに何の用事かね？まさか、このあたりで手配魔獣でも出おつたか？ライゼン村長が取り直して言った。

「いえ、実は……定期船消失事件について調べている最中なんです。こちらで目撃情報があったという話を聞いたのでお邪魔しました」ヨシユアが説明した。

「なんじゃ、その話かね。先日、王国軍の兵士たちも調べにきておつたが……。結局、このあたりを調査してそのまま帰っていきおつたぞ？」

ライゼン村長が言った。

「やっぱりそうなんだ……。ところで、空飛ぶ影つてのを目撃したヒトって誰なの？」

エステルが尋ねた。

「村の子供でな。ルウイという男の子じゃ。事件があった夜に怪しげな影を見たらしいが……。なにぶん、子供のことじゃ。寝ぼけて夢を見たのかもしれん」

ライゼン村長が言った。

「うーん、夢か……」

エステルが考え込んだ。

「とりあえず、その子からも話を聞いた方がよさそうだね」
ヨシユアが言った。

「ん、そだね。村長さん、お邪魔しました」

エステルが言った。

「なんのなんの。何かあつたらまた来なさい」
そうして、エステルたちはルウイという子供を探した。

ラヴェンヌ村 池の棧橋

そこに男の子がいた。

「あれ、お姉ちゃんたち、見かけないカオだね……。フルーツ買いに来た商人さん？」

男の子が言った。

「ふっ、それが違うのよね。何を隠そう、ブレイサー遊撃士よ！」
エステルが気取って言った。

「ブレイサー？アガットお兄ちゃんと同じ？でもお姉ちゃん、そんなに強そうには見えないけど……」

男の子が言った。

「うぐっ。はつきり言ってくれちゃって……。でも、この華麗な棒

術を見て果たして同じことが言えるかしら!」

そう言つて、エステルは棒を取り出し、回転させた。

「わ、わわ!クルクル回つてすごいや!」

男の子が驚いた。

「むふふ、思い知つたかね。それじゃ、もっと凄い技を……」

エステルが得意そうにそう言つた時、

「エステル、はしやぎすぎ。それよりも……もしかして君がルウイ君?」

ヨシユアが尋ねた。

「あ、うん……。どうして名前を知ってるの?」

ルウイが怪訝そうな顔をした。

「村長さんに聞いたんだ。君が、空飛ぶ影を見たつてね。その時のことを聞きにきたんだ」

ヨシユアが言つた。

「え、でも……。兵隊さんが調べて何も見つからなかつたつて……」
ルウイが言つた。

「うん、それでもいいんだ。僕たちにも教えてくれないかな?できる限り詳しくね」

ヨシユアが言つた。

「う、うん……」

「……………」

「あのね……ボク、星を見るのが好きなんだ。それで、夜中に家を抜け出して、ここで星を見たりするんだけど……。このあいだの夜、夜空に2つの影が動くのを見かけたの」

ルウイが思い出しながら語り始めた。

「え、ちよつと待つて……。空飛ぶ影つて2つもあったの?」

エステルが尋ねた。

「うん……。あつ、大きさは違つたよ。まるで親子連れみたいだつた」

ルウイが言つた。

「大きさの違う2つの影……」

エステルが考えた。

「定期船と空賊艇……そう考えると辻褃が合うわね」

シエラザードが言った。

「確かに、森に現れた船は定期船よりも小型でしたね」

ヨシユアが言った。

「それで、その2つの影は北の方に飛んで行っちゃって……。そのまま見えなくなっちゃった」

ルウイが言った。

「北っていうと……」

エステルが呟いた。

「村の裏口からさらに山道が続いているわ。ずいぶん昔に廃坑になった七耀石の鉱山があるみたいね」

シエラザードが言った。

「兵隊さんたち、北の山道をテツテイ的に調べただけど、なにも見つからなかったって……。だから、ボクが寝ぼけて夢を見たんだろって言うって……。それで……バカにしたように笑って……」

ルウイの目がジワツと潤んだ。

「ああ、もう……男の子が泣いたりしないの！あたしたちは兵隊とは違うよ。君の話が夢なんかじゃないって、ちゃんと証明してあげるんだから！」

エステルがルウイに言った。

「ほ、ホント……？」

ルウイが顔を上げた。

「ホントもホント。どーんと任せなさいって！だから君もベソかいちゃダメだからね？」

エステルが言った。

「う、うん……。お姉ちゃん、いいヒトだね！」

ルウイが喜んだ。

「（フフ、相変わらず子供に好かれやすいみたいね）」

「（ええ……あれも人徳かもしれませんね）」

シエラザードとヨシユアが呟いた。

「ん、どうしたの？」

エステルが振り向いた。

「いや、何でもないよ。それよりも、やるべき事は決まったみたいだね」

ヨシユアが言った。

「うん！早速、村の裏口から出て、北の山道を調べてみましょう！」
そうして、エステルたちは北の山道へ向かった。

第2章 消えた飛行客船（9）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちは北の山道と廃坑を調べることになった。果たしてどうなるのか!?

第2章 消えた飛行客船（10）

廃坑

エステルたちはラヴェンヌ山道を抜けて廃坑に辿り着いた。

しかし、廃坑の入口は頑丈な鎖が巻きつけてあり、南京錠によって封鎖されていた。

「ここが廃坑の入口みたいだね」

ヨシユアが言った。

「確かに、マルガ鋳山と同じような雰囲気は残っているけど……。

ずいぶん寂れちゃってるわね」

エステルが言った。鍵と鎖は錆びている。

「ずいぶん昔に閉鎖されたそうよ。鍵と鎖も錆び付いているわ。最近、開かれたことは無さそうね」

シエラザードが入口を見て言った。

「という事は、空賊たちが出入りした可能性もない……。だから軍も調べなかったのかな？」

ヨシユアが言った。

「確かに、岩山の中を調べても、何かの手掛かりが見つかるわけ、」

「……………」

エステルが急に黙った。

「どうしたの、エステル？」

シエラザードがエステルに尋ねた。

「気のせいかもしれないけど……。中から、風が吹いてきてない？」

エステルが言った。

「中からって、廃坑の奥から？」

シエラザードが不思議そうな顔をした。

「うん、そう」

エステルが頷いた。

「ちょっと待って……」

ヨシユアは人指し指を口に含んでから、そつと立てた。

「……………」

「本当だ……微かだけど風が吹いて来ている」

ヨシユアが言った。

「あ、やっぱり？」

エステルが言った。

「あんたつて、時々驚くほどカンが冴えることがあるわねえ。さすが先生の娘つてところかしら」

シエラザードが驚いた。

「父さんは関係ないつてばあ。それよりこの中……メチャメチャ気にならない？」

エステルが言った。

「確かに、どこかに通じてる可能性があるかもしれないね。調べてみる価値はありそうだし」

ヨシユアが言った。

「よし、そうと決まったら、さっそく鍵をブチ破つて……」

エステルが武器を構えた。過激ですね……。

「ここらこら、止めなさい。とりあえず村に戻つて、村長さんに相談してみるわよ。鍵を持つてるかもしれないわ」

シエラザードが言った。

「ちえーっ、残念」

エステルが悔しそうに言った。それで扉を破壊できるとは思えないが……。

エステルたちはいったんラヴェンヌ村に戻った。

ラヴェンヌ村

村長は墓の前にいた。

「村長さん、ここにいたんだ」

エステルが言った。

「おお、遊撃士の諸君か」

ライゼン村長が振り向いて言った。

「……ずいぶん立派なお墓ね」

シエラザードが言った。

「10年前の戦争の犠牲者を弔うために建てたものじゃ。ボース地
方は、帝国に近いから一番の激戦地となつてなあ……。この村も、
戦火に巻き込まれて、何人かの犠牲者を出したのじゃ」

ライゼン村長が言った。

「そうなんだ……」

「……………」

エステルとヨシユアは目を伏せた。

「はは、あんたたちまでしんみりすることはないさ。今では、ここ
の掃除をするのが、わしの日課になつとるんじゃ。ところで、どう
したね。わしに用があるんじゃないのか？」

ライゼン村長が言った。

「あ、うん。相談したい事があるんだけど。えっと、その前に……」

エステルが墓を見て言った。

「これも縁だし、あたしたちもお参りしてもいいかしら？」

シエラザードが言った。

「花はありませんけど……せめてお祈りくらいは捧げさせてくださ
い」

ヨシユアが言った。

「おお、そうか……。もちろん構わんとも。あやつらも喜ぶじやろ
うて」

エステルたちはしばし黙祷した。

エステルたちは鉱山に手掛かりがあるかもしれないことを説明した。
「ふむ、あの廃坑に手掛かりがあるかもしれないか。……確かに兵士たちは、あの中までは調べなかったのう」

ライゼン村長が言った。

「ルウイって子の話を聞いてどうしても気になっちゃって……。念のため調べてみたいから、入口の鍵を貸してくれないかな？」

エステルはライゼン村長に尋ねた。

「あの南京錠の鍵か。ちよつと待っておくれ……」

ライゼン村長は立ち上がって引き出しの中を調べた。

「確か、この引き出しに……。おっと、あつたあつた」

ライゼン村長が鍵を見つけてエステルに渡した。

「ほら、これでいいんじゃない？」

エステルは廃坑の鍵を受け取った。

「うわ、ゴツそうな鍵……。ありがと、村長さん！」

エステルが喜んだ。

「本当に助かります」

ヨシユアが言った。

「いやいや、遊撃士協会にはいつも世話になつとるからな。これくらい協力するのは当然じゃ」

ライゼン村長が言った。

「ふふ……村長さんみたいな人ばかりだと、あたしたちも助かるんだけど」

シエラザードが笑いながら言った。

「何か見つかったら、ちゃんと報告させてもらいます」

ヨシユアが言った。

「うむ、よろしく願います」

そうしてエステルたちは再び廃坑に向かった。

廃坑

「さっそく、村長さんから借りた鍵を使わなくちゃ……………」

エステルは廃坑の鍵を使って南京錠を開けた。

それから巻き付けられていた鎖をはずした。

「ふー、堅い扉だったわね」

エステルは一息ついた。

「さてと……………早速、中を調べてみようか」

ヨシユアが言った。

「空賊はともかく、魔獣がいそうな気配はするわね。気を引き締め
て行くわよ」

エステルたちは廃坑の中へと入っていった。

第2章 消えた飛行客船（10）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

廃坑の中に入ったエステルたち。その先で見たものとは!?

第2章 消えた飛行客船（11）（前書き）

これで1000000文字突破です。1つの区切りですね。

第2章 消えた飛行客船（11）

廃坑 外の谷間

エステルは廃坑の外に出た。どうやら谷間のようだ。

「まぶし……。ん、あれって……」

エステルが何かを発見したようだ。

「（静かに、エステル……）」

ヨシユアが囁いた。

「（これは、大ビンゴね……）」

そこには定期飛行船の《リンデ号》と空賊艇があった！

「重い資材は放っておいて、食料品と貴重品を優先するんだ。できるだけ急げよ。グズグズしていると連中が来る」

空賊団3兄妹の1人、キールが言った。

「がってんだ、キール兄貴」

空賊が言った。

「（こ、こんな所に定期船が……。あの子の話はやっぱり夢じゃなかったんだ……）」

エステルが驚いて言った。

「（ここは……露天掘りをしていた谷間ね……。うまい隠し場所もあつたもんだわ）」

シエラザードが言った。

「（簡単に見つからないわけですね。あれは、定期船の積荷を空賊艇に運び込んでいるのかな?）」

ヨシユアが言った。

「（考えるのはあとあと！また逃げられる前に、なんとか捕まえな

くちや！）」

エステルが言った。

「はあ、これで三往復目かよ……。まったく兄貴ときたら弟使いが荒くてたまらないぜ。まあいいや、これが終わったらゆつくりと身代金の交渉を……」

キールが嘆きながら言ったその時、

「そこまでよっ！」

エステルたちが突入した！

「なにっ!？」

キールと空賊たちが驚きながら振り向いた。

「この世に悪が栄える限り、真っ赤に燃える正義は消えず……」

「ブレイサーズ、ただいま参上！」

エステルが高らかに叫んだ。

「……………」

エステル以外の全員が静まり返った。

「あり？」

エステルが周りを見た。

「なんなの、ブレイサーズって……」

「まったくもう。すーぐ調子に乗るんだから」

ヨシユアとシエラザードが呆れている。

「な、なによっ……。ちよつと外しちゃっただけじゃない」

エステルが真っ赤になった。

「お前たちは……ジョゼットがやり合った連中!？は、話が違っじやないか!どうしてこんな早く来るんだよ？」

キールが焦った。

「話が違っ?早く来る?なにワケ判んないことを……」

エステルが不思議そうな顔をした。

「遊撃士協会の規定に基づき、定期船強奪、乗客拉致の疑いであな

たたちを緊急逮捕するわ。覚悟はいいかしら？」
シエラザードが言った。

「ちょ、ちよつと待て。ひよつとしてお前ら……3人だけで捕まえに来たのか？」

キールがエステルたちに尋ねた。

「何よ、見ればわかるでしょ？」

エステルが言った。

「ふーん、なるほどね。あの連中とは関係ないわけか。だったら話は早い……しばらく眠っていてもらおうか！」
キールたちはエステルに取り掛かった。

「いたた……なかなかやるじゃないか。ジョゼットを負かしただけはある」

キールが言った。

「おだてても何も出ないもんね。ほれ、とつとと降参して乗客たちを解放しなさいよっ！」

エステルがキールに言った。

「ははは！本当に何も知らないらしい。まったくおめでたい連中だぜ」

キールが笑いながら言った。

「あ、あんですってー！？」

エステルが怒った。

「……気をつけて！」

ヨシユアが突然言った。

キールが立ち上がると何かを投げつけた。
そこから煙が視界を覆った。

「な、なにこれ……」

「しまった、煙幕！？」

エステルたちは何も見えない。

「あーっはははははっ！積荷を残したのは残念だが、そのくらいは我慢してやるさ！あばよ、ブレイサーの諸君！」

キールは高らかに言った。

視界が開けたとき、空賊艇は空を飛んでいた。

「ごほっ、ゲホゲホ……。ちょっと目にしみた〜……」

エステルが咳き込んでいる。

「大丈夫、毒性はない……。普通の発煙筒だったみたいだね」

ヨシユアが言った。

「……見えなくなったわね。やれやれ、一度ならず二度までも取り逃がしたか。こりゃあ、あたしの方は降格されても文句言えないわね」

シエラザードは溜息をついた。

「もう、シエラ姉ってば……。そんな風に、自分一人が悪いような言い方やめてよね」

エステルが言った。

「僕たちにだって逃げられた責任はあります。悔やんでいる暇があったら、今できる事をしておかないと……」

ヨシユアが言った。

「フフ、まったく……。これじゃあ立場が逆だわね。幸い、定期船は取り戻せたし、さっそく調べてみるとしますか。中に乗客がいるかもしれないわ」

シエラザードが言った。

「……うん！」

そうしてエステルたちは定期船の中を調べ始めた。

「うわ〜……ガランとしてるわね。積荷がひとつもないわ」
エステルが内部を見て言った。

「どうやら、空賊たちに運び去られたみたいだね。この様子じゃ…

…」

ヨシユアが俯いて言った。

「……とにかく、一通り調べてみるわよ」

シエラザードが言った。

リフトカー

「これ、リフトカーよね」

エステルが言った。

「発着場で見かけるものと同じタイプみたいだね。多分、これを使
つて積荷を外に運び出したんだ」

ヨシユアが言った。

コントロールパネル

「これって何かな？」

エステルが何かの機械を見て言った。

「導力機関オパールエンジンのコントロールパネルね。導力は完全に落ちてるみたい
だけど……」

シエラザードが言った。

操縦室

「船長さんが座る席みたい。いつもだったら喜んで座っちゃおう」

「だけど……」

エステルが残念そうに言った。

「座ったりしないの」

ヨシユアが呆れた。

「これ、操縦用の舵輪よね」

「操縦していた人……どこいっちゃったのかな？」

エステルが蛇輪を見て言った。

展望室

「まぶし……光が差し込んで……」

エステルが言った。

「一通り調べてみたけど、誰もいないみたいね……」

エステルが残念そうに言った。

「どうやら、彼らの船で連れ去られた可能性が高そうだ。……たぶん、連中のアジトに」

ヨシユアが言った。

「うん……。せっかく手がかりを見つけたと思ったのに……」

エステルが残念そうに言った。

「ほらほら。そんな辛気くさい顔しないの。まだ、手がかりが完全に無くなつたわけじゃないわ。あの連中、どうしてこんな場所に定期船を隠したんだと思う？」

シエラザードがエステルに尋ねた。

「え……？」

エステルが不思議そうな声をだした。

「見たところ、船内の導力は完全に止まっている……。これはつまり、導力機関オバルエンジンが抜き取られたことを意味しているわ。オーブメントの導力は時間が経てば回復するものだからね。さらに連中は、大量の積荷を何度も往復して運び去っている。その手間とリスクを考えたら定期船ごとアジトに運んだ方が、はるかに効率がいいと思わない？」

シエラザードが言った。

「あ、確かに……。それなのに、この場所に定期船を隠していた理由か。うーん、考えられるとしたら……。アジトが特殊な場所にあるため、かな？」

エステルが言った。

「そう、まさにその通りよ。推測するに、彼らのアジトは少し特殊な場所にあるのだと思う。10〜15アージュ……。つまり、空賊艇程度の小型船のみ着陸できるような特殊な場所にね」

シエラザードが説明した。

「な、なるほど……」

エステルが大きく頷いた。

「山岳や峡谷のような高低差の激しい入り組んだ地形……。そういった場所が怪しそうですね」

ヨシユアが言った。

「ええ、あたしもそう思う。ただそうになると……。あたしただけでは限界だわ。歩いて辿り着けない場所にアジトがある可能性もあるからね」

シエラザードが言った。

「ど、どうするの？」

エステルが言った。

「そうね……。不本意だけど、事情を説明して軍に協力を要請すべきかもしれない。彼らは警備飛行艇を持っているから」

シエラザードが残念そうに言った。

「え〜っ……いまさら軍の連中に頼るの!？」

エステルはおおいに不満そうだ。

「どのみち、この定期船のことを連絡しないわけにはいかないさ。彼らの態度がどうであれ、ここは協力した方がいいと思う。それで人質が戻ってくるんならね」

ヨシユアが言った。

「うーん、そうね……。こだわってる場合じゃないか」

エステルが言った。

「とりあえず、ギルドへ戻ってルグラン爺さんに報告しましょう。ギルドの導力通信を使えば、ハーケン門に連絡できるはずよ」

そうして、3人はギルドへ戻ろうとしたが、定期船を出た時、

「え、ええ〜っ!?!?こ、これってどういうコト!?!？」

エステルが叫んだ。

「ハハ、これはさすがに予想外だね」

ヨシユアが苦笑した。

「うーん、連絡する手間が省けたと喜ぶべきかしら……」
シエラザードも同様だった。

エステルたちの前には王国軍兵士が大勢いて、取り囲んでいた。

「武器を所持した不審なグループを発見!」

「お前たち! 大人しく手を上げる!」

王国軍兵士がエステルたちに向かって叫んだ。

「まったく世も末だぜ。こんな女子供が空賊とは……」
そのうちの1人が言った。

「だ、誰が空賊ですってえ!?!この紋章が目に入らないの!?!」

エステルが遊撃士の紋章を見せた。

「フン、遊撃士の紋章か……。そのようなものが身の潔白の証になるものか」

モルガン将軍が現れた。

「モ、モルガン将軍!?」

「どうしてここに……!」

エステルたちは驚いている。

「各部隊の報告に目を通して調査が不十分と思われる場所を確かめに来たのだが……。まさか、おぬしらが空賊団と結託していたとは思わなんだぞ」

モルガン将軍が言った。

「言いがかりをつけるのは止めていただけないかしら?我々は、そちらより一足先にこの場所を捜し当てただけだわ」

シエラザードが言った。

「ならば、空賊どもはどこだ?その中に人質たちはいるのか?」

モルガン将軍が言った。

「空賊には後一步のところまで逃げられてしまいました……。人質の乗客もここにはいません」

ヨシユアが言った。

「フ、語るに落ちたな……。大方、我々がやって来ることをおぬしらが空賊に知らせたのだろう」

モルガン将軍が嘲笑した。

「ちょ、ちよつとお!いいかげんにしてよねっ!」

エステルが頭にきて叫んだ。

「それはこちらの台詞だ!者ども!こやつらを引っ捕らえい!」
モルガン将軍が怒鳴った。

エステルたちは王国軍に捕らえられてしまった……。

第2章 消えた飛行客船（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

無実の罪で捕まえられたエステルたち。このままGAME OVER
Rか！？そんなことはありません。

第2章 消えた飛行客船（12）

ハーケン門 兵舎内の牢

「明朝、將軍閣下自らの手で、あんたたちの尋問が行われる。そこで無実が証明されれば2、3日で釈放されるはずさ。ま、しばらくそこで頭を冷やしておくことだな」

王国軍兵士が言った。

「はあ、冗談じゃないわよ……。こちらの言い分も聞かないで、こんな場所に放り込んでさ……」

エステルが疲れて言った。

「軍が空賊団を逮捕できれば疑いは晴らせるだろうけど……。こうなると無理かもしれないな」

ヨシユアがうなだれた。

「え、どうして？」

エステルが尋ねた。

「廃坑で戦った空賊リーダーの言葉を覚えているかい？『話が違つ、来るのが早い』って」

ヨシユアが言った。

「そういえば、そんなこと言ってたかな。あ、まさかそれって軍の部隊のことだったの!？」

エステルが言った。

「十中八九、そうだと思う。そしてそれが意味するのは……」

ヨシユアが言おうとしたとき、
「軍内部に空賊のスパイがいる。もしくは情報を流す協力者のような人物がいる」

「つまり、そういうことね？」

シエラザードがヨシユアに言った。

「はい」

ヨシユアが頷いた。

「そ、それが本当だったら絶対に捕まらないじゃない！やっぱり、あたしたちが頑張るしかないっていつのに……」

エステルが悔しそうに言った。

「八方塞がりってやつね。こんな時に、先生だったらどう切り抜けるかしら……」

シエラザードがうなだれた時、隣から声が聞こえてきた。

「フフフ……。どうやらお困りのようだね？」

青年の声のようだ。

「あれ……。ヨシユア、何か言った？」

「いや、僕は何も……」

「隣から聞こえてきたわ。しかも何だか聞き覚えのあるような……。エステルたちは首を傾げている。」

「おお、つれない事を言わないでくれたまえ。この艶のある美声を聞いたら誰だかすぐに判るだろうに……」

青年が嘆いた。

「こ、この根拠のない自信……」

「そして自分に酔った口調……」

「ひよつとしなくても、オリビエ？」

エステルたちが言った。

「ピンポーン」

「ああ、こんなところで再会することができるとは……。やはりボクとキミたちは運命で結ばれているらしいね」

オリビエが言った。

「あ、あんた……。どうしてここにいるのよ？ボースに案内したはずでしょ！」

エステルが言った。

「しかも、こんな牢屋に閉じ込められてるなんて……。一体、何をしでかしたわけ？」

シエラザードが尋ねた。

「まーまー、そう一度に質問しないでくれたまえよ。これには海よ

りも深く、山よりも高い事情があるのさ」

オリビエが言った。

「あっそ、だったら聞かない。ていつか聞いちゃったらものすごく疲れそうな気がする」

エステルがきつぱりと言った。

「偶然だね、エステル……僕もそんな予感がするんだ」

ヨシユアが言った。

「そういうわけで、話してくれなくても結構よ。あたしたちの健康と美容のために」

シエラザードが突っぱねた。

「はっはっはっ。そんなに遠慮することはない。一部始終聞いてもらうよ……ボクの身に起きた悲劇的事件をね」

オリビエが言った。

「（聞いちゃいない……）」

エステルが溜息をついた。

「キミたちと別れた後……。ボクは、マーケットを冷やかしてから、レストランの《アンテローゼ》に入った。そして、存分に舌鼓を打った後、余興にグラランドピアノを弾いたのさ。すると、レストランの支配人が身を震わさんばかりに感激してね……。レストラン専門のピアノリストとして雇いたいと頼み込んで来たわけだよ」

オリビエが語った。

「どうでもいいけど……あなた、リユート弾きじゃないの？」

エステルが尋ねた。

「フツ、天才というのは得物を選ばないものだよ。それはともかく……ボクはある条件を出してそのオフアーを受けたわけだ。ミラの代わりに、料理とワインを毎日夕夕でご馳走してくれてね」

オリビエが言った。

「何て言うか……オリビエさんらしいですね。でも、それがどうしてこんな牢屋に入れられることに？」

ヨシユアが尋ねた。

「ああ、ここからが聞くも涙、語るも涙の話なのさ。その夜、さっそくボクはシェフに作らせた鴨肉のソテーに舌鼓を打っていたのだが……」

「血を使ったソースがまたたまらなく濃厚な味わいでねえ。どうしても普通の赤ワインでは物足りなく感じてしまったのだよ」

オリビエが嘆きながら語った。

「なんか無性に殴りたくなってきたわね……。それであなたはどうしたの？」

エステルは我慢しながら聞いている。

「貯蔵庫の奥に保存されていた良さそうな一本を拝借したんだ」

「《グラン〓シャリネ》1183年物」

オリビエが言った。

「《グラン〓シャリネ》……しかも1183年物ですって！？王都のオークションに出た幻のワインじゃない！」

シエラザードが驚愕した。

「ほう、シエラ君はなかなか詳しいみたいだね。ボクも噂を聞いてかねてから飲んでみたいと思っていたのさ」

オリビエが言った。

「オ、オークションって……どのくらい値段がついたの？」

エステルが恐る恐る尋ねた。

「聞いた話じゃ……50万ミラで落札されたそうよ」

シエラザードが言った。

「ご、50万ミラ！？たかがワイン一本に！？」

エステルが驚いた。

「とんでもない世界だね……。オリビエさん。まさかそのワインを……」

ヨシユアが尋ねた。

「フッ、言うまでもない。美味しく頂かせてもらったよ」

「鼻腔をくすぐる馥郁ふくいくたる香り。喉元を愛撫あいぶする芳醇ほうじゆんな味わい」

「ねえキミたち、信じられるかい？薔薇色に輝く時間と空間が確か

にそこには存在したんだ……」

オリビエがさも嬉しそうに語った。

「……ダメだこりゃ……」

「……やっぱり疲れたね……」

「……呆れてモノも言えない……」

エステルたちはやっぱりという感じた。

「しかし、そうなるとう度は料理の方が物足りなく感じてねえ。ワインに合うくらいの逸品をシェフに作らせようとした時にちょうど支配人が帰ってきたんだ。ボクもケチじゃないからね。彼にも相伴しんぱんしてもらおうと気前よくグラスを勧めたんだか……」

「なぜか激しく立腹し始めてねえ。あれよあれよと言う間に、兵士たちがやって来たのだよ」

当たり前だろ！

「……それで……なんと……」

「……これがまた……」

「……」

オリビエはかまわず1人喋り続けた。よく口の回るヤツだ。

「以上が、ボクをここに送った涙なしでは語れぬ悲劇的事情さ」

「さあ！思う存分同情してくれたまえっ」

オリビエが高らかに言った。

「……くーくー……」

「……すーすー……」

「……うん……バカ……」

しかし、エステルたちはすでに寝ていた。

「……おや？ちよつとキミたち……。その『くー』とか『すー』とか『うん、バカ』というのはなんだね？」

「いいかい？話はここから面白くなるのだよ？ここに連れてこられてからも更なる試練がボクを待ち受けて……」

「……」

「もしもーし？ちょっと聞いてますかー？」

兵舎 牢屋内 早朝

「おい！あんたたち、起きてくれ」

王国軍兵士が言った。

「うーん……ふわわ……。んー、眠いいゝ……」

と、エステル。

「……どうしたんですか？」

と、ヨシユア。

「あふ……こんな朝早くから尋問なの？さすがに勘弁して欲しいわね」

と、シエラザード。

「いや、その反対だ。あんたたちを釈放する」

王国軍兵士が言った。

「えっ……。ど、どうして急に……」

エステルが驚いている。

「何か理由でもあるんですか？」

ヨシユアも同じ様子だ。

「……こういう訳ですわ」

そこからメイベル市長とモルガン將軍が現れた。

「し、市長さん！？」

「あらら。珍しい場所で会うじゃない」

エステルたちが驚いた。

「皆さん、大変でしたわね。ですが、もう安心して下さい。皆さんの疑いは晴れましたから」

メイベル市長が微笑んで言った。

「フン、まだ完全に納得した訳ではないが……。まあ、メイベル嬢たっての頼みだ。せいぜい彼女に感謝するといい」

モルガン将軍が言った。

「えっと、それって……。市長さんが、あたしたちをかばってくれたっていうコト？」

エステルが尋ねた。

「かばったわけではありませんわ。ただ、皆さんの事情について閣下に説明しただけですから」

メイベル市長が言った。

「あたしたちの事情……？」

エステルが首を傾げた。

「……その2人。おぬしらに1つ質問がある。カシウス・ブライトの子供というのは本当なのか？」

モルガン将軍がエステルとヨシユアに尋ねた。

「へっ……」

「はい、仰るとおりです。彼女はエステル・ブライト……。僕は養子のヨシユアといえます」

エステルが驚き、ヨシユアが説明した。

「そうか……。確かに、そちらの娘にはレナ殿の面影が残っておるな」

モルガン将軍がエステルに言った。

「!!!!」

「お母さんを知ってるの!？」

エステルが再度驚いた。

「ロレントの家を訪れた時に何度か手料理をご馳走になった。フフ、赤ん坊だったおぬしにも会ったことがあるぞ」

モルガン将軍が微笑して言った。

「ちょ、ちよつと待って……。モルガン将軍って父さんの個人的な知り合い？父さんが昔、軍にいたのはあたしも知っているけど……」

エステルがモルガン将軍に尋ねた。

「フン……。遊撃士としてのヤツは知らん。わしが知っているのは軍人としてのカシウスだけだ。稀代の戦略家と呼ばれた、な」

モルガン将軍が言った。

「戦略家？」

エステルが首を傾げた。

「まったく、何を好んで遊撃士協会などに……」

「……ええい！ 思い出すだけで腹の立つ！ わしはこれで失礼する」
モルガン将軍はぶつぶつ言いながら去って行った。

「ど、どうなってるの？」

エステルは訳がわからない様子だ。

「フフ……。エステルさんのお父様は優秀な軍人だったそうですわね。退役する時、何度も引き留めたと将軍閣下から伺ったことがありますわ」

メイベル市長が言った。

「そ、そうだったんだ……。なんだか信じられないけど」

エステルが言った。

「しかし、そうになると……。将軍の遊撃士嫌いは先生が原因かもしれないわね。目を掛けていた部下に去られた悔しさから来ているのかも……」

シエラザードが言った。

「なんかそれっぽいですね」

ヨシユアが言った。

「じゃあ何、父さんのせいであたしたち苦労しているわけ？ あ、あんの極道オヤジいっつ！」

エステルが身を震わせた。

「フフ……。さて、それでは皆さん。ボースに戻ると致しましょう。定期船が見つかった事で、事件は新たな局面を迎えました。色々と相談したい事があるのです」

メイベル市長が言った。

「あ、うん……」

「……………」

エステルが急に黙った。

「あら、どうなさったの？」

メイベル市長がエステルに尋ねた。

「帰るのは賛成なんだけど、何かを忘れているような……」

「そういえば……」

「何だったかしらね……？」

エステルたちは首をひねった。

「ああ……人は何と無情なのだろう。一夜を共にした仲間のことをいとも簡単に忘れ去るとは……。なんとという悲劇……何というやるせなさ……。いいさ、ボクはこの暗き煉獄で一人朽ち果てて行くでしょう……」

オリビエが寂しそうに言った。できればそう願いたいと思う人もいるだろう。

「アレがいたか……」

「うーん……完全に忘れ去っていたわね」

「気の毒とは思いつけど、さすがにどうすることも……」

エステルたちが言った。

「そちらの方は……噂の演奏家の方ですわね？《グラン＝シャリネ》を勝手に飲んでしまったという」

メイベル市長が言った。

「フツ、いかにも……。しかしレディ。勘違いされては困るな。あれは前払いだよ。華麗なるボクの演奏に対するね」

オリビエが言った。とてもそうには思えない……。

「フフ、面白い方ですわね。まあ、ついからですから貴方も釈放していただけるよう将軍に掛け合って差し上げますわ」

メイベル市長が笑って言った。

「ほう……？」

オリビエが呟いた。

「さ、さすがにそれは無理があるような……」

「レストラン側が訴えれば、少なくとも訴訟にはなるはずよ」
エステルたちは苦笑した。

「ふふ……その心配はありませんわ。あのレストランのオーナーはわたくしですから」

メイベル市長が言った。

「え……」

エステルが驚いた。

「あの《グラン》「シャリネ」もわたくしが競り落としたもの。これならば問題ないでしょう？」

そうしてエステルたちとオリビエは無事に釈放され、一同はボースへと戻った。

第2章 消えた飛行客船（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

無事釈放されたエステルたち。しかし、エステルたちが捕らえられている間に、ボースでは事件が起こっていた！

第2章 消えた飛行客船（13）

ボース市長邸

「まさか本当に釈放されちゃうなんて……」

エステルは呆れて呟いた。

「まったく、大した悪運なこと」

シエラザードも同じ様子だ。

「はっはっはっ。そんなに誉めないでくれたまえ」

当のオリビエは周りの様子を全く気にしていない。

「しかし、タダであるワインを飲んだとあつては心が咎めるな。契約通り、レストランでピアノを弾かせていたどころか？」

オリビエがメイベル市長に言った。少しは反省しているようだ。

「それは遠慮しておきますわ。さすがに、あの騒ぎの後だと色々と気まずいでしょうから」

メイベル市長が断った。

「（うーん、コイツだったら全然気にしないと思うけど……）」

「（確かに凶太そうだしね……）」

エステルとヨシユアは冷ややかにオリビエを見ている。

「まあ、今回のことはお互い不幸な事件と割り切りましょう」

メイベル市長が締め括ろうとしたが、

「しかし……それではボクの気が済まない」

オリビエが割り込んだ。

「ふむ、そうだな……。ちょうど、エステル君たちが何かの調査をしているようだね。ワインの礼に、彼らの手伝いをするというのはどうだろうか？」

オリビエが提案した。

「ハア？」

エステルが素つ頓狂な声をあげた。

「あら、それは面白いですわね。お願いしてもいいでしょうか？」

メイベル市長が賛成した。

「フツ、お任せあれ。そう言うわけだ。キミたち、よろしく頼むよ」
オリビエが爽やかに言った。

「ちよつと待つて……どーしてそうなるのよっ!？」

エステルが反対した。

「素人に付いてこられても正直言つて迷惑なんだけど……。足手まといにならない自信は？」

シエラザードはオリビエに尋ねた。

「銃と魔法にはいささか自信がある。無論、ボクの天才的な演奏と一緒にされても困つてしまつが」

オリビエが相変わらず自己陶酔的に言った。

「そーいうセリフが激しく不安を誘うんですけど」

エステルが呆れて言った。

「でも、悪くないかもしれないね。軍が当てにならない以上、僕たちも人手不足な気がするし」

ヨシユアは賛成のようだ。

「……………」

「まあ、いいわ。協力してもらつとしますか。ただし、足手まといになると判断したら外れてもらうけど……。それでもいいかしら？」
シエラザードが条件をつけてオリビエに尋ねた。

「フツ、構わないよ。決して失望させたりしないから、どうか安心してくれたまえ」

オリビエが自信たつぷりに言った。

「うーん、失望するもなにも最初からそんなに期待してないし」

エステルが酷いことを言った。

「フフ……話がまとまつて何よりですわ。それはそうと、皆さんに報告する事があるので」

メイベル市長が言った。

「報告すること?」

エステルが興味を示した。

「そういえば、ここに来るまでに街が騒がしかった気がするわね。何かあったの？」

シエラザードが尋ねた。

「はい……。実は昨晚、ボースの南街区で大規模な強盗事件があったのです。武器屋、オーブメント工房をはじめ、何軒かの民家が被害に遭いました」

メイベル市長が説明した。

「ええっ!？」

エステルが驚いた。

「やっぱり……。例の空賊たちの仕業ですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「今のところは不明ですが、その可能性は高そうですね。現在、王国軍の部隊が調査を行っている最中ですよ」

メイベル市長が言った。

「なるほど、あたしたちもすぐに調査した方が良さそうですね」

シエラザードが言った。

「ええ、お願い致します。ここまでの調査のお礼はギルドにお支払いしておきますわ。当座の調査費用として、どうぞお役に立ててくださいいな」

メイベル市長が言った。

「また軍の連中に邪魔されそうな気がするけど……。ま、そうならその時だよな」

エステルが前向きに言った。

「邪魔されるのはともかく……。こちらが情報を掴んだとしても、軍には伝えない方がいいと思う。本当にスパイがいるとしたら空賊たちに筒抜けになるからね」

ヨシユアが言った。

「不本意だけど仕方ないわね。とにかく、慎重に行動しましょう」
シエラザードが言った。

「フツ、それでは諸君。さっそく南街区に行くとしようか」
オリビエが割り込んで仕切り始めた。

「だくから！どうしてあんたが仕切んのよっ！」

エステルが言った。

オリビエの仕切りの性格がわずらわしい。

とにかく、エステルたちは被害状況を調べるため、オリビエと共に
ポース南街区に向かった。

第2章 消えた飛行客船（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

空賊たちの悪行はとどまる事を知らず、続いている。エステルたちは調査に乗り出すが、オリビエが加わった。これからどうなるのか！？（色んな意味で……）

第2章 消えた飛行客船（14）

ボース南街区 ルシール工房

「ふう、可愛く撮れたつと。ナイアル先輩。こんな感じでいいですかあ？」

ドロシーがナイアルに尋ねた。

「ああ、そんなもんだろ。しかしこりゃあ、根こそぎやられちまったようだな」

「……………ん？」

ナイアルがエステルたちに気付いた。

「こんにちは。さつそく取材ですか？」

「ご苦労さんね、あんたたちも」

エステルたちがナイアルたちに言った。

「おっと、お前さんたちか」

ナイアルが振り向いた。

「あー！エステルちゃんとヨシユア君！よかったねえ、釈放されたんだ」

ドロシーが喜びながら言った。

「聞いたぞ。軍の連中にとっ捕まったんだってな。いっや、ホント心配したぜ」

ナイアルがどことなく能天気に行った。本当に心配したのか？意外と笑っていたんだりして。

「なに他人事みたいに言ってくれちゃってるかな。ナイアルの情報を元に村に行った結果なんですけど？」

エステルが呆れながら言った。関係ないと思う。

「おいおい、そりゃ逆恨みだろ」

ナイアルが自分のせいではないと主張した。

「ナイアルさんたちも廃坑には行ったんですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「そうだよ、昨日のうちにね。ヨシユア君たちは連行されちゃった後だったけど」

ドロシーが言った。

「しかし、逮捕の現場にいたら面白い写真が撮れたんだが……。ホント、惜しいことをしたぜ」

ナイアルが笑いながら言った。本当に他人事のようにだ。

「こ、これだからマスコミの人間ってのは……」

エステルがナイアルに突っかかりそうな勢いだ。

「それよりも、この有様はやはり空賊の仕業なのかしら？」

シエラザードがナイアルに尋ねた。

「ああ、そうみたいだな。軍の連中も手がかりを調べているらしいが……。正直、何も無いみたいだぜ」

ナイアルが言った。

「そう、やつかいね……」

シエラザードが溜息をついた。

「記者君、ちよつといいかい？空賊たちは、街のどこから侵入したのか分かるだろうか？」

オリビエが突然尋ねた。

「ああ、目撃情報によると西口方面に去ったらしいが……」

ナイアルが答えた。

「フム、それはおかしいな。西口に入っつてすぐの所には、市長邸やマーケットもある……。それらを襲った方が遥かに実入りが良さそうだが……」

オリビエが疑問点を指摘した。

「言われてみれば確かに……」

「……ところで、あんたダレ？」

ナイアルが今頃尋ねた。

「フツ、よくぞ聞いてくれたね。オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして天才演奏家さ」

「噂くらいは聞いているだろうか？」

「……」

オリビエがお決まりの自己陶酔的自己紹介をした。

「あゝ、高級レストランでワインを飲み逃げしたっていう。お目にかかれて光栄ですう」

ドロシーは興味津々だ。光栄か……？

「ははっ、照れるぢやないか。インタビューならいつでも受け付けてあげよう」

オリビエが調子に乗り出した。

「うわー、いいんですかあ？」

ドロシーが身を乗り出した。こんなヤツ、インタビューしても意味がないと思うが……。

「アタマ痛くなってきた……」

「何て言うか……ある意味同じタイプかもね」

「なんで一緒に行動してるのかは聞かないでおくことにするぜ……」

「ま、それが無難でしょうね」

エステルたちはその様子を見て、ただただ呆れた。

色々、家を回って聞き込みをしようとしていると、

「おい、お前たち！」

王国軍士官がエステルたちを呼び止めた。

「ん、どうしたの？」

エステルが答えた。

「一言、忠告しようと思つてな。いくら市長の代理とはいえ、お前たちはあくまで民間人だ。我々が調査している最中にウロウロしないでもらおうか」

王国軍士官が言った。

「あ、あんですって〜!？」

「忠告というよりも、警告ですね」

エステルたちはむっとした。

「分をわきまえろと言っている。そんなに調べたいのだったら、我

々が引き上げた後にするんだな。あまりワガママが過ぎると、また牢屋に招待させてもらうぞ?」

王国軍士官が脅した。

「むっ……」

エステルが頭にきたようだ。

「気にしないの、エステル。どうせ何もできやしないわ」

シエラザードが冷ややかに言った。

「フツ、虎の威を借る狐とはよくぞ言ったものだね」

オリビエがさらに挑発した。

「な、なにい!?!」

王国軍士官が真っ赤になった。

その時、

「……何をやっているのかね」

前から黒服の将校がやってきた。

「こ、これは大佐どの!?!」

王国軍士官が焦った。

「栄えある王国軍の軍人が善良な一般市民を脅すとは……。まったく

く、恥を知りたまえ」

黒服の将校がたしなめた。

「で、ですがこいつらはただの民間人ではありません。ギルドの遊

撃士どもです!」

王国軍士官があわてて言った。

「ほっ、そうだったのか……。だったら尚更だろっ。軍とギルドは

協力関係にある。対立を煽ってどうするのだ?」

黒服の将校が言った。

「し、しかし自分は將軍閣下の意を汲みまして……」

王国軍士官が言い訳をした。

「やれやれ……。モルガン將軍にも困ったものだ。ここは私が引き受

けよう。君は部下を連れて撤収したまえ」

黒服の将校が王国軍士官に命じた。

「し、しかし……」

王国軍士官は納得いかない様子だ。

「早朝から始めているのだ。もう十分に調査しただろう。將軍閣下には後で私が執り成しておく。それでも文句があるのかな？」

黒服の将校が尋ねた。

「りよ、了解しました……」

「撤収！ハーケン門に戻るぞ！」

王国軍士官が部下を連れて去って行った。

「さて、と……」

「遊撃士の諸君。軍の人間が失礼をしたね。謝罪をさせてもらうよ。黒服の将校が謝った。

「これは、どうもご丁寧に。ま、こちらも挑発的だったし、お互い様としておきましょう」

シエラザードが言った。

「そう言ってくれると助かるよ」

「……先程も言ったように軍とギルドは協力関係にある。互いに欠けている部分を補い合うべき存在だと思うのだ。今回の、一連の事件に関しても君たちの働きには期待している」

黒服の将校が言った。

「フフ、失望させないようせいせい頑張らせてもらうわ」

シエラザードが微笑みながら言った。

「（な、なんか……すごくマトモそうな人ね）」

「（うん……誰なんだろう？）」

エステルとヨシユアが囁いた。

「大佐……そろそろ定刻ですが」

後ろに控えていた女性士官が言った。

「おお、そうか。それでは諸君……これで失礼させてもらうよ」

黒服の将校が去ろうとした時、

「……そういえばまだ名乗っていなかったな。王国軍大佐、リシャールという。何かあったら連絡してくれたまえ」

そう言い残して去って行った。

「リシャール大佐って……どこかで聞いたことあるような」

エステルが考えた。

「ナイアルさんが言ってた人だね」

「王国軍情報部を率いるキレ者の若手将校だっていう」

ヨシユアが言った。

「あ、そうだった　うーん、軍人にしてはけっこう話が判るヒトだったね」

エステルが感心しながら言った。

「ふむ、歳は30半ばくらい、ルックスも悪くないと来たか……」

軍人より政治家に向いていそうね」

シエラザードが勝手に分析した。

「おーい、お前さんたち」

ナイアルが工房から出てきた。

「今の黒服の軍人、誰なんだ？　なんか見覚えがあるんだが……」

ナイアルが首を傾げながらエステルたちに尋ねた。

「なんだ、顔は知らないんだ。ナイアルが言ってた、情報部のリシ

ヤール大佐だったさ」

エステルが言った。

「な、なにー……？　おいおい、そりゃホントか？」

ナイアルが思いっきり驚いた後、半信半疑で尋ねた。

「う、うん……。本人がそう名乗っていたから間違いないと思いますけど……」

エステルたちがナイアルの驚きようにたじろいだ。

「まさかこんなところで噂の人物に出くわすとは……。こっしちやいらねん！　ドロシー、追いかけるぞっ！」

ナイアルがドロシーに言った。

「アイアイサー！　よくわかりませんけど」

そう言っつて、ナイアルたちはリシャール大佐を探して走っていった。

「は、張り切ってるわね。インタビューでもするのかな？」

エステルはナイアルの様子を見て言った。

「ふふ、確かに記事にしたら受けそうな人物ではあるわね」
シエラザードが言った。

「……ふむ……」

オリビエが久々に口を開いた。なにやら考えていたようだ。

「ん、どうしたの？珍しく真剣な顔しちゃって」

エステルがオリビエに尋ねた。

「いや、今の**大佐**なんだが……。なかなかの男ぶりであるのはボクも認めるに**吝か**ではない……。しかし……」

オリビエが突然閉口した。

「しかし……なんですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「ボクのライバルとなるにはまだまだ役者不足だと言えよう。より一層の精進を期待したいね」

オリビエがアホなことを言った。

「聞くんじゃないかった……」

「その自信がどこから湧いてくるのか不思議ですね」

エステルたちが疲れた顔をした。

「ふふ、さてと……。兵士たちが居なくなった所で、調査を再開するとしますか。さっき、話を聞けなかった住民たちから話を聞くわ
よ」

シエラザードが言った。

「ん、りょーかい」

そうして、エステルたちは再び聞き込みを再開した。

第2章 消えた飛行客船（14）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちのもとに現れた王国軍情報部をまとめるリシャル大佐。彼のおかげで争いは回避できた。エステルたちは気を取り直して調査を再開する。

第2章 消えた飛行客船（15）

聞き込み セシル婆さんの家

「おや、アンタたちは……。さつき話を聞きに来ていた遊撃士さんたちじゃないか」

セシル婆さんが言った。

「あ、はい」

エステルが頷いた。

「すまなかつたねえ。さつきは相手ができなくて。それで、あなたたちも昨晩の話を聞きに来たのかい？」

セシル婆さんが尋ねた。

「はい。伺つてもよろしいですか？」

ヨシユアが言った。

「ああ、いいとも」

一同は机に座った。

「昨日の夜中のことさ。扉の外で何やら物音がしてね。あたしや、こんな時間に亭主が帰ってきたのかと思つて扉を開けて怒鳴りつけてやったんだ。だが、そこにいたのは向かいの工房から出てきた覆面の男たちだったのさ！あの時ばかりは心臓が止まるかとおもつたねえ。もつとも、向こうも驚いて北の方に逃げていったけどさ」

セシル婆さんが語った。

「なるほど……それが空賊たちだったのね」

エステルが頷いた。

「じゃあ、ここのお宅は特に被害はなかつたんですね？」

ヨシユアが尋ねた。

「ああ、不幸中の幸いだったよ」

セシル婆さんが頷いた。

「ひとついいかしら？ご主人が遅かったというのは酒場でも行っただということ？」

シエラザードが尋ねた。

「それだったらまだ許せるんだけどねえ……。ウチのは飲んだくれに加えて大のコレ好きと来たもんだ」

セシル婆さんは右手を差し上げるような動作をした。

「????？」

シエラザードは分けが分からない様子だ。

「あ、判った ずばり、釣りね？」

エステルが言った。

「ああ、なるほど……」

シエラザードが理解したようだ。

「そう！これがまたキがつきほどの釣り好きでね。昨日もカサギを釣るとかで南の湖畔に行っちまったんだよ。しかも、まだ帰ってきやしない」

セシル婆さんが溜息をついた。

「え、それじゃあ……。まだ事件のことは知らないの？」

当然そうなるだろう。セシル婆さんは頷いた。

「その通りさ。まったくあの宿六……。帰ったらタダじゃおかないよ！」

セシル婆さんは相当頭に来ているようだ。

「おい、帰ったぞっ」

外から老人の声が出た。

「はー、やれやれ……。朝から粘ったのにボウズに終わっちまったよ。お、なんだ、お客さんかい？」

クワノ老人が帰ってきた。

「このスットコドツコイ！」

セシル婆さんが思いつき怒鳴った。

「な、なんだってんだ。いきなり大声出しやがって。お客さんに失礼じゃねえかよ」

クワノ老人が驚いて飛び上がった。

「失礼なのはアンタの方だよ。まったく、この大変な時に呑気に遊び呆けてるなんてさ」

セシル婆さんが大きく溜息をついた。

「あん、大変な時？」

クワノ老人は状況が分からない様子だ。

「実は……」

エステルたちは、昨晚起こった強盗事件についてクワノ老人に一通り説明した。

「は、空賊による強盗ねえ。そりゃ大変な事があったなあ。しかし、コイツの怒鳴り声で逃げてつたつてのは傑作だぜ。わはは、空賊も災難だったよな」

クワノ老人はどこか他人事のように。

「なんだってえ!？」

セシル婆さんがまた怒鳴ろうとした。

「お、落ち着いて、お婆ちゃん」

エステルがセシル婆さんを制した。

「しかし、夜闇に紛れて現れてどこかに消える空賊どもか……。アイツの言ってたことが、もしかして関係あるのかねえ？」

クワノ老人が上を向きながら言った。

「アイツ……どなたのことなんですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「ああ、オレの釣り仲間でな。南の湖畔にある宿屋に滞在してるヤツがいるんだよ。そいつが、宿屋の近くで妙な連中を見かけたらしいんだ」

クワノ老人が説明した。

「妙な連中……」

「興味深いわね。詳しく話してもらえない？」

エステルたちが身構えた。

「構わんが……言っておくが又聞きだぞ？」

「なんでも夜釣りをした時に、偶然見かけたらしいんだが……。真夜中に、宿屋の出口から街道に出た連中がいたらしい。しかも、宿の人間に聞いてみると、そんな連中は泊まってないそうだ」

クワノ老人が語った。

「それは……たしかに妙な人たちですね。その宿、強盗事件とか起こったりはしていませんか？」

ヨシユアが尋ねた。

「そういう物騒な事件はまったく起きちゃいねえよ。静かでメシの美味しい、なかなかオススメの宿だぜ。何といっても良い釣り場だし」
クワノ老人が太鼓判を押した。

ボース南街区

「肝心の強盗事件については手がかりはなかったけど……。なかなか興味深い話が聞けたわね」

シエラザードが言った。

「ふむ、同感だ。特に宿屋の食事が美味だというのが気に入った」
オリビエがどうでもいいことを言った。

「そういう話じゃないってば。ま、あたしも釣りにはちょっと心惹かれるけど……。何も事件が起きてないんじゃ調べてみる価値はなさそうね」

エステルが言った。

「いや、それは逆だと思うよ。へたに事件を起こしたら、軍に徹底的に調査されてしまう。逆に、何も起きていない場所こそ空賊たちが現れる可能性は高い」

ヨシユアが分析して言った。

「そっか……そういう考え方もあるか」

エステルが頷いた。

「確かに、この一連の事件……。軍にスパイがいるかはともかく、空賊たちは相当に抜け目がないわ。起きた事件を調べるだけでは連中を追い詰めることは難しい。連中の動きを読んだ上で一歩先を行く必要があるそうね」

シエラザードが言った。

「なるほど……。守りより攻めの姿勢ね？」

エステルが言った。

「フツ、それでは行こうか……。リベールの真珠と唄われし麗^{うつく}しのヴァレリア湖のほとりへ」

オリビエが言った。本当にやる気があるのだろうか？

エステルたちは南の湖畔の宿屋へと向かった。

第2章 消えた飛行客船（15）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

空賊が現れると思われる宿へ向かうエステルたち。これは当たりとなるか！？

第2章 消えた飛行客船（16）

ヴァレリア湖畔

「ここがヴァレリア湖の北岸か……。なかなか雰囲気がいい場所ね」
エステルが辺りを見て言った。

「そうだね。宿も立派そうだし」

ヨシユアが言った。

「前に仕事で泊まった事あるわ。酒は美味しいし、部屋も良い、文句のつけられない宿だったわね」

シエラザードが言った。

「うーん、遊びに来たんだったら言うことなしだったんだけど……」
エステルが残念そうに言った。

「あれ、違うのかい？ボクはそのつもりだったけど。昼はボートに揺られうたた寝し、夜は酒と料理に舌鼓を打つ……。これぞバカンスというやつだね」

オリビエがバカなことを言った。お決まりの言動だ。

「……………」
エステルが怒ったように睨む。

「……………」
ヨシユアは呆れたような視線で見る。

「……………」
シエラザードは冷ややかな視線をぶつける。

「ハツハツハツ。ちょっとしたジョークさ。バカンスはいつでも楽しめるが、空賊退治は今しか楽しめない……。このオリビエ、優先順位はちゃんと弁^わえて^あっているつもりだよ」

オリビエが取り繕って言った。ホンマかいな。

「楽しむ、楽しまないの問題じゃないと思うんだけど……」

エステルが溜息をついた。

「ふふ、まあいいわ。本気でやってくれさえすれば」

「早速、ご老人が言ってた釣り好きの滞在客を探すわよ」「シエラザードが言った。

「おとこの夜、怪しい人たちを目撃したっていうお客さんですね」
そうしてエステルたちはその客を探し始めた。

ヴァレリア湖 棧橋

釣竿を持つ男性がいたので声をかけてみた。

「……………」
男性は集中している。

「あのー、ちよつといいかな？」

エステルが男性に声をかけてみた。

「……………」
「……………」
全く耳に入っていないようだ。どれだけ集中してるねん。

「（あら、反応が無いわね…………）」

「（よっぽど集中してるんでしょうね…………）」

ヨシユアとシエラザードがあまりの集中力に感心している。

「（…………なるほど、これが釣りバカというものか）」

「（フツ、なかなか興味深い人種のようにだ）」

その様子を見たオリビエが呟いた。

「（あんたほどじゃないと思うけど…………）」

とにかく、その人から離れて別をあたってみた。

川蝉亭

調理場にいた男性、レナードに声をかけた。

「川蝉亭^{カウゼミ}へようこそ。皆さん、泊まりに来たのかい？」

レナードが尋ねた。

「えっと、一応そうだけどそれだけじゃないって言うか……」

エステルが歯切れ悪く言った。

「ある人を探しているんです。こちらに滞在しているお客さんで釣り好きの方はいらっしやいますか？」

ヨシユアが代わりに尋ねた。

「うーん、釣りだったら大抵のお客さんは楽しんでるけど」

レナードが言った。

「昨日、ここに泊まったご老人の釣り仲間って聞いたわ。心当たりはないかしら？」

シエラザードが言った。

「ああ、クワノ爺さんのことか。その釣り仲間といたらロイドさんの事じゃないか？」

レナードが手を打って言った。

「ロイドさん？」

エステルが聞き返した。

「王都から来ているお客さんで、プロのアングラードって話だよ。」

《釣公師団^{ウチコウシダン}》とかいう、王都にある団体のメンバーらしいんだ」

レナードが説明した。どうやらクセのありそうな人のようだ。

「な、なんか凄そうなヒトねえ。ところで、それって裏手で釣りをしてるオジサン？」

エステルが苦笑して言った。

「ああ、たぶんそうだと思うよ。大声で名前を呼んだら気付いてもらえるんじゃないかな？」

レナードが言った。そこまでしないと気付いてもらえないのかいっ！

「……………」
相変わらず男性は釣りに集中している。

「ええっと……。おじさんが、王都から来てるっていうロイドさん？」

エステルが男性に話しかけた。

「……………」

全く耳に入らない。

「すごい集中力だね……。魚以外目に入らないみたいだ」

ヨシユアが感心している。ここまでいくと素晴らしいとすら思えてくる。

「フツ、仕方ない。ここはボクの出番のようだね」

オリビエが前に出てきた。

「へっ……………」

エステルが場所を空けた。

「……………ふうっ……………」

オリビエは男性の耳に息を吹きかけた。

「ひゃああっ!？」

男性は驚いて悲鳴を上げた。

「な、なんだね君たちは!?!、い、い、いつからそこにつ!?!」

男性はかなり焦っている。

「エ、エゲツな……………」

「見ているコツチも思わず鳥肌が立つちゃったわね……………」

エステルたちはオリビエを冷ややかに見ている。

「やあ、ごきげんよう。先程から声をかけていたんだが、さすがプ

口、凄い集中力だねえ」

オリビエが褒め称えた。

「あなたがロイドさんですね?」

ヨシユアが男性に尋ねた。

「あ、ああ、その通りだが。はて、どうして私の名を?」

ロイドが首を傾げた。

「とあるご老人からあなたのことを聞いたのよ。少し時間をいただけないかしら？」

シエラザードが尋ねた。

エステルたちはクワノ老人の話を説明した。

「なるほど……クワノさんから聞いたのか。ああ、確かに見たよ。

おととの夜、奇妙な連中をね」

ロイドが言った。

「やっぱり……。その話、あたしたちにも詳しく教えてくれないかな？」

エステルがロイドに言った。

「……その前に。君たちは遊撃士だって？何か事件に関係することかい？」

ロイドが逆に尋ねた。

「断言は出来ません。ですが、可能性はあります」
ヨシユアが説明した。

「わかった……。そういう事なら協力しよう」

「おとといの晩……ボートで夜釣りに出た時のことさ。又シとの格闘に明け暮れた私はクタクタになって宿に戻ってきてね。すっかり夜も更け、宿の者全員が眠りに就いている時間になっていた」

ロイドが説明を始めた。

「ちょっと待って。……その又シってというのは？」

シエラザードが割り込んだ。しかし、この質問がミスだった。

「よくぞ聞いてくれました！」

ロイドが声を張り上げて喜んだ。待つてましたとばかりに。

「又シというのはこのヴァレリア湖に住む巨大マスのことだねっ！
もう10年以上も前から我々釣り愛好家のあいだで畏怖されている

魚なんだよっ！」

ロイドが興奮しながら熱く語り始めた。

「（しまった……）」

「（マニア心に火をつけましたね……）」

シエラザードとヨシユアが後悔して溜息をついた。

「そ、そんな凄いヤツなんだ!？」

エステルは感心している。さすが釣り好き。

「ああ、私は5年近くヤツを追っているのだが……。なにせ、広大なヴァレリア湖をあっちに行ったりこっちに来たりと気まぐれにエサ場を変える魚だね。最近、この辺りに現れた事を知って、私も王都から追っかけてきたわけさ」

ロイドがしゃべりまくっている。

「フツ、大した情熱だ。その気持ち、判らなくもないよ。ボクも気に入ったものがあつたら、何としても手に入れたい口だね」

「たとえば《グランシヤリネ》とか」

オリビエのアホ発言。

「あれは手に入れたんじゃないやなくて飲み逃げしたたげでしょーが」

エステルがつっこんだ。

「コホン……話を戻すわよ。それで、ロイドさん。夜釣りから戻ってきてどうしたの？」

シエラザードが再び尋ねた。

「あ、ああ……。それで、ボートを戻して宿の中に入ろうとしたんだが……。奇妙な二人組が、宿の敷地から街道に出て行くのを見かけたんだよ」

ロイドが言った。

「街道って……そんな真夜中にですか？」

ヨシユアが言った。

「ああ、間違いない。アンセル新道に出て行ったよ。最初は、街から遊びにきた連中が戻るところなのかと思ったけど……」

「さすがに時間が遅すぎるし、次の日、宿の人間に聞いてみたらそ

んな連中知らんと言うじゃないか。幽霊でも見たんじゃないかって
思わず背中がゾーッとしたものさ」

ロイドが震える仕草をした。

「ゆ、幽霊！？そ、そんなの出るの、ここ！？」

エステルが悲鳴を上げた。どうやら、エステルは大の幽霊嫌いらしい。

「はは、何せその二人組、若い男女のカップルだったからね。もしかしたら、周囲に認められずに心中したカップルだったのかも……」
ロイドが声をひそめて言った。

「あううう、や、やめてよう！」

エステルが耳をふさいだ。

「やれやれ……相変わらず幽霊話には弱いよね」

シエラザードがそんなエステルの様子を見て言った。

「そのクセ聞きたがるんですよ。怪談とか、世にも奇妙な物語とか」
ヨシユアが言った。

「ふふ、エステル君もそうやって恐がってる分には、なんとも可愛らしいじゃないか。寒さに震える子猫のようだよ？」

オリビエの変態発言炸裂！

「ふーっ、噛み付くわよ！？」

エステルがむかつとした。

「ははは……まあ、幽霊っていうのは冗談さ。だが、訳ありのカップルというのはもしかしたら本当かもしれないんだ。女の子が変わった服を着てたからね」

ロイドが言った。

「変わった服……というと？」

ヨシユアが尋ねた。

「後姿しか見ていないから確実とは言えないんだが……。学生服を着てみたいなんだ」

ロイドが言った。これは、まさか！？

「学生服って、まさか……」

「ジェニス王立学園ですか？」

エステルたちが驚いた。

全員、ロレントでの事が頭に浮かんだようだ。

「ほう、良く知っているね。私の姪も通っているんだが、それとソツクリだったよ」

ロイドが言った。

「なるほど……これで一気に怪しくなつたわね」

シエラザードが言った。

「怪しいどころかゼツタイ、あの生意気娘だつて！とうとう尻尾を掴んだわよっ」

エステルはロレントでの怒りを再燃させている。エステルの頭の中ではジヨゼットのことばかりだろう。

「なんだ……君たちの知り合いだったのか？だったら、あの2人が思い詰めて早まったことをしないよう注意してやってくれ。たしか、今夜あたりにまた来るような事を話していたからね」

ロイドが言った。これだけの事をよく覚えているね、ロイドさん。

「それ、本当ですか？」

ヨシユアが聞き返した。

「ああ、2日後にまた来るぞつて若い男の方が話していたんだ。真剣な口調だったから気になってね」

ロイドが言った。これだけの事を聞いて覚えていたね、ロイドさん……。

「なるほど……。貴重な情報、感謝するわ。後は我々に任せてちょうだい。絶対に悪いようにしないから」

シエラザードが確信を持って言った。

「ホッ、そうか……そう言ってくれると助かる。何だか肩の荷が下りた気分だよ」

「……安心したら今度はボート釣りがしたくなってきたな。こうしちゃいられん！君たち、私はこれで失礼するよ！」

ロイドは早速釣りの準備に取り掛かりにいった。

「相当な釣りバカね……あたしなんか足元にも及ばないわ」

エステルが半ば呆れて言った。

「《釣公師団》とか言ってたけど、どういう集まりなんだろうね」

ヨシユアが言った。

「それで結局、そのカップルがどう事件に絡んでくるんだい？事情を知らないボクにも懇切丁寧に教えてくれたまえ」

内容が把握できていないオリビエが尋ねた。

「そうね。かいつまんで説明すると……」

エステルたちは、ロレントに現れた空賊団の妹、ジヨゼットについて説明した。

「なるほど……それは確かにビンゴのようだね。となると、今夜と
いうわけか」

オリビエが状況を理解したようだ。

「ええ……。念のため、あたしたちも部屋を取った方が良さそうね。
真夜中まで待つ必要があるし」

シエラザードが言った。

「うん。宿の受付で部屋を取りましょ」

エステルたちは、空賊たちを待ち伏せするため、宿の部屋を取りに
向かった。

第2章 消えた飛行客船（16）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ついに手掛かりを掴んだエステルたち。いよいよ大詰めです。

第2章 消えた飛行客船（17）（前書き）

今回は結構感動モノだと個人的に思います。お楽しみください。

第2章 消えた飛行客船（17）

川蝉亭

「あら、お泊りになられますか？」

受付のソフィーナが言った。

「うん、そのつもりだけど……」

エステルが言った。

「エステル、ちょっと待った。やり残している事があつたら、今のうちに済ました方がいいよ。いったん部屋を取ってからポーヌまで戻るのも何だしね」

ヨシユアが止めた。

「うーん、確かに……。でも、大丈夫よ。部屋を取りましょ」

エステルが部屋を取った。

「かしこまりました。それでは皆さん。お部屋にご案内します」
ソフィーナがエステルたちを案内した。

「こちらの部屋になります。では皆さん、夕食までごゆっくりお過ごしください」

そう言い残して、ソフィーナは戻っていった。

「なかなか良い部屋だね。街のホテルにはない趣があつて」

ヨシユアが部屋の中を見て言った。

「うん、イイ感じよね。値段もそんなに高くなかつたし」

エステルが相槌を打った。

「ふふ、さてと……。夜が更けるまであたしたちもゆっくりしますか」

シエラザードが言った。

「おお、ナイス提案だ」

オリビエが喜んだ。

「え、嬉しいけど……ゆつくりしちゃっていいのかな？」
エステルがシエラザードに尋ねた。

「休める時に休んでおく。それも遊撃士の仕事のうちよ。食事するなり、散歩するなり、しばらく自由行動にしましょう」

シエラザードがそう言うのと、エステルたちは自由に行動し始めた。

エステルとヨシユアは外へ出た。

「うわ。すごくキレイな眺め……。まるで湖が光ってるみたい」
エステルがヴァレリア湖の様子を見て感動した。

「対岸に王都があるはずだけど、霞んでいてよく見えない……。さすが王国最大の湖だね」

ヨシユアが言った。

「うーん、釣りをしたらめっちゃめっちゃ楽しそうだけど……」

エステルが悩んだ。

「やってきたら？いい気分転換になると思うよ」

ヨシユアが言った。

「うん、そうしよっかな。ヨシユアはどうするの？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「僕は、そうだな……。読みたい本があるし、その席でゆつくりするよ」

ヨシユアはエステルと違って消極的だ。

「もー、ジジくさいなあ。男の子だったら、もうちよっと体を動かさないよ」

エステルがつれないヨシユアに言った。

「あはは……そういうのは君に任せるよ」

ヨシユアは近くのテーブルに座った。

「ちえっ……付き合いが悪いんだから。まあいいや。さっそく場所を決めよっつ」

「うーん、そのの棧橋あたりが良さそうだけど……」

エステルが棧橋の周りの様子確かめた。

「うん……やっぱりここがベストみたい。ふっふっふ、早速始めよっかな？」

エステルが釣りを始めようとした時、

「しまった……あたし、竿持ってない。宿屋のヒトが貸してくれないかな？」

エステルは宿屋の人に竿を借りに行った。

「あの……。貸し竿ってありませんか？」

エステルがソフィーナに尋ねた。

「ええ、ございますよ」

ソフィーナは竿を取り出した。

「こちらになります。宿泊の方には無料です」

ソフィーナはエステルに竿を渡した。

「え、本当？ラッキー？」

エステルは貸し竿を受け取った。

「へー、貸し竿にしてはなかなか良いロッドね。それじゃ、遠慮なく借りちゃいます」

エステルは棧橋に向かった。

「ふふ……楽しんできてくださいね」

再び棧橋

「さてと、早速始めましょうか」

エステルはしばらくの間、のんびりと釣りを楽しんだ。

「ふゝ、もう夕方が……」
「うん！なかなかの戦果ね。見て見て、ヨシユア。こゝんなに釣っちゃったわよ！」

エステルは後ろのテーブルに座っているヨシユアに声をかけた。しかし、ヨシユアの姿はなかった。

「……………あり」

「ヨシユア？」

エステルはヨシユアが座っていたはずのテーブルに走っていった。

「あれ、これって……」

テーブルの上には『実録・百日戦役』という本があった。

「ヨシユアの忘れ物かな？いつも澄ましてるクセに割と抜けてるトコがあるのよね。仕方ない、あたしが届けてやるか。それにしても、ヨシユアってどこに行っちゃったのかな？」

エステルはヨシユアを探し始めた。

外れの棧橋

「……………」
そこには無言でヨシユアが佇たたずんでいた。

「よっ、少年。こんなところで何をたそがれておるのかね？」

エステルがヨシユアの方へ向かっていった。

「はは……………たそがれてなんかいないけどね。もう、釣りはいいの？
今からが入れ食いじゃない？」

ヨシユアが言った。

「うん、もう充分。久しぶりに堪能しちゃったわ。あ……………そうだ
エステルはヨシユアに『実録・百日戦役』を差し出した。

「も、読書するとか言って置きっぱなしにしちゃってさ。勿体ないオバケが出るわよ」

エステルが少し古い言い回しをした。

「……………ああ……………ちょうど読み終わったばかりでさ」

「目が疲れたから気分転換に散歩してたところなんだ」

ヨシユアが言った。

「こーら」

エステルがヨシユアに近づいた。

「な、なに？」

ヨシユアが一歩後ずさった。

「まーた1人だけでなにか溜め込もうとしてるな？分かるんだってば、そーいの」

エステルがヨシユアを白い目で見た。

「……………」

ヨシユアが閉口した。

「大体ね、フエアじゃないわよ」

「ヨシユアだって、あたしが落ち込んだ時には慰めるクセに」

「あたしじゃ父さんみたいに頼りにはならないと思うけど……………」

「それでも、こうやって一緒にいてあげられるんだから」

エステルがヨシユアの隣に立った。

「……………」

「……………ごめん」

ヨシユアが呟いた。

「こういう時には、ありがとう、でしょ？ヨシユアって頭はいいけど肝心なことが分かってないんだから」

エステルが指摘した。

「はは、本当にそうだな」

「ありがとう……………エステル」

ヨシユアが笑った。

「うむうむ、苦しゅうない」

「あ……………そうだ！ハーモニカを1曲。お礼はそのあたりでいいわよ」
エステルが言った。

「おおせのままに……」

ヨシユアがハーモニカを取り出した。

「『星の在り処』でいいかな？」

ヨシユアがエステルに尋ねた。

「うん」

エステルが頷いた。

そして、ヨシユアが吹き始めた。

「えへへ、なんでかな。ハーモニカの音って夕焼けの中で聞くと
なんだか泣けてくるよね」

エステルが目元を拭った。

「相変わらず……何も聞かないんだね」

ヨシユアが目を背けて言った。

「あは……約束したじゃない。話してくれる気になるまであたし
からは聞かないってね」

エステルが言った。

「それに5年も経つんだもん。なんか、どーでも良くなったし」

エステルが前向きに言った。

「そう……5年もだよ」

「どうして何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？」

「あの日、父さんに担ぎ込まれたポロポロで傷だらけの子供を……」

「昔のことをいっさい喋らない得体の知れない人間なんかを……」

「……どうして君たちは受け入れてくれるんだい……？」

ヨシユアがエステルに向き直って言った。

「よっと」

エステルが腰を上げた。

「そんなの当たり前じゃない。だってヨシユアは家族だし」

エステルが事も無げに言った。

「……………」
ヨシユアはただ口を開けている。

「前にも言ったけど、あたし、ヨシユアのことってかなり色々
知ってるのよね」

「本が好きで、武器オタクで、やたらと要領がよくて……………」

「人当たりはいいけど、他人行儀で人を寄せつけないところがあ
つ……………」

エステルがべらべらと並べ立てた。

「ちょ。ちょっと……………」

ヨシユアが制した。

「でも、面倒見は良くて実はかなりの寂しがり屋」

エステルは笑って言った。

「……………」
ヨシユアのがまた口開いたままになった。

「もちろん、過去も含めて全部知ってるわけじゃないけど……………」

「それを言うなら、父さんの過去だってあたし、あんまり良く知ら
ないのよね」

「だからと言って、あたしと父さんが家族であることに変わりはな
いじゃない？」

「多分それは、父さんの性格とか、クセとか、料理の好みとか……………」

「そういう肌で感じられる部分をあたしがよく知ってるからだと思
う」

「ヨシユアだって、それと同じよ」

エステルが満面の笑みを浮かべた。

「……………」

「本当に……………君には敵わないな。初めて会った時……………飛び蹴りをく
らった時からね」

ヨシユアが静かに言った。

「え……。そ、そんな事したっけ？」

エステルがたじろいだ。

「うん、ケガ人に向かって何度もね」

ヨシユアが言った。

「あ、あはは……。幼い頃のアヤマチってことで」

エステルが苦笑しながら言った。

「はいはい。……。ねえ、エステル」

ヨシユアがエステルに向かって言った。

「なに、ヨシユア？」

エステルが向き直った。

「今回の事件、絶対に解決しよう。父さんが捕まっているかどうか、まだハッキリしてないけど……。それでも、僕たちの手で、絶対に」

ヨシユアが真剣な眼差しで言った。

「うん……」

「モチのロンよ！」

エステルが力強く頷いた。

「ふふ……。そろそろ宿に戻ろうか？食事の用意もできてる頃だろうし」

ヨシユアが言った。

「うん、お腹ペコペコ。しっかりごはんを食べて真夜中に備えなくちゃね」

そうして、エステルとヨシユアは宿に戻ろうとしたその時、

「あ、忘れてた」

「ヨシユア、この本……」

エステルが途中で立ち止まり、ヨシユアに本を差し出した。

「ああ……。もう、読み終わったんだよな……。かさばるし、どうしようかな」

ヨシユアが迷った。

「難しい本みたいだけど……あたしでも頑張れば読める？」

エステルが本を見て言った。

「大丈夫だと思うよ。よく知ってる内容も多いから。エステル、読んでみる？」

ヨシユアが言った。

「うん、挑戦してみようかな」

エステルは『実録・百日戦役』を買った。

そして、宿へと戻った。

第2章 消えた飛行客船（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回はエステルたちが見回りを開始します。

第2章 消えた飛行客船（18）

川蝉亭 1階食卓

そこには机に突っ伏したオリビエがいた。

「君たち……助けてくれたまえ……。さ、さすがに……。もう限界だ……」

オリビエが完全に酩酊状態に陥っていた。

「うっわー、すごい。少しだけ見直しちゃったわ」

エステルはオリビエの心配することなく言った。

「確かに、シエラさんに付き合って意識が残っているのは珍しいかもね」

ヨシユアも同様だ。少しは心配するべきところだと思う。

「んふふ……いいところに来たじゃない おねーさんと一緒に飲ましょ？いいでしょ、いいでしょ、ねーん？」

シエラザードが駄々をこねだした。こちらは相変わらず酒グセが悪いうえに、タチが非常に悪い。

「あ、あたしたちはこれからゴハン食べるからダメだってば」

エステルがきつぱりと拒んだ。

「やだやだっつ。一緒に飲むったら飲むのっつ！飲んでくれないと暴れてやるっつ！」

最悪だ。子供よりさらにタチが悪い。

「だ、駄々っ子モードに入った……」

エステルはお手上げだ。

「シエラさん、オリビエさんがまだ大丈夫みたいな感じですよ。付き合ってもらったらどうですか」

ヨシユアがオリビエにパスした。意外と冷酷ですね、ヨシユア君……。

「……………（ジー）」

「な〜んだ、まだイケルわね？」

エステルはオリビエの様子を見て言った。

「いやあ、飲んだ飲んだ。最近色々あつて飲めなかったから、久しぶりに堪能しちゃったわ?」

シエラザードはもうすっかり酔いがさめている様子だ。

「もう完全に素面^{しよめん}だし……。シエラさん、何か特殊な訓練でも受けているんじゃないんですか?」

ヨシユアがその様子を見て言った。確かに、そう思いたくなる。

「うーん、ゲテモノ酒のたぐいは一座にいた頃から飲んでたけど。サソリ入りとか、マムシ入りとか。それで酒に強くなったのかしら?」

シエラザードが笑いながら言った。そんな酒、子供の頃からよう飲みましたね……。

「いや……。それは違うんじゃないかなあ」

ヨシユアは苦笑して否定した。

「それよりもコイツ、どうするの?しばらく使い物にならないわよ。少しは心配しましょうよ、エステルさん……。

「このまま寝かせておきましょう」

「……。ここから先は、空賊たちと直接対決になる可能性が高いわ。やっぱり、ただの民間人を巻き込むわけにはいかないからね」

シエラザードが言った。さっきの大酒飲ませは、それを考えての行動だったのか!?

「え、もしかして……。付いて来させなくするために、わざとオリビエを酔わせたとか?」

エステルが言った。

「えっ……。……。……。……。あ、当ったり前じゃない。深慮遠謀のタマモノってヤツよ」

シエラザードが少し間を空けて慌てて言った。そんな事は考えていなかったようだ。

「その間は何なのよ……」

「絶対ナチュラルに楽しんでたね」

2人は呆れて言った。

「さてと、夜も更けてきたわ。早速、宿の周辺を回りながら張り込みを始めるとしますか」

シエラザードがエステルたちの発言を無視して言った。

「あ、ごまかした」

エステルが言った。

「ええい、おだまり」

理不尽だ。

「とりあえず、昼間に話を聞いた外れの棧橋まで見回りをするわよ」
シエラザードが言った。

「はい、わかりました」

ヨシユアが返事した。

「それじゃ、レッツ・ゴー！」

エステルたちは見回りを始めた。

第2章 消えた飛行客船（18）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ、空賊団と本拠地で本格戦闘が始まります。ついに来たという感じですね。第2章ももうすぐ完結します。

第2章 消えた飛行客船（19）（前書き）

いよいよ空賊団アジトに潜入です！

第2章 消えた飛行客船（19）

外れの棧橋

「うーん、誰もいないわね。何の用事が知らないけどあの兄妹、本当に現れるのかな」

エステルが呟いた。

「確かに確証はないけど……ロイドさんの情報が正しければ、きっと現れるんじゃないかな」

ヨシユアが言った。

「でも、あまり動き回ったら見つかって逃げられる可能性があるわ。空賊たちは、街道から来るみたいだし、そちらを見張っておいた方がよさそうね」

シエラザードが言った。

「確かに……それじゃ、どのあたりで見張ろうか？」

エステルが尋ねた。

「街道方面がチェックできて、向こうには気付かれない場所……」。

そんな場所が良さそうだね」

ヨシユアが言った。

エステルたちはヨシユアが言った場所を探した。

そして、川蝉亭のテラスで見張ることにした。

しばらくして、エステルが何かを見つけたようだ。

「あ、あれは……」

空賊団兄妹のキールとジヨゼットが街道から現れた。

そのまま、外れの棧橋へ向かった。

「さてと……少し早い時間に着いたか」
キールが言った。

「そうだね。あーあ、昼間だったらここで食事とか出来るのにサ」
ジヨゼットがつまらなさそうに言った。

「無茶言つなよ。俺たちやお尋ね者なんだぞ？ほれ、さっさと行くぞ」

キールが先に歩き出した。

「あ、待ってよ、キール兄！」

ジヨゼットが慌てて追いかけた。

「……やっぱりあいつらか」

エステルがビンゴという感じで言った。

「外れにある棧橋の方に向かったみたいだね。何をするつもりなんだろう？」

ヨシユアが言った。

「それは見てのお楽しみってね。気付かれないように近づくわよ」
エステルたちは兄妹の後を静かに追った。

外れの棧橋

「さすがにまだ来てないか。しかし、あの連中、いつも時間通りに来るよな」

キールが言った。

「ボク、あいつらキライ。なんか偉そうだし……それにちょっと恐いんだもん」

ジヨゼットが言った。

「確かに……得体のしれん連中ではあるな。だが仕方ないさ。ドルン兄貴の命令だからな」

キールが言った。

「（ここなら大丈夫そうね……）」
「（うん、会話もバツチリ聞こえる……）」
エステルたちが陰からうかがっている。

「……………」
「ねえ、キール兄……」

「ドルン兄、最近おかしくない？」
ジヨゼットがキールに尋ねた。

「……………」
キールは黙っている。

「だいたい変だよ。定期船を乗っ取ったのだから」
「確かに実入りは良かったけど、軍が本腰入れて介入してきたし……」

「遊撃士なんていう生意気な連中まで絡んでくるし……」
「それに人質を取って身代金まで要求するなんて……」
「さすがに、やりすぎだと思っ」

ジヨゼットがキールに言った。
「何だかんだ言っつて、お前も女の子なんだなあ……。心底、悪党には成りきれねえか」

キールが溜息まじりに言った。
「なっ!?!?」
ジヨゼットが驚いた。

「誉めてるんだよ、これでも。辛いんだったらお前だけでも故郷に戻っていいんだぜ？高望みさえしなけりゃ、あそこは暮らしやすい場所だ。この国よりは、ちと寒いけどな」
キールがジヨゼットに諭すように言った。

「い、いくら兄いでも怒るぞ!？」

「だいたいボクがいなかったら食事も洗濯もままならないクセに。ボクがロレントに行つてた時の惨状を繰り返すつもりかよっ!？」
「ジヨゼットが怒りながら言った。どういふ状況だったのかはご想像にお任せします。」

「ぶるるっ……そいつはゴメンこうむりたいが。でも、ちつたあ考えておけ。これ以上引き返せなくなる前にな」

キールが真剣に言った。

「……………」

ジヨゼットは黙った。

「ま、それはそれとして。確かにドルン兄貴の様子がちよいと変と
いふのは同感だ」

「身代金の額を釣り上げるために時間を稼ぐつても限度がある。

その見極めがつかないほど兄貴はバカじゃないと思うが……」

キールが悩みながら言った。

「やっぱりさ……アイツが来てからじゃないの?そうとしか考えられないよ……」

ジヨゼットが言った。

「確かに……連中を紹介したのもヤツだしな。何か吹き込まれたの
かもしれねえ」

キールが言った。どうやら、空賊兄妹の中でも問題があるそうだ。

「(アイツ?ヤツ?)」

「(ふむ、誰のことかしらね)」

エステルとシエラザードは考えている。

「(あ、あれは……)」

ヨシユアがなにかを見つけたようだ。

「(どうしたの?)」

エステルがヨシユアの方を向いた。

「（……来たみたいだよ）」
向こうからボートがやってきた。

「よう、おいでなすつたな」

「相変わらず時間通りじゃねえか？」

キールがボートの上の仮面をかぶった黒装束の男に言った。

「フン、少しは遅れてくるなり早く来たりすればいいのにさ。まったく可愛げがない連中だよな」

ジョゼットが言った。

「フ……時間厳守が我々の習いでね。気に障ったのなら謝罪しよう」
黒装束の男が言った。

「た、単なるイヤミだよっ！ホント可愛げがないんだから……」

ジョゼットがムカツとして言った。イヤミはまったく通用しないらしい。

「こら、話が進まねえだろ」

キールがジョゼットをとがめた。

「とりあえず……さっそくビジネスの話と行こう。その後の進展はあつたのかい？」

キールが黒装束の男に向き直り尋ねた。

「ああ、ついに陛下が動かされた。ご自分の資産から身代金を拠出するおつもりだ」

黒装束の男が言った。

「そ、そうか……女王さんの財布からかよ……。いよいよ大詰めってわけだな」

キールがちよつと焦った。女王陛下の財布とは途方もない話だからだろう

「王国軍の方はどうなの？」

「ボクたちのアジトの場所に気づいたような気配はある？」
今度はジョゼットが尋ねた。

「まだのようだな。しかし、時間の問題だろう。遊撃士協会のメンバーが動いているという情報もある」
「いずれにせよ、成功の暁にはアジトを捨てることになるぞ?」
黒装束の男が答えた。
「ああ……どうせ偶然見つけた仮宿だ。兄貴だって未練はないはずさ」
キールがどうってことはないと言った。

「（また怪しげなのが現れたわね）」

「（シエラ姉、どうする？突入して一気にケリ付けようか?）」

エステルがシエラザードに尋ねた。

「（ふむ……それより良い考えがあるわよ）」

シエラザードが言った。

「（良い考え?）」

エステルが尋ねた。

「（あの兄妹が現れたってことは近くに空賊艇が停泊してるハズ）」

「（また逃げられたらかなわなしいし、先にそちらを押さえるのはどう?）」
シエラザードが言った。

「（なるほど……まずは足を奪うってことね）」

「（あたしは賛成だけど、ヨシユアは?）」

エステルが隣のヨシユアに尋ねた。

「（……………）」

ヨシユアは険しい目つきのまま黙っている。

「（ヨシユア……?）」

エステルがヨシユアに再度尋ねた。

「（あ、ああ……………）」

ヨシユアは気がついたようだ。

「（空賊艇を先に押さえる案か。うん、僕もその方がいいと思う）」

ヨシユアは何も無かったかのように言った。

「（……どうしたの？）」

「（なんか、顔が強張ってない？）」

エステルが心配そうにヨシユアに尋ねた。

「（いや……）」

「（うん、きつと気のせいさ）」

ヨシユアが自分自身に言い聞かせるように言った。

「（……………？）」

エステルはヨシユアの方を見ている。

「（あまり時間はないわ……）」

「（彼らの話が終わるまでに街道に出て空賊艇を探すわよ）」

エステルたちは早速空賊艇を探し始めた。

空賊艇が停泊できそうな場所を調べていった。

そして

「なるほど《琥珀の塔》の前か。確かに街道から外れてるから停泊場所としてはうってつけね」

岩陰に隠れながらシエラザードが言った。

「《琥珀の塔》ってロレントの《翡翠の塔》と同じような塔だったわけ？」

エステルが尋ねた。

「《四輪の塔》と呼ばれている古代遺跡の1つだよ」

「それでシエラさん……すぐに彼らを制圧しますか？」

ヨシユアがシエラザードに尋ねた。

「そうね……。前に遭遇した時と較べて手下の人数が倍以上いるけ

ど……………」

シエラザードは迷っている。下手をするとタイムリミットになる可能性があるので。

「大丈夫だって。制圧できない数じゃないよ。このまま一気にケリを……………」

エステルが言おうとした時、

「フツ……………」それはどうかと思うけどね」

オリビエが草陰から飛び出してきた。

「やあ、待たせてしまったね？」

オリビエはいたって元気そうに言った。

「オ、オリビ……………」

エステルが驚いて大声をあげそうになった。

「静かに……………」あいつらに気付かれるよ」

ヨシユアが止めた。

「……………」（コクコク）」

エステルは口をふさいで頷いた。

「驚いたわね…………」。あの酔いつぶれた状態から、よくそこまで回復したもんだわ」

シエラザードが感心している。

「フツ、任せてくれたまえ。胃の中のものをすべて戻して、冷たい水を頭からかぶってきた」

オリビエ、執念の復活をここに遂げたり。

「あ、ありえない……………」

「なんと言うか、執念ですね……………」
全員呆れている。

「こんな面白そうな事を見逃すわけにはいかないからね。ちょうど宿から出たところで街道に出るキミたちを見かけて、ようやく追いついたという次第さ」

オリビエが笑いながら説明した。

「ツメが甘かったわね…………」。火酒に一気飲みでもさせておけば良か

「つたかしら？」

シエラザードは残念そうに言った。それは危険すぎます……。

「それは確実に死ぬるんで勘弁してくれたまえ……」

オリビエが顔面蒼白になった。

「それよりもキミたち。ここで空賊たちと戦うのは少々面白くないと思わないか？」

オリビエが気を取り直して言った。

「別に面白くなくてもいいの！」

エステルが怒った。

「いや、これは真面目な話」

「ここで戦って、ついでにあの兄妹を捕らえたところだ。彼らがアジトの場所について口を割らない可能性だつてある。それどころが、人質をタテに釈放を要求してくるかもしれない」

オリビエが真剣な眼差しで言った。

「何事にもリスクは付きものだわ。それとも、リスクを回避できるいいアイデアでもあるのかしら？」

シエラザードがオリビエに尋ねた。

「フッフッフ……諸君、耳を貸したまえ」

オリビエが不敵な笑みをうかべた。

「いいけど……。息を吹きかけたりしたら、マジでぶん殴るからね？」

エステルが念を押した後、オリビエが説明した。その方法は後ほど。

「兄貴、お嬢！」

「お帰りなさい！結構かかりましたね」

「話が長引いたんスか？」

空賊たちが口々に言った。

「ああ……いよいよ大詰めだからな。王国軍の動向を含めて、かな

りの情報を仕入れてきた」

キールが言った。

「それじゃ、いよいよ……」

空賊たちが期待を膨らませた。

「うん、数日のうちに身代金をいただけそうだよ。ボクたちの夢に向かつて一歩前進といったところだね」

ジヨゼットが言った。

「ひゃっほーっ！」

「やったぜっ！」

空賊たちが快哉かさいをあげた。

「こらこら。まだ喜ぶのは早いっての。とりあえずアジトに戻ってドルン兄貴に報告するでしょう」

「みんな、急いで撤収だよ！」

キールとジヨゼットが空賊たちに言った。

「がっつんだ！」

空賊たちが期待を胸に叫んだ。

どうでもいいけど、この合言葉みたいなものは何とかできないのか？正直、子供じみていると思う……。

空賊艇 山猫号

「気温21度、湿度15%」

「南南西、風速12アージュ」

「周囲の導力反応は無しだよ」

ジヨゼットが言った。

「軍の巡回は無さそうだな……。オーバルエンジン始動。船体各部への導力伝達を開始」

キールが空賊たちに言った。

「アイサー。オーバルエンジン始動」

「各部への導力伝達を開始」
「オーバルフローター作動開始」
「オーバルドライバー作動開始」
「スタビライザーもOKです！」
空賊たちが着々と発進の準備をしていた。
「よし……。カプア空賊団所属、《山猫号》
キールが叫んだ。
「アイアイサー！」

デイクオフ
「離陸！」

そうして、真夜中に《山猫号》は空に飛びだった。

「駆動率を40%に固定。そのまま巡航速度を維持せよ。ただし、いつでも戦闘速度に切り換えられるようにしとけよ」
キールが言った。

「アイサー」

空賊が了解した。

「やーれやれ。夜明け前には戻れそうだね」

ジヨゼットが言った。

「ああ。とつとと眠りたいところだがドルン兄貴に報告しないとな」
キールが言った。

エンジン室

「……あれ……」

「なんか音がしなかったか？」

空賊の1人が何かに気付いたようで別の空賊に聞いた。

「いや？聞こえなかったけど」

もう1人の空賊が言った。

「妙だな。たしか船倉の方から……」

空賊が船倉の方へ降りて行った。

「うーん……ネズミでもいるのかな？ヒマを見て掃除でもするかね」
そう言っただけで帰っていった。

階段の下に隠れていたエステル。かなり緊張していた様子だった。
ヨシユアたちもどこかに隠れていたのだ。いわゆる忍び込みをしていたのだった！

空賊団アジト

次々と降り立っていった空賊たち。

「ふわ〜、眠い、眠い。ここに来てから昼夜逆転の生活だからな」
見張り役の空賊ライルが欠伸あくびをしながら言った。

「まあ、もう少しの辛抱でこんな生活ともオサラバさ。ドルンのお頭に付いていけば間違いなしってもんだぜ」

もう一人の空賊ロイルが言った。

「しかし最近のお頭……ちょっとばかり変じゃねえか？おっかないっていうか気安く話せねえっていうか」

ライルが言った

「お前ね……そんな滅多なこと言うなよ。兄貴やお嬢に聞かれたらぶっ飛ばされるぞ？」

ロイルが言った。

「で、でもよ……」

ライルは納得いかない様子だ。

「寝不足で疲れてるんだよ。とっとと片づけを終わらせて、ゆっくり休むとしようぜ」

ロイルが言った。

その時、

「今すぐ休んでもオツケーだけど？」

エステルたちが武器を構えて出てきた。

「あ」

「お前たちは……!!」

空賊たちが驚いた。

「遅いつてば!」

エステルたちが突入した。

難なく空賊たちを片付けたエステルたち。

「フツ、無事、潜入できたようだね」

オリビエが言った。

「まったく……こんなに上手くいくとはね。今回ばかりはあんたに感謝しなくちゃいけないわね」

シエラザードがオリビエに言った。

「で、でもさ。メチャメチャ焦ったわよ。隠れてる所を発見されたらどうするつもりだったの?」

エステルが言った。エステルはピンチでしたね。

「いや、発見されたとしても、その時は空賊艇を制圧すればいい。

飛行船の内部は狭いから多数との戦いにも有利に働くしね。オリビエさん……そこまで考えていたんですか?」

ヨシユアがオリビエに尋ねた。恐いことをさらりと言いますね、ヨシユア君。

「いや、まったく」

オリビエがすぐさま返答した。

「敵地潜入というシチュエーションが単に面白そうだと思っただけさ」

オリビエが言った。どこまで面白さを求めるヤツなんだ?

「あ、あんたねえ……」

エステルが呆れ顔をした。

「まあ、いいじゃない。こうして無事潜入できたんだし。それよりも……ここは《霧降り峡谷》みたいね」

シエラザードが周りを見て言った。

「《霧降り峡谷》ってボースとロレントの境にある？そっか……だから外が白く霞んでるのか」

エステルが納得した。霧降り峡谷は年中霧が深い、複雑な構造を持つ峡谷である。

「それと、大型船は侵入できない高低差の激しい入り組んだ地形……。シエラさんの推測、どうやら当たってたみたいですね」

ヨシユアがシエラザードに言った。

「ま、せっかくの推測もあまり役に立たなかったけどね」

「さてと……あまりグズグズできないわ。空賊たちを制圧しつつ、監禁されている人質の安全を確保するわよ。もちろん……カシウス先生もね」

シエラザードが言った。

「うん……!!」

「了解です!!」

エステルたちは早速アジト内部へ潜入した。

第2章 消えた飛行客船（19）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよアジト侵入を果たしたエステルたち。人質解放と空賊逮捕は成功するのか!?

第2章 消えた飛行客船（20）（前書き）

なんだかんだで、第2章が20話まで行っちゃいました。次回で第2章が完結します。て、言っか完結させようと思います。次回に乞うご期待！！

第2章 消えた飛行客船(20)

空賊アジト 部屋の1つ

男たちの話し声が聞こえる。

「手下がいるみたいだね。……突入してみようか？」

ヨシユアがエステルに尋ねた。

「モチのロンよ！」

エステルたちが突入した。

「あん……？」

「なんだ、新入りか？」

空賊の1人アロンが呑気に言った。バカだ……。

「ガクツ……そんなわけないでしょ！」

「緊張感のない連中ねえ」

エステルが拍子抜けに言った。

「え、でもよ……それ以外に誰がいるって、」

「……………」

「……あの、まさか侵入者？」

気付くのがあまりにも遅い。状況判断能力は最低のようだ。

「ピンポン？」

オリビエが言った。

「遊撃士協会の者です。降伏した方が身のためですよ」

ヨシユアが空賊たちに言った。

「じよ、冗談じゃねえ！」

「返り討ちにしてやらあ！」

空賊たちが武器を構えてかかってきた。

「うっっ……」

空賊たちが倒れた。

「ちよっと！人質はどこにいあるの？正直に言わないと、ひどい目に遭わすわよ！」

エステルが空賊アロンに尋ねた。

「か、勝手にしやがれ。誰が喋るもんかよ……」

アロンは口をつぐんだ。

「あーら、そう。エステル、どいてなさい」

シエラザードの目が剣呑けんのんに輝いた。

「う、うん……」

エステルがどいた。

シエラザードが鞭でアロンを打った。

「ぎゃっ……！」

アロンが痛そうに叫んだ。

「ふふ、手加減しているから簡単に気絶できないでしょう？素直に話してくればゆっくりと寝かせてあげるわ」

酷い。

「ひ、ひいいい……。この下の階にいるっ！俺たちの仲間が守ってるんだ！」

アロンは後ずさりしながら口を割った。

「素直でよろしい。キールとジヨゼットっていう首領格の連中はどこにいるの？」

シエラザードが続いて聞いた。

「ふ、ふぎけるなっ！誰がそこまで喋るかよっ！」

アロンは今度は喋ってくれなさそうだ。けっこ忠義が厚いですね。

「ふーん、人質はともかく自分たちのボスは売れないか」

「仕方ない、勘弁してあげるわ」

シエラザードは次の瞬間、アロンに飛び掛って鞭で思い切り打った。
「うっん……」

空賊が吹っ飛んで気絶した。酷すぎる！

「うっわ……相変わらず容赦ないわね」

エステルがえげつなくといった様子で見ている。

「失礼ね。これでも手加減してるんだから」

シエラザードが言った。果たしてそうか？

「確かに、そこはかとなく気持ちよさそうな感じではあるね」

オリビエが言った。それが今の様子を見たセリフか？

「あら、試してみる？」

シエラザードが鞭を構えた。

「いや、またの機会に」

オリビエがきつぱりと断った。

「人質が監禁されているのは下の階みたいです。急ぎましょう」

エステルは下の監禁部屋へと向かった。

下の階へ降りたところでエステルが口を開いた。

「それにしても……ここって一体なんなのかな？あいつらが造ったにしては大きすぎるし、古めかしいけど」

エステルが言った。

「大昔の城塞のような雰囲気ね。その頃の隠し砦を、アジトとして使っているんじゃないかしら？」

シエラザードが言った。

「《大崩壊》から数百年以上、戦乱の世が続いたそうだからねえ。

こういうものが残っていてもそれほど不思議ではないだろう」

オリビエが言った。

「《大崩壊》？」

エステルが聞きなれない単語を尋ねた。

「1200年前にあったっていう古代ゼムリア文明の崩壊のことだ

よ。天変地異が原因と言われているんだ」
ヨシユアが説明した。

「ああ、前にアルバ教授が言ってた……」
エステルが頷いた。

「しかし、発見されにくいとはいえ、アジトにするには少々悪趣味だわね。魔獣までうるついでるし……男所帯なんてこんなモノかしら？」

シエラザードがヨシユアとオリビエを見て言った。

「あの、シエラさん……」

「それは激しく違うと思うよ」

ヨシユアとオリビエが呆れて言った。

何はともあれ再び監禁部屋へとエステルたちは向かった。

監禁部屋前

男たちの話し声が聞こえる。

「また話し声が聞こえる。……突入してみようか？」

ヨシユアが尋ねた。

「迷ってられないわ、行くわよ！」

エステルが頷いた。

「お、お前たちは！？」

「遊撃士ども！？」

「ど、どこから入ってきた！？」

空賊たちが慌てた。

「どうやら、その奥の部屋に人質が監禁されているみたいね。大人しく降伏すればよし。さもなければ……」

シエラザードが鞭をならした。

「ふ、ふざけるな！」

「やっちまえ！」

空賊たちが飛びかかってきた。

その頃 監禁部屋内の奥

「な、なんや……外で何が起こってるんや？」

トリノが言った。

「ふむ、ケンカというわりには、いささか派手すぎるようですね
グラント船長がどことなくのんびりとした口調で言った。

「みんな、無事!？」

エステルたちが急いで入ってきた。

「遊撃士協会の者よ。皆さんを救出しに来たわ
シエラザードが言った

「ほ、ほんまか……ワイら、助かったんか!？」

トリノが言った。なぜか大阪弁……

「見張りは片付けました。とりあえず安心してください
ヨシユアが言った。

「ほ、本当か……!？」

「た、助かったの!？」

人質たちは半信半疑でも喜んでいる。

「私は、定期船の《リンデ号》の船長を務めるグラントという。本
当にありがとう……何と礼を言ったらいいか」
グラント船長が言った。

「お礼は脱出の後でね。ところで……」

エステルが辺りを見渡した。

「……あれ?あれれ?」

エステルが見回してもカシウスの姿がなかった。

「いないみたいだね……」

ヨシユアが言った。

「どうかしたのかね?」

グラント船長が尋ねた。

「え、えつと……。人質のヒトつて、これで全部？」

エステルが尋ねた。カシウス・ブライトが見当たらないようだ。

「ああ、その通りだが……。《リンデ号》に乗っていた乗客・乗員はこれで全部だよ」

グラント船長が言った。

「うそ……」

エステルが呆然とした。ここまで来たのにと感じた。

「カシウス・ブライトという人が定期船に乗っていませんでしたか？遊撃士協会の人間なんですが……」

ヨシユアが尋ねた。

「カシウス・ブライト……？どこかで聞いたことがあるような」

グラント船長が首をひねった。

「あ、あの船長……あのお客様じゃありませんか？離陸直前に船を降りられた……」

乗務員クラリスが言った。

「ああ！そう言えばそんな人がいたな」

グラント船長が手を打った。

「ど、どーゆうこと!？」

エステルが尋ねた。かなり慌てている。

「いや、ボースを離陸する直前に船を降りたお客さんがいたんだよ。王都から乗ってきた男性で確かに、そんな感じの名前だった」

グラント船長が言った。

「あ、あんですってー！だ、だって乗客名簿には……」

エステルが驚いた。

「なにせ離陸直前の下船だったから、書類の手続きが間に合わなくてね。ロレント到着後に手続きするはずが空賊に襲撃されて、そのままなんだ」

グラント船長が言った。

「……………（パクパク）」

エステルは言葉を失っている。

「なるほど、そういう事ですか。父さんが空賊に捕まるなんて変だとは思っていただけ……」

ヨシユアは納得している。

「ふう……ようやく疑問が氷解したわね」

シエラザードが言った。

「ハツハツハツ、それは重畳ウチヤウチヤウ」

オリビエが笑った。

「ちょ、ちよつと待ってよ。そ、それじゃ……父さんは何をしているわけ？これだけの騒ぎになってるのにどうして連絡を寄越さないの!？」

エステルが周りに意見を求めた。今は到底分かることではない。

「落ち着いて、エステル。確かにそれは気になるけど、今ここで考えても仕方がない。ここにいる人たちの安全を確保するのが優先だよ」

ヨシユアがエステルに言った。

「あ……うん。わかった、今は忘れる」

エステルが言った。

「皆さん、我々はこれから空賊のボスの逮捕に向かうわ。申し訳ないけど、もう少しだけここで辛抱していてちょうだい」

シエラザードが人質に言った。

「あ、ああ……どうかよろしく願います」

グラント船長が言った。

「こうなったら腹くくったわ。ワイらの命、アンタらに預けたる。

せやから、あんじょう頑張りや!」

トリノが言った。大阪弁が連発や。

「うん、まかせて!」

エステルたちは空賊のボスの部屋を探し始めた。

空賊団アジト 最下層

聞き覚えのある声が部屋から聞こえてきた。

「ここは……」

「うん……ここが首領の部屋みたいだね」

エステルたちは様子を見て突入することにした。

「ぐふふ……女王が身代金を出しやがるか。これで貧乏暮らしともオサラバだな」

カプア空賊団首領のドルンが言った。

「兄貴、油断は禁物だぜ。身代金が入るのはこれからだ」

「うん、まずは人質解放の段取りを決めなくちゃね」

キールとジョゼットが言った。

「人質解放？おいおい、どうしてそんな面倒くさいことをしなくちゃならねえんだ？」

ドルンが不思議そうに言った。

「え……」

ジョゼットが呆然とした。

「そんなもん、ミラだけ頂いて皆殺しにすりゃ済む話じゃねえか。生かしておく必要はねえだろう」

ドルンが言った。

「ド、ドルン兄……？」

「じよ、冗談キツイぜ……」

ジョゼットとキールは焦った。予想外の発言に対応できない様子だ。「連中には俺たちの顔をしっかりと覚えられてるんだぜ？リベールから高飛びしても足がつくかもしれないねえだろうが」

ドルンが言った。

「だ、だって年寄りとか小さな子供だっているんだよ？本当に殺し

「ちやうつもりなの!？」

「ジョゼットが必死に引き止めた。」

「まったく、おめえときたらいつまで経っても甘ちゃんだな。ママゴトやってんじゃねえんだぞ?」

「ドルンは全く聞き入れない。」

「そ、そんな……ボク……」

「ジョゼットは愕然としてうなだれた。」

「兄貴……悪いが俺もそれだけは反対だ。そこまでやっちゃあ空の女神エイドスだつて許しちゃくれん」

「それに……血塗れのミラで故郷を取り戻したくないんだよ」

「キールが言った。」

「……………」

「キールよ、おめえ……いつからそんな偉くなったんだ?」

「ドルンが静かに言った。」

「えっ……」

「キールが聞き返した。」

「なめた口叩くんじゃねえ!」

「ドルンが手元にあつた瓶をキールに投げつけた。」

「がっ!」

「キールに瓶が直撃し、その場でうずくまった。」

「キール兄!？」

「ジョゼットがキールの元に駆け寄つた。」

「がはは、なにが故郷だ!」

「せっかく大金が入るのに今更あんなしみつたれた土地を取り戻してどうするつもりだよ?ハッ、南のリゾートあたりで豪遊するに決まってるだろうが!」

「ドルンが言い張つた。」

「なん……だつて……?」

「キールがうずくまつたまま言った。」

「それでミラが無くなつたら、また飛行船を強奪すりゃあいい。そ

れが、これからの《カプア空賊団》ってやつだぜ」

「ぐわーっはっはっはっ！！」

ドルンが大声で笑った。正直、イカれたおっさんだな、聞く限り。

「ドルン兄……どうしちゃったの……？」

「本当にどうしちゃったのさあ！」

ジヨゼットが叫んだ。

その時、

「お取り込み中のところを悪いんだけどさあ……」

「兄妹ゲンカは後にしてくんない？」

エステルたちが突入した。

「あ、あんたたち！？」

「遊撃士どもっ！？ど、どうしてこの場所に……」

空賊3兄妹が驚いた。

「フツ……薄情なこと言わないでくれ。キミたちがあの船で運んで

くれたんじゃないか」

オリビエが言った。

「バ、バカな……何をふざけたこと言ってる……」

「……………まさか」

キールが思いついたようだ。

「琥珀の塔の前に飛行艇を泊めてたでしょ？スキを見て忍び込んで

船倉に隠れてたってわけ。いわゆる密航ってやつね？」

エステルが笑いながら説明した。

「ず、ずっこいぞ！この脳天気オンナっ！！」

ジヨゼットが叫んだ。

「だ、誰が脳天気よ！」

「この生意気ボクっ子っ！！」

エステルがむっとした。そして負けじと言い返す。

「な、なんだとっ！？」

「単純オンナ、暴力オンナ！」

ジヨゼットも言い返す。

「あ、あんですって〜!?!」
子供だな。

「はいはい。ロゲンカはそのくらいで」
「……人質は解放したし他のメンバーも倒しました。残るは、あなたたちだけです」

ヨシユアがきつぱりと言った。

「遊撃士協会の規定に基づき、あなたたちを逮捕・拘束するわ。逆らわない方が身のためよ」
シエラザードが言った。

「うっ……」

「くっ、くそー……」

怯むキールとジヨゼット。

「キール、ジヨゼット……。てめえら、何やってやがる?」
その後ろでドルンが言った。

「す、すまねえ兄貴……」

「ゴメンなさい……」

キールとジヨゼットがドルンに謝った。

「ぐふふ、まあいい。大目に見といてやるよ。こいつらをブツ殺せば、それで済むわけだからなあ」

ドルンが言った。

「あ、あんですって〜!?!」

エステルが怒った。

「がはは、馬鹿な連中だぜ!その程度の人数でこのドルン・カプアを捕まえようとするとはなあ!」

ドルンが大砲のような武器を構えて撃った。

「きゃあ!?!」

「導力砲を軽々と……!!」

エステルたちが飛び退いた。

「キール、ジヨゼット!さっさと得物を取りやがれ!」
ドルンが叫んだ。

「こいつらを血祭りにあげるぞ！」
恐いことを言うねえ。
キールたちが武器を構えて飛び掛ってきた。

何とかドルンたちを倒したエステルたち。

「つ、強い……。これが遊撃士か……」

キールが膝をつきながら言った。

「く、くっそ……こんな女に負けるなんて」

ジョゼットが悔しそうに言った。

「ふふん、思い知ったか？」

エステルが胸を張って言った。

「さてと、決着もついたし、大人しく降伏してもらおうよ。抵抗したりしたら……わかってるでしょうね？」

シエラザードは鞭をしごいてジョゼットに微笑んだ。

「ひっ……やだ、勘弁してくださいっ！」

ジョゼットが後ずさりした。

「トホホ……こんな終わり方ありかよ……」

キールは悲しそうに言った。同情の余地なし。

「……うーん……」

「あいたた……どうなってやがる。身体の内側が痛えぞ……」

「なんで俺……導力砲なんざ持つてるんだ？」

「……はて？」

ドルンが気絶から目を覚ましたようだ。しかも、意味不明なことを口走っている。

「兄貴？」

「ドルン兄？」

キールとジョゼットが不思議そうにドルンに話しかけた。

「おお、ジョゼット！ロレントから帰ってきたのか？こんな早く帰

つてきたって事は、やっぱ上手くいかなかったんだな」

ドルンが笑いながら言った。

「ふえっ……？」

ジヨゼットが素っ頓狂な声をあげた。

「がっはっは、ごまかすな。まあ、これに懲りたら荒事は俺たちに任せておけよ。ちまちました稼ぎだが、なあに、気長にやりゃあいい」

ドルンが相変わらず笑いながら言った。さっきとは全く様子が違う。

「ド、ドルン兄、何言ってるの？」

ジヨゼットが焦った。

「あ、兄貴、すっかりしろよ」

「ジヨゼットはとっくにロレントから戻ってきただろう。定期船を襲った直後に俺が迎えに行ったじゃないか？」

キールがドルンに説明した。

「はあ？定期船を襲うだとお？なに夢みたいな話をしてやがる。そんな危ない橋、渡れるわけないだろうが」

ドルンが言った。どういふことなんですかねえ？

「……………」

「……………」

キールとジヨゼットは開いた口がふさがらない。

「（何言ってるの、コイツ？）」

エステルが危ない人を見るかのような目で見て、ヨシユアに尋ねた。

「（うん……言い逃れじゃなさそうだけど……）」

ヨシユアが囁いた。

「さっきから気になっていたんだが、この奇妙な連中は何者なんだよ？まさか新入りじゃねえだろうな？」

ドルンがキールたちに尋ねた。どうして空賊たちは新入りが大好きなんだろうか。

「残念ながら違うわね。あたしたちは遊撃士協会の者よ」
シエラザードが言った。

「はあ!？」

「な、何でこんな所に遊撃士がいやがるんだ!？」
ドルンが驚愕して叫んだ。

「ダメだこりゃ……ホントに忘れてるみたいね」

エステルがあきれて言った。

「ハツハツハツ。面白い展開になってきたねえ」

オリビエが笑った。面白いか？

「忘れていようといまいと、逮捕することには変わりないわ」

「定期船強奪、人質監禁、身代金要求など諸々の容疑でね」

シエラザードが言った。

「定期船強奪……人質監禁、身代金要求だ!?! キール! ジョゼツ

ト! こ、こりゃあ何の冗談だっ!」

ドルンが青ざめてキールとジョゼツトに助けを求めた。

「ドルン兄い……」

「聞きたいのはこっちだよ……」

「だが、兄貴のおかげで……チャンスができたぜ!」

キールがいきなり身を起こすと発煙筒を投げた。廃坑の時と同じも
のだ。

あたりがすぐに真っ白になった。

「ああっ!」

「しまった! 2度も同じ手に……」

エステルたちはあわてている。

「お、おい……!」

「キール兄!？」

「話は後だっ! とにかくここを脱出するぞ!」

ドルンたちはその隙に逃げ出した。

「くっほ……」

「け、煙がノドに……」

オリビエが咳き込んでいる。

「早く部屋から出ましょう！」

ヨシユアがそう言つとエステルたちは部屋から出た。

「あいつら……。どこにいったの!？」

エステルがあたりを見渡した。

「上だ……。飛行艇で逃げるつもりだよ！」

ヨシユアが言つた。

「あ……！」

エステルが焦つた。

「ここまで追い詰めて取り逃がすわけにはいかないわ!全力で追いかけるわよ！」

シエラザードが言つた。

「うん!!」

「了解です！」

エステルたちが頷いた。

「ごほごほ……。た、助かつた……」

「ああ、何たる悲劇!ボクのデリケートな鼻腔が……」

今頃オリビエが出てきた。そしてアホ発言。悲劇というほどのものでもないな。

「ほら、オリビエも!急がないと置いていくわよ!」

エステルがオリビエを急かした。

「あわわ……。ま、待つてくれたまえ!」

オリビエがあわててエステルたちを追いかけた。

そうして、エステルたちは急いでドルンたちを追いかけた。

第2章 消えた飛行客船(20) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ、空賊たちを追い詰め、そして倒した。しかし、詰めが少々甘かったようで、その場を逃げられた。空賊たちは飛行艇で逃げようとしている。果たして、エステルたちは追いつき、そして逮捕できるのか!? 次回、空賊編最終回!!! 乞うご期待!!!

第2章 消えた飛行客船(21) (前書き)

いよいよ第2章が完結します。昨日は多忙のため更新できませんでした。

その分、今回は長めです。

それではお楽しみください。

感想、評価等お待ちしております。

第2章 消えた飛行客船(21)

空賊団アジト 地下2階(1)

「待ちな、てめえら！」

「ここから先には行かせねえ！」

さつき倒したはずの空賊たちが行く手をさえぎった。

「も、もう復活したの？」

「なかなかタフな連中だね」

「ふん、どかめと言うなら力づくで押し通るまでよ！」

エステルたちが感心した。

漆黒の牙 (ヨシユアの技)

「これで終わりだ……」

一撃必殺！

空賊団アジト 地下2階(2)

「おっと！ここから上には行かせねえ！」

「人質を連れてとっと帰りな！」

またもや空賊たちが現れた。

「また現れたか……一度負けたのに懲りないヤツら」

エステルが溜息をついた。

「首領たちを逃がすために時間稼ぎをするつもりですか？」

ヨシユアが空賊たちに尋ねた。

「ヘッ、兄貴たちにはいろいろ世話になったからな」

「恩返しをさせてもらうぜ！」

空賊たちが向かってきた。

漆黒の牙

「これで終わりだ……」

一撃必殺！

空賊団アジト 地下1階

「けっ、おいでなすったか……」

「勝とうなんて思うな！ 兄貴たちが逃げるまでの間、時間稼ぎができればいいんだ！」

空賊たちが叫んだ。

「フツ、自らを盾にして主人のためにつくすか……。愚かではあるが、なかなか天晴な心意気だ」

オリビエが言った。

「こちらも全力で応えるのが礼儀というものかしらね……。いくわよ！」

漆黒の牙

「これで終わりだ……」

一撃必殺！

空賊団アジト 地上

そこにはドルンたちを確保した王国軍兵士たちがいた。ついでに、ナイアルとドロシーまでいた。

「へっ……」

「これは……」

エステルたちが驚いた。

「くそっ、まさか軍にここの場所を知られるとは！ あの野郎、話が

違うじゃないか！」

あの野郎とは黒装束の男のことだろう。

「こ、こらっ！ 気安くボクに触るなよっ！」

ジヨゼットが兵士たちに言った。

「おいおい……何がどうなってるんだあ！？」

ただ1人、ドルンだけが状況を全く把握できていなかった。

そのまま王国軍兵士たちが警備飛行艇にドルンたちを連行した。

「は、あの人たちが空賊さんたちのボスですか。女の子もいるなんて、なんかビツクリですねえ」

ドロシーが感心している。

「無駄口叩いてないで、とにかく撮りまくれっ！ こんなスクープ、滅多にあるもんじゃねえ！」

ナイアルがドロシーを急かした。とにかく必死だった。

その時、リシャール大佐とモルガン将軍が現れた。

「どうだ、ナイアル君。いい記事は書けそうかな？」

リシャール大佐がナイアルに尋ねた。いつの間に知り合っただか……。

「そ、そりゃあもちろん！ 連れてきてくれて、ほんっとーに感謝してますよ！ あっ、ついですから大佐も撮らせてもらえませんかねえ？」

ナイアルが頭を下げた後、リシャール大佐に尋ねた。 凶々しいっただらありゃしない。

「ふむ……閣下、よろしいですか？」

リシャール大佐がモルガン将軍に尋ねた。

「勝手にするがいい。今回の作戦はお前の立案だ。正直、大した手並みだったぞ」

モルガン将軍がリシャール大佐に言った。

「いや、情報部のスタッフの分析が正確だったからです。それと、そこにいる諸君の協力のたまものでしょうね」

リシャル大佐がエステルたちの方を向いて言った。

「なに……？」

モルガン将軍が驚いた。気づいてなかったんかい！

「えっと……まだ状況が掴めないんだけど。コレ、どうなっちゃてるの？」

エステルが言った。無理もないだろうね。

「お、お前たちは……」

「わぁ、エステルちゃんたちだ！」

ナイアルたちが振り向いた。こちらにも気づいてない者がいた。

「ゆ、遊撃士ども！？なぜ貴様らがここにいる！？」

モルガン将軍が慌ててエステルたちに尋ねた。

「念のため言っておくけど、また一足先に潜入していたの。このアジトもすでに制圧済みよ」

シエラザードが言った。

「逃げた空賊の首領たちをここまで追ってきたんですが……。まさか王国軍の警備艇が来ているとは思いませんでした」

ヨシユアが言った。

「ぐぬぬぬ……また出過ぎたマネをしおって」

モルガン将軍が怒り始めた。長生きしないね、この将軍。

「お言葉ですが、閣下。彼らがいたから、我々の突入もここまで上手くいったのです。その功績は認めるべきかと」

リシャル大佐がモルガン将軍を制して言った。

「……くっ」

「まあよい。後の指揮はおぬしに任せる。わしは一足先に船に戻って空賊どもを締め上げてくるわ」

モルガン将軍がそう言って引き上げていった。

「承知しました」

リシャル大佐が了解した。

「相変わらず頑固オヤジね」

エステルが溜息をついた。

「悪い人ではないのだがね。いささか柔軟性には欠けるな。ところで、他の空賊たちと人質の方々はどこにいるんだね？」

リシャル大佐がエステルたちに尋ねた。

「他の手下たちはそこから転がっているはずよ。人質たちには、監禁されていた部屋で待機してもらっているわ」

シエラザードが言った。

「そうか……。いや、本当にご苦労だった。人質や積荷の移送を含め、後のことは我々に任せて欲しい。行くぞ、カノーネ大尉」

リシャル大佐が副官のカノーネ大尉に言った。

「承知しましたわ」

そう言つて、リシャル大佐はさっさと行つてしまった。

「あ、ちよつと大佐！」

ナイアルが焦つて言った。

「お前さんたちにもインタビューしたいんだが、今回ばかりはあつちが優先だ。機会があれば、よろしく頼むぜ！」

「まったね〜！エステルちゃん、ヨシユア君」

ナイアルたちもエステルたちにそう言い残して行つてしまった。

「いやはや、美味しいところを根こそぎ持っていかれた気分だね」
オリビエが言った。

「うーん、確かに」

エステルが残念そうに言った。

「フフ、いいじゃないの。遊撃士の本分は縁の下の力持ちというものの。無用に目立つても仕方ないわ」

シエラザードが言った。

「確かにそうですね。父さんも、そのあたりには気を配っていたみたいですし」

ヨシユアが言った。

「あれ、そうだったっけ？」

「……………」

「ああつ、父さん！」

エステルが突然大声をあげた。

「うん……その問題を考えなくちゃね。父さんが今、どこにいて何をしているのか……」

「どうして連絡をくれないのか」

ヨシユアが俯きながら言った。

「うん……」

エステルも力なく頷いた。

「ここで、あたしたちが出来ることはもう無さそうね。とりあえず、ボースに戻って事件の報告をしておきましょう。先生の事を考えるのはそれからよ」

そうして、エステルたちはボースへと戻った。

遊撃士協会ボース支部

「本当にご苦労さまでした。やっぱり、わたくしの目は間違っていたいなかったようですわね。みなさんだったら絶対に解決してくれると思いましたわ」

メイベル市長がエステルたちを褒め称えた。

「でも、軍に良い所を持っていかれちゃったしなあ。解決したとはいえないかも……」

エステルが言った。

「そんなことはありませんわ。仮に、皆さんがいなかった場合、軍の突入も上手くいったかどうか。逆上した空賊たちに人質を傷つけられたかもしれませんが」

メイベル市長が言った。

「うむ、お前さんたちが潜入してアジトを制圧していたおかげじゃ。胸を張ってもいいと思うぞ」

ルグラン老人が言った。

「そ、そっかな……えへへ」

エステルが照れた。

「確かに人質は解放されて空賊たちも逮捕されたけど……。幾つかの謎が、解明されぬまま残ってしまったのが悔やまれるわね」

シエラザードが言った。

「湖畔に現れた男たちと空賊の首領の奇妙な態度ですね。この事件、まだ裏があると考えた方がいいかもしれません」

ヨシユアが言った。確かに……。

「まあ、そのあたりは王国軍に任せるしかなさそうじゃのう。連中の身柄を拘束された以上、こちらとしては調べようがない」

ルグラン老人が言った。

「とにかく、人質たちが全員無事に戻ってきただけでも幸いですわ。空賊逮捕のニュースのおかげで街にも活気が戻りつつあります。感謝の気持ちに、少しばかり報酬に色をつけさせて頂きました」

メイベル市長が言った。

「え、いいの？」

エステルがメイベル市長に尋ねた。

「ふふ、もちろんですわ」

「オリビエさんも……本当にありがとうございました」

メイベル市長がオリビエに向かって言った。

「フツ……《グラン＝シャリネ》分の働きが出来たのであればいいがね」

オリビエが言った。

「ええ、お釣りが来るほどですわ」

そうかあ？

「それでは皆さん、ご機嫌よう。何かあったらまたお願いします」

「……失礼いたします」

メイベル市長とリラが去って行った。

「うーん、何だかものすごく感謝されちゃったわね」

エステルはまだ照れている。

「あれ以上事件が長引いていたら流通はさらに混乱しただろうからね。市長さんが喜ぶのも当然かもしれないな」
ヨシユアが言った。

「えへへ、何だか嬉しいな。あたしたちが頑張ったことでみんなのお役に立てたんだっいたら遊撃士冥利に尽きるってもんよね」
エステルが喜びながら言った。

「フフ、ナマ言っちゃって。でも、確かにあんたたちももう新人とは言えないわね。正直、今回は色々驚かされたわ」
シエラザードが言った。

「えへへ、そっかな？」
また照れた。

「とりあえず、今回の事件の査定と報酬を受け取るがいい」

「市長が言っていた分、報酬には色をつけておいたぞ」

「それとこれは……わしからお前さんたちにはじゃ」
ルグラン老人はエステルとヨシユアに正遊撃士資格の推薦状を渡した。

「これって……ボース支部の推薦状!？」

「あの、いいんですか？」

エステルとヨシユアは驚いた。

「うむ、これだけの事件を解決してくれたとあっては推薦せぬわけにはいかんじゃろ。どうか受け取ってもらいたい」
ルグラン老人が言った。

「ありがとうございます、ルグラン爺さん！」

「推薦状に恥じないよう、これからも頑張ります」

エステルたちは喜んだ。

「ふふ、良かったわね。カシウス先生が聞いたらさぞ喜ぶと思うんだけど……」

シエラザードが言った。

「……うん」

「……そうですね……」

エステルとヨシユアの顔が曇った。

「カシウスか……一体何をしておることやら。ギルドはおるか家族にすら連絡の1つもよこさんとはなあ」

ルグラン老人が言った。

「そうね……先生らしくもない。ボースで突然降りた後、いつたいどこに行ったのかしら」

シエラザードが呟いた。

その時、

「ごめんくださ〜い！」

青年が入ってきた。

「飛行場の受付の……。なんじゃ、どうしたね？」

ルグラン老人が尋ねた。

「実は、例の空賊に奪われていた定期船の積荷が戻ってきましたね。その中に遊撃士協会あての郵便物が幾つかあったんですよ。それで

お届けに伺ったんです」

受付係のテッドが説明した。

「それはご苦労さんじゃった」

「いや、待てよ……。ボースから出発した船に、どうしてウチ宛のものがある？」

ルグラン老人が首を傾げた。

「いえ、違うんです。ロレント宛のものなんですけど。えっと、こちらにカシウス・ブライトという方の御家族はいらっしやいますか？」

受付係テッドが尋ねた。

「ええっ!？」

「僕たちがそうですけど……」

エステルたちが驚いた。

「ああ、ちょうど良かった!いや、ロレント支部に連絡したら、こちらに来ていと聞きましたね。それじゃあ、受け取ってください」
エステルは手紙と小包を受け取った。

「この手紙は……うん、父さんの字だね。宛先は、ロレント支部のあたしとヨシユアになってる」

「どうやら船を降りる直前に書いたものらしいね。父さん、ちゃんと僕たちに連絡するつもりだったんだよ」

「そっか……」

エステルは安心した。

「ふふ、良かったわね。そっちの小包も先生から送られてきたもの？」

シエラザードが尋ねた。

「ううん、他の誰かが父さんに送ったものみたい……」

「……………あれ、おつかしいなあ？」

エステルが小包のまわりを見た。

「うん……差出人がどこにも書いてないね」

ヨシユアが言った。

「では、確かにお渡ししましたよ」

受付係テッドが出て行くとした時、振り返って、

「ああそれと……空賊逮捕、本当にご苦労さまです。いやあ、さすが遊撃士ですねえ」

そう言って再び去って行った。

「まさか、定期船の積荷に手がかりがあったとはのう。ここで読むのもなんじゃ。2階の休憩所を使うといい」

ルグラン老人が言った。

「ありがと、ルグラン爺さん！」

エステルが礼を言った。

「フツ、それではさっそく中身を拝見させてもらおうか
オリビエがさりげなく言った。

「……つて、またどうしてあんたがちゃっかりいるわけ？」

エステルが席に座るとオリビエに言った。

「いやあ、純然たる興味さ。どうして君たちの父上が出発前に船を降りたのか……。このままお預けをくらったら、気になって夜も寝られないよ」

オリビエが言った。

「そ、そんなこと言われても」

エステルが迷った。

「ああ、一緒に冒険したのに仲間外れとは何と薄情な……。アジトに潜入できたのは誰のおかげかな」と

オリビエがわざとらしく言った。

「うぐっ……」

エステルが言葉に詰まった

「まったく夕チが悪い男だこと」

シエラザードが言った。

「仕方ありませんね……。ただ内容次第では席を外してもらいますよ？」

ヨシユアが釘を刺した。

「フッ、もちろんだとも」

オリビエが笑った。

「はあ、気を取り直して……」

エステルはまず手紙の封を切った。

エステル、ヨシユアへ

そろそろ代理の仕事を終わらせた頃合だろうか？

最初は躓く事も^{つまづ}あるだろうが、一步一步確実にこなせばいい。お前たちなら必ず出来るはずだ。

さて、こちらの仕事のほうだが少々困ったことが起こってな。

どうやら、しばらくの間家に帰ることが出来そうにない。

そうだな……女王生誕祭が終了するまでは帰ってこられないと考えるてくれ。
お前たちには申しわけないが、まあ、いまさら親の留守を寂しがるような歳でもなからう。

俺が戻るまでの間、お前たちがどう過ごすかはお前たち自身で決めるといい。

ロレントで仕事を続けるもよし。

正遊撃士の資格を得るために旅に出るのもいいかもしれん。

16歳という実り多き季節を悔いなく過ごすといいだろう。

それではな。シエラザードとアイナによく伝えておいてくれ。

カシウス・ブライト

「……先生らしい文面ね。軽そうだけど、あんたたちへの思いやりに満ちあふれているわ」

シエラザードが言った。

「うん……」

「そうですね……」

エステルとヨシユアが頷いた。

「ふむ、女王生誕祭か。聞いた話によると、まだしばらく先のようなだね」

オリビエが尋ねた。

「2、3ヶ月は先のことよ。確かにちよっとした旅行なら出来そうな期間だけど……。本当に、いったいどこで何をしてらっしゃるのかしら」

シエラザードが言った。

「……………」

「……………」

エステルとヨシユアは黙った。

「それはともかく……そちらの小包はどうだい？差出人不明という

ところが何とも興味深いじゃあないか」

オリビエが言った。

「まあ、確かに気になるけど。父さん宛のものを勝手に調べるのもちよつと……」

エステルがためらった。

「しかし、考えてもみたまえ。父上の失踪の時と同じくして届けられた差出人不明の小包だ。何か関係があるかもしれないよ？」

オリビエが指摘した。単に見たいからそう言ったのかもしれない。

「そ、そっかなあ……」

エステルが揺れた。

「ちよつとオリビエ……。自分が興味あるからってそそのかすんじゃないわよ」

シエラザードがたしなめた。

「いや、オリビエさんの言うことも確かに一理あります。父さんが帰ってくるまでずっと放っておくのも何だし……。調べた方がいいかもしれません」

ヨシユアが賛成した。

「……………」

「わかった、調べてみよ！」

エステルは差出人不明の小包を開いた。

小包の中からは漆黒に光る半球状の装置が現れた。

「こ、これって……」

「オーブメントだね。用途はよくわからないけど。メモには、えつと……」

例の集団が運んでいた品を確保したので保管をお願いする。

機会を見て、R博士に解析を依頼して頂きたい。

K

「こ、これだけ？」

「うん……他には何も書かれていない。シエラさん。このKとかR博士とかいう人に心当たりはありませんか？」

ヨシユアがシエラザードに尋ねた。

「うーん……残念ながら判らないわね。先生はとにかく顔が広いから外国人という可能性もあるし」

シエラザードが頭をふった。

「ヒントがこれだけじゃ正直、お手上げって感じよね。この黒いオブメント、いったい何なのかな？」

エステルがその物体を見て言った。

「形状からいって一般的な用途に使われるものじゃなさそうね。戦術オブメントあたりに少し雰囲気は似ているけど……」

シエラザードが言った。

「いや、それとも違うな。普通のオブメントには結晶回路クオーツを嵌はめるスロットが付いている……。だが、これには何もついていない。

これはひよつとしたら……《古代遺物アーティファクト》かもしれないね」

オリビエが言った。

「アーティファクト？」

エステルが尋ねた。

「現在造られているオブメントの原型となった古代文明の導力器のことさ。たまに遺跡から発見されて七耀教会に保管されることが多い。まあ、いわば骨董品だね」

オリビエが説明した。骨董品とはどうかな？

「でもこれは、見たところそんなに古いものじゃないわ。最近造られたものみたいだけど」

シエラザードが指摘した。

「それは確かに……。ただ、訳アリの品であるのはどうやら間違いなさそうだね」

オリビエが結論付けた。

「あゝまったくもう。あの不良親父ときたらっ！心配ばっかりかけてくれちゃってもう！」

エステルがいきなり大声をあげた。

「エ、エステル？」

ヨシユアが驚いて声をかけた。

「こんな差出人不明の怪しげな品が送られてきて……」

「一体、どんな事件に首を突っ込んでるんだか……」

エステルが悲しそうに言った。

「エステル……」

シエラザードが下を向いた。

「……………」

「ねえ、エステル。少し考えたんだけどさ……。このまま、旅を続けられない？」

ヨシユアがエステルに言った。

「……………えっ……………？」

「ヨシユア？」

エステルとシエラザードが顔を上げた。

「父さんの手紙にも書いてあったじゃないか。正遊撃士の資格を指して旅をするのもいいだろうって」

ヨシユアが言った。

「う、うん……それは確かにそうだけど」

エステルが頷いた。

「僕たちは、ロレントとボースで推薦状を貰ったよね。残るは、ルーン、ツァイス、王都グランセルの3つだけだ。ギルドの仕事をしながら、これらの地方を回っていけば……。ひよっとしたら……父さんの行方が判るかもしれない」

ヨシユアが言った。確かに、可能性としてはありうるだろう。

「あ……………」

エステルが気付いたようだ。

「父さんの実力を考えたら余計な心配だとは思っけど……。それに

外国に行っている可能性だってあるんだけど……。それでも、ただ待っているより遙かにマシなんじゃないかな。それにR博士だって見つけられるかもしれないしね」
ヨシユアが言った。

「……………」

「……ねえ……ヨシユア……」

「なに？」

「ヨシユアってば天才！」

エステルがヨシユアの耳元で叫んだ。

「ちよ、ちよつとエステル？」

ヨシユアが困惑した。

「それ、一石二鳥どころか十鳥くらいあるじゃない！も、憎たらしくくらいに頭が冴えてるんだからっ」

エステルがいきなり元気になった。

「それって……賛成と考えるもいいのかな？」
当然だろう。

「賛成、賛成、大賛成っ！正遊撃士めざして修行しながらリベール中を歩き回って……。ついでにあの不良中年が何をしてるのか暴いてやるわ！」

エステルが叫んだ。人を悪人呼ばわりしすぎじゃない？

「あの……微妙に目的がズレてきてない？」

ヨシユアが呆れた。

「ふふ……完全に調子が戻ったみたいね」

「フツ、これにて一件落着だね」

シエラザードとオリビエが言った。

ボース国際空港

「それじゃ、あたしはこれでロレントに戻るけど……。うーん、や

つぱり心配ねえ。本当に付いていかなくていいの？」

シエラザードが不安げに言った。

「も、大丈夫だってば。一応、正遊撃士を目指す旅だもん。シエラ姉がいたら修行にならないよ」

「シエラさんまで帰らなかつたらロレント支部も大変でしょうし。

大丈夫、何とかやっていきます」

エステルとヨシユアが言った。

「まあ、そこまで言うなら……。あんなたちの歳で正遊撃士を目指すのは珍しいんだからくれぐれも無茶しないようにね。それと、困ったことがあつたらロレント支部に連絡するのよ。あんなたちがどこに居ようとすぐに駆けつけて行くからね」

シエラザードが言った。面倒見がいいね。

「うん……。ありがとね、シエラ姉。シエラ姉の方こそあんまり飲み過ぎないでよね。あたし、それだけが心配なんだから」

エステルが言った。それだけか……？

「タハハ……。まあ、気を付けておくわ」

シエラザードが苦笑した。

「フツ、心配しないでくれたまえ。何といつてもシエラ君にはこのボクが付いているのだから！」

オリビエが胸を張った。

「……で、どうしてあんたもロレントに行くわけ？しかもシエラ姉と一緒に……」

エステルが言った。

「フツ、ボースの郷土料理はとりあえず全部味わったからね。そろそろ他の地方に足を向けてみようと思つてね。ロレントの料理は、野菜が絶品と聞いているから今から楽しみだよ」

オリビエの方はエステルと違って食べ歩き王都一周をするそうだ。

「てな感じで、美味しい店を紹介しろって言つて聞かないのよ。あんまりしつこいから居酒屋で酒に付き合つのを条件に付いてくることを許可しちゃった？」

シエラザードが舌を出した。

「うつわ〜……」

「オリビエさん……あの、本当に大丈夫なんですか？」

エステルとヨシユアは心配そうに言った。

「フツ、このオリビエ、美人と美食のためなら死ねるさ。本当は、ヨシユア君にも付いていきたいところなのだがね。迷った拳句の苦しい選択だった……」

オリビエが口惜しそうに言った。アホ……。

「迷われても困るんですけど」

ヨシユアが溜息をついた。

「まったく懲りないヤツ……ロレントの治安を乱さないでよね。あと、仕事明けのシエラ姉って本当にリミッター外れちゃうから。マジで注意した方がいいわよ」

エステルが忠告した。

「なによ、失礼ねえ。アイナは付き合ってくれるもん」
シエラザードが言った。

「あの人だって底ナシでしょー!」

エステルが言った。アイナは最強の酒豪だ。

「リミッターが外れる？あの、それって……この前よりもスゴイのかい？」

オリビエが尋ねた。

「……何というか。比較にならないと思います」

ヨシユアが顔を伏せた。

「ふーん、そうなんだ……」

「え!？」

オリビエがいきなり驚いた。状況を理解したそうだ。

ロレント方面行き定期飛行船、まもなく離陸します。

ご利用の方はお急ぎください。

「あら、もう出発か。ほらオリビエ、急がないと」
シエラザードがオリビエの服を掴んだ。

「シエ、シエラ君。ちょっと待ってくれたまえ。少し考える時間を
くれると嬉しいな〜って……」

オリビエが言った。

「出発直前になって、な〜にを言ってるのかしら」

「男だったらグダグダ言うな！」

シエラザードが叫んだ。

「ひええええ〜っ！」

オリビエがシエラザードに引きずられていった。

「シエラ姉、まったね〜！ロレントのみんなによろしく！」

「2人ともお元気で！」

エステルとヨシユアが別れの挨拶をした。

そうして定期船は飛び立って行った。

第2章 消えた飛行客船（21）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

「第3章 白き花のマドリガル」が始まります。是非ご期待ください。

第3章 白き花のマドリガル(1) (前書き)

いよいよ第3章が開幕です。更なる展開にご期待ください。

第3章 白き花のマドリガル（1）

飛行船 外

男性の声

「……以上が王国北方で起こった空賊事件の顛末てんまつさ」

「……………」

「ああ、没落したカプア一家の連中がこんなところに流れてくるとはね。王国から問い合わせがあるかもしれないから適当にあしらってくれ」

「……………」

「うん、結局彼には会えなかった。どうやらトラブルが発生したらしい。空賊事件との関係ははまだ不明だが別の勢力が動いているのは間違いない」

「……………」

「フツ、そうでもないのさ。面白い連中と知り合いになれたよ。料理も美味しいし、美人も多い。この国はなかなか肌に合ってる。いっそ永住しちゃおうかななんて」

オリビエだった。なにやら通信をしているようだ。

「わかった、わかった。そんなに恐い声をださないでくれ。そちらの方は引き続き頼む。くれぐれも宰相殿に気付かれるな」

「また連絡するよ……親友」

そうして、オリビエは通信を切った。

「フフ、相変わらずからかい甲斐のある男だな。融通の利かないところが可愛いというか何というか……」

その時、不意にオリビエの後ろから声がした。

「……携帯用の小型通信機ね。ずいぶん洒落たものを持ち歩いているじゃないの」

シエラザードだった。

「シ、シエラ君……」

オリビエが驚いた。

「ツアイスの中央工房ですら実用化していないオープンメントを持っているなんてね……。あんだ、いったい何者なの？」

シエラザードがオリビエに問い質した。

「フツ、水くさいことを言わないでくれたまえ。漂泊の詩人にして天才演奏家、オリビエ・レンハイムのことはキミも良く知っているはずだろっ？だが、もっと知りたいのであれば所謂いわゆるビロートークというやつで……」

オリビエがはぐらかした。

「悪いけどマジなの。道化ゴツコは通用しないわよ。エレボニア帝国の諜報員さん」

シエラザードが真剣に言った。

「……………」

「フフ、《銀閃》の名はどうやらダテじゃなさそうだね。エステル君たちの前では気付かぬフリをしていたわけか」

オリビエが言った。

「これ以上、あの子たちに余計な心配をかけたくないもの。それじゃ、詳しいことをサクサクと喋って貰おうかしら。あんだの目的は？どうやってリベールに潜入したの？」

シエラザードが単刀直入に聞いた。

「その前に…… 2つほど訂正させてくれるかな。まず、道化ゴツコはしていない。ボクの場合、これが地の性格でね。擬態でも何でもなかったりする」

オリビエが笑って言った。

「あー、そうでしょうね。ワインをダダ飲みしたのだから飲みたいからやったんでしょうよ」

「ただしその後、門に連行されて情報を集めることまで計算してね。あたしたちと合流する事まで狙っていたとは思えないけど……」

シエラザードが言った。

「フフフ……そのあたりは想像にお任せするよ」

「訂正するのはもう1つ……この装置はオーブメントじゃない。帝国で出土した《古代遺物》^{アーティファクト}さ。あらゆる導力通信器と交信が可能で暗号化も可能だから傍受の心配もない。忙しい身には何かと重宝するのだよ」

アーティファクト！？それは、個人所有は七耀教会で禁止されているはず！

「アーティファクト……七耀教会が管理している聖遺物か。ますますもって、あんたの狙いが知りたくなってきたわね」

シエラザードがオリビエを睨んだ。

「イヤン、バカン。シエラ君のエッチ。ミステリアスな美人の謎は無闇に詮索するものじゃなくてよ」

オリビエの変態発言。

「……………」

「本物の女に近づきたい？あたしの鞭で手伝ってあげるけど」
シエラザードが微笑んだ……か？鞭をしならせている。

「や、やだなあシエラ君。目が笑ってないんですけど……」
オリビエが慌てた。

「まあ、冗談は置いとくとして」

そして、いきなり真顔になったオリビエ。

「ったく。最初から素直に話なさいよ」

シエラザードが鞭をしまった。

「お察しの通り、ボクの立場は帝国の諜報員のようなものさ。だが、工作を仕掛けたり、極秘情報を盗むつもりはない。ある人物に会いに来ただけなんだ」

オリビエが説明した。

「ある人物……？」

シエラザードがさらに尋ねた。

「キミも良く知っている人物だよ」

オリビエが言った。

「王国軍にその人ありと謳うたわれた最高の剣士にして、稀代の戦略家」

「大陸に5人といない特別な称号を持つ遊撃士」

「《剣聖》 カシウス・ブライトその人さ」

ボース北街区

「さてと、王国全土を回るなら次の目的地はルーアン地方ね。どう
いうルートで行けばいいのかな？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「それなんだけど……本当に定期船は使わないのかい？歩いて行っ
たらかなりの遠回りになると思うけど」

ヨシユアがエステルに聞いた。

「シエラ姉が言ってたじゃない。まずは自分が守るべき場所を實際
に歩いて確かめてみるって。あ、これって父さんの言葉だっけ？」

エステルが言った。

「まあ、確かに時間はあるからのんびり行くのも悪くはないか。定
期船の運賃も節約できるしね」

ヨシユアが納得した。

「そーそー、運賃が浮いた分はボースマーケットで買い物しましょ。
なにせ空賊騒ぎの時は落ち着いて買い物できなかったし。出発はそ
れからでもいいんじゃない？」

エステルが言った。買い物好きですね。

「それは構わないけど……あんまり無駄遣いしないようにね。ちな
みに、ルーアン地方に入るには西のクローネ峠を越える必要がある。
買い物が済んだら西口から出よう」

ヨシユアが説明した。

「オツケー、西口ね」

エステルが頷いた。

第3章 白き花のマドリガル（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

正遊撃士を目指し、次の都市を目指し始めたエステルたち。いったい何が待ち構えているのか！？

第3章 白き花のマドリガル(2)

クローネ峠 関所 外

長い西ボース街道とクローネ峠を越えて、エステルたちは関所に到着した。

「は、やっと着いたみたい。あれが関所の建物なのかな？」

エステルが関所を見て言った。

「そうみたいだね。あれを越えたらルーアン地方だ。でも参ったな…… もうすぐ日が暮れる。今日はここに泊めてもらった方がいいかもしれない」

ヨシユアが言った。確かに、日が暮れ始めている。ここからさらに峠を降りて歩かなければルーアン市には行けない。このまま行けば、夜道を歩くことになる。

「別にいいけど……。急いで峠を降りて、麓の宿に泊まる選択肢もあるんじゃない？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「夜の峠越えは危険だよ。視界も悪ければ足場も悪い。夜行性の魔獣に襲われたら崖から落ちる可能性だってある。あんまりお勧めできないけどな」

ヨシユアがエステルに危険性を説明した。

「ぶるるっ、確かに危ないかも。とりあえず関所の兵士さんに事情を説明するしかないか……」

エステルが身を震わせた。

とにかく関所に入ることにしたエステルたち。

そこで、門番の兵士がエステルたちに気付いた。

「おっと、珍しいな。こんな時間にお客さんなんて。ハイキングに来て道に迷っちゃったのか？」

兵士のカドルスがエステルたちに尋ねた。

「ううん、違うわ。あたしたち、一応、遊撃士なんだけど」

エステルはそう言つて準遊撃士の紋章を兵士に見せた。

「へえ、あんたたちの歳で遊撃士つてのは驚きだなあ。それじゃあ、仕事で来たのかい？」

兵士カドルスが感心して尋ねた。

「いえ、実は正遊撃士を目指して王国各地を回るつもりなんです。」「で、どうせだったら修行を兼ねて飛行船を使わずに歩こうかなつて」

ヨシユアとエステルが事情を説明した。

「歩いて王国一周するのか！？は？っ、若いつて言うか気合が入っているつて言うか」

兵士カドルスが感嘆した。

「えへへ、それほどでも」

エステルが照れた。

「しかし、いくらなんでも今から峠を降りるのは危険だぞ。最近、このあたりではやたらと魔獣が発生してるからな。旅人用の休憩所があるから今夜はそこに泊まっていくといい」

兵士カドルスがエステルに休憩所を紹介した。ありがたいこつちや。

「やった、ありがと」

「助かります」

エステルたちが礼を言った。

「なんのなんの。休憩所を使うときはウチの隊長に声をかけるといい。手前の詰所にいるからさ」

兵士カドルスが言った。

エステルたちは早速関所の中に入った。

関所 中

エステルたちは詰所の中にいた隊長こと、ゼルスト隊長に声をかけた。

「うん、君たちは……」
ゼルスト隊長が振り向いた。
「どうも、お邪魔しています。実は……」
エステルたちは事情を話して、泊まらせてもらえるように頼んだ。
「そうか、構わないよ。遊撃士なら身元も確かだしね。隣の休憩所を自由に使ってくれ」
ゼルスト隊長は快く了承した。
「ありがとう、隊長さん！」
エステルたちは礼を言って隣の休憩所に向かった。

休憩所

「ここが旅行者用の部屋ね」
「うん。まずは暖炉をつけようか」
ヨシユアが暖炉に火をつけた。部屋がすぐに暖かくなった。峠の夜は冷えるため。その暖かさが身にしみる。
「は、あつたかい……。やっぱり薪まきを使った暖炉って落ち着く感じがする……」
エステルが言った。
「そうだね。導力ストーブも出回ってるけど、暖かさでは暖炉には敵わないかな」
ヨシユアが言った。
「ま、あれはあれでお手軽でいいんだけどね」
エステルがそう言った時、扉のノック音が聞こえた。
「おーい、お邪魔するぞ」
副長のセーロスが入ってきた。
「隊長から話は聞いたぜ。今夜は泊まっていくんだった？夕食、俺たちのメシと同じでよけりゃご馳走するけど、どうする？」
副長セーロスがエステルたちに尋ねた。
「え、いいの？」

「すみません、何から何まで」

いたせりつくせりとはこの事を言うのだろう。

「なあに、定期船が就航してから通行人がめつきり減ってな。ヒマを持って余しているから正直、客人は大歓迎なのさ」

副長セーロスが言った。

「えへへ、そういうことなら遠慮なくご馳走になろうかな？」

エステルが喜んで言った。

「よし、それじゃあ少しの間待っててくれや。もっとも軍隊のメシだから、あまり味に期待しないでくれよ？」

そう言つて、副長セーロスは部屋を出て行った。

「空賊団騒ぎでは王国軍と張り合っていたけど……。1人1人の兵士さんはやっぱり親切な人が多いよね」

エステルが言った。

「確かにそうだね。まあ、軍人が親切なのはリベルくらいだと思うけど……」

ヨシユアが含みのあることを言った。まるで、他の国ではそうではないかのよう。

「え？」

「いや……とりあえず荷物を置こうか」

エステルが聞き返したが、ヨシユアは話題をそらした。

夕食後

「は、お腹いっぱい。期待しないでとか言つてたわりには、かなり美味しかったと思わない？」

エステルが満足そうに言った。

「そうだね。軍で出る食事とは思えないな」

ヨシユアが言った。

「ちよつと失礼するぞ」

セーロス副長が入ってきた。

「あ、副長さん。すつごく美味しかったわよ」

「ご馳走さまでした」

エステルたちが礼を言った。

「お粗末さま。口に合ったようで何よりだ。ところで……もう1人客が来たんだが、相部屋でも構わないかい？」

セーロス副長がエステルたちに尋ねた。

「来客……こんな夜中にですか？」

ヨシユアが言った。外は既に日が暮れて真っ暗だ。

「ずいぶん度胸があるヒトねえ。あたしたちは構わないけど？タダで泊めてもらってる身分だし」

エステルは了承した。

「そう言ってくれると助かるよ。ま、嬢ちゃんたちの同業者だから気兼ねする必要はないだろうけどな」

セーロス副長が笑った。同業者？というのと、遊撃士ということか？

「え？」

「同業者？」

エステルたちが首を傾げた。

「フン……どこかで見たような顔だぜ」

青年が部屋に入ってきた。赤毛の青年、アガットだった。

「あ、あんた……」

「《重剣のアガット》……」

エステルたちが驚いた。まさか再会するとは思いもしなかっただろう。

「なんだ、知り合いだったのか。ところで、アガット。お前さん、メシはどうする？」

セーロス副長がアガットに尋ねた。

「いや、せつかくだがさつき喰っちゃったばかりだ。寝床を貸してくれるだけでいい」

アガットが答えた。

「わかった。ベッドは適当に割り振ってくれよ。それじゃあ、おやすみ」

そう言つて、セーロス副長は部屋を出て行った。

「さてと……オッサンの子供たちだったか。何だつてこんな場所に泊まってやがる？シエラガードはどうしたんだ？」

アガットがエステルたちのところに寄つて来て言つた。相変わらず、ぶっきらぼうだ。

「シエラさんはロレント地方に帰りました。今は僕たち2人で旅をしています」

「正遊撃士を目指して王国各地を回ろうと思つてるの。修行を兼ねて自分の足だけでね」

エステルたちが答えた。

「正遊撃士？歩いて王国一周だあ？ずいぶんと呑気なガキどもだな」アガットが呆れた口調で言つた。

「あ、あんですつてー!？」

エステルが頭にきたようだ。

「お前らみたいなガキが簡単に正遊撃士になれるわけねえだろ。常識で考えるよ、常識で」

アガットが言つた。

「こ、これでもあたしたち空賊逮捕で活躍したんだから！推薦状だつて貰つているし、子供扱いするのやめてよねっ!」

エステルが反論した。

「その話か。ルグラン爺さんから聞いたぜ。それじゃあ聞くが……飯にお前らしかないなかつたらその事件、解決できたと思うか？シエラガードの手を借りずにお前たち自身の力だけでだぞ？」

アガットが尋ねた。そう言われると、困るな……。

「そ、それは……」

「……難しかったと思います」

エステルたちは口ごもつた。

「ま、当然だろうな。お前たちは新米で、しかもガキだ。力もなけ

りや、経験も足らねえ。とっさの判断も出来ねはずだ。それを忘れて浮かれてるといつか必ず足元をすくわれるぞ」
アガットが言った。

「う、浮かれてなんかいいもん。あんたの方こそ、こんな時間に峠越えなんて危なっかしいことしちやってさ。人のこと言えないんじゃないの？」

エステルがアガットに言った。

「アホ、鍛え方が違うんだよ。それに俺の方は仕事だ。物見遊山の旅と一緒にすんな」

アガットが反論した。

「仕事？遊撃士協会のですか？」

ヨシユアがアガットに尋ねた。

「ああ、お前らのオヤジに強引に押し付けられた……」

アガットが答えようとしたが、

「え……？」

「父さんが押し付けた？」

エステルたちが身を乗り出した。

「……………」

「さてと、明日は早いし、とつとと休ませてもらうぜ。お前らも喋ってないで寝ろや」

アガットは途中で口を閉じ、ベッドへと寝転んだ。

「あー、ごまかした！？」

「そこまで露骨すぎると余計に気になるんですけど……」

エステルたちが追求した。

「あーもう、うるせえな。ガキが余計なことに首を突っ込んだら火傷するぞ。とつととルーアンに行って掲示板の仕事でもしていやがれ」

「それが……ふああ……お前らにはお似合いだぜ」

「……………」

そのまま、アガットは寝てしまった。

「ちょ、ちよつと……」

「もう寝ちゃったみたいだね。エステル並みに寝つきがいいなあ」

ヨシユアが感心した。エステルの寝つきとはどのようなものなのか。

「一緒にしないでっつてば！」

エステルが怒った。

「もー、何なのよコイツ!? ケンカ売ってると思えないんですけどっ!？」

エステルが疲れた顔で言った。

「まあまあ。僕たちが新米なのは確かだし。ひよつとしたら、心配してわざとキツク言ってるのかも……」

ヨシユアが言った。

「……………」

「ねえ、ヨシユア。ほんとーにそう思う?」

エステルが納得いかない目でヨシユアを見た。

「ゴメン、あまり自信ない。でも、そろそろ僕たちも寝た方がいいのは確かだよ。明日の峠越えがあるんだし」

ヨシユアが言った。

「うー、ムシヤクシヤが納まらないけど仕方ないか……。あ、せめてコイツの顔にラクガキしてから寝るのはどう? 安眠間違いなしだと思っけど」

エステルが言った。スゲー低レベルですね……。やったとしても、明日の朝にボコボコにされますよ。

「止めなさいっつてば……」

ヨシユアが制した。

第3章 白き花のマドリガル(2) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

関所に泊まることにしたエステルたち。しかし、その夜中に突如、事件が起こる！

第3章 白き花のマドリガル(3)

深夜 ボース側関所の外

「待たせたな。そろそろ交替の時間だぞ」

兵士アツシャーが兵士カドルスに声をかけた。

「ああ、もうそんな時間かよ。しかし、誰も通らないのに見張りをする必要があるのかね。いつそ夜はゲートだけ閉めときゃいいんじゃないねえか？」

兵士カドルスが面倒そうに言った。

「決まりだからしょうがないさ。この前の空賊騒ぎといい、最近、なにかと物騒だからな……」

その時、兵士アツシャーが周りを見渡した。

「なんだ、どうした？」

兵士カドルスが尋ねた。

「なんか音がしないか？こっ、ザワザワと……」
しかし、何も無い。

「風の音じゃないのか？」

その時、峠側から唸り声がした。これは、獣の声……！

「お、狼の群れ!？」

「おいおい、マジかよ!？」

兵士たちが慌てた。

休憩所

「今、何か聞こえなかった!？」

「何かあったみたいだね」

エステルたちが話していた時、アガットが目を覚ました。起きるのが早いね。

「様子を見てくる。お前らはとつと寝とけ」
そう言つて、さっさと出て行つた。
「あ……ちょ、ちよつと待ちなさいよ！」
「念のため、僕たちも行つた方が良さそうだね」
「うん、モチのロンよ！」
エステルたちも現場に向かつた。

ボース側関所 外

「狼の群れ……！」
「た、大変！早く加勢しなくちゃ！」
エステルが加勢しようとした時、
「……コラ、やめとけ」
アガットが止めた。
「な、なんで止めるのよ！？あんた、それでも遊撃士なの！？」
エステルが怒つた。
「勘違いするんじゃないやねえ。関所を守るのは軍の仕事だ。ここの連中は錬度も高いからすぐに撃退できるだろうよ。余計なお節介つてモシなろうが」
アガットが言つた。
「そ、そんなこと……」
エステルは納得できないようだ。
「彼の言う通りだ！これは自分たちの仕事さ！」
「嬢ちゃんたちは中に入つてな！」
兵士たちが言つた。
「で、でも……」
その時、ルーアン側の警報が鳴つた。
「……ちいっ！」
アガットが向かつて行つた。

「ど、どうなってるの!？」

エステルが慌てた。

「エステル、反対側だ。ルーアン方面の出口でも何かが起こったらしい」

ヨシユアが言った。

「あ、あんですって!？」

エステルたちも急いで向かった。

ルーアン側関所 外

兵士が狼の群れに襲われていた。1人だったため、兵士は傷ついている。

狼の群れが兵士に襲おうとしたその時、アガットが突入して、重剣で狼を両断した。

「す、凄い……!」

「噂以上の破壊力だね」

エステルたちが感心した。

「ハッ、包围するつもりかよ。犬ツコロのくせにわりと知恵が働くじゃねえか」

狼の群れがアガットを包围した。

「……加勢するわよっ!」

エステルたちもアガットに加勢した。

「コラ、引っ込んでろ!」

アガットがエステルたちに言った。

「ふ〜んだ。あたしたちの勝手だもんね」

「邪魔にならないように手伝わせてもらいますから」
エステルたちが言った。

「チツ、勝手にしやがれ……。せいぜい、俺の《重剣》に巻き込まれないよう注意しとけよ！」
狼の群れが襲い掛かってきた！

「ふう……なんとかやつつけたわね」

「うん、数も多かったしなかなか手強い相手だった」
エステルたちが一息ついた。

「……………」

「フン……思ったよりもやるみたいだな。ま、あのオッサンの手解きを受けていたんだったら当然か」
アガットがエステルたちに言った。

「え」

エステルが驚いた。
「勘違いするなよ。あくまで新米としてはだ。まだまだ正遊撃士には遠いぜ」

アガットが言った。

「おい！そっちは大丈夫か！？」

ゼルスト隊長とセーロス副長が来た。

「ああ、問題ない。一匹残らず片付けたぞ。気絶していたヤツはどうだ？」

アガットが尋ねた。

「思ったよりも軽傷だ。お前がいてくれて助かったよ」

「さすが《重剣のアガット》だぜ」
ゼルスト隊長たちが言った。

「大したことはしてねえよ。それに、このガキどもがそこそこ働いてくれたからな」

アガットが言った。

「そうなのか……嬢ちゃんたち、ありがとうな」

セーロス副長が礼を言った。

「う、うん……」

エステルがぎこちなく返事をした。

「自分たちは、念のため周辺をパトロールするつもりだ。君たちは中に入ってゆつくりと休んでくれ」

ゼルスト隊長が言った。

「ああ、気をつけるよ」

アガットがそう言うと、兵士たちはパトロールを始めた。

「さてと、寝直すとするか。もう危険は去ったはずだ。お前らも大人しく寝ておきな」

アガットはさっさと関所に入っていった。

「ど、どうなってんの？あの口の悪いヤツがあたしたちを誉めるなんて」

エステルが意外そうに言った。

「少しは、僕たちの実力を認めてくれたのかもしれないね。思ったよりも真っ直ぐな人なんじゃないかな？」

ヨシユアが言った。

「うーん……とてもそうは思えないんだけど。……まあ、たしかにデカイ口を叩くだけはあるわね」

エステルが言った。少しは納得したか？

そして、エステルたちも関所に入って寝直した。

「エステル。……エステルってば」

ヨシユアがエステルを起こしている。

「ふわ〜っ……もう、なんなのよ〜……」

エステルが目を開ける。

「あれ、ヨシユア……。もうギルドに行く時間だっけ？」
完全に寝ぼけている。

「なに言ってるんだか。ここはクローネ峠の関所だよ」
ヨシユアが呆れている。

「そうだった……夜中に魔獣騒ぎがあつて……」

エステルが体を起こして思い出している。

「あれ……」

エステルがアガットの姿がないことに気付いた。

「あの赤毛男はどうしたの？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「朝早くに出発したみたいだ。急ぎの仕事があつたらしいね」

ヨシユアが言った。

「そうなんだ……。せっかく昨日は協力して魔獣を撃退したのにさ……。挨拶もしないで行くなんて、やっぱり失礼なヤツよね」

エステルが溜息をつく。

「まあまあ。それよりも僕たちも支度しよう。昼過ぎには峠を越えたいからね」

ヨシユアが言った。

「ん、わかった。いよいよルーアン地方ね！」

「兵士さん、おはよう！」

「おはようございます」

エステルたちがセーロス副長に挨拶した。

「やあ、お早うさん。昨日は本当にご苦労さんだったな」

セーロス副長が労をねぎらった。

「えへへ、それほどでも。兵士さんたちの方こそあの後、パトロールに出て危険なことはなかったの？」

エステルが尋ねた。

「ああ。何の異常も無かつたぞ。しかし……妙なんだよな」

セーロス副長が顎に手をあてた。

「妙つて、何が？」

「街道や関所にある照明に魔獣を遠ざける効果があるのは知っているだろう？ 関所に近づく魔獣がいたとしても、普段は多くて2、3匹程度なんだ。昨日みたいに大量に群がってくるのは初めてだぜ」

セーロス副長が説明した。

「それは確かに奇妙ですね……」

ヨシユアが真剣な顔つきになった。

「ま、帝国軍にくらべりゃ、魔獣なんて可愛いもんだけどな。拠点防衛の良い演習になったと思えばいいか」

えらい前向きな考えですな。

「そ、そういう問題なの？」

エステルがつっこんだ。

「俺たちにとつちゃあ、そっちの方が気がかりだからな。魔獣どもが何を考えてるのは嬢ちゃんたち遊撃士に任せるさ」

「それはそうと……そろそろ出発するんだろう？ 通行手続きをしちまうかい？」

セーロス副長が尋ねた。

「はい、お願いします」

エステルたちはルーアン地方に入る手続きをした。

「……これでよしと。それじゃあ……」

セーロス副長は開閉装置を操作した。

「青い海と白い花に彩られたルーアン地方によっこそー！」

セーロス副長が元気よく言った。

「そうそう、嬢ちゃんたちはルーアン市に向かうんだろ？」

セーロス副長が思い出したように言った。

「うん、そのつもりだけど……」

エステルが振り向いた。

「昨日の件についてはギルドの支部に報告しておくよ。軍から謝礼金が出るはずさ」

セーロス副長が言った。

「えっ、いいの？」

エステルが驚いた。

「まあ、アガットのやつと山分けになるとは思うがな。それじゃあ、正遊撃士目指して頑張れよ」

セーロス副長が言った。

「うん！」

「色々お世話になりました」

そうして、エステルたちはルーアン地方に入った。

第3章 白き花のマドリガル(3) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよルーアン地方に入ったエステルたち。この先の話にご期待ください。

第3章 白き花のマドリガル(4) (前書き)

今回は、知る人ぞ知る制服の少女初登場です。

第3章 白き花のマドリガル(4)

マノリア間道

エステルたちはクローネ山道を抜けて、マノリア間道に入った。

「わあっ……！」

エステルはいきなり感動した。

「エステル？」

ヨシユアがエステルの方を向いた。

そして、エステルが走っていった。

「見て見て、ヨシユア！海よ、海！」

エステルは海を見て感動したようだ。

「はいはい。言われなくても判ってるよ」

ヨシユアはやれやれといった様子だ。

「青くてキラキラしてメチャメチャ広いわね。それに潮騒の音と

一面に漂う潮の香り……。うーん、これぞ海って感じよね」

エステルがロマンを感じている。

「エステル、海を見るのは初めて？」

ヨシユアが尋ねた。

「昔、父さんと定期船に乗った時、ちらっと見た記憶があるんだけど……。こんなに間近で見るのはひよっとしたら初めてかもしれない」

エステルが言った。

「そっか……。僕も海は久しぶりだな……。定期船を使わずに歩いてきた甲斐があったね」

ヨシユアが微笑んだ。何か引つかかる言い方……。

「うんうん。何だか達成感があるよね！」

エステルたちは再び歩き始めた。

マノリア村

「はっつ。やっと人里に着いたわね。なんだか、白い花があちこちに咲いてるけど……」

エステルが一息ついてあたりを見渡した。

「ここって何ていう村だっけ？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「マノリア（Magnorlia）だよ。街道沿いにある宿場村さ。あの白い花は、木蓮の一種だね」

ヨシユアが説明した。

「ふーん、キレイよね。それに潮の香りに混じってかすかに甘い香りがするよな。うーん……何だかお腹が空いてきちゃった」

エステルが言った。どうしてそうなるんだか……。

「あはは、花の香りで食欲を刺激されるあたりがエステルらしいって言うか……。まさに花よりダンゴだね」

ヨシユアがエステルに言った。言い得て妙なり。

「だって、育ち盛りなんだもん。ちようどお昼だし、休憩がてらにランチにしない？」

エステルが言った。

「いいけど……何か手持ちの食料はあったかな？」

ヨシユアが荷物を探った。

「あ、ちよつとタンマ。どうせだったら落ち着ける場所で、できたの料理を頼まない？せつかくルーアン地方に来たんだし」

エステルがヨシユアに提案した。

「たしかにそうだね。それじゃあ、宿酒場を探そうか」

エステルたちは宿酒場を探した。

宿酒場 白の木蓮亭

「ようこそ、《白の木蓮亭》へ。見かけない顔だけど、マノリアには観光で来たのかい？」

受付のレックスが尋ねた。

「ううん。ルーアン市に向かう途中なの」

「ポーヌ地方からクローネ峠を越えて来たんです」

エステルたちが答えた。

「クローネ峠を越えた！？は、あんな場所を通る人間が今時いるとは思わなかったな。ひよっとして、山歩きが趣味だとか？」

レックスが聞いた。

「うーん……。そういう訳じゃないんだけど。ところで、歩きっぱなしですつごくお腹が減ってるのよね」

「何かお勧めはありますか？」

エステルたちが尋ねた。

「そうだな……。今なら弁当がお勧めだけど」

レックスが言った。

「お弁当？」

エステルが聞き返した。

「町外れにある風車の前が景色のいい展望台になっていてね。昼食時は、うちで弁当を買ってそこで食べるお客さんが多いんだ」

レックスが説明した。それは贅沢ですね。

「あ、それってナイスかも 聞いてるだけで美味しそうな感じがするわ」

「それじゃ、そうしようか。どんな種類の弁当があるんですか」

エステルたちは賛成した。

「スモークハムのサンドイッチと魚介類のパエリアの2種類だよ。どちらもウチのお勧めさ」

レックスが言った。

「うーん、あたしはサンドイッチにしようかな」

エステルはサンドイッチを選択した。

「それじゃ、僕はパエリアを」

ヨシユアはもう一方のパエリアを選んだ。

「まいどあり。しめて120ミラだよ」

エステルたちはお金を払い、特製ランチボックスを手に入れた。

「ついでにサービスでハーブティーもつけておいたよ。これもウチの名物でね」

気前のいい人だな。

「わ、ありがとう？」

「それじゃ、展望台に行こうか？」

「うん！」

エステルたちは展望台へと向かった。

「ここはさっき調べたばかりね。雑貨屋さんにも居なかったし……」

「困ったわ……。どこに行っちゃったのかしら」

制服の少女が何かを探しているようだ。

「ヨシユア、ほらほら早く！」

「ちよつとエステル。前を向いて歩かないと……」

エステルはいきなり前を向いたため、制服の少女とぶつかった。

「あつっ……」

「きやつ……」

2人とも地面に手をついた。

「あいたた……。ご、ごめんね、大丈夫!? あたしが前を見ていなかったから……」

エステルが制服の少女を起こした。

「あ、いえ、大丈夫です。すみません、私の方こそそそ見をしてしまつて……」

制服の少女が謝った。

「あ、そうなんだ。じゃあ、おあいこつて事で」

エステルが笑った。

「まったく……。エステル、何やってるのさ」

「……………」
ヨシユアが制服の少女を見るなり、いきなり黙った。
「?????」

制服の少女が不思議そうな顔でヨシユアを見ている。

「ヨシユア、どうしたの?」

エステルがヨシユアを見た。

「い、いや……。ごめんね。連れが迷惑かけちゃって。どこにもケガはないかな?」

ヨシユアが制服の少女に言った。

「はい、大丈夫です。私も人を捜して……。それでよそ見をしてしまつて」

制服の少女が申し訳なさそうに言った。

「え、誰を捜してるの?」

エステルが尋ねた。

「帽子をかぶつた10歳くらいの男なんですけど……。どこかで見かけませんでした?」

制服の少女が風貌を言った。

「帽子をかぶつた男の子……。ヨシユア、見かけたりした?」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「いや、ちよつと見覚えがないな」

ヨシユアが言った。

「そうですか。どこに行つちやつたのかしら……。私、これで失礼します。どうもお手数をおかけしました」

制服の少女は去つて行つた。

ヨシユアはその少女を見続けている。

「ヨシユア? ねえ、ヨシユアってば」

エステルは呆けているヨシユアの肩をゆすつた。

「え、ああ……。どうしたの」

ヨシユアが我に返つた。

「どーしたもこーしたも」

エステルは呆れている。

「あ、もしかして……。なるほど、そーゆーことか？」

突然、エステルが1人相槌を打った。

「……なんか、激しく勘違いしてない？」

ヨシユアが意を得たようだ。

「照れない、照れない 一目会ったその時から恋の花咲くこともあるってね」

それは早とちりというものだろう。

「ち・が・い・ま・す。ただ、昔の知り合いにほんの少し似ていただけだよ。それで、ちよつと驚いただけさ」

昔の知り合い？

「へえ、ほう、ふーん。昔の知り合いに似ているね。口説き文句としては30点かな？」

エステルが勝手に採点した。なんやねん、それは。

「ところでエステル。あの子の制服、見覚えない？」

ヨシユアが怒った口調で言った。

「そういえば……。ジヨゼットが変装に使ってた何とか学園ってところの制服!？」

何とか学園って……。物覚えが悪いなあ。

「ジェニス王立学園だよ。このルーアン地方にあるらしいから見かけても不思議じゃないけどね」

ヨシユアが説明した。

「ふーん、今のが本物なんだ。なんか清楚で礼儀正しくて頭も良さそうだったわね。生意気ボクっ子とは大違いだわ」

そのセリフ、確か前にも言ってたよね……。

「何言ってるんだか。ジヨゼットと最初に会った時、完全に騙されていたくせに」

ヨシユアがきつくあたった。

「うっ……」

エステルが言い返せずに黙った。

「そういや、あの時も僕の事をからかっていたよね。ま、それでもんまと騙されたら世話ないんだけど」

ヨシユア君、恐いですよ……。エステルにからかわれたこと、かなり怒っているね。

「うつつ……」

全く言い返せないエステル。

「人をからかう暇があったら、もうちょっと観察力を養った方がいいんじゃないの？」

ダメ押しの一言！

「わかった、わかりました！もう、からかったりしません！」

エステルがヨシユアに謝った。

「分かればよろしい」

ヨシユアがエステルを許した。

「さてと、それじゃ展望台でお昼ご飯にしようか？」

「ふあゝい」

急に元気がなくなったエステル……。

第3章 白き花のマドリガル（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

今回はエステルとヨシユアの昼食シーンに焦点をあてています。

第3章 白き花のマドリガル(5)

風車小屋前 展望台

「うわっつ、絶景ねえ！」

「うん、海が一望に出来るね」

そこは、青い海に囲まれているかのような場所だった。

「こんな場所で食事なんて、すっごく贅沢な気分じゃない？」

「確かに、気持ち良さそうだ。さっそくランチをいただこうか？」

「うん あゝ、お腹空いちやった！」

いきなり元気になったエステル。

エステルたちはベンチに腰掛けてランチボックスを開いた。

「あたしのはスモークハムのサンドイッチね。うーん、香ばしい匂いがする」

「僕のは……魚介類のパエリアだね。サフランのいい香りがするな」
それぞれ弁当を分けた。

「それじゃ、いったきまーす」

「いただきます」

エステルたちが手を合わせた。

「それじゃ、まずは一口と……」

エステルがサンドイッチを口に入れた。

「もぐもぐもぐ……ごっくん。わ、香ばしくて美味しい！レタスもシャキシャキしてる」

エステルが驚いた。

「パエリアも美味しいよ。サフランの香りが利いてて。バーテンさん、いい腕してるな」

ヨシユアも満足そうだ。

「あ、ちよつと一口ちようだい。あたし、パエリアってちゃんと食べたことないのよね」

エステルがヨシユアのパエリアに興味を示した。

「いいけど……ランチボックスを交換しようか？」

ヨシユアが言った。

「うーん……手が塞がってるから面倒だし。ヨシユアが食べさせてよ」

エステルがさらりと言った。

「食べさせてって……」

ヨシユアがひいた。

「もちろん、あーん？」

エステルが口を開いた。

「それは……ちよつと恥ずかしいんだけど」

ヨシユアがためらった。

「いいじゃない。誰も見てないんだし。子供っぽいことしても笑われる心配はないってば」

そういう問題か？

「……そういう意味で恥ずかしいんじゃないけど。まったく仕方ないな……」

ヨシユアはパエリアをすくってエステルに食べさせてあげた。

畜生、めっちゃ羨ましいぞ！

「むしゃむしゃ……ごつくん。うーん、デリッシャス？これぞ海岸地方の代表料理よね。なんていうか、独特の香りが食欲をそそっちゃうというか……」

エステルが言った。

「はいはい、よかったね」

ヨシユアはどうでも良さそうだ。

「あ、なんか投げやり。えーい、これでも喰らえッ！」

エステルはヨシユアの口にサンドイッチの残りを突っ込んだ！

「むぐっ……。モグモグモグ……。コクン」

「……いや、美味しいんだけどいきなり口に突っ込まないでよ！畜生、めっちゃ羨ましいぞ！（2度目……）」

「ふっふっふっ、参ったか」

何、得意気な顔してんだか……。

「は、美味しかったあ」

「サービスでもらったハーブティーも絶品だったね」

エステルたちは満足そうに言った。

「うん、身体が温まって軽くなってくるっていうか……。潮風も気持ちいいし……。なんだか眠くなってきちゃった」

エステルが眠そうに口を押さえた。

「食べた直後に寝ると牛になるよって言いたいところだけど……。食後の昼寝もたまにはいいかもしれぬね」

ヨシユアが言った。

「うんうん……」

エステルが頷いたその時、

「……あれ？」

大きな白い鳥が飛んでいった。

「ねえねえ、今の鳥！カモメにしては大きくなかった？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「そうだね。翼の形も違うち、嘴も鋭かった。タカかワシなんじゃないかな？」

ヨシユアが言った。

「白いタカ……。珍しいものを見ちゃったね。うん、何か良いことが起こりそうな気がしてきたわ」

エステルが楽しそうに言った。そんなものか？

「はは、そうだといいいね。ところで……。眠気は無くなったんじゃない？」

ヨシユアがエステルを見て言った。

「あ……。うん、残念ながら」

残念か？

「なら、そろそろ出発しようか。今日中にルーアン支部で所属変更

の手続きがしたいしね」

「それもそっか……。うん、わかった。名残惜しいけど出発しましよ」

エステルは展望台を後にした。

第3章 白き花のマドリガル(5) (後書き)

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちは昼食を終えてルーアン市に向かおうとするが、その時エステルに…！

>追記<

最近、作者が多忙のため、更新が遅れる可能性があります。更新を待っている読者様にはご迷惑をおかけします。こちらとしても最善を尽くしますので、どうかご了承ください。

第3章 白き花のマドリガル(6) (前書き)

昨日の分までお楽しみください。

第3章 白き花のマドリガル(6)

「あつっ……」

「わわわっ!」

エステルは突然走ってきた少年とぶつかった。

「な、なんだか今日はやたらとぶつかる日ねえ」

エステルが地面に手をつきながら言った。

「ゴメンゴメン。ちよっと人捜しをしてさ。あれ、姉ちゃんたちこの辺で見かけないカオじゃん?」

帽子の少年が言った。

「そりゃそうよ。この町の人間じゃないもん。あれ、それよりキミって……」

エステルが帽子の男の子のことを思い出したようだ。

「……な、なんだよ?」

「さっき制服姿のお姉ちゃんが帽子をかぶった男の子を探しているって言ってたけど……。キミ、なんか心当たりある?」

エステルが帽子の少年に言った。

「あー、そうそう。オイラが捜してる人と一緒だよ。どこで会ったの?」

帽子の少年が尋ねた。

「宿酒場の近くだけど……。ちよっと前のことだから、どこに行っただか判らないわよ?あたしたちも一緒に捜してあげよっか?」

エステルのお節介。

「い、いいよ。どこに行っただか見当つくしき。そんじゃ、バイバイ!」

帽子の少年はさっさと行ってしまった。

「元気な子ね」。ロレントのルックに少し感じが似ているようなら……。あの子たち、今頃何してるのかな」

エステルが想いを馳せていると、ヨシユアは黙って何か考え込んで

いた。

「ヨシユア、どうしたの？」

エステルがヨシユアに尋ねた。

「うん……。気のせいならいいんだけど。エステル、なにか失くしてない？」

「失くす？何を？」

「身に付けている物だよ。財布とかアクセサリとか」

「なによ、やぶから棒に？財布は……ある。髪飾りも……OK。遊撃士の紋章は……」

エステルが突然手を止めた。

「……………」

肩を落としたエステル。

「やっぱりね……」

ヨシユアが言った。

「ええええ！？一体どうなってるの！？峠越えをする時に落としちゃったとかっ！？」

途端に慌て始めたエステル。焦ったところで出てくるわけがない。

「落ち着いて、エステル。ランチを食べていた時にはちゃんと左胸に付けていたよ。失くしたとすれば……この場所では考えられない」

ヨシユアが言った。

「で、でも……どこにも落ちてないけど」

エステルが周りを見たが、どこにもない。

「ま、まさか……」

エステルが思い当たったようだ。

「たぶん、さっきの子だろうね。不自然なぶつかり方をしたから、もしかしたらとは思ったけど……」

子供にすられたエステル……。注意力無いなあ。

「あ、あんですって！？ど、どうして遊撃士の紋章なんかを！？」
エステルが怒り始めた。

「確かに、子供が持つてても何の意味もないものだからね。イタズラの可能性が高そうだ」

「いたって冷静なヨシユア。」

「むむむむ……イタズラ小僧、許すまじ！絶対に捕まえてお仕置きしてやるんだからっ！」

一方、怒り心頭のエステル。

「まあ、お手柔らかに。とりあえず、あの子がどこに行ったのか調べてみよう」

そうして、エステルたちのスリ実行犯捜索が始まった……。

「あら、どうしたの？」

エステルは花屋のサテイに尋ねた。

「ちよつと聞きたいんだけど……。この辺で、帽子をかぶった男の子を見かけたことないかな？」

「帽子をかぶった男の子……。ああ、王立学園の生徒さんの連れがそうだったかしら」

サテイが答えた。

「うん、まさにその子よ！」

「どこの子かご存知ありませんか？」

エステルたちがさらに尋ねた。

「この町の子供じゃないわね。孤児院の子だと思っけど……」
サテイが考えた。

「孤児院……？」

エステルが首を傾げた

「『マーシア孤児院』と言ってね。テレサ院長っていう女の方が運営してらっしゃる福祉施設よ。東のメーヴェ海道途中にあるわ」
サテイが説明した。

「あの子、孤児院に住んでるんだ……」
複雑な気持ちになったエステル。

「さっそく訪ねてみようか」
エステルたちは『マーシア孤児院』に向かった。

メーヴェ海道

エステルたちは看板を見つけた。

「……………」
エステルが看板の前に立ち尽くしている

「どうやらこの先にあるみたいだね」

ヨシユアが先を見て言った。

「うーん……………」

「……………」
エステルがうなづけている。何か悩んでいるようだ。

「どうしたの、エステル？」

ヨシユアがエステルに尋ねた。

「よし、決めた！境遇うんぬんは関係ない！人の物を取るのはいいこと！見つけたらきっちりお置きしてやるんだから！」

エステルが宣言した。決断遅いな、おい。

「はは、悩んでそう結論するのがエステルらしいってどうか……………。
とりあえず、お手柔らかにね」

ヨシユアが呆れた。

マーシア孤児院

エステルが孤児院に入ると、3人の子供たちがいた。

「クラムつたらどこに行つてたのよ、もう！クローゼお姉ちゃん、
すごく心配してたんだからね！」

子供の1人、マリイが帽子の少年に言った。

「へへ、まあいいじゃんか。おかげでスツゲエものが手に入ったんだからさ」

帽子の少年はクラムというそうだ。

「なんなの、クラムちゃん？」

もう1人の子供、ダニエルが尋ねた。

「にひひ、見て驚くなよ。ノンキそうなお姉ちゃんから、まんまと拝借したんだけど……」

その時、

「……だ〜れがノンキですって？」

「へっ……」

クラムが振り返ると、エステルたちが入ってきていた。

「ゲツ、どうしてここに……！」

クラムがあせった。

「ふふん。遊撃士ブレイサーをなめないでよね。あんたみたいな悪ガキがここに居るのかなんてす〜くに判っちゃうんだから！」

エステルが得意気に言った。

「く、くそー……。捕まっつてたまるかってんだ！」

クラムが逃げ出した。

「こらっ、待ちなさい！」

そう言っつて追いかけるエステル。

「あのう、お兄さん……。どうなっっちゃてるんですか？」

「クラムちゃん、また何かやったの〜？」

マリイとダニエルが不安げにヨシユアに尋ねた。

「ええつと……騒がしくしちゃってゴメンね」

ヨシユアが肩身狭そうに言った。

その時、エステルがクラムを捕まえたそうだ。

「ちくしょ〜！離せっ、離せつてば〜っ！児童ギャクタイで訴えるぞっ！」

クラムが暴れている。

「な〜にしゃらくさい事言っつてくれちゃってるかなあ。あたしの紋

章、さつさと返しなさいっての!」

エステルがクラムの首を掴みながら言った。

「オイラが取ったっていう証拠でもあんのかよ!」

クラムが抵抗しながら言った。

「証拠はないけど……。こうして調べれば判るわよ!」

エステルはクラムの脇腹をくすぐった。

「ひやはは……。!や、やめろよ!くすぐったいだろ!エッチ!乱暴オンナ!」

クラムはくすぐったそうだった。

「ほれほれ、抵抗はやめて出すもの出しなさいっての……」

その時、娘の声があった。

「ジーク!」

そして、エステルの目の前を鳥が通り過ぎた。

「わわっ!?!なんなの今の!?!」

声の主は、制服の少女だった。鳥が制服の少女の肩の上にとまる。

「その子から離れて下さい!それ以上、乱暴をするなら私が相手になりま……」

「……………あら?」

制服の少女が目を丸くした。

「あ、さっきの……」

エステルも同じだ。

「マノリアでお会いした……」

「ピユイ?」

その鳥はシロハヤブサだった。

「助けて、クローゼお姉ちゃん!オイラ、何もしてないのにこの姉ちゃんがいじめるんだ!」

クラムがエステルから離れた。

「な、なにが何もしてないよ!あたしの紋章を取ったくせに!」

「へん、だったら証拠を見せてみるよ!」

クラムは往生際が悪い。

エステルは再びクラムを捕まえようとした。

「あ、くすぐるのは無しだかな」

「うぬぬぬ……」

エステルは悔しそうにしている。

「やあ、また会ったね」

ヨシユアが制服の少女、クローゼに言った。

「あ、その節はどうも……。すみません、私てつきり強盗が入ったのかと思って……。あの、それでどういった事情なんでしょう？」

クローゼが困った顔で尋ねた。

「クローゼお姉ちゃん。そんなの決まってるわよ。どーせ、クラムがまた悪さでもしたんでしょ」

マリイが言った。

「ねー、おねえちゃん。もうアップルパイできた？」

ダニエルがクローゼに尋ねた。今は関係ないだろう……。

「あ、もうちよっと待っててね。焼き上がるまで時間がかかるの。クローゼが微笑みながら言った。

「この悪ガキ！」

「乱暴オンナ！」

その横ではエステルとクラムが言い争っていた。

「まったく、クラムってばいつまで経ってもガキなんだから」

「アップルパイ、まだかな」

各自、他人を気にせず自由気ままに話している。

「……なんだかややこしい事態になってるね」

「あ、あはは……私もそんな気がします……」

ヨシユアとクローゼが苦笑した。

「ピュイ」

シロハヤブサが鳴いた。

「あらあら。何ですか、この騒ぎは……」

その時、孤児院の中から女性が現れた。

「テレサ先生！」

この女性こそが孤児院運営者のテレサ院長だった。

「詳しい事情は判りませんが……。どうやら、またクラムが何かしでかしたみたいですね」

テレサ院長が困った様子で言った。

「し、失礼だなあ。オイラ、何もやってないよ。この乱暴な姉ちゃんが言いがかりをつけてきたんだ」

「だ、誰が乱暴な姉ちゃんよ！」

さつきと何も変わらない2人。

「あらあら、困りましたね。クラム……。本当にやっていないのですか？」

テレサ院長がクラムに近づき言った。

「うん、あたりまえじゃん！」

この期に及んでまだそう言えるのがすごい。

「女神様エイトスにも誓えますか？」

「ち、誓えるよっ！」

「そう……。さつき、バッジみたいな物が子供部屋に落ちていたけど……。あなたの物じゃありませんね？」

「え、だってオイラ、ズボンのポケットに入れて……」

クラムがズボンのポケットに手を入れた。

「はっ」

カマをかけられたようだ。

「や、やっぱり〜！」

エステルが声を出した。

「まあ……」

「見事な誘導ですね……」

クローゼとヨシユアが感心した。

「クラム……。もう言い逃れはできませんよ。取ってしまった物をそちらの方にお返ししなさい」

テレサ院長がクラムに言った。

「うっうっうっう……。わかったよ！返せばいいんだろ、返せば！」

クラムは悔しそうに紋章をエステルに放り投げた。

「わつと……」

「フンだ、あばよっ！」

クラムはどこかに行ってしまった。

「あつ、クラム君！」

「大丈夫、頭が冷えたらちゃんとして戻ってくるでしょう」

テレサ院長がクローゼに言った。

「それより……ここで立ち話をするのも何ですね。詳しい話は、お茶を飲みながら伺わせていただけないかしら？」

テレサ院長がエステルたちを孤児院に招き入れた。

エステルたちは、お茶とパイをご馳走になりながら自己紹介をして先ほどの出来事について説明した。

「そうですね……そんな事を。あの子も、悪気はないのですがイタズラ好きに加えて無鉄砲で……。本当にすみませんでした。保護者としてお詫び申し上げます」

話を聞いたテレサ院長が頭を下げた。

「あは、もういいですよ。紋章もちゃんと戻ってきたし。美味しいハーブティーとアップルパイでチャラってことで」

エステルが笑いながら言った。

「ふふ、ありがとう。エステルさん、ヨシユアさん」

テレサ院長が微笑んだ。

「でも、本当に美味しいお茶ですね。町の酒場で淹れてもらった物と同じような味がしますけど……。ひよっとして表で栽培されているものですか？」

ヨシユアがテレサ院長に尋ねた。

「ええ、ハーブの栽培は私の趣味のようなものでしてね。それを、宿酒場のご主人がご好意で仕入れて下さるんです」

テレサ院長が説明した。

「そうなんだ……。さっき食べたアップルパイもすっごく美味しかったんですけど」

エステルが言った。

「ふふ、あれは私ではなくこの子が作ったものなんですよ」

テレサ院長がクローゼを見た。

「え、クローゼさんが？」

エステルが驚いてクローゼを見た。

「恥ずかしながら……。あの先ほどは本当に失礼なことをしました。私、とんでもない勘違いをしてしまって……」

クローゼがすまなさそうに言った。

「気にしなくていいよ。あたしもあの子を捕まえた時にちょっと荒っぽくしちゃったし。でも、さすがにあの白いタカには驚いたけどね」

「あ、ジークのことですね。あの子、シロハヤブサなんです」

「シロハヤブサ……。たしかリベールの国鳥だったね。よく訓練されているみたいけど、君のペットなの？」

ヨシユアが尋ねた。

「いえ、私が飼っているわけじゃありません。仲のいい友達なんです」

「は、すごい友達もいたもんね。そういえば、クローゼさんってジェニス王立学園の生徒よね？なのに、ここに住んでるの？」

エステルが感心して尋ねた。

「いえ……。私は学園の寮に住んでいます。あまり遠くないので、休日などについて遊びに来てしまっんです。ご迷惑かと思うんですけど……」

クローゼは少しばかりすまなさそうに言った。

「あらあら。迷惑だなんてとんでもない。あなたが来てくれるおかげで私も、色々と助かっていますよ。子供たちも喜んでますしね」
テレサ院長が言った。

「テレサ先生……」

「でも、こちらに構いすぎて学園生活を疎かにしないようにね。まあ、あなたに限ってそんな心配はないでしょうけど」

「はい、肝に銘じておきます」

クローゼが頷いた。

「うーん、学園生活か……。そういうのも一度は経験してみたかったわね」

「確かに、教会の日曜学校は週に一回しかなかったからね。でも、王立学園の入学試験はかなり難しいって話だけど？」

「あう、あたしには逆立ちしたって無理か……」

エステルは肩を落とした。

「ふふ、そんな事ないです。遊撃士になる方がはるかに難しいと思いますよ。しかも、その若さで……。私の方こそ懂れてしまいます」
クローゼが言った。

「えへへ……。何だかくすぐったいわね。遊撃士とは言ってもまだ見習いみたいなもんだし」

「一人前の遊撃士を目指して王国各地を回っている最中なんです。

しばらく、このルーアン地方で活動することになると思います」

エステルたちが言った。

「だったら、何かの機会にお世話になるかもしれないね。あの子たちも喜ぶでしょうし、是非、また来て下さいな。お菓子とお茶くらいはご馳走させてもらいますよ」

そうして、エステルたちはお暇することにした。

「うーん、テレサ院長ってあったかい感じのする人よね」

「そうだね……。お母さんって感じの人かな」

「ふふ、子供たちにとっては本当のお母さんと同じですから」

その時、シロハヤブサのジークが来た。

「ジーク。待っていてくれたの？」

「ピュイ」

「うん、そうなの。悪い人たちじゃなかったの。エステルさんとヨシユアさんっていつてね。あなたも覚えていてくれる？」

「ピュイー！」

「ふふ、いい子ね」

クローゼはジークと会話しているようだ。

「す、すごい。その子と喋れるの？」

「さすがに喋れませんけど、何が言いたいのかは判りません。お互いの気持ちを通じ合ってるっていうか……」

「ほえ……」

エステルはただただ感心するばかりだ。

「相思相愛ってわけだね」

「はい」

クローゼが頷いた。

「こんにちは、ジーク。あたしエステル、よろしくね？」

「ピュイー？」

「ピュイー　　ッ」

ジークは飛び立って行った。

「ああ……。しくしく、フラれちゃった」

「はは、残念だったね」

「クスクス。そういえば、エステルさんたちはルーアン市に行かれるんですね？」

「うん、ギルドの支部で転属手続きをするつもりなの。そうしないとお仕事できないし」

エステルが頷いた。

「ルーアンのギルドでしたら私、何回か行った事があります。よかったら案内しましょうか？」

「わ、いいの？すぐく助かっちゃうけど」

エステルが喜んだ。

「君の方は大丈夫？すぐに学園に戻らなくて」

ヨシユアが尋ねた。

「はい。今日一日は外出許可を貰っていますから。夜までに戻れば大丈夫です」

「それじゃ決まりね ルーアンに向けてレッツ・ゴー！」

第3章 白き花のマドリガル(6) (後書き)

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いろいろあったが何はともあれ、いよいよルーアン市に入ることになったエステルたち。そこには何があるのか!?

第3章 白き花のマドリガル(7)

メーヴェ海道

マーシア孤児院を出たところで草むらから少年の声がした。

「…………クローゼ姉ちゃん」

クラムが出てきた。

「クラム君？」

「あ、イタズラ小僧！」

クローゼとエステルが声を上げた。

「もう…………こんな所で遊んだらダメよ。魔獣に襲われたらどうするの？」

クローゼがクラムをたしなめた。

「オイラ、クローゼ姉ちゃんにどうしても謝りたくってさ…………。何もしてないなんて嘘ついたりしてごめんなさい」

「ふふ…………怒ってないから安心して。それに、本当に謝りたい人は他にもいるんだよね？」

「ギクツ…………。そ、そんなことないもんね！」

凶星だったようだ。

「????？」

当のエステルは何も分かっていないようだ。

「あなたが良い子なのは私、よく知ってるから。ね…………ちゃんと謝ろう？」

クローゼがクラムに言った。

「……………」

「クローゼ姉ちゃんの頼みなら仕方ないや…………。悪かったよ。遊撃士の姉ちゃん。ゴメン…………なさい」

クラムがエステルに近寄り、謝った。

「あ、あはは…………。あたしに謝りに来たんだ。素直なところ、あるじゃない？」

「か、勘違いすんなよ！？クローゼ姉ちゃんに頼まれたからだってば！大体なあ、遊撃士のくせに注意力が足りないんじゃないの？オイラみたいな子供に簡単に取られてどうするのさ？」

「うぐっ……」

エステルは反論できない。

「バイバイ！せいぜい修行しろよな！」

クラムは孤児院に戻っていった。

「や、やっぱり可愛くない！」

「まあまあ。ただの照れ隠しだってば。それに、あの子の言う通り注意不足だったのは事実だしね。修行が必要なのは確かだと思っよ？」

ヨシユアの追い討ち。

「うっう……。ヨシユアはもつと可愛くない！」

2人にもダメ出しを食らったエステルはうなだれた。

「クスクス……。エステルさんとヨシユアさんってとっても仲がいいんですね。まるで本当の姉弟みたいです」

「そ、そうかな？」

エステルは照れた。

「面倒を見る割合からいうと姉弟っていうより兄妹だけどね」

「む、失礼しちゃうわね」

エステルはむくれた。確かにそうだな。

「ふふ、うらやましいです。私は一人っ子でしたから。だから、あそこの雰囲気は憧れてしまっんですけど……」

クローゼは下を向きながら、小さく言った。

「え？」

「あ、いえ……。それではそろそろ出発しましょうか。このまま、海岸沿いにまっすぐ行けばルーアンです」

クローゼは何事もなかったかのように言った。

「オッケー。それじゃあ、行きましょ」

海港都市ルーアン 北街区

「うわ……。ここがルーアンか。なんていうか、キレイな街ね」

「海の青、建物の白……。眩しいくらいのコントラスト。まさに海港都市って感じだね」

エステルとヨシユアは初めて見る海港都市に見惚れた。

「ふふ、色々と見所の多い街なんです。すぐ近くに、灯台のある海沿いの小公園もありますし。街の裏手にある教会堂も面白い形をしているんですよ。でも、やっぱり1番の見所は《ラングランド大橋》かしら」

クローゼが見所を挙げていった。

「《ラングランド大橋》？」

エステルが尋ねた。

「こちらと、川向こうの南街区を結ぶ大きな橋です。巻き上げ装置を使った跳ね橋になっているんですよ」

「跳ね橋か……。それはちよつと面白そうだな」

「あと、遊撃士協会の支部は表通りの真ん中にあります。ちよつと大橋の手前ですね」

「オツケー。まずはそつちに寄ってみましょ」

エステルたちは遊撃士協会ルーアン支部に行った。

遊撃士協会ルーアン支部

「こんにちは、つて。あれ、受付の人は？」

受付には誰もいなかった。むなしく響いた挨拶だった。

「おや、お嬢ちゃんたち。なにか依頼でもあるのかい？」
掲示板を見ていた女性が言った。

「あ……」

「受付のジャンは2階で客と打ち合わせ中なんだ。困ったことがあるならあたしが代わりに聞くけど？」

「えっと……。客じゃないんだけど」

エステルが言った。女性はエステルの胸元にあつた遊撃士の紋章に気付いた。

「ん、その紋章……。なんだ、同業者じゃないか。あたしの名はカルナ。このルーアン支部に所属してる。見かけない顔だけど新人かい？」

女性はカルナと名乗った。

「うん。あたしは準遊撃士のエステル」

「同じく準遊撃士のヨシユアです。よろしく願いします」

エステルとヨシユアが自己紹介した。

「エステルとヨシユア……」

カルナが顔に手を当てた。

「そうか、あんたたちがロレントから来た新人だね？ボースじゃ、シエラザードと大活躍したそうじゃないか」

カルナが思い出して言った。結構、情報が流れているね。

「あ、あはは……。それほどでもないけど」

「僕たちが来ることをご存じだったんですか？」

「ああ、ジャンのやつが有望な新人が来るって言ってたからね。しかし、転属手続きをするなら彼の用事が終わらないとダメだねえ。

しばらく、街の見物でもして時間を潰してきたらどうだい？」

「どうやら、すぐには転属できないようだ。」

「そうですね……。ただ待っているだけでも何ですし」

「あたしも賛成！あ、そうだ……。ね、良かったらもう少し付き合ってくれないかなあ？せつかく知り合いになれたのにここでお別れも勿体ないし……」

エステルがクローゼに向き合って言った。

「あ……喜んで。お邪魔じゃなかったらぜひ一緒に過ごさせてください」

クローゼが言った。

「やった」

「決まりだね。それじゃあ僕たち、ルーアン見物に行ってきます」
ヨシユアがカルナに言った。

「しばらくしたらまた来るわね」

「ああ、楽しんでおいで」

エステルたちはルーアン見物を始めた。

第3章 白き花のマドリガル（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ルーアン市に着いたエステルたち。次回からルーアン支部所属となつて活動開始です。

第3章 白き花のマドリガル(8) (前書き)

不良グループとダルモア市長と秘書ギルバードが登場！

第3章 白き花のマドリガル(8)

ラングランド大橋

「うわぁ……。これが《ラングランド大橋》か……」

ラングランド大橋は全長108アージュという壮大な長さを誇る。

跳ね橋で、巻取りには工房都市ツァイスで造られたオーブメントを搭載している。

「やっぱり大きいわねえ。ヴェルテ橋の倍くらいはありそう」

エステルは

「この橋が作られたのは40年ほど前のことだそうです。それまでは、渡し船を使って両岸を行き来してたんですって」
クローゼが解説してくれた。

「え……。どうして橋を作らなかったの？」

「このルビーヌ川は海と湖を結ぶ唯一の川だからね。湖畔にある王都に向かう船が通れないと困るからじゃないかな」

ヨシユアが指摘した。確かに、跳ね橋でないと大型の船が通れないね。

「はい、ご明察です。50年前の導力革命によって、これほど大規模な跳ね橋を建造することが可能になったそうです」

「なるほど……。オーブメント様々ってわけね。しかし、それは実際に跳ね上がる所を見てみたいな」

「跳ね橋が上げられるのは日に三回と決められています。今からだったら……。夕方には見られると思いますよ」

「よし、それは絶対に見逃さないようにしないと！」
「だね」

エステルはかなり期待しているようだ。

ルーアン市 南街区

「なんか、大きな建物がいっぱい並んでるわね」

そこには、家ではなく何かを保管しておくような建物が多くあった。「ここは倉庫区画ですね。外国から運ばれてきた荷などが保管されているんです」

「ふーん……。でも、少し寂しい場所ね」

「飛行船が普及してから水の上に浮かぶだけの船は少なくなりましてから……。昔と較べると、荷卸しの量も減ってしまったようです」「そうなんだ……」

エステルは寂れた倉庫を見て呟いた。

「使われていない倉庫もありそうだね」

倉庫区画 最奥

倉庫の前に赤いバンダナを頭に巻いた男が立っていた。

「……ど、どうしてこんな場所に若い女の子たちが……。やいやい、ここは立ち入り禁止だ！て、てめえらみたいなガキどもが入っている場所じゃねえんだよ！」

男は緊張しながら怒鳴った。

「いや、別に入りたくないなんて一言も言っていないんだけど……。ところでお兄さん、なんでそんなに緊張しちゃってるわけ？」

エステルが純粹な疑問を投げかけた。

「や、やっぱり緊張してるように見える……。？……。じゃなくて、とにかくここは立ち入り禁止だ！とつとと向こうに行っちまえ！」
相変わらず緊張しているようで、歯切れが悪そうに怒鳴る。

「（これは、そつとしておいてあげた方がよさそうだね……）」

「（うーん、カッコも妙だし、いったいどういう人なのかしら？）」「ヨシユアとエステルがささやく。

「（……………）」

クローゼだけが困った顔をしていた。

北街区に戻ろうとした時、

「待ちな、嬢ちゃんたち」

若者が3人こちらに来た。

「え、あたしたち？」

「おっと、こりゃあ確かにアタリみたいだな」

3人のうちのデインが言った。

「ふん、珍しく女の声が聞こえてきたかと思えば……」

もう1人のロツコが言った。

「あの、なにか御用でしょうか？」

クローゼが尋ねた。

「へへへ、さつきからここらをブラついてるからさ。ヒマだったら俺たちと遊ばないかな〜って」

下品な口を叩くデイン。どうやら、まともな人ではないことは確かだ。

「え、あの……」

困惑するクローゼ。

「なによ、今時ナンパ〜？悪いけど、あたしたちルーアン見物の最中なの。他をあたってくれない？」

エステルは呆れたように言った。

「お、その強気な態度。オレ、ちよつとタイプかも〜？」

最後の1人、レイスがこれまた下品な口調で言った。

「ふえっ？」

エステルが素っ頓狂な声をあげた。

「見物がしたいんだったら俺たちが案内してやるうじゃねえか。そんな生つちろい小僧なんか放っておいて俺たちと楽しもうぜ」

ロツコがヨシユアの方を見て言った。

「……………」

ヨシユアは何も言わない。
「ちょ、ちよつと！何が生つちろい小僧よ！？あんたたちみたいないだろ？」

エステルが言おうとした時、

「いいよ、エステル。別に気にしてないから。君が怒っても仕方ないだろ？」

ヨシユアが制した。

「で、でも……………」

エステルは納得いかない様子だ。

「なに、このボク…………。余裕かましてくれてんじゃん」

「むかつくガキだぜ…………。上玉2人とイチチャつきやがって」

「へへ、世間の厳しさってヤツを教えてやる必要がありそうだねえ」

デイン、ロツコ、レイスがヨシユアに歩み寄ってきた。ヨシユアの実力に気付かないようでは大した使い手ではなさそうだな。

「ちょ、ちよつと……………！」

「や、止めてください……………！」

エステルとクローゼが叫ぶ。

「…………。僕の態度が気に入らなかつたら謝りますけど」

ヨシユアが冷静に言う。

「彼女たちに手を出したら…………。手加減、しませんよ」

そして、3人に近づききつぱりと言った。

「なっ……………」

「な、なんだコイツ……………」

「ハ、ハツタリだ、ハツタリ！」

ヨシユアの威圧に負けて押された3人。やっぱり大した者ではないな。

「へッ、女の前でカツコ付けたくなる気持ちも判るけどな。あんまり無理をしすぎると大ケガすることになるぜ……………」

デインが言ったその時、

「お前たち、何をしているんだ！」
青年がラングランド大橋から来た。

「ゲツ……………」

「うるせえヤツが来やがったな……………」

3人は面倒そうに言った。

「お前たちは懲りもせず、また騒動を起こしたりして……………。いい年して恥ずかしいとは思わないのか！」

青年が言った。

「う、うるせえ！てめえの知ったことかよ！」

「市長の腰巾着が……………」

3人が忌々しそうに言った。

「なんだと……………」

青年が言おうとした時、

……………おや、呼んだかね？」

男性が1人現れた。

「ダ、ダルモア！？」

「ちっ……………」

これまた面倒そうな視線を向ける3人。

「（だ、誰なのかな……………。すぐく威厳ありそうな人だけど）」

エステルが男性を見る。

「（ルーアン市長のダルモア氏です。お若い方は、秘書をされているギルバードさんといったかしら……………」」

クローゼが囁いた。

「このルーアンは自由と伝統の街だ。君たちの服装や言動についてとやかく文句を言うつもりはない。しかし他人に、しかも旅行者に迷惑をかけるというなら話は別だ」

ダルモア市長が言った。

「けっ、うるせえや。この貴族崩れの金満市長が。てめえに説教される覚えはねえ」

デインが言った。ひどい言い様だな。

「ぶ、無礼な口を利くんじゃない！いい加減にしないと、また遊撃士協会に通報するぞ！」

青年改め、秘書ギルバードが言った。

「フン……何かというと遊撃士かよ。ちったあ自分の力で何とかするつもりはないわけ？」

レイスが言った。まあ、そう言いたくなる。

「たとえ通報されたとしても奴らが来るまで時間はある……。とりあえず、ひと暴れしてからトンスラしたっていいんだぜえ」
ロツコが言った。

「悪いんだけど……。通報するまでもなくすでにここに居たりしてエステルが残念とばかりに言った。

「な、なにに？」

3人がエステルたちの方を向く。

「はあ、この期に及んでこの紋章に気付かないなんてね。あんた達、目が悪いんじゃない？」

エステルは、左胸に飾った準遊撃士の紋章を指差した。

「そ、それは……！？」

「遊撃士のバッジ！？」

「じゃあ、こつちの小僧も……」

3人がヨシユアを見る。

「そういう事になりますね」

ヨシユアが言う。

「（ど、どうすんだ？まさかこんなガキどもが遊撃士なんて……）」

「（なあに、構うもんか！遊撃士とはいえただの女子供じゃねえか！）」

「（ば、馬鹿野郎！見かけで判断するんじゃないやねえ！ついこの間、3人がかりで女遊撃士と戦つてのされちまったのを忘れたのか！？それに何と言つても……」あの人”と同じなんだぞ！？）」

3人が話し合う。デインは賢明だな。女遊撃士とはカルナのことだろうが、「あの人」とは誰だろうか？

3人が青ざめると

「きよ、今日の所は見逃してやらあ！」

「今度会ったらタダじゃおかねえ！」

「ケツ、あばよ！」

どこかに行ってしまった。

「なんて言うか……。めっちゃめっちゃ陳腐な捨て台詞ね」

「まあ、ああいうのがお約束じゃないのかな？」

エステルたちは呆れている。

「済まなかったね、君たち。街の者が迷惑をかけてしまった。申し

遅れたが、私はルーアン市の市長を務めているダルモアという。こ

ちらは、私の秘書を務めてくれているギルバード君だ」

「よろしく。君たちは遊撃士だそうだね？」

ダルモア市長と秘書ギルバードが挨拶した。

「あ、ロレント地方から来た遊撃士のエステルっていいいます」

「同じくヨシユアといます」

「そういえば、受付のジャン君が有望な新人が来るようなことを言

っていたが……。ひょっとして君たちのことかね？」

ダルモア市長が推測して言った。

「えへへ……。有望かどうかは判らないけど」

「しばらく、ルーアン地方で働かせて貰おうと思っています」

「おお、それは助かるよ。今、色々大変な時期でね。君たちの力

を借りることがあるかもしれないから、その時はよろしく頼むよ」

ダルモア市長が言った。

「大変な時期……ですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「まあ、詳しい話はジャン君から聞いてくれたまえ。ところで、そ

ちらのお嬢さんは王立学園の生徒のようだが……」

ダルモア市長がクローゼを見た。

「はい、王立学園2年生のクローゼ・リンツと申します。お初にお

目にかかります」

「そうか、コリンズ学園長とは懇意にさせてもらっているよ。そういえば、ギルバード君も王立学園の卒業生だったね？」

「ええ、そうです。クローゼ君だったかい？君の噂は色々と聞いているよ。生徒会長のジル君と一緒に主席の座を争っているそうだね。優秀な後輩がいて僕もOBとして鼻が高いよ」

秘書ギルバードは色々情報を持っているようだ。

「そんな……恐縮です」

「ははは、今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか、頑張ってくれたまえ」

「はい、精一杯頑張ります」

「うむ、それじゃあ私たちはこれで失礼するよ。先ほどの連中が迷惑をかけたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長としてしかるべき対応をさせて頂こう」

そう言つて、ダルモア市長と秘書ギルバードは去っていった。

「うーん、何て言うかやたらと威厳がある人よね」

「確かに、立ち居振る舞いといい市長としての貫禄は充分だね」

「ダルモア家といえばかつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止されたとはいえ、いまだに上流貴族の代表者と言われている方だと思います」

クローゼが言った。

「ほえ……。なんか住む世界が違うわね。しかし、それにしてもガラの悪い連中もいたもんね」

いきなりアレでは驚くのも当然だね。

「そうですね。ちょっと驚いちゃいました。ごめんなさい、不用意な場所に案内してしまったみたいですよ」

クローゼが謝った。

「君が謝ることはないよ。ただ、わざわざ彼らを挑発に行く必要はなさそうだね。倉庫区画の一番奥を溜まり場にしていみたいだからなるべく近づかないようにしよう」

ヨシユアが言った。

「うーん……。納得いかないけど仕方ないか」
エステルは腑に落ちないようだ。
とにかく、3人は北街区に戻ることにした。

第3章 白き花のマドリガル（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回からルーアン支部の一員として働き始めます。

第3章 白き花のマドリガル(9) (前書き)

皆さん、お久しぶりです。

第3章 白き花のマドリガル(9)

遊撃士協会ルーアン支部

「いらつしゃい。遊撃士協会へようこそ！おや、クローゼ君じゃないか」

受付の男性が気前よく挨拶した。

「こんにちは、ジャンさん」

どうやらこの男性がジャンのようだ。

「また、学園長の頼みで魔獣退治の依頼に来たのかい？ああ、判った！学園祭の時の警備の依頼かな？」

やたらと早とちりして、よく喋る人だな。

「いえ、それはいずれ伺わせて頂くとおもうんですけど。今日は、エステルさんたちに付き合わせて貰っている最中なんです」

早合点するジャンに説明した。

「あれ、そういえば……。学園の生徒じゃなさそうだけど。……待てよ、その紋章は……」

エステルたちが受付の前に立った。

「初めまして。準遊撃士のエステルです」

「同じく準遊撃士のヨシユアです」

「ああ、君たちがエステル君とヨシユア君か！いや、ホント良く来てくれた！ボース支部から連絡があつて今か今かと待ちかねていたんだ」

ジャンは嬉しそうだ。

「そっか、ルグラン爺さん、ちゃんと連絡してくれたんだ」

「感謝しなくちゃね」

根回しのいいルグラン爺さんだった。

「僕の名前はジャン。ルーアン支部の受付をしている。君たちの監督を含め、これから色々サポートさせてもらうよ。2人とも、よろしくな」

「うん！よろしくね、ジャンさん」

「よろしくお願ひします」

「はは、君たちには色々と期待しているよ。何といつても、あの空賊事件を見事解決した立役者だからな」

「空賊事件つて……。あのポーヌ地方で起きた？私、《リベール通信》の最新号で読んだばかりです。あれ、エステルさんたちが解決なさったんですか？」

クローゼはかなり驚いている。

「あはは、まさか……。手伝いをしただけだつてば」

「実際に空賊を逮捕したのは王国軍の部隊だしね」

「謙遜することはない。ルグラン爺さんも誉めてたぞ。さっそく転属手続きをするから書類にサインしてくれるかい？」

ジャンが書類を差し出した。

「さあさあ、今すぐにでも」

多少、強引そうに突き出すジャン。

「う、うん……？」

「それでは早速」

エステルとヨシユアは転属手続の書類にサインした。

「うんうん、これで君たちもルーアン支部の所属というわけだ。い

やあ、この忙しい時期によくルーアンに来てくれたよ。ふふ……も

う逃がさないからね」

ジャンの目が危なく輝く。

「な、なんかイヤな予感」

「先ほどから聞いてるとかなり人手不足みたいですね。何か事件でもあつたんですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「事件という程じゃないけどね。実は今、王家の偉い人がこのルー

アン市に来ているのさ」

ジャンが溜息をついた。

「王家の偉い人……。も、もしかして女王様！？」

エステルが期待して尋ねた。

「はは、まさか。王族の1人であるのは間違いないそうだけどね。何でも、ルーアン市の視察にいらっしやっただとさ」

「へー、そんな人がいるんだ。でも、それがどうして人手不足に繋がっちゃうの？」

「何と言つても王家の一員だ。万が一の事があるといけないとダルモア市長がえらく心配してね。ルーアン市の警備を強化しよう依頼に来たんだよ」

「なるほど、先ほど2階で話し合っていた一件ですね。それにしても市街の警備ですか」

ヨシユアが頷いた。

「まあ、確かに港の方には跳ねつ返りの連中がいるからね。そちらの方に目を光らせて欲しいという事だろう」

「跳ねつ返りつて……。さっき絡んできた連中のことね。うーん、確かにあいつら何かしでかしそうな感じかも」

「なんだ、知っているのかい？」

ジャンが不思議そうに尋ねた。

「実は……」

エステルたちは先ほどの出来事を説明した。

「そうか……。倉庫区画の奥に行ったのか。あそこは《レイヴン》と名乗ってる不良グループのたまり場なんだ。君たちに絡んできたのは、グループのリーダー格を務める青年たちだろう」

「《レイヴン（渡りカラス）》ねえ……。なーにをカッコつけてんだか」

エステルは不満そうに言った。

「少し前までは大人しかったんだが最近、タガが緩んでるみたいだね。市長の心配ももつともなんだが、こちらら、地方全体をカバーしなくちゃならないんだ。とまあ、そんなワケで本当に人手不足で困っていてね。君たちが来てくれて、感謝感激、雨あられなんだよ」

「あはは……。期待に沿えるといいけど。それじゃあ、明日からさ」

「つそく手伝わせてもらおうわ」

エステルが照れた。

「何かあつたら僕たちに遠慮なく言いつけてください」

「ああ、よろしく頼むよ！」

外に出た時は既に夕方になっていた。夕陽が照りつける港町

「わあ、もう夕方か……。すつごくキレイな夕陽ねえ！」

「ここの夕陽は格別だな。白い町並みに良く映えてる」

「ふふ、私も大好きです。そうだ……。そろそろだと思えますよ」

クローゼが思い出したように言った。

「え、何が？」

その時、ラングランド大橋がゆっくりと跳ね上がった。

「はあく、なんていうか圧巻ね。あれ、どのくらいの間跳ね上がっているものなの？」

エステルが尋ねた。

「30分くらいだと思います。早朝、昼前、夕方の3回、通る船が無くなるまでですね」

クローゼが言った。

「なるほど、比較的人通りの少ない時間帯だね」

「ふふ、初めて来られた方は最初は戸惑われるみたいですけど。あ、そういうえば……。エステルさんたちは今夜の宿はどうされるんですか？」

「うーん、ギルドの2階に泊まらせてもらう手もあるけど。やっぱり最初くらいは優雅にホテルに泊まりたいかも」

「だったら、急いで部屋を取った方がいいかもしれません。今は観光シーズンですからすぐに一杯になってしまふと思います」

「そうか……。だったら急いだ方が良さそうだね」

「うん、ホテルに行きましょう」

エステルたちはホテルに向かった。

第3章 白き花のマドリガル(9) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ホテルに向かったエステルたち。しかし、そこには不幸が待ち受けていた！

第3章 白き花のマドリガル（10）（前書き）

ホテルでエステルたちに降りかかる災難……。しかし、読んでもる方としては結構面白い内容ですよ。

10000アクセス突破しました！読者の皆様に感謝です！

第3章 白き花のマドリガル(10)

ホテル・ブランチエ

「いらつしやいませ。ホテル・ブランチエへようこそ。ご予約のお客様でいらつしやいますか？」

受付のアーネストが尋ねた。

「ううん。そうじゃないんだけど……」

「今からでも部屋は取れますか？」

エステルたちは部屋が空いているかどうか尋ねた。

「お客様、いいタイミングでしたね。つい先ほど、最上階の部屋がキャンセルされたばかりなんです。よろしかったら、そちらにご案内しますが如何いかがでしょう？」

アーネストが言った。ナイスタイミングだな。

「最上階の部屋……。うーん、いいかも shouldn't」

「でも、最上階ともなるとかなりお高いんじゃないですか？」

当然そうだろう。

「キャンセル空きですから通常料金と同じで構いません。それに拝見した所、お客様がたは遊撃士でいらつしやるご様子……。いつもお世話になってるのでサービスさせて頂きますよ」

アーネストが言った。遊撃士がこんな所で有利に働くとは……。

「えへへ、そこまで言われたらお言葉に甘えちゃうしかないわね」
エステルの顔がほころんだ。

「それじゃあ、その部屋をお願いします」

「かしこまりました」

アーネストが手続きを行った。

「ふふ、良かったですね。エステルさん、ヨシユアさん。それでは私、そろそろ学園の方に帰ろうかと思えます。急がないと、寮の門限に間に合いそうにないので……」

「あ、そっか。夕方までって言ってたよね。うーん……名残惜しい

けど仕方ないか」

エステルが残念そうに言った。

「よかつたら学園まで送ろうか？」

「ふふ、大丈夫です。通い慣れている道ですから」

ルーアン市北街区

「今日は付き合わせてもらってありがとうございます」
クローゼが礼を言った。

「えへへ、やだな。お礼を言うのはこっちだってば」

「そうだね。案内してくれてありがとう」

「そんな、大したことはしてません。そうだ、お2人はしばらくルーアン地方にいるんですね？よかつたら、来週末にある学園祭にいらつしやいませんか？」

「ガクエンサイ？」

「名前から察するに何かの行事みたいだね」

この2人、学園祭というものを知らないのか？

「ええ、学園側の許可を貰って、生徒が自主的に開くお祭りです。

王立学園の伝統行事なんですよ」

クローゼが丁寧に説明した。

「あ、そーいうのあたしメチャメチャ好きかも！出店とか演^だし物はあ^あるの！？」

それがなかったら学園祭とは言えないだろう。

「ふふ、もちろんです。けっこう本格的なんですよ」

「行く行く、ぜーったい行く！というか、あたしも一緒にお祭りの準備がしたいくらい！」

ノリのいいエステル。

「ちよつとエステル……。さっきギルドで、忙しくなるって聞いたばかりなのを忘れたのかい？」

ヨシユアがはしゃぐエステルを制した。

「うう、それがあつたか……」

途端に気落ちするエステル。

「まあ、学園祭の当日だけならいい息抜きになると思うし……。それまでしつかり仕事しようね」

「ふあゝい」

「クスクス……。エステルさん、ヨシユアさん。それでは私、そろそろ失礼しますね。近いうちにまた……」

「うん、またね！」

「気をつけて帰ってね」

そうして、クローゼは帰って行った。

「うーん、可憐な雰囲気なのに凜とした所もあって頼もしい……。あたしが男だったら間違いなくホレちゃってるわね」

やたらと人を品定めするエステル……。

「まあ、それはともかく……。何か企んでいそうな様子もないし、いい子であるのは確かみたいだね」

対して、人を冷静に判断するヨシユア……。

「そんな、どこぞの空賊娘じゃないんだから」

ジヨゼットか。

「でも、出会いには恵まれたし、最上階の良い部屋も取れたし……。やっぱり、マノリアの展望台でジークを見たのがよかったのかも」

「はは、そうかもしれないね。……。それじゃ、さっそく部屋に荷物を置いてちやおうか？」

「うん、最上階よね」

エステルたちはホテル・ブランシエに入った

ホテル・ブランシエ最上階

「うわゝ、ひつろーい!!」

そこは、2人で使用するにはもつたないくらい豪華絢爛「じっかげんらん」だった。早速、部屋を物色するエステル。「へえ、こつちが寝室なんだ」「最上階で、しかもスイートか。通常料金で泊まらせてもらうのが申しわけなくなってるね」「ま、せつかくの申し出だし、せいぜい堪能させてもらいましょ」

バルコニー

「すごいな……。こんなバルコニーまであるんだ」
ヨシユアが驚いている。

「うん……。さすが絶景よね。でも確かに、あたしたちだけで使うにはもつたない部屋かも……。……父さんも一緒だったら良かったのに」

「そうだね……。本当に……。どこで何をしているのだろうな」
エステルとヨシユアの顔が翳かげる。

その時、部屋の中から声がした。

「ほほう……。なかなか良い部屋ではないか」

男性の声のようだ。

「なに、今の？」

「うん、部屋の中から聞こえてきたみたいだけど……」

「それなりの広さだし調度もいい。うむ、気に入った。滞在中はここを使うことにする」

貴族風の男性が言った。

「閣下、お待ちくださいませ。この部屋には既に利用客がいるとのこと……。予定通り、市長殿の屋敷に滞在なさってはいかがですか？」

黒服の男性が焦って言った。

「黙れ、フィリップ！あそこは海が見えぬではないか。その点、この海沿いのホテルは景観もいいし潮風も爽やかだ。バルコニーにも出られるし……」

貴族風の男性は寢室を出て、バルコニーに向かおうとした。が、エステルとヨシユアが寢室の前にいた。

「な、なんだお前たちは！？賊か！？私の命を狙う賊なのか！？」
めちやくちゃだな、このオッサン。

「何をいきなりトチ狂ったこと言ってるのよ。オジサンたちこそ何者？勝手に部屋に入ってきたりして」

エステルが慥然ぶぜんとした様子で言った

「オ、オジサン呼びわりするでない！フン、まあよい……。お前たちがこの部屋の利用客か？ここは私が、ルーアン滞在中のプライベートルームとして使用する。とつとと出て行くが良い」

過去最大の自己中心的発言炸裂！

「はあ？言ってることがゼンゼン判らないんですけど。どうして、あたしたちが部屋を出て行かなくちゃならないわけ？」

「事情をお伺いしたいですね」

エステルとヨシユアが言った。まあ、普通はそう言いますね。

「フツ、これだから無知蒙昧むちもつまいな庶民は困るのだ……。この私が誰だか判らぬというのか？」

自信たつぷりに背を反る貴族風の男性。

「うん、全然。なんか変なアタマをしたアジサンにしか見えないんだけど」

エステルがその自信をコナゴナにした。アタマとは髪型のことか、それとも中身のことか？

「へ、変なアタマだと……！」

慌てて頭の上に手を乗せる貴族風の男性。

「エステル……。いくら何でもそれは失礼だよ。個性的とか言っ
てあげなくちゃ」

「なるほど、物は言いようね」
さらに、失礼だと思えますよ、ヨシユア君……。
「ぐぬぬぬ……。フツ、まあ良い。耳をかつぼじって聞くが良い。
……私の名は、デュナン・フォン・アウスレーゼ！リベール国主、
アリシア？世陛下の甥にして公爵位を授けられし者である！」
威厳たつぷりに言った貴族風の男性。

「……………」
「……………」
エステルとヨシユアは口をあけたまま何も言わない。

「フフフ……。驚きのあまり声も出ないようだな。だが、これで判
つただろう。部屋を譲れというそのワケが？」

「ぶっ……………」

「はは……………」

「あははははははは！」

思いつき笑い出したエステル。ヨシユアも笑いをこらえている。

「オジサン、それ面白い！めっちゃめっちゃ笑えるかも！」

既に笑ってる人にいわれてもなあ……………。

「よりもよって女王様の甥ですって〜！？」

笑いが止まらないエステル。

「あはは、エステル。そんなに笑ったら悪いよ。この人も、場を和
ませるために冗談で言ったのかもしれないし」

ヨシユアが笑いながら言った。

「こ、こ、こやつら……………」

震える貴族風の男性改め、デュナン公爵。

「……………誠に失礼ながら閣下の仰ることは真実です」
後ろに控えていた黒服の男性が言った。

「え……………」

エステルが笑うのを止めた。

「これは申し遅れました。わたくし、公爵閣下のお世話をさせて頂
いているフィリップと申す者……。閣下がお生まれになった時から

お世話をさせて頂いております」

黒服の男性がフィリップと名乗った。

「は、はあ……」

エステルは状況を飲み込めていない様子だ。

「そのわたくしの名譽に賭けてしかと、保証させて頂きます。こちらにおわす方はデュナン公爵……。正真正銘、陛下の甥御にあたられます」

執事フィリップが断言した。

「（し、信じられないけど……。そのオジサンはともかく、あの執事さんはホンモノだわ）」

「いまだオジサン扱いのデュナン公爵……」。

「（そういえばジャンさんが言ってたね……。ルーアンを視察に来ている王族の人がいるって……）」

その王族の人がこんなオジサンなんて……といわんばかりのエステルとヨシユア。

「ふはは、参ったか！次期国王に定められたこの私に部屋を譲る榮譽をくれてやるのだ。このような機会、滅多にあるものではないぞ！」

人の気も知らず喋り続けるデュナン公爵。

「ふ、ふざけないでよね！いくら王族だからといってオジサンみたいな横柄な……」

エステルが言おうとしたその時、

「あいや、お嬢様がた！どうかお待ちくださいませ！」

フィリップが駆けつけてエステルを制した。

「え？」

「しばしお耳を拝借……」

フィリップがデュナン公爵に聞こえないように壁際までエステルたちを誘導した。

「失礼ながら、お嬢様がたにお願いしたき儀がございます。これで部屋をお譲り頂けませぬか？」

老執事は、札束になったミラを懐から取り出して差し出した。

「し、執事さん……」

「何もそこまで……」

「閣下は一度言い出したらテコでも動かない御方……。それもこれも、閣下をお育てしたわたくしめの不徳の致すところ……。どうか、どうか……」

老執事は、土下座せんばかりの勢いでエステルたちに頭を下げた。

「ふう、仕方ないか……。あんまり執事さんを困らせるわけにもいかないし」

「部屋はお譲りします。ただ、そのミラは受け取れません」

「し、しかしそれでは……」

「いっていいって あたしたちにはちよつと豪華すぎる部屋だし。あのオジサンのお守り大変とは思うけど頑張つてね？」

「お、お嬢様がた……。どうも有り難うございます」

執事フィリップが頭を下げた。

「こら、私をのけ者にして何をコソコソ喋っているのだ？」

「別にな〜んにも」

「どうもお騒がせしました。部屋は公爵閣下にお譲りします」

「おお、そうか！ わはは、最初から素直にそう言えばいいのだ。その謙虚な心がけをこれからも忘れるでないぞ」

調子のいい公爵だな。

「まったくもう……」

疲れた顔をするエステル。

「それでは失礼します」

エステルとヨシユアは部屋を後にした。

1階 受付

「そうですね……。公爵閣下には事情を説明してお断りしたはずだ

ったのですが。本当に申し訳ありません。このようなことになってしまつて」

アーネストが謝つた。

「いいつて、いいつて。悪いのは全部あのワガママ公爵なんだし」

「ところで……。代わりの部屋はありますか？普通の部屋で結構ですから」

ヨシユアが尋ねた。

「そ、それが……。つい先ほど、全ての部屋が満室になってしまひまして……」

アーネストが申し訳なさそうに言った。

「げっ……」

「少し甘く見てたか……」

「どうかご安心ください。今回の件は私どもの不手際です。他に泊まれる場所がないか責任をもつて手配させて……」

その時、後ろから知っている声が出た。

「よ、なんか困つてるみたいだな？」

ここにきて、ナイアル・バーンス登場！

「エステル、ヨシユア。空賊アジトで会つて以来だな」

ホテル内は禁煙ですよ……。

「あ、ナイアル！？」

「こんばんは。意外な場所で会いますね」

「そりゃこつちの台詞だぜ。お前さんたちもルーアンに来ていたとは思わなかつた。それより、どうした？何かトラブルでもあつたのかよ？」

「実は……」

先ほどの一件をナイアルに説明した。

「ハツハツハ！相変わらず面白いことに巻き込まれてるじゃねーか！」

大笑いするナイアル。

「あのねえ……。笑い事じゃないんだけど」

「そういう事なら話は早い。俺の部屋に泊めてやるよ」
「え？」

ナイアルもここに泊まっているという事か？

「ベッドに空きがあるからな。よう、フロントさん、それでも構わないだろう？」

「もちろんですとも。そうして頂けると助かります」

アーネストは歓迎した。

「よし、決まりだな。地下1階の奥の部屋だ。遠慮せずに付いて来いよ」

ナイアルは一足先に行ってしまった。

「うーん、いのかなあ？」

「せっかくの申し出だし受けてもいいんじゃないかな。まあ、泊めてもらう代わりに何かネタは要求されそうだけど」

今までのことから考えるとありそうだな。

「うーん……。メチャメチャありそうね。まあ、それくらいは仕方ないか」

とにかく、部屋に向かうことにした。

第3章 白き花のマドリガル（10）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

宿は何とか確保できたエステルたち。遊撃士の仕事は明日の朝から開始することになった。

第3章 白き花のマドリガル(11)(前書き)

ルーン地方で事件が起こる！

第3章 白き花のマドリガル（11）

地下1階 ナイアルの部屋

「おお、よく来たな。空いているベッドを適当に使ってくれや」

「泊めてくれるのはありがたいんだけど……。ちよっとサービス良すぎるんじゃないの？」

「おっと。変な勘繰りをするなよな？この前は、お前さんたちのおかげでスクープをモノに出来た。感謝のシルシってやつだぜ」

「空賊逮捕のスクープですね。どのくらい反響がありました？」

「それがよ、もうバカ売れ！特に、リシャール大佐と情報部の活躍を取り上げた記事が大反響でな。空賊事件そのものよりも大佐に稼がせてもらった感じだぜ」

ナイアルが笑いながら言った。最高に良かったそうだ。

「へえ……。あの人、そんなに人気あるんだ？」

「噂じゃ、今回の事件で陛下から勲章まで貰ったらしい。王都あたりの市民の間じゃ人気うなぎ登りって話だぜ。今度ウチでも、リシャール大佐の独占インタビューを載せるしな」

国民的英雄になりつつあるリシャール大佐。

「それは凄いですね……」

ヨシユアも感心している。

「まあ、あのルックスに加えて知的で頼りがいのある雰囲気だ。俺も、実際に話してみても好感の持てる人物だと思っただぜ。ただなあ……」

そこで突然、ナイアルは黙った。

「どうしたの？」

「いや……。ま、それはどうでもいいか。記事のおかげでポーナスも出だし、ようやくお守りからも解放された。リシャール大佐様々ってやつだぜ」

「お守りから解放されたって、ひょっとしてドロシーのこと？」

「そういえば……。一緒じゃないんですか？」

「元々、新人研修の一環としてしばらく面倒見てただけだしな。今回のスクープをもってめでたくコンビ解消ってわけだ」

「ナイアルとしてはまさにめでたい事だな。」

「ふーん……。でも、あのヒトって1人にしたらかえって心配のよーな」

エステルがもつともらしいことを言った。

「言うなつての……。考えないようにしてんだから。まあ、そういうわけでボーナスを使ってバカンスを楽しんでいる最中ってわけだ」
「とか言つて、どうせまたスクープを狙ってるんでしょ？あ、ひよつとして……。あの公爵を追つてたりとか？」

「ああ、デュナン公爵か。お前たちも災難だったな。聞いた話だと王族の中でも放蕩三昧のはみ出し者だそうだ。アリシア女王も頭を悩ましているって噂だぜ」

まあ、あの態度を見れば一目瞭然だな。

「信憑性のありそうな話ですね。でも、本人が言うには次期国王だそうですね……」

「え、それってホントなの？あたし、あんなオジサンを王様なんて呼びたくないわよ」

エステルが露骨に嫌そうな顔をする。確かに、アレが国王になったら大変なことになりそうだ。

「まあ、陛下もご高齢だし有力候補なのは確かみたいだぜ。たしか、陛下の御子息は結構前に亡くなっているからな。まあ、周囲の反対も多そうだが……」

「ナイアルさんもそれほど詳しくなさそうですね。ということは……。追っているのは別の件ですか？」

ヨシユアが指摘した。

「……………」

ナイアルが驚いた顔をした。

「あ、凶星って顔してる」

「まったく……。相変わらず鋭い小僧だぜ。イエスとだけ言っておこう。だが、それ以上は喋れねえ。かなーり大きなネタなんでね」
「そう言われると余計に気になっちゃうんだけど……。まあいっか。あたしたちマスコミじゃないし」

「記事、楽しみにしておきますよ」

「おお、任せとけてんだ。ところで、お前さんたち晩メシはまだなんじゃねえか？奢おしってやるから付き合えよ」

今回のナイアルは太っ腹だ。ボースの時とは大違いだ。

「え、ホント!？」

「ありがたくご馳走になります」

その夜、エステルとヨシユアはカジノバー《ラヴァンタル》でナイアルに夕食を奢おしってもらった。アゼリア湾の魚介類を使った料理の数々に舌鼓を打った後、エステルたちは、酔いつぶれたナイアルをホテルまで運んでから眠りにつくのだった。

深夜 マーシア孤児院

「フフ、繕つくろいものが多いのは元気な子が多い証拠かしら……。さてと、そろそろ休みますか」

テレサ院長が服を置いた。

「女神エイトスよ、あの子たちに健やかなる明日を与えたまえ」

その時、外から何か音がした。火がついた音のような。

「何かしら、この音は？薪まきをくべる時のような……。……。それにこの匂い……。……。まさか!？」

火事か!？」

「みんな、起きて!」

テレサ院長が2階の子供たちの寝室に駆けつけた。

「わわわっ……。ゴメン、もうしませんっ!」

クラムが跳ね起きた。なんやねん、それは?

「……………あれ?」

寝ぼけていたことに気がついたようだ。

「クラムったら……。なに寝ぼけてんのよう」

マリイが隣のベッドから眠そうに言った。

「ポーリイ、ダニエル!早く起きなさい!

「うみゅ〜……………」

「どうしたのお……。先生、ちょっとコワイよう」

ポーリイとダニエルも眠そうに言った。

「……………火事です!」

テレサ院長が言った。

「え」

「ほ、ほんと!?!」

「1階に降りますよ!慌てず、大急ぎで先生に付いて来なさい!」

1階に降りたときは既に火の手があちこちに飛んでいた。火が容赦なく5人の行く手を狭めて^{せは}いる。

「わわっ、なんだコレ!」

「けほけほ、煙くさ〜い」

「こ、こわいよ〜!」

「うみゅ〜……………。まだねむい〜……………」

クラム、マリイ、ダニエルはまともな判断だが、ポーリイだけは…

…。

「さあ、みんな出口に急いで!」

テレサ院長が出口に向かって走った時、屋根の梁が^{はり}落下して出口を塞いでしまった。

「わああっ!」

「きゃあああっ」

「そ、そんな……。ああ、女神よ！^{エイドス}どうかこの子たちだけでも……」
テレサ院長はなす術もなく、ただ祈るだけだった。

第3章 白き花のマドリガル（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

マーシア孤児院で火事が起こってしまった。さらに、テレサ院長たちは出口を塞がれ、脱出ができなくなってしまった。テレサ院長たち5人の安否は！？次回、エステルたちがこの事件を調べることになる！

第3章 白き花のマドリガル（12）（前書き）

ルーアン初仕事がマールシア孤児院の火事の原因を調べることになったエステルたち。

第3章 白き花のマドリガル(12)

翌朝 ルーアン市街

「うあ~~~~~……。頭がガンガンしやがる……」

ナイアルが辛そうに頭を押さえる。同情の余地はないな。

「完璧な二日酔いね。そんなに強くないクセに飲み過ぎたりするからよ」

「薬でも買ってきましようか？」

「いや、いい。それじゃ、俺はこのまま取材に向かうとするぜ……」

そんな辛そうな姿で取材しに行くとは……。

「そっか……。昨日は泊めてくれてありがとうね」

「それと、ご馳走さまでした」

「ま、せいぜい面白いネタを掴んだら教えてくれや……。俺もしばらくはルーアンに滞在するからよ……。んじゃ、またな」

ナイアルはとぼとぼと歩きながら行ってしまった。

「さてと、僕たちもそろそろギルドに行こうか？」

「うん、そうね。ジャンさんに仕事を紹介してもらいましょ」
エステルとヨシユアはギルドに向かった。

遊撃士協会ルーアン支部

「ジャンさん、おっはよー！」

「おはようございます」

「やあ、おはよう。早速来てくれたみたいだな」

「うん、約束したしね」

「早速ですけど、仕事を紹介してもらえますか？」

「ああ、いいともさ！色々頼みたい事があるけど、うーん、どれにしようかな」

ジャンが嬉しそうに仕事を探す。

「お、お手柔らかに……」

エステルがジャンの顔を伺う。

その時、ギルドの通信器がなった。

「おっと……。ちよっと待っていてくれ」

ジャンが通信器を取った。

「はいはい、こちら遊撃士協会。やあ、《白の木蓮亭》の……。連絡してくるなんて珍しいな。あんたの所のボ口通信器でよくぞ連絡できたもんだ……」

ひどい言い様だな。

「……………」

ジャンが黙って話を聞きはじめた。

「……………」
「なんだって？そうか……。そりや大変な事になったな。ああ、判ってる。すぐにウチのを向かわせるさ」

そこでジャンが通信器を置いた。

「どうしたの？何か事件でもあった？」

「事件か事故かはちよつと判らないんだが……。昨夜、海道沿いにある孤児院が火事にあつたそうだ」

「う、うそ……！？」

「それ、確かなんですか？」

エステルとヨシユアは驚いた。

「マノリアの宿屋の主人がわざわざ連絡してくれたんだ。マーシア孤児院っていうんだが君たち、場所は知ってるかい？」

「し、知ってるもなにも……。昨日の昼に訪ねたばかりだわ」

「それで、院長先生と子供たちは大丈夫なんですか？」

それが今一番重要だ。

「その確認は取れていない。とりあえず、それも含めて一通り調べてきて欲しいんだ。……君たちに頼めるかい？」

「あつたりまえよ！」

「それじゃあ僕たち、急いで孤児院に向かいます」

「ああ、よろしく頼んだよ！」
思わぬ事態に、エステルたちは急いでマーシア孤児院に向かった。

マーシア孤児院

「ひ、ひどい……」

「完全に焼け落ちてるね……」

マーシア孤児院は元の姿も想像できないくらい焼け落ちていた。

「あれ、あんたたち……？」

焼け跡の処理をしていたザックとソレノが声をかけてきた。

「ひよっとして君たち遊撃士協会から来たのかい？」

「う、うん……」

「皆さんはマノリアの方ですね？」

ヨシユアが尋ねた。

「ああ……。瓦礫がれきの片付けをしているんだ。昨日の夜中に火事が起きて慌てて消火に来ただけ……。まあ、ご覧の通り、ほぼ建物は焼け落ちちゃった」

ザックはうなだれた。

「そ、それで……。院長先生と子供たちは!？」

エステルが慌てて尋ねた。

「大丈夫、みんな無事だよ。今、マノリアの宿屋で休んでもらってる最中なんだ。これだけの火事だったのに全員、大したケガは無いそうだし」

ソレノが言った。

「よ、よかったあ」

エステルが安心して息をつく。

「うん、不幸中の幸いだね」

ヨシユアも安心した。

「俺たちはもう少し後片付けをするつもりだけど。あんたらはどう

するつもりだい？」

「あ、さっそく宿屋に行つてあの子たちのお見舞いに……」

「悪いけど、それは後回し」

ヨシユアが制した。

「ふえっ!？」

驚いたエステル。

「この現場、ざっと見ただけでも妙なことが多すぎる。そして、そういう手がかりは時間が経つと失われてしまふんだ。……君の気持ちもわかるけど今は現場検証の方を優先しよう」

「……………」

黙るエステル。悩んでいるんだろう。

「わかつた……。あたしたち、遊撃士だもんね。何があつたのか突き止めないと」

「うん……。さっそく敷地内を調べてみよう」

ヨシユアが言った。

「話はまとまつたみたいだね」

「それじゃ、よろしく頼んだぜ!」

ソレノとザックは後片付けに戻つていった。

扉の残骸

「うわ……。真つ黒コゲになつてる。あれっ…………?」

エステルが何かに気付いたようだ。

「どうしたの?」

「気のせいかもしれないけど……。蝶つがいの部分に変な風に引きちぎられてない?」

そこでヨシユアが確かめた。

「……確かに。まるで火がつく前に破壊されたような感じだね」

扉付近の石壁

「ここ……。特にひどく崩れちゃってるね。それと……。なんか変なニオイがしない？」

「そうだね。これはひよつとしたら……」

ヨシユアがなにか思いついたようだ。

その他、食料品入れの樽や、ミルク入れのタンクが倒されていて、ハーブ畑のハーブが根元から抜かれていたり、敷地内には土が散乱していた。

一通り調べ終えたエステルたち。

「さてと……。色々なことが見えてきたね。このあたりでいったん整理してみようか？」

「うん、わかったわ」

「まず、出火場所なんだけど……。どうやら建物の中じゃなさそうだ。屋外の可能性が高いと思う」

「屋外？」

「うん、こつちだ」

ヨシユアが扉付近の石壁に向かった。

「……。ちようどこの辺りから建物全体に火が回ったんだろう」

「あ……。石壁が崩れ落ちちゃった場所ね。でも、どうしてここが出火場所だっかわかるの？」

「地面の焦げ方が他の場所よりも激しいからだよ。周りで見比べれば判るはずさ」

エステルが周りを見渡す。確かにその付近の地面が真っ黒になっている。

「あ、ほんとだ……」

「建物外部の、この場所から火が広がったという事実……。これが何を意味するかわかるかい？」

ヨシユアがエステルに尋ねた。

「そ、それって……。何者かによって放火されたっていうこと!？」

「うん、僕もそう思う。このあたりに漂う匂い……。これは可燃性の高い油の匂いだ。多分、このあたりにぶちまけてから火を付けたんだろう」

「そ、そんな……」

「それから、建物の敷地が散らかり過ぎているのも変だ。消火するのに関係のないハーブ畑までが荒らされている。これも何者かの仕業だと思う」

その時、不意に後ろから女性の声がした。

「それ……本当ですか……?」

クローゼだった。

「あ、クローゼさん!？」

「来ていたのか……」

「どうして……。誰が……。こんなことを……。かけがえのない思い出が一杯につまったこの場所を……。どうして……。こんな……。酷いことができるんですか……!？」

「クローゼさん……」

「……。」「
エステルたちは何も言えなかった。

「……。ごめんなさい……。取り乱してしまつて……。私……。わたし……」

エステルがクローゼを抱きとめた。

「取り乱すのも無理ないよ。知り合ったばかりのあたしだってちよつとキツいから……。信じられないよね。こんな事をする人がいるなんて」

「エステルさん……」

「でも、院長先生とあの子たちはみんな無事だったそうだから……」。

だから、大丈夫。もう安心していいからね？」

「……………ありがとう。少しだけ落ち着きました。朝の授業を受けていたらいきなり学園長がやって来て……。孤児院で火事が起きたらしいって教えてくれて……。ここに来るまで……。生きた心地がしませんでした」

「そっか……………」

「院長先生と子供たちはマノリアの宿屋にいるそうだよ。調査も終わったし、僕たちも一緒にお見舞いに付き合わせてくれるかな？」
ヨシユアが尋ねた。

「あ、はい……。そうして頂けると嬉しいです」

クローゼが微笑んだ。

「それじゃあ、さっそくマノリアに行くとしましょ」
エステルたちはマノリア村の宿屋へ向かった。

第3章 白き花のマドリガル（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

テレサ院長たちは無事だと聞いたエステルたち。この火事は放火だとほぼ確証を得た。とにかく、まずはお見舞いに向かうことにした。

第3章 白き花のマドリガル(13) (前書き)

今回はちょっと感動的な話です。この話の感想・評価などお待ちしています。

第3章 白き花のマドリガル（13）

マノリア村 白の木蓮亭

「先生、みんな……！」

エステルたちが2階に上がり部屋に入ると、クローゼがすぐに声をかけた。

「あ、クローゼ姉ちゃん！」

「来てくれたんだ……！」

子供たちもすぐに振り向いた。

「みんな……。どこにもケガはない？」

子供たちがクローゼに寄ってきた。

「うん、だいじょうぶだよ！」

「えへへえ。ポーリイもへいきー」

子供たちには目に見える大きなケガはなかった。

「良かった……。本当に良かったね……」

その様子を見て、クローゼは安心した。

「ふふ……。よく来てくれましたね。エステルさんとヨシユアさんも一緒に来てくださったのね？」

テレサ院長が喜んだ。

「はい……。ギルドに連絡があったから」

「調査に来たついでにお見舞いに寄らせて頂きました」

エステルとヨシユアがテレサ院長に言った。

「そうですか……。訪ねてきてくれてありがとうございます」

テレサ院長が頭を下げた。

「調査に来たって……。あの火事を調べに来たんだろ？なにか分かったこと、あんの？」

クラムが尋ねた。

「えっと……」

「何と言ったらいいのか……」

エステルとヨシユアは困ったように目を交わした。子供たちにあの
ような残酷な真実を伝えるのはとてもできないだろう。

「ねえ、みんな。お腹は空いてないかしら？私、朝ゴハンを食べて
なくて食堂で何か頼もうと思うの。ついでだから、みんなにも甘い
ものをご馳走してあげる」

クローゼが空気を読んで子供たちに言った。

「え、ほんとあ！？」

「ポーリイ、プリン食べたーい！」

ダニエルとポーリイは食に釣られた。

「で、でも姉ちゃん……」

クラムは納得いかないようだ。

「………………。行きましょ、クラム」

マリイも空気を察したようだ。

「え……」

「つべこべ言わずにさっさと来なさいってば。クローゼお姉ちゃん、
はやく下に行きましょう」

マリイがクラムを引っ張った。

「ふふ、そうね」

クローゼと子供たちは部屋を出て行った。

「ふう、助かつちゃった。あの子たちにはあんまり聞かせたくなか
ったから……」

エステルが安心して息をついた。

「そうだね。あのマリイって子は察してくれたみたいだけど……」

マリイは大人だな。身体は子供、頭脳は大人って感じか？

「ふふ、良い子に恵まれて私は本当に幸せ者です……。それで、調
査に来たとおっしゃっていましたね。どうぞ、何なりと聞いてくだ
さい」

「ご協力、感謝します」

「えっと、それじゃあ……」

エステルたちがテレサ院長に先ほどの調査の結果を伝え始めた。

「まず、火災現場を調査した結果なんですが……。何者かによる放火の可能性が極めて高いことが判明しました」

「そうですか……。やはり。火には気を付けていたのでおかしいとは思っていたのですが」

「そこでお聞きしますけど……。犯人には心当たりはありませんか？ こういう事をしそうな動機があるという意味ですけど」

ヨシユアが尋ねた。

「……見当もつきません……。ミラにも余裕はありませんし恨まれる覚えもまった……。」「

テレサ院長が首を振った。

「つまり、強盗目的じゃないし怨恨が理由でもないってわけね」

「そうになると、嫌な話ですけど愉快犯という可能性もあります。事件の前後に、何か変わったことはありませんでしたか？ 見知らぬ男たちが孤児院の近くをうろついていたとか……」

「そうですね……。昼間に、エステルさんたちがお見えになってからは特に……。……あの方は関係ないでしょうし」

「あの方？」

エステルが尋ねた。

「火に包まれた建物から私たちが脱出しようとした時……。天井の梁はりが落ちてきて、玄関から出られなくなってしまうんです。ですがその時、扉を破って助けにきてくれた方がいて……。梁はりをどけて私と子供たちが逃げるのを助けて下さったんです」

「そ、そんな事があつたんだ。それってマノリアの人なの？」

「それが、私たちを助けてから村の者を呼んでくると言つてすぐに居なくなってしまう……。マノリアの方々に聞いても誰も心当たりはないそうです」

「……怪しいですね。そんな真夜中に、孤児院の近くにいたというのにもなりますし。どういう雰囲気の人でした？」

ヨシユアがさらに尋ねた。

「象牙色のコートをまとった20代後半くらいの男性です。見事な

銀髪をなさっていました」

「銀髪……」

ヨシユアが反応した。

「お若いのに、苦労なさったような深い眼差しをしていましたね。悪い方には見えませんでした」

「普通の人とは思えないけど人助けをしたのも事実だし……。確かに、犯人じゃなさそうね」

エステルが言った。

「……………」

ヨシユアは口をあけたまま黙っている。

「ヨシユア？ なによ、ポーツとしちゃって」

「いや……。そうだね、案外どこかの遊撃士かもしれないし……。その人のことは、とりあえず分けて考えた方が良さそうだ」

ヨシユアが視線をそらしたまま言った。なにやら雰囲気がおかしい。

「う、うん……？」

その時、クローゼが部屋に入ってきた。

「……………失礼します」

「あれ、クローゼさん？」

「あの子たちはどうしたの？」

「ふふ……。下でケーキを食べています。あの、先生。お客様がいらっしゃいました」

「お客様？」

テレサ院長は誰といった顔だ。

「お邪魔するよ」

男性が2人入ってきた。

「あ……………！」

「ダルモア市長……………」

ダルモア市長と秘書ギルバードだった。

「おや、昨日会った遊撃士諸君も一緒だったか。さすがはジャン君、手回しが早くて結構なことだ。さて……………」

ダルモア市長はテレサ院長の前に立った。

「お久しぶりだ、テレサ院長。先ほど、報せを聞いて慌てて飛んできた所なのだよ。だが、ご無事で本当に良かった」

「ありがとうございます、市長。お忙しい中を、わざわざ訪ねてくださって恐縮です」

「いや、これも地方を統括する市長の勤めというものだからね。それよりも、誰だか知らんが許しがたい所業もあつたものだ。ジョセフのやつが愛していた建物が、あんなにも無残に……。心中、お察し申し上げます」

ダルモア市長が軽く頭を下げた。

「いえ……。子供たちが助かったのであればあの人も許してくれると思います。遺品が燃えてしまったのが唯一の心残りですけど……」

……

テレサ院長が残念そうに視線を落とした。

「テレサ先生……」

クローゼがその様子を見た。

「遊撃士諸君。犯人の目処はつきそうかね？」

ダルモア市長がエステルたちに向き直って言った。

「調査を始めたばかりですから確かな事は言えませんが……。ひよつとしたら愉快犯の可能性もあります」

ヨシユアが答えた。

「そうか……。何とも嘆かわしいことだな。この美しいルーアンの地にそんな心の醜い者がいるとは」

「市長、失礼ですが……」

突然、秘書ギルバードが口を開いた。

「ん、なんだね？」

「今回の件、もしかして彼らの仕業ではありませんか？」
彼らとは？

「……………」

ダルモア市長は黙っている。

「ま、待つて！『彼ら』って誰のこと？」

エステルが慌てて尋ねた。

「君たちも昨日絡まれただろう。ルーアンの倉庫区画にたむろしているチンピラどもさ」

それは『レイヴン』のことか？

「あいつらが……」

「……………」

クローゼは黙っている。

「失礼ですが……。どうして彼らが怪しいと？」

ヨシユアが冷静に尋ねる。

「昨日もそうだったが……。奴ら、いつも市長に楯突いて面倒ばかり起こしているんだ。市長に迷惑をかけることを楽しんでいるフシもある。だから市長が懇意にしているこちらの院長先生に……」

「ギルバード君！」

突然、ダルモア市長が声を荒げた。

「は、はい！」

「憶測で、滅多なことを口にするのは止めたまえ。これは重大な犯罪だ。冤罪えんざいが許されるものではない」

「も、申し訳ありません。考えが足りませんでした……」

ギルバードが頭を下げた。

「余計なことを言わずともこちらの遊撃士諸君が犯人を見つけられるだろう。期待してもいいだろうね？」

「うん、まかせて！」

「全力を尽くさせてもらいます」

エステルとヨシユアが頷いた。

「うむ、頼もしい返事だ」

ダルモア市長が満足げに言った。

「ところでテレサ院長……。1つ伺いたいことがあるのだが」

ダルモア市長がテレサに長に向き直る。

「なんでしょうか？」

「孤児院がああなつてしまつてこれからどうするおつもりかな？再建するにしても時間がかかるし、何よりもミラがかかるだろう」

「………………。正直、困り果てています。当座の蓄えはありますが、建て直す費用などとても……………」

「院長先生……………」

「………………。……………」

エステルたちはその様子をただ見ていただけしかできなかった。

「やはりそうか……………。どうだろう。私に1つ提案があるのだが」

「……………。なんでしょう？」

「実は、王都グランセルにわがダルモア家の別邸があつてね。たまに利用するだけで普段は空き家も同然なのだが……………。しばらくの間、子供たちとそこで暮らしてはどうだろうか？」

「え……………」

「もちろん、ミラを取るなど無粋なことを言うつもりはない。再建の目処がつくまで幾らでも滞在してくれて構わない」

「で、ですがそこまで迷惑をおかけするわけには……………」

「どうせ使っていない家だ。気がとがめるのであれば……………。うん、屋敷の管理をして頂く。もちろん謝礼もお出にする」

「市長……………。………………。………………。少し考えさせて頂けませんか？ありがたい申し出ですけれど、いろいろな事が起こりすぎて少し混乱してしまつて……………」

「無理もない……………。ゆっくりお休みになるといい。今日のところはこれで失礼する。その気になつたらいつでも連絡して欲しい」

「はい……………。どうもありがとうございます」

テレサ院長が頭を下げた。

「ギルバード君、行くぞ」

「はい！」

ダルモア市長と秘書ギルバードが部屋を出て行った。

「は、驚いちゃった。メイベル市長もそうだったけどめっちゃめっちゃ太っ腹なヒトよね」

「そうだね……。元貴族っていうのも頷けるな」
エステルとヨシユアは感心している。その一方でクローゼは困った顔をしていた。

「先生、市長さんの申し出、どうなさるおつもりですか？」

クローゼはテレサ院長に尋ねた。

「そうですね……。あなたはどう思いますか？」

「……………」

クローゼがしばし考え込む。

「常識で考えるのなら受けたほうがいいと思います。だけど……。

一度王都に行ってしまったら……。いえ……。なんでもありません」

「ふふ、あなたは昔から聞き分けがいい子でしたからね。いいのよ、

クローゼ。正直に言っただけだよ」

「……………。あのハーブ畑だって世話する人がい

なくなるし……。それに……。それに……。先生とジョセフおじさん

に可愛がってもらった思い出が無くなってしまふ気がして……。ご

めんなさい……。愚にも付かないわがままです」

「ふふ、私も同じ気持ちです。あそこは、子供たちとあの人の思い

出が詰まった場所。でも、思い出よりも今を生きることの方が大切

なのは言うまでもありません」

「はい……………」

クローゼが頷く。

「近いうちに結論を出そうと思います。あなたは、どうか学園祭の

準備に集中してくださいね。あの子たちも楽しみにしていますから」

「……………はい」

先ほどとは違い、力強く頷いたクローゼ。

「エステルさん、ヨシユアさん」

テレサ院長がエステルとヨシユアの方を向いた。

「申しわけありませんが……。調査の方、よろしく願います」

「お任せください」

「絶対に犯人を捕まえて償いをさせてやりますから！」

第3章 白き花のマドリガル（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ダルモア市長の提案に心が揺れるテレサ院長。エステルたちは改めて犯人逮捕を誓う！

第3章 白き花のマドリガル（14）（前書き）

今回は割と短めです。次回は笑いあり、涙ありの話になります。

第3章 白き花のマドリガル（14）

マノリア村

「それにしても大変なことになったわね……。犯人捜し、どこから始めよう？」

決定的な証拠がない今、手のつけようがない状況のエステルたち。

「そうだね……。とりあえず、ギルドに戻ってジャンさんに報告した方がいい。捜査方針はそれから決めよう」

「うん、わかったわ」

エステルが頷く一方で、

「……………」

クローゼは心ここにあらずといった様子だった。

「あれ、どうしたの？ポーツとしちゃって……………」

「あ、ごめんなさい……。私もちよつと混乱しているみたいで……………」

「そっか……。そういえば、ジョセフさんって院長先生の旦那さんのこと？」

エステルがクローゼに尋ねた。

「はい。数年前にお亡くなりになりましたけど……。私もずいぶん可愛がっていただきました」

「そうなんだ……。あれ、という事は……。クローゼさんも孤児院の出身？」

「いえ、残念ですけど……。ずいぶん昔に、ある事情でお世話になったことがあるんです。それで、王立学園に入ってルーアンに来たのをきっかけにまた親しくさせていだいて……………」

「なるほど……………」

「だから、いつも遊びに来て色々お手伝いしてたんだね」

「はい……。私の受けたショックなんて先生やあの子たちに較べたらぜんぜん大したことありません。

何とかして元気づけて……………」

その時、後ろからマリイの声が聞こえた。

「クローゼお姉ちゃん！」

慌てて走ってきたマリイ。

「マリイちゃん。どうしたの、そんなに慌てて？」

「あのね、あのね。クラムのやつがどこかに行っちゃったのよ！
息を切らしながら話すマリイ。

「え……」

「ど、どこかに行っただってもしかしてマノリアの外に？」

「詳しく話してくれるかな？」

「あ、はい……。あのオジサンたちが来てから、クラム、2階に上がったみたいで……。すぐに降りてきて、真っ赤な力オして『ぜつたい許さない！』とか言つて……。そのまま飛び出してっちゃったんです！」

「ぜつたいに許さない……。そ、それってまさか！倉庫にたむろする連中のこと！？」

「うん……。『レイヴン』の連中だと思う。秘書の人が喋っていたのを聞いてしまったんだろう……」

「た、大変じゃない！まさかあの子、連中の所に乗り込むつもりなんじゃ……」

「そ、そんな……。こうしてはいただけません！私、急いで追いかけないと……」

「僕たちも付き合つよ。急げば、ルーアンに行くまでに何とか追いつけるかもしれない」

エステルたちは早速ルーアンに向かうことにした。

「クローゼお姉ちゃん……」

マリイが心配そうな顔をした。

「心配しないで。クラム君は必ず連れ戻すから。マリイちゃんは他の子たちの面倒をみてあげてね」

「うん……。お姉ちゃんたち、お願いね！」

マリイは白の木蓮亭に入っつていった。

「それじゃあ急いでルーマンに引き返しましょー！」
「はい……！」

第3章 白き花のマドリガル（14）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

クラムが単身でレイヴンの所に向かったと聞いたエステルたち。クラムを無事引き止めることができるか!?

第3章 白き花のマドリガル（15）（前書き）

クローゼが初戦闘参加！笑いと涙が混じった話です。どっちかという感動話ですかね？感想・批評等を是非お願いします。

第3章 白き花のマドリガル（15）

ルーアン市 北街区

メーヴェ海道を抜け、ルーアン市に到着したエステルたち。しかし、メーヴェ海道にはクラムはいなかった。

「……海道にはいなかったね。まさか、もう連中の所に乗り込んでいったんじゃない……」

エステルが肩を落とす。

「……………」

クローゼは心配そうな顔をしている。

「とにかく南の倉庫区画に急ごう」

このままではいけないと思ったヨシユアが2人に言った。

ラングランド大橋に差し掛かったとき、

「しまった、もう昼前か……！」

クラムが橋を渡っていた。

エステルたちが走って追いかけたが、目の前で橋が跳ね上がったしまった。

「ああっ……！クラム君、待って！」

クローゼが叫んだが、距離が遠すぎて聞こえていない。

「駄目だ……。聞こえていないみたいだ」

「もっつ！どうしてこんな時に橋がっ！30分も待ってられないわよー！」

エステルが忌々しそうに言った。

「そんな……。このままじゃあの子が……。どうしよう……。どうすれば……。」

クローゼが困惑している。

「クローゼさん、落ち着いて。忘れたのかい？君が教えてくれたこ

とを」

ヨシユアがクローゼに言った。

「え……」

「橋が無かった頃は、何を使って向こう側と行き来していたって？」
以前、クローゼが橋が無かった時は船を使っていたと教えてくれた。

「あ、小船ね！」

「……そうでした！確かホテルの裏手に貸しボートがあるはずですよ！」

エステルとクローゼが思い出した。

「よっしゃあ！それで向こうに渡りましょ！」

エステルたちは早速ホテルへと向かった。

ホテル・ブランシエ 裏手

小船に乗っていたムラート老人に声をかけた。

「ん……。なんじゃお前さんたち？」

「そのボート、貸してくれる！？急いで向こう岸まで渡りたいの！」
エステルがあせって言った。

「残念じゃが、このボートは公爵とやらの予約が入っていてな。これから水遊びをするそうじゃが……」

こんな時まで邪魔をしてくれるデュナン公爵。しかも水遊びとは……。

「そ、そんな……」

がっくりとうなだれるエステル。

「どうか……。どうかお願いします！小さな男の子が、危険な目に遭うかもしれないんです！」

クローゼが必死に頼み込む。

「泣きそうな顔をするな。孫娘のことを思い出すじゃろが。まあ、いいじゃろ。人助けとあらば仕方あるまい。とっとと乗っていくが

ええ」

ムラート老人がボートを譲った。

「あ、ありがとうございます！」

「おじさん、サンキュ！」

「ふふ、公爵とやらには整備しとると最中と言っておく。坊主、ボートの操縦は判るか？」

ムラート老人がヨシユアに尋ねた。

「はい、何とか。それじゃあ、2人とも乗って！」

エステルたちがボートに乗り込み、ヨシユアが運転した。

ルーアン市 南街区

「ここは……。倉庫区画の一番南側ね」

その時、鳥の鳴き声があった。

「あ、ジーク!?」

ジークだった。クローゼの肩にとまった。

「ピユイ。ピユピユウ、ピユイー！」

クローゼの肩の上で鳴くジーク。

「そう……。わかったわ。……やっぱりあの子、一番奥の倉庫に行ってみたんです」

ジークと話したクローゼが言った。いつ見てもこの光景は理解できない……。

「急ごう。連中のたまり場は奥の方だ」

「了解ッ！」

「はい………」

「……とぼけるなよ！お前たちがやったんだろ！？ぜったいに許さないからなっ！」

クラムがレイヴンのメンバー達に叫ぶ。

「なに言ってるんだ、このガキは？」

「コラ、ここはお前みたいなお子ちゃまが来るとこじゃねえぞ。とつと家に帰って母ちゃんのオツパイでも飲んでな」

「ひやはは、そいつはいいや！」

幹部のロッコ、デイン、レイスが笑う。

「うっうっう……。わあああああああっ！」

クラムが叫びながらロッコたちに飛び掛った。

「な、なんだ……？」

「このガキ……なにブチギレてんだあ？」

あまりの行動に困るロッコたち。

「母ちゃんが居ないからってバカにすんなよっ！オイラには先生っていう母ちゃんがいるんだからなっ！その先生の大切な家をよくも、よくも、よくもおっ！」

「ちっ……」

ロッコが面倒くさそうにクラムを突き飛ばした。

「あっっ……」

そこにデインが近づき、クラムの首を掴み持ち上げた。

「黙って聞いてりゃあいい気になりやがって……」

「どうやら、ちつとばかりオシオキが必要みてえだなあ」

「お尻百たたきといきますか？ひゃーっはっはっは！」

その時、エステルたちが倉庫に飛び入った。

「やめてください！」

クローゼが真っ先に飛び出す。

「お、お前たちは……」

デインがあわててクラムを後ろに投げ飛ばした。

「けほけほ……。クローゼ……。姉ちゃん？」

クラムがかろうじて声を出した。

「子供相手に、遊び半分で暴力を振るうなんて……。最低です……。恥ずかしくないんですか」

クローゼが哀れなものを見るように言った。

「な、なんだとー!」

「ようよう、お嬢ちゃん。ちょっとばかり可愛いからって舐めた口、利きすぎじゃないの?」

「いくら遊撃士がいた所で、この人数相手に勝てると思うか?」

ロツコが余裕の笑みを浮かべる。

「クローゼさん、下がってて!」

「僕たちが時間を稼ぐよ。その隙にあの子を助けて……」

エステルとヨシユアがクローゼに言った。

「……いいえ。私も戦わせてください」

しかし、クローゼは拒むどころか自分も戦うと言った。

「へ……」

「本当は使いたくありませんでしたけど……。剣は、人を守るために振るうように教わりました」

クローゼが細剣を抜いた。

「今が、その時だと思えます」

「ええっ!?!」

「護身用の細剣?」
レイヒア

エステルとヨシユアが驚いた。

「その子を放してください。さもなければ……実力行使させていただきます!」

クローゼが向き直り、レイヴンのメンバーに言った。

「か、かっこいい……」

「……可憐だ……」

下っ端たちはそのクローゼの姿に惚れている。

「可憐だ、じゃねえだろ!」

デインが切れた。

「こんなアマツ子にまで舐められてたまるかってんだ!」

「俺たち《レイヴン》の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！」
ロッコたちが下っ端たちに叫んだ。

「ウーッス！」

下っ端たちが呼応する。そして飛び掛ってきた！

漆黒の牙

「これで終わりだ……」

一撃必殺！

「こ、こいつら化け物か……?」

「遊撃士どもはともかく、こっちの娘もタダ者じゃねえ……」
ロッコたちが膝をつきながら言った。

「す、すごい姉ちゃん！」

クラムが驚いて言った。

「ひゅーっ！クローゼさん、やるっっ！」

エステルがはやしただてる。

「その剣、名のある人に習ったものみたいだね」

「いえ、まだまだ未熟です」

そして、クローゼがレイヴンのメンバーに近づいた。

「あの、これ以上の戦いは無意味だと思います。お願いします……。
どうかその子を放してください」

「こ、このアマ……」

「こ、ここまでコケにされてはいそうですかって渡せるかっ！」

その時、

「……そこまでにしとけや」

背後から青年の声があった。聞き覚えのある声だ。

「だ、誰だ!？」

「新手か!？」

ロッコたちが身構える。

「やれやれ、久々に来てみりゃ俺の声も忘れていたとはな……」

「ア、アガットの兄貴！」

「き、来てたんすか……」

兄貴？

「……………」

アガットがロッコたちに近づく。

「ど、どうしてあんたが……。ていうか、こいつらの知り合いなの！？」

エステルが不思議そうに尋ねる。

「……………レイス……………」

アガットがドスの利いた声でレイスを呼んだ。

「は、はい、なんでしよう？」

そこで、アガットが強烈な一撃をレイスに叩き込んだ！

「ふぎやつ！」

腹を抱えてうずくまるレイス。これは痛そうだ……。

「お前ら……。何やってんだ？女に絡むは、ガキを殴るは……。ちよつとタルみすぎじゃねえか？」

アガットが周りを一瞥しいちへつ言った。

「う、うるせえな！チームを抜けたアンタにいまさら指図されたく……………」

ロッコが反抗しようとしたとき、アガットがまたもや強烈な一撃を加えた。今度は吹っ飛んで壁にぶつかりロッコは気絶した。

「……………何か言ったか？」

アガットが何もなかったかのように言った。鬼だな、これは……。

「あ、兄貴、勘弁してくれ！ガキならほら、解放するからよ！」
デインは自分まで殴られたくないと必死だ。

「クローゼ姉ちゃん！」

クラムが駆け寄ってきた。

「よかった……。もう大丈夫だからね……………」

クローゼが抱きとめる。

「フン、最初からそうしときゃいいんだよ」
アガットが言った。

「まったく乱暴なんだから……。第一、どうしてあんたがタイミン
グよく現れるわけ？」

エステルが不満そうにアガットに尋ねた。

「ジャンのやつに聞いたただけだ。どこそのヒヨッコどもが放火事件
を捜査してるってな。さてと……」

アガットがクラムの方を向いた。

「おい、坊主」

「な、なんだよ……？」

「1人で乗り込んで来るとはなかなか気合の入ったガキだ。だが少
々、無茶すぎたようだな。あんまり、おっ母さんに迷惑をかける
んじゃないぞ」

アガットが入り口の方を見た。

「え……」

「クラム……」

テレサ院長がそこに立っていた。

「せ、先生!？」

「どうしてここが……」

クローゼも不思議な顔をしている。

「ギルドで事情を伺ってそちらの方に案内していただきました。ク
ラム、あなたという子は……」

「こ、今度だけはオイラ、あやまんないからな!火をつけた犯人を
ゼツタイにオイラの手で……」

「クラム!」

珍しくテレサ院長が怒鳴った。クラムが飛び上がる。

「テレサ先生……。どうか叱らないで下さい」

クローゼがかばう。

「いいえ。叱っているのではありませんよ。ねえ、クラム……。あ

あなたの気持ちはよく判ります。みんなと一緒に暮らしたかけがえのない家でしたものね。でもね……。あなたが犯人に仕返ししたとしても燃えてしまった家は戻らないわ」

テレサ院長がクラムに諭した。

「あ……」

「あなたたちさえ無事なら先生は、もうそれだけでいいの。他には何も望まないから……。お願いだから……。危ない事はしないでちょうだい」

「せ、先生……。うううううう……。うわああーん！」

クラムがテレサ院長に泣きついてきた。

「グス……。こういうのには弱いかも……」

エステルが目をつぶった。

「はい……。本当に、無事でよかった……」

クローゼが今の状況をかみしめた。

「ったく……。これだから女子供ってやつは。おい、小僧。院長先生たちを連れてさっさとここを引き上げろや。どうもこういうのは苦手だな」

アガットがエステルとヨシユアに言った。

「構いませんけど……。アガットさんはどうするんですか？」

「決まってるんだろ……」

アガットがディンに近づき、

「このバカどもが犯人かどうか締め上げて確かめてやるんだよ！ たつぷりと急を据えてからな！」

「ひえええええっ。か、勘弁してくださいよ〜！」

真っ青な顔をして縮こまるディン。

「なるほど……。そういう事ならお邪魔したら悪そうですね」

ヨシユアが微笑みながら院長先生を連れて倉庫を後にした。

第3章 白き花のマドリガル（15）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

何とか無事にクラムを助け出したエステル。しかし、事件の解決には繋がらない……。。

第3章 白き花のマドリガル（16）（前書き）

エステルたちはアガットに仕事を奪われてしまいます……。しかし

……。

200000文字突破です！

第3章 白き花のマドリガル（16）

ルーアン市 北街区

「本当にありがとうございます。何とお礼を言っているやら……」
倉庫から出たエステルたち。ルーアン市の入り口でテレサ院長はエステルたちに頭を下げた。

「お礼なんかいいですってば。これも仕事のうちですから。それより、いいんですか？ マノリアまで送らないで……」

「ええ、大丈夫です。メーヴェ海道は私の庭ですから。これ以上、何かして頂いたらバチが当たってしまいそうです」

テレサ院長が微笑んだ。

「気にしなくてもいいのに……」

「先生……。せめて私だけでも」

クローゼが心配そうに言った。

「ふふ、あなたは学園祭の準備に専念してちょうだい。この子たちだって楽しみにしてるのですから」

「……はい」

そこで、後ろからヨシユアが駆けつけて来た。

「よかった、間に合ったか。ボートは返してきたよ」

「あ、サンキュ」

「すみません……。お一人で行かせてしまって」

「気にしないで。大した手間じゃなかったし」

「ヨシユアさんも……。本当にありがとうございます」
テレサ院長が再び頭を下げた。

「クローゼ姉ちゃん……。それとエステル姉ちゃんとヨシユア兄ちゃん……。今日はありがとな。オイラなんか助けてくれてさ。オイラ、本当にバカだったよ」

いつになく殊勝なクラム。この件で懲りたようだ。

「クラム君……」

「弱つちいクセに仕返ししようとしてさ……。かえって姉ちゃんたちに助けられちゃって……。ホント、みっともないよな」
泣き出しそうなクラム。

「そ、そんなこと……」

「みつともなくなんかないさ」

ヨシユアが横から言った。

「え……」

「大切なものを守るために身体を張って立ち向かおうとする……。そんなの、大人だって簡単に出来ることじゃないよ。だから僕は、君のことがすごくカッコイイと思った」

「ヨシユア兄ちゃん……」

「だけど、犯人を捜し出してとつちめるのは僕たちでもできる。君は、君にしかできないやり方で先生や他の子たちを守るべきだ。一緒にいたり、お手伝いをしたり励まし合ったり、支えてあげたりね。クラム……それは君にしかできないことだよ」

「……。オイラにしか出来ないこと……。うん、兄ちゃんの言いたいこと、なんか判った気がするよ」

「どう、やれそうかい？」

「モチのロンだよ！オイラに任せておけて！」

クラムが胸を張った。

「ふふ、何から何までありがとう。それでは皆さん。私たちはこれで失礼します」

「あ、クローゼ姉ちゃん！お芝居、楽しみにしてるぜ！」

「うん、頑張っちゃうからみんなで一緒に見に来てね」

「あつたりまえだよ！またな、姉ちゃんたち！」

テレサ院長とクラムが帰っていった。

「は、よかったあ。元気を取り戻してくれて……。ヨシユアってばなかなか憎いこと言うじゃん？」

「ふふ、びっくりしました。あんなに元気になるなんて。ヨシユアさん……本当にありがとうございませう」

「いや、大したことは言っていないよ。……大切な人を守る、か」
ヨシユアの顔がかける。

「とりあえず、あの子が無事で本当によかった。クローゼさん、協力ありがとう」

「そんな……。お礼を言うのは私の方です。あ、そういえば……。あの方たちの取り調べはどうなったんでしょうか？」

「ああ、あの赤毛男が締め上げてるってアレか。もう終わってるのかなあ？」

「一旦、ギルドへ戻ろうか。クローゼさんも来るかい？」

「はい、できれば本当のことが知りたいです。いったい誰が放火なんてしたのか……」

「それじゃ、レッツ・ゴー！」
エステルたちはギルドへ戻った。

遊撃士協会ルーアン支部

「おお、ご苦労さん。どうやら男の子は無事助けられたらしいな」
ジャンが笑顔でエステルたちを迎えた。

「うん、何とかね。それよりも、驚いたわよ。あの赤毛男が来るんだもん」

「はは、アガットのことか。別件でルーアンに来た所をむりやり頼んだってわけさ。何せヤツは《レイヴン》のリーダーを務めていたからな」

「やっぱりそうでしたか」

「どつりでガラが悪いと思ったのよね」

ヨシユアとエステルは納得した。

「といっても昔の事だけだね。君たちくらいの年齢でこのルーアンに流れて来てね……。荒っぽい連中を引き連れてずいぶん暴れてくれたもんさ。あの頃に較べたら今のメンバーは可愛いもんだな」

昔が気になる言い様だな。

「そ、そんなヤツがよく遊撃士になったわね」

「まあ、ある人と知り合ったのがきっかけだね。それから遊撃士を志して今じゃすっかり若手のホープだ。人間、変われば変わるもんだよな」

「……余計なお喋りはそのくらいにしておけつての」
アガット登場！

「あ、帰ってきた……」

「人がいないのを良いことに好き放題言いやがって……。相変わらず人を喰ったヤツだ」

アガットがジャンを睨む。

「はは、誉め言葉として受け取っておくよ。それよりも取り調べはすんだのかい？」

「ああ、一通りな。絶対とは言い切れんが……。多分、あいつらはシロだろう」

「ホントに？まさか、昔の仲間だからって庇かはってるんじゃないでしょうね？」

エステルが不信な目つきでアガットを見た。

「アホ、見くびるんじゃない。昨日の夜、船員酒場で飲んだくれてたって証言もある。そして、酔った勢いだけじゃあんな周到な放火はできん……」

「むづ……」

「そういう事なら、とりあえず保留にしても良さそうですね。それに、放火までするほどの度胸がある人たちとも思えない」
もつともな意見を述べるヨシユア。

「うーん、確かに……。イキがつてるだけって感じよね」

「まあ、あいつらには俺が睨みを利かせておくさ。犯人捜しをするついでにな」

「へ……」

犯人捜し？

「事件の調査は俺が引き継ぐ。お前らには手を引いてもらう」

「あ、あんですつて〜っ!? 後からやって来たクセになにタワケたこと言つてんの!」

「納得できる説明を聞かせてもらえますか?」

エステル、ヨシユアともにこのアガットの態度には不満を言った。

「お前らは私情を挟みすぎなんだよ。遊撃士に限らず、情が絡むと判断力は鈍るもんだ。つたく、ただの民間人を戦闘に巻き込みやがつて……」

「あ……。すみません、私……」

クローゼが申し訳なさそうに謝った。

「あんたが謝る必要はねえ。こいつらの心構えの問題だ。要はプロ意識が足りねえのさ」

「な、なんでそこまで言われなくちゃいけないわけ!? 何と言われたって、あたしたちは院長先生と約束してるんだから……」

エステルが切り札を出した。

「おい、ジャン。正遊撃士と準遊撃士が同じ任務を希望した場合、規約で優先されるのはどっちだ?」

アガットが余裕の笑みを見せながらジャンに尋ねた。

「やれやれ……。わかっててそれを聞くかい? 言つまでもなく正遊撃士さ」

ジャンが呆れながら言った。

「うぐっ……」

エステルが言い返せず黙る。

「僕たちもそれなりの戦力にはなると思います。せめて手伝いくらいは……」

ヨシユアが提案する。

「ただの調査に人数は必要ない。話は終わりだ。悪く思っんじゃねーぞ」

アガットがヨシユアの提案を切り捨て、ギルドを出て行った。

「な、な、な……。何様のつもりよ、アイツ!」

「悔しいけど、彼の言い分は間違っではないからね……。反論できないのが辛いな」

相手の言い分が正しくて反論できない時が一番悔しいだろう。

「本当にすみません……。私が剣を抜かなかつたら……」

「それは関係ないってば。まったく、事あるごとにあたしたちを目的かたきにして……」

「まあ、悪気はないからどうか大目に見てやってくれ。不器用なヤツでね。あんな言い方しかできないのさ。それにどうやら今回の件……ヤツが追っている事件と関係があるかもしれないからね」

「え……」

「アガツトさんが追っている事件？」

「詳しいことは話せないが……。犯人捜しはヤツに任せてほしい。

僕の方からもお願いするよ」

そう言われると手を引くしかできない。

「そ、そんな……」

「そうですね……。では、これまでの捜査状況を報告しておきます」

「ああ、よろしくお願いします」

エステルたちは残念に思いながらこれまでの経緯を報告した。

「うん、良く調べてくれたみたいだね。でも、さっき言った通り、今度の件には色々と事情があるんだ。申しわけないが、この報告で捜査は終了とさせてもらおうよ」

「で、でも……。院長先生とあの子たちのために何かしたいと思っ
てたのに……。……こんなので……」

「エステル……」

「エステルさん……」

確かに、こんな中途半端なかたちで終わらせたくはないだろう。しかし、どうすることもできないこの状況がさらにエステルたちの苦

悩を膨らませる。

「………………。あの、ジャンさん。遊撃士の方々と
いうのは民間の行事にも協力して頂けるんですね？」

クローゼがしばし考えた後、ジャンに尋ねた。

「ああ、内容にもよるけど。王立学園の学園祭なんか大勢のお客さ
んが来るらしいからうちが警備を担当してるしね」

「でしたら……。エステルさん、ヨシユアさん。その延長で、私た
ちのお芝居を手伝って頂けないでしょうか？」

「え…………？」

「それって、どういうこと？」

「毎年、学園祭の最後には講堂でお芝居があるんです。あの子たち
も、とても楽しみにしてくれているんですけど……。とても重要な
2つの役が今になっても決まらなくて……………」

来週に学園祭があるっていうのに、いまだ重要な役が決まっていな
いなんて……。そんなんで、いいんかい！？」

「も、もしかして……………」

もしかしくなくても……………。

「その役を、僕たちが？」

「はい、このままだと今年の劇は中止になるかもしれませんが。楽し
みにしてくれているあの子たちに申しわけなくて……。そこで昨夜
学園の生徒会長にお2人のことを話したんです。そしたら、すごく
乗り気になって連れてくるように言われて……。あまり多くはあり
ませんが、運営予算から謝礼も出るそうです」

「ど、どうしてあたしたちなの？自慢じゃないけど、お芝居なんて
やった事ないよ？」

「片方の、女の子が演じる役が武術に通じている必要があって……。
エステルさんだったら上手くこなせると思っています」

野生児エステルここに活躍の場が与えられたり。

「な、なるほど……。うーん、武術だったらけっこう自信はあるか
も……………」

「確かにピッタリだね。それでもつひとつの役は？」

ヨシユアが尋ねる。

「そ、それは……。私の口から言うのは……」
クローゼが目を伏せた。

「言うのは？」

「……恥ずかしい、です」

クローゼが照れた。

「そ、それってどういう意味？」

「もー、ヨシユアってば。しつこく聞くと嫌われるわよ。お祭りにも参加できるし、あの子たちも喜んでくれる……。しかもお仕事としてなら一石三鳥ってやつじゃない！こりゃ、やるっきゃないよね？」

すっかり乗り気のエステル。

「ちょ、ちょっと待ってよ。ジャンさん、こついつのもアリなんですか？」

ヨシユアがあわててジャンに尋ねた。

「もちろん、アリさ。民間への協力、地域への貢献、もろもろ含めて立派な仕事だよ。アガットが来たおかげでそれなりに余裕も出来たし……。よかつたら行つてくるといい」

「やつたね？」

「ふう……。何だかイヤな予感がするけど。あの子たちのためなら頑張らせてもらうしかないか。ただ、他に用事があるんだつたら王立学園に向かう前に済ましておいた方がよさそうだね。劇の手伝いをするとなつたら他のことをしている暇はなさそうだし」

「なるほど、確かにそうかも」

エステルが頷く。

「ね、クローゼさん。ちょっと寄り道することになるかもしれないけど、いいかな？」

「あ、はい。私のことは気にしないでください。ちなみに王立学園の場所ですけど……。メーヴェ街道に出て、最初の三叉路を東に向

かった林道の先にあります」

「うん、わかったわ。それじゃ、レッツ・ゴー！」

エステルたちはジェニス王立学園に向かうことにした。

第3章 白き花のマドリガル（16）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルたちはクローゼの演劇の手伝いをする事になった。初めて学園というものを経験するエステルとヨシユア。次回から王立学園ストーリー開幕です！空の軌跡FCの見所の1つです。是非ご期待ください！

第3章 白き花のマドリガル(17)(前書き)

王立学園編第1話です。感想お待ちしています。

第3章 白き花のマドリガル（17）

ジェニス王立学園

ヴィスタ林道を抜けて辿り着いたジェニス王立学園は見事なものだった。白を基調とした洋風の校舎だった。

「は、ここが王立学園か。なんて言うか……落ち着いた感じのいい場所ね」

「静かだし、勉強するにはもってこいの環境みたいだね」

エステルとヨシユアは校舎を見上げて言った。

「ふふ、今は授業中ですから。もう少ししたらとたんに騒がしくなりますよ。学園祭も間もないですし」

「なるほど。みんな準備に大忙しなんだね」

「はい。生徒会長に紹介したいんですけどまだ授業中ですから……。まずは学園長室に案内しますね」

「学園長室？」

「王立学園の責任者であるコリンズ学園長のお部屋です。本館1階の右奥にあります」

「ん、りょーかい」

「それじゃあまずは学園長に挨拶に行きましょうか」

本館1階 学園長室

「学園長。ただいま戻りました」

「クローゼ君、戻ったか。おや、そちらの君たちは……」

コリンズ学園長がエステルとヨシユアに目をやった。

「初めまして、学園長さん」

「遊撃士協会から来ました」

エステルとヨシユアが挨拶した。

「ほう、まだ若いのに遊撃士とは大したものだ。孤児院で火事があったそうだがもしや、その関係で来たのかね？」

「はい、実は……」

クローゼはコリンズ学園長に放火事件を含めた一通りの事情を説明した。

「そうか……。大変なことになったものだ。わしらも、何らかの形で力になれるといいのだが……。……。……。まず。最初は、学園祭を成功させて子供たちを元気づけること……。そこから始めるしかないだろうな」

コリンズ学園長が話した。

「はい……。そこで、お芝居についてはエステルさんとヨシユアさんに協力していただこうと思ひまして」

「いい考えだと思うよ。エステル君、ヨシユア君。どうかよろしく願ひする」

「あ、はい！」

「微力を尽くさせて頂きます」

「劇に関しては、生徒会長のジル君に全てを任せている。監督も担当しているから詳しい話を聞くといいだろう。わしの方からは……寮の手配をしておこうか」

「え……」

「寮、ですか？」

エステルとヨシユアが驚いた。

「何と言つても学園祭までほとんど時間がない。おそらく毎日、夜遅くまで練習する必要があるだろう。そうすると、泊まる場所が必要になるのではないかな？」

「あ、な……るほど……」

「それは助かります」

その時、学園のチャイムが鳴った。

「ちょうど授業も終わりだな。さっそく、生徒会長に紹介してあげるといいだろう」

「はい。エステルさん、ヨシユアさん。次は生徒会室に案内しますね。この本館の右手にあるクラブハウスの2階にあります」
「うん、それじゃ行きましょ」
エステルたちは生徒会室に向かった。

生徒会室

「は、忙しい、忙しい。各店のチェックと予算の割り当てはOK……。招待状の発送も問題なしと」
生徒会長のジルが予定に目を通す。

「残る問題は、芝居だけか……。このまま見つからなかったら俺たちがやる羽目になるのかね」

溜息をついているのはハンスである。

「私はともかく、あんたは問題外でしょうが。衣装合わせをした時のおぞましい恰好かっこうといったら……」
ジルが身をよじる。

「言っなつての……。俺も思い出さたくないんだから」

「ただいま。ジル、ハンス君」

クローゼたちが生徒会室に入った。

「あ、クローゼ!? 火事の話、聞いたわよ。大変だったそうじゃない」
「い」

「院長先生とチビたちは大丈夫だったのか？」

「ええ……。一応、みんな無事でした。ただ、孤児院の建物が完全に焼け落ちてしまつて……」
クローゼが肩を落とす。

「そうか……」

「元気出さないよ。悩んでいたって仕方ないわ。チビちゃんたちが楽しめるように学園祭を成功させないとね」

ジルは前向きだ。

「うん、テレサ先生にもそんな風に注意されちゃった。だから、全力で頑張るつもり」

「あんたが本気を出せば百人力だから期待してるわよ。ところで、さつきから気になってるんだけど……。その人たち、どちらさま？」

ジルがエステルとヨシユアに目を向けた。

「初めまして。あたし、エステルっていうの」

「ヨシユアです、よろしく」

「それじゃ、あなたたちがクローゼの言ってた……。！」

ジルが驚いた。

「ふふ、約束通り連れてきたわ。2人とも協力してくださいさるって」

「いや、助かったわ！初めまして、エステルさん、ヨシユアさん。私、生徒会長を務めているジル・リードナーといます。今回の劇の監督を担当してるわ」

「俺は副会長のハンスだ。脚本と演出を担当している。よろしくな、お2人さん」

「うん、こちらこそ」

「よろしくお願いします」

「うん、それにしても……」

ジルがエステルとヨシユアをじっくり見ている。

「な、なに？」

「さすが遊撃士だけあってスポーツも得意そうな感じね。エステルさん、剣は使える？」

ジルがエステルに尋ねた。

「まあ、それなりに……。棒術がメインだけど父さんに習ったこともあるし」

「よっしゃ、これで決まりね。あなたには、クローゼと剣を使って決闘してもらおうわ」

「け、決闘!？」

「もちろんお芝居で、ですよ」
当然ではないか。

「クライマックスに2人の騎士の決闘があるのよ。まあ、劇の終盤を彩る迫力のあるシーンなんだけど……。クローゼと勝負できるくらい腕の立つ女の子がいなくてねえ。この子、フェンシング大会で男子を押しつけて優勝してるし」

ジルが溜息をついた。

「へへ、すっごい！」

エステルが感心した。

「ちなみに、結晶で負けたのはそこにいるハンスだけだね」

「悪かったな、負けちまって。ちなみに俺が弱いんじゃない。クローゼが強すぎるんだよ」

「あ、あくまで学生レベルの話ですから……。本職のエステルさんには足元にも及ばないと思います」

クローゼがきまり悪そうに言った。

「またまた、謙遜しちゃって。でも、そういう事ならちょっとは協力できるかも。クローゼさん、頑張ろうね」

「はい、よろしくお願いします」

「はは、それにしても……。女騎士の決闘なんて、なかなかユニークな内容だね」

ヨシユアが言った。

「女騎士？2人に演じてもらうのはれっきとした男の騎士役だけ？ハンスがこともなげに言う。」

「え」

まさか、このパターンは……。

「しかし、ヨシユアさんの方は文句のつけようがないわね……。期待してもいいんじゃない？」

ジルの目が妖しく光る。

「ああ、悔しいが同感だぜ」

「????？」

エステルは状況がわからないらしい。

「えっと、その劇……どういう筋書きなのかな？」

ヨシユアが尋ねる。

「題名は『白き花のマドリガル』。貴族制度が廃止された頃の王都を舞台にした有名な話なの。貴族出身の騎士と平民出身の騎士による王家の姫君をめぐる恋の鞘当て……。しかもこの3人、身分は違うけどお互い幼なじみの関係にあってね。それに、貴族勢力と平民勢力の思惑と陰謀が絡んできちゃうわけよ。まあ、最後は大団円、文句なしのハッピーエンドだけどね」

ジルがあらすじを説明した。

「へ〜、面白そうじゃない」

「そ、それで……。どうして女の子が男性役を？」

「それが、今回の学園祭ならではの独創的かつ刺激的なアレンジだね。男子と女子が、本来やるべき役をお互い交換するっていう趣向なのさ」

「ということはヨシユアは……。」

「男女が役を入れ替える？へ〜、そんなのよく先生たちが許してくれたわね」

「性差別からの脱却！ジェンダーからの解放！」

ジルが机を叩いた。すごい言葉を使うな。

「とかなんとか理屈をこねて無理矢理押し通したちゃったわ。本当は面白そうっていう、それだけの理由なんだけど？」

ああ、そうだろうね。

「ジルったらもう……。」

「ほんと、こんなヤツが生徒会長とは世も末だよな」

ハンスが溜息をついた。

「あはは うん、確かに面白そうかも」

「ちょ、ちょっと待った！その話の流れで言ったら……。僕が演じなくちゃいけない『重要な役』っていうのは……。」

ヨシユアが青ざめながら慌てて言った。

「いやあ、ホント助かったぜ」

「クローゼ、ありがとね。いい人たちを紹介してくれて？」

「あ、あはは……。しめんなさい、ヨシユアさん……」
姫君の役か……！

第3章 白き花のマドリガル（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エステルは騎士役、ヨシユアは姫君の役を担うことになった。次回から、演劇の特訓が始まります。

第3章 白き花のマドリガル（18）（前書き）

王立学園編第2話。初の学園生活を経験するエステルとヨシユア。

第3章 白き花のマドリガル（18）

王立学園 講堂

エステルとクローゼは舞台衣装に着替えてステージの上に立っていた。

「うーん、これが舞台衣装か。騎士っていうから鎧でも着るのかと思ってたけど」

「さすがに甲冑かこうだと演技に支障をきたすからね。現在の、王室親衛隊の制服をアレンジする方向で行ったのよ」

「ふーん、そうなんだ。クローゼさんはショートだし、ハマリ役って感じがするけど」

「ふふ、ありがとございます。エステルさんもとても良く似合ってますよ」

「えへへ、そうかな？とところで……。なんで色違いになってるの？」「私が演じるのは平民の《蒼騎士オスカー》。エステルさんが演じるのは貴族の《紅騎士ユリウス》。それぞれの勢力のイメージカラーなんです」

「は、なるほど。それじゃ、ヨシユアは……」

「2人の騎士の身を案ずる王家の《白の姫セシリア》だ。ささ姫、どうぞこちらへ」

ハンスの声が舞台脇から聞こえた。

「ちょ、ちよつと待った。……まだ心の準備が……」

ハンスがヨシユアを舞台に引き出した。

「……」
「……」
「……」
舞台上に引き出されたヨシユアは視線をそらしたままだ。しかし、これは……。とても男とは思えないほどの美しさだった。

エステル、クローゼ、ジルは言葉を失っている。

「頼むから何か言って……。このまま放置されるのはちょっとツライものがある……」

ヨシユアがたまりかねて言った。

「いやあ、何て言うか……。ぜんっぜん違和感ないわね」

エステルが褒め称えた。

「びっくりしました。はあ、すっごく綺麗です……」

クローゼは見惚れている。

「うんうん、自身持っていていいぞ。事情を知らずにあんたを見たら、俺、ナンパしちやいそうだもん？」

ハンス、それは……。

「正直な感想、ありがとう。ぜんぜん嬉しくないけど……」

「ムフフ……。まさに私の狙い通り……。この配役なら、各方面からウケを取れること間違いなしね……。みんな、一致団結して最高の舞台にするわよっ！っ！っ！」

ジルがかけ声を上げた。

「おーっ！」

「はいっ！」

「うーっす！」

エステル、クローゼ、ハンスは乗ったが、

「しくしく……」

ヨシユアだけは悲しそうにしていた。

その夜から、エステルとヨシユアはそれぞれ女子寮と男子寮に泊まることになった。

「では……。エステルさん。手前のベッドを使ってください」

「サンキュ。でも、クローゼさんとジルさんって同じ部屋なんだ。」

道理で仲がいいわけね」

「ふふ……。学園に入って以来の仲です」
クローゼが微笑んだ。

「ルームメイトにして腐れ縁ってところかしらね。ところで、エステルさん。1つ提案があるんだけど……」

ジルがエステルに言った。

「なに？」

「私のことは、ジルって呼び捨てにしてくれるかな？さん付けされるとなんだかムズ痒いかゆのよね。代わりに私も、エステルって呼び捨てにさせてもらおうから」

「あはは……。うん、そうさせてもらおうわ」
エステルが苦笑した。

「でしたら、私のこともどうか呼び捨てにしてください。その方が自然な気がしますし……」

クローゼも呼び捨てにするよう言った。

「そう？だったら遠慮なく……。ジル、クローゼ。しばらくの間、よろしくね」

「はい、こちらこそ」

「まあ、女所帯だし気軽に過ごしてもいいわよ。建物の中にいる限りは男子の目も気にしなくていいし」

ジルが言った。

「だからと言って、だらしないのは感心しないけど」

クローゼがジルに言った。

「はあ、これだからいい子ちゃんちゃんは困るのよね。カマトトぶつちやってもう」

「あ、ひどい。そんな事を言う子にはお菓子焼いてもあげないから」

「あ、うそうそ。クローゼ様。私が悪ごございましたです」

「だーめ、反省しなさい」

クローゼとジルが楽しそうに話している。

「……………」

その前でエステルはその様子をじっと見ていた。

「あら……?」

「どうしたの、エステル? まじまじと見詰めたりして……」

「あはは、いやあ……。なんだかうらやましいなって」

「うらやましい?」

ジルがなぜといわんばかりに問い返した。

「あたしもロレントに仲のいい友達はいるけど……。せいぜい、お互いの家にお泊りするだけだったのよね。こんな風に、気の合う友達と一緒に暮らせていいなって思って」

「……クローゼ、どう思う?」

「どうって言われても……。エステルさんに羨ましあつしがられるのはちよっと納得いかないような……」

「へ?」

エステルはその言葉の意味がわからないようだ。

「あ、やっぱり? 何言ってやがるんだこのアマは、って感じよね」

「な、なんで! ?」

「あんだねえ……。自分が、誰と一緒に旅をしているのかわかってる? 自宅では、一つ屋根の下で暮らしていたんでしょーが」

ジルがやれやれといった感じで言った。

「え……。それって。もしかしてヨシユアの話?」

「もしかしなくてもそうですよ」

「あんな上玉の男の子といつも一緒にいるくせに女所帯を羨ましがるとは……。もったいないオバケが出るわよ?」

「も、何言ってるかなあ。ヨシユアはあたしの兄弟みたいなものだってば。何年もの間、家族同然に暮らしてきたんだから」

「ほほう、家族同然ね……。あなたがそのつもりでもヨシユア君の方はどうかしら?」

ジルの目が妖しく輝く。

「え」

「あの年頃の男の子って抑えが利かないって言うし。まして、あんな

たみたいな健康美あふれた子が側にいたら色々とつらかったりして

……」
ジルはかまわず喋り続ける。

「もう、ジル！ごめんなさい、エステルさん。ジルってば、興が乗ると人をからかう悪癖があるんです」

「ぶーぶー。悪癖ってなんだよー」

「何か文句でも？」

クローゼがジルを睨む。

「や、滅相もないっす」

「あ、あはは……。もう、ビックリさせないでよ。そんな、まさかねえ。ヨシユアが……。だなんて」

「意識してる、意識してる」

懲りないジル。

「ジル！」

「おっと、忘れてたわ。寝る前に日報を先生に提出しなきゃ。それじゃ、おやすみ。先に寝ちゃっていいいわよ」

ジルはそそくさと出て行った。

「まったくもう……。そうだ、エステルさん。私のでよかったらパジャマを貸しますけど……」

「……………」
エステルは呆然としたまま立っている。

「エステルさん？」

「ふえっ!？」

エステルがあわてて振り向く。

「あ、ああ、パジャマね。うん、何でもいいから貸して」

こうして、思わぬ形でエステルとヨシユアの学園生活はスタートした。

家族以外の同世代の仲間とともに起き、学び舎キャに行く朝……。 (と

言っても、寮は学園の敷地内にあるのですぐに着くのだが……)

午前中は、他の生徒と一緒に授業に参加させてもらい……

昼はランチを共にしながら他愛のないおしゃべりを楽しみ……

そして、放課後は厳しい稽古が夜まで続く……

忙しくも楽しい学園生活は瞬^{またた}く間に過ぎていった。

第3章 白き花のマドリガル（18）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

迫る学園祭当日。次回は学園祭前日の話です。

第3章 白き花のマドリガル(19)(前書き)

王立学園編第3話。学園祭前日です。感想・評価お待ちしております。

第3章 白き花のマドリガル（19）

学園祭前日

講堂での練習……

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄しゆうを決する運命にあつたのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」

紅騎士ユリウスが剣を構えた。

「運命とは自らの手で切り拓ひらくもの……。背負ひらうべき立場も姫の微笑みも、今はは遠い……」

蒼騎士オスカーは立ち尽くしている。

「臆おそしたか、オスカー！」

「だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になつた君と戦いたくて仕方ないらしい……」

そして、オスカーが剣を抜く。

「革命という名の猛たけき嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもつて運命を決するべし！」

そして、ユリウスが剣を構えた。

「おお、我ら二人の魂、空の女神もご照覧あれ！いざ、尋常に勝負！」

「応！」

そして、2人は見詰め合う。

「はっ……」

「ふう……」

エステル、クローゼが一息ついた。

「やったっつ？ついに一回も間違わずにここのシーンを乗り切ったわ！」

「ふふ、迫真の演技でしたよ」

「えへへ、クローゼにはぜんぜん敵わないけどね。セリフを間違え

たこと、ほとんど無かつたじゃない？」

「私はずいぶん前から台本に目を通していましたから。私もようやく、エステルさんの動きに付いていけそうです。色々と、稽古をつけてくれて本当にありがとうございました」

「ううん、クローゼの場合は基本がしつかりしてたからね。その気になれば、いつでも遊撃士資格を取れると思うよ？」

「ふふ、おだてないで下さい」

そして、2人は椅子が並べられた講堂を見た。

「いよいよ、明日は本番ですね。テレサ先生とあの子たち、楽しんでくれるでしょうか……」

クローゼが講堂を見たまま言った。

「ふふ、本当に院長先生たちを大切に思ってるんだ……。まるで本当の家族みたい」

「……………」

クローゼは突然黙った。

「あ、ゴメン。変なこと言っちゃった？」

「いえ……。エステルさんの言う通りです。家族というものの大切さは先生たちから教わりました……。私、生まれて間もない時に両親を亡くしていますから」

「え……」

「裕福な親戚に引き取られて何不自由ない生活でしたが……家族がどういふものなのか私はまったく知りませんでした。10年前のあの日……先生たちに会うまでは」

10年前というと……。

「10年前……。まさか《百日戦役》の時？」

「ということ、クローゼもまさか……」。

「はい、あの時ちょうどルーアンに来ていたんです。帝国軍から逃れる最中に知っている人ともはぐれて……。テレサ先生と、旦那さんのジョセフさんに保護されました」

クローゼも戦争の被害者だった。

「そうだったんだ……」

「戦争が終わって、迎えが来るまでのたった数ヶ月のことでしたけど……。テレサ先生とおじさんは本当にとても良くしてくれて……。その時、初めて知ったんです。お父さんとお母さんがどういふ感じの人たちなのかを。家族が暮らす家というのがどんなに暖かいものなのかを……」

「クローゼ」

「す、済みません……。つまらない話を長々と聞かせてしまって」「ううん、そんな事ない。明日の劇……頑張って良い物にしようね！」

「……はい！」

「あたしが言うのも何だけど、絶対面白くなると思うわよ。ジルとハンスも色々頑張ってくれたしね」

「ふふ、そうですね。でも、最大の功労者はヨシユアさんじゃないかしら。あんなに演技が上手いなんて……」

「う、うん……。乗り気じゃなかったクセに見事なまでのお姫様っぷりよね」

「発声といい、間の取り方といい、プロの役者さん顔負けですよ。ヨシユアさんって演劇の経験がおりなんですか？」

「あ、うーん……。あたしも、出会うまでの事は良く知らなかったりするのよね。何があったのか知らないけどあんまり喋りたがらないし……」

エステルが顔を伏せる。

「あ……。すみません……。失礼なことを聞いてしまって」

「あはは、いいわよ別に。うーん、確かにヨシユアは何でも完璧にこなすタイプかな。ホント、いつも余裕しゃくしゃくで可愛くないっていうか……。たまに慌てたりする時なんかは可愛かったりするんだけどね」

人がいないことを良い理由に言い続けるエステル。

「クスクス……。……」

また、黙るクローゼ。

「どうしたの？」

「私たちの役、逆だった方が良かったかもしれませんね……」

「えっ？」

「ユリウスとオスカーですよ。エステルさんがオスカーの方が良かったような気がして……」

「え、どうして？確かにあたしが貴族出身のユリウスっていうのもちよっと似合わない気がするけど……」

「いえ、そういう事ではなくて。……あの、劇のラストで……」

「あ、ああ……。姫様がオスカーに、つてやつね」

「は、はい……」

「ヨ、ヨシユアも役得よね。クローゼ、ひよっとしてヨシユアにされるのイヤとか？」

「と、とんでもないです！」

あわてて否定するクローゼ。

「でも、何だかお2人に申し訳ないような気がして……」

「や、やだな。ジルみたいなこと言わないでよ。どうせヨシユアだって手のかかる妹くらいにしかあたしを見ていないんだから……」

「そう……なんですか？」

「いつも父さんと一緒になってあたしのことを子供扱いするし。まったく、腹が立つたら……。とにかく、そういう事で気にする必要はまったくナシ！」

エステルはきつぱりと言った。

「は、はい……」

その勢いに押されてクローゼはうなづいた。

「……ああ、ここに居たのか」

ヨシユアとハンスがやってきた。

「ヨ、ヨシユア！？」

「ハンス君も……」

「予行演習は終わったのにまだ稽古をやっていると。2人とも精

が出るじゃないか」

「決闘シーン、うまく行きそうかい？」

ハンスとヨシユアが言った。

「ま、任せなさいっての！完璧に演じてみせるんだから！」

エステルが答えた。どこか慌てているように見える。

「そっか……。うん、楽しみにしてるよ」

ヨシユアは微笑んだ。

「そういえば、お2人はどうしてここに？私たちを捜していたみたいですけど……」

「ああ、エステルもヨシユアも寮に泊まるのは今日が最後だろ？明日の景気づけもかねて一緒に夕食でもと思ってさ」

ハンスが言った。

「あ、そうなんだ。うん、あたしも賛成！」

「ご一緒させて頂きます」

「ところで……。ジルさんは一緒じゃないの？」

ヨシユアが気になっていた事を尋ねた。そう言えば、見ないな。

「つい先ほど学園長に呼ばれましたけど……。私、ちょっと呼んできませんね」

「あ、あたしも行く！ヨシユアたちは先に食堂で席を取っててよ」
エステルが言った。

「うん、判った。それじゃ、食堂に行こうか」

「がってんだ、大将」

空賊団か、お前は……。

「誰が大将だよ……」

そう言っつて、ヨシユアとハンスは一足先に向かった。

「ふふ、あの2人も仲良くなったみたいね。ヨシユアって、なかなか人を寄せつけない所があるからちよつと心配だったけど……」

「くす……」

クローゼが笑った。

「え、どうしたの？」

「いえいえ、何でもありませんよ」
「何も無いことはないだろう。」

「んー、まあいいや。とりあえず着替えましょ。この恰好で歩き回ったらさすがに恥ずかしいもんね」

「ふふ、そうですね」

エステルは舞台脇で着替えた。

「……これでよしと。それじゃあ、ジルを迎えに行くとしますか」
「はい。学園長室に行きましょう」
エステルたちは学園長室へ向かった。

学園長室

「なるほど……。それはいいアイデアですよ！さすが学園長、冴えてますねえ」

ジルが何やら喜んでいる。

「ははは……。おだてても何も出んよ。それでは、リストの方は君に任せても構わないかね？」

「はい、任せてください！」

そこで、エステルたちが学園長室に入ってきた。

「失礼します」

「あ、すみません……。まだお話中でしたか？」

「いやいや。ちょうど終わったところだよ。実はなあ……」

「ああ、学園長！喋っちゃダメですってば！明日の楽しみが減っちゃうじゃないですか！」

ジルが慌てて学園長を口止めする。

「な、なんなの？あからさまに怪しいわね」

「ジルったら……。また何か企んでいるの？」

「ふっふっふ……。それは明日のお楽しみよん。それより、どうし

たの？ひよつとして私に用？」

「ええ、実は……」

明日の景気づけを兼ねて食堂で夕食会をすることを説明した。

「あら、いいじゃない。それじゃ、明日の学園祭の成功を祈って騒ぐとしますか。パーッとやりましょ、パーッと！」

「ふふ、あまり羽目を外して明日に差し障りがないようにな」

「はい」

「それじゃ、ジル。食堂に行こっか」

「うん、行きましょ」

エステルたちは食堂へと向かった。

「やつほ〜 連れてきたわよ〜」

「ふ〜、みんなお疲れ〜」

「お疲れ、ジルさん」

「よう、待ってたぜ。さっそく料理を注文するか？」

「あ〜、もうお腹ペコペコよ。劇の仕上げに加えて、今日も一日、学園中を走り回ってたし……」

ジルが疲れた声で言った。

「ふふ……。でも、それも今日で終わりね」

「そうよね、ホント。気合を入れ直さなくちゃ。新しい仕事も入ったことだし……」

「新しい仕事？なんだそりゃ？」

ハンスが尋ねる。

「うん、あとで相談するわ。じゃ、学園祭の成功を祈って今日はパーッと騒ぐわよ！エステル、ヨシユア君。明日はよろしく頼んだからね！」

「うん、任せておいて！」

「精一杯頑張らせてもらっしょ」

その夜、エステルたちは食堂でにぎやかな一時を過ごし……
最後に、劇の成功を祈ってソフトドリンクで乾杯した。
寮に戻ってから、明日のために早めに眠りにつくエステルたちだっ
た。

第3章 白き花のマドリガル（19）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ明日は学園祭当日。乞うご期待！

第3章 白き花のマドリガル(20)(前書き)

王立学園編第4話。学園祭当日です。今回は演劇が始まる直前までです。

第3章 白き花のマドリガル(20)

学園祭当日

「大道具、小道具の用意は万全……。照明も調整済みつと……。よっしゃ！これで準備完了だわ！」

エステルたちは講堂で最後のチェックをしていた。ジルは一通りチェックして問題なかったようだ。

「そろそろ開場だ。劇の上演までは時間はあるからそれまで遊んでくるといい」

「そう来なくっちゃ 屋台とか片っ端から回るわよっ！」
食べ物中心のエステル。

「回るのはいいんだけど……。食べ過ぎて、劇の最中に動けなくならないようにね」

ヨシユアが念を押した。

「そ、そんなの判ってるわよ。そういうば……。みんなも一緒に回るんでしょ？」

「私とハンスは、生徒会の仕事が残ってるから無理ね。あんたたちだけで楽しんできてちょうだい」

ジルが言った。

「ええっ!？」

「生徒会の仕事って……。ひょっとして昨日言ってた？私も手伝おうか？」

「いいって、いいって。あんたはエステルたちを一通り案内してあげなさい。チビちゃんたちもそろそろ来るんでしょ？」

「あ……。うん、ごめんね」

「ま、俺たちもヒマを見て適当に楽しませてもらっさ。あ、そうだヨシユア……。来場者の中に俺好みの女性を見かけたらこっそり教えに来てくれよ？抜け出して口説きに行くからさ？」

「はいはい、分かったよ。美人で背が高くて大人の魅力を備えたお

姉さんね」

「おお、それでこそ我が友だ」

だめだな、これは……。いろいろな意味で……。

「まったく、男ってやつは……」

「うーん、理解に苦しむわね」

「クスクス……」

女性陣は苦笑している。

その時、開場のアナウンスが流れた。

「……大変長らくお待ちせしました。ただ今よりジェニス王立学園
第52回・学園祭を開催します」

「うわ……。すごい数のお客さんだわ」

「さすがは名高いジェニス王立学園だね。学園レベルの祭りとは思
えないな」

「ふふ、今年は例年よりもお客さんが多いみたいです」

確かに、それを裏付けるかのように来場者で溢れている。

「よし、ついに始まったか。ハンス、とつとと行くわよ！」

「おおよ。俺たちは生徒会室にいるから何かあったら来てくれ」

「了解。2人とも頑張ってるね」

ジルとハンスは先に行ってしまった。

「では、私たちも見物を始めましょうか？」

「うん、レッツ・ゴー！」

エステルたちも学園祭を楽しみ始めた。

校庭

そこにはナイアルがいた。

「お、エステルにヨシユアじゃないか。どうしたんだ、こんなとこ」

るで」

「あ、ナイアル……。あんたまで遊びに来たの？」

「学園祭には色々な業界人も呼ばれていますからね。ひよっとして取材の一環ですか？」

「ま、そんなとこかな。その前にちょうどハラ減ってたとこなんだ。腹ごしらえしていくとするか」

ナイアルは屋台へと向かっていった。

人文科教室

喫茶店となっていた人文科教室。

「あ、メイベル市長！？」

テーブルに座っていたのはメイベル市長でその脇にはメイドのリラだった。メイドに扮した生徒の中に本物のメイドがいるのは少し滑稽な光景だった。

「まあ、エステルさんとヨシユアさんじゃないですか！」

「市長がどうしてここにいるの？」

「ふふ、実は私この学園の卒業生ですよ。毎年、学園祭には顔を出させてもらっていますわ」

「へえ、そうなんだ」

「それよりお2人こそ一体どういたしましたの。ひよっとしてギルドのお仕事かしら？」

「えへへ、実は……」

エステルたちはメイベル市長に事の経緯を話した。

「まあ、演劇の助っ人に？私、これでも演劇にはうるさいほうですの。ふふ、エステルさんとヨシユアさんが出演するとなると見ない手はありませんわね」

「（うーん、知り合いの人にはなおさら見てほしくないなあ……）」
後ろでつぶやくヨシユア。

社会科教室

そこにはデュナン公爵と執事フィリップの姿が……！

「か、閣下、いつも申しておりますが……。公衆の面前ではご発言にくれぐれもご注意下さいませ」

執事フィリップの心配をよそに、

「ここは王家が金を出してやってる学園だからな。女王の甥であるこの私がしっかり視察しなくては。ふはは、生徒たちもさぞかし光栄に思っていることだろう」

わけのわからない発言をするデュナン公爵。

「（このオジサンも招待されてたのね……）」

「（うん、呼ばないわけにはいかなかったんだらうな……）」

エステルはいまだオジサン扱いのままだ。

食堂・クラブハウス

クラブハウスのテーブルの一角にはどこかで見かけた顔の女性が座っていた。

「（あれ、この人……どこかで見たような？）」

「（確か空賊の砦でリシャル大佐と一緒にいた女性士官だね）」

実はそれ以前にリシャル大佐と初めて会ったボースの南街区でもいたんだけど……。

「フフ、大佐は以前から王立学園を訪れてみたいとおっしゃっていましたがけれど……。何分、今はご多忙の身……。もう少しすれば、ゆっくり訪れて頂くことも出来るはずだわ」

カノーネ大尉は1人つぶやいていた。

クラブハウスの食堂のカウンターの前にはこれまた見かけた顔が。しかし、この人は忘れられないな。

「……………あれ？もしかしてアルバ教授じゃない？」
もしかしなくてもそうだけど。

「おや、エステル君とヨシユア君じゃないですか。これは奇遇ですね。2人とも元氣そうで何よりです」

こっちとしては、あんたが元氣そうで何よりだけど……………。

「ひよつとして教授も学園祭に招待されたんですか？」

「いえ、残念ながらそういうわけではありません。この地方にある《紺碧こんへきの塔》の発掘調査に来たんですよ。こちらの学園にひよつとしたら資料でもないかと思いましてね」

「はー、熱心ねえ」

エステルは相変わらずのアルバ教授に感心した。

「はは、ミラのない私の研究を支えているのは情熱と体力だけです。そういえば、この学園のカリキュラムは幾つかのコースに分かれているそうですね。やっぱり、展示とかやっているんですか？」

「はい、3つのコースのうち社会科コースだけです……………。学生たちによる自主研究の発表が行われています」

クローゼが詳しく説明した。

「ほう、いいですねえ。学生時代を思い出しますよ。その研究発表というのはどこでやっているんですか？」

「そっか、教授ってはこの学園は初めてなんだっけ……………。うーん、何て説明すればいいのか」

「そうですね。この学園は建物が多いです……………。あの、よかったですから案内しましょうか？」

「それは助かりますけど……………。せっかく学園祭を楽しんでいる時に手間を取らせるのは申しわけですね」

「いいっていいって。大した手間じゃないんだから」

「そうですね……。では、君たちの都合がいい時に展示場までの案内をお願いします。それまで、この学食でノンビリと待っていますから」

しばし学園を回った後、アルバ教授のもとに向かった。

「いやいや、それにしても学生たちはいいですねえ……。この値段で毎日食事ができるなんてうらやましい限りですよ」
本当、貧乏なんだな……。

とにかく、エステルたちはアルバ教授を社会科教室に案内した。

社会科教室

「ほ、なかなかどうして本格的な展示じゃないですか。歴史から経済まで色々なジャンルがあるみたいですね。いやあ、助かりました。これはなかなか楽しめそうだ」

「いえ、どういたしまして。私も社会科専攻ですから興味を持って頂けると嬉しいです」

「うーん、あたしはちょっとこういう難しい所は苦手だけど……」

エステルは勉強全般苦手だろう。これに限ったことではないと思う。

「はあ、たまには君もこういう物に興味を持とうよ。遊撃士だって色々な知識を必要とすることは多いんだから」

もっともなことを言うヨシユア。

「むぐっ……」

「はは、それじゃあさっそく拝見させてもらいます。案内してくれて本当にありがとう」

アルバ教授はさっそく資料を見に行った。

階段を下りたところで、

「あつ、姉ちゃんたち！」

孤児院の子供たちだった。

「みんな……。来てくれたのね！」

「よく来たわね、チビっ子ども」

「どう、楽しんでるかい？」

エステルたちは子供たちに駆け寄って言った。

「うんー！すっごく楽しいよ」

ポーリイは満面の笑顔。

「ぼく、いっぱいお菓子たべちゃった！」

ダニエルは相変わらず食中心……。

「あんたはちよつと食い意地はりすぎだつてば」

マリイがそんなダニエルをたしなめた。

「ふふ……。テレサ先生と一緒に来たの？」

「うん、そこで他の人と話をしてたけど……。あ、来た来た」

クラムが後ろを向いた。

「ふふ、こんにちは」

テレサ院長が来た。

「あ、テレサ先生！」

「先生……。こんにちは」

「今日は招待してくれて本当にありがとうね。子供たちと一緒に楽しませてもらってますよ」

テレサ院長が笑った。

「なあ、クローゼ姉ちゃん。姉ちゃんが出る劇っていつぐらいに始まるのさ？」

「あたしたち、すっごく楽しみにしてるんだから」

クラムたちが尋ねた。

「そうね……。まだ、ちよつとかかるかな。ちなみに、私だけじゃなくてエステルさんたちも出演するのよ？」

「ほんと？わあ、すっごく楽しみ〜！」

「ヨシユアちゃん、どんな役で出るのー？」

ポーリイがヨシユアが一番嫌なことを聞いた。

「えっと……何て言ったらいいのか……」

ヨシユアは答えることができない。

「あはは……。見てのお楽しみってね？それより院長先生。まだ、マノリアにいるの？」

「はい、宿の方のご好意で格安で泊めて頂いています。ですが……」
そこで閉口するテレサ院長。

「????？」

エステルはわからない様子だが、
「……………」

ヨシユアはわかってしている様子で、目をつむっていた。

「ねえ、みんな。劇の衣装、見たくない？綺麗なドレスとか騎士装束がいっぱいあるよ」

「綺麗なドレス!？」

「騎士しよーぞく!？」

マリイとクラムが誰よりも早く反応した。

「ふふ……。興味があるみたいだね。それじゃあ特別に劇の前に見せてあげるよ」

「やったあ!」

「ポーリイもいくー」

「（舞台の控え室にいるからあとからゆっくり来てよ）」

ヨシユアがエステルたちにそっと耳打ちした。

「それじゃあ付いて来て」

ヨシユアは子供たちを連れて本館を出て行った。

「ふふ、ヨシユアさんは本当に気が利く子ですね。ちょっと、子供たちの前では言いづらいことだったので……」

「それじゃ、ひょっとして……」

エステルもようやくわかったようだ。

「ええ、市長のお誘いを受ける決心ができました。これ以上、マノリアの方々には迷惑をかけられませんから。今日の学園祭が終わったあの子たちにも打ち明けます」

「そう……ですか……。寂しくなるけど……仕方ありませんよね……」
クローゼがうつむく。

「ふふ、そんな顔をしないで。王都とはいっても飛行船を使えばすぐの距離です。それに私、王都に行ったら仕事を捜そうと思っています。ミラを貯めて、いつかきつと孤児院を再建できるように……」

「院長先生……」

「……………」

「さてと……。あの子たちの後を追いますか。ヨシユアさん1人に任せておくわけにはいきませんからね」

講堂

「うわ。これ、めっちゃ格好いい！オイラにも着れないかなあ」

「あなたの背丈じゃムリよ。あたしも、この白いドレス着てみたいんだけどね」

子供たちはそれぞれ関心を持っているようだ。

「おーおー。楽しんでるみたいね。あれ……」

エステルはあたりを見渡す。

「ヨシユアはどこ行ったの？」

確かに、ヨシユアの姿が見当たらない。

「ヨシユア兄ちゃん？オイラたちをここに連れてきてからどこかに行っちゃったぜ」

「お姉ちゃんたちが来るまで待っててって言われました」

「ふーん……？」

「どうしたんでしょうか？」

エステルたちは首をひねった。

「えへへー。ポーリイしってるよー。ヨシユアちゃんってば銀色のお兄ちゃんをさがしにいったんだよー」

「銀色のお兄ちゃん？」

いきなり言われてもわからないエステルたち。

「火事があったときにポーリイたちを助けてくれたお兄ちゃんだよー。アタマが銀色でキレイなのー」

「ええっ!？」

「そ、その人を学園の中で見かけたの？」

「うんー。ちらっとだけどねー。ヨシユアちゃんも目をまん丸にしてたよー」

意外と周りに鋭いポーリイ。

「ポーリイ、お前なあ。なんでその時にオイラたちに言わないんだよ」

「だって、クレープ食べるのにいそがしかったんだもん」
子供らしいセリフをありがとう。

「エステルさん……」

「うん……。院長先生。あたし、ちょっと失礼するね」

「ええ……。そうした方が良さそうね。クローゼ。あなたも行ってあげなさい。私たちのことは気にしなくてもいいですから」

「すみません、先生……」

「えー、お姉ちゃんたち、もう行っちゃうの？」

ダニエルが不満の声をあげる。

「うん……。ごめんね。劇、楽しみにしてて」

「そーそー、目いっぱい頑張っちゃうんだから」

講堂の外へ出たエステルとクローゼ。

「とにかく……。ヨシユアを捜しましよ。その銀髪男が何者かは知

らないけど……。なんだかイヤな予感がする」

「ちよつと待つてください。……ジーク！」

どこからともなく現れたシロハヤブサのジーク。

「ピユイ？」

「聞きたいことがあるの。ヨシユアさんがどこに行ったかわかる？」

「ピユイ」

ジークは校舎裏へと飛び去っていった。

「相変わらず凄いわね。あれ、あっちの方角って……」

「ええ……。本館の裏手にある旧校舎の方です」

エステルたちは旧校舎へと向かった。

旧校舎

さっきまでは鍵が閉ざされていた旧校舎だが、鍵が開いていた。やはり、間違いないようだ。エステルたちはすぐさま旧校舎の中に入った。

「おかしいな……。確かに気配があつたはずなのに……。……でも、まさか……」

ヨシユアは立ち尽くしたまま考える。そこに、

「ヨシユアっ！」

エステルとクローゼが走ってきた。

「エステル、クローゼ……」

「もう、あんまり心配かけないでよね！銀髪男を追いかけたついでうからビツクリしちゃったじゃない」

「あれ……。何で知ってるんだい？」

「ポーリィちゃんが教えてくれたんです。あの子も見えていたらしく……」

「そうか、鋭い子だな……。それらしい後姿を見かけてここまで追ってきたんだけど……。どうやら撒まかれたみたいだ」

「まあ……」

「ヨシユアを撒くなんて、そいつ、タダ者じゃないわね。いったい何者なんだろう？」

「……わからない。ただ、孤児院放火の犯人じゃなさそうな気がする。あくまで、僕のカンだけどね」

「そっか……。それにしても……。どうして1人で行動するかな？」

「本当にそうですよ。私たちに伝言するなりしてくれればいいのに……」

「ごめん。心配かけたみたいだね」

2人に詰め寄られるヨシユア。

「べ、別に心配してないってば。あくまでチームワークの大切さを指摘しているだけであって……」

なぜか照れるエステル。

「うふふ、ウソばかり。さっきは、あんなに慌てていたじゃないですか？」

「そ、そんな事ないってば。そういうクローゼだって真剣な顔してたクセにさ」

「そ、それは……」

「はは……。2人ともありがとう」

その時、校内アナウンスが流れた。

「……連絡します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。繰り返しします。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください」

「そっか……。もうそんな時間なんだ」

「はい、衣装の準備をしたらすぐに開演になると思います」

「よし、それじゃあいよいよ出陣ってわけね！あ、銀髪男の方は

どうしよう?」

「そうだね……。カルナさんに伝えて注意してもらおうかなさそう
だ」

エステルたちは、銀髪の男の情報を遊撃士のカルナに伝えてから講
堂に向かった。

そして、30分後……。いよいよ開場になった。

講堂

衣装に着替えたエステルたち。

「うっわ……。めっちゃめっちゃ人がいる。あう、何だか緊張し
てきた」

エステルが舞台脇から人の様子を見て言った。

「大丈夫ですよ、エステルさん。あれだけ練習したんですから」

「それに、劇が始まったら他のことは気にならなくなるさ。君って、
1つの事にしか集中できないタイプだからね」

「むっ、言ってくれるじゃない。でもまあ、そのカツコじゃ何言わ
れても腹は立たないけど?」

「う……………」

それは同感。

「はいはい。痴話ゲンカはそのくらいで。……今年の学園祭は大盛
況よ。公爵だの市長だのお偉いさんがいるみたいだけど私たちが臆
することはないわ。練習通りにやればいいとのこと」

「俺たち自身の手でここまで盛り上げてきた学園祭だ……。最後ま
で、根性入れて花を咲かせてやるとしようぜ!」

第3章 白き花のマドリガル(20) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ次回は演劇開幕です！そして学園祭もクライマックスに！

第3章 白き花のマドリガル(21) (前書き)

いよいよ演劇が開幕!どうぞごゆっくりお楽しみください。
感想お待ちします。

第3章 白き花のマドリガル（21）

講堂の中が薄暗くなる。

「……大変お待たせしました。ただ今より、生徒会が主催する史劇、《白き花のマドリガル》を上演します。皆様、最後までごゆっくりお楽しみください……」

「時は七耀暦1100年代……。100年前のリベールではいまだ貴族制が残っていました。一方、商人たちを中心とした平民勢力の台頭も著しく……。貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化していったのです。王家と協会による仲裁も功を奏しませんでした……。そんな時代……。時の国王が病で崩御されて一年が過ぎたくらいの頃……。早春の晩、グランセル城の屋上にある空中庭園からこの物語が始まります……」

語り手のジルが舞台脇へと引き上げる。

「街の光は、人々の輝き……。あの1つ1つにそれぞれの幸せがあるんですね。ああ、それなのにわたくしは……。」「

白の姫セシリアが憂いの言葉を漏らす。

「姫様……。こんな所にいらっしやいましたか」

「そろそろお休みくださいませ。あまり夜更かしをされてはお身体に障りますわ」

侍女のレイニとリンファがセシリアを気遣う。

「いいのです。わたくしなど病にかかれば……。そうすれば、このリベールの火種とならずに済むのですから」

「まあ、どうかそんな事を仰らないでくださいませ！」

「姫様はリベールの至宝……。よき旦那様と結ばれて王国を統べる

方なのですから」

「わたくし、結婚などしません。亡きお父様の遺言とはいえこればかりはどうしても……」

「どうしてでございますか？あのように立派な求婚者が2人もいらつしやるのに……」

「1人は公爵家の嫡男ちやくななにして近衛騎士団長のユリウス様……」

「もう1人は、平民出身ながら帝国との紛争で功績を挙げられた猛将オスカー様……」

「はあ、どちらも素敵ですわ？」

2人して声をあげるレイ二とリンファ。

「………………。彼らが素晴らしい人物であるのはわたくしが一番良く知っています」

そこで数歩前へと歩くセシリア。

「ああ、オスカー、ユリウス……。わたくしは……どちらを選べばいいのでしょうか？」

「（まあ、あのお姫様は……ヨシユアさんではありませんか。ふふ、男女の配役が逆とは……。ジルもなかなか考えましたわね）」

「（はい、お嬢様。ただヨシユア様はともかく他のメイドの方はちよつと……）」

リラ……そこは突っ込んでだめだろう……。

「覚えているか、オスカー？幼き日、棒切れを手にしてこの路地裏を駆け回った日々のことを」

「ユリウス……。忘れることができようか。君と、セシリア様と無邪気に過ごしたあの日々……。かけがえのない自分の宝だ」

「ふふ、あの時は驚いたものだ。お忍びで遊びに来ていたのが私だけではなかったとはな……」

「舞い散る桜のごとき可憐さと清水のごとき潔さを備えた少女……。セシリア様はまさに自分たちにとっての太陽だった」

「だが、その輝きは日増しに翳^{かげ}りを帯びてきている。貴族勢力と平民勢力……。両者の対立は避けられぬ所まで来ている。姫の嘆きも無理はない……」

「そして……。ああ、何という事だろう。その嘆きを深くしているのが他ならぬ我々の存在だとは……」

「（きゃあきゃあ！お姉ちゃんたちステキ！）」

「（く、悔しいけど……。男よりも格好いいかも……）」

「（ふふ……。静かに見ましようね）」

「ユリウスよ、判っておろうな。これ以上、平民どもの増長を許すわけにはいかんだ。ましてや、我らが主と仰ぐ者が平民出身となった日には……。伝統あるリベールの権威は地に落ちるであろう」

貴族勢力筆頭のラドー公爵が厳かに言った。

「お言葉ですが、父上……。東に共和国が建国されてから10年ほどの年月が流れました。最早、平民勢力の台頭も時代の流れなのではないかと」

ユリウスが歩み寄って言った。

「おぞましいことを言うな！」

ラドー公爵が席を立てて怒鳴った。

「何が自由か！何が平等か！」

ユリウスに詰め寄り怒鳴り続けるラドー公爵。

「高貴も下賤^{げせん}もひとまとめにして伝統を捨てるそのあさましさ。帝国の軍門に下った方がはるかにマシと言つものよ！」

「父上！」

ユリウスが叫んだ。

「ヒック……。公爵の言う事ももつともだ。平民どもに付け上がらせたら伝統は失われるばかりだからな」

このおっさんは……。しかも酔っているじゃないか！

「（閣下……。もう少し声を抑えめに……）」

「オスカー君。君には期待しているよ王家さえ味方に付けられれば貴族派を抑えることができる。そうすれば、我々平民派が名実ともに主導権を握れるのだ」

平民派代表のクロード議長が言った。

「しかし議長……。自分は納得できません。このような政治の駆け引きにセシリア様を利用するなど……」

「フフ、なんとも無欲な事だな。いくら名目上の地位とはいえ王となるチャンスだというのに。君が拒否するというのであれば流血の革命が起きるといっただけ……。貴族はもちろん、王族の方々にも歴史の闇に消えて頂くだけのことだ」

「議長！」

オスカーが叫んだ。

「（フム、大したものだ。時代考証もしっかりしている。最初、男

女の役が逆と聞いていかなものかと思いましたがな」
ダルモア市長が頷く。

「（ふふ、生徒たち全員の努力のたまものでしょうな。それと協力をしてくれた若き遊撃士たちの……）」

「流血の革命だけは起こさせるわけにはいかない……。ユリウスもセシリア様も死なせるわけにはいかない……。自分は……いったいどうしたらいいんだ」

悩むオスカーのところに酔っ払いが現れた。

「ういっく……。ううう……。だめだ……。気持ち悪い……」

「おっと、大丈夫か？」

オスカーは酔っ払いのもとに寄る。

「あまり飲み過ぎるものではないな。いくら春とはいえこんな所で寝たら風邪を引くぞ」

「うう……。親切な騎士様……。どうもありがとうござえますだ」

「騎士様はやめてくれ……。自分は大した人物ではない。何をすべきかも判らずに道に迷うだけの未熟者だ……」

「まったくその通りだな」

「なに？」

その時、酔っ払いがオスカーの腕をナイフで切った。

「くっ、利き腕が……」

「けけけ……。こいつには痺れ薬が塗ってある。大人しく観念してもらおうか」

「貴様……。何者かに雇われた刺客か!？」

「あんたが目障りというさる高貴な方のご命令でなあ。前払いも気が良かったし、てめえには死んでもらうぜっ!」

「（なるほど……。なかなか見せてくれるじゃねえの。となるとこの次の展開は……。……いかにいかに。危うく仕事を忘れるとこだったぜ）」
「ちやっかりいるナイアル。それにしても仕事とは？」

「久しぶりですね、姫」

「ユリウス……。本当に久しぶりです……。今日は……。オスカーと一緒にではないのですね。お父様のご存命だったころ……。宮廷であなただ達が談笑するさまは侍女たちの憧れの的でしたのに」

「……。姫もご存じのように王国は存亡の危機を迎えています。私と彼が親しくすることは最早、かなわぬものと……。」「

「今日は姫に、あることをお願いしたく参上しました」

「お願い……。ですか？」

「私とオスカー……。近衛騎士団長と若き猛将との決闘を許していただきたいのです。そして勝者には……。姫の夫たる幸運をお与えください」

「！……！」

「（フフ……。なかなかドラマチックですこと）」
「カノーネ大尉も……。」

「貴族勢力と平民勢力の争いに巻き込まれるようにして……。親友同

士だった2人の騎士はついに決闘することになりました。彼らの決意を悟った姫はもはや何も言えませんでした。そして決闘の日……。王都の王立競技場グランアリーナに2人の騎士の姿がありました。貴族、平民、中立勢力など大勢の人々が見届ける中……。セシリア姫の姿だけがそこには見られませんでした」

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄しゆうを決する運命にあつたのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」

紅騎士ユリウスが剣を構えた。

「運命とは自らの手で切り拓ひらくもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今はは遠い……」

蒼騎士オスカーは立ち尽くしている。

「臆したか、オスカー！」

「だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい……」

そして、オスカーが剣を抜く。

「革命という名の猛たけき嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもつて運命を決するべし！」

そして、ユリウスが剣を構えた。

「おお、我ら二人の魂、空の女神エイドスもご照覧あれ！いざ、尋常に勝負！」

「応！」

2人は剣を交える。

「やるな、ユリウス……」

「それはこちらの台詞だ。だが、どうやら……いまだ迷いがあるようだな！」

剣でお互い押し付けながら語る。そしてユリウスが先に攻撃を仕掛けた。オスカーは防ぐだけで精一杯だった。

「どうしたオスカー！お前の剣はそんなものか！？帝国を退けた武勳はその程度のものだったのか！」

「くっ……。おおおおおおおっ！」

オスカーが雄叫びとともに仕掛ける。

「さすがだユリウス……。なんと華麗な剣捌きな事か。く……………」

オスカーが右腕を押さえる。

「オスカー、お前……。腕にケガをしているのか！？」

「問題ない……。カスリ傷だ」

「いまだ我々の剣は互いを傷つけていない筈……。ま、まさか決闘の前に……………」

その時、控えていたクロード議長が、

「卑怯だぞ、ラドー公爵！貴公のはかりごとか！？」

反対側のラドー公爵に抗議した。

「ふふふ……。言いがかりは止めてもらおうか。私の差し金という証拠はあるのか？」

余裕の笑みを漏らすラドー公爵。

「父上……。何ということを」

「いいのだ、ユリウス。これも自分の未熟さが招いた事。それにこの程度のケガ、戦場では当たり前のことだろう？」

「……………」

「次の一撃で全てを決しよう。自分は……。君を殺すつもりで行く」

「オスカー、お前……。わかった……。私も次の一撃に全てを賭ける」

2人が後ろに飛び退いた。

「更なる生と、姫君の笑顔。そして王国の未来さえも……。生き残った者が全ての責任を負うのだ」

「そして敗れた者は魂となって見守っていく……。それもまた騎士の誇りだろう」

「ふふ、違くない。……………」

互いに目を閉じ、次の瞬間、

「はああああー！」

「おおおおおー！」

両者同時に仕掛けたが、

「だめ つー！」

「あ……………」

セシリア姫が間に入っていた。

「……………姫……………？」

「セ……………シリア……………？」

体をくずすセシリア姫。

「ひ、姫 ツー！」

「セシリア、どうして……………。君は欠席していたはずでは……………」

セシリアの体を支えながら語りかけるオスカー。

「よ、よかった……………。オスカー、ユリウス……………。あなたたちの決闘

なんて見たくありませんでしたが……………。どうしても心配で……………戦う

のを止めて欲しくて……………。ああ、間に合ってよかった……………」

「セシリア……………」

「ひ、姫……………」

「皆も……………聞いてください……………。わたくしに免じて……………どうか争い

は止めてください……………。皆……………リベールの地を愛する大切な……………仲

間ではありませんか……………。ただ……………少しばかり……………愛し方が違った

だけのこと……………。手を取り合えば……………必ず分かり合えるはずで……………」

……………」

「お、王女殿下……………」

「もう……………それ以上は仰いますな……………」

ラドー公爵とクロード議長が膝を折った。

「ああ……………目がかすんで……………。ねえ……………2人とも……………そこに……………い

ますか……………？」

「はい……」

「君の側にいる……」

「不思議……あの風景が浮かんできます……。幼い頃……お城を抜け出して遊びに行った……路地裏の……。オスカーも……。ユリウスも……。あんなに楽しそうに笑って……。わたくしは……。2人の笑顔が……。だいすき……。だ……。から……。どうか……。……。いつも……。笑って……。いて……。……」

そこで力尽きたようにセシリアの腕から力が抜けた。

「姫……？嘘でしょう、姫！頼むから嘘だと言ってくれええ！」

セシリアの身体をゆるするユリウス。

「セシリア……自分は……」

オスカーはセシリアの身体を抱きしめた。

「姫様、おかわいそうに……」

「ああ、どうしてこんな事に……」

侍女の2人が顔を伏せる。

「殿下は命を捨ててまで我々の争いをお止めになった……。その気高さと較べたら……。貴族の誇りなど如何ほどの物か……。そもそも我々が争わなければこんな事にならなかったのに……」

ラドー公爵が膝を折ったまま言った。

「人は、いつも手遅れになってから己の過ちに気がつくもの……。これも魂と肉体に縛られた人の子としての宿命か……。エイドスよ、大いなる空の女神よ。お恨み申し上げます……」

クロード議長も同様だ。

「まだ……。判っていないようですね」

空が明るく照らし出される。

「……確かに私はあなたたちに器としての肉体を与えました。しかし、人の子の魂はもつと気高く自由であるはず。それをおとしめているのは他ならぬ、あなたたち自身です」

「ま、眩しい……」

「何て綺麗な声……」

「おお……なんたること！方々、畏れ多くもエイドスが降臨なさいましたぞ！」

王都の司教が叫んだ。

「これが女神……」

「なんとという神々しさだ……」

ユリウスとオスカーが見上げる。

「若き騎士たちよ。あなたたちの勝負、私も見させてもらいました。なかなかの勇壮さでしたが……肝心なものが欠けていましたね」

「仰るとおりです……」

「全ては自分たちの未熟さが招いたこと……」

「議長よ……。あなたは、身分を憎むあまり貴族や王族が、同じ人である事を忘れてはいませんか？」

女神エイドスがクロード議長に言った。

「……面目次第ありません」

「そして公爵よ……。あなたの罪は、あなた自身が一番良く判っているはずですね？」

続けて公爵に言った。

「……」

公爵は自戒しているようだ。

「そして、今回の事態を傍観するだけだった者たち……。あなたたちもまた大切なものがかけていたはず。胸に手を当てて考えてもらいなさい」

侍女や貴族、平民の人々は黙って考えている。

「ふふ、それぞれの心に思い当たる所があるようですね。ならば、リベールにはまだ未来が残されているでしょう。今日という日のことを決して忘れる事がないように……」

そこで女神エイドスは消えていった。

「ああ……」

「消えてしまわれた……」

だが、

「……………ん……………」

セシリアが起き上がった。

「あら……………ここは……………」

「ひ、姫!?」

「セシリア!?」

「まあ……………ユリウス、オスカー……………。まさか、あなたたちまで天国に来てしまったのですか?」

「……………」

ユリウスとオスカーは驚いて声が出ない。

「こ、これは……………。これは紛^{まご}う方なき奇跡ですぞ!」

王都の司教が驚愕した。

「姫様!」

侍女たちがセシリアに駆け寄った。

「本当に、本当に良かった!」

「きゃっ……………。どうしたのです2人とも……………。あら……………公爵……………議長までも……………。わたくし……………死んだはずでは……………」

「おお、女神^{エイドス}よ!よくぞリベールの至宝を我らにお返しくださった!」

「大いなる慈悲に感謝しますぞ!」

ラドー公爵とクロード議長が天を仰いだ。

「オスカー、ユリウス……………。あの……………どうなっているんでしょう?」

「セシリア様……………。もう心配することはありません。永きに渡る対立は終わり……………全てが良い方向に流れるでしょう」

「甘いな、オスカー。我々の勝負の決着はまだ付いていないはずだろっ?」

「ユリウス……………」

「そんな……………。まだ戦うというのですか?」

「いえ……………。今回の勝負はここまです。何せ、そこにいる大馬鹿者が利き腕をケガしておりますゆえ。しかし、決闘騒ぎまで起こして勝者がいないのも恰好が付かない。ならば、ハンデを乗り越えて

互角の勝負をした者に勝利を！」

「待て、ユリウス！」

「勘違いするな、オスカー。姫をあきらめたわけではないぞ。お前の傷が癒えたら、今度は木剣で決着をつけようではないか。幼き日のように、心ゆくまでな」

「そうか……。ふふ……。わかった、受けて立とう」

「もう、2人とも……。わたくしの意見は無視ですか？」

「そ、そういうわけではありませんが……」

「ですが、姫……。今日の所は勝者へのキスを。皆がそれを期待しております」

「……。わかりました」

セシリアがオスカーに近づき、キスをした。

「きゃあきゃあ？」

「お2人ともお似合いです？」

侍女たちがはやし立てる。

「空の女神も照覧あれ！今日という良き日がいっまでも続きますように！」

ユリウスが叫んだ。

「リベールに永遠の平和を！」

「リベールに永遠の栄光を！」

「フフ……。やはり最後は大団円か。だが……。それでいい」

講堂の扉の前にいた銀髪の青年がそう呟いて講堂を出て行った。

こうして《白き花のマドリガル》は大好評のうちに幕を閉じた。同時に、学園祭の終了を告げるアナウンスが鳴り響き……

来場客は、みな満足した表情で学園を後にするのだった。

第3章 白き花のマドリガル（21）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

無事演劇を終えたエステルたち。そして、王立学園を出る前に……。

第3章 白き花のマドリガル(22) (前書き)

学園祭が成功して喜ぶエステルたち。そしてテレサ院長に思いもよらないことが……。

第3章 白き花のマドリガル(22)

講堂 控え室

「いや、ほんとお疲れ！監督の私が言うのも何だけど、最高の舞台だったわよっ！」

ジルがエステルたちをねぎらった。

「最初、男女が逆ということで笑われてしまったけれど……。みんな、劇が進むに連れて真剣に見てくれて本当によかった」
クローゼが言った。

「うん、そうだね。あんな恰好した甲斐があったよ。もう2度としないけど……」

ヨシユアが溜息をついた。

「はは、そんなこと言うなよ。写真部の連中が劇のシーンを何枚か撮っていたけど……。お前さんの写真がどれだけ売れるか楽しみだぜ」

「ハア、勘弁してよ……」

「エステルたちの写真もすっごく売れると思うわよ。男子はもちろん下級生の女の子あたりにもね。『お姉さま』なんて呼ばれちゃったりして？」

「もう、ジルったら……」

「……………」

エステルは下を向いたままだ。

「あれ……。どうしたの、エステル？」

「ふえっ……。え、あの、何の話!？」

「いや……。大した話じゃないけど……。劇が終わってからボーツとしてみるみたいけど大丈夫かい？」

「ま、ハードな決闘だったから疲れちまったのも無理ないさ」

「調子悪いんだったら医務室に案内するわよ？」

「だ、大丈夫だってば！これでも遊撃士なんだからこのくらいの疲

れ、日常茶飯事よ。ただ、気が抜けたってというか、頭が混乱してるってというか……」

「あ……。エステルさん、もしかして……」
クローゼが何か気づいたようだ。

「ち、違うんだからね？全然、そういうんじゃない……。あーもう、とにかく全然問題ナシ！」

エステルのアタマがパンクした。

「????」

その時、テレサ院長たちが入ってきた。

「ふふ……。失礼してもいいかしら」

子供たちが一斉にエステルたちに駆け寄ってきた。

「クローゼ姉ちゃん！オスカー、カツコ良かったぜ！やっぱオトコはああでなくちゃ！」

クラムがクローゼに言った。

「ふふ、ありがとう」

「エステルさんもすごく良かったですよ！ああん、ユリウス様？」

マリイがとろけた声で言った。

「ちよ、ちよつとマリイ……」

そんなマリイに困るエステル。

「ヨシユアちゃん　とっても可愛かったよー」

「うん？ボクもうつとりしちゃったあ」

ポーリーとダニエルがヨシユアに言った。

「あ、あはは……。ありがとう……」

ヨシユアは複雑な気分だ。

「ふふ、みんなで楽しませてもらいましたよ。恋と友情の間で悩みながら時代の奔流に立ち向かっていくそれぞれの主人公たち……」

手に汗を握る決闘の果てに待ち受けている哀しい決着……。そして心温まる大団円……。本当に素晴らしい劇でした」

「いや、そう言って頂けると頑張った甲斐がありますよ。あ、そ

うだ……ハンス」

「ああ、そうだったな」

ジルとハンスが目配せした。

「なに、どうしたの？」

「ちよつと用を思い出したの。すぐに戻ってくるからそのままおもてなししてて」

「う、うん……？」

首をかしげるエステルをよそにジルとハンスは行ってしまった。

「今の人たちは、ジルさんにハンスさんと言ったかしら。クローゼのお友達でたしか生徒会の人だったわね」

「はい、今回の劇では監督と演出を担当しました」

「そう……感謝しなくてはね。本当に、ルーアン地方でのいい思い出になりました」

「先生……」

「この子たちにはまだ……？」

クローゼとヨシユアが目を伏せる。

「ええ……。マノリアに帰ってから話します。そして早ければ明日にでも発たとうかと……」

「そ、そんな急に!？」

エステルが声を上げた。

「なになに、何の話だよー？」

クラムが興味ありげに尋ねる。

「失礼でしょ、クラム！大人の話にわりこんだりしてマリイが怒る。」

「いいのよ、マリイ。でもとりあえずは宿屋に帰るとしましょうか。夕食を食べて……話はそれからいいですね？」

「う、うん……？」

「それではクローゼ……エステルさんもヨシユアさんも。私たち、そろそろ失礼しますね。今日は本当にありがとう。素晴らしいものを見せて頂いて」

「あ、ちょっと待って。ジルたちが戻ってくるから……」

その時、ジルたちが戻ってきたようだ。

「……失礼するよ」

コリンズ学園長までが来た。

「まあ、コリンズ学園長……」

「久しぶりだのう、テレサ院長。せっかく来て頂いたのに挨拶が遅れて申しわけなかった」

「とんでもありません……。本当に素晴らしいお祭りに招いていただいて感謝しますわ」

「ふふ、生徒たちも頑張った甲斐があるというものだ。……事情はクローゼ君から聞いた。本当に大変なことになったものだ。そこで、わしらも微力ながら力になればと思っただけ……」

「え……」

「ジル君」

「はい」

ジルはなにやら封筒を持っている。

「どうぞ、お受け取りください」

ジルは、テレサ院長に王立学園の紋章が入った分厚い封筒を渡した。

「これは……？」

「来場者から集まった寄付金でちょうど100万ミラあります。孤児院再建に役立ててください」

「ひ、ひゃく万ミラ……！」

「すごい大金ですね……」

エステルたちが驚く。

「ど、どうしてこんな……？」

「今回は、公爵やボース市長など多くの名士が来場したからのう。例年よりも多く集まったのだよ」

「学園長……」

「そんな、いきません！こんなものは受け取れません！」

「遠慮する必要ありませんよ。毎年、学園祭で集まった寄付金は福

社活動に使われているんですから」

「孤児院再建に使われるのなら寄付した方々も納得しますって」
ジルとハンスが言う。

「でも……そんな……。ここまでして頂くわけには……」

「先生……どうか受け取ってください」

「クローゼ……ですが……」

「先生が戸惑う気持ちも判ります。でも……どうか考えてみて欲しいのです。それだけのミラがあったら孤児院を再建するのはもちろん、王都に行く必要もありません。あのハーブ畑だって放っておかなくてもいいんです」

「……………」

「クローゼ君の言う通りだ。亡きジョセフ君と何よりも子供たちのために……。あなたは拘こたわりを捨ててそのミラを受け取るべきだろう」

「……ああ……。もう……何とお礼を言っているのか……。ありがとう……。本当にありがとうございます……」

「グス……よかったあ……」

「うん、これで一件落着だね」

「な、なあ……。王都に行くってなんだよ？何がどうなっちゃってるわけ？」

クラムが尋ねる。

「いいのです……。もう心配しなくても……。あなたたちには……本当に苦勞をかけましたね……」

「べ、別に苦勞なんてしたつもりはないけど……。それよりも先生……どうして泣いてるのさあ？」

「バカねえ、クラムったら。そんなの嬉しいからに決まってるじゃない」

テレサ院長と子供たちがマノリアに帰った後……

エステルとヨシユアは他の生徒と一緒に祭りの後片付けをした。

そして、片づけが終わった頃にはすっかり夕方になっていた。

「……せっかくだからもう一泊して行けばいいのに。これから学園祭の打ち上げだってあるのよ?」

「あはは……。残念だけど遠慮しとくわ。新米のクセに、あまりギルドを留守にするのもなんだしね」

「今日中に報告したいから悪いけど、これで失礼するよ」

「そうか……。ああ、今夜からまた俺だけになっちまうのか。独り寝っていろいろは寂しいぜ」

「そんな……。まさか……?」

「ええっ!?!」

エステルが驚いて声を上げた。

「ハンス……。悪ふざけが過ぎるよ。エステルも信じないように」

「あ、あはは、冗談ね……」

「ほんと、あんたたちってば一緒にいて退屈しなかったわ。また何かあったら遠慮なく遊びに来なさいよね?」

「もちろん泊りがけでな」

「うん……。ありがと」

「ぜひ寄らせてもらおうよ」

「ふふ……。それでは行きましようか。早くしないと日が暮れてしまいますから」

「あんたはこれからマノリア村に行くのよね?」

「ジルがクローゼに尋ねた。」

「うん、先生たちと話したい事が一杯あるし……。外出許可を貰ってきちゃった」

「せっかくの打ち上げに揃って主役がいなくなるのはちょっと残念だけど……。ま、仕方ないよね。ゆっくり過ごしてきなさいな」

「そういや、院長先生たち……。あんな大金を持ち歩いてちよっと危なくなかったか?」

「あ、それは心配しないで。警備に来てた遊撃士のカルナさんが護衛を引き受けてくれたから」

「わざわざ学園長さんが頼んでくれたみたいだね」

「さすが学園長。やることにソツがないぜ。……よし……それじゃあ……」

「元気でね。エステル、ヨシユア。頑張って修行して正遊撃士を目指しなさいよ？」

「うん、まっかせて！」

「君たちも勉強、頑張ってね」

そうしてエステルたちはジル、ハンスと別れた。

「うーん……。数日間だけだったけどすごく楽しかったわね！もちろん授業を除いてだけど」

おい……。

「なにムシのいいこと言ってるんだか……。本来は、授業が主で学園祭の方が特別なんだから」

「そうなのよね。はあ、学生っていうのも意外とラクじゃないわ」

「ふふ……。あら……？」

クローゼが辺りを見渡した。

「どうしたの？」

「いえ……。ジークがいる気配が近くに感じられなくて……。どこに行っちゃったのかしら？」

「ゴハンでも取りに行ってるんじゃないの？」

「はい……。そうかもしれません。すみません。変なことを言って……」

……。では海道に出るまで一緒にさせてください」

「うん のんびり行きましょ」

第3章 白き花のマドリガル（22）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ギルドに戻ろうとしたエステルたちが北海道で事件が……！！

第3章 白き花のマドリガル(23) (前書き)

テレサ院長たちの身に事件が！

第3章 白き花のマドリガル(23)

メーヴェ海道

エステルたちがメーヴェ海道に出た。

「さてと、ここでお別れだね」

「はい……。この数日間、本当にありがとうございました」

「あはは、いいって。あたしたちも楽しかったし。それじゃあ……先生とあの子たちによろしくね」

「はい、必ず伝えます」

そうして別れようとした時、

「おお、あんたたちは！」

後ろから孤児院の片付けの手伝いに来ていたザックが走ってきた。

「あれ……」

「あなたは……確かマノリアに住んでいる……」

「そういうあんたたちは確か遊撃士だったな！ た、大変な事になったんだ！」

かなり慌てている。

「大変なこと……？」

「はあはあはあ……。ちょ、ちょっと待ってくれ。い、息が切れて

……。ふーっ、ふーっ……。ふう……」

深呼吸して落ち着いていたザックがようやく話し始めた。

「……テレサ先生と子供たちがマノリアの近くで何者かに襲われた」その言葉に一同は驚いた。

「あ、あんですってー！？」

「……あ……」

クローゼはそれを聞いて糸が切れたように膝を折った。

「だ、大丈夫！？」

慌ててエステルがクローゼを支える。

「……しっかり。倒れている場合じゃないよ」

ヨシユアがクローゼに言った。

「す、すみません……」

クローゼが立って、ザックに尋ねる。

「お願いします……。詳しいことを教えてください」

「あ、ああ……。学園祭から帰って来る途中で変な連中に襲われたみたいでな。子供たちにケガは無かったがテレサ先生と遊撃士の姉ちゃんが気絶させられたみたいで……」

「ええっ、カルナさんも!？」

「相当の手練みたいだね……」

「……………」

「ギルドに連絡するはずが宿の通信器が壊れたみたいでな。仕方なく俺が大急ぎで走ってきたんだ」

確か、マノリアの通信器は古いつてジャンが言っていたな。

「そうですが……。協力、感謝します。ただ、できればこのままルーアンに行ってくれませんか？僕たちはこのままマノリアに急ぎますから」

「ああ、わかった!」

ザックはルーアンに向かっていった。

「さあ、僕たちも急ごう!」

「う、うん!」

「……………はい!」

エステルたちは急いでマノリア村に向かった。

マノリア村

エステルたちは宿屋に入って前と同じ2階の部屋に行った。

「あ……………」

「お姉ちゃんたち……………」

子供たちが振り返る。

「みんな……」

クローゼが子供たちを見回す。

「わあああん……」

「恐かったのー！」

子供たちが泣きついてきた。

「良かった……。あんなたちは無事みたいね」

「すみません。先生たちの容体は？」

ヨシユアは看護をしていたカーラに尋ねた。

「安心しなさい。2人とも大した怪我じゃないわ。ただ、目を醒まさないからちよつと心配なんだけど……」

「……ちよつと失礼します」

ヨシユアはテレサ院長とカルナの様子を調べた。

「間違いない……。睡眠薬を嗅がされたみたいだ」

「す、睡眠薬う？」

「うん、かすかに刺激臭がする。副作用がないタイプだから安心してほしいと思うけど……」

「うーん……。ね、クラム。何があったのか教えてくれる？」

「……」

クラムは話そうとしない。

「あたしが説明します……」

マリイが話し始めた。

「あたしたち……遊撃士のお姉さんと一緒に北海道を歩いていたんですけど……。いきなり、覆面をかぶった変な人たちが現れて……。遊撃士のお姉さんが追い払おうとしたけど……。覆面の人たちにくぐに囲まれちゃって……。先生もあたしたちを守ってあいつらに向かっていった……。それで……。ヒック……」

マリイは泣きそうになった。

「よしよし、恐かったね……」

エステルはマリイの頭をなでた。

「……あいつら……先生からあの封筒を奪ったんだ……。オイラ……」

…取り戻そうとしたけど思いつきり突き飛ばされて……。ヨシユア兄ちゃん……オイラ……守れなかったよ……」
クラムが泣き始めた。

「……そんなことないさ。君たちが無事でいるだけで先生はきっと嬉しいはずだから。だから……自分を責めちゃだめだ」

「でも……オイラ……オイラ……」

「ヒック……ヒック……」

「許せない……！どこのどいつの仕業よ……」
エステルがたまりかねて叫んだ。

「……はつきりしているのは……犯人たちは相当の手續ということですよ。遊撃士の方がなす術もなく気絶させられたわけですから……」

「クローゼ……」

「そしてもう1つ……。計画的な犯行だと思えます。狙いはもちろん先生の持っていた寄付金……。孤児院を放火したのもおそらくその人たちでしょう」

「うん、その可能性が高そうだ」

「クローゼ……。やっと落ち着いたみたいね」

「はい……。落ち込んでいても仕方ありませんから。今はとにかく、一刻も早く犯人の行方を突き止めないと……」

「……そいつは同感だな」

アガットがいきなり入ってきた。

「あーっ！」

「アガットさん……」

「話はギルドで聞いたぜ。ずいぶんと厄介な事になってるみたいじゃねえか」

「ひ、他人事みたいに言わないでよ！カルナさんだってやられちゃってるんだから！」

「判ってる……。きゃんきゃん騒ぐな。確かにカルナは一流だ。相当、やばい連中らしいな。大ざっぱでいいから一通りの事情を話し

てもらおうか」

「はい……」

エステルたちは寄付金が奪われたことも含めてアガットに一通りの事情を説明した。

「ふん、なるほどな……。妙な事になってきやがったぜ」

「妙つて、何がよ？」

「ああ、実はな……。『レイヴン』の連中が港の倉庫から行方をくらました」

「そ、それつて……。やっぱりあいつらが院長先生を襲ったんじゃない？」

「いや、それはどうかな。彼ら程度に、カルナさんが遅れを取るとも思えない」

ヨシユアが冷静に言った。

「そつか、確かに……。あの連中、口先だけでろくに鍛えてなかったもんね」

「しばらく睨みを利かせて大人しくなったと思っただが……。今日になつていきなり姿をくらましやがって……。そこに今度の事件と来たもんだ」

アガットが拳を手のひらに叩きつけた。

「犯人かどうかはともかく何か関係がありそうですね」

「ああ、だが今はそれを詮索してる場合じゃない。新米ども、とつとと行くぞ」

アガットが部屋を出ようとした。

「なによ、いきなり……。いったい、どこに行くの？」

「わかんねえヤツだな。犯行現場の海道に決まってるだろ。あのバカどもがやったかどうかはともかく……。できるだけ手がかりを掴んで犯人どもの行方を突き止めるんだ！」

「あ……なるほど」

「分かりました、お供します」

エステルたちが部屋を出たとき、既に日が暮れていた。

「わっ、もうこんな時間!？」

「ち……マズいな。これだけ暗いとどこまで調べられるか……」
アガットが舌打ちした。

その時、ジークの鳴き声がした。

「なんだ、今の鳴き声は……」

アガットだけが分からない様子だ。

「まあ、ジーク……。どこに行ってたの？」

「な、なんだコイツは」

「クローゼのお友達でシロハヤブサのジークよ」

「はあ……お友達ねえ……」

なんともメルヘンなことだなといわんばかりのアガットの表情。

「ピユイ!ピユイ、ピユイ!」

「そう……わかったわ。ありがとうね、ジーク」

「ピユイ」

「まったく呑気なもんだぜ。で、お嬢ちゃん。そのお友達は何んだつて?」

「先生たちを襲った犯人の行方を教えてくれるそうです。襲われた時にちょうど見ていたらしくて……」

「ははは!面白いジークだぜ……」

アガットは苦笑した。

「やった!さすがジーク!」

「うん、お手柄だね」

「ピユイ」

「ちょ、ちょっと待て!お前ら、そんなヨタ話をしんじてるんじやねえだろうな?」

アガットがその様子をみて言った。

「僕たちは何度かこの目で確かめていますし」

「信じないんだっいたら付いて来なけりゃいいのよ。クローゼ、ジーク」

ク、行きましょ！」

「はい！」

「ピューイ！」

エステル、ヨシユア、クローゼはジークの後を追った。残されたのはアガットののみ。

「……………えーと……………。こゝこゝらガキども、待ちやがれ！」

慌ててエステルたちの後を追うアガット。

第3章 白き花のマドリガル（23）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

今回は犯人の一端を捕まえることになります。果たしてその犯人は！？犯人の予想をお待ちしています。ヒントは孤児院を必要なものと思い、テレサ院長をルーアン市から遠ざけようとしている人物です。すでにその黒幕の名前は出ています。さらに、その人物はもちろん学園祭に来ていました。今までにテレサ院長と会話した人たちの言動を調べてみましょう。

第3章 白き花のマドリガル(24) (前書き)

どうもお久しぶりです。大学のレポートや試験対策で忙しくて、
今、ストレスと疲れがMAXの状態です……。このような状態の作
者に一言励ましの言葉を下さい。

第3章 白き花のマドリガル(24)

マノリア問道

「確かに誘導しているみたいだが……。おい、嬢ちゃん。冗談だったら勘弁してくれよ?」

「いまだ不信のアガット。」

「冗談なんて言いません。先生とあの子たちは私の家族も同然ですから……」

「ち……。仕方ねえな。ダメされたと思ってここは乗せられてやるとするか」

アガットはクローゼに押されて信じることにした。

「まったくもう。素直じゃないんだから」

「とにかく急いでジークの後を追いかけよう」

三叉路に差し掛かったところで、ジークはクローネ峠方面とは別の海道を示した。

「あつちは確か……」

「うん……。とにかく行ってみよう」

バレン又灯台

「あの建物って……」

「バレン又灯台……。ルーアン市が管理する建物だな。確か、灯台守のオッサンが1人で暮らしていたはずだが……」

「でも、間違いありません。先生たちを襲った人たちはあの建物の中にいると思います」

「となると、犯人に灯台内を占領されている可能性が高そうだね」
「見たところ……入口はあそこだけみたい。とにかく入ってみるしかないか」

「はい……」

「ちよつと待ちな。嬢ちゃん、あんたは……」

アガットがクローゼを引き止めようとした。

「この目で確かめてみたいんです」

「なにに？」

「誰がどうして、先生たちをあんな酷い目に遭わせたのか……。だから……どうかお願いします」

「そ、そうは言ってもな……」

アガットが渋る。

「あーもう。ケチなこと言うんじゃないわよ。この場所が判つたのはクローゼたちの手柄なんだから」

「彼女の腕は保証しますよ。少なくとも、足手まといになる心配はないと思います」

エステルとヨシユアが援護する。

「エステルさん、ヨシユアさん……」

「ち……勝手にしろ。だがな、相手はカルナを戦闘不能に追いやつた連中だ。くれぐれも注意しとけよ」

アガットが折れた。

「はい、肝に銘じます」

「それじゃ、決まりね」

「うん……。さっそく中に入るう」

エステルたちはバレンヌ灯台に入った。

バレンヌ灯台 1階

そこにいたのは、まさかの《レイヴン》のメンバーだった。

「こ、こいつら!？」

「あ、あの時の人たち……」

エステルとクローゼは驚いた。

「まさかとは思ったが……」

アガットがレイヴンのメンバーに近づくと。

「おい、てめえら……。こんな所で何やってやがる!」

アガットが叫んだが、レイヴンのメンバーの目は虚ろで何も映っていないようだった。

「お、おい……」

アガットがデインに近づいたその時、いきなりデインは刃物を抜いた。

「アガットさん、危ない!」

ヨシユアが叫んだ。アガットは間一髪、重剣で受け止めた。

「こ、この力……!？」

どうやら尋常ではない力で押してきたようだ。

「デイン、てめえ……」

「……………」

デインは何もしゃべらない。そして、下っ端の2人も刃物を抜いた。

「はっ、上等だ……。なにをラリッてるのかは知らねえが……。キ

ツイのをくれて目を醒まさせてやるぜ!」

ラリッてるわけではないと思うが……。

エステル VS デイン及び下っ端2人 戦闘開始!

漆黒の牙

「これで終わりだ……」

一撃必殺!

「し、信じられない……。倉庫で戦った時とはケタ違いの強さじゃ

ない！」

「様子も変でしたし……。どういふ事なんでしょうか？」

エステルたちはどうにか倒したが、以前とは比べ物にならないほど強かった。

「ふん……。どうやら何者かに操られていたみたいだな」

「あ、操られていたって……」

「うん、間違いない……。薬品と暗示を併用した特殊な催眠誘導みたいだ。肉体的なポテンシャルも限界まで引き出されている」
ヨシユアはレイヴンのメンバーを調べて言った。

「そ、そんな事できるの!？」

「もちろん、相当な技術が必要になるのは間違いねえ。こいつはひよっとしたら……」

「心当たりがおりなんですか？」

クローゼが尋ねた。

「ああ……。ちよいとな。とにかく、上の階を目指すぞ。こいつらを操っている真犯人どもがいるはずだ」

「うん、わかった！」

エステルは2階に向かった。

バレン又灯台 2階

「……………」
レイスがディーンと同様虚ろな瞳で立ち尽くしていた。

「ま、また出たわね〜!!」

「手加減している余裕はなさそうだね……………」

エステルたちはレイスと激突した。

漆黒の牙

「これで終わりだ……」
一撃必殺！

バレン又灯台 3階

「……………」

ロッコも同じく……。
「ごめんなさい……。操られているだけの方々に剣を向けたくありませんが……」

クローゼが申し訳なさそうに言った。

「あー、遠慮することはねえ。死なない程度に蹴散らすぞ！」
非情なり、アガット……。

漆黒の牙

「これで終わりだ……」
一撃必殺！

これでレイヴンのメンバーをすべて片付けたエステルたち。エステルたちはすぐさま最上階に向かった。

第3章 白き花のマドリガル（24）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ次回、事件の黒幕が判明します！

第3章 白き花のマドリガル(25) (前書き)

いよいよ事件の黒幕が判明！予想と当たっていましたか？

第3章 白き花のマドリガル(25)

バレン又灯台 4階

「あれ……この声……」

エステルが突然、足を止めた。

上の階から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

エステルたちは階段から耳を澄ました。

バレン又灯台 最上階

「ふふふ……。君たち、良くやってくれた。これで連中に罪をかぶせれば全ては万事解決というわけだね」

声の正体は秘書ギルバードだった。いつもとは異なり、下卑た笑みを浮かべている。

「我らの仕事ぶり、満足していただけたかな？」

黒装束の男が言った。

「ああ、素晴らしい手際だ。念のため確認しておくが……証拠が残る事はないだろうね？」

「ふふ、安心するがいい。たとえ正気を取り戻しても我々の事は一切覚えていない」

「そこに寝ている灯台守も朝まで目を醒まさないはずだ」

2人の黒装束の男が言った。

「それを聞いて安心したよ。これで、あの院長も孤児院再建を諦めるはず……。放火を含めた一連の事件もあのクズどもの仕業にできる。まさに一石二鳥というものさ」

「喜んでもらって何よりだ」

「しかし、あんな孤児院を潰して何の得があるのやら……。理解に苦しむところではあるな」

「ふふ、まあいい。君たちには特別に教えてやろう。市長は、あの土地一帯を高級別荘地にするつもりなのさ」

「ほう……？」

「風光明媚ふうこうめいびな海道沿いでルーアン市からも遠くない。別荘地としてはこれ以上はない立地条件だ。そこに豪勢な屋敷を建てて国内外の富豪に売りつける……。それが市長の計画というわけさ」

「ほう、なかなか豪勢な話だ。しかしどうして孤児院を潰す必要があるのだ？」

「はは、考えてもみたまえ。豪勢さが売りの別荘地の中にあんな薄汚れた建物があつてみる？おまけに、ガキどもの騒ぐ声が近くから聞こえてきた日には……」

「なるほどな……。別荘地としての価値半減か。しかし、危ない橋を渡るくらいなら買い上げた方がいいのではないか？」

「は、あのガンコな女が夫の残した土地を売るものか。だが、連中が不在のスキに焼け落ちた建物を撤去して別荘を建ててしまえばこちらのものさ。フフ、再建費用もないとすれば泣き寝入りするしかないだろうよ……」

秘書ギルバードが笑った。

「それが理由ですか……」

エステルたちが話の一部始終を聞き終えた後、階段を上がった。

「き、君たちは……！？」

秘書ギルバードが慌てた。

「そんな……つまらない事のために……先生たちを傷つけて……思いの出の場所を灰にして……。あの子たちの笑顔を奪って……」

クローゼが顔を伏せながら言った。

「ど、どうしてここが判った！？それより……あのクズどもは何をしてたんだ！」

「残念でした。みんなオネンネしてる最中よ。しかし、まさか市長が一連の事件の黒幕だったとはね。しかも、どこかで見たような連中も絡んでいるみたいだし……」

エステルがしたり顔で言った。

「ほう……。娘、我々を知っているのか？」

「その赤毛の遊撃士とは少しばかり面識はあるが……」

「ハッ、何が面識だ。ちよろちよろ逃げ回った拳句、魔獣までしかけて来やがって。」

だが、これでようやくてめえらの尻尾を掴めるぜ」
アガットが重剣を構えた。

「き、君たち！そいつらは全員皆殺しにしろ！か、顔を見られたからには生かしておくわけにはいかない！」

秘書ギルバードは見苦しい態度で黒装束の男に言った。

「先輩……本当に残念です……」

クローゼが呟いた。

「まあ、クライアントの要望とあらば仕方あるまい」

「相手をしてもらおうか」

「ふん、望むところだつての！」

「たとえ雇われてやったのでもあなた方の罪は消えません……」

「《重剣》の威力……たっぷりと味わいやがれ！」

「そ、そんな馬鹿な……」

秘書ギルバードは愕然とした。

「市長秘書ギルバード。及び、その黒坊主ども。遊撃士協会規約に基づき、てめえらを逮捕、拘束する。あきらめて投降しやがれ」

「うつつ……」

秘書ギルバードは後ずさりする。

「なかなかやるな……。真っ向からの勝負ではやはり遊撃士は手強い」

「ああ、隊長の忠告通り油断すべきではなかったか」

「隊長……。ひょっとして空賊と交渉していた赤い仮面をかぶった

人ですか？」

ヨシユアが尋ねた。

「その事も知っていると……」

「さすがギルドの犬ども。なかなか鼻が利くようだな……」

「負けたくせになく、に余裕がましてんのよ！いいから武器を置いてとつと降伏しなさいよね！」

エステルがたまりかねて叫んだ。

「フ、それはできんな」

黒装束の男は秘書ギルバードに近づき、銃を構えた。

「なっ！？」

秘書ギルバードはなぜと言った顔だ。

「な、なんのつもりよ！？」

エステルが近づこうとしたが、

「動くな。それ以上近寄ればこいつの頭が吹き飛ぶぞ」

「き、君たち！？や、雇い主に向かってどういっつもりだ！？」

秘書ギルバードが黒装束の男たちに言った。

「勘違いするな、若造。我々の雇い主は市長であって貴様ではない」

「市長にしたところで同じこと。利害が一致していたから協力していたに過ぎん……」

「お前がここで死のうが我々は痛くも痒くもない」

「ひ、ひいいいい……。撃つな、撃たないでくれ！」

「コラ、いいかげんにしろや。そんな下手な芝居打って逃げられると思つて……」

アガットが近づいたその時、

「ぎゃあああつ……。あ、足が……。僕の足がああ！！」

黒装束の男の銃が火を噴いて、秘書ギルバードの足を撃ち抜いた。

「せ、先輩！？」

「チッ……」

「どうやら本気みたいですね」

「これでも納得しないなら……。こちらの灯台守の頭を撃ち抜いて

もいいのだが？」

黒装束の男は灯台守の頭に銃を突きつけた。

「や、やめなさいよ！その人は関係ないでしょ！」

「ならば、しばらくの間離れていてもらおうか……。そうだな……階段の近くまで下がれ」

「フン、仕方ねえな……」

エステルたちは階段の近くまで下がった。

「ふふ、いいだろう」

「それでは、さらばだ」

黒装束の男たちは灯台の修理用の出口から逃げていった。

「待ちなさいってーの！」

「逃がすか、オラアッ！」

エステルたちはすぐさま追いかけた。

「脱出用のワイヤーロープ!?」

「な、なんて用意周到なやつらなの!？」

「……………。……………秘書野郎とバカどもの面倒は任せたぞ」

「えっ…………?」

「俺はこのまま連中を追う！お前らは、今回の事件をジャンに報告して指示を仰げ！」

そう言い残してアガットはワイヤーロープで降りていった。

「きゃっ…………」

「な、なんて無茶なヤツ…………。ねえ、あたしたちも追おうか？」

「いや…………。アガットさんが言ってただろう?秘書や、レイヴンのメンバーを放っておくわけにはいかないよ」

「そうですね…………。自業自得とはいえ、足にケガをしていますし…………」

「そつか……。悔しいけど、あの連中はアガットに任せるしかなさそうね」

……。こうして、エステルたちは奪われた寄付金を無事取り戻すことができた。そして、市長秘書や不良青年たちをマノリアの風車小屋に拘禁した頃には、もうすでに空は明るくなっていた……

マノリア村

「さてと……。連中はあたしが見張っている。あんたたちはルーアンに行つてジャンに報告してきておくれ」

風車小屋の前でカルナが言った。

カルナがエステルたちに言った。

「それは構わないけど……。カルナさん、もう大丈夫なの？」

「なあに、スキを突かれて眠り薬を嗅がされただけだからね。とっさの事だったからどんな連中だか覚えてないんだが……。まったく面目ないつたらないよ」

カルナが自嘲気味に言った。

「無理もないですよ。僕たち4人がかりで何とか撃退できた相手でしたし」

「あの子たちが無事だったのもカルナさんのおかげです。本当にありがとうございます」

「は……。ま、それだけが幸いだっただね。しかし、アガットは1人で連中を追つていったのか……。あいつの腕前は知っているけど、さすがにちよつと心配だねえ」

「う、うん……。返り討ちにあつたりしたら……」

「今はアガットさんを信じよう。どうやらずっと、あの連中を追い

かけていたみたいだからね。手口も知ってるみたいだからそう簡単に遅れは取らないと思う」

「うん……そうだね。あたしたちはあたしたちの出来ることをするしかないか」

「そうだね、その通りだ。取り戻した寄付金は事件のケリがつくまであたしが預かっておく。今度こそ守りきってみせるから安心して出発しておくれ」

「はい、よろしくお願いします」

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エステルたちはルーアン市に向かった。

第3章 白き花のマドリガル(25) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ黒幕も判明し、事件の大詰めを迎えたエステルたち。事件解決へとさらに進めることになる。

第3章 白き花のマドリガル(26) (前書き)

いよいよ第3章もクライマックスに!

第3章 白き花のマドリガル(26)

メーヴェ海道

「しかし、ダルモア市長が事件の黒幕だったなんて……。親切そうに振る舞っていたのも全部お芝居だったわけね！」

エステルは怒り心頭と言った感じた。

「あの……。少し気になったんですけど……。今回の件で、ダルモア市長を逮捕できるんでしょうか？」

クローゼが心配そうに尋ねた。

「……え？」

「そうだね……。難しいかもしれない。遊撃士協会は、国家の内政に干渉という原則があるからね。ルーアン地方の責任者である現職市長を逮捕するのは難しそうだ」

ヨシユアが俯きながら言った。

「ちょっと待ってよ！それっておかしくない!?」

エステルは納得いかずとっさに返した。

「おかしいけどそれが決まりだからね。この決まりがあるからこそギルドはエレボニア帝国にすら支部を持つことができたんだ」

「そ、そうは言っても……」

「とにかくギルドに行ってジャンさんに相談してみよう。良い知恵を貸してくれると思う」

「う、うん……」

「……………」

クローゼは俯いたままだ。

「大丈夫、心配することないって！院長先生たちを苦しめたツケはきっちり払ってもらわないとね！」

「はい……そうですね」

一行はルーアン市に再び向かった。

「……………」
クローゼが王立学園への三叉路に差し掛かったところで突然後ろから声をかけた。

「クローゼ、どうしたの？」

「あの、エステルさんたちはギルドに行かれるんですよね？私、やる事を思い出したので先に行ってももらえませんか？すぐに追いつきますから……………」

「構わないけど……………いったん学園に戻るのかい？」

「は、はい……………。一応、学園長にも報告しておこうと思ひまして」

「そっか……………。うん、わかったわ。ギルドで待ってるからね！」

エステルたちは先にギルドへと向かった。

「ごめんなさい……………。エステルさん、ヨシユアさん」

クローゼはそう呟いた後、手帳とペンを取り出して文字を書き連ねた。

「うん、これでいいわ。……………ジークー！」

ルーアン市 遊撃士協会

エステルとヨシユアはジャンにこれまでの報告をした。

「……………話はわかった。まさか、ダルモア市長が一連の事件の黒幕だったとは。うーん、こいつは大事件だぞ……………」

話を聞いたジャンは首をひねった。

「それで、ジャンさん。市長を捕まえる事はできるの？」

「うーん……………。残念だが逮捕は難しそうだな。現行犯だったら、市長といえど問答無用で逮捕できるんだけどね」

「やはりそうですか……………」

「そ、そんな……………。だったらこのまま悪徳市長をのさばらせてもい

いてわけ!？」

「まあ、そう慌てなさんな。遊撃士協会が駄目でも……王国軍なら市長を逮捕できる」

「あ……」

「エステル君、ヨシユア君。これから市長邸に向かって市長に事情聴取を行ってくれ。多少、怒らせてもいいからできるだけ時間を稼いで欲しい」

「なるほど、その間に王国軍に連絡するんですね？」

「ふふふ、その通りさ。導力通信で、レイストーン要塞の司令部に応援を要請してみるよ」

「うーん、軍に頼るのはシャクだけど仕方ないか……。よし、クローゼが追いついたらさっそく市長邸に向かって……」

その時、ギルドの扉が開いて、クローゼが戻ってきた。

「はあはあ……。お、お待たせしました……」

クローゼは息を切らしながら言った。

「いいタイミングで来たわね」

「学園に寄った割にはずいぶん早かったね？」

「え、えつと……。足には自信がありますから。それで……どういう事になりました？」

「ちょうど市長のところへ乗り込むって話をしてたのよ。王国軍の連中が来るまで事情聴取して時間稼ぎをするの」

「あ……。そうですか……。余計なことをしたかしら……」

クローゼは下を向いてポツリと呟いた。

「????えつと、クローゼも来るよね？」

「あ、はい。どうか一緒にさせてください」

「ジャンさん、連絡の方はどうかよろしくお願いします」

「ああ、任せておいてくれ！」

エステルたちは早速ルーアン市長邸へと向かった。

第3章 白き花のマドリガル(26) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよタルモア市長邸へ殴りこみ開始です。

第3章 白き花のマドリガル(27) (前書き)

どうもお久しぶりです。大学の期末試験で忙しくて手が回りませんでした。実は今も期末試験中ですが……。

次回の第28回で第3章が完結します。どうぞごゆっくりお楽しみください。

今日は第27回、第28回と2つ公開します。第28回は20時公開予定です。

第3章 白き花のマドリガル（27）

ルーアン市長邸

エステルたちは門の前でルーアン市長邸を見渡した。ルーアン市長邸は今まで見た市長邸の中で最も豪華絢爛で大きかった。

「しっかし、大きな屋敷よね。やっぱり悪どい事してるからこんな屋敷に住めるのかしら？」

エステルはルーアン市長邸を見上げて言った。

「それは関係ないと思うけど……」

「ダルモア市長は元は大貴族の家柄ですから。この屋敷も、代々の当主に受け継がれたものだと思います」

クローゼが横から説明してくれた。

「そっか……。確かに屋敷に罪はないわよね。まあいいや、何とかあの市長を問い詰めてやらなくちゃ」

エステルたちは市長邸の扉を開いた。

「ルーアン市長邸へようこそ。申しわけありませんが只今、市長は接客中ですので……。また来て頂けますでしょうか？」

メイドのフローラがエステルたちに申し訳なさそうに言った。

「ええ！ちよつと待つてよ……」

エステルがそう言ったとき、
「その来客のことなら僕たちも承知しています。デュナン公爵閣下ですよね？」

ヨシユアがささず言った。

「え……」

エステルとクローゼが驚いてヨシユアの方を向いた。

「まあ、その通りですね。……ひょっとして皆様も招待されていら

「つしゃるのですか？」

「はい、市長から直々に。お邪魔しても構いませんか？」

「よく見たら遊撃士の方ですわね。そういう事情でしたらどうぞ、お上がりになってください。市長と公爵閣下は、2階の広間にいらつしゃいます」

「わかりました。親切にありがとうございます」

ヨシユアが笑顔で礼を言った。

「……………（ポツ）」

フローラが顔を赤らめた。

「そ、そうだわ。お客様が増えるのだったらその分、お茶を用意しないと……。わたくし、これで失礼しますね」

フローラはその場を逃げるように行ってしまった。

「……………」

「……………」

エステルとクローゼは先程からずっと驚いたままの顔だった。

「あれ、どうしたの？」

「べっつに〜」

エステルは不機嫌そうだ。

「え、えつと……。そうだ、よく公爵閣下が来ていると判りましたね？」

「ああ、カマをかけたただだよ。別荘地を、国内外の富豪に売りつける計画だっただろう？デュナン公爵なんか恰好のお得意さんだと思ってる」

ヨシユアが事も無げに言った。やはり、ヨシユアは頭がキレル。

「まあ……………」

「もう、悪知恵が働くんだから。市長に招待されてるなんて口から出まかせ言っちゃってさ」

「出まかせじゃないよ。初めてダルモア市長に会った時に言われたじゃないか。レイヴンの連中が迷惑をかけたら遠慮なく市長邸に来てくれるってさ」

そついうのを屁理屈と言つたり言わなかつたり……。

「あ……そつか」

「ふふ……確かに招待されていますね」

「そついうこと。それじゃあ、遠慮なく大広間に向かうとしようか」
エステルたちは遠慮なく2階の広間に向かった。

2階 大広間

その中では、ダルモア市長とデュナン公爵が会談をしていた。

「ヒック……。ふむ、なかなかいい話だ。確かにこのルーアンは別荘を持つには絶好の場所だ。しばらく滞在してよく判った」

酒に酔っているデュナン公爵……。どうやら、ダルモア市長は酒を煽らせながら話を進めているようだ。はっきり言って、こついうのは今も昔も変わらない光景だ。

「ふふ、そつうでしょうとも。その高級別荘地の中でもとりわけ素晴らしい場所に閣下の別荘を用意いたします。必ずや気に入って頂けるかと……」

その場所は間違いなく孤児院の跡地である。

「ふつふつふ……。おぬし、なかなか話が判るな。いいだろう、ミラに糸目はつけん。次期国王にふさわしい豪華絢爛ごうかけんらんな別荘を用意するがいい。そつうだな、最低でもこの屋敷くらいは欲しいところだ」
デュナン公爵はお得意の放蕩癖を全開にして言った。

「閣下、しばしお待ちを。女王陛下に相談もせずそのような巨額の出費は……」

執事フィリップが止めようとしたが、

「黙れ、フィリップ！私は次期国王だぞ！このくらいの買い物は当然だ！」

全く耳を貸さないデュナン公爵であった。

「いやはや、公爵閣下ならば判つていただけだと思います。後で

契約書を持ってこさせます。その前に、もう一献……」

ダルモア市長はデュナン公爵のグラスになみなみとワインを注いだ。そこで、

「こんにちは」。遊撃士協会の者です」

エステルたちが大広間に入った。

「君たちは……」

「ヒック……。なんだお前たちは？どこかで見たような顔だが……」

「おお、いつぞやの……」

「こんにちは、執事さん。ちなみに、今日はその市長さんにお話があつて来ただけだから」

「困るな君たち……。ギルドの遊撃士ならば礼儀くらい弁^{わか}まえているだろう。大切な話をしているのだから出直してきてくれないかな？」
ダルモア市長が不機嫌な顔でエステルたちを見た。

「なにぶん緊急の話なので失礼の段は、ご容赦ください。実は、放火事件の犯人がようやく明らかになったので……」

ヨシユアがそう言うと、ダルモア市長が驚いた。

「その件か……。仕方あるまい。公爵閣下、しばし席を外してもよろしいでしょうか？」

「ヒック……。いや、ここで話すといい。どんな話なのか興味がある」

「し、しかし……」

「いいじゃない 公爵さんもああ言ってるし。聞かれて困る話でもないでしょ？」

「まあ、それはそうだが……。そういえば夕べは、またもやテレサ院長が襲われたそうだな。放火事件と同じ犯人だったのかね？」

「その可能性が高そうです。残念ながら、実行犯の一部は逃亡している最中ですが……」

「そうか……。だが、犯人が判つただけでも良しとしなくてはならぬ。ちなみに誰が犯人だったのかね？」

「うーん、それなんだけど。市長さんが考えている通りの人たちだ

と思うわよ」

エステルが半ば笑いながら言った。

「そうか……残念だよ。いつか彼らを更正させる事ができると思っていたのだが……。単なる思い上がり過ぎなかつたようだな……」

ダルモア市長が手で顔を覆った。

「あれ、市長さん。誰のことを言ってるの？」

エステルが不思議そうに尋ねた。

「誰って、君……。《レイヴン》の連中に決まっているだろうが。

昨夜から、行方をくらませているとも聞いているしな……」

「残念ですが……彼らは犯人ではありません。むしろ今回に限っては被害者とも言えるでしょうね」

「な、なに!？」

ダルモア市長が驚いて声を上げた。

「今回の事件の犯人、それは……ダルモア市長、あんたよっ！」

エステルが声を張り上げて言った。

「!!!!」

「秘書のギルバードさんはすでに現行犯で逮捕しました。あなたが実行犯を雇って孤児院放火と、寄付金強奪を指示したという証言も取れています。この証言に間違いはありませんか？」

「で、でたらめだ!そんな黒装束の連中など知るものか!」

「あれ、おつかしいな。あたしたち、黒装束だなんて一言も言っていないんだけど」

「うぐっ……。知らん、私は知らんぞ!全ては秘書が勝手にやったことだ!」

「往生際の悪いオジサンねえ」

エステルはダルモア市長の姿を見て溜息をついた。

「高級別荘地を作る計画のために孤児院が邪魔だったと聞いています。これでもまだ、容疑を否認しますか？」

ヨシユアが徐々に退路を断っていく。

「しつこいぞ、君たちっ!確かに、ずいぶん前から別荘地の開発

は計画されている！だが、それはルーアン地方の今後を考えた事業の一環にすぎん！どうして犯罪に手を染めてまで性急に事を運ぶ必要があるのだ！？」

ダルモア市長は切り札を出してきた。

「そ、それは……」

エステルが反論できずに困ったとき、

「……莫大な借金をかかえているからでしょう？」

ナイアルが広間に突然入ってきた。

「ナ、ナイアル！？」

「どうしてここに……」

エステルたちは驚きながら尋ねた。

「いやな、その市長さんを取材しようと屋敷まで来たらお前たちが入っていくじゃねえか。こりゃ何かあるなと思ってお邪魔してみたらこの有様だ。いやゝ。一部始終聞かせてもらったぜ？」

相変わらずのグッドタイミングで登場というわけか。

「な、なんだね君は！？」

「あ、《リベール通信》の記者、ナイアル・バーンズといます。実はですねえ。最近のルーアン市の財政について調べさせてもらったんですが……。ダルモア市長、あなた……市の予算を使い込んでますなあ？」

「……そ、それは……。別荘地造成の資金として……」

ダルモア市長の顔が青ざめた。

「そいつは通りませんぜ。まだ、工事は一切始まってない。ちよいと妙だと思ったんで飛行船公社まで足を伸ばしてあなたの動向を調べたんですよ。すると、あゝら驚き。1年ほど前に、共和国方面に度々いらっしやてますねえ？」

「……た、ただの観光だ……」

「というのは表向きの理由。本当の理由は……あちらの相場に手を出して大火傷を負ったからでしょう？」

「……！！」

「えっと……相場ってなに？」

エステルが周りに尋ねた。

「市場の価格差を利用してミラを稼ぐ売買取引です。ある品が安い時に買いこんで高くなったら売るような……」

クローゼが説明してくれた。

「あ、なるほど。それで、この市長さんはどれだけ損しちゃったわけ？」

「共和国にいる記者仲間調べてもらった限りでは……。およそ1億ミラってところらしい」

「い、い、1億ミラあゝ!!」

「寄付金の100倍ですか……。確かに、犯罪に手を染めても不思議ではない金額ですね」

エステルたちはその価格に驚愕した。

「ヒック、1億とはな……。私もミラ使いは荒い方だがさすがにおぬしには完敗だぞ」

デユナン公爵のばかげた発言……。

「くっ……」

ダルモア市長は逃げ場を失い、顔を歪めた。

「な〜に競ってるんだか」

「まあ、そんなわけで……。莫大な借金を返すために市の予算に手を出した方がいいが問題を先送りにしただけだ。どうするものかと思っただけならまさか放火や強盗までして別荘地を作ろうとするとはねえ。何と言いますか……行き当たりばったりですなあ」

ナイアルは哀れみの目でダルモア市長を見た。

「……。ふん、そんな証拠がどこにある。憶測だけで記事にしてみる。名誉毀損で訴えてやるからな!」

「あらま、開き直った」

「貴様らもそうだ!市長の私を逮捕する権利は遊撃士協会にはないはずだ!今すぐここから出て行くがいい!」

「む、やっぱりそう来たか」

「さすがに自分の権利はちゃんと判っているみたいだね」

エステルたちの予測通り、現役市長の不逮捕特権が突きつけられた。王国軍が到着するまでうまく切り抜けないといけない。

「……………市長、1つだけ……………お伺いしてもよろしいですか？」

クローゼが口を開いた。

「なんだ君は！？王立学園の生徒のくせにこのような輩と付き合っ……………。とつとと学園に戻りたまえ！」

「……………」

クローゼは凜とした眼差しでダルモア市長をまっすぐ見つめた。

「うっ……………」

ダルモア市長が怯んだ

「どうして、ご自分の財産で借金を返さなかつたんですか？確かに1億ミラは大金ですが……………。ダルモア家の資産があれば何とか返せる額だと思います。例えば、この屋敷などは1億ミラで売れそうですよね？」

「ば、馬鹿なことを……………！この屋敷は、先祖代々から受け継いだダルモア家の誇りだ！どうして売り払う事ができよう！」

「あの孤児院だって同じことです。多くの想いが育まれてきた思い出深く愛おしい場所……………。その想いを壊す権利なんて誰だつて持っていないのに……………。どうして貴方は……………あんなことが出来たのですか？」

「あ、あのみすばらしい建物とこの屋敷を一緒にするなああ！！」
ダルモア市長が吼えた。

「あなたは結局自分自身が可愛いだけ……………。ルーアン市長としての自分とダルモア家の当主としての自分を愛しているだけに過ぎません。可哀想な人……………」

クローゼは哀れみと軽蔑の目でダルモア市長を見た。

「……………ふふ……………ふふ……………ふふ……………。よ
くぞ言つた、小娘が……………。……………こうなつたら後のことなど知つたこ

とか！」

怒りに身を震わせたダルモア市長が席を立ち、壁にあったスイッチを押した。そして扉が開いた。どうやら隠し扉だったようだ。

「ファンゴ、ブロンコ！エサの時間だ、出てこい！」

ダルモア市長が叫ぶと、扉の向こうから足音が聞こえてきた。

「な、なんなの……」

「獣の匂い……！」

そして、巨大な魔獣が2匹現れた。

「な、なんだああっ!？」

「ま、魔獣うつつうつつ!?!うーん……ブクブクブク……」

「こ、公爵閣下!?!」

デュアン公爵は気を失ってしまった。執事フィリップは慌ててデュアン公爵のもとへと駆け寄った。

「信じられません……。魔獣を飼ってるなんて……」

「くくく……。お前たちを皆殺しにすれば事実を知るものはいなくなる……。こいつらが喰い残した分は川に流してやるから安心したまえ。ひゃ　　はっはっはっ!」

ダルモア市長が狂ったように笑い叫んだ。

「く、狂ってやがる……」

ナイアルが後ずさりした。

「ぐるるるるるう……」

「……うるる……」

ブロンコとファンゴが食台のうえに飛び乗った。

「こ、こんな屋敷の中で魔獣と戦うことになるなんて……」

「でも、これで現行犯として市長を逮捕することができる」

「あなたたちに恨みはないけれど……。人を傷付けるつもりならば容赦はしません！」

ファンゴとブロンコが飛び掛ってきた!

何かファンゴとブロンコを倒したエステルたち。エステルたちはダルモア市長に詰め寄った。

「ば、馬鹿な……。私の可愛い番犬たちが……。貴様ら、よくもやってくれたな！」

あんな化け物を可愛い番犬と言えるセンスが理解できないな。

「はあはあ……。それはこっちの台詞だったの！」

「遊撃士協会規約に基づきあなたを現行犯で逮捕します。投降した方が身のためですよ」

「ふふふふ……。こうなっては仕方ない……。奥の手を使わせてもらうぞ！」

ダルモア市長が懐からなにやら杖のようなものを取り出した。

「え！？」

「杖……？」

エステルたちが取り押さえようとした時、

「時よ、凍えよ！」

ダルモア市長がそう叫ぶと、エステルたちが何かに縛られたように動きが止まってしまった。

「か、身体が動かない……！」

「こ、これは……導力魔法オーバーアーツなのか？」

「ち、違います……。これは恐らく《古代遺物》アーティファクトの力！」

「なんだあ、そりゃあ！？」

ナイアルももちろん動けない。

「ほう、クローゼ君は博識だな。これぞ、わがダルモア家に伝わる家宝、アーティファクト《封じの宝杖》……。一定範囲内にいる者の動きを完全に停止する力があるのだよ」

「な、なんてデタラメな力……」

「こんな強力なアーティファクトが教会に回収されずに残っていたのか……」

「フフ、さすがは古代文明の叡智の結晶……。戦術オーブメントこ

ときとは比較にならぬ力を備えている。もつとも、1つの機能しか持っていないのが難点だがね」

ダルモア市長が銃を取り出し、エステルたちに向けた。

「仕方ないから、君たちの始末は私自らの手で行ってあげよう。クク…… 光栄に思うのだな」

ダルモア市長がエステルたちに近寄った。

「まずはそうだな…… 生意気な小娘から始めて……」

「むっ、何が生意気よ！」

この期に及んでそう言えるエステルはすごい。

「最後に賢さかしらな小娘の息の根を止めるとしようか？」

「……………」

クローゼは動じない。

「ククク…… さっきの威勢はどうした？ 命いのちごいでもすれば助けてやらんでもないぞ？」

「だ、誰があんななにかに……………」

「汚い手で…………… るな……………」

「なに？」

「汚い手でエステルに触るな……………。もしも…………… 毛ほども傷付けてみる……………。ありとあらゆる方法を使ってあんなを八つ裂きにしてやる……………」

ヨシユアは冷酷な目つきでダルモア市長を睨み、言い放った。

「な……………」

ダルモア市長が気圧されて、後ずさった。

「ヨ、ヨシユア……………」

「ヨシユアさん……………」

「ゆ、指一本も動かせぬくせに意気がりおってからに……………。いいだろう！ 貴様の始末を先にしてやる！」

ダルモア市長がヨシユアに銃を向けた。

「や、止めなさいよっ！ ヨシユアを傷付けたら絶対に許さないんだからねっ！」

エステルは動きたくても動けない。

「……………」

ヨシユアはダルモア市長を先程の目つきのまま変わらず睨んでいる。

「ヨシユアさん！」

「死ね」

クローゼが叫んだ。

ダルモア市長が引き金に指をかけた。

第3章 白き花のマドリガル（27）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ヨシユアに向けられた銃。動きたくても身体を動かせない中で、エステルたちはどうなる！？

第3章 白き花のマドリガル(28) (前書き)

今回で、第3章「白き花のマドリガル」が終了します。お楽しみいただけましたでしょうか？感想・評価等お待ちしております。

第3章 白き花のマドリガル(28)

「だめええええええっ!!!」

エステルが叫んだその時、エステルの胸元から黒い光が放たれた。

「な……!」

ダルモア市長がその場から後退した。

「この光は……」

「くそ……。この手が動けばカメラを……」

記者人生一本道をひた走るナイアルは客観的にしか状況を見ていない。

エステルの胸元の黒い光が波動のように広がり、同時に身体が動くようになった。

「な、なぬううううううっ!?!」

「身体の自由が……戻った?」

「エステル……今の黒い光は?」

「う、うん……。父さん宛に届いたあの黒いオーブメント……」

エステルが半球状の黒いオーブメントを取り出した。

「これが光つたみたいだけど……」

「そ、そんな馬鹿な……。家宝のアーティファクトがこんなことで壊れるものかああ!」

「どちらにせよ……。あなたの切り札はもうない」

ヨシユアが武器を構える。

「現実を見た方がいいんじゃないありませんか?」

「そ、そうよ!」

エステルも武器を構える。

「よくも悪趣味なやり方でいたぶってくれたわねっ!」

「最低です……」

「うううううううう……。誰が捕まるものかっ!」

ダルモア市長が隠し扉から逃げて行った。

「ああつ！」

「追いかけるよ！」

「はい！」

エステルたちはダルモア市長の後を追いかけた。

「ああつ、待ちやがれ！こ、こんなスクープ、逃してたまるかってんだ！」

ナイアルも追いかけていった。

「やれやれ……寿命が縮みましたぞ……。閣下、大丈夫ですか、閣下……」

執事フィリップがデユナン公爵の肩をたたいた。寿命が縮むって言ったが、もういい年じゃないか……。

「うーん……魔獣が、魔獣がああ……」

梯子はしを降りて、抜けたところで見たものはダルモア市長がヨットで逃走しているところだった。

「あ、あれは……」

「ダルモア市長のヨットです！」

「ま、待ちなさいっての！」

「このボートで追いかけてよう！さあ、2人とも乗って！」

ヨシユアは素早くもう1隻あったボートに乗り込んだ。

「オツケー！」

「はい！」

エステルたちも素早く乗り込み、ヨシユアはエンジン全開で追いかけた。

「こらー！俺も乗せやがれってんだ！」

1人残されたナイアル……。

エステルたちのボートとダルモア市長のヨットとの距離は少しずつ縮まっていった。

「よし、近づいてきた！」

「こちらの方が小型な分、船体は軽いみたいですね」

「くっ……しつこいやツラだ……。これでも喰らえっ！」

ダルモア市長はエステルたちに向けて銃を撃った。

「とりゃあっ！」

エステルは棒を回転させ、すべての弾を弾いた。そして、ピースサイン。

「な、なにいい!?!」

「ふふん、遊撃士を舐めんじやないわよっ！ヨシユア、そのまま右側につけちゃって！」

「了解。……あれっ？」

ヨシユアが船体をつけようとしたその時、ダルモア市長のヨットが加速した。

「い、いきなり速くなった!?!」

「これは……沖合いを流れる風です！」

「まずいな、こうなったらヨットのの方が断然有利だ……」

「あ、あんですってー!?!」

「わはは、女神は私エイトスの方に微笑みかけてくれたようだな！それではさらばだ、小娘ども！」

ダルモア市長はそのまま逃げて行った。

「冗談じゃないわよ！あと一步のところであっ！」

「このままだと高飛びされかねない……。なにか手段は……」

ヨシユアが考えていたその時、上空からエンジン音が聞こえた。

「な、なに……?」

「……来た」

そのままエステルたちのボートの上を大きな飛行船が飛んでいった。

「フン、逃げたはいいがこれからどうしたのか……。やはり、軍の手が回る前に帝国に高飛びするしかないか。なあに、しばらく我慢すれば『彼』が何とかしてくれる……」

ダルモア市長が後ろを見たとき、大きな飛行船が向かってきた。

「な、な、なあああああつ!？」

そのままその飛行船はダルモア市長のヨットの前に着水した。

「な、な、な……。うわあああつ! な、なんだこの飛行船は! 王国

軍の……。いや、この紋章は……」

「……。王室親衛隊所属、高速巡洋艦^{アルセイユ}。それがこの艦の名前だ」

飛行船の甲板の上には女性士官とその部下らしき隊士がいた。

「やれやれ……。何とか間に合ったみたいだな」

女性士官が息をついた。

「蒼と白の軍服……。女王陛下下の親衛隊だと!？」

「その通り。自分は中隊長を務めるユリア・シュバルツという。ル

ーアン市長、モーリス・ダルモア殿。放火、強盗、横領など諸々の

容疑で貴殿を逮捕する」

「これは夢だ……。夢に決まっている……。うーん、ブクブクブク……」

……

ダルモア市長はヨットの上に崩れ落ちた。

そのすぐあとに、エステルたちのヨットも到着した。

「こ、これって……。どうなっちゃってるの?」

「ジャンさんが連絡してくれた王国軍の応援だと思っけど……。それにしては来るのが早すぎるような……」

「……ふふ……」

クローゼはその後ろで笑っていた。

「やあ、遊撃士の諸君。諸君の協力に感謝する。後のことは我々に任せてほしい」

ルーアン発着場

ダルモア市長の身柄が拘束された後に、エステルたちはルーアン発着場に向かった。

「先程、目を覚ました市長を問い詰めたのだが……。どうやら記憶が曖昧になっているようだな。放火や強盗の犯行についてもぼんやりとしか覚えてないらしい」

ユリア中尉がエステルたちに言った。

「そ、そうなんだ……。なんか空賊の首領みたい……」

「あの黒装束たちといい何か関係があるかもしれないね」

「まあ、記憶が曖昧と言っても起こした罪は明白だから……。秘書共々、嚴重な取り調べが待っているのは言うまでもない。何か判明したら遊撃士協会にもお知らせしよう」

「助かります」

「ところで中尉さん。1つお願いがあるんですがね
ちやつかりいるナイアル。」

「なにかな、記者殿？」

「できれば俺も、そちらの船に乗せてくれませんかねえ？何と云っても、ツアイス中央工房が世に送り出す最新鋭の飛行船だ。ぜひとも取材させて欲しいんですよ」

「申しわけないがお断りさせていただこう。この《アルセイユ》は先日、艦装艦装が終わったばかりで試験飛行を行っている段階なのだ。

正式なお披露目が行われるまでどうか報道は控えていただきたい」
「そ、そこを何とか！逮捕された市長や秘書からもコメントを貰いたいところだし……」

「心配せずとも、判明した事実は王都の通信社にもお伝えしよう。そのあたりで勘弁して欲しい」

「はあ、仕方ないか。よし、こうしちゃいられん！記事を書いたら大急ぎで王都に戻るしかっ！そんじゃあ、失礼するぜ！」

ナイアルは走って戻っていった。

「相変わらず遅い^{たくま}っていつかめげないっていつか……」

「はは……でもナイアルさんらしいね」

「《リベール通信》の発行部数は最近うなぎ上りだと聞いている。彼には、プロパガンダに囚われない記事を書いて欲しいものだが……」

「……」
「プロパガンダ
政治的宣伝……？」

「いや……」

ユリア中尉が顔を伏せた。

「お手柄だったようだね。シュバルツ中尉」

そこに現れたのは、リシャール大佐とカノーネ大尉だった。

「こ、これは大佐殿……！」

「ああっ！」

「リシャール大佐……」

「ほう、いつぞやの……。なるほど、ギルドの連絡にあつた新人遊撃士とは君たちのことだったか」

「え……。ジャンさんが連絡したのってリシャール大佐のことだったの？」

「ああ、王国軍の司令部があるレイストーン要塞に連絡が入ってね。

慌てて駆けつけてみればすでに事が終わっていたとはな。見事な手際だ、シュバルツ中尉」

「は、恐縮です……」

「フフ、でも不思議ですこと。王都にいる親衛隊の方々がこんな所に来ているなんて……。どうやら、我々情報部も知らない独自のルートをお持ちのようね？」

カノーネ大尉がユリア中尉に詰め寄った。

「お、お戯れを……」

「……」

「はは、カノーネ大尉。あまり絡むものではないな。ただ、陛下をお守りする親衛隊が他の仕事をするのも感心はしない。後の調査は

我々が引き継ぐからレイストーン要塞に向かいたまえ。そこで、市長たちの身柄を預からせてもらおうとしよう」

「は……了解しました」

「我々はこれで失礼するよ。親衛隊と遊撃士の諸君。それから制服のお嬢さん……」

「……………」

「……機会があつたらまた会うこともあるだろう。それでは、さらばだ」

「フフ、ごきげんよう」

リシャール大佐とカノーネ大尉はルーアン発着場を後にした。

「気のせいかもしれないけど……。今、リシャール大佐、クローゼの方を見ていなかった？」

エステルがクローゼに尋ねた。

「そ、そうでしょうか？」

「……………。確かに、こういう場所に君みたいな学生がいるのはあまりないことだろうからね。不思議に思われたのも無理ないよ」

「あ、あはは……本当にそうですよね。ちょっと反省です……」

「うーん、そんな雰囲気じゃなかったような……」

「……自分に言わせれば君たちだって充分驚きの対象だ。いくら遊撃士とはいえその若さでここまで活躍するとは……。できれば親衛隊にスカウトしたいくらいさ」

「や、やだな。そんなにおだてないで下さいよ。今度の事件だって色んな人に助けてもらったし」

「そう謙遜するものではない。まだ準遊撃士のようだが正遊撃士は目指さないのかな？」

「あ、今ちよつどそれを目指して修行中なんです」

「女王生誕祭が始まるまで一通り国内を回ってみるつもりです」

「そうか……自分も応援しているよ」

その時、アルセイユから親衛隊員の声が出た。

「ユリア隊長！出航の準備が整いました」

「ああ、わかった。エステル君、ヨシユア君。……それとクローゼ君も。そろそろ我々は失礼する。機会があったらまた会おう」

「あ、はい！」

「その時は宜しくお願いします」

「……ありがとうございます」

「隊士一同、敬礼！」

ユリア中尉がそう言つと、ファンファーレを鳴らしながら、親衛隊士が敬礼した。

「わわっ……」

「王室親衛隊所属艦、《アルセイユ》

テイクオフ
離陸！」

「はっつ、敬礼しながらファンファーレを鳴らすなんて……。なんか圧倒されっぱなしだわ」

「そうだね……。船も最新式のものみたいだし。さすが、女王陛下の安全を守るエリーと部隊だね」

「ふふ、そうですね」

「しっかし、ユリア中尉ってカッコイイ女の人だったよね。何だかクローゼが演じた蒼騎士オスカーみたいな感じ？」

「私もそう思いました。うふふ、面白い偶然ですよね」

遊撃士協会 ルーアン支部

「は、まさか王都の親衛隊がやって来るとはね。しかも噂の最新

鋭艦、《アルセイユ》のお出ましとは。僕も受付の仕事が無かったら見に行きたかったんだけどなあ」

ジャンが残念そうに言った。

「ジャンさんって意外にミーハーだったのね。でも、ジャンさんが連絡したのはリシャル大佐だったんでしょ？」

「ああ、レイストン要塞に彼がいたもんだからね。どうして親衛隊が駆けつけたのかは判らないが……。まあ、軍の連絡系統にも色々あるってことなんだろうね」

「通常の正規軍に加えて、国境師団、情報部、王室親衛隊……。確かに複雑そうですね」

「でも、今回の事件は事後処理が大変そうですね……。今後、ルーアン地方の行政はどうなってしまおうでしょうか？」

「あ。そうか……。市長が逮捕されちゃったし」

「とりあえずは王都から市長代理が派遣されると思う。市長の有罪が確定すればいずれ選挙が行われるだろうね。そうそう、孤児院については正式な補償が行われると思うよ」

「そうですね……。良かった。これもみんなエステルさんたちのおかげです。本当に……。ありがとうございます」

クローゼが胸をなでおろした。

「や、やだな。水くさいこと言わないでよ」

「そうだね。当然のことをしたただけさ。それに僕たちだけじゃなくてアガットさんの協力も大きかったしね」

そこで、エステルは忘れていたことに気づいた。

「そ、そういえば！ね、ねえ、ジャンさん！アガットから何か連絡はあった！？」

「ああ、それなんだが……。残念ながら、黒装束の連中は取り逃がしてしまつたらしい。他にも仲間がいたみたいだね。待ち伏せの襲撃にあったそうだよ」

「ええっ！？」

「大丈夫だったんですか？」

「ああ、何とか切り抜けたらしい。そのまま連中を追ってツアイス地方に向かうそうだ。今頃は、ルーアン地方から離れている頃じゃないかな」

「な、なんか……ハードなことやってるわね」

「まあ、慣れっこだろうよ。しばらく前から、アガットはあの連中を追いかけているんだ。どうやら、君たちのお父さんに頼まれた仕事らしいけどね」

「と、父さんが!？」

「どうしてそういう事に？」

「ふふ、《レイヴン》にいたアガットを更正させたのは他ならぬカシウスさんだからね。何だかんだ言ってあの人には頭が上がらないのさ」

「ええっ、そうだったの!？」

「アガットはああいう性格だから感謝しないで突っ張っているけどね」

「なるほど……。僕たちに対する厳しい態度もそれが原因かもしれないですね」

「すぐくそれっぽいわね。って、やっぱり父さんのとぼっちりじやなのよっ!」

「くすくす……。あ、エステルさんたちのお父様といえば確か……」

「え、どうしたの？」

「あの、市長邸で黒い光が溢れた時に……」

「あ、それがあつたか!」

エステルが胸元から黒いオーブメントを取り出した。

「色々ありすぎて、つい忘れちゃってたけど……。コレ、いったい何なのかしら……」

「それのおかげで助かったけど、少し不気味な感じはするね……」

「珍しい色のオーブメントだね。どういった由来の物なんだい？」

「それが……」

エステルはカシウスの元に届けられた小包の中にメモと一緒に入っ

ていたことを説明した。

「まあ……」

「ふーむ、R博士にKか……。ひよっとしたら……」

ジャンがあごに手をつき、唸うなった。

「え、知ってるの!？」

「いや、心当たりというほどじゃないのだが……。それを調べたければツアイス地方に向かった方がいいかもしれない」

「ツアイス地方?」

エステルは幾度となく耳にした言葉だが知らないらしい。

「知つての通り、ツアイス市はオーブメント生産で有名な場所だ。

《工房都市》とも言われており、博士の肩書を持っている人も多い」
「なるほど……。たとえば博士が見つからなくても、その黒いオーブメントの正体が判るかも知れませんか」

「うーん、でもあたしたちここで修行する必要もあるし」

エステルが肩を落とした。

「ふふ、こんな事もあるうかとちゃあんと用意しておいたのさ」

ジャンは正遊撃士資格の推薦状をエステルたちに渡した。

「ええっ……!」

「いいんですか?」

エステルとヨシユアは驚きながら受け取った。

「はは、空賊事件の時と同じさ。これだけの大事件を解決されちゃ渡さないわけにはいかないからね。査定も報酬も用意してあるよ」

「うわ……学園祭の出演料まである……」

「何から何まで済みません」

「なあに、正当な報酬さ。僕も、君たちには一刻も早く正遊撃士になつてもらいたい。その方が、君たちの力をもっと活かせると思うからね」

「えへへ……。ありがとう、ジャンさん」

「期待に応えられるよう頑張ります」

「良かったですね。エステルさん、ヨシユアさん。……ちよっと寂

しくなつてしまいますけど……」

「クローゼ……」

「……そうだね。僕たちも名残惜しいよ」

「あは……。わがまま言つてごめんなさい。出発の日が決まったら私にも教えて頂けませんか？エアレットンの関所まで見送らせていただきますから……」

第3章 白き花のマドリガル(28) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回、第4章「黒のオーブメント」が始まります。乞うご期待！開幕は明日8日の午後12時です。

第1回 空の軌跡人気キャラクター投票のご案内

第3章までに色々なキャラクターが登場しましたが、第3章終了と同時に人気キャラクターを選定したいと思います。

- ・ エステル・ブライト
- ・ ヨシユア・ブライト
- ・ カシウス・ブライト
- ・ シェラザード・ハーヴェイ
- ・ ジョゼット・カプア
- ・ ナイアル・バーンズ
- ・ メイベル市長
- ・ リラ
- ・ オリビエ・レンハイム
- ・ アガット・クロスナー
- ・ モルガン将軍
- ・ リシャール大佐
- ・ クローゼ・リンツ
- ・ ユリア・シユバルツ

などなど数々のキャラクターが登場しました。

その他にも、多くのキャラクターが小説内に登場しています。

感想ページに、小説に登場したキャラクターの中で皆様のお好きなキャラクターを選んで投稿してください。

その際に、どの当たりが良いかなど一言お願いします。

集計できるほどの数が集まり次第、集計、発表したいと思います。
ご協力お願いします。

第4章 黒のオープメント(1) (前書き)

いよいよ第4章が開幕！五大都市一周も半分を過ぎました。物語はさらに加速します。

第4章 黒のオープメント(1)

深夜 街道

「はあはあ……。な、何てしつこいヤツだ！」

バレン又灯台から逃げていた黒装束の男2人が未だ逃走していた。

「あんなバカでかい大剣を担ぎながらどうして付いて来られる!?」
しかし、アガットの猛追に黒装束の男たちは疲れていた。

「ハッ、鍛え方が違うんだよ!らあああああああつ!!!」

アガットは黒装束の男たちにめがけて重剣を振り下ろした。

「クッ……これ以上は振り切れんか……」

「仕方ない、迎撃するぞ！」

「ようやくその気になってくれたみたいだな。てめえらとの鬼ゴッコには飽き飽きしてたから嬉しいぜ」

「しつこく追ってこなければ死なずに済んだものを……」

「馬鹿なヤツだ……。2対1で勝てると思うのか？」

「ははッ。勝てるに決まってるんだろ」

アガットは余裕の笑みをもらした。

「なに……!？」

「ケンカは気合だ。気迫で負けたら終わりなんだよ。尻尾巻いて逃げ出した時点でてめえらは負け犬決定してわけさ」

「ほ、ほざけ!ギルドの犬がッ！」

「2人がかりでなぶり殺しにしてやる！」

黒装束の男たちがアガットに飛び掛ったが、アガットは一太刀で切り捨てた。

「ぐあああつ……!」

「クッ……ここで捕まるわけには……」

「フン、とつとと降伏して洗いざらい白状して貰おうか。てめえら
が何者で何を企んでるのかをな……」

アガットが問い詰めようとした時、背後から青年の声が出た。

「それは困るな」

「なッ!？」

その青年は、エステルたちがヴァレリア湖のほとりで見た仮面をかぶった男だった。

「い、いつのまに……」

アガットはその気配に全く気がつかなかったようだ。

「た、隊長!」

「来てくださったんですか!」

「仕方のない連中だな。定時連絡に遅れた上にこんな所で遊んでいるとは」

仮面の隊長がうんざりした声で言った。

「も、申しわけありません」

「色々と邪魔が入りまして……」

「なるほどな……。てめえが親玉つてわけか?」

「フフ、自分はただの現場責任者にすぎない……。部下たちの非礼は詫びよう。ここは見逃してもらえないか?」

「はあ?今……なんて言った?」

聞き逃したのではなく、なぜそのようなことが言えるという意味だろう。

「見逃してもらえないかと言った。こちらとしても、遊撃士協会と事を構えるつもりはないのでね」

「ア、アホか!そんな都合のいい話があるか!」

「やれやれ……。悪くない話だと思っただが。……お前たち。ここは自分が食い止める。早く合流地点に向かうがいい」

「は、はい!」

「感謝します、隊長!」

黒装束の男たちはすばやく立ち上がり逃げていった。

「逃がすか、おらあッ!」

アガットが追いかけようとしたが、

「……………」

仮面の隊長が立ちふさがった。こちらの獲物も剣だった。

「てめえ……。フン、まあいい。だったら獲物を変えるまでだ。てめえが持つてる情報の方がはるかに重要そうだからな……」

「フフ……。そう簡単に狩れるかな？」

「上等ッ！」

アガットが間合いを一気に詰め、仮面の隊長に剣を振り下ろした。

しかし、仮面の隊長も鮮やかな身のこなしでその攻撃をすべて避けた。

「フン、やるじゃねえか」

「抑えきれぬ激情をもって重き鉄塊を振るうか……。お前は……自分と似た所があるようだ」

「……。なんだと……？」

「己おのれの無力さに打ちのめされたことがある……。そんな瞳めをしているぞ」

「……。クツクツクツ、いいねえ。

どこの誰かは知らねえが、なかなか気に入ったぜ……」

「自分もお前のような不器用な男は嫌いではない。お互い、このあたりで手打ちというのはどうかな？」

「ふざけんなああッ！黙って聞いてりゃあ、知った風な事ほざきやがって！徹底的にブチのめしてやらあッ！」

「フツ……」

互いに剣を構え、この一撃にこめた。

「おおおおおっ！」

「はあああああッ！」

そして両者交錯した。

「ぐっ……」

膝をついたのは仮面の隊長だった。

「へっ……。口ほどにもないヤツだぜ。ギルドに運んで徹底的に締め上げてやるとするか……」

アガットが仮面の隊長に近づいたとき、仮面の隊長の姿が薄くなっ

た。

「な、なんだ……」

そして仮面の隊長の姿が完全に消えてしまった。

「こ、これは……分け身の戦技クラフトツ!?」

暗い木々の狭間から微かな気配かすが漂ただよってきた。

「フフフ……。悪くない一撃だったが、いまだ迷いがあるようだな。

その迷いが太刀筋を狂わせる」

仮面の隊長の声だった。

「な、なにッ!?」

「修羅と化すならば全てを捨てる覚悟が必要だ。人として生きたいのなら……怒りと悲しみは忘れるがいい。それでは、さらばだ……」
木々の間に漂っていた気配はかき消すように消えてしまった。

「……忘れろだと……。そんな事……」

「……出来るわけねえだろうが……。うおおおおおッ!!!」
1人アガットの声だけが街道にこだました。

第4章 黒のオープメント(1) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

今回はクローゼとの別れと、ツァイス地方に入る話です。更新は今日8日の20時です。

第4章 黒のオープメント(2)

朝 ルーアン市

ラングランド大橋の上でクローゼを待つエステルとヨシユア。

「……やっぱりまだ来てないみたいね。早く来すぎちゃったかな？」

「そうだね、酒場で時間を潰そうか？」

「ううん、風も気持ちいいし、ここで待つことにしましょう。川の流れを見ているだけでも、なんか飽きない気がするし」

意外にも風流なエステルであった。

「うん、そうしようか」

エステルとヨシユアは橋の手すりに手をかけ、話し合う。

「きっかけ、ルーアンもようやく落ち着きを取り戻した感じよね。」

ダルモア市長が逮捕されて一時は大騒ぎになったけど……」

「現職の市長の逮捕なんて前代未聞の出来事だからね。ロレントでいえばクラウス市長が捕まったのと同じことなわけだし」

「うわ、それは確かにショックすぎるかも……。でも、そう考えてみるとルーアン市の人は冷静よね。驚いてはいたみたいだけどショックは受けてないみたい」

「まあ、ルーアン市は伝統的にダルモア家の当主が選ばれていたみたいだから。市長本人を慕っていたわけじゃなかったのかもしれないね」

「みんなから好かれてるクラウス市長とは違うわけか。うーん、自業自得とはいえ、ちょっと哀れな気がするかも」

その時、橋の上から鳥の声がした。

「来たみたいだよ」

ヨシユアが空を見た。

「え……」

エステルが上を見るとジークが橋の手すりに留まった。

「あ、ジーク！」

「ピユイ」

「エステルさん、ヨシユアさん！」

そして、クローゼは走りながらエステルのところまで来た。

「はあはあ……。ごめんなさい、遅れてしまっ」

「いや、僕たちもちょうど来たところだよ」

「も、もしかしてわざわざ走って来たの？ そんなに慌てることないのに」

「いえ、お見送りをするのに遅れるわけにはいきませんから。連絡を下さってどうもありがとうございました」

「も、クローゼってば。お礼を言うのはこっちだよ。ジークも……見送りに来てくれてありがと？」

「ピユイ」

「はは、それじゃあ……。さっそく出発するでしょうか？」

「うん、そうね。ツァイス地方に行くには南口を出ればいいんだけど？」

「はい、南の街道の先にツァイス方面の関所があります。《エア＝レットン》といって滝が見えることで有名なんですよ」

「へっつ、ちよつと楽しみかも。それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エステルたちはツァイス地方に向けて出発した。

エア＝レットン

そこは滝が轟々（ごうごう）と流れていて、圧巻としか言えないほど素晴らしい光景であった。

「へっつ……。すごく雰囲気の良い場所ね。関所というより観光地って感じかも」

「実際、滝目当てに訪れる観光客も多いそうですよ」

「あ、やっぱり？ うーん、ルーアン地方ってほんと綺麗な場所が多

いよね。あの公爵じゃないけど住んでみたい気はするかな」

「ええ、そうですね。でも、ロレントの街も落ち着いていて素敵だと思いますよ」

「あ、クローゼってロレントに来たことあるんだ？」

エステルが敏感に反応した。

「はい、五大都市には一通り行った事があります。そうだ、この先にあるツアイス市なんですけど……。とても個性的な街でビックリすると思いますよ」

「ふーん、そうなんだ？ うーん……楽しみになってきたわね」

「よし、それじゃあ関所で通行手続をしようか？」

「うん、オツケー」

エステルたちは関所へと入った。

「こんにちは。どのようなご用件ですか？」

兵士クロンが尋ねた。

「ツアイス地方に入るための通行手続をお願いしますか？」

「ああ、それでしたらこちらのカウンターでどうぞ。ただし、通行手続をしてしまうと関所から出られなくなってしまうですが……。それでも構いませんか？」

「うん。お願いしちゃうわ」

「では、こちらの書類にサインをお願いします」

兵士クロンはエステルたちに通行手続の書類を渡した。

エステルとヨシユアは書類にサインした。

「はい、これでOKです。そちらのお嬢さんは通行手続をされないんですか？」

「あ、私はこちらの方々のお見送りに来ただけなんです」

「ああ、そういう事ですか。《カルデア隧道》の手前までなら見送りをなさって結構ですよ」

「ありがとうございます」

クローゼは礼を言った。

「《カルデア隧道》^{すいどう}って、ナニ？」

エステルは兵士クロンに尋ねた。

「この関所からツアイスマまでを結んでいる街道ですよ。カルデア丘陵を貫いている長い地下のトンネル道なんです」

「へっつ、そうなんだ」

「トンネルの街道か……。さすがに通るのは初めてだね」
エステルとヨシユアは感嘆した。

関所の2階に上がると、滝が目の前に広がった。

「うわー、壮観！ふーん、滝って言っても自然の川じゃなくて水路から流れ落ちてるんだ……」

「たしか《ローツエ水道》っていう名前だったかな？中世に造られた水道橋だね」

「はい、ヴァレリア湖から直接水を運んでいるんですよ」

「うーん、オーブメントも無いのによく造れたわよね。それで、あつちの方が……」

エステルが目を向けた先には薄暗いトンネルがあった。

「……あれがトンネル道の入口だね」

「うん……。そろそろお別れね」

「はい……。あのエステルさんたちはこのまま王国を一周するんですよね？ひよっとしたら王都でまたお会いできるかもしれません」

「え、そうなの！？」

「私、女王生誕祭の頃には王都に戻るつもりなんです。親戚の集まりのようなものに出席しなくてはならないので……」

「女王生誕祭というたしか一ヶ月くらい先だね。確かに、その頃には王都に行ってるかもしれない」

「あ、じゃあさ……。親戚の用事が終わったら王都のギルドに連絡してよ？そうすれば会えると思うから」

「はい、必ず連絡しますね。エステルさん、ヨシユアさん。本当にありがとうございます。お2人がしてくださったこと、私、絶対に忘れませんから……」

「や、やだな。水くさいってば〜！」

照れるエステル。

「僕たちも君には色々世話になったしね。おあいこって事にしようよ」

「とんでもありません……。あの時……市長と対決した時……。私は偉そうなことを言いました。『立場に囚われている』、『自分の身が可愛いだけ』って。でも……。それは私も同じだったんです」

「えっ……？」

「私は逆に、自分の立場から逃げようとはかりしていました。孤児院にしても学園にしてもどこか逃げ場にしていたんです。でも……。そんな私にエステルさんたちは教えてくれました。どんな時でも前向きに進んでいく決意を……。大切なものを守る強さを……。ありがとう、おかげで私も少しだけ勇気が出せそうです」

「よ、よく判ないけど……。お役に立てたんだったらあたしとしても嬉しいかな」

エステルはクローゼの手を握った。

「あ……」

「えへへ……。元気でね、クローゼ。今度は王都で会いましょう！」

「はい……。必ず」

「ピュイピュイ」

「あは、ジークも一緒に王都で会えるといいわね？」

「ピュイ」

「……って、あんた。本当に王都に来るつもり？このあたりに住んでるんじゃないの？」

「ピューイ？」

ジークは首をかしげた。

「ふふ、ジークは特別ですから。きっと会えると思いますよ」

「うーん……。冗談で言っただけ」

「はは、ジークには最後まで驚かされっぱなしだね。それじゃあ…

…そろそろ行くでしょうか？」

「ん……そうね」

「エステルさん、ヨシユアさん。修行の旅、頑張ってください。それから、お父様の行方が判ることをお祈りしています」

「ピューイ」

「うん……ありがとう！」

「君たちも元気で！」

エステルたちはクローゼたちに別れを言い、《カルデア隧道》すいどうへと入った。

「……………」

クローゼはエステルたちの背中を名残惜しそうに見続けた。

「ピューイ」

「うん、そうね……。また会えるよね」

その時、クローゼの背後から女性の声がした。

「クローゼ。お待ちせしました」

その声の主はユリア中尉だった。

「……ユリアさん。レイストン要塞から戻ったのですね？」

「ええ、予想以上に時間を取られてしまいました。失礼ながら、その件に関してご報告をしようと参上した次第です」

「ありがとうございます、ご苦労様でした」

「ピューイ」

ジークはユリア中尉の周りを飛んだ。

「こ、こら、ジーク。じゃれつくんじゃない。お前、護衛の使命はちゃんと果たしているのだろうな？」

程なくして、ジークはユリア中尉の肩に留まった。

「ピユイピユイ」

「うふふ、ジークにはいつも世話になっています。ね、ジーク？」

「ピユイ？」

「まったく調子のいいヤツだ」

ユリア中尉はクローゼに向き直った。

「……街道外れに《アルセイユ》を停めています。報告の方はそちらで……」

「わかりました。……学園生活もしばらくお休みですね。王都に戻る前に先生たちに挨拶しなくては……」

クローゼは下を向いて元氣なく言った。

「（エステルさん、ヨシユアさん。おふたりに負けないよう……私、精一杯頑張りますね）」

第4章 黒のオープメント(2) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

ついにツァイス地方に入ったエステルたち。その先に待ち受けているのは!?

第4章 黒のオープメント(3)

カルデア隧道すいどう

エステルの後ろでヨシユアが突然立ち止まった。

「……………」

「どうしたの、ヨシユア？」

「いや…………。誰かが来たような気配がして」

「へえ、あたしたちの他にこんな所を通る人がいるんだ」

エステルとヨシユアは入口の方をしばらく見たが誰も来なかった。

「…………。誰も来ないわよ？」

「そうだね…………。ゴメン、勘違いだったみたいだ」

「あ、わかった…………」

エステルがポンと相槌を打った。

「もー、ヨシユアってばクローゼに未練があるんでしょ」

「はあ？どうしてそうなるのさ？」

「照れない照れない。お姉さんにはお見通しよ？ま、まあ無理ない

わよね…………。お芝居とはいえ…………。キヌまでした仲なんだし…………」

「…………え…………」

「な、何だったら今すぐ戻って声をかければ？良い返事、聞けると

思うわよ？」

「……………………。…………。もしかして今まで気付いていな

かったとか？」

「へ…………。気付いてないって、何が？」

「だから、ラストのシーン。あれはフリだよ、フリ。うまく角度を

ずらして、したように見せただけなんだけど」

「え…………………………………………。あ、あんですって〜!？」

エステルが絶叫した。トンネル内にエステルの声がこだました。

「まったく君って本当にそっかしいなあ。台本の注釈のところにも

もちろんと書いてあっただろう？」

「あ、あはは……。そっか、そうだったんだ……」
エステルは急にヨシユアに背中を向けた。
「(っつて、あたしつてば……。どうしてこんなにホツとしてんのよ
くっ!?)」
「あの……。エステル？ひよつとして具合でも悪い？」
「なはは、大丈夫だつてば！それじゃあ、とつとツァイスに出発
しましょっ！」
エステルはさっさと歩き出した。

カルデア隧道の途中、ツァイス側から声が聞こえてきた。
「はあはあ……。い、急がなくなっちゃ……。」「
どうやら子供の声のようだ。

「あれ……。?」
「……。誰か来るみたいだね」
その時、その声の主であろう女の子が走って現れた。

「あ……。」
その女の子はエステルたちを見るなり立ち止まった。

「やあ、こんにちは」
「どうしたの、そんなに急いで？」
エステルたちはその女の子に話しかけた。

「あ、はい、こんにちは。あの、お姉さんたち、この道を通ってきた
んですか？」

「うん、そうだけど？」
「あのあの、だったら途中で消えた照明を見ませんでした？トンネル
の壁についている照明のことなんですけど……。」

「むっ……。ごめん。ちよつと気付かなかったかも」
エステルは見えていなかったようだ、
「消えた照明はなかったけど、川を2つ越えたところで調子が悪そ

うなのは見かけたよ」

ヨシユアはしつかり見ていた。

「それですっ！や、やっぱり思ったとおりだよ……。すみません。わたし急がなくなっちゃ！」

女の子はまた慌しく走っていった。

「ツアイスの女の子かな。変わった格好してたね。ずいぶん慌てていたけど……」

「うーん。なんか気になるわね。ね、ヨシユア。ちょっと追いかけてみない？」

「そう言うと思ったよ。たしかに女の子を1人で行かせるのは危険そうだからね。付いていった方が良さそうだ」

ヨシユアも同感だったらしい。

「うん！急いで追いかけましょっ！」

エステルたちは来た道を引き返し、女の子を追いかけた。

しばらく戻ったところで女の子を発見した。

「はうう〜っ……」

目的の照明には魔獣が群がっていた。

「も、もうこんなに集まって来ちゃうなんて……。このままじゃ壊されちゃう……。こ、こうなったら……」

女の子はどこからか導力砲を取り出し、魔獣に向けた。

「方向ヨシ、仰角20度……。導力充填率30%……。……いっけええっ！」

そして魔獣目掛けて打ち込んだ。

「そ、それ以上近づいたら今度は当てちゃうんだから！ほ、本当に、本気なんだからっ！」

しかし魔獣は女の子に詰め寄ってきた。

「あう……。ぎゃ、逆効果だったかも……」

じりじりと近づくと魔獣。

「やああっ……………」

そこでエステルが突撃した。

「てりやあああっ！」

エステルとヨシユアは女の子の前に立った。

「え…………。あ、さっきの……………」

「話はあとあと！いいから下がってて！」

「とりあえずこいつらを追っ払うからね！」

エステルたちは難なく魔獣を倒した。

「こ、こわかった〜っ…………。あのあの…………ありがとうございますっ。

おかげで助かりました」

「あはは。無事で何よりだったわね。でも…………ちよつと感心しないわよ？魔獣を挑発するなんて危ないことしちゃダメじゃない」

「あ、でもでも…………。放っておいたら照明が壊されちゃうと思って

……………」

「そういえば…………。どうして、あの魔獣たち、消えた照明に群がっていたのかな？」

「前に街道灯を交換した時にも同じことがあっただろう？オープメントの中にある七耀石の回路は魔獣の好物だからね。だから街道灯には、魔獣よけの機能が付いているんだけど…………。その機能が切れたら逆に狙われやすいってわけさ」

ヨシユアが丁寧に教えてくれた。

「あ、なるほど。でも、それにしただって無茶するにも程があるわよ。大ケガしたら危ないでしょ？」

「あう…………ご、ごめんなさい」

しゅんとする女の子。

「まあまあ、そのくらいで。第一、無茶するとか君が言っても説

「得力ないしね」

「そこつ、水をささないのっ！まあいいや……。あたし、エステルっていうの」

「僕はヨシユア。2人とも、ギルドに所属している遊撃士なんだ」

「わあ、それであんなに強かったんだ……。わたし、ティータつていいいます。ツアイスの中央工房で見習いをさせてもらってます」

「へー、それでそんな格好してるんだ。それじゃあ、ティータちゃん。ツアイスに戻るんだったらあたしたちと一緒に行かない？」

「そうだね。また魔獣が出たら大変だし」

「ほ、ほんとですか？ありがとーございますつ。えつと、ちよつとだけ待つてもらってもいいですか？あの照明を修理しちゃいますから」

「あ、たしかにこのまま放っておくのは危なそうだもんね。でも、どうしてここの照明が切れそうなんて分かったの？」

「あ、端末のデータベースを調べていたら偶然見つけて……。手違いで、整備不良だったものがそのまま設置されたみたいなんです」

「なるほど……。早く見つかって良かったね」

「（端末？でーたべーす？）」

エステルは言葉の意味が理解できず、首をかしげていた。

「……………んしょつと」

ティータが最後に照明のカバーをつけると、点灯した。

「はい、これでいーです。お待たせしちゃいました」

「へえ、すごい。ずいぶん手際良いのねえ」

「さすが、あの中央工房で見習いをしてるだけはあるね」

「えへへ……。大したことはしてないです。クオーツの接続不良を直して導力圧を調整しただけですから」

「????なんか充分、大した事のように聞こえちゃうんですけど…

……」

「そんなことないですよー。えとですね。わかりやすく説明すると……」
テイータが1人解説を始めた。

「オーブメントの内部にはクオーツって言う結晶回路がはまっているんですけど、それがきちんとユニット部に接続されていないと、生成された導力が行き場を失ってしまつて、結果的に想定された当初の機能が発揮できなくなってしまうんです。それが街道灯の場合には光と魔獣除けの……」

「ス、ストップ！」

エステルが耐え切れなくなつてテイータを制した。

「せ、説明はまたにしてそろそろ出発したいかな。うんうん。こんな所で立ち話もなんだし」

「あ、それもそーですね。ちょっと残念ですけど……」

「（ホツ……）」

安堵あんどの息を吐くエステル。

「はは、それじゃあ改めてツァイスに向かうとしようか」

「オツケー！」

「はいっ！」

気を取り直して、エステルたちは再びツァイスの中央工房へと向かった。

第4章 黒のオープメント(3) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告 <

いよいよツァイス地方の中心、ツァイス中央工房に到着！

第4章 黒のオープメント(4)

「あつ……!」

エステルが小走りに駆け出した。

「トンネルの終点……。つてことは……。ここがツァイス市の入口かな？」

「はい、そーです。正確には、中央工房の地下区画に出るんですけど」

「そつか、あの有名な……」

「《中央工房》 工房都市ツァイスが誇るオープメント技術の殿堂だね。ずいぶん大きな建物だって聞いたことがあるけど……」

「それはもー。とにかくおつきいです。初めて来るお客さんなんか迷子になっちゃうくらいです」

「ティータは笑いながら言った」

「ひええ……。そりやまた大したもんね。ちゃんとギルドまで行けるか心配になってきたわ……」

「とりあえず、1階に上がれば町の方に出る玄関があるんです。わたし、お姉さんたちを案内します」

「ありがと、よろしくね」

「それじゃあ中に入ろうか」

ツァイス中央工房 地下1階

「あれ、この部屋は……」

エステルは部屋に入ったかと思うと何も無い小部屋に当惑した。

「ここはエレベーターです。地下から屋上までひとつとびつてカンジです」

「んー？エレベーターって鉱山にもある昇降装置よね。どこにも見

当たらないけど……」

エステルは周りを見渡すが、どこにもそんな装置はなかった。

「違うよエステル。たぶん、この部屋そのものが上下する造りになつてるんだ」

「あ……」

エステルがようやく気付いたそうだ。

「えへへ、最新式なんですよー。最大積載量、50トリン……。大型機材の搬入なんかもラクラクこなしちゃうんです」

「よ、よく分からないけど……。なんか凄そうなカンジかも。それで、どうやったら動くの？」

「あ、そのパネルで行きたい階を選べばOKです。えと……町に行きたいんですね？」

ティータはそばにあった機械を示した。

「うん。1階に案内してくれるかな？」

「はいっ」

ティータは機械を操作するとエレベーターが動き始めた。

「わわっ……」

ツァイス中央工房 1階

「へへ。なんか広いトコに出たわね」

「ここが中央工房の1階です。受付のカウンターと一般のお客さん向けのメンテナンス窓口があります」

「なるほど。ここから町に出られるんだね」

その時、受付のヘイゼルがティータに声をかけた。

「あつ、ティータちゃん」

「あ、ヘイゼルさん？」

「ちょうどよかったわ。トランス主任があなたのことを捜していたの。演算室に来て欲しいですって」

「あ……はい、わかりましたっ」

「あら。急用が入っちゃったみたいね」

「ありがとう。わざわざ案内してくれて」

「と、とんでもないですよー。わたしの方こそお世話になっちゃって……」

ティータが申し訳なさそうに言った。

「あたしたち、しばらくツァイスに滞在するからさ。よかったらまた会いましょ？」

「あ……。はい、よろこんでっ！それじゃあ、さようなら！」

ティータは再びエレベーターに乗って行ってしまった。

「はは、可愛い子だったね。一生懸命な感じがして」

「うんうん、同感！あゝあ、あたしも、ああいう健気で可愛い妹が欲しかったなあ。誰かさんみたいなお可愛くない弟じゃなくてさ」

エステルがヨシユアに向かって皮肉たっぷりに言った。

「何度も言うようだけど、いつもフォローしているのは僕。お姉さんぶりたいんだっいたらもっとしっかりしてくれないとね」

ヨシユアはその言葉をものともせず言い返す。

「ふんだ、よけーなお世話。それはともかく……さっそく町の方に行ってみる？」

「そうだね、まずはギルドで転属手続をしておこうか。それから、父さんのことと例のオーブメントのことについても相談してみよう」

「ん……オツケー」

エステルたちはさっそくツァイスの市内に向かった。

エステルが中央工房の外に出るとなにやら動く階段があった。もといエスカレーターだが。

「な、なにこれ？」

「動く階段……みたいだね。たしかに長い階段だから昇り降りは大変そうだけど……」

「だ、だからといって機械で動かしちゃうなんて……。あたし、この町に着いてから驚いてばかりのような気がする」
「それは同感」

遊撃士協会 ツァイス支部

「こんにちは〜！」

「失礼します」

エステルはギルドの受付であろう東方風の女性の方に向かった。

「……………」

しかし、東方風の女性は目を閉じたまま何も話さない。

「あの〜、あたしたち、」

「……………」
「……ようやくのご到着ね。エステル、ヨシユア。ツァイス支部へようこそ」

東方風の女性がいきなり話し出した。しかも、すでにエステルとヨシユアのことを知っていた。

「へっ……………」

「僕たちをご存知なんですか？」

「ルーアン支部のジャンからすでに連絡は受けていたから。栗色のツインテールに黒髪と琥珀の瞳……。まさにあなたたちのことね」
ジャンがすでに連絡を入れていたので知っていたというわけだ。

「な、なるほど……………」

「私の名前は、キリカ。ツァイス支部を任されている。以後、お見知りおきを」

東方風の女性はキリカと名乗った。

「あ、はい、こちらこそ」

「よろしく願います」

「さっそくだけど、所属変更の手続をしてもらおうわ。こちらの書類にサインして」

キリカはエステルたちに転属手続の書類を渡した。

「うん、わかったわ」

エステルとヨシユアは転属手続の書類にサインした。

「……………いいわ。これであなたたちもツァイス支部所属になったけど……………。今のところ、すぐにやって欲しい急ぎの仕事は入ってないの。掲示板をチェックしながら自分たちのペースで働くことね」

「ちよつと物足りないけど、ま、平和なのはいいことよね。そうだから、キリカさん、聞きたいことがあるんだけど……………」

「カシウスさんのことね」

キリカがこれまたエステルの先を読んだ。

「ひえっ!？」

「それもジャンさんからお聞きになったんですか？」

「一通りのことはね。残念だけど、カシウスさんはツァイス地方には居ないわね。少なくとも、ここ数ヶ月はこの支部を訪れていない」

「はっつ、そっかあ……………」

「残りは王都か、それとも……………」

エステルとヨシユアは顔を伏せた。

「だけど、別の問題については手がかりをあげられると思う。これを持っていきなさい」

キリカはエステルに工房長への紹介状を渡した。

「え、これって……………」

「中央工房の責任者であるマードック工房長への紹介状。このツァイス地方では市長と同じ立場にいる人ね」

「ひよつとして……………黒いオーブメントの件ですか？」

「市長邸での話を聞く限り、かなり謎めいた代物のようね。まずは工房長に会って相談してみるといいでしょう」

「な、なんかメチャメチャ用意いいわね。キリカさん、超能力者とか？」

「あなたたち遊撃士のサポートが私の仕事だから。届けられた情報を判断してしかるべき用意をしただけよ」

キリカがキツパリと言った。

「お、恐れ入りました」

「助かります、本当に」

「気にすることはないわ。何か事件が起こった時に働いて返してもらうから」

「あはは……。うん、その時は任せて！」

「早速、工房長さんに会いに行ってみようか？」

「うん、そうしましょ」

エステルたちは中央工房へと向かった。

第4章 黒のオーブメント(4) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

黒のオーブメントの手掛かりを探すため、中央工房に向かったエス
テルたち。なにか得られるか!?

第4章 黒のオープメント(5)

ツァイス中央工房

エステルたちは受付嬢のヘイゼルに話しかけた。

「あら、先ほどティータちゃんと一緒にいた……。ようこそ中央工房へ。どういったご用件でしょうか？」

「あの、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど」

「こちらの工房長さんに面会をお願いに来ました」

エステルは工房長への紹介状をヘイゼルに見せた。

「まあ、そうでしたの。ちょっとお待ちください……」

ヘイゼルは壁にあるインターフォンを操作した。

「あ、工房長。ご休憩のところ失礼します。はい……。そうですの。遊撃士協会の方々が……。……。かしこまりました。それでは……」

ヘイゼルが戻ってくると、

「お待ちせしました。マードック工房長がお会いになられるそうです。お手数ですが、2階にある工房長室をお訪ねください」

「よかった。すぐに会ってくれるんだ」

「それじゃあ、2階に上がろうか」

エステルたちは2階の工房長室に向かった。

中央工房2階 工房長室

「やあ、待っていたよ。エステル君にヨシユア君だね」

「あ、はい。初めまして、工房長さん」

「お忙しいところを失礼します」

「いやいや。気にしないでくれたまえ。遊撃士協会には……。特にカシウスさんにはお世話になっているからね。そのお子さんたちとな

れば歓迎しないわけにはいかないさ」

「えっ！？工房長さんって父さんの知り合いなの！？」

「知り合いというかカシウスさんは大の恩人だよ。この中央工房は、大陸で最もオーブメント技術が進んでいる場所と言っても過言じゃない。当然、その技術をめぐって色々トラブルが絶えなくってね。どうしても対応に困った時にはロレント支部に連絡して彼に来ていただいていたんだ」

「そ、そうだったんだ……」

「はは、道理でいつも出張が多かったわけだね」

「その恩人のお子さんたちが、わざわざ訪ねてきてくれたんだ。喜んで相談に乗らせてもらうよ」

「えへへ……。ありがと、工房長さん」

「少し話は長くなりますが……」

エステルたちは、マードック工房長に、黒いオーブメントをめぐるこれまでの経緯を説明した。

「なるほど……。そんなことがあったのか……。そのオーブメントを拝見しても構わないかね？」

「うん、もちろんよ」

エステルは黒いオーブメントを荷物から取り出して、マードック工房長に渡した。

工房長はそのオーブメントをしばらく調べた。

「うづむ……。確かに得体の知れない代物だ……。明らかに最近造られた物だが、どこにもキャリバーが刻まれていない……」

「キャリバー??」

「オーブメントのフレームに刻まれている形式番号ですか？」

「うん、その通りだ。オーブメントには、ほぼ例外なくいつどこで造られたのかを表す形式番号が刻まれている。これは、リベールだけでなく他の大陸諸国でも事情は同じだね。50年前に、オーブメントが発明された時からの伝統なのだよ」

「へへ、そうだったんだ」

エステルは懐から戦術オーブメントを取り出して、フレームを調べた。

「……………あ、ほんとだ。確かに番号が刻まれてるわ」

「はあ……………。今まで気付かなかったのかい？」

ヨシユアは横であきれている。

「う、うっさいわね……。でも、形式番号キャリアが無いのってそんなに不思議な事なんだ？」

「導力技術者にとってナンバリングをすることは常識とも言えることだからねえ。試作品だとしてもそれは同じ……………。となると、なにか後ろ暗い目的で造られた可能性が高いかもしれない」

「後ろ暗い目的……………」

エステルの顔が真剣になった。

「まあ、はつきりとしたことは内部を調べないと判らないが……………」

マードック工房長が黒いオーブメントを開けようとしたが、その手が止まった。

「……………」

「どうしたんですか？」

「まいったな……………。調整用のフタが見当たらない。よく見たら継ぎ目もないし……………どうやって組み立てたんだろう？うーん、このままだと中を調べるのすら難しそうだな」

「えー、そんなあ……………。あ、だったら外側のフレームを切断すればいいんじゃない？」

「まあ、確かにそうするのが手っ取り早いかもしれないが……………。でも、カシウスさんあてに届いたものを勝手に傷つけるのはちょっと気が引けるなあ」

「そ、そっか……………」

「……………。例の博士だったら任せられると思うんだけど……………」

「あ……………同封されていたメモの……………。確かに、その博士だったら任せちゃっていいかもね」

「????」

「実は、そのオーブメントと一緒にこんなメモが入ってたんだけど……」
エステルはカシウス宛の小包に同封されていたメモをマードック工房長に見せた。

「『R博士に調査を依頼……』」

「そのR博士という方に心当たりはありますか？」

「心当たりがあるものにも……。頭文字がRで、カシウスさんの知り合いといたら『ラッセル博士』に間違いないだろう」

「やっぱりそうですか……」

「ラッセル博士？というか……。ヨシユアの知り合いなの？」

「いや、面識はないけど。オーブメント技術をリベールにもたらした人物として有名なんだ」

「ほう、よく知ってるね。オーブメントを発明したのはエプスタイン博士という人だが……。ラッセル博士はそのエプスタイン博士の直弟子の1人にあたるんだ。40年前、彼が持ち帰ったオーブメント技術のおかげでリベールは技術先進国となった。いわば、リベールにおける導力革命の父といえるだろう」

「ほええ……。そんなすごい人がいるんだ。父さんってば、つくづく意外な人脈を持つてるわねえ」

「しかし、そのオーブメントを博士に任せるのは心配だな。どんな事になってしまふのやら……」

「へ？」

「なんと言うか……。良くも悪くも天才肌の人でね。一度、研究心に火がつくと色々なことを起こしてくれるんだ。そうだ……。初めて導力飛行船を開発したときも……。ふう……。マードック工房長は溜息をついた。

「（な、なんか遠い目をしてる……）」

「（色々とあつたみたいだね……）」

「……コホン、これは失礼。まあ、確かに博士ならそのオーブメント

トの正体を必ずや突き止めてくれるだろう。紹介するから相談してみるといい」

「ありがと、工房長さん！」

「どちらに行けば博士にお会いできますか？」

「そうだな……。ちよつと待ってくれたまえ」

マードック工房長はインターフォンを操作した。

「もしもし……。おお、ちよつと良かった。実は君のことを捜しているね。すまないが、こちらに来てもらえないかな？ うん、うん、待っているよ」

「ひよつとして、そのラッセル博士を呼んだの？」

「いやいや、とんでもない。実はラッセル博士は町に個人工房を持つていてね。最新式の設備が揃っているから普段はそちらで研究してるんだ」

「へへ。さすが天才博士つて感じね。……あれ、それじゃあ今、呼んだのは？」

「うん、そのラッセル博士のお孫さんがここで働いているんだ。その子に君たちのことを案内してもらおうとお思つてね」

「その”子”？」

その時、扉から人が入ってきた。

「えつと、失礼します」

「あつ？」

「君は……」

入ってきたのはティータだった。

「あれれ……。エステルさん、ヨシユアさん？」

「なんだなんだ。ひよつとして顔見知りかね？」

「うん。知り合つたばかりだけだね」

「それじゃあ彼女が博士のお孫さんなんですね」

「うん、その通りだ。ティータ君。こちらのエステル君たちが博士に相談があるそうなんだ。家まで案内してもらえるかね」

「おじいちゃんに……。あ、はい、わかりましたっ」

「よろしく頼んだよ。そうそう、何か判ったら私にも教えてくれると嬉しいな。技術者のはしくれとして、非常に興味をそえられるからね」

「あはは、うん、わかったわ」

「それでは失礼します」

「やー、ティータちゃんが来るとは思わなかったわ。しかも、有名な博士のお孫さんだったなんてね」

「どうりでオーブメントの扱いにも慣れてるわけだ」

「え、えへへ……。そんなことないですよー。おじいちゃんはともかく、わたしはただの見習いですから」

ティータが照れた。

「あ、そういえば……。おじいちゃんに相談って遊撃士のお仕事と関係が？」

「うーん……。ま、半々ってところかな。これがまたフクザツ怪奇な事情でね」

「詳しい話は、おじいさんに会った時にさせてもらおうよ」

「あ、はい、わかりました。えと、わたしの家は街の南西の方にあるんです。エスカレーターを降りてまっすぐ歩けば南口があって……。そこで西に曲がれば到着です」

「わかったわ。それじゃ、早速行きましょ」

エステルたちはラッセル博士の家に向かった。

第4章 黒のオープメント(5) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

黒いオープメント解明に向けて一歩前進したエステルたち。ラッセル博士はどのような人物なのか!?

第4章 黒のオープメント(6)

ラッセル工房

「えへへ……。これがわたしの家です」

「へへ、いいお家じゃない」

エステルが周りを見渡しながら言った。

「ラッセル博士はどこにいらっしやるのかな？」

「おじいちゃんなら工房の方にいると思います。その扉の向こう側です」

ティータは扉を指し示した。

「それじゃあ早速、挨拶させてもらいますか」

ラッセル工房 2階

「おじいちゃん、ただいまあ」

「……むむむ……。ここをこうして、こうすれば……。くぬぬぬぬっ……。！……ぬおおっ……」

しかし、ラッセル博士は一向に振り向かず、ただただ目の前の作業に集中していた。

「……あ」

「あ、その人ね」

エステルはラッセル博士に挨拶しに向かった。

「あのへ、初めまして。あたし、遊撃士協会のエステル・ブライトつていいいます。実は、博士に相談したいことが……」

「……あり？」

しかし、ラッセル博士は全く振り向かず、手元を忙しく動かしていた。そして、

「で、できたあああつ！」

急に大声を出した。

「ひえっ!?!」

「わはは、やったわい! ついに完成したぞおおおっ! さすがワシ! すごいぞワシ! うむ、こいつは早速、テストせねばなるまいてっ!」
ラッセル博士は急に立ち上がり、エステルを押しつけて1階へ降りていった。

「わあっ! な、なんなのよ!?!」

「ご、ごめんなさい、エステルさん。おじいちゃん、発明に夢中になるとまわりが目に入らなくなつて……。数日前から造っていた装置がようやく完成したみたいなんです」

「なるほど……。さすが天才って感じだね」

「そ、そういう問題じゃないと思うんですけど……」

「ま、面目ないですう……」

とにかく、エステルたちはラッセル博士を追った。

ラッセル工房 1階

「おじいちゃん、あのね。このお姉ちゃんたちが相談したいことがあつて……」

「ん……? おお、テイータ! いいところに戻ってきたのう! 今からテストをするからデータ収集を手伝ってくれ」

やっと反応を示したラッセル博士。

「え、でも、あのね……」

「今度の発明は、生体感知器を無効にするオーブメントじゃ。特殊な導力場を発生して走査をスキャンごまかすわけじゃな」

「ほ、ほんとー?」

「ホントもホント。掛け値なしの新発明じゃ! ほれほれ、いいから、起動テストの手伝いをせい!」

「うんっ！」

おいっ……。

ラッセル博士とティータは複雑そうな装置を動かし始めた。残されたエステルとヨシユア。

「……あの〜」

「うん。しばらくかかりそうだね」

そして突然、ラッセル博士が振り向いた。

「ほれ、その黒髪の！」

「え、僕のことですか？」

「他に誰がある？2階の本棚から『導力場における斥力値』というノートを持ってくるんじゃない？ほれほれ、とつと急がなか！」

「は、はい、わかりました」

ヨシユアは急かされて2階に走っていった。

「ちょ、ちよつとヨシユア……」

「ほれ、その触角みたいな髪したの！」

次にエステルにお呼びがかかった。しかもエステルのツインテールを触角と言った。

「しょ、触角……。あ、あんですって〜!?!」

エステルが怒ったが、

「ぼけーつとしとらんでコーヒーでも淹いれてこんか！」

ものともせず指図した。

「な、なんであたしがっ!?!」

「ちなみにワシはブラックじゃ。泥のように濃いヤツを頼むぞ」

「聞いてないし……。はあ、もう、わかったわよ」

エステルも走って行った。

「……うん、ばっちり おじいちゃん。こっちの設定は終わったよ」

「おお、さすが早いな」

「あれ……。そういえば……エステルさんたちは？」

「誰じゃ、それ？……」

ラッセル博士が首をひねった。

「そういえば、見覚えのない若い助手どもがいたが……。はて、マドックのやつがよこした新人かのう？」

「お、おじいちゃん……」

こうして、エステルたちは成り行きで実験を手伝うことになり……。実験が終わった頃にはすっかり夕方になっていた……。

「わはは、すまんすまん。すっかりお前さんたちを中央工房の新人かと思つてな。いつものノリでコキ使ってしまったんじゃ」

ラッセル博士は調子良く笑った。

「ったく、笑い事じゃないわよ。コーヒーだけじゃなくてさんざん手伝いをさせてさ」

「まあまあ、貴重な体験をさせてもらったと思えばいいじゃない。

新型オーブメントの起動実験なんて滅多にあるもんじゃないんだし」

「ほう、お前さん。なかなか判つておるようじゃの。どうじゃ、遊撃士なんぞやめて導力学者への道を進んでみんか？」

「もう、おじいちゃんたら！ごめんなさい。エステルさん、ヨシユアさん。なんだか、わたしも実験に夢中になっちゃって……」

「あ、ティータちゃんは謝る必要はないんだからね？はあ、《導力学革命の父》というからどんなスゴイ人かと思つたけど……。ここまでお調子者の爺さんとは思わなかつたわ……」

エステルががつくりとした。

「わはは、そう誉めるでない。しかし、まさかカシウスの子供たちが訪ねてくるとはのう。わしの方もビックリじゃよ」

「あ、やっぱり博士って父さんの知り合いだったんだ？」

「うむ、けっこう前からのな。あやつが軍にいた頃からじゃから20年以上の付き合いになるか」

「わたしも、カシウスさんと会つたことがありますよ。おヒゲの立派なおじさんですよね？」

「うーん、立派というか胡散臭いというか……。でも、そういうことならアレを預けてもよさそうね」

エステルはヨシユアを見た。

「そうだね、問題ないと思うよ」

「???」

「なんじゃ、何かあるのか？　そういうえば、お前さんたち、わしに相談があるそうじゃな？」

「うん、実はね……」

エステルたちはこれまでの経緯を説明して黒いオープメントを取り出した。

「……ほう」

「わあ……真つ黒いオープメント……」

「ふむ、これは興味深いのう。形式番号キャリバーがないのもそうだが、継ぎ目のたぐいが見当たらん。しかもこのフレームは……」

ラッセル博士は腰のベルトから工作用のカッターを取り出した。そのままオープメントの表面にカッターの刃を強く押し当てる。

「な、なにをしてんの？」

「特殊合金製のカッター……」

「……やはりか……。ほれ、見てみるがいい」

ラッセル博士は黒いオープメントを見せた。

「う、うん……？」

エステルたちは黒いオープメントの表面を覗き込んだ。

「あれっ？」

「キズ一つ付いてない」

「……」

「どうやら、このフレームはわしが知っているどんな金属よりも硬い素材でできているようじゃ。切断して中を調べるのはかなり難しいかもしれんな」

「そ、そんなにとんでもない代物なんだ……」

「切断するのが難しいとなると困ったことになりましたね……」

「ま、フレームの切断は時間をかければ出来るじゃろ。しかしその前に、測定装置にかけてみるべきかもしれんな」

「ソクテイ装置？」

「さっきの実験でも使ったあの大きな装置のことですよ。導力場の動きをリアルタイムに測定するための装置なんです」

「よ、よくわかんないけど……。その装置を使うとどうなるわけ？」

「簡単に言うと、このオーブメントがどんな働きをするのかが判らんじゃ。もつとも、導力波の動きだけではあくまで推定の範囲内に留まるがな」

「それでも、重要な手がかりは得られる可能性が高そうですね」

「うむ。それじゃあ早速……」

「でも、おじいちゃん。そろそろゴハンの時間だよ？」

「えー」

ラッセル博士が不満そうに言った。

「あ、エステルさんたちもよかつたら食べてってください。あんまり自信はないですけど……」

「あ、それじゃあ遠慮なく」

「よかつたら僕たちも手伝うよ」

「よし、それじゃあこうしよう。食事の支度が済むまでわしの方はちよつとだけ……」

「だ、だめー。わたしだって見たいんだもん。ぬけがけは無しなんだから」

ティータがラッセル博士を引き止める。

「ケチ」

「（なんていうか、この2人……）」

「（血は争えないってやつだね）」

第4章 黒のオープメント(6) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

いよいよ次回、黒のオープメントの実験が始まります。果たして、
どうなるのか!?!?乞うご期待!

第4章 黒のオープンメント（7）

ラッセル工房 1階

「コホン……。腹もふくれたことじゃし、さっそく始めるとしようかの。それでは、エステル。例のオープンメントを台の上へ」

「う、うん……」

エステルは測定装置の上へ黒いオープンメントを置いた。

「これでいいの？」

「うむ、ごくろう。ティータや。そちらの用意はどうじゃ？」

「うん、バツチリだよー」

「よろしい。それでは《黒の導力器》の導力波測定実験を開始する」

「《黒の導力器》？」

「なんか、まんまなネーミングねえ」

「シンプル・イズ・ベストじゃ。とりあえず名前がないのは不便じやからの」

「ドキドキ、ワクワク……」

ティータは早く実験を始めたらしく、そわそわしている。

「あー、この子はこの子ですっかりやる気満々だし」

「あ……てへへ」

「よし、それでは始めるぞ。ティータ。装置の起動を頼む」

「うんっ」

ティータが装置の起動を始め、ラッセル博士も操作に入った。

「出力を45%に固定……。各種測定器のスタンバイ開始」

「了解……。うんっ。各種測定器、準備

完了だよ」

「さーて、ここからが本番じゃ。入出力が見当たらない以上、中の結晶回路に導力波をぶつけて反応を探るしかないわけじゃが……」。

そこで、この測定装置の真価が発揮されるというわけじゃ！」

ラッセル博士が楽しそうに言った。

「ノ、ノリノリねえ……」

「ポチツとな」

ラッセル博士がボタンを押すと、測定装置が動き出した。どうやらスキヤンしているようだ。

「へえ……いかにもそれっぽい光ねえ」

「なるほど、ああやって結晶回路に負荷をかけるのか……」

「よしよし……。ティータや。測定器の反応はどうじゃ？」

「う、うん……。なんだか、ヘンかも……」

「なぬ？」

「タコメーターの針がぶるぶる震えちゃって……。あつ……。ぐ、ぐるぐる回り始めたよ!？」

「なんじゃと!？」

その時、ルーアン市長邸と同じ黒い光が放たれた!

「きゃあつ!？」

「な、なんじゃこれは!？」

「ヨシユア、これ……!？」

「あの時の黒い光……!！」

さらにその光は拡散するように広がった。

「なんじゃと!？」

外では町中のありとあらゆる光が消え、さらにエスカレーターまでもが止まってしまった。人々は外に出てただただ困惑していた。

「お、おじいちゃん、これ以上はダメだよお!測定装置を止めなくっちゃ!」

「ええい、止めてくれるな!あと少しで何かが掴めそう……」

その時、外にでていたエステルが帰ってきた。

「ちよつとちよつと!町中の照明が消えてるわよ?」

「ふえつ!？」

「なんと……。ええい、仕方ない!これにて実験終了じゃああつ!」
ラッセル博士が測定装置を止めた。瞬間、明かりがついた。

「あ……。も、元に戻った……」

「はづひづつて……」

「計器の方は……。ダメじゃ、何も記録しておらん。ということば、生きていたのは《黒の導力器》が乗った本体のみ。あとは根こそぎということか……」

そして、ヨシユアも戻ってきた。

「よかった……。実験を中止したみたいだね」

「あ、ヨシユア！外の様子はどうなの？」

「うん……。照明は元通りになったみたいだ。まだ騒ぎは収まっていないけどね」

「そっか……。でも、一体全体、何が起こっちゃったってわけ？」

「そうじゃな……。あえて表現するなら『導力停止現象』と言うべきか」

「『導力停止現象』……」

「オーブメント内を走る導力が働かなくなったということですね」

「やっぱり、その《黒の導力器》が原因なのかな……？」

「うむ、間違いあるまい。しかし、これほど広範囲のオーブメントを停止させるとは。むむむむむむむむ……こいつは予想以上の代物じゃぞ。面白い、すこぶる面白いわい！」

「お、面白がつてる場合じゃないと思うんですけど……」

その時、誰かが入ってきた。

「ハ〜カ〜セ〜ッ!!」

その人物はマードック工房長だった。

「おお、マードック。いいところに来たじゃないか」

「いいところ、じゃありません！毎回毎回、新発明のたびにとんでもない騒ぎを起こして！町中の照明を消すなんて今度は何をやってんですかッ!？」

マードック工房長は怒り心頭といった感じだ。

「失敬な。今回はわしは無関係じゃぞ。そこに置いてある《黒の導力器》の仕業じゃ」

ラッセル博士は測定装置の上にある黒いオーブメントを指し示した。

「そ、それは例の……。なるほど、それが原因ならこの異常事態も
うなずける……」

マードック工房長はしばらく考えた。

「だ、だからといってアンタが無関係ということがあるかあっ！」
そして絶叫した。

「ちっ、バレたか……」

「な、なんかやたらと息が合ってるわね」

「いつもこんな感じなんだ？」

「あう、恥ずかしながら……」

こうして、ツアイス市での最初の日は慌ただしく過ぎていった。エ
ステルとヨシユアは、夜も遅いためラッセル工房に泊めてもらっ
とにした。

第4章 黒のオープメント(7) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

予想以上の代物だった黒いオープメント。ラッセル博士はさらなる実験を行おうとしているが、解明できるのか!?

第4章 黒のオープメント(8)

朝 ラッセル工房

「いや〜。昨日は大変な一日だったわね。この町自体もビックリしたけどあんな事件が起こっちゃうなんて」

「はは、そうだね。それにしても《黒の導力器》か……。想像していた以上に大変な品物だったみたいだね」

「うん……。実験には失敗しちゃったけど、博士、どうするつもりなのかな？」

その時、テイータが上がってきた。

「おはよーございます。エステルさん、ヨシユアさん」

「あ、おはよ〜。テイータちゃん」

「おはよう。昨日は大変だったね」

「えへへ、そーですね。エステルさんたちはよく眠れましたか？」

「うん、バツチリよ？　そういえば、博士はもう起きてるの？」

「あ、おじいちゃん、朝早くに中央工房に行っちゃったんです。」

絶対に《黒の導力器》の秘密を突き止めてやるわ〜！』って」

「は〜、あれだけ工房長さんに釘を刺されたのにまだ懲りてなかったんだ」

「僕たちが持ち込んだ品物を調べてくれるのはありがたいけどちょっと申しわけないな」

「あは、気にしないでください。おじいちゃん、自分が調べたくて調べているだけなんですから。そうだ、朝ごはん食べたらわたしも中央工房に行きますけど……。エステルさんたちはどうします？」

「モチ、付き合っに決まってるわ。あのオープメントの正体も知りたいし」

「そうだね。なにか手伝えるといいんだけど」

「わあ、だったら一緒におでかけですね……。あ、いつけない！　スーブをかけたままだった……。すぐに朝ごはんできますからもうち

よつと待つててください！」

ティータは慌てて下に降りていった。

「いいなあ、あれ……。お持ち帰りにできないかしら」

呆けながらエステルが言った。

「エステル、オジサンっばいよ」

「さてと、美味しい朝食もごちそうになっちゃったし……。中央工房に行くとしますか」

「その前に、できれば一度、ギルドに寄った方がいいかもね。念のため、昨日の一件について報告をした方がいいかもしれない」
ヨシユアが早速中央工房に向かうエステルに言った。

「あ、それもそっか……。ねえ、ティータちゃん。ちよつと寄り道してもいいいかな？」

「はい、もちろんです」

エステルたちはギルドに向かった。

遊撃士協会 ツアイス支部

「おはよう。昨日は大変だったわね。さっそく報告を聞かせてもらおうかしら」

「あ、相変わらず単刀直入ねえ」

「大体の状況は工房長から聞いているけど……。実際に現場にいた人間の説明も聞いておきたいから」

「はい、それでは……」

エステルたちは昨夜の『導力停止現象』についてキリカに詳しく報告した。

「なるほど……。さすが、カシウスさんの所に匿名で届いただけあ

つてまっとうな品ではなかったわね。協会ギルドとしても気になるから」
のまま博士に協力するといいわ」

「うん、そのつもりよ」

「なにか判ったら報告します」

エステルたちは次に中央工房に向かった。

ツアイス中央工房 3階 工作室

「ええい！また失敗かつ！」

ラッセル博士はいらだしそうに実験していた。

「おじいちゃん。お手伝いに来たよ」

「おお、ティータ。おや……お前さんたちも来たのか」

「えへへ……。やっぱり気になっちゃって。で、いったい何してるの？」

「見ての通り、工作機械を使って《黒の導力器》のフレームを切断しようとしているのじゃが……。これがなかなか上手くいかなくてな」
ラッセル博士が溜息をついた。

「どういうことですか？」

「百聞は一見に如かずじゃ。……ポチツとな」

ラッセル博士が工作機械を動かし始めた。

「わっ……なにこれ！？」

「工作用の丸ノコです。特殊合金製で、大抵のものは切断できちゃうんですけど……」

「へえ、これなら……」

しかし、工作機械は黒いオーブメントに触れると、黒い光を放ち、
工作機械を止めてしまった。

「と、止まっちゃった……」

「やっぱり……」

「小規模だけど、昨日と同じ現象ですね」

「どうやら、この黒いヤツは干渉しようとするオーブメントの機能を停止させてしまつらしい。単に照明を消すだけには留まらなかつたみたいじゃな」

「そ、そうなんだ……」

「でも、おじいちゃん。タベみたいにまわりに広がったりしないの？」

「うむ、いいことに気付いたな。どうやら、この停止現象は周囲で稼働中のオーブメントに連鎖して広がっていくものらしい。有効範囲は、およそ5アージユ。逆に言ってしまうえば、範囲内に稼働中のものがなければ、それ以上は広がらんというわけじゃ」

「なるほど……。そんな法則があつたんですか」

ヨシユアが感心しながら聞いている。

「じゃが、それが判つたところで肝心かなめの機械を止められては中を調べることができん……。これは困つたことになつたのう」
ラッセル博士は腕を組んでうなり始めた。

「なんとか人間の力で切断することはできないの？ 気合と根性で、とかさ」

真剣そのもので話すエステル。そんなことで解決するならこうまで苦労しない。

「無茶だよ、エステル。特殊合金製のカッターでも傷つけられなかつただろう？」

「あ、そつか……。うーん、だつたら火を使えば？ 溶鉱炉にいれて溶かしちゃうとか」

「そ、そんなことしたら中もタダじゃすみませんよう」

「やっぱダメかあ……」

がっくりとうなだれるエステル。

「………………。いや、イケるかもしれんぞ」

「ええっ!？」

自分で言つたことに驚くエステル。

「高温で溶かす方法ですか？」

「いや、そうではない。ようは導力　オーブメント機械で作動する機械を使うから問題なんじゃ。工作機械を、導力以外で動くようにしてしまえばいい」

「機械を導力以外で動かせるようにする……?」

「そんな方法があるんですか?」

「『内燃機関』といってな……。火を燃やしてエネルギーを生成する仕組みがあるんじゃない。アイデア自体は昔からあるが、導力機関よりも効率が悪くてな。ただ、工作機械くらいなら簡単に動かすことができるぞ」

「そんなものがあるんだ……」

「なるほど……。それで『火』なんですね」

「でも、おじいちゃん。内燃機関のユニットなんてわたし、見たことないけど……」

「たしか、中央工房のどこかに研究用のものがあつたはずじゃ。おっと、それから燃料を調達する必要があるな」

「燃料って……油のこと?」

「いや、『ガソリン』という燃焼力の高いものが必要じゃ。溶剤としても使うから、わりと備蓄があつたはずじゃ。うむ……。なんとかイケそうじゃの。よし、さっそく工作機械を改造してみるか!」

「あ、わたしも手伝うよ」

「あたしたちも何か手伝えることないかな? ティータちゃんみたいに専門的なことは無理だけど……」

「だったら、その内燃機関とガソリンを取ってきてくれんか?」

「少々重いが、遊撃士の体力ならばなんとか運べるじゃろう」

「オッケー、任せて!」

「内燃機関とガソリンですね。どこに置いてあるんですか?」

「んー? ……はて……」

「まさか、どこにあるのか忘れてしまったんじゃない?」

「うん、忘れた」

それはもうあっさりと。

「あっさり言わないでよ」

「あ、あの、エステルさん。たぶん、演算室だったらどこにあるか分かると思います」

「演算室？」

「5階にある部屋で導力演算器があるんです。中央工房に関する情報が全部記録されているから保管場所もわかると思います」

「すごいな。そんな場所があるんだ……」

「てなわけで、よろしく頼むぞ」

「まったくもう……。まあいいや、とりあえずその演算室って所に行きますか」

「うん、5階だったね」

エステルとヨシユアは5階に向かった。

第4章 黒のオーブメント(8) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告<

黒いオーブメントの正体を突き止めるため、着々と進みだすエステ
ルたち。まずは材料集めから始まります。

第4章 黒のオープメント(9)

ツァイス中央工房 5階 演算室

演算室は大型の機械だらけで物々しい雰囲気かもを醸し出していた。

「うわ、何か凄そうな部屋ねえ」

「どうやらここが演算室で間違いなさそうだね」

その時、部屋の奥で機械を操作していた男性が手を止めた。

「おや、君たちは……。見かけない顔だけど演算室に何か用かい？」

私は、ここの技術主任のトランスと言う者だ」

男性はトランスと名乗った。

「初めまして、遊撃士協会の者です」

「実は、ラッセル博士の頼みで調べものに来ただけ……」

エステルがそう言うと、トランス主任は顔色を変えた。

「ラ、ラッセル博士の！？ま、ま、またっ、面倒なことじゃないだ

ろうねっ!？」

そして後ずさりした。

「ま、またって……。ほんと博士、信用ないのねえ」

「いや、その……博士が天才なのは認めるよ。この演算器の《カペ

ル》だって博士が開発したものだしね。でもね、あの人が絡むとい

つもトラブルが絶えなくてさ。ティータ君は、一生懸命で本当にい

い子なんだけどねえ」

天才とはこういうものだと言わんばかりの言葉だった。

「あはは……。気持ちはわかるけどね。でも、今回はそんなに手間

を取らせないと思うわよ」

「中央工房で保管している備品の場所を探したいんです」

「ホッ、そういう話が……。その程度だったらすぐに調べられると

思うよ。それじゃあ、せっかくだから検索の仕方を教えておこうか」

エステルたちは《カペル》へと近づいた。

「この円筒の装置が導力演算器の《カペル》だ。今では導力演算器

は飛行船の航行制御なんかにも使われるようになったけど……。この《カペル》は現時点で世界最高の情報処理速度と高度な汎用性を備えている。構造物の強度計算から情報検索まで何でもござれさ。で、情報検索のやり方だけど……。まず、この正面のパネルで情報検索モードに切り替える。すると、導力信号が配線を通って、記憶オーブメントにアクセスする。記憶オーブメントには光情報を管理するクオーツが大量に仕込まれているからね。知りたい情報があったら簡単に引き出せるって寸法さ。と、ここまではいいかい？」

「うん、バッチリよ」

エステルが得意げに頷いた。

「すごいな、エステル。ここまで最新の技術だと僕にはわからないよ」

ヨシユアが驚いたが、

「ウソです、ごめんなさい。ていうか、何言ってるのが最初から最後までサツパリ意味不明なんですけど……」

「どうやら、ただの見栄っ張りだったらしい。実際は、エステルは別世界の言葉を聞いているような感じだった。」

「まあ、詳しい仕組みはいいか。モードは切り換えておくから実際にパネルに触ってごらん。すぐにやり方がわかるはずさ」

エステルは実際に《カペル》に触れてみた。そして、内燃機関とガソリンの保管場所を調べ、手帳にメモした。

「どうやら探し物は見つかったようだね」

「うわっつ。魔法の箱みたいねえ」

「導力演算器……予想以上に凄い技術ですね」

「基本概念を提示したのはラッセル博士の先生であるエプスタイン博士らしいけどね。ただ、それをここまで形にしたラッセル博士もまた天才だよ。はあ、あれでもう少し落ち着きがあったらいいんだけど……」

「はは……。女神は二物を与えずですね」

「ところで、内燃機関を管理してるグスタフ整備長って人だけだ……。その人ってどこにいるの？」

「整備長は、飛行場の責任者だからそっちに行けば会えると思うよ。それと、ガソリンの方だけどオーブメント生産工場は中央工房の地下区画にあるんだ。そこにいるスタッフに頼んだら手に入るんじゃないかな」

「内燃機関のユニットは飛行場にいるグスタフ整備長……。ガソリンは、地下にあるオーブメント生産工場ですね」

「サンキュー、助かったわ」

「いやいや。何かあったらまたどうぞ」

エステルはまず、内燃機関を手に入れるため、飛行場に向かった。

ツァイス発着場

「よう、飛行船をご利用かい？西回りの定期船なら、ちょうど出たところだが……」

受付のジラールが言った。

「ううん。飛行船に乗るわけじゃないわ。グスタフ整備長っていう人に頼みたいことがあるんだけど」

「なんだ、オヤジさんに用か。オヤジさんなら今、ここにはいないけど……」

「えっ、出かけてるの？」

「ああ、ここ2、3日、レイストーン要塞に行っているんだ。なんか急に、軍用警備艇のメンテナンスの依頼が入ってね」

「レイストーン要塞っていうと……」

「ヴァレリア湖畔にある王国軍最大の軍事基地だよ。ツァイス地方の北側だね」

「ううん、それじゃあ簡単には戻ってこれなさそうだね。博士の用事、どうしようっ？」

「何の用事か知らないけど、そろそろ戻ってくると思っぜ。さつき通信で連絡があつたし……」

その時、飛行船の到着を告げる連絡が入った。

「あれ……。次の定期船がもう来たの？」

「いや、噂をすればつてやつさ」

そこには、一風変わった定期船らしき船が到着しようとしていた。

「オレンジ色の定期船……。あれ。そんな定期船あつたっけ？」

「いや……。定期船じゃなさそうだね。ところどころ形状が違うし、作業用のアームも付いている」

「あ、たしかに……」

「中央工房が所有している工房船の《ライブニッツ号》だ。定期船と同型んだけど色々な設備が追加してあつてな。大型設備のメンテナンスや製品の運搬などに使われるのさ」

ジラールが説明してくれた。

「へ〜！空飛ぶ工房つてやつね。あ、それじゃあ、あの船に整備長さんが乗っているんだ」

「そういうこと。さっそく話を聞いてきたらどうだ？」

「うん、そうするわ」

「それでは失礼します」

「ん……。なんだア、嬢ちゃんたちは？」

年配の整備員がエステルたちに声をかけた。

「あ……」

「この《ライブニッツ号》には色々な機材が山のように積みまれている。危ないから近寄らないこつたな」

「えっと、実は人を捜して……」

「グスタフ整備長という方がこちらの船にいらっしやいませんか？」

「なんだよ、俺に用なのか？」

「あ、おじさんが整備長さんだったんだ」

エステルたちはグスタフ整備長にラッセル博士から内燃機関を借りてくるように頼まれたことを説明した。

「なんだ。ラッセル爺さんの用事かよ。しかし、内燃機関のユニットか。いいタイミングだったなア」

「へ？」

「ちよつと待つてるよ……」

グスタフ整備長が船の中に入っていった。

「ひよつとしてこの船に積んであったのかな？」

「うん、そうみたいだね」

しばらくして、グスタフ整備長が重そうな機械を持って戻ってきた。

「ほれ。重いから気イつけな」

エステルは内燃機関ユニットを受け取った。

「わわっ……。確かにズッシリ来るわね。でも持てない重さじゃないかな」

「へえ、娘っ子のくせになかなか気合入ってんじゃねーか。がはは、気に入ったぜ！」

「あはは、そりゃどーも」

「しっかし、それにしても面白い偶然もあつたもんだぜ。軍から返してもらった直後に爺さんが持っていくとはなア」

「えっ……」

「軍から、というと？」

「いやな、そのサンプル、しばらく王国軍に貸してたんだ。何かの研究に使うとかでな。で、今日になってやっと返してきやがったってわけさ」

「へへ。たしかに面白い偶然ねえ」

「……………」

「ん、どうしたの？」

「いや……何でもないよ。残りはガソリンだね。地下にある工場に行こうか？」

「ん、わかった。整備長さん、サンキュー！」
「おお、爺さんによるしくな」
次にエステルたちは中央工房地下に向かった。

ツァイス中央工房 地下1階

「あゝ、ちよつといい？」

「なに、どしたの？」

工房員のフェイが手を止めていった。

エステルたちはラッセル博士からガソリンを貰ってくるよう頼まれたことを説明した。

「へ、ガソリンか。たしか保管庫の奥にいくつかタンクがあったな……。ちよつと問い合わせてみるよ」

フェイはインターフォンを操作した。

「こちらフェイ。ちよつと頼みがあるんだけど。カルバード産のガソリン、たしか備蓄があったはずだよな？うん、うん……。タンクに入れて送ってくれる？持ち運びができるくらいのヤツ。サンクス、頼んだよ」

フェイがこちらを向いた。

「ちよつと待ってて。すぐに送ってくれるってさ」

「送ってくれる……？」

その時、ベルトコンベアーが動き出した。

「わわっ……」

「来た来た」

「ひよつとしてこれがガソリンなの？」

「送ってくれるというのはいくつのことだったんですか」

「フフ、大したもんだろ？このコンベアシステムはただ製品を運ぶだけじゃない。広大な地下工場を相互に結ぶ機能もあるんだよ」

「へえ、便利なもんねえ」

「これもラッセル博士の発案でね。元々は、製品を運ぶだけの機能しかなかったんだけど……。あのじーさまが改造してからかなり使えるシステムになった。まー、インフラ整えるまで死ぬほど苦労させられたけどね」

「あはは。やっぱりそうオチるんだ」

「それじゃあ、このタンク、持って行かせてもらいます」

「ほいほい。あ、何に使うか知らないけど取り扱いには注意しなよね。ガソリンってのはとにかく良く燃えるからさ」

2つの材料を揃えたエステルは3階の工作室に戻った。

第4章 黒のオープメント(9) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

2つの材料を揃えたエステルたち。実験第2弾開始です。

第4章 黒のオープメント(10)

中央工房 3階 工作室

「ふう、ただいま」

「頼まれたものを持って来ました」

「おう、戻ってきたか」

「お疲れ様です」

エステルは内燃機関ユニットとガソリントankを渡した。

「は、さすがにちよつと重かったかも」

「うむ、ご苦労じゃったの。こちらもちょうど改造が終わったところだな。あとは内燃機関を取り付けてガソリンを入れるだけじゃ。

ティータ。さつそく仕上げに入るぞ」

「はい」

ラッセル博士とティータは仕上げに入った。

しばらく後にその装置は完成した。

「よし、完成じゃあ！」

「うわ、ずいぶんゴツイ物がくつついたわね。これが内燃機関のエンジンなの？」

「はい、そーです。この中でガソリンを燃焼させて、その力で工作機械を動かすんです」

「これで導力に頼らずに工作機械を動かせますね」

「うむ、それでは早速スイッチを入れてみるか。……ポチツとな」
ラッセル博士がスイッチを入れると工作機械が動き始めた。

「うわつ、すごい音……」

「オバルエンジン導力機関と比べるとかなりの音と振動ですね」

「うむ、それが難点のひとつだな。だが予想通り『黒の導力器』が発動する恐れはなさそうじゃ。では、このまま解体を始めるぞ」

「じくつ……」

「ドキドキ……」

エステルたちは固唾をのんで見守る。

そして、工作機械が《黒の導力器》に触れた。その瞬間、大量の火花が散った。

「わわっ……！」

「すごい火花だね……」

「よし、ひとまず止めるぞ。どのくらいフレームが削れたのか確認してみよう」

ラッセル博士が工作機械を止めた。エステルたちはフレームの表面を覗き込んだ。小さな傷がうつすらと付いている。

「た、たったこれだけ？」

「信じられない……。特殊合金製の丸ノコなのに」

「とんでもない材質ですね……」

「しかし、根気よく続ければ何とか切断できそうじゃな。まあ、丸ノコを何枚も交換する必要があるそうじゃが」

「こうなったらガマンくらべってわけね」

その時、マードック工房長が入ってきた。

「博士、ちよつといいですか？おお……無事、改造は終わりましたか」

「あたりまえじゃ。わしを誰だと思っておる。で、なんじゃ。なにが面倒でも起こったか？」

「先ほど、エルモの旅館から博士あてに伝言がありましたね。温泉を汲み上げる導力ポンプが故障してしまっただらしいんですよ。このままだと営業できないから博士に直しに来てほしいと……」

「かゝつ、なんじゃと！？ええい！この忙しいときに面倒な……」
ラッセル博士は露骨に悔しそうな顔をした。

「なんだったら、代わりの技師でも送りましょうか？」

「いや……40年以上前のポンコツじゃ。最近の機械しか知らん、若い連中の手には余るじゃろう。ううむ、困ったことになったな」

そこで、ティータが名乗りを上げた。

「あの、おじいちゃん……。わたしがかわりに修理しに行っちゃダメかなあ？」

「なぬ？」

「ティータ君？」

ラッセル博士とマードック工房長がティータを見た。

「前に連れて行ってもらった時、整備のお手伝いをしたよね？だから、大丈夫だと思うの」

「ふーむ、確かにお前になら任せてもよさそうじゃが……。別の意味で心配じゃのう」

「そうですね。街道には魔獣も出ますし……」

「でもでも、マオおばあちゃんが困っているの放っておけないよう

……」

エステルとヨシユアが2人して顔を見る。

「……そういう事ならあたしたちに任せてくれない？」

「えっ……」

「街道での安全の確保は遊撃士の義務ですから。責任を持って、ティータさんの送り迎えをさせてもらいます」

「おお、君たちが一緒だったらなんの心配もいらないな」

「ふむ……。せっかくだからお願いするか」

「あのあの……。ホントーにいいんですか？」

「こゝら、子供が遠慮しないの」

「よかつたら一緒に行こうよ」

「あ、ありがとう。エステルさん、ヨシユアさん。おじいちゃん、工房長さん。それじゃあ、行ってきます」

「おお、よろしく頼むぞ」

「気をつけて行ってくるんだよ」

エステルたちはエルモ温泉へと向かった。

第4章 黒のオープメント(10)(後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

Estelle's group are going to
Imo Hot Spring next time.

第4章 黒のオープメント(11)

「エルモかあ。ちよつと楽しみだなあ。たしか温泉地なのよね？」
「はい。とつてもいいところですよ。わたしも、おじいちゃんに何度か連れて行ってもらいました」

「ここからだどうやって行けばいいのかな？」

「えとですね。町の南口から出ると広い草原道があるんですけど……。その道をまっすぐ南に行つて道沿いに進んでいけば到着です」

「オツケー。平原道に出てまっすぐ南ね。それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エルモ村

「へえ、ここがエルモか。ずいぶん雰囲気のいいところねえ。つて……なにこの匂い……」

エステルがあたりに漂う匂いを嗅いだ。

「あ、お湯に入っている硫黄成分の匂いなんですよ」

「温泉が湧いているところでは大抵こういう匂いがするらしいね」

「へえ、なんかタマゴをいぶした時みたいな匂いね。うん、イヤな匂いじゃないかな」

「えへへ……よかつた。あ、でも、いつもよりちよつと匂いが薄いような……。湯気も出ていないみたいだし……」

「ポンプが故障したことと関係があるかもしれないね。さつそく修理に行くかい？」

「あ、ポンプ小屋のカギは旅館にいるマオおばあちゃんが持っているんです。まずはカギを借りないと……」

「オツケー。それじゃあ旅館に行きましょう」

エルモ村旅館 《紅葉亭》

「こんにちは、マオおばあちゃん」

「おお、ティータ。よく来てくれたね。ついさっき、工房長さんから連絡があつたよ。ラッセルのやつ、アンタに修理を押し付けて自分は研究三昧してるんだって?」

「そ、そんなことないよ。おじいちゃん、ちゃんと来るつもりだったけど、わたしが無理を言っちゃって……」

「は、アンタって子は本当に健気でいい子だねえ。でも、あんまりあのジジイを甘やかしちゃあいけないよ?昔から研究のことしか頭になくて、放っておいたらどこまでも自墮落に過ごすからねえ」

「あ、あはは……」

「（元気なお婆ちゃんねえ）」

「（博士の知り合いみたいだね）」

「ん、あなたたちは……?」

マオ婆さんがエステルとヨシユアに目を向けた。

「あ、おばあちゃん。紹介するね。エステルさんと、ヨシユアさん。遊撃士協会のブレイサーさんでわたしを、わざわざ送ってくれたの」

「あ、こんにちは」

「よろしく願います」

「へえ、そうだったのかい。わざわざ済まなかったねえ。アタシや、この『紅葉亭』の女将をしているマオってババアさ。ラッセルはアタシの幼なじみでこの子も、実の孫みたいなもんさね」

「へ、そうだったんだ」

「えへへ……。あ、そうそうおばあちゃん。導力ポンプが壊れちゃつたってホントなの?」

「ああ、そうなんだよ。40年前の機械だし、そろそろ寿命なのかねえ……。ま、いずれ買い換えるつもりだけどとりあえず応急手当をしてほしいんだ。ティータ、できるかい?」

「うん、まかせて」

「よし、これを持っておゆき」

ティータはポンプ小屋の鍵を借りた。

「ポンプ小屋は村の広場から北に登った高台にあるからね。それじゃあよろしく頼んだよ」

高台を上った所に機械がいろいろ出ている小屋があった。

「あ、ここがポンプ小屋なんだ？」

「はい、そうです。裏山から運ばれたお湯を旅館や広場の井戸に送るんですよ」

「それじゃあ、さっき借りた鍵を使おうか」

ポンプ小屋の鍵を使うと、鍵が外れた。

エルモ村 ポンプ小屋

「へ、これがポンプ装置か」

「昔のものとは思えないほどきれいに手入れされているね」

「えへへ……。おじいちゃん、このポンプは毎年手入れしているみたいですよ。40年前、オーブメントはまったく知られていなくて……。その便利さを知ってもらうために最初に作ったものだって聞きました」

「なるほど……。そりゃ、思い入れがあるわけだわ」

「そういう事ならしっかりと修理しなくちゃね」

「はいっ！」

ティータはさっそく修理に取り掛かった。

「えっと……。まずは機関部の点検から……。そこに問題がないならスクリューと配管をチェック……」

ティータはあちこちを見て回っている。

「えっと、何かあったらあたしたちも手伝うけど……」

「あ、大丈夫ですよー。1人でなんとかなりますから。エステルさんたちは旅館でゆっくりしててください」

そして再び作業に取り掛かるティータ。

「キャビテーションと水撃作用の可能性の考慮……。うーん、それからそれから……。あ、サージングの問題もあった！」

「やっぱり、あたしたちがいても何の手伝いにもならないかも……」

「うん、そうみたいだね。ここはお言葉に甘えて旅館で待たせてもらおうか」

エステルとヨシユアは旅館に戻ることにした。

「おや、アンタたち。ティータはどうしたんだい？」

「うん、修理を始めたわよ。側にいたらかえって邪魔になりそうだったからここで待たせてもらうことにしちゃった」

「あはは。それが賢明かもしれないね。あの子はある意味、ラッセル以上の天才だからね」

「天才……。言われてみればそうかも」

「たしかにあの歳で中央工房の手伝いをしているなんて普通じゃ考えられませんからね」

「おまけによく気がつくし、健気でいつも笑みを絶やさない。まあ、機械いじりを始めるとすぐに熱中しちまう所はあるが……。本当に

よく出来た子だよ。……。でもね……。……」

マオ婆さんはそこで口を閉ざした。

「どうしたの、おばあちゃん？」

「いや、なんでもない」

「おーい、マオ婆さん！」

そこに男性が入ってきた。

「エド、戻ったのかい。すつとんきような顔していったい何があったんだい？」

「いや、その……。ちょっと聞きたいんだけど……。あの王都から来た姉ちゃん、ちゃんと帰ってきているかい？」

「王都から来た……。ああ、昨日来たお客さんかい。散歩に行くとか言っただけの帰り帰ってないよ」

「やっぱそうか……。うーん、まずったなあ」

「なんだい？村の中にいるんだろう？」

「いや、その……。実はさ。さっき、村の出口であの姉ちゃんを見かけたんだ。なんか、景色のいい所を探しに平原を散策するとか言っ
て……」

「平原を散策だつてえ？魔獣もいるのにバカなことを……。このスツトコドッコイ！なんで止めなかつたんだい！」

「止めた、止めたつてば！ただ、なんていうかすごくマイペースな人だろ？こちらの言うことをどこまで真剣に考えているか後から心配になっちゃつてさ」

「あー、ちよつといい？」

「ん、なんだい？あれ、新しいお客さん？」

「そのお客さんを、出口で見かけたのはいつごろですか？」

「いつごろつて……。ちよつど昼時だつたと思うよ。昼メシに帰るところだつたからね」

「昼時か……。うん、何とか追いつけそうね」

「急いで追いかけようか」

「えつと……？」

「あたしたち、こう見えても遊撃士協会の人間なのよ」

「これから、平原に出てそのお客さんを保護してきます」

「なに、あんたら遊撃士！？こりゃ頼もしい。よろしく頼んだぜ」

「頼んだぜ、じゃないだろつ。まあいい……。お客さんの安全の方が大事だ。アンタたち。すまないけどよろしく頼んだよ」

「うん、まかせて！」

「それでは行ってきます」

第4章 黒のオープメント(11) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

女性客を追いかけることになったエステルたち。果たして追いつけるか!?

第4章 黒のオープメント（12）

トラット平原

「さてと……。平原道って広いけどどこから探せばいいのかな？」
「そうだね、景色のいい場所を探してたって言うから……。舗装された道から外れた場所にいる可能性が高そうだ」
「あっちゃあ……。ますます危ないじゃないのよ。まあいいや！とつとと捜して連れ戻しましょう！」

「ふえ〜ん……。！やだやだ、助けて〜〜〜っ！」
少し探し回ったところで娘の声が聞こえてきた。

「今のは……」

「うん、近いね」

「女神さまあ！お父さん、お母さ〜ん！ナイアルせんぱい！たすけてくださいよ〜！」

なぜここでナイアルの名前が出てくるっ！？これで誰かは決定的だけれど……。

「こ、これって……」

「想像通りと思うけど……。とりあえず急ごう！」
エステルとヨシユアは急いで向かった。

魔獣に囲まれているドロシー。ドロシーは魔獣に説得している。無駄だと思っけど……。

「ワ、ワンちゃんたち……。とりあえず話し合いましよ〜？わたしなんか食べたって美味しくないと思うのですよ〜。毎日12時間以

上寝てお野菜もしっかり食べてるからお肌もツルツルだし……。
……って、なにげにヘルシーで美味しそう!?」

1日の半分以上を寝て過ごしていることを激白ッ！
魔獣はさらにドロシーを追い詰める。

「ひい〜ん。こんなことなら給料前借りして食べ放題しとくんだったあー！」

その時、半泣きのドロシーの元にエステルとヨシユアが突っ込んだ。

「ハッ……あ、あなたたちは〜！」

「ふう……やっぱり思った通りね」

「ドロシーさん。もう心配ありませんよ」

「……………どちらさま、でしたっけ？」

さっきの言葉は何だったんだ？

「ガクッ……………」

「……………遊撃士協会のエステルとヨシユアです」

「うふふ、冗談だつてばあ。エステルちゃん、ヨシユア君。こんな所で会うなんて奇遇ねえ」

喰われかけたとは思えないほどのほほんとしているドロシー。

「は、激しくやる気が……………」

「エステル、来るよ！」

ヨシユアの声と同時に魔獣が飛び掛ってきた。

魔獣を全て追い払ったエステルたち。

「はあ……………。なんとか追っ払えたわね」

「エステル……………気付いたかい？」

ヨシユアがエステルに尋ねる。

「うん……………。峠の関所を襲った魔獣ね。どうしてこんな所まで……………」

「わ〜、スゴイスゴイ。さっすが遊撃士だねえ。しばらくぶりねえ。

エステルちゃん、ヨシユア君。まさか、こんなところで会えるとは

思わなかったよ。はっ、これってもしかして運命の出会いって
うやつ!？」

「なんの運命よ、なんの……」

「ところで、ドロシーさん。エルモの旅館に泊まっているお客さん
って、あなたですか？」

「そうだけど……。あれ、なんで知ってるの？」

エステルとヨシユアはエルモの旅館の女将に宿泊客の保護を依頼さ
れたことを説明した。

「あ、そうなんだ。それは大変だったねえ」

「な、に他人事みたいに言ってるのよ。で、こんな街道の外れでい
つたい何をしていたわけ？」

「ちつちつち……。そんなことも分からないの？くすくす、エス
テルちゃんもまだまだ洞察力が足りないなあ」

得意気に指を振るドロシー。ものすごく頭にくる台詞だ。それが、
ドロシーに言われたものだからなおさらだ。

「あ、あんですって!？」

「正解は、今度の特集に使いそうな写真のネタを捜してた、でした
。あ、ちなみにナイアル先輩にやれって言われた宿題なんだけど
ね」

「なるほど、仕事だったんですか」

「だからって、こんな場所でネタ探しをしなくても……。ああもう、
なんか戦い以外で激しく疲れたような気がする……」

「大丈夫、エステルちゃん？痛い痛い、とんでけー」

「疲れさせた張本人がなにを抜かしたるかあっ!」
エステルのムカツキが頂点に達した。

「（エステルにここまで突っ込まれる人も珍しいな……）」
ヨシユアはただ見守っているだけである。

「ねえ、エステル。とりあえずエルモに戻らない？そろそろポンプ
修理も終わっているかもしれないし」

「はあはあ……。そ、そうね……。そういうわけで……。ドロシーも一

緒に戻るわよ」

「え、まだ写真撮りたいのに」

渋るドロシー。とことん懲りない性格だ。

「戻・る・わ・よ」

「エステルちゃん、コワイ……」

エルモ村

エルモ村に戻ったときには、既に夕方になっていた。

「あ……。見て、湯気が湧き出してる！」

「うわ、ほんとだあ！」

井戸からは確かに湯気が出ていた。

「どうやらポンプの修理が無事、終わったみたいだね」

「ふえっ。これでやっと温泉に入れるよお。もう思い残すことはないかも」

「そんな大げさな……」

「ドロシーさんってそんなに温泉が好きなんですか？」

「てへへ、それはもう。なんと言っても湯上がりには飲むフルーツ牛乳が最高なんだよねえ。それじゃあ、わたしはさっそく温泉に入ってくるから」

さっそく旅館へと向かうドロシー。

「あ、そうだ」

そこで、ドロシーは突然足を止めた。

「エステルちゃん、ヨシユア君。さっきはありがとね！あぶないところを助けてくれて」

「あ、あのタイミングでお礼を言ってくるなんて……。ほんとにもう。ピントがズレてるんだから」

「はは、ドロシーさんらしいね。それじゃあ、僕たちはポンプ小屋の方に行こうか」

「あ、そうね。ティータちゃんがまだ残ってるかもしれないし」
エステルとヨシユアはポンプ小屋へと向かった。

ポンプ小屋

「……………」
ティータはうかない顔で立ち尽くしている。

「ティータちゃん。修理、終わったみたいね？」

「あ……。エステルさん、ヨシユアさん。えへへ……。今、ちょうど終わったところです。ちゃんとお湯が送られているかまだ確認はしてないですけど……………」

エステルとヨシユアが入ってくると笑ってみせるティータ。

「大丈夫、広場の井戸にお湯がちゃんと沸いてたわ」

「結局、なにが原因だったの？」

「えとですね…………ポンプ装置そのものは問題なかったんですけど……。スクリューを回すクランク軸が腐食して折れちゃってたんです。防錆効果のあるパーツと交換したからもう大丈夫ですよ」

「そっか、ご苦労さま」

「それじゃあ旅館に戻って女将さんに報告しようか？」

「はいっ」

エステルとヨシユアにはティータの憂いの顔には気付かなかったよ
うだ。

紅葉亭

「ティータ、ありがとうよ。ちゃんとポンプを修理してくれたみたいだね」

「えへへ……。いつもお世話になってるからこのくらい当然だよ」

「ほ、いつちよまえな口を叩くようになったじゃないか。それと、アンタたちもさつきはご苦労さんだったね。なんでも知り合いだったんだって?」

「あはは、まゝね」

「なにかあつたんですか?」

「ティータはもちろん知らない。」

「ちよつとした遊撃士の仕事があつてね」

「アンタたちには本当に世話になつちまつた。お礼といつてはなんだけど今日は泊まつて休んでおいき」

「え、いいの!？」

「あ、あの、おばあちゃん。わたしたち、今夜泊まるつておじいちゃんに言つてなくて……」

「ああ、心配いらぬよ。さつき、ラッセルから連絡があつてね。」

『こちらの作業は明日までかかるから今夜はそつちに泊めてもらえつてさ』

「おじいちゃんが?」

「へえ。博士つてば気が利くじゃない」

「そついうことならお言葉に甘えてもいいかもね」

「ああ、遠慮は無用だよ。2階の『柚子の間』つていう部屋を用意したから、荷物を置いておいで。夕食まで、しばらくかかるからそれまで温泉に入つてるといい」

「食事前にオフロ?え、オフロつて普通、寝る前に入るもんじゃないの?」

「な。に言つてんだい。せつかくの温泉なんだよ?朝から晩まで一日中、何べんも入るのが普通さね」

「ふふ、1日3回くらいは平気で入るかもしれないです」

「そ、そついうものなんだ……。うーん、オフロは好きだけど、さすがにのぼせそつな気が……」

「部屋に荷物を置いたらさつそく行つてみようか」

成り行きで《紅葉亭》に泊まることになったエステルたちであった。

第4章 黒のオーブメント(12) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

温泉でまったり……？

第4章 黒のオープメント（13）

紅葉亭 2階 柚子の間

「へへ、いい部屋ねえ」

「本当だ。東方風の内装がいい感じだね」

「マオおばあちゃん、東方の生まれって言ってました。小さなころ、家族と一緒にリベールに移住したんですって。この村は、おばあちゃんと同じ東方系の人がけっこういるんです」

「あ、だから村の雰囲気もちょっと変わった感じなんだ。これは食事も期待できそうかも」

「そうだね。でも、せっかく勧められたからその前に温泉に行ってみない？」

「あ、そうね！ティータちゃん。あたしと一緒に入ろう？」

「は、はい」

「荷物を置いたらさっそく出かけようか」

「さてと。邪魔な荷物も置いたし……。あれ、温泉ってどこにあるの？」

「あ、裏手にある離れがお風呂専用になってるんです。奥にはおっきな露天風呂もあるんですよ」

「露天風呂というと……屋外に作られた風呂のことだね」

「へへ、なんか面白そう！それじゃあ、レッツ・ゴー！」

「わへ、もうすっかり暗いわね」

「東方風の庭か……風流だね」

「あゝ！エステルちゃんたちだあゝ！」

この声は……。

「あれ、ドロシー？」

「エステルちゃんたちもお風呂に入りに来たの？ここのお風呂はいいよ。広くてのーんびりできるし。ちよっぴり湯につかりすぎで頭がクラクラしちゃったけど」

「あたしたちと別れてから今までず〜っと入っていたの？」

「そうだよお。ふあゝ、気持ちよかつた〜っ。あれ、その女の子はなんか初めて見るカオねえ？」

「あ、初めまして……ティータっていいます」

「へー、ティータちゃんか。わたし、ドロシーっていうの。王都にある雑誌社のカメラマンをしてるんだあ」

「カメラマン……わあ、素敵なお仕事ですねえ」

「てへへ……それほどでも。あ、そうだ。エステルちゃんたちこの旅館に泊まるんだよねえ？よかつたらお食事一緒にしない？」

「あ、いいかもね」

「僕たちが上がるまで待っててもらえますか？」

「うん、フルーツ牛乳飲みながら待ってるよ。それじゃあ、また後でね〜」

「えっと……ここがお風呂の入口よね？」

「エ、エステルさあん。こっちは男湯ですよ……」

エステルが開けようとしたのは男湯だった。

「あ、なるほど。男女分かれてるんだ。そりゃ当然よね。着替えたりするんだし」

「コホン……。それじゃあ、ここで別れだね」

ヨシユアは男湯に、エステルとティータは女湯に向かった。

「は、極楽、極楽。温泉って、初めて入ったけど想像以上に気持ちいいわねえ。ドロシーじゃないけど、こりゃあ病みつきにもなるわ」

「ふふ……。わたしもかなり病みつきです。小さなころから、おじいちゃんに連れてきてもらってましたから」

「そうなんだ……。あれ、あそこの雇ってなに？」

エステルが目をやった先には雇があつた。

「あ、さつき言っていた露天風呂に繋がってるんです。とっても大きくて10人でも入れそうな感じですよ」

「へえ、そうなんだ……。ほふ、旅の疲れが溶け出る感じがする」

「エステルさんたちって歩いて旅をしてるんですよ。なんで飛行船を使わないんですか？」

幾度となく聞かれてきた質問。

「うーん、修行のためかな？あと……。父さんの言葉っていうのが大きかったかもしれない」

「カシウスおじさんの……？」

「うん、父さんの教え子でシエラ姉ってのがいるんだけど。父さん、やっぱりその人に徒歩での旅を勧めたのよね。守るべき場所を、自分の足で実際に歩いて確かめてみるってね」

「わ、カツコイイ……」

「普段はおちやらけてるけど、決める時は決めてたみたい。はあ、今ごろどこをほつつき歩いてんだか」

「……エステルさん……」

「あはは、ごめんごめん。しめつぽくなっちゃったかな。ま、あたしたちの修行があるし、心配ばかりもしてられないからね。今できるのは……。うん、信じることくらいかな」

「信じる……」

「ん、どうかした？」

「うづん、なんでもないです。あっ……そうだ！わたし、エステルさんに聞きたいことがあるんですけど」

「聞きたいこと？なにになに？何でも聞いていいわよ？」

「えと、あの、その……。エステルさんとヨシユアさんってもう結婚しているのかなあって」

「……………」

「ドキドキ……………」

「えっと、ゴメン。聞き間違っちゃったみたい。あたしとヨシユアが何だつて？」

「あう、ですからあ。もう結婚してるのかなって」

「な、な、な……。なんでそうなるワケ!？」

エステル絶叫。

「だ、だつて名字が同じだし……。兄妹にしては似ていないからてつきりそうなのかなって……………」

「に、似てないのは血がつながっていないからっ！みよ、名字が同じなのはヨシユアが父さんの養子だから！」

「あ、そーなんですか……。えへへ、ごめんなさい。ちょっと勘違いしちゃいました」

「と、とんだ勘違いだわ……。そもそも、あたしもヨシユアもまだ16歳なんだから。結婚なんて全然先の話だつてば」

「そ、そーですよ。いくらお互いが好きでもそんなに早く結婚しませんよね」

「ガクツ……。だ、だからあ！あたしとヨシユアは恋人でも何でもないので！ただの家族よ、家族！」

エステル、再び絶叫。

「そ、そーなんですか!？」

「そーなんですかって……。あの、テ

イータちゃん。あたしとヨシユアってそーいう雰囲気に見える？」

「そーいう雰囲気って？」

「だ、だから……。こ、恋人同士みたいな雰囲気よ。らぶらぶとかあつあつとかいちゃいちゃとか、そういうの」

エステルは照れ隠しのため顔を背けながら言った。

「あう……。そーい感じはしませんけど。でもでも、いつも一緒に自然な感じだし、お互いのことを分かり合ってるような感じだし……」

「いや、それはまあ、少しはそうかもしれないけど……。それって家族とか親友でもありそうな雰囲気じゃない？だいたい、あたしとヨシユアってそんな雰囲気になったことすら……」

エステルの脳裏にはロレントの時計台の上での出来事やマノリアの風車前での昼食やカルデア隧道での事など色々浮かんできた。

「（な、何思い出してんのよ！っていうか、あたし今まであんな恥ずかしいことを平気で……）」

「??? エステルさん？お顔、まっかですけど……」

「あわわ……。何でもない、何でもないから！いや、それにしても温泉ってホントーに効くよね！？血の巡りが良くなりすぎて頭がクラクラするっていうかっ！」

それは妄想による照れが原因だな。

「は、はあ……」

「そ、そういえば露天風呂があっただけ？のぼせてきちゃったし、あたしちょっと行ってくるね！」

「あ、はい……」

エステルは飛び出るようにして行ってしまった。

「あ、そーいえば。エステルさん、露天風呂って……。……混浴なんですけど」

ティータの声はエステルには届かなかった。

「（は、あせった……。心臓がバクバクいってる……。あたし……」

…この前からどうしちゃったんだろ……。今まで、ヨシユアをそういう風に意識したことなんてなかったのに……。……。……。……。……。……。……。ええい、悩むのやめっ！あたしのキャラじゃないしっ！」
エステルは露天風呂につかった。
「はっつ、いい気持ち！中のお風呂もよかったけど外のはまた力クベツよねえ。うーん、広くてのびのびできるし……」
「……言っておくけど、泳いだりしたらダメだからね」
どこからともなく声がした。
「ギクツ……そんなことしないわよ！」
凶星だったらしい。

「……………え」
その声の主はヨシユアだった。

「やあ、エステル。お先に入らせてもらってるよ。はは……この格好だとさすがにちょっと照れるね」

「……………」
「で、でも温泉って思った以上に効果があるね。傷にも良さそうだし体の芯から疲れが取れそうだ。遊撃士稼業にはぴったりかもしれないな」

「……………」
エステルは口を開けっ放しだ。

「えっと、その……。こういう状況で黙られると落ち着かないんですけど……」

「え、う、あ……。きゃあああああああー！」
本日、3度目の絶叫。

「ものすごい悲鳴がしたから何かと思って飛んできてみれば……。まったく人騒がせな娘だねえ」

「うっ……スミマセン」

「いいかい。この露天風呂は混浴なんだ。脱衣場の張り紙に書いてあっただろう？」

「あっ……」

「……要するにまったく見てなかったんだね」

「だいいち、裸の一つや二つ、見られたからって騒ぐんじゃないよ。女の肌つてのは見られてキレイになるもんだからね」

「そ、そうなのー!？」

「そこ、信じちゃダメっ!っていうか、そもそも裸は見られてないもんっ!」

すかさずエステルが言った。

「まあ、それはともかく風呂くらい仲良くお入り。ここは本来、家族で入れるように混浴にしてあるんだからね。それじゃあ、アタシは行くよ」

マオ婆さんは露天風呂から出て行った。

「は……なんか思いつきり疲れた……。うっっ、それもこれも全部、ヨシユアのせいなんだからっ!」

エステルはヨシユアのせいにした。

「なんで僕が……。結局、エステルが一人で大騒ぎしてただけじゃないか。脱衣場の張り紙も見えてないし、日頃の注意力が足りない証拠だね」

「よ、よけーなお世話!ほんとにもう、可愛くないんだからっ!」

「あー、そうですね。いいよ、別に。君に可愛いと思われたって嬉しくともなんともないからね」

「あ、あんですって!？」

「大体、なんだよ。人を見るなり悲鳴を上げて……。そんな反応されるなんて……。夢にも思わなかったよ」

「あ、あれはその……。あまりにもタイミングが……。別にヨシユアと一緒にイヤってわけじゃないからね?」

「いいよ、無理しないで。僕はもう上がるから2人でゆっくり入っ

ていきなよ」

「無理してるなんて一言も言っていないでしょっ！ヨシユアのバカっ！」

「む……バカはどっちさ」

「クスクス……」

ティータがそのやりとりを見て笑っている。

「ほ、ほら！ティータちゃんにも笑われちゃったじゃない！」

どこまでも人のせいにするエステル。

「だからなんで僕が……。ご、ごめんね。みつともないところ見せて」

「あ、ううん。笑ったりしてごめんなさい。ただ……うらやましいなって思ってた」

「う、うらやましい？」

「えっと……どうして？」

「わたし、兄弟がいないからケンカとかしたことがないんです。おじいちゃんは優しいからあんまり叱られたことないし……。お父さんとお母さんはあんまり一緒にいられないから……」

「え……」

「あの、ティータちゃんのお父さんとお母さんって……？」

「2人とも、導力技術者でずっと外国に行ってるんです。オープメントの普及していない所で技術指導をしているみたいで……。もう何年もツアイスに戻って来てないんです」

「そうだったんだ……」

「それは……寂しいね」

「そんなこと、ないです。おじいちゃんがいてくれるから。中央工房の人たちもみんな親切でいい人ばかりだし。でも……エステルさんたちを見ているとちよつとうらやましいなあって……。えへへ、こういうのって無いものねだりって言うんですよね」

ティータは笑っているが、その奥の哀しみは隠しきれていない。

「ティータちゃん……」

「……………。いいこと思い付いちゃった」

「え…………」

「エステル？」

「あたしが、ティータちゃんのお姉さんになってあげるわ！ちなみにヨシユアはお兄さん」

「ふえっ!？」

「はあ…………また突拍子もないことを…………」

「なによ、文句でもあるの?」

「いや…………エステルらしいと思ってね。僕も異存はないよ。ティータちゃんさえよければね」

「…………あ…………。あ、ありがとう…………エステルさん、ヨシユアさん。わたし、わたし…………なんだかすごく嬉しいですっ」

「それじゃあ、決定っ!あ、そうそう。もう『さん』付けはナシね?代わりにあたしたちも呼び捨てにさせてもらおうから」

「そうだね。あと、博士と話す時みたいに気軽に喋ってくれると嬉しいな」

「あ、あう…………。さん付けはやめて気軽に………………………」

………………………」
「ティータはいきなりの状況に悩んでいるようだ。」

「エステルお姉ちゃん。それと、ヨシユアお兄ちゃん。……………」
「これでいいのかなあ?」

「うん、バツチリ!」

「あらためて、よろしくね」

その頃

「うー、遅いよ。エステルちゃんたちではあ。はう、フルーツ牛乳飲み過ぎてお腹タプタプになっちゃった……………」

ドロシーの机の上にはフルーツ牛乳の空ビンがいっぱい置いてあっ

た。

風呂から上がったエステルたちはむくれたドロシーをなだめつつ、宿自慢の東方料理に舌鼓を打った。食後は4人でカードゲームに興じ、しばらくしてから再び温泉に……。そうして、温泉地の夜はゆったりと更けていくのだった。

第4章 黒のオーブメント(13) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

>次回予告<

ツアイスに帰ると、事件が！次回、話が急展開！

第4章 黒のオープメント(14)

エルモ村 朝

「それじゃあ、マオ婆さん」

「色々とお世話になりました」

「はは、くつろいでもらえたようで何よりだよ。ティータもずいぶんと楽しそうだったじゃないか？」

「えへへ……そうかなあ？」

「どうやら、昨日のうちにずいぶんと仲良くなったみたいだね。そういえば……眼鏡の娘の姿が見えないけど、あの子はどうしちまっただんだい？」

「うーん、なんかまだ寝てるみたいなのよね。いくら声をかけても起きないから失礼しちゃうことにしたわ」

「ドロシーさんが起きたらよろしく伝えておいてください」

「ああ、わかったよ。ティータ、ラツセルのやつによろしく伝えておいておくれ。研究ばかりやってないで規則正しい生活を心がけるってね」

「ふふ、伝えておくれ。おばあちゃんもお元気で。今度また、遊びに来るから」

「ああ、待ってるよ。あんたたちも機会があつたらまたおいで。風呂だつたらいつでも入ってくれていいからね」

「うん！絶対に寄らせてもらうね」

「料理も美味しかったですし、ぜひまた寄らせてもらいます」

「マオ婆さんは微笑むと、旅館の中に戻っていった」

「いや、ばつちりリフレッシュしちゃったわね」

「これも、ポンプの修理に付き合わせてもらったおかげだね。ティータには感謝しなくちゃな」

「そ、そんなあ。わたし、何もしてないよ。お姉ちゃんたちこそ昨日はありがとう。わたし……とっても楽しかった」

「えへへ。そう言ってくれると嬉しいな。ま、ここはおあいこつて
ことで」

「うんっ」

「さてと、それじゃあそろそろツァイスに戻ろうか？《黒の導力器
》の解体も終わってる頃かもしれないし」

「あ、そっか……。そんな話も残っていたわね。いや、すっかり
忘れてたわ」

「はあ……。そんな事だろうと思った」

「ふふ。エステルお姉ちゃんたら」

とにかくエステルたちはツァイスに向かった。

エルモ村を出ようとしたとき、

「待って〜！」

ドロシーが慌てて走ってきた。

「あ、ドロシー。やっと起きたんだ」

「はあはあはあ……。み、みんなヒドイよ〜！わたしだけ置いてい
くなんてえ」

「へっ……。？」

「ドロシーさん、記事用の写真を撮るためにまだ滞在するって言っ
てませんでした？」

「あれ、そうだったっけ？まあいいや〜。私だけ仲間はずれはヤだ
し。ティーちゃんもいいよねえ？」

そういって、ティータの方を見た。

「ティーちゃん……。わ、わたしのことですか？」

「なに、適当に略してんのよ」

「『ティータちゃん』てなんか呼びにくいんだもん。だめかなあ？」

「うん、別にいいですよ」

「ありがとう、ティーちゃん」

「はあ……ほんとにマイペースなんだから。ま、そういうことなら一緒にツァイスに戻りますか」
「えへへ、そこなくっちゃ」
「それじゃあ、あらためて出発しようか」
一行は気を取り直し、ツァイスへと向かった。

トラット平原

「おお、ちようど良かったぜ」
前方から東方風の男性が現れた。
「よう、お嬢さんがた。ちよいと聞きたいんだが……」
「へっ……」
「わあ、おつきな人……」
「はわわ、く、熊さん!？」
「熊って……まあいいか。別にあやしいモンじゃない。ちよいと道を聞きたいだけだ。エルモって温泉地がどこにあるか知らないか？」
「あ、それならちようどあたしたちが来た方向だわ」
「ここから南に向かって道沿いに歩けばありますよ」
「おお、そうか。不案内だったから助かったぜ。あれ、お前さんたち……」
東方風の男性はエステルたちをじっと見た。
「えっ?」
「ふーむ、なるほどな。コイツはひよつとしたら……」
「僕たちがどうかしましたか?」
「いや、すまん。大したことじゃあないんだ。それじゃあ、またな」
東方風の男性は行ってしまった。
「な、なんか飄々(ひょうひょう)とした人ねえ。東方風の服装だったけどやっぱり外国から来たのかな」

「ツアイス地方の東側にはカルバード共和国への玄関口にあたる《ヴォルフ砦》があるからね。そこからやって来たのかもしれない」「うん、きつとそーだと思っよ。マオおばあちゃんもそうだけどツアイス地方には東方の人がけっこう住んでいるの」

「あ、確かにキリカさんとかもそうね」

「それにしてもでっかい人だったよね。わたし、ビックリしちゃった」

「ふふ、ほんとーに熊さんみたいな人でしたね」

「でも、あれは熊なんて生易しいもんじゃないわよ。かなりの武術の腕と見たわね」

「わかるの、お姉ちゃん？」

「ま、あたしも武術家のはしくれだからね。大きいだけじゃなくて鍛え抜かれた身体してたわ」

「そうだね……。足の運び方も無駄がなかった。エステルを読み通り、達人クラスかもしれない」

ツアイス市

「あれ……！？」

エステルがツアイス市に入ったところで突然、足を止めた。

「どうしたの？エステルお姉ちゃん」

「気のせいかもしれないけどなんか騒がしいような気が……」

「……気のせいじゃない。遠くからざわめきが聞こえる。中央工房の方からだ」

「えっ……！？」

「ほええ、どういうこと？」

「わからないけど……。行ってみた方が良さそうね」
エステルたちは中央工房へと急行した。

ツァイス中央工房前

「ああっ!？」

エステルが見上げた先には、中央工房から煙が出ており、研究員達が続々と逃げ出していた。

「はあはあ……。し、死ぬかと思った……」

トランス主任が動揺している。

「無事で何よりだ。よし、これで全部かね!？」

マードック工房長がヘイゼルに確認した。

「は、はい、常勤の方は……」

「工房長さん!」

「おお、君たちは……。エルモから戻ってきたのか!」

「いったい何の騒ぎなの!？」

「どうやら建物内部で何かのガスが発生したらしい!地下から5階まで煙まみれだ!」

「まさか、火事ですか?」

「消火装置が作動してないからその心配はなさそうだ。だが、なぜ煙が出ているのかまったく見当がつかなくてね……」

「あ、あの、工房長さん。おじいちゃんはどこですか?」
ティータが尋ねた。

「おや、そのあたりに……」

周りを見渡すが、ラッセル博士の姿は見えない。

「ヘイゼル君。確認したんじゃないのかね?」

「そ、それが……。職員は全員確認しましたが、ラッセル博士の退去はまだ……」

「!!!!」

「なんだって!まだ中に残っているのか!？」

「工房長さん!ここはあたしたちに任せて」

「僕たちが様子を見てきます」

「す、すまない。よろしく願います」

「わ、わたしも行く……！」

ティータが中央工房に入ろうとするエステルとヨシユアに言った。

「えっ……」

「ティータ君？」

「中央工房のことなら色々知っているから……。お姉ちゃんたちをちゃんと案内するから……」

「ティータ……。わかった、一緒に来て」

「ただし、危なくなったらすぐに戻ってもらおうからね？」

「う、うん……」

「あ、あの……。わたしも付いていっちゃ……」

「だめ」

エステルは即答した。

「済みません。遠慮してください」

「あう、即答……。でも仕方ないかあ。くれぐれも気をつけてね？」

「博士がいるとしたらたぶん3階の工作室だろう。まずはそちらを確認してくれ」

「うん、了解！」

「それじゃあ行ってきます」

第4章 黒のオープメント(14) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

中央工房で謎の煙が大量発生。そして、ラッセル博士の安否は!?

第4章 黒のオープメント(15)

中央工房 1階

中央工房の中は話どおりに煙で充満していた。

「うわっ……。これは確かに煙っぱいわね。あれ、でも、あんまり息苦しくないような」

煙は確かに充満していたが、火災の時の煙とは違い、息をつめるよ
うなものではなかった。

「このモヤは……。多分、攪乱用の煙幕だと思う。フロアのどこか
に発煙筒が落ちているはずだ」

「へっ……。？」

「ど、どうしてそんなものが……」

「それは分からないけど……。発煙筒を止めさえすればモヤはすぐ
に消えると思う」

「わかった。見つけ次第止めるとして……。ラッセル博士はやっぱり
3階の工作室にいるのかな？」

「う、うん……。たぶんそうだと思うけど……。おじいちゃん、研
究に熱中すると周りが見えなくなっちゃうから……」

「とにかく3階に行ってみよう」

「あ……。ヨシユア、これって!？」

エステルが何か見つけたようだ。

「さっき言った発煙筒だ。ちょっと貸してみて」

ヨシユアは発煙筒を素早く解体した。

「わ……。モヤが無くなったわ!」

「すごい……。ヨシユアお兄ちゃん」

「これと同じ発煙筒が他にもあると思う。見つけ次第解体しよう」

「オッケー!」

エステルたちはエレベーターに乗ろうとしたが、
「あれ……？自動ドアが開かないわ」
「導力が通じていない……？」
「うん……。ちゃんと生きてるみたい。誰かがエレベーターを使っている最中なのかも……」
「誰かがって……もしかしてラッセル博士？」
「いや、それにしてもすぐに降りてこないのは変だ。いずれにせよ、上に行くには非常階段を使うしかなさそうだ」
「うん……。そうだね」

中央工房 3階 工作室

「おじいちゃん、大変だよ！……あ……」
しかし、そこには誰もいなかった。そして、工作機械だけが動いていた。

「誰もいない……。ていうか、どうして機械だけが動いてるわけ？」
「と、とりあえず機械を止めなくっちゃ……」
テイータは工作機械のスイッチを切った。

「ふう……。おじいちゃん……。どこにいったのかな？」
「博士もそうだけど……《黒の導力器》も見当たらない。これはひよっとしたら……」

その時、背後から声がした。

「フン、ここにいやがったか」

そこに立っていたのは、まさかのアガットだった。

「ア、アガット!？」

「どうしてこんな所に……」

「そいつはこっこの台詞だぜ。騒ぎを聞いて来てみりゃあまたお前

らに先を越されるとはな。つたく、半人前のクセにあちこち首突っ込みすぎなんだよ」

「こ、こんの……。あいかわらずハラ立つわねえ！」

「あの……。お姉ちゃんたちの知り合い？」

「アガットさんと言ってね。ギルドの先輩ブレイサーなんだ」

「おい、ちよつと待て……。どうしてガキがこんなところにいやがる？」

アガットはティータを睨みつけた。

「……ひっ……」

「ちよ、ちよつと！なに女の子を脅かしてんの！？」

「……。チッ……。言いたいことは山ほどあるが後回しにしといてやる。それで、一体どうなってるんだ？」

「はい、実は……」

エステルたちはラッセル博士の姿が見当たらないことを説明した。

「フン、発煙筒といい、ヤバい匂いがプンプンするぜ。時間が惜しい……。とつととその博士を捜し出すぞ！」

「うん！」

「了解です」

「……おじいちゃん……」

中央工房 5階

「あれ、どうして扉が……」

なぜか演算室の扉が開いていた。

「……待たせたな。最後の目標を確保した」

「よし……。それでは脱出するぞ。用意は出来てるだろな？」

なにやら不審な声が聞こえてきた。しかも、聞き覚えのある声だ。

「今の声は……！」

「急ぐぞ！エレベーターの方だ！」

エステルたちはエレベーターの方へ急行した。

「いた……!!」

「てめえらは……!!」

「お、おじいちゃん!？」

エレベーターの前には黒装束の男たちがいた!

「む……。アガット・クロスナー!？」

「面倒な……。ここはやり過ぎすぞ!!」

黒装束の男たちはエレベーターに乗り込んだ。

「ま、待ちなさいよっ!!」

「逃がすか、コラアッ!!」

しかし、扉が閉まり、間に合わなかった。

「クソ……。間に合わなかったか!!」

「も、もう一歩だったのに……!!」

「そ、そんな……。どうしておじいちゃんを……!!」

「とにかく非常階段で下に降りましょう。このまま中央工房から脱出するつもりみたいです」

「ああ、逃げるとしたら、町かトンネル道のどちらかだ。急ぐぞ、ガキども!!」

「言われなくても!!」

エステルたちは1階から外へと急行した。

ツアイス市

「あ、エステルちゃんたち!!」

「おお、無事だったかね。軍の人間が出てきたから何があったのかと思ったよ」

「軍の人間だと……!!?」

「ちょ、ちよつと待って！黒ずくめの連中じゃないの？」

「なんだね、それは？蒼と白の軍服を着た礼儀正しい軍人たちだったが……。エアレットンの関所から駆けつけてくれたそうじゃないか」

「あの軍服はたしか女王様の親衛隊だね。カッコ良かったから思わず写真に撮っちゃったあ」

「親衛隊って……。あの！？」

「ルーアンで市長を連行していった人たちだね。でも、どうしてこんな所に……」

「あ、あのっ！その人たち、おじいちゃんを運んでいませんでしたかっ！？」

「ラ、ラッセル博士を！？い、いや……。？大きな荷物は運んでいたが……」

「！……！」

「間違いない、あいつらだわ！」

「エレベーターの中で軍服に着替えやがったのか……。くそ、舐めたマネしやがって！」

「ちょ、ちよつと待った！それはいったいどう……」

「詳細は後ほどお話します。その軍人たちはどちらに去っていきましたか？」

「よ、用があるとかで町の方に降りていったが……」

「追いかけるぞ！」

「絶対、逃がすもんですか！」

エステルたちは手分けしてツァイスの市街区を探し回ったが……。とうとう博士を掠さらった男たちを発見することはできなかった。

第4章 黒のオープメント(15) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告 <

ここにきてまさかの黒装束の男たちが現れた。彼らの目的は何なのか!? 話はさらに加速する!

第4章 黒のオープメント（16）

ツァイス中央工房 2階 工房長室

通報を受けて湖畔の要塞から王国軍の部隊が駆けつけてきた。来たのは、カノーネ大尉だった。

「詳細は分かりました。それにしても……大変なことが起こりましたわね。これはれっきとしたテロ事件と言えるでしょう」

「テロ事件……。な、なんとという事だ……」

「発煙筒による攪乱かくらんと王国随一の頭脳かくだうの誘拐……。さらに最新技術の塊である演算オーブメントの強奪。許されざるべき所業ですわ」

「……」

「それで、王国軍の方はどういう方針で動くんだ？」

「すでにエアレットン、ヴォルフ砦、ソルダート軍用路、セントハイム門に検問を敷いています。賊がツァイス地方から逃げることは不可能でしょう」

「へえ。ずいぶん手際がいいわねえ」

「フフ……。有事に迅速に対応するのが我々、情報部の役目ですから」

「ひとつ伺いたいのですが……」

ヨシユアが突然切り出した。

「例の男たちが親衛隊に変装していたことをどう思われますか？」

「そうですね……。由々しき事態と言えるでしょう。というわけで……ドロシー・ハイアットさん」

カノーネ大尉はドロシーの方を向いた。

「へ……？わ、わたしのことですか？」

「逃走する賊どもの姿をカメラに収めたそうですね？その時の感光クォーツを我々に預けていただきたいのです」

「えっっ！？でもでも、せっかくのスクープなんですけど……」

ドロシーは思いつきり渋った。

「身内をかばうわけではありませんが王室親衛隊は王国軍の誇りです。彼らの、ひいては女王陛下の名誉を守るためにも、詳しいことが判るまで報道はどうか控えていたいただきたい。非公式ではありませんが、これは王国軍全体の意向ですわ」

「うう、仕方ありませんねえ。詳しいことが判ったらちゃんと返してくださいよ？」

ドロシーは泣く泣く、カノーネ大尉に写真用の感光クオートを渡した。

「ご協力、感謝します。それと、申し訳ないのですがブレイサーの方々にはこれ以上の調査は控えて……」

「そいつはできねえな」

アガットが即答した。

「あの黒装束の連中はずいぶん前から俺が追っている。軍のメンツもあるんだろうがここで引くわけにはいかねえよ」

「……………。ふう、仕方ありませんわね。引き続き調査を行ってください。ただし、何か判ったら必ずレイストーン要塞の情報部に報告してくれるようお願いします」

「わかった。あんたらも何かわかったらツァイス支部に連絡してくれ」

「了解しました。それでは私たちはこれで……」

カノーネ大尉と王国軍たちは出て行った。

「ふう…………。なんだか緊張しちゃった。あの人、リシャル大佐の副官をやってる女の人よね？」

「うん、大佐の代理として調査に来たみたいだね」

「フン…………。どうも軍人は肌に合わねえな。まあいい、とりあえず犯人どもはツァイス地方のどこかに潜伏しているみたいだ。ギルドで報告したらすぐに町の外の搜索を始めるぞ」

「うん…………。って。なによ、今度はあたしたちに付いてくんなどかいわないわけ？」

「ああ。お前らもそこそこ使えそうだ。俺の助手でよければ使って

やる」

相変わらずの上から目線でアガットが言った。

「相変わらず偉そうねえ。まあいいか、もう慣れちゃった」

「よろしく願います」

「ああ、気を抜くんじゃねえぞ」

「工房長。それじゃあ俺たちは行くぜ」

「ああ……よろしく頼む。どうかこの通りだ……。博士を救い出して欲しい」

工房長は頭を下げた。

「……………」

ティータは何も言わず立ち尽くしていた。

ツアイス市

「あ、そうだ。感光クオーツを買ったかなきゃ。わたし、ここで失礼するねえ」

「あ、うん。ドロシーもご苦労だったわね」

「ううん。わたしは何にもやってないよ。わたしも、編集部に問い合わせたのに情報がなくて調べてみるねえ。だから……ティーちゃん、元気出してね？」

ドロシーの心強い言葉。

「あ……。はい……。ありがとう……。ドロシーさん」

その言葉にティータの表情が和らいだ。

「心配いらないよ。エステルちゃんたちが必ず、おじいちゃんを助けてくれるから。それじゃあ、またね」

ドロシーは再び中央工房に入ってしまった。

「……………」

しかし、ティータは再び浮かない顔になった。

「ティータ……。そんな顔しないで。博士は絶対に無事だから」

「ああ、王国一の天才学者が傷付けられたりするはずがないさ」

「お姉ちゃん、お兄ちゃん……。うん……。そうだね。ぜったいに大丈夫だよね……」

「……………」

アガットは何か考え込んでいる表情だった。

「なにしかめっ面してんのよ？」

「……………なんでもねえ。時間が惜しい。とつととギルドに行くぞ」
エステルたちは今後の行動を考えるためにギルドへと向かった。

第4章 黒のオーブメント(16) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

ラッセル博士と黒装束の男たちを探し出すため、ギルドへと戻るエ
ステルたち。一体、どのような行動を取るのか!?

第4章 黒のオープメント（17）

遊撃士協会 ツアイス支部

「いい所に戻ってきたわね」

ギルドに戻ったところで、いきなりキリカにそう言われた。さらに見覚えのある男性がいた。

「あれっ……？」

「あなたは……」

そこにいた男性はアルバ教授だった。

「おや……エステルさん、ヨシユアさん。お久しぶりです、お元気でしたか？」

「アルバ教授じゃない。ツアイスに来てたんだ。なに、護衛を頼みに来たの？」

「それどころじゃない。犯人たちの行方が判ったわ。この人はその目撃者」

キリカから衝撃的な言葉が飛び出した。

「へ……！？」

「なんだと！？」

エステルたちは当然驚いた。

「うーん、やっぱりただ事じゃなかったんですね。いやはや、通報に来てよかった。実は私、ついさっきまで塔の調査をしてたんですよ」

「塔っていうと……。例の《四輪の塔》の1つね」

「平原道の北にある《紅蓮の塔》だな……」

「ええ、そしたら軍人が数名、中に入ってくるじゃないですか。最初は王国軍の調査でもあるのかと思っただんですが……。陰から様子をつかがっていると誘拐だの、逃走ルートだの、不穏な言葉が出てきましてねえ。気になってしまったので、こちらに通報に来たわけなんです」

「その軍人たち……どんな軍服を着ていましたか？」

「ええと、蒼と白を基調にした華麗な軍服を着ていましたが……。さすがは女王陛下の国。軍人までも洒落ていますねえ」

「決まりだな……。《紅蓮の塔》に急ぐぞ！」

「うん！」

「わかりました！」

エステルたちは《紅蓮の塔》に行こうとしたが、

「あ、あの……」

ティータが急に声をかけてきた。

「お姉ちゃんたち、お願い……。わ、わたしも連れて行って……！」

「ティータ……」

「それは……」

エステルとヨシユアは答えられなかった。できれば連れて行ってあげたいのだが……。

「こら、チビスケ」

「ふえっ……？」

「あのな……。連れて行けるわけねえだろうが。常識で考えろや、常識で」

「で、でもでも……！おじちゃんが掠さらわれたのにわたし……わたし……！」

「時間がねえからハッキリ言っておくぞ……。足手まといだ、付いてくんな」

「……っ！」

「ちょ、ちよつと！少しは言い方ってもんが……」

「黙ってる。てめえだって判ってるはずだ。シロウトの、しかもガキの面倒見てる余裕なんざねえんだよ」

「そ、それは……」

エステルは返す言葉が見つからなかった。

「ねえ、ヨシユア、何か言っつてよ！」

「残念だけど……僕も反対だ。あの抜け目のない連中が追撃を予想

していないわけがない。そんな危険な場所にティータを連れて行くわけにはいかないよ」

「ヨ、ヨシユアお兄ちゃん……」

「うっ……」

ティータが心配なのはわかるが、今回の事件はあまりに危険すぎる。

「……ごめん、ティータ。やっぱ連れていけないみたい……」

「エ、エステルお姉ちゃん……。……ひどい……ひどいよあつ……」

ティータは泣きながらギルドを出て行った。

「ティータ！」

エステルはティータを追いかけようとしたが、ヨシユアに掴まれた。

「……待った、エステル。今はそつとしておこう。一刻も早く博士を助けて彼女を安心させてあげるんだ」

「……わかった……。確かにそれしかないかも」

「つたく……。余計な時間を取らせやがって。キリカ！軍への連絡は任せたぞ」

「ええ、そちらも武運を」

「どうやら大変なことが起こっているようですね……。くれぐれもお気を付けて」

エステルたちは気を取り直し、《紅蓮の塔》へと急いだ。

紅蓮の塔

「《ここが《紅蓮の塔》……。博士とあの連中、本当にここにいるのかな？」

「間違いない……。複数の足跡が入り乱れている。たしかに隠れ家としてはうってつけかもしれないが……」

その時、ヨシユアが突然身構えた。

「2人とも、気をつけて！」

塔の中からドロシーを襲ったトラット平原の魔獣が現れた。

「こいつら!？」

「へッ……。やっぱりビンゴだったか！」

3度目ともなる狼の魔獣との戦闘を制したがエステルの頭に疑問が浮かび上がった。

「なんであの魔獣たちがここに……。あ、もしかして……黒装束の連中と関係が!？」

「ああ、間違いねえ。おそらく、連中に訓練された戦闘犬ってところだろうな」

「せ、戦闘犬……?」

「俺は、奴等を調べ始めてから何度もあの魔獣の襲撃を受けた。無関係であるはずがねえ」

「そ、そうだったんだ……。……てことは、峠の関所が魔獣に襲われたのはあんたがいたからってわけ!？」

当然そう考えられる。関所の兵士はとばかりを受けたということになる。

「ま、結果的にはな。そもそも、奴等の調査を俺に押し付けたのはお前らの親父だ。こつちだってイイ迷惑なんだよ」

「う、それを言われると……」

「そっいえば、ジャンさんがそんな事を言っていましたね。どういう経緯で頼まれたんですか？」

「例の空賊事件が起こる少し前にフラリと現れて押し付けやがったんだ。なんでも、外せない用事ができたとか抜かしやがってな。まったくボけたオッサンだぜ」

「そ、そうだったんだ……」

「もつとも、今となつちゃあ誰にも譲るつもりはねえがな。特に、あの野郎だけは絶対この手で捕まえてやる……」

「?????」

「あの野郎……?」

「……なんでもねえよ。とっとと連中を捕まえてあの爺さんを救出するぞ」

エステルたちは紅蓮の塔の中に入った。

第4章 黒のオーブメント(17) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

紅蓮の塔に入ったエステルたち。そこに待ち受けていたものとは！
？

第4章 黒のオープメント（18）

紅蓮の塔 屋上

「いたっ！」

屋上にたどり着いたエステルたち。そこには黒装束の男たち3人がいた。ラッセル博士も気絶しているのかぐったりとしていた。

「フン……。とうとう追い詰めたぜ」

エステルたちは黒装束の男たちに武器を構えながら近づいていった。

「な……。！遊撃士ども！？」

「なんとという連中だ。ここまで鼻が利くとは……」

黒装束の男たちはあせる。

「変装して町から脱出するなんて芸の細かいことするじゃない。でも、ツメが甘かったみたいね」

「誰も来ない遺跡だと思って油断したのが運の尽きですね。素直にラッセル博士を解放してもらいましょうか」

「く……」

「遊撃士協会規約に基づきてめえらを逮捕・拘束する。あのスカした仮面野郎が見当たらないのは残念だが……。まあ、てめえらで我慢してやるよ」

「ふ、ふざけるな！」

「邪魔者は排除するのみ！」

黒装束の男たちと激突！

「クツ……。さすがは遊撃士ども……」

「だが……。人質がいるのを忘れたか？」

黒装束の男たちはラッセル博士を楯に取った。

「あんたたち！往生際が悪すぎるわよ！？」

「あなた達の目的はラッセル博士の頭脳でしょう。危害を加えてもいいのですか？」

「う、うるさい！」

「本当に傷付けられないか試してやってもいいのだぞ！？」

「うぜえな……。いい加減、あきらめろや。王国軍だって動いている。てめえらには逃げ場はねえんだよ」

「……クク……」

「ははは……」

黒装束の男たちはいきなり笑い始めた。

「……なにがおかしい？」

「いや、なに。おめでたい連中だと思っただけ」

「それに……そろそろ時間だ」

「なに……？……ハッ！」

アガットが何かの気配に気づいた。

「エステル、危ない！」

「わかってる」

エステルは銃弾をかわした。そこに現れたのは飛行艇だった。

「やっぱり、飛行艇！」

「クソ、ここまで大がかりな組織だったのか！？」

「フフ……形勢逆転だな」

「ここで皆殺しにしてもいいが……。遊撃士協会を敵に回すつもりはない」

「そこで黙って見ていれば命だけは助けてやってもいいぞ？」

「こ、この……！言わせておけば……」

「（エステル……。ここは彼らの言つとおりにしよう）」
ヨシユアが後ろからささやいた。

「（え……！？）」

「（従うフリをしてスキを伺え……。爺さんを運び込もうとする瞬間……。そのタイミングで一気に突入する）」

「（りよ、了解……！）」

「…………どうやら諦めたようだな」

「フフ……。賢明な判断というものだ。では、失礼させてもらっぞ」
黒装束の男たちが1人、2人と飛行艇に乗り込んだ。3人目がラッセル博士を運び込むとした瞬間、アガットがささやいた。

「（今だ…………！）」

エステルたちが突入しようとした時、

「だ、だめえっ！」

導力砲が飛行艇に打ち込まれた。

「なにッ！？」

導力砲を打ち込んだのは、ティータだった。

「こ、子供！？」

黒装束の男たちも驚いている。

「ティータ！？」

「しまった！付いてきてしまったのか！？」

「お、おじいちゃんを返してっ！返してくれなかったら……………」
「こ
うなんだからああっ！」

ティータが2発目の導力砲を撃った。飛行艇がぐらついた。

「うおっ…………」

「ガ、ガキが！調子に乗るんじゃない！」

黒装束の男の1人が銃口をティータに向けた。

「あ…………」

「まずい…………！」

「ティータ！」

「…………チイイッ！」

黒装束の男の銃が撃った瞬間、アガットがティータを押しつけた。
しかし、銃弾がアガットの肩に当たった。

「くっ…………！」

「アガット！？」

「アガットさん！？」

エステルたちはアガットに駆け寄った。

ム力つくんだよ」

「う……うめ……。うめ……。ん……。なさ……。ふえ……
……うええっ」

「ちょ、ちょっと！どうしてそんな酷いこと言うの！？ただでさえ、おじいちゃんが掠さらわれたばかりだっていうのに！」

「だから言ってるんだ。おい……。チビ。泣いたままでいいから聞け」
「……うぐ……。ひつく……？」

「お前、このままでいいのか？爺さんのこと助けなくてこのまま諦めちまっていいの？」

「うっうっうっ」

ティータは首を横に振った。

「だったら……腑抜けてないでシャツとしろ。泣いてもいい、喚いてもいいからまずは自分の足で立ち上がれ。てめえの面倒も見られねえヤツが人助けなんかできるわけねえだろ？」

「……あ」

「それが出来ないんだったら二度と俺たちの邪魔をするな。子供らしく、ベッドで毛布かぶってメソメソ泣いてやがれ。……フン、俺としてはその方がよっぽど助かるけどな」

「……」

「ティータ」

「……。大丈夫だよ……。お姉ちゃん……。わたし……。ひとりで立てるから……」

そして、ティータはひとりで立った。

「ヘッ……。やれば出来るじゃねえか」

「本当に……。ごめんなさい……。わ、わたしのせいであの人たちに逃げられちゃって……」

「バカ……。謝ることなんてないわよ」

「うん。ティータが無事でよかった」

「ありがとう……。お姉ちゃん、お兄ちゃん。あ、あの……。アガットさん……」

「なんだ？文句なら受けつけねえぞ」

「えと……。あ、ありがとーございます。危ないところを助けてくれて……。それから……。励ましてくれてありがとう……。」

ティータがアガットに頭を下げた。

「は、励ましたわけじゃねえ！メソメソしてるガキに活を入れてやつただけだ！」

「ふふ……。そーですね」

「だくから、泣いたくせになんでそこで笑うんだよ！？ちよ、調子の狂うガキだな……。」

「あんたねえ、お礼くらい素直に受け取りなさいよ。ホント、ひねくれてるんだから」

「いや、アガットさん、単に照れてるだけじゃないかな」

「あ、なるほど。可愛いところ、あるじゃない？」

エステルが相槌を打った。

「そこ、うるせえぞ！まあいい……。とりあえず速攻でギルドに戻るぞ。どうやら、連中の背後にかなりの大物がいるのは間違いない。気は進めねえが……。軍と協力する必要があるだろう」

「うん……。そうね」

「急いの方がよさそうですね」

エステルたちは急いでギルドに戻ることにした。

第4章 黒のオープメント(18) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

ラッセル博士の救出に失敗したエステルたち。ギルドへ帰る途中にアガットに異変が！

第4章 黒のオープメント（19）

紅蓮の塔 入口

「……………」

アガットが入口を出た途端、顔を歪めた。

「ど、どうしたの？」

「いや……………何でもない。ちょっと眩暈めまいがしたただけだ」

「あ……………！ま、まさか、わたしをかばった時に……………」

「そ、そういえば……………！」

「ひよつとして……………撃たれていたんですか？」

「カスリ傷だ。大したことはねえ」

「で、でも……………わたしのせい……………」

ティータが心配そうにアガットを見た。

「あのなあ、このくらいの傷なんざ日常茶飯事なんだよ。うだうだ
言っていないでとっととツアイスに戻るぞ」

「う、うん……………」

「……………」

エステルたちはアガットの言われるままにツアイスへと向かった。

トラット平原

「おや？お前さんたちは……………」

そこで現れたのは以前エルモ村への道を探ねてきた東方風の男性だった。

「あれっ……………！？」

「エルモの帰りに会った……………」

「はは、あの時は道案内してくれてありがとよ。しかし、また街道で会うとはなかなか縁があるじゃないか」

「あは、そうかもね。そういえば、おじさんもエルモで温泉に入ってたわけ？」

「その通りだが……。おじさんはやめてくれよ。おっと、そっちのアンちゃんはどうやら初対面のようなだ。顔色悪そうだが、大丈夫かい？」

「え……」

エステルたちがアガットの方を向くと、

「……………」

アガットの顔は真っ青で今にも倒れそうな様子だった。

「うわ……。なにその顔色!？」

「ア、アガットさん……!？」

「るせえ……。大丈夫だって言ってる……………」

そう言った時、アガットが崩れ落ちた。

「……………かはっ……………」

「きゃあ……!？」

「ど、どうしちゃったの!？」

「……………ちよつと待って!」

ヨシユアはアガットのまぶたを開いた。

「まずいな……。瞳孔が開き始めている。あの時の弾に何かを仕込まれてたんだ……………」

「な、何かって……。まさか毒!？」

「ふむ、間違いなさそうだな。瞳孔が拡大しているということは植物性の神経毒かもしれないぞ」

「その可能性が高いと思います。断言はできないけど……このままだと危険かもしれない」

「そ、そんな……!」

「と、とにかく急いで治療できる場所に運ばなきゃ! ティータ、このあたりで治療できる場所ってある!？」

「ちゅ、中央工房……! 4階に医務室があるのっ!」

「ふむ………だったらそこに案内してくれ。俺がその若いのを運ぼう」

「え……いいの!？」

「見ての通り、このガタイだ。重い荷物運びなら任せておきな。それに……どうやら同業者のようだしな」

「同業者って……」

「もしかして、あなたも？」

遊撃士？

「自己紹介がまだだったな。ジン・ヴァセック　共和国のギルドに所属している。よろしくな。リベールの遊撃士さんたち」

中央工房　4階　医務室

「とりあえず、応急処置は施しておいたわ。ただ……かなり特殊な神経毒みたい。普通の解毒剤が効かないのよ」

「ミアム先生がアガツトの様子を見て言った。」

「あ、あの、アガツトさん、どうなっちゃうんですか……?」

「相当タフみたいだから何とか持ちこたえているけど……。このまま昏睡状態が続けば命の危険もありえるかもしれない」

「……………ッ!」

「そ、そんな……」

その時、ヨシユアが医務室に来た。

「あ、ヨシユア……」

「遅くなってごめん。キリカさんに報告してきたよ。軍にも通報してもらったから何かあれば情報が入ると思う」

「そっか……ご苦労さま。あれ、ジンさんはどうしたの?」

「うん、キリカさんと知り合いだったみたいでね積もる話があるみたいだった」

「なるほど……。2人とも東方出身だもんね」

「それで……アガツトさんの容態は?」

「そ、それが……」

「……………」

エステルもティータも口を開けなかった。

「そうか……。危険な状態みたいだね」

「残念だけど、私の知識では毒物の具体的な成分が判らないと解毒のしようがないわ。でも……ビクセン教区長ならあるいは……」

「あ……！」

ティータが何か思い立ったようだ。

「ビクセン教区長？」

「あ、あのね。ツァイス教区の神父さんなの」

「七耀教会には、千年に及ぶ伝統医療の蓄積があるからね。特に薬学に関しては色々と学ぶところが多いのよ。ひよっとしたら未知の毒物の対症療法もご存じかもしれない」

「なるほど、ロレントの教区長さんもお薬の処方とかしてたもんね」

「頼んでみる価値はありそうだね。もう遅いけど……教会に行つて相談してみようか」

「う、うん……！」

ツァイス礼拝堂

「おや、ティータじゃないか。こんな夜更けにどうしたのかね？」

「あ、あの教区長さん！アガットさんを助けてあげてくださいっ！」

「どういうことかね？」

ビクセン教区長は状況がわからないようだ。

「ティ、ティータ。落ち着きなさいってば」

「実は……」

うるたえるティータの代わりにヨシユアが説明を始めた。アガットが毒に倒れた事情と詳しい症状について説明した。

「まあ、そんなことが……」

「うっむ……これは困ったことになったな」

「や、やっぱり……治すのは難しそうですね？」

「いや、幸いなことに神経毒全般に効果のある薬が七耀教会には伝わっており。毒の成分を消すのではなく、患者の抵抗力を高めることで自然治癒をうながす薬なのだが……。シスター・キエラ。確かあの薬は……」

ビクセン教区長は隣にいたシスター・キエラに尋ねた。

「はい……。ちょうど材料を切らしていて……」

「そ、そんなぁ……」

ティータが泣きそうな顔をした。

「原料……。どういった物なんでしょう？」

「『ゼムリア苔』という古代文明の名がついた発光植物だ。このあたりでは、カルデア隧道の途中にある鍾乳洞に生えておったはずだ。以前、遊撃士協会に依頼して採取してもらったことがある」

「カルデア隧道って……。ツァイスに来た時に通ったあのトンネル道のことよね。なぐんだ！ だったら話は簡単じゃない」

「さっそく鍾乳洞に向かって『ゼムリア苔』を採取してきます」

「なに……。君たちがかね？」

「あの、お姉ちゃんたちもギルドの遊撃士さんなんです」

「なるほど……。ならば任せられるかもしれない。とりあえず、鍾乳洞に行く前にギルドの受付に聞いてみるといい。以前、採取してもらった時の記録が残っているかもしれない」

「うん、わかりました！」

「それでは失礼します」

エステルたちは次にギルドへと向かった。

遊撃士協会 ツァイス支部

「おお、お前さんたちか」

「あ、ジンさん！ まだ居てくれたんだ。さっきはアガットを運んで

くれてありがとね」

「お世話になりました」

「はは、気にするな。これも同業者のよしみだぜ」

「それで……アガットの容態はどう？」

「それが……」

エステルたちはアガットの容態と『ゼムリア苔』について説明した。

「ふむ……。思った以上に危険な状態だな」

「確かに『ゼムリア苔』なら以前、教会の依頼で採取が行われたわ。ちよつと待って」

キリカは書棚からギルドの任務記録を探し出した。

「……あつた。カルデア鍾乳洞の北西区画、洞窟湖のほとりで採取したそうよ」

「鍾乳洞の北西……洞窟湖ね」

「手帳にメモしておこう」

「ただ、鍾乳洞の魔獣はかなり手強いと聞いているわ。前に採取した時はベテランの遊撃士4人でチームを組んで採取したから」

「べ、ベテラン4人!？」

「確かに大変そうですね」

「一気に依頼の難易度が上がったような感じになったエステルたち。

「ふむ、だったら……」

「というわけでこの男を連れて行きなさい」

「ガクツ……。って、おい！勝手に話を進めるんじゃない」

「あら？付き合うつもりではないの？」

「いや、それはそうだが……。ああもう、お前ときたら相変わらずな性格をしやがって!」

「そんなに誉めないで」

「誉めとらん、誉めとらん!」

コントをしているようにも見えるジンとキリカのやり取り。

「え、えつと……。要するにジンさんも鍾乳洞に付き合ってくれるの?」

「あ、ああ……。これも何かの縁だろうさ。明日には王都に向かうからそれまでしか付き合えんがな」

「それで充分！すつごく助かつちやうわ！」

「よろしく願います」

「あ、あの……。お姉ちゃん、お兄ちゃん……。わたしも……。行つちやダメ？」

「えっ？」

「わかつてるの……。足手まといだつてことは……。でも……。でもね。アガットさん、つわたしをかばつてあんな事になつちやつたのに……。何にもしてあげられないなんてわたし……。いやだよ……。」「ティータ……。ね、ヨシユア。あたしからもお願い！一緒に連れて行つてあげよう？」

「仕方ないな……。ねえ、ティータ。もう無茶しないつてちゃんと約束できるかい？」

「う、うん、約束する……。！」

「そういう訳なんですけど、ジンさんも構いませんか？」

「ああ。俺はいつこうに構わんぞ。よろしくな、お嬢ちゃん」

「あ……。はいっ！」

「よし、そうと決まればさつそく鍾乳洞に行きましょ！」

「まずは中央工房の地下からカルデア隧道に降りなくちゃね」

エステルたちはカルデア鍾乳洞に向かった。

第4章 黒のオープメント(19) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

カルデア鍾乳洞に向かったエステルたち。『ゼムリア苔』を見つけることができるか!?

第4章 黒のオープメント(20)

カルデア鍾乳洞

神秘的な光景が広がるカルデア鍾乳洞。そこには至る所に鍾乳石があり、中は涼しかった。

「カルデア鍾乳洞……。なんだか神秘的な場所ね」

「だが、奥の方から魔獣の気配がプンプンするぞ。なかなか齒ごたえがありそうだ」

ジンはすでに魔獣の気配を悟っている。

「ふ、ふええ……」

その言葉にティータが身を震わせた。

「ティータ、恐かったら戻ってもいいんだからね？あんまり無理しちゃダメよ」

「だ、大丈夫だよ……。恐いけど無理はしてないから。とにかく急いで『ゼムリア苔』を取りに行こう？」

「そうね……。行くとしますか。えっと、たしか洞窟湖のほとりに生えているって言ってたっけ？」

「うん、そうみたいだね。ちなみに、洞窟湖は鍾乳洞の北西方向にあるらしい」

「ふむ、位置と方向を把握しながら慎重に進んだ方がよさそうだな」
エステルたちは鍾乳洞の北西方向にある洞窟湖へと進んでいった。

カルデア鍾乳洞 洞窟湖

「うわあ……！」

「キレイ……」

「ほう……。なかなかの景観じゃないか」

洞窟湖は光と湖が織りなす素晴らしい光景だった。

「うんうん！洞窟の中とは思えないわ」

「ここが洞窟湖みたいだね。このあたりのどこかに『ゼムリア苔』が生えているはずだよ」

「オツケー！探してみましょ」

エステルたちは『ゼムリア苔』を探し始めた。

そして、湖のほとりの岩で『ゼムリア苔』を見つけた。

「あ、それって……！」

「その光っているのが『ゼムリア苔』ってやつか」

「うーん、こんなにキレイな苔だとは思わなかったな。どうして光ってるのかしら？」

「七耀石の成分が大量に含まれているのかもしれないね。さっそく採取して急いでツァイスに戻ろう」

エステルたちは『ゼムリア苔』を採取した。

「よし、任務完了！」

「それじゃあ、町に戻って教区长さんに届けようか」

「うん、そうしましょ……」

「……待て」

その時、ジンが何かを察したようで、戻ろうとするエステルたちを制した。

「へっ……？」

「あ……！」

ヨシユアも何かを感じたようで武器を構えた。

「気をつける！」

突然、湖の中から魔獣、もとい巨大なペンギンみたいなものが飛び出してきた。

「な、なにアレ……！？」

エステルは不細工な魔獣だと思ったようだ。

「はわわっ……！」

「フフン、どうやらこの洞窟湖の又らしいな」
「これは……戦うしかなさそうですね！」
ペンギン型魔獣が飛び掛かってきた！

魔獣を退けたエステルたち。

「び、びっくりしたあ〜！」

「か、可愛かった恐かったあ〜……」

「ふう……。なんとか撃退できたみたいだね。でも、モタモタしていたらまた襲ってくるかもしれない」

「ふむ、とつと町に戻った方が良さそうだ。たしか、さっき採取した苔を町の教会に持っていけばいいんだな？」

「うん、急ぎましょ！」

エステルたちは急いでツァイス市に戻った。

ツァイス礼拝堂

「教区長さん！『ゼムリア苔』、採ってきたよ！」

「おお……本当かね！？よくぞ、こんなに早く採ってくることできたものだ」

「あ、あの……。これでお薬、作れますか？」

「ああ、もちろんだとも。奥で調合するから少し待っていてくれたまえ」

そして、調合が始まった。

「万物の根源たる七耀より聖別されし蒼と金、ここに在り。万物の流転司る女神の秘蹟、浄化と活性の融合を成したまえ。……」

……。うむ……。これで完成だ。さあ、持っていくといい

エステルはアルヴの靈薬をもらった。

「わあ……キレイな色！」

「これって、飲み薬なの？」

「ああ、内服薬だ。毒の成分を消すのではなく、患者の免疫力を飛躍的に高めて自然治癒を促すわけだな」

「ふむ、東方の医術と通じるところがありますな」

「たしか漢方だったか……。同じ発想と言ってもいいだろう。さあ、急いでその薬を届けてやるといい」

「うん、わかったわ！」

「教区长さん！ありがとうございます！」

エステルたちは医務室へと向かった。

ツアイス中央工房 4階 医務室

「先生、お待ちせ！」

「どうだった!?」

「教区长さんからお薬をもらってきました」

「本当!?さすがはビクセン教区长ね」

エステルはアルヴの靈薬をミリアム先生に渡した。

「なるほど……。免疫力を活性化させる薬か。試してみる価値はありそうね」

エステルたちはアガツトのもとに行った。

「さてと……。それじゃあ飲ませるわよ」

ミリアム先生はスポイトを使ってアガツトの口から薬を飲ませた。

「ゴクッ」

「女神様」

エステルたちは固唾を飲みながら見守った。

「……………。……………」

しばらくして、アガットの様子の変化しはじめた。

「うっ……うっうっ……。がああっ……あああっ！」

「ひっ……！？」

「わわっ……！なんか苦しみ始めたわよ！？」

「大丈夫……。たぶん、これでいいんだ」

「え……！？」

「薬が効き始めたようだ。苦しかったり、痛かったりするのとは体の機能が復活した証拠だろう」

「ふふ、その通りよ。これで、神経毒による危険な昏睡状態からは脱したわ」

「そ、そうなんだ……」

「で、でも……アガットさん、苦しそう……」

「まあ、丸一日くらいは苦しむことになるでしょうね。でも大丈夫。それを過ぎれば完治するはずよ」

こうして、アガットは危険な状態から脱した。夜も遅かったため、エステルたちは交替で休みながらアガットの看病をすることにした。

「うーん、おかしいな……。確かここにタオルの替えが……」

「ハアハア……。うああああっ……」

「……！」

ティータはその声に駆け付けた。

「ア、アガットさん……。す、すごい汗……。ふいてあげなくちゃ

……」

「……うっう」

アガットがうつすらと目を開けた。

「あ、アガットさん！気が付いたんですか？今、水でも持ってきて

……」

「ミ、ミーシャか……？」

「え……」

「よ、よかった……。そこにいたのか……。兄ちゃんが付いている……。もう……。恐くないから……。……。だから……。だから……」

……

「そういつてアガットは再び目を閉じた。」

「……………」

「ア、アガットさん!？」

ティータは慌ててアガットの様子を確かめた。先ほどよりも呼吸が安定して穏やかな寝息を立てている。

「ほ……。よ、よかったあ……。……。誰……。なのかな……」

「シャって……。たしかそう呼んだよね……。……。誰……。なのかな……。……?」

第4章 黒のオープメント(20) (後書き)

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

アガット回復を待ちつつ、次の手立てを見つけてます。

第4章 黒のオープメント(21)

次の日の朝 ツアイス発着場

エステルたちはジンを見送るため、ツアイス発着場に来ていた。

「……わざわざ済まん。見送りなんぞさせちまつて」

「このくらい当然よ。いろいろお世話になっちゃったし」

「ジンさんは、このまま定期船で王都に直行ですか？」

「ああ、どうしても外せない用事があった。そうでなければ俺も誘拐事件の調査に付き合わせてもらうんだが……。すまん、お嬢ちゃん」

「と、とんでもないですよ。いろいろと助けてもらったし……。ホントーにありがとうございます」

「はは……。そう言ってくれと助かるぜ」

その時、定期船のアナウンスが流れた。

「王都方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸します。

ご利用の方はお急ぎください」

「おっと……。そろそろ出発のようだな」

ジンは定期船に乗った。

「それじゃあな。機会があったらまた会おうや」

「あ、うん！そういえばジンさんっていつまでリベルにいるの？」

「はつきりとは判らんが……。女王生誕祭まではいると思うぞ」

「あ、だったらまた会えるかもしれないわね」

「その時はよろしく願います」

「おお、こちらこそな」

そして、定期船は離陸した。

「さてと。さっそくギルドに行こうか？例の飛行艇のことについて何かわかったかもしれないし」

「うん、王国軍から情報が入っているといいんだけど……。あ、テータはどうする？」

「あ、あのね……。わたし、アガットさんの看病をしようと思うの。まだ目を覚ましていないからなんだか放っておけなくて……」

「テータ……。わかった、博士のことはあたしたちに任せておいて！」

「ごめんね、お姉ちゃんたちに迷惑ばかりかけちゃって……」

「も〜、この子つてば。変な遠慮するんじゃないわよ」

「人つて、意識がなくても誰かが側に付いているだけで安心できるものだからね。アガットさんの事、頼んだよ」

「う、うん……！」

テータは走ってアガットのところへと向かった。

「あー、ホントにあの子つてば健気っていうか、いじらしいよね。あんな無愛想な不良男なんかにそこまで優しくすることないのに」

「まあまあ。思っただけど、君とアガットさん、割と性格が似てるんじゃないかな？」

「はあ！？あ、あんな無愛想な男とどこが似てるってゆーのよ!？」

エステルはむきになって否定した。

「すぐに突っ走るところとかお人好しすぎるところとか。アガットさん、言葉はキツイけど相手を思いやっての事が多いからね。たぶん、テータもそれがわかってるんだと思う」

「むむむ……。なんか納得いかないけど……。まあいいや、とりあえずギルドに行って話を聞きましょう。アイツが動けるようになるまで色々調べて自慢してやるんだから」

「うん、そっだね」

エステルとヨシユアはギルドへと向かった。

遊撃士協会 ツァイス支部

「キリカさん、おはよう〜！」

「おはようございます」

「おはよう、2人とも。ジンはもう出発した？」

「はい。先ほど定期船で王都の方に」

「キリカさんも見送りに行けばよかったのに。そういえば、キリカさんとジンさんってどういう知り合い？」

「昔、ちよつとね。それはともかく……。妙な雲行きになってきたわ」

「あゝ、ごまかした！……って、妙な雲行き？」

「例の飛行艇についてなにか分かったんですか？」

「いえ、まったく。妙な雲行きというのは王国軍の動きについてよまず、軍の司令部があるレイストン要塞に連絡しても何の返事も返ってこない。次に、各地に敷かれていた検問が昨夜のうちに解除されてしまった」

「ええっ！？それってどーいうこと？また、空賊事件の時みたいに縄張り争いでもするつもりなの？」

「いや、それだったら検問を解除するのはおかしい。自分たちで捕まえたいのなら素直にそう連絡するはずだし……。確かに妙な雲行きになりましたね」

「ちなみに、レイストン要塞の情報部とも連絡がとれないわ。もしかしたら、王国軍内部で何か事件が起こったのかも……」

「何かって……。あ、ひよつとして……。！ドロシーが撮った、あの！？」

「親衛隊に変装していた黒装束の男たちの写真だね」

「呼びました〜？」

絶妙のタイミングでドロシーが現れた。

「あ、ドロシー！」

「噂をすれば影ですね」

「いや〜、まいつちやったよう。編集部に連絡したらちようどナイアル先輩がいてね。感光クオーツを王国軍に渡したことを話したらものすごく怒られちゃったの。ひどいよね〜、そう思わない?」
ドロシーが泣きそうな顔で言った。

「つて、感光クオーツつてまだ返してもらってないんだ?」

「うん、ひどいと思わない? せっかくレイストン要塞まで返してもらいに行ったのになあ」

「うわ〜。あんたも根性があるわねえ」

「えへへ〜。それだけがわたしの取り柄だし。仕方ないから、雑誌掲載用に要塞の写真を撮ってきちゃった。月明りでライトアップされてすつごく可愛く撮れたんだよ〜」

「要塞を可愛く撮ってもねえ」

「それに許可なしに軍事施設を撮影したらマズインじゃ……」

「まーまー。堅いこと言いつこナシ? ほらあ、見て見て。さつき現像したばかりなの」

ドロシーはカウンターの上に写真を置いた。

「へえ……。たしかに綺麗に撮れていますね。これがレイストン要塞か……」

「ほんと、ドロシーつてカメラの腕は大したもんよね……。……」

「……………あれ……………」

エステルが何か見つけたようだ。

「どうしたの、エステル?」

「気のせいかもしれないけど……。右上の方になにか映ってない?」

「え……………」

ヨシユアが写真をじっくり見た。

「……………本当だ」

「たしかに微かだけど小さな影が映っているわね」

「ふえ〜、エステルちゃん、よく気が付いたねえ。わたし、撮ってたのにぜんぜん気付かなかったよ」

「えっへん、それほどでも シルエットしか映ってないけどやっぱ

り軍の警備艇なのかな？」

「………………。いや、これは警備艇じゃない…………。」

これは、あの時の飛行艇だ」

「あの時…………？」

「博士を掠った飛行艇と同じシルエットなわけね」

「はい」

「博士を掠ったって………………。えええっ!？」

ちよ、ちよっと待ってよ!どうしてあの時の船がこんな所に映ってるわけ?ここってたしか王国軍の本拠地なんでしょ?」

「落ちて着いて、エステル。色々な可能性が考えられるけど、まだ結論するのは早すぎると思う。ここは僕たちも直接レイストン要塞に行って事情を聞くべきかもしれない」

「ええっ!？」

「なるほど。ゆさぶるつもりね」

「マズイでしょうか?」

「いいえ、許可するわ。こちらは危つく死者を出すところだった。どんな事情があるにせよ、舐められるわけにはいかない」

キリカの目が危なく輝いた

「ひええ、キリカさん、目がマジなんですけど…………。でも…………確か
にそうよね。ドロシー、この写真、あたしたちに一枚くれない?」

「うん、いいよ。エステルちゃんたちには色々世話になっちゃ
ったし」

「ありがと、恩に着るわ!」

エステルはドロシーの写真をもらった。

「レイストン要塞に行くなら東口からリッター街道に出なさい。リ
ッター街道の途中の三叉路を北に向かえば要塞のゲート前が出るわ
くれぐれも慎重に行動なさい」

「ラジャー!」

「了解しました」

エステルたちはレイストン要塞に向かった。

第4章 黒のオープメント(21) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

王国軍から何の連絡もなく、妙な動きを見せた。エステルは事情を聞くため、直接レイストーン要塞へと向かった。

第4章 黒のオーブメント(22)

レイストン要塞

「うっわ〜……こりやまた大きな基地ねえ。あのハーケン門の数倍はあるんじゃないの?」

「そうだね……そのくらいはあるかもしれない。10年前の戦争でも陥落せずに反攻作戦の拠点となったそうだよ」

「なるほど納得……って感心してる場合じゃないか。とつとと玄關に行つて責任者を呼んできてもらおうか」

「……………」

ヨシユアがその言葉を聞いて驚いた。

「あれ、どうしたの?」

「いや、つくづく君って物怖じしない子だなと思つて。さすがは父さんの娘だね」

「失礼ねえ。あたしだって緊張してるわよ。でも、あのモルガン將軍以上におっかない人がいるとは思えないし」

「はは、それはそうかもね。モルガン將軍か……。今もハーケン門にいるのかな?」

「あれ、誰もいないわね……」

「変だな……。普通こついうところには門番が立ってるものなんだから」

「……………何だね、君たちは」

突然、どこからともなく声が聞こえてきた。

「あ、あれ……どこから聞こえてきたの?」

「たぶん、どこかにスピーカーがあるんじゃないかな」

「ここはレイストン要塞。リベール王国軍の総司令部だ。君たちのような民間人が立ち入っていい場所じゃない。悪いが引き返しても

「らえるかね」

「（うーん、対応は丁寧だけど……）」

「（うん……。かなり警戒は厳しいみたいだ）」

さすがはレイストーン要塞といった感じた。

「あーあー。君たち、聞こえているかね？」

「悪いけど、あたしたちただの民間人じゃないのよね。遊撃士協会の人間なんだけど」

「中央工房が襲撃された件についてお話ししたいことがあります。責任者の方に合わせて頂けますか？」

「遊撃士協会だと？君たちが遊撃士だというのか？」

「疑うんだったら、この紋章を見なさいよ。ほらほら、見えているんでしょ？」

エステルは胸元にある準遊撃士の紋章を誇示した。

「………………。確認した。どうやら本物のようだな。しかし生憎、この基地の責任者は現在、留守にしている最中でね。できれば日を改めてもらえないか？」

「責任者がいない……。なんだか、しまらない話ねえ」

「では、情報部の方を誰でもいいから呼んでいただけですか。リシヤール大佐か、カノーネ大尉に伝えてもらいたいことがあるんです」

「………………。よろしい、そこで待っていたまえ」
そういつて、スピーカーが切れたようだ。

「ふう……。ようやく引つ張り出したわね」

「うん、でもこれは予想以上にガードが固そうだ」

その時、目の前の大扉が開いた。

「わわっ……………!?!」

「誰か来たみたいだ……………」

「待たせてしまって申し訳ない。自分は、レイストーン要塞の守備隊長を務めるシード少佐だ」

「あたし、遊撃士協会のエステル・ブライトです」

「同じく、ヨシユア・ブライトです」

「……ブライト……?」

その時、シード少佐の顔が変わった。

「あれ、どうしたの?」

「い、いや……。すまない、こちらのことだ。それよりも……中央工房の襲撃事件について話があるとのことだったな。本当に申し訳ないが……情報部の人間も全員不在でね。伝言があるなら聞いておこう」

「うーん、困ったわねえ。(よし。ここで揺さぶってみよっと……)」

エステルは揺さぶりを決め込んだ。

「あーあ、せっかく博士を連れ去った飛行艇の手掛かりをつかんだのに」

「な、なんだと!?!」

「あれ、少佐さん。なんでそんなに驚いてるの?」

「い、いや、連絡を受けて我々も探し回っていたからな。それで……手がかりというのは……?」

「これを見ていただけますか」

ヨシユアはドロシーの写真をシード少佐に渡した。

「これは……レイストン要塞じゃないか。どうしてこんな写真を君たちが……」

「まーまー。堅いことは言いつこなし。写真の右上の方を見てみてよ」

「右上の方……。こ、これは……!?!」

「軍で使っている警備艇とは明らかに違うシルエットですね?」

「で、博士を連れ去った飛行艇とソックリなのよね、これが」

「……。なるほど……。これは由々しき事態だな。協力感謝する。至急、情報部に伝えておこう」

「へ……。ちよ、ちよっと待ってよ。それだけなの?」

「それだけとは?」

「だ、だって……。おかしいじゃない。なんで犯人たちの乗った船が

こんな所をウロウロしてるわけ？」

「恥ずかしながら完全にこちらの不手際だな。国境付近を搜索するあまり本拠地周辺の警戒が疎かおろそかになってしまったようだ。湖を北上したということは帝国の仕業の可能性もあるだろう」

「そ、そうなの……？」

「………………。1つだけ聞かせてもらえますか。今、情報部の方たちはどちらに出かけているんですか？」

「………………。軍事機密だ。それでは失礼する」
そう言つて、シード少佐は要塞の中へと戻つていった。

「ちょ、ちよつとヨシユア……。なんかあからさまに怪しいっぽいんですけど？」

「わかつてる……。でも、決定的な証拠がない限り、これ以上追求するのは無理だよ」

「うっつ……………」

エステルが悔しそうに唇をかんだ。

そして、自動ゲートが閉まろうとした時、

「あれ？」

ゲートが突然止まり、半開きの状態になってしまった。

「……………どうしたんだろう？」

「な、なんだ……。どうして途中で止まったのだ？」

シード少佐の声が聞こえてきた。

「………………。なに……。また例の現象が起こつただと？」

例の現象……。これはもしかすると……！

「（ヨシユア、これって……！）」

「（ああ……。ビンゴだったみたいだね）」

そこで、シード少佐が現れた。

「み、見苦しいところを見せてしまったようだな。どうも最近、閉装置の調子が良くないみたいだね」

「なるほど、それは大変ですね」

「そんなに調子が悪いんだつたら中央工房の人に修理してもらえば？ラッセル博士みたいな人だったらすぐにでも直してくれるわよ？」
「う、うむ、検討しておこう。装置が復旧するまでここで警備をしている。不用意に民間人を近づけるな」
シード少佐は兵士に命令した。

「はっ！」

「了解であります！」

「そういう事だから君たちも気にせず行ってくれ。例の写真については必ず情報部に伝えておこう。それでは失礼する」
シード少佐は再び中に戻っていった。

第4章 黒のオープメント(22) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

手がかりが掴めないと思っていたら、思いもよらぬ手がかりをつかめたエステルたち。これをもとにラッセル博士を奪還する作戦を考える！

第4章 黒のオープメント(23)

レイストン要塞

「何だか信じられないけど……。今のって、やっぱりアレ？」

「うん……。たぶん例の現象だろうね」

「ということは……。もしかして、ラッセル博士もあの要塞の中に捕まって……！」

エステルが声を荒げた。

「(シツ、エステル……。あんまりここでそれを口に出さない方がいい)」

「(わ、わかった……)」

「(とりあえず、ツアイスに戻ってキリカさんに相談してみよう。

場合によつたら……。工房長も呼んだ方がよさそうだ)」

エステルたちは急いでギルドへと戻った。

遊撃士協会 ツアイス支部

「ま、まさかラッセル博士がレイストン要塞にいるとは……。ほ、本当に確かなのかね？」

話を聞いたマードック工房長はにわかに信じがたいといった表情をしている。なにせ一番ありえない所にラッセル博士がいると聞いたからだ。

「ドロシー嬢の写真とゲート前で起きた導力停止現象。この2つをあわせたらそう考えるのが妥当でしょうね」

「し、しかし、中央工房は長年、王国軍と協力関係を築いてきた。

にわかには信じられん話だ……」

「一口に王国軍といつても内部は一枚岩ではありませんから。工房襲撃の犯人たちが逃走時に親衛隊の恰好をしたのもそのあたりが原

因なのかもしれませんが」

「え、ということは……。もしかして……親衛隊は濡れ衣を着せられたの？」

「うん。そう考えるのが一番しっくり来る。ひよっとしたら、何らかの陰謀が軍内部で進行しているのかもしれない」

「うづむ……。なんたることだ。しかし、どうして博士がそんな陰謀に巻き込まれたのか……」

「……どうやら犯人どもの手がかりを掴んだみてえだな
いきなりアガットがギルドにやってきた。

「え……。アガット!？」

「よかった……。意識を取り戻したんですね」

「ああ、ついさっきな。起きたら見慣れない場所で寝かされていたからビビったぜ」

「まったくもう……。みんな心配したんだからね？」

「起きたばかりなのにもう動いてもいいんですか？」

「ああ、寝すぎたせいかな身体がなまってしかたねえ。とにかく思いっきり身体を動かしたい気分だぜ」

「で、でも、アガットさん。あまり無茶しちゃダメですよ。毒が抜けたばかりだからしばらく安静にして先生が……」

「だ〜から、大丈夫だって何べんも言ってるだろうが。鍛え方が違うんだよ、鍛え方が」

「う〜っ……」

ティータが絶対に譲らないとばかりに嫌な顔をした。

「う……。わかった、わかったっての！本調子に戻るまでは無茶しなきゃいいんだろ？」

「えへへ……。はいっ」

「まったく……。これだからガキってのは……」

「あはは、さすがのアンタもティータには形なしみたいね」

「ずっと付きつきりで看病してもらった身としてはしばらく頭が上がりませんね」

「あゝもう、うるせえなつ。それより、俺がくたばつてた間に色々動きがあつたみたいだな。聞かせてもらおうじゃねえか」

「うん、わかつた」

エステルたちはラッセル博士がレイストン要塞に捕われている可能性が高いことを話した。

「お、おじいちゃんがそんな所にいるなんて……」

「しかも、あの黒装束どもが軍関係者だったとはな……。フン……。正体が判つてスッキリしたぜ。キツチリ落とし前を付けさせてもらうことにするか」

アガットは拳を手のひらに叩き付けた。

「落とし前つていうと？」

「決まつてるだろう。レイストン要塞に忍び込む。博士を開放して奴らに一泡吹かせてやるのさ」

「あ、なるほど。それが一番手っ取り早そうね」

「そう簡単にはいかないわ」
「キリカが割り込んできた。」

「へっ？」

「遊撃士協会の決まりとして各国の軍隊には不干涉の原則があるわ。協会規約第三項。『国家権力に対する不干涉』……。『遊撃士は、国家主権及びそれが認めた公的機関に対して捜査権・逮捕権を行使できない』。つまり、軍がシラを切る限り、こちらに手を出す権利がないの」

「チツ、そいつがあつたか……」

「そ、そんな……。そんなのっておかしいわよ！目の前で起きている悪事をそのまま見過ごせつていうわけ!？」

エステルがむきになって反論する。

「ただし……。この原則には抜け道がある。協会規約第二項。『民間人に対する保護義務』……。『遊撃士は、民間人の生命・権利が不当に脅かされようとしていた場合、これを保護する義務と責任を持つ』。これが何を意味するかわかる？」

「なるほど……。博士は役人でも軍人でもない。保護されるべき民間人ですね」

「そ、それじゃあ……」

「あとは……。工房長さん、あなた次第ね。この件に関して王国軍と対立することになってモラツセル博士を救出するつもりは？」

「……考えるまでもない。博士は中央工房の……。いや、リベールにとっても欠かすことのできない人材だ。救出を依頼する」

マードック工房長は即断した。

「工房長さん……。あ、ありがとうございます！」

「礼を言うことはないさ。博士は私の恩師でもあるからね」

「これで大義名分は出来たわ。遊撃士アガット。それからエステルとヨシユア。レイストン要塞に捕まっていると推測されるラツセル博士の救出を要請するわ。非公式ではあるけど遊撃士協会からの正式な要請よ」

「そう来なくっちゃ！」

「了解しました」

「フン、上等だ。そうと決まれば潜入方法を練る必要があるな。何しろ、レイストン要塞といえば難攻不落で有名な場所だ」

「そうですね。実際、かなりの警戒体制でした。侵入できそうなルートがどこかにあるといいんですけど」

「残念だけど……。あそこの警備は完璧に近いわ。導力センサーが周囲に張り巡らされているから湖からの侵入も難しそうですね」

「フン……。そんな事だろうと思っただぜ」

「正攻法では難しそうですね」

「そういえば、工房長さん」

エステルが何か思いついたようだ。

「あのオレンジ色の飛行船ってレイストン要塞によく行くのよね？」

「ああ……。工房船の《ライブニッツ号》だね。資材の搬入や設備の点検で定期的に要塞に行っているが……」

「だったら、それに隠れて要塞に潜入するってのはダメ？」

「いや、基地に降りたクルーは全員チエックを受けるんだ。勝手に抜け出して行動するのは不可能に近いだろう……」

「ということは、積荷にまぎれて忍び込むのも無理か？」

「ああ、生体感知器によつて1個1個のコンテナが調べられる。この感知器というのがラッセル博士の開発したものでね。ネズミ1匹たりとも見逃さない優れ物なんだ」

「うーん、やっぱりダメかあ……」

「……あ……」

ティータが何か気づいたようだ。

「ん、どうしたの？」

「お姉ちゃん、覚えてない！？お姉ちゃんたちを案内した時、おじいちゃんが作つてた発明品！」

「あたしたちを案内した時……。……ああっ！」

「そうか……。僕たちも実験を手伝つたあの新型オーブメントだね」
「うん、それだよ！あの装置、生体感知器の走査を妨害する導力^{フィールド}場を発生するの！起動テストもしてあるから大丈夫……。ちゃんと動かせるよ！」

「なに……。本当か！？」

「まったく博士ときたらいつのまにそんなものを……。その装置はどこにあるのかね？」

「えと、たぶん研究室のどこかに置きっぱなしになってると思います」

「なら、あなたたちは急いでその装置を取ってきて。その間に、レイストーン要塞の詳細なデータを用意しておくわ」

「わかった、頼むぜ」

「工房長さんは、工房船の手配をよろしくお願いするわ」

「りよ、了解した。グスタフ整備長に相談しよう。準備が済んだら飛行場まで来てくれたまえ！」

マードック工房長は急いで工房船の手配に取り掛かった。

エステルたちはその間に装置を探しに向かった。

ラッセル工房

「さてと……あの装置を探さなくちゃ。どこらへんにありそうかな？」

「えとね、研究室の隅っここが研究室の2階の書斎にあると思うの。おじいちゃん、発明した物はわりと放りっぱなしにしちゃうから」「なんか、えらく変わり者の爺さんみたいだな。まあいい。とつととそいつを探し出すぞ」

エステルは研究室の2階で装置を発見した。

「あつた、あつた」

「確かに僕たちが実験を手伝ったオーブメントだね。どう、ちゃんと使えそうかい？」

「うん……大丈夫。うまくやれば、生体感知器を完全にこまかすことができるよ」

ティータは装置を調べて言った。

「よし、とつととギルドに戻るぞ。キリカが、レイストーン要塞のデータを揃えてくれていたはずだ」

エステルたちはギルドへと向かった。

遊撃士協会 ツァイス支部

「キリカさん。装置、取ってきたよ！」

「こちらも準備はできている。ちなみに、これから見せる物は他言無用をお願いするわ」

キリカはエステルたちに何やら図面のようなものを渡した。

「へッ、なかなか良いものを持つているじゃねーか」

「これは……レイストン要塞の概略図ですか」

「うわあ……。すごく広いんですね。このどこかにおじいちゃんが……」

「でも、こういつのって軍事機密なんじゃないの。どうしてギルドにあるわけ？」

「蛇の道は蛇つてね。とあるルートから入手したの。遊撃士協会わたしたちには、こういう面もあることを覚えておきなさい」

「う、うん……」

「言うまでもないけど今回のケースはかなり特殊よ。本来、王国軍とギルドの関係は他国のそれと比べても友好的なの。遺恨を残さないためにも兵士との交戦は極力避けること。特にアガット……いいわね？」

キリカはアガットを睨んだ。

「フン、仕方ねえな。だが、あの黒装束の連中は立ち塞がったら容赦しねえぞ。軍人だろうがなんだろうが犯罪者には違いないんだからな」

「好きにしなさい。ただし死なない程度でね」

キリカさん、そこはオーケーですか？

「エステル、ヨシユア。本来ならば準遊撃士のあなたたちにこんな仕事は任せたくないけど……」

「ちよ、ちよっと！そんなのってないわよ！」

「乗りかかった船です。どうかやらせてください」

「……と思ったから反対するのは止めにするわ。ちなみに、あなたたちはツァイス支部の監督下にある。万が一のことがあってもわたしが責任を取るから安心なさい」

「キ、キリカさん……」

「すみません……。ご迷惑をおかけします」

「それから……ティータ。遊撃士でないあなたにこう聞くのもなんだけど……。決心は変わらないのね？」

「あ……。はい！」

「え、え？それってどういうこと？」

「もしかして……」

「あ、あのね……。この装置を動かせるのはたぶんわたしだけだと思っの。だから……。わたしもお姉ちゃんたちと一緒に行くよ」

「ええっ!？」

「たしかに、複雑そうなオーブメントだったけど……」

「ごめんなさい……。わたし、迷惑にならないようちゃんと付いていくから……」

「……ふざけんな。こら、チビスケ……。そんな話は聞いてねえぞ

……。こんなヤバイ仕事にガキを連れて行けるわけねえだろうが!」
「で、でもでも……。わたしがやらなかったら装置が動かせないですし……」

「だったらそんな方法はハナツから却下だ、却下!別の潜入方法を見つければいいぞ!」

「……。あんたねえ。いいかげんにしなさい

よ。なに、意地を張ってるわけ?」

「なにい……?」

「ティータも覚悟して協力するって言ってるでしょ。それに協力してくれたらあたしたちも潜入しやすくなる。それって、博士を助け出す可能性も上がるってことよね?この期に及んで反対する余地がどこにあるってゆーのよ?」

「てめえ……。民間人を、しかもガキを危険にさらせると思ってるのか?」

「そうならないようにあたしたちが守ればいいじゃない。それが遊あ撃士たしたちの仕事でしょ?」

「クツ……。たかが新米ごときが偉そうなことを抜かしやがって……」

「……。新米、ベテランはこの際、関係ないと思います。大切なものを守りたいという気持ちも遊撃士だけのものじゃありません。むし

る、そういう気持ちを支えるのが僕たちの仕事じゃないんですか？」

「お姉ちゃん、お兄ちゃん……。あ、あの、アガットさん。ごめんなさい、困らせちゃって……。でも、わたし、おじいちゃんが大切だから……。ぜったいに助かってほしいから……。だから、自分ができることがあればできる限りのことがしたいんです」

「それに、アガットさんがわたしを助けてくれたように……。わたしも、お姉ちゃんや、お兄ちゃんや、アガットさんの力になりたいんです……。ぜったいに無理はしません……。ちゃんという事も聞きますから……。だから……。どうかお願いしますっ！」

「ティータ……」

「そうか……。そこまで考えてくれたんだね」

「……。フン、判っちゃいねえな。力になる以上に足手まといになりそうだから付いてくるなと言ってるんだ」

「あつっ……」

「だがまあ、他に潜入方法がなさそうなのも確かだから……。気は進まねえが……。本当に気は進まねえが、今回だけは特別に認めてやるよ」

「あ……。ありがとう、アガットさん！」

「礼を言われる筋合いはねえ。足手まといになったりしたら容赦なく見捨ててやるからな。覚悟しとけよ」

「は、はいっ！」

「まったくもう……。いちいち偉そうな男ねえ。素直に認めてあげなさいよね」

「まあまあ、エステル。アガットさん、照れ隠しに憎まれ口を言ってるだけだから」

「う、うるせえぞ、てめえら！」

「クスクス……」

「フフ……。話がまとまって何より。そろそろ工房船の準備が済ん

でいる頃でしょう。準備が済み次第、飛行場に向かうといいわ」

「うん、わかった!」

「じゃあな、キリカ。軍への対応は任せませ」

「ええ、問い合わせが来ても適当にあしらっておく。女神エイドスの加護を。くれぐれも気を付けて」

エステルたちは飛行場へと向かった。

第4章 黒のオープメント(23) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

レイストン要塞に乗り込むことを決めたエステルたち。次回より緊迫した潜入計画が始まる！

第4章 黒のオーブメント(24) (前書き)

レイストン要塞潜入編 第1話です。

第4章 黒のオープメント(24)

ツァイス発着場

発着場ではマードック工房が待っていた。

「おお、待っていたよ。そちらの準備は済んだのかね」

「ああ、いつでも行けるぜ」

「《ライブニッツ号》の準備はできていますか？」

「ああ、運がいいことに軍から急な発注があつてね。ちょうどレイストン要塞に出発する予定だったんだ。いつでも離陸できるそうだよ」

「いつでもって……。あのオレンジ色の船、どこにも見当たらないんだけど……」

エステルが周りを見渡すが、ライブニッツ号は見当たらなかった。

「エステル、下だよ」

ヨシユアが後ろ側を指した。

「あつ、あんなところに……。じゃあ、あそこまで降りていく必要があるんだ？」

「ふふつ、お姉ちゃん。降りる必要なんてないよ」

「へ……」

その時、飛行場から何やら音が聞こえてきた。

「な、なに……！？」

「飛行場のレーンが……！」

「なんだ、知らなかったのか？この飛行場は、とんでもなく常識はずれの造りをしてるんだぜ」

「じよ、常識外れ？」

エステルがそう言うと、飛行場のレーンが移動して自分たちの目の前で停止した。

この飛行場のレーンは可動式だったのだ。

「なんていうか、大抵のことには慣れっこになったけど……」

「うん、極めつけの大仕掛けが残っていたね」

「ちなみに、この飛行場の仕掛けも……」

「わかってるわよ。ラッセル博士なんですよ。ティータ。あんたのお祖父ちゃんってホント、とんでもないヒトねえ」

「えへへ……。それはわたしも同感」

「よう、待たせちまったな」

「あ、整備長さん！」

ライブニッツ号からグスタフ整備長が現れた。

「ティータ坊。話はぜんぶ工房長に聞いたぜ。まさか、ラッセル爺さんがそんなことになっちまうとはなア。及ばずながら、俺たち整備屋もとことん手伝わせてもらうからな」

「あ、ありがとーございますー！」

「すまねえ、世話になる」

「いいってことよ。爺さんは俺にとつても恩人だ。さアて。こちらの準備はオツケーだ。レイストン要塞に出発するかよ？」

「うん、お願いしちゃうわ」

「よし！ だったら乗った乗った！ 工房船、《ライブニッツ号》、レイストン要塞に出発するぜ！」

「遊撃士諸君……。博士のこと、よろしく願います。それから……ティータ君を守ってあげてくれ」

「工房長さん……」

「うん、どーんと任せて！」

「それでは行ってきます」

エステルたちが乗り込むと、すぐに《ライブニッツ号》は出発した。
「頼んだぞ、遊撃士諸君……」

工房長は行く末を見守った。

「ま、待ってえ〜！」

その時、ドロシーが飛行場に駆け込んできた。

「はあはあ……。ああ……。行っちゃった……。……」

「おや……。ドロシー君じゃないか」

「あ、工房長さん！今の船に、エステルちゃんたち乗っていたんですよね？」

「そうだが……。どうして知っているのかね？」

「ギルドの受付で教えてもらったんですよう。編集部と連絡をとったら大変なことがわかったんで知らせなくちゃって思ってた」

「た、大変なことだって？うーん、今のこの状況よりも大変なことなんて想像もつかないが……」

「えっと……。これはオフレコなんですけど。王都にいた親衛隊の人たちが反逆罪で捕まったらしいです」

「な、なんだって！？」

あまりの衝撃的な情報にマードック工房長は驚いた。

第4章 黒のオープメント(24) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ王国内で波乱の波が起こり始めた。しかし、エステルたちはそれを知る由はない。

第4章 黒のオーブメント(25) (前書き)

レイストーン要塞潜入編 第2話です。

第4章 黒のオープンメント(25)

ライブニッツ号

「こいつが、お前さんたちに隠れてもらうコンテナだ。4人で隠れるには狭いと思うが、ま、カンベンしてくれや」

「そう？結構大きそうな気がするけど」

「それがよく、偽装するから空いたスペースは半分もねえんだ。わはは、ちよっとした押しくらまんじゅうになるだろうな」

「なるほど、そりゃ狭そうだな」

「大丈夫、姿勢を工夫すれば隠れるだけの広さはあるよ」

「充分だ。贅沢言ってる場合でもねえしな。そうだ、オッサン。戦術オープンメント用の設備はあるか？少し調子が悪いんで調整しておきたいんだが……」

「ああ、工房設備があるから勝手に使ってくれて構わねえぞ」

「あ、わたしも感知妨害器を調整するから一緒に行きます。アガットさん、こっちです」

「あ、ああ……」

アガットとティータは先に調整に行ってしまった。

「レイストン要塞まで30分くらいのフライトだ。コンテナの偽装をしとくからそれまで適当に休んでくれや」

「うん、わかったわ」

「よろしく願います」

エステルたちは、レイストン要塞に着くまで準備をすることにした。

整備室

「それじゃあ、アガットさんの戦術オープンメントを見せてください。簡易測定器を使って、どこが悪いかちょっと調べてみますから」

「ああ、コイツだが……。しっかしお前、機械を見るとすぐに目の

色変えるのな」

工房船 外

「うわ、高いわね。飛行船に乗るの、けっこう久しぶりかも」

「そうだね。空賊艇に忍び込んだときは景色を見る余裕は無かったし。あの時と状況は似ているけどはるかに危険度は高いと思う……。気を引き締めてかからないと」

「うん……わかってる。でも、平和なりべールでこんな事件が起きるなんて……。あたし、何か大きなことが動き始めているような気がする」

「僕もそう思う。空賊たちや、ルーアン市長の背後にはあの黒装束たちがいた。だから、彼らの正体が判れば何か重要な事が掴めるかもしれない。ひよつとしたら……父さんが居なくなつた理由もね」

「そつか……。よし、博士を助けるついでにそのあたりも探ってみなくちゃね！」

整備室

「うんしょつと。はい、これでいーです。スロットの接続部分の金具が緩んでいたみたいですね」

「つたく……おせっかいなガキだな。その程度の調整だつたら俺でも出来るつてのによ。でもまあ、礼は言つとくぜ」

「ふふ……。どーいたしまして。あ、そういえば……。身体の方はもう大丈夫ですか？気持ち悪くとかなつてませんか？」

「ああ、大丈夫だ。本気で心配はいらねえよ。人の心配するくらいだつたら自分のことをまず心配しとけ。今だつたらまだ引き返せるんだぞ？」

「わ、わたし……」

「つと、勘違いすんな。今さら来るなとは言わねえよ。ただ……お

前、怖くねえのか？」

「ふえっ？」

「爺さんのためとはいえ、軍事施設への不法侵入だ。いくらガキでも、その重大さがピンとこない歳じゃねえだろ？どうして、そんなにノホホンとしてられるんだ？」

「えっと、その……。ホントのこと言うと怖くてたまらないんですけど……。でも、エステルお姉ちゃんとヨシユアお兄ちゃんがいるし……。それにアガットさんがいるから……。怖いっていう以上に安心できるような感じなんです。えへへ……。わたし、ちょっと二ブイのかも」

「……。フフン。ちょっとじゃなくて、かなりだろ。どうやら心配するだけ時間のムダだったみてえだな」

「えへへ……。ごめんなさい。……。あ、あの

……。ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんだよ、やぶからぼうに？」

「えと、その……。ミーシャさんって、誰なのかなって

それを聞くと、アガットの表情が一変した。

「……。なんでその名前を知ってる？」

「あ、あのあの……。アガットさんが毒でうなされてる時にわたしのことをそう呼んで……。……。ごめんなさい。聞いちゃいけませんでした？」

「いや……。隠すほどのことでもねえしな。ミーシャってのは、俺の妹だ」

「わあ、アガットさんってお兄ちゃんだったんですか？妹さんっていくつなんですか？やっぱり、わたしよりも年上？」

「いや……。そうだな。ちょうどお前と同じくらいの歳だったはずだ」

「????？」

アガットのはつきりしない言い方にティータは疑問を覚えた。

「えっと、ふだん妹さんとあんまり会っていないんですか？」

「まあ、こつこつ職業だからな。年に一度、里帰りした時に顔を見

せる程度かもしれないな」

「そうなんだ……。……ミーシャさん、ちょっと可哀想……」

「な、なんでだよ？」

「だって……。わたしにお兄ちゃんがいたらいつも一緒がいいなって思うし……。とにかく、わたし、ミーシャさんに同情しちゃいます」

「そ、そうか……。でもまあ、確かにそうだな。もっと俺がしっかりしてれば一緒にいてやれるんだが……」

「え……？」

その時、船内にアナウンスが流れた。

「当飛行船はまもなくレイストン要塞に到着します。遊撃士の方々は至急、船倉エリアに集まってください」

「っと、そろそろ時間か……」

「あ、いたいた」

エステルとヨシユアが整備室にやってきた。

「あ、お姉ちゃんたち……」

「アナウンス、聞いたでしょ。そろそろ到着するみたいよ」

「準備が済んでいるんでしたら一緒に船倉に行きませんか？」

「ああ、俺の方の準備はいいぞ」

「ティータの方は装置の調子はどうだった？」

「うん、バッチリだよ。タイミングのテストもしたし。よっぽどの事がない限り、生体感知器をごまかせると思う」

「おっと。頼もしいセリフじゃない」

「期待してるよ、ティータ」

「うん！」

「よし、それじゃあとっと船倉に向かうとするか」

エステルたちは船倉へと向かった。

第4章 黒のオープメント(25) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回、レイストーン要塞に潜入開始！無事、見つからずに潜入に成功できるか！？

第4章 黒のオーブメント(26) (前書き)

レイストン要塞潜入編 第3話です。

第4章 黒のオープメント(26)

ライブニッツ号 船倉

「おお、来たか」

「準備、終わったみたいね？」

「コンテナの偽装は完了だ」

グスタフ整備長はコンテナを叩いた。

「普通のフタを開いても船殻修理用の特殊プレートが入っているようにしか見えないが……」

グスタフ整備長が別の側面を指し示した。

「こちら側にもうひとつ隠しトビラがあるってわけだ」

もう一方は見事に外から見ただけではわからない隠しトビラになっていた。

「へえ、よく出来てるわね」

「たしかにこれで生体感知器を無効化できたら何とか潜入できそうですね」

エステルたちは感心した。

「さアて、あとはお前たちがこの中に隠れるだけだが……。心の準備はできてるか？」

グスタフ整備長が真剣な顔つきでエステルたちに尋ねた。

「もちろん！」

「いつでもオーケーだ」

「よし、それじゃあ1人ずつ順番に入るんだ。全員入ったら隠しトビラを閉めるからな」

「了解しました。じゃあ、まずは僕から……」

ヨシユアが初めにコンテナに入った。

「ほんと狭そうね。ピツタリくっつかないと……。……」

エステルの顔が赤くなった。

「……………？エステル、どうしたのさ？」

「な、なんでもないっ！」

続いてエステルが入った。

「んしょつと……………」

「エステル。頭はそつちに向けて」

「オツケー……………あつ……………。ちよ、ちよつとヨシユア……………。

この体勢、どうにかならない？」

「が、我慢してよ。こうしないと4人全員が入るなんて無理なんだから」

「そ、そつか……………。そうね、仕方ないよね」

中は相当狭そうだ。

「コホン……………。次はティータで、最後にアガットさんかな。そうすれば何とか、4人全員入りきれれると思う」

「うん、それじゃあ入るね」

ティータがコンテナに入った。

「んしょつと……………。お姉ちゃん、ごめんね」

「わあ、ティータ。あつたかくて柔らか〜い。んー、なんだかミルクみたい匂いもするし」

「お、お姉ちゃん……………。そんなに強く抱き締めないで。ちよつと苦しいよう」

なにをやってるのだから、エステルは。

「ふつふつふ……………。まあ、よいではないか。うーん。ぷにぷにのホッペじやのう」

「やあん」

「エステル……………遊ばないの」

「やれやれ……………。無性に不安になってきたぜ。こら、ガキども。もうちよいスペース空ける」

アガットが強引にコンテナの中に入った。

「あう……………」

「つと……………きついか？」

「う、ううん。だいじょーぶです。ガマンできますから……」

「無理すんなよ。キツくなったらそう言え」

「あ、はいっ」

「よし、オッサン。こっちはいつでもいいぜ」

「わーった。隠しトビラを閉めるぜ」

グスタフ整備長は隠しトビラを閉めた。

「着陸したらすぐにコンテナを搬出する。揺れるとは思うが、しばらく我慢してくれよ」

続いてコンテナの正面のトビラを閉めた。

レイストン要塞

「よお、シード少佐。注文通りに届けに来たぜ」

「やあ、グスタフ整備長。わざわざ来てくれてすまない。しかし、こんなに早く来てくれるとは思わなかったよ」

「王国軍はお得意様だからな。このくらいのサービスは当然だ。それにしてもずいぶん急な注文だったなア。この前の警備艇の整備といい、なにか事件でもあったのかよ？」

「い、いや……。まあ、軍にも色々あってね。そうだ、中央工房の襲撃事件についてだが……。重要な手がかりを掴んだので数日中には解決するだろう」

「ほう……。そりゃよかった。掠われたラッセル爺さんは俺にとつては大の恩人だね。まさか傷つけられているようなコトにはなっただねえだろうなア？」

グスタフ整備長はシード少佐を睨んだ。

「い、いや……。それはないから安心してくれ」

「ほう、何でわかるんだい？」

「犯人たちは、博士を人質に身代金を要求しているらしい。無事は確認されているからどうか安心して待っていてくれ」

「なるほどねエ……。ま、王国軍に任せておけば何の心配もいらなさそうだな。で、今日もコンテナのチェックをするつもりかい？」
「信頼はしているがこれも規則なのでね。お前たち、さっそく始める！」

シード少佐は兵士にコンテナのチェックを命じた。

「ラジャー！」

「了解しました！」

兵士はすぐに生体感知器でチェックを始めた。

「異常なし、次……」

「……OKです」

次々とチェックをする兵士たち。そして、急に生体感知器が反応した。

「センサーに異常あり！生体反応です！」

「なんだと……！？整備長……これは？」

「お、おいおい。別に心当たりはねエぞ。装置の故障じゃねえのか？」

「そんなはずはない……。中央工房に発注した特別製の生体感知器だ」

「だったらあれだ。ネズミかなんかだろ。そんなに大騒ぎすることないんじゃないのか？」

「……これも規則なのでね。お前たち！そのコンテナを取り囲め」

コンテナは銃を構えた兵士4人で取り囲まれた。辺りに緊迫した状況が張りつめた。

「よし……開ける」

兵士の1人がコンテナを開けた。

コンテナの中にいたのは……猫だった。

「は……？」

シード少佐や兵士は拍子抜けした。

「なんだよ。アントワーヌじゃねえか。お前、いつの間に紛れ込んでやがったんだ？」

「にゃーお」

「そ、その猫は……?」

「アントワーヌってえ名前ですら中央工房に住んでいるヤツだ。どうやら『ライブニッツ号』に忍び込んでいたみてえだな」

「まったく驚かせてくれる……。こら、お前。人騒がせにも程があるぞ」

「にゃおん?」

「まあ、猫の気まぐれを責めても致し方ないか……。お前、気に入ったのならしばらくここに住んでみるか?」

「おいおい。アントワーヌを誘惑するなよ」

「ふみやああ……。にゃおん」

アントワーヌは『ライブニッツ号』に戻っていった。

「むむ、フラれてしまったか」

「はは、残念だったなア。しかし、その生体感知器、ずいぶん大した代物じゃねえか。あやうくアントワーヌを閉じ込めたままにするところだったぜ」

「ああ、さすがは中央工房製の機械だ。……それではお前たち。残りのコンテナをチェックしろ」

「了解しました!」

レイストン要塞 夜

「お前たち、ご苦労だった。コンテナの搬入は明日にして今日はもう兵舎に戻るがいい」

「あ、あの、少佐殿……。ここ数日の非常体制ですがいつまで続くのでしょうか?」

兵士の1人がシード少佐に尋ねた。

「……………」

「そ、そうです!どうして我々正規軍があんな連中の言いなりに……」

…」

もう1人の兵士もここぞとばかりに尋ねた。

「お前たちの言いたいことは分からないでもない……。だが、上官の決定に疑問を差し挟むのは軍人の役目ではない。それに、どこに目があり耳があるのかわからんだ。不用意な発言は慎むがいい」

「は……」

「りよ、了解しました」

兵士は兵舎へと戻っていった。

「ふう……。後ろめたいものだな……」

シード少佐はため息をついた。

「少佐殿、申し上げます！」

そこに王国軍士官がやってきた。

「カノーネ大尉が話したいことがあるから来てくれとのことですよ」

「そうか、わかった。仕方ない……。雌狐の話聞きに行くか」

シード少佐はうんざりとした表情で発着場を後にした。

誰もいなくなつた発着場でコンテナが開いた。

「は……。さすがにつらかつた……。ティータ、大丈夫だった？」

「うん、ちよつとだけ頭がボーッとなつたけど……。でも、ちゃんと装置を動かすことができてよかった」

「ああ、大したもんだ。散々反対したが……。来てもらって正解だったな」

「えへへ……。ありがとう、アガットさん。でも、アントワーヌにはビックリさせられちゃいました」

「うんうん、ちょうど隣のコンテナだったもんね。完全にバレたと思っちゃった」

「あの猫、整備長さんがわざと入れたんだと思うよ。あれがあつたせいで兵士の警戒も緩まつたからね。本人、落ち着き払ってたし」

「ふふ、整備長さんならそれくらいやつちゃうかも」

「なかなか喰えないオツサンだぜ。さてと……。それじゃあ行動開始といくか」

アガットがレイストーン要塞概略図を取り出した。

「俺たちがいるのは飛行船発着場　　このあたりだ」

アガットが飛行船発着場に印をつけた。

「やみくもに搜したところで博士を発見できるとは思えねえ。そこでエステル……。地図から見当をつけてみるや」

「えっ？ど、どうしてあたしに聞くのよ？」

いきなり名指しされて慌てるエステル

「なに、ギルドの先輩として洞察力をテストしてやるうと思っただけ。時間がねえんだからとつとと答えるや」

「仕方ないわね……。うーんと、中央の研究棟かな？」

「ほう……。驚いたな」

「ふふん、任せないっての」

「調子に乗るなっつーの。ヨシユア。お前の意見はどうだ？」

「僕もそこが怪しいと思います。独立した敷地内にあるし、博士の才能を利用してはいるならうってつけの場所ですから」

「ま、そういうことだ」

アガットが研究棟に印をつけた。

「時間もないことだし、まずはここを調べてみるぞ」

「アガットさん。脱出のルートはどうしますか？」

「おっと、そうだったな。この発着場の反対側に湖に出る波止場があるみてえだ」

アガットは波止場に印をつけた。

「爺さんを救出したい、ここから船を奪って逃げるぞ」

「うん……。わかったわ。それじゃあ、この研究棟に向かいますよ。ティータ。あたしたちから離れないでね」

「う、うん……。！」

エステルたちは研究棟へと急いだ。

第4章 黒のオープメント(26) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

無事、レイストーン要塞に潜入できたエステルたち。ここからが正念場の救出劇が始まる！

第4章 黒のオーブメント(27)(前書き)

レイストン要塞潜入編 第4話です。

第4章 黒のオープメント(27)

レイストーン要塞 研究棟前

「あ……！」

「あいつらは……」

研究棟前には、紅蓮の塔で見た飛行艇があり、黒装束の男たちがいた。

「へっ……。やっぱりいやがったか」

「塔に現れた飛行艇……」

「やっぱりあいつら軍の関係者だったのね……。普通の兵士とはずいぶん違うみたいだけど……」

「たぶん、破壊工作の訓練を受けた特殊部隊だろう。どつりで手強いわけだよ」

「お、おじいちゃん、あそこに捕まっているの？」

「ああ、いよいよその可能性が高くなってきた。だが……ここでやり合うのはマズいな」

「そうですね……。下手に騒ぎを起こしたら要塞中の兵士が駆けつけてくると思います」

「何とか見つからずに建物の中に入れないかな？」

エステルたちは研究棟の周りを探ることにした。

研究棟の窓に注目したエステル。

「ねえねえ。ここから中に入れないかな？」

「いや……窓に鉄格子がはまっている。音を立てずに侵入するのはちょっと難しそうだな……」

「……あっ！」

「こいつは大当たりだぜ……」

ティータとアガットは何かに気付いたようだ。

「え……」

「ラッセル博士。本当にありがとうございます。よくぞ、この《ゴスペル》の制御方法を突き止めてくださった。情報部を代表して感謝しますよ」

そこにいたのは、まさかのリシャール大佐だった。同時にカノーネ大尉とシード少佐がいた。

「ふん……。やはり貴様が黒幕じゃったか。情報部指令、リシャール大佐……。たしか貴様もカシウスの元部下だったか？」

「おお、そういえば博士は彼と交友があつたのでしたね。カシウス・ブライトの行方は我々も捜しているのですがいまだ突き止められなくてね。心当たりがあるのなら教えて頂きたいものですが……」

「知らん。知ったところで教えるものか」

「フフ……。まあいいでしょう。もし、この《ゴスペル》が彼の元に届けられていれば困ったことになっただろうが……。今さら彼が現れたとしてもこの流れを止めることはできない」

「《黒の導力器》……。いや、《ゴスペル》とか言つたか……。貴様ら、それを使つて何をしでかすつもりじゃ？ いや、そもそも……。そんな得体のしれない代物をいつたいどこから手に入れた？」

「ある筋からと申し上げておこう。我々の目的は……。まあ、すぐに明らかになりますよ。それが分かつた頃には博士を解放して差し上げますからそれまでゆっくりなさってください」

「貴様らの悪事を知る者を平気で解放しようとするとは……。よっぽど大それたマネをしでかすつもりらしいな？」

「ハハ、想像にお任せしよう。しかし事が成つたあかつきには個人的に、博士の研究を援助させていただくつもりです。新たな発明で、このリベールをより豊かにして頂くためにね……」

「けっ、お断りじゃい」

「博士。あまり聞き分けのないことをおっしゃらないでくださいな。博士のお孫さんに万が一のことがあつた時に助けてあげられません

わよ？」

そこでようやくカノーネ大尉が口を開いた。

「こ、小娘が……。またそれでわしを脅すか……!!」

「やれやれ、カノーネ君。君の交渉のやり方は、いささか優雅さに欠けるのではないかね？」

「うふふ……失礼しました」

「彼女は、どうも特殊なユーモアセンスの持ち主でね。誤解して欲しくないのですが我々はみな、国を憂える一介の軍人に過ぎないのです。民間人を巻き込むつもりは一切ないと誓っておきましょう」

「憂国の土気取りか……。そして、あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオーブメント……。なるほど、貴様らの目的、何となくじやが見えてきたわい」

「ほう……」

「……失礼する」

そこに、仮面の隊長が現れた。

「あら少尉。大佐は博士とご歓談中なの。邪魔するものではなくてよ」

「いや、構わんよ。ロランス君、報告したまえ」

「^{グランセル}王都で動きがありました。大佐の読み通り、白き翼が網にかかった模様です」

「それはそれは……」

「フフ……。これでチェックメイトだな。それでは博士。我々はこれで失礼します。シード少佐。博士が不自由のないように気を配ってくれたまえ」

「は……了解しました」

リシャル大佐、カノーネ大尉、仮面の隊長こと、ロランス少尉が出て行った。

「ラッセル博士……何か入用のものはありますか。大抵のものなら揃えさせますが」

「ふん、結構じゃ。お前さんは、連中と違って骨のある男と違って

おつたが……。どうやらわしの買いかぶりだったようじゃの」

「……恐縮です。博士は、ある反逆者によって誘拐されたことになっていきます。それを踏まえて頂ければお孫さんへの手紙など届けさせていただきますが……」

「早くわしの前から消えろ！」

ラッセル博士が頭にきたようだ。

「……失礼します」

シード少佐も研究棟を後にした。

「リシャール大佐……あの人が黒幕だったんだ。しかも父さんのことを捜しているみたいだけど……」

「ああ……どういふことなんだろう。それに、あの仮面の男……」

「あの野郎……やっぱり出やがったか。むっ、行くみたいだな……」
研究棟の前にあつた飛行艇にリシャール大佐たちが乗り込んでいた。

「フツ……うまく切り抜けられるかな」

ロランス少尉が誰にともなく言った。

そして飛行艇がレイストーン要塞を飛び立った。

「よし……一気に人気ひとけがなくなつたな。ヤツとは決着を付けたかつたが、まあいい、仕事の方が優先だ」

「窓から入れない以上、見張りを倒すしかないわね。速攻でケリをつけましょー！」

「う、うんっ！」

「……………」

ヨシユアは飛行艇が飛び立っていった方向をずっと見つめていた。

「ヨシユア？ちよつと、聞いているの？」

「あ……エステル？」

「だ、大丈夫？ヨシユアお兄ちゃん……」

「おいおい、勘弁しろよ。クールなお前らしくもねえ」

「す、すみません。少しボーツとして……」

「ヨシユア……どこか調子でも悪いの？」

「大丈夫、問題ないよ。入口を守っている見張りを倒すんですよね？」

「ああ……とつとと始めるぞ」

第4章 黒のオーブメント(27) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

黒幕は以外にもリシャール大佐だった！そして、博士を救出するため、研究棟に殴り込む！

第4章 黒のオーブメント(28) (前書き)

レイストーン要塞潜入編 第5話です。

第4章 黒のオープメント(28)

研究棟前

黒装束の男たち2人が研究棟の前で見張りをしていた。しかしどうやら、見張りなんてやってられないといった感じだった。

「はあ、せっかく王都で大きな作戦があるのに……。こんなところで爺さんの見張りなんてな」

「ぼやくな、ぼやくな。王国のため、そして理想のため大佐の手足となって働くこと……。それが情報部の隠密隊員、《特務兵》の使命なんだからな」

「フン、てめえらそんな大層な肩書だったのかよ」

「なに……。？」

黒装束の男たちが振り返った目の前にはエステルたちがいた。

「ば、馬鹿な……。！」

「アガット・クロスナー!?」

「遅ええっ!」

エステルたちは黒装束の男たちに突撃した。

「ケツ……。ざまあ見やがれ。散々コケにしてくれた借りは返してやったからな」

アガットは気を失った黒装束の男たちに向かって吐き捨てた。

「個人的な恨みが入りまくってるわね」

「ここからは時間との勝負だ。一刻も早く博士を連れて脱出しよう」

「はいっ!」

エステルたちは研究棟の中に入った。

研究棟

「また来おったか……。いい加減にせい！何もいらんと言ったじゃろ……」

振り返りながら怒鳴った先にはエステルたちが。

「お、おじいちゃん……」

「テイ、ティータ！？はて……わしは夢でも見ておるのか？」

「おじいちゃんああん！よ、よかつたあ……。無事でいてくれてえ……」

……。うつつうつつ……。うわああああああん！」

ティータはラッセル博士に抱きついた。

「こりゃ、どうやら夢じゃないようじゃな。それにお前さんたちは……」

「やつほー、博士。わりと元気そうじゃない？」

「マードック工房長の依頼で博士の救出に来ました」

「なんと……。ここに潜入したのか。さすがカシウスの子供たち……。常識外れなことをするのう」

「よお、爺さん。悪いがとっとと脱出の準備をしてくれや。あんまり時間がないんでね」

「なんじゃ、お前さんは？ガラの悪そうな若造じゃの。ニワトリみたいな顔をしておって」

「ニ、ニワ……。あんだと、このジジイ！？」

「あはは、博士ってばうまいことを言うわね！」

「お、おじいちゃん。失礼なこと言っちゃダメだよ。この人はアガットさん。ギルドの遊撃士さんでお姉ちゃんたちの先輩なの」

「ほう、お前さんも遊撃士じゃったか。そういや前に、カシウスから聞いたことがあるのう。いつも拗ねてばかりいる不良あがりの若手がおると」

「あ、あんのヒゲオヤジ……！」

「まあまあ、アガットさん。博士も、詳しい話は後にして急いで脱出の準備をしてください。何か持っていくものはありますか？」

「そうか……。ならば、《カペル》の中核ユニットを運んで行って
くれんか？ 下手に置いていったらまた連中に悪用されそうじゃ」

「わかりました」

ヨシユアは演算オーブメントの《カペル》を機械から外した。

「わしはそいつを使って《黒の導力器》の制御方法を研究させられていたんじゃ。構造そのものは解析できなかつたが、データと制御方法は弾き出してしまった。これで連中は、いつでも好きな時に例の現象を起こすことができるじゃろう」

「そっか……」

「すまん、エステル、ヨシユア。せつかくお前さんたちが届けてくれた品物じゃったのに……」

「どうか気にしないでください。ティータの身の安全を盾にされたら従うしかないのは当然でしょう」

「むしろ、あたしたちの方が博士たちを巻き込んだみたい」

「だーっ！ ウダウダ言ってるヒマはねえ！ 準備もできなし脱出するぞ！ 爺さんは、ギックリ腰にならない程度に急ぎやがれ！」

アガットは場の雰囲気になんか耐えかねたようだ。

「フン、言いおつたな……。まだまだ若いモンに負けん所を見せてくれるわ！」

張り合うアガットとラッセル博士。

「も、もう、2人とも……」

エステルたちは脱出するため、予定通り波止場へと向かうことにした。

第4章 黒のオープメント(28) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ラッセル博士を救出したエステルたち。このままレイストーン要塞を脱出しようとするが……。

第4章 黒のオーブメント(29) (前書き)

レイストン要塞潜入編 第6話です。

第4章 黒のオーブメント（29）

研究棟前

エステルたちが中庭に出ると、先ほどエステルたちに気絶させられた黒装束の男の1人が目を覚ました。

「う……………く……………。このまま逃がすものか……………」

そして、身に着けていた警報作動装置のスイッチを押して、そのまま再び気絶した。

中庭

「あ……………これって!？」

「バレたようじゃの!」

中庭ではシード少佐が兵士たちを招集していた。

「どうやら侵入者が現れたようだ! 犬どもを下げて搜索を開始する

! 第1、第2、第3、第4小隊は飛行船発着場および波止場を封鎖

! 第5、第6、第7小隊はそれぞれ兵舎・監視塔・研究棟を搜索!

第8小隊は、私と共に司令部へ! 以上! 行け!

「イエス・サー!」

兵士たちは各自持ち場へと移動を開始した。

陰からエステルたちが様子をつかがっていた。

「まずっ……………。兵士たちが来るわ!」

「発着場と波止場を押さえられたみたいだね……。あの少佐、なかなか鋭いな」

「ふん……。さすがは本拠地を守る守備隊長か」

「ど、どうしよう……。どこから逃げればいいのかな？」
「ティータがあたふたする。」

「こうなった以上、波止場から逃げるのは難しそうだな……。兵士どもをかわしながらなんとか脱出ルートを探すぞ！」

エステルたちは身を隠せるところから調べた。
そして、エステルたちは司令部に逃げ込んだ。

レイストン要塞 司令部 地下1階

地下1階は牢獄になっていた。そこにはなんとカプア一家がいた。どうやら、皆で捕まった後ここに閉じ込められたようだ。

「ね、ねえ……。なんだか外、騒がしくない？」

「あー、なんでも侵入者があつたらしいな」

「なにイ、侵入者だと……。こうしちゃいられねえ！このスキに何とか脱出して……」

「兄貴、カンベンしてくれよ。そんな簡単に脱獄できるわけ……」

「ここは……。どうやら地下牢みたいだね」

「へえ、ハーケン門の地下牢と比べると規模が大きいわね……」

エステルたちがさらに歩みを進めると、

「あれ……」

「あ」

エステルとジヨゼットがご対面。

「あああああっ!?!」

2人は顔を見ると同時に叫んだ。

「お、お前たちは!?!」

「あの時のガキどもか!？」

キールとドルンもエステルたちに近寄ってきた。

「なんとというか……。お久しぶりですね」

「そっか、あんたたちここに捕まっていたんだ。……」

「……。えっと、その、元気してる?」

エステルはかける言葉がなく適当に問いかけた。

「こ、こらあ! 哀れみの目でボクを見るな! 棒振り回すことしか能がないノーテンキ女のくせにつ!」

牢の中から喚くジョゼット。

「ゴメン……。何言われても平気かも。それで気が済むんなら好きなだけ罵^{ののし}っていいわよ」

「む、むっかゝ! なに余裕かましてんだよっ!」

「おいおい、この連中、お前たちの知り合いかよ?」

アガットがヨシユアに尋ねた。

「カプア空賊団……。定期船を奪った犯人です」

「ほう、噂の連中か。かなり高性能な飛行艇を使っていたそうじゃの? 帝国製と聞いていたがどのくらいのスペックかね?」

「あ、ああ、最高時速は2300セルジュで……。って、どうしてそんな事を答えなくちゃならないんだ!」

キールが途中で話すのをやめた。答える方も答える方だ。

「なんじゃ、ケチじゃのー」

「お、おじいちゃん。そんなこと聞いてる場合じゃないと思うんだけど……」

「ちょ、ちょっと待ちやがれ! そもそも遊撃士がなんでこんな所にいやがる? もしかして、さっきから鳴っているこのサイレンは……」

「……」

「……」

「……ふむ……」

「……あう……」

「……さてと、邪魔したな」

ドルンの質問に答えずにエステルたちは地下牢を後にした。

「ああっ、ごまかしたあ！」

「侵入者ってのはお前らかよ！」

「こらっ！俺たちもついでに解放しやがれっ！」

レイストーン要塞 司令部 1階

「はあ……。ビックリしちゃった。そういえば、あいつらって黒装束の連中と関係があったよね。なのに、リシャール大佐に逮捕されたってことは……」

「大佐の手柄になるように利用されたかもしれないね。ひょっとしたらルーアンのダルモア市長も……」

「ケツ、だからといって同情する必要はねえだろうが。余計な時間を食っちまった。他の脱出ルートを見つけろぞ」

エステルたちが司令部を出ようとした時、

「おい、見つけたか!？」

「いや、兵舎の方は一通り調べ終えたぞ！」

「監視塔も異常なしだ！」

「……となると、残るのはこの司令部だけのようだ。少佐に報告するついでにしらみ潰しに捜すとするか」

外では兵士たちが話をしていた。どうやら司令部に入ってくるらしい。

「まずっ！こつちに来るみたい！」

「クソッ……このままじゃ袋小路だぜ」

「……………」

その時、司令部の奥から声がした。

「来い！こつちだ！」

男性の声だ。

「今、なんか聞こえた？」

「う、うん……こっち来てって言ってたよつな」

「……時間がない！捕まりたくないんだろっ！？」

「空耳ではなさそうじゃの」

「こっなりや仕方ねえ！ダメもとで行ってみるぞ！」

エステルたちは声を信じて奥へと向かった。

第4章 黒のオープメント(29) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

絶体絶命のエステルたち。声を信じて奥へと向かうが、その声の主は意外な人物だった。

第4章 黒のオープメント(30)(前書き)

この話で、『第4章 黒のオープメント』 完結です。
いかがだったでしょうか？

次回、空の軌跡FCの最終章、『第5章 王都^{おつとりよつらん}撩乱』 開幕です！

第4章 黒のオープメント(30)

エステルたちは声の元へと急いだ。

「さあ、そのまま廊下の奥まで来るんだ！」

「ヨシユア、この声って……」

「ああ……。聞き覚えのある声だね」

エステルたちはそのまま奥へと進んだ。

奥には扉があつた。

「さあ、入りたまえ！」

中から声がした。

「おいおい、その部屋は……」

「フン、何のつもりか知らんが行くしかなさそうじゃな」

エステルたちは中へと入った。

「間一髪だつたな」

声の主はあるうことかとシード少佐だつた。

「やっぱり……！」

「さあ、念のため鍵を」

「わかりました」

ヨシユアは鍵をかけた。

「フン、何のつもりじゃ？レイストーン要塞の守備隊長。リシャール大佐に、わしの監禁を命じられていたのではないのか？」

「……その節は失礼しました。すでに王国軍は、大佐の率いる情報部によって掌握されています。主だつた将官は、懐柔されるか、さもなくば自由を奪われる始末……。モルガン將軍も、ハーケン門に監禁されている状態なのです」

「えええっ！？あのガンコ爺さんが！？」

「大変なことになっていきますね……」

「おいおい、一体どうしてそんな事になっちまったんだ？王国軍つてのはそこまでモロい組織なのかよ」

「残念ながら……。帝国との戦いが終わってから軍の規律は少しずつ乱れていった。特に将官クラスの者たちの間で横領・着服・収賄が絶えなかった。そこをリシャール大佐に付け込まれてしまったのだ」

「なるほどのう……。持ち前の情報力を駆使して弱みを握ったというわけか」

「その通りです。モルガン将軍が監禁された今、リシャール大佐は王国軍の実質的なトップとなりました」

「と、とんでもないわね……」

「アリシア女王はどうだ？王国軍の指揮権は、最終的に女王に帰属するんじゃないのか？」

「不可解なことだが……。女王陛下は沈黙を保ったままだ。陛下の直属である王室親衛隊も反逆罪の疑いで追われている……」

「は、反逆罪！？あのユリア中尉たちが！？」

「中央工房の襲撃事件を親衛隊の仕業に偽装したらしい。ご丁寧に証拠写真まで用意したようだ」

「ドロシーさんの写真か……」

「そ、そんなのおかしーですっ！中央工房をめちゃくちゃにしておじいちゃんを掠って……。アガットさんを撃つて死にそうな目に遭わせたのに……。それを人のせいにするなんて！」

「ああ……。返す言葉もない。上官の命令は絶対だが……。黙認した私にも責任がある。だから……。せめてもの罪滅ぼしをさせて欲しかった」

「難儀な人だな、あんた」

「フン、そういう事であれば無礼の数々は水に流してやろう。その石頭を、スパナで叩くくらいで勘弁してやるわい」

「きよ、恐縮です」

「お、おじいちゃんってばあ」

「冗談じゃ」

「話はわかったけど……。これからどうするつもりなの？ほとぼりが冷めるまであたしたちを匿かくまってくれるの？」

「いや、それよりもはるかに安全な方法がある。君たちには、この部屋から要塞を脱出してもらいたい」

「この部屋って……」

周りに扉は先ほどの入口しかない。

「なるほど……。脱出口があるんですね？」

「ふふ、なかなか鋭いな」

シード少佐は部屋の壁の1つを押した。そうすると、隠し扉が現れた。

「わわっ……」

「さすが軍の司令室。なかなか凝ってるじゃねえか」

「この緊急退避口を使えば要塞の裏にある水路に出られる。ボートが用意されているからそれを使って脱出できるはずだ。本来なら、部外者に明かしたら禁固10年は確実なのだが……。まあ、軍規は許してくれなくとも女神エイトスは許してくれるだろうよ」

「少佐さん……」

「遠慮なく使わせてもらうぜ。最初に俺が降りる。次に、爺さんとティータが来い。エステル、ヨシユア。しんがりはお前らに任せろ」

「わかったわ！」

「了解です」

アガットが先に行った。

「少佐、さらばじゃ」

「えっと、あの……。ありがとーございました！」

ラッセル博士とティータが続いて行った。

「さてと……。残りはあたしたちだけね。少佐、色々ありがとう」

「お世話になりました」

「いや、礼はよしてくれ。実のところ……君たちと最初に会った時にこうなることは予想していた」

「最初に会った時……?」

「ゲートでお会いした時ですね?」

「ああ……。名字を聞いたときにね。君たちは、カシウス大佐のお子さんたちなのだろう?」

「カシウス大佐って……。ええっ、父さんってそんなに偉い階級だったの!？」

身内のエステルすら初耳だったらしい。

「私も、あのリシャル大佐も彼直属の部下だったのだよ。10年前の侵略戦争で帝国軍を撃退した陰の英雄……。その子供たちならば必ずや、真実を突き止めて博士を助けに来ると思ってるね」

「そ、そうだったんだ……。でも、父さんが帝国軍を撃退した英雄って……」

その時、入口の扉が叩かれた。

「少佐、よろしいですか!どうやら侵入者が地下牢に来ていた模様です!まだ司令部に潜伏している可能性が高そうですが、いかがしますか!？」

「や、やば……」

エステルたちが焦った。

「わかった!すぐ行くからその場で待機!」

シード少佐が扉越しに命令した。

「さあ、早く行きたまえ」

「う、うん……!」

「それでは失礼します」

エステルとヨシユアはシード少佐に礼を言って失礼した。

「は、びっくりした!まさか滑り台になっていたなんて」

「どうやら、秘密の水路に出たみたいだね。さあ、早く追いつこう！」

「おっと、来たようじゃの」

「お姉ちゃんたち、こっちだよ！」

「遅えぞ！なにグズグズしてた？」

「ゴメン、ゴメン。ちよつと父さんの話が出てさ」

エステルとヨシユアは船に乗り込んだ。

「お待たせしました。発進してください」

「ようし……。しっかり掴まってるんじゃぞ！」

ラッセル博士は船を発進させた。

レイストーン要塞 ゲート前

「ふう……。何とか脱出できたわね。まだ、こっちの方まではパトロールに来てないみたい」

「シード少佐が引き留めているのかもね。でも、グズグズしていたら追跡部隊が編成されると思う。どこか安全な場所に博士たちを逃がさないと……」

「……………ふむ……………」

「お姉ちゃん、お兄ちゃん……………」

ティータが心配そうな顔をした。

「あ、心配することないからね。ティータと博士のことは絶対に守ってあげるんだから」

「……………いや。お前らはここで手を引け」

「え……………!？」

「どういうことですか？」

エステルとヨシユアがその言葉に反論した。

「今回の一件で、俺は完全に情報部の連中にマークされた。そして、爺さんとテイータも同じように追われ続けるはずだ。逃げるついでに、2人まとめて安全な場所まで逃がしてやるよ」

「アガットさん……」

「なるほど、そう来たか。そうじゃな。わしらに巻き込まれる人間は少なければ少ない方がいい。本当なら、テイータも巻き込みたくはなかったが……。人質に取られることを考えると一緒に逃げた方がいいじゃろう」

「おじいちゃん……」

「ちよ、ちよつと待つてよ！あたしたちだけ安全だなんてそんなの絶対に納得いかない！ヨシユアもそう思うでしょ？」

エステルは納得いかにヨシユアに同意を求めた。

「いや……。ここはアガットさんが正しい」

「へっ……」

「逃亡・潜伏のセオリーだと一緒に行動する人間が多くなると、それだけ

逃げ隠れがしにくくなる。その意味では、アガットさんだけで博士を逃がした方がいいんだ。君の気持ちは分かるけど……ここはアガットさんに従おう」

「そ、そんな……」

「さすがだな、ヨシユア。よく分かってるじゃないか。エステル、ここは素直に引いてもらうぜ」

「で、でも……。理屈では分かるんだけど……」

「エステルお姉ちゃん……」

「ふむ、あくまで納得できない顔をしとるのう。ならば、わしの代わりにある仕事を引き受けてくれんか？」

「え……」

「まず、王都に向かってほしい。そして、グランセル城にいるアリア女王陛下と面会してくれんか」

「じよ、女王様に面会〜!？」

「どついつ事でしょうか？」

「例の《黒の導力器》じゃが……。あれは元々、リシャール大佐がどこからか入手した物らしい。彼は《黒の導力器》のことを《ゴスペル》と呼んでおったよ」

「福音……ですか」

「ケツ……。ご大層な名前じゃねえか」

「どうやら、《ゴスペル》は何者かによって情報部から持ち出されたりしい。恐らく、その持ち出した人間が小包でカシウス宛に送ったのじゃろう。じゃが、あの導力停止現象で所在が情報部に知られてしまった。あの黒装束　　特務兵どもが中央工房を襲撃した真の理由はわしでも演算オーブメントでもない。あれを回収するためだったのじゃ」

「そ、そうだったんだ……」

「なるほど……。それで色々納得できました」

「リシャール大佐は、あれを使って王都で何かをしようとしておる。わしのカンが正しければ……。非常にマズイことが起きるはずじゃ。その事を陛下に伝えて欲しくてな」

「非常にマズイこと……。あの導力停止現象ってやつ？」

「いや……。おそらくそれを利用した……。……すまん、これ以上はわしの口から言うわけにはいかん。とにかく、あの《ゴスペル》について陛下に直接伝えて欲しいのじゃ。逃亡するわしの代理としてな」

「はあ……。まったくもう。そんな風に言われたら断るに断れないじゃない」

「僕たちでよければ引き受けさせてもらいます」

「すまんな、よろしく頼んだぞ」

「あ、あの……。エステルお姉ちゃん。……ヨシユアお兄ちゃん……」

ティータが寂しそうにエステルとヨシユアを見た。

「ティータ……。しばらくのお別れだね」

「ごめんね……。付いてあげられなくて」

「そ、そんなあ。あやまる事なんてないよう。わたし、お姉ちゃんたちに助けられてばかりいて……。すごく仲良くしてくれて、妹みたいに扱ってくれて……。うっ……。えっ……」

「ティータ……」

「お、おじいちゃんのこと助けてくれてありがとう……。うっ、それから……。仲良くしてくれてありがとう……。2人とも……。大好きだよ……」

「うん……。あたしも大好きよ……」

「君と一緒にいられて僕たちも嬉しかった……。こちらこそありがとう」

「……。名残惜しいだろうが、そのくらいにしておきな。涙なんざ、また会えた時に取っておきやいいだろう？」

「グス……。もう……。デリカシーがないんだから……。でも……。あんともしばらくお別れね。色々あったけど、一緒に仕事してすごく良い経験になったわ。ありがとね、アガット先輩」

「ぞわわ……。気色悪い呼び方すんじゃねえ！」

「あはは、照れてやんの？」

「どうやら、エステルはアガットをからかったようだ。」

「ったく……。さすがはオッサンの娘だぜ。ヨシユア、その跳ねっ返りが暴走しないように気をつけとけよ。武術だけは一人前だが、それ以外はどうも不安だからな」

「フンだ、よけーなお世話」

「ええ、任せてください。アガットさんも気をつけて。博士とティータのこと、どうかよろしくお願いします」

「おお、任せておきな。それじゃあ……。俺たちは先に行くぜ！」

「さらばじゃ！カシウスの子供たちよ」

「げ、元気でねっ！お姉ちゃん、お兄ちゃん！」

「うん！ティータたちも！」

「女神の加護を！くれぐれも気を付けて！」

アガットたちは先に行ってしまった。

第4章 黒のオープメント(30) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回、第5章より、王国軍情報部の陰謀が浮上し、リベール王国全てを巻き込むことになる。エステルたちは最後の五大都市、《王都グランセル》に向かい、その陰謀を食い止めることができるのか！
？

第5章 王都撩乱(1) (前書き)

今回、次回は、エステル・ヨシユアは登場しませんが、重要な話です。

第5章 王都撻乱(1)

エルベ周遊道 - キルシエ通り間

「こちらです、クローゼ！」

ユリア中尉がクローゼを誘導している。

「はあはあ……。何とか周遊道を抜けましたね。どうでしょうか、これから？」

どうやら、2人は何かから逃げているようだった。

「このままキルシエ通りに出て王都グランセルにお向かいください。部下たちの陽動によつて警備は手薄になっています。そのお姿なら、気付かれずに遊撃士協会まで行けるでしょう」

「分かりました……。あ。それではユリアさんは……!？」

「ここで敵を食い止めます。少しの間ですが時間稼ぎにはなるでしょう」

「そんな……。そんなのダメです! 私一人が逃げるなんて……。私もユリアさんと共に戦います！」

「……人はそれぞれ守るべきものがあります。私がここに留まるのはおのれの信念と責務のため。ですが、貴女の場合は、失礼ながらもただの感傷に過ぎぬかと存じます。御身が御身だけのものでないこと、どうかお忘れなきよう……」

「……。わかりました、ユリアさん。でも、約束してください。絶対に無茶なこととはしないと……。それと、無事再会できたらお祖母さまが淹れた紅茶と一緒にご馳走になりましょう。私、新作のお菓子を焼きますから」

「それは楽しみです。さあ、お急ぎください。……ジーク! しっかりお守りするのだぞ！」

クローゼはジークと共に王都を目指した。

「さてと……。そろそろ追いついてきたか……」

向かってきたのは、黒装束の男たち改め、特務兵と訓練犬だった。

「3人……それに犬どもが5匹か。フ、甘く見られたものだ。あの方より教わりし剣……。存分にふるう時が来たようだ」
ユリア中尉が剣を構えた。

「王室親衛隊、中隊長……。ユリア・シュバルツ　　参るッ！」

キルシエ通り

クローゼは王都の目の前まで逃れてきた。

「はあはあ……。……ジーク、来て！」

「ピユイ？」

「私はもう大丈夫だからユリアさんのところに行つてあげて。このままだとユリアさんが……」

「ピユイ！」

「ありがとう、お願いね」

ジークはユリアの元へと向かった。

「ユリアさんの言つた通り、こちらの警備は手薄みたい……。急いで遊撃士協会に行かないと……」

その時、雨が降り出した。

「雨……。……。……。……。……。そういえば、エステルさんたちもそろそろ王都に来る頃かしら……」

上空から何やら飛行船の音がした。

「……まさか!？」

そこに現れたのは、紅蓮の塔やレイストーン要塞でみたあの警備艇だった。

「情報部の特務艇……。まさか、昼間のうちから王都の前に現れるなんて……」

それだけ、情報部がリベールを支配していることが伺えるような大胆な行動だった。

クローゼは引き返し逃げようとした時、

「あっ……」

「……………」

クローゼの目の前にロランス少尉が立ち塞がった。

「やあ、珍しい所で会うものだな」

特務艇から現れたのは、リシャル大佐だった。

「ジェニス王立学園、社会科在籍。クローゼ・リンツ君……。少々、話を聞かせてもらえるかね？」

第5章 王都療乱(1) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

なぜかクローゼの身を確保したりシャルル大佐。その目的とは!?

第5章 王都撻乱(2)

王都グランセル 東街区 帝国大使館

「麗しの王都に暗雲立ちこめ、昏き情熱くもの序曲が鳴り響く……。フ
フ……面白くなってきたじゃないか」

部屋の一角で何やら呟いていたのはオリビエだった。

「……相変わらずのお調子者だな」
部屋に入ってきたのは軍人姿の男性だった。

「おお……。ボクは夢でも見ているのか？ ミュラー、親愛なる友よ
！多忙な君が、わざわざ帝都から訪ねて来てくれるとは。一体どう
いう風の吹き回しだい？」

「何をぬけぬけと……。貴様が連絡の一つもよこさずにほっつき歩
いているからだろうが。余計な手間を取らせるんじゃない」

「フツ、照れることはない。口ではそう言いながらもボクの事が心
配でしようがなくて飛んできてしまったのだろうか？ 恋は盲目とはよ
く言ったものだ」

「……………」

「さあ、遠慮することはない。ボクの胸に飛び込んできたまえ！」
オリビエが両腕を勢いよく広げた。

「頼まれた情報をわざわざ持ってきたんだが……。どうやら知りた
くないようだな」

「ああん、つれないことを言わないでくれたまえ。わかった。つま
り誠意を見せると？」

「それが常識だと思っが」

「そういう事ならお任せあれ。コホン……」

オリビエがわざとらしく咳払いすると、

「お願いします、ご主人様っ どうか教えてくださいますっ？」
ミュラーは何も言わず立ち尽くしている。

「あれ、外したかな？ それじゃあ、お次はこれだ」

次にオリビエは片手片膝を床につくと、

「アニキー！一生の願いじゃあああつ！どうか教えてくれええい！」

「もういい……。頭が悪くなりそうだ……。話してやるから黙ってる」

ミユラーはオリビエの態度に呆れ果てたようだ。

「ワアイ」

オリビエはすぐさま立ち上がった。

「例の《彼》だが……。ようやく足取りが見つかった。どうやら一月前まで帝国の遊撃士協会にいたらしい」

「へえ……？」

「ここ数ヶ月の間、帝国各地の協会支部が立て続けに襲撃された。その事件を調査していたらしい」

「襲撃ねえ……。まさかとは思うけどどこかの部隊の仕業だったりする？」

「さすがに……。10年前とは事情が違うさ。俺の知る限り、どの部隊にも出勤命令は下されていない。何者かに雇われた^{イエーガー}猟兵団の仕業だった可能性が高そうだ。いずれにせよ、事件解決と同時に彼の足取りは途切れてしまった」

「ふーむ……。参ったな。せっかくリベールに来たのに完全に入れ違いだったわけか」

「まあ、そういうことだ。目当ての人物がない以上、この地に留まる必要があるまい？どうやら予想以上に激しい嵐が近づいているようだ。巻き込まれる前に帝都に戻るぞ」

「はっはっは、ご冗談を。せっかく始まる極上のオペラに参加しないという手はあるまい？」

「……なに？おい、まさかお前……」

オリビエがガラス越しに外を見た。

「役者もそろいつつあるようだ。あいにく、主役は不在だが代役には心当たりがあつてね。あの2人なら、必ずや自力で舞台上がっ

「じつじくねんだろ」

第5章 王都療乱(2) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回、エステル・ヨシユアはキリカたちに事件の総括を話します。

第5章 王都撻乱(3)

遊撃士協会 ツアイス支部

「そうか……。博士を無事救出してくれたか。演算器も取り戻してくれたし、何とお礼を言ったらいいのか……。ありがとう。エステル君、ヨシユア君」

「うーん、あたしたちは大したことでないんだけど。どちらかというと、アガットの手伝いをしただけだし」

「お礼なら、博士たちを守っているアガットさんに言ってあげて下さい」

「もちろん、彼にも感謝してるさ。無事、軍の搜索から逃げ切れるといいんだが……」

「今はアガットを信じるしかないでしょう。しかし、どうやらリシヤール大佐は王都で何かをするつもりのような。《ゴスペル》と呼ばれる漆黒のオーブメントを使って」

「うん、どういう用途で使うのかは分からないけど……。その事を女王様に伝えるように博士から頼まれちゃったのよね」

「うづむ、まさかそこで陛下の名前が出てくるとは……。確かに博士は、女王陛下と個人的な親交があったはずだ。王国の機密に関することを知っていてもおかしくはない」

「そういう事情で、博士から正式に依頼を受けたんですが……。キリカさん、現状で僕たちが王都に行っても大丈夫ですか？」

「要塞に潜入したのがあなたたちである証拠はないから、今のところ問題はないでしょう。むしろ、追及される前に王都に向かった方がいいわね。少なくとも、中央工房に査察が入る可能性はありそうだよ」

「確かに……。今のうちに対策を立てなくては。エステル君、ヨシユア君。どうか気を付けて出発してくれ。博士の依頼、よろしくお願ひする」

「うん、任せておいて！必ず女王様に伝えるから」

「工房長も、どうかお気をつけて」

「ああ、みすみす軍の連中に尻尾をつかませるへまはせんさ。それでは失礼するよ」

「マードック工房長は今後の対策を立てるため、中央工房に戻って行った。」

「さてと……。こうなったら善は急げね。一刻も早く女王様に会わなくちゃ」

「だったら、今回ばかりは定期船を使った方がいいかもね。王都まで歩いたら半日くらいかかるけど、飛行船なら1時間足らずだからね」

「そっか、確かに……。せっかく徒歩で王国一周しようと思ったけど仕方ないか」

「だったら、少し待ちなさい」

「キリカが通信器で何やら話し始めた。」

「こちら遊撃士協会……。こんにちは。いつもお世話になってるわね。……。ええ……。お願いするわ。王都行きを2枚……。ええ……。請求はいつものように。それではよろしく頼むわね」

「?????どうしたの、キリカさん？」

「ひよっとして発着場の受付ですか？」

「ええ、王都行きの定期船のチケットを確保したわ。代金はツアー支部が持つから受付で搭乗手続きだけすればいいわ。それと、これを持っていきなさい」

「キリカは正遊撃士資格の推薦状をエステルとヨシユアに渡した。」

「ええええっ!？」

「ず、ずいぶんと用意がいいんですね……」

「定期船のチケットは博士の依頼に関する必要経費。推薦状は、博士救出という大仕事を達成したことへの評価。報酬といっしょに、胸を張って受け取りなさい」

「あ……。うん！ありがとう、キリカさん！」

「本当に……何から何まですみません」

「フフ、前にも言ったけどそれが私たち受付の仕事だから。さて……。王都行きの船は11時出発よ。早めに発着場に行って搭乗手続きをした方がいいわね。女神エイドスの加護を。2人とも気を付けて行きなさい」

「はい！」

「お世話になりました」

エステルとヨシユアは早速ツァイス発着場に向かった。

第5章 王都療乱(3) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

急いで王都へ向かおうとしたエステルたち。しかし、思いもよらぬことが！

第5章 王都療乱(4) (前書き)

読者の皆様、お久しぶりです。今回から本格的なFC最終章の開幕です。

何か一言お待ちしてます。

第5章 王都撩乱(4)

ツアイス発着場

「やあ、あんたたち。キリカさんから話は聞いてるぜ。さっそく搭乗手続をするかい？」

「うん、お願いしちゃうわ」

「それじゃあ、この用紙に名前と連絡先を書いてくれ」
「わかりました」

ジラールは搭乗手続の用紙をエステルとヨシユアに渡した。

エステルたちは定期船の搭乗手続を行った。

「よし、それじゃあ、これがあんたたちの乗船券だ。定期船が到着したらこいつを見せて乗ってくれ」

エステルとヨシユアは乗船券をもらった。

それを手に持って、エステルたちは乗り場まで行った。

「にゃー」

そこで、後ろから猫の声が聞こえてきた。

「あ、このネコって……」

「あの時の、コンテナに紛れ込んでいたネコだね。たしか、アントワーヌって言ったかな」

「にゃおーん」

まるで、言葉を理解しているかのように鳴いたアントワーヌ。

「あはは、可愛い。まったく、お前のせいですごくビックリしたんだからね。ちょっとは反省しとるかね、ん？」

「みやおん？」

「聞いちゃいない」

がつくりとするエステル。

「はは、ひよっとしたらトボけられているのかもね」

「よう、お前さんたち！」

次に来たのはグスタフ整備長だった。

「あ、整備長さん！」

「工房長から話は聞いてたが見事、救出に成功したそうだな。博士は俺たち技術屋にとっても師匠と言えるお人だからな。俺からも礼を言わせてもらうぜ」

「えへへ、整備長さんたちが色々協力してくれたおかげよ。さすがに、あの子にはビックリしちゃったけどね」

「やっぱりあれ、わざとだったんですか？」

「がはは、敵を欺くにはまずは味方からってな。で、どうした。発着場に何の用だ？」

「うん、博士の依頼で王都に行くことになってね」

「11時の船なんですけど、少し早く来すぎたみたいです」

「ああ……ちよいと到着が遅れてるみてエだな。荷降ろしとかの間もあるからもう少し街でゆっくりしていても大丈夫だと思うぜ」

「うーん、そうしよっか……」

エステルたちがどうしようか考えていた時、

「おーい、あんたたち！」

受付のジラルが走って乗り場にやってきた。

「なんだ、ジラルじゃねえか。どうした、何かあったのか？」

「ちようどよかった。オヤジさんも一緒でしたか。実は困ったことになりましたね」

「困ったことだと？」

「いえね、飛行船公社から連絡があつたんですけど……。定期船の到着、数時間ほど遅れそうなんですよ」

「えっ……!!」

「……………」

驚くエステルと、何か心当たりがあるのか考え込むヨシユア。

「おいおい。そりゃ一体どういうことだよ？また空賊騒ぎでも起こったのか？」

「ま、似たようなもんですかね。何でも、女王様の生誕祭を妨害し

ようとするとテロリストがどこかに潜伏しているらしくて。調査のため、全ての発着場に軍による検問が敷かれるそうです」

「（そ、それって……）」

「（たぶん、逃亡している博士たちが目当てだろうね……）」

「そういうわけで、王都行き船はしばらくルーアンで足止め。かわりに、レイストーン要塞から軍の警備艇が来るらしいですよ」

「なるほど、そういうことか。しかしそうになると、お前も忙しくなりそうだなア？」

「そうなんスよ。客に説明しないといけないし。そういうわけだから、あんたらもしばらく時間を潰してくれや。そうだな……。遊撃士協会で待っていてくれれば通信で連絡させてもらっぜ？」

「う、うん……」

「よろしくお願いします」

そうして、ジラールは戻って行った。

「……きな臭くなってきたな。軍の連中がやってくるすれば、ライプニッツ号も調べられるはずだ。ちよいと工房長と相談してくるぜ」

「そっか、昨日のことを調べられたら大変だもんね」

「どうか気を付けてください」

「はは、お前らみたいなヒヨっ子に心配されるほどモウロクしてねえさ。それじゃあ、あばよ！」

グスタフ整備長も発着場を出ていった。

「ヨシユア……。なんか、やばそうじゃない？」

「うん……。こうなると定期船は危険だな。少し時間はかかるけど、街道を使った方が良さそうだ」

「うー、せっかく久しぶりに飛行船に乗れると思ったのに……。許すまじ、リシャール大佐！」

「まあまあ。修行の続きと思えばいいじゃない。それじゃあ、受付で搭乗手続きのキャンセルをしよう」

第5章 王都撩乱(4) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ王国軍情報部の手がエステルたちに伸びてきた！この圧倒的不利な状況の中、エステルたちはどうするのか！？

英雄伝説 零の軌跡 発売前予想？（前書き）

ちょうど発売1週間前です！

英雄伝説 零の軌跡 発売前予想？

「どうも、空の軌跡メインヒロインのエステル・ブライトよ」

「ヨシユア・ブライトです」

「And, my name is Ryuya Ijuin.

I am this novel's author. (作者の伊集院龍也です。)

「なんで英語なのよ……。しかもご丁寧に訳付きだし……」

「まあ、この作者は変わり者だし……」

「I agree with you. (同感ですね)」

「そのようね……」

「まあ、このまま行こうか……」

「今日は9月30日発売の『英雄伝説 零の軌跡』の予想をしたいと思うわ」

「空の軌跡シリーズ最新作は2年ぶりだね」

「By the way, "The legend of heroes " Sorano kiseki" the 3rd

was released in 24th July, 20

08. (ちなみに、英雄伝説 空の軌跡 the 3rd は2008年7月24日に発売されました)」

「こんな豆知識は放っておいて……。ヨシユアはどんなストーリーだと思う?」

「うん、クロスベル自治州を舞台にしたストーリーというのは知っているね。この自治州はエレボニア帝国とカルバード共和国の間にあって、度々問題が起きている自治州なんだ。この問題は『クロスベル問題』と言われているよ」

「ふーん、そうなんだ。主人公は新しくなったのよね?」

「そうだよ。男性主人公は『ロイド・バニクス』で女性主人公は『エリイ・マクダエル』だね。どちらもクロスベル警察の一員だね。」

他に、天才のテイオや女たらしと言われるランディという人も出るね。こちらでいうクローゼやオリビエさんみたいな存在かな？」

「クロスベルには遊撃士協会もあったね。ところで、あたしたちは登場するのかしら？」

「それはわからないな」

「Well, I think you can't appear. If so, it's very regrettable. (うーん、登場しないんじゃないかな。もし、そうなら残念だな。)」

「ちょ、ちょっとまってよ！あたしが出られないってどーいうワケ！？」

「まだ出ないとはいつてないよ。もしかしたら、どこかで出るかもしれないし。それはプレイしてからの楽しみってわけ。ちなみに、オルタナティブ・サーガでのエステルとロイドとの会話も参考に」

「もし出なかつたら、リメイクしてもらおうわ！」

「そんな無茶な……」

「You can't absolutely do so.」

それは絶対にできませんよ」

「おつ、エステルとヨシユア。何をしているんだ？」

「と、父さん！？どこから出てきたの！？」

「This person is Cassius Bright. He is Estelle and Joshua's father. (この人物はカシウス・ブライト。エステルとヨシユアの父親です。)」

「なんだ？『零の軌跡予想』だって？ほう、新作ゲームか。ところで、俺は登場するのか？」

「あんたは絶対出ないわよっ！どきなさいー！」

「エステル、そこまでしなくても……」

「You are a little aggressive, Estelle.」(エステル、強引だね)」

「そうだぞ、エステル。俺はただでさえ出番が少ないんだ。俺はお前たちの父親だぞ。もっと出てもいいはずじゃないか？」

「なによあ、えつらそうに。父さんは今まででいい場面で登場したじゃない。特に、FCのクライマックスのシーンの……」

「エステル、それはまだ言うてはだめだよ」

「あつと、そうね。とにかく父さんは出ることはないっ！以上っ！しくしく……」

「He has no dignity.」(威厳全くなしですね)」

「やあ、君たち。このボクを差し置いて何してるんだい？」

「げっ、オリビエ……」

「Oliver Lenheim, he is a eccentric.」(彼はオリビエ・レンハイム。変人です)」

「おつと、ひどいなあ。神秘的な存在と言ってくれたまえ」

「I can't abusolately say so.」
「口が裂けても言えません」

「オリビエさんはなぜここに？」

「フフフ、君たちがなにか面白そうなことをしていると感じたので帝国から馳せ参じたのさ(嘘)」

「Do you realize he is very foolish?」(皆様、理解いただけましたでしょうか？彼の変人っぷりを)」

「はいはい。わかりました。じゃあ、さようなら」

「ちょ、ちょっと待ちたまえ！冗談だから、少しだけこの場でお出させ、お願いっ！」

「まったくもう。仕方ないわね。じゃあ、少しだけよ」

「フツ、では話させていたごう。『英雄伝説 零の軌跡』における第3の主人公はこのオリビエ・レンハイム。その華々しき活躍を
とくにご覧あれ！」

「そんなわけあるかあ！邪魔よっ！」

「ゴフツ……！」

「ひどい紹介でしたね。まるで自分が主人公よりも活躍しそうな語りぐさだったね」

「少しでも出させたあたしのミスだったわ……」

「Well, I'm going to write this
video game's novel. I'll start
in 30th September, the day
of release the game. I'm glad to
read my novel. (今度は『零の軌跡』の小説を
書こうと思ってます。発売予定日の9月30日に始める予定です。
乞うご期待!)」

「え、なに？もう終わらせるの？」

「うーん、色々邪魔が入ってこのコーナーの意味をなさなくなっただからかな？」

「そんな！まだ何も予想してないのに!？」

「クロスベル自治州は繁栄を続ける一方で、自治州内では幾つもの勢力が争いを続けているため光と闇が混在する『魔都クロスベル』
と言われています。新米警察官のロイドと市長の娘であるエリイを中心とし、多くの事件を解決しながら自治州内の陰謀を阻止するのは間違いのないと思います。公開ムービーでは手に汗を握るような場面があり、今回も期待度MAXです！それでは、またお会いしましょうー！（作者発）」

「あ、ちゃんと喋った……じゃなくて、もっと話させて〜！」

英雄伝説 零の軌跡 発売前予想? (後書き)

皆様の予想などお待ちしております。

第5章 王都療乱(5) (前書き)

エステルたちに危機が！100話突破です！

第5章 王都撻乱(5)

「ああ、あんたたちか。さっきも言ったように、いつ船が来るか判らないんだ。悪いけど、遊撃士協会で待っていてくれよ」

「えっと、実は……。ちよっと予定が変わったのよ」

「申しわけありませんがキャンセルしても構いませんか？」

「そうか……。まあ、無理もないよな。定期船の到着前ならキャンセル料はかからないんだ。さっきの乗船券を返してくれるだけで構わないぜ」

「ん、わかったわ」

エステルとヨシユアは乗船券を返した。

その時、上空から船が来たらしい。到着の音が聞こえた。

「おっと……。軍の警備艇が来たみたいだな。ずいぶんお早いご到着で」

「そ、それじゃあ、あたしたちはこれで……！」

「お手数をかけて申しわけありませんでした」

「いやいや。またのご利用をお待ちしてるぜ」

エステルとヨシユアは足早に発着場を後にした。

軍の警備艇ではカノーネ大尉が王国軍を仕切っていた。

「フフ……。忙しくなってきましたわね。まずは、工房長のお顔を拝見しに行くとしましょうか。しかし、さすがは大佐殿……。こんな手をお考えになるなんて」

「は、ビックリしちゃった」

「グズグズしていたら情報部の連中がこちらに来る……。このまま急いで街を出よう」

「ん、わかった。えっと、王都に行くには東の街道に出ればいいんだっけ？」

「ああ、リッター街道を北上して《セントハイム門》に行けばいい。門を通れば、王都にあるグランセル地方に入れるよ」
エステルたちはリッター街道に出た。

セントハイム門

リッター街道を抜け、ツアイス地方とグランセル地方を隔てるセントハイム門に到着した。

「ここがセントハイム門か……。なんか、ロレント地方にあるグリユーネ門と似てるわねえ」

「同じ王都地方を囲む城壁、《アーネンベルク》の門だからね。千年近く前に築かれたものだけど、さすが帝国軍の侵攻を食い止めただけあって、堅牢そうな造りだな」

「うんうん、大砲を撃ち込んでも壊れなさそうなカンジよね。でも、観光名所みたいだし、時間があつたら屋上に登って……。……………」

そこで、エステルの言葉は止まった。なにやら照れている様子。

「はは、君のことだからまっすぐ続いている城壁の上を全力疾走してみたいとか？」

「ち、違うってば！あたしがしたいのは、2人きりでのんびりランチしたいって言うか……。か、風に吹かれながら色々とお喋りしたいって言うか……………」

「????別にそんなのいつもしている事だと思っけど？」

「はあ…………もういい。さっさと通行手続してとっとと王都に行きま

「えっと……。気のせいかもしれないけど。なんだか機嫌、悪くない？」

「気のせいでしょう。変なこと言っていないでとっと中に入るわよ」

「（女の子は難しいな……）」

ヨシユアは深いため息をついた。

「やあ。セントハイム門にようこそ。王都に行きたいんだったら通行手続をしてもらえるかな？」

受付の兵士ウエインが尋ねた。

「うん。通行手続をしてもらえる？」

「よし来た。この用紙にサインしてくれ」

エステルとヨシユアは手続用紙に必要事項を書き記した。

「しかしなんだ。最近の子は進んでいるっていか度胸があるって
いうか……。わざわざ街道を通ってハイキングがてらデートかい？」

「ふえっ！？デ、デートって……」

「はは、そんなのじゃないですよ。僕たち、これでも兄妹なんです」

「……………」

「へえ、全然似てないけどたしかに同じ名字だね。よし、これで手続完了だよ」

「……………」

「エステル……？さっきから様子が変だけどこか具合が悪かったりする？しばらく休んでいこうか？」

「はーっ……。ううん。本当になんでもないから。さっさと王都に向かいましょ」

「それならいいけど……」

「しかし、デートじゃないとすると武術大会の見物でも行くのかな」

「え、武術大会……？」

「なんだ、それも違ったか。武術大会つてのは王都の《王立競技場》で毎年開かれているイベントでね。王国軍の精鋭を始め、腕に覚えのある人間が集まって武術の腕を競い合う大会なんだ。たしか、今日の午後に予選が行われるはずだよ」

「へえ、なんだか面白そう！」

「はは、エステルが好きそうないイベントだね」

「女王陛下のはからいで入場料は割引されるし……。ああ、僕も勤めがなかったら見物に行つたんだけどねえ」

兵士ウエインは残念そうに言った。

「あはは、ご愁傷様。でも、どうせだつたら見物より参加がしたかつたな。今までの修行の成果も確かめられそうだし」

「確かに……。でも、予選をしているなら参加するのは無理そうだな。依頼も受けているし見物だけでガマンしようよ」

「ちえ、残念」

「……………」

兵士ウエインはエステルたちのやり取りを見ていた。

「ん、兵士さん？どうしたの。マジマジと見つめちゃって」

「その胸のエンブレム……。若いから気付かなかつたけど君たち、ひよつとして遊撃士？」

「うん、そうだけど？」

「何か問題でもありますか？」

「いや、その……。問題というか何というか……。参つたな。さすがにありえないと思うけど……………」

「……………こら。勤務中の無駄口は感心せんな」

控え室から男性が出てきた。どうやら出で立ちからして隊長のようだ。

「あ、隊長……………」

「なんだ、問題でもあったか？」

「そ、それがですね……。彼らが、その……………遊撃士らしいので……………」

「なに……………」

「????」

エステルは状況が判らない様子だ。

「あー、君たち。申しわけないが、少々時間をもらえるかな？」

「え、でもあたしたち、早く王都に行きたいんだけど」

「ほう、王都に、ねえ。参考までに聞くが、何をしに行くつもりなのかね？」

「え、え？その、頼まれた仕事で……」

「仕事の内容は？」

「えっと、博士の……。……じゃなくて！うー、何て言えばいいのか」

「申しわけありませんが、ギルドの規約があるのです。依頼人のプライベートにも関わるので内容を明かすのは勘弁してもらえませんか？」

ヨシユアが手助けした。

「ふん……。怪しいな。どうやら、色々と話を聞かせてもらう必要があるそうだな」

「な、なにがなんだかよく分からないんですけど……」

「その、実は……。軍本部からの通達があつてね。あの王室親衛隊が、陛下に反逆して各地でテロ事件を起こしたらしいんだ。しかもどうやら遊撃士を装って活動している連中もいるらしくてね……」。

念のため、遊撃士を名乗った人間は取り調べの対象にしているのさ」

「あ、あんですってー!？」

「こら、余計なことを言うな。申しわけないがこれも上からの命令だね。身元が証明されるまでここに留まってもらおうか」

「じよ、冗談じゃないわよ。なんであたしたちが……」

「ああ！やっと来てくれたんですか」

通路の奥からやってきたのはアルバ教授だった。

「へ……」

「あなたは……」

「いやー。待ちくたびれちゃいましたよ。通行手続が済んだのであ

れば早速王都に向かいますでしょうか？」

「え、え、え……？」

「申しわけありません、教授。準備に手間取ってしまったって出発が遅れてしまっただんです」

「ちょ、ちよつと待ちたまえ。……その、あんたは……？」

「これは申し遅れました。私、考古学者のアルバといます。ノーザンブリア自治州の出身でリベールには研究調査に来ています」

「おい、そちらの男性の通行手続は済んでいるのか？」

「あ、はい、先ほど……。パスポートも正規の物ですし、王都にある歴史資料館が身分を保障しているみたいです」

「そうか……。ならば問題なさそうだな。失礼した……。アルバさん。ところで、こちらの2人とはどういう知り合いなのかね？」

「ああ、彼らは遊撃士ですね。今まで何度か、危険なところを助けてくれた恩人なのです。その縁で、今回は王都まで同行してもらえることになりました。そうですよね？ エステル君、ヨシユア君」

「え……。ああ、うん！ じ、実はそうだったりするのよね」

「ふむ……。まあ、そういう事ならば身分の保障にはなりそうだな。君たち、済まなかった。どうやら誤解だったようだ」

「うんうん、分かればいいのよ」

「そちらも職務でしょうからどうか気になさらないでください」

こうして、アルバ教授のおかげで、エステルたちは何とか危機を乗り越えることができた。

第5章 王都療乱(5) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

アルバ教授のおかげで検問を逃れることができたエステルたち。しかし、これはあくまでこれからの苦難の序章に過ぎなかった。

第5章 王都撩乱(6)

セントハイム門 食堂

「まったくもー。ビツクリさせないでよね。教授もそうだけど、ヨシユアもすぐに話を合わせるんだもん。一瞬、あたしの方が約束を忘れてるのかと思っちゃったわ」

「そんなわけないって……。話を合わせたことくらい。すぐに察し
てくれなくちゃ」

「ふんだ。察しが悪くてすみませんね。……自分だって肝心なことは察しが悪いクセにさ」

「え……何か言った？」

「何でもありませんよーだ」

「????」

「はは、すみません。驚かせてしまったようです。何やらお困りの様子だったので口出しさせてもらいましたが……。ご迷惑だった
ですかねえ？」

「あ、ううん。困っていたのは確かだったから。ありがとう、アル
バ教授」

「本当に助かりました」

「いえいえ。以前助けてもらったお礼ですよ。しかし、どうしてま
た軍の方々と揉めていたんですか？テロ事件かどうとか聞こえてき
ちやっただんですけど」

「最近、他人を装って騒動を起こす犯罪者たちがいるみたいなん
です。どうも、その人たちに間違えられてしまったみたいで……」

「そうそう、そうなのよ。腹立つたらありやしない。やっぱり軍
人って横柄な人が多い気がするわ」

「はー、それは災難でしたね。《紅蓮の塔》で見かけた一件も誘拐
事件だったと聞きますし……。そういえば、あの事件は解決したん
ですか？」

「う、うん……。根本的な問題は残っているけど一応、解決したとは言えるかも」

「いやあ、さすがですね。最初に会った時から君たちが凄腕の遊撃士になると睨んでいたんですよ。うんうん。私の目に狂いはなかったようだ」

「や、やだな。誉めてもなんにも出ないわよ？」

「まだまだ修行中の身ですから。それよりも……教授はどうしてこんな所に？」

「それはもちろん、王都に向かう途中なんですよ。定期船を使おうと思ったんですが、ちよつとミラが心もとなくて……。まあ、考古学者は体力が命ですから足腰を鍛えることにもなりますし……。」

……ははは……ふう……」

アルバ教授は深いため息をついた。

「そ、そんなに自分を追い詰めなくても……。しかし、相変わらず極貧生活を送っているのねえ」

「文系学者のフトコロなんてみんな同じようなもんですよ。特に考古学なんて、ミラが入ればすぐに発掘に使っちゃいますから」

「だめだコリヤ。ま、それはともかく……。ここで会ったのも何かの縁よね。せつかくだから、あたしたちと一緒に王都まで行かない？」

「ちよ、ちよつとエステル。アルバ教授だって色々都合があると思っし……」

「私の方は大歓迎ですよ。街道には魔獣も出ますから、君たちと一緒にだと心強いです。まあ、ここから王都までは大した距離じゃないませんが」

「そういうことなら……よろしくお願いします」

「それじゃあ決まりね。王都に向けてレッツ・ゴー！」

「おい、あんたたち！」

向こうから兵士の部隊がやってきた。

「（あれっ……）」

「（軍の部隊みたいだね……）」

「あんたたち。エルベ離宮の見物は禁止だぞ。先日、グランセル市街に布告があつたばかりだろう？」

「???？」

「あの……。僕たちは王都民ではありません。先ほど、セントハイム門を抜けてグランセルに向かう途中なんです」

「なんだ、旅行者か……。テロリスト騒ぎの最中に徒歩で街道を旅行とはな……。ずいぶんノンキなもんだぜ」

「えっと……。テロリスト騒ぎの話はともかく。《エルベ離宮》って何なの？」

「たしか、東の方にあるリベル王家の小宮殿でしたね。普段は、市民の憩いの場所として解放されていると聞きましたが？」

アルバ教授が教えてくれた。

「生憎だが、今は立入禁止だ。テロ事件の捜査本部にするため軍が使わせてもらっているのさ」

「捜査本部、ですか……」

「離宮周辺の街道は立入禁止になっていないが……。テロリストに間違えられたくなかつたら近寄らない方が身のためだぞ」

それを言い残して、部隊は通つて行った。

「物々しい雰囲気ですねえ。私、近寄るなど言われるとかえって近寄りたくなるんですけど。どうです、ここは寄り道して離宮の近くまで行ってみませんか？」

人間の性ともいえるアルバ教授の言葉。

「う、うーん……。好奇心は刺激されるんですけど」

「警告されたばかりだし、今は止めておきましょう。兵士が言っていた通りテロリストがいるかもしれません」

「え、でもあれって……。情報部がしかしたことを親衛隊や遊撃士のせいに……」

「エステル！」

ヨシユアがエステルの言葉をさえぎった。

「（できればそのことはあまり口外しない方がいい。下手に知らせてしまったら巻き込むことになってしまうよ）」

「（そ、それもそうね……）」

エステルはうなづいた。

「????情報……何ですって？」

「え、ああ、うん。ゴメン、何でもないわ」

「そういうわけで、早く王都に向かいますよ」

「はあ……。残念ですけど仕方ありませんね」

エステルたちは気を取り直し、王都へと向かった。

第5章 王都療乱(6) (後書き)

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ王都へと入ったエステルたち。最後の五大都市での遊撃士稼業が始まる。

第5章 王都撩乱(7)

王都グランセル 南街区

「うっわ……。やっぱり大きな街よねえ。昔、父さんと一緒に来たけどこんなに大きかったかしら……」

「まあ、王国最大の街だからね。大通りの先には、女王陛下の住んでいるグランセル城があるし……。七耀教会の大聖堂や、王立競技場、各国の大使館なんかもあるんだ」

「へ、そうなんだ。でもヨシユア、結構詳しいね。やっぱり前に来たことあるんだ？」

「うん……僕も、小さな頃だけだね」

「しかし……いつ見ても美しい街ですねえ。単純な規模だったら帝都や、共和国の首都の方が大きいとは思いますが……。このグランセルには、他にない居心地の良い上品さがありますね」

「えへへ、なんだか嬉しいな。外国の人にそう言ってもらえると。そういえば……教授はこれからどうするの？滞在費用とかは大丈夫？」

「はは、実はアテがありました。《歴史資料館》という所にやつかいになるつもりなんです」

「へえ、そんな場所があるんだ」

「発掘物や美術品などを展示している博物館ですね」

「ええ、その客員としてしばらくやつかいになります。エステル君とヨシユア君もよかったら遊びに来てください」

「うー、博物館という堅苦しい雰囲気があるけど……。来たら勉強しろ、とか言わない？」

「フフフ、お望みでしたらみっちりご教授しましょう。……というのは冗談として。展示品を眺めるだけでも結構楽しいと思いますよ。では、私はここで失礼します」

アルバ教授は先に行ってしまった。

「は、何て言うか相変わらずノンキな人よね。でも、客員ということは……けっこう有名な学者なのかな？」
「うん、そうかもしれないね。さてと、まずは最初にギルドの支部に挨拶に行こうか？所属変更もあるし……博士の依頼を達成するにしてもまずは相談した方がよさそうだ」
「うーん、確かに……。考えてみれば、どうすれば女王様と面会できるのかしら。まさか、城に行けば会えるほど単純でもなさそうだし……」
エステルたちはまず、ギルドへと向かった。

遊撃士協会グランセル支部

「それでは武運を。まあ、皆さんだったら余裕で通過できると思いますが」
「へへっ、分かってんじゃねえか」
「出場するからには全力でいかせてもらうよ」
「そうですね！軍の連中には負けられません」
「さてと……。そろそろ出かけるとしようか。……ん？」
クルツがエステルたちに気が付いたようだ。
「えっと……」
「どうも、お邪魔します」
「あんたたちは……エステルとヨシユアじゃないか」
「あ……ルーアンのカルナさん！」
「そついや、空賊騒ぎの時に一度会ったことがあったっけな。たしか、シエラザードと一緒にいた新人たちだよな？」
「どうもご無沙汰してます。でも、どうして皆さんが王都に集まっているんですか？」
「それについては私から説明させていただきます。皆さんは、早く行かないと間に合わなくなると思いますよ」

エルナンがメンバーに促した。

「おっと、それもそうだね……。悪いね、2人とも。積もる話はまた後にしよう」

「それじゃあ、俺たちはこれで失礼するぜ」

「またね、新人君たち！」

「……失礼する」

カルナ、グラッツ、アネラス、クルツの正遊撃士メンバーはギルドを出ていった。

「は、あれだけ遊撃士が揃うとなんだか壮観って感じよね」

「そうだね……。みんな凄腕みたいだし。出場するとか言ってたからひよつとして……」

「ええ、お察しの通りですよ。彼らはこれから武術大会の予選に出るんです」

「へっつ……。つて。す、すみません！あたし、ツアイス支部から来たエステル・ブライトっていいいます」

「同じく、ヨシユア・ブライトです」

「私はエルナン。グランセル支部を任されています。キリカさんから連絡を頂いたのであなたたちの来訪は知っていました。早速ですが、転属手続をしていただけますか？」

「はい、わかりました」

エステルとヨシユアは転属手続の書類にサインした。

「はい、結構です。遊撃士協会、グランセル支部にようこそ。個人的に、あなたたちが来るのをとても楽しみにしていたんですよ。たしか、カシウスさんのお子さんたちなんですよね？」

「あ、うん、そうだけど……。やっぱりエルナンさんも父さんの知り合いなのよね？」

「ええ、カシウスさんにはいつもお世話になっています。聞いた話ですと、旅に出たきりお戻りになっていないそうですが？」

「うん……。しばらく留守にするって手紙はあったんだけど……」

「具体的に、どこに行くかは書かれていなかったんです。ロレント

からツアイスマで一通り回ってみたんですけど父の消息は分かりませんでした」

「ふむ、そうなると国内にはいない可能性が高そうですね。しかし、参ったな……。現在、軍のテロ対策で王都で遊撃士のメンバーが活動しにくくなっているんです。元軍人のカシウスさんならば軍で何が起こっているのかご存知かと思ったのですが……」

「……………」

「……………」

「エステルたちが黙っている。」

「おや……。どうしました？」

「えっと、実は……。あたしたち、そのあたりの裏事情を知ってたりするのよね」

「え……………」

「ツアイス地方での事件を含めて報告させていただきます」

エステルとヨシユアはレイストーン要塞で知った事実とラツセル博士の依頼について説明した。

「……………」

「あれ……。エルナンさん、どうしたの？」

「い、いや……。あまりのことに頭が真っ白になってしまいました。」

リシャル大佐による王国軍の実質的な支配……。情報部の特殊部隊によるテロ事件の自作自演……。にわかには信じがたい話ですね」

「で、でも本当なんだってば！」

「ツアイス支部のキリカさんに問い合わせてみれば判ります」

「大丈夫、あなたたちの言葉を疑うつもりはありません。むしろ、話を聞かせてもらってパズルのピースがはまった心地です。ですが、王都でのリシャル大佐の人気はかなりのものでしてね……。恥ずかしながら、話を聞くまでわたしも共感を覚えていたくらいです。ましてや、普通の市民は大佐が陰謀をめぐらせているなど夢にも思っていないでしょうね」

「やっぱりそうなんだ……………」

「さすが、情報部だけあつて情報操作は完璧みたいですね」

「遊撃士協会の性格上、軍への介入はできませんが……傍観できる状況でもなさそうです。とりあえず、あなたたちはラッセル博士の依頼を遂行していただけますか？」

「もちろん、そのつもりよ。ただ問題なのは、どうやったら、女王様に会えるかなんだけど……」

「そうですね……。普段なら、協会の紹介状があれば取り次いでもらえるはずなんですけど……」

「え、そうなの！？なんだ　心配して損しちゃった」

お気楽思考のエステル。

「エステル……。そう簡単にはいかないと思う。何といつても、城を守る親衛隊がテロリスト扱いされているんだ。それが何を意味するか分かるかい？」

「え、それつてつまり……。紹介状を握りつぶされちゃう？」

「うん、その可能性が高そうだ。レイストン要塞と同じくグランセル城もリシャル大佐に掌握されている可能性が高いと思う」

「うう、やっぱりそっか……。そうなる、簡単には女王様に会えそうもないわね」

「レイストン要塞みたいに城にも忍び込めればいいんだけど……」。

さすがに同じ手が2度通用するほど甘くはないだろうね」

「うーん……。ここで考えても仕方ないから、とりあえずお城に行ってみない？うまくすれば、門番あたりから情報が聞き出せるかもしれないし」

「それは構わないけど……。一つ注意しておくことがある。僕たちが女王陛下に面会しようとしていることは隠しておいた方がいいと思うんだ。リシャル大佐の耳に入ったら妨害される可能性が高いからね」

「あ、なるほど……」

「確かに、当面は他の遊撃士にも伏せておいた方がよさそうですね。ちなみに、王城は大通りを北にまっすぐ行ったところにあります。」

くれぐれも慎重に情報収集を行ってください」

「わかったわ、エルナンさん」

「何か分かったら報告します」

エステルたちはグランセル城へと向かった。

第5章 王都療乱（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

グランセル城へと向かったエステルたち。何か情報を得られることができるか！？

第5章 王都撩乱(8)

グランセル城 城門前

「うわ〜……。あれがグランセル城ね。女王様が住んでるだけあつて、さすがに立派でキレイよねえ……」

「うん……。ただ綺麗なだけじゃなくてかなり堅牢な造りみたいだね。あの巨大な城門が良い例だよ」

「確かに、あれじゃあ簡単に中に入るのは無理っぽいわね」

「となると、あそこの兵士さんから話を聞くしかなさそうだけど……」

「まずは地道に行ってみようか。……田舎から来たばかりでお城の中を見学してみたい。ついでに、女王陛下のお姿を一目でいいから拝見したい。そんな設定でいいかな？」

「相変わらず、涼しい顔してすぐに出まかせを思いつくわねえ。いつも感心しちゃうわ」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

エステルたちは城門の門番に話しかけた。

「あの〜、こんにちは〜」

「よう、こんにちは」

「グランセル城へようこそ。どういった御用かな？」

「僕たち、ロレントから王都見物に来たばかりなんです。せっかくだから、お城の中を見物させてもらおうと思つて……」

「ああ、なるほどね。申しわけないが、グランセル城は関係者以外、立入を禁止してるんだ」

「テロ騒ぎがあつたせいでチェックが厳しくなつてしまつてね。まあ、テロリストたちが捕まれば見学も許されるようになると思うよ」
「そうなんだ……。ガツクシ。それじゃあ、女王様の姿を見るなんて夢また夢かしら……」

「そうだなあ……。生誕祭当日は、城のテラスからいつも市民に挨拶

拶してくださるから拝見する機会はあると思うけど……」

「でも最近、陛下もお身体の調子が悪いみたいだからねえ。いつもの挨拶もあるかどうか……」

「え……!?」

「あの……。女王陛下はご病気なんですか？」

「ああ……。心労によるものらしいけど……。信頼していた親衛隊にテロ事件の容疑がかけられた事がよほどショックだったみたいだね。最近、謁見の場にも現れずに女王宮で静養されているそうだよ」

「そうなんだ……」

「まったく、親衛隊の野郎どもめ。陛下の信頼を仇で返すとはな……。普段からエリートぶってていけ好かないと思ってたんだ」

「で、でもさ、ユリア中尉は色々親切にしてくれたじゃないか。俺たちがテロリストなんてちよつと信じられないんだけど……」

「そ、そんなのあたりまえだ！たぶん彼女は、部下の不祥事に責任を感じて姿を消しただけさ！ああ……。何て気の毒なユリアさん……」

「（要するにこの人って……。ユリアさん絡みで他の隊員に嫉妬してるだけなんじゃ……）」

「（うん、そうみたいだね……）」

「ゴホン……。まあ、そういうわけでグランセル城は立入禁止だ」

「悪いけどお引き取り願おうか」

「はあ、そういう事情じゃあきらめるしかないかあ……」

「ただ、ちよつと心配ですね。女王陛下の健康ももちろんですけど、政務の方は大丈夫なんでしょうか？」

「ああ……。その心配はごもつともだ。一応、名目上の代理はいらっしやるんだけどね……」

「名目上の代理？」

「はは。文字通り、名目上のだけ。あの方ほど政務という言葉が似合わない人も珍しいからなあ」

「おいおい、口を慎めよ。まあ確かに、姫様の方がよほど向いているとは思っけど……」

「ほーらみる、お前だって……」

その時、グランセル城から鐘が鳴った。

「な、なに……?」

「おっと、お出ましのようだな」

城門が開き、中から出てきたのは……

「ええい、まったく何たることだ!とつくに予選試合が始まっている時間ではないか!フィリップ!お前が起こさなかったせいだぞ!まさかのデュナン公爵!

「申しわけございません、閣下。ですが閣下も、規則正しい生活を心がけて頂けませんと……。ここ数日、宴会の席ばかり設けて呑めや歌えやの大騒ぎ……。ビールとドーナツを一緒にお召し上がりになりながら朝まで劇画雑誌を読みふける……。そのような調子では寝過ごされるのも無理はないかと……。最悪の生活習慣……」。

「黙れフィリップ!お前の小言はもう聞き飽きた!次期国王たる私には、好きな時に好きなことをする資格があるのだ!ええい、時間が惜しい!急いで王立競技場グランアリーナに向かうぞ!」

デュナン公爵は執事フィリップを連れて行ってしまった。

「……えーと……」

「……あの、もしかして……」

「分かってる、みなまで言うな。今のが、陛下の代理として政務を担当している公爵閣下だ」

「は、激しく頭が痛くなってきたんですけど……」

「ま、まあ心配しなくても頼もしい補佐がいるから大丈夫さ。その人のおかげで、今のところ大した問題は起こっていないしね」

「頼もしい補佐……ですか」

ヨシユアの目が光った。

「へへ、王国軍情報部のリシャル大佐という人でね。道楽者の公

爵閣下に代わって政務を一手に引き受けているらしい」

「（や、やっぱり……）」

「（予想以上に、王国の中枢に食い込んでいるみたいだね……）」

「まあ、城内見物は無理だけど、そんなに気を落とさないでくれや。」

グランセルの街には他にも名所がたくさんあるからな」

「せっかくの王都見物だ。のんびり観光を楽しむといいよ」

「う、うん、そうするわね」

「親切にありがとうございます」

エステルたちはグランセル城を後にした。

第5章 王都療乱(8) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

リシャール大佐は公爵を名目に立て、王国の実権を握っているらしい。エステルたちは公爵の動向を調べるため、グランアリーナに向かう。

第5章 王都撩乱(9) (前書き)

武術大会を観戦!

第5章 王都撩乱(9)

城門前の通りでエステルたちが得た情報を整理する。

「うーん……。予想以上に収穫があったわね。それにしても、あの公爵が女王様の代理をしているなんて……」

「実権を握っているのはたぶんリシャール大佐だろうね。しかも、自分が黒幕であるのを周りに気付かせていないみたいだ。正直、情報操作の手腕はかなりの物だと思うよ」

「もう、ヨシユアってば。敵を誉めてる場合じゃないわよ。それよりも、あの公爵、武術大会に行くつもりみたい。ね、あたしたちも行ってみない？」

「そうだね……。確かに、公爵の動向は調べておいて損はなさそうだ」

「それじゃあ決まり！えっと、グランアリーナ王立競技場ってどっちの方角にあるんだっけ？」

「たしか東街区だったはずだよ。大通りを戻って東の方に向かおうグランアリーナエステルたちは東街区の王立競技場に向かった。

王都グランセル 東街区

「グランアリーナ王立競技場へようこそ。チケットをお買い求めですか？」

受付のリーファが尋ねた。

「あ、はい。2人分お願いします」

「本戦は明日から3日間ございますが……。どの日になさいますか？」

「本戦……？」

「あの、明日からではなくて今行われている予選の試合が見たいんですけど……」

「あら、失礼しました。もう半分以上、試合は終わってしまったと思いますけど……。それでも構いませんか？」

「あ、いいですいいです」

「それでは……。お2人分を合わせて1000ミラになります」

「わ、結構するものなのね」

「たしか生誕祭の武術大会は割引されると聞きましたけど……」

「大変申しわけありません……。今年はその、色々と例外措置が取られているみたいでして……」

「ふーん……。そういう事なら仕方ないか。えっと、1000ミラと……」

エステルは1000ミラを支払った。

「毎度ありがとうございます。それではチケットをお受け取りください」

エステルは観戦チケットを2枚受け取った。

「グランアリーナの入口は左手正面にございます。そのチケットを入口の係員にお見せください」

グランアリーナ 入口

「現在、当アリーナでは武術大会・予選試合が開催中です。ご入場の方はチケットをお出してください」

エステルは観戦チケットを2枚渡した。

「はい、結構です。それではお入りください」

グランアリーナ

内装は王家が建てたにふさわしい装飾が施されていた。

「うわぁ……。これまた豪華な広間ねえ」

「ここが玄関ホールだね。どうやら観客席は2階にあるみたいだ」「うん、行ってみましょ」

観客席はほぼ満席に近かった。

「うわぁ……。いっぱい入っているわね〜！」

「うん……。すごい熱気だね。予選からこの数っていうことはかなり大きなイベントみたいだ」

「予選試合、どこまで進んでいるのかな」

「お待たせしました。これより第7試合を始めます」
司会の声が流れてきた。

「あ……。始まったみたい」

「それじゃあ、どこか空いている所に座ろうか」

「南、蒼の組。国境警備隊、第2連隊所属。バウル少尉以下4名のチーム！」

左の門から兵士たちが現れた。

「あれっ……。試合って1対1じゃないんだ？」

「うん、団体戦だったみたいだね。僕の記憶だと確か個人戦だったはずだけど……」

これが例外措置だったようだ。

「北、紅の組。遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！」

「あつ、カルナさんたちだわ！」

「危うく見逃すところだったね」

右の門から遊撃士チームが現れた。

「これより武術大会、予選第7試合を行います。両チーム、開始位置についてください」

両チームが開始位置についた。

「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、クルツチームの勝ち！」
結果は遊撃士チームの圧勝だった。

「やったああーっ！すごいわ、カルナさんたち！」

「うん、いい勝負だったね。軍人たちもいい動きだったけど連携攻撃と役割分担の上手さで遊撃士チームには及ばなかったな」

「うんうん！戦い方の参考になりそうね！いやあ、なんとというかこの武術家としての血が騒ぐわねえ。お城に行くのは後回しにして最初の試合が見たかったあ〜」

「はは、気持ちは分かるけど。そこを我慢するのが一人前の遊撃士じゃないかな」

「フン、だ。どうせ半人前ですよーだ」

「……続きまして、これより第8試合を始めます。なお、この試合をもちまして予選試合は終了となります」

「南、蒼の組。チーム《レイヴン》所属。ベルフ選手以下4名のチーム！」

「あ、あの連中！？」

「ルーアンの倉庫街にいた不良グループのメンバーだね。なるほど、普通の民間人にも開かれている大会なのか……」

「はあ、場違いもいとこだわ……。戦闘や武術のプロが集まっているのにあんな連中が敵うわけじゃない」

「北、紅の組。隣国、カルバード共和国出身。武術家ジン選手以下1名のチーム！」

「ジ、ジンさん！？」

「また知り合いか……。世間は狭いって感じだね。でも、1人で出場なんてさすがに不利だと思うけど……」

「確かに……。いくら相手がチンピラでも囲まれちゃったらマズイかも」

「ジン選手は今回の予選でメンバーが揃わなかったため1名のみで

の出場となります。著しく不利な条件ではありませんが本人の強い希望もあつたため今回の試合が成立した次第です。みなさま、どうかご了承ください」

「これより武術大会、予選第7試合を行います。両チーム、開始位置についてください」

「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ジン選手の勝ち！」

開始早々囲まれてしまったジンだが、得意のパワーと体力で圧勝した。

「ひゃっほーっ！さすがジンさん、圧倒的！」

「余計な心配だったみたいだね。あの巨体で、動きも速いし、技のキレも凄まじいものがある。ただ、さすがに本戦になったら1対4は厳しいとは思っけど……」

「うーん、確かに……」

「ただ今の試合をもちまして予選試合は全て終了となりました。本戦出場チームは8組。明日から3日間にわたって開かれる、トーナメント戦で優勝チームを決めます。それでは最後に、大会主催者であるデュナン公爵閣下から挨拶があります」

観客席の反対側にある特別席にいたデュナン公爵がしゃべり始めた。「ウオツホン！あー、親愛なる市民諸君よ、本日はわざわざの観戦ご苦労だった。私は残念ながら、政務で忙しかったため前半の試合を見逃してしまったが……。後半から見た試合はどれもレベルが高く非常に楽しませてもらい、また興奮した！最近、テロ事件に陛下の健康不調と深刻なニュースばかり続いているが……。だが、どうか安心して欲しい！陛下から政務を託された者としてこのデュナン・フォン・アウスレーゼ、身を粉にして諸君らの期待に応えよう！そして、この武術大会の活気が諸君らの気持ちを明るくするのに役立つ

つてくれればと思う次第である！明日からの本戦を、どうか楽しみにして欲しい！」

観客席から拍手が起こった。

「あ、あの公爵さんにしては言ってることがマトモすぎる……」

「多分、情報部のスタッフが文面を考えているんだろうね」

それ以外にも寝坊を政務のせいにして……。

「はっはっは……。おお、そうだな。大会の優勝者には、賞金とは別に私からのプレゼントを用意しよう！」

「（か、閣下……。勝手によろしいのですか？）」「
執事フィリップが後ろからささやいた。

「（うるさい、黙っておれ。私の気前の良さを見せる良い機会だ）」「
デュナン公爵は向き直り、

「そのプレゼントとは……。3日後にグランセル城で行われる宮中晩餐会への招待状である！陛下は残念ながら出席されないが各界の名士が集う、最高の晩餐会だ。王侯貴族のみに許された、最高の料理ともてなしを約束しよう。今日勝ち残った出場者は、どうか励みにして頑張ってほしい！」

そうして、予選試合は締めくくられた。

第5章 王都療乱(9) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

優勝者はグランセル城に招かれることになる。グランセル城に入るのはこの方法しかないと思ったエステルたちが思いついたこととは!?

第5章 王都撻乱(10)

観客席が空いた場所でエステルとヨシユアが相談していた。

「ねえ、ヨシユア……。カルナさんたちに会っておいの方が良い？」

「うん、僕もそう思う。彼らが優勝できたら正々堂々とグランセル城に入ることができる。例の事を、女王陛下に伝えるチャンスだつてあるかもしれない。そういうことだね？」

「うん……。博士の依頼を他人任せにするのはイヤだけど……。こたわっている場合じゃなさそう」

「僕は異存はないよ。まだ帰っていないかもしれないし選手室の控室に行ってみようか？」

「うん、そうね。えっと、確かカルナさんたち、北側のゲートから出てきたっけ？」

「うん、いるとしたら北の方にある控室だと思う」
エステルたちは北側の控室に向かった。

グランアリーナ 北側控室

「カルナさんたち！ 予選突破、おめでと〜！」

「あつ、新人君たちだ！」

「おや、あんたたちが」

「よお、ひよつとして試合を見に来てくれたのか？」

「はい、ちょうど先輩方の試合を見ることができました。すごく良い試合でしたね」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ。今回はいきなり団体戦に変更されたから戸惑ったがね」

「うんうん。本当にアセりましたよね」

「あたしたちはまだいいさ。何とかメンバーも揃ったんだ。ジンの旦那なんか正直、困ってるんじゃないかねえ」

「あ、カルナさんたちもジンの知り合いなんだ？」

「ま、知り合って間もないけど名前だけは知っていたからねえ。『不動のジン』って言って共和国じゃ有名な遊撃士なのさ」

「どうやら、武术大会に出るためにリベルにやって来たらしいが……。さっきも言ったように大会が個人戦から団体戦にいきなり変更されてしまったんだ」

「これが、例の公爵閣下の思い付きだったらしくてな。で、ジンの旦那は仕方なく1人で登録する羽目になったわけさ」

「そうだったんだ……。まったく、あの公爵つてのはロクでもないことばかりするわね」

「はは、違うない。しかし、このまま彼の実力が発揮されないのは惜しすぎる」

「だな。無名でもいいからある程度戦えるヤツがいれば……。……おっ！？」

「……おや……」

「……ふむ」

「……いいかも……」

グラッツ、カルナ、クルツ、アネラスの全員がエステルとヨシユアを見た。

「?????な、なんなの？マジマジと見ちゃって……」

「いや、ものは相談だが……。君たち、ジンさんに協力して本戦から出場してみないか？」

「え……。ええええええ！？」

「本戦からの参加って……。そんなの大丈夫なんですか？」

「まあ、いきなり個人戦から団体戦に変更されたわけだからね。ルールの固まっていなくてある程度の融通は利くらしいのさ」

「ジンの旦那も遊撃士の助っ人が他にいないかエルナンに頼んだみたいでな。ただ、シエラザードは忙しいらしいし、アガットのヤツ

とは連絡がとれない。他の連中も似たようなもんらしいぜ」

「カシウスさんに至っては国内にいないみたいですからねえ。ま、あの人とジンさんが組んだら反則っていう気もしますけど……」

「はは、我々程度では万が一にも勝ち目はないだろうな。……そういうわけだから前向きに考えてみたらどうか。今日中にジンさんと決めれば明日の選手登録に間に合うはずだ」

「う、うん……」

「おっと……長話しすぎちゃったようだね。それぞれの依頼も抱えているし、あたしたちはこれで失礼するよ」

「ばいばーい、新人君たち！」

「へへ、試合場で手合せできるのを楽しみにしてるぜ」
遊撃士メンバーは引き上げていった。

「……どうしよう、エステル？仕事の相談をするつもりが変な話になっちゃったけど……」

「……えへへ……。……むふふ……」

エステルが変に身震いしている。

「エステル、だ、大丈夫？」

「来た、来た……。キタ (？) (？) ……!!!」

エステルが絶叫した。

「そうよ、そうなのよ！やっぱりそーこなくっちゃ！ああん、女神様！大いなる加護を感謝いたします〜！」

「……。エ、エステルが壊れた……」

エステルの様子を哀れな目で見えるヨシユア。

「考えてもみなさいよ。武術大会に出られるのよ！？困ってるジンさんに協力できる……。あたしたちは城に堂々と入れる……。ついでに白熱したバトルもできる……」

「ついでとは言っているが今のエステルにとってはバトルが気持ちの8割を占めているだろう。」

「これぞまさに一石三鳥！」

「そ、そんなに良かったのか……。まあ、優勝できると決まった

わけじゃないけど……。僕たちの手で、依頼を達成できる可能性が出てきたのは嬉しいな」

「うんうん 何と言ってもそれが大きいよね！」

ホンマかいな……。

「……こうしちゃいられない！早速ジンさんに頼んでみるしか！」

エステルが慌てて控室を出て行こうとした時、

「ところで、ジンさんがどこにいるのか知っているのかい？」

「……そーいえば」

気持ちだけ、先走って、空回り

「まったくもう……。ちよつとは落ち着きなよ。とりあえず、ギルドに戻ってエルナンさんに報告しておこう。彼だったら、ジンさんがどこにいるかも知っているはずだよ」

エステルたちはギルドへと戻った。

第5章 王都撩乱（10）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

なんだかんだでエステルたちは武術大会に参加することに。とりあえず、ジンさんを探すことにした。

第5章 王都撩乱(11)

遊撃士協会グランセル支部

「なるほど、確かにジンさんから遊撃士の助っ人は頼まれていました。あなたたちは博士の依頼があるのであえて紹介はしなかったのですが……。公爵閣下の気まぐれのおかげで依頼と大会が重なったわけですね」

「えへへ、結果的にだけど公爵のワガママに助けられちゃった」

「武術大会への参加……。エルナンさんはどう思います？」

「そうですね……。打てる手は全て打っておくという意味では試してみる価値はあると思いますよ。クルツさんたちに相談するのは彼らが優勝した時でいいでしょう。あなたたちは全力で挑戦してみてください」

「やった、そうこなくっちゃ！早速だけど、ジンさんがどこにいるのか教えてくれる？」

「普段は、この建物のすぐ側の酒場にいるみたいです。あと、王都での滞在先はカルバード大使館だそうですよ」

「なるほど。ジンさんの祖国の大使館ね」

「共和国大使館は、競技場と同じ東街区にあるはずだよ。あと、その酒場も覗いてみた方がよさそうだね」

「うん、オッケー！」

「ああ、そういえば……。あなたたちは王都に滞在中、どこに泊まるおつもりですか？」

「うーん。多分ホテルになると思うけど……」

「確か、王国最大のホテルが北街区にありましたよね？」

「ええ。ホテル・ローエンバウムです。差し支えなかったら、私の方で部屋を取っておきましょうか？ミラも王都支部が持ちますよ」

「ええっ、いいの!？」

「さすがにそこまでして頂くわけには……」

「博士の依頼の必要経費として認めましょう。このくらいしか出来なくて申しわけないのですが……」
「うん、とても助かったやう！」
「そういう事なら……。お言葉に甘えさせてもらいます」
「では、私の方からホテルに予約を入れておきましょう。夕方以降、フロントで名前を言えば部屋に案内してくれるはずですよ」
こうして、滞在先を確保したエステルたちはジンを探し始めた。

まずは近場にある居酒屋のに入ろうとすると、エステルが足を止めた。

「あ……。これって……ピアノ？」

「うん、レコードじゃないね。中で誰かが引いているみたいだ弾いているみたいだ。このメロディー、どこかで聞いた覚えがあるんだけど……」

「なぐんかイヤな予感が……」

そんな予感を持ちつつ、中に入ると……。

「(……) やっぱりお調子者のオリビエか。でも、演奏家なんてただの自称かと思っただけ……)」

「(かなりの腕前みたいだね。プロの演奏家を名乗るだけはあるんじゃないかな)」

「(うん……。ちょっとじーんと来ちゃうかも)」
ピアノの演奏が終わると拍手が起こった。

「……今のは『琥珀の愛』といってね。本来は、オペラに使われる間奏曲でしかないのだけど……。そこはそれ、愛と真心でカバー。尽きせぬ愛とともに君たちに贈らせてもらうよ」
相も変わらずお調子発言。

「相変わらずのマイペースっぷりねえ……。はあ……。感動して損し

た気分だわ」

「お久しぶりです、オリビエさん。王都に来ていたんですね」

「それはもちろん、大河に零れた人魚の涙が海に辿りつくように……。こうしてボクは、黒髪の王子様と感動の再会を果たしたわけさ」
そして片手で髪をかき上げるオリビエ。

「……本当に相変わらずですね」

「あー、はいはい。タワゴトはそのくらいにしてあたしたちを席に案内しなさいよ。気障なカツコしてるクセに気が利かなくなったらありゃしない」

「エステル君……なんだか手強くなってるない？」

席に着いたエステルたち。

「たしかオリビエ、シエラ姉と一緒にロレントの方に行ってたわよね？いつから王都に来てるの？」

「うーん、一月前くらいかな？君たちと別れてからロレントの街でシエラ君と共にしばらく甘い一時を過ごしたのさ。だが、所詮ボクは漂泊の詩人にして演奏家……。シエラ君が涙ながら引き留めるのを振り切って麗しの王都に流れてきたわけだよ」

「何と言うか……。信憑性ゼロの話ですね」

「おおかた、シエラ姉の酒に每晚付き合わされた拳句、たまらず逃げ出したんでしょ？」

エステルが得意げに言い当てる。

「ギクッ……」

「あと、アイナさんにまで酒を付き合わされちゃったとか？」
そついうと、オリビエの表情が静止した。そのまま何も喋らなくなつた。

「あれ、オリビエってばアイナさんのこと知らないの？シエラ姉の親友で、ロレント支部に受付やってる人なんだけど。ウワバミ度で言えばシエラ姉を上回るとい……」

「……ハハハ。やだナア えすてるクン？ソナン名前ノ 人ナンカ
ミタコトモ キイタコトモ ナイヨ？」

「……声が完全に裏返ってるんですけど……」

「エステル……そのくらいにしといてあげなよ。つらい……とても
つらい事があったんだと思う」

「ブツブツ、まさかシエラ君以上に底ナシだったなんて……。……
あああ……。……。穏やかに微笑みながら注ぎ込むのはやーめーてー
！」

その場にいたものが全てオリビエに注目した。

「フ、フラツシュバツク！？」

「アイナさん最強伝説が着実に出来上がりつつあるね……」

「はあはあはあ……。まあ、それはともかく……。キミたちは他の
地方を回りながら王都まで来たんだろう？何か面白いことはあった
かい？」

「うーん、いっぱいありすぎて簡単には説明できないかも……。そ
れに今、人捜ししてるから今度会った時でもいい？」

「へえ……。いったい誰を捜してるんだい？」

「ジンさんといって、カルバード共和国から来た武術家の遊撃士で
す。よく酒場に来ているらしいんですけど、オリビエさん、ご存じ
ありませんか？」

「ああ！あの熊のように大きな御仁か。何度かお目にかかった事は
あるけど今日はまだ見かけてないねえ」

「そっか……。今日は酒場に来ないのかな？」

「カルバード共和国の大使館にいる可能性が高そうだね」

「フツ……。早速、行ってみるとしようか」

「だ〜から、なに自然な流れで付いてこようとしてんのよっ!？」
「ハッハッハッ。つれない事を言うもんじゃないよ。旅は道連れと

もいうし、ボクも人捜しを手伝おうと思ってね。それとも……。邪魔されたくないのかな？」

「な……！」

「いやはや。初々しいっいたらありやしない。蕾であることを自覚したばかりで咲くのを恐れたためらう乙女……。……フフ、いい感じで色気が出てきたみたいだねえ」

オリビエの目が妖しく輝いた。

「……………」

「???何を言ってるんですか？」

「フフフ、それはねえ……」

「せいやっ！」

エステルが素早く棒を抜き、オリビエを吹っ飛ばした。

「あ〜れ〜っ！」

オリビエが店の中に消えていった。

「うわああ、なんだ〜っ!？」

「お、お客さん、しっかり！」

「だめじゃ……。白目をむいているわい……」

店の中では慌ただしくなっている。

「エステル……。何を怒っているのかしらないけど、ちょっとやりすぎなんじゃ……」

「……インパクトをずらして派手に吹き飛ばしただけだもん。大したダメージじゃないわよ」

「フフフ……。エステル君の……。照れ屋さん……」

オリビエの声が店の中から聞こえてきた。

「……確かに大丈夫そうだね」

「ほらほら、人捜し再開。グズグズしてないでとっと大使館に行くわよ」

「(……………なんで僕まで怒られるんだろう?)」

毎度のごとく、ヨシユアにはわけが分からなかった。

第5章 王都撩乱（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

酒場にはお調子者のオリビエがいただけだった。次に向かうはカルバード共和国大使館。

第5章 王都撻乱(12)

共和国大使館前

「おっと、こちらはカルバード共和国大使館っす。何の御用っすか？」

門番の兵士タクトが尋ねた。

「あの、ここに泊まっているジンって人に用があるんだけど……」

「お手数ですが取り次いで頂けますか？」

「へえ〜。ジンさんに会いに来たんすか？オレ、最初あの人を見たとき、少しチビリそうになったんすよね。王都の真ん中で熊が！？とか思っちゃったッスから」

「あはは、ジンさん大きいもんね」

「でも、話してみると気さくで優しい人なんすよね〜。交替前で腹空かしてる時に肉まんを差し入れてくれたし」

「うんうん。頼りになるアニキって感じよね」

「コホン……。それでジンさんに取り次いで頂けますか」

「あ、それなんすけど……。ジンさん、さつき帰ってきてからまた出かけちゃったんすよね。武術大会の本戦に備えて修行の場所を探してるみたいで」

「しゅ、修行の場所？さっすが本格的なのね〜」

「具体的には、どこに行くとか言ってますでしたか？」

「郊外にある《エルベ周遊道》に行ったみたいッスね。森の中にある公園って感じだから静かで修行にもってこいらしいッス」

「《エルベ周遊道》か……。僕たちも行ってみようか？」

「もちろん！早いところ相談しなくちゃ！」

「ああ、周遊道に行くんだったらひとつ気を付けて欲しいッス。奥の方に《エルベ離宮》っていう王家の建物があるんすけど……」

「あ、それ、前に聞かされたわ」

「テロ事件の対策本部にするため、軍が立入禁止にしてるんですけどね？」

「なんだ、知ってたツスか。……あそこに詰めてる連中は色々うるさいから注意するツス。近寄らない方が一番いいツスね」

兵士タクトがそつと耳打ちした。

「ふーん、色々うるさい連中か。目をつけられたらヤだし、なるべく近寄らないことにするわね」

「ご忠告、ありがとうございます」

エステルたちはエルベ周遊道に向かった。

第5章 王都療乱（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

エルベ周遊道に向かったエステルたち。その先で出会うものとは？

第5章 王都撩乱（13）（前書き）

読者の皆様、お久しぶりです。活動報告にも書きましたが、最近、交通事故を起こし、死にかけました（汗）。しかし、今日ここに復活を宣言します。つきましては、この日を建国記念日改め、復活記念日と致します！ 冗談です。とにかく、今日からまた毎日更新したいと思います。長いことお待たせしました。今回はオリジナルの小説を少しはさんでみました。

第5章 王都撩乱(13)

キルシエ通り

エルベ周遊道に向かう途中、エステルがふいに立ち止まる。

「ねえ、ヨシユア。リシャール大佐って何がしたいんだろう?」

「そうだね。少なくとも、王国の支配だけが目的じゃないはずだ」

「え、どうして?」

「王国の支配が目的ならば、ゴスペルを手に入れて解析することに説明がつかない。つまり、王国の実権を握るのは、次の目的のために必要なことだと思う。ゴスペルは導力停止現象を起こすものだ。大佐はその導力停止現象を起こすゴスペルを用いてもっと大きな目的を達成しようとしていると僕は思うんだ」

「なるほど。……………」

エステルは黙り込んだ。

「そんなものを使ってなにがしたいんだろう?」

「深く考えたって何もわからないよ。今言えるのは、それを止めるのが僕たちの使命じゃないのかい?」

「うん、そうね。それじゃあ、今はジンさんを探すのに集中しまし
よ」

エステルたちはキルシエ通りを進み、エルベ周遊道を目指した。

第5章 王都撩乱(13)(後書き)

次回も今日更新予定です。

第5章 王都療乱(14)(前書き)

ジンを探しにエルベ周遊道を歩いていると……。

第5章 王都撩乱（14）

エルベ周遊道

キルシエ通りから分岐したエルベ周遊道は木々に囲まれた静かな場所だった。

「エルベ周遊道か……。森の中なのに石畳があるなんて、ちょっと面白いわね」

「王都市民の憩いの場所としてずいぶん昔に造られたみたいだよ。ざっと数百年は経ってるんじゃないかな？」

「ふーん……。さすがは女王様のお膝元ね。でも何だか、魔獣の気配がプンプンするんですけど……」

エステルが周りの気配を確認すると、そこら中から魔獣の気配が漂ただよっている。

「さすがに鋭いね。多分、さきの通りよりも危険な魔獣がいると思う。気を抜かないでジンさんを捜そう」

「……いやああっ！」

すこし遠くから女の人の悲鳴が聞こえてきた。どうやらただ事ではないようだ。

「女の人の悲鳴!？」

「奥の方だ、急ごう!」

エステルとヨシユアは奥に急いだ。

「きゃああああ〜っ！助けて〜っ！誰か助けてください〜っ！」

魔獣が女の人、シスターを襲おうとした時、エステルとヨシユアが割り込んだ。

「え……」

「シスター！もう大丈夫だからね！」

「危ないですから下がっててください！」

「ふう……。なかなか手強かったわね。シスター、大丈夫だった？」
「は、はい……。おかげさまで。あの、あなた方はいつたい？」
「僕たちは遊撃士協会の者です。人を捜している途中であなたの悲鳴を聞いたので……」

「そう……。でしたか……。……。……。……。……。だ、大丈夫？
？なんだか元気ないけど……。ひよっとしてケガでもしてるの？」

「いいえ……。おかげさまで無事でしたわ。私、王都の大聖堂に勤めるシスター・エレンと申します。本当にありがとうございます」
「あはは。お礼にはおよびませんってば」

「それにしても、聖職者の女性がこんな場所で1人きりているなんて……。お連れの方とかはいらっしゃらないんですか？」

「ええ、私1人きりなんです……。実は、大聖堂で調査に使っているハーブを切らしてしまって……。お店でも品切れだったのでつい摘みに来てしまったんです……」

「あ、危ないわねえ。こんな魔獣だらけなのに……」

「いえ、普段はここまで魔獣は多くなかったのですが……。どうやら最近になって増えてしまったみたいで……。あっ……」

シスターが後ろを振り返ると、さっきの魔獣が大勢やって来た。

「な、なによコイツら……！」

「どうやら騒ぎを聞きつけて集まってきたみたいだね……。さすがにこの数はやっかいだな」

「うん、いざとなったらシスターだけでも逃がさなきゃ」

エステルとヨシユアが画策していると、

「よう、お困りのようだな？」

魔獣の後ろから、ジンがやって来た。

「あ、ジンさん!？」

「よかった……。気付いてくれたんですか」

「へへへ。誰かと思えばお前さんたちか。ま、積もる話は後回しにしてとつとコイツらを片付けてちまうぞ!」

「うん!」

「了解です!」

「やれやれ……。おかげで良い汗かいた。しかし、お前さんたちとここで会えるとは思わなかったぜ。ツアイスの方で仕事をしていたんじゃない?」

「あはは、確かにあれからそんなに経ってはいないかもね」

「実は僕たち、ツアイス支部からグランセル支部に移ったんです」

「ほう、そうか。ってことは、例の誘拐事件、なんとか解決できたみたいだな。あの毒をくらった赤毛のアンちゃんは元気かい?」

「うん、もつピンピンしてるわ」

「……………」

様子を見ていたシスター・エレンが話に入ってきた。

「おっと、こいつは失礼……。……………ハッ……………」

ジンが顔を変えて、ヨシユアに耳打ちした。

「(おいおい……。えらくベツピンさんじゃねえか。お前さんたちのツレかよ?)」

「(いえ、僕たちもさつき知り合ったばかりですけど……………)」

「まったく、鼻の下を伸ばしてみっともないわね。キリカさんに言いつけちゃうわよ?」

「ギクツ……。俺はただ客観的な事実をだな……。って、なんでそこにあいつの名前が出てくるんだよ?」

「あの……。危ないところを本当にありがとうございました。みなさ

んは命の恩人ですわ」

「いやいや、お気になさらずに！男として、武侠の道に生きる者として当然のことをしたままでですよ！」
ジンが我先にと話した。

「まあ……」

「（何をカッコつけてるんだか……。ジンさんって実は女の人に弱かったのねえ）」

「（はは……。何となくらしい気もするけど）」

エステルとヨシユアが話していると、

「お前たち、何をしている!？」

後ろから何度も見ている黒装束の男たちが来た。

「え……。!？」

「……………」

「こんな人気のない場所で密談するとは怪しい奴らめ……」

「もしや……。テロリストではないだろうな？」

「だ、誰がテロリストよ!? あんたたちの方が」

エステルが逆上した時、ヨシユアが割り込んだ。

「……僕たちは遊撃士協会、グランセル支部に所属する者です。先ほど、こちらのシスターが魔獣に襲われていたので保護しました」

「なに……!？」

「遊撃士だと!？」

「あの……。その方たちの仰ることは本当です。わたくし、薬草を摘みに来て魔獣に襲われそうになって……」

「ついでに言えば、俺も遊撃士でね。たしか、あんたたちの仲間とは予選で顔を合わせているはずだが？」

「カルバードの武術家……。あの1人で戦っていたヤツか……。ふん……。身分だけは確かのようなな。」

「今回だけは見逃してやろう。だが、ここはエルベ離宮の近くだ。用もなくうるつかないでもらおうか」

「それと、シスターどの。貴女のことは、自分たちが王都まで送っ

ていきましょう。遊撃士風情の手を借りるまでもありません」

「え、で、でもわたくし……」

「むっか、ちよつとあんたたち！さつきから聞いていれば失礼なことばかり言って……」

「エステル……いいから。以後、気を付けますから大目に見て頂けると助かります」

「ふん、まあいいだろう。お前たちは所詮、民間人だ。おのれのをわきまえるのだな」

「さあシスターどの、行きますよ」

「は、はい……。あの、みなさん……。本当にありがとうございました」

そうして、シスター・エレンと黒装束の男たちは行ってしまった。

「な、な、な……何様のつもりよ、あいつらっ！」

「王国軍の情報部に所属する《特務部隊》とかいう連中だな。腕は立ちそうだが、どうにも陰険そうな連中だねえ」

「ああいうのは陰険っていうよりも性悪っていうのよっ！って、あれ……。どうしてジンさんが、あの連中のことを知ってるの？」

「ああ、武術大会の予選で連中のチームが出場してたんだ。その時に、そう紹介されてな」

「（あの連中が出場……！？隠密活動をしていた連中が堂々と姿を見せるなんて……）」

「（たぶん、存在を隠す必要も無くなったということだろうね……）」

「まあ、因縁をつけられる前にとっと街に退散するでしょうか。……そういや、お前さんたちどうしてこんな所にいるんだ？」

「あ……肝心なこと忘れてたわ。それが実は、ジンさんのことを捜してたのよ」

「あん、俺を？」

「実は、ジンさんをお願いしたいことがあるんです。武術大会のことなんですけど……」

第5章 王都撩乱(14) (後書き)

本日2月11日の20時にも王都撩乱(15)を投稿します。是非、読んでください。

第5章 王都撩乱(15)(前書き)

武術大会に向けて、ジンと話していると…。

第5章 王都撩乱(15)

居酒屋 《サニーベル・イン》

エルベ周遊道から戻ったエステルたちは武術大会のことに關してジンに話した。

「……なるほど、そういう事かい。ひとつ聞いておくが、なんで武術大会に出たいんだ？」

「えっと……。予選を見てたら身体がウズウズしてきちゃって。手強い相手と、思いつきり戦いたくなっちゃったのよね。」

「僕たちは、正遊撃士を目指して王国各地を旅してきました。今までの修行の成果を試してみたくなっただんです。」

「ふーむ……。いいぜ。一緒に組むとしようや。明日、大会が始まる前に選手登録をすりゃあ大丈夫だ。」

「やったあ？……て、即答しちゃってもいいわけ？」

「お前さんたちの腕前は前に見させてもらってるからな。助っ人としては十分すぎるぜ。」

「えへへ……。ありがと、ジンさん！あたし、精一杯がんばるから！」

「よろしくお願ひします。」

「こちらこそよろしくな。しかし、1人でどこまで通用するか挑戦してみるつもりだったが……。助っ人が加わったからには優勝を目指さないと話にならないな。」

「モチのロンよ！出場するなら優勝あるのみ！」

「でも、そうなって来ると1人足りないのは苦しいですね。団体戦の定員は4人ですから。」

「あ、そっか……。1人足りないことになるわね。でもまあ、そこは何とか気合で乗り切るしか！」

「いや、上を目指すんだったら準備は万全にしておくべきだぜ。戦いってのは拳コブツを交える前からすでに始まっているもんだ。」

「う……確かにそうかも。こういう時に、シエラ姉がいてくれたら心強いんだけど……。ね、エルナンさんに頼んでロレントに連絡してもらわない？」

「うーん、でもシエラさんかなり忙しいと思うよ。父さんも、僕たちもいないからロレント支部は手薄だと思うし……」

「そ、そうでした……。あーもう、誰でもいいから協力してくれる人いないかしら！」

エステルがやけになって絶叫した。

「フツ……。その言葉を待っていたよ」

階段にリユートを鳴らす青年 もとい一人しかいないが オリビエがいた。

「出たわね。このスチャラカ演奏家。まさか2階に潜んでいたとは」

「ひよつとして……。今の話、聞いていたんですか？」

「フフフ……。余すことなく聞かせてもらったよ。これはボクの出番だと思ってね」

髪をかき分け階段から降りてきて、堂々と席に着いた。

「あ、ちよつと……。なに勝手に座ってんのよ？」

「たしか、ピアノを弾いてる演奏家の兄ちゃんだったな。お前さんたちの知り合いか？」

「知り合いつていうか、早くも腐れ縁というか……」

「……まだ知り合つてそんなに経っていないのにね」

「ボクはオリビエ・レンハイム。エレボニア出身の旅の演奏家さ。

エステル君とヨシユア君とは前にある事件で知り合つてね。それ以来、タダならぬ関係なのさ」

「誤解を招く言い方はやめい！」

「ふーん、よく判らんが俺の方も名乗つておこうか。ジン・ヴァセック。カルバード出身の遊撃士で武術の道を志している。あんたのピアノにはいつも楽しませてもらつてるよ」

「フフ……。お誉めにあずかり光栄至極。ボクの方も、大会予選で

のあなたの武勇は耳にしている。4人を相手にしてたった1人で圧倒したそうだね?」

「素人相手で運が良かっただけさ。で、その演奏家さんが俺たちに何の用だい?」

「ちよつと待ったあああ!」

エステルが声を上げて話をさえぎった。

「オリビエさん……。ひとつ確認しておきますが……。ひよつとして最近、かなりヒマだったりしますか?」

「さすがヨシユア君。鋭い質問じゃあないか。王都に来てから1月あまり……。一通り観光をしまつて残るはグランセル城くらいだが無粋な兵士が入れてくれない……。他の地方にも行ってみたいが生誕祭が迫っているから今、王都から離れるのも忍びない……。」「よーするに、かなりヒマだと」

エステルがオリビエの言葉を省略した。

「そこに降つて湧いたような定員が1人足りないという話……。さらにトドメに、優勝者には豪華な晩餐会へのご招待……。まさに女神の天啓といえようっ!」

「はあ……」

「そんな事だろうと思いました」

「というわけで、ボクも武術大会の仲間に入れてくれないかな?」
て

「いいんじゃないのか?」

ジンが即答した。

「ちよ、ちよつとジンさん。そんな簡単に……。オリビエがどんな戦い方をするのかも知らないんでしょう?」

「えもの得物は導力銃だろ? 戦術の幅も広がるし、いいチームになると思うがね」

「ええっつ!」

「これは……。驚いたな。やはり脇の下のふくらみと歩き方で判つてしまうものかな?」

「それと視線の動かし方だな。武術家だろうが剣士だろうが動く対象のとらえ方は線だが……。あんたは、相手の動きをポイントごとにとらえている。銃使いに特有の視線の動きさ」

「ひよええええ、プロだわ……」

「なるほど……。確かに理屈ではそうなりますね」

「フム……。今後、気を付けておくとしよう。で、その達人の目から見てボクは合格という事でいいのかな？」

「ああ、よろしく頼むぜ」

「うーん。一抹の不安は残るけど……」

「オリーブさん。よろしくお願ひします」

その後、エステルたちは明日からの大会に向けて、夕食を堪能した。

第5章 王都療乱（15）（後書き）

オリビエファンの方には待ち望んだ展開ですかね？

第5章 王都撩乱(16)(前書き)

武術大会本選開催までの話です。

第5章 王都撩乱(16)

グランセル南街区

「ふ……。お腹いっぱいになっちゃった。あの2人、あれだけ食べといてまだ呑み食いしてるなんて……。付き合いきれないわ、もう」

「ジンさんはあの体格だし、オリビエさんも健啖家けんたんかだからね。明日の試合に差し障りがなければ大丈夫なんじゃないかな」

「うーん、確かに2人とも心配するだけムダな気がしてきた」

「さてと、僕たちはそろそろ北街区にあるホテルに行こうか？エルナンさんが部屋を予約してくれているはずだよ」

ホテル・ローエンバウム

「こんばんは。ようこそホテル・ローエンバウムへ。お泊りのお客様でいらつしゃいますか？」

受付のフリッツがエステルたちに尋ねた。

「はい、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど……」

「部屋を取ってもらっていると聞いていますので確認して頂けますか？」

「おお……。あなた方のことでしたか。ええ、確かに承っております」

「は、助かつちやった」

「エルナンさんに感謝だね」

「エステル様とヨシユア様ですね。失礼ですが、遊撃士協会の手帳を見せていただけますか？」

「あ、ちよつと待って下さい……」

エステルたちはブレイサー手帳をフリッツに見せた。

「……はい、確かに。それではこれをお渡ししておきます」
エステルたちは202号室の鍵を受け取った。
「階段を2階に登りまして左手奥の部屋でございます。何か御用が
ありましたらフロントにお申しつけください」
エステルたちは202号室に向かった。

202号室前

「202号室……。ここがあたしたちの部屋ね」

エステルは鍵を開けて部屋に入った。

「わあ……。雰囲気の良い部屋ねえ。見て見て、こっちからだと夜の
グランアリーナが見えるわ！」

「へえ……。本当だ。タダで泊めてもらうのが申しわけないような部
屋だね。武術大会が終わるまでがここが僕らの拠点になるわけか……」

「（……この部屋でしばらくヨシユアと一緒に暮らすんだ……。つ
て、あたしっては何を考えてるのよ〜っ!?!）」

「あのさ、エステル……」

ヨシユアがエステルに声をかけると、

「ひゃいつ!?!」

エステルはすつとんきような声を上げた。

「いきなりこんな事を言うとな変に思われるかもしれないけど……」。

その、僕たちは家族……だよな？」

「……え……」

「父さんみたいに頼りにならないかもしれないけど……。シエラさ
んみたいに聞き上手でもないけど……。それでも僕は、家族として
君の支えになりたいと思っっている。もし、何か悩みごとがあればい
つでも相談に乗るつもりだから」

「……あ……」

「なんだか最近、君の様子がちょっと変な気がしたからさ……。えつと、勘違いだったらゴメン」

「はあ……。まったくヨシユアらしいっていうか。メチャクチャ鋭いわりにはどこかピン트가ずれてるんだから……」

「え……?」

「ありがと、ヨシユア。でも、そんなに心配しないで。確かにあたり、最近ちよつと変かももしれないけど……。つらいとか、苦しいとか、深刻なことじゃないから……。ちよつとだけ、気持ちの整理がつかないだけだから……。だから大丈夫。見守ってくれるだけで大丈夫よ」

「そつか……。うん、だったら僕も余計な心配はしないようにする。そのかわり、悩みが解決したら僕にも話してくれると嬉しいな。あ、無理にとは言わないけどね」

「え、えつと……。うん、心の整理がいたら話すことにはなつちやうかも……」

「えっ?」

「ううん、何でもないっ！まだ早いけど……。今日は休まない？色々あつて疲れちゃった」

「そつだね。明日の試合もあるし……。荷物の整理をしたら休もうか」

ホテル・ローエンバウム 朝

「よう、お早うさん」

フロントに降りると、ジンが待っていた。

「あ、おはよう、ジンさん！」

「すみません。わざわざ迎えに来てもらって」

「なあに、いいってことよ。どのみち試合前に色々準備しておきたかったからな。工房に武器屋、そして百貨店と一通り回った方がい

いだろう」

「備えあれば憂いなしってヤツね。ところで……オリビエのやつは
まだなの？」

「モーニン、親愛なる諸君？」

「噂をすれば影というものだ。」

「ハッハッハッ。初陣を飾るのにふさわしい、実にすがすがしい朝
だねえ」

「まくた狙ったようなタイミングで現れるし……」

「お早うございます、オリビエさん」

「お早うさん。これで全員そろったな。それじゃあ出かけるとする
かね」

「たしか武術大会って正午から始まるのよね。まだ朝早いけどどう
やって時間を潰そっか？」

「さっきも言ったが、足りない装備は店で揃えておいた方がいいだ
ろう。それと、身体をならすためにも街道あたりで魔獣退治をする
のも悪くない」

「なるほど。ウォーミングアップというわけだね」

「確かに、試合前に団体戦の感覚は掴んでおくべきかもしれませんが
ね。このメンバーで戦うのは初めてですし」

「そうと決まればレッツ・ゴー！準備が整いしだい、グランアリー
ナに行きましょう！」

第5章 王都療乱（16）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ開催する武術大会！エステルたちのチームの行方は！？

第5章 王都撩乱（17）（前書き）

武術大会1日目（前編）です！

第5章 王都撩乱（17）

グランアリーナ前

準備を終えたエステルたちはグランアリーナ前に来ていた。

「よう、お早うさん」

ジンは武術大会受付嬢のリーファに挨拶した。

「まあ、ジン選手。どうもお早うございます。今日の試合は正午からですけどどうなさったんですか？」

「メンツが揃ったんで選手登録しておきたいんだ。お願いできるかい？」

「まあ、おめでとうございます！お一人で戦っていると聞いて大変そうだと思っていたんです。あら、あなた方は昨日の……」

「えへへ、こんにちは」

「今日は、ジンさんのお手伝いで試合に参加することになりました」「そうだったんですか……。それではこちらの書類に必要事項をご記入ください」

エステル、ヨシユア、オリビエは選手登録の書類に必要事項を記入した。

「まあ、そちらのお2人は遊撃士の方だったんですね。それと……そちらの方のプロフィールは……『漂泊の詩人にして不世出の天才演奏家。愛と平和の使者にしてくださいま恋人熱烈募集中』……」

……「あまりの内容に言葉も出ないリーファ。こんな所でもアホさ炸裂させるオリビエに乾杯……」

「ハッハッハッ。いやあ、照れちゃうなあ。ついでにどうだろう？試合が終わったら飲みにでも……」

「あー、はいはい。このアホのことは放っておいて」

「登録の方、よろしく願います」

「は、はい……。それでは本戦での選手登録を完了しました。チー

ム代表者のジン選手以下、エステル選手、ヨシユア選手、オリビエ選手の4人になります。以後、欠員が出たとしても交替できないのでご了承ください」

「おお、結構だ」

「いよいよって感じね。そういえば、今日の試合の相手ってもう決まっているの？」

「すでに組み合わせは決まっていますが賭博行為の防止のため、試合直前まで知らされないことになっているんです。どちらの控室に案内されるかで相手チームは絞れると思いますけど……」

「なるほど……。反対側の控室にいるチームのいずれかと対戦するわけですね」

「うふふ、そういう事ですね。それでは選手の皆さんにこちらの品をお渡ししておきます」

エステルたちは選手登録カードを受け取った。

「それを受付係に提示すればそのまま競技場内に入れます。それでは皆さん。ご健闘をお祈りしていますわ」

エステルたちは早速競技場に入ることにした。受付係に選手登録カードを見せた。

「その登録カードは……本戦に出場される方々ですね。一度、中に入ったなら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか」

「うん、大丈夫よ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

そうして、エステルたちはグランアリーナに入った。

「右手の《蒼の組》ですからこちらの控室でいいんですよ?」

「ああ、間違いないはずだぜ」

「フツ、それじゃあ試合までくつろがせてもらおうとしようか」

「あんたはどんな時でもくつろぎまくってるでしょうが」

「ヘツ……。ずいぶん余裕そうじゃねえか」

不意に後ろから声が聞こえてきた。

「あ、あんたたちは……!」

レイヴンの幹部たちである、デイン、レイス、ロツコだった。

「フン……。妙なところで会うもんだぜ」

「ひやはは。ここで会ったが百年目ってか?」

「……誰だったっけ?」

エステルが首をかしげた。

「ルーアンをシメていた《レイヴン》だったの!」

「忘れたとは言わせねえぞ!」

「冗談よ、じょーだん。昨日、あんたたちの仲間が予選で戦っているのを見たから王都に来ていたのは知ってたわ。それで今日は、性懲りもなくあたしたちに因縁つけに来たの?」

「へっへっへ……」

「ひゃひゃひゃ……」

「フツフツ……」

不気味に笑うデインたち。

「な、なによ、気持ち悪いわね」

「もしかして、あなたたちも本戦に出場するんですか?」

「へっ……!?!」

「こら、なに驚いた顔してやがる!」

「俺たち、ちゃんと予選に勝ってここまで上がってきたんだよねえ」

「途中参加のためえらにデカイ面される覚えはねえんだよ」

「へえ、すごいじゃない! あんたたちみたいな素人がよく勝ち抜くことが出来たわねえ。よっぽど特訓したんじゃないの?」

素直に驚くエステル。

「え……」

「なんだこのアマ……」

「ただのチンピラと思ったけどけっこう根性あるじゃないの。うん
うん、ちよつと見直したわ」

「いやあ、でへへ……」

照れるレイス。

「ま、丸め込まれてんじゃねえ！」

「と、とにかく……。お前らには散々コケにされた。この機会に、
きつちりと落とし前をつけさせてもらっぜ」

「フフン、望むところよ。ところであんたたちもこっちの控室なわけ？」

「いや、反対側の方だけどよ……」

「だったら早速、今日の試合でぶつかる可能性があるわけね。そう
なったらお互い正々堂々と戦いませよ」

「……………」

「……………」

「……………」

黙り込むレイヴンの3人。

「あれ？」

エステルは無反応の3人を不思議そうに見た。

「おい、行くか……」

「ああ、何か調子が狂っちゃったぜ」

「試合の前にメシでも食うべ」

そう言つて3人は去つて行った。

「な、なによ……失礼しちゃうわね。ねえ、あたし何か変なこと言
つた？」

「いや……ちつとも。やっぱり凄いな、君は……」

「へ？」

「はは、まあ気にするなつて」

「自分の良さに無頓着なエステル君らしさなのだろうね」

「なんかバカにされてる気がするんですけど……」
「そんな事ないってば。じゃあ、控室に入って試合が始まるのを待とうか」

エステルたちは控室に入った。

しばらく後。

「そ、そろそろ始まるわね……。どうしよう……。すぐドキドキしてきちゃった」

「落ち着きなよ、エステル。順番が来たら呼ばれるから、それまでおとなしく待っていよう」

「うー、そうは言ってもなんだか落ち着かないよ」

そわそわと歩き回るエステル。

アリーナからアナウンスが聞こえてきた。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦を始めます！」

「それでは早速、栄えある第一試合のカードを発表することにしませう。南、蒼の組　　遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！北、紅の組　　王国軍、突撃騎兵隊所属。ジエイド中尉以下4名のチーム！」

「よし……出番だな」

腰を上げるクルツ。

「突撃騎兵隊といやあかなりの猛者揃いのはずだぜ。相手にとって不足はねえ」

気合いを入れるグラッツ。

「カルナさんたち、頑張つてね！」

「ああ、任せておきな」

「それじゃあ、行ってくるね！」

「これより武術大会、本戦第一試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！蒼の組、クルツチームの勝ち！」

結果はクルツチームの圧勝だった。

「やった！カルナさんたちの勝ちだわ！」

「さすがはリベールの遊撃士ってところか。揃いも揃って大した腕前だぜ」

「たしかに人数こそ少ないがそれぞれが一騎当千のようだね」

「もし試合で当たったらかなり苦戦させられそうですね」

しばらくしてクルツたちが戻ってきた。

「先輩たち、ナイスファイト！」

「よう、いい勝負だったぜ」

「はは、《不動のジン》にそう言ってもらえるとは光栄だ」

「さすがに予選と違ってほとんど余裕はなかったけどな」

「続きまして、第二試合のカードを発表させていただきます。南、

蒼の組　カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム

！北、紅の組　チーム《レイヴン》所属。デイン選手以下4名

のチーム！」

「あたしたちの番だわ！」

「しかも相手はあの人たちか……」

「フフ、優雅さに欠ける相手だがなかなか面白い試合になりそうだ」

「よし、アリーナに出るぞ！」

「へへ……。早速リベンジの機会とはな」

「たまには女神も粹なことをするもんだよな」

「この前の事件で力不足を思い知った俺たちは死にもぐるいで特訓した……。その成果を見せてやるよ！」

「フフン、その意気やよし！あたしたちも手加減ぬきで思いっきり行かせてもらおうわ！」

「（うーん、エステル君てばいつになく生き活きしてるねえ。男らしいというか何と言うか）」

「（エステルに聞かれたらまたはたかれますよ……）」

「さて、そろそろ時間だな」

「これより武術大会、本戦第二試合を行います。両チーム、開始位置についてください」

両チームが開始位置につく。

「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」

結果はエステルたちの圧勝だった。

「はあはあ……。やっぱり負けちゃったか……」

「き、キツイっす……」

「クソッ、クソクソクソ……」

地面を悔しそうに叩くロツ」。

「まあまあ……。そう気を落とさないでよ。正直、驚いたわ。まともになんか強くなってるから」

「僕も同感です。バレン又灯台で戦った時よりもはるかに手強く感じました」

「そ、そうか……?」

「あの時のことはあんま覚えてないんだけどね」

「何だか知らんがお互い、全力を出したんだ。胸を張って控室に戻るとしようや」

ジンがうまくまとめた。

「はは、あのチンピラどもがあそこまで健闘するとはねえ。人間、変われば変わるもんだ」

「勝負は見えていたがなかなかいい試合だったぜ」

「ハツハツハツ。ありがとう。まあ、彼らが心を入れ替えたのも全てはボクの人徳のタマモノでね」

オリビエのウソ発言。

「へー、そうなんだ?」

その言葉をアネラスが素直に信じている。

「事情を知らない人相手になにデタラメ言ってるのよ……。ていうかアンタ、あの連中と面識はないでしょ!」

「恋に落ちるのは一瞬、加速するのは無限大だからね」

「意味不明すぎますね……」

「続きまして、第三試合のカードを発表させていただきます。南、

蒼の組 空挺師団第3連隊。ライエル中尉以下4名のチーム!」

「よし……。俺たちの出番だな。気張って行くぞ、野郎ども!」

「アイアイサー!」

「北、紅の組 空賊団 《カプア一家》所属。ドルン選手以下

4名のチーム！」

「へっ!？」

「《カプア一家》って……」

「おやおや。どこかで聞いた名前だねえ」

「え、えーと……。事情を説明させていただきます。ご存知の方も多いとは思いますが、彼らはボース地方を騒がせた空賊団 《カプア一家》の者たちです。正々堂々と戦うことでこの武術大会を盛り上げたい……。そうすることで迷惑をかけた王国市民に償いたい……。その一心で、今回の武術大会への参加を強く希望したそうです。服役中の態度が真面目であったため、主催者である公爵閣下のはからいで今回の出場が実現した次第であります。皆様、どうかご了承ください」

「団体戦へのルール変更に錠破りの犯罪者の参加か……。もはや何でもアリって感じだな」

「ハッハッハッ。ずいぶん太っ腹な公爵殿だね」

「わ、笑いごとじゃないってば!」

「さすがにこれは無理があると思いますけど……」

「皆様、静粛に!これより武術大会、本戦第三試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え!勝負始め!」

「勝負あり！紅の組、ドルンチームの勝ち！」
結果は、ドルンチームの勝利だった。

「は……あいつら勝っちゃったわ」

「彼らの実力からしたら当然の結果なのかもしれないね。でも、万が一優勝したりしたらどうするつもりなんだろう……」

「ハツハツハツ。空賊を城の晩餐会にご招待か。さぞかし面白い見物だろうねえ」

「そんな事が実現する前にあたしたちが食い止めるわよ！」

「いずれにせよ、手強い相手がもう一組現れたってことだな」

そして、ライアル中尉のチームが戻ってきた。

「クソツ……。犯罪者に遅れを取るとは……」

「まあ、そう気を落とすなよ。奴等は集団戦に慣れている。その差が出ただけさ」

もう一組のリーダー、ベルン中尉が慰めた。

「いや……俺たちの力不足の問題だ。部隊に戻ったら演習量を増やさねえとな」

「続きまして、第四試合のカードを発表させていただきます。南、

蒼の組　　国境警備隊、第7連隊所属。ベルン中尉以下4名のチーム！」

「あなたたちの出番だな。残る相手は連中だろうから絶対に負けるんじゃないぜ」

「分かってる……。正規軍魂を見せてやるさ。行くぞ、みんな！」

「イエス・サー！」

「北、紅の組　　王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下4名のチーム！」

「あいつらだわ……！」

「ロランス少尉……！ひよっとしてあの時の……！」

「これより武術大会、本戦第四試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ロランスチームの勝ち！」

結果は、情報部の圧勝だった。

「な、なにあれ……。圧倒的じゃないの……！」

「ヒュー、やるねえ。あのチーム、予選は3人で戦っていたから1人加わると思っていたが……。あんな切札キースを用意してたのか」

「僕やエステル君たちと同じく本戦からの出場者ということだね。フフ……とんだ隠し玉もあったもんだ」

「……今の太刀筋……は……」

ヨシユアが何かに驚いている。

「え……？ヨシユア、どうしたの？」

「まさか……でも……」

「ヨシユア？……ヨシユアってば！」

エステルがヨシユアをゆすった。

「あ……。大丈夫……。何でもないよ。見事な太刀筋だったから、ちよっと見とれちゃって……」

「そ、そうなの？」

「フツ、さすがヨシユア君。感受性が豊かで結構なことだ」

「ただいまの試合をもちまして武術大会本戦、1日目を終了します。」

2日目に勝ち進んだのは、クルツチーム、ドルンチーム、ジンチーム、ロランスチームの4組！彼らの健闘に期待しましょう！」

「さてと……。無事、2回戦に勝ち進めたな。どこと当たるかは分からんが明日もこの調子で行くでしょう」

「モチのロンよ！でも実際、残ったのは強敵ばかりなのよね。ギルドの先輩たちに、空賊ども。それに情報部のあの連中か……」

「そうだね……。気を引き締めてかからないと」

「なあに、心配することはない。恋のパワーはノンストップ。どんな障害もブレイクスルーだよ」

「だから訳わからないってば……」

「今日はお互い、鋭気を養って明日に備えることにしようぜ。俺は酒場に行くが、お前さんたちはどうする？」

「フツ、ボクは喜んでお付き合いさせてもらうよ」

「（僕たちは、いったんギルドに報告に行った方がいいかもね。依頼についての情報が入っているかもしれないし）」

「（あ、そうね……）」

エステルが頷いた。

「ごめん、ジンさん。あたしたちはパスしておくわ」

「だったら、今日はここでお別れだな。また明日の朝、ホテルで待ち合わせといこう」

「オ・ルヴォワール。愛しい子猫ちゃんたち^{フシキキャット}」

ジンとオリビエは酒場へと行ってしまった。

「さてと……。あたしたちもギルドに行こっか」

「……うん……。それと……。どこかで情報を集めたいな……」

「へ……？」

「へッ、何ボーツと突っ立ってやがるんだ」

やって来たのはレイヴンの3人だった。

「あ、あんたたち……。今日はお疲れさまだったわね」

「フン……。いい気になってんじゃねえぞ」

「今回は時間がなかったから満足に鍛えてなかったただけだ。次に戦った時は、絶対に勝つ……」

「え、まだやるのかよ？」

「あはは、いいわよ。また機会があったら、いつでも手合せしたげるわ」

「ちょっとエステル……。安請け合いしてもいいのかい？」

「まーまー、いいじゃない。修行に精を出してたら、悪さをするヒマもないだろうし」

「フ、フン……。まったく呑気なガキどもだぜ。そんなてめえらにコイツをくれてやらあ」

デインはエステルに地下水路の鍵Aを渡した。

「な、なによコレ……」

「ずいぶん年代物の鍵ですね」

「西街区の方にある格子扉を開くための鍵だ。でかい地下水路に通じている」

「俺たち、たまたま鍵を手に入れて毎日そこを探検してたんだよな。手強い魔獣が徘徊してるから結構、いい修行になってさあ」

「え、それって……」

「か、勘違いするなよ？俺たちに勝ったお前たちに簡単に負けられると困るんだよ！」

「いいか……。絶対に優勝だ。それ以外は許さねえからな……」

「そんじゃあ、まったなあ」

3人は去って行った。

「え、つと。今のつてもしかして……」

「うん。励ましてくれたみたいだね。試合に備えて、その地下水路で鍛えておけてことじゃないかな」

「や、やっぱそうよね。うーん……。本当に心を入れ替えたのかしら？」

「はは、君の太っ腹な所が気に入ったんじゃないかな。エステルって意外と親分肌が合ってるのかもね」

「太っ腹……親分肌……。あんまり嬉しくない表現ねえ。まあいいわ、ありがたく受け取っておきましょう」

「でも、今日はもう遅いから地下に降りるのは止めておこう。明日の朝、試合の前に腕試しするのがいいだろうね」

「ん、りょーかい。それじゃあ、ギルドに行つてエルナンさんに報告しましょ」

エステルたちはグランセル支部に向かった。

第5章 王都療乱（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

次回は武術大会1日目（後編）です！ 本日2月12日20時更新
予定です。

第5章 王都撩乱（18）（前書き）

武術大会1日目（後編）です。

第5章 王都撻乱（18）

遊撃士協会グランセル支部

「やあ。エステルさん、ヨシユアさん。初戦突破、おめでとございます」

エルナンが笑顔で迎えてくれた。

「えへへ、どーもどーも。ってエルナンさん。もう結果知ってたんだ？」

「先ほど、クルツさんたちが教えてくれましたからね。それで……どうです、手ごたえのほどは？」

「そうですね……。先輩たちもそうですねですけど強敵ばかりが勝ち残った感じです」

エステルとヨシユアは空賊と特務兵のチームについて説明した。

「なるほど……。空賊たちが出場を許可されたのは聞いていました……。特務部隊の隊長がそこまで凄腕とは思いませんでした」

「ただの隊員も手強いけど、あの隊長は完全に別格だったわ。大剣を片手で操る膂力りよくと豹みたいにしなやかな身のこなし……。得体の知れないヤツだとは思ったけどあそこまで強いとは思わなかった」

「そうだね……。あの、エルナンさん。ロランス少尉の経歴について何か分かることはありませんか？」

「うーん、残念ながら現状では分かりませんね。情報部は、新設部隊だけあってリシャル大佐が立ち上げの際に各方面から引き抜いたそうです。彼もその1人だとは思いますが……」

「そう、ですか……」

「ねえ、ヨシユア……。ずいぶん、あの赤いヤツにこだわってるみたいね。何か……気になることでもあるの？」

エステルがヨシユアの様子に耐え切れず尋ねた。

「いや、明らかにタダ者じゃないからね。試合で当たる可能性もあるから詳しい戦力を知っておきたいんだ」

「そっか、なるほどね」

「そういえば、その少尉ではありませんが……今日の昼頃、軍用警備艇が王都の発着場に到着したそうです。降りてきたのは、大佐の副官のカノーネ大尉だったそうですよ」

「それは気になる情報ですね」

「カノーネ大尉というと……あの陰険そうな女ギツネか。ティータをネタにして博士を脅迫してた嫌なヤツ」

「何でも、五大都市を一通り回ってきたそうですよ。強引に発着場に着陸させるので定期船の運航スケジュールがずいぶん遅れてしまったそうです」

「まったくロクな事しないわね……」

「五大都市を一回りですか。博士たちを搜索するにしては少し大げさすぎる気がしますね……」

「今、各地の支部で探ってもらっている最中です。何か分かったら連絡しましょう。あなたたちは、このまま武術大会に専念してください」

「うん、そうするわ」

「それでは失礼します」

エステルたちは、ホテルへと向かった。

ホテル・ローエンバウム

「やくつと帰ってきたやがったか。あんまり待たすんじゃないやねえっての」フロントから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「この声……」

向かってみると案の定、ナイアルがいた。

「お久しぶりです、ナイアルさん」

「うわ、ナイアルだ！何よ、あたしたちをわざわざ訪ねてきてくれたの？」

「おお、わざわざ訪ねて来てやったのよ。武術大会の取材をしてた

ヤツが少年少女の出場者の話をしてな。詳しく聞いてみりゃあ、どう考えてもお前たちじゃねえか。こりゃ王都に来てるってんでホテルで待ち伏せしてたわけさ」

「はあ……相変わらず鼻が利くわねえ」

「訪ねてきてくれたのは嬉しいんですけど……。ナイアルさんの事だから用があつて来たんですよね？」

「ああ、またネタ探しね」

「かゝつ、何と嘆かわしい。利害捨得抜きに友情を温めようというお兄さんの真心が伝わらんかね？」

「ウソくさ……」

「それに、お兄さんというには歳が離れすぎているような気も……」

「ええい、黙りやがれ！そういうわけでさっそく食事に出かけるぞ」

「また唐突ですね……」

「別にいいけど当然、奢おごってくれるのよね？」

「ぐっ……まあいいだろ」

「編集部の近くに行きつけの店があつてな。そこでメシを食うとしてよ」

「コーヒーハウス《パラル》」

「へー、雰囲気の良い店ね。酒場というよりは喫茶店でカンジだけど」

「この匂いはコーヒーですね」

「このマスターが道楽でやってる店でな。サイフォンで淹いれる一杯は絶品としか言いようがねえ。あとは、本場のスパイスを使ったライスカレーがお勧めだな。まあ、食事とコーヒーは後で適当に頼んでおくとして……」

「ちよつと待ったあ！あたしたち、試合で身体を動かしてメチャメチャお腹空いてるのよね」

「まずは夕食をご馳走になってもいいですか？」

「ぐくつ……。可愛くないガキどもだぜ。ええい、こうなったら好きなだけお代わりしやがれ！それでスクープ取れるならじゅうぶん元は取れるからなっ！」

ヤケクソのナイアル。

「やっぱりそれが狙いか」

「そういえば、ドロシーさんは今日は一緒じゃないんですか？」

「ああ、ヤツにはちよいと別の仕事を頼んでいてな……。まあいい、とつと中に入るぞ」

「は、辛かったけどすつごく美味しかったあ？トロツとしたヒレ肉とホクホクとしたジャガイモが何ともいえずマッチしてて……」

「食後のコーヒーがまた絶品ですね。サイフォンで美味しく淹れるのは難しいって聞きましたけど……」

「ったく、人のミラだと思ってバカスカ食いやがって……。記者の薄給をなんだと思つてやがる」

「まーまー。とりあえずご馳走さまでした。それで……。やっぱりネタに困つてるわけ？」

「フン……。ネタなら腐るほどあるさ。だが、親衛隊のテロ事件だの、アリシア女王の健康不調だの信憑性の乏しい情報ばかりだな。はつきり言つちまえば軍のフィルターを通していない生で新鮮な情報欲しいのさ」

「……………」

「ドロシーから、ツアイスでの誘拐事件について少し聞いたが……。単刀直入に聞くぞ。リシャール大佐の尻尾をお前たち、どこまで掴んでいる？」

「何て言うか、ホント直球ねえ」

「そう質問してくるといふ事はある程度、予測できているみたいですね」

「やっぱり大佐はクロか……。ウチの雑誌でインタビューして人気が出ちまった手前、認めたくはなかったが……。反逆者、一步手前ってとこか？」

「現時点で、女王陛下に対する反逆を企んでいるかどうかは分かりません。ただ、デュナン公爵を傀儡かいらいにして何かを企んでいるのは確かでしょうね」

「デュナン公爵か……。陛下が不調なのをいいことにグランセル城の主人気取りで好き放題やってみたいだが……。不思議なのは、軍のお偉方がどうして動かないってとこか……」

「うーん、それはねえ。……ねえヨシユア。話しちゃってもいいのかなあ？」

エステルがヨシユアと顔を見合わせた。

「そうだね……。僕たちとしてもできるだけ情報は欲しいところだ。ナイアルさんだったら協力してもらってもいいと思う」

「おいおい、なんだよ。そんなに良いネタを持つてんのか？」

ナイアルがそれを聞いて食いついてきた。

「あらかじめ言っておきますけど……。今から話すことは、記事にしたくても出来ないような内容だと思えます」

「心の準備、しといてよね」

エステルが念を押す。

「クソッ……。何だかヤバそうな話じゃねえか。まあいい、とつとと話しやがれ」

エステルたちは今までのリシャル大佐や情報部などについてこれまでのことの真相を話した。

「……………」

ナイアルは話を聞いた後、無言のまま目を閉じていた。

「あーあ、だから心の準備をしないとって言ったのに……」

「ありえねえ……。おい……ホントにマジか？」

「残念ながらマジです。空賊事件から、孤児院放火事件、中央工房の襲撃事件に至るまで……。全ての事件に、情報部の特務兵たちが関与していたんです」

「で、軍の上層部は弱みを握られてモルガン將軍は監禁状態……」。

親衛隊は無実の罪を被せられてテロリストとして追われてると……」

「あーもう！ 繰り返すんじゃねえ！ チクシヨウ……記事にできるわけねえだろ。最近ウチの雑誌にやあ軍の検閲が入ってるんだ……」。

ゲラにした時点でお縄だぜ……」

「そ、そうだったんだ……」

「仕方がないから、当たり障りのない武術大会の記事で埋めているんだが……。……って、そうか。お前らが大会に参加してるのも何か理由があつての事なんだな？」

「ま、そういうこと。依頼内容にも関わるから詳しくは話せないんだけど……」

「事態を打開するために動いていると思っってもらって結構です」

「そうかよ……」。

「……………」

ナイアルは目をつむって何か考え始めた。そして、しばらく後、吹っ切れた。

「……………よし、決めた。記者としては動けねえが……俺も一肌脱いでやるうじゃねえか。ギルドでも調べられない事を独自のルートで調べてやらあ」

「サンキュ、助かるわ」

「軍を相手にするわけですから、かなり危険な仕事になると思います。それでも協力してくれますか？」

「くだい、こいつは俺の戦いだ。このままペンが剣に負けるのを見過ごすわけにはいかねえんだよ！」

「ナイアル……」

見直したかのように感動するエステル。

「分かりました……。どうかよろしくお願いします」

「おお、任せとけてんだ。それで、具体的にはどういう事が知りたいんだ？」

「そうねえ……。やっぱり軍の動きかしら。親衛隊の人たちは全員捕まっちゃったのとか……。モルガン將軍はどこに監禁されているのとか……」

エステルが思いつくことを並べていく。

「なるほどな。俺もその辺は気になった。それは調べておくとして……他にはあるかよ？」

「……。あの……。情報部の人間の経歴なんて調べられないものでしょうか？」

「へっ……？」

「情報部員の経歴だと……？」

「具体的には、中心人物と思われるリシャル大佐とカノーネ大尉、そしてロランス少尉の3人です。この先、彼らと対決するなら詳しい経歴を知っておきたい……」

「敵を知り、己を知れば百戦危うからずってヤツか」

「確かに、大佐もそうだけどあの少尉のことは知っておきたいわね。ヨシユアも言ってたけど、明日の試合か明後日の試合で当たることになるかもしれないし……」

「ナイアルさん、お願いできますか？」

「……軍には何人か知り合いがいる。機密情報ならともかく、単なるプロフィールだったら調べてもらえるかもしれないね。よし、何とか当たってみてやるよ」

「サンキュ、助かるわ！」

「よろしくお願いします」

「なあに、いいってことよ。その代わり、お前たちが優勝してグラウンセル城に招待されたら色々話を聞かせてもらおうからな」

「やっぱりそう来たか……」

「分かりました。差し支えない範囲なら」

その後、ナイアルと別れたエステルたちはホテルに戻って早めに休むことにした。

第5章 王都療乱(18) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

武術大会2日目(前編)です。更新は本日2月12日以降毎日、9時、15時、20時としたいと思いますのでよろしくお願いします。

第5章 王都撩乱(19)(前書き)

武術大会2日目(前編)です。今回は実際に戦った時の戦闘風景を入れてみました。

第5章 王都撻乱(19)

ホテル・ローエンバウム 朝

「フツ、これで全員集合だね。さっそく出かけるとしようか」

「昨日と同じく、試合は午後からだから午前中は自由に動けるはずだ。店で装備を整えるもいいし、街道の魔獣相手に肩慣らしするのもいいだろう」

「あ、そういう事なら絶好の場所があるみたいよ」

エステルは不良たちから貰った地下水路の鍵について説明した。

「ほう、そいつは興味深いな。手強い魔獣がいるんだったら、恰好かっこうの練習相手になるかもしれん」

「麗うつくしの王都の地下に広がる古いにしえの地下水路か……。フツ、浪漫と冒険心をくすぐってくれるじゃないか」

「余裕があつたら午前中に入ってみましょう。水路の入口は、西街区にある住宅街の外れの方だそうです」

そうして、エステルたちは準備を整えて、地下水路に入って、肩慣らしをした。

グランアリーナ前

「これはジン様。グランアリーナへようこそ。一度、中に入ったら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか？」

「ええ、大丈夫よ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

エステルたちはグランアリーナに入った。

グランアリーナ ホール

エステルたちが控室に向かおうとした時、後ろから声をかけられた。

「あゝ、エステルちゃんたちだ！」

「あ、ドロシーじゃない！」

そこにはドロシーがいた。

「お久しぶり……って言うほどでもないですね。ツアイスで会って以来ですから」

「ホントにそうだね。また生きて会えるなんて夢にも思ってたよ。エステルちゃんたち、工房船に乗って危ない所に行こうとしてたみたいだし」

「危ない所……？」

「ほほう、興味深い話だねえ」

ジンとオリビエが食いついてきた。

「あわわ、ドロシー！その話はまた後でってことで」

エステルがすかさずドロシーを止める。

「ほえ……？そういえば、その人たちどこかで見ることがあるよな」

「フツ、一度ボースの街でお目にかかったことがあるね。また会えて嬉しいよ。ユニークでチャーミングなお嬢さん」

「俺の方とは、温泉の近くで一度すれ違ったことがあったな」

「ああ、思い出しましたあ！ワイン飲み逃げ事件の犯人さんと東方風のカッコした熊さんです！エステルちゃんたち、この人たちと武術大会で一緒に戦ってるの？」

「うん、そうよ」

「こちらのジンさんをお願いして本戦から参加しているんです。そういうば、ドロシーさん。今日は取材に来たんですか」

「うん、昨日までは別の取材をしてただけだね。今朝、ナイアル先輩に会ってエステルちゃんたちが武術大会に出てることを教

えてもらって。でも、先輩が言った通りかなり強そうなチームみたいね。これは良い写真が撮れそうかも。」

「あはは、期待してるわ。あれ……そういえばナイアルは一緒じゃないの?」

「うん、なんだか大事な調べものがあるみたいだね。昨日は徹夜で資料と格闘してみただし。今日は、昔の知り合いと会って話をするんだって。」

「そっか……」

ナイアルはかなり必死に調べているようだ。

「あ、そうそう、先輩から、エステルちゃんたちに伝言があるの。今日の夕方くらいに編集部に来て欲しいんだって。なんか、大切な話があるみたいよ?」

「ん、わかった」

「試合が終わったら伺います」

「大切な話……。なんだかお安くはないねえ。気になるなあ。ゴロゴロ、うにゃああん」

オリビエ、かなり気持ち悪い。

「ちょ、ちよつとダメだつてば。オリビエには関係ない話なんだから」

「ひどいわつ、エステル君!昨日はあんなに激しく(試合で)燃えたのに!必要がなくなったらゴミのように捨てるのねっ!」

「だくから、誤解を招く言い方はやめい!」

「はわわ、エステルちゃん。いつのまにそんなオトナに?」

「あんたも信じるなつちゅーの!」

「あ、それじゃあわたし、撮影ポジションを確保するから観客席の方に行くね。エステルちゃんたちのこと、応援しまくるから頑張つてね。」

そう言って、ドロシーは観客席の方に行った。

「なんとというか……ユニークな嬢ちゃんだなあ」

ジンが感嘆の声を漏らした。

「はふ〜っ……。オリビエとドロシーが揃うと2乗で疲れるような気がするわ……」

「ハツハツハツ。試合前の緊張がほぐれたということだ。緊張はとれても疲れると思うが……」

「ドロシーさんは、カメラマンとしてかなりの腕前の持ち主みたいですよ。最近の《リベール通信》の写真は彼女が撮った物ばかりだそうですね」

「ほう、そりゃ凄いな。だったら、そのカメラの前でブザマな戦いは見せられねえな」

「うん……。確かに。誰と当たるかは判らないけど気合を入れるしかないわねっ！」

蒼の組 控室

「うーん……。遅いわね。もうすぐ試合が始まるのにもう1組のチーム、来ないわよ？」

「確かに妙だね。事情があつて遅れているのか、それとも……」

その時、廊下から声が聞こえてきた。

「ほら、キリキリ歩かないか！」

「ったく、うるせえな。そんなに急かすんじゃないやねえよ」

「ああ……。どうしてこんな事になったんだろーな」

「兄い、気合いを入れなよ！あいつらと当たった時にそんなことでどうすんのさ！」

そうして入ってきたのは……。カプア一家だった。

「あ……」

エステルは口を開けている。

「てめえらは……」

「あなたたちのチームでしたか」

「フツ、どうりで時間通りに来ないわけだね」

「ふーん、今日のお相手はお前さんたちじゃ無かったか」

「フン……運がよかったね。あんたたちと当たったら今度こそ、そのノーテンキ女に思い知らせてやるうと思っただのに」

「あ、あんですって〜?」

「コラ！無駄口を叩くんじゃない！公爵閣下の温情があつて参加していることを忘れたか?」

「まあまあ兵士さん。そう目くじらを立てないでくれよ。ここに連れて来られてから俺たちや、大人しかつただろう?」

「願わくば、また牢に戻るまでその態度を通して欲しいものだ」

「あんたたちも、こいつらとはなるべく口を利かないでほしい。面倒を起こしてもらつては困るのだ」

「別に面倒を起こすつもりはないけど……」

「判つてるとは思うが、競技場には一個中隊の兵が警備についている」

「逃げられると思うんじゃないぞ」

「わかつてますって。そんな馬鹿なマネはしませんよ」

「フンだ。目障りだからとつとへ行けばあ?」

ジョゼットが兵士を挑発した。

「このっ……」

「ガキの挑発に乗るなよ。いいな、くれぐれもおかしな事を考えるんじゃないぞ」

そう言つて、兵士は控室を出ていった。

「ねえ……一体どうなつてるのよ。どうして、あんたたちが武術大会なんかに出てるわけ?」

「デュナン公爵あたりに出場しろと言われたんですか?」

「確かに、俺たちを出場させようとか言いだしたのはその何とかつていう公爵らしいぜ。試合に勝つたびに刑を軽くしてくれるんだつてさ」

キールが説明してくれた。

「し、信じられないことするわね」

「ふーむ、法治国家とも思えないような独断っぷりだな」

「ハツハツハツ。何ともお茶目さんな公爵さんだ」

「まあ、せっかくの申し出だ。刑が決まってムシヨに移される前にできるだけ稼いでおこうと思ってな。もっとも……それだけが理由じゃねえけどよ」

ドルンが目を背けた。

「へ……どうということ？」

「うっさいなあ。あんたたちには関係ないだろ。ボクたちだってそれなりの意地はあるんだよ」

「僕たちと戦うために参加したんじゃないとすると……特務兵たちと戦うためですか？」

「な、なんで……」

「くっ……その通りだぜ。あいつら、味方のフリして俺たちのことをハメやがったんだ！情報部とやらの勢力を拡大するためのダシとして使い捨てやがったのさ！」

「まあ、だまされた俺たちもマヌケといえればマヌケだけど……。それでも、エゲつなさすぎだぜ」

「うーん、確かに……。そう考えてみるとあんたたちも不憫ふひんよねえ」「だくから、哀れみの目でボクたちを見るなつてばあ！ボクたちに借りがあるクセにっ！」

「へ？あんたたちに借りって……？」

すっかり忘れているエステル。

「フフン、この前の出来事さ。お前さんたちが要塞にいたことを連中に知られるとマズイんじゃないのか？」

「あ……」

「連中への恨みがあつたからためえらのことは喋らなかつたんだ。がはは、せいぜい感謝しやがれよ」

「うっ……」

「確かに……黙っていてくれたことは感謝します」

「何だか面白そうな話をしてるねえ。どういふ事情なのかお兄さん

にも教えて欲しいなあ」

「えい、何でもないつてば！」

「おっと……。お取込み中のようだがそろそろ始まるみたいだぜ」
ジンが振り返って言った。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦
2日目を始めます！早速ですが、本日最初の第五試合のカードを発
表します。南、蒼の組　カルバード共和国出身。武術家ジン以
下4名のチーム！北、紅の組　遊撃士協会、グランセル支部。
クルツ選手以下4名のチーム！」

「来たっ！しかもカルナさんが相手だわ！」

「……強敵だね。僕たちが、ジンさんの足を引っ張らないようにし
ないと……」

「そう慎重になることはないさ。お前さんたちの実力はじゅうぶん
正遊撃士に迫ってる。後は勝とうという気合いだけだ」

「うんっ！」

「頑張ります！」

「フツ……。いざ行かん、戦いの園へ！」

「来たね。エステル、ヨシユア」

「新人君たち、やっほー！」

「えへへ。どーも、先輩たち」

「胸を貸していただきます」

「『不動のジン』……あんたとは一度やり合ってみたかったんだ。
どれほどの腕かこの剣で確かめさせてもらおうぜ！」

「フフン、いいだろう。こちら全力でいかせてもらおう」

「はは、出来れば決勝戦で戦いたかったものだが……。ここで当たったのも運命だろう」

「片や、ベテランの遊撃士集団。片や、注目の新人コンビと武術家ブレイサーと天才演奏家との混合チーム。どちらが勝つかは女神エイトスのみぞ知る、だね」

「これより武術大会、本戦第五試合を行います。両チーム、開始位置についてください」

両チームが開始位置に着く。

「双方、構え！勝負始め！」

戦いの火蓋が切つて落とされた！

《1ターン目》

ヨシユア 魔眼 クルツ 624ダメージ カルナ 68

1ダメージ

クルツ・カルナ AT DELAY (行動

順遅れ)

《2ターン目》

エステル 旋風輪 クルツ 534ダメージ カルナ 5

72ダメージ

アネラス 581ダメージ グラッツ

591ダメージ

《3ターン目》

ジン 龍神功 STR・DEF 30% UP

《4ターン目》

オリビエ アーツ クロックアップ改 待機

《5ターン目》

グラッツ 通常攻撃 ジン 0ダメージ

《6ターン目》

アネラス 通常攻撃 ヨシユア 0ダメージ

《7ターン目》

オリビエ	アーツ	クロックアップ改	発動	ジン	SPD
50%	UP				
《8ターン目》					
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	待機		
《9ターン目》					
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	発動	ヨシユア	SP
D	50%	UP			
《10ターン目》					
エステル	旋風輪	クルツ	578ダメージ	カルナ	6
15ダメージ					
《11ターン目》					
ジン	月華掌	クルツ	1095ダメージ		
《12ターン目》					
ヨシユア	双連撃	アネラス	695+691ダメージ		
《13ターン目》					
カルナ	通常攻撃	オリビエ	0ダメージ	状態異常	暗闇
《14ターン目》					
グラッツ	通常攻撃	ヨシユア	0ダメージ		
《15ターン目》					
クルツ	方術・偽きこと夢幻のごとし	エステル	294ダメージ		
1ダメージ					
《16ターン目》					
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	待機		
《17ターン目》					
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	発動	エステル	SP
D	50%	UP			
《18ターン目》					
アネラス	通常攻撃	ジン	0ダメージ		
《19ターン目》					
ジン	月華掌	クルツ	M I S S		

《20ターン目》				
エステル 旋風輪		クルツ	594ダメージ	アネラス
M I S S				
《21ターン目》				
ヨシユア 絶影		クルツ	654ダメージ	クルツ 戦闘
不能				
《22ターン目》				
カルナ 通常攻撃		オリビエ	0ダメージ	
《23ターン目》				
オリビエ アーツ		クロックアップ改	待機	
《24ターン目》				
オリビエ アーツ		クロックアップ改	発動	オリビエ S P
D 50% U P				
《25ターン目》				
ジン 月華掌		アネラス	1221ダメージ	アネラス
戦闘不能				
《26ターン目》				
グラッツ 旋風剣		ジン	0ダメージ	エステル 0ダメ
ージ				
《27ターン目》				
ヨシユア 双連撃		カルナ	642+675ダメージ	カ
ルナ 戦闘不能				
《28ターン目》				
エステル 通常攻撃		グラッツ	654ダメージ	
《29ターン目》				
オリビエ アーツ		アースランス	待機	
《30ターン目》				
オリビエ アーツ		アースランス	発動	グラッツ 1116
ダメージ				
《31ターン目》				

ジン 通常攻撃
戦闘不能

グラッツ 1074ダメージ

グラッツ

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」

「クツ……見事だ」

「『不動のジン』……まさかここまでの凄腕とは……」

「お前さんたちもさすがに手強かったぜ。エステルたちがいなかったら俺も勝ち目は無かつただろうな」

「はあはあ……。あたしたち、勝つたの……？」

「うん、何とか……。足を引っ張らずにすんだね」

「ふふ……。謙遜するんじゃないよ……。ジンの旦那もそうだがあんたたちも充分手強かった」

「ふう、さすがはシエラ先輩の教え子だな……。それに、そこのお兄さんがそこまでやるとは思わなかったよ……」

「フツ、お嬢さんの方もなかなか痺れさせてもらったよ。よければ試合の後にお互いの強さを讃えて乾杯でも……」

「えーかげんにしときなさい！」

蒼の組 控室

「ほつつ、やるじゃねえか」

「うんうん。見ていて興奮しちまったぜ」

「フ、フン……。悪くない試合だったじゃないか」

「あはは、ありがとう。って、どうしたの？あんたが誉めてくれるなんて。ひよつとして熱でもあるの？」

「あ、あんたみたいな甘ちゃんをボクが誉めるわけないだろっ！ボクたちを追い詰めた連中に簡単に負けられると困るだけだよ！」

「ムカ……。口の減らないボクっ子ねえ」

「まあまあ、エステル。……どうもありがとう。色々あったのに、僕たちを応援してくれたみたいだね」

紳士スマイルのヨシユア。

「……あ……。だ、だからっ！応援なんかしてないってば！」「（むっ……？）」

「続きまして、第六試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組　空賊団《カプア一家》所属。ドルン選手以下4名のチーム！北、紅の組　王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下4名のチーム！」

「おーし、とうとう来たか！」

「あの黒坊主どもに目にももの見せてやるぜ！」

「こうなったのも何かの縁ね。応援してあげるからめいっぱい頑張りなさいよ！」

「敵の隊長には気を付けて。彼さえ自由にさせなかつたら勝機は必ずあると思う」

「う、うん……。……じゃなくてよ、余計なお世話だよっ！」

「よお、仮面の兄ちゃん。待ってたぜ。借りを返せる機会をな」

「へへ、あの公爵には感謝しなくちゃいけないな」

「ふふ……」

ロランス少尉が笑った。

「な、なにがおかしいのさ!？」

「エレボニアの没落貴族、カプア男爵家の遺児たち……。悪徳商人に領地を横取りされ、お家再興のために空賊稼業……。何とも涙ぐましい話だと思っただな」

「て、てめえっ!？」

「どうして知ってるんだよ!？」

「我々が所属しているのが情報部だということを忘れたか？我々への復讐などあきらめて真面目に服役した方が身のためだ。どうやらお前たちは、悪党に向いていないようだからな」

「な、なんだと〜!?!」

「ずいぶんとまあ、囀さえずつてくれるじゃないの……」

「てめえなんざ導力砲の餌食にしてやらあ!」

「これより武術大会、本戦第六試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え!勝負始め!」

「勝負あり!紅の組、ロランスチームの勝ち!」
結果はロランスチームの圧勝だった。

「ああ……負けちゃったわ……」

「途中まではいい展開だったんだけどねえ。あの赤い隊長どのが動き始めたら崩れてしまったね」

「ふーむ……底の知れん相手だな。あれで本気とも思えんし、いまいち実力が読み切れねえ」

「え……今ので全力じゃないの!?!」

「……たぶん、違うよ。最後の技を放ったあとも気の集中が衰えていなかった。まだ余力を残していると思う」

「と、とんでもないわね……」

そして、カプア一家が控室に戻ってきた。

「……………」

「……………」

「……………」

全員、無言だった。

「あ、あの……惜しかったわね」

「なくさめはいらねえ……。俺たちの完敗だったぜ……」

「くそつ……俺のサポートが甘かったからだ……」

「キール兄は悪くない……！ボクがあいつの斬り込みを崩せなかったからだよ……！」

「……。まあ、仕方ないでしょ。勝負は時の運とも言っただし。あなたたちの仇は、明日の試合であたしたちが絶対に討ってあげるわ！」

エステルが自信ありげに言った。

「なにイ……！？」

「おいおい……ずいぶん簡単に言うじゃないか」

「そんな安請け合いでできる相手じゃないと思うけど……」

「まあ、意気込みがないと勝てるモンも勝てなくなるからな」

「フツ、根拠のない所がまたエステル君らしいねえ」

「フン……やっと終わってくれたようだな」

その時、警備兵が控室に入ってきた。

「ほら、グズグズするな！とつとと波止場に戻るぞ！」

「おいおい、冗談じゃねえぞ」

「闘ったばかりなんだから少しくらい休ませてくれよ」

「フン……犯罪者の分際で甘えるな」

「ほら、さっさと来ないか！」

「チツ……」

「ああ、疲れたあ……」

「……」

そうして、カプア一家が控室から出ようとした時、

「おい、あんたたち……」

ジヨゼットがエステルたちの方を向いた。

「えっ……？」

「ボクたちはもう、明日はここに来れないけど……。あんたたち、絶対に勝てよな！あんなふざけた連中に負けたりしたら許さないか

らねっ!」

「あ……。あつたりまえでしょ!任せておきなさいってば!」

「絶対に……勝ってみせるよ」

エステルとヨシユアは勝つことを宣言した。

「……気は済んだか」

「ほら、手間を取らすんじゃない」

グランアリーナ前

「ふう……。今日も何とか勝てたわね。明日はいよいよ決勝戦かあ」

「激しい戦いに備えて鋭気を養う必要があるし、そうだな。そういうわけ……。今日も酒場に繰り出すとするか!」

「フツ、そうこなくて。お付き合いさせてもらうよ
相変わらず連夜呑む2人。

「なんか違う気がする……」

「僕たちは用事があるので今夜も遠慮させてください」

「おお、それじゃあな。明日の朝、フロントで待ってるぜ」

「グンナイ、マイ・スイートハーツ?」

ジンとオリビエは酒場に行ってしまった。

「さてと……。ナイアルが待ってるはずだし、あたしたちは雑誌社
に行こっか?」

「そうだね……。情報部のメンバーについて何か判っているとい
いんだけど……」

エステルたちはリベール通信社に向かった。

第5章 王都撩乱（19）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

今回の戦闘プレイはどうですかね？エステルしかダメージを受けていませんが……。

> 次回予告 <

武術大会2日目（中編）です。

第5章 王都撩乱(20)(前書き)

武術大会2日目(中編)です。

第5章 王都撻乱(20)

リベール通信社 2階

「おい、ナイアル」

「お邪魔します」

「……おお、やっと来たか。ドロシーのヤツ、珍しくちゃんと伝言できたみたいだな」

エステルとヨシユアがナイアルのところに向かった。

「そういえばお前ら、今日も勝ったそうじゃねえか。ドロシーのヤツがはしやぎながら帰って来たぞ」

「えへへ、まあね」

「それでナイアルさん。例のことなんですけど……」

「おっと、さつそく本題かよ。ほれ……主だった連中の経歴は集まったぜ」

ナイアルは一冊の黒いファイルを差し出した。

「これって……王国軍の？」

「ああ、機密度は高くないが一応持ち出し禁止の書類らしい。無理を言つて軍の知り合いに借りたんだから、他言無用だぜ」

「了解しました」

「それじゃあ、ここで読ませてもらうわね」

エステルとヨシユアは黒いファイルをめくっていった。

くリシャール大佐について

アラン・リシャール大佐。七耀暦1168年、リベール王国、ルーアン地方で生まれる。士官学校を首席で卒業した後カシウス・ブライト大佐率いる独立機動部隊に配属される。1192年の《百日戦役》においてカシウス大佐の部下として反攻作戦で多大な戦功をあげる。カシウス大佐が退役した後、軍作戦本部のスタッフに抜擢さ

れ組織改革に多大な功績を残した。1201年、情報部の設立を提案。アリシア女王陛下の承認を得て情報部の初代司令に就任する。

「何というか……エリートっていう感じねえ。首席だって、首席」
「確かにキレ者って感じだからね。シード少佐から聞いたとおり、10年前の戦争で、父さんの部下だったのは間違いなさそうだ」
「うーん、父さんってホントに大佐だったんだ……。そんなに偉かったのに何で辞めちゃったのかしら……」

「カノーネ大尉について
カノーネ・アマルティア大尉。七耀暦1175年、リベール王国、王都グランセルに生まれる。士官学校を優秀な成績で卒業後、軍作戦本部のスタッフに抜擢される。1201年、情報部の設立と同時にリシャール大佐の推薦で情報部に異動。以後、リシャール大佐の副官として作戦指揮の補佐をする立場にある。」

「『優秀な成績で卒業』ってこれまたエリートって感じねえ」
「任官されてから、リシャール大佐の下でずっと働いてきたみたいだね。忠誠心は堅いみたいだな……」

「ロランス少尉について
ロランス・ベルガー少尉。年齢、国籍不明。傭兵部隊『ジエスター獵兵団』に所属していたところを、リシャール大佐の招きに応じて情報部の一員となった。それ以前の経歴は不明。」

「あの仮面のヤツって……リベールの人間じゃないんだ。しかも元傭兵で経歴不明ってどーいうことよ？」

「……判らない。『獵兵団』^{イェーガー}といえは最高ランクの傭兵部隊にのみ

与えられる称号のはずだけど……」

「へー、そうなんだ。戦闘のエキスパートとして大佐が引き抜いたのかしら？」

「うん……そうかもしれないね。『ジエスター獵兵団』……どこかで聞いたことがあるような」

一通り読み終えたエステルとヨシユアはファイルを閉じた。

「ありがと、ナイアル。何となく敵の姿が見えてきたわ」

「お役に立てて何よりだぜ。こちらも、資料を調べているうちに面白いことが色々判ってな」

「面白いこと……ですか？」

「たとえば指名手配されている親衛隊のユリア中尉だが……。士官学校で、カノーネ大尉と同年だったらしいぞ」

「へえ、そうだったんだ」

「そのわりには、あの2人、あまり仲が良さそうには見えませんでしたけど……」

「何でも、お互い主席を争うライバル同士だったらしくてな。文のカノーネ、武のユリアと好対照な2人だったらしい」

「なるほど……何となく想像できますね」

「ユリアさん、凜として昔の騎士みたいだったもんね」

「それから……これは軍とは関係ないんだが。お前ら、『クローディア姫』という名前は聞いたことはあるか？」

「クローディア姫……。どこかで聞いたことあるわね？」

「確か、海難事故で亡くなった王太子夫妻の忘れ形見ですね。女王陛下のお孫さんにあたる……」

「ああ、あまり有名じゃないが、直系中の直系ともいえる女性だ。

いつもは、グランセル城の女王宮で暮らしているらしいが……。その姫殿下の見合い相手がある人物が捜しているらしい」

「見合い相手か……。お金持ちの家は、そういうのも珍しくない

つていうけど……。何だかちょっと気の毒よね」

「エステル、論点はそこじゃないよ。この場合、『ある人物』というのが問題なのですよね？」

「フフ、さすが鋭いじゃねーか」

「え、その人物って……リシャール大佐のこと？」

エステルが指摘した。

「ほう、なかなか鋭いな。実際に、他国に人を派遣して有力候補を捜そうとしているのはリシャール大佐らしいんだな」

「やっぱり……。でも、おかしくない？なんでリシャール大佐がお姫様の結婚相手を探すわけ？」

「だから面白そうないがプンプンするんじゃないか。というわけで……そのあたりの事は頼んだからな」

「へ……？」

訳が分からないと首をかしげるエステル。

「……明日の試合に勝ってお城の晩餐会に招待されたらそのあたりの情報を探ってこい。つまり、そういうことですね？」

ヨシユアが逆に尋ねた。

「あ、なるほどね……。まったく、道理で気前よく色々教えてくれるわけだわ」

「これだけ調べてやったんだ。ギブ・アンド・テイクは当然だろ」

「確かに、色々と助かりました」

「仕方ないわね。何か判ったら教えてあげるわよ」

「へっ、そう来なくっちゃな。まあ、お前らに頼らなくてももうまく行けば今日中にも……」

その時、通信社の通信器が鳴った。

「おっと……」

ナイアルが受話器を取った。

「もしもし。こちら《リベル通信社》……。おお、お前か！ずっと連絡を待ってたんだぜ。なに……。今から？ああ、わかった。これからそっちで落ち合おう」

そして、ナイアルは受話器を置いた。

「なになに、どうしたの？」

「ちょっとしたヤボ用でな。今から人に会うことになった」

「大変ですね。もう日が落ちるのに……」

「もともと俺は夜型でね。それを、あのマイペース娘の新人研修をしてるうちに、朝型に変えられちゃまったんだ……。って、そんな事はどうでもいいか。俺はこれから出かけるが、お前らはゆっくりしていけよ」

「ん、わかったわ。お仕事、がんばってね」

「お前らも、明日の試合、絶対に負けるんじゃないぞー！」

そう言っつて、ナイアルは出かけて行ってしまった。

「さてと……あたしたちはどうしよっか？」

「そうだね……。とりあえずギルドに寄ってからホテルに帰るとしようか。ナイアルさんが調べてくれたことを報告しておいた方が良さそうだ」

「ん、りょーかい」

エステルとヨシユアはギルドに向かった。

グランセル支部

「エステルさん、ヨシユアさん。見事、決勝に進んだそうですね。」

クルツさんたちは残念でしたが、良い試合だったと聞いていますよ。エルナンが楽しそうに話した。

「うん、白熱の勝負だったわ。でも、先輩たちと較べるとあたしたちってまだまだかも……」

「確かにそうだね。ジンさんはもちろん、オリビエさんの銃と魔法にも助けられてばかりだし……。これから精進が必要みたいだ」

「その心構えがあればもつともつと上に行けますよ。ところで、今日は何か判ったことはありますか？」

「はい、実は……」

エステルとヨシユアは、ナイアルが調べてくれた情報をエルナンに報告した。

「なるほど……。ロランス少尉というのは獵兵団イェーガーの出身でしたか。

『ジェスター獵兵団』……。聞いたことのない名前ですが調べた方が良さそうですね」

「ギルドと獵兵団には交流があるんですか？」

「いや、どちらかというと商売敵のようなものです。我々は規約で、国家間の戦争に関与することはできませんが、彼らの場合はそれが商売です。戦争の絶えない辺境などでは民間人の安全をめぐって対立することが多いんですよ」

「……あんま好きになれないかも。でも、それなら情報なんて手に入りっこないんじゃない？」

「そこはそれ。蛇の道は蛇と言いました。情報を集めるのに2、3日はかかるでしょうから決勝には間に合いませんが……。それでも構いませんか？」

エルナンが得意げに言った。

「あ、うん。大会だけの話じゃないしね」

「よろしくお願いします」

「あとは……クローディア姫の結婚相手を大佐が捜しているという話ですが。実は少々、それに関する情報がないわけではありません」
「……っというところ？」

「どうやら、女王生誕祭の当日にエレボニアの皇族が来るそうです。名前はまだ分かりませんが……かの国の皇族がリベールを訪れるのは10年前の侵略戦争以来のことです」

「なるほど、先程の縁談話と関係がありそうな感じはしますね」

「エレボニアの皇族かあ。どういう人たちか全然知らないわね。ていうか、帝国人の知り合いつてオリビエくらいしか知らないし……」
「ちなみに、クローディア姫は16歳になったばかりのはずです。

確かに、結婚を急かせるのは不自然と言えるかもしれないね」

「え、そうなの！？あたしたちと同一年じゃない！」

「上流階級でいえば社交界にデビューする歳だね。でも、昔ならいざ知らず、その歳で結婚は早すぎるな……」

「そこまでして急かせる理由が何かあるのかもしれない。調べてみる価値はあると思いますよ」

「うん、わかったわ。無事にお城に招待されたらそのあたりも探つて来るから」

「そのためには、明日の試合を何とかして勝たなくちゃね」

「ふむ……少々、危険かもしれませんが。これをお渡ししておきましよう」

エルナンはエステルに地下水路の鍵Bを渡した。

「え、これって……」

「王都支部で管理している地下水路の鍵のひとつです。グランアリーナの横にある入口を開くことができますよ。ただ、そこから入れる区画にはかなり手強い魔獣がいますが……」

「それこそ望むところよ！あいつらと戦う前にもう少し鍛えておきたかったから助かつちゃうわ！」

「エルナンさん。ありがとございます」

「なに、これも受付の役目です。ただし、あなたたち2人だけ入ろうとは思わないでくださいね」

「りょーかい。朝、ジンさんたちと合流したら入ってみることにするわ」

エステルたちは、ホテルへ向かうことにした。

第5章 王都療乱(20) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

武術大会2日目(後編)です。

第5章 王都撩乱(21) (前書き)

武術大会2日目(後編)です。

第5章 王都撩乱(21)

グランセル南街区

「わっ……。もうこんな時間だわ」

「早くホテルに帰ったほうがよさそうだね」

外に出るとすっかり日が暮れていた。

「おい、その君たち!」

いきなり兵士から声をかけられた。

「あれ……。兵士さんたちどうしたの?」

「我々は巡回中の者だ。テロリスト対策の一環として本日から、夜間のパトロールを強化することになってな」

「それに伴って、夜間は外出はなるべく控えてもらおう事になった。

君たちも、早く家に戻りたまえ」

「夜間の外出を控えろって……。ちよつと不便すぎるんじゃない?」

エステルは嫌な目で見た。

「これも上の決定なのでね」

「申しわけないが従ってもらおう。ところで……。君たちはどこに住んでいるのかね?」

「僕たちは、北街区にあるホテルに滞在しています。武術大会の期間中、そこに泊まっているので……」

「武術大会の期間中……。待てよ、君たちの顔、どこかで見たような気が……」

「ああっ!この子たち、武術大会の決勝に勝ち進んだ出場者じゃないか!」

「言われてみれば……」

兵士たちは驚いたようだ。

「あ、兵士さんたち、見物してくれてるんだ?」

「はは、警備のついでにね。特に今日の試合は白熱の展開で興奮させられたよ」

「明日は決勝戦なんだろう？ホテルまで送っていくからゆつくり休まなきゃだめだぜ」

「え、えっと……」

「わかりました。お言葉に甘えます」

そうして、エステルたちは兵士にホテルまで送ってもらった。

ホテル・ローエンバウム

「えっと……送ってくれてありがとう」

「どうもお世話様でした」

「なあに、自分たちは君たちのファンだからな」

「同じ王国軍なのにこういう事を言うのも何だが……。あの特務部隊の連中はいまいち好きになれなくてね」

「そうそう、何を考えているのかさっぱり分からないというかとと、こんなことを言ったらリシャール大佐に失礼だな」

「まあ、そんなわけで君たちの活躍には期待してるよ」

「明日の試合、頑張ってくれよな！」

「あはは……どーも」

「精一杯頑張ります」

そして、兵士は出ていった。

「ふう……何だかフクザツねえ。あの人たち本当に大佐の陰謀を知らないみたい」

「情報部の人間ならともかく、彼らはただの一兵卒だからね。上官から伝えられた情報をそのまま信じてるんだろう」

「うーん……。あたしたちの応援をしてくれるし、あんまり敵対したくないなあ」

「どちらにせよ、一般兵とは事を構えない方が賢明だろうね。今夜はもう外出しないで部屋で休もうか」

「ん、オツケー」

エステルたちは2階に上がった。

202号室前

エステルが部屋を開けようとすると、中から何か音が聞こえてきた。

「あれ……。今、何か物音がしなかった？」

「……………」

ヨシユアが厳しい目つきで部屋の扉を見ている。

「（…………部屋に入ると同時に臨戦態勢のまま状況確認を）」

「（えっ…………！？）」

ヨシユアがエステルにささやいた。

「（たぶん、侵入者だ。爆発物が仕掛けられている可能性もあるから気を付けて）」

「（ちょ、ちよっと…………冗談でしょ？）」

「（頼むから僕の言うとおりにして…………。何だったらここで待っていてくれても構わない）」

「（じよ、冗談！覚悟はできているからとつと中に踏み込みましょ！）」

「（…………了解）」

エステルたちは武器を構えたまますぐさま部屋に入った。

「あ……………」

「逃げられたみたいだね。でも、おかしいな…………。人のいた気配がない…………。トラップも…………仕掛けられてないみたいだ」

部屋の中は特に散らかされた様子もなく、綺麗なままだった。

「そ、そんな事までわかるの？」

ヨシユアが部屋を見渡し、窓の下に落ちていた手紙を拾った。

「…………どうやら置き土産はこれだけみたいだ」

「それって…………手紙？」

ヨシユアは手紙の封を切った。

「『 今夜10時。大聖堂まで来られたし。くれぐれも他言無用のこと』」

ヨシユアが手紙の文面を読んだ。

「……………って、それだけ？大聖堂って、西街区にある大きな教会のことよね。今夜10時っていうことはもうすぐか……………」

「……………」

ヨシユアは黙ったままだ。

「うーん、あやしさ大爆発だけど虎穴に入らずんばとも言うし……………。ねえ、ヨシユア。ここはお誘いに乗ってまない？」

「……………駄目だ！」

ヨシユアが大声を出した。

「ど、どうしたの？」

「ごめん、大声を出して……………。ほら、さっき兵士たちが夜のパトロールを強化してるって言うってただろ？西街区までは離れているし、みとが見咎められる可能性が高いよ」

「あ、忘れてた。うーん、だからといって放っておくのも気持ち悪いし……………」

「だから、僕ひとりで行ってくるよ」

「へっ……………？」

「こついう時は、2人よりも1人の方が行動しやすいからね。兵士たちをやり過ぎしながら大聖堂までたどり着けると思う」

「……………」

「様子を確かめるだけなら僕ひとりで充分だと思っただ。だから君はここで待って……………」

「コラ」

エステルが話をさえぎった。

「え……………」

「あたしだって遊撃士のはしくれよ。自分のことは自分で面倒見れるし、足を引つ張らない自身だってあるわ。もっともらしいこと言ってもごまかされないんだからね」

「エステル……僕はそういつつもりじゃ」

「あたしを信用してないワケじゃないのは分かってる。心配してくれているんだろうけど多分、それだけでもない……。何か心当たりがあるってトコ？」

「……。そんな素振りを見せてないのにどうしてそこまで分かるんだい？」

「ヨシユアは凶星だったようだ。」

「そりゃあ、あたしはヨシユア観察の第一人者だもん。何となく分かっちゃうんだってば」

「……。ここまで、か……」

「ヨシユアがエステルに聞こえないようにつぶやいた。」

「えっ？」

「わかった、もう止めないよ。指定の時間までもうすぐだし、急いで大聖堂に向かうとしよう」

「あ……うん！」

「でも、約束して欲しいことがある。何かあったら必ず僕の指示に従ってほしいんだ。一瞬のミスが命取りになるかもしれない」

「うん……わかった。それじゃあ急ぎましょ」

「エステルたちはさっそくホテルを出た。」

「あ……！」

外はパトロールの兵士でいっぱいだった。

「（さっそく巡回してるみたいだね。もし兵士に見つかったらホテルに連れ戻されると思う……。兵士たちの巡回をかわしながら何とか大聖堂までたどり着こう）」

「（ん、オツケー！）」

グランセル大聖堂前

「(やった、何とか到着したわ!)」

「(気を抜かないで、エステル……。先に僕が入るから後からついてきてくれ)」

「(う、うん……)」

グランセル大聖堂

「……ごめん、エステル。僕の勘違いだったみたいだ」

「え……?」

「……フフ。来てくださいましたか」

そこにいたのは、以前、エルベ周遊道で魔獣に襲われていたシスター・エレンだった。

「あなたは……」

「ひょっとして……周遊道で会ったシスター!？」

「その節はどうもありがとうございました。よく、あんな伝言でここまで来て下さいましたね」

「あの手紙、シスターのものだったんだ……。でも、一体どうしてこんな思わせぶりなこと……」

「なるほど……ようやく気付きました。貴女だったんですか」

「へっ……?」

「フフ……。ヨシユア君はなかなか鋭いな。では、失礼して……暑
苦しい服は脱がせてもらおう」

シスター・エレンが服を脱ぐと、その人物は……ユリア中尉だった!
「ああっ!？」

「王室親衛隊、中隊長。ユリア・シュバルツ中尉だ。久しぶりだな。
エステル君、ヨシユア君。来てくれると信じていたよ」

「お久しぶりです、ユリア中尉。ルーアンの発着場でお別れして以
来ですね」

「ああ……そうだな。さほど経っていないのにずいぶんと昔のような気がするよ」

「ちよ、ちよっと待って……。なんでユリアさんがそんな恰好しているわけ？それと、どうしてあたしたちをこんな場所に呼んだりしたの？」

エステルが訳が分からずに一気に質問攻めした。

「一つ一つ答えさせてもらおう。まず、この恰好だが……七耀教会はリベール王家と昔から深い繋がりがあってね。リシャル大佐の陰謀によって追われることになった我々を色々と助けてくれているのだよ」

「そうだったんだ……」

「もう一つの疑問だが……君たちを呼んだのは他でもない。明日の決勝で勝利したら城の晩餐会に招待されるだろう。その時に、グランセル城にいる女王陛下と接触して欲しいのだ」

「……………」

「虫のいい頼みなのは判っている。だが、手配された我々にとって城内に入り込む術は存在しない。もはや君たちだけが頼りなのだ」

「……えつと。なんとか偶然ねえ」

「僕たちは、陛下と会うために武術大会に出場しているのです」

「え……？」

エステルとヨシユアは、レイストーン要塞での事件とラッセル博士から女王あてに伝言を預かっていることを話した。

「そんな事があったのか……。おお女神よ。エイトス大いなる慈悲に感謝します……。ならば、私の方から君たちに頼むことはただひとつ。苦境にある陛下の相談に乗ってさしあげてほしいのだ」

「うん、もちろんそのつもりよ」

「内政不干涉が原則とはいえ、この事態はさすがに見過ごせません。できる限りのことをさせていただくつもりです」

「かたじけない……。それでは、これを持っていくといいだろう」

ユリア中尉はエステルに紹介状を渡した。

「これって……？」

「城の女官長をされているヒルダ夫人という方への紹介状だ。たぶん陛下は、あの特務兵たちに厳重に監視されているとは思いますが……。身の回りを任されている夫人なら君たちを陛下に引き合わせる事が出来るかもしれない」

「へへ、そんな人がいるんだ」

「わかりました。その人を捜して相談してみます」

「よろしく願います。フフ……情けないことだな」

ユリア中尉が自嘲した。

「へ……？」

「奸計かんけいにおとしいれられて守るべき方を守れなかった屈辱……。たとえこの命が果てようとも奸賊かんぞくを討ち、陛下をお救いすることで晴らさんと誓ったばかりなのに……。君たちに力を借りるしかない無力な自分が情けなくてね……」

ユリア中尉は自分の拳に力を入れた。

「そ、そんなに自分を追い詰めなくても……。それに申しわけないけど明日の試合で、あたしたちが負ける可能性だってあるんだし……」

「フフ……君たちならきつと大丈夫だろう。あのカルバードの武術家どのも大した腕前の持ち主だが……。何といっても君たちはあのカシウス大佐の子供なのだから」

「ええつ、ユリアさんも父さんのこと知ってるの!？」

ここでカシウスの名前が出てくるとは思いもよらなかったのだろう。エステルはかなり驚いたようだ。

「王国軍きつての智将にして《剣聖》と呼ばれた最高の剣士……。退役前に、士官学校の武術教官をなさっていた時に指南して頂いた。私の剣の師匠とも言えるお方さ」

「し、信じられない……。父さん、棒術しか使わないのに」

「退役して遊撃士となった時に剣は捨ててしまったらしいな。ただ

敵を断つだけでなく敵を挫き、弱きを扶ける……。そういう精神の象徴として棒術を選ばれたと聞いている」

「そうだったんだ……。あたしの棒術にそんな意味があったなんて……」

「その精神は、間違いなく君にも受け継がれていると思うよ。誇りに思ってもいいんじゃないかな」

ヨシユアが励ましてくれた。

「ヨシユア……」

「カシウス大佐が鍛えた君たちだ。必ずや優勝できると信じている」

「えへへ……。ユリアさんにそう言ってもらえると何だか自信がわいてきちゃった」

「全力を尽くします」

その時、大聖堂の扉がノックされた。

「……失礼、王都警備隊です！現在、テロ対策の一環として主要施設の見回りをしております。夜分遅くに申しわけありませんが中を改めても構わないでしょうか？」

「（やばっ……）」

「まあ……ご苦労さまです。少々お待ちください。すぐに鍵を開けますから」

そう言つて、ユリア中尉はシスター姿になった。

「（祭壇部屋の方に外に通じている裏口がある。君たちはそこから行くといい）」

「（うん、わかったわ！）」

「（ユリア中尉もどうか気を付けてください）」

エステルたちはすぐさま裏口から大聖堂を後にした。

グランセル東街区

「はあ……なんか巡回を避けているうちにこんな所まで来ちゃった

わね。もう、こっちの方には兵士はいないみたいだけど……」

「うん……人の気配はないね。そろそろ夜間のパトロールも終わりたいだ。少し休んでからホテルに戻るうか」

「オッケー」

そして、エステルは近くのベンチに座った。

「うう、色々ありすぎてなんか頭がパニック状態かも……」

「はは……確かに。まさか大聖堂で待っていたのがユリア中尉だとは思わなかったな」

「あ、そーいえば……。結局、ヨシユアの心当たりはユリアさんじゃ無かったのよね？ひよつとして……前に会ったことのある人？」

「……それは……」

ヨシユアが話しくそくに顔を伏せた。

「あ……。ごめん、今のナシ。ルール違反、ルール違反」

「エステル……」

「ヨシユアが話す気になるまで出会う前のことは聞かない……。気を付けてはいるんだけどつい忘れちゃうのよね」

「……。エステル、僕は……。僕は、君と旅してきて少しは強くなれたと思うんだ」

「え……？」

ヨシユアが唐突に切り出してきた

「同じ空の下で生きている様々な人々の、さまざまな人生……。響き合う人々の想いと想い……。そんなものに触れることで亡くしたものを取り戻せる……。そんな気がしていたんだ……」

「……ヨシユア……？」

「……たぶんそれは錯覚なんだ。だけど、それでも僕は……。君と一緒にいられることを感謝したいと思っている……。この空と、父さんと……何よりもエステル……。君に」

「ヨシユア……」

「だから……。約束する。今回の事件が片づいて父さんも無事に帰ってきたら……。僕の過去……。君と出会う前のことを話すよ」

「ホ、ホント……?」

「うん。この星空にかけて約束する」

「………………。よし、決めた!」

エステルが突然立ち上がった。

「エステル……?」

「何ていうか……モヤモヤが吹っ飛んじやった。あたしも、全部片づいたらヨシユアに話すことがあるから」

「え……ああ。もしかして、例の悩みのこと?」

「そうそう、それぞれ。えへへ……覚悟してもらっからねっ!」

「覚悟って……いつでも出来てるつもりだけど。だったら今すぐにも……」

「ダ、ダメだってば! やっぱりそういうのってタイミングがあると思っし……。うーん、シチュエーションはすごくいい感じなんだけど……」

「??? よく分からないけど……。落ち着いて話をするためにも明日の試合は負けられなくなったね」

「モチのロンよ。あんな連中に邪魔されるもんですか。乙女のパワーで特務兵どもをぶつとばす!」

エステルが真夜中に絶叫した。

「ぶつとばすって……。ぶつ……。クツ、アハハハ……。っ!

君ってやっぱり……。父さんの娘だなあ……」

ヨシユアがたまりかねて大笑いした。

「な、なによ、失礼しちゃうわね。あんな不良中年とどこが似ているってゆーのよ?」

「うん……そうだな。なんだか僕も、明日の試合勝てそうな気がしてきたかな」

そして、2人は少ししてからホテルへと戻ってゆっくりと身体を休めた。

第5章 王都療乱(21) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

武術大会最終日です。ロランス少尉との対戦がメインです。

第5章 王都撩乱(22) (前書き)

武術大会最終日・決勝戦です。決勝戦の戦闘の様子をお楽しみください。

第5章 王都撻乱(22)

ホテル・ローエンバウム 朝

「まったく、昨日は災難だったよ。ホ口酔い気分で大使館に戻ろうとしたら兵士たちに難癖つけられてねえ」

オリビエが早朝から昨日のパトロールについてボヤいている。

「テロリスト対策とやらで夜間のパトロールが強化されていたらしいな。お前さんたちは大丈夫だったか？」

「ええ、昨日は早く休んだので特に問題はありませんでした」

「そ、それよりもエルナンさんからいいものを借りてきちゃったわ」
エステルは昨日のことに触れられないよう、話題を変えた。

エステルは懐から、昨日、エルナンから借りたもうひとつの地下水路の鍵を取り出し、説明した。

「おお、そりゃあ助かるな。あの兄ちゃん、まだ若いのにずいぶん心配りがきくようだな」

「そういうわけで、午前中は地下水路に降りてみましょう」

「もうひとつの入口はアリーナの隣にあるそうです」

「フツ、晩餐会のために最後のひと頑張りで行こうか」

エステルたちは、準備を整えた後、地下水路で鍛えた。

グランアリーナ前

「これは皆様。グランアリーナへようこそ。一度、中に入ったら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか？」

「うん、バッチリよ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

蒼の組 控室

「は、あたしたちだけだとメチャメチャ広く感じるわねえ」

エステルは自分たち以外誰もいない控室を見渡して言った。

「団体競技や、サーカスなんかも出来るよう造られた場所だからね。昔は、大型魔獣との戦いなんていうイベントも行われていたみたいだよ」

「へ、だからこんなに大きな控室になってるわけね」

「帝都のオペラ劇場に較べると設備の面では物足りないが……。屋外コンサートなんていうのも悪くないかもしれないねえ」

オリビエはここでコンサートを披露したいようだ。

「何の話よ、何の……」

「しかし、今日はどうやら早く来すぎちまったようだな。考えてみりゃー試合だけだから始まる時間は遅いはずだ」

「え、そうなの。うー、試合があるまでただ待ってるのは退屈かも」

「だったら、試合が始まるまで場内を散策して来ようか？」

「ん、そうね。ジンさん、オリビエ。あたしたち散歩に行ってくるわ」

「おー。時間までには戻ってこいよ」

そして、エステルとヨシユアは控室を出ていった。

「……………」
オリビエはただそれを見送っていた。

「へえ。どういふ風の吹き回しだ？お前さんのことだからってつきりついていくと思っただが」

ジンが珍しいなと言った。

「いやね、2人の雰囲気少し変わったような気がしてね。あれは

何か進展があつたとみたね」

「ほう、よく見ているじゃないか。確かにあの2人、この大会に妙なプレッシャーを感じていたみたいだが……。今日はどこか吹っ切れたようないい表情をしてやがったな。いやあ、若いモンはうらやましいね」

「でも、まだまだ仕込みは不十分といったところかな。もう少し進展した方が美味しく頂けるにちがいない。フフ……からかい甲斐がありそうだ」

オリビエの目がいやらしく輝いた。

「やれやれ、悪趣味だねえ」

「ゾクツ……」

エステルが突然身を震わせた。

「どうしたの？ひよつとして体調が悪い？」

「ううん……。何だか邪悪な意志を感じて……。人をダシに楽しんでやろうという調子にのつたヨコシマな意志を……」

「……なんとなく誰だか見当は付きそうだね」

とは言つても、1人しかいないけど……。

グランアリーナ ホール

「おお……。そこにいるのはエステル君とヨシユア君か！」

「ああっ、クラウド市長！？」

「どうしてこんな所に……」

ホールにいたのはロレント市長のクラウド市長だった。

「いやあ、久しぶりじゃのう。シエラザード君から話を聞いて王国各地を旅しているのは知っておつたが……。2人とも、しばらく見ないうちにいい顔つきになつたじゃないか」

「はは……。ありがとうございます」

「うーん、自分じゃあんまり分からないけど……。市長さんの方は相変わらず元気そうね。ちょっと安心しちゃったわ」

「はは、まだまだ若い者には負けてはおれんよ。それよりも、武術大会に出場して決勝まで行ったそうじゃないか。年甲斐もなくつい見物に来てしまったよ」

「え、見物のためにロレントから来てくれたの？」

「いや、そうじゃないんだ。実は、グランセル城の晩餐会に突然、招待されてしまったな。それで、今朝の定期船で王都に到着したばかりなんじゃ」

「お城の晩餐会！？」

「なるほど……。そうだったんですか。その晩餐会、デュナン公爵に招待されたものじゃありませんか？」

「よく知っておるのう？元々、生誕祭の式典には夫婦で出席するつもりじゃったから近いうちに来ていたはずじゃが……。いきなり軍の女性士官がやって来て晩餐会に出るよう要請してきてなあ」

「（その女性士官って……）」

「（カノーネ大尉だね、きつと）」

エステルとヨシユアは目くばせした。

「ただ、ミレーヌのやつは旅行の準備が整わなくてなあ。仕方がないのでわしだけ先に来たというわけじゃ」

「そっか……。ミレーヌおばさんは来てないんだ」

「あの、市長。実は僕たちも、もしかしたらその晩餐会に出るかもしれないません」

「ほ……？」

エステルとヨシユアは公爵の提案で、武術大会の優勝者が晩餐会に招待されることを説明した。

「なるほど……。そういう事になっていたのか。陛下がご不調の折の晩餐会などあまり出たくはなかったが……。君たちが一緒なら気が紛れるといったものじゃ。こりゃあ、ますます君たちに勝つてもらわなくてはならんのだ」

「あはは……うん、わかつたわ！」

「ご期待に添えるよう頑張ります」

「それじゃあ私は観客席の方に行っておるよ。頑張つてな。エステル君、ヨシユア君」

そう言つてクラウス市長は観客席の方に行つてしまった。

「まさか、クラウス市長も晩餐会に出席するなんて……。つて事は、メイベル市長なんかも呼ばれてるのかしら？」

「可能性は高そうだね。たぶん、有力者たちを集めて話があるんじゃないかな」

「うーん……まあいつか。何とか試合に勝つて晩餐会に出れば分かるもんね！」

「うん、そうだね。そろそろ控室に戻ろうか。もうすぐ開場の時間だと思つよ」

「ん、りょーかい！」

エステルたちは控室に戻つた。

蒼の組 控室

「あ……。今日はリシャール大佐も公爵と一緒に来てるみたい！」

「そうだね……。公爵のお供のついでに部下の試合を見に来たのかな」

「ほう、あれが巷ちまたで人気の王国軍情報部のリーダーか。男前だが、風格を感じさせる、なかなかの人物みたいだな」

「まあ……確かにそうなんだけどね」

エステルがため息をついた。真相を知つた者としてはがっかりするだろう。

「ふむ、ボースで見かけた時からさらなる風格を漂わせるようになったみたいだね。フツ、こうなつては仕方ない。このオリビエ・レオンハイムのライバルと認定しようじゃないか」

「あんたにライバル視されてもねえ」

「……始まるみたいだよ」

ヨシユアがつぶやいた。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦最終日を始めます！予選開始から1週間にわたって開催されてきた武術大会ですが……本日ももちましていよいよ最終日となりました。勝利と栄光を掴むのは一体、どちらのチームなのか……。それでは、決勝戦のカードを発表させていただきます。南、蒼の組　カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム！北、紅の組　王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下4名のチーム！」

「よっしゃあ、出番ね！」

「いよいよだ……」

「フツ、今回ばかりは本気で行かせてもらおうよ」

「泣いても笑ってもこれが最後だ……。気合を入れていくぞ！」
エステルたちはアリーナへと出た。

「（さすがに今までの連中よりは齒ごたえがありそうだな……）」

「（しかし、チームの半分が青さの取れない少年少女とは。所詮、我々の敵ではなさそうだ）」

特務兵がこそごと話している。

「（フフ、侮るな。その少年たちは遊撃士協会の人間なのだぞ）
ロランス少尉がたしなめた。

「（え……）」

「（すると報告にあつた……）」

「（その可能性もある。くれぐれも気を抜くな）」

「（……はっ！）」
「（了解であります！）」
「こちら。何ごちゃごちゃ言ってるのよ」
「フツ、エステル君。大目に見てあげてくれたまえ。そんな仮面をつけるくらいだから、よほど自分の顔に自信がないのだろう。ボクの芸術的な美貌をやっかんてコソコソ陰口を叩くのも無理はないさ」
この言葉に特務兵たちは猛反抗した。
「ど、どうしてそうなる！？」
「都合のいい解釈をするな！」
当然、怒るよね…。
「あの……。ロランス少尉と言いましたね」
「なにかな、少年？」
「ヨシユア……？」
「あなたの太刀筋は……。……いえ……何でもありません。どうかよろしくお願いします」
「フ……。こちらこそお手柔らかなにな」
「????？」
エステルはわけが分からないようだ。
「ほら、お喋りはそこまでしておきな。そろそろ始まるぞ」
「これより武術大会、決勝戦を行います。両チーム、開始位置にいてください」
両チームが開始位置についた。
「女神エイトスもご照覧あれ……。双方構え！」
両チームが武器を構えた。
「勝負始め！」
鋭い言葉と同時に決勝戦の火蓋が切って落とされた！

エステル	掛け声	エステル・ヨシユア・ジン・オリビエ	S
TR	20% UP		
《2ターン目》			
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	待機
《3ターン目》			
ヨシユア	双連撃	特務兵1	885 + 849ダメージ
《4ターン目》			
ロランス少尉	アーツ	待機	
《5ターン目》			
ジン	龍神功	STR・DEF	30% UP
《6ターン目》			
特務兵1	影縫い	ヨシユア	0ダメージ
《7ターン目》			
特務兵2	影縫い	ヨシユア	0ダメージ
《8ターン目》			
特務兵3	通常攻撃	ジン	0ダメージ
《9ターン目》			
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	発動
50% UP			ジン SPD
《10ターン目》			
ロランス少尉	アーツ	ティアラル	発動
000回復			特務兵1 HP1
《11ターン目》			
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	待機
《12ターン目》			
ロランス少尉	移動		
《13ターン目》			
オリビエ	アーツ	クロックアップ改	発動
D 50% UP			ヨシユア SP
《14ターン目》			

特務兵1 通常攻撃	ジン	0ダメージ	
《15ターン目》			
特務兵2 通常攻撃	エステル	0ダメージ	
《16ターン目》			
エステル 旋風輪	特務兵1	741ダメージ	特務兵2
807ダメージ			
	特務兵3	787ダメージ	
《17ターン目》			
ジン 月華掌	特務兵1	1185ダメージ	混乱
《18ターン目》			
ヨシユア 魔眼	特務兵1	979ダメージ	特務兵2
852ダメージ			
	特務兵3	877ダメージ	特務兵1
戦闘不能			
《19ターン目》			
ロランス少尉 アーツ	待機		
《20ターン目》			
オリビエ アーツ	クロックアップ改	待機	
《21ターン目》			
ロランス少尉 アーツ	ティアラル	特務兵3	HP1000回復
《22ターン目》			
オリビエ アーツ	クロックアップ改	発動	ジン SPD
50% UP			
《23ターン目》			
ジン 月華掌	特務兵3	1230ダメージ	
《24ターン目》			
エステル 旋風輪	ロランス少尉	612ダメージ	特務
兵2 723ダメージ			
《25ターン目》			
ヨシユア 双連撃	特務兵2	861+846ダメージ	

特務兵2 戦闘不能

《26ターン目》

ロランス少尉 アーツ 待機

《27ターン目》

オリビエ スナイプショット ロランス少尉 517ダメージ

アーツ解除

《28ターン目》

ロランス少尉 破砕剣 エステル 357ダメージ

《29ターン目》

特務兵3 通常攻撃 エステル 0ダメージ

《30ターン目》

ジン 月華掌 特務兵3 1200ダメージ 混乱

《31ターン目》

エステル 旋風輪 ロランス少尉 564ダメージ 特務

兵3 777ダメージ

《32ターン目》

ヨシユア 双連撃 ロランス少尉 609+669ダメージ

《33ターン目》

ロランス少尉 分け身 ロランス少尉分身出現 (HP200

0)

《34ターン目》

ジン 月華掌 ロランス少尉 990ダメージ 混乱

《35ターン目》

オリビエ アーツ クロックアップ改 待機

《36ターン目》

オリビエ アーツ クロックアップ改 発動 オリビエ SP

D 50% UP

《37ターン目》

エステル 旋風輪 ロランス少尉 645ダメージ

ロランス少尉分身 1260ダメージ

≪38ターン目≫
 ヨシユア 双連撃 ロランス少尉 681 + 682ダメージ
 ≪39ターン目≫
 ロランス少尉 移動 (混乱状態)
 ≪40ターン目≫
 特務兵3 移動 (混乱状態)
 ≪41ターン目≫
 ジン 通常攻撃 ロランス少尉 927ダメージ ロラン
 ス少尉 戦闘不能
 ロランス少尉分身消滅
 ≪42ターン目≫
 オリビエ 通常攻撃 特務兵3 669ダメージ 特務兵
 3 戦闘不能

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」

「ば、馬鹿な……」

「選り抜きの特務部隊を代表する我々が負けるとは……」
 特務兵たちが膝を付きながら話す。

「フ……やられたな……」

ロランス少尉が笑みをこぼす。

「やったああああっ！」

エステルが絶叫した。

「勝った……勝てたのか……」

「はあはあ……。さ、さすがに疲れたねえ……」

ヨシユアとオリビエは疲れている。

「……………」

しかし、ジンは難しい顔でロランス少尉を見ていた。

「それではこれより、優勝チームに公爵閣下の祝福の言葉が贈られます。代表者、ジン・ヴァセック選手！どうぞ、前にお進みください」

「は」

ジンがデユナン公爵の前に出た。

「おお、近くで見ると本当に大きいのだなあ……。東方人というのは皆、そなたのように大きいのか？」

デユナン公爵がジンに驚いている。

「いや、自分は規格外ですな。幼き頃より、良く食べ、良く眠り、鍛えていたら自然とこうなり申した。生来、物事を深く考えない質ゆえ図体ばかり大きくなったのでしよう」

「ハツハツハツ、なるほどな。うむ！ 気に入ったぞ、ジンとやら！ 賞金10万ミラと晩餐会への招待状を贈るものとする！」

「ありがたき幸せ」

ジンは晩餐会への招待状と賞金10万ミラを手に入れた。

「そなたと、そなたの仲間エイトスに女神の祝福と栄光を！ さあ、親愛なる市民諸君！ 勝者に惜しみない拍手と喝采を！」

こうして、武術大会が終了した。

紅の組 控室

「フフ、面白い者たちが優勝することになったものだな」
リシャール大佐が式の様子を見ながら言った。

「まったく……。恥を知りなさい、ロランス少尉。あのような者たちに遅れを取って閣下の顔に泥を塗るなんて……。日頃のふてぶてしい態度はどうやらコケおと威しだったようね？」

カノーネ大尉がロランス少尉を責めた。

「……………恐縮です」

「はは、カノーネ君。そう責めないでやってくれ。実は私の方から、ロランス君に全力を出さないように頼んだのだ」

「えっ……………！」

「情報部はその性質上、黒子の役に徹せねばならない。今回のように、華のあるチームが優勝する方が望ましいだろう」

「なるほど……………。公爵閣下も、あの東方人を予想以上に気に入られた様子……………。目くらましにはもってこいですね」

「しかし……………今年の大会は残念だったな。親衛隊のシュバルツ中尉やモルガン將軍が参加していればもつと華やかだっただろうに」

「うふふ、お戯れを……………。そういう事なら、閣下ご自身が出場なさればよろしかったのに。あの小癩こしゃくなユリアなど足元にも及ばぬ腕前なのですから」

「はは、私はそれほど自信家ではないつもりだよ。本気を出したロランス君にはあまり勝てる気がしないからね」

「……………お戯れを。閣下は少々、私のことを買いかぶりすぎているようだ。軍人とは名ばかりの獵兵あがりの無骨者むこつしゃにすぎません」

「これでも人を見る目は確かなつもりだ。君に対抗できるとすれば、それこそあの男くらいだろうな」

「……………」

「その彼のことですが……………。このままでは、彼の子供たちがグラネル城に入ってしまったいますわ。何らかの処置を講じましょうか？」

「放っておきたまえ。公爵閣下が約束してしまったことだ。今更、遊撃士協会が介入しても計画が止まることはありません」

「で、ですが……………」

「……………ロランス君。計画の進行度はどのくらいだ？」

「現在90%を越えました。一両日中には、最終地点へ閣下をご案内できるかと思えます」

「よし、いいぞ」

リシャル大佐が数歩前に出た。

「……王国の夜明けは近い。たとえ逆賊の汚名を受けても……必ず
やじの手で明日を切り拓くのみ」

第5章 王都療乱(22) (後書き)

今回の戦闘はどうでしたかね？前と同じく、エステル1回しかダメージを受けていません。エステルって、敵に狙われやすいのかな？

>次回予告<

決勝戦でグランセル城に入る権利を得たエステルたち。これからはよいよ、リシャール大佐の陰謀が明らかになる！そして、エステルたちはラッセル博士とユリア中尉の約束を果たすため、アリシア女王陛下との面会を試みる！

第5章 王都療乱(23) (前書き)

グランセル城に向かうエステルたち。

第5章 王都撩乱(23)

グランアリーナ前

「はあ、何ていうかすつごい戦いだつたわよね。あのロランス少尉つても想像以上に手強かつたし……」

エステルが冷めやらぬ気持ちを吐露した。

「うん……よく勝てたと思う。今でも信じられないな……」

「……気に入らん」

ジンが唐突に話した。

「えっ？」

「いや……何でもない。それよりも、晩餐会つてのはさっそく今夜あるみたいだな。結構遅くまであるらしいから部屋も用意してくれるみたいだぜ」

「やれやれ、太っ腹なことだ。お偉方と同席というのは堅苦しいよ。うな気もするが……。やはり、リベール宮廷料理にありつけるのは楽しみで仕方ない。フツ、今から想像しただけでも涎よだれが出てしまっそうだよ、ジュール」

汚いな。

「出てる、出てるってば」

「オリビエさんに関しては何のプレッシャーも無さそうですね」

「ハツハツハツ。それでは行こうじゃないか！ボクたちをもてなしてくれる愛と希望のパラダイスにっ！」

オリビエが高らかに騒いでいると、

「……そう事が運ぶと思うか？」

後ろから男性の声がした。

「ハツ、君は……」

男性がオリビエのところに来て来た。

「貴様というやつは……。毎日毎日、ふらりと出かけて何をしているのかと思えば……。まさか立場をわきまえずに武術大会に参加し

ていたとは……」

「や、やだなあ、ミュラー君。そんなに怖い顔をするんじゃないよ。笑う門には福来る。スマイル、スマイルっ？」

「誰が怖い顔をさせているかッ！」

「ミュラーと呼ばれた男性がキレた。」

「（あの制服って、もしかして……）」

「（うん……。エレボニア帝国の軍服だ……）」

「（ふむ……。なかなかやりそうな兄さんだ）」

「……お初お目にかかる。自分の名前はミュラー。先日、エレボニア大使館の駐在武官として赴任した者だ。そこのお調子者とはまあ、昔からの知り合いでな」

「いわゆる幼なじみというヤツでね。フフ、いつも^{いか}威めしい顔だがこれで可愛いところがあるのだよ」

「い・い・か・ら・黙・れ」

「ハイ……」

オリビエがしゅんとした。

「コホン、失礼した。どうやら、このお調子者が迷惑をかけてしまったようだな。帝国大使館を代表してお詫びする」

「あ、ううん……。迷惑ってほどじゃないけど。試合じゃ、オリビエの銃と魔法にずいぶん助けられちゃったし……」

「あの、オリビエさん。武術大会に出ていたことを大使館に隠していたんですか？」

「ハッハッハッ。別に隠してたわけじゃないさ。ただ、言わなかっただけだよ」

「そういうのを隠していたと言うのだッ！」

「ま、まあいい……。過ぎたことを言っても仕方ない。とっと大使館に戻るぞ」

「へ……。ちょ、ちょっと待ちたまえ。ボクたちはこれからステキでゴージャスな晩餐会に招待されているんですけど……」

「ステキにゴージャスだからなおさら出られると困るのだ。お前にはしばらく大使館で過ごしてもらおうぞ」

「……………マジで？」

「俺は冗談など言わん」

「そ、そんな殺生な……………。晩餐会だけを心の支えにここまで頑張ってきたのに……………」

「さ、さすがに……………ちよつと可哀想じゃない？」

「晩餐会に出席するくらい、別に構わんのじゃないのか？」

「何か理由でもあるんですか？」

「キミたち、ナイスフォロー！ああ、仲間というのはなんと美しいものなのだろうか……………。どこその薄情な幼なじみとは比べ物にならない温かさだねえ」
急に生き返ったオリビエ。

「……………君たちは、事態の深刻さがいまいち理解できていないようだ。いいか、想像してみる。王族が主催する、各地の有力者が集まる晩餐会……………。そこで立場もわきまえずに傍若無人にふるまうお調子者……………。それが帝国人だと分かった日には……………」

「ミユラーが想像を促した。容易に想像できるだろう。」

「……………」

「……………」

「……………」

「エステルたちは何も答えなかった。」

「ちよ、ちよつと皆さん。どうしてそこで黙るんデスカ？」

「……………ごめん、オリビエ。その人の心配ももつともだわ」

「さすがに、王城の晩餐会でいつものノリはまずいですよね」

「うーむ。国際問題に発展しかねんな」

「オリビエに対して何のフォローもなし。」

「うわつ、掌を返すようにっ！？」

「終戦から10年目……………。ただでさえ微妙な時期なのだ。我慢してもらおうぞ、オリビエ」

ミュラーがオリビエの首を掴んだ。

「ちょ、ちよつと待ってくださいよ、ミュラーさん。黙っていたことは謝るからさ……」

「問答無用」

時既に遅し。

「ボクの晩餐会〜！ボクの宮廷料理〜！……」

オリビエはミュラーに引きずられながら大使館に戻されていた。

「えつと……いいのかなあ？」

「気の毒だけど……こういう事もあるよ、うん」

「まあ、人間万事、塞翁が馬さいおうがばってやつだ。せいぜい奴やつさんの分まで楽しんできてやるでしょうぜ」

「うーん……仕方ないか。それじゃあ、気を取り直してグランセル城に行きましょう！」

エステルたちはグランセル城に向かった。

グランセル城 城門前

「おつと、この先は女王陛下のいらっしやるグランセル城だ」

「用がないのであればどうかお引き取り下さい……ってあれ？」

門番の兵士ダン、アルツがエステルとヨシユアに気付いたようだ。

「どーも、こんにちは」

「先日は失礼しました」

「なんだ、お前さんたちが」

「まだ王都に滞在していたのかい？」

「うん。ちよつと用事があったね」

「今日は正式に招待されてこちらに伺わせていただきました」

「正式に……？」

「招待されて……？」

「公爵さん直々に招待状をもらったのさ」

「うおっ!？」

「きよ、巨人か!？」

ジンを見た兵士ダンとアルツは後ずさった。

「ほらよ、こいつが招待状だ」

ジンは晩餐会への招待状を渡した。

「えつと……『ジン選手以下、武術大会で見事優勝した4名の者を晩餐会に招待する……』。そうか……あなたたちが武術大会の……」

「そついや、優勝したのは東方人の武術家が率いるチームとか言ってたな……。もしかして、お前さんたちも同じチームだったってことか?」

兵士ダンがエステルとヨシユアを見た。

「えっへん、実はそうなのよね」

「微力ながらお手伝いをさせてもらいました」

「なるほど、そうだったのか……。……あなたたちの事は女官長から聞かされています。1人足りないみたいですが、その方はどうなさったんですか?」

兵士アルツが尋ねた。

「ちとヤボ用でね。来れなくなっちゃったんだ。俺たちだけで出席させてもらっぜ」

「そうか、そりゃあ残念だな。まあいいや……。中へと案内させてもらっぜ」

兵士アルツが門の前に立った。

「武術大会の優勝者、ジン選手以下3名がご来場!開門!」

そして、巨大な城門が開いた。

「うわあ……。ハーケン門もそうだったけど、この城門も迫力があるわねえ」

「それに、さすがに王城だけあって堅牢そうな造りしてますね」

「そりゃ、難攻不落の城だからな。建国以来、アーネンベルクを外敵が突破したことはないが……。貴族の反乱で、王都が戦火に包まれたことは何度かあったんだ」

「だけどその度に、この城は反乱軍の突入を撃退して王家の方々と避難民を守った……。そんな話が残っているくらいさ」

兵士ダンとアルツが王城の逸話を語ってくれた。

「へー、そんな事があつたんだ」

「ふむ、歴史ある国ならではの古き良き逸話つてやつだな」

「さてと、ようこそ！女王陛下のグランセル城へ！そのまま中に入つたら案内係が待っているはずだぜ」

「それでは皆さん、よき夕べを」

エステルたちはグランセル城へ入った。

第5章 王都療乱(23) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよグランセル城に入るエステルたち。

第5章 王都撩乱(24)

グランセル城

「うっわ……」

「当然と言えば当然だけど……。今まで見てきたどの屋敷よりも圧倒的に豪華だね」

「ただ豪華なだけじゃなくて歴史と伝統を感じさせる壮麗さ……。つくづく、旧き王国の格式と伝統を感じさせるねえ」

城の中は白を基調とした内装で高級そうな調度品で彩られていた。さらに、左右対称で階段も一段と格式ある風貌を漂わせていた。

「ようこそ、グランセル城へ。ジン選手御一行でいらっしやいますわね?」

やって来たのは、カノーネ大尉と案内係の者だった。

「(げげっ……カノーネ大尉……)」

エステルがあからさまに嫌な目をした。

「(予想してなかったわけじゃないけど……)」

「ああ、そうだ。公爵さんの招待を受けて参上した。えっと……あなたは?」

「うふふ、申し遅れました。グランセル城の警備を担当する情報部のカノーネ大尉と申します。ジン選手御一行におかれましては御優勝、おめでとうございます。試合を拝見させていただきましたが凛々しくて、本当に素敵でしたわ」

「いやあ、それほどでも。そちらこそ、その若さと美貌で軍の大尉とは本当に驚きですな。よほど優秀でいらっしやるのだろう」

「まあ……お上手でいらっしやいますこと。でも、そちらの若き遊撃士殿ほどではありませんわ」

カノーネ大尉がエステルとヨシユアの方を見た。

「……!」

「……………」

エステルとヨシユアはカノーネ大尉を見返した。

「エステル・ブライトさん。ヨシユア・ブライトさん。ツァイスの事件以来ですわね？」

「……………うん、そうね」

「ご無沙汰していました」

「あいにくですが、ラッセル博士の一件はまだ解決していないのです。どうやら、博士と孫娘さんを誘拐した不届き者がいるらしくてエステルさんたちにお心当たりはないかしら？」

カノーネ大尉が知っているんじゃないかと言わんばかりの目で見てきた。

「さ、さあ。ぜんっぜん心当たりがないわねえ」

「あの事件は正遊撃士に任せて僕たちは王都に向かいましたから。

その後の続報も聞いていません」

「そう……………ふふ。それは本当に残念ですわ。まあ、情報部の力をもつてすれば誘拐犯の逮捕も時間の問題でしょう。楽しみに待っていてくださいね」

「（こ、この雌ギツネ……………）」

エステルは怒り心頭の様子だ。

「わかりました。博士は僕たちにとっても恩人なのでよろしくお願
いします」

「それはもちろん……………。さて、それでは皆さんをお部屋までご案内
申し上げます。シアさん……………あとはお任せしてもいいかしら？」

「はい……………お任せくださいませ」

カノーネ大尉の後ろにいたシアと呼ばれた女性が答えた。

「念を押しておきますが……………お客様に、つまらない話をして失礼を
かけることがないように。いいですわね？」

「は、はい……………わかっております」

明らかに委縮しているシア。

「うふふ、それでよろしい。それでは皆さん。よき夕べをお過ごし

ください。わたくしは、これで失礼しますわ」

カノーネ大尉はどこかに去って行った。

「うーん、なかなかイイ女だねえ」

「ジンさん、悪趣味ねえ……。あんな雌ギツネっぽいのがいいっていうのよ」

「ああいう人がジンさんのタイプなんですか？」

「はは、ああいうのに限って根が純情だったりするんだよな。そのギャップが、またそそるっつーか」

「ダメだこりゃ……。どうでもいいけど何だかオジサンっぽいわよ」「ガーン！」

ジンはオジサンという言葉にかなりショックを受けたようだ。

「あ、あの……」

シアがたまりかねて声をかけてきた。

「あ、ゴメンゴメン。あたしたちを部屋まで案内してくれるんだっけ？」

「はい……。ご案内させていただきます。申し遅れました。私、侍女のシアと申します。今夜の晩餐会から明日までお世話をさせていただきます。何か不便がございましたらいつでもお申し付けくださいませ」

「ああ、よろしく頼むぜ」

「それでは部屋まで案内していただけますか？」

「あ、はい。お部屋はお2階にございます」

エステルたちはシアについて行った。

グランセル城 2階

「ふわ〜っ！あの巨大なシャンデリアもつくづく豪華絢爛ね〜」

「エステル、騒がないの。ところで、そちらの入口は……？」

「《謁見の間》^{えっけん}ですわ。女王陛下が来客に会われる時にお使いにな

られます。最近は使われておりませんが……」

「……なるほど」

ヨシユアが頷いた。

「しかし、女王陛下のご病気はそんなに悪いのかい。もうすぐ生誕祭なんだろう？」

「い、いえ……。最近では、陛下のお世話は女官長がなさっているのです。私はその、あまりそついった事は知らされていない……。そ、それでは参りましょう」

シアはその話を無理に断ち切った。

グランセル城 2階 左翼

シアは部屋の一つの前で立ち止まり扉を開けた。

「こちらが皆様にお泊りになって頂くお部屋です。どうぞ、中にお入りください」

「う、うん……」

「それでは失礼します」

エステルたちは部屋の中に入った。

「うっわ……」

「こんな所に泊まれるなんてちょっと想像できなかったな……」

「いやあ、何ていうかいい土産話になりそうだぜ」

部屋はそこらのホテルとは比べ物にならないくらい豪華だった。

「晚餐会が始まるまでしばらくあるかと存じます。城内は自由に見学して頂いて構いませんが、警備上の理由で立入禁止にしている区画があります。くれぐれも立入はご遠慮ください」

「えっと、具体的にはどういう所がダメなわけ？」

エステルがシアに尋ねた。

「まずは、女王陛下がいらっしやる女王宮ですね。屋上にある空中庭園の一角に築かれた小宮殿ですわ」

「空中庭園……。すごく綺麗そうな雰囲気ねえ」

「うふふ、生誕祭の時にはこのテラスから王都の市民に陛下が挨拶してくださるんです。空中庭園に出るくらいなら大丈夫だと思いますよ。それと、他の立入禁止場所ですが……。1階にある親衛隊の詰所と地下の宝物庫がそうなっております」

「親衛隊の詰所っていうと……」

「たしかテロリストとして指名手配されてる連中らしいな？」

「は、はい……。現在、その場所は情報部の方々が使用されています。立入は禁じられていますのでどうかご了承くださいませ」

「だいたい判りました。ところで、晚餐会に招待されている他の方々はどうしているのですか？」

「すでに全員お見えになっていますわ。たぶん、それぞれのお部屋で寛いでいらっしやるかと思います」

「そうですか……」

「それじゃあ、もうクラウス市長も来てるんだ」

「はい、先ほどいらっしやっただばかりですわ。それでは私は失礼しますが……。何か御用がございましたら1階の控室までご連絡ください」

そう言っつて、シアは出ていった。

「さてと……」

エステルとヨシユアはジンに気付かれないよう目配せした。

「……ねえ、ジンさん。あたしたち、ちょっとお城の中を見物しに行きたいんだけど……」

「晚餐会が始まるまでには戻ります」

「やれやれ、試合の後だっついうのに若いモンはタフだねえ。いいぜ、行ってきな。俺はメシまで、この豪勢な部屋でのんびりと休ませてもらっぜ」

そして、エステルたちは部屋を出た。

「晩餐会が始まるまでにできる限りのことをしなくちゃ。まずはユリアさんが言ってたヒルダ夫人に会わなくちゃね」

「それと、他の招待客に会って挨拶をしておいた方がいいと思う。多分、顔見知りが多いだろうからね」

エステルたちは当初の目的を果たすため、行動を開始した。

第5章 王都療乱(24) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよ行動を開始したエステルたち。ヒルダ夫人と会えるのか！
？

第5章 王都療乱(25)(前書き)

グランセル城の招待客には懐かしい人たちが。

第5章 王都撩乱(25)

グランセル城 2階 左翼

クラウス市長・コリンズ学園長

「おお、来たか。エステル君、ヨシユア君」

「フフ、久しぶりだのう」

「あれ……学園長先生!？」

「ひよつとして、学園長も晩餐会に招待されたんですか?」

「うむ、今日の定期船でルーアンから飛んで来たのだよ。それよりも、市長から聞いたよ。武術大会で優勝したそうだね? ジル君たちが聞いたら喜ぶだろう」

コリンズ学園長も招待されていたそうだ。

「えへへ……どうもありがとうございます」

「それにしても、学園長まで招待されているとは思いませんでした」
「コリンズ学園長といえば王国会議にも出席されているリベル随一の賢人じゃからな。晩餐会に招待されても何ら不思議ではないといえよう」

「はは、賢人というのはさすがに持ち上げすぎでしょう」

「えつと……王国会議って?」

「年に一度開かれている王国全体の問題を決める会議だよ。女王陛下や、各地の市長、各界の代表が集まって様々な問題を協議するんだ」

「へへ、そんなものがあるんだ。じゃあ、その時と同じメンバーが今日の晩餐会には招待されているのね」

「いや……。実質、半数にしか過ぎない。女王陛下は御不調であるし、モルガン將軍は軍務で忙しい……。ルーアンのダルモア市長は例の事件で逮捕されてしまった。そして、ラッセル博士は……」

コリンズ学園長は、限られた人しか招待されていないことを話してくれた。

「あの人の事件に関してはいまだに不可解な点が多いですのう。親衛隊も加わっていたという大規模なテロ組織の仕業というのはどこまで本当なのやら……。まったく、このような状況で晩餐会とは正気とも思えんですわい」

「……………」
「……………」
エステルたちは黙っている。

「まあ、公爵閣下の真意がどこにあるかを確かめるためにも晩餐会に出る必要はありそうですね。女王陛下へのお見舞いを許していただく必要もありますし」

「うんうん。まさにそれが一番の問題ですのう。このグランセル城に来て陛下のご尊顔を拝見できぬことほど馬鹿げた話はありませんからなあ。それにクローディア姫にも久しぶりにお会いしたいものじゃ」

クラウド市長が頷いている。

「クローディア姫って……。たしか女王様のお孫さんよね」

「その方もグランセル城に住んでいらっしやるんですか？」

「いや、普段は別の場所で暮らしていらっしやるそうじゃが。ただ、数日ほど前から王都に來ているとは聞いておるぞ」

「へえ、そうなんだ……。うーん、機会があつたら一度でいいから見てみたいわねえ」

「フフ、君たちならばきつとお目にかかる機会もあるだろう」

くメイベル市長・リラ

「あ……。メイベル市長！？」

「それにリラさんも……………」

「エステル様に、ヨシユア様……………」

「ふふ、やっと会えましたわね。お2人が訪ねてきてくださるのを

「今か今かと待っていましたのよ」

「やっぱりメイベル市長も晩餐会に招待されてたのね。あれ、でもどうしてあたしたちが来るって……?」

「クラウス市長から聞いたんですの。お2人が、武術大会に出場して見事優勝して晩餐会に招かれたって。はあ、そうと知っていれば他の仕事を全部なげうつでもお2人の応援に来ましたのに……」

「お言葉ですが、お嬢様……。その時は、お嬢様ご自身が後々苦労することになるだけでは?」

「うう、そんなの分かってますわ」

「あはは……。相変わらず忙しそうなのね」

「まったく、女王陛下ならともかく、あの公爵主催の晩餐会などに出るヒマなどありませんのに……。軍の女性士官が執拗しつように出席するように促してきて仕方なく王都に来たんですの」

「情報部のカノーネ大尉ですね?」

「ええ、その方。対応は丁寧ですが、慇懃無礼いんぎんぶれいでどうも好きになれませんでしたわ。最近、モルガン將軍ともほとんど連絡が取れませんし……」

「それって……」

「ハーケン門に連絡は取れないんですか?」

「『將軍は留守』の一点張りで門前払いといった感じですね。何でも、テロ事件の対策のため忙しくしていらっしやるそうです。ひよっとしたら、今夜の晩餐会で会えるかと思いましたが……。どうやら出席はされないようですね」

「そうなんだ……」

「市長はどう思われます?この時期に、市長たちを集めて晩餐会が開かれるということを……」

「そうですね……。女王陛下が主催されたのであれば何か重要な発表があるかと思いますが……。今回は公爵閣下のヒマ潰しに付き合わされただけだと思いますわ。陛下の代理という立場を利用して威張り散らしたいだけなのでしょう」

「うーん、あり得るかも……」
大いにね。

「でも案外、その程度の原因なのかもしれないね」

「まあ、このグランシエフは王国一の腕前とも言われていますし……。せいぜい美味しいものを食べて女王陛下のお見舞いをしたらとつととボースに帰ることにしますわ」

それじゃあ、食い逃げ同然じゃないのか？

グランセル城 2階 右翼

くマードック工房長

「おお……エステル君、ヨシユア君！」

「工房長さん！やっぱり招待されていたんだ」

「市長クラスの人が来ているから工房長もそうだと思っていました」
「君たちの方こそ、まさか武術大会で優勝してグランセル城に入り込むとはな。いやはや……さすがカシウスさんの子供たちだ」

「えへへ……色々な人たちに助けてもらったけどね」

「ところで、ここ数日間に何か動きはありましたか？」

「うむ……。君たちが王都に向かった直後、情報部のカノーネ大尉が来たんだ。晩餐会への出席は断れなかったが要塞への侵入工作については何とかごまかすことができたよ。逃亡中のラッセル博士たちもまだ軍に見つかってははいないようだ。ただ、この状況が長く続けば捕まるのは時間の問題だろうな……」

「そっか……」

「先ほど、陛下のお見舞いをしたいとカノーネ大尉に頼んではみた
が、あっさりと断られてしまったよ。やはり直接会うのは難しそう
だぞ？」

「そつみたいね……。でも、アテはあるから大丈夫！」

「何としても博士の伝言を女王陛下に届けます」

空中庭園

「うわ〜……キレイ……。ここがお城の空中庭園かあ……」
「たしかに……湖が一望できるし、グランセルの城下町も見下ろせる。見学希望者が多いのも肯けるね」
「う〜、こういう時じゃなかったらゆつくり景色を楽しめるんだけど……。今はお仕事を優先するしかないわね」

女王宮 入口前

「あ……」
「ここが女王宮みたいだね……」
空中庭園を少し進んだ先に女王宮らしき場所があった。しかし、入口は2人の特務兵によって守られていた。
「む……なんだ貴様らは」
「おい……こいつら……」
「えっと……あたしたち、公爵さんに招待された者なんだけど……」
「こちらは、陛下のいらっしやる女王宮でいいんでしょうか？」
「……その通りだ」
「だがここ数日、陛下は御不調でいらっしやる。お目通りを願っても無駄だぞ」
「や、やだな〜。そんな大それたこと考えてないわよ。そりゃあ、ちょっとはお目にかかれたらな〜って思うけど」
「ところで、クローディア姫もこちらにいらっしやるんですか？」
「いや、こちらには……」
「……おい」
「とと、それは熱心に陛下の看病をなさっていらっしやるぞ。もち

るん、お前たちの相手をなさる余裕などないからな」

その時、不意に女王宮の中から声が聞こえてきた。

「……こんな所で何をなさっているのですか？」

女王宮の中から現れたのは、中年の女性だった。

「夫人……」

「もうお帰りかな？」

「もうすぐ晩餐会ですからいったん控室に引き上げます。ところで、こちらのお客様は？」

「武術大会で優勝したチームの者です。たかが遊撃士の身分ですが一応、招待客とはいえるでしょうな」

特務兵が笑いながら言った。

「ムツ、たかが遊撃士って……！」

エステルが起ころうとした時、

「無礼者っ！」

中年女性が鋭く一喝した。

「あなた方は、王城の招待客を侮辱するつもりですか！」

「や……自分たちはその……」

あまりの迫力に特務兵たちがたじろいだ。

「たとえ招かれたのが公爵閣下でも城を来訪された方は、陛下のお客様！その事を忘れてもらっては困ります！」

「りよ、了解しました」

素直に頷くしかない特務兵たち。

「（す、すごい迫力……）」

「（ひよつとしてこの人が……）」

「ですが夫人……彼らを通すわけにはいきません。その事は、大佐の説明で分かっていたただけははずですな？」

「……その事は聞き飽きました」

そして、中年女性はエステルたちの前に向かってきた。

「申しわけありません、お客様。警備上の理由で、女王宮の付近に近づくことは禁じられています。できれば、晩餐会が始まるまでお

部屋でお待ちくださいませんか？」

「あ……は、はい」

「わかりました。そうした方が良さそうですね。……すみません。色々とお騒がせしました」

ヨシユアは特務兵に謝った。

「フン……」

「分かればいいのだ、分かれば」

「……………（ギロツ）」

中年女性が特務兵たちを睨んだ。

「……………どうぞ、気を付けてお戻りください」

慌てて訂正する特務兵たち。

女王宮を離れ、空中庭園の広場に来た。

「……………お客様の前で見苦しいところをお見せしましたね。申し遅れました。私の名はヒルダといいます。グランセル城の女官長として侍女の監督にあたっております」

「やっぱり……………」

「あなたがヒルダ夫人だったんですね」

「おや……………。失礼ですが、面識がありましたでしょうか？」

「えつと……………ある人から教えてもらっただけです」

そう言つて、エステルはヒルダ夫人にユリアの紹介状を渡した。

「この筆跡は……………」

ヒルダ夫人は一目見ただけで誰のものか分かったようだ。

「あ、それだけで判るんだ」

「その紹介状と、遊撃士の紋章が僕たちの身分証明となります」

「わかりました……………。ここでは何ですから侍女たちの控室に参りましょう。そこで話を伺わせていただきます」

第5章 王都療乱(25) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

ついにヒルダ夫人と接触できたエステルたち。次に、アリシア女王と会うために策を講じることになる。さらに、大佐の陰謀が晩餐会で明らかになる！

第5章 王都療乱(26) (前書き)

晩餐会が始まり、リシャール大佐の口から重大発表が！

第5章 王都撻乱(26)

グランセル城 侍女控室

「……お話はわかりました。ラッセル博士の伝言を女王陛下に直接伝えたいと……。つまり、そういう事ですね？」

「はい……。そうなんです。女王様が本当に調子が悪かったらちよつと考え直しますけど……」

「それは問題ないでしょう……。女王宮は、先ほどの特務兵によつて24時間監視されている状況です。中に入れるのは、公爵閣下と大佐殿、そして身の回りの世話を仰せつかった私や侍女だけなのです」

「ということは、やっぱり面会するのは難しそうね……」

「どうする、エステル？博士の伝言を、ヒルダ夫人に伝えてもらう手もあるけど……」

「うーん、でもやっぱり直接会つて話したいかも……。デュナン公爵の狙いにリシャル大佐の目的……。いろいろ判らないことも多いしね」

「……エステル殿、ヨシユア殿。私に少々考えがあります。晩餐会が終わつたらまたここに来て頂けますか？」

「え、それって……」

「僕たちが女王陛下にお会いできる手段があるということでしょうか？」

「そう考えて頂いても結構です。難しいかもしれませんが……試す価値があるかもしれません。ただ、いささか用意が必要なので晩餐会が終わってからでもいいですか？」

「やった、ラッキー！」

「わかりました。晩餐会が終わつたら伺います」

「お待ちしております。料理の下ごしらえが終わつたのでそろそろ晩餐会も始まると思います。一度、お部屋に戻った方がいいかもし

「れませんか」
エステルたちは部屋に戻ることにした。

グランセル城 2階 右翼 自分たちの部屋

「よう、エステル、ヨシユア。ずいぶんと遅かったじゃないか。そろそろ晩餐会が始まる時間だぜ？」

「ジンは待ちくたびれているようだ。」

「ごめん、ジンさん。あちこち見物していたらつい時間を忘れちゃってさ。それに、各地の市長さんたちと色々と話してきちゃったの」

「へえ、お前さんたち、お偉いさんと知り合いだったのか？」

「ロレントの市長さんとは普段から親しくさせてもらっているんです。他の方たちとも、旅をしている時に知り合った方々ばかりです」

「なるほどな。確かに、遊撃士の仕事をしてたらお偉いさんと知り合う機会が多いか。しかし、その様子じゃ、ずいぶん活躍してるみたいじゃないか？」

「えへへ……それほどでも。ジンさんは、王都に来てから何か遊撃士の仕事はやったの？たしか、他の国でも同じように仕事ができるのよね？」

「ああ、正遊撃士だったら国籍に関係なく仕事ができるが……。予選だの、大使館の手続だったので仕事を受けてるヒマはなかったな。まあ、他にも遊撃士が4人いたから出る幕がなかったとも言えるがね」

「確かにこれだけ遊撃士が集まったら大抵の事件はすぐ解決しそうですね。ただ、王都に集中している分、他の地方支部は大変そうですけど……」

「わはは、そうかもしれないなあ」

「うう、なんだか今さら申しわけない気がしてきたわ。シエラ姉、ロレントで今ごろどうしてるのかしら……」

「たしか前にもその名前を口にしていたが……。そのシエラ姉ってのはひよっとしてシエラザードのことか」

「え……知ってるの!?!」

まさかジンが知っているとは……。

「はい、僕たちの先輩で昔から親しくさせてもらっています」

「なるほど、そうだったのか。前に彼女がカルバードに来た時に知り合ったことがあってな。いい師に恵まれていたらしく、若いながらも見所がある娘だった」

「（その師って……）」

「（うん、父さんのことだね）」

その時、部屋がノックされてシアが入ってきた。

「失礼します。晚餐会の支度が整いました。ご案内してもよろしいでしょうか？」

「おお、待ちくたびれちゃったぜ。さ〜とと、それじゃあタダメシにありつくとするかね」

「うん、さすがに試合の後だからすっごくお腹が空いてきちゃったさ〜、食べまくるわよ〜」

「あの、2人とも……。一応、テーブルマナーなんかも忘れない方がいいと思うけど……」

2人を心配するヨシユア。

グランセル城 1階 広間

「えっと……。これって夕食会なのよね?どうして食器だけが並んで肝心の料理がないの?ナイフとフォークがいっぱい並べられてるし……」

目の前の光景が分からず隣のヨシユアに尋ねた。

「正式なディナーだからね。前菜から順番に色々な料理が出てくるんだ。あと、ナイフとフォークは外側から使っていくんだよ」

「うぐつ……テーブルマナーってやつね。ちょっと緊張してきちや
った」

「うふふ……。あまり気にする事ありませんわ。料理というものは
美味しく頂くのが一番ですから。マナーや礼儀作法は二の次ですわ」
「そうじゃそうじゃ。聞けば、君たち2人は出席しておる者たち全
員と知り合いだそうじゃないか。固くなる必要はなかるう」

メイベル市長とクラウス市長が和ませてくれた。

「あ、それもそっか」

「それで納得しないでよ……」

「そういえば、そちらの方はナイフとフォークでよろしいんですの
？ 東方の方々は、お箸の方が得意だと聞きましたけど」

「ほう、よくご存じですな。ですが、郷に入っては郷に従えとも言
いますからな。不調法ながらナイフとフォークを使わせてもらいま
すよ」

「まあ……ご立派ですわ。さすが武術大会で優勝された達人の言葉
は違いますわねえ」

「はっはっは。いやあ、それほどでも」

「（つくづく美人に弱いよねえ……）」

「（まあ、女好きって感じじゃないと思うけど……）」

「それにしても……公爵閣下はずいぶん遅いですな。いったい何を
してるんでしょう？」

マードック工房長が多少イライラしている。

「ふむ……確かに。それと上座は公爵閣下としてその席は誰が座
るのじゃろうか？」

「そうですな……。クローディア姫という可能性もあるかもしれな
いが……」

クラウス市長とコリンズ学園長が話していると、問題の人物が来た。
「皆様……大変長らくお待たせしました。公爵閣下、ご入室ござ
います」

執事フィリップの声と同時にデュナン公爵が、そしてその後ろにリ

シャル大佐とカノーネ大尉が入ってきた。

「いやはや、諸君。待たせてしまって申しわけない。少々、打ち合わせが長引いてしまったものでな。彼はリシャル大佐。王国軍情報部の責任者でな。テロ事件を解決するために日夜、尽力してくれているので礼の意味も込めて招待した」

「お初お目にかかります。王国軍情報部のリシャルです。公爵閣下の格別のご厚意で晩餐会に招待していただきました。無粋な軍服で失礼ですがどうか同席をお許しいただきたい」

そう言つてデュナン公爵とリシャル大佐が席に着いた。

「（ま、まさか大佐と一緒にテーブルで食事するなんて……）」
エステルが嫌そうな顔をした。

「（予想はしていたけど、やっぱり少し緊張するね……）」
そうして晩餐会が始まった。

「はっはっは、いや、愉快愉快。どうかね、メイベル市長。王城のグランシエフの腕前は？ポースの《アンテローゼ》にも負けずとも劣らずの味ではないか？」

「ええ、素晴らしい腕前ですわ。ワインとの相性も完璧ですし、思わず引き抜きたくありませんわね」

「はっはっは、そなたが言うとなながち冗談には聞こえないな。どうだ、ジンとやら。東方人のそなたの口には合うかな？」

「いや、大変結構ですな。不調法な自分の舌にも判る洗練された深みと味わい……。リベール料理の真髄を味わっているような心境です」

「うんうん、そうだろう。どうだ、若き遊撃士たちよ。こんな豪華な料理は今まで食べたことがなからう？」

「うーん、確かにメチャメチャ美味しいです。招待してくれた人とはともかく、料理だけはホンモノかも……」

招待してくれた人はともかく……。

「はっはっは。そうだろう、そうだろう……。……ん？」
デユナン公爵が言葉を振り返ろうとした。

「ほ、本当に素晴らしい料理ですね。それに今まで、こういう正式な席に呼ばれる機会が無かったのでもともと勉強になります。招待してくださいまして本当にありがとうございます」

ヨシユアが慌てて取り繕った。

「はっはっは。なかなか殊勝でよろしい。しかし、執事から言われてようやく思い出したのだが……。そなた達とは、ルーアンの事件で一度顔を合わせていたのだな。何とも奇妙な縁があったものだ」

「は、はあ……。そーですね。（執事さんから言われるまで思い出せなかったわけね……。）」

「さあ、今夜は無礼講だ！料理も酒もたっぷりあるから、遠慮なく追加を申し出るがいい！」

「公爵閣下……。その前に、例の話を済ませてしまつては如何ですか？」

リシャール大佐がデユナン公爵に申し出た。

「……。おお！そーだ、その話があったか。実は、王国を代表する諸君らに集まつてもらつたのは他でもない……。この晩餐会の席を借りてある重大な発表をしたかつたのだ」

ついに本題に入った。

「ほう、重大な発表……。）」

「それは一体……。どのようなお話でしょうか？」

「うむ。ここから先は、私の代わりにリシャール大佐に説明してもらおう」

あんたじゃ話せそうにないからな……。

「……。恐縮です。女王陛下が御不調なのはすでにご存じのことかと思ひます。ですが、徐々に回復なさつて居るため、すぐに元気な姿を見せてくださるでしょう」

「おお……。それは良かった」

「では、陛下へのお見舞いは許していただけなのかしら？」

「あいにくですが、陛下のご意向でそれは遠慮して欲しいとのこと
です。ただ数日中に、王都周辺を騒がすテロリストどもは一掃でき
る公算です。その事と合わせて、女王生誕祭は予定通りに執り行わ
れるでしょう」

「ふむ……市民も楽しみにしているだろうからめでたいことではあ
りません。だが、話というのはそれだけではないのでしょうか？」

「……確かに、それだけならば連絡してくれば済みますからな」
「フフ、察しが良くて助かります。女王陛下が回復されつつあるの
は先ほど述べた通りなのですが……。陛下は、今回のご不調を理由
にある決断をなされたのです。その決断とはすなわち
リシャール大佐が言葉に力を込めた。」

「ご自身の退位と、こちらに居られるデュナン公爵閣下への王位継
承です」

この言葉にはその場にいた全員を震撼させた。

「な、なんですと!?!」

「ほ、本当ですよ!?!」

「(ヨシユア、これって……!!)」

「(うん……。とうとう陰謀が姿を現したね)」

「……私も戸惑ったのだが陛下が存外、弱気になられてな。無理も
ない、40年近くもの間、激動の時代に翻弄されたりベルを女性
の身で導いてくださったのだ。そう思うと、この生誕祭を最後に俗
事から解放させてさしあげたい……。王位継承権を持つ身としては
そう決意した次第なのだよ」

「なんと……陛下がそこまでお悩みになっておられたとは……。毎
年、お会いしているというのに気付けなかったとは情けない……」

「し、しかし……。このような酒の入った席で聞くにはあまりにも
重大な内容ですわ。失礼ですが、どこまで現実性のあるお話なので
しょう?」

メイベル市長が反論した。

「む……」

デュナン公爵が不満そうな顔をした。

「ふむ、メイベル市長。閣下のお言葉が信用できないと……そう仰られるか？」

「そ、そうは言ってません！ただ、市長には選挙があるように王位継承にもしかるべき手続があるのではないかという事です」

「そうですな……」

「できれば、陛下から直接、今の話をお伺いしたいものです」

「う、うーむ……」

市長たちからあまり支持されないことにたじろぐデュナン公爵。

「皆さんの動揺も理解できます。ですが、どうか冷静になって今の話を受け止めていただきたい。先ほど申し上げたように生誕祭には陛下ご自身の口から発表されることになるでしょう。真偽はその時に確かめれば済むことではありませんか？」

「そ、それは……」

マードック工房長はそれ以上何も言えなかった。

「問題なのは、この件が発表された時に一般市民にどう影響を与えるかです。いたずらな混乱を避けるためにも各地の責任者である皆さんに前もって事を伝えておきたい……。公爵閣下はそう判断なされたのです」

「ゴホン……。うむ、まあそういう事だな」

あからさまに考えてなかったな……。

「そして、陛下の退位ともなれば事態はリベル国内には留まりません。大陸諸国の目、とりわけ北の脅威たるエレボニアの反応も気がかりでしょう。まさに、ここにいる我々が新たな国王陛下を盛り立てながら一致団結をしなくてはならない……。そんな時期が迫っているのです」

「（な、何かもつともらしい事を言ってるんですけど……）」

「（うん……。大したアジターだね）」

「正式決定は、生誕祭の時に陛下から直接伺うとして……。心の準備をしておくようにと。つまり、そういう事ですか？」

「フフ……。理解していただいて幸いです」

「うーむ……。確かにそういう事になったらむしろ忙しくなりそうじゃな」

「そうですね……。市民へのアナウンスもありますし」
大方、納得しかけた時、

「……。1つお伺いしたい」
コリンズ学園長が尋ねた。

「公爵閣下に王位継承権があるのは私も存じておるが……。たしか、同委の継承権を持つ方が他にもいらっしやっただはずですか？」

「そ、それは……」

「陛下のお孫さんにあたるクローディア殿下のことですね。確かに、王室典範上の規定では公爵閣下と同位ではありますが……。まだ年端もいかないという理由で陛下は閣下の方を推されたようです。先ほどの話にもありましたが……。女性の身に余るほどの重責を姫に負わせたくなかったのでしょうか」

「そうそう、そうなのだ！まあ、クローディアには良い縁談を探してやるつもりだ。非公式だが、すでに他国の王家から何件もの申し入れがあつてな……。ひよっとしたら今年中にも縁談が実現するかもしれないのだ」

「まあ……！」

「……。ふむ、お話は判りました。そうなるとお目出たい話が2つも続くというわけですね」

「ううむ……。姫様が……。ご結婚されるには少々若すぎるとは思いますが……」

「……。ちよいと失礼。1つ質問してもいいですかね？」

黙って聞いていたジンが突然話に入ってきた。

「ジ、ジンさん？」

「ほう……。？構わん、言ってみるがいい」

「失礼だが、今耳にした話は自分たちのような部外者が聞いていい話とは思えません。まして、自分は王国人でもない。なのに、何故

このような席でわざわざ発表されたのでしょうか？」

「それは、優勝した君たちが偶然にも遊撃士だったからだ。陛下の退位という重大な情報はギルドにも事前に伝えたかった。そう私が閣下に提案したので聞いてもらう事になったのだよ」

「なるほど……。リベールでは、軍とギルドが良い関係を結んでい
るといふ話はどうかやら本当だったようですな」

「はは、帝国や共和国ほど軍事力が充実していないからね。手を結ばざるを得ないというシビアな現実があるのだが……。いずれにせよ、真意はご理解いただけただかね？」

「ふむ……。了解しました。今日、この席で知った情報は王都支部にも伝えておきましょう」

そうして、晩餐会の時は流れていった。

第5章 王都療乱(26) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよリシャル大佐の陰謀が明らかになった！尚更、アリシア女王と面会したくなったエステルたちだが……。

第5章 王都療乱(27)(前書き)

侍女の控室に向かおうとした時……。

第5章 王都撩乱(27)

グランセル城 2階 左翼 自分たちの部屋

「いやはや、ひよんな事からとんでもない話を聞いたもんだ。俺はしよせん他国のはなしだがお前さんたちはずいぶん驚いたんじゃないか？」

「あ、あたり前だってば！ま、まさかここまで周到に話を進めてるなんて……」

「は？」

「あ、ううん、何でもない。でも……もったいなかったなあ。せつかく、舌がとろけるほど美味しい料理だったのに最後の方は味が判らなかつたわ」

「はは、無理もないかもね。それよりもエステル。腹ごなしに散歩に行かない？」

「え……？ああ！そうそう、そうだった！そうね、外の空気でも吸ってきたい気分かも」

エステルは一瞬、分からなかったがすぐにヨシユアの言いたいことを理解した。

「は、さつきも見物してたのに、今度は食後の散歩と来たか……。認めたくはないがこれがトシの差ってやつかねえ」

ジンがしみじみと言った。

「あはは、ジンさん大げさよ」

「ジンさんは見物とかしないんですか？歴史ある建物だけあって見所はたくさんありますよ」

「まあ、気が向いたらフラフラさせてもらおうとするさ。厨房に行きやあ、残り物があるかもしれんしな」

見た目に変わらず大食漢のジン。

「あきれた……。まだ食べるつもりなの？」

「どちらかというと酒のツマミが欲しいところだな。飲める談話室

もあるみたいだし後で行ってみるとするかね」
そんなジンを放っておいて、エステルたちは廊下へと出た。

「は……とんでもない事になったわね。ますます、女王様に会って事情を聞きたくなくなってきたわ」

「まずは約束通り、ヒルダ夫人に会いに行こう。陛下に面会する段取りをつけてくれるはずだよ」

「ん、りょーかい」

エステルたちはヒルダ夫人の約束通り、侍女の控室に向かった。

侍女の控室に行こうとした時、階段から男性の声が出た。

「おや、君たちは……」

「あ……！」

「リシャール大佐……」

階段から上がってきたのは、リシャール大佐だった。ついでにカノーネ大尉も後ろにいた。

「フフ……。エステル君とヨシユア君か。こうして面と向かって話すのは初めてではないかな？」

「え……」

「最後に言葉を交わしたのはダルモア市長逮捕の後でしたね。でも、大佐が僕たちのことを覚えているとは思いませんでした」

「交わした言葉は少なかったが君たちは非常に印象的だったからね。気になって調べてみたら驚いたよ。まさか、カシウス大佐のお子さんたちだったとはね……」

「そ、その事も知ってたんだ」

「はは、伊達に情報部を名乗っているつもりはないよ。……カシウスさんには彼が軍にいた時にお世話になった。それこそ……言葉では言い表せないほどね」

「……………」
「どうだろう、これから少し話に付き合ってくれないだろうか？君たちとは、前から一度、個人的に話をしてみたかったのだ」

「ええっ!？」

エステルは予想もしない言葉に驚いた。

「……………」
「あ、あの、大佐殿……。これから公爵閣下との打ち合わせがあるのでは？」

「少しくらい遅れても構わんよ。そうだな、話すのだったら奥の談話室を借りるとしようか。アルコール抜きのカクテルでも振舞わせてもらおうよ」

「そ、それでしたらわたくしがお作りしますわ!」
カノーネ大尉が慌てて言った。

「いや、それには及ばない。君は公爵閣下の所に行って私が遅れる旨を伝えてくれたまえ」

「りよ、了解しました……………」

カノーネ大尉がしぶしぶ納得した

「……………」 (ギロリ) 「

「(ゾクツ…………)」

振り向き際にカノーネ大尉はエステルを睨んだ。

「……………それでは失礼しますわ」

「さてと、私たちも談話室に向かうとしようか。それでは付いてきたまえ」

リシャール大佐は足早に談話室に向かつてしまった。

「あ……………。(ね、ねえヨシユア、どうしよう?)」

「(付き合っしかなさそうだね……………。少し遅れそうだけど夫人の所には後で行こう)」

エステルたちは逃げる事も出来そうもないので仕方なく付き合っこととした。

「……カシウスさんと出会ったのは私が士官学校をでたばかりのことだ。当時、彼が率いていた独立機動部隊に配属されてね……。それ以来、彼が軍を辞める時まで公私にわたってお世話になったんだ」

「ふ、ふーん……。そうだったんですか……」

エステルはナイアルから借りたファイルで既に知っていたので適当に相槌を打つしかなかった。

「えっと、その頃のお父さんって大佐から見てどんな感じでした？」

何とか別の事を聞こうとしたエステル。

「一言でいうと『英雄』だったかな。『剣聖』とまで言われた技の冴え。あらゆる戦況に柔軟に対応できる立体的かつ多面的な指揮能力……。単なる戦術に留まらない、高度な戦略レベルでの部隊運用……。どれをとっても並ぶ者はいなかった」

「な、なんだか別の人の話を聞いているみたいなんですけど……」

「父が軍を辞めるまでというところあの《百日戦役》の時も一緒に？」

「ああ……。カシウスさんの下で戦ったよ。今でも覚えている……。彼が立てた奇跡のような作戦を実行した時の熱気と興奮を……。あの時のことを話し始めるといくらあっても

時間が足りないからまたの機会にさせてもらおうが……。ただ、これだけは断言できる。あの時、カシウス・ブライトという男が王国軍にいなかったら、このリベールはエレボニアに吸収合併されていただろう」

リシャール大佐がきっぱりと言いつつ切った。

「う、うそ！？さすがにちょっと信じられませんけど……」

「フフ、信じられないような事を成し遂げたから『英雄』なのさ。もっとも、戦後すぐに退役して女王陛下の勲章すら固辞されたから名前が知られることはなかったが……。今でも、一部の軍人の間ではカシウス大佐の名は英雄の代名詞だ」

「うー……。あのヒゲ親父、そんな事、一言も教えてくれてないしっ！」

「まあ、娘にわざわざ語って聞かせるような話じゃないさ。父さんを責めたら可哀想だよ」

「か、可哀想なのはあたしの方！……って、ヨシユアってばあんまり驚いてないみたいだけど。もしかして……今の話、知ってたりするわけ？」

「リシャル大佐が父さんの部下だったことはさすがに知らなかったけど……。まあ……おおむねのところは」

「あ、あんですって！？それじゃあヨシユアも共犯！？」

「お、落ち着いてよ、エステル。僕だって別に、父さんから教えてもらったわけじゃないよ。それに父さんから、君にわざわざ知らせる事はないって言われたんだ」

「うう、納得いかないわね……。本当にもう、帰ってきたらとっちめてやるんだからっ！」

「フフ……」

リシャル大佐がその様子を見て笑った。

「えっと、その……」

「す、すみません。話の腰を折ってしまって」

「いや……。君たちを見て少し安心した。カシウスさんが軍を辞める時、私は必死に引き留めたものだが……。どうやらその選択は彼にとつて正解だったらしい。君たちが側にいたのなら奥さんを亡くされた哀しみからきつと立ち直れたらうからね」

「リシャル大佐……」

「……」

「さてと……付き合ってくれてありがとう。あまり公爵閣下を待たせるわけにはいかなから私はこれで失礼させてもらうよ」

リシャル大佐はそう言つて席を立ちあがった。

「あ……はい」

「すみません、僕たちの方が話を聞かせてもらうばかりで……」

「いや、君たちは一番知りたかったことを教えてくれた。……これで未練はなくなったよ」

リシャル大佐が目伏せた。

「え……？」

「それはどういう……」

「はは、近いうちにまた会う機会もあるだろう。その時には、カシウスさんと一緒に話せるといいのだが……」

よく分からない言葉を残してリシャル大佐は出ていった。

「えーと……。今ここに居たのって本当にリシャル大佐だっけ？」

「あのね……。なにを寝ぼけてるのさ」

「だ、だってあんな風に父さんの事を話すなんて……。なんていうか……。イメージと違ったっていうか」

「……確かに。ただの悪人ではなさそうだね。でも、それとは別に彼が何かを企んでいるのも確かだ。父さんの事は、この際分けて考えなくちゃいけないと思うよ」

「うん……。それはそうなんだけど……」

「イヤな言い方をするけど……。僕たちに見せた親しさだって何かの目的があるのかもしれない。彼みたいな情報将校にとって僕たちみたいな子供を誑かすのは朝飯前だろうからね」

「さ、さすがにそれは言いすぎなんじゃないの？」

「うん……。そうだね。疑うのは僕の役割だ。君は、自分の直感を信じていた方がいいと思う」

「え……」

「ただ、あらゆる可能性に備えて油断だけはしないで欲しいんだ。遊撃士の仕事というのは……たぶんそういうものだと思うから」

「……。うん、わかった。ちゃんと心に留めておくわ」

「……ありがとう、エステル」

「やゝねえ。何でヨシユアが礼を言うのよ。それよりも、さっさとヒルダさんの所に行きましょう。たぶん、待ちくたびれてるわ」

「そつだね……。メイドさんたちの詰所に行こうか」
予定の事があつたが、エステルたちはすぐに侍女の控室に向か
つた。

第5章 王都療乱(27) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよアリシア女王と面会することになる！

第5章 王都療乱(28) (前書き)

大佐から解放され、ヒルダ夫人のもとに向かう。

第5章 王都撩乱(28)

グランセル城 1階 侍女の控室

「エステル殿、ヨシユア殿。お待ちしていましたよ。ずいぶん遅うございましたね?」

「えへへ……ごめんなさい。なんかリシャル大佐に捕まっちゃって……」

「大佐に……ですか?」

「僕たちの父のことについて昔話を聞かせてもらいました。こちらの動きについては気付かれていないと思います」

「そうですね……。紹介状によるとあなた方は、カシウス殿のお子さんということでしたね。リシャル大佐が感慨を抱くのも分かる気がします」

「あの、ヒルダさんも父さんを知ってるんですか?」

「昔は、モルガン將軍の副官として王城によく来てらっしゃいました。亡き皇子……陛下のご子息のご学友だったとも聞いております」

「亡き皇子って……」

「クローディア姫のお父上にあたるかたですね」

「ええ、15年前の海難事故でお亡くなりになりました。皇子さえ生きてらっしゃればこのような事態は起こらなかったでしょうに……」

ヒルダ夫人が目を伏せて言った。

「え……」

「……起きてしまったことを悔やんでも仕方ありませんね。夜も更けてまいりました。早速、支度をしていただきます。シア、いらっしやい」

出てきたのは、案内係のシアだった。

「あれ、あなたは……?」

「確か、シアさんとおっしゃいましたね?」

「ど、どうも……エステル様、ヨシユア様。事情は伺わせていただきました」

「この子のことは信用してくださって結構です。姫様が城にいらっしやる時にお世話をしている侍女ですから」

「姫様つて……クローディア姫のことね」

「それなら問題ありませんね」

「きよ、恐縮です……。では、用意した制服に袖を通していただけますか？リボンやカチューシャなど細かい所は、わたくしが整えさせていただきます」

「へ……」

「あの……ひよつとして？」

「ひよつとしなくても間違いない」

「ええ、エステル殿には侍女と同じ恰好をもらって女王宮に入っていたできます。多少、髪をいじらせて頂ければ、見張りにも気づかれないでしょう」

「なるほど……」

「たしかに、制服というのは個性を隠しやすいですからね。潜入するにはもってこいかもしれません」

「へえ、メイドさんの制服があ。リラさんとかを見ていていいなあって思っていたのよね。ヒラヒラしてて可愛いのにすごく動きやすそうなんだもん」

「ふふ、動きやすくないとお掃除の時に困りますから……」

「あ、やっぱりそうなんだ？さっそく着させてもらおうと！」

「嬉しそうだなあ……。はしゃぐのはいいけど陛下に失礼のないようにね。今度ばかりは僕も付いてはいけないからね」

「え、どうして？ヨシユアも着替えるんでしょ？」

「……………え」

ヨシユアが心外そうに答えた。

「エステル殿？」

「だってヨシユア、学園祭の劇でお姫様の恰好をしてたじゃない。

ドレスもメイド服と同じでしょ？」

「あ、あれはお芝居じゃないか。女王陛下にお会いするのに女装するなんて、ちよっと……」

「大丈夫、大丈夫。全然みつともなくないから！だってヨシユアのお姫様姿、すつごく綺麗だったもん！」

「ま、また……冗談はやめてよ。あの、ヒルダさんたちからも何とか言っただけでください」

ヨシユアはヒルダ夫人とシアに頼った。

「……………」

「……………」

ヨシユアをまじまじと見るヒルダ夫人とシア。

「あ、あの……？」

「なるほど……。たしかに問題なさそうですね。シア、たしか姫様のためのヘアピースがありましたね？」

「は、はい……。一度も使われていないものが。長い黒髪ですからヨシユア様にもお似合いかと……」

「ちよ、ちよっと……」

ヨシユアに選択の余地はなさそうだ。

「それじゃあ、3対1のファイナルアンサーってことで」

「では、こちらにどうぞ。更衣室になっていますので……………」
エステルがヨシユアを引っ張った。

「ちよっと待ってよ！僕は着替えるなんて一言も……………」

問答無用でエステルはヨシユアを更衣室に連れ込んだ。

「わかった、わかったから……。服くらい自分で脱げるってば……」。

え……シアさん……化粧までするんですか……！？？」

中では大変なことが起こってるそうだ。

「はあ……最近の若い子たちときたら……」

数十分後

エステルとシアが更衣室から出てきた。

「まあ……」

「じゃ〜ん。えへへ、どーでしょうか？」

「うふふ……とつてもよくお似合いですわ」

「城働きに来たばかりの活発で朗らかな侍女見習い……。そんな説得力は十分ありますわね。髪も下ろしていますから気付かれることはないでしょう。何でしたらこのままグランセル城で働きますか？」

「ゆ、遊撃士の仕事もあるからそれはちよつと……。あ、それよりも。ちよつと、ヨシユア。早く出てきなさいってば〜」

エステルが更衣室に隠れっぱなしのヨシユアを呼んだ。

「はあ……。どうしても出ないと駄目かな？」

「だーめ。ウダウダ言ってるのと引きずり出しちゃうわよ？」

「わかったよ……。もう、しょうがないな……」

そう言つて、ヨシユアはしぶしぶ出てきた。

「……………」

ヨシユアは何も言わない。

「これはまた……。怖いくらいにお似合いですね」

「ですよねえ！？まったく、女のあたしよりもサマになつてるといふのは一体どーゆうことなのかしら」

「うふふ……。お化粧のしがいがありましたわ」

「もういいです……。何とでも言つてください……」

哀しそうに言うヨシユア。

「さて……。準備は整つたようですね。それではこれから女王宮へと案内させていただきます。あくまで侍女見習いとして扱いますので、そのおつもりで」

「あ、はい、わかりました。ゴクツ……。いよいよ女王様と会えるのね」

「うん……。ここが正念場だね。気を引き締めて何とか女王宮に入らないと」

「プツ、その恰好でシリアスに言っても似合わないかも……」
エステルが吹き出した。

「わ、悪かったね！シリアスが似合わなくて！こんな恰好をさせといてよくもまあ、ぬけぬけと……」

「ゴメンゴメン。そんなに拗ねないですよ。今度、アイスクリームでもオゴってあげるからさ」

「ふん、君じゃないんだから食べ物でごまかされたりしないよ」

「あ、あたしがいつ食べ物でごまかされたのよっ？」

「うふふ……本当に仲がいいんですね」

「時間がありません……。さっさと女王宮に行きますよ」

エステルたちはヒルダ夫人に連れられて女王宮に向かった。

女王宮 入口

「これはヒルダ夫人……」

「こんな遅い時間に女王陛下に御用ですか？」

特務兵たちがヒルダ夫人に尋ねた。

「陛下に頼まれていた紅茶と食器類をお持ちしたのです。このような事態になって陛下も何かと不自由なさっでいらっしやるようですからね」

「これは手厳しい……」

「おや……。見たことのない顔ですが、そちらの侍女さんたちは？」

「公爵閣下の命令で補充した新米の侍女見習いです。今日、城に入つたばかりです」

「ほう……」

「ふーむ。さすがに可憐ですなあ」

「ど、どうも……」

「……………（ペコリ）」

「おや……？なんとなくどこかで見たような……」

特務兵の1人がエステル顔を伺った。

「(やばっ……!)」

「……年頃の娘を、そんな風にジロジロ見るとは何事ですか。もしや、良からぬことを考えているのではないでしょうね?何かあったら、公爵閣下や大佐殿に抗議させてもらいますよ」

「と、とんでもない!」

「王国軍の精鋭たる我々がそのような事は……」
慌てて訂正する特務兵たち。

「ならばよいのです。ところで、いいかげん、通していただけないでしょうか?」

「これは失礼しました!」

「どうぞ、お通りください」

特務兵たちが女王宮の道を開けた。

女王宮

「ふう、緊張しちゃった。ありがとう、ヒルダさん。おかげで助かつちやいました」

「鮮やかなお手並みでしたね」

「お役に立てて幸いです。さて……何でしたら陛下に会う前に着替ええますか?特に気にしないのであればそのままご案内しますが……」

「別にあたしはこのままでも……」

「是非、着替えさせてください!」

ヨシユアがきつぱりと言った。

女王宮 部屋の二つ

「まったくもう。恥ずかしがり屋なんだから。あのままでも良かった」

たじゃない？」

「信用にもかかわるからそういっわけにもいかないよ。ところで、ヒルダさん。この部屋はひょっとして……」

ヨシユアはこの部屋が誰のものなのか気付いているようだ。

「はい……。クローディア様のお部屋です。もつとも、普段は王城に住んでいらっしやらないのでほとんど使われていませんが……」

「へへ、そんなんですか。でもお姫様って、たしか女王様の看病をしてるって聞いたような……」

「……………」

「やはりそれも偽情報ですか」

「詳しい事は陛下にお聞きになるといいでしょう。女王宮の2階にあるのがアリシア女王陛下のお部屋です。それでは参りましょう」

女王宮 2階 アリシア女王の部屋

「陛下、失礼します。先ほどお話ししたエステル殿とヨシユア殿をお連れしました」

ヒルダ夫人がノックした。

「……………ご苦労さまでした。どうぞ、入って頂いて」
中から老婦人の声が聞こえてきた。

「かしこまりました。私はここで待たせていただきます。さあ、お2人はどうぞ中へ」

「は、はい……！」

「失礼します……」

そして、エステルとヨシユアはアリシア女王の部屋に入った。

第5章 王都療乱(28) (後書き)

この小説の感想等お待ちしております。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

>次回予告<

いよいよアリシア女王のもとにたどり着いたエステルとヨシユア。そこで、今までの経緯を話し合うことになる。

第5章 王都撩乱(29)

女王宮 アリシア女王の部屋

「あ……」

窓際に一人の老婦人 アリシア女王がいた。

「ふふ……。ようこそいらっしやいましたね。わたくしの名はアリシア・フォン・アウスレーゼ。リベール王国、第26代国王です」
「あ、あの……。エステル・ブライトです。遊撃士協会の準遊撃士です」

「同じく、準遊撃士のヨシユア・ブライトといいます。お初にお目にかかります」

「エステルさんとヨシユア殿ね。あなたたちに会えるのを本当に楽しみにしていました。大したもてなしはできませんが、お茶の用意くらいはできます。どうぞ、ゆっくりして行ってくださいな」

そして、エステルとヨシユアはアリシア女王にラッセル博士のことを含め、今までのことを話した。

「そう……。ラッセル博士はそんな事を。あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオーブメント……。そんなものを大佐は手に入れているのですか……」

「博士は、女王陛下ならばリシャル大佐がそれを何に使うか分かるかもしれないと言いました。何か……。心当たりはありますか？」

「……。ひとつだけ心当たりがあります。ですが、大佐がそれを知っているとは思えません。わたくしの思い過ぎであるといいのですが……」

「あの……。その心当たりっていうのは？」

「……。あなたたちならお話ししても構わないでしょうね」
アリシア女王が目を開いて話し始めた。

「十数年前、この王都の地下に巨大な導力反応が検出されたのです。その調査にあたってくれたのが中央工房のラッセル博士でした」

「巨大な導力反応……」

「王都の地下ということは地下水路の近辺でしょうか？」

「いいえ、水路よりもさらに深い地下から検出されたようです。博士は、いまだ機能を失っていない古代文明の遺物が埋まっているのではないかと仰っていました」

「古代文明の遺物って……」

「《アーティファクト》と呼ばれる古代導力器のことだね。大半は、塔の頂上の装置みたいに機能が死んでしまっているけど……。それに、ダルモア市長の家室のように機能が生きている物もあるみたいだ」

つまり、《四輪の塔》の頂上みたいな機能停止しているアーティファクトもあれば、まれに機能停止せずに動く《封じの宝杖》みたいなアーティファクトもあるということである。しかし、機能が生きている物は非常に稀らしい。

「そんなものが王都の地下に……。あ、それじゃああの《ゴスペル》ってのは……」

「埋まった遺物の機能を停止させるために使われる……。その可能性があるということですね？」

「ええ……。ですが、その遺物がどんなもので何のために埋められたものかははっきりしていません。ラッセル博士の調査自体も非公式で行われたものです……。大佐がどこで存在を知ったのかわたくしには不思議でなりません」

「そうですね……。いずれにせよ、良くない事が起こる可能性がありますね」

「まったく、ちょっと見直したのに口クナ事を考えていないわね……。みんなに迷惑がかかるんだつたらまさしく遊撃士の出番だわ！何とかして大佐を阻止しないと！」

エステルが意気込んだ。

「ふふ……。さすがは……。カシウス殿のお子さんたちね」

「!!!!」

「陛下も父と面識がおりだったのんですか？」

「亡くなった息子の友人でしたし、王国を救った英雄ですからね。」

軍を辞めて遊撃士になってからも依頼を通じてお世話になりました」

「そ、そうだったんだ……」

「それは知りませんでした……」

「ふふ、彼の性格を考えれば知らないのも無理はありませんね。ひよつとして、10年前の戦争で彼がどのように活躍したのか……。そのこともご存じないのかしら？」

「えつと……。詳しいことはあんまり……」

「ならば、これはわたくしの役目なのかもしれないかもしれませんね……。エステルさん、ヨシユア殿。少々、年寄りの昔話に付き合ってくださいませんか？」

「あ……。はい、もちろん！」

「拝聴させていただきます」

そして、10年前の《百日戦役》の話が始まった。

「10年前の春のことです……。エレボニアの帝国の南部である痛ましい事件が起こりました。いまだ原因が分かっていないため事件についての説明は省かせてもらいますが……。その事件をきっかけに帝国はリベールに宣戦布告をしたのです。後に《百日戦役》と呼ばれる不幸な日々が始まりました。帝国軍は、宣戦布告と同時に大兵力を持ってハーケン門を突破……。リベールは、王都を除いて瞬く間に全土を占領されました。侵攻してきた兵力は、王国軍のおよそ3倍だったと言われています。カルバードからの援軍も間に合わず……。もはや王都が占領されるのも時間の問題かと思われました。しかし、開戦から2ヶ月後……。誰もが予想しなかった形で戦局が大

大きく変化したのです。当時開発されたばかりの警備飛行艇が各地を結ぶ関所を奪回し、帝国軍の連絡網を断ち切りました。そして、レイストン要塞から王国軍の総兵力が水上艇で出撃し、各地方を奪還していったのです。ツァイス、ルーアン、ボース、ロレント……。各地を占領していた帝国軍の師団は補給を断たれ、各個撃破されました。この反攻作戦を立案した人物こそカシウス・ブライト大佐

モルガン將軍の右腕であり、リシャール大佐の上官だったあなたたちのお父様だったのです。その後、遊撃士協会と七耀教会の仲裁もあつてようやく戦争は終結を迎えました。しかしこの時、カシウス殿は大切なものを失っていたのです。それはレナ・ブライトさん……エステルさんのお母様でした。あの時計塔は、反攻作戦によって追い詰められた帝国軍師団の悪あがきによって破壊されたのです。そして……あとはあなたも知っている通り……カシウス殿は、奥様の死すらも見届けることができませんでした……」

「……そんな……。そんな事情だったなんて……」

「……自分が立てた作戦が結果的に奥様を死なせてしまった。その自責の念から、カシウス殿は軍を辞めて遊撃士の道に入りました。残されたあなたの側にいるために……。そして今度こそ、自分の手で愛する人々を守るように……」

「バカよ……父さん……。父さんのせいでお母さんが死んじゃっただなんて……。そんな事あるわけないのに……」

「エステル……」

「ええ、そうですね……。全ては、大切な民を守れなかったこの力なき女王の責任なのです。ごめんなさい、エステルさん。お母様を守る事ができなくて……。そのことを……ずっと謝りたいと思っていました」

「あ、謝る必要なんてありません！女王様は、戻ってきた平和をず

つと守ってください。父さんたちは必死になってこの国を守ってくれた……。お母さんは命がけであたしのことを守ってくれた……。それで……。充分だと思っんです……」

「エステルさん……。ありがとう、優しい子ね……。あなたに会うことが出来て……。本当に良かった……。今、心からそう思えます」

「女王様……」

「でも、だからこそ……。だからこそ、あなたには危険な事をして欲しくはありません。これ以上、今回の事件に関わりを持って欲しくはないのです」

「え……。！で、でもあたしたち、ユリアさんに女王様の助けになるように頼まれて……」

「ありがとう。その心だけ頂いておきますね。カシウス殿の留守中にあなたに万が一のことがあったら今度は何とお詫びしていいのか……。どうか、ロレントのお家に帰ってお父様の帰りを待っていてください」

「で、でもっ……。！」

「ですが、女王陛下……。父カシウスが取り戻し、陛下が守り続けた平和が今まさに揺らごうとしています」

「ヨシユア殿……」

「《ゴスペル》の件もそうですが……。このまま大佐の狙い通り公爵閣下が国王となった場合、その平和はどうなるのでしょうか。その事を考えて頂きたいんです」

「……………」

「あ、あの、女王様……。あたしたち、遊撃士になって父さんの代理で仕事をしました。それから、空賊事件に関わって手紙が届いて変な小包を開けて、そのまま各地を旅してきて……。まるで、父さんに背中を押されてここまで来たような気がするんです。だから……。あたしも守りたい。平和に暮らせる幸せな毎日を……。今まで知り合ったあたしの大好きな人たちを……。女王様や、お母さんたちみたいにあたしなりの方法で守りたいんです！」

するために……」

「なるほど……。ようやく事件の全貌が見えてきました」

「強大な軍事国家にする……。それって具体的にはどうするの？」

「色々考えられるよ。税率を上げて軍事費を拡大したり……大量破壊を目的とした導力兵器を開発したり……大規模な徴兵制を採用したり……リベールでは認められていない獵兵団イーガーとの契約を合法化したり……」

「そ、そんな……」

「まさに同じようなことを大佐はわたくしに要求しました。それは、純粋な愛国心から来る発言だとは思えたのですが……。わたくしは、どうしてもそれが正しいとは思えなかつたのです。国を守っているのは軍事力だけではありません。他国と協調していく外交努力もそうですし……。技術交流や、経済交流を通じて諸国全体を豊かにする事だつて国を守ることに繋がるはずですよ」

「……まさに陛下のおっしゃる通りだと思います」

「うんうん！お互いが信じ合わなくちゃ！」

「ですが、大佐はその考えを女々しい理想論と断じました。そして、クローディアの安全とひきかえに退位を要求したのです」

「！……！」

エステルはそれに愕然とした。

「多くの者が、家族を人質に取られ大佐に逆らえなくされています。ですが、わたくしは女王です。肉親への情けのために国の未来を売り渡すことはできません。ただ、そうは言ってもあの子はわたくしのたった一人の孫娘……。見殺しにはしたくないのです」

「女王様……。どうか安心してください！」

「依頼の旨、しかと承りました。必ずや、姫殿下を含めた囚われの方々を救出いたします」

「ありがとうございます……。エステルさん、ヨシユア殿。これで、大佐の脅しにも最後まで屈せずすみそつです」

「あ、あの！他にも依頼はないんですか？《ゴスペル》の件もある

し……。ここから女王様を逃がすことだって不可能じゃないと思うんです！」

「ありがとうございます、エステルさん。ですが、わたくしが逃げたところで事態が変わるわけではありません。それと、『ゴスペル』に関しては幾つか気になることがあるのです。わたくしから、大佐に真意を問いただしてみようと思います」

そして、アリシア女王との面会は終わった。

第5章 王都撩乱(29) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

うまく面会が済んだエステルたちだが、そう簡単に夜は終わらない
……。

第5章 王都撻乱(30)

クローディア姫の部屋

エステルとヨシユアはメイド服に着替えた。

「はあ、何とか素敵な方だったわね。優しげなのに、芯が強くとても毅然としていて……。あたしも、歳を取るならあんな力ツコイイお婆ちゃんになりたいな」

「カツコイイって……。でも確かに、一国を治める風格を感じさせる方だったな」

「うん……。本当はクーデターを阻止して女王様を助けたいんだけど……」

「さすがにそれは、遊撃士の領分から外れているからね……。まずは、僕たちの力で出来ることからやっつけていこう」

「うん……。そうね。それにしても、女王様から父さんのことを聞かされるなんて夢にも思わなかったわ……。まだ、あたしの知らないことがあつたりするのかしら？」

その時、部屋がノックされた。

「エステル殿、ヨシユア殿。もう支度は終わりましたか？」

ヒルダ夫人だ。

「あ、はい」

「それでは急いで控室に戻ることにしましょう。もう11時過ぎ……」

…あと少しで日付が変わります」

ヒルダ夫人が慌てている。こんなに長居していると特務兵に疑われる可能性がある。

「わわっ、もうそんな時間？」

「ずいぶん長いあいだ、陛下とお話していたからね。これ以上、長居したら見張りたちに怪しまれそうだ」

エステルたちは急いで女王宮を出た。

女王宮 入口

「ヒルダ夫人。今日はもうお帰りですか？」

見張りの特務兵が尋ねてきた。

「ええ、そうさせて頂きます。くれぐれも陛下に失礼のないようお願いします」

「これは手厳しい……。ですが、どうかご安心を。我々は愛国の士でありますから」

「頼もしいことで何よりです。それでは、私たちはこれで失礼させて頂きます」

「ど、どーも……」

「……失礼いたします」

ヒルダ夫人に連れられて、女王宮を後にしようとした時、エステルたちは特務兵たちに声をかけられた。

「ああ、お嬢さんたち」

「え……」

「そういえば名前を聞いてなかったと思ってな。一応聞かせてもらえるか？」

「えっと、その……。レナっていいいます」

エステルはとっさに思い浮かんだ名前を言った。

「ほう……。なかなか良い名前だな。あなたの雰囲気にも合っている」

「え、その……。ありがとうございます」

「で、そちらの黒髪のお嬢さんは？」

「……カリンと申します」

「カリンというのか……。何というか、可憐な名前だ」

「ありがとうございます……。私もこの名前はとても気に入っています」

「そうか……。そ、そうだ。自分は特務部隊の……」

特務兵の1人が慌てて名乗ろうとしたが、

「そのくらいにして下さい。これ以上は下心ありと見なしますよ」
ヒルダ夫人にさえぎられた。

「いや、自分たちは……」

「……………（ギロツ）」

有無を言わさない鋭い目つき。

「……………どうぞ気を付けてお戻りください」
結局、以前と同じ結果に終わった。

グランセル城 2階 右翼

「はあ……。ヨシユアってばモテモテね。あの連中、ヨシユアが名乗ったら目の色変えてたもんね」

「そ、そんなこと無いってば。君だつて結構、話が弾んでいたじゃないか」

「あたしの時は、あの連中、別に緊張してなかったもん。ふう、何だかちよつと自信がなくなっちゃったなあ」

「え……………？」

「ヒック……。何を騒いでおるのだ……………」

突然、談話室の扉が開き、デュナン公爵と執事フィリップが出てきた。デュナン公爵は酒で酔っ払っている。

「これは公爵閣下……………」

「何だ、女官長ではないか……。おや……………なんだ、その侍女たちは……………。ヒック……………見たことのない顔だが……………」

「新しく入った侍女見習いのレナとカリンと申します。まだ城内に不慣れなもので色々案内しているところです」

「おや……………？」

執事フィリップがエステルとヨシユアの顔を伺った。

「（あつ……………気付かれた？）」

「（……………まずいな。この人とは何度か会っているから気付かれても

おかしくない……)」

エステルとヨシユアはばれるのを覚悟した。

「なんだ、フィリップ。まじまじと顔を見つめて……。わはは、堅物のお前にしてはずいぶんと珍しいではないか」

「これは失礼しました……。わたくしの姪めいに似ていたので一瞬、目を疑ってしまいました。お嬢さん方。申し訳ございませんでしたな」
「あ、いえいえ」

「どうかお気になさらずに……」

「ふむ、見ればどちらも中々の上玉ではないか……。特に栗色の髪の方は健康的ですこぶるいいのう」

「（ぞわわっ……）」

エステルは身を震わせた。

「黒髪の方は、もう少々、胸に張りが欲しい所だな……」

「……きよ、恐縮です」

「ふむ、そうだな……。レナとやら！今夜の伽かを申し付けるぞ！」

「！……！」

ヨシユアがこのことに驚いた。顔つきもこわばった。

「へ……？」

事の重大さにわけが分かっていないエステル。

「こ、公爵閣下！？」

執事フィリップも驚いている。

「（ねえ、伽トキってなに？）」「

「（えっと、何て言えばいいのか……）」

「閣下、いくらなんでもお戯たわむれが過ぎますわよ……。城勤めの侍女は全て女王陛下に仕える身です。そのことをお忘れですか？」

「わかった、わかった……。まったく冗談の通じないヤツだ。ヒツク、どうせ1週間後にはこの城は私のものになるのだ。その時までのお楽しみにとっておくとしようかのう……」

「……………」

ヒルダ夫人がデュナン公爵を冷ややかに見ている。

「か、閣下！いい加減になさいますせ！暴飲暴食ならともかく、色に走るなど言語道断！このフィリップ、一命を賭してお諫めさせていただきます……」

「だから冗談だと言っているであろうが！もういい！今夜はとつとと休むぞ！」

「さ、さすがは閣下でいらっしやいます。そちらが閣下の部屋です。足元にお気を付け下さい」

デユナン公爵がふらふらと歩いていると、振り返ってエステルに声をかけた。

「ういゝ……そうだ、レナとやら。困ったことがあつたら遠慮なく私に相談するといい。次期国王みずから親身に相談に乗ってやろう」

「あは……はは……どうもありがとうございます」
棒読みで答えるエステル。

「わはは、愛いやつじや。うむ、愉快愉快！」
そっぴいなながら部屋に入っていたデユナン公爵。

「どうもお騒がせしました。多分、閣下は明日の朝になれば何も覚えてらっしやらないでしょう。どうかご安心くださいませ」

「……そう願いたいものですわね」
ヒルダ夫人が答えた。

「本当に申しわけありません。夫人、お嬢様がた。それでは失礼いたします」

執事フィリップもデユナン公爵の部屋に入ってしまった。

「ふう、あの男ときたら……。相変わらず余計な苦勞を背負いこんでいるようですね……」

「あれ、ヒルダさんってフィリップさんと知り合い？」

「幼い頃からの知り合いです。もっとも今では、仕える方も立場も隔たっています……」

「そうだったんですか……」

「確かにフィリップさんって見るからに苦勞性って感じよね。公爵が大佐に唆される状況にハラハラしてるんじゃないかしら」

「その可能性は高そうだね……。そういえば、エステル。君だつてモテてるじゃないか。公爵は君の方が好みだつてさ」

「ぞわわっ、何だかちつとも嬉しくないんですけど……。あ、ところで結局、『トギ』って何だったの？」

「そ、それは……」

ヨシユアは答えづらそうにしている。

「エステル殿。そのようなことを殿方に聞いて困らせるものではありませんよ」

「へっ？」

「……お耳を拝借」

ヒルダ夫人はエステルにそつと耳打ちした。

「……………」

エステルは顔を真っ赤にしてうつむいている。

「……理解できましたか？」

「あ、あう……。ハイ……………」

ちなみに、伽カとはこの場合、夜伽カのことで、女性が男性の寝室で夜の相手をすることです。

「（まったく無防備なんだから……………」

そして、すぐに侍女の控室に戻った。

第5章 王都療乱(30)(後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

デュナン公爵の絡みを抜け、部屋に戻るエステルたちだが……。

第5章 王都撩乱(31)

グランセル城 1階 侍女の控室

エステルとヨシユアは服を着替えた後、ヒルダ夫人とシアに礼を言った。

「ヒルダさん、シアさん。本当にありがとうございました！」

「おかげで助かりました」

「いえ、これも女王陛下に仕える者として当然の義務です。陛下の依頼についてはどうかよろしく願います」

「あ、あの……わたくしからも願います……。どうか姫様を……助けて差し上げて下さいませ」

「あ、シアさんって確かお姫様のお付きだったのよね？」

「は、はい……。日頃お仕えできる機会が少ないのが残念ですが……。わたくしのような者まで友として扱ってくださるような、そんな気さくで優しいお方です。囚われの身になられたとお聞きしてかわたくし、夜も眠れなくて……」

「そっか……。絶対に助けるから安心して！」

「それでは、これで失礼します」

エステルとヨシユアは自分の部屋に戻ることにした。

グランセル城 2階

階段を上がりきったところで、不意に女性の声が聞こえてきた

「……こんな時間に何をしてらっしゃるのかしら？」

《謁見の間》から出てきたカノーネ大尉に見られてしまった。

「あ……！」

「カノーネ大尉……」

「うふふ、こんばんは。いくら招待客とはいえ、あまり感心しませ

んわね。子供が夜歩きするには遅すぎる時間ではないかしら？」

「申しわけありません。城内が珍しく見物していたらつい遅くなってしまうって……」

「あら、それは結構なこと。では、30分ほど前までどこを見物していたのかしら？参考までに聞かせてくれませんか？」

「えっと……厨房に行っていました」

「あら、おかしいですね。先ほど見回りをした時には見かけませんでしたけど……」

「そ、それは……」

「まあ、戯たわむれはこのくらいにしておくとしましようか……。実は、あなたたちが何度かメイド部屋に出入りしているのを見かけたという報告が入っているの。あんな場所を見物するなんておかしいと思いませんこと？」

カノーネ大尉が回りくどく聞いてきた。

「な……！」

「知ってて質問するなんてずいぶん人がお悪いんですね」

「うふふ、誉め言葉として受け取っておきましょう。それで、メイド部屋に何の用事があったのかしら？正直に答えた方がよくなってよ。徐々に退路を断っていくカノーネ大尉。

「それは……」

ヨシユアも逃げる手段がないようだ。

「おお！エステル、ヨシユア！こんな所にいやがったかあ！」
野太い声が聞こえてきたと思ったら、ジンの声だった。

「ジンさん……」

ふらふらとした足取りでジンがエステルたちの所に来た。そして、目の前で手酌をした。

「ぷはあゝ、染みわたるねえ！」

「うわ、へべれけ……」

エステルが若干ひいた。

「おっと、こりゃあ失礼。誰かと思えば、ベッピンの女士官どのも

「一緒にしたか。いやあ、なんと言いますか妙な偶然もあるもん
ですなあ」

「そ、そうですね……」

「それで、どうしました？俺の未熟な弟子どもが迷惑をおかけしま
したかね？」

「で、弟子って……」

「いえ、彼らがメイド部屋にしばらくいたそうなので……。保安上
の理由で、何をしてたのか聞かせてもらっていたのですわ」

「ああ、そりゃあ、アレですな。ちょうど酒のつまみがなくなつて
取りに行かせてたんですよ！おい、ヨシユア。なんか食べるもんは
あつたか？」

「いえ、もう料理人の方々は帰ってしまったみたいで……。侍女の
方に聞いたんですけど、すぐに用意できるようなツマミのたぐいは
ないそうです」

「はあ、仕方ねえな。ツマミ無しで我慢するか……。おっと……い
いことを思い付いた」

ジンがカノーネ大尉に近寄った。

「よかつたら、俺と酒に付き合ってもらえませんかねえ。わはは、
美人の笑顔は最高の酒の肴さかなといえますしなあ！」

「に、任務があるので遠慮させていただきますわ。先ほどの一件は
不問にいたしますけど……。今夜は、もう部屋に戻ってこれ以上出
歩かないことね。不審な行動をした場合、取り調べさせてもらいま
すよ」

カノーネ大尉が一步引き下がって言った。

「わ、わかりましたってば」

「もう遅いので休ませてもらおうと思います」

「ふふ、素直でよろしい、では……我々はこれで失礼しますわ」

カノーネ大尉と特務兵たちは行ってしまった。

「あら、フラれちまったか……。仕方ねえ……とつと部屋に戻
るとするかね」

「う、うん……」
「僕たちも一緒に戻ります」

グランセル城 2階 左翼 自分たちの部屋

「やれやれ……。どうやら上手いことごまかせたみたいだな」
部屋に戻ったとたん、ジンの言葉が元に戻った。

「え……。！ジンさん、酔ってたんじゃないの？」

「ありや、演技だ演技。酒なんざ一滴も呑んでないぜ」

「うそ！？顔だつて赤かつたし……」

「気を巡らせて血行を良くし酔ったように見せかける……。東方武術における『気功』というものじゃないですか？」

「ほう、そんな事まで知っているとは驚きだぜ。まあ、困ってたみたいだからちよいと口出しさせてもらった。どうだ、助かっただろう？」

「もー、ジンさんてばほんと人が悪いんだから。たしかに助かったけど本当に驚いちゃったんだからね」

「はは、悪い悪い。それで、どうだったんだ？」

ふと、ジンが尋ねてきた。

「????どうだったって、何が？」

エステルがわけが分からずに尋ね返した。

「決まってるだろう。女王陛下との会見のことさ」

「あ、あんですって！?ど、ど、どうしてジンさんが!?」

「もしかして、エルナンさんから何か聞いていたんですか？」

エステルとヨシユアは飛び上るほど驚いた。

「受付の兄ちゃんからは何も教えてもらってないぜ。まあ、カマを
かけさせてもらったというところかねえ」

「カマつて……」

「……何の情報もなしにそんな憶測はできませんよ。ジンさん……」

あなたは何を知っているんですか？」

ヨシユアが冷静にジンを見た。

「ふふ……。ようやくコイツをお前さんたちに見せられるな」

ジンは一通の手紙をエステルに渡した。

「て、手紙……？」

「この筆跡は……」

「まあ、とりあえずそいつを読んでみてくれ。だいたいの事情は判るはずだ」

「う、うん……」

エステルは手紙を開いて読み始めた。

「拝啓、ジン・ヴァセック殿。

ご無沙汰しているがお元気だろうか。急いでいるので、ざつくばらんな書き方になることを許して欲しい。実は、^{イエーガー}獵兵団がらみの事件で帝国方面に向かうことになった。しかし、リベール国内でも妙な勢力が動き始めているらしく、若手だけに任せるのは少々心許ない。そこで君に頼みがある。私の留守中、リベールの来て何かあったら若い連中を助けてもらえないだろうか？君はリベールが初めてらしいから物見遊山しながらでも構わない。女王生誕祭の前には、外国人も参加できる武術大会も開かれるからいいカモフラージュになるだろう。突然の話で戸惑われると思うが、もし手が空いていたらお願いする。女王生誕祭までには戻るからその時にはまた、一緒に呑もう。

カシウス・ブライト

追伸：

もしかしたら私の娘と息子に会う機会があるかもしれない。ギルドの見習いをやっているの、その時は遠慮なく鍛えてやってくれ。少々の事なら、手を貸さずに自分の力で切り抜けさせてほしい」

「……ご、これって……」

「ジンさんは、父に頼まれてリベールに来たんですか……。そして父は今……エレボニアの方にいるんですね」

「まあ、そういう事になるな」

「そういう事になるなって……。よ、要するにジンさん、父さんとグルだったんじゃない！」

エステルがジンを睨んだ。

「グルとは人聞き悪いねえ。カシウスの旦那には、あの人がカルバードに来た時に色々とお世話になったんだ。いつか借りを返したかったからこの手紙は渡りに舟だったのさ」

「そうだったんだ……」

「いつ僕たちが父の子供だと判ったんですか？」

「最初に会った時にエステルが棒術具を持っていたからなんとなくピンと来てな……。キリカに聞いて確信したわけだ」

「まったく、一言くらい教えてくれてもよかったのに……。あたしたち、父さんの行方が判らないですつとヤキモキしてたんだからね。エステルがむつとした。

「それについては悪いと思っている。ただ、文面からカシウスの旦那が帝国に行くことを隠したがっているような気がしてな……。しかし、どうやらお前さんたちだけでかい仕事をやり遂げたいみたいじゃないか？」

「あ、うん……。ねえ、ヨシユア。もう話しちゃってもいいよね？」

「うん、こうなったら事情を話した方がよさそうだ。僕たちだけで済ませるにはあまりにも大きい話だからね」

エステルたちは、博士の依頼でアリシア女王に面会したこと……。そして、囚われたクローディア姫を救出する依頼を請けたことを話した。

「なるほどな……。晩餐会での話を聞いてキナ臭いとは思っていたが……。よし、その依頼、俺も手伝わせてもらおうぜ」

「え、いいの!？」

「ああ、カシウスの旦那に恩返しする絶好の機会だからな。どうか俺にも協力させてくれ」

「あ、あたしたちの方からお願ひしたいくらいだってば」

「改めて、よろしくお願ひします」

一方、リシャル大佐たち……

「こ、ここは……」

「こ、こんな場所が存在していたなんて……」

特務兵たちが周りの空間に驚いていた。そこは底が知れないほど巨大な空間で時代の古さを物語っていた。

「フフ、予想以上の規模だな。ロランス少尉。最深部まで案内できるかね？」

「了解しました……」

その時、魔獣、いや、古代の機械兵器とも言えるものが2体立ち塞がった。

「おおっ!」

「き、機械の化物!？」

「ほう……。古代の人形兵器か」
オーバーマベット

言うが早い、リシャル大佐とロランス少尉がそれぞれ一体ずつ一閃で切り伏せた。

「す、凄い……」

「あんな化物を一刀で……」

「フフ、君の方が反応が早かったようだ。やはり、本気の君にはあまり勝てそうな気がしない」

「ご謙遜を。さすがは《剣聖》より受け継ぎし神速の居合い……。しかと見せていただきました」

「ふふ、まだまだ未熟だ。だが、時代の流れはあまりに早く未熟者

の成長を待つてはくれない。何とか、このつたなき手で王国の明日を切り拓かなくては……」

そして、特務兵たちの前で号令をかけた。

「勇者たちよ！大いなる力への道は開いた！我らが愛するリベールの輝ける夜明けはもうすぐだ！諸君の働きに期待する！」

「了解であります！」

「われら特務兵、一丸となって大佐のために尽くす所存です！」

「リベールの栄光のために！リベールの栄光のために！」

特務兵たちの声が広い空間内にこだました。

第5章 王都撻乱(31) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

グランセル城の晩餐会、もといアリシア女王との面会を終え、クロ
ーディア姫の救出計画が始まる！しかし、リシャル大佐の計画も
水面下で最終段階を迎えていることは、エステルたちが知る由もな
かった……。

第5章 王都撩乱(32) (前書き)

いよいよ遊撃士たちの反攻計画が幕を開ける！

第5章 王都撻乱(32)

遊撃士協会グランセル支部

「状況は理解できました……。エステルさん、ヨシユアさん。本当によくやってくれました。まさか、女王陛下直々の依頼を請けてきてくださるとは……」

エルナンがエステルたちをねぎらった。

「あはは、運が良かっただけよ。でも、ここから先は運じゃ乗り切れないかも……」

「うん……。気を引き締めてかからないとね」

「それが判っているのであれば私から言うことは何もありません。ともかく、これでラッセル博士の依頼は達成ということになりますね。今後何かとご入用でしょうし、ここで報酬をお渡ししておきます」

エステルはエルナンから依頼達成の報酬を受け取った。

「さて、それから……。ジンさん。あなたがカシウスさんに招かれて来てくれたというのは僥倖うちはいでした。A級遊撃士としての力をどうか私たちに貸してください」

「ああ、そのつもりだ。旦那への借りを返す以前にこんな事件は放っておけんよ。最後まで手伝わせてもらうぜ」

「さすがジンさん、太っ腹！ところで……。A級ってナニ？」

「正遊撃士の実力を表すランクのことだよ。一番下のGからAまでの7段階に分かれているんだ」

「そ、それじゃあA級って最高のランクってことじゃない！ジンさんって……。そんな凄い遊撃士だったんだ」

「はは、俺なんざA級の中でも下っ端の方さ。それにA級は、大陸全土で20人くらいはいるんだが……。その上に、実は非公式でS級というランクがあつてな。これは国家的な事件を解決した遊撃士にしか贈られない称号なんだ。大陸全土でも4人しかいない」

「ど、どれだけ凄いか想像もできないんですけど……」

「ハア、どうやらお前さん、何も知らないみたいだな……。その1人つてのがカシウスの旦那のことだぞ」

「ええーっ！？ま、まさかヨシユアもしってたんじゃないわよね？」

「ゴメン、実は知ってた。5年前に、共和国での事件を解決してそうなったみたいだね」

「はあ、もう……。いいかげん怒る気もしないわ。王国軍大佐だの、陰の英雄だの剣聖だの、S級遊撃士だの……。そんなに凄かったんだつたらとつと帰って、今回の事件も解決してくれりゃあいいのに……」

「はは、その通りかもしれんな。そもそも、あの旦那がいたらここまで事件が大きくなる前にクーデターを潰していたのかもしれない」

「……………」
ヨシユアがその言葉を聞いて目を伏せた。

「ヨシユア、どうしたの？」

「……少し妙だと思ってるね。一連の事件は、全部父さんが旅立つてから起こったことだ。まるで、父さんの留守中を狙ってクーデターを起こしたような……。そんな印象すら感じるんだ」

「あ……………」

「ふむ、旦那が帝国に向かったのもクーデター計画の一環だった……。つまり、そう言いたいわけか？」

「……………いえ。さすがに考えすぎでしょうね。あの父さんを、気付かせないように誘導するなんて可能とは思えない……。よほど、父さんの動きを把握してその裏をかける人物じゃない限り……………」

「うーん、確かにそうかもね。あたしなんて、近くにいたのに何をしていたのか知らなかったし」

「まあ。旦那の裏をかけるなんて例の大佐にも無理だろうよ。多分、2つの事件が偶然に重なっただけだろうな」

「いずれにせよ、頼みの柱たるカシウスさんの力は借りられません。」

ですから、私も覚悟を決めました。これより遊撃士協会・王都支部は緊急体制に入りたいと思います」

「き、緊急体制って……」

「何と言っても、女王陛下直々のご依頼です。規約第三項、『国家権力に対する不干渉』の枷かせはこの時点で無くなつたわけですが……。それでも軍とギルドでは根本的な戦力が違いすぎます。ジンさんはもちろん、王都にいる他の遊撃士全員にも協力していただきましよう」

「なるほど……。確かに、情報部とケンカするくらいならそのくらいの戦力は欲しいわね」

「できれば、他の国内支部にも協力してもらいたいのですが……。今日になって、関所や発着場が軍によって完全に封鎖されました。テロリスト対策という名目です」

完全に各地方は孤立したも同然となったということだ。リシャール大佐の計画が完全に露呈したことも表している。

「ええっ!?!」

「実質上の戒厳令かいげんれいですね……」

「いよいよ、敵さんの動きも本格化してきたってことだな」

「おそらく、潜伏中の親衛隊や我々の動きを封じるつもりでしょう。人質救出は、手持ちの戦力だけで行うしかありません」

「正直、きつそうだけどやるっきゃないわよね!とここで、人質が捕まってるのは具体的にどこか見当がつきそう?」

「そうですね、先程から色々と考えてみたのですが……。やはり一番怪しいのは《エルベ離宮》だと思います」

「《エルベ離宮》……。森の中にある王家の建物ね」

「可能性は高そうですね。テロ対策という名目で特務兵たちが使っていたし……。それに、王族の女性をレイストン要塞のような場所に監禁はできないと思います」

「ただ、相手が軍なだけに確実な情報が欲しいところだな。間違いでしたで済む相手じゃない」

「ええ……その通りです。どちらにせよ、王都にいる他の遊撃士たちをここに集めなくてはなりません。そこで、彼らに声をかけながら情報を集めていただけませんか？ たしか、エステルさんたちは雑誌社の記者さんとお知り合いだったはずですね？」

「あ、ナイアルのことね」

「確かに、何か情報がないか聞いてみた方がよさそうだね。それと、潜伏中の親衛隊にもできれば協力を要請したい所です。こちらの線も当たっていたけると助かります」

「ということは……シスターになりすましているユリアさんに連絡を取るのね」

「紹介状の件で助けてもらっただし、一度報告した方がよさそうだね。じゃあ、大聖堂も訪ねてみようか」

「王都にいる他の遊撃士はクルツさん、グラッツさん、カルナさん、アネラスさんの4名です。酒場や、普段使うお店、あとホテルなどにいると思います。見かけたら、ここに集まるよう伝えてください」

「うん、オツケー！」

「それでは早速、出かけてきます」

エステルたちは行動を開始した。

第5章 王都療乱(32) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告 <

エステルたちは計画遂行のために協力者たちを探し始める！

第5章 王都撻乱(33)

リベール通信社 2階

「編集長、やっぱり変ですよ。2日も連絡がないなんて」
ドロシーが泣きそうになりながら編集長と話している。

「うむ、彼のことだからスクープを探して夢中になっただけだ
と思うんだが……。たしかに、戒厳令に近い状況で何の連絡もない
のは変だねえ……。おや……」

編集長がエステルたちに気が付いたようだ。

「ああ、エステルちゃんたちだ！」

「こんにちは、ドロシー」

「失礼します」

「ほー、武術大会に優勝した……。私は《リベール通信》の編集長
をやっている者だ。ナイアル君とドロシー君から君らの噂はかねが
ね聞いとるよ。遊撃士協会のエステル君とヨシユア君だね？」

「あ、こんにちは」

「どうも初めまして。《リベール通信》は毎号、楽しみにさせても
らっています」

「ははは。嬉しいことを言ってくれるねえ。ところで、ナイアル君
に用事があつて来たのかい？」
編集長が尋ねた。

「あ、はい、そうですけど……」

「それが、ちょうどその事を話していたところだったんだ。実はナ
イアル君、昨日と今日と編集部に来ていなくてねえ。連絡も一切な
い状態なんだよ」

「え……」

「昨日と今日ですか……。僕たち、おとといの夕方にここでナイア
ルさんと話をしていましたけど……」

「ほ、ホント！？」

「ホントも何も、ナイアルの伝言を伝えたのはドロシーでしょうが。準決勝の後、ここに話を聞きに来たのよ」

「あー、そういえば、そんな事もあったよーな。ねえねえ、ナイアル先輩、その時に何か言ってたよ？どこかに出かけるとか？」
「うーん、心当たりがあると言えば、誰かから呼び出されていたわね」

「うん、確かにそうだったね。通信で誰かに呼び出されてどこかに出かけていったんだ」

「君たち、そいつは本当かね？」

「はい。どうやら、その時から今まで消息不明という事になりますね」

「そ、そんなあ！先輩が死んじゃうなんてえ〜！」

ドロシーが泣きそうな顔になった。消息不明＝死亡確定は早とちりが過ぎるよ。

「え、縁起でもないこと言うんじゃないやありませんっ！今日から定期船は運航停止してるらしいけど……。昨日までは運航してたんだから別の地方に出かけたんじゃないの？」

「発着場に問い合わせたけど名簿には載ってないって言うんだ。となると、やっぱり王都にいますと思うんだけどねえ」

編集長はすでに定期船の線はあたっていたようだ。

「ふーむ……。お前たちが、その記者に最後に会った時のことだが……。そのナイアルって記者は何か記事になりそうなネタを話していなかったか？」

ジンが話に入ってきた。

「え……」

「こういうご時世だ。マスコミへの軍の規制もかなりのモンだろう。どうだい、編集長さん？」

「まあ、確かにその通りですよ。特に、情報部絡みの話になると検閲されまくりという状態です。腹立たしいったらありゃしない」

「……そういう状況じゃ記事に出来そうなネタも少ない。だが、記

者だったら少しでも新鮮で話題性のある記事を読者に提供したがるもんだろ？」

ジンが推測で真意を連ねていく。

「なるほど……。情報部が検閲しても問題ない、新鮮で話題性のあるネタ……。それについて、ナイアルさんが何か話していたかどうかですね？」

「ああ、それだったら……。クローディア姫の縁談について話していたわ」

「ほう、晩餐会の時に公爵が言っていたあの話か……」

「なんだ、ナイアル君、君たちにも話していたのか。確かに本当だったらすごいスクープになるからねえ。どうにかしてウラを取ってみると言っていたが……」

「ナイアルって記者はどうしてその話を知っていたんだい？王室関係者以外は知るはずのない情報だろう？」

「たしか、エルベ離宮に勤めている友達に聞いたって言ってましたねえ。オフレコだけど、姫様のことをテロリストが狙ってるらしくて。それで姫様、エルベ離宮に内緒で保護されてるんですって」。このドロシーの発言に、エステルたちの判らなかつたピースがはまつたようだ。

「……やっぱり！」

「ふふん。これで裏付けが取れたな」

「もし、あの日通信してきたのが離宮に勤める友人だとしたら……。ナイアルさんも、離宮にいる可能性が高くなってきましたね」

「そ、そうか……。たしかにナイアル君だったら姫殿下にインタビューするために強引に潜入する可能性もありえる……。それで、兵士に見つかって捕まってしまったのだとしたら……」

ナイアル死亡フラグが立ったか！？

「ふえ〜ん！ナイアル先輩が死んじゃう〜！」

いよいよ泣き始めたドロシー。

「だから死なないってば……。でも、それが本当だとしたら簡単に

は釈放はされないでしょうね」

「うん……。クローディア姫と同じ立場になっっている可能性が高そうだね」

「君たちは……いったい何を知っているんだ？この王都で……いや、リベールで何が起こっているのか知っているんじゃないのかね？」

「うん、ごめんなさい。それを話すわけにはいかないの」

「ナイアルさんのことは遊撃士協会に任せてください。もし拘束されているとしたら必ず釈放されるように計らいます」

「そうかい……。わかった、よろしく頼むよ」

「お、お願いね〜！エステルちゃんたち〜！ナイアル先輩を助けてあげて〜！」

「うん、任せておいて！」

クローディア姫を含めて人質はエルベ離宮にすることが確信できたエステルたち。次に、協力者を探しに向かった。

第5章 王都療乱(33) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告<

情報収集のための協力者だったナイアルが捕まっていると知ったエステルたち。しかし、エルベ離宮に人質がいるという裏付けが取れた！後は、ユリア中尉と王都の遊撃士を集めるだけだが……。

第5章 王都撩乱(34)(前書き)

グランセル大聖堂に向かったが……。

第5章 王都撩乱（34）

グランセル大聖堂 祭具室

「おや、お前さんたちは……」

エステルたちはカラント大司教に声をかけた。

「えっと、その……遊撃士協会の者です」

「こちらの大聖堂にシスター・エレンという方はいらっしゃるでしょうか？」

「ほう……。それではお前さんたちが彼女の協力者というわけか」

「え……！」

「……事情は完全に判ってらっしゃるようですね。彼女に頼まれたことがあってその報告に参上しました」

「残念ながら彼女はもうこの大聖堂にはおらん。今朝がた、私に挨拶してここを去って行ってしまったよ」

完全にすれ違いになってしまったようだ。

「ど、どこに行っただんですか？」

「いや、残念ながら判らない。王家との長年の付き合いから彼女をかくまわせてもらったが……。今回の件について、私は彼女から詳しいことは聞かされていないのだ。たぶん、教会に迷惑をかけたくなかったのだろう」

「そうですか……」

「だが、安心するといい。ここを去る時、彼女の目は希望の光に満ち溢れていた。絶望の末、自暴自棄になって出て行ってしまったわけではなさそうだ」

「そ、それを聞いてちょっと安心しちゃった……。でも、その様子だと親衛隊には連絡つかないかも」

「ま、無いものねだりをしてもし方あるまい。ひとまず、親衛隊の存在は脇に置いといたほうがよさそうだ」

「残念ですけどそうするしかありませんね」

「どうやら大変な困難にぶつかっているようだ……。女神は、自らを扶く者を扶ける。精一杯がんばりさえすれば必ずや良き導きがあるであろう」

カレント大司教が励ましてくれた。

第5章 王都療乱(34) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

>次回予告<

ユリア中尉が消息を絶つたのは意外だったが、ゆっくりしている間もないので、王都にいる4人の遊撃士を探し始める。

第5章 王都療乱(35)(前書き)

王都にいる4名の遊撃士を招集するエステルたち。

第5章 王都撩乱(35)

ホテル・ローエンバウム 2階の宿泊部屋

「……………。あの時の記憶…………。あと少しで思い出せそうなんだが…………。まるでモヤがかかったみたいに…………。」
「クルツが一人たたずんでいた。」

「あ、クルツさん…………！」

「よかった、ここにいたんですか」

「おや…………。エステル君とヨシユア君か。ジンさんも一緒にどうしたんだい？」

「俺たちが昨日、晩餐会で城に行ったことは知ってるだろう？その時に、この新米2人がとんでもない依頼を請けてきたんだ」

「とんでもない依頼…………？」

「クルツさんには、多少詳しく説明した方がよさそうですね」

エステルたちは、クルツにこれまでの事情と女王の依頼について説明した。

「……………。それは…………。本当か？」

「モチのロンだってば。だから、クルツさんにも手伝ってもらいたいのよ」

「いや…………。そうじゃない。陛下の依頼というのもしかに驚きなんだが…………。大佐が手に入れたという漆黒のオーブメントというのは本当に…………。存在するのか…………？」

クルツの顔が一気に青ざめていった。

「…………。クルツさん？ど、どうしたの？なんだか顔が青くない？」

「ううう…………。があああああっ！」

クルツが急に震えだした。

「わわっ！」

「こ、これは…………。」

「ぶむ…………。ちょっと離れてろ」

「え……」

ジンがクルツの前に立った。

「フヒユウウウウウウウウツ……」

ジンが呼吸を整え始めた。

「阿………咩ッ！」

「ガッ！」

そして、ジンの声で急に大気が震えたと思うと、クルツが後ろに吹き飛んだ。

「な、なに今の……！触れてもないのにビリビリッと来たわっ！」

「今のが気功だ……。触れてもいないのに肉体に直接作用する……」

「ま、時間がなかったから荒っぽく行かせてもらったぜ」

ジンがクルツに近寄った。

「どうだい、気分は？」

「ああ……。すまない、もう大丈夫だ」

そう言っただけでクルツが立ち上がった。

「全部ではないが……。ようやく思い出すことができた。そのショックで身体が言うことを聞かなくなったみたいだ……」

「お、思い出したって……？」

「前に話しただろう？3ヶ月前の事故さ……」

「クルツさんが仕事中に記憶をなくした事件ですね」

「ああ……。私はあの時、ある人物に頼まれて黒装束の連中のことを調べていた……。そして、連中が運んでいた怪しげな代物を奪取したんだ。それは、漆黒のオーブメントだった」

「！……」

「その人物というのはもしかして……」

「ああ……。君たちの父親のカシウスさんだ。私は急いで、そのオーブメントを小包でカシウスさん宛に送った……。何とかそこまでは思い出したよ……」

「そ、それじゃあ！小包を送った『K』って……」

「ああ……。私のことだ。ラッセル博士に解析してもらおうようメモに

進言した記憶がある……。そうか、あの小包は君たちが受け取ったのか……」

「クルツさん……。その後の記憶はどうですか？父さんに小包を送った後、あなたに何が起こったんですか？」

「ああ……。発着場を出た後、誰かに声をかけられて……。その後……。駄

目だ、モヤがかかったように思い出すことができない」

「どうやら、その時に記憶を操作されたみたいだ。」

「あまり無理をして思い出そうとしない方がいい。身体に負担を与えるだけだぜ」

「……。ああ、わかった……。とりあえず、あの時のことを思い出せただけでも上出来だ……」

「それにしても……。いったい誰がこんなことを……。やっぱり特務兵たちが何かをしたってことかしら？」

「可能性はあるね……。アガツトさんを蝕^{はしむ}んだ毒物もそうだったけど……。特殊な薬品を開発してテストしているみたいだからね。記憶に負担をかける作用をもつ薬品がつかわれたのかもしれない」

「な、なんだか気味が悪いわね。とすると、空賊のポストかダルモア市長も同じってことね。あたしたちも気を付けないと……」

「すまない……。肝心の話がまだだったな。陛下の依頼の件は了解した。どうか私にも協力させてほしい」

「で、でも……。クルツさん、調子は大丈夫？」

「ああ、記憶を取り戻して逆に身体が軽くなっただくらいさ。落とし前をつける意味でもせひとも協力させて欲しいんだ」

「その調子なら大丈夫そうだな。いったん作戦会議がある。まずはギルドに向かってくれ」

「わかった……。恩に着る！」

クルツは先にギルドに向かった。

居酒屋 《サニーベル・イン》

「グラッツさん、見つけた！」

エステルはカウンターに腰かけていたグラッツを発見した。

「おっと。優勝チームのお出ましか。晚餐会で城に泊まったそうだが、もう帰ってきちゃったのか。さぞかし美味しいもんを食ってきたんじゃないのか？」

グラッツは興味津々に聞いてきた。

「確かに美味しかったけど……。それどころじゃなかったのよ」

「それどころじゃない？」

エステルたちはこれまでの事情と女王の依頼についてかいつまんで説明した。

「……………おいおい、マジかよ」

「残念ながら、掛け値なしの本当だ。俺の二つ名に賭けてもいい」

「《不動のジン》……。あんたが動いているってことは疑う余地はなさそうだな……。よし、わかった。俺も協力させてもらうぜ」

「ありがとう、グラッツさん！」

「まずは、作戦会議をするのでギルドに向かってください。みんな集まってくるはずですよ」

「わかった、後でな！」

グラッツがギルドに向かっていった。

ヴァイス武器商会

「あ、カルナさん！」

武器のショーケースを見ていたカルナを見つけた。

「いや、あんたたちか。ジンの旦那まで一緒にいたいどうしたんだい？」

「実は、かなり面倒な話になっちまってな……」

「……なんだい？タダ事じゃなさそうだね」
エステルたちはこれまでの事情と女王の依頼についてかいつまんで説明した。

「………………。どうやら冗談じゃなさそうだね。閑所と発着場が封鎖されてキナ臭いとは思っていたが……。事情はわかった。あたしはどうすればいい？」

「まずは、全員で作戦を練ろうという話になりました。ギルドに向かってください」

「了解だ。一足先に行ってるよ」

カルナはギルドに向かっていった。

エーデル百貨店

「あら、新人君たちにジンさんも一緒じゃない。もう、お城から戻ってきたんだ？」

アネラスは今日も可愛いもの探しに余念はないようだ。

「うん、そうなんだけど……」

「アネラスさん。少し時間を頂けますか？」

「なにに？面白い話でもあるの？」

アネラスは身を乗り出してきた。

「うーん。面白いかどうかはともかくビックリするのは確かかも……」

「へえ……なんだか楽しそうじゃない。こんな所で立ち話も何だから外の休憩所でも行こっか？」

そうして、人の気持ちも分らずに外の休憩所に向かった。

「………………。え。」

その話を聞いて、アネラスはただ一言しか言えなかった。

「念のために言いますが、冗談じゃありません。大きな仕事になり
そうなので力を貸して欲しいのです」

「……えーと。ごめん、ちょっと混乱して事態が把握できてないみ
たい。よく判らないけど、みんなギルドに集まるのね？」

「うん、エルナンさんが詳しい話をしてくれるはずよ」

「わかった……！とりあえず行ってみるね」

アネラスはよく判らないままギルドへと向かっていった。

4人を招集したエステルたちもギルドへと戻った。

第5章 王都療乱(35) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

王都にいる4名の遊撃士を招集したエステルたちは、本格的な作戦を練り始める！

第5章 王都撩乱(36) (前書き)

ギルドに集結した遊撃士たち。そして、作戦会議が始まった。

第5章 王都撩乱(36)

遊撃士協会グランセル支部

「他の遊撃士は全員集合したようですね。記者さんと、親衛隊の方には何とか連絡はつきましたか？」

「残念だけど……両方とも連絡がつかなかったの」

「ですが、必要な情報はだいたい集まったと思います」

エステルたちは雑誌社と大聖堂で手に入れた情報を説明した。

「なるほど……。クローディア姫がエルベ離宮にいるのは間違いな

さそうですね。親衛隊の方は残念ですが、捕まっていない事が判っ

ただけでも良しとしましょう」

「それじゃあ、早速始めるかい？」

「ええ……。全員で、人質救出計画を練ってみることにしましょう」
エステルたちは2階に上がった。

3階

「……以上が、現在進行している情報部のクーデター計画の詳細です。それを踏まえた上で王都支部は、女王陛下の依頼をお受けしたいと思っています」

エルナンが今まで手に入れた情報を詳細に全員に説明した。

「まさか、そこまで大それた陰謀が進行していたとは……。見抜けなかった自分の不甲斐なさが腹立たしい限りだ」

クルツが自分を責めたてた。

「確かに、あの特務兵つて連中うさん臭そうだったけど……。リシヤール大佐が格好良かったからつい信じちゃってたみたい……。格好良さにつられ、目がくらんでいたらしいアネラス……。」

「しかも、空賊事件やダルモア市長までも裏から操っていたとはね

え……。ずいぶんと遊撃士を舐めてくれるじゃないか……」

「こりゃあ、落とし前を付けないとどうにも収まりがつかねえな……」

カルナとグラッツは舐められたことに怒りを感じている。

「それでは皆さんも、協力して下さるといふことで構いませんか？」

エルナンが4人に確認した。

「もちろんだぜ！」

「遠慮なくコキ使っておくれ」

「借りは……返させてもらう」

「あたしも喜んで！」

4人は当然のごとくうなづいた。

「うわ……。凄いことになってきたわね！」

「うん……。さすがに頼もしい限りだね」

「それでは具体的な救出作戦を練ることにしましょう。人質の命がかかっている以上、あまり悠長な作戦にはできません。多少、力押しになります。が拠点攻略の形を取りたいと思います」

「侵入ルートを探す時間はないし、確かにそれしか方法はなさそうだな」

「しかし、離宮を攻略するとしたら役割分担はどうするつもりだい？」

カルナが持ち手の戦力の少なさを指摘して言った。

「……陽動班と突入班の二手に分けるのが確実だろう。何らかの騒ぎを起こして離宮にいる戦力を引き付けてからそのスキに別動隊が突入する……」

クルツが提案した。

「しかし、相手は王国軍の中でも精鋭にあたる情報部の特務部隊だ。欲を言えば、陽動時の要撃班と突入時の攪乱班も欲しいところだな」

「えっと……それってどういうこと？」

エステルは意味が分からないので尋ねた。

「陽動して追いかけてきた敵を待ち伏せして叩くのが要撃班……」。

敵を混乱させて、突入をやりやすくするのが攪乱班だね」

ヨシユアが分かりやすく言ってくれた。

「なるほど……。でも、この人数じゃあそんな役割分担は無理じゃない？」

この場には、エステル、ヨシユア、ジン、クルツ、グラッツ、カルナ、アネラスの7人しかない。人数が少なすぎて、到底、そんな役割分担にはできない。

「ええ……残念ながら。他の支部にも連絡したのですが、発着場と関所が封鎖されているため遊撃士がこちらに来れない状況です」

「そっか……。こういう時に、シエラ姉やアガットがいてくれたらな……」

「……ジンの言う通り、陽動と突入の2班だけではあまりにも危険が大きすぎます。何か別の案を検討した方がいいかもしれません」

エルナンが別の案を考えようとした時、

「いや、足りない戦力は我々が補わせていただく」

1階から声がした。そして、上がってきたのはシスター服姿のユリア中尉だった。

「あ……！」

「ユリアさん……！」

「おお、周遊道で会ったあの時のシスターじゃないか」

「お初お目にかかる。王室親衛隊、中隊長。ユリア・シュバルツ中尉だ。あなた方の作戦に親衛隊も協力させてほしい」

そして、ユリア中尉がエルナンに具体的なことを説明した。

「なるほど……。お話はわかりました。あなたを含めた9人の隊士が協力してくださるわけですね」

「皆、それぞれの方法で王都に潜伏している最中だ。だが、1時間以内に全員を集結させることができるだろう」

これで合計16人が作戦に加わることになった。

「そ、それはいいんだけど……。ユリアさん、どうしてあたしたちが人質を救出しようとしてるって分かったの？」

「僕たち、それを伝えようとして大聖堂に行っただんですけどユリアさんには会えなかつたんです」

確かに、ユリア中尉には何の情報も伝えられていないはずだ。

「そうか……。済まなかつたね。ただ、君たちが陛下から依頼を請けたことは知っていた。それも昨日の夜のうちにね」

「昨日の夜！？それって、あたしたちが女王様と会つたすぐ後ってこと？」

「フフ……。その通りだ。我々は、情報部も知らない特殊な連絡手段を持っていてね。君たちの手助けをするよう陛下からご指示があつたのさ」

「特殊な連絡手段？」

エステルはそれが分からないようだ。

「うーん。何と言つたらいいのか……」

ユリア中尉も説明しにくそうだ。

「まあ、そいつはいいだろう。大事なのは、要撃班と攪乱班が何とか確保できるってことだ」

「ええ、これで作戦の成功率が跳ね上がりました。早速、役割分担を決めてしましましょう」

「了解した。まずは陽動だが……。これは我々親衛隊のうちの5人のメンバーが担当しよう」

「確かに、指名手配中のあなたたちが現れたとなれば敵も引つかかる可能性が高いな」

「ああ、そういうことだ。具体的には周遊道の外れに停泊している情報部の特務飛行艇を狙うつもりだ」

「特務飛行艇って……。特務兵たちが乗ってたアレ！？」

エステルが驚いた。

「周遊道の外れに停めてあつたんですか……」

「そついや、封鎖されて入れなかつた場所があつたな……」

「私の調査だと、数名の特務兵が常に見張りをしているようだ。これを叩いて、離宮に連絡させて応援部隊をそちらに向かわせる」

「あ、なるほど……。その応援部隊を、要撃班が返り討ちにするってことね？」

「ならば、要撃班は私たちが引き受けた方がよさそうだな」

「たしかに、森での戦闘は魔獣退治で慣れっこだからな！」

「銃使いもここにいろし……。うってつけじゃないかねえ？」

「まさに適材適所だと思います」

「では、攪乱班と突入班ですが……」

エルナンが離宮に入るメンバーを決め始めた。

「攪乱班は、陽動班と同じく親衛隊のメンバーが務めよう。その方が、特務兵たちの注意を引きつけられるはずだ」

「……ということは……」

「僕たちが突入班として人質を解放するわけですね」

「みんなのお膳立てがあつて初めて成立する大切な役割だ。気合いを入れる必要があるぜ」

「そ、そう言われるとちよつとプレッシャーかも……」

エステルが今までにない緊張にさらされている。

「フフ……。そう心配することはないさ」

「何といつても武術大会の優勝メンバーだからねえ」

「敵の大部分は私たちが何とかしよう。君たちは人質救出だけを考えてくれればそれでいい」

みんながエステルを励ましてくれた。

「ユリアさん……先輩たち……」

「僕たちだけで人質を救うわけじゃない。力を合わせればきっと大丈夫さ」

「うん……！よし！やるっきゃないわよねー！」

エステルも気合いが入つたようだ。

「おっと、いい気合いだな」

「これで作戦会議は終了ですね。作戦決行は夜……。闇に紛れてが望ましいでしょう。一度作戦が始まってしまえば市街地に戻る余裕はありません。今のうちに、足りないものを揃えてきてはいかがですか？」

「あ、それもそうね」

「私は、王都に潜伏している部下たちに連絡を取ってこよう」

「それじゃあ、一旦ここで解散ですね」

こうして作戦会議は終了した。後は、決行するのを待つだけになった。

第5章 王都療乱(36) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告 <

いよいよ人質解放のための作戦が決行される！

第5章 王都療乱(37) (前書き)

いよいよエルベ離宮解放・人質救出作戦が開始!

第5章 王都撩乱(37)

遊撃士協会グランセル支部

「おや、皆さん。もう準備はお済みでしょうか？一度作戦が始まってしまえば、市街地に戻る余裕はありませんが……」

「ええ、バツチリよ」

「わかりました。それでは時間まで作戦を細かく詰めていきましよう」

エステルたちは作戦の詳細を話し合い、集合場所を決めた。

エルベ周遊道 夜

エステルたち7名の遊撃士が集合場所で待機していた。

「さてと……。集合場所はここでいいのよね？」

「アンバル琥珀石の石碑のある休憩所だからここで合っているはずだよ。問題

は、ユリアさんたちが見つからずに来れるかだけ……」

「……その心配は無用さ」

後ろから声がしたかと思うと、ユリア中尉含め、親衛隊9人が揃っていた。

「わっ、いつのまに……」

「はは、よくそれだけの数が王都に潜伏できていたもんだな」

「我々の理解者は市民にも大勢いるものでね。こちらの準備はできている。いつでも作戦を始めてほしい」

「よし……。エステル君。号令をお願いしたい」

クルツが不意にエステルに言った。

「え……？あ、あたしが！？」

エステルが唐突に言われたためたじろいでいる。

「元々、君たちが請けた女王陛下直々の依頼だ」

「ああ、お前さんの号令で始めるのが筋つてもんだぜ」

「で、でも……。あたし、まだ新米だし……」

「はは、関係ないさ。あんたなら文句はないよ」

「ただし、あんまり大声を出さないようにね？」

「我々は手伝いだ。異存はまったくないよ」

「あ、あう……」

みんなに押されて断れないエステル。

「エステル、自信を持って」

「細かいことは考えるなって。こういうのはノリさ、ノリ」

「うん……」

覚悟を決め、石碑の上に乗るエステル。

「全作戦要員に告げる……。これより、エルベ離宮攻略、および人

質救出作戦を開始する！」

そして、エルベ離宮攻略・人質救出作戦が始まった！

エルベ周遊道 外れの池

「はあ……。さすがに腹が減ったな。そろそろ交替時間じゃないか？」

夜も更け、眠くなっている見張りの特務兵がもう1人の見張りに声をかけた。

「おいおい、たるんでるぞ。いつ、潜伏中の親衛隊が現れるかもしれんのだからな」

もう1人は真面目だ。

「逃亡してるのは10名にも満たない数だろ？そんな連中、大佐が本気になればあっというまに狩りつくせるさ」

「……やれるものならやってみるがいい」

その時、ユリア中尉率いる陽動班が特務兵たちの目の前に現れた。

「な……！」

「親衛隊中隊長、ユリア・シュバルツ！？」

エルベ離宮 前庭

この戦闘を受け、エルベ離宮の中隊長がすぐにエルベ離宮の広場に兵を集めた。

「聞け！特務艇から連絡があつた！どうやら、親衛隊の残党がこのこと現れたらしい！至急、現場に急行しこれを機会に奴等を殲滅する！」

「ラジャー！」

エルベ周遊道 外れの池

「何とか片づいたか……。むっ……」

特務艇の見張りを倒した後すぐに先ほどの中隊長率いる増援がかけつけた。

「バカな連中だ……。飛行艇はロックされている。簡単に使うことはできんぞ」

「……………」

「おとなしく大佐に従っておけば命だけは助かったものを……。おのれの頑迷さを呪って死んでいくがいい！かかれっ！」

中隊長が号令をかけた時、後ろから控えていたクルツたち要撃班が攻撃をかけた。

「ゆ、遊撃士だと！？貴様ら、軍に齒向かうつもりか！？」

「あいにくだが……君たちはすでに違法的な存在だ」

「陛下のお墨付きがある以上、遠慮なく行かせてもらつよ！」

エルベ離宮前

「よし、要撃班が動いたぞ」

「まず自分たちが先行して前庭で残存兵力を引き付けます！その隙に、あなた方は離宮内部に突入してください！」

親衛隊が離宮内の兵を一手に引き受ける作戦だ。

「うん、わかったわ！」

「女神エイドスの加護を！」

そうして、親衛隊4名が先に離宮に突入した。

エルベ離宮 前庭

離宮の前庭ではすでに戦闘が繰り広げられていた。

「よしよし……。やってくれてるようだな。この隙に建物に突入するぞ」

「オツケー！」

「了解です！」

エルベ離宮

「ここが《エルベ離宮》……。うーん、お城にも負けなくらい豪華だわ」

「まあ、王家の建物だからね」

その時、ジンが構えた。

「おっと、おいでなすつたぜ」

前に特務兵たちが現れた。

「な、なんだ貴様らは！？」

「悪党に名乗る名など無し！」

「問答無用で行かせてもらいます！」

〈戦闘？ 特務兵×3
5ターンで難なく終了〉。

「さてと、お姫様たちはどこに捕まってるのかしら？」
「そんなに広い建物じゃない。しらみ潰しに調べていった方が良さそうだ」

「ぐずぐずしてたら前庭にいる連中も戻ってくる。とにかく急ぐぞ」

エルベ離宮 中庭

「な……なんだお前たち！？」
「不審者め、そこを動くな！」
動くなと言われても動きません。

〈戦闘？ 特務兵×2、軍用犬×2
7ターンでこれまた楽勝〉。

「は、あせった。いきなり襲ってくるんだもん」
不審者がいたら、そりゃあたり前でしょうよ。

「まだ、かなりの数が離宮内に残っているみたいだ。定期的に中庭の廊下を巡回しているみたいだね」

「仕方ない、見つかったら黙らせるしかなさそうだな」
これこそ力による口封じ。最悪だけど……。

エルベ離宮 談話室

「あ、あなたたちは……？」

マイスターをしていた執事レイモンドが、武器を構えていきなり入ってきたエステルたちに驚いた。しかも、そこには特務兵たちが酒を飲んでいた。騒ぎが起こっているにもかかわらず……。いわゆる、ぐうたら組ですね。

「わわっ……。結構集まっているわね」

特務兵たちが4人も。

「ん……。なんだ、お前たちは……」

「うい……。見かけない顔だなあ？」

完全に酩酊状態だった。

「こんばんは。遊撃士協会の者です」

「へ……？」

「まあ、そのまま気持ち良く眠っててくれや」

酔った特務兵たちと戦闘開始……。

〈戦闘？ 酔っ払った特務兵×4 コレ、ワロタ

今回最速の3ターンでThe End。

「ふう、一丁あがりっ」と

「酔ってたからあまり手ごたえがなかったな」

「ここは、城にもあった酒を出す談話室みたいですね」

「い、命ばかりはお助けを……。ぼ、ぼ、僕はっ、彼らの仲間じゃありませんっ！」

執事レイモンドがカウンターから顔を伺いながら言った。

「わかってるってば。離宮に勤めている人でしょ？」

「女王陛下の依頼で捕まった方々を助けに来ました」

「え……ほ、本当かい？本当に僕たちを助けに来てくれたのかい！？」

「うん、だからもう安心して」

安心したのか、執事レイモンドがカウンターから出てきた。

「はあ……よかった……。友達の記者が捕まってから生きた心地がしなかったんだ。あいつ、無事だろうか……」

「友達の記者……。あ、ナイアルの友達ってひょっとしてあなたのこと？」

「へ……」

エステルはナイアルが行方不明になった経緯を話した。

「そうか、確かにあの時ナイアルに連絡したのは僕さ。彼、ここに保護された姫様にインタビューしたがってね……。あまりに熱心だから断れなくて中に入れる手引きをしたんだよ」

「それでバレて捕まったわけか」

「ああ、恥ずかしながらその時になって真相に気づいたよ。姫様、テロリストに狙われたからここに保護されたって聞いたんだけど……。実際には、情報部の連中に監禁されていたんだって……。姫様が来たことに浮かれて、そんな事にも気づかなかつたんだ……。まったく、執事失格だよ……」

「まあまあ。そんなに気を落とさないでよ」

「それで、捕まった方々がどこにいるのか分かりますか？」

「ああ、建物の一番奥にある《紋章の間》に集められている。条約の調印にも使われる由緒正しい大広間なんだ」

「奥にある《紋章の間》ね」

「よし、さっそく行ってみるか」

奥につづく扉には鍵がかかっていた。

「えー、そりゃないわよ！」

「かなり頑丈な鍵だね。どこからか見つけてこないと」

「ふむ、あの若い執事に聞いてみた方がよさそうだな」

エルベ離宮 談話室

エステルは執事レイモンドに奥にある扉に鍵がかかっている事を話した。

「そうか、あそこには鍵がかけられていたっけ……。あの鍵は、情報部の中隊長が管理していたはずだけど……。テロリストが現れたとかで出かけちゃったみたいなんだ」

「え……！」

「それじゃあ、ユリアさんたちが待ち伏せている方に行ったのか……」

「むう、まずいな。戻っているヒマはないぞ……」

ここに来て行き詰ったエステルたち。

「ちよつと待った……。あそこの鍵は、スペアがどこかに保管されているんだ。確か、展示室のどこかに隠してあったと思ったけど……」

……

「展示室ね！」

「急いで探してみよう！」

エルベ離宮 展示室

エステルは大きな緋色の壺を調べた。そして底に何かが貼り付けてあった。それはスペアキーだった。

「あ、これね！」

「これで奥にある扉を開くことができそうだね」

早速、エステルたちは奥にある扉に向かってスペアキーを使った。

エルベ離宮 紋章の間への渡り廊下

紋章の間の扉の目の前に見張りの特務兵たちがいた。

「なんだ貴様ら……」

「どこかで見かけたような……。こいつら！ 武術大会で優勝した……」

「遊撃士協会の連中か！？」

「ま、そういうことだ」

「素直に通してくれれば見逃してあげてもいいんだけど？」

「な、舐めるなア！」

「我らが鉄壁の守り、破れるものなら破ってみろ！
では、ご遠慮なく行かせてもらいます。」

「戦闘？ 重装特務兵×2」

鉄壁の守りむなしく、8ターンで破られましたとさ。

エルベ離宮 紋章の間

「お、お前ら……！？」

真っ先に気付いたのはナイアルだった。

「やつほー、助けに来たわよ」

「ナイアルさん。無事だったみたいですね」

「助けに来たって、マジか！？」

「エステルさん、ヨシユアさん。こんな所で会えるなんて……」
奥から少女の声が聞こえてきた。

「……………え？」

エステルたちが向かってみると、そこにはドレス姿の少女がいた。

「あ、あなたがお姫様なんだ。初めまして、あたしたち遊撃士協会の……………」

「初めまして、じゃないですよ。エステルさん、ヨシユアさん。やつと約束通り再会できましたね」

「え……………」

エステル、しばしの沈黙。

「ああつ、クローゼじゃない！」

「もう、エステルさんったら。すぐに気付いてくれないなんてヒドイです」

「そ、そんなこと言われてもドレス着て、髪伸ばしてるし……………。一体全体、どうしちゃったの？」

「……………ごめん、クローゼ。エステルって、あまり人を疑うことを知らないから」

ヨシユアがクローゼに申しわけなく言った。

「ちよつと！それってどーという意味よ！」

「ふふ、それがエステルさんのいいところだと思いますから。それよりも、ヨシユアさん。まだ私を……………その名で呼んでくれるんですね」

「うん、君がそう望んでいるような気がしたから。本名の方が良かったかな？」

「とんでもありません……………。ありがとうございます」

ヨシユアとクローゼは話を通じているようだ。

「……………?とここで、どうしてクローゼがここにいるわけ?それに、例のお姫様がどこにもいないんですけど……………」

「あいな、目の前にいるだろ。その方が、陛下の孫娘のクローディア姫殿下だつての」

ナイアルがたまりかねて言った。

「……………ええええええっ!?!」

おそらくこれがエステル人生最大の驚きであつただろう。それも当然、クローゼがクローディア姫だったからだ。

「ごめんなさい、黙っていて……。本当は、エステルさんたちと王都で再会した時に打ち明けるつもりだったんですけど……。リシャル大佐に捕まってしまうて……」

「え、でも、なんで？なんでお姫様が正体隠して普通の学校なんかに……。！？そ、それにあたし、クローゼのことをどう呼んだらいいのか……」

エステルの頭の中は完全に混乱状態だった。

「どうかこのままクローゼと呼んでください。クローディア・フォン・アウスレーゼ……。本名の最初と最後を合わせた愛称なんです」

「そうだったんだ……。えっと、それじゃあその髪は？」

「あ、これはヘアピースです。さすがに同じ髪型だと、学園生活に支障をきたしそうだったので……」

「まったく迂闊うかつでしたよ……。そのお姿は、写真で拝見していたのに市長邸の事件で会った時にはサッパリ気付きませんでしたからねえ」

ダルモア市長事件の時にナイアルは学生服姿のクローゼを見ているが気付かなかつた。

「うふふ、ごめんなさい。デュナン小父様おじや、ダルモア市長も気付かなかつたみたいですし意外と効果はあつたみたいですね」

「そっか、考えてみればあの公爵も親戚なのよね。とと、そうだ。

肝心なことを忘れていたわ」

エステルたちは今までの経緯を一通り説明して、女王陛下の依頼で救出に来たことを説明した。

「そうだったんですか……。エステルさん、ヨシユアさん。それにジンさんと仰いましたね。助けに来てくださって本当にありがとうございました」

「あはは、気にしないでよ。捕まっていたのがクローゼだと知っていたら頼まれなくても助けに来たし」

「エステルさん……」

「確かにその通りだね。それに、僕たちよりも陛下に感謝した方がいいと思う。自分の身をかえりみずに君の救出を依頼したんだから」
「確かに、姫殿下さえ無事ならば大佐の要求を拒否することができ……。死すら覚悟されているかもしれないな」

「はい……。お祖母さまはそういう方です。何とか手を打たないと今度はお祖母さまの身が……」

そう話していた時、

「茶番はそのくらいにしてもらおうか……」

振り返ると、情報部中隊長が戻ってきていた。さらに銃をこちらに向け、女の子が特務兵に銃を突きつけられていた。

「お、お姫さまあ……」

「リアン又ちゃん!？」

「な、なんで女の子が!？」

「モルガン將軍のお孫さんです……。ハーケン門に監禁された將軍を動かすために連れてこられたらしくて……」

「女王陛下に対する君と同じということか……」

「言うておくが、ただの脅しと思うなよ……。我らが情報部員、理想のためなら鬼にも修羅にもなれる!」

どうやら本気のようにだ。

「そ、そんなことで威張ってるんじゃないわよ!」

「中隊長、取引をしましょう。その子の代わりに私を人質にしてください」

クローディア姫が自分の身を売ろうとした。

「おっと……。その手には乗りませんぞ。さすがに我々といえど王族を手にかける勇氣はない。それと較べると、モルガン將軍の孫娘というのはちよつどよろしい。人質の価値もあるし傷つけても問題なさそうだ」

中隊長は完全に腐っているようだ。

「……あなた方は……」

「……さいてー」

「やれやれ、腐った連中だぜ」

「フン、何とでもほざくがいい。そろそろキルシエ通りから巡回部隊が帰還する頃合いだ。親衛隊、遊撃士もろともここで一網打尽にしてくれるわ！」

「あー、それは無理ってもんね。ここに來るときにあたしたちが倒しちゃったから」

その時、ロレントにいるはずのシエラザードが突入してきてリアン又を拘束していた特務兵を倒した。

「な……!？」

あまりに突然で中隊長が驚いている。

「ひぐっ……うう……。うわあああああん！」

あまりの恐怖から解放されたためか、リアン又が泣き始めた。

「よしよし、もう大丈夫よ。エステル、ヨシユア。ずいぶん久しぶりじゃない」

「シエ、シエラ姉!？」

「来てくれたんですか……」

「な、なにを悠長に挨拶しておるかああっ！」

中隊長がキレた。

「やれやれ、無粋の極みだね」

「うおっ……」

その言葉と同時に部屋の外からの銃弾が中隊長に命中し、

「ぐぎやっ！」

シエラザードが鞭で殴った。中隊長は壁に激突し、気絶した。

「今のはオマケよ」

「エ、エゲツな。って今撃つたのって……」

「……オリビエさんですか？」

「ピンポン いやいや。真打ち登場といった所かな」

オリビエがこのこと現れた。

「はは、つくづく突拍子もない兄ちゃんだな。それに、シエラザー

ド。ずいぶん久しぶりじゃないか」

「どうも、ご無沙汰してます。まさかジンさんがリベールに来てるなんてね。あなたがエステルに付いているって聞いたからあんまり心配してなかったわ」

「はは、そりやさすがに買いかぶりすぎってもんだぜ。しかしお前さん……ずいぶん色っぽくなったなあ。正直、見違えたぞ」

「あ、あら、そうかしら？」

「むむむ。そこはかたなくジェラシー。ボクのことを散々もてあそんでおいてゴミのように捨てるのねっ」

オリビエはこんな状況でも変わらない。

「ああ、オリビエ。アイナが会いたがってたわよ。また一緒に呑もうだってさ」

「ごめんなさい。ボクが悪うございました」

「まったくもう……。みんな相変わらずなんだから」

「でもシエラさん。よく王都に来れましたね。王国軍に関所が封鎖されてませんでしたか？」

「ええ、だからヴァレリア湖をボートを使って移動したわ。で、王都の波止場に上陸したわけ」

「なるほど、考えましたね……」

「でも、どうしてまたスチャラカ演奏家と一緒になの？」

「王都のギルドでばったり出くわしちゃってね。スツポンみたいに離れないから仕方なく連れてきたのよ……」

どこまでも浪漫を求める男、オリビエ。

「ハッハッハッ。こんな面白そうなことをボクが放っておくわけないだろう。ところで、そちらのお嬢さんが……」

「あ、紹介するわね。女王様のお孫さんにあたるクローディア姫殿下よ。あたしとヨシユアの友達なの」

「初めまして、お2人とも。助けに来てくださって本当にありがとうございます」

「お気になさらずに。これも遊撃士としての務めです」

「フツ、美しき姫君を救うのは紳士としての誉れと言っからねえ。お会いできて光栄だ、プリンセス」

「クローゼ、ご無事でしたか！」

その時、ユリア中尉とジークが入ってきた。

「ユリアさん、ジーク！」

「ピュイピュイ！ピユウーイ！」

「ふふ、よかった。また会うことができて」

「殿下、よくご無事で……。本当に……。本当に良かった……」

「ユリアさんも……。元気そうでしたです」

やがて、陽動を行っていた遊撃士たちや親衛隊員も合流した。他の人質を休ませてからエステルたちは状況確認を行うことにした。こうして、エルベ離宮解放・人質救出作戦は成功のうちに終わった。

第5章 王都療乱(37) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

エルベ離宮を解放したエステルたち。しかしその頃、グランセル城内では……。

第5章 王都撻乱(38)

エルベ離宮 応接室

「本当に……申しわけありませんでした。私が不甲斐なかつたばかりにこのような苦勞をおかけして……。出来ることなら、至らぬ我が身をこの手で引き裂いてやりたかつた……」

「そんなこと言わないでください。お互い、こうして無事に再会できただけでも嬉しいです。助けにきてくれて……。本当にありがとうございます」

「殿下……」

「えっと、感動してるところをちょっと悪いんですけど……。なんでジークがここにいるの？」

「ピュイ？」

「はは、ジークは殿下の護衛であると同時に、親衛隊の伝令係でもあるんだ。君たちのホテルにも手紙を届かせただろう？」

「あ……あの夜の！」

「やっぱりそうだったんですか。それでは、女王陛下の依頼をユリアさんが知っていたのも……」

「ああ、女王宮の陛下から直接、ジークを介して教えていただいた。だが、殿下がいたあの広間にはジークの侵入できる窓が無くてね。連絡できなくて本当に心配したよ」

「まったくもう……。驚かせてくれるじゃない。こら、ジーク。黙って手紙を置いていくなんてちょっと薄情じゃないの？」

「ピュイ……」

「ふふ……『ごめんよ』ですって」

「あはは、まあいいか。ところで、特務兵たちはもうほとんどやつつけたの？」

「離宮に詰めていた部隊はほとんど拘束することができた。しかし、グランセル城内にはまだ相当数が残っているはずだ」

「各地の王国軍も、いまだに情報部のコントロール下にある。下手をしたら、反乱軍としてこの場所を鎮圧されかねないわ」

「うわ……。そこまでは考えてなかったわね」

「そうですね……。クローゼだけでも、別の場所に避難させた方がいいかもしれません」

「……………」

クローディア姫は黙っている。

「ならば、帝国か共和国の大使館に保護を求めてはどうか？大使館内は治外法権……。簡単に手出しはできないからね」

「さっきの作戦で鹵獲した飛行艇で亡命する手もあるな。根本的な解決にはならんが、時間を稼ぐにはちょうどいい」

「そうだな……。どうお逃がしするべきか……」

「……………」

あの……。みなさん。この状況で、私が遊撃士の皆さんに依頼をすることは可能でしょうか？

クローゼが意外なことを言いだした。

「え……」

「人質救出のミッションは完了したから大丈夫だと思うよ。もちろん、依頼内容にもよるけどね」

「でしたら……。無理を承知でお願いします。王城の解放と、陛下の救出を手伝っていただけませんか？」

「で、殿下……」

「そっか……。そうよね。今度は女王様を助けないと！」

「正直言って、その話にはなるんじゃないかと思っただぜ。だが、姫殿下……。その依頼はかなりの難物だ」

「そうね……。ここにいる戦力を全員集めても正面から落とすのは不可能だわ」

「あの特務艇を使えば可能性はあると思いますが……。ただ、よほど上手い仕掛けが必要になりそうですね」

「……………」

私に考えがあります。皆さん、これを見て頂けますか？」

クローディア姫が一枚の古い地図を取り出した。

「これって……どこの地図？」
「王都の地下水路の内部構造を記した古文書です。これに、王城地下に通じる隠し水路の存在が記されています」

グランセル城

一方、グランセル城内では……

「ど、どういう事ですの！？《エルベ離宮》との連絡が途絶えてしまったなんて！」

カノーネ大尉がロランス少尉に問いただしている。

「親衛隊か遊撃士……。どちらかに落とされた可能性があると言ふことかな」

ロランス少尉が冷静に答えた。

「ぬ、ぬけぬけと……。連中を指揮していたのは少尉、あなたでしように！」

「これは面目ない。だが、済んでしまったことはとやかく言っても詮無きことだ。この上、陛下まで奪われぬよう城の守りを固めるべきだろうな」

「い、言われなくてもわかっていますわ」

そう言つて、カノーネ大尉は広間に集まっていた特務兵たちに号令をかけた。

「城門を完全封鎖！誰が来ても入れないように！以後は、空からの襲撃にのみ備えることにしなさい！」

「了解しました！」

「それと、各地の部隊に連絡してエルベ離宮に向かわせること！名目は、王族を騙ったテロリスト集団の鎮圧です！」

「イエス・マム！」

そう言つて、特務兵たちは早速行動に移った。

「ふふ、見事なお手並みだ」

「フン、当然でしょう。新参者のあなたとは違います。……閣下の留守はわたくしが絶対に守りますわ！」

第5章 王都療乱(38) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

クローディア姫からアリシア女王救出の依頼を受けたエステルたち
少数人数でどのように難攻不落といわれるグランセル城を解放する
のか!?

第5章 王都撻乱(39)

エルベ離宮 紋章の間 朝

エルベ離宮解放から一晩明けた翌朝、ユリア中尉がグランセル城の解放の手立てを説明し始めた。

「これより、グランセル城の解放と女王陛下の救出作戦を説明する。まずは、ヨシユア殿下以下、3名のチームが地下水路よりグランセル城地下へと侵入。親衛隊の詰所へと急行し、城門の開閉装置を起動する」

「了解しました」

「ま、でかい花火の点火役ってところだな」

「フフ……いずれにせよ最終幕の幕開けには違いない」

この作戦にはヨシユア、ジン、オリビエが任命された。

「城門が開くのと同時に親衛隊全員と、遊撃士4名が市街から城内へと突入。なるべく派手に戦闘を行い敵の動きを城内へと集中させる」

「ああ、任せてもらおう」

「よっしゃ、腕が鳴るぜえ！」

「そして最後に……。……殿下、やはり考え直して頂けませんか？」

ユリア中尉が心配そうに学生服に着替えたクローディア姫 クローゼを見た。

「ごめんなさい……。お祖母さまは私が助けたいんです。それに私は一応、飛行艇の操作ができますから……。どうか作戦に役立ててください」

「くっ……。こんな事なら、操縦方法などお教えするのではなかったか……」

ユリア中尉は今になってクローディア姫に余計な事を教えてしまったと悔やんだ。

「まあまあ、ユリアさん。クローゼのことならあたしたちに任せて

おいて」

「《銀閃》の名に賭けて必ずやお守りすることを誓うわ」

「わかった……どうかお願いする。城内に敵戦力が集中した直後、エステル殿以下3名のチームが特務飛行艇で空中庭園に強行着陸。しかる後、女王宮に突入してアリシア女王陛下をお助けする」

「了解ッ！」

これで、総勢19名でグランセル城を攻略することになった。

「作戦決行は正午の鐘と同時に　それまでに待機位置についでくれ。それでは各員、行動開始せよ！」

「イエス、ママ！」

エルベ離宮 前庭

「……ヨシユア、気を付けてよね。くれぐれも無理しちゃダメなんだから」

初めてヨシユアと別行動をとることになったエステルはヨシユアが心配そうだ。

「うん、気をつけるよ。だから、君の方もくれぐれも先走らないように。自分の力を過信しないでシエラさんたちと協力すること」

「うん……分かってる。なんと言っても、例の約束だってあるもんね！お互い、元気な姿でグランセル城で会いましょ！」

「うん……必ず！」

「ヨシユアさん。隠された水路にはどんな魔獣がいるか判りません。どうか、気を付けてくださいね」

「わかった。くれぐれも気を付けるよ」

「エステルのごことは心配しなさんな。あんたと今まで旅して色々で成長したみたいだからね。遊撃士としてだけじゃなくて女としても、みたいけど？」

シエラザードがちらっとエステルを見た。

「シエ、シエラ姉……」

「?????どういう事ですか?」

「ま、まだ判らなくていいの!」

エステルがヨシユアを止めた。

「やれやれ、この非常事態に何とも頼もしいガキどもだぜ」

「はは、まったくだな。さて……そろそろ俺たちは行くぞ」

「また会おう、仔猫ちゃんたち?」

「女神エイドスの加護を!」

そうして、ヨシユアたち3人は先に行ってしまった。

「……ヨシユア……」

「(ねえねえ、お姫さま……。やっぱりあの子たち旅先で何かあったのかしら?)」

シエラザードがそつとクローゼに耳打ちした。

「(……そうかもしれないね。2人とも、とても良い顔をしてらっしゃいましたから……。ちよっぴり羨やいましいかな……)」

王都グランセル 南街区

ヨシユアたちが王都グランセルに到着した。王都はすでに王国軍の一般兵にかわり、特務兵たちが巡回していた。

「……一般兵に替わって特務兵たちが巡回していますね」

「離宮を落とされて敵さんも必死なんだろうさ。しかし、何とも物々しい雰囲気だぜ」

「よし、こういう時こそボクのリユートで張りつめた空気を和ませ
て……」

オリビエがリユートを取り出そうとした。

「目立つことをしていると、またあの人飛んできますよ。確か、
ミユラーさんでしたっけ?」

「そ、そうだった……。2人とも、帝国大使館には絶対に近寄らな

いでくれたまえ！」

オリビエが必死に言った。

「はは、お互い大使館に寄ってるヒマは無さそうだな。準備を整えしだい、地下水路に降りるとしよう」

グランセル東街区 地下水路

「さてと……。例の隠し水路の場所を確認した方が良さそうだね」

「そうですね……。ちよつと待っていてください」

ヨシユアが地下水路の地図を広げた。

「今、俺達がいるのが右下の階段マークの所で……。中央の『』が付いている所が隠し水路の入口ってわけだな」

「はい……。まずは、この場所に行つてあたりの壁を調べてみましょう」

「このあたりが地図にある『』の場所ですね」

ヨシユアたちはそれらしき場所に来た。

「ふむ、見たところ何の仕掛けもなさそうだが……。さすがは王家の仕掛けだな」

「ねつちり、みつちりと調べてみるしかなさそうだねえ」

「……まずは僕が調べてみます」

そういつてヨシユアが調べ始めた。そして、数分後……。

「あつた……。これだ」

ヨシユアがレンガの一つを操作すると、壁が開いた。

「お見事」

「ふーん、大したものだ。こういう仕掛けを見つけるコツでもあるのかい？」

「コツというか……単なる慣れだと思います。自然と指先が探り当てるんです」

「自然とねえ……。ヨシユア君って、その昔、伝説の少年怪盗をしていたとか？活劇物に出てくるようなやつ」

「あのですね……」

「時間がない。とつとと行くとしようぜ。ここからが本番だからな。そうして、ヨシユアたちは隠し通路の攻略を始めた。」

地下水路 北区画

ヨシユアが扉の前で立ち止まった。扉の先が石の壁で塞がれていたのだ。

「おっと……。ひょっとしてここが終点かな？」

「ええ、さっきと同じ隠し扉のスイッチがあります」

「ふむ、だったら正午までここで待機した方が良さそうだな」

「ええ、そうしましょう」

「よし……。正午までここで待機するぞ。時間が来たら一気に突入する」

「やれやれ、今のうちに身体を休めておきましょうか」

ヨシユアたちは正午まで待機することにした。

王都グランセル 市街地の門前

「よし……。各員、そのまま待機。正午の鐘と同時に突入する」

ユリア中尉や遊撃士たちのチームが物陰に身をひそめていた。

エルベ周遊道 外れの池

「情報部の特務艇……。こんな形で乗るなんて」

エステルたちが特務艇を目の前にしていた。

「なんていうか……。やたらと趣味の悪い飛行艇ね。あの空賊艇とい勝負だわ」

「でも、かなりの機体性能スベックであることは間違いありません。こんな船を、情報部はどうやって調達したのか……」

「うーん、そういえば。あの《ゴスペル》といい色々謎が多いわね……」

「やあ、殿下。お待ちしていましたよ」

飛行艇から男性が降りてきた。

「ペイトンさん。どうもお久しぶりです」

「えっと……この人は？」

エステルがクローゼに尋ねた。

「ペイトンさんといって《アルセイユ》の整備をしている方です」

「といっても、中央工房から出向している技術要員ですけどね。《

アルセイユ》は試験飛行段階なので色々データを取る必要があるんです」

「へえ、そうなんだ。ルーアンで見た時はちゃんと飛んでいたけど

……」

「もちろん、通常飛行は可能ですけどね。新型の導力機関オーバルエンジンが開発が遅れて旧型を載せているだけで本来の性能が引き出せていないんです。ともかく、《アルセイユ》は情報部に奪われ、試験飛行も無期延期……。王都で途方に暮れていたところをユリアさんが呼んでくれたんです」

「なるほど……」

「ふふ……。よろしく願いますわね」

「ま、任せてください！一応、ロックは外して操縦できるようにしました。かなりの高機動なので操縦するときはお気をつけて」

「わかりました」

「それじゃあ、早速乗り込みましょ！」
エステルたちが飛行艇に乗り込もうとした時、
「……そうだ、皆さん。一応、皆さんのオーブメントを調整する道具を持ってきました。あと、種類は少ないですけど装備や道具なども用意しています」
「え、ほんと!？」
「あら、気が利くじゃない」
「とても助かります。ありがとうございます」
「こ、このくらいお安いご用です。用があれば声をかけてください」
エステルたちは最後の調整を行った。

「もう正午まであまり時間はありません。乗り込んでエンジンを起動しますか？」
「ええ、急ぎましょ」
「わかりました。……ペイトンさん。サポートをお願いします」
「了解しました。エンジンの調整は僕に任せて殿下は操縦に専念してください！」
「シエラ姉、いよいよね……」
「ええ……。難しいミッションだけど、基本は何も変わらないわ。迅速に……そして着実にね」
エステルたちは飛行艇に乗り込み、正午を待った。

第5章 王都療乱(39) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

グランセル城解放のため、各員が配置についた。次回、グランセル城解放作戦が幕を開ける！

第5章 王都撩乱(40)(前書き)

いよいよグランセル城を攻略開始!

第5章 王都撩乱(40)

王都グランセル 正午 リベール通信社

「ちっ……。始まつちまつたか！行くぞ、ドロシー！見晴らしのいい場所を探すんだ！」

ナイアルが世紀の大事件を記事にしようと必死だ。

「ま、待ってくださいよ！すぐに感光クーツをセットしちやいますから〜！」

ドロシーは慌ててカメラの調整をしている。

「おいおい、どうしたのかね！？3日ぶりに顔を見せたと思ったら……」

編集長がなにやら忙しそうにしているナイアル達に尋ねた。

「スクープです！《リベール通信》始まって以来のどでかいスクープなんですよ！」

グランセル城

ヨシユアたちが正午の鐘と同時にグランセル城に侵入した。

「城門の開閉装置は親衛隊の詰所にあります！南側の階段を登りましょう！」

「応！」

「フッ、行くとしようか！」

グランセル城 親衛隊詰所

「え……！」

「バカな、侵入者だと!？」

特務兵たちはいきなり現れたヨシユアたちに驚いた。大半の人員は市街地と空中庭園に配置されていたため、城内は比較的手薄のようだ。

「侵入された方は必ずそう言うんだよね」

「ま、気持ちは判らんでもないが」

「……行きます！」

ヨシユアたちが見張りたちと戦闘開始！

（戦闘？ 特務兵×4、軍用犬×2

7ターンで楽々終了。

「よし、一丁上がりだ」

「やれやれ、あっけない」

「今から城門の開閉装置を操作します！敵が来たら撃退してください！」

ヨシユアが城門の開閉装置を操作し始めた。

「おお、任せとけ！《不動のジン》の名に賭けて誰一人として中に入れん」

「フッ、今こそ天上の門が開く時……。最終楽章の始まりだ！」

グランセル城 城門前

「な、なんだ……？」

「おかしいな……。完全封鎖と聞いていたのに」

見張りの特務兵たちがいきなり開いた城門を不審に思っていた。

「なっ！？」

「馬鹿な……！」

その時、ユリア中尉率いる突撃隊がグランセル城になだれ込んできた。

グランセル城 空中庭園

「う、嘘ですわ……！どうして城門が勝手に……」

その様子をカノーネ大尉は信じられないとばかりに見ていた。

「た、大尉どの！いかがいたしましたしょう！？」

「このままでは敵に城内に入られてしまいます」

空中庭園に集められていた特務兵たちが取り乱していた。

「第1小队を残して全員、玄関広間に急ぎなさい！敵を城内に入れてはなりません！」

「ラ、ラジャー……！」

空中庭園にいた特務兵たちは玄関広間に急行した。

「くっ、何たる失態……。閣下が戻られる前に何としても撃退せねば……」

「た、大尉どの！」

「と、特務飛行艇が！」

控えていた特務兵2人が上空に気付いたようだ。

「しまった！そちらが本命か！？」

上空からエステルたちの乗った特務飛行艇が空中庭園に着陸した。

「エ、エステル・ブライト！？。それに……クローディア殿下！？」

「カノーネ大尉！またお邪魔するわよ！」

「お祖母さまを……解放していただきます！」

「な、舐めるなア、小娘ども！」

カノーネ大尉たちと戦闘開始！

「戦闘？ カノーネ大尉、特務兵×2

11ターンであえなく終了。最後はクローゼの一突きでした。

カノーネたちをボコボコにして気絶させたエステルたち。

「鬼気迫るといふか……。妙におっかない女だったわね。いったい何者なの？」

シエラザードがエステルに尋ねた。

「リシャル大佐の副官よ。典型的な雌ギツネって感じ」

エステルがムカツとしながら言った。

「なるほど、そんな感じだわ。さてと……。目指すは女王宮ね！」

「はい、急ぎましょう！」

女王宮 入口前

「いたぞ！」

「こつちだ！」

特務兵たちがやってきた。

「わっ、また来た！」

「フン、しゃらくさい！」

「戦闘？ 特務兵×3、軍用犬×2

14ターンで返り討ち。

「き、来たぞ！」

「ここは通さん！」

入口の見張りが武器を構えた。

「でも……通らせてもらいます！」

「邪魔したらブツ飛ばすわよ！」

〈戦闘？ 特務兵×2、軍用犬×2、重装軍用犬×2
21ターンでブツ飛ばしちゃいました。

女王宮 玄関

「は、反逆者ども！のこのこと来おつたな！？私を新たなる国王と知つての狼藉か！？」

デュナン公爵が護衛に守られながら言った。

「冗談は髪型だけにしなさいよ。あんた、まだ国王になったわけじゃないでしょ」

「な、なぬう！？」

「デュナン公爵閣下ですね。私たちは遊撃士協会の者です。クローディア殿下の依頼で女王陛下の救出に来ました。大人しくそこを通してくれるとこちらも助かるんですけど」

「ク、クローディアだと！？あの小娘……余計なことをしおつて！」

「デュナン小父様……。もう、終わりにしてください。小父様はリシャール大佐に利用されていただけなんです」

「な、何だそなたは……。……………」

デュナン公爵がクローゼを見た。

「ク、ク、ク、クローディアではないか！」

気付くの遅ッ！

「なんだその髪は！？その恰好は！？」

「やっと気付いたのか……。こりゃ、ルーアンで会った時も気付い

てなかったわけだわ」

「よく判らないけど、ずいぶんと抜けた人みたいね」

「あの、黙っていた私が悪かったんだと思います……」

「こ、この私をよくもたばかってくれたな！これだから女という生き物は信用がおけんだ！小狡すずく、狭量で、ささいな事ですぐ目くじらを立てて……。そんな下らぬ連中に王冠を渡してなるものか！」

「……………」

「……………」

「……………」

エステルたちはデュナン公爵を無言のまま睨んだ。

「……え……その……………」

「か、閣下……。今のはマズイのでは……………」

「あ、謝った方がいいかと……………」

特務兵たちがサポートしたが、

「ふーん……下らない連中か」

「いやはや、見直したわ。このご時世に大した度胸がある発言ね」

「ご、ごめんなさい小父様。今のはちょっと……弁護できそうにありません」

時すでに遅しだった。

〔戦闘？ デュナン公爵、特務兵×2、重装特務兵×1〕

エステルたちの怒りが炸裂し、9ターンで終了。デュナン公爵は見せしめのために生かしておきました。

「はい、一丁上がりと！さーて、お次は公爵さんの番かしら？」

エステルたちが次々と倒していく様を見て、公爵が一步下がった。

「女ごときが振るう鞭の味、味わってもらおうかしらねえ？」

「ひ、ひえええええ……。寄るな、寄らないでくれええ！」

「あ、あの……。そのあたりで許してあげては……」
「くっ、こうなったら陛下を盾にするしか……。……ええい、ままよ！」

デュナン公爵が振り返って、走り出した時、階段に顔を思いつきりぶつけてしまった。

「ぎゃうっ……」

そして、頭の上に小鳥が出現……。

「あちゃあ……。ちよつと脅しすぎたかも」

「まあ、邪魔したのは事実だし、いい薬になったんじゃない？」

「はい……。不幸な事故だと思います。でも、気絶した小父様をこのままにしておくわけにも……」

「……こ、公爵閣下!？」

外から執事フィリップが慌てて入ってきた。

「あ、フィリップさん！」

「エステル様……。それにクローディア殿下……。この度は、我が主が迷惑をおかけして申しわけありません！全ては、閣下をお育てしたわたくしの不徳の致すところ……。どうか、これ以上の罰はわたくしめにお与えください！」

執事フィリップは深々と頭を下げた。

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

「フィリップさん……。どうか頭をお上げください。私たちは、お祖母さまを……。陛下をお助けしに來ただけです。もとより、小父様に何もするつもりはありません。どうか、私の部屋で小父様の手当てをしてあげてください」

「で、殿下……」

「実際、大した傷はないわ。ぶつかったショックで気絶しているだけだから大丈夫」

「み、皆様……。本当にありがとうございます。このご恩、決して忘れませんぞ！」

そう言って執事フィリップはデュナン公爵を運んで行った。

女王宮　アリシア女王の部屋

アリシア女王の部屋には誰もいなかった。

「あれ、誰もいない……………」

「奥のテラスかもしれません。急ぎましょう！」

テラス

「お祖母さま、大丈夫ですか？」

「助けに来ました、女王様」

「クローディア…………。それにエステルさんも…………」

「ようやく来たか…………。待ちくたびれてしまったぞ」

奥から現れたのは、ロランス少尉だった。

「ロ、ロランス少尉！どうしてこんな所に…………」

「フフ…………。私の任務は女王陛下の護衛だ。ここにいても不思議ではあるまい？」

「ふ、ふざけないでよね！いくらあんたが腕が立ってもこっちは3人もいるんだから！」

「なに、こいつ…………。ずいぶん腕が立ちそうね。いったい何者なの？」

シエラザードが尋ねた。

「情報部、特務部隊隊長。ロランス・ベルガー少尉！もと猟兵あがりで大佐にスカウトされた男よ！」

「ほう、そこまで調べていたか。さすがはS級遊撃士、カシウス・ブライトの娘だ」

「…………」

「外部には公表されていない先生のランクを知っているなんて…………」。

こいつ、タダ者じゃないわね」

「フフ……。お前のことも知っているぞ。ランクC、《銀閃》シエラザード・ハーヴェイ。近々、ランクBに昇格予定らしいな」
「ロランス少尉は全てを知っているらしい。」

「あ、あの……。お祖母さまを返してください。もしあなたが大佐に雇われただけなのならもう戦う理由などないはずですよ」

「この世を動かすのは目に見えている物だけではない。クオーツ盤だけを見ていては歯車の動きが判らぬように……」

「え……」

「心せよ、クローディア姫。国家というのは、巨大で複雑なオーブメントと同じだ。人々というクオーツから力を引き出すあまたの組織・制度という歯車……。それを包む国土というフレーム……。その有様を把握できなければあなたに女王としての資格はない」

「!?!」

クローゼは何を言いたいのかわからない。

「面白い喩えたとをするものですね。ですが……。確かにその通りなのかも知れませんが。まさか、この場で国家論を聞くとは思いませんでしたけれど……」

「フ……。これは失礼した。陛下には無用の説法でしたな」

「な、なんかよく判らないけど……。要するに、女王様を解放する気はないってわけね」

「だとしたら……。どうする?」

「決まってる……。力づくでも返してもらおうわ!」

「そうね……。ここまで来て後には引けない」

「あなたからは敵意は感じられませんけど……。お祖母さまを取り戻すためなら剣を向けさせていただきます!」

「フフ、いいだろう……。ならば、こちらも少し本気を出させてもらおうぞ」

「え……。!?!」

「 ロランス少尉が仮面を取った。」
「 ……」
「 ……銀髪…」
「 いや……アッシュブロンドね……。どうやら……北方の生まれみたいだわ」
「 フフ……。北であるのは間違いない。まあ、ここからそれほど遠くはないがな」
「 え……」
「 お前たちが女であるのが手加減するつもりはない……。 ……行くぞ」
「 ロランス少尉がかかってきた。」

〔戦闘？〕 ロランス少尉

《1ターン目》

エステル 掛け声 エステル・シエラザード・クローゼ STR
+20%

《2ターン目》

ロランス少尉 通常攻撃 エステル0ダメージ

《3ターン目》

クローゼ アーツ クロックアップ改 待機

《4ターン目》

シエラザード 通常攻撃 ロランス少尉 603ダメージ

《5ターン目》

クローゼ アーツ クロックアップ改 発動 クローゼ SP
D +50%

《6ターン目》

ロランス少尉 アーツ 待機

《7ターン目》

エステル 金剛撃 ロランス少尉 762ダメージ アーツ解除

≪8ターン目≫
 クローゼ アーツ クロツクアップ改 待機
 ≪9ターン目≫
 シェラザード 通常攻撃 ロランス少尉 600ダメージ
 ≪10ターン目≫
 クローゼ アーツ クロツクアップ改 発動 エステル S P
 D +50%
 ≪11ターン目≫
 ロランス少尉 アーツ 待機
 ≪12ターン目≫
 ロランス少尉 アーツ アンチセプト零 (封魔効果)
 エステル・シェラザード・クローゼ 無効
 ≪13ターン目≫
 クローゼ アーツ クロツクアップ改 待機
 ≪14ターン目≫
 クローゼ アーツ クロツクアップ改 発動 シェラザード
 SPD +50%
 ≪15ターン目≫
 エステル 通常攻撃 ロランス少尉 684ダメージ
 ≪16ターン目≫
 シェラザード 通常攻撃 ロランス少尉 666ダメージ
 ≪17ターン目≫
 ロランス少尉 アーツ 待機
 ≪18ターン目≫
 クローゼ ケンプファー ロランス少尉 597ダメージ S
 TR・DEF -50%
 ≪19ターン目≫
 エステル Sクラフト 桜花無双撃 ロランス少尉 3651
 ダメージ
 ロランス少尉 戦闘不能

「驚いたな……。まさかここまでやるとは」

ロランス少尉が膝をつきながら言った。

「はあはあ……。あ、あんた！決勝で手を抜いてたわね！？あの時とはケタ違いじゃない！」

「こ、こんな化物によく勝てたわね……」

「し、信じられません……」

シエラザードとクローゼもかなり疲弊ひげいしている。

「エステル・ブライト……。侮ひつていたことは詫わびよう。お前ならあるいは……父親の域まで達するかもしれん」

「え……」

「だが……今はまだまだだ」

ロランス少尉がいきなり立ち上がると、エステルたちに剣を振り下ろした。どうやら、まだまだ余力が残っているようだ。

「きゃああ……！」

「ぐっ……」

「きゃあっ！」

エステルたちは一撃で切り伏せられた。

「クローディア！エステルさん！」

アリシア女王がエステルたちの元に近寄ってきた。

「陛下、それ以上は動かないでいただこう。死ぬようなケガではない」

「……。その瞳……。なんて深い色をしているのかしら。まだ若いのに……。たいそう苦労してきたようですね」

「……。女王よ、あなたに俺を哀れむ資格などない。《ハーメル》の名を知っているあなたには……」

「！？」

アリシア女王はその言葉に驚愕した。

「さてと、そろそろ時間だ。お望み通り、女王陛下は返してやろう」

「へ……!?!」

「大佐を止めなければ地下に急いだ方がよかるう。もはや手遅れだろうが……。無用の被害が広がるのを食い止められるかもしれん」

「地下に……。まさか、あの場所から地下に降りたという事ですか?」

「フ……。今のあなたならばその意味が嫌というほど判るはず。彼らを導いてやるといいだろう。……。それでは、さらばだ」

ロランス少尉はそう言い残し、数百メートルもあるテラスから飛び降りた。

「な!?!」

「しよ、正気!?!」

エステルが飛び降りて下を見たが、ロランス少尉はどこにもいなかった。

「い、いない……。池に落ちたのかな……。?」

「それにしても……。湖面が波立っていないわ……。あの男、いったい……。」

「お祖母さま……。お怪我はありませんか!?!」

クローゼがアリシア女王に走った。

「大丈夫よ、クローディア。乱暴なことはされていません。それよりも……。」

「エステル!」

部屋の方からヨシユアの声が聞こえてきた。それと同時に、ユリア中尉やジンたちも来た。

「ヨシユア!?!よかった、無事だったみたいね!」

「エステルの方こそ……。リシャール大佐やロランス少尉が城内にいなかったから心配だったんだ」

「あの赤ヘルムならさっきまでここにいたけど……。」

「え……。!?!」

「その手すりを越えて飛び降りて逃げていったわ。とんでもない化物ね、あれは……。」

シエラザードはため息しか出ないようだ。

「そ、そうだったんですか……。本当によかった……。君が無事でい
てくれて……」

「ヨシユア……」

「陛下……。よくぞご無事で……」

「ユリア中尉……。また会えてうれしいわ。それに皆さんも……。本当
に感謝の言葉が尽きません」

「フツ、女王陛下。過分なお言葉、ありがたき幸せ」

「お役に立てたならば幸いです。ですが、まだこれで終わりではな
さそうですな」

「城内の特務兵は鎮圧しましたがよくない報せが届いています。各
地の正規軍部隊が王都を目指しているとのこと……。どうやら、情
報部によってコントロールされているようです」

「そうですか……」

「失礼ですが、あまり時間がありません。どうか今すぐ飛行艇でこ
こから脱出なさってください」

「いえ……。それはできません。それよりも……。どうやら大変なこと
になりました。何としても、リシャール大佐を止めなくてはなりま
せん」

「ど、どういう事ですか？」

「昨夜、大佐と話をしてみてもようやく真の目的が判りました」

大佐は国を乗っ取るのが目的ではなかったようだ。

「どうやら彼は、《輝く環》^{オーリオル}を手に入れるつもりのようなのです」

「《輝く環》^{オーリオル}……。そ、それってどこかで聞いたことがあるような
……」

「古代人が女神から授かった《七の至宝（セプト・テリロン）》の
ひとつ……。全てを支配する力を持つといわれる伝説のアーティフ
アクトのことですね」

「ああ、アルバ教授が言ってた……。でもそれって、教会に伝わっ
ているただのおとぎ話なんでしょう？」

「……………」

アリシア女王は何も言わず黙っている。

「え……」

「ふむ、存在するのですね？このリベル王国のどこかに」

「古き王家の伝承にはこうあります。『輝く環、いつしか災いとなり人の子らの魂を煉獄へと繋がん。我ら、人として生きるがために昏き闇の狭間にこれを封じん……』」

「『人の子らの魂を煉獄へと繋がん』……。なんとも……不気味な言葉ですな」

「この言葉は、代々の国王への戒めとして伝えられてきました。おそらく《輝く環》と呼ばれる何かはその危険性ゆえ、王家の始祖によつて封印されたのだと推測できます。そして、王都の地下から検出された巨大な導力反応……。この2つを結びつけて考えたら……」

「王都の地下に《輝く環》が封印されている……。そう考えるのが自然でしょうね」

「ええ……。大佐もそう考えたのでしよう。《輝く環》がどういう物なのかは伝承にも残っていませんが……。もし、蘇らせてしまつたら大変なことが起きるかもしれません。それこそ過去に起きたという伝説の《大崩壊》に匹敵する……」

「そ、そんな……」

「参ったわね、こりゃあ……」

「あ、あの女王様！ロランス少尉は『地下に行け』と言つてましたけど……。あれってどういう意味なんでしょう？」

エステルが先ほどのロランス少尉の言葉の意味を尋ねた。

「このグランセル城には不思議な部屋があるので……。特に何も保管されていないのに昔から立入禁止とされた場所……」

「あ……」

「宝物庫のことですか！？」

クローゼとユリア中尉は知っていたようだ。そして、それを聞いて、一同は宝物庫へと向かった。

第5章 王都撩乱(40) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

リシャール大佐の真の目的が判明した！エステルたちはそれを確かめるため宝物庫へ向かう！

第5章 王都撻乱（41）

宝物庫前

「間違いありません……。つい最近、ここを頻繁に出入りしたような跡があります」

ヨシユアが宝物庫の扉を調べて言った。

「……それだけじゃないわ。かなり重量のある物が運び込まれたような跡もある」

「おそらく、予備の鍵を使って中で何かをしていたのでしょう。調べてみる必要がありますね」

アリシア女王は鍵を取り出し、宝物庫を開けた」

宝物庫

「こ、こんな場所にエレベーターが……。こんな物、無かったはずなのに！」

ユリア中尉が目を疑った。そこにはエレベーターが設置され、工事された跡があった。

「わざわざ大佐が建造させたということか……。とすると、このエレベーターで《輝く環》が封じられた場所に降りることができわけですな」

「ええ……。ひょっとしたら、これこそが今回のクーデターを起こした真の目的だったのかもしれない。王城を占領でもしない限り、こんなものを造るのは不可能ですから」

「ま、まさかそんな……」

「ふむ、ありうるかもしれない。どこの国でもそうだが、王権が守る聖域とは不可侵のものだ。それを破るとなれば、よほど思い切った強行手段に出る必要があるだろう」

「いずれにせよ、これを使って地下に降りる必要がありますね。まずは動かしてみましよう」

ヨシユアはエレベーターのパネルを調べ始めた。

「!!!」

ヨシユアが何かに驚いたようだ。

「どうしたの、ヨシユア？」

「これは……導力的な方法でロックされている。特殊な結晶回路クォーツを組み込んだ鍵を使わないと動かせないみたいだ」

「あ、あんですって!!?」

「そんな、ここまで来て……」

「拘束してある特務兵を締め上げて聞いてやります!どこかに鍵があるかもしれない!」

結構過激なユリア中尉。

「ええ……そうした方がよさそうですね」

「いや、それには及びませんぞ」

全員が後ろを振り返ると、そこにラッセル博士がいた。

「え……!!」

「まさか……!」

「まあ……ラッセル博士!?!」

「アリシア様。ご無沙汰しておりましたな。エステルとヨシユアも元気そうで何よりじゃ」

「ちよ、ちよっと……。なんで博士がここにいるのよ!」

「ツアイスで、情報部に追われていたんじゃ……」

「それに、博士がここに来ているということは……」

「お、おじいちゃあくん。どこに行っちゃったのお!?!」

「こら、チヨロチヨロと動き回ってるんじゃないやねえよ。爺さんもそうだが、落ち着きのない一家だな」

「だ、だってアガットさん……。あ……!」

外が騒がしいと思ったら、ティータとアガットが入ってきた。

「ティータ!?!」

「やっぱり……」

「エステルお姉ちゃん！それにヨシユアお兄ちゃん！
ティータがエステルにしがみついていた。」

「わわ、ティータ……」

「よ、よかったあ。また会うことができてる。ギルドで聞いたらお姉ちゃんたちがお城で戦っているって聞いて。うう、無事で良かったよう〜！」

半泣きのティータ。

「ティータ……」

「ありがとう……。心配してくれたみたいだね。アガットさんも……よくご無事でしたね。どうして王都にいるんですか？」

「いや、ひよんなところで王都行きの貨物船を見つけてな。灯台下暗しを狙って来てみたら騒ぎが起こってるじゃねえか。で、エルナに事情を聞いてわざわざ来てみたってまけた。おっと、ヤツからの預り物もあるぜ」

アガットは依頼の成功報酬をエステルに渡した。

「い、いいのかな……。ちゃんと報告してないのに」

「親衛隊の伝令から大体の事は聞いたみたいだぜ。しかし、こんな所でガン首揃えてどうしたんだよ？てつきり残りの特務兵どもをブチのめせるかと思ってきたんだが。ん、あんたは……」

アガットがクローゼの方を見た。

「お久しぶりです、アガットさん。灯台ではありがとうございます
た」

「たしか、クローゼと言ったな？どうして、あんたみたいな学生がこんな場所にいやがるんだ？」

「どうやら、孫娘がお世話になったようですね。わたくしからもお礼を言わせてください」

「ああ、気にすんなって。単なる仕事のついでだからな。ところで婆さんはこの城の関係者か何かかい？」

アガットはアリシア女王のことを知らないようだ。

「ぶ、無礼者！この方をどなたと心得る！リベール国主たるアリスア女王陛下であるぞ！」

ユリア中尉がキレた。

「へっ……。そ、そういえばどっかで見たような気が……」

「やれやれ。相変わらず未熟者じやのう」

「んだとう！」

アガットがラッセル博士に未熟と言われ、つつかかった。

「じよ、女王さま！？そ、それじゃあ……こっちのお姉ちゃんは……」

「女王陛下の孫娘のクローディア姫殿下だよ。僕たちはクローゼって呼んでるけどね」

「クローゼ。この子が博士の孫のティータよ。あたしたちの妹同然の子なの」

「そうですか……。初めまして、ティータちゃん。私のことはクローゼって呼んでくれると嬉しいですよ」

「は、はい……。ク、クローゼさん……」

「あらやだ。この子、なんか可愛いわねえ。あたしはシエラザード。エステルとヨシユアの先輩よ。シエラって呼んでちょうだい」

「は、はい、シエラさん……」

「それじゃあボクは『オリビエおにいちゃん』って……」

「あんたはやめい、あんたは」

「やたらとにぎやかになった宝物庫……」。

「それはともかく……。そのエレベーターが動かなくて困っておるようじゃな。いったいどういう事情なのかね？」

「実は……」

エステルたちはリシャル大佐の目的と《輝く環》オリオールについて説明した。

「おいおい、マジかよ……。シャレになってねえぞ」

「そんなものがこの下に埋まってるなんて……」

「ぶむ……。やはりわしが恐れていた通りじゃったか。このエレベー

ターを使えばその場所に降りられるようじゃな？」

「ええ、ですが特殊な鍵でロックされてしまっています。クォーツを使ったものらしくて……」

「ほうほう、あれか。ちよつと見せてみるがええ」

ラッセル博士がエレベーターを調べ始めた。

「これはわしが開発したカードキーを応用したものじゃな。同一の結晶回路を持つカードを差し込まないとロックは解除されん」

ラッセル博士が小型の装置を取り出してケーブルをカードスロットに差し込んだ。

「じゃが、この手の初期型にはプロテクトが実装されておらん。こうして、導力圧を調整して回路に負荷を流し込めば……」

ラッセル博士が回路に負荷をかけるとエレベーターの電源が入った。

「やった、さすが博士！」

「……お見せしました」

「ふふ……さすがですね。それではさっそく地下に降りてみるとうましようか」

「た、大変です！」

アリシア女王たちが地下に降りようとした時、親衛隊の1人が駆け込んできた。

「なんだ、どうした!？」

「王都の大門に正規軍の一個師団が到着!情報部の士官によって率いられている模様です!」

「なに、もう来たのか!？」

「さらに湖上から3隻の軍用警備艇が接近中!い、いかがいたしましようか!？」

「ええい、この大変な時に!」

「た、大変です!」

「……どうやら、わたくしが説得に出た方がよさそうですね」

「お、お祖母さま……!？」

「屋上のテラスに出て到着した部隊に声をかけます。ユリア中尉、

用意してください」

「で、ですが……万が一攻撃されてしまったら！」

「わたくしは彼らを信じます。誤解があったとはいえ、彼らもリベールの民……。わたくしの姿を見て、声を聞いてなぜ攻撃することがありましよう」

「……陛下……」

「エステルさん、皆さん……。こんな事を頼むのは非常に心苦しいのですが……」

「女王様……。それ以上は仰らないでください。リシャール大佐の野望はあたしたちが食い止めます！」

「どうかお任せください」

エステルたちは地下に降りて行った。

第5章 王都撩乱(41) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

リシャール大佐の野望を砕くため、地下へと降り立つエステルたち。
ついに、最終決戦の幕が開ける！

第5章 王都撩乱(42) (前書き)

王城の地下

封印区画に降りたエステルたち。

第5章 王都撻乱(42)

封印区画 第1層

「な、なによここ……」

「古代ゼムリア文明の遺跡……」

エステルたちは自分たちの目を疑った。王都の地下にこのような巨大な場所が存在するとは思ってもみなかったからだ。

「相当古い遺跡のようじゃが死んではおらんようじゃの……。《四輪の塔》などと違って、装置が稼働しておるようじゃ」

「装置が動いてるだけじゃねえ。やばそうな化物がうようよいる気配がするぜ」

「ふ、ふええ……」

「このあたりの建材は最近持ってこられたものね。リシャール大佐の指示で建造されたということか……」

「まあ、間違いないだろうね。こんな地下深くで工事とはご苦労様なことだ」

「でも、思っていた以上に巨大な遺跡のようですね……。効率的に探索しないとすぐに迷ってしまいそうです」

「ふむ……。ここは、探索班と待機班に分かれた方がいいかもしれんな」

ジンが提案した。

「え、どういうこと？」

「つまり、安全な場所を拠点としてそこを足がかりにするんですね？」

「まあ、そういうことだ。探索班がルートを発見する間、待機班は拠点を守りながらいざという時の交替に備える。ルートが見つかったら全員で移動して新たな拠点を作る」

「なるほど……合理的だな」

「ならば、当面はこの場所を拠点にした方がよさそうじゃの。エス

テル、ヨシユア。さっそく探索班を決めるがええ」

「ええ、あたしたち!？」

「ですが……」

「今回の事件に一番深く関わつとるのはお前さんたちじゃ。みなも異存はないじやろう」

「ええ、あたしは賛成よ」

「もちろん私もです」

「わ、わたしもお姉ちゃんが決めるなら……」

「チツ、仕方ねえな。お前らの指示に従ってやるよ」

「フツ……信じているよ。ボクを選んでくれることをね」

「ま、そういうことだ。ちゃっっちゃと選んじまいな」

全員が賛成のようだ。

「ヨシユア……どうしよう?」

「深く考えることはないよ。いざとなつたら、拠点に戻ってメンバーを交替すればいいからね」

「そっか、それじゃあ……」

エステルはジンとアガットを指名した。

「ジークを、エステルさんたちに付いて行かせるようにします。拠点になりそうな場所を見つけたら彼をこちらに向かわせてください。

エステルさんたちがいる場所まで案内してもらいますから」

「ピユイ」

「なるほど、わざわざ戻らなくても済みそうだね」

「頼むわよ、ジーク!」

「ピユイ!」

「それでは探索、よろしく頼んだぞ」

エステルたちは探索を開始した。

「やはりノコノコとやって来ましたわね……」

目の前に立ち塞がったのは空中庭園で気絶させたはずのカノーネ大尉だった。

「カノーネ大尉……」

「な、なんであんたがこんなところにいるのよ!? 空中庭園で気絶してたんじゃない……」

「フン、このわたくしがあの程度のことです。倒れるものですか。どうやら、グランセル城は奪われてしまったようですけど……。閣下が《輝く環》を手に入ればいつでも取り戻せるというものです」

「雌ギツネが……。ずいぶんいい気なもんだな。せいぜい夢でも見ているや」

アガットが挑発した。

「ええい、お黙りなさい! とにかく、リシャル大佐の邪魔だけはさせませんわよ! いでよ、人形ども!」

カノーネ大尉の上から巨大な機械人形オーバーマセットが降ってきた。

「わわっ……!」

「古代の機械を操ったのか……」

「フフ。我々の力を見くびってもらっては困ります。ここの調査を開始してからすでに膨大なデータを集めたわ。このように、強力な人形兵器オーバーマセットを操ることも不可能ではありません」

「おいおい、命知らずだな……」

「フン、何とでもお言いなさい。それでは……行きますわよ!」
カノーネ大尉と2度目の戦闘開始!

「こ、今度は完全に気絶してると思うんだけど……」

「またカノーネ大尉をボコボコにしたエステルたち。」

「うん……。しばらくは動けないと思う。それよりも……彼女がここを守っていたということはこっちのルートで正しいみたいだね」

「あ、確かに……。それじゃあジークにお使いしてもらおうかな。」

「おい、ジーク！」
エステルがジークを呼び、仲間を呼び寄せた。

「先ほど検出した導力反応から遺跡の規模を割り出してみたが……。どうやらこのあたりが遺跡の中間地点のようじゃの」

ラッセル博士が導力判定装置を見て言った。

エステルたちは数時間探索したが、それでもまだ半分だった。

「ふう、やっと半分かあ。急がなくていいのになんだか焦るわね……」

「でも、ここで焦ったらかえって迷うかもしれない。無理せず確実に進んでいこう」

「うむ……。ここが踏ん張りどころじゃ。いつ大佐と戦ってもいいように万全の準備をしていくがいい」

エステルたちはしばらく休んでから探索を再開した。

封印区画 最下層

ついに、最下層に降り立ったエステルたち。

「ここって……。何だか今までの場所と雰囲気が違う気がする……」
エステルが今までは違った雰囲気以身震いした。

「確かに……。息苦しい感じがするぜ」

「たぶんここが終点だ。万全の準備をしてから中に入ったほうがよさそうだね」

エステルたちは覚悟を決めて中に入った。

第5章 王都撩乱(42) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告 <

封印区画・最下層に辿り着いたエステルたち。リシャル大佐との野望を止めるため、王国の運命を賭けてエステルたちが最終決戦に臨む！

第5章 王都撩乱(43)

封印区画 最終層 最深部

そこには思った通り、リシャル大佐の姿があった。そして、リシャル大佐の後ろには何か分からないが古代の装置があった。そして、その装置に《ゴスペル》が組み込まれていた。

「……やはり来たか。何となく来るのではないかと思ったよ」

「リシャル大佐……。あたしたち、女王様に頼まれてあなたの計画を止めに来たわ」

「まだ《ゴスペル》は稼働させていないみたいですね。今なら……まだ間に合います」

ヨシユアはリシャル大佐に止めるよう言った。

「ふふ、それはできんよ」

「な、なんでよ！？そもそも《輝く環》(オーリオール)って何！？そんなもの手に入れてどうしようっていのよ!？」

「かつて古代人は天より授かった《七の至宝》(セプト・テリオン)の力を借りて海と大地と天空を支配したという。その至宝のひとつが《輝く環》だ。もし、それが本当に実在していたのだとしたら……。国家にとって、それがどういいう意味を持つか君たちに分かるかね?」

「こ、国家にとって……」

「周辺諸国に対抗する強力な武器を手に入れる……。つまり、そういう事だな」

ジンが答えた。

「その通り……。知つての通り、このリベルは周辺諸国に国力で劣っている。人口はカルバードの5分の1程度。兵力に至っては、エレボニアのわずか8分の1にしかすぎない。唯一誇れる技術力の優位はいつまでも保てるわけではない。二度と侵略を受けないためにも我々には決定的な力が必要なのだよ」

「だ、だからといってそんな古代の代物をアテにしなくてもいいじゃないの！10年前の戦争だって何とかなっただんでしょ！？」

「あの侵略を撃退できたのはカシウス・ブライトがいたからだ。だが、彼は軍を辞めた。国を守る英雄は去ったのだ。そして、奇跡というものは女神と彼女に愛された英雄にしか起こすことはできない

「……………」

「だから私は、情報部を作った。諜報戦で他国に一步先んじることこそそうだが……あらゆる情報網を駆使してリベールに決定的な力を与えられるものを探したのだよ。リベールが苦境に陥った時にふたび奇跡を起こせるようにね」

「それって……奇跡なのかな？」

エステルが不意にリシャル大佐に言った。

「なに……………？」

「えっと、あたしたちは遊撃士でみんなの大切なものを守るのがお仕事だけど……。でも、守るといってもただ一方的に守るだけじゃない。どちらかというところ、みんなの守りたいという気持ちを一緒に支えてあげるといふ感じなの」

「それが……どうしたのかね？」

「父さんだって、別に1人で帝国軍をやっつけたわけじゃない。色々な人と助け合いながら必死に国を守ろうとしたんでしょ？みんながお互いを支え合ったから結果的に、戦争は終わってくれた。大佐だってその1人だったのよね？」

「……………」

「今、あたしたちがここにいる事だって同じだと思う。大佐の陰謀を知った時はかなり途方に暮れちゃったけど……。それでも、色々な人に助けられながらここまでたどり着くことができたわ。それだって、奇跡だと思わない？」

「……………」

「でも……それは奇跡でも何でもなくて……。あたしたちが普通に

持っている可能性なんじゃないかって思うの。もし、これから先、戦争みたいなことが起こっても……。みんながお互いに支え合えれば何でも切り抜けられる気がする。わけの分らない古代の力よりそっちの方が確実よ、絶対に！」

「エステル……」

「へっ、ナマ言いやがって」

「はは、さすがは旦那の娘だぜ」

「フフ……強いな、君は。だが皆が皆、君のように強くなれるわけではないのだよ。目の前にある強大な力……。その誘惑に抗あひかうことは難しい。そして私は、この時のために今まで周到に準備を進めてきた。今更、どうして引き返せようか」

「……。ひとつ、教えてください。どうして大佐は……この場所を知っていたのですか？」

「なに……？」

「女王陛下すら存在を知らなかった禁断の力が眠っている古代遺跡……。ましてや、宝物庫から真下にエレベーターを建造すればその最上層にたどり着けるなんて……。あなたの情報網を駆使したって知りえるとは思えないんです」

「それは……」

「そして、その《ゴスペル》……。ツアイスの中央工房をもしのぐ技術力で作られた謎の導力器……。あなたは、それをいつたいてどこで手に入れたんですか？」

「……答える義務はないな」

「違う……。！あなたは、僕の質問に答えることができないんだ！」

「……！！」

「ど、どういうこと……？」

「ただあなたは、この場所に《輝く環》という強大な遺物が眠っていると確信していた。そして、その黒いオーブメントを使えば手に入ると思い込んでいたんだ。だけど、そう考えるようになったきっかけがどうしても思い出せない。そうなんでしょう!？」

「……………」
「そ、それって……………」

「ダルモア市長みたいに記憶をいじられた可能性があるってことか……………」

「それがどうしたというのだ！強大な力の実在はこの地下遺跡が証明している！人形兵器オーバーマセットにしても現代の技術では製作不可能だ！ならば私は…………私が選んだ道を征くだけだ！」

リシャール大佐の上から人形兵器オーバーマセットが2体降りてきて、古代の装置に組み込まれた《ゴスペル》から黒い光が溢れ出した！

「あ……………」

「君たちの言葉が真実ならば私を退けてみるがいい…………。それが叶わないのであれば所詮は、青臭い理想にすぎん」

そして、リシャール大佐が腰に据えた剣に手を置いた。

「とくと見せてやろう！《剣聖》より受け継ぎし技を！」

「言ってくれるじゃない！」

「だったらこちらも遠慮なく行かせてもらいます！」

そして、最終決戦が始まった。

〈最終戦闘？ リシャール大佐、フォトンジャツジ×2

《1ターン目》

エステル 掛け声 エステル・ヨシユア・ジン・アガット S

TR +20%

《2ターン目》

ジン 龍神功 ジン STR・DEF +30%

《3ターン目》

アガット スパイラルエッジ フォトンジャツジ1 903ダメージ

	フォトンジャツジ	AT	DELAY
《4ターン目》			
ヨシユア	アーツ	クロックアップ改	待機
《5ターン目》			
リシャール大佐	移動		
《6ターン目》			
フォトンジャツジ2	AAキャンセル		ヨシユア
0ダメージ			
ジ	アーツ解除		
《7ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	待機	
《8ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	発動	ヨシユア
0%			SPD +5
《9ターン目》			
リシャール大佐	通常攻撃	アガット	72ダメージ
《10ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	待機	
《11ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	発動	ジン
《12ターン目》			SPD +50%
エステル	通常攻撃	フォトンジャツジ1	525ダメージ
《13ターン目》			
ジン	通常攻撃	フォトンジャツジ1	MISS
《14ターン目》			
フォトンジャツジ2	ドンキーミサイル	エステル・ヨシユア	
0ダメージ			
《15ターン目》			
ヨシユア	双連撃	フォトンジャツジ1	612+618ダメージ
《16ターン目》			

フォトンジャツジ1 ドンキーミサイル エステル 0ダメージ
 ≪17ターン目≫
 アガット スパイラルエッジ フォトンジャツジ1 810ダメージ
 フォトンジャツジ1 AT DELAY
 ≪18ターン目≫
 リシャール大佐 光鬼斬 ヨシユア 0ダメージ
 ≪19ターン目≫
 ジン 月華掌 フォトンジャツジ1 924ダメージ
 ≪20ターン目≫
 フォトンジャツジ2 アトミックミサイル
 ≪21ターン目≫
 エステル 通常攻撃 フォトンジャツジ1 MISS
 ≪22ターン目≫
 ヨシユア 双連撃 フォトンジャツジ1 597+606ダメージ
 ≪23ターン目≫
 リシャール大佐 光鬼斬 ジン 0ダメージ
 ≪24ターン目≫
 ジン 月華掌 フォトンジャツジ1 1489ダメージ
 フォトンジャツジ1 戦闘不能
 ≪25ターン目≫
 フォトンジャツジ2 ドンキーミサイル アガット 30ダメージ
 ≪26ターン目≫
 ヨシユア 絶影 フォトンジャツジ2 630ダメージ
 フォトンジャツジ2 AT DELAY
 ≪27ターン目≫
 エステル 通常攻撃 フォトンジャツジ2 787ダメージ

《28ターン目》			
リシャール大佐	光鬼斬	ジン	0ダメージ
《29ターン目》			
ジン 移動			
《30ターン目》			
アガット	スパイラルエッジ	フォトンジャツジ2	903ダメージ
		フォトンジャツジ2	ATD
E L A Y			
《31ターン目》			
ヨシユア 移動			
《32ターン目》			
ジン 通常攻撃	フォトンジャツジ2	876ダメージ	
《33ターン目》			
リシャール大佐 移動			
《34ターン目》			
ヨシユア 双連撃	フォトンジャツジ2	540+573	
ダメージ			
《35ターン目》			
エステル 通常攻撃	フォトンジャツジ2	543ダメージ	
《36ターン目》			
リシャール大佐	光鬼斬	ヨシユア	60ダメージ
《37ターン目》			
ジン 通常攻撃	フォトンジャツジ2	1170ダメージ	
《38ターン目》			
ヨシユア 絶影	リシャール大佐	447ダメージ	
《39ターン目》			
エステル 掛け声	エステル・ヨシユア・ジン	STR	+2
0%			
《40ターン目》			

リシャル大佐	光輪斬	エステル・ヨシユア	0ダメージ
《41ターン目》			
アガット	ドラグナーエッジ	フォトンジャツジ2	MISS
《42ターン目》			
ジン	通常攻撃	リシャル大佐	1011ダメージ
《43ターン目》			
ヨシユア	通常攻撃	フォトンジャツジ2	618ダメージ
		フォトンジャツジ2	戦闘不能
《44ターン目》			
リシャル大佐	必殺技 《残光破砕剣》	ジン	969ダメージ
《45ターン目》			
ジン	通常攻撃	リシャル大佐	738ダメージ
《46ターン目》			
エステル	通常攻撃	リシャル大佐	462ダメージ
《47ターン目》			
ヨシユア	双連撃	リシャル大佐	774+873ダメージ
《48ターン目》			
リシャル大佐	光輪斬	ヨシユア	42ダメージ
テル	18ダメージ	ジン	0ダメージ
《49ターン目》			
アガット	移動		
《50ターン目》			
ジン	通常攻撃	リシャル大佐	MISS
《51ターン目》			
エステル	通常攻撃	リシャル大佐	519ダメージ
《52ターン目》			
リシャル大佐	光鬼斬	アガット	147ダメージ
《53ターン目》			

アガット	通常攻撃	リシャール大佐	594ダメージ
《54ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	待機	
《55ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	発動	ヨシユア SPD +5
0%			
《56ターン目》			
ジン	通常攻撃	リシャール大佐	726ダメージ
《57ターン目》			
リシャール大佐	通常攻撃	ヨシユア	33ダメージ
《58ターン目》			
エステル	通常攻撃	リシャール大佐	510ダメージ
《59ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	待機	
《60ターン目》			
ヨシユア	クロックアップ改	発動	ジン SPD +50%
《61ターン目》			
アガット	通常攻撃	リシャール大佐	660ダメージ
《62ターン目》			
ヨシユア	双連撃	リシャール大佐	504+523ダメージ
《63ターン目》			
ジン	龍神功	ジン	STR・DEF +30%
《64ターン目》			
リシャール大佐	必殺技	《残光破砕剣》	アガット 112
8ダメージ			
《65ターン目》			
エステル	通常攻撃	リシャール大佐	729ダメージ
《66ターン目》			
アガット	通常攻撃	リシャール大佐	MISS
《67ターン目》			

ヨシユア	双連撃	リシャル大佐	4 4 2 + 3 8 1	ダメージ
《68ターン目》				
ジン	通常攻撃	リシャル大佐	8 8 2	ダメージ
《69ターン目》				
リシャル大佐	通常攻撃	アガツト	9 3	ダメージ
《70ターン目》				
エステル	通常攻撃	リシャル大佐	4 4 7	ダメージ
《71ターン目》				
ヨシユア	通常攻撃	リシャル大佐	3 8 4	ダメージ
		リシャル大佐		戦闘不能

「さすがだ……。カシウス大佐の子供たち……。だが……。一足遅かったようだ」

そのとき、《ゴスペル》の黒い光がさらに溢れ出した。

「しまった……。！」

「くっ……。！」

装置から出ていた幾何学的な金色の光が消え、その後すぐに地震が起こり始めた。

「チイツ、こいつは……。！」

「これは……。《陰》の気か！」

そして、《ゴスペル》の黒い光が周囲に広がった。たちまち、遺跡の光が消えていった。

封印区画 第3層空中回廊

「しまった！ 《導力停止現象》か！」

ラッセル博士を含めた待機班の場所の光も瞬く間に消えていった。

封印区画 最終層

「な、何だったの、今の……」

「導力停止現象なんだろうけど、今までのものとは違って……。まるで、何か解放されたような……」

そうヨシユアが言った時、装置から再び幾何学的な金色の光が出てきた。

「……警告します……。全要員に警告します……」
いきなり装置がしゃべり始めた。

「え……」

「あの装置が喋っているんだ……」
エステルたちが装置の方を見た。

「《オーリオル》封印機構における第一結界の消滅を確認しました。封印区画・最深部において《ゴスペル》が使用されたものと推測……。《デバイスター》の起動を確認……」

装置が言った瞬間、エステルたちの周囲にあった4本の柱が地面に収納された。

「な、なによこれ!？」

「第一結界……《オーリオル》封印機構……。大佐、これはいいたい!？」

ヨシユアがリシャル大佐に尋ねた。

「わ……わからない……。このような事態になるとは想定していなかった……」

そして、装置がまた喋り出した。

「第一結界の消滅により、《環》からの干渉波、微量ながら発生……。《環の守護者》の封印解除を確認……。全要員は、可及的速やかに封印区画から撤退してください……」

そして、最深部の横にあった扉が開き、巨大な人形兵器たち

おそらく装置の言っていた《環の守護者》だろう が出てきた。

「な、なに、このブサイクなの……」

確かに、その人形兵器のセンスはなかった。

「気を抜かないで！こいつが《環の守護者》だ！」

「おいおい……。こんなのと戦えてのか！？」

「見た目にごまかされるな！こいつら……尋常じゃない！」

そして人形兵器が起動し始めた。

「ゲート固定……導力供給完了……再起動確認……MODE：索敵
行動……座標確認……《環の守護者》トロイメライ……索敵行動開
始……」

《環の守護者》トロイメライたちがエステルたちに飛び掛かってき
た！

〈最終戦闘？ 《環の守護者》トロイメライ（索敵モード）、ポソ
ープリ、ポソープル

ポソープたちは無視して、本体だけ集中攻撃して27ターンで楽勝。

「な、なんで倒れないの！？」

確かに倒した（本体のトロイメライだけだが）はずだが、《環の守
護者》トロイメライは倒れなかった。

「まだ、何かするつもりだ！」

突然、《環の守護者》トロイメライはポソープRとポソープLを両
腕につけ、機体の形を変形させた。（いわゆる、変形合体といった
もの）

「MODE：殲滅行動……《環の守護者》トロイメライ……これよ
り殲滅行動を開始する……」

性懲りもなくまたもや襲ってきた《環の守護者》トロイメライ……。返り討ちにして今度こそ壊れたプラモデル同然にしてくれる！

〈最終戦闘？ 《環の守護者》トロイメライ（殲滅モード）

殲滅モードでも何てことはなく、32ターンで終了。

「はあはあ……。な、何とか倒せた……？」

リシャル大佐との戦闘から3連戦でさすがにエステルたちの身体はボロボロだった。

「う、うん……。動けなくはしたみたいだ……」

右腕、レーザー発射口、頭部と順次破壊して機能を麻痺させることができた。

「《環の守護者》か……。どうやら、そいつの目的は《輝く環》^{オリオール}を封印していたこの施設の破壊だったようだな……。そして、《輝く環》の封印と同時に扉の中で機能を停止したのか……。《輝く環》をめぐって古代人同士が対立していたのかあるいは……。しかし……肝心の《輝く環》はどこに……」

リシャル大佐が1人話していたとき、《環の守護者》トロイメライが立ち上がり、またも動き出した。どこまでしぶといヤツなんだ……。

「クッ……間に合うか!？」

「ヨ、ヨシユア……!」

「エステルツ……!」

エステルをめぐって腕を振り下ろそうとした《環の守護者》トロイメライ。ヨシユアがかばおうとしたが、急にトロイメライの腕がそれた。

「え……」

「……させんっ！」

リシャル大佐が剣で止めてくれた。

「た、大佐……!？」

「こいつは私が何とかする!早くここから逃げたまえ!」

「で、でも……!」

「君たちは今しがたこいつと死闘したばかりだ!私の方はもう動けるようになった!時間を稼ぐことくらいはできる!」

言うが早い、リシャル大佐がトロイメライと1人戦い始めた。

その動きは神速のごとく、トロイメライに一方的だった。

「す、凄い……!」

「さすが、父さんの剣技を継いただけはあるね……」

「何をしている!早く行け!」

その時、トロイメライがリシャル大佐の剣を弾き飛ばしリシャル大佐を驚掴みにした。

「う、うおおおおおっ!？」

「た、大佐!？」

「く……どうしたら!？」

「い、いいから行きたまえ!君たちとの勝負に敗れた時……私の命運は……尽きていたのだ!」

「そ、そんな……」

「だから……気にすることはない……。私の計画は失敗に終わったが……。最期に君たちを助けられれば後悔だけは……せずにする……」

「やれやれ……。諦めなければ必ずや勝機は見える。そう教えてたことを忘れたか?」

突然、最深部の入口から男性の声が聞こえてきた。

「せいっ!」

男性がトロイメライの腕を一閃でへし折った。その男性は、カシウス・ブライトだった。

「え……!!」

「まさか……!!」

「今だ!止めを刺せ!!」

カシウスの声を受けて、エステルたちは《環の守護者》トロイメライに止めを刺しに行った。

〈最終戦闘? 《環の守護者》トロイメライ(機能停止寸状態)必殺技連発で2ターン終了。〉

今度こそ完全にバラバラになった《環の守護者》トロイメライ。

「か、勝ったあ〜っ……」

「……みんな、ご苦労だったな」

カシウスがエステルたちのところにやってきた。

「ただいま。エステル、ヨシユア。ずいぶん久しぶりだな」

「と、と、と……父さん!？」

「まだまだ詰めは甘いが一応、修行の成果は出たようだな。今回は合格点をやるっ」

「ご、合格点じゃないわよ!なによ、父さん!なんでこんな所にいるの!？」

「なんでって言われても……まあ、成り行きってやつ?」

口癖のように『成り行き』を使うカシウス。

「ど、どんな成り行きよっ!」

「はは、父さんも相変わらず元気そうだね」

「ほう、お前も少し背が伸びたみたいだな。どうだ、エステルのお守りは色々大変だっただろう?」

「どーという意味よ!？」

「まあ、それなりにね。でも、それと同じくらい僕もエステルに助けられたから。だからおあいこつてところかな」

「そうか……。いい旅をしてきたみたいだな」

「こら、オッサン！今の今まで何を遊んでいやがった！？」

アガットがカシウスに怒鳴った。

「おお、不良青年。博士から話は聞いたぞ。お前にしてはずいぶん頑張ったみたいだな。いやあ、えらいえらい」

「ガ、ガキ扱いするんじゃない！」

「冗談だ。特務兵の調査についても頑張ってくれたらしいな。娘たちも世話になったようだし感謝するぞ」

「お、おう……」

「やあ、旦那。ずいぶん遅いお帰りですね。待ちくたびれちまいましたよ」

「すまないな、ジン。君を共和国から呼ぶのはさすがに申しわけなかったが……。どうも胸騒ぎがして手紙を送らせてもらったんだ」

「いやいや、気にせんでください。こういう機会でもない借りが溜まる一方ですからな。旦那自慢のお子さんたちの腕も見る事ができましたし……。色々と楽しませてもらいましたよ」

「そうか……。そう言ってくれると助かる」

「な、和やかに会話している場合じゃないってば！まったく、帰ってくるなり見せ場をかつさらって……」

「やれやれ……。どうやら片づいたようじゃの」

ラッセル博士たち全員が来た。

「おや、博士。ずいぶん遅い到着ですな」

「お前さんが先行した後、人形の群れに困^{ハズレ}まれてな。何とか撃退してからようやくたどり着いたが……。どうやら……。全て片づいたみたいじゃな」

「ええ……。色々と課題は残ったがとりあえず一件落着でしょう」

「で、でも……。情報部に操られた大部隊がお城に迫ってるんでしよ」

「確かに……。警備艇も来ていたみたいだし。父さんが来た時、地上の様子はどうだった？」

「ああ。その事ならもう心配ないぞ。モルガン將軍に頼んで事態を收拾してもらっている。シードにも動いてもらったからじきに騒ぎは沈静化するだろう」

何とも手際がいいカシウス。

「あ、あんですって〜っ!？」

「ふふ……なるほどな……。ここに来るまでに仕込みをしていたわけか……」

リシャル大佐がよろよろと立ちあがった。

「……目を覚ましたか」

「モルガン將軍には嚴重な監視をつけていた……。シードも家族を人質にとつて逆らえないようにしていた……。どちらもあなたによつて自由の身になつたわけですか……」

「まあ、そんなところだ。だがな、リシャル。俺がしたのはその程度のことさ。別におれがいなくなつて彼らは自分で何とかしたはずだ」

「いや……違う。やはりあなたは英雄ですよ……。あなたが軍を去つてから私は……不安で仕方なかつた……。今度、侵略を受けてしまつたら勝てるとは思えなかつたから……。だから……頼れる存在を他に探した。あなたさえ軍に残ってくれたら私もこんな事をしなかつたものを……」

「……………」
カシウスがリシャル大佐に近づいたかと思うと、カシウスは思いつきりリシャル大佐を殴り、吹っ飛ばした。

「ぐっ……………」

「甘つたれるな、リシャル！貴様の間違いは、いつまでも俺という幻想から解き放たれなかつたことだ！それほどの才能を持ちながら、なぜ自分の足で立たなかつた!?俺はお前がいたから安心して軍を辞めることができたのだぞ!？」

「た、大佐……」

「俺は……そんなに大層な男じゃない。10年前も、將軍やお前たちが助けてくれたから勝つことができた。そして、大切なものを守れずに現実から逃げてしまった男にすぎん」

「……………」

「……父さん……」

「だがな……もう二度と逃げるつもりはない。だから、リシャルル。お前もこれ以上逃げるのはよせ。罪を償いながら、自分に何が足りなかったのかを考えるがいい」

こうして、情報部によるクーデター計画は幕を閉じた。モルガン將軍とシード少佐によって王国軍部隊の混乱は收拾され……計画に荷担していた情報部の人間は各地で次々と逮捕されていった。

第5章 王都撩乱(43) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

> 次回予告<

色々と問題点を残しながらもリシャル大佐の野望を阻止したエス
テルたち。そして、無事に女王生誕祭を迎えることになる。

第5章 王都撩乱（44）

王都グランセル 1週間後

予定通り、女王生誕祭が開催された。王都は生誕祭一色に染まり、グランセル城の前に大勢の人々がアリシア女王の姿を見ようと駆けつけた。

遊撃士協会グランセル支部 3階

「エステル・ブライト。並びにヨシユア・ブライト。今回の働きにより、グランセル支部は正遊撃士資格の推薦状を送ります。

どうぞ、受け取ってください」

「はい！」

エステルとヨシユアは正遊撃士資格の推薦状を受け取った。

「これで、5つの地方支部での推薦状が揃ったわけですね。それではカシウスさん。よろしくお願いします」

「うむ」

エルナンに替わり、カシウスが前に出た。

「エステル・ブライト。並びにヨシユア・ブライト。これより、協会規約に基づき兩名に正遊撃士の資格を与える。各地方支部での推薦状を提出せよ」

「は、はい……」

「どうぞ、ご確認ください」

エステルとヨシユアは5枚の正遊撃士資格の推薦状を渡した。

「ロレント支部、ボース支部、ルーン支部、ツァイス支部、そしてグランセル支部……。5支部全てのサインを確認した。最終ランク、準遊撃士1級。ここまで行くとは思わなかった。正直、驚かされたぞ。女神と遊撃士紋章エイドスにおいて、ここに兩名を正遊撃士に任命

する。両者、エンブレムを受け取るがいい」

「はい！」

エステルとヨシユアは正遊撃士の紋章を手に入れた。

「おめでと、エステル、ヨシユア！」

「はは、新しいエンブレム、なかなか似合ってるじゃないか」

「まあ、今回はかりはよくやったと誉めてやるよ」

「えへへ……みんな、ありがと！」

「ここまで来れたのも……皆さんが支えてくれたおかげです」

「遊撃士としてのキャリアはここからが本番だ。そのことを忘れないようにな」

「うん……わかってる」

「一層、精進するつもりです」

「さて、めでたい話の後で非常に申しわけないのですが……。ここで皆さんに、ひとつ残念な事をお知らせしなくてはなりません」

「残念な知らせ……？」

「本日を持ちまして、カシウス・ブライトさんが遊撃士協会から脱会します。しばらくの間、王国軍に現役復帰することです」

「なっ……!!」

「ほ、本当ですか!？」

この報告に王都の遊撃士4人が驚いた。

「長らく留守にした上に突然、こんな事を言い出して本当にすまないと思ってる。だが、クーデター事件の混乱はいまだ收拾しきれていない。情報部によって目茶苦茶にされた軍の指揮系統も立て直す必要がある。その手伝いをするつもりなんだ」

「あ、そうか……。軍人は遊撃士になれないから……。そういえば、先輩たちはこのことを知っていたみたいですね」

アネラスがすでに知っていたシエラザードたちに尋ねた。

「ええ、相談を受けたからね。正直心細いけど……いつまでも先生に頼ってばかりじゃあたしたちも一人前になれないし」

「まあ、これからは若手だけでも何とかなるって証明してやるっじ

「やねえか」

シエラザードやアガットは前向きだ。

「そうか……そうだな」

「しかし、いつまでたっても忙しさから解放されないねえ」

「まあ、こうして新たな正遊撃士が2人誕生したんだ。せいぜい俺の代わりにコキ使ってやるといいだろう」

「あのね……」

「はは、これからはもっと忙しくなりそうだね」

こうして、エステルとヨシユアは正遊撃士に昇格した。

王都グランセル グランセル城前

「まったく父さんってば……。生誕祭くらい、王都見物に付き合ってくれたらいいのに……」

エステルはカシウスが生誕祭に付き合ってくれないことに不満を漏らしていた。

「すまんが、さっそく軍議があつてな。リシャルこそ逮捕されたが、いまだ逃亡中の特務兵も多い。カノーネ大尉も、あの地下遺跡でいつの間にか姿をくらませていた。さらに、大会に参加した空賊団も混乱にまぎれて逃亡したらしい。生誕祭の途中で騒ぎが起こらないよう警備を強化しなくてはならんのさ」

「まったく……。揃いも揃ってしづとい連中ねえ」

「たしかに、どちらも諦めが悪そうな感じはするね」

「まあ、警備の方は気休めさ。問題は、あの地下遺跡の出来事が何を意味していたかということだ。リシャルが封印を解いたことでどのような影響が出てくるのか……。《輝く環》オーリオルとは何なのか……。それを見極める必要があるだろう」

「うん……確かにそうよね。それに、リシャル大佐も記憶があやしいみたいだったし」

「うむ……クルツと同様、思い出せないことがあるそうだ。それでも取り調べの途中、一つだけ判明したことがある。あの黒いオーブメントの出所だ」

「え……！」

「製造元が判つたの!？」

エステルとヨシユアが身を乗り出した。

「いや……あれを情報部に持ち込んだ人間が判明した。情報部、特務部隊隊長。ロランス・ベルガー少尉だ」

「!!!!!!」

「あ、あの人が……」

このことに2人は驚いた。

「情報部にスカウトされた時にリシャルに渡したらしい。そしてリシャルがクーデターを計画したのはちょうどその頃からだそう。どうやら、ロランス少尉の正体は徹底的に調べる必要があると思うだな」

「そっか……。得体が知れないとは思ってたけど……。そうになると、あたしたちが素顔を見ただけでもラッキーね。言ってくればいつでも似顔絵を描くわよ?」

「ああ、そのうち頼むぞ。もつとも、お前の絵心にあまり期待は持てないが……。シエラザードや陛下たちにも頼んでおくか」

「む、どーという意味よっ!」

「エステル……。ロランス少尉の顔、見たの?」

「あれ、話してなかったっけ? 女王宮のテラスで戦う時にあのヘルメットを外したのよね。歳は20歳くらいでアッシュブロンドの髪だったわ」

「え……」

「でも、女王様も言ってたけどやたらと荒んだ目すまをしていたのよね。なんていうか……冷たいような、それでいて燃え盛っているような……。『あなたに哀れむ資格などない』とか女王様に向かって言うてたし……」

「哀れむ資格などない……。……………」

ヨシユアは何か心当たりがあるのか下を見ていた。

「ヨシユア……？」

「ふむ、お前は昔から考えすぎる所があるようだな。事件の後始末は俺たちに任せて生誕祭を楽しんできたらどうだ？」

「あ……うん、それもそうだね」

「そーそー。めいっぱい楽しんでしましょ。そうだ、確か今夜はお城に泊めてもらえるのよね？」

「ああ、女王陛下のご配慮で右翼の2つの客室を貸して頂いた。俺とヨシユアが右側でエステルとシエラザードが左側だ」

「え……。あたしとシエラ姉が一緒なの？」

「別の組み合わせがいいのか？ だったら、俺とエステル、ヨシユアとシエラザードにするか。たっぷりと父に甘えるがいい」

「……やっぱリシエラ姉と一緒にいい」

「わはは、照れ屋さんめ。それじゃあ、夜にまた会おう」

カシウスはグランセル城に入って行った。

「久しぶりなんだし、父さんと一緒に部屋にすればいいのに。君のお母さんのことか……。色々話すことがあるんじゃないの？」

「それはそうだけど……。ヨシユアとシエラ姉が一緒は何だかイヤっていうか……」

エステルが顔を赤らめながら言った。

「え……」

「な、なんでもない！ それよりも……とつとつ見物に行きましょう。

街の中、すごく賑わってたし」

「そうだね。色々と回ってみようか。疲れたら、東街区にある休憩所で一休みするのがいいんじゃないかな」

「あ、百貨店の裏にある休憩所ね。それじゃあ、街を見物しながら最後にあの休憩所に行くとしますか」

エステルとヨシユアは生誕祭を満喫することにした。

第5章 王都撩乱(44) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告 <

生誕祭を満喫していると……。。

第5章 王都撩乱(45)

王都グランセル 東街区

「さてと、休憩所に着いたね。色々回ったから、そろそろ休憩にしようか?」

「うん、そうしょっか」

エステルとヨシユアはベンチに腰かけた。

「はあ……あちこち回ったからさすがにちょっと疲れちゃったわね」

「しばらくここで休もうか。とりあえず、王都で騒ぎが起きそうな気配はなかったね」

ヨシユアは王都を見回りながら、騒ぎが起きないか心配していたようだ。

「あつきれた。そんな心配してたんだ。今日くらい、事件の後始末は父さんたちに任せとけばいいのよ。遅れて来たんだからそれくらい当然の義務だってば」

「はは、そうなんだけどね。何となく性分ってというか……」

「はあ、仕方ないわねえ。それにしても……あたしたちも正遊撃士かあ」

「これからは支部の監督を受けずに自由に行動できるようになる。

人手が足りない支部からの応援要請なんかも来るから定期船を使う機会も多くなるね。その分、責任も増えるんだけど」

「うん、でもまあ何とかやっていけるわよね。今回だって、クーターは阻止することができたんだし。もう、父さんに『ヨシユアがないと心配だ』なんて言わせないんだから!」

「はは……さすがにもう言わないと思うよ。でも僕は、これからも君と一緒にいたいと思ってるけどね」

「……え……。ええええええええっ!」

急に驚きだしたエステル。

「あれ、迷惑だったかな？」

「いや、迷惑っていうか……。一緒にいたって……。それって……
どういう……？」

「そりゃあ、気心は知れてるし、お互いのクセは判っているからね。
このままコンビを組んだ方がいいと思っただけ……」

「あ……。遊撃士の仕事のことか……。なーんだ、てっきりあたし、
逆に告白されちゃったのかと……」

ほっと、胸をなでおろすエステル。

「えっ……」

「わあああああつ！今のナシ！忘れてっ！」

「エステル、それって……」

エステルがベンチを飛びあがった。

「し、しっかし今日はホントに暑いわよねっ！？暑いときにはアイ
スが一番！おごつてあげるからちよつとここで待っててっ！」

そう言つて、エステルはアイス売り場に走って行った。

「あ……。アイス売り場はそっちじゃないと思うんだけど……」

……。もしかして……。エステル……。いや……

……。そんなわけないよな……」

「いやあ。若い人はうらやましいですね」

エステルに入れ替わり、アルバ教授がやってきた。

「アルバ教授……」

「やあ、しばらくぶりですね。最近、色々と騒がしかったですが平
和が戻つて本当によかった。やはり人間、平穩無事に暮らすのが一
番ですね」

「……」

「おや、どうしました？顔色が優れないようですが……。正遊撃士
になれたのだから、もっと晴れやかな顔をしなくては。そうだ、私
からもお祝いをさせて頂きましょうか。あまり高いものは贈れませ
んけど」

「最初に会った時から……。強烈な違和感がありました……。今では

少し慣れましたけど……。あなたを見ていると何故か震えが止まらなかつた……」

ヨシユアが下を向きながら話し始めた。

「ほう……？」

「そして……各地で起きた事件……記憶を消されてしまった人たち……。あなたは調査と称して……事件が起こった地方に必ずいた……。そう……タイミングが良すぎるほどに……」

「アルバ教授はヨシユアの話を黙って聞いている。」

「決定的だったなのは……クルツさんの反応です……。記憶を奪われたクルツさん……。あの人も、アリーナの観客席で気分が悪そうにしていた……。そして……あなたも同じ場所にいた……」

「ヨシユアがそこでベンチから下りた。」

「アルバ教授……。あなた……だったんですね？」

「クク……。認識と記憶を操作されながらそこまで気付くとは大したものだ。さすが、私が造っただけはある」

「……え………」
『造った』……？

「では、暗示を解くでしょうか」

アルバ教授がヨシユアの前に立ち、指を鳴らした。その瞬間、ヨシユアの頭の中に今までの記憶が急に鮮明によりがえった。

「……あ……。あなたは……。あなたは………
ッ！？」

「フフ、ようやく私のことを思い出したようだね。バラバラになつた君の心を組み立て、直してあげたこの私を。虚ろな人形に魂を与えたこの私を」

「対象者の認識と記憶を歪めて操作する異能の力……！7人の《蛇の使徒》^{ファンギス}の1人！《白面》のワイスマン……！」

ヨシユアが一步下がり、武器を構えた。

「はは……。久しぶりと言っておこうか。《レギオン執行者》No. X?。」

《漆黒の牙》 ヨシユア・アストレイ。」

アルバ教授改め、ワイスマンが言った。

「あ、あなたが……。あなたが今回の事件を背後から操っていたんだな！ それじゃあ、あのロランズ少尉はやっぱり……。」

「お察しの通りだ。彼の記憶は消さないであげたからすぐに正体に気付いたようだね。はは、彼も喜んでいるだろう。」

「あ……。あなたは……。……。僕を……。始末しに来たんですか。」

「ふふ……。そう身構えることはない。計画の第一段階も無事終了した。少々時間ができたので君に会いに来ただけなのだよ。」

「第一段階……。あの地下遺跡の封印のことか……。」

「《環》に至る道を塞ぐ《門》……。それをこじ開けることがすなわち、計画の第一段階だね。ふふ……。もはや閉じることはありえない。」

「やはり……。これで終わりじゃないのか……。《輝く環》とは一体何です!? 《結社》は……。あなたは何を企んでいるんだ!？」

「それを知りたければ《結社》に戻ってくればどうだい？ 君ならすぐに現役復帰できるだろう。少々カンは鈍っただろうがリハビリすればすぐに取り戻せるさ。」

「……。……。」。 「フフ、そんなに恐い顔をするものじゃないよ。わかっているさ。

今の君には大切な家族がいる。尊敬できる父親と何よりも愛おしく大切な少女……。たとえ『彼』が、こちら側においてもそれらを捨てるなど馬鹿げた話だ。」

「……。……。」。 「だから私は、君に会いに来た。『計画に協力してくれた』礼として真に《結社》から解放するために……。おめでとう、ヨシユア。

君はもう《結社》から自由の身だ。この5年間、本当にご苦労だったね。」

「……………え……………」

「なんだ、つまらないな。もっと嬉しそうな顔をしてくれると思っただが……。ふむ、まだ感情の形成に不完全な所があるのかな？」
「僕が……計画に協力……。……はは……何を……馬鹿なことを言ってるんだ……？」

「ああ、すまない。うっかり言い忘れていたよ。君の本当の役目は暗殺ではなく諜報だったのさ」

「え……………」

「《結社》に見捨てられた子供として同情を引き、見事保護されてくれた。そして定期的に、結社の連絡員に色々なことを報告してくれたんだ。遊撃士協会の動向と……。カシウス・ブライトの情報をね」
「……！」

「無論、そんな事をしていたのは君自身も覚えていないだろう。私がそう暗示をかけたからね」

「……………」

「S級遊撃士、カシウス・ブライト。まさしく彼こそが今回の計画の最大の障害だった。彼に国内にいられては大佐のクーデターなどすぐに潰されてしまっただろうからね。彼の性格・行動パターンを分析して、悟られずに国外に誘導するために……。君の情報は本当に役に立ってくれた」

「……………嘘……………」

「ヨシユアは頭を抱えてうずくまった。」

「だから……。改めて礼を言おう。この5年間、本当にご苦労だった」

「嘘だ、嘘だ！嘘だああああああっ！……。僕は……。エステルと過ごした……。僕のあの時間は……………」

「ふふ……。何がそんなに哀しいのかな？素知らぬ顔で、大切な家族と幸せに暮らしていけばいいだろう？君が黙っていれば判らないことだ」

「……………」

「しかしまあ……。考えてみればそれも酷な話か。ブライト家の父娘

はどうも健全すぎるようだからね。君のような化物にとって少し眩しすぎたんじゃないかな？」

「あ……………」

「君は、人らしく振る舞えるが、その在り方は普通の人とは違う。どんな時も目的合理的に考え、任務を遂行できる思考フレーム。単独で大部隊と渡り合えるよう限界まで強化された肉体と反射神経。私が造り上げた最高の人間兵器。それが君 《漆黒の牙》だ」

「……………」

「そんな君が、人と交わるなどしょせんは無理があったのだよ。この先、彼らと一緒にいても君が幸せになることはありえない」

「……………」

「だから、辛くなったらいつでも戻ってくるがいい。大いなる主が統べる魂の結社。我らが《身喰らう蛇》^{ウロボロス}に……………」

「そういう残して、ワイスマンはヨシユアから去って行った。」

「……………」

「これが……………罰か……………」

姉さん……………レーヴェ……………僕は……………僕は……………」

数時間後

「はあ……………。ずいぶん待たされちゃった……………。何だかんだでもう夕方だし……………。ヨシユア……………さっきのどう思ったんだろ……………。う……………思い出したらまた顔が熱く……………」

「おや、エステルさん」

「あれ、アルバ教授。こんな所で会うなんて珍しいわね」

「はは、そうかもしれませぬね。そうだ、先ほどヨシユア君とも会いましたよ。おめでとうございます。正遊撃士になったそうですね」

「えへへ……………まあね。あれ……………？」

「……………どうしました？」

「教授つてば……いつもと雰囲気が変わない？ なんだかすごく楽しそうな顔をしてるわよ？」

「……。はは、見抜けましたか。実は、考古学の研究で色々と進展がありましてね。それで少々、浮かれていたんです」

「へへ、よかつたじゃない。あ……ゴメン！ アイスが溶けちゃうからあたし、これで行くわね！ それじゃあ、またね〜！」

エステルはヨシユアのもとに急いだ。

「ふふ、なるほど。カシウス・ブライトの娘か……。なかなか楽しませてもらえそうだ」

「ごめん、遅くなっちゃって！ ものすごく混んでてさ〜。ようやくゲットできたのよ」

「そっか、ご苦労さま。ありがたくご馳走になるよ」

「……うん……。えっと、さっきの事だけ……」

「ああ、さっきはゴメン。紛らわしい言い方しちゃって。確かにあれじゃあ出来の悪い告白みたいだね」

「え……。うん……。出来が悪いってことはないけど……」

「まあ、考えてみればそう結論を急ぐこともないよね。正遊撃士になったからといって別の仕事についてもいいわけだし。ここはお互い、将来についてじっくり考えるべきかもしれないな」

「た、確かに……。(結婚なんかしちゃったら子育てなんかもしなくちゃいけないし……。……。だから！ 先走りすぎだつての、あたし！)」

「さてと、もう夕方だしアイスを食べながら城に戻るうか。父さんとみんなが待ってるよ」

「……。ヨシユア？」

エステルがヨシユアの顔を見た。

「どうしたの、エステル。将来についての相談があるとか？」

「ち、違っつてば！さっさとお城に戻りましょ！」

エステルとヨシユアはグランセル城に向かった。

第5章 王都療乱(45)(後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

グランセル城での宿泊時に……。

第5章 王都撻乱(46)

グランセル城 エステルとシエラザードの宿泊部屋

「うーん……」

エステルはせわしなく部屋をうろつろつとしている。

「何よ、エステル。さっきからそわそわして。なにか気になることでもあるの?」

シエラザードがそんなエステルを見て言った。

「う、うん……」

エステルがシエラザードのところに寄った。

「ねえ、シエラ姉……。食事の時……。ヨシユア、変じゃなかった?」

「???変なのはあんたの方でしょ。あの子はいつも通り落ち着いてたじゃないの」

「それはそうなんだけど……」

「ハッハーン。そっか、そういうことか」

シエラザードが何か感づいたようだ。

「な、なによいきなり……」

「隠さない、隠さない そんな雰囲気はしたけど……。やっぱり自覚しちゃったわけね。ヨシユアのこと……。好きになっちゃったんでしょ?」

「……うっ……。や、やっぱり分かつちゃっ?」

エステルが顔を赤くした。

「悪いけど、丸わかりよ。でも、その様子じゃ、ヨシユアにはちゃんと伝わっていないみたいね」

「うん……。そうだと思う……。ヨシユアって、こういうこと昔から二ブいところあったし……。ってあたしも人のこと言えないか」

「ああもっ、初々しいわねえ。あの花よりダンゴだったエステルがよくそこまで……。おねーさん。感激しちゃうわ!」

人のことだと思い、茶化すシエラザード。

「……もうシエラ姉にはこんりんざい相談しない……」

「ウソウソ。からかって悪かったわ。でも、そうね……。考えてみれば、あんたたちは思春期に入る前に出会ったのよね。なかなか、お互いの気持ちに気付かないのは仕方ないか……」

「そ、そういうものなのかな……。あたしは、旅をしてる最中にちよつとしたきつかけで意識して……。い、いちど、気になりだしたらどんどん意識するようになって……。ああもう、こんなあたしのキャラじゃないのに……」

「ふふ……。咲かない蕾はないってね。女の子はみんなそういうものよ」

「シエラ姉……」

「あまり軽率なことと言うつもりはないんだけど……。覚悟が決まってるなら打ち明けた方がいいんじゃない？ふんきりがつかないのならちよつと占ってあげよっか？」

「うづん……。実はもう、覚悟が決まってるの。話を聞いてもらう約束もしたし」

「そっか……。よし、それでこそあたしの妹分！ああもう！おねーさん、泣けてくるわっ！」

「それはもうええっちゅーねん。でも、ありがと、シエラ姉。なんだか少し勇気が出てきたわ。あたし、ちよつとヨシユアのところに行ってくるね」

「え……。いま、まさか今すぐ告白するの!？」

「うづん、それは別口。何かさつき、ヨシユアの様子がおかしいよ。うな気がしたのよね。まずはそれを聞きだしてくるわ」

「そ、そう……。しかし、さすがにあの子のことをよく分かってるみたいじゃないの。あんたとヨシユアならきつと上手く行くと思うわよ。話して、良い雰囲気になったらそのまま打ち明けてみたらどう?？」

「う……。善処します……。それじゃあ、行ってくるわね!」
エステルが部屋を飛び出していった。

「……初恋かあ……。うまく行くといいんだけどね……」

ヨシユア、カシウスの部屋

エステルがヨシユアたちの部屋に入ったが2人ともいなかった。

「あれ……。2人ともいないわね。そういえば、父さんはまだ会議とか言ってたか……。でも、ヨシユアは……」

その時、ハーモニカの音が聞こえてきた。

「ヨシユア……。どこで吹いてるのかな？」

エステルはハーモニカの音を頼りに探し始めた。

第5章 王都療乱(46) (後書き)

この小説の評価・感想等お待ちしております。

>次回予告<

エステルがヨシユアに告白するが……。次回、FC最終回です！続けて、SCもご期待ください！

第5章 王都掠乱(47) (前書き)

今回でthe First Chapterは終了です。

第5章 王都撩乱（47）

グランセル城 空中庭園

「……やあ、エステル。いい夜だね」

「うん……。また、その曲なんだ。『星の在り処』」

「色々なものを失くしたけど……。この曲と、このハーモニカはいつも僕のそばにいてくれた……。だから、『吹き収め』に思っ
ね」

「え……」

「約束、果たさせてくれるかな。君に会うまでに僕が何をしてきたのか……。それを、今から話したいんだ」

「ヨシユア……。うん、わかった」

「少し長い話になるけど、それでも……構わないかな？」

「もちろん……。キッチリ最後まで聞かせてもらおうわ」

「ありがとう……」

そして、ヨシユアが背を向けて少しずつ語り始めた。

「昔々、あるところに……。あるところに1人の男の子がいました。甘えん坊で気が弱くて何の取り柄もない男の子……。でも、大切な人たちと一緒にいて男の子の毎日はとても幸せでした。しかし、ある事がきっかけで男の子の心は壊れてしまいました。言葉と感情を失い、食事もとらずにハーモニカを吹き続ける毎日……。面倒を見
てくれた人の努力も空しく、男の子は日に日に痩せ衰えていきました。そんな男の子の前に1人の魔法使いが現れました。『私がその子の心を治してあげよう。ただし、代償は払ってもらおうよ』。そうして、男の子は魔法使いに預けられることになりました。壊れた心を繋ぎ合わせながら……。魔法使いは、男の子の存在を好きなように作り変えていきました。そして、新たな心を手に入れた時 男

の子は人殺しになっていました。2年ものあいだ、男の子は毎日のように人を殺し続けました。何十人も部隊を、闇に紛れて全滅させたこともあります。屈強な護衛に守られていたとある国の大臣の屋敷に潜入して、その喉をかき切ったこともあります。時には爆発物を使い、罪もない人々を巻き添えにしました。いつしか男の子は、ただの人殺しから優秀な化物に成長し……《漆黒の牙》と呼ばれ恐れられるようになっていました。そして男の子は、魔法使いにある標的の暗殺を命じられました。かつて女王様が治める国を北の大きな国から守った英雄。大陸で4人しかいないという特別な称号を持つている遊撃士を。でも、その標的は強すぎました。子猫が虎にいなされるように男の子は撃退されてしまいました。失敗した男の子の前に魔法使いの手下たちが現れました。標的に顔を知られてしまった男の子を始末しようとしたのです。しかし、その手下を追い払って男の子を救ってくれた人がいました。それは、男の子が暗殺に失敗した当の標的である遊撃士だったのです。そして、男の子は……その人の家に連れてこられてひとりの女の子に出会いました……。その家で、男の子は5年もの間、素敵な夢を見せてもらいました。本当なら、その男の子には許されるはずもなかった夢を……。だけど、夢はいつか醒めるものです。現実に戻る時が迫っていました」

「これで……この話はおしまいだ。ありがとう……最後まで耳を塞がずに聞いてくれて」

ヨシユアがエステルの方に向きなおした。

「……えっと……あは……。それって……どこまで本当なの？」

エステルはおとぎ話でも聞いていたような感じだった。

「全部　本当のことだよ。僕の心が壊れているのも。僕の手が血塗られているのも。君の父さんを暗殺しようとして失敗したのも。」

そして……今までずっと君たちを裏切り続けていたことも」

「!?!」

「男の子は本当の意味で救いようがない存在だった。そこにいるだけで不幸と災厄をもたらすような……。そんな、穢けがれた存在だったんだ」

「……………」

「だから……男の子は旅立つことにした。幸せな夢を見せてくれた人たちをこれ以上、巻き込まないために。自分という存在を造った悪い魔法使いを止めるために」

そして、ヨシユアはエステルに自分の持っていたハーモニカを渡した。

「え……?」

「それは、僕が人間らしい心を最後に持っていた時のものだ。もう必要ないものだから……。だから……君に受け取ってほしい。この5年間のお礼にはとてもならないだろうけど……。何も無いよりはマシだと思うんだ」

「……………。かげんにしなさいよ」

「え……?」

「いい加減にしなさいっての!」

エステルがヨシユアに近づき、怒鳴った。

「夢なんて言わないでよ……。っ!まるで……。今までのことが本当じやなかったみたいじゃない!過去がなんだっていうの!?!心が壊れてる!?!それがどーしたっていうのよ!?!」

「エステル……」

ヨシユアが目を伏せた。

「あたしを見て!あたしの目を見てよ!ずっと……。その男の子を見てきたわ!良い所も悪い所も知ってる!男の子が、何かに苦しみなから必死に頑張ってたってことも知ってる!そんなヨシユアのことをあたしは好きになつたんだから!」

「!?!?!」

「1人で行くなんてダメだからね！あたしを、あたしの気持ちを置き去りにして消えちゃうなんて！そんなの、絶対に許さないんだからあつ！」

「……エステル……。……」

ヨシユアがエステルの肩に手を乗せた。

「え……？」

そして、口づけをした。

「……あ……。……（……ヨシユア……）」

不意にエステルがヨシユアから離れた。

「なに今の……！口の中に流れて……」

「……即効性のある睡眠誘導剤だよ。副作用はないから安心して」

「あ……」

眠気がエステルを襲い、エステルは地面に崩れ落ちた。

「ど……。どうして……。？……。何でそんなものを……！」

「僕のエステル……。お日様みたいに眩しかった君。君と一緒にいて幸せだったけど、同時に、とても苦しかった……。明るい光が濃い影を作るように……。君と一緒にいればいるほど僕は、自分の忌まわしい本性を思い知らされるようになったから……。だから、出会わなければよかったと思ったこともあった」

「……そんな……」

「でも、今は違う。君に出会えたことに感謝している。こんな風に、大切な女の子から逃げ出す事しかできないけど僕だけ……。誰よりも君のことを想っている」

「……ヨシユア……。ヨシユア……」

「今まで、本当にありがとう。出会った時から……。君のことが大好きだったよ」

そして、エステルは眠りに落ちた。

「……さよなら、エステル」

n T
s o
t b
o r y , t h e c o n t i n u e d
S e c o n d t h e
C h a p t e r . C h e s t n a t i o

第5章 王都療乱（47）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

> 次回予告<

エステルの想いを残し、1人旅立って行ったヨシユア。エステルはハーモニカに残された小さな想いを胸に秘め、ヨシユアを追う旅を決心する。

第6章 乙女の決意(1) (前書き)

SC編始まります！

第6章 乙女の決意(1)

王都グランセル

「……………う〜……………まぶし……………」

窓から差し込んでくる光で目を覚ましたエステル。

「ふわあああああ〜っ……………。ん〜っ、よく寝たあ〜っ！」

そして、辺りを見渡すエステル。

「あれ……………」

家とは違う風景に少し戸惑った。

「そっか、あたしたち昨日はお城に泊まったんだっけ。ヨシユアとお祭りを回って……………帰りにアイスクリームを食べて……………夜は父さんと一緒に晩餐会に出て……………。それで……………」

そして、ヨシユアと空中庭園でのことを思い出した。

「……………。うそ……………」

慌ててベッドから飛び起き、部屋を確認した。

「ここ……………ヨシユアと父さんの部屋だ……………。確かあたし……………シエラ姉と同じ部屋だったはず……………。えっと……………どこからが夢なんだろう……………」

そして、ポケットに入っていたハーモニカを見つけた。

「あ……………」

ヨシユアっ……………」

エステルは部屋から飛び出した。

「あら、エステル。ずいぶん遅いお目覚めね」

後ろから別の部屋から出てきたシエラザードに声をかけられた。

「シエラ姉……………」

「まったく、昨日はいつまで経っても帰って来ないから心配しちゃ

ったわ。でも、その様子だとヨシユアと色々話せたみたい。」

「シエラ姉、ヨシユアは!？」

「へ……」

いきなりエステルに迫られたシエラザード。

「ヨシユアを捜してるの!シエラ姉、見かけなかった!？」

「今朝は見かけてないけど……。ていうか、あんた昨日は疲れてそ
ちの部屋で眠ったんでしょう?起きた時にはいなかったの?」

「え……。!?あたしが疲れて寝たって……。そ、それって誰から聞
いたの?」

「先生からだけど……」

「と、父さんが!?それじゃあ!父さんは見かけなかった!？」

大分、あせっているエステル。

「先生なら、さっき階段を登って空中庭園に上がって行っただけど……

……

「!……!」

それを聞いてエステルは空中庭園に急いだ。

「あ、ちよつとエステル!?!……どうということ……?」

そして、シエラザードはタロットカードを取り出した。

「……………。逆位置の『恋人たち』……………」

グランセル城 空中庭園

「あ……」

カシウスは、昨夜ヨシユアがいた場所と同じところにいた。

「エステルか」

「と、父さん……」

エステルがカシウスに走って行った。

「あのね、大変なの……!」

「判っている。ヨシユアは……行ってしまったようだな」

エステルという言葉を書くことなく、カシウスは答えた。

「ど、どうして……。なんで父さんが知ってるの？」

「昨日、軍議から帰ってきたらベッドにお前が寝かされていた。そしてテーブルにはあいつの書き置きが残されていた。それで大体の事情は分かるさ」

「だ、だったら！ だったらどうしてこんな所でノンビリしてるの！
早くヨシユアを捜さないよ」

「止めておけ」

急にカシウスがエステルという言葉を書き止めた。

「え……」

「あいつが本気で姿を消したらたとえ俺でも見つけるのは無理だ。
5年前、あいつに狙われた時、俺もかなり苦戦させられたからな」

「……………」
5年前のことはヨシユアに聞いたのでエステルはこのことは分かっていた。

「あたし……今までずっとこの質問はしなかったけど……ヨシユア
って……何者なの？」

この質問は、ヨシユアとの約束でカシウスにも聞かないでいた。

「……………」。《身喰らう蛇》。そう名乗っている連中がいる。《盟主》と呼ばれる首領に導かれ、世界を闇から動かそうとする結社。ヨシユアはそこに属していたらしい」

「《身喰らう蛇》……………」

「正直、遊撃士協会でも実態が掴めていない組織でな。世間への影響を考えてその存在は半ば伏せられている。だが、それは確実に存在し、何かの目的を遂行しようとしている。……今回のクーデター
のようにな」

「そ、それって……あのロランス少尉のこと！？」

「ああ、間違いあるまい。もっとも、関与していたのはその少尉だけではなかったはずだ。……ある意味、ヨシユアも協力者の1人だったようだからな」

「ちょ、ちょっと待って……。それってどういう意味!？」

ヨシユアが事件の協力者と聞いてエステルは驚いた。

「書き置きに書かれていた。ヨシユアはこの5年間、遊撃士協会に関する様々な情報をその結社に流し続けていたらしい。どうやら、自分でそれと知らずに報告する暗示をかけられていたそうだ」

「そ、そんな……。そんなことって……」

「正直、得体の知れない連中だ。深入りするのは止めておけ」

「……。あは……。意味が分からないんですけど……。それって……。ヨシユアを放っておけてこと?」

「カシウスは何も答えなかった。

「ねえ父さん! 答えてよ!」

「いずれ……。こうなる日が来ることは判っていた。5年前、ヨシユアが俺の養子になることを承諾した時。あいつは、ある事を俺に誓った」

「ある事……?」

「自分という存在がお前や俺たちに迷惑をかけた時……。結社という過去が何らかの形で自分に接触してきた時……。俺たちの前から姿を消すとな」

「……。なにそれ……」

「お前の気持ちも分かる。今まで家族として暮らしてきたんだ。簡単に割り切れるものでもないだろう。だがな……。男には譲れない一線というものがある。だからお前もヨシユアの気持ちも分かって」

「」

「……知ってたんだ」

「なに?」

「ヨシユアが……。いつかいつかあたしたちの前から居なくなっちゃつかもしれないって……。父さん……。知ってたんだ……」

「……。すまん……」

「父さんのバカ!」

そう言つて、エステルはカシウスから走り去つて行つた。

「先生……」

入れ替わり、シエラザードがカシウスの所に来た。

「シエラザード……。みつともない所を見られたな」

「いえ……。……………」

「責めないのか、俺を？」

「あたしも、それなりの事情があつて先生のお世話になつた身ですから……。先生とヨシユアの気持ちはどちらも分からなくはないんです」

「そうか……。そうだったな」

「でも、1つだけ。女の立場から言わせてもらえれば」

「うん？」

「先生もヨシユアも、かなり最低です」

ピシヤリと一言。

第6章 乙女の決意(2) (前書き)

オリキャラ『レイン・アクアライト』を作り出してみました。

第6章 乙女の決意(2)

王都グランセル 北街区

「はあつ、はあつ……………」

エステルは降り注ぐ雨の中、当てもなく走っていた。

「……………。そんなわけない……………。ヨシユアが居なくなるなんて……………そんなこと……………あるわけない……………」

「そこのお嬢さん、こんな雨の中何をしていますか？雨で濡れてしまいますよ？」

1人の青年がエステルに声をかけてきた。

「えっと……………何でもないです」

「そうですね……………？……………。それで、誰を探しているのですか？」

青年が言った。

「……………！……………どうして……………それを……………」

「おや、当たってしまいましたか。まあ、こんな所で立ち話も何ですし、冷静になるためにもどこか店に入りましょう」

居酒屋 《サニーベル・イン》

「そついえはまだ名乗っていませんでしたね。私の名前は、レイン・アクアライトといいます」

「レインさん……………。……………どうして、あたしが誰かを捜しているって判ったの？」

「いえ、あの角であなたが『居なくなるはずない』みたいな言葉が聞こえたもので。それで、誰を捜しているんです？少し、話してくれませんか？」

「えっと、あたしの兄弟みたいな男の子がどこにいったか判らなく

て……」

「そうですか……」

「朝になつたらすでにいなくなつて……。今、捜している最中なの……」

「……。なるほど……。それで、自分の家に帰っているというのではないのですか？」

「あ……。……。……。……。……。そっか、そうよね。ヨシユアが居なくなるはずない……。きつと……。先に家に帰ってるだけ……」

「え？」

「レインさん！ありがと！急いで家に帰ることにするわ！」

エステルは急に席を立ちあがり、店を出ていった。

「……。……。……。……。……。思った通り、彼女がエステル・ブライト……。そして、居なくなった彼の名前がヨシユア……。彼がいきなり居なくなったという事は、やはり《結社》が接触をかけたようですね。それに今回のリベールの事件……。これはようやく、『彼』と会える時が来たかもしれませぬ……」

定期船 《セシリア号》

「……。……。……。……。……。あたし……。ヨシユアのこと気付つけたの？ 出会わなければよかつた……。……。あたし……」

「アカン、アカンな〜」

エステルが後ろから振り向くと軽そうな青年が立っていた。

「……。？」

「澄みきつた青空！そして頬に心地よい風！そんな中で、キミみたいな可愛い子が元気なさそうな顔をしたらアカンよ。女神さまもガツカリするで、ホンマ」

「えっと……」

「あ、ちやうで？ けっして怪しいモンとちやうよ？ ただ、乗船した時からキミのことが妙に気になってなあ。なんか元氣ないみたいやからオレの素敵トークで笑顔にしたると、まあ、そんな風に思ったわけや」

「………………。えっと…………。よく判らないけど、ありがと」

「まあ、ぶっちゃけナンパしとるんやけどね。どや、暇やつたら下の展望台にでも付き合わん？ ドリンク注文できるみたいやからお近づきの印に奢らせてもらおうわ」

「あ、あの…………。気持ちはありがたいんだけど…………。あんまり気分じゃなくて…………。ごめんなさい…………。」

「んー、そっか。それじゃあ、ナンパは止めて本業に切り換えた方がいいかな？ 迷える子羊導くのもお仕事やし」

「本業…………？」

「フフン、これや」

軽そうな青年は、腰に付けた杯が描かれたペンダントを突き出した。

「え、それって…………。たしか七耀教会の…………。」

「ビンゴ。『星杯の紋章』や。オレはケビン・グラハム。これでも七耀教会の神父やねん」

「へー、そうなんだ…………。って、冗談でしょ？」

「なんでえ？ オレ、めっちゃ真面目な神父さんやで？ 3度の祈りは欠かしたことはないし、聖典もほら、肌身離さず持ち歩いて…………。」

ケビン神父が服の中を探したが…………。

「………………。ゴメン、座席に忘れてきたわ」

「…………。説得力ゼロなんですけど。ふふ…………。ホント、おかしなお兄さんね」

「あ！ 今ちよつと笑ったな？ うんうん。やっぱり可愛い子は笑顔でないとな。ま、そういうわけやからよかつたら神父として相談に乗るで。ナンパは抜き、空の女神に誓うわ」

「あ…………。うん…………。で、でも…………。どんな風に相談したら…………。あた

し……。んくつ……………」

エステルが涙をこぼした。

「え、ちよつと待ってや……。何か知らんけど！ゴメン、オレが悪かった！」

「ひっ、えっ……。うづうづ……。ああああっ……。うわあああ
ああああん……。！」

「あ……………」

ケビン神父がエステルに手を添えた。

「よしよし、良い子や。今までガマンしとったんやな。気の済むまで泣いたらええよ」

「うあああっ……。！うわああああああん……。！」

「えつと……。ケビンさんだったっけ。ごめんなさい……。みっともない所を見せちゃって」

「ええて、ええて。女の子に胸貸せるなんて役得や。どや、ちよつとは落ち着いたか？」

「……。うん。あたしエステル。エステル・ブライトっていうの。遊撃士協会に所属してるわ」

「エステルちゃんか。名前もめっちゃ可愛いやん。……………」

……。つて、遊撃士協会？」

「うん、これでも遊撃士よ。えへへ、あんなみっともない姿見たら信じられないかもしれないけど……………」

「いや、そんなことないで。よく見たらそれっぽい恰好やし。やっぱり何かの武術をやってるん？」

「棒術を、少しね。そういうケビンさんは本当に教会の神父さんなの？どう見てもそうは見えないんだけど」

「あいた、キツイなあ。まあ、オレは巡回神父やからちよい毛並みが違うのは認めるわ」

「巡回神父？」

「礼拝堂のない村つてあるやる？そういう村を定期的に訪れて礼拝や日曜学校を執り行うわけや。ま、教会の出張サービスやね」

「なるほど……そんな神父さんがいるんだ」

「まあ。礼拝堂勤めの神父と違って法衣とかも適当なヤツが多くてな。そんなワケで大目に見たってや」

「うーん、まあいいか。それじゃあ、ケビンさんはこれからどこかの村に行くんだ？」

「やゝ、実はオレ、リベールに来たばかりなんや。巡回神父の手が足りんらしくて本山から派遣されて来たんやけど」

「あ、そうなんだ。教会の本山つて……どこにあるのか知らないけど」

「大陸中部にあるアルテリア法国つてとこや。まあ、グランセル大聖堂の大司教さんに着任報告する前にちよいと観光でもしたる思つてな。で、こうしてブラブラしてるわけや」

「ガクツ……ダメじゃない。ホント、いい加減な神父さんねえ」

「ええねん。いずれ巡回する場所の下見や。こうして、悩みごとがありそうな可愛い子と巡り会えたしな。うんうん、これぞ女神のお導きやで」

1人納得するケビン神父。

「まったく調子いいわねえ」

「でも、ありがと。泣いたらスッキリしちゃった。ダメよね、うん。ちゃんとヨシユアを信じないと」

「へ……？」

「あ、ヨシユアつて、あたしの兄弟みたいな男の子なんだけど。いきなり居なくなっちゃったからあたし、ちよつと驚いちゃって……」

「いきなり居なくなつたつて……。それつて、家出かなんかか？」

「ううん、違う。一足先に家に帰っただけなの。さっきのレインさんも自分の家は確かめたのかって言われてね。だって家族なんだから。勝手に居なくなるわけないんだから」

「……………」

「でも、ホント失敗したなあ。告白はタイミング悪かったかも。ヨシユアに会ったらうまい具合にごまかさないと……………」

「……………」なあ、エステルちゃん」

「ふえっ？」

「いや……………。あんな、オレさつきも言

ったように観光中やから特に用事もないねん。せやから、ロレントって街で降りてエステルちゃんを家まで送ったるわ」

「ええっ!？」

エステルはケビン神父と共に家に向かうことになった。

第6章 乙女の決意(3)

地方都市ロレント

「は、ここがロレントか。こう言ったらなんやけど発着場がある以外は田舎やね」

ケビン神父があたりを見回して言った。

「悪かったわね、田舎で。一応言っておくけど、礼拝堂だってあるんだからね」

「お、なら後で教区長さんに挨拶しに行かなアカンな。で、エステルちゃんの家ってどっちの方にあるん？」

「それなんだけど……。見送りなんて必要ないってば。街から出てすぐの所だし、これでも一応、遊撃士なんだから」

「なはは、遠慮せんでええよ。レデイの送り迎えは男の義務や。それに、自慢のカレシにも一度お目にかかってみたいしな」

「カレシって……。そんなんじゃないんだけど。まあいいわ、家に着いたらお茶くらいはご馳走してあげる」

「サンキュー。ほな、案内したってや」

ブライト家

「へ。ここがエステルちゃんの家か。なんちゅうか、あつたかそんな雰囲気の家やね」

「えへへ、そうでしょ？あたしと、父さんと、お母さん……。それにヨシユアとの思い出がいっぱいに詰まった場所なんだから」

「なるほどな。で、そのヨシユア君ってのが一足先に帰ってきているわけか？」

「うん、間違いないわ。ついて来て、紹介するから」

エステルが家に入っていった。

「どんな野郎か知らんが、罪作りなやつちゃ。ふう……しゃあないな」

ケビン神父も家に入っていった。

「ただいま、ヨシユア！ねえ、帰って来てるんでしょ！？」
家からは反応はない。

「おかしいな……。ヨシユア……帰ってきているはずなのに……。
あ、父さんの書斎にいたりして」

エステルは書斎に入った。

「……………」
ここにもいなかった。エステルは書斎を出て2階に上がった。

2階でヨシユアの部屋に行こうとした時、

「……そうだ。あたしの部屋にいる可能性もゼロじゃないよね……
？やばっ、下着とか出さなければなしにしてたかも……」

自分の部屋に入ったエステル。

「……………。よかった……。出さなければなしにして
なくて。まあ、ヨシユアだったら、あたしの下着なんか見たって平
然としてるだろうけど……………」
よろよろと自分の部屋を出て、ヨシユアの部屋の前に立つ。

「ヨシユア……入るね？」

ノックした後、エステルは部屋に入った。

「……………あ」
そこにも誰もいなかった。

「あは……そっか……」
エステルはその場に崩れ落ちた。

「……………あたし……バカだ……」
そこで、ケビン神父が入ってきた。

「カレシ……おらんみたいやな」

「……………」

エステルは黙っている。

「それともアレか。いったん帰って来てからまた街にでも出かけたとかか？」

「……………ううん……………」

エステルが力なく首を振った。

「ふう……。やっと目え、醒めたみたいやね」

「……………。そうよ、ホントはね、ちゃんと分かっただんだ……。ヨシユアは行っちゃったって……。家に戻ってるはずないってちゃんと分かっていたんだよ……………」

「そっか……………」

「でもね……………この部屋が最後だったから……。他に、ヨシユアの居場所なんてあたしには思いつかなかったから……。だから……………ここでおしまい。あたしはもう……………二度とヨシユアに会えないんだ……………」

「……………？……………」

「所詮、運命なんちゆうもんは女神にしか見えへんシロモンや。そんなもん縛られた気になって諦めるのは早すぎるで。大事なんは、エステルちゃんが何をどうしたいって事とちゃうか？」

「で、でも……………。ヨシユアを捜そうにも何の手がかりもないし……………」

「いや、そうでもないやろ。そのカレシがどんなヤツかオレは知らへんけど……………。何のきっかけもなしに姿を消すヤツなんておらんで……………え……………」

「最近、カレシの言動や態度で何かおかしいことはなかったか？もしくは、カレシに関係ありそうな奇妙な出来事が起こったりとかな。ずっと一緒にいたキミにしかわからんことやで……………」

「……………あ……………！」

エステルの頭の中に色々と思いが当たる節があったようだ。

「ああ……………！ヨシユアがおかしくなったのはあの休憩所に戻って……………」

から……。うそ……。どうして？なんであたし……。あの時あった人が思い出せないの？」

エステルが顔を青ざめていった。

「だ、大丈夫か？めっちゃ顔色悪いで」

「う、うん……。大丈夫……」

エステルが立ち上がった。

「そっか……。ヨシユアの目的は悪い魔法使いを止めること……」。

あの時、あたしがあつた人がその魔法使いだとするなら……。それがクーデターを影から操っていたのと同じ人物なら……。悪い魔法使いは、まだリベールで何かをしようと企んでいるはず……。じゃあ、あたしが遊撃士として魔法使いの企みを阻止できたなら……。ひよつとしたら……」

「……よく気付いたな」

その時、カシウスとシエラザードが部屋に入ってきた。

「父さん、シエラ姉！？ど、どうしてここに……？」

「……悪い、エステルちゃん。定期船を降りる時、ギルドの王都支部に連絡させてもらったわ」

「え……」

「まったく驚いちゃったわよ。あんたを捜してギルドに行ったらちよつど連絡が入ってくるんだもの。で、あわてて先生と一緒に出発直前の貨物飛行船に乗ったわけ」

「あ……」

「まあ、そういうわけだ。ケビン神父といったか？連絡してくれて本当に助かった。礼を言わせてくれ」

「いや、とんでもない。部外者が出しゃばったりしてホンマ、すんませんでしたわ」

「あ、あの……。父さん、あたしね……」

「判っている……。深入りするなと言ったのはただの俺のエゴだ。男としての、父親としての論理をお前に押し付けただけにすぎん。そう、シエラザードに叱られてな」

「シエラ姉……」

「ふふ、あたしも今回は全面的にあんたの味方よ」

「覚悟はしていたが……あいつが居なくなっただけが思っていたよりも堪えたらしい。だから、せめてお前だけは危険な道を歩かせたくなかった。命と引き替えにお前を救ったレナのようになって欲しくなかった。……だが、そういう風に考えるのはお前にも、母さんにも失礼だったな。今更ながらに思い知らされたよ」

「父さん……」

「……軍を立て直すため俺はしばらく身動きが取れん。おそらく奴等の狙いはそこにもあったのだろうが……。今度こそ、俺はお前のことをロクに手助けもできんだろう。それでも、決意は変わらないか？」

「……うん。あたし、まだまだ未熟だけど、それしか方法はなさそうだから……。だからあたし、やってみる。《身喰らう蛇》の陰謀を阻止してきつとヨシユアを連れ戻してみせる！」

「そうか……。ならば何も言うことはない。遊撃士として……それから1人の女として。お前は、お前の道を行くといい」

「……父さん……」

エステルがカシウスに抱きついた。

「あたし……あたし……」

「そっだ……。大事なことを言い忘れていた」

「え……？」

「エステル、どうか頼んだぞ。ヨシユアを　　あの馬鹿息子を連れ戻してくれ」

「……あ……。うん……。わかった……。またこの家で……。みんなと一緒に暮らすためにも……。絶対にヨシユアを連れ戻すから……」

……！」

第6章 乙女の決意(4)

2ヶ月後 ゼムリア大陸中西部 レマン自治州・峡谷地帯 遊撃

士協会 ルロックル訓練場

そこで、エステルとアネラスは特訓をしていた。

「いくわよ、アネラスさん！烈破 無双撃ッ！」

「わわっ、さすが強烈だね。でも……今度はこっちの番だよっ！剣

技 八葉滅殺ッ！」

「くっ……！」

「まだまだっっ！」

アネラスは続いて技を繰り出してきた。

「（くっ……このままじゃ持たない……。それなら……！）」

エステルは技の間隙について避け、

「え、うそっ……！」

「もらったああっ！」

「きゃうっ……！」

一閃を食らわせた。

「あいつたあ〜っ……！」

「だ、大丈夫、アネラスさん？」

「あはは、大丈夫だよ。何とかガードも間に合ったしね」

アネラスが立ち上がった。

「はー、でも参っちゃったな。とうとうエステルちゃんにあの技を

返されちゃったか〜」

「えへへ、まぐれよ、まぐれ。今までコテンパンにされた分、ちょ

っとくらいは返せないかね」

「ふふっ。やる気だね、エステルちゃん。それなら、ついでだから

もう1セット付き合ってくれる？」

「うん、望むところよー！」

「あらあら、2人とも元気ねえ」

「あ、管理人さん。お早うございま〜す！」

「管理人さん、おはよう！」

ルロツクル訓練所の管理人であるフィリス管理人がやって来た。

「はい、おはよう。エステルちゃん、アネラスちゃん。朝ゴハンができたから呼びにきたんだけど……。うーん、お邪魔だったかしら？」

「あ、そうなんだ。アネラスさん、どうしよう？」

「うーん、そうだね。ゴハン冷めたらもったいないし、今朝はこれで上がりにしよっか。管理人さん、クルツ先輩はどうしてます？」

「クルツさんなら演習の準備があるって先に済ませちゃったわよ。

何でも今日の演習はかなりハードなんですってね？」

「え……」

「そ、そんな風に先輩が言ってたんですかっ？」

2人は身震いした。

「うん、朝食はしっかり取っておくようにとの伝言よ。2人とも、いっぱい食べてしっかりスタミナをつけてね？」

ルロツクル宿舎

「はあ……。けっこうお腹いっぱい。訓練前にこんなに食べたらまずいような気がするけど……」

「ふふ、管理人さんの料理ってホントおいしいもんね。でも、訓練と違って途中でバテるわけにもいかないし、ちょうどいいんじゃないかな？」

「うん、確かに。やっぱりスタミナは基本よね。それにしても……。ここに来てからもう3週間か。正直、あつという間だったな」

「ふふ、エステルちゃん、ものすごく頑張ってたもんね。私も一緒に訓練しててホント、いい刺激になったよ」

「えへへ……。そう言ってもらえると嬉しいな。でも、クルツさん

が訓練教官として来てくれたのも驚いたけど……。まさかアネラスさんがあたしと同じ訓練を受けるとは思ってもみなかったわ」

「んー、私も正遊撃士になってから半年くらいの新米だからねえ。シエラ先輩からエステルちゃんの話聞いて渡りに船だと思ったんだ。前々からこの訓練場のことは先輩たちに聞いて興味があつたし」

「そつか……。でも、こんな場所があるなんてギルドも結構大きな組織なのね。最初、父さんたちから話を聞いたときはあまりピンとこなかったんだけど……」

く エステルの回想

「言つたように、もう俺はお前を止めるつもりはない。だが正直、今のお前の実力では結社の相手はあまりにも危険すぎる。そこでエステル……。『ルッロツクル』に行ってみないか？」

「『ルッロツクル』？」

「レマン自治州にある遊撃士協会が所有している訓練場だ。宿舎の周りには、様々な種類の本格的な訓練施設が用意されている。遺跡探索技術、レンジャー技術、サバイバル技術、対テロ技術……。実戦レベルの訓練を行うのにもっとも適した場所と言えるな」

「そんな場所があるんだ……。でも、自治州ってことはその訓練場、外国にあるのよね？あたし……。今、リベールを離れるわけには……。エステルは少しでもヨシユアの情報を集めたいと思つていた。そのためには、少しばかりリベールから離れたくなかつた。」

「外国とはいっても国際定期船を使えば1日よ。訓練期間は、そうね……。1ヶ月もあれば一通り終わるわ。その間、何か情報が入つたらすぐに連絡できるように手配する。それならどう？」

「……」

「まあ、勧めはするが決めるのはあくまでお前だ。よく考えてみる」といい

「……うん、もう決めた。あたし、訓練を受けてみる」
「あらま……」

シエラザードはこれほど早く決めることは意外だったようだ。

「ふむ、思い切りがいい。どうやら自分でも思うところがあるらしいな？」

「うん……まあね。考えてみれば、あたしってヨシユアに頼りきりだった。何か事件が起こったときはいつもヨシユアが導いてくれた。でも、これからは自分の判断が頼りなんだよね。だからあたし……その訓練場で自分を鍛えてみる」

「エステル……」

「そうか……。なら、明日にでも訓練場の利用を申請するといい。ロレント支部から出来るはずだ」

「うん、わかった」

「ね、エステル……。出発が決まったら王都の百貨店に寄ろうか？」
シエラザードがエステルを誘った。

「え、どうして？」

「正遊撃士になったお祝いよ。せっかくだから新しい仕事用の服を買ってあげるわ」

「なるほど……。その服って、シエラ先輩のお祝いプレゼントだったんだね。いいな。可愛い服を買ってもらえて」

「う、うん……。丈夫な生地を使っているし、動きやすくていいんだけど……。こういう女の子っぽい服ってあたしには似合わないかも……」

「そんなことない！とつてもよく似合ってるってば。それに遊撃士でも女の子にオシヤレは必要だよ。否、遊撃士だからこそオシヤレには気を使わなくちゃ！」

アネラスが熱弁し始めた。

「ア、 アネラスさん？」

「そうだ、エステルちゃん。リボンとか付けてみる気ない？すごく似合うと思うんだけどなあ」

「え、遠慮しときます。ていうか……前々から思っていたんだけど。アネラスさんって可愛いものに目がないでしょ？」

「もちろん！可愛いことは正義だもん！シエラ先輩みたいな格好いいお姉さまにも憧れるけど……。やっぱり可愛く着飾った年下の女の子に勝るものなし！ぬいぐるみなんか抱いてたらぎゅっと抱きしめたくなるよ」

「あ、あはは……。 (こりゃ、ティータに会ったら卒倒するかもしれないわね……)」

「くす、それにしても……。初めて会った時と較べるとエステルちゃん、変わったよね」

「えっ？」

「最初はいかにも新人君で初々しい印象しかなかったけど……。今は、初々しさを残しながらぐっと頼もしくなった気がする。それって結構スゴイことだよ？」

「や、やだなあ……。 アネラスさん、おだてないでよ」

「あはは、照れない照れない。うむ、これは先輩として私も負けてられないな」

「もっ……」

そこで、エステルはハッと気づいた。

「そういえば、アネラスさん。そろそろ演習の時間じゃない？」

「あ、そうだね。いったん部屋に戻ろうか。それじゃあ、また後でね〜！」

アネラスは席を立って、2階の部屋に向かっていった。

「ふー、ほんと元気な人ねえ。アネラスさんが一緒にこつちも助かっちゃったな……。さてと、あたしも部屋に戻って必要な装備を取って来なくちゃ」

エステルは2階の自分の部屋に向かった。

第6章 乙女の決意(4) (後書き)

オリキャラは第6章が終了したら本格的に出そうと思います。ここで、オリキャラの『レイン』の技クラフトを作ろうと思っています。もし良ければ、何か良いクラフトを教えてください。

第6章 乙女の決意(5)

2階 自分の部屋

「さてと、演習と言うからには一通りの装備が必要になりそうね。実戦と同じで何が起こるか分からないし……」

エステルはベッドの上に置いてあったカバンから、ハーモニカを取り出した。

「………………。うん、今日も頑張らなくちゃ」

エステルは装備を確認した。

「これでよし。…………それじゃあ、玄関に行くとしますか！」

1階 テーブル

「来たか、エステル君。向かいの席についてくれ」

エステルはクルツの向かいの席に座った。

「本日の演習は遺跡探索だ。この宿舎の西にある『バルスツール水道』に入ってもらおう」

「『バルスツール水道』…………。古めかしい名前だけどやっぱり訓練用の施設なの？」

「ああ。中世の遺跡を改築した施設だね。昔の仕掛けも残っているし、危険な魔獣も多く徘徊している」

「なるほど。かなり実践に近そうですね。それじゃあ早速、その水道に出発するんですか？」

「いや、その前に…………。2人とも、これを見てくれ」

クルツは、見慣れぬ形のオーブメントを取り出した。

「あれ、これって…………」

「もしかして…………戦術オーブメントですか？」

「ああ、その通りだ。導力魔法の使用を可能にする戦術オーブメン

トを造っているのは『エプスタイン財団』というが……。これは先月、財団から納入されたばかりの新型でね。スロットの数は1つ増えて7つ。今までのアーツに加えて新型のアーツも組み合わせることができる」

「へ〜、凄いじゃない！」

「うんうん！かなり期待できそうだね。で、クルツ先輩。私たちも貰えるんですか？」

「ああ、希望するならギルドから無償で提供される。ただし……」
クルツがそこで言葉を切った。

「難点がひとつあってね。新型は、基本的アーキテクチャが大幅に変更されてしまったんだ。だから、互換性の問題で以前のクオーツが装着できない。新規格のクオーツが必要になる」

「ええ〜っ！？そ、それってつまり……」

「今まで合成したクオーツが無駄になるってことですかっ！？」

「残念ながらそうだ。面倒だろうが、また最初から1つずつ揃えてもらうしかないな」

「そ、そりゃないわよ〜」

「うーん……。確かに迷っちゃうよね。このまま今のオーブメントを使い続けたらダメなんですか？」

「ダメじゃないが、推奨はしない。新型オーブメントは、全ての面で以前のものより性能が高いんだ。最大EPも大幅にアップするし、最新型のクオーツにも対応できる。将来的には、さらなる身体能力の向上が期待できるということだ。それに何と云っても以前のオーブメントになかった新しいアーツが組めるのが大きい。……エステル君。ロランス少尉を覚えているか？」

「えー！？」

エステルの頭にロランス少尉の顔が浮かんだ。

「う、うん。忘れるなんて出来っこない相手だけ……」

「シエラ君から聞いたが、彼は未知のアーツを使ったそうだな。複数の相手を一度に攻撃しながら混乱効果を与える上位アーツ……」

実は、新型オーブメントではそのアーツを組むことも可能なんだ。名前を『シルバースーン』という」

「『シルバースーン』……」

「そ、それじゃあ……。あの赤い隊長さんは新型を使っていたんですね!？」

「その可能性は高そうだ。さて、君たちはどうする?」

「う、うーん……。やっぱり迷っちゃいますね。将来性は新型の方が上だけど、当面の戦力ダウンは痛いし……」

「……。あたしは……。新型を使いこなしてみたいな」

「え?」

「あの時、あたしはあの銀髪男に全く歯が立たなかった。オーブメントを変えたからって自分が強くなるわけじゃないけど……。それでもあたし、より大きな力を使いこなせるようになってみたい。だから……」

「エステルちゃん……。……うん、確かにそうだね。クルツ先輩。

私も新型、使わせてください!」

「いいだろう。それでは受け取ってくれ」

エステルとアネラスは新型の戦術オーブメントを受け取った。

「あと、これを渡しておこう」
各属性のセピスを貰った。

「それだけあれば基本的なクオーツは揃うだろう。演習に行く前に、その工房でロベルト君に合成してもらおうといい。新しい結晶回路クオーツと導力魔法オーバルアーツのリストはブレイサー手帳に追加しておいた。工房に行くときは自分たちで確認しておくように」

「うん、了解です」

「さらに……。今日の演習は長丁場になるはずだ。いざという時に備えて、食料も用意した方がいいだろう」

「うーん、食料ですか……。それはフィリスさんにお願ひすればOKですよね?」

「ああ、そうだな。ロベルト君とファイリス管理人……2人に相談して準備を整えるように。さて、エステル君にはついでにこれも渡しておこう」

クルツはエステルにクオーツなどを渡した。

「え、これって……」

「あ、いいな。しかも結構良さそうな物じゃない」

「ああ、全て特注品さ。もちろんクオーツは新型オーブメント用のものだ。準遊撃士での功績に対するギルドからの報酬だと思ってくれ」

「えへへ、ありがとう!」

「それでは自分は宿舎の出口で待っている。準備が終わったら来てくれ」

クルツは先に外に出ていった。

「それじゃあ、エステルちゃん。早速、演習の準備を始めようか」

「うん、ファイリスさんとロベルトさんの所に行つて話を聞いてみなくちやね」

「ファイリス管理人」

「今日の演習はまた一段と厳しいみたいね。手軽に回復できる便利な料理をささつと教えてあげちゃうわ?」

ファイリス管理人はレシピ手帳を渡した。

「そうそう、食材も忘れずにね」

同時に食材の詰め合わせも貰った。

「今、もらった食材で料理を作れちゃうんですか?」

「ええ、基本的な料理はもちろん作れるんだけど……。食材の中には魔獣が落とすものもあるの。そんな材料をたくさん使う料理は食材を集めるだけでも一苦勞よ」

「た、確かに……。色々とヘンな食材があつたわよね」

「うーむ、なるほど。働かざる者、食うべからずですね」

「料理についての詳しい説明はブレイサー手帳にもあるから時間があるときにみておいて。それじゃあ、お2人さん。演習がんばってね」

「うん、ありがとう」

「お料理、試してみますね！」

↳ 整備士ロベルト

「お、どうやら2人とも新型オーブメントにしたみたいだね。手帳に載っている新型クオーツとアーツのリストにはもう目を通してみたいかい？基本的なところは一緒だけど、能力の変わっているのもあるからきちんと確認しておく方がいいよ。さてと、実際にクオーツを作る前にまずはおさらいから始めようか。オーブメントのことで忘れたことがあったら聞いてくれよ」

エステルたちはオーブメントのことを一通り聞いた。

「さてと、説明はこれくらいにしてさっさと演習の準備をしなくちゃな。少なくとも回復のアーツくらいは使えるようにしておいた方がいいよ。回復のアーツを使うためには、どんなクオーツが必要になるかわかるかな？分からなかったら手帳で調べて早速、合成してみてくれよ」

エステルは回復系のクオーツを合成した。

「うん、ちゃんと回復のアーツが使えるようになったみたいだね。」

それじゃ、2人とも気を付けて行ってくるんだよ」
準備を終えたエステルたちは出口へと向かった。

第6章 乙女の決意（6）

出口

「新しいクオーツを作って回復系のアーツも用意したか。これでようやく出発できるな」

「ほっ……」

「えっと、確か西の方にある中世の下水道でしたよね？」

「ああ、『バルスताल水道』だ。先ほども言ったが、水道内には危険な魔獣が徘徊している。2人とも、準備はいいのか」

「ええ、大丈夫です」

「わかった。それでは出発しよう。2人とも、付いて来てくれ」

「了解！」

「分かりました！」

バルスताल水道

「ここが『バルスताल水道』……」

「へへ、結構大きな下水道みたいですね」

「王都の下水道ほどではないが、それなりの広さはあるだろう。」

本日の演習は、水道の最奥にあると思われる機密文書の回収だ」

「き、機密文書お？」

「はは、あくまでもそういう想定での演習だよ。とにかく、水路の最奥まで行けばダミーの書類が見つかるはずだ。それを回収できたら演習終了さ」

「うーん、話を聞いている限りだと簡単そうに聞こえますけど……」

「当然、演習というからには色々と用意してるのよね？」

「まあ、ご想像にお任せするよ。ちなみに徘徊している魔獣がかなり手強いのは確かだ。ひよっとしたら『チェインクラフト』を使い

「こなす必要があるかもしれない」

「『チエインクラフト』って言うんですけど……」

「ここに来てから特訓した、仲間同士による協力攻撃ですよ？」

「ああ、複数の仲間が敵を同時に攻撃できるクラフトだ。せっかくだから、この演習中に試してみるといい」

「うん、わかった！」

「……それと、戦闘に際して君たちにこれを渡しておこう」

エステルたちは魔獣手帳を受け取った。

「あ、これって……」

「これは……『魔獣手帳』ってヤツですね？」

「ああ、戦った相手の情報を記録しておくための手帳さ。敵の特性が判り次第、その手帳に書き記すといい」

「敵の情報か……。戦いには重要な事よね」

「うん、まず敵を知ることが兵法の基本でもあるからね。恩に着ます、クルツ先輩」

「はは、礼には及ばないよ。加えて言わせてもらうと、傷を負った場合には無理せず撤退するように。オーブメントの回復装置も念のため用意したからね」

「あはは、さすがはクルツさん。何もかも準備万端ってわけね」

「うん、それだけに私たちもちゃんと期待に応えないと。それでは行ってきま〜す！」

バルスータル水道 最奥

「やあ、ようやく来たか」

最奥にいたのはクルツだった。

「ク、クルツ先輩！？」

「え、ちょっと待って……。入口の所にいたはずなのにどうして先回りしているわけ？」

「実は他に抜け道があつてね。君たちが仕掛けを解除している間にまっすぐここに来させてもらったよ」

「ガクツ……。せつかく苦労して仕掛けを解いてきたのに……」

「そ、それはともかく……。やつぱりここが地下水路の最奥なんですよね？」

「ああ、その通りだが？」

「それじゃあ……回収する機密文書っていつのは？」

「ふふ……」

クルツが武器を構えた。

「へっ!？」

「や、やつぱり……」

「自分の役は、機密文書を強奪しに来た某国の武装作業員だと思つてくれ。当然、同じ目的を持った者たちは実力を持って排除させてもらうよ」

「あ、あんですって!？」

「機密文書は単なる口実……。本当の演習課題は、探索中の予想外の交戦つてわけですね!？」

「ふふ、そういうことだ。それでは……こちらから行かせてもらうぞ!」

「やれやれ……。手加減したつもりはなかったが。どうやら、自分の負けのようだな」

「はあはあ……。あたしたち……勝つたの……?」

肩で息をしながらエステルがつぶやいた。

「う、うん……。さすがは『方術使い』……。2人がかりでやつと勝てたね……」

「さて……作業員が無力化したことで君たちは機密文書を回収した。今回の演習はこれで終了だ」

「そ、それじゃあ今日の訓練は……」

「これで終わりとか……？」

「はは、まさか。宿舎に戻って昼食を取ったら南にある『サントク
ロワの森』に向かう。演習の反省点を見直す意味でもみっちり訓練
を受けてもらおうか」

「ひえ……」

「クルツ先輩って……ホント、容赦ないですよねえ」

宿舎前 夜

「さてと、本日の訓練は終了だ。2人ともご苦労だったね」

「つ、疲れた……」

「た、確かに……。今までで一番ハードだったね」

「やれやれ。まだまだ体力が足りないな。今夜は早めに休んで明日
に備えておくといい」

「は……い……」

「お疲れさまでした……」

力のない声で宿舎に入ったエステルとアネラス。

宿舎 1階

「はあ……。今日は本当にハードだったね。まあ、ここでの訓練も
そろそろ仕上げみたいだけど」

「うーん。嬉しいような、残念なような。それにしても……クルツ
さんって、かなり強くない？あたしたち2人を相手にしてもまだま
だ余裕がありそうだったし」

「あはは、それはそうだよ。『方術使い』のクルツと言えばリベ
ルの遊撃士じゃNo.2だし。一番はもちろん、エステルちゃんの

お父さんだけだね」

「あ、うん」

「ちなみに、正遊撃士のランクはGからAまでの7段階あるの。私なんて、半年かけてやっとFに昇格できたけど……。クルツ先輩なんてBでもうすぐAに昇格するらしいよ」

「へえ、A級っていつたらジンさんと同じってことよね。(でも、その凄腕のクルツさんの記憶を奪った犯人って……。あたし……。止められるのかな……)」

「……エステルちゃん？どうしたの、真剣な顔して」

「あ……。ご、ごめんなさい。ちよつと、ボーツとしちゃって」

「……。ひよつとして……。ヨシユア君のこと考えてた？」

「あ……。うん、そんなところかな」

「そつか……。私、シエラ先輩から少し事情を聞いたんだけど……。心配だよ……。今、どこで何をしてるかとか」

「……。うん。でも、大丈夫！あんまり心配しないで。しよせん、ヨシユアなんて1人で勝手に思い詰めて出ていった家出息子に過ぎないんだから……。絶対に見つけ出して首に縄をかけてでも連れ戻すっ！」

「そうだね、その意気だよ！エステルちゃんがその気だったらヨシユア君は絶対に見つかる！お姉さんが保証してあげるよっ！」

「あはは、ありがと……。あ、でも……。アネラスさんってあんまりお姉さんって感じがしないよーな」

「あ、ひどい、エステルちゃん。私のこと、子供っぽいとか思ったりしてるんでしょう？」

「(ギクツ……)い、いや、そこまでは」

「うーん、これでも君より2歳は年上なんだけどな。まあいいや、年上扱いされるより友達として付き合える方が嬉しいし。ふふっ、今後ともよろしくね？」

「あ……。うん、こちらこそよろしくー！」

「さ〜てと、そろそろ休んで明日に備えるとしますか。ずいぶん疲れちゃったけど明日の訓練、出られそうかな？」

「あ、それは大丈夫。あたし、いくら疲れてても次の朝にはあんまり残らないから。アネラスさんさえ良ければいくらでも付き合わせてもらおうわ」

「やった、そうこなくっちゃ。それじゃあ、おやすみなさい」

「うん、おやすみなさい」

アネラスは自分の部屋に行った。

「さてと……あたしも部屋に戻って休もうかな。あ、そういえば。

演習でセピスを手に入れたっけ。新しいクオーツも揃えたいし、寝る前に工房に寄ってみようかな？」

2階 自分の部屋

「はあ、もうクタクタ……。明日のためにもさっさと寝なくちゃね

……」

エステルはベッドで横になった。

深夜

「（ん……？なに……この音……）」

エステルは物音で目を覚ました。

「何この音……。ひよっとして銃声!？」

突然部屋がノックされた。

「……エステルちゃん！エステルちゃん、起きてる!？」

アネラスが部屋に入ってきた。

「アネラスさん!？」

「よかった！起きてたんだね！さあ、早く支度をして!」

「う、うん！この銃声ってまさか……」
「正体は判らないけど何者かが襲撃してきたみたい！クルツ先輩が応戦しているからエステルちゃんも急いで！」
エステルは急いで装備を整えた。

宿舎 1階

「クツ……これではらくは……」

クルツが正面の扉に鍵をするとその場に崩れ落ちた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「た、大変っ！腕にケガをしていますよっ！」

「大丈夫……。ただのかすり傷ですから……。それよりも……敵の侵入を防がないと……」

「ク、クルツさん！？」

「せ、先輩！？ケガをしたんですか！？」

エステルとアネラスがクルツのもとに寄った。

「エステルちゃん！アネラスちゃん！」

「すまない、油断してしまった……。見ての通り、武装した集団がこの建物を襲撃しているようだ……。2人とも迎撃に協力してくれ……」

「りよ、了解！」

「そんな……。先輩に手傷を負わせるなんて……。誰が襲ってきたんですか！？」

「先ほど少しやり合ったが……。あの格好は……。おそらく『猟兵団』の一派だろう……」

「猟兵団って……。あの百戦錬磨の傭兵たち！？」

「で、でも……。どうしてそんな人たちが！？」

「リベール国外では遊撃士協会と猟兵団は事あることに対立している……。ここが彼らの標的になってもそれほど不自然ではない……」。

ひよつとしたら……例の結社が手を回したのか……」

「え!?!」

その時、窓が叩き割られて、鎧に身を包んだ猟兵が1人侵入してきた。

「あ……!!」

「しまった!」

エステルとアネラスがすぐに迎撃態勢に入った。

「はあはあ……。な、何とか勝てたけど……」

「そ、その人!武器を捨てて降伏してっ!」

「クク……。思ったよりもやるようだ。だが、詰めは甘いようだな」

「え……」

突然、同じ格好をした猟兵が窓から侵入してきて、煙幕を投げた。たちまちエステルたちの視界が真っ白になった。

「あ……!!」

「は、発煙筒!?!」

「フフ……。お眠り、仔猫ちゃんたち」

エステルたちはその場に崩れ落ちた。

第6章 乙女の決意(7)

サントクロワの森

「ん……。もう朝かあ……。……。……。！！！」

エステルはハッと身を起こした。

「え……。ここ、どこ……。？たしか敵が襲ってきて……」

エステルが周りを見渡した。そこで、アネラスが横に倒れていた。

「アネラスさん！起きて、アネラスさん！」

アネラスを揺する。

「うーん……。えへへ……。うさぎさんとー……。くまさんのぬいぐるみ……。……。どっちにしようかなー……」

幸せそうに寝ているアネラス。

「な、なんの夢を見ているんだか……。アネラスさん！大変なの、起きてってば！」

「ん……。？」

目を開けたアネラス。

「あれ、エステルちゃん……。あ、そつかあ……。もう朝練の時間なんだ……」

「ガクツ……。朝練どころじゃないってば。お願いだから目を醒ましてよー！」

「ふえ……。？」

ようやく体を起こし周りを見るアネラス。

「……。……。えーと。何がどうなっちゃってるの？もしかして昨日の襲撃って、ただの夢？」

「あたしもそう思いたいけど。2人とも覚えているってことはやっぱり、夢じゃないと思うわ」

「あー、なるほどねー。いやー、これはお姉さん、一本取られちゃったなあ」

軽く笑い飛ばすアネラス。

「アネラスさん……。まだ寝ぼけてるでしょ」

「えっと、まずは状況を整理してみようか。昨夜、猟兵団らしき集団が宿舎を襲撃してきて……。クルツ先輩が手傷を負って、私たちが駆けつけた直後に窓から敵が侵入してきて……。その直後、私たちはすぐに眠らされてしまった」

「うん。あたしの記憶と同じみたい。問題は、どうしてこんな所で目を醒ましたかなんだけど……」

「うん、確かにおかしいよね。持ち物の類は無くなってみたいだけ……。訓練の時に使っていた武器を取られちゃったみたい」

「あ、あたしもだ。っていうことは、あたしたちをこの場所に運んできたのって……。襲撃してきた猟兵団？」

「うん……。そう考えるのが自然だけど……。ただ、私たちを拘束しないで放置した理由が分からないんだよね」

「気絶したあたしたちをここに運んで武装解除した後……。何らかのアクシデントが起きて慌てて別の場所に移動したとか？」

「なるほど。それはイイ線行ってるかも。そうすると、この場所に長居をしていたら危険みたいね。エステルちゃん、地図は持ってる？」

「あ、うん。荷物は取られてないから……。あつたあつた」

エステルはルックルの地図を広げた。

「うん、やっぱりそうだ。ここは昨日訓練で使った『サントクロワの森』だと思う」

「ということは……。当面の目的は、森を脱出して宿舎の様子を確かめるくらい？」

「うん、先輩の安否とか他にも色々と気になるけど……。まずは現状を打破しなくちゃ」

エステルは地図をたたみ、準備をした。
「それじゃあ、出発しようか。敵が近くにいるかもしれないし、慎重に行動した方がいいね」
「うん、わかった」

サントクロワの森 出口付近

エステルとアネラスが看板を見つけた。

『サントクロワの森。レンジャー訓練のほか、サバイバル訓練など推奨』

「あ、この看板って……」

「うん、案内板みたいだね 昨日確かに通ったし、きつとこの先が出口だよ」

「やった！これで森から抜けられるわね」

サントクロワの森 出口

「アネラスさん！あそこが出口みたい！」

「ふ〜……。ようやく一息付けるねえ」

「あらあら……。ちよつと目を離れたスキに逃げ出すなんて悪い子たちね」

声が出たと同時に銃弾が飛んで来た。

「きゃ……！」

「くっ……！」

「ふふ……。あたしの狩り場にようこそ」

「お、女の人！？」

「エステルちゃん、気を付けて！この人……かなり強いよ！」

「あら……。それを見抜く力はあるのね。それに、あのガスを食ら

つてもう目が醒めたのは驚きだね。さすがは遊撃士。体力だけは無駄にあるみたいね」

「あ、あんたたち！ いったい何が目的なの！？ どうして訓練場を襲ったのよ！？」

「ふふ……。答える義理はないわね。あなたたちに選べるのは2つ。大人しく降伏するか、このままあたしに狩られるかよ」

「くっ……。 (回収した装備で何とか戦える……！？) 」

エステルはこのまま闘う決意をした。

「アネラスさん！」

「うんっ！」

エステルとアネラスは武器を構えた。

「ふふ……。いいわ、仔猫ちゃんたち。存分に狩らせてもらうわよ！」

「クッ……。少し甘く見ていたか……」

「はあはあ……。遊撃士を甘く見ないでよね！」

「小娘2人と侮ったのが運の尽きだったみたいだね！」

「フフ、威勢のいい仔猫ちゃんたちだこと……」

猟兵は立ち上がると、再び発煙筒を投げた。

「またっ……」

「エステルちゃん、息を止めて！」

「すでに方術使いは捕まえた。仔猫ちゃんたちの味方はいない。あきらめて投降することね……」

煙が消えた時には猟兵の姿はなかった。

「逃げられたか……。アネラスさん。深追いしない方がいいよね？」

「そうだね……。待ち伏せされる危険もあるし。ねえ、エステルちゃん。今の人が言ってた『方術使いは捕まえた』って……」

「あ……。うん……。クルツさんのことだと思う」

「そっか……………」

「だ、大丈夫だってば！仮に捕まったとしてもクルツさんなら無事だって！それに……………こういう時こそ今までの訓練が活かせると思う」

「あ……………。非常時の行動、安全の確保、そしてカウンターテロ行動……………。うん……………確かにそうかも！教えてもらったことを活かしてクルツ先輩を助けなくっちゃ！」

「うんうん、その意気！ね、アネラスさん。とりあえず宿舎に戻らない？敵に占領されたままかどうか確かめた方がいいと思うし」

「うん、そうだね。それじゃあ、出発しようか」

エステルたちは宿舎へと向かった。

第6章 乙女の決意（8）

宿舎前

「ここから見た限りだと人の気配はないみたいだけど……」
近くの壁から宿舎を伺う2人。

「うん……。入っても大丈夫そうだね。でも、トラップが仕掛けられて
いる可能性もあるから慎重に行こう」
「了解」

宿舎 1階

「あ……。あの槍、クルツさんの……」

「……。とりあえず……。宿舎の中を調べてみようか。何か手がかりが見つかるかもしれないし……」
「うん……。わかった」

く血のりで汚れた床

「これって……。まさかクルツさんの？」

「うん……。先輩の可能性は高そうだね。この出血量なら致命傷じゃないと思うけど……」

く壊れた通信器

「さすがプロの傭兵。これを見逃すわけなかったか」

アナラスがため息をついた。

「なるほど。応援を呼ばせないつもりね。これはかなり痛いかも……」

……

く空の食材入れのタル

「これって……。敵が取って行ったのかな？」

「う、うん。その可能性が高いと思うけど。管理人さんもないし一体、どうしちゃったのかな」

く割られた窓

「これって、昨日の夜、猟兵が侵入した時のだよね？」

「うん……。あの身のこなし……。相当、訓練を積んでいると思う」

く何か破り取られた跡

「確かここに、地図が貼っていなかった？」

「うん、私たちが持っている物と同じだね。それを持っていったってことは……」

「とりあえず、宿舎の中を一通り調べてみたけど……。2階はまったく異常なし。荒らされたのは1階だけみたい」

「うーん……。何か理由があると思うけど。でも、敵が何をしているか大体掴めそうな気がしてきたね」

「え……！」

「敵の行動は謎も多いけど一貫している所もあると思うんだ。この宿舎、そして森のテント。2つの場所で発見した手がかりを合わせると……」

「あ……。ひょっとして！新たな拠点に移動したってことね！」

「うん、私もそう思う。多分、あの森のテントはこの宿舎を襲撃するための仮の拠点だったんじゃないかな。だとしたら……。あそこの

人気が無かったのは他に拠点を移したからだと思うの」

「あ、なるほど……。でも、この宿舎を拠点にしたわけじゃないのよね？」

「昨日の襲撃からも判るようにここを守りはあまり固くないしね。万が一、ギルドの応援が来た時に人質と一緒に立て籠もれる場所……。そんな場所に拠点を移したんじゃないかと思うの」

「うんうん。そう考えると辻褄つじつまが合うかも。だとすれば、連中が移動した場所って……」

「あ、あんたたち!？」

いきなり入ってきたのは、整備士ロベルトだった。

「あ……」

「ロベルトさん!？ぶ、無事だったんだ!？」

「昨夜、クルツさんが隙を見て逃がしてくれてね……。今まで何とか隠れていたんだ」

「そ、そうなんだ……」

「よかった……。無事でいてくれて……」

「すまない……。僕一人が逃げることになって……。まったく……男のくせに情けなさすぎるぜ」

「お、落ち込まないでよ。相手はプロの傭兵なんだし」

「うんうん、その通りですよ。人質にならなかつただけでもラッキーだったと思わなくちゃ」

「そうか……。そう言ってもらえると助かるよ。それで結局、クルツさんと管理人さんはどこに行ったんだ？」

「そ、それが……」

エステルとアネラスは、敵の集団が2人を連れて別の拠点に移った可能性を話した。

「なるほど……。守りやすそうな拠点が。そうなる……。『グリムゼル小要塞』じゃないかな」

「よ、要塞!？」

「そ、そんな物がこの近くに!？」

「要塞といつても本物つてわけじゃない。最近、建てられたばかりの軍事施設を模した訓練施設だね。対テロ訓練などに使われるんだ」
「そ、そんな場所があるんだ。……アネラスさん」
エステルがアネラスを見た。

「うん……わかってる！」

「お、おい……。まさか君たち2人であの集団に挑むつもりかい？
ギルドに連絡して応援を呼んだ方がいいんじゃない？」

「あ、通信器、壊されたわよ」

「……………（パクパク）」

ロベルトは言葉が出なかった。

「えっと、ロベルトさんは通信器の修理をお願いします。直り次第、ギルドに事情を伝えて応援を呼んでくれますか？」

「……わかった。オーブメントの整備が必要なら工房の方に来てくれ。それじゃあ武運を祈るよ！」

ロベルトは通信器の修理を始めた。

「さてと……。行こうか、エステルちゃん。その『グリムゼル小要塞』に！」

「おう、合点だ！」

エステルとアネラスはグリムゼル小要塞に向かった。

グリムゼル小要塞

「これが『グリムゼル小要塞』……………」

本物の要塞を模した物とはいえ、本物としか見えない。

「すごいね……。かなり本格的な訓練施設だよ。とりあえず、外からだと人の気配は感じられないけど……………」

「うん、間違いない……。つい最近、複数の人間が通ったような跡があるわね」

「ふふ、さっそく追跡訓練の成果が出てきたみたいだね。この様子

だと、敵の数もそれほど多くはないと思うよ。3、4人つてとこじやないかな」

「敵は凄腕みたいだけど……あたしたちだって正遊撃士だし。対抗できない相手じゃないよね」

「うん、全力を尽くそう！」

グリムゼル小要塞 最奥

「カカツ、よく来やがったな」

「あ……！」

「やっと出た……！」

「よく来たなあ。俺たちの新たな拠点によ。仕掛けは楽しんでもらえたかい？」

「えー、おかげさまでね。それよりも、クルツさんたちはその扉の向こうにいるみたいね」

「痛い目に遭う前に解放した方がいいと思うよ」

「クク、小娘2人がずいぶんと囁るささやじゃねえか。死地とも知らずにのこの飛び込んでくるとはな」

「フン、それを言うならあんたたちだって同じでしょ。何が目的か知らないけど袋のネズミと同じじゃないの」

「なにイ……？」

「ギルドの応援もすぐに来るよ。そうなったら、あなたたちの勝ち目は無いと思うんだけどなあ」

「フン……。宿舎の通信器は完全に破壊した。それでそうやって連絡を取る？」

「え、えつと……（何か上手いハツタリは……）」

エステルはしばし考えた後、いい考えが浮かんだ。

「フン、連絡なんてそもそもする必要がないのよ。定時連絡がない時点でこちらに異常が起きたのはギルドにも分かっているはずだし」

「なに……?」

「確かに、今朝の時点で異常に気が付いているはずだから……。うん、そろそろ応援が到着するかも?」

「……チツ。詰めが甘かったみたいだな。まあいい。どのみち貴様らは目障りだ。とっとと片付けさせてもらっせ!」

「望むところよ!」

「いざ、尋常に勝負だよ!」

「……………」

倒された獵兵は何も話さない。

「はあはあ……か、勝った……。で、でもこの手応えって……」

「う、うん……。エステルちゃんも気付いた?」

「フフ……。見事、騙されてくれたようだね」

「ハハハッ。面白いように引っかかったな」

扉の向こうから獵兵が出てきた。

「あっ!」

「あ、新手!?」

「はは、だから違っって」

「もう口調は変えてないからあんたたちにも分かるだろう?」

「その姐さん口調……。……も、もしかして!?」

「カ、カルナ先輩!?」

「ビンゴだ」

仮面を取るとカルナだった。

「アネラス、エステル。ずいぶん久しぶりじゃないか」

「久しぶりって……。一体どうなっちゃってるの?そ、それじゃあこっちは……」

「グラッツ先輩ですねっ!?」

「おうよ!」

続いて、グラッツが仮面を取った。

「よう、お2人さん。お疲れさまだったなあ」

「お、お疲れさまです……。もしかしてこれって……」

「フフ、そういうことだ。エステル君、アネラス君。最終訓練、ご苦労だったな」

今闘った猟兵はクルツだった。

「さ、最終訓練……」

「つ、つまり……。昨日の襲撃から全部、お芝居だったんですかっ！？」

手の込んだドッキリだった。

「ふふ、この訓練場における慣例のようなものでね。最終訓練は、訓練生を騙して危機的状況を体験させる趣向なんだ」

「あ、あんですってっ！？」

「んで俺たちは、その手伝いのためわざわざリベールから来たってわけだ」

「ふふ……。なかなか楽しませてもらったよ」

「うっ……。先輩ってば意地悪すぎですよっ！」

「そ、そうよ！あたしたち本気でピンチだと思ったんだからね！」

「まあ、それが狙いだからね。ちなみに言っておくが……本物の猟兵はこんなに甘くないぞ」

「うっ……」

「あっ……」

「リベールでは猟兵団の運用は禁止されているからあまり想像できないだろうけど……。他の国じゃ、遊撃士協会と猟兵団の対立は日常茶飯事なのさ。自然と、遊撃士たちも危機的状況に備える者が多い」

「だから、リベールの遊撃士にも一度は危機的状況を体験して欲しい。そんな親心の現れだと思ってくれや」

「はあ……。ずるいなあ。そんな風に言われたら文句言いたくても言えないわよ」

「うんうん、ずるいよね」

「あらあら。もう終わっちゃったのかしら？」

扉の奥からフィリス管理人が出てきた。

「あ、管理人さん！」

「む、管理人さんもグルだったんですね？」

「あん、グルなんて言わないで。お芝居っていうから私も一生懸命、台詞を覚えたのよ？うふふ、迫真の演技だったでしょ？」

どこか呑気なフィリス管理人。

「えーえー。完全に騙されましたとも」

「はっはっはっ。2人ともお疲れさん！」

続いて後ろの扉から入ってきたのは整備士ロベルトだった。

「あ、嘘つきな人だ」

「結局のところ、全員がグルだったわけね。あ、それじゃあ、宿舎の通信器って……」

「うん、あれはジャンクパーツさ。本物の通信器は、別の場所に保管してあるから心配いらないよ。本当は、僕も最後まで人質として出てこない予定だったけど……君たちが、新型オーブメントをどう使いこなすか知りたかったからあのタイミングで現れたってわけさ」
愉快に話す整備士ロベルト。

「まったくもう……。みんな用意周到すぎですよ。でも、結局のところ騙された私たちの負けかなあ？」

「うーん、悔しいけどそうかも。落ち着いて考えれば不自然な所はかなりあったし……。まだまだ修行が足りないなあ」

「ふふ、そう落ち込むことはない。グラッツも言っていたが、今回は君たちの実力を試すよりも危機的状況を体験して欲しかった。そういう意味で演習は大成功だ。では改めて……アネラス・エルフィード」

「あ、はいっ」

「エステル・ブライト」

「……はい！」

「これをもって、本訓練場における総合強化訓練の全過程を終了す

る。この3週間、本当にご苦労だったね」

「そ、それじゃあ……」

「もう明日には……?」

「すでにリベルル行き定期船のチケットは取ってある。もう今夜は何も起こらないから2人とともに、ゆっくり休んでくれ」

「うふふ。打ち上げと、送別会を兼ねて今夜はご馳走にしなくちやね?」

第6章 乙女の決意(9)

同時刻 リベール王国某所

一機の赤い飛空艇がとある研究所のような場所に着陸した。そして緑色の髪にピンク色のスーツをまとった奇妙な少年が降りた。

「ふうん。なかなか良い所じゃない。教授もいい趣味してるよね」

「遅かったな、カンパネルラ」

「やあ、《剣帝》。ずいぶん久しぶりだねえ。君がいない半年間、寂しくてたまらなかつたよ」

「フツ、心にもないことを。帝国遊撃士協会の襲撃はお前が担当したと聞いている。カシウス・ブライトの相手はさぞかし楽しかっただろう?」

《剣帝》と呼ばれた銀髪の青年が無視して答えた。

「なあんだ、知ってたのか。いや、あのオジサン、ホントとんでもない人だよ。僕の存在は知らないはずなのに次々と的確な対策を取られてさあ。おかげで手持ちの獵兵団をひとつ潰されちゃったよ」

潰されたという割には、楽しそうに答える《道化師》カンパネルラ。

「《ジエスター獵兵団》か。一度、稽古は付けてやったがどうにも凡庸な連中だったな。《劍聖》の相手は少々、荷が重かっただろう」

「でもま、君の工作完了まで足止めできたから上出来かな。あれ、もしかして君ってば彼との対決が愉^{たの}しみだったとか?」

「フフ……少しな。だが、野に放たれた虎も軍務という名の鎖に繋がれた。もはや、正攻法で我らを止めることは叶うまい」

「ふふ、教授の計画が見事、図に当たったみたいだね。それじゃあ、他のメンバーはもうリベールに来てるのかい?」

「ああ、昨日集結したばかりだ。もつとも、ブルブランのやつは前から下見していたようだ。《怪盗紳士》、《痩せ狼》、《幻惑の鈴》、《殲滅天使》……。揃いも揃って、クセのある連中ばかりが

集まったものだ」

「ふふつ、そういう君だつて相当クセが強いと思つけどね。そういう
えば『彼』……行方をくりましたんだつて？」

「……………」

それを聞いて銀髪の青年が黙った。

「うふふ、愉しみだな。僕たち《執行者^{レキオン}》の中でも隠密行動はピカイチだったしね。《剣帝》と《白面》相手にどこまで頑張つてくれることやら」

「……………。所詮、何年も前に《結社》から足を洗つた人間だ。大した脅威になるはずがない」

「いやいや。そんな事はないと思つよ」

後ろから《白面》ことワイスマン教授が現れた。

「やあ、カンパネルラ。わざわざご苦労だったね。見事、カシウス・ブライトを足止めしてくれて助かつたよ」

「うふふ、楽しい仕事だったよ。しかし、教授の計画書を拝見させてもらったけど……いやはや、ずいぶんと楽しいことを考えてるじゃない」

「ははは、道化師たる君にそう言つてもらえるとは光栄だ。しかし、実際の計画ではもつと楽しんでもらえると思つよ。何しろ、今回協力してくれる諸君は皆、個人的な目的を持っている。私も、そしてこちらの彼もね」

「……否定はしないさ。あなたの思わせぶりに^{ほの}仄めかされる筋合いはないがな」

「やれやれ、つれない事を」

「ふふ、なるほど。色々と事情がありそうだ。まあいいや、教授の悪趣味はまはや芸術的とすら言えるからね。存分に楽しませてもらつよ」

「フフ……。悪趣味とは聞こえが悪い。まあいい、心ゆくまで今回の計画を見届けるがいい。我らが《盟主》の代理としてね」

「うふふ、任せておいてよ。執行者N.O.O 《道化師》カン

パネルラ。これより、使徒ワイスマンによる『福音計画』の見届け
を始める」

第6章 乙女の決意（10）

同時刻 エレボニア帝国南部 リベール王国の国境線より約120セルジュ北部

「……………」
黒髪の少年が墓石の前で花束を抱えていた。

「カリン姉さん……………帰ってきたよ」

そう言つて、花束を墓前に置いた。

「お、おーい……………。どこ行つちやつたのさあ!？」

娘の声が残るから聞こえてきた。

「よかつた……………ここにいたんだ」

カプア一家が黒髪の少年の前に寄つた。

「もう、ビツクリさせないですよ!1人でさつさと奥に行くんだもん」

「ふう……………どうして来たんだ。個人的な用事だから付き合う必要はないと言つたはずだよ」

黒髪の少年 ヨシユアが冷たく言つた。

「か、可愛くないヤツ!人がせつかく心配して探しに来てやつたのにさー!」

「それに、この有様は興味を持つなつて方が無理さ。見たところ、廃墟になつたのはここ10年くらいの間みたいだな」

「俺たちは3年前まで北部の領地に住んでいたが……………。南部が廃村になつたなんて今まで聞いたことがなかつたぞ。何ていう名前の村だつたんだ?」

「……………。……………。……………。『ハーメル』。かつてそう呼ばれていた村さ」

「ハーメル……………。聞いたことのない名前かも。キール兄、知ってる?」

「いや……………。俺も聞いたことがないな。兄貴はどうだい?」

「んー、待てよ……………。かなり前に、帝国政府から何かの通達があつ

たよつな……。駄目だ、思い出せねえ」

「なんだよ、それ」

「……僕の用事は終わりだ。貴方たちには関係ないのに付き合わせて済まなかったね」

「別にそれはいいんだけどさ……。アンタ、最初に会った時と態度が違いすぎるんじゃない？ボクたちを舐めてるわけ？」

「……君にそんなことを言われる筋合いはないな。最初に会った時、ずいぶん堂に入った演技をしてくれたじゃないか。僕の態度もそれと同じさ」

「うっ……。そ、それじゃあそれがアンタの本性ってわけかよ！？」

「……そう思ってくれて構わない。少なくとも今の僕は遊撃士とはかけ離れた存在だ」

「ふう……。何だか知らんが色々と事情があるみたいだな。まあ、本性を出してくれた方がこちらとしては信頼はできる。上辺を取り繕われるよりはな」

「……………」

「それに、おめえには王国軍に追われていたところを助けてもらった借りもあるしな。そのクソナマイキな態度も少しは大目に見といてやらあ」

「……大目に見る必要はない。貴方たちを助けたのはあくまで利用できる駒が欲しかっただけだからね。貸しに見合っ働きを期待させてもらっただけさ」

「ぐっ、口の減らねえガキだな。だがまあ、おめえの提案は俺たちにとつても渡りに舟だ。せいぜい俺たちの方もおめえを利用してもらっぜ」

「……それでいい。僕と行動するのはかなりの危険が付きまとう。その危険に見合っだけの協力はさせてもらっつもりだ」

「ほ、ほんと可愛くないヤツ！なんでこんなヤツのことをあの時一瞬でも……………」

「……………」

「なんでもな！不思議そうな目でボクを見るな！」

「どろどろ、ジヨゼット。ま、いずれにしてもお互いの目的を達成するまでは俺たちが仲間ってのは確かだ。よろしく頼むぜ、ヨシユア」

「………………。わかった、よろしく頼む」

「へッ……。そろそろ出発するかよ？」

「ああ…………。戻ろう。リベールへ　見えざる影に覆われた大地へ」

第7章 忍び寄る影(1)

王都グランセル 封印区画 最下層

「ふゝ、それにしてもほんまゴツイとこですねえ。いい加減、足が疲れましたわ」

ユリア大尉に封印区画を案内されていたケビン神父が長時間歩いていたので疲れていた。

「ふふ、安心するといい。ここが《封印区画》の最下層だ」

「わお、ホンマですか!？はゝ、あと半分とか言われたらどないしようかと思いましたよ」

「フツ、ご謙遜を。神父殿が、聖職者にしてはかなり鍛えてあるのはお見通しだ。そうでない君の役目はなかなか務まらないだろうからね」

「あいた、かなわんなあ。まーええですわ。リベール王家とウチのところは昔から縁が深いみたいですし。そや、大尉さん。例の市長さんのアレですけど……」

「ああ、《封じの宝杖》だね」

《封じの宝杖》とはダルモア市長が所持していた《アーティファクト》のことで、時間を止める効果があるものだ。

「盟約に従い、指定された方法で厳重に保管させてもらっている。いつでも手渡せると思うよ」

「おおきに、助かりますわ。それじゃあ……例のブツ、見せてもらえますか?」

「ああ こちらだ」

ケビン神父とユリア大尉は最深部へと向かった。

「こいつはまた……」

ケビン神父は最深部の有様に驚いた。

「七耀教会もさぞかしこれらの扱いには困るだろう。超弩級ちやうどききゅうと言つてもいい古代遺物アイティファクトだろうからね」

「………………。ちよいと調べさせてもろてもええですか？」

「もちろんだ。陛下の許可も下りている。どうか我々に知恵を貸していただきたい」

ケビン神父はまず、《環の守護者》トロイメライを調べ始めた。

「こいつが報告書にあった《環の守護者》つちゆうヤツか。カルバードで出土した巨像に雰囲気は似とるが……。うー、動いているところをこの目で確認したかったわ。それと……。次に、リシャル大佐が《ゴスペル》を設置した古代の装置を調べ始めた。」

「古代ゼムリア文明末期……1200年前の代物やな……。装置としての機能は不明ながら遺跡全体の中核であるらしい……」

「アーティファクトの解析は現代の技術では不可能らしいな。同じ導力として稼働しながらもオーブメントとは異なる機械体系……。そうラッセル博士が仰っていたよ」

「『早すぎた女神の贈り物』　そう教会では定義しとりますわ。それであつちが……」

最期に目を向けたものが、床に収納された4つの支柱だった。

「《ゴスペル》つちゆう漆黒のオーブメントが使われた直後……ここにあった巨大な柱が床の中に格納されたそうすな？」

「ああ、ここを含めた四隅にある柱が格納されたそうだ。しかし、2ヶ月近く経つのに、その意味ははまだ掴めていない」

「封じられた《輝く環》……。そして使われた漆黒の《福音》……。装置が喋った《第二結界》と《デバイスタワー》の起動……。なるほどな……。微妙にカラクリが見えてきたわ」

「カラクリが見えた……。そ、それは一体どういう……。!?」

ユリア大尉が身を乗り出した。

「いや、何ちゆうか直感みたいなモンですけど。恐らくこの場所は《門》やないかと思えます」

「《門》……？」

「ええ、そうです。女神の至宝に至るための《道》を塞いでいた《門》……。そして、それをこじ開けたのが《福音》と呼ばれた漆黒の鍵……。そう考えれば、ここに肝心の《輝く環》が無いのも肯けますわ」

「だ、だが、《道》と言ってもここはすでに遺跡の最下層だ。博士の調査でも、他のエリアが存在しない事は判明しているが……」

「多分、目に見える形での《道》とはちやいますやろ。地下に流れる七耀脈……。あるいはもっと別の経路……。恐らく、それを越えたどこかに《環》の手がかりがあるはずですよ」

第7章 忍び寄る影(2)

王都グランセル 発着場

「ふ〜。半日以上、飛行船に乗ってたらさすがに疲れちゃったねえ。早速、訓練終了と帰還の報告をギルドにしに行こうか?」

「……………」

「エステルちゃん?」

「う、うん……。そうよね。エルナンさんに挨拶しなきゃ」

「えっと……。もしかして。エステルちゃん、緊張してる?」

「う、うん、何でかな……。訓練に行く前はそんなこと感じなかったのに……。これから本格的に正遊撃士として動くと思うと何だか落ち着かなくなつて……」

「そっか。多分それは……。武者震いなんじゃないかな」

「む、武者震い?」

「エステルちゃんはこの一月の訓練で強くなった。それは、力だけじゃなくて知識とか慎重さとか判断力とかそういうものも含めてだと思う。謎の組織の陰謀を暴いてヨシユア君を連れ戻す……。たぶん、そのことの大変さが前より見えてるんじゃないかな?」

「あ……。うん。言われてみればそうかも。はあ……。マヌケだわ。

登ろうとする山の高さが見えてなかった登山者みたい」

「登る気、無くしちゃった?」

「ううん!やる気だけは前以上かも。どんな山だつて、結局は一步一步登るしかないんだし。たとえ這つても頂上を目指してやるんだから!」

「ふふっ、その意気だよ。それじゃあ、ギルドに報告に行こうか?」

「うん、了解!」

遊撃士協会グランセル支部

「そうですね……。2人ともご苦労さまでした。では、訓練の評価と合わせて報酬をお渡ししましょう」

エステルとアネラスがエルナンに訓練場での報告をした。

「え？訓練なのに報酬なんてもらっていいの？」

「ええ、これも仕事の一環ですからね。もちろん、その分の活躍は期待させてもらいますよ」

「あはは……。頑張ります」

エステルとアネラスは査定を受けた。

「どうやら、充実した訓練期間だったようですね」

「うん！本当に勉強になっちゃった」

「また機会があったらぜひとも利用したいですね」

「ふふ、それは何よりです。そういえば、クルツさんたちは訓練場に残ったそうですね？」

「うん、カルナさんたちと上級者向けの訓練をするらしいわ。しばらく帰って来れないみたい」

「でも、正遊撃士が3人も国外に行ったきりだもんねえ。これから猛烈に忙しくなりそう。カシウスさんも、もう本格的に王国軍で働いているんだつたよね？」

「あ、うん。確か、レイストーン要塞勤務になるって聞いたけど……」

「カシウスさんは、准将待遇で軍作戦本部長に就任されました。実質上、現在の王国軍のトップとも言えるでしょうね」

「ぐ、軍のトップ！？それって今だとモルガン將軍じゃないの!？」

「当初はその予定だったそうですが將軍ご自身の意向で、カシウスさんに権限が集中する体制になったそうです。將軍としては、若いカシウスさんに王国軍の未来を託したいんでしょうね」

「うーん……。あんまり実感湧かないわねえ」

「あはは、カシウスさんならそれもアリって感じがしますけど。ただ、これですますギルドの戦力が低下しますねえ」

「まあ、以前よりもさらに軍の協力は得られそうですが……。ただ、

今の我々には新たに警戒すべき事があります」

「え……」

「それって……。やっぱり《結社》のことよね。もしかして、何か動きがあったの？」

「いいえ、今のところは。ただ、ここ1ヶ月の間、奇妙なことが起こってしまってるね。たとえば……各地に棲息する魔獣の変化です」

「魔獣の変化……」

「具体的にはどういう事ですか？」

「まず、今まで見たことのないタイプの魔獣が各地で現れました。

さらに、既存の魔獣も今までよりはるかに手強くなっているそうです。今のところ、原因は判明していません」

「そ、そんな事があったなんて……。《結社》ってというのが何かしたって事なんですかっ!？」

「いや、結論するのは現時点では早計でしょうね。ただ、女王生誕祭を境にして何かが起こり始めている……。それは確実に言えると思います」

「そんな……」

「……………」

「実は、その件について対応策を立てることになりました。エステルさんとアネラスさんにも是非、協力をお願いしたいんです」

「へっ……?」

「なんだ、もう到着してたのね」

その時、シエラザードとアガットが入ってきた。

「あ、シエラ先輩!？」

「シエラ姉!?それにアガットも……」

「お帰り、エステル、アネラス」

「へっ、思ったよりも早く帰ってきやがったな」

「シエラ姉、ただいま!アガットも、お久しぶりだね?」

「ああ、生誕祭の時以来だな。……ヨシユアのことはオッサンから聞かせてもらった。へこんでたみてえだが……どうやら気合い、取

り戻せたみてえじゃねえか」

「えへへ、まあね。それよりも……どうして2人が一緒にいるの？」

「うーん、確かに。珍しいツーショットですよ」

「あら、そうかしらね？」

「ま、確かに一緒に仕事をする事は少ないかもしれない」

「実は、シエラザードさんとレインさんには、特別な任務に就いてもらうことになりましたね。そのために来てもらったんですよ」

「特別な任務？」

「ええ……。《身喰らう蛇》の調査です」

「《結社》の調査！？」

「そ、それってどういう……！？」

「調査と言っても、具体的に何かをするってわけじゃないわ。なにせ、実在そのものがはっきりしない組織だしね」

「各地を回って仕事をしながら、《結社》の動向に目を光らせる……」

「ま、地味で面倒な任務ってわけだ」

「な、なるほど……。でも、現時点ではそれくらいしか手はないのかも。それじゃあ、あたしたちに協力して欲しい事って……」

「ええ、2人のお手伝いです。王国各地で情報収集するためにアガツトさんとシエラザードさんには別々に行動してもらうのですが……」

「……。得体の知れない《結社》相手に単独行動は危険かもしれませんが……」

「じゃあ、私たちのどちらかがシエラ先輩のお手伝いをして……」

「もう一方がアガツト先輩のお手伝いをするってわけですね？」

「そういう事になりますね。どうぞでしょう。協力していただけませんか？」

「あたしはもちろん！元々、《結社》の動きについては調べるつもりだったから渡りに舟だわ」

「私も協力、させてください。そんな怪しげな連中の暗躍を許しておくわけにはいきませんよ！」

「ありがとうございます」

「さて、そうなるとチームの組み合わせが問題ね。あたしとしてはどちらがパートナーでもいいわ」

「互いに面識はあるわけだしな。自分たちの適性を考えて2人で相談して決めてみるや」

「うっ……。なかなか難しいこと言うわねえ。アネラスさん、どうしよう?」

「うーん、そうだね。無責任かもしれないけど……。ここはエステルちゃんが決めちゃうのが一番いいと思う」

「ええっ!?!」

「やっぱりエステルちゃんは正遊撃士になったばかりだもの。遊撃士としての自分のスタイルがまだまだ見えてないと思うんだ。だから、これを機会に自分がどういう風になりたいのか考えてみるといいんじゃないかな?」

「アネラスさん……」

「ふふ、アネラス。いつの間にか、いつちよまえな口を利くようになったじゃない?」

「ふふん、任せてくださいよ」

「ま、言うことはもつともだ。例えば、俺とシエラザードは遊撃士のランクは同じくらいだが、戦闘スタイルのクセはかなり違う。俺はアーツは補助程度で重剣を使った攻撃がメインだが……」

「あたしは機動力と鞭の射程、そしてアーツも活用するタイプね。

確かに、そのあたりはどちらを選ぶかの基準にはなるわ。ただ、遊撃士の仕事っていうのは何も戦闘だけじゃないからね。自分なりに考えて選ぶのが一番よ」

「う、うーん。えっと、それじゃあ……。アガット。協力してくれる?」

エステルはレインを指名した。

「そうか、わかった。正遊撃士になったからにはこれまでに以上に厳しく行くからな。覚悟しとけよ」

「はいはい、判ってますって。ホント、予想通りの憎まれ口を叩く

んだから」

「む……」

「はいはい、ケンカしないの。それじゃあ、あたしはアネラスとコンビか。訓練の成果、見せてもらおうわよ」

「はいっ。ふふ、久しぶりに先輩とコンビを組めて嬉しいなあ」

「さてと、これでようやくこの問題はケリがついたが……。具体的
にどういう風に各地を回るかってのが問題でだな」

「エルナンさん。そのあたりはどうかしら？」

「そうですね……。当面は、忙しい地方支部の手伝いに行くのが良いでしょう。実は、ロレント支部とルーアン支部から応援要請が来ているんですが……」

「あちゃあ、さすがにロレントを留守にしすぎたか。ここは、アイナを助けるためにもあたしが行った方がいいのかな」

ロレント支部は比較的忙しくなりやすい支部だ

「そうですね、私も賛成です。うーん、アイナさんに会うのは久しぶりだな」

「だったら俺たちはルーアン支部に行くでしょう。エステル、それでいいな？」

「うん、もちろん。ルーアン地方か……。みんな、どうしてるのかな」

ルーアン支部受付のジャンなどが頭に浮かんだエステル。

「各支部への連絡は私の方からやっておきます。それでは皆さん。気を付けて行ってきてください」

第7章 忍び寄る影(3)

王都グランセル 発着場

「それじゃあ、あたしたちは一足先に出発するわね。エステル……せつかくあんたが帰ってきたのにゆつくりできなくて残念だわ」

「うん……あたしも。でも、アイナさんも困っているみたいだし仕方ないわよ。ロレントのみんなによろしくね」

「ん、わかった。エステル。もう大丈夫だとは思っけど……くれぐれも焦るんじゃないわよ」

「シエラ姉……」

「あたしのタロットはあんたとヨシユアの関係が断たれていないことを示していた。だから、大丈夫。あんたとヨシユアの絆を信じなさい。そうすれば、必ず道は開けるから」

「うん……わかった。ありがとう、シエラ姉。すごく勇気づけられちゃった。あたし……」

「ほらほら、そんな顔しないの。正遊撃士になったんでしょ？堂々と胸を張っておきなさい」

「……うん、わかった」

「ふふっ……。エステルちゃん。しばらくのお別れだね」

「アネラスさん……。訓練に付き合ってくれて本当にありがとう。本当は、シエラ姉に頼まれて一緒に来てくれたんでしょ？」

「へっ……」

シエラザードが驚いた。

「えへへ、バシてたみたいだね。うん、ヨシユア君のことをよく知らない人が側にいた方が気持ちの整理ができるからって。そうシエラ先輩に頼まれてたの」

「あはは、そんな事だろうと思った」

「ちょ、ちよつと……。なに全部バラしてるのよっ？」

「まあまあ、いいじゃないですか。……でも、それだけじゃなくて

自分を鍛えたかったのも確かなんだ。エステルちゃんと一緒に訓練できてすごく得る物も多かったのも本当。だから私からもありがとう、だよ」

「アネラスさん……………」

「そ、それから、あのね……………。こんなことを言い出すと変に思われるかもしれないけど……………」

アネラスが急に言いにくそうにした。

「????？」

「もう私たちは友達だと思うけど……………。私としては、エステルちゃんとそれ以上の関係になりたいと思ってる」

「………………。えええっ!?!？」

「ちょ、ちょっと……………。いきなり何を言い出すのよ!?!？」

「先輩、止めないで下さい!私、これでも本気なんですからっ」

「ほ、本気って……………」

シエラザードが頭を抱えた。

「(ったく、何やってんだか……………)」

「そりゃあ、私はエステルちゃんより2歳も年上だけど……………。でも、遊撃士の中では同じような年頃だと思うんだ。それに、こっぴつこっぴつって年の差は関係ないと思うし……………。だから……………どうかな?」

「え、えっと……………!う、嬉しいんだけどその、ちょっとビックリしたっていうかっ!それに、ヨシユアもいるし各方面で色々マズイっていうか……………」

「ヨシユア君?私とエステルちゃんがライバル同士になったら何かまずいことでもあるの?」

その場にいた3人は沈黙した。

「……………ライバル同士?」

「うんうん。歳も近いし、武術の腕も互角。お互い切磋琢磨できるといいなって思ったんだけど……………。迷惑、だったかなあ?」

「あ、あはは……………。そういう意味だったのね」

「はあ……………。相変わらずズレてるっていうか。そんなオチだとは思わ

なかつたわ」

「???」

「うん……でも、そういうことなら。不肖、エステル・ブライト。若輩の身ではありませんが……。喜んで、アネラスさんをライバル認定させてもらうわ!」

「やったあ! とりあえず、どっちが先輩たちのレベルに追い付けるか競争だね」

「望むところよ! 絶対に負けないんだから!」

「ふふ……やれやれ。こりゃ、あたしたちもウカウカしてられないわね」

「へッ、まったくだ。向こう見ずなガキほど恐ろしいものはねえからな」

「ロレント方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください」

「あら、もう時間か」

シエラザードとアネラスは定期船に乗った。

「それじゃあね、2人とも。お互い、何か動きがあったらギルドの支部を通じて連絡し合うようにしましょう」

「ああ、了解だ」

「またね、シエラ姉、アネラスさん!」

「うん! エステルちゃんたちも元気で!」

「さてと……。あたしたちも乗船手続をしてルーアン行きの船を待とうか?」

「そうだな、反対周りの定期船もすぐに到着するだろう。ただ、お前は一ヶ月ぶりだし買い物でもしたいんじゃないか?」

「んー、確かに百貨店とか覗きたいけど。アガットはどうしたいの

「？」

「俺はどちらでも構わねえ。身支度だの何だのは女の方が必要だろうからな。お前が好きなように決めろや」

「そっか……えへへ。うーん、そうね。買い物はルーアンでもできるし……。とつとと乗船手続きしちゃいましょ」

「そうか、わかった。乗船券は飛行船公社の待合所の中で売ってるぞ」

「ん、了解」

飛行船公社 待合所

「あれっ……？」

エステルたちが飛行船公社に入ると、言い争いが起こっていた。そこにはミユラーの姿もあった。

「まったく、これだから尊大な帝国貴族というのは……。鼻持ちならないにも程がありましたよ」

「フン、鼻持ちならないのはそちらの方ではないのかね。第一、エンジン供給についてどうして共和国が口を出す？それこそ、内政干渉ではないか」

「安全保障上の問題ですから。貴国がリベールを侵略してからまだ10年しか経っていないでしょう。そんな侵略国家がぬけぬけと最新技術に手にするなど言語道断。友好国のメンツにかけても見過ごすことなどできませんわ」

「な、なにが友好国だ！10年前も実際に兵を出したわけでもなからうに！ただの傍観者風情が偉そうな口を利くのはやめたまえ！」

「な、なんですって……」

「ダウイル大使……。そのあたりになさっては。他の客の迷惑になりますよ」

「し、しかしミユラー君」

「エルザ大使もここはお引き取り下さい。この話は、いずれ別の機会に双方の大使館ですればよいかと」

「……そうですわね。帝国軍人に指図されるのはあまり愉快ではありませんけど。尊大で性根の腐った帝国貴族よりは遙かにマシですわ」

「な、なんだと!？」

「それでは御機嫌よう。皆さん、失礼いたしますわ」

エルザ大使と呼ばれた眼鏡の女性は飛行船会社を出ていった。

「な、なんとという失礼な女だ。これだから歴史も伝統もない成り上がりの庶民どもは……」

「大使……」

「……フン、判っている。私は先に大使館に戻る。例の件については君に任せたぞ」

「了解しました」

ダウイル大使が出て行くのと同時にエステルたちはミュラーに話しかけた。

「どうも、こんにちは」

「君は……。確かエステル君だったか。久しぶりだ。武術大会の時からになるか」

「よかった。覚えていてくれてたんだ。それにしても……すごい言い争いだったわねえ。今の人たち、どちらさまなの?」

「男性の方はエレボニア帝国のダウイル大使。女性の方はカルバード共和国のエルザ大使。どちらも王都にある大使館の責任者にあたる立場だ」

「そ、そうだったんだ」

「しかし、大使というのは大人気ない口論だったな。あんなもんで務まるのか?」

「ちよ、ちよつとアガット」

アガットの口を止めた。

「いや、面目ない。元々、帝国と共和国は友好的な関係とは言えな

くてね。さらにあの2人は、性格的にも徹底的にウマが合わないらしい。まあ、顔を合わせるたびに口論ばかりしているというのは逆に気が合う証拠かもしれないが」

「あはは、そうかもしれないわね。それにしても……気になること言っただけで済んだ？ エンジン供給とか内政干渉とか」

「……………」

ミユラーが少し黙った。

「あ、聞いたらマズかった？」

「……………いや、構わないだろう。エンジンとは、中央工房が現在開発している最新鋭のものでね。完成の暁には、飛行船公社を通じて帝国と共和国にサンプルが提供される話があるんだが……………。その打ち合わせに来たところでエルザ大使と鉢合わせたわけだ」

「ふーん、そうなんだ。でも、新型エンジンくらいでどうして口論になるのかしら」

「そりゃあ、飛行船の性能を左右する最重要の部品だからな。軍艦に搭載されることを考えたらノンキに流せる話でもねえだろう」

「なるほど……………。確かに、それで帝国軍がパワーアップしちゃったらちょっとシャレにならないかも。……………あ、ゴメンなさい」

エステルはミユラーが帝国軍人と気付いて謝った。

「いや、確かにその通りだ。普通なら、他国に最新技術を提供するなど考えられないが、これも女王陛下のご意向でね。技術的優位を独占するのではなく、多くの国に提供することで諸国間の平和を確立したい……………。そう思ってたっしやるそうだ」

「なるほど……………。確かにそんな風に言ってたかも。うーん、それを考えるとやっぱり女王様って立派よね。ただの理想というよりずっと先のことまで考えた外交政策っていう気がするわ」

「ああ、リベール国民はあの方を大いに誇るべきだろう。……………すまない。つい話し込んでしまったな。乗船券を買うのだろうか？ 俺はこれで失礼させてもらおう」

「あ、うん。そういえばミユラーさん。オリビエのことなんだけど

……。彼、もうエレボニアに帰っちゃたのかしら？」

「なんだ、知らないのか？」

「生誕祭以来、機会がなくて挨拶してないまま会ってなくて。申しわけないって思ってたの」

「心配せずとも、あのお調子者ならまだリベル国内に滞在しているぞ。しばらく、エルモ温泉という場所で優雅に逗留じゅうりゅうするとか抜かしていたな」

「あ、そうなんだ。ふふ……。なんだかオリビエらしいな」

「ヤツが大使館に戻ってきたら君たちのことを伝えておこう。少なくとも、帰国前にはギルドに連絡するように言っておく」

「ありがとう、ミュラーさん」

「こちらこそ、あの変人に付き合ってくれて感謝する。それでは、またな」

ミュラーも飛行船会社を出ていった。

「あの金髪男の知り合いにしちゃずいぶん堅そうな軍人じゃねえか。いったいどういうヤツなんだ？」

「ミュラーさんっていつて帝国大使館の駐在武官さん。と言っても、あたしたちは1、2回会ったくらいなんだけどね」

「ふーん……。ガタイもいいし隙もねえ。獯猛な牙を隠し持った優秀な軍用犬ってところか」

「もう、失礼な言い方ねえ。確かに……。かなり強そうな雰囲気だけど」

「フン、あの金髪男もそうだが、どうも帝国人は信用ならねえな。カシウスのおっさんと何か話していたみたいだが……。どんな目的で長期滞在してるか判ったもんじゃねえ」

「うーん、言われてみれば。でも、オリビエって変人だけど悪人じゃないし……。あのミュラーさんにしたって悪い人には見えないんだけど」

「フン、どうだかな。まあいい、カウンターでとっとと乗船券を買っぞ」

「いらつしゃいませ。国内線をご利用ですか？それとも国際線でしょうか？」

「えっと、ルーアン行き乗船券を2枚お願いします」

「かしこまりました……。あら、お客様。遊撃士協会の方々ですね。エステル様とアガット様でいらつしゃいますか？」

「う、うん、そうだけど？」

「王都支部のエルナン様から乗船券の代金は頂いております。どうぞ、お受け取りください」

エステルたちは乗船券を2枚受け取った。

「そっか、エルナンさんが……」

「さすがエルナン。やる事にソツがねえぜ」

「それでは、その乗船券を建物を出てすぐの場所にある受付にお渡しください。そこで乗船手続きを行います」

乗船受付

「いらつしゃいませ。定期船をご利用ですか？ご利用になる場合は、乗船手続きをいたしますのでチケットをお渡しください」

「手続きをしたら、定期船が来るまでここで待った方が良さそうだ。買い物などはもういいのか？」

「うん、大丈夫よ」

「かしこまりました。それではこちらの用紙にサインをお願いします」

「あ、はいはい」

エステルたちは乗船手続きを済ませた。

「はい、結構ですね。それでは、定期船の到着まで発着場内にてお待ちください」

「うん、わかりました」

「なら、定期船の到着までベンチに座って待つとするか」

第7章 忍び寄る影（4）

定期船 《リンデ号》

「ふう、いい天気ねえ。この分だと、ルーアン地方は絶好の観光日和じゃないかしら」

「かもな。もつとも、今は観光以外で熱くなってるみてえだが」

「観光以外？」

「市長選挙だ。逮捕されたダルモアの代わりに2人の候補が出馬したらしい」

「へー、そうなんだ。でも、確かにそうよね。いつまでも市長が不在でやっていけるはずないんだし」

「そういや、あの事件はお前らが解決したらしいな。後からジャンに聞かされたぜ」

「あ、あはは……。うん、アガットが抜けてからヨシユアとクローゼでね。まあ、記者の人にも助けられたし、親衛隊が市長を逮捕したんだけど」

「フン、自分の力だけじゃないと分かってるんならそれでいい。それにしても、あの制服娘がクローディア姫だったとはな……。城で聞かされた時には、さすがの俺もビビったぜ」

「あはは、気持ちは判るけどね。そういえば、オリビエもそうだけどクローゼとも生誕祭以来なのよね……。ううん、ティータと博士、それにジンさんとも……」

「ティータと爺さんなら俺の方から事情を伝えといた。お前たちのことをあまりにも心配しやがるからな」

「そうなんだ……。ありがと、アガット」

「ま、いざれ手紙を出すなり、直接挨拶に行くといいだろう。ジンのやつは、生誕祭のあとカルバードに帰っちまった。お前によるし、くと言ってたぞ」

「そっか……。挨拶くらいしたかったな」

「まあ、姫さんの方は学園に戻ってるらしいからな。せつかくルーアン地方に行くんだ。ヒマを見て挨拶すりゃあいいだろ」

「うん、そうだよな。ふふっ……」

エステルが不意に微笑んだ。

「あ、なんだよ。なにか変なことを言ったか？」

「ううん、別に。ただ、アガットって意外と気を使う方なんだなって思ってた。王都を出発する時にも、買い物とか気を使ってくれたし」

「ば、馬鹿言ってるじゃねえ。ったく……俺は到着まで席で寝てるからな。ウロチヨロ船内を歩き回ってルーアンで降りるのを忘れるなよ」

アガットは照れ隠しのように船内に入って行った。

「まったくもう。憎まれ口ばっかんだから。さてと、到着まで時間はあるし、船内を回ってみようかしら」

「……お待たせしました。まもなく本船はルーアン市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください。エステルが船内を歩いているとアナウンスが流れた。

「あ、いけない。早く席に戻らなくちゃ」

エステルは席に着いた。

第7章 忍び寄る影(5)

遊撃士協会ルーアン支部

「いや〜！来てくれて本当に助かったよ。何しろカルナさんが留守で掲示板の仕事が溜まっていてね。早速、ジャンジャンバリバリ働いてもらうとしようかなあ」

「あ、あはは……。相変わらず飛ばしてるわねえ」

「掲示板の仕事はボチボチ片付けるつもりだが……。何か他に緊急の仕事はねえのか？」

「それが、仕事は溜まっていくけど緊急要請にあたる物はないんだ。市長選の管理は軍の管轄だし……。街も、市長選で盛り上がってるから観光客は少ないみたいなんだよね」

「ふーん、市長選ってそんなに白熱しているんだ。誰が出ているんだっただっけ？」

「観光事業を推進しているノーマン氏と港湾事業の維持を訴えるポルトス氏さ。ルーアン市長といっても、その権限は地方全体に及んでいてね。マノリアの住民も投票するし、マスコミもかなり注目をしている。ルーアン地方の未来を左右する重要な選挙になるのは間違いないね」

「へ〜、そうなんだ。未成年だし、住民じゃないから選挙権はないんだけど……。あの事件に関係した人間としてやっぱり動向は気になるわねえ」

「そのあたりは《リベルール通信》が特集しているから読んでみることをお勧めしておくよ。あ……。そういえば。実は1つだけ調べて欲しいことがあったんだ」

「調べて欲しいこと？」

「うーん、なんて言うか……。どう説明したらいいか非常に困る話なんだけど……」

ジャンが言葉に詰まっている。なんだかジャンらしくない。

「なんだあ？ハッキリとしねえヤツだな。いつもの図々しさでズバツと切りだしてみろや」

「あはは、言つてくれるねえ。それじゃあ言うけど……。『亡霊』について調べて欲しいんだ」

エステルとアガットは口を開けたまま、『何を言っているんだ』と言わんばかりの顔でジャンを見た。

「はあ、絶対にそんな顔をされると思ったんだよなあ。だから頼むのは嫌だったんだ」

「……あ、いや、うん。ちょっと面食らっただけで。いったいどういうことなの？」

「うん……。ここ1〜2週間なんだけどき。『夜、白い影を見た』って報告がギルドに何件も寄せられているんだ。それも、ルーアン地方の各地からね」

「夜、白い影を見た……。そそそ、それって!?!」
エステルが飛び上った。

「なるほど、それで『亡霊』か。目の錯覚にしちゃあ各地からつてのが気にはなるな」

「うん、そうなんだよね。掲示板の仕事のついででいいから聞き込みをしてもらえないかな？」

「あ、でも、その、ねえ……。あまり安請け合いもできないし、考えさせて欲しいなあ、なんて」

エステルが下を見たまま答えた。

「エステル君、ひよつとして……」

「え、やだ、違うわよ!?!全然そんなことないんだからね!?!この泣く子も黙るエステルさんが幽霊が苦手だなんてそんなこと……。自分から白状してしまったエステル。」

「……ゴメンなさい。ちよつとだけ苦手かも」

「あはは。ちよつとどころじゃなさそうだね。まあ、実害があるわけでもないし、この話は無かったことに……」

「いや……。引き受けた」

アガットが答えた。

「……忘れんな。俺たちの任務は《結社》の調査だ。少しでも妙な兆候があれば調べて《結社》の関与を検証する。そういう話だったろうが」

「あ……」

「人間、誰しも苦手なモンはある。たまには弱音を吐くのもいいだろう。だが、何もしてないうちから尻尾巻いて逃げ出すんじゃないか……」

「やれやれ。ちょっとキツすぎないかい？」

「……ううん。アガットの言う通りだね。確かに、幽霊とかは苦手だけど……。ヨシユアが消えたことに比べれば、そんなの全然恐ろしくない……」

「エステル君……」

「フン、分かってんじゃないか」

「ジャンさん、その調査、あたしたちに任せてもらえる？」

「そう言ってもらえると助かるよ。すでに幾つか証言は集まったんだけど新たに3件の目撃情報が届いたんだ。まずは、エアレットの関所に勤めている兵士の1人でね。夜の巡回中に見かけて腰を抜かしかけたそうだよ」

「ひえ……」

「2人目は、《レイヴン》のチームメンバーの1人らしい。これはアガットがいたら聞き込みはしやすいだろうね」

「ま、拒否したところで力づくで口を割らせてやるさ」

「やめなさいって……。 武術大会の時に対戦したけど、結構心を入れ替えてみたいよ？」

「フン……どうだかな」

「まあまあ、穏便に頼むよ。そして最後の目撃者は……マーシア孤児院の子供たちさ」

「えっ……孤児院の子たち!？」

「ああ、テレサ院長が代わりに連絡してくれたんだ。ちなみに、マ

「シア孤児院は先日、建て直されたばかりだね。テレサ院長の希望もあってほぼ前と同じ形になったそうだ」

「そうなんだ……良かった。院長先生と子供たちには挨拶に行くつもりだったし。お祝いがてら話を聞きに行ってみようかな」

「よろしく頼むよ。ただ、言った通り、緊急じゃないから後回しにしてくれても全然構わない。掲示板には他の仕事もあるからそちらをチェックしておくといい。3件の目撃情報を確かめたらここに戻ってまとめて報告してくれ。集まった情報を検討してみよう」

「うん、わかったわ。ただ、レイヴンは倉庫にいるから先に当たってみたほうがいいかも」

「だったら、街から出る前に港の倉庫に行ってみるとすっか」
エステルたちは港の倉庫に向かった。

第7章 忍び寄る影(6)

港湾区 倉庫

「はあ、なんか最近タルいよな。色々鍛えてみたけど強くなった実感はないし……」

「フン……。まさか今更、街道をうろついでる魔獣に苦戦するとは思わなかったぜ」

「あー、なんでも最近、魔獣が狂暴化してるらしいよん。以前の2〜3倍は強くなってるんじゃないかってさ」

「 Dein、ロツコ、レイスがテーブルで話していた。」

「なるほど、そういうことか。……仕方ねえ。久々に街に繰り出すとするか。どうだ、北区の《ラヴァンタル》に行かねえか？」

「あー、2階のカジノが新装オープンしたところか。いいねえ、色っぽいディーラーの姉ちゃんもいるらしいし。へへっ、あわよくばお触りなんかしちゃったりして」

「それだ！カルナの姐御も留守みたいだし少しくらい羽目を外してもいいだろ」

「3人が騒いでいると、アガットたちが入ってきた。」

「……何が構わないってんだ？」

「ア、アガットさん!？」

「……げっ……」

「まったく、てめえらは……。ちったあマシになったと思えばすぐにタルみやがって……」

「や、やだな。ただの冗談ですってば。って、そこにいるのは……」

「……」

「新人遊撃士のエステルちゃんじゃん!？」

「ども、久しぶりね。武術大会で戦って以来かな」

「あー、そうだな」

「いや、俺たちあれから決勝戦まで観戦したんだけど。マジ凄か

ったよ。あんたのこと惚れ直したもん？」

相変わらず軽いノリのレイス。

「あはは……ありがとう。でね、今日訪ねたのはギルドの用事でなんだけど……。えっと、あなたたちの中で『白い影』を見た人っている？」

「それって……」

「……だよなあ」

3人はすぐに気付いたようだ。

「あ、やっぱり知ってるんだ」

「だったら、とつと知ってることを話しやがれ。手間を取らせるんじゃないぞ」

「……ちよつと待てや。アンタ、少し調子に乗りすぎなんじゃねえのか？」

ロッコはアガツトの態度が気に食わないようだ。

「……あ？」

「うざいんすよ、アンタ。勝手にチームを抜けて遊撃士なんかになったクセに。都合のいい時だけ話を聞かせるっていうわけか？ぶざけんなって感じなんだよな」

「お、おいロッコー！」

慌ててロッコを止めるディンとレイス。

「へっ、あいかわらず鼻っ柱だけは強いヤツだぜ。だったら、何をすりゃあお前は満足するってんだ？土下座でもしろってか？」

「…………。ここで……。俺たちと勝負してもらおうか」

「な、何でそうなるんだよっ!？」

「おいおい、なに熱くなってるのよ」

「るせえ、これはケジメの問題だ。アンタらが勝ったら知っている情報を教えてやる。俺らが勝ったら……。二度とデカイ面するんじゃないぞ」

「へっ、いいだろう。どの程度強くなったのか、この重剣で確かめ

「てやろう……。3人とも、気合い入れて来いや！」

「とほほ……。どうしてこんな事に……」

「でも、エステルちゃんもまた戦えるのはラッキーかも？」

「そ、そんなもの？まあいいわ。こっちも手加減はしないわよ！」

「くあ、さすがに強いぜ」

「白旗白旗、お上げッス！」

「……クソッ……」

「フン、武術大会に出たつていうのもまんざら嘘じゃないらしいな。だが、まだまだ腰が入ってねえぞ」

「でも、一般人にしてはかなり強い方だと思うけど。こんな場所であむろしないで、遊撃士でも目指してみたら？」

「なに……」

「お、俺たちが遊撃士？」

「あ、ありえねえって！」

「でも、あたしみたいな小娘だつて遊撃士やつてるくらいなんだもん。あなた達だつて、その気になれば十分なれると思うわよ」

「コラ、安請け合いですんな。遊撃士つてのは傭兵じゃねえ。切った張った以外の仕事も多い。それはお前も経験してるだろうが」

「うーん……。それはそうなんだけど」

「そ、そうだよなあ。オレら、ケンカくらいしか能がないし……」

「そんな上手い話、あるわけないよな」

「……。とりあえず、約束は約束だ。アンタらの知りたいことを教えてやるよ」

「おう、話してもらおうか」

「さつきも言ったけど、あたしたち、『白い影』を目撃した人たちを探しているの。あなたたちの仲間でもいるって聞いたんだけど……」

「ああ、いるぜ。今日は来ていないがベルフって名前のヤツだ」

「1年前に入ったヤツでね。アガットさんも、顔くらいは知ってる
と思いますけど……」

「ああ、あいつか。前の事件で取り調べた時にちよいと話したくら
いだな」

「ベルフのやつ、ここ数日ほどこの倉庫に来てないんだよね。幽
霊を見たシヨックで家で寝込んでるのかも」

「ええっ！？そ、それってひょっとして呪いとかタタリなんじゃ……
……」

エステルが身を震わせた。

「それは知らねえが……。すげえビビってたのは確かだ。元々、良
いとこのボンボンで気が小せえヤツなんだ」

「フン、まともな家があるのに不良なんかやってんのか。まあいい、
詳しい話は本人から聞くから家を教えろや」

「えーと。市長邸の右隣にある家ツス。ノーマンってオッサンの家
でベルフはその長男なんですよ」

「市長邸の右隣にある家、と。情報提供、どうもありがと。それじ
ゃあ場所も分かったし、ベルフって人を訪ねてみようか」

「ああ、そうするか。それじゃあな。ヒマだからって悪さするなよ
「フン、余計なお世話だ」

「お疲れさまです。また来てくださいよ」
「頑張れよ、エステルちゃん？」

ノーマン氏の家

「えっと……。ここがベルフって人の家？」

「市長邸の右隣ってことはここでいいんじゃないかねえのか」

「あら、いらっしやい」

ノーマン氏の妻であると思われるプリジットがキッチンから出てき
た。

「あいにくだけど、主人は今、ホテルの方に詰めているのよ。そこから行って頂けるかしら」

「へっ？」

「いや、俺たちに用があるのは旦那の方じゃない。ベルフって息子の方が」

「あらあら、ベルフの？ごめんなさいね。てっきり選挙のことがあったのかと思ったわ」

「選挙って……。あ、ひょっとしてここのご主人さんが……」

「ええ、主人のノーマンが市長選挙に出馬するんです。それで、ホテルの最上階を選挙対策本部として使ってね。そちらで支持者の方と選挙活動をしているみたいです」

「そうなんですか……。あの、あたしたち遊撃士協会のものなんですけど。幾つか、息子さんにお聞きしたいことがあって……」

「遊撃士協会？あ、あの、うちのベルフが何かしてしまっただしよつか？」

焦るプリジット。

「いや、そういうわけじゃねえ。あなたの息子さんが奇妙なものを見たって聞いてな。その目撃情報を聞きに来たんだ」

「奇妙なもの……？」

「お母さんの方は何も聞いてないんですか？」

「ええ、恥ずかしながら……。久しぶりに息子が帰ってきたのはいいんですけど、ロクに話もしてくれなくて……。主人は選挙で頭が一杯で息子と話をしようとしな……」

「そ、そうなんだ……」

「とりあえず、ベルフと話をさせてもらってもいいか？悩みがあるんだったら相談に乗れるかもしれねえ」

「そうですね……。よろしく願います。ベルフは2階におります。どうぞ上がってくださいな」

「ふう……。……はあ……………」
若者が1人ため息をついていた。

「あの、ちよつといい？」

エステルが声をかけた。

「何やってんだろ、オレ……。オヤジがいないからって安心して家に戻ってきて……。……情けないぜ……………」
「どうやら聞こえていないようだ。」

「おいコラ。人が話しかけてんだからこっち向きやがれ」

「えっ……。うわわわっ！な、なんだアンタたち！？」

「ベルフだな。俺の顔を忘れちまったか？」

「……。へ………………。アア、アガツトさん！？ど、どうしてオレの家に！？」

「ちと聞きたいことがあつてな。おつかさんに通してもらったぜ。今、時間はいいか」

「は、はあ……。別にいいツスけど……。……あのう、話つて？」

「実は、あなたが『白い影』を見たっていう話を聞いてね。詳しい話を教えてもらえないかって思って」

「そ、その話か……。正直、あんまり話したくないんだよな。話すと思いだしてまた恐くなっちゃうから……………」

「ああん？」

アガツトが剣呑な顔でベルフを見た。

「は、話します！話しますってば！」

「ちよつとアガツト。脅かしたりしないでよ」

「話が早くていいだろ。オラ、とつと話しやがれ」

「ふう……。参ったな。オレ、一週間前までチームの溜まり場になつてる倉庫で暮らしていたんですよ。この家には、メシを食いにたまたま帰ってくるくらいで……。仲間と馬鹿やりながらあそこで寝泊まりしてました」

「り、理解に苦しむわね。せつかく居心地のいい家がこんな近く

にあるのに……。アガットも同じような生活してたの？」

「……うるせえ。話の腰を折るんじゃないやねえ。それで、どうしたんだ？」

「一週間前の夜……。いつものように仲間たちと酔っ払って倉庫で寝てる時にふと起きちまって……。夜風に当たろうと外に出たら……見たんですよ」

「見たって……。れ、例の『白い影』を？」

「ああ……。空に浮かぶ『白い影』をな。マントみたいなのをまわって古めかしい衣装を着て……。踊るように宙を舞ってたんだ」

「あ、あはは……。ずいぶん具体的ねえ……」

「酔っ払って寝ぼけてたって可能性は？」

「いや、それはないツス。オレ、一気に酔いが醒めちゃって叫ぼうとしたけど声が出なくて……。幽霊が北東の方に飛び去った後、倉庫に戻って大声で他の連中をたたき起こしたんです。それでロツコさんに殴られちまったんですけど」

「フン、なるほどな。夜中って話だがだいたい何時くらいか判るか？」

「そうツスね……。真夜中の2時くらいかな。……ああもつ。完璧に思い出しちゃった……。わざわざ家に戻って思い出さないようにしてたのに！」

頭を抱えるベルフ。

「そ、それが家に戻ってきた理由なんだ。確かに、幽霊を見ちゃった場所で寝泊まりしたくないのは分かるけど」

「ケツ、不良失格だな。《レイヴン》なんざ辞めて、このまま家にいた方が身のためだぞ」

「うう……。分かってますよ、向いてないって。でもオレ、どうしても親父と顔を合わせたくなくて……。いま親父、選挙活動とかでホテルで寝泊まりしてるからオレも家に戻ってきたんですけど……。選挙が終わったらまた顔を合わせることになるし……。これで市長なんかになったらよけいに締めつけてくるんだ……」

「うん、それって結局、嫌な事から逃げてるだけのよな」

「うううう……」

「フン、どうやら自覚はしているみてえだな。だったら、誰にも頼らずにめえで答えを出してみろ。おっかさんには俺の方からそう言っておく」

「ア、アガットさん……」

「こちらの用件は終わりだ。エステル、次に行くぞ」

「うん、わかったわ。ベルフさん。情報提供、ありがとね」

「……ああ」

これで1つ目の聞き込みは終わった。

第7章 忍び寄る影（7）

エア＝レットンの関所

「エア＝レットンの関所……。ずいぶん久しぶりな気がする。ここに、アレを見た兵士さんがいるのよね？」

「ああ、ジャンが言うにはな。まずは関所の隊長に会ってどいつが見たのか聞いてみるぞ」

「ん、わかった。はあく、それにしても。こんな綺麗な場所でアレが出るなんてねえ……」

「白い影だの、アレだのいいかげん往生際が悪いな。素直に幽霊だって認めろや」

「あーもう、ほっとしてよ！ 気にならないように何とかごまかしてるんだから！」

エステルは幽霊の類が相当苦手らしい。

「あの、すみません。遊撃士協会の者なんですけど」

エステルはエア＝レットンの関所の隊長、ハーン隊長に話しかけた。

「ああ、ご苦労さん。見かけない顔だが今日はどうしたんだい？」

「実は、この関所で『白い影』を見かけた兵士さんがいるって聞いたんだけど……」

「なんだ、ギルドにまでその話が伝わっていたのか。まったく面目ない。お恥ずかしい限りだよ」

「お恥ずかしいって？」

「幽霊を見たなど寝ぼけていたに決まっている。そのような気の緩みは有事では命取りになりかねん。そして、部下の気の緩みは隊長である私の責任だからな」

「あいにくだが、そいつはあなたの方が早とちりだぜ。その幽霊、

ルーアン各地で目撃されているって話だからな」

「なんだって……？」

エステルたちは、ジャンから調査を頼まれたことをハーン隊長に説明した。

「そうだったのか。てつきり寝ぼけていただけだと思ったんだが……。いや、それは確かに私の早とちりだったようだ。ニクスには悪いことをしたな」

「そのニクスさんっていうのが白い影を目撃した兵士さん？」

「ああ、そうだ。カルデア隧道すいどうの入口で立哨すうしているから直接、話を聞くといい。私からの許可は出ていると伝えて欲しい」

「うん、わかったわ」

カルデア隧道 入口

「お、隧道に出たいのかい？ちょっと待っていてくれ。今、門を開けちまうから」

兵士ニクスが門の鍵を取り出そうとした。

「あ、ううん。通りたいわけじゃないの。あたしたち、遊撃士協会の者なんだけど、『白い影』について聞き込み調査してるんだ」

「それってひょっとして……。で、でもあれって俺が寝ぼけてただけなんじゃ……」

「ううん、そうじゃないわ。実は、あなた以外にもルーアン各地で白い影を目撃した人がいるのよね」

「あんたも、この隊長もその事を知らなかったらしいな。悪いことをしたって言ってたぜ」

「そ、そうだったのか。いや、安心してよ。夢にしちゃリアルだったからな。……って。夢じゃないってわかったらいきなり恐くなくなってきたな……」

「……気持ちはわかるかも。ま、まあ、それはともかくその時のこ

とを話してくれない？できるだけ詳しく、具体的に」

「ああ、わかった。……3日前の真夜中、俺は立哨で同じようにここに立ってたんだ。ここって俺の音がすごいだろ？でも、そのリズムに慣れちゃうとかえって眠くなるんだよね。ちよとメシを食って交替したばかりだったから余計に眠くてさ……。だから、眠気を払うためにこの上を行ったり来たりして歩哨していたんだ。その時さ……。俺がアレを見たのは」

「そ、そっか……。それってどういうアレだった？」

「ここでも『アレ』としか言えないエステル。

「白くてボンヤリして古めかしい服を着てたよ。ソレが俺の真上でくるくと踊っていたんだ。俺、もうゾツとして思わずライフルを構えてさ……」

「ええっ！？ゆうれ……。じゃなくてソレを撃つたの！？」

思わず『幽霊』と言いかけたエステル。

「あ、ああ……。威嚇射撃のつもりが当てちゃってさ。だけど、当たった様子もなくてその場にボンヤリ浮かんで……。いきなり北の方に飛び去ったんだ……」

「あうあう……」

「フン……。こりゃ本物くさいな」

「その後、あわてて中に戻って隊長たちを起こしたんだけど……。

『立哨中に寝ぼけるとは何事だ！』『しかも無用の発砲までしたのか！』って大目玉をくらっちゃってさ。はあ……。散々だったよ」

「ご、ご愁傷様です。まあ、夢でも見たと思って忘れるのが一番よ、うんうん」

「そんな風に言われてももう忘れられないってば。……何が理由でさ迷っているのか知らないけど何とかしてやってくれ。遊撃士なら、霊の悩みとか解決できるんじゃないのか？」

「や、やめてよね。神父さんじゃないんだから。でも確かに……。

何か出てくる理由はあるのかも。何とか頑張って調べてみるわ」

「ああ、よろしく頼むぜ」

「ついでにその目の証言を確認した。」

第7章 忍び寄る影(8)

エアレットンの関所 1階

「わあ、なんてスゴイの！パパ、ママ、こっちよ！」

「ほらほら、そんなにはしゃいだら転んでしまうぞ」

「うふふ。でも本当にステキね。ありがとう、あなた。一緒に連れてきてくれて」

「いや、君たちにはいつも寂しい思いをさせているからね。このくらい当然の家族サービスさ」

親子3人で旅行中の家族らしい。

「(うーん。仲の良さそうな家族ね。旅行に来たのかしら?)」

「(ああ、そうみたいだな。ひよっとしたら外国から来たのかもしれん)」

「はあ……。なんてスゴイのかしら。見ているだけで吸い込まれそうになってしまうわ。ねえ、そこのお姉さん。この滝って何て名前なのかしら?こんなに沢山の水、どこから流れてきているの?」

女の子がエステルに話しかけてきた。

「おっと、いきなりね」

エステルたちが女の子に近寄った。

「この滝は『エアレットン』よ。ヴァレリア湖から、大昔の水道を通ってここまで水が流れてきてるってわけ」

「ヴァレリア湖って知ってるわ!飛行船で到着する前に見えたとしても大きな湖のことでしょう?」

「うん、そうだけど……。ひよっとして外国から来たの?」

「レンのこと?ええ、そうよ。レンは遠くから来たんだから」

「そっか。レンちゃんって言うんだ。可愛い名前ねえ」

「うふふ、そうでしょう?だって、パパとママが付けてくれた名前なんだもの」

「レン、お姉さんをあまり困らせちゃだめよ」

「はは、スミマセン。見ず知らずの方に」ご迷惑を……」

「むーっ。レン、迷惑かけてないもの」

「あはは。気にしないでください」

「外国から来たみたいだが、リベールには旅行に来たのかい？」

「ええ、私は貿易商でリベールにはよく来るんですが。訪ねるたびに、この国の美しさにすっかり参ってしまったね……」

「それで今回は、商談がたら私と娘を連れてきてくれたんです。ふふ、珍しいこともあるものですわ」

「あはは……。いいですね、仲のいい家族で」

「うふふ、うらやましいでしょう？ パパは出張ばかりだけどいつもたくさんのお土産を買って来てくれるし……。ママはいつもニコニコしておいしいお料理を作ってくれるのよ」

「そうなんだ。うーん、お姉ちゃん羨ましいぞ」

「はは、参ったな……」

「すみません……。まだまだ子供なもので」

「ねえ、お名前教えてくれる？ レン、お姉さんのことなんて呼んだらいいのかしら？」 おっと、名前を覚えてもらって答えないのは失礼だったわね。あたしはエステル。エステル・ブライトっていうの。遊撃士をしてるんだけど……。うーん、遊撃士って知ってるかな？
「もう、子ども扱いたくないで。でもお姉さんって遊撃士さんだったのねえ。コワイ魔獣をやっつけたりするんでしょう？」

「うん、そういう時もあるかな」

「ほう……。遊撃士でいらっしやるか」

「そのお歳で遊撃士なんてとても凄くていらっしやるのね」

「あはは……。まだまだ新米ですけど」

「リベールの各都市にはギルドの支部がある。旅行中、困ったことがあったらいつでも頼るといいぜ」

「これはどうも」ご丁寧に……。では私たちは宿泊の手続きをしまいります」

「ほらレン、行きますよ」

「むー、お姉さんたちともうちよつと話していたいの。ねえ、お姉さん。こんど会ったら一緒に遊ぼうね？」

「うん、いいわよ」

「うふふ、うれしいな。またね、エステルお姉さん」

レンの家族たちは宿泊部屋に入って行った。

「ずいぶんマセたガキだったな。ティータより1つか2つ年下つてところか」

「うん、そのくらいかも。……………」

「どうした。オッサンでも思い出したか？」

「えへへ……………ちよつとだけ。あと、ヨシユアと会ったのもあの子くらの歳だったなって」

「そうか……………さてと。とつと次の目撃情報を当たってみるか？」

「うん！」

エステルたちは最後の目撃情報であるマーシア孤児院に向かった。

一方、同時刻、エア＝レットンの関所

「あの少女はまさか……………。いえ、間違いありませんね。彼女がここにいるということは……………。ついに動き始めましたか……………」

レインは何かを勘付いたようだった。そしてその場を後にした。

第7章 忍び寄る影(9)

マーシア孤児院

「ああつ……………」

そこには、放火で完全に焼け落ちたはずの孤児院が、焼け落ちる前と全く変わらないほどに再建されていた。

「ほう、こりゃ驚きだぜ。あれだけ黒コゲだったのをよくここまで戻せたもんだ」

「建物が新しくなっただくらいであとは元のまんまかも……………。…………よかつた…………本当に」

「エステルさん？」

「テレサ先生！」

庭からエステルに声をかけたのはテレサ院長だった。

「ふふつ。やっぱりそうだったのね。いらっしやい。よく来てくれました。それと…………あなたはアガットさん？」

「ああ。ご無沙汰してるぜ」

「以前、クラムの件でお世話になって以来ですね。お久しぶりです。あの時はお世話になりました」

「いや、いいんだ。それよりも、今まで挨拶もナシで申しわけねえ」

「あ、あの、孤児院再建、本当におめでとございます。前のまんまだから驚いちゃった」

「マノリアや業者の方々のご好意でそうして頂きました。やっぱり、この雰囲気はマーシア孤児院だと思いますから」

「あはは…………。うん、ホントにそうですね。えっと…………あの子たちは中にいるんですか？」

「ちょうど今、マノリア村にお勉強に行ってるどころなんです。週に一度、巡回神父の方が来て日曜学校が開かれるので…………」

「そうなんだ…………どうしよう。挨拶のついで、あの子たちから話を聞こうと思っただけ……………」

「話……。ひよつとして、ポーリイが見た『白いオジチャン』のことかしら？」

「あ、多分それです！そっか、目撃者はポーリイちゃんだったんだ。確かにあの子、妙にカンが鋭かったし……」

「あの子たちが帰ってくるまでどうぞ、中でお待ちになって。お茶とお菓子を馳走しますから」

「あ、ありがとう……。……」

エステルがそこで黙ってしまった。

「なんだ、どうした？」

「テレサ先生……。ヨシユアのこと……聞かないんですね」

「……。……。クローゼから聞かせてもらいました。あの子があまりにも悩むから相談に乗ってあげる形で……。」

エステルさん……。色々大変でしたね」

「……。あ……。あはは……。やだな……。先生みたいな人に慰められたら……。あたし……。ガマンできなくなっちゃう……」

「……。……」

「……。……。我慢する必要なんてありません。大切な人が自分の側から居なくなってしまったのだから……」

テレサ院長がエステルを抱きしめた。

「……。あ……。……」

「何も言わないで……。あなたのお母様の代わりにはならないでしようけれど……。しばらくこのまま……。抱きしめさせてくださいね」

「はあ……。恥ずかしいな。せっかく正遊撃士になった姿を見てもらうつもりだったのに……」

「ふふ、そういえば正遊撃士になったんですね。おめでとう、エステルさん」

「いや、あはは……。ホントまだまだ新米だけど。あ、そういえば

……。先生、さつきクローゼが悩んでたつて言つてませんでした？」
「ええ、エステルさんとヨシユアさんのことだね。大切な人たちが苦しんでいるのに力になることができない……。それは、多分あの子にとつて一番つらいことなのでしょう」

「大切な人……。えへへ、申しわけないけど何だかちよつと嬉しいかも……。早くクローゼにも会わなくちゃ」

「確か今、学園は試験期間ですから中に入れないかもしれませんが……。もうすぐ終わりのはずですし、すぐに会えると思いますよ」
「うん、わかりました。それにしても……。あの子たち、遅いですねえ。日曜学校の授業つてそんなに長くないはずですよね」

「ひよつとしたら、授業が終わつた後、村で遊んでいるのかもかもしれませんね。新しく来られた巡回神父の方が子供好きでいらつしやるそうですから」

「新しく来た巡回神父……。あれ……。何だか引つかるような？」

「だったらマノリア村まで様子を確かめに行つてみるか。ついでにガキどもをここに送つてくりゃあいい」

「あ、それもそっか」

「あら……。いいんですか？」

「えへへ。気にしないでください。美味しいお茶とお菓子のお礼です」

「それと、慰めてもらった礼もしなくちゃならねえしな」

「も、もう……。！」

エステルが赤面した。

「クスクス……。わかりました。それではお願いしますね」

エステルたちはマノリア村に向かった。

メーヴェ海道

「しかし、あの院長先生は相変わらずのおっかさなんだつたな。女王

もそうだったが……ああいう人には頭が上がらないぜ」

「あはは、アガットでもそんな風に思うことがあるんだ。うん、あたしのお母さんともちよつと雰囲気が似ているかな」

「そうか、オツサンの……。確か、10年前の戦争で亡くなったって言ってたな……………」

アガットが急に黙った。

「どうしたの、アガット？」

「いや……何ていうか。女は強えと思つてな」

「なにそれ？」

「……あまり突っ込むな。ほら、とつとマノリアにガキどもを迎えに行つちまうぞ」

マノリア村

「マノリアか……。寄付金強奪の事件以来だな。相変わらずノンビリした村だぜ」

「そこがいいんじゃない。アガットの故郷のラヴェンヌ村もノンビリしてて良かったわよ」

「フン、そういうもんかねえ。とりあえず、日曜学校は村のどこかでやってるらしい。様子を確かめに行くとするか」

「ん、オツケー」

「あ……………」

風車小屋の前の海が見えるベンチを見てエステルが足を止めた。

「……………」

「なんだ、どうした？」

「あはは……。ここでヨシユアと一緒にランチを食べたことがあつ

て……。ちよつと思ひ出してたの」

「そうか……」

「あ、でもホント、大した思ひ出じゃないの。あたし、自分の気持ちにも気づいていないような子供で……。人目をはばからずにヨシユアに『あゝん』とか平気でやつちやつたりして……。はあ、さぞかしヨシユアを呆れさせちゃったんだろうなあ」

「ふん、今でも十分子供と言やあ子供だがな。どうする？ここで少し休んでいくか？」

「ううん、今はまだ立ち止まってられないし。それより、日曜学校がまだやつてるか確かめなきゃ」

「ああ、そうだな」

マノリア村 風車小屋

風車小屋の扉に『日曜学校・授業中』という張り紙がされていた。

「あ、ここで日曜学校をしているみたいね。まだ終わってないみたいだけど何の授業をしているのかしら？」

「中を覗いてみたらどうだ。もう終わってて、張り紙を取り忘れた可能性もあるだろ」

「うん、覗いてみるね」

エステルが扉を少し開けて中を覗いた。

「（んー、どれどれ……。あれっ、あの人……）」

「『同情することありませんよ。まったく、ティーア様は人がいいんだから』」

正直なところ、ガストン公爵がこのまま黙って引き下がるとはとも思えないペトロ口でした。それに、不気味な仮面の人形師ハーレクインの動向も気になります。互いに面識があるようでしたが師匠の

カプリは、言葉を濁してなにも教えてくれませんでした。いずれにせよ、近いうちにもう一波乱あるに違いありません。ペトロは蒼騎士の改造を決意しました。

『もう、ペトロ様ったら』

ちよつと拗ねたような口調にペトロは我に返りました。

『お茶が冷めてしまえますよ?』

青空を映した、涼やかな瞳が“大丈夫”と安心させるようにいたずらっぽく輝いています。照れくさくなったペトロはぬるまった紅茶で喉を潤しました。

……人形の騎士・おわり」

巡回神父のケビン神父は本を閉じた。どうやら、授業内容は本の読み聞かせだったようだ。

「ええ〜っ！もう終わりなのかよ〜！？ハーレクインとの決着はどうなるんだよ!？」

「バカねえ、クラムつたら。ここで終わるのがいいんじゃない。そしてペトロとティーア姫はいずれ結婚して幸せに暮らすのよ。はあ〜、ロマンチックだねえ?」

「うんうん。やっぱり2人には結婚して幸せになってもらわないと?」

「ボク、なんだか先生のお茶が飲みたいな〜」

「カプリ師匠がカッコイイの」

子供は口々に自分の意見を言っていた。

「はあはあ……。さすがに『人形の騎士』全22巻の一気に読みはキツイわ。ほれ、これでええやろ。今日の授業はオシマイやで」

「ぶーぶー」

「ケビン先生、お疲れさまあ」

「ふう、敵わんなあ……。あー、その人。授業は終わりやからもう入ってきてもええで」

「あはは……。気付かれちゃったか。えっと、失礼します」

エステルとアガットが風車小屋に入った。

「へっ……?」

「あああああっ!?!」

「エステルさん!?!」

「みんな、久しぶりね!元気にしてた?」

子供たちが一斉にエステルの元に駆け寄った。

「なんだよ!遊びに来たのかよ!?!」

「うわあ!本当に久しぶりです!」

「エステルおねえちゃん。遊んで遊んで」

「よく来たの!。歓迎するの!」

「あはは……。みんな相変わらず元気ねえ。えっと、ケビンさんもお久しぶりね」

「おお、エステルちゃん。オレのこと覚えとってくれたか!」

「そりゃあもちろん。しかし、本当にその格好で神父なんかやってたのねえ」

「どーという意味やねん。しかし、こんなところでまた会えるなんてなあ。これはひよっとして運命の再会ってやつかもな?」

エステルたちはケビン神父も連れてマーシア孤児院に戻った。

マーシア孤児院

「そうでしたか……。神父様とエステルさんはお知り合いだったんですね。ふふっ、世間は狭いですね」

「いや、ホンマそうですわ。それにしても、オレまでお昼をご馳走になつてしもうてえらいスイマセンでしたわ」

「いえいえ、ついですし子供たちに勉強を教えてもらっていただけのお礼ですわ」

「な、エステル姉ちゃん。ヨシユア兄ちゃんがいなくて今日は一緒にいないのかよ?」

クラムがエステルに尋ねた。

「あ、うん……まあね。ちょっと用事があって一緒に来られなかったのよ」

事情を知っているケビン神父は顔を背けた。

「そうなんだ……しょぼん」

「うー、ヨシユア兄ちゃんにも孤児院が元通りになったトコ、見てもらいたかったんだけどなー」

「ほんと、残念です」

「お姫さまのカッコウ、また見たかったのー」

「あ、あはは……。それはともかく、ずいぶん長い日曜学校だったわね。最後に何か読んでみたいだけであれって小説か何かなの？」

「へへん。『人形の騎士』っていうんだ。人形使いの戦いをテーマにしたバリバリのアクション活劇だぜ！」

「あん、違っわよう。身分違いの恋をテーマにしたラブロマンスじゃないの」

「リベールに来る時に持ってきた青少年向け（ジュヴナイル）小説なんやけどな……。ちよっとずつ読んで聞かせようと思っったのにいきなり全巻読んでしもたわ……」

「あはは。ノリがいいのが仇になったわね」

「うふふ。本当にお疲れさまでした。神父様はこれからルーアンにお戻りになるの？」

「ええ、まあそうですね。他にも回るところがあるからすぐに飛行船に飛び乗ることになるとは思いますけど。そういや、エステルちゃんはどうしてルーアン地方におるん？やっぱ、遊撃士のお仕事でか？」

「うん、まあ色々あってね。そうだ、あたしたちは聞きたいことがあつて孤児院にきたんだけど……」

「ポーリイが見たという『白いオジチャン』の話ですね？」

「あー、その話かあ」

「んー？ポーリイがどうしたの？」

「えっと、ポーリイちゃんに聞きたいことがあるんだけど……。『白いオジチャン』のこと詳しく聞かせてもらえないかなあ？」

「白いオジチャンは白いオジチャンなの。くるくる回っていても楽しそうだったのー」

あまり頼りにならないポーリイ。

「うーん……困ったわねえ」

「えっと、あたしから説明させてもらいますね」

しっかり者のマリイが代わりに説明してくれた。

「あれは4日前くらいかな……。この子、夕食のあと外に出てぼーっとしてたんです。そしたら空に、白い男の人が浮かんでいるのを見たらしくて」

「そうなのー。楽しそうに飛び跳ねながらお空でくるくる踊ってたのー。で、ポーリイが話しかけたらペコリとお辞儀をして飛び去って行っちゃったのー」

「ぜってー、寝ぼけてただけだって。だってユーレイにしちゃ全然怖くないじゃん、そんなの」

「私も最初そう思ったんですがダニエルも見ていたらしくて。ね、ダニエル？」

テレサ院長がダニエルに尋ねた。

「うん。ボクはちょっとだけど。白いヘンな影が、東のほうにびゅーんって飛んでいったんだ」

「う、うーん」

「目撃者が2人つてことは信憑性が高そうだな。しかし、声をかけたらお辞儀したと来やがったか……。その白いオッサンってヤツ、どんな顔をしてたか分かるか？」

「お顔は知らないのー。だってオジチャン、変なマスクをつけてたんだもん」

「マ、マスク!?!」

「そりやまた……。ケツタイな幽霊もいたもんだ」

「あのなあ、ポーリイ。そういう事はちゃんと見えよ。初めて聞い

たぞ、オレ」

「だって誰にも聞かれなかっただもーん」

「まあ、マスクの事はともかく夢ではないようでしたので……。念のため、遊撃士協会にお知らせした次第なんです。それ以来、注意はしましたけど再び現れる様子はないようです」

「う、うーん……」

「大体わかった。色々と参考になったぜ」

「エステルさん、アガットさん。ルーアン地方にいる間、よかったらまたいらしてね。神父様も、授業があつた時はぜひまたお寄りください」

「うん、そうさせてもらうわ」

「いや、機会があつたらまた寄らせてもらいますわ」

「ケビン兄ちゃん、またな！それからエステル姉ちゃん！今度はヨシユア兄ちゃんと一緒に来てくれよな！」

「あ、うん……。いつになるか分からないけど絶対に一緒に遊びに来るからね！」

メーヴェ海道

「いや、ホンマ元気なガキどもやったわ。しかし、院長先生の人徳かな？どいつも気持ちのいいほどまつすぐな性格しとったわ」

「そりゃあテレサ先生だもん。本当はもう1人、子供たちの面倒を見ている子がいるんだけど。学校が試験期間とかで今日は来ていないみたい」

「ふーん、そうなんか。そういやオレはこれからルーアンに戻るけど。アンタらはどうする？一緒に街まで行くとするか？」

「そうだな、こっち方面での聞き込みも終わったし……。旅は道連れと行くとしようや」

「それじゃあ決まりね。ルーアンに向けてレッツ・ゴー！」
エステルたちはルーアン市に向かった。

第7章 忍び寄る影（10）

ルーアン市

「やれやれ、よーやく戻れたか。おおきに。ここまで送ってくれて助かったわ」

「あはは、お礼なんてやめてよ」

「俺たちがいなくてもあんただったら平気だったろうさ。ボウガンとは古風だが……なかなか大した腕前だったぜ」

「いや」。巡回神父なんて町外れに行くお仕事ですから。最低限の武装はしとるけど、やっぱ本職には敵わんですわ」

「うーん、そうかなあ。十分、遊撃士としてもやっていける腕前だと思っけど」

「もう、エステルちゃんつてば人をおだてるのが上手いんやから。お兄さん、本気になってまうで〜?」

「な、なんの話をしてんのよ」

「はは、それは置いておいて。さっきの幽霊の話やけど、ルーアン礼拝堂にも何人が相談に来とるらしい。ただ、テオドロ教区長によると普通の霊とは思えないそうや」

「普通の霊じゃない……?」

エステルが首をかしげた。

「教会の教えでは、人が死んだ時、善なる魂は空に登るんだっただな?」

「ええ、反対に罪を負った魂は昏き煉獄に落とされるんですけど……。たまに、その枠からはみ出でどちらにも行けん魂があるらしい。それがいわゆる『幽霊』やと教会では一般的に言われとりますわ」

「うつつ……。さ迷える魂ってことね。でも、普通じゃないって一体どういことなのかしら?」

「普通の霊は、多くの場合、何かに縛られていることが多い。場所だったり、人だったりな。やけど、今回の幽霊騒ぎにはどちらにも

あてはまらない。せやから、教区長さんもしきりに首をひねった
で」

「なるほど……そういうことか」

「まあ、調査の参考にでもしたってや。ほな、オレは礼拝堂に戻る
わ。またな、エステルちゃんたち」

ケビン神父は行ってしまった。

「うーん、助言はなかなか聖職者っぽかったけど……。やっぱりど
う見ても神父には見えない人ねえ」

「ま、巡回神父なんて変わったヤツが多いからな。昔、ラヴェンヌ
村に来てたやつもけっこう変わった親父だったぜ」

「ふーん、そうなんだ。さてと……ジャンさんに言われてた目撃情
報は全部集めたね。いったんギルドに戻ろっか？」

「ああ、そうだな」

エステルはギルドに向かった。

遊撃士協会ルーアン支部

「あ……」

ギルドに入ると、ナイアルとドロシーがいた。

「お、戻ってきたか」

「エステルちゃん！お帰りなさい！」

「ナイアル、ドロシー！どうしてルーアンにいるの？」

「そりゃあ、話題の市長選を取材しに来たに決まってるだろ。で、
妙な事件が起こってるって聞いて、ギルドに事情を聞きに来たわけ
さ」

「妙な事件って……。例の『白い影』のことね」

「実は、君たちが調べている間に市街で別の目撃事件があってね。
市民の間にも徐々に動揺が広がっている状況なんだ」

「そうか……。だんだん、大事おおいことになってきたな」

「そして極めつけが……。このお嬢さんが撮った写真さ。これはかなり有力な資料になると思うんだけど……」

「写真つて……。ま、ま、まさかっ!？」

エステルが顔を青ざめた。

「心霊写真つてやつか？」

「うーん、そうなのかなあ。ホテルから夜景を撮ってたら偶然写っていたからよくわからないんだけど。とりあえず見てみるわ?」

ドロシーが写真を見せてくれた。ホテルから見える灯台の横にマントを羽織った白い影がくつきり写っていた。

「……………」

エステルは開いた口がふさがらなかった。

「……なんつーか。決定的じゃねえか？」

「あ、あはは……。そう決めつけるのは早いわよ。オーバルカメラの調子が悪かっただけかもしれないし……」

「うーん、故障ってことはありえないと思うよ?中央工房で買った最新機種だしメンテナンスもバッチリなもの」

「そういう事にしといてっばっ!」

エステルがドロシーを睨んだ。

「エステルちゃん、コワイ……………」

「まあ、そういう訳でかなり具体性を帯びた話になってきちゃったんだけど……。この件は、マスコミと協力しても損はないと思う。

早速、各地で調べてきた事をここで報告してくれないか？」

「う、うん……。一応、3箇所調べたけど」

「た、大変だ〜!」

エステルが報告しようとした時、外から叫び声が聞こえてきた。そして、青年が1人入ってきた。

「ど、どうしたの!そんなに慌てて……………」

「強盗でも起こったか!？」

「いや、違うんだ!ノーマンさんの支持者とボルトスさんの支持者

が言い争いを始めちゃって……。ラングランド大橋で睨みあつてる状態なんだ！」

「あ、あんですって〜!?!」

「ノーマンとボルトスといやあ、どっちも市長選の候補じゃねえか」

「ほほう。そりゃあ良いネタだな。ドロシー、とつとと行くぞ！」

「アイアイサー！エステルちゃん、また後でね」

ナイアルとドロシーはさっさと出ていった。

「な、なんて素早い……」

「念のため、俺たちも行くか。喧嘩になりそうだったら間に入って仲裁するぞ」

「う、うん！」

「すまない。よろしく頼んだよ」

エステルたちはラングランド大橋に直行した。

ラングランド大橋

橋の上では大勢の双方の支持者たちが言い争いを繰り広げていた。

「とぼけるんじゃない！ホテルに現れた幽霊つてのがあんたたちの仕業だつていうのはもう分かつてるんだよ！」

「ノーマンさんの息子さんもショックで寝込んでるんだぞ！やりすぎだとは思わないのか!?!」

ノーマン氏側の支持者がボルトス氏側を責めたてた。

「フン、その息子つてのは《レイヴン》の不良じゃねえか！そんなロクデナシの言うことが信用できるかよ!！」

対するボルトス氏側も黙っていない。

「……ちよつと待ちたまえ。私個人を批判するならともかく家族を攻撃するのは卑怯だろう。そのロクデナシつてのは撤回してもらおうじゃないか」

ノーマン氏が口を出した。

「うーん、確かにそれは言い過ぎかもしれないねえ」

ボルトス氏も頷いている。

「ちよつと主任！そこで納得しないでくれよ！あんたがそんな弱腰だから観光推進派が調子に乗るんだ！」

「な、なんだと〜!?」

「調子に乗ってるのはあんたら港湾推進派じゃないか！幽霊騒ぎなんてセコイ手使って嫌がらせなんかしやがって！」

売り言葉に買い言葉と言った感じだ。これでは話の進展がない。

「あちゃあ……。ヒートアップしてるわねえ。これは止めた方がいいのかしら？」

「喧嘩沙汰にはなつてねえからまだ早いかもしれない……。いざ喧嘩が始まったらすぐに止められるような場所に移動しておきてえな」

「といつても、見物人が多くてとても前に進めないんだけど……」

まったく、ナイアルたちつてばちやつかり前を確保しちやつてさ」

エステルたちがそう言っている間にも、言い争いは勢いを増していった。

「もう我慢できねえ！てめえらみてえな軟弱野郎が腕つぶしで勝てると思うなよ！」

ボルトス氏側が先にキレた。

「じよ、上等だ！やつてやろうじゃないか！」

「ノーマンさんの名誉は僕たちノーマン商会員が守る！」

「止めたまえ君たち！暴力はいかん、暴力は！」

ノーマン氏が慌てて止めた。

「みんな抑えてくれ！ここは冷静に話し合いを……」

ボルトス氏も止めたが収まりそうになかった。

「(やばっ……!）」

「(チツ……止められねえか)」

エステルたちが仲裁に入ろうとしたが前に進めなかった。

そのとき、楽器の鳴る音が聞こえてきた。

「フツ……。哀しいことだね」

ボートの上でリュートを携えた金髪の青年 オリビエが橋の近くでボートを止めた。

「争いは何も生み出さない……。空しい亀裂を生み出すだけさ。そんな君たちに、歌を贈ろう。心の断絶を乗り越えて、お互いに手を取り合えるようなそんな優しくも切ない歌を……」

そう言つて、オリビエは歌を歌い始めた。

「陽の光 映す 虹の橋

掛け渡り 君の元へ……

求めれば 空に 溶け消えて

寂しいと 君が舞う……

届くことのない はかない願いなら

せめてひとつ 傷を残そう

はじめての約束 守らない約束

君の吐息 琥珀にして

永遠の夢 閉じ込めよう……」

「フツ……。みんな感じてくれたようだね。ただ一つの真実……。それは愛は永遠だということを。今風に言えばラヴ・イズ・エターナル」

その場にいた全員はその言葉にあきれ返った。

「コ、コホン……。とりあえず、ボルトスさん。ここはいったんお互い頭を冷やした方が良さそうだな」

「ええ、そうですね。通行の邪魔になりますし。みんな、いったん

港の方に戻ろう」

「そ、そうっすね……」

「そうだ……。チラシを配らなくちゃ」

どちらの陣営もそそくさと退散した。

「（み、みんな逃げた……）」

「（……気持ちは分かるぜ）」

「フツ、どこの国でも民衆が熱しやすく冷めやすいのは同じだな。

いや、真に恐るべきはみんなの平常心を取り戻したこの奇跡のこと

き旋律か……。さあ記者諸君！思う存分、写真を撮って取材してくれたまえっ！」

「うわ、いいんですかあ。それじゃあ遠慮なくいきますね。ハイ、チーズ？」

ドロシーは本当に遠慮なくカメラを撮り始めた。

「うーん、マーベラス」

オリビエもしっかりポーズをとっている。

「えーと、その……。俺はさっきの話を聞かせてもらおうかね」

「う、うん、そうね。早いうちに報告しないと忘れちゃいそうな気が……」

「とつととギルドに戻ってジャンに報告するか」

エステル、アガット、ナイアルはギルドに戻った。

「おや……。ちょっと、エステル君。どこに行こうというのかね？」

「ま、待ちたまえ！いや、どうか待ってください！」

「おお、いい表情ですね！とつてもキュートです？」

第7章 忍び寄る影（11）

遊撃士協会ルーアン支部

「まったく、何という薄情な……。久しぶりに再会した運命の相手に向かつてこの仕打ちはあんまりだよ」

オリビエがさつきからブツブツ言っている

「何が運命の相手なんだか……。大体、オリビエってばどうしてルーアンにいるのよ。エルモの温泉に逗留してるんじゃないの？」

「フツ、実はミユラー君から《紅葉亭》に連絡があつてね。エステル君が戻ってきたことをわざわざ知らせてくれたのだよ。これは挨拶せねばと思つて飛んで来たわけなのさっ」

「あ、ありがたいんだけど素直に喜べないような……。でも、生誕祭以来挨拶もできなかったよね。ありがとう、オリビエ。また会えて本当に嬉しいわ」

「そ、そうか……。うーむ、エステル君が素直だと調子が狂うような。もつと激しく突っ込んでくれないと、その……。欲求不満になつてしまうよ」

オリビエが赤面しながらエステルに言った。

「顔を赤らめながら不穏な発言をするのはやめい！」

エステルが怒鳴った。

「はあ……。まあいいわ。えっと、ジャンさん。コレがクーデター事件の時に協力してくれたオリビエ。エレボニアから来た演奏家なの」

「はあ……。何というか強烈な人だねえ。しかし、それだったら一緒に話を聞いてもらつても構わないかな」

「本来なら部外者つてことで追い出すところだが……。人の話を聞くヤツじゃねえし放っておくしかなさそうだな」

「ハッハッハッ。さすがはアガット君だ。ボクのことなら何でもござり存じのようだね」

「さもマブタチのように語りかけてくんじゃねえ！あの時一緒に戦

「ただだけでロクに話したこともねえだろ！」

「……まあ、流す方向で」

「オーケー。の方が良さそうだね」

「どうでもいいが、さっさと話を聞かせてくれ。こちとら、市長選のネタを集めなきゃならねえんだからな」

「はいはい、判ってるわよ。それじゃあ、聞いてきた順に目撃情報を報告するけど……」

エステルたちは各地の目撃情報に加えてケビン神父の見解を説明した。

「なるほど……。ずいぶん具体的に集まったね。少なくとも、何かを掴むには十分すぎるほどの情報だよ」

「うーん、そうかしら」

「まあ、さつき騒いでいた市長選の相手陣営を妨害するためのイタズラって線はなさそうだな。ノーマン氏の息子はともかく孤児院と関所の兵士を脅かして効果があるとも思えんし」

「実際、亡霊は空を飛んでいる。一般人が簡単にできるトリックじゃないはずだぜ」

「それじゃあやっぱり、本物の幽霊さんなんですよ。たぶん仮面をかぶらされて幽閉された拳句におかしくなった大昔の貴族かなんかで。数百年の時を経た今、怨霊として甦ったんですよ」

「さも楽しそうに言うドロシー。」

「そ、そんな怖い話をさも嬉しそうに言わないでよつ。第一、幽霊つてのは人か場所に縛られているらしいし。やっぱり違うんじゃないかしら」

「いえ、それはどうでしょうか？」

いきなり、後ろから声が聞こえてきた。

「誰だっ！」

アガットが慌てて振り向いた。

「あっ、あなたは……レインさん!？」

そこにいたのはエステルが王都で会ったレインだった。

「どうもお久しぶりです、エステルさん。王都で会って以来ですね」
「おい、エステル。誰だ、こいつは？」

アガットがエステルに尋ねた。

「えっと、あたしもよく判らないんだけど。王都で会ったレインさんよ」

「どうも初めまして。それで、私もこの事件解決に加わってもよろしいでしょうか？もちろん、その手助けはさせてもらいますよ」

「ええっ！？」

「なんだと……？」

「レイン君と言ったかな？君は何者なんだい？」

ジャンがレインに尋ねた。

「怪しい者ではありません……と言っても駄目でしょうから、行動で示させてもらいますよ。エステルさん、3つの情報にはある一貫性があります」

「ほう……。ボクと同じことに気付いたようだね」

「ええ、僕も同じことを考えていましたよ」

オリビエとジャンが相槌あいつちを打った。

「えっ、どういうこと？」

「エステルさんが調査した3ヶ所の目撃地点ですが……」

レインが王国地図を取り出した。

「ここと、ここ、ここになりますね」

レインがルーアン市、エア＝レットンの関所、マーシア孤児院に印を入れた。

「うん……。ルーアン南街区に、エア＝レットンの関所、そしてマーシア孤児院。それがどうかしたの？」

「ここで得られた3つの証言において、明確に異なる部分に注目してください。そうすると、ある事実が浮き上がります。エステルさん、その異なる部分は何か分かかりますか？」

「3つの証言で明確に異なる部分……」

3つの証言では、白い影の行動、現れた時間、去って行った方角だ

が……。

「そ、それって……。わかった！ ずばり、白い影が去った方角ね！」
「ええ、その通りだ。南街区での証言では白い影が去ったのは『北東』……。エアレットンの関所の兵士の証言では白い影が去ったのは『北』……。そして、孤児院での子供の証言では白い影が去ったのは『東』……。」

レインが順次、矢印で去った方向を書き込むと、ある一点に集中していた。

「あああつ！？」

「フン、そういうことか……。」

「なるほどねえ。幽霊が来た場所が絞られたっていう寸法かよ」

「そういうことです。ここは『ジェニス王立学園』ですね。この近辺に幽霊の居場所があるというわけです」

「レインさん……。あなた、なかなか冴えるわね。こうなったら、幽霊だろうがなんだろうがどっちでもいいわ。行って確かめるしかないわね！ レインさん、協力してくれる？」

「ええ、もちろんです」

「アガツトも問題ないよね？」

「フン……。てめえが何者か知らねえが……。今回は特別に協力を認めてやらあ。ジャン、問題はねえな？」

「うーん、まあ、問題ないですよ。本格的に調査して、できれば問題を解決してくれ。《リベール通信》さんはこの先、どうするんですか？」

「そうだな、肝心の市長選の取材もしくちやならねえし……。よし、ドロシー。この件はお前に任せろ」

「はい、わかりました。これでもかっくらいい心霊写真を撮ってきてまーす！」

何かのツアーと勘違いしているらしいドロシー。

「違っつての！ あくまで真相の解明だ。エステルたちに付いて行って幽霊事件の取材をするんだよ」

「はあ、なるほど。よく判りませんけど。せいっぱい頑張ります！」

「ちよ、ちよっと。勝手に話を進めないでよ」

「まあまあ。写真も提供してもらったし、持ちつ持たれつってことで」

「フン……仕方ねえな」

「うーん、なんかどんどん緊張感がなくなって行くような。でもまあ、今回は助かるかな」

「そういうわけで事件の調査、よろしく頼んだぞ。俺はこれから2人の候補にインタビューをかますからな」

「ナイアルはギルドを出て行くとしたが……」。

「とと……。そうだ、エステル……。ヨシユアのことは親父さんから少し聞かされた。謎の組織つても気になるし……。それっぽいニュースが入ったらすぐにギルドに連絡するからな」

「え……」

エステルは驚いた。

「……………」

そしてレインは黙っていた。

「だからその……まあ、頑張れってことだ！そ、そんなじゃあな！」

ナイアルはそれを言い残して出ていった。

「ナイアル……」

「うふふ。先輩つてば照れちゃって。カシウスさんから話を聞いて結構シヨックだったみたいなの。何か助けになれないか色々と考えてたみたいよ？」

「そ、そうなんだ。まったくもう。素直じゃないっていうか……」

「かく言うわたしも取材で気になるネタを拾ったらギルドに連絡を入れるから。だからエステルちゃん。ファイト・オー、だからね〜！」

「うん、ありがとう……。それじゃあ……王立学園に行くと思いますか！」

「王立学園には僕の方から連絡しておこう。それではよろしく頼んだよ」

「……何ていうか、今さら突っ込むのも何だけど。やっぱりオリビエも来るわけね？」

オリビエはさりげなくエステルたちに付いてきた。

「ハツハツハツ。やだなあ、エステル君。鳥が空を駆け、魚が水に遊ぶのと同じくらいあたり前のことだよ。何のためにボクが、温泉を捨ててエルモから来たと思ってるんだい？」

「うーん……。ねえアガット。仲間に入れてもいいかな？」

「もう好きにしゃがれ……。ただし、俺はアンタを完全に信用してやるわけじゃねえ。妙なマネをしたら容赦なくブチのめすからな」

「ふう、それは残念だ。たまには君みたいなワイルドなタイプも悪くないと思っただが」

「はあ？」

「フツ、安心してくれたまえ。君の信用を勝ち得るまで口説くのは控えることにするよ」

「……。ア、アホかあッ！何の話をしてやがる！……?」

「はわわ、何だかとっても大人の香りでドキドキです」

「（しばらくツツコミ役はアガットに任せてとこつと……）」

「（フフフ……。愉快的人たちが多くて結構なことです）」

第7章 忍び寄る影（12）

メーヴェ海道

「そういや、てめえ。どうしていきなり、この事件に絡んできた？アガットがレインに尋ねた。」

「あ、そういえば……。ねえ、どうしてなの、レインさん？」

「そうですね……。この事件、私の思うところ、幽霊などではなくて何か人為的なものを感じるのです。それで気になって……。すいません、余計な口出しでしたかね？」

「いえ、そんなことはないけど。むしろ、役に立ったし。それで、人為的って？」

「本物の幽霊ではないということです。今回の幽霊事件、何らかの目的があるとみています」

「そいつはまさか……。《結社》が絡んでも言うのか？」
アガットが突っ込んできた。

「いえ、現時点では断定するのは早計だと思います。いま言えることは、幽霊などではないことです」

「それはまた何で？」

「エステルさんも言っていました、幽霊は何かに縛られることが多いのです。しかし、今回はルーアン地方全体に出没しています。さらに、出没回数も非常に多いのです。普通ならば、出没回数が多いのは領けますが、その場合、局所的な場合が大抵です。しかし、今回は明らかに違います」

「な、なるほど……」

「それじゃあ、何者かが何らかの手段を使って幽霊騒ぎを起こしているってことか？」

「ええ、そう思います。しかし、こんなことができることなんて考えられません……」

「フン、いずれにせよその場所に行ってみれば分かることさ。今、

ウジウジ考えてたっつてしょうがねえ」

「そうですね、急ぎましようか」

「あともうひとつ、聞かせる。さっきは聞かなかったが……てめえは何者だ？」

「……………」

レインは黙ってしまった。

「どうしたの、レインさん？」

「どうした？とつとつと言いやがれ」

「……………今、全てを話すことはできませんが。これだけは話します。ただ、あまり口外して欲しくはありません。それを守ってくださいますか？」

「え…………？」

「ああ、いいだろう。だから、話せ」

「わかりました。……………私は、《結社》のある人物を追いかけています。それも何年も前からです。そして今回、リベル王国で《結社》の動きがあるとわかりました。それで、《結社》の動きを掴み、その人物と会うために今まで1人活動していたのです」

「《結社》の！？」

「それで《結社》で何か判ったことはあるのかよ？」

「いいえ、肝心なことはまだ判っていません。まだ《結社》は表立って活動はしていませんから。しかし、近いうちに必ず《結社》はこの国を揺るがすことになるのは間違いありません」

「そ、そんな……………」

「フン、だろうな。今回の事件はどうか知らんが、間違いなくヤツらが何かしでかすのは間違いねえ」

「ええ。ですから、今回の幽霊騒ぎ、《結社》が絡んでいる可能性は全くないとは言いません」

「《結社》を追いかけている点で、俺らとは共通しているようだ。まあ、今回はてめえを信用しといてやる。とにかくさっさと王立学園に行くぞ」

エステルたちは王立学園に向かった。

第7章 忍び寄る影（13）

ジエニス王立学園

「ほう、ここが王立学園か。ほころぶ直前の蕾たちが青春の汗と涙を流す学び舎……。フフ……。実に素晴らしいじゃないか」

「さぞかし撮りがいのある被写体が揃ってそうですね。これを機会に撮りまくらないと」

オリビエとドロシーは目的を忘れかけている。

「あのな、俺たちはあくまで幽霊騒ぎを調べに来たんだったの。わかってんのか、そこんどこ？」

「でも、何だか懐かしいな……。この学園で過ごしたのはたった一週間くらいだったけど……」

「ま、それだけ濃い時間を過ごしたってことだろ」

「ほう……。この学園で何かしたのですか？」

「うん。学園祭の手伝いをね。演劇に出演したんだ」

「あ、ナイアル先輩に聞いたよ。エステルちゃんたちが騎士で、ヨシユア君がお姫様だったんでしょ？あーあ、写真撮りたかったなあ」

「なに……。それは本当かい！？」

いち早く飛びついたのはオリビエだ。

「おお、なんたることだ！ヨシユア君の艶姿を見逃すとは！何としても彼を見つけてもう一度着てもらわなくてはっ！」

「はあ、感傷に浸ってるのが馬鹿馬鹿しくなってくるわね。そういえば、試験期間だってテレサ先生が言ってたけど……。まだ終わってないのかしら？」

その時、鳥の鳴き声が聞こえてきた。

「ジーク！？」

シロハヤブサのジークがエステルの腕にとまった。

「ピュイピュイピュイ！」

「あはは……。何言ってるのか分からないけど歓迎してくれているみたいね。久しぶり、元気にしてた？」

「ピューイ？」

「ほう……。リベールの国鳥のシロハヤブサですか。これはまた珍しいですね」

「……エステルさん……」

「あ……」

続いてやって来たのはクローゼとその友達のジルとハンスだった。

「クローゼ……。えへへ……。生誕祭以来ね」

「はい……。そうですね。……。あの……。私……。……。私……。……」

クローゼはいきなりエステルに近づいてきて抱きついた。

「わわっ……。どうしたのクローゼ？」

「ごめんなさい……。本当にごめんなさい……。エステルさんたちが大変な時に私……。なんにも出来なくて……。自分の力不足がイヤになります……」

「やだな……。そんなこと言わないでよ……。そんな風に思っただけであたしは嬉しいから……。ヨシユアだってきつと同じだと思うから……。とにかく……。また会えただけでも嬉しいよ……」

「はい……。私も……。こうして再会できただけでも空の女神に感謝したい気分です」

「まったくも。2人とも大げさなんだから。久しぶりね、エステル。生誕祭の時に会って以来かな？」

「うん、そうだね。ハンス君も……。お久しぶり」

「ああ……。そうだな。色々と話したいんだが……。今は後回しにしておくとするか。遊撃士の仕事で来たんだろう？ 学園長のところに案内するよ」

学園長室

エステルたちはコリンズ学園長にこれまでのことを説明した。

「なるほど、話はわかった。ルーアン地方の各地に現れる『白い影』がこの学園から来ているのだね？」

「はい、そうみたいです」

「そこで、ギルドとしては学園内の調査をしたいんだが。生徒への聞き込みを含めて許可してもらえんだろうか？」

「いや、そういう事であればこちらからもお願いしよう。その『白い影』の正体はどういうものかは判らないが……。選挙にも影響を与えていると聞いては放つてもおけんだろう」

「ホッ……。ありがとうございます。それで、学園で『白い影』みたいな怪しい噂が流れてたりしませんか？」

「いや……。私の所に報告は来てないな。生徒会の方はどうかね？」
生徒会所属のクローゼ、ジル、ハンスに尋ねた。

「うーん、こちらにもその手の話は来てませんねえ。ただ、なにぶん、試験期間中でもありましたし。みんな、相談に来るような余裕がなかっただけかもしれません」

「なるほど……。ありえるな」

「?どういうこと？」

「王立学園の定期試験は進級のかかる重要なものですから……。たとえば何かを見た生徒がいたとしてもとりあえず考えないようにして勉強に集中してしまうかもしれません」

「確かに俺でもそうするね。目の錯覚にこだわるよりも一つでも多くの数式を頭に叩き込みたいところだ」

ハンスがため息をついた。

「ひえ……。そういうものなんだ」

「ふえ、最近の学生さんはとも頑張り屋さんですねえ」

「だけど、今日で試験期間も終わってみんな解放感に満ち溢れている……。そういった噂が出るとしたらまさに今日からなんじゃないか？」

「怪談めいた噂が広まったらどれが真実か分からなくなる……。目撃者本人から話を聞くには今がちょうどいいかもしれないね」

オリビエがもつともなことを言った。
「だとすれば、早いにこしたことはありません。今から聞き込みに行きましょう」

レインがエステルたちに急ぐべきだと言った。

「うむ、さっそく学園内で調査を始めるといいだろう。ジル君、ハンス君、クローゼ君も協力するといい」

「はい！」

「わかりました」

「とりあえず、調査をするならどこか拠点があった方がよさそうね。何か情報が入るかもしれないし、生徒会室がいいんじゃないかしら」
「サンキュー、助かるわ」

そして、エステルたちは生徒会室に移動した。

生徒会室

「さてと……。これで役割分担は決まりね。まず、私とアガットさんは職員室で先生方に聞き込み。続いて、その他職員方への聞き込み調査も行います」

「おう、よろしく頼むぜ」

「ハンスは資料室で過去に似たような事件がなかったかどうかのチェック」

「了解だ」

「エステルとクローゼとレインさんは生徒たちへの聞き込み調査」

「オツケー」

「わかりました」

「ええ、了解です」

「ドロシーさんとオリビエさんは感性の赴くままに学園内を散策。」

芸術家ならではの直感で何かを発見してみてください」

事件解決とは無関係のことを任されたドロシーとオリビエ。まあ、こっちの方が邪魔されるよりマシだとは思うが。

「フツ、任せたまえ」

「頑張っちゃいますね」

「各自、夕方までには調査を終わらせて戻ってくることに。それでは解散！」

それぞれが各持ち場に向かった。

「はあ……。学園祭の時もそうだったけど相変わらず見事な手並みねえ。普段はおちゃらけてるけど、さすが生徒会長だけはあるわ」
「それぞれの適性を活かした采配が得意なようですね」

「ふふ……。将来はメイベル市長みたいな政治家になりたいそうです。10年早く生まれていたら今度の市長選にも立候補するのについて本気で悔しがっていましたから」

「そ、それは凄いわね」

「大きな夢で結構なことですよ」

「そういえば……。ジルたちってクローゼのことどこまで知っているの？」

「ふふ……。ほとんど全部知っていますよ。入学してから半年くらいで2人に見抜かれてしまいました」

「何の話をしているのですか？」

「あつと……。ごめんね。ねえ……。クローゼ。話しちゃってもいい？」

「エステルさんがそう言うなら、構いませんよ」

「ありがと。レインさん、クローゼは女王様のお孫さんなのよ」

「何と……。アリシア女王陛下の。それは驚きですね。なんでまた王立学園に……。とは今聞かない方がいいですね」

「すみません、気をつかわせてしまつて……」

「いえいえ、謝ることはありませんよ。それで、エステルさん。このようなことを私に話しても良かったのですか？」

「うーん、これからもレインさんと《結社》で関わる必要があります」

うだし……。それに、レインさんならその内、見抜いてしまいそうな気がするし……」

「はは、それは買いかぶりすぎですよ」

「それで、クローゼ。さっきの続きだけど……」

「ええ、そうですね。他に、私が王族であることをご存じなのは学園長だけです」

「そうなんだ……。それにしちゃ、2人ともクローゼに対して自然に付き合ってるわよね」

「はい……。エステルさんみたいに。みんな大切なお友達です」

「あはは……。ちよつと照れるわね。さてと、学園内を回ってみんなから話を聞いてみようか。『試験期間中、何か変なことはなかったか?』って聞けばいいよね?」

「はい、そう聞いた方がみんな判りやすいと思います。あと、寮に帰ってしまった生徒からも聞いてみた方がいいかもしれません」

「ん、オッケー。それじゃあ、聞き込み開始!」

エステルたちは聞き込みを開始した。

クラブハウス 資料室

「よう、聞き込みの調子はどうだい?」

「うーん。始めたばかりだから全然ね」

「資料の方はどうですか?」

「そんなに多くないから大して時間はかからないだろ。それより……聞き込み中に悪いけど少しだけ時間を貰えないか?」

「あ、うん……。ヨシユアのこと……だよな?」

「ああ……。詳しいことは知らないけどあいつ、行方不明なんだってな」

「うん……。でも心配しないで。自分から居なくなっただけだから家出みたいなものだと思っし……」

「エステルさん……」

レインがエステルを気づかった。

「……。あいつと一緒にいたのは1週間くらいだったけど……俺たち、妙に気が合ってたな。色々なことを話したもんだぜ。エステルの家に来てからの事もけっこう聞かせてもらったよ」

「そ、そうなんだ。ちょっと恥ずかしいな。あたしオテンバだったし……って、それは今でもそうだけど」

「はは、心温まるエピソードを色々聞かせてもらったよ。ただな……それ以前の話は全く聞いていない」

「……あ……」

「一度、ロレント以前の話は何の気なしに尋ねたんだが……。その時のヨシユアの目……。今でもはっきり覚えているよ。一瞬だけ、瞳が暗く濁って感情がプツリと切れた音がした。ま、あいつのことだからすぐに笑ってごまかしたけどな」

「……」

「事情は知らないけど……。ヨシユアが居なくなったのはそのあたりが原因なんだろう？」

「うん……。多分、そうだと思う」

「やっぱりそうか……。寝る前にさ、その日あった事をお互い話したりするじゃないか？劇の練習キツかったとか今日のランチは美味かったとか。あいつ、そういう時にはいつも眩しそうな表情をしてさ……。まるで手の届かない宝物を眺めているような……。それでいて、届かないことが当然だと納得しているような……。そんな顔をしていたんだ」

「……。ヨシユア……。届かないなんて……。ほんと、バカなんだから……」

「エステルさん……」

「なあ、エステル。付き合いの浅い俺なんか立ち入るのもなんだけどさ……。ただ、これだけは頼んでもいいか？」

「え……」

「あいつと会えたら、もう2度とあんな表情をさせないでやってくれ。届かないだなんてそんなバカな話があるもんか。あいつには、俺たちと同じように心から笑ったり、恋をしたり、バカやったりする権利がある。なあ、そうだろ？」

「ハンス君……うん、そんなのあたりまえよ。ひっぱたいてでも目を覚まさせてやるんだから！」

「ふふ、エステルさんだったら……。でも、そのくらいしないとヨシユアさんには判らないかもしれませぬね」

クローゼが笑った。

「ああ、まったくだ。はあ……。ちよつとスッキリしたぜ。すまん、時間を取らせたな。聞き込み、続けてくれよ」

「うん……わかった」

「ハンス君もよろしくお願いします」

王立学園・本館2階 渡り廊下

「おや、クローゼさん。試験の出来はいかがでした？」

掲示板を見ていたパトムに話しかけた。

「まあ、そこそこ……です。それよりもパトムさん、少しお聞きしてもよろしいですか？」

「はい、なんででしょう？」

「えっと、実はねえ……」

エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。

「ふむ、変な出来事ですか……。思い当たる節があると言えばあるのですが……」

「あ、確かなことが分からなくてもいいのよ。とにかく、あったことをそのまま教えてほしいの」

「そういうことならお話ししてみましよう。実はですね……………」
パトムが声を潜めた。

「……………空を飛ぶ人影を見たんですよ」

「……………!？」

「それは……………」

「……………その時の様子を詳しく話してくれない？」

「ええ、試験期間中の夜のことです。僕は教室に残って勉強をしていたんですが……………。ふと、窓の外で何か動いた気がしたんです。風が入ってきたのだと思い、窓を閉めなおしに行ったところ……………外に白っぽい人影が浮かんでいたというわけです」

「白っぽい人影……………かぁ。それで、そのあと問題の人影はどうなったの？」

「残念ながら、すぐに見えなくなってしまいました。ほとんど真東の方角に消えていったと記憶しています」

「東ということは……………校舎裏のほうに消えたわけですね」

「うん、そういうことだけど……………。でも、それにしてもいやにハッキリ覚えてるわねえ」

「ええ、興味深い現象でしたからね。あとで研究しようと思って簡単なメモをとっていたんですよ」

「け、研究……………!？」

「そのような研究をしようとするのは変わり者だ。」

「パトムさんは理系クラスの生徒ですから」

「あははっ、そういうことか」

「お役に立てたでしょうか？」

「うん、とっても貴重な証言だったわ。さっそく手帳にメモさせてもらうわね」

「パトムさん。ありがとうございます」

「いえ、お安いご用ですよ」

「ふああ〜っ、やれやれ腹が減ったな。……あれ？何か用？」
窓際で大きなあくびをしていたミックに声をかけた。

「あ、うん……。実はちょっと聞きたいことがあるのよ」

エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。

「へんな出来事……？」

「おかしな物を見たとか、怪しい物音を聞いたとか。気になったことなら何でもいいわ」

「おかしな物を……か。まったく、いやなことを思い出させるな」

「何かご覧になったんですか？」

「ああ、これはまだ誰にも話してないことなんだが……。実はオレ……怪しい人影を見ちまつたんだ」

「……っ！？……詳しい話を聞いていい？」

「あ、ああ、構わないぜ。オレ、家に帰る前に校舎裏をぶらぶらしてたのさ。試験中は人がなくてすごく気分がいいからな。で、そろそろ帰ろうと思って裏門のあたりまで歩いてきたら……。白っぽい色をした人間がふわふわ宙に浮いていたんだよ。間違いなく人の形をしてたぜ。何かの見間違えってことはない」

「（白っぽい人影か……。ほかの証言と一致するわね）」

「（ええ、これはほとんど裏付けが取れたといっても間違いはないでしょう）」

「……で、その後はどうなったの？」

「そいつ、裏門の方に飛んで行っちまつてよ。そのまますぐに見えなくなっちまつたぜ」

「なるほど……裏門の方に消えたわけか。うん、この話は手帳にメモしておいた方がいいわね」

「ええ、貴重な証言ですね」

「……なら、もういいか？さっきから腹が減ってしょうがないんだ

「が……」
「あつと、ごめん。わざわざありがとね。話してくれて助かったわ」
「ま、何だが知らないが適当に頑張ってくれよ」
ミックは教室を出ていった。

王立学園・講堂

「あ……」
エステルが講堂の舞台に登った。

「……おかしいですね。数ヶ月前のことなのにとっても懐かしく感じます……」

「うん……」
「すみません、私は一人で男子寮のほうの聞き込みに行つてきます。それでは……」

「あ、レインさん……」

レインはすぐさまその場を離れていった。

「お優しい方ですね……」

「うん……。申しわけないけど、ここはレインさんの厚意に甘えましょ」

エステルは舞台の縁側に座った。

「あれから本当に色々なことがあつて……。澄ました顔でお姫様をやつてたヨシユアは居なくなつて……。今、あたしたち2人だけでこの舞台にいる……。何だか不思議な気分かも」

「そうですね……。ねえ、エステルさん。一つ白状してもいいですか？」

「え……?」

クローゼも同じように座った。

「私……ヨシユアさんが好きでした。初めて会ったときからとても

惹きつけられるものを感じていたんです」

「……………。……そっか。あはは、やっぱりね。そんな気はしていたけど……………」

「最後のキスシーンなんてすごくドキドキしたんです。エステルさんに申しわけないと思いますが、演技に熱が入ってしまった……………。フリじゃなくて、本当に唇を奪いそうになってしまいました」

「そ、そうなんだ……………。クローゼって意外と大胆っていうか……………。エステルは赤面して顔を背けた。」

「ふふっ、ユリアさんによれば私の行動にはいつもヒヤヒヤさせられるそうです。でもあの時……………。ダルモア市長がエステルさんに銃を突きつけた時……………。ヨシユアさん……………。本当に恐い目をしていた……………。どだけエステルさんのことを大切に思っているか判りました。それで、これは見込みがなさそうだなって諦めたんです」

「う、うーん……………。あたしが言うのもなんだけど諦めるのは早いんじゃないかなあ。クローゼとあたしじゃ正直、勝負になんないと思う……………」

「もう、エステルさんって本当にそういう事に疎いんですね。自分がどれだけ魅力的かいまいち自覚してないんですもの」

「う……………。何だかバカにしてるでしょ？」

「ふふ、とんでもないです。私、エステルさんのそういう所が大好きです……………。たぶん、ヨシユアさんも同じだったんだと思います。その意味では、私とヨシユアさんは似た者同士なのかもしれないですね」

「あ……………。言われてみればちょっとそんな感じがするかも。頭が良くて礼儀正しいところとか涼しげなところか……………。だから最初、お似合いだとかヨシユアを唆そそしたんだけど……………」

「私は先生たちと出会うまで孤独な日々を過ごしていました。多分、ヨシユアさんもエステルさんと出会うまでは同じだったのかもしれない。私とヨシユアさんが違つとすれば……………。それは強さだと思います」

「強さ？」

「お祖母さまは、次期国王に私を指命しようとなさっています。状況を考えるとそれが最善だとは思いますが……。だけど、女王になれば私は2度と『クローゼ』には戻れない。大きな権力と責任を持つ『クローディア・フォン・アウスレーゼ』として生きていくしかありません。こうして友達と気軽に話したり、先生に甘えたり、あの子たちを抱き締めてあげることができない……。それが恐くて……。そして、孤独に戻る恐さを感じてしまう自分が情けなくて……。いまだにお祖母さまにはつきり返事ができていません……」

「クローゼ……」

「その点、ヨシユアさんは私なんかよりも強いと思います。誰よりもエステルさんから離れたくなかったはずなのに……。それでも、エステルさんを自分の事情に巻き込まないために姿を消したんですから……」

「……確かにヨシユアは強いよ。でも……それは間違った強さだと思っ」

「え……？」

「一国を治める女王様だもん。クローゼが悩むのも当然だよ。不安に思うのは当たり前だし、思わなかったらおかしいと思う。そんな風に悩んで、それでも答えを出そうとしているクローゼだからこそ、あたしは女王様にふさわしいと思う」

「エステルさん……」

「だけどヨシユアは……。ヨシユアは悩まなかった。悩みもせず、さも当然のようにあたしたちの前から姿を消して……。あたしね……それが一番、許せないんだ」

「エステルさん……。……そうですね。ちょっと許せませんよね。

女の子の気持ちを何だと思ってるのかしら」

「ぷっ……」

「ふふっ……」

そして2人して笑った。

「あたし、クローゼと友達になれて本当によかった。ここまで本音で話せる人ってなかなかいないと思うし……」

「ふふ、私もです。恥ずかしいことばかり語ってしまいましたけど……。えっと、誤解しないで下さいね？私、ヨシユアさんのこと今ではそんな風には思ってます……」

「ああ、いいっていいって。好きって気持ちが抑えられるものじゃないってあたしにもようやく判ったし。それに、こういうのも何だか青春っていう気がしない？」

「もう、エステルさんだったら……。うーん、気持ちが残っていないと言えばウソになりますけど……。それ以上に、お2人のことを応援したい気持ちが強いというか……」

「うんうん、分かってるって。……さてと、すっかり話し込んだじゃったね。レインさんだけに聞き込みをさせるのは悪いし、聞き込み再開しよっか？」

「あ、そうですね。夕方になる前に回りきってしましましょう」
そして、レインと合流し、聞き込みを再開した。

王立学園・女子寮

「あのー、ちよっと……」

エステルが2人の女生徒に話しかけようとした時、

「聞いてませんわよ、そんな話！」

いきなり目の前の女生徒に怒鳴りかかった。

「(う、うわっ……！)」

エステルはあまりの剣幕に思わずのけぞった。

「休暇にはリベル旅行に行くと言ったから言っておいたでしょう！それがなんで今さら国許くにもとへの帰省になるのかしら!？」

「フラッセ、どうか落ち着いてください」

「いいえ、聞きませんわ！今日こそ言わせてもらいます」

「え、えーと……」

改めて声をかけようとしたが、全く耳に入らない。

「ようやく試験も終わり、さあ旅行だと思った矢先に……。どうして帝国行きの往復チケットが届くの？あなた、爺やと共謀して私を騙すつもりだったのね！」

「（うーん、割り込めない）」

「（す、少し様子を見ましようか……）」

「（早く収まればよいのですが……）」

「あのう、ですからフラッセ……。何もおっしゃらない方が身のためだと思いますよ」

レイナがフラッセに言った。

「み、身のため……！？み、身のためですって！？」

怒りが再燃した様子のフラッセ。

「つ、付き人の分際でよく主人にそんな口がきけ……！」

そして、ようやくエステルたちの存在に気が付いたようだ。

「……あ……」

「あ、あはは……どうも」

「（だから言ったのに……）」

「コ、コホン……。何かご用ですかしら？」

何もなかったかのように振舞おうとするフラッセだったが、気まぐささがありありと見える。

「う、うん……。お取り込み中ごめんね。今、とある事件を調査してるんだけど……」

エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。

「……」

フラッセは心当たりがあるようだ。

「なるほど、あの件の調査に来られたのですね」

「レイナ！やめてちょうだい。私、思い出したくないの」

「……何かあったの？」

「ええ、実は……………。…………試験期間中に、怪しい物を目撃したんです。具体的に申し上げれば、『宙を舞う人影』…………ですか」

「まあ…………！？」

「レイナ…………！！」

あわてて口を塞ごうとするフラッセ。

「…………詳しい話をお願いしたいわね」

「私からお話しいたします。…………よろしいですね、フラッセ」

「う…………か、勝手になさい！」

フラッセはレイナから離れた。

「あれは試験前日の真夜中のことでした。突然、『窓の外に誰かがいる』とフラッセが言い出したのです」

「い、いかにも怪談って感じね」

エステルは少し身を震わせた。

「窓を覗いてみると、確かに校舎の上空に人影が見えました。風に吹かれていたのかくると回ってしまいましたよ」

「う……………」

フラッセは青ざめていた。

「やがて、人影は校舎の裏手へ隠れてしまいました……………。…………けれども、本当に大変だったのはその後です。おびえてしまったお嬢様が私のベットに潜りこんできて……………」

「そ、そこまで話す必要はないでしょ！」

突然、フラッセが向き直った。

「プ、プライベートは結構よ」

「あら、そうですね。残念です……………ここから面白いのに」

「え、えーと、証言を整理させてもらうと……………。人影は校舎の上空に現れて校舎の裏手に消えたってことね」

「ええ、その通りです。お役に立てましたか？」

「うん、それだけ判れば十分よ。2人とも、ご協力感謝するわ」

「有力な目撃証言ですね」

「そうですね…………。早速、手帳にメモしておくわ」

「それではお二方、失礼します」

「あ……もうこんな時間なんだ」

生徒の聞き込みを続けているうちに、空はすっかりオレンジ色に染まっていた。

「一通り生徒から話を聞きましたし、いったん生徒会室に戻りましょうか？」

「うん、そうね。みんなの情報を照らし合わせて何か見えてくるといいんだけど」

エステルたちは生徒会室に向かった。

第7章 忍び寄る影（14）

生徒会室

「あ、戻ってきたわね。それじゃあ一旦、各自報告をするとしましよ」

エステルたちは各自得た情報を報告し始めた。

「各職員から話を聞いてみたが……。用務員が学園の敷地内で怪しい人影を目撃したらしい。旧校舎に通じる裏門のところでききなり消えちまったそうだ」

「他の先生方はテストの準備で忙しくて特に気づいた人はいなかったみたい。学食のおばさんと受付のファウナさんからも大した情報は得られなかったわね」

アガットとジルは用務員だけからしか情報は得られなかったようだ。「なるほど……。あたしたちは、3人の生徒から気になる証言を聞いたんだけど……」

パトム、ミック、フラッセたちの証言を他のみんなに話した。

「どの証言も、校舎の裏手 すなわち、旧校舎が鍵になっています。偶然にしては気になる符号ですね」

「それじゃあ、わたしの成果を発表しますね。生徒・職員の方々に30枚、学園内の風景を50枚も撮りました。えへへ。どれも可愛く撮れたと思うよ」

「ボクの方も残念ながら大した収穫はなかったよ。フツ、リユートを演奏したら可愛い仔猫ちゃんたちがいっぱい集まってきたけどね」

ドロシーとオリビエは案の定、役に立たなかった。

「もう、2人とも全然調査になつてないじゃないの。あんまり期待もしてなかったけど……」

「最後は俺か。過去の資料をあたって同じような事件がないかどうか調べてはみたんだけど……。この学園、建物自体は新しいから怪談めいた話は意外と少なくてね。それも大体が旧校舎に集中してたよ」

「全ての証言を考えると、明らかにその旧校舎が怪しいですね。いったいどういった建物なのですか？」

レインが尋ねた。

「裏門の奥にある築数百年の古い建物ですよ。20年前まで使われていて、こちらの新校舎が建造されてからは閉鎖されているんですけど……」

「あれ、学園祭の時には旧校舎の中に入れなかったっけ？」

「あの後、魔獣が入り込んだりして危険だから裏門が施錠されたんです。2、3ヶ月は放置されたままだと思います」

「フツ……。数百年の石造りの建物か。亡霊が住みつくにはピツタリのロケーションだね」

「うん……。正直、気は進まないけど他に手がかりも無さそうだし。……今日はもう遅いから明日の朝にでも調べてみない？」

「おや、エステル君。どうして遅いことがあるんだい？」

「だ、だって、もうすぐ夜だし、魔獣もいて危険かもしれないし。」

「昼間ですら薄気味悪いのに夜なんかに入った日には……」

「フツ、それがいいんじゃないか。肝試しといえば真夜中。幽霊の正体を掴むのにこの上ない時間帯と言えよう」

「うんうん。やっぱり心霊スポットの取材に夜は欠かせませんよね」

「う、うん……。あれっ……」

急にエステルが窓に目を向けた。

「エステルさん？どうしたんですか？」

「うん……。窓の外に何か見えたような」

エステルが窓側に寄った。

「白っぽい影だったからジークだと思うんだけど……。……………」

………白い影？」

窓の外には白いマントを羽織って仮面をつけた人が宙を舞っていた。そして、エステルに気付くと礼をして旧校舎の方に去って行った。

「エステルさん？どうなさったんですか？」

クローゼが心配そうにしている。

「あは……あははは……。う、うん……」

エステルはその場に崩れ落ちた。

「お、おい！？」

「エステルさん！大丈夫ですか！？」

「………テルさん……。エステル……きて……」

「ん……。あれ……」

エステルが目を覚ましたようだ。

「あ、エステルちゃん！」

「よかった……。目を覚ましたんですね。あの、気分はどうですか？」

「うん……悪くないけど」

エステルは身を起こした。

「あれ……ここ女子寮よね？どうしてこんな所で……」

エステルは急にベッドから離れた。

「あ、あたし！窓の外に『白い影』を見て！それで……！」

「はあ……。やっぱり幽霊を見たわけね」

「エステルさん……。その『白い影』というのはどのような姿をしていましたか？」

「う、うん……。古めかしい衣装を着た、仮面をかぶった男の人で……。白くてボーツと光りながら空中をくるくる跳っていて……。旧校舎の方に飛んで行っちゃった」

「ふえ、ずいぶん楽しそうな幽霊さんだねえ」

「各地で目撃されたという『白い影』の証言と同じですね」

「それに、やっぱり旧校舎か」

「……談じゃないわよ」

「へっ……？」

「幽霊だか何だか知らないけど上等じゃない……。ふざけた格好で人を脅かして気絶までさせてくれちゃって……。この落とし前、絶対に付けてやるんだからっ！」

「お、落とし前って……」

「エステルちゃん。幽霊苦手じゃなかったの？」

「あたしが幽霊が苦手なのは居るかどうかわからないから！こうして目撃しちゃった以上、今さら恐がるものですかっ！2度と化けて出てこないようとっちめてやるわ！」

「うーん、遅しいというか、ズレてるってというか……」

「ふふ……。さすがエステルさんですね」

クラブハウス 1階

「ほらよ、先生から裏門の鍵を借りてきたぜ」

ハンスはエステルに裏門の鍵を渡した。

「ありがと、ハンス君！」

「張り切るのはいいが……。調子は大丈夫なんだろうな？」

「モチのロンよ！とつと旧校舎を調べて幽霊をとっちめなくちゃ！」

「そ、そうか……」

「フフ、エステル君も本領発揮といったところだね。さてと……。早速、肝試しと行こうか。魔獣がいるかもしれないから、ある程度、武術が使える人間に絞った方が良さそうだね」

「ああ、もちろんだ。カメラマンの姉ちゃんはともかく、学生たちには遠慮してもらっぜ」

「わかってますつて。足、引つ張りかねないし」

「何かあつた時のためにここで待機してますよ」

「あの、アガットさん。私も……同行しても構いませんか？」

「おいおい、姫さん。あんた、あまり軽率なこととはしない方がいいんじゃないのか？」

「孤児院の子が見ていますし、個人的にも放つておきません。それに以前、旧校舎には何回か入ったことがありますからお役に立てると思います」

「ちつ……仕方ねえな。まあ、あんたの腕なら同行するには十分すぎるか。くれぐれも無茶はすんなよ」

「はい、肝に銘じます」

「私も同行させてもらいますよ。武術の腕ならありますし、例の件もありますしね」

「まあ、あんたは構わねえな。それに、あんたの腕を見れるいい機会だしな」

「まあ、任せてください」

「よし、これで決まりね！それじゃあ幽霊を捕まえに旧校舎に行くとしますか！」

「おーっ！」

エステルたちは旧校舎へと向かった。

第7章 忍び寄る影（15）

王立学園旧校舎

「なるほど……。これが旧校舎か」

「ふふ……なかなか本格的じゃないか。さぞやゾクゾクさせてくれるに違いない」

「うふふ……鳥肌がたっちゃいますねえ」

オリビエとドロシーは面白がっている。

「全然怖がっているように見えなんですけど……」

「あっ……」

クローゼがいきなり声を上げた。

「どうしたの？」

「エステルさん、扉の前に……」

旧校舎の扉に何か挟まっていた。

「これって……カード？何か書いてあるけど……」

エステルが手にとって読んでみた。

『招かざる訪問者よ。わが仮初めの宿へようこそ。千年の呪い、恐れぬならばわが元へ馳せ参じるがよい。第一の呪いは大広間に。虚ろなる炎』を指せ』

「わわっ……！」

「きゃっ……！」

読み終えた途端にカードは炎に包まれて消滅してしまった。

「な、何だっつてんだ！？」

「ひよつとしたら発火現象かも……。騒霊現象などで時々起こる

らしいけど……」

「ふむ……。ずいぶん挑戦的な幽霊だねえ。ボクたちに謎かけをし
てきたか」

「じよ、上等じゃない！生きてる人間様を舐めるんじゃないわよ！」
「強がりもそこまで行きゃあ上等だ。それにしても……」
「虚ろなる炎を目指せ」か

「たぶん『大広間』はその扉を入ったところにある大きな玄関広間
だと思えます。調べてみる必要がありますね」

「う、うん……！」

「では、入ってみましょう」

エステルたちは旧校舎へと入った。

旧校舎 玄関広間

「『虚ろなる炎』……。この燭台のことでしょうか？」

「確かに1つだけ炎が点つてないわね。よし、調べてみようか」
エステルが燭台を調べてみると、中にカードが入っていた。

『第二の呪いは教室に。』南を向く生徒』を探せ』

カードは炎に包まれて消滅した。

「わわっ……。で、でも正解だったみたいね」

「ふむ、今度は教室だね。無人にもかかわらず『南を向く生徒』か
……」

「たしか教室は左翼の1階と2階の2つずつ、合わせて4つあった
はずです」

「よし……コンパスを使いながら調べてみるか」

旧校舎 1階左翼教室

「他の席は散らかってるのここだけちゃんと置かれてるね」

「向いている方角も真南……。多分、ここで合ってるだろ」
「それじゃ、調べてみるわね」
机の中を調べるとカードが入っていた。

『第三の呪いは庭園に。『落ちたる首』を探せ』

カードは炎に包まれて消滅した。

「と……。正解みたいだったけど、次はどこになるのかしら」
「『庭園』と『落ちたる首』か。ずいぶんと大仰だがこれも何かの比喩なんだろうね」

旧校舎 屋上

屋上には4本のプリンターがあり、1本だけが倒れていた。

「『庭園』の『落ちたる首』……。条件に合いそうな気はしますね」
「うん……。たぶん間違いないと思うわ」

石造りのプリンターにはカードと古びた鍵が入っていた。

『今こそ呪いは成就せり。最後の試練を乗り越え、いざ我が元へ来たれ』

カードは燃え尽き、古びた鍵を手に入れた。

「謎かけはこれで終わりみたいね。『呪いは成就せり』って、やたらと嫌な感じはするけど……」

「フツ、いずれにせよ、その鍵を使えということだろうね。合う場所を探してみようじゃないか」

旧校舎 1階右翼

右翼の部屋のうち、1つだけ鍵がかかっていた。エステルは鍵を使い、中へと入った。

「竜の像……みたいね」

部屋の中には大きな竜の像が鎮座していた。

「この像は、確か昔からここにあったと思います。かつてリベールに棲息していた古代竜を象かたどつたものらしいですけど……」

「部屋の中にただ一つ像だけがある……。何か仕掛けがありそうですね。少し調べさせてください」

レインは竜の像を調べ始めた。しばらくして竜の像の台座にスイッチらしきものがあった。

「……これですね」

レインはそのスイッチを押した。そして、竜の像が横に移動し、階段が現れた。

「こ、こんなものが像の下にあったなんて……」

「フツ……悪くない趣向だ。なかなかどうしてケレン味タップリじゃないか」

「そうですね。サービス精神満点です。観光名所にしたらお客様さんが集まるかも」

「でも……さつきから思ってたんだけど。あのカードといい幽霊の仕業にしては変じゃない？」

「確かに、実体のない霊ができることも思えませぬ」

「いずれにしても一筋縄でいく相手じゃねえ。気を引き締めて降りるとするぞ」

第7章 忍び寄る影（16）

王立学園旧校舎 地下

「えっ……」

「チツ……いきなりかよ！」

階段を降りて1つ部屋を抜けて前に進もうとした時、いきなり魔獣が立ち塞がった。

「か、かなり手強かったわね。それにしても……ここって地下の遺跡？」

「そうですね……中世のものだと思います。こんな場所があったなんて……」

「ふむ、魔獣の気配がブンブン漂ってるねえ。さしずめ、この地下遺跡がカードにあった『試練』かな？」

「ええ、間違いないでしょうね」

「さすがに非戦闘員を連れて行くのはキツいな。おい、カメラマンの姉ちゃん」

アガットがドロシーに言った。

「はい、なんでしょう？」

「聞いての通り、この先はかなり危険だ。あんたはしばらく手前の部屋で待機してくれ」

「えー、そんなあ。せっかく幽霊さんを撮れると思ったのに……」

「ま、何か見つけたら呼びに戻ってあげるわよ。それなら構わないでしょ？」

「うー、仕方ないなあ。それじゃあみんな、くれぐれも気を付けてね？」

ドロシーは手前の部屋に戻った。

「さてと……。先に進むとするか。魔獣もかなり手強い。慎重に進むぞ」

「了解ッ！」

「わかりました」

「フツ、任せたまえ」

「行きましよう」

エステルたちは地下遺跡を先に進んだ。

第7章 忍び寄る影（17）

王立学園旧校舎 最奥広間

「あっ……………！」

エステルが声を上げたその先には、白いマントを羽織った人物がいた。

「影もあるようだし、幽霊じゃあなさそうだが……………。てめえ……………何者だ！？」

「フフフ……………」

白いマントの男が振り返った。

「ようこそ、我が仮初めの宿へ。歓迎させてもらおうか」

「か、仮面……………」

「エステルさんやポーリイちゃんを目撃情報と同じですね……………。あなたがルーアン各地を騒がしていた『影』の正体ですか？」

「フフ……………。その通りだ、クローディア姫。お目にかかれて光栄だよ」

白いマントの男はあろうことかクローゼの正体を知っていた。

「こ、こいつ……………なんでクローゼの正体を！？」

「フフ……………。私に盗めぬ秘密などない。改めて自己紹介をしよう。」

《執行者》NO.？。《怪盗紳士》ブルブラン 《身喰らう蛇》

《に連なる者なり》

「《身喰らう蛇》……………！」

「《執行者》……………！この者がまさか……………！」

「レインさん、何か知ってるの？」

「《執行者》というのは、《結社》のなかで選りすぐりの戦闘集団です。その実力は今我々全員の力をもつてしても敵うかどうか……………」

「そ、そんな……………」

「……………チツ……………」

エステルたちは後ずさりした。

「ほう、その彼は何か知っているようだね。まあ、そう殺気立つことはない。私はここで、ささやかな実験を行っていただけなのだ。諸君と争うつもりは毛頭ない」

「じ、実験……？」

ブルブランの後ろの装置で何かが輝いた。

「そ、それは……」

「リシャル大佐が使っていた漆黒の導力器ゴスペル……」

「しかもどうやら……あれより一回り大きいみたいだね」

「ふむ、『彼』の報告通りこれの存在は知っているか。この《ゴスペル》は実験用に開発された新型だね。今回の実験では非常に役に立ってくれたのだよ」

「実験……。いったい何の実験だ？」

「フフフ……。百聞は一見に如かずだ。実際に見ていただくか」

ブルブランが装置のスイッチを入れた。そして、装置の前にエステルたちが見た『幽霊』が現れた。

「ゆ、幽霊……！」

「いや、その装置を使って空間に投影された映像のようだね。そんな技術が確立されているとは寡聞にして聞いたことはなかったが」

「これは、我々の技術が造り出した空間投影装置だ。もつとも、装置単体の能力では目の前にしか投影できないが……。《ゴスペル》の力を加えるとこのようなことも可能になる」

《ゴスペル》から黒い光があふれだすと、ブルブランの映像が急にエステルたちの後ろに移動した。

「きゃっ……！？」

「わわっ……」

そして、その映像は自由自在に動き回った。

「とまあ、こんな感じだ。フフ、ルーアン市民諸君にはさぞかし楽しんでもらえただろう」

「チッ……。つまり、単なる悪ふざけだったわけか」

「悪ふざけとは人聞きが悪い。選挙で浮かれる市民たちに贈るちょ

つとした息抜きと娯楽……。そんな風に思ってくれたまえ」

「力、カラクリはわかったけど……いったいどうしてこんな事をしでかしたのよ!? 《身喰らう蛇》って……いったい何を企んでいるわけ!?」

「フフ……それは私が話すことではない。私が、今回の計画を手伝う理由はただ一つ……。クローディア姫　　貴女と相見えたかつたからだ」

「えっ……?」

「市長逮捕の時に見せた貴女の気高き美しさ……。それを我が物にするために私は今回の計画に協力したのだ。あれから数ヶ月この機会を待ち焦がれていたよ」

「え、あの、その……」

「……市長逮捕つて、ダルモア市長の事件よね。な、何であんたがあの時のことを知ってるのよ!？」

「フフ、私はあの事件の時、陰ながら君たちを観察していた。たとえば……このような方法でね」

ブルブランが瞬時に姿を変えた。その姿はダルモア市長の執事であるダリオの姿だった。

「まさかあの時いたダルモア家の……!？」

「怪盗とは、すなわち美の崇拜者。気高きものに惹かれずにはいられない。姫、貴女はその気高さで私の心を盗んでしまったのだよ。

他ならぬ怪盗である私の心をね……。おお、何という甘やかなる屈辱! 如何にして貴女はその罪を贖あがなうおつもりなのか?」

「あ、あの……。そんな事を言われても困ります」

「この自分に酔った口調……てめえにソックリじゃねえか?」
アガットが隣のオリビエに言った。

「失敬な……。一緒にしないでくれたまえ」

「《身喰らう蛇》。何か思っていたのと違うけど……」

エステルが武器を構えた。

「クローゼが狙いと聞いたらなおさら放っておけないわね!」

「エステルさん……」

「協会規約に基づき、不法侵入の容疑で拘束する。《ゴスペル》のことも含めて色々と喋ってもらうぜ」

「やれやれ……。何という無粋な連中であろう。相手をしてやってもいいがせつかく選んだこの場所だ……。『彼』に相手してもらおうか」

「なに……?」

いきなり周囲が揺れ動きだした。

「な、なんなの……?」

「ふむ……。イヤな予感がするねえ」

部屋の横の扉が開いたかと思うと、巨大な機械が出てきた。

「な、なにコイツ!？」

「甲冑の人馬兵!？」

「フフ、どうやら『彼』はこの遺跡の守護者のようだね。半ば壊れていたところを私が親切にも直してあげたのだ。せつかくだから君たちが相手をしてあげるといい」

「じよ、冗談じゃないわよ!」

「……来るぞ!」

「か、勝った……」

「ケツ……。手こずらせやがって。次はてめえの番だ……。覚悟はできてるだろうな!」

「いけません!今は戦うべきではありません!」

レインがアガットを止めた。

「てめえ、なぜ止めやがる!？」

「相手は《執行者》です!実力の内を分からないまま、戦うのは大変危険です!」

「やれやれ……。優雅さに欠ける戦い方だな。仕方ない……。私が手

本を見せてあげよう」

ブルブランがステッキを構えた。

「Flamme！（炎よ！）」

ブルブランがそう唱えると、周囲の篝火かがりびの火が大きくなった。

「な……！？」

「篝火の炎が……！？」

「Aiguille！（針よ！）」

ブルブランが一瞬にしてステッキからナイフのような小刀を出し、

エステルたちの影をめぐらして放った。

「えっ……！？」

「きゃっ……！？」

「おお……！？」

「これは……『影縫い』か！？」

「そうですね……！東方に伝わる、対象者の動きを封じる技、『影縫い』です！」

エステルたちはブルブランの手によって動けなくされてしまった。

「フフ、動けまい。君たちはダルモア市長の《宝杖》に驚いていたようだが……。この程度の術、執行者われわれならばアーティファクトに頼るまでもない」

「そ、そんな……」

「クソ……見くびりすぎたか……！」

その時、部屋の外からジークがブルブランに飛び掛かってきた。しかし、ブルブランはそれをかわし、エステルたちと同様、動きを止められた。

「ピュイイツ！？」

「ジーク！？」

「現れたな、小さきナイト君。君の騎士道精神には敬意を表するが、しばし動かないでいたどうか」

ブルブランはステッキを収め、クローゼに近寄った。

「クローディア姫。これで貴女は私の虜とりこだ。フフ、どのような気分

かね？」

「……見くびらないでください。たとえこの身が囚われようと心までは縛られない……。私が私である限り、決してクローゼはブルブランから目を離さず言い放った。」

「そう、その目だよ！気高く清らかで何者にも屈しない目！その輝きが何よりも欲しい！」

「ふ、ふざけたこと抜かしてんじゃないわよ！」

エステルは縛られたままブルブランに武器を向けた。

「このキテレッツ仮面！クローゼから離れなさいっての！」

「やれやれ、この仮面の美しさが分からないとは……。君には美の何たるかが理解できていないようだな」

「フフツ……」

オリビエが不意に笑みを漏らした。

「む……？」

ブルブランがオリビエを見た。

「ハハ、これは失敬。いや、キミがあまりにも初歩的な勘違いをしているのでね。つい、罪のない微笑みがこぼれ落ちてしまったのだよ」

「ほう……面白い。私のどこが勘違いをしているというのかね？」

「確かにボクも、姫殿下の美しさを認めるに吝かちかではない。だがそれは、キミのちっぽけな美学では計れるものではないのさ。顔を洗って出直してきたまえ」

「おお、何という暴言！たかが旅の演奏家ごときがどんな理由で我が美学を貶める！？返答次第では只ではすませんぞ！」

「フツ、ならば問おう　美とは何ぞや？」

「何かと思えば馬鹿馬鹿しい……。美とは気高さ！遙か高みで輝くこと！それ以外にどんな答えがあるというのだ？」

「フツ、笑止……。真の美　それは愛ツ！」

「……なにツ！？」

「愛するが故に人は美を感じる！愛無き美など空しい幻に過ぎない

「気高き者も、卑しき者も愛があればみな、美しいのさっ！」

「くっ、小賢しいことを……。だが、私に言わせれば愛こそ虚ろにして幻想！人の感情など経ずとも美は美として成立しうるのだ！そう、高き峰の頂きに咲く花が人の目に触れずとも美しいように！」

「むむっ……………」

両者にらみ合いが続いた。

「……………えーと」

「なんてアホな会話だ……………」

「こ、困りましたね……………」

「このままではいつまで経っても終わりが見えませんね……………」

「……………まさかこんな所で美をめぐる好敵手に出会うとは。演奏家

名前を何という？」

「オリビエ・レンハイム。愛を求めて彷徨する漂泊の詩人にして狩人さ」

「フフ……………その名前、覚えておこう」

「あゝ！エステルちゃんたち見つけた〜！」

ここに来て、状況を引っ掻き回すドロシーが現れた。いったいどうやってここに来たのだから……………。

「えへへ、あんまり遅いからガマンできずに来ちゃった」

「ド、ドロシー！？」

「いけません！早く逃げてください！」

「ふえ……………？あーっ！仮面をかぶった白いヒト！あなたが幽霊さんですね〜！？」

ドロシーはエステルたちのことなど気にしていない。

「い、いや……………」

「はい、チーズ？」

ドロシーがカメラのシャッターをきった。

「うおっ？」

シャッターのフラッシュがあたり一面、まばゆく輝いた。

「ピュイー」

「あつ……！」

「痺れが取れた……」

「そうか……。フラツシュで影が消えたのか！」

「フツ、とんでもないお嬢さんだ」

「えっへん、任せてくださいよ。何がスゴイのか自分でもわかりませんけど」

「ククク……ハーツハツハツ！」

ブルブランが装置に戻って、《ゴスペル》を取り外した。

「あつ！」

「《ゴスペル》を！」

「こんな愉快的時間を過ごしたのは久しぶりだ。礼を言わせてもらうぞ、諸君」

「てめえ……まだ何かやるつもりか！」

「フフ……今宵はこれで終わりにしよう。しかし、諸君に関しては認識を改める必要があるそうだ。さすが《漆黒の牙》と共に行動してただけの事はある」

「《漆黒の牙》……！」

「ヨシユアさんのことですね！？」

「フフ、彼とは旧知の仲だね。最初に君たちを観察し始めたのは彼の姿を見かけたからなのだよ。全ての記憶を取り戻したようだが……

…今はどこでどうしている事やら」

ブルブランがステッキをかざした。

「あつ……！？」

「な、なんだ……！？」

「どうやらここから去るつもりですね……」

「さらばだ、諸君。計画は始まったばかり……。せいぜい気を抜かぬがよろう。それとは別に、私は私なりの方法で君たちに挑戦させてもらうつもりだ。フフ、楽しみにしていたまえ」

「き、消えた……」

「し、信じられません……」

「うわゝ！何だか手品みたいですねえ」

「ハツハツハツ。なかなかやるじゃないか。これはボクの方も好敵手と認めざるを得ないね」

「そういう問題じゃないってば！キテレツな格好はともかく……あいつ、並の強さじゃないわ！」

「そうだな……。《身喰らう蛇》　　予想以上に手強そうだけ」

こうして……ルーアン各地を騒がした幽霊事件は幕を閉じた。翌朝、街に戻ったエステルたちはドロシーと一旦別れて事件の報告をすべく、ギルドに向かった。

第7章 忍び寄る影（17）（後書き）

《執行者》ブルブラン、いかがだったたでしょう？

第7章 忍び寄る影（18）

遊撃士協会ルーアン支部

「そうか……ご苦労だったね。《身喰らう蛇》……。カシウスさんに話を聞いた時には正直、半信半疑だったが……。とりあえず、今回の調査の報酬を渡すよ。まさかこんな形になるとは思わなかったけどね」

エステルは報酬を受け取った。

「調査結果はすぐに王国軍に報告しておこう。あちらさんも相当、情報を欲しがっていたからね」

「ああ、頼んだぜ。あの投影装置を考えるとハンパな組織じゃねえはずだ。しかも《ゴスペル》をまた持ち出してくるとはな……」

「どうやら結社の目的は新しい《ゴスペル》を使った実験をすることにあったようだね。幽霊騒ぎは、趣味の入った実験結果でしかなかったようだ」

「怪盗ブルブラン……。あいつ、自分のことを《執行者》と呼んできたよね」

「先日言いましたが、《執行者》は《結社》の選りすぐりの戦闘集団です」

「……………」

「エステルさん、あの……………」

クローゼがエステルの考えていることを察したようだ。

「うん、わかってる……。《漆黒の牙》……。あの日、ヨシユアは自分のことをそんな風と呼んでいたから……。多分、ヨシユアもその《執行者》だったんだと思う」

「なるほどな……。あの怪盗野郎と同格なら、あいつの専門技術も納得だ。ひょっとしたら実力を隠して猫をかぶっていたのかもしれないね」

「うん……そうかも。……ねえ、ジャンさん」

「なんだい？」

「あの怪盗男、結社の計画が始まったばかりだって言ってた。多分、リベールの各地で色々しかすつもりだと思うの。ほかの地方支部から何か情報は入ってきてないかな？」

「うーん……。目立った情報は入ってないね。ただ、エステル君の言う通り、結社が各地で暗躍を始めている可能性は高いと思う。幽霊騒ぎも一段落ついたし、他の地方に移った方がいいかもね」

「ああ。俺もそう思っていたところだ。どこか手薄な支部はあるかよ？」

「強いて言うならツァイス支部だと思う。常駐のグンドルフさんが王都方面へ出かけたらしくてね。かなり大変な状況らしい」

「だったら、あたしたちが手伝いに行つた方がよさそうね。でも、ルーアン支部は大丈夫？」

「実は、ボース支部のステイングさんが数日後こつちに来てくれるんだ。それまではメルツ君1人に何とかしのいでもらうとするさ。そうだ、ツァイスに着いたらラッセル博士を訪ねた方がいいね。新たな《ゴスペル》の一件は博士の知恵を借りた方が良さそうだ」

「うん、確かにそうかも。ティータとも会いたいし、すぐに工房を訪ねてみるわ」

「それでは準備ができたらさっそく飛行場に行くでしょう」

「ジャン君。乗船券を5枚手配してくれたまえ」

「へっ……？」

「いきなり仕切つてなに凶々しいこと言つてんのよ……。……つて5枚？」

「フツ、エステル君とアガット君とレイン君。そして、このボクと姫殿下の分に決まってるだろう」

「あ、あんですって〜!？」

「そんな気はしてたが……。この先も付いてくるつもりかよ？」

「ヨシユア君を捜すのは愛の狩人たるボクの使命でもある。新たな好敵手とも巡り会えたし、同行する理由は十分だと思うけどね？」

「あ、あなたのタワケた理由はともかく……。クローゼたちまで一緒に巻き込むんじゃないわよ！」

「いえ……。実は私も、同じことをお願いしようと思っていました」「私も同じです」

「え」

「私は前にも言いましたが、前々から《結社》の存在を追い続けてきました。そして今回、《執行者》が現れてリベールで何かを実行しようという裏付けが取れました。別々で行動するよりも一緒に行動した方が何かと便利だと思っしてね。もちろん、今まで得てきた情報もお教えさせていただきますよ」

「レインさん……」

「ま、あなたは仕方ねえな」

「私もです。リベールで暗躍を始めた得体の知れぬ《結社》の存在。王位継承権を持つ者として放っておくわけにはいきません。それに何よりも……。エステルさんとヨシユアさんの力になりたいんです」「クローゼ……。で、でも学園の授業はどうするの？」

「実は今朝、コリンズ学園長に休学届を出してしまいました。試験の成績も問題ありませんし、進級に必要な単位もとっています。ジルとハンス君にも相談したら『行ってくる』って……」

「い、いつのまに……」

「やれやれ。思い切りのいい姫さんだぜ」

「す、すみません……。押しかけるような真似をして。あの……。駄目でしょうか？」

「ふふっ……。駄目なわけじゃない！そういう事なら遠慮なく協力してもらおうわ！アガツトもいいよね？」

「ま、いいだろ。アーツにしてもハヤブサにしても姫さんがいると色々助かるしな」

「よかった……。ありがとうございます。エステルさん、アガツトさん」

「えへへ、何といっても紅騎士と蒼騎士の仲だもんね。一緒に協力

して、行方不明のお姫様を捜すことにしましょ！」

「あ……はい、そうですね！」

「フツ、それじゃあボクは黒髪の姫に強引に迫ろうとする隣国の皇子という設定で……」

「勝手に役を増やすなあっ！」

「あはは……。話がまとまって何よりだね。しかし、そういう事なら3人を『協力員』という立場で扱わせてもらった方が良さそうだ。そうすればギルドとしても経費面などで便宜が計れるからね」

「はい、それをお願いします」

「誠心誠意、愛を込めて協力させてもらおうよ」

「ありがとうございます」

第7章 忍び寄る影（18）（後書き）

今回で第7章が終了です。どうでしたでしょうか？

第8章 荒ぶる大地（1）

ルーアン市 南街区

「かくして宴は終われども、残されし熱気に我らはただ惑い……蒼ざめた月影と、海原を渡る涼風が熱き血潮を冷ますのを待つのみ……」

ブルブランが港湾区の倉庫の上に佇んでいた。

「……待たせたな」

銀髪の青年がブルブランに声をかけた。

「フフ、ちょうど時間通りさ。しかし相変わらず律儀な男だな。たまには遅刻ぐらいしても罰は当たらないのではないかね」

「これも性分だね。早速だが、報告を聞かせてもらおうか」

「はは、そう焦るものではない。今宵は気分がいい。少しくらい浸らせてくれたまえ」

「やれやれ……よほど気に入ったと見えるな？」

「うむ、麗しの姫君にはますます心を奪われてしまった。それに、思わぬところで美をめぐる好敵手と出会ってね。フフフ……これから忙しくなりそうだ」

「仕方のないやつだ。個人的な趣味も結構だが計画の支障になっては困るぞ」

「フフ、それは心配無用だ。それでは受け取りたまえ」

ブルブランは銀髪の青年にゴスペルを渡した。

「……確かに。それで……実験の成果はどうだった？」

「ふむ、そうだな。9割成功と言っていいだろう。投影装置が生み出した映像をかなり遠くの座標まで転送できた。ただ、最初の1、2回は転送に失敗したらしくて……。3回目を越えたあたりから完璧に作動するようになったが」

「ふむ……。不安要素はあるが、悪くない。早速、教授に伝えておこう」

「しかし《ゴスペル》か……。導力停止現象もそうだが今の技術を遙かに越えているな。《十三工房》製らしいが一体どういうカラクリなのかね？」

「さてな……。俺も詳しくは聞かされていない。ただ、教授によればそれらの現象は『奇跡』の一端に過ぎないらしい」

「ほう、奇跡ときたか。ふむ……。奇跡は女神にしか許されぬ御業。いったいどういう意味なのやら」

「いずれにせよ、真の潜在能力は今後の実験で明らかになるだろう。そうすれば……」

銀髪の青年が急に話を止めた。

「……………」

「ほう？フフ、今宵は意外な登場人物に恵まれているようだ。さて、筋書きはどうしたものか」

「フツ」

銀髪の青年が剣を構えた。

「それは、身を潜めているネズミの態度次第だろうさ」

「クク、違いない」

ブルブランもステッキを構えた。

「さてさて……。どんな声で鳴いてくれるのやら」

「……………ういゝ」

遠くから酔った声が近づいてきた。

「ふむ……。どこのネズミか知らぬが命拾いしたようだな」

「フツ……。女神に感謝するがいい」

2人は倉庫を飛び下り、姿を消した。

「ぎゃはは、酒持ってこい！」

「うえつぷ、もう飲めない……」

「ちくしょう……。俺だって……。俺だってなあ……」

酔った声の正体は《レイヴン》の3人だった。

「はあゝ……。寿命が縮むかと思ったわ……。へッ、言われずとも女神に感謝しまくりやっちゅうねん」

コンテナの後ろに潜んでいたのはケビン神父だった。

「……しかしまあ、何ちゅう化物どもやねん。あれが結社の《執行者》か……」

第8章 荒ぶる大地(2)

ルーアン市 北街区

「さてと……ツアイス地方に出発ね。準備が済んだらもう発着場に行こっか？」

「そうだな……他に用事がなければ出発の方がよさそうだ」

「そういえば、ドロシー嬢はその後、どこに行ったんだい？いつの間にか居なくなってしまったようだ」

「あ、ホテルにいるナイアルの所に行ったみたい。ルーアンを出発するなら一応挨拶した方がいいかも」

「ふふ、そうですね。できれば先生たちにも挨拶したかったんですが……。先ほど連絡したら、どうやら用事で子供たちと一緒に出かけたらしくて」

「そうなんだ……。うーん、あたしも挨拶しておきたかったなあ」

「ま、ツアイスに着いたら手紙でも書きゃあいいたる。いざとなったらすぐにでも戻って来れるしな」

「はい、そうします」

「あたしも一緒に書こつと」

「フツ……それでは出発するでしょうか。導力技術の殿堂のして王国の頭脳集まる工房都市へ」

ホテル

「こんにちは……って……」

「おう、お前らか。ドロシーから聞いたぜ。幽霊騒ぎは解決したそ
うだな。うん、一応そうだけど……。ドロシー、どうしちゃったの
？」

ドロシーはベッドの上に横たわっていた。

「事件の報告をしている時からうつらうつらし始めてな……。終わった途端、爆睡しやがったんで仕方ねえからベッドに運んだんだ」
「ま、昨日は真夜中まで色々なことがあったからな。少々キツかったのかもしれん」

「ふん、徹夜を続けられてこそ一人前の記者だっつーの。そうだ、コイツの説明だけじゃいまいち要領が得なくてな……。今回の事件について幾つか質問をしてもいいか？」

「うん、いいわよ」

エステルたちはナイアルの質問に答えながら、事件のあらましを説明した。

「なるほど、大体わかったぜ。それにしても『怪盗B』がリベールに来ていたとはな……」

「え……。！ナイアルつてば怪盗男のことを知ってるの！？」

「大陸各地を騒がす有名な盗賊らしいぞ。狙った獲物は逃がさないあくまで華麗に盗み去る……。そんな芝居がかった盗賊らしい」

「フン……。同一人物くせえな」

「だが、その『怪盗B』がまさか結社の手先だったとはな。《身喰らう蛇》……。とことん得体の知れない連中だぜ」

「あの、ナイアルさん。今回の事件についてはどこまで記事にするんでしょう？」

クローゼがナイアルに尋ねた。

「いや、実はギルドと王国軍から結社についての報道は控えるように頼まれちゃいましたね。『悪質な愉快犯』の仕業として書くことになっちまうと思います」

「まあ、クーデターも集結してやっと国内も落ち着いた頃合だ。市民の動揺を考えたら妥当な判断だと言えるだろうね」

「記者としては不満だが、そのあたりは俺も納得してるさ。その代わり、また事件が起こったら俺たちにもちゃんと知らせてくれよ？」

「うん、わかったわ。それじゃあ、あたしたちはツァイス地方に出発するけど……」

「おお、そうか。俺は原稿書きがあるからちよいと見送りに行けねえが……。ドロシーのヤツ、起こすかよ?」

「あ、いいっていいって。せつかくぐつすり寝てるんだし。ナイアルからよろしく言っというて」

「わーった。くれぐれも気を付けろよ」

ルーアン市 発着場

「おう、いらっしやい。ツアイスに向かう遊撃士さん御一行だな?」
受付のエドワンから尋ねられた。

「あ、うん、そうだけど」

「ジャンから連絡はもらった。運賃はギルド持ちだそうだ。さっそく乗船手続をするかよ?」

「手続きしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうルーアン地方でやり残したことはねえだろうな?」

「うん、大丈夫よ。乗船手続をしましよ」

「よしきた!それじゃあ全員、用紙にサインしてくんな」

「うん、わかったわ」

「エステルたちは乗船手続を済ませた」

「おう、全員問題ねえな。そんじゃあ、定期船が着くまで発着場で適当に待っててくれよ」

「はい」

しばらくして、定期船が到着した。

「さてと。あたしたちも乗りますか」

「はい、そうですね……」

エステルたちが定期船に乗ろうとした時、

「あゝ、いたいた！」

孤児院の子供たちがやってきた。

「あ、あんたたち!？」

「みんな、どうして……」

「見送りに来たのー」

「まったく2人と、ちよつと薄情すぎるぜ。オレたちに黙って出発しようとしてさ〜！」

「ほんと、プンプンですよ！」

「クローゼおねえちゃん。ホントに行っちゃうの〜？」

孤児院の子供たちは思い思いの言葉を言った。

「うん……ごめんね。挨拶をしようと思っただけど留守にしてるって聞いて……」

「ルーアンの方に来てたわけね。あ、それじゃあひよつとしてテレサ先生も……」

「うふふ。間に合つたみたいですね」

後からテレサ院長とジル、ハンス、さらにコリンス学園長までがやって来た。

「院長先生！それに、ジルたちも……」

「あはは！ぎりぎりセーフって感じね」

「はあ、いきなり見送りして驚かせようなんて言い出すからこんな事になるんだよ」

「ま、結果オーライってことで」

「実は、ジルさんたちからあなた達が出発することを教えてもらつたんです。それで、どうせならみんなでお見送りをしようという事になって」

「フフ、ついでだから私も付き合わせてもらつたよ」

「そうだったんですか……」

「……なあ、エステル姉ちゃん。ヨシユア兄ちゃん……家出しちゃつたんだってな」

クラムが突然エステルに尋ねた。

「あ……」

「あたしたち、先生からその事を教えてもらって……」

「そっか……。ごめんね、みんなに黙ってて」

「ううん、いいんです。あの、わたしたち女神さまに毎日お祈りします！ヨシユアさんが早く帰ってきますようにっ！」

「ボクもお祈りするっ！」

「きつとかなえてくれるのっ」

「みんな……」

「ふふ、ありがとう」

「ついでにあたしたちも女神様に祈らせてもらっわ。エステル、クローゼ。くれぐれも気を付けてね」

「頑張るのはいいが無理して危険な目には遭うなよ。そんな事になったら、あいつ、自分が許せなくなるだろうっからな」

「ジル、ハンス君……」

「うん……。肝に銘じておくわね」

「エステルさん、クローゼの事、どうかよろしくお願いします。しっかりしているように見えてもろいところがある娘ですから……」

「せ、先生……」

「えへへ、任せてください。といっても、あたしの方が色々助けらちやいそうだけど」

「ふふ……。クローゼはこれを機会に自分を見つめ直せるといいわね。自分のすべきことが何なのか焦らず答えを出すといいでしょう」

「はい……わかりました」

「遊撃士と学生……どちらも目指すべき道がある。2人とも、これまでの日々でじゅうぶん力を養ってきたはずだ。己の力を過信せずに使いこなせるようになるといい。そうすれば必ずや困難な道も乗り越えられるだろうっ」

「はい！」

「ツアイス方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸しま

す。ご利用の方はお急ぎください」

「あ、いけない……!!」

エステルたちは定期船に乗りこんだ。

「それじゃあ、またね!」

「みんな……お元気で」

「姉ちゃんたちも元気でな!」

「土産話とヨシユア君、期待して待ってるからね!」

こうして、ルーアン地方での旅は終了した。

第8章 荒ぶる大地(3)

定期船 《セシリア号》

エステルはアガットに声をかけた。

「なんだ、エステル。また船内をうるついでんのか？」

「うん、まあね。あたし今まで、飛行船ってあんまり乗ったことがないからけっこう新鮮なのよね」

「正遊撃士は出張が多いから飛行船はかなり利用するぞ。交易商と同じくらい利用頻度が高いんじゃないかねえか？」

「確かにうちの父さんも出張ばかりしてたわね。今ごろ何してるのかな……」

「軍のトップに祭り上げられて目の回るような忙しさだろうさ。ヘッ、いつも余裕そうにしてたからいい気味ってもんだぜ」

「うーん、忙しい父さんってあんまり想像できないけど……。でもアガットって、基本的に父さんのことを評価してるよね。なのに、どうしていつも憎まれ口を叩いたりするわけ？」

「……別に憎まれ口を叩いてるわけじゃねえっての。大体な、失礼なのはどう考えてもお前の親父だぞ。いつも人の顔を見るなり、『ご苦労』だの『偉い偉い』だの若造扱いしやがって……」

「うーん、確かに父さんってすぐに人をからかってくるよね。ま、いつもの減らず口だからあんまり気にならないけど……」

「お前、娘で良かったのかもな。あんな親父の息子だったら今ごろ反抗期の真っ最中だぞ」

「そ、そういうもんかしら？」

「親父つてのは、息子にとっちゃ越えなくちゃならねえ壁だからなあんなバカ高い壁があった日にゃコンプレックスの塊になりそうだぜ」

「うーん……。いまいちピンとこないけど。要するにアガット、父さんにコンプレックス感じてるわけね？」

「あれ、凶星だった？」
「……………」
「……………るせえ、この似た者親子め」

エステルはオリビエに声をかけた。

「やあ、エステル君。空の旅を満喫してるかい？見たまえ……………この雄大なる空の色を！まさに最高の酒の肴さかなと言えるだろう！」

「まあ、いい天気だし景色が綺麗なのも認めるけど……………。ツアイスまで、すぐに着くのお酒を飲むってどうかと思うわよ」

「フツ……………。そう言わないでくれたまえ。この空の下どこかに愛しのヨシユア君がいる……………。ああ彼は今、何を想って旅を続けているのだろうか……………。そんな事を考えていると飲まずにはいられないのだよ」

「……………それ、完全にあたしの台詞なんですけど。まったく、オリビエがいると話が深刻にならなくて助かるわ」

「フフ……………お誉めにあずかり光栄至極。……………しかし、少々安心したよ」

「え？」

「《漆黒の牙》……………。あの怪盗の残した言葉を聞いて動揺しているかと思っただからね。だが、思っていたよりもキミの意志は固かったらしい」

「あ……………。えへへ、オリビエってあたしの心配してくれたんだ？」

「ふふ、愛を求めて彷徨さまよう詩人にして演奏家だからね。恋する乙女の味方なのさ」

「あ、う……………！」

エステルの顔が火を噴いた。

「おっと。棒術は勘弁してくれたまえ。茶化しているわけではじゃない。微笑ましく思っているだけさ。たとえばその服だってヨシユ

ア君に見てもらいたいと思って新しくしたんだろっ？っん、とても良く似合っているよ」

「あ、ありがと……。もう……。いきなり真面目に恥ずかしくなること言わないでよ。それにこの服は、シエラ姉がお祝いに見立ててくれたんだから。ヨシユアに見てほしいなんて……。……。ちよ、ちよっとは思っているけど」

「……………」

「な、なによ、悪い？」

「フフ……。いや、予想以上だと思ってね。まあ、この話はこのくらいにしておこうかな。エステル君もどうだい？カクテルでも奢らせてもらおうよ」

「うーん、遠慮しとくわ。すぐにツァイスに着くだろうし。オリビエも程々にしないと酔い潰れて降り損ねちゃうわよ？」

「フツ、心配しないでくれたまえ。このオリビエ、美女の酌以外では酔い潰れたことは一度もないのさっ」

「何の自慢にもならないわね……………」

エステルはクローゼに声をかけた。

「エステルさん。ひよっとして船内をお散歩ですか？」

「えへへ、まあね。そういえばクローゼっていつも王都に帰る時どっうしてるの。親衛隊の人に送ってもらおうとか？」

「うふふ、まさか。定期船を使って帰っていますよ。新年の式典と女王生誕祭。年に2回は王都に帰っていますね」

「それじゃあ結構定期船は使ってる方なんだ。あ、そういえば……ジークってどうしてるの？クローゼの後からのんびりと王都に来るわけ？」

「あ、ジークなら……。ジーク、来て！」

「へ……………」

クローゼはジークを呼んだ。その後、ジークが飛んで来た。

「ええっ!？」

「ピユイ？」

「ふふ、ごめんね。ちょっと呼んだだけなの」

「ビ、ビツクリした……。ジークってはこの船について来てたんだ」

「ピユイ」

「ジークは時速1800セルジュで水平飛行することができるんです。この定期船の運航時速は900セルジュくらいですから……。ジークにとつたらお散歩と同じような感覚で付いて来ているのかもしれませんね」

「そうなんだ……。あんだ、つくづく普通のハヤブサじゃないわねえ」

「ピユイ？」

「ジークが親衛隊の伝令を手伝うことがあるのはこの速さがあるからなんです。導力通信が使えないとき、ジーク以上の速さで情報を届けられる存在はありませんから」

「そっか……。市長逮捕の時もそうだったわね」

エステルはレインに声をかけた。

「おや、エステルさん。どうしたのですか？」

「えへへ、ちょっと船内を散歩してるの。レインさんは何をしてるの？」

「ええ、風に当たりながら少し考え事をね。……エステルさん、突然ですが《結社》についてどう思います？」

「えっ……?」

「クーデター事件の時もそうでしたが、今回も《ゴスペル》が関わっていました。そして、怪盗紳士ブルブランも言っていたように実験は始まったばかりのようです」

「うん、そのようね」

「このままだといずれ、《結社》の《執行者》と戦うことになるでしょう。《執行者》の戦闘力は強力です。エスエルさんはそれでも止めようと思いますか？」

「………………。あたしはヨシユアを連れ戻すと決めた。そして、いずれかは《結社》と戦うことになることも分かっている…………。それでも、あたしはやると思った以上、覚悟は揺らがないわ」

「そうですね…………。そうですね、愛しい彼氏のためならばね」

「か、彼氏って…………！」

「ふふ、照れなくてもいいですよ。当然のことですからね」

「も、もう…………！そういえば、レインさんってどうしてそんなに《結社》にこだわるの？前に誰かを追いかけてるって言ってたけど…………」

「そうですね…………。それでは少しお話ししましょう。私はリベール出身ではなく、レミフェリアの出身です」

「え、レインさん、リベールの人じゃないんだ？」

「ええ、そうですね。それはあまり関係ありませんが、私は数年前に外国で起きた『事件』で今私の捜している人物と出会いました。その事件は一応解決されましたが、根本的な解決と遂げることはできませんでした。私はその事件を根本的に解決するため、事件に関わっていると考えたその人物を捜しているのです」

「その事件にも《結社》が関わっていたの？」

「いえ、事件自体に《結社》は関わっていませんでした。ただ、《結社》のその人物が事件解決途中に見受けられたものですから…………」

「そうなんだ…………。でも、そんな大規模な事件があったっけ？」

「事が事なのであまり世に知らされていない事件ですから知らなくても無理はないですよ。いずれにせよ、今回のこととは無関係ですから、気にしないでください」

「……お待たせしました。まもなく本船はツアイス市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」

第8章 荒ぶる大地（4）

ツアイス市 発着場

「さてと、何はともあれツアイス支部に行くとしますか。キリカさんに挨拶しなくちゃ」

「ほう、名前からすると東方系の女性のようだね。どのようなご婦人なんだい？」

「また始まったか……」

「ま、並のタマじゃねえ女さ。シェラザード以上の女傑だから火傷したくなけりゃ手を出すなよ。つーか、とばっちりを食らいたくねえから止めてくれ」

「フツ、それを聞いたらますます興味が湧いてきたよ。それじゃあさっそくギルドに……」

オリビエがギルドに向かおうとした時、

「おおっ……!?!?」

いきなり地面が揺れ出した。

「こ、これはひょっとしてそのキリカさんの怒りなのか!?!?」

「そ、そんなわけあるか……!」

「地震……みたいですね」

「……………」

「た、助けてー!」

「お、落ちてしまっわ!」

飛行船の乗客が慌てふためいている。

「み、皆さん!どうか落ち着いてください!この発着場は、直下型の大地震にも耐えられるように設計されています!大した地震ではありません!どうかご安心を!」

飛行船受付のジラルルが乗客たちに説明した。そうしている間に地震は止まった。

「と、止まった……………」

「も、もう大丈夫だな……。さあ皆さん。慌てず騒がず受付までどうぞ」

「やれやれ……。地震とは久しぶりじゃの」

「えへへ、すごかったねえ！」

受付のジラールが乗客を案内した。

「はあ……。ビックリしちゃった。それほど大きくなかったけどこんな不安定な場所で揺れるのは勘弁して欲しかったわね」

「ふふ、そうですね。それにしても、リベールで地震なんて珍しいですね……」

「私が知る限り、リベール王国が位置するところは地震が多発する場所ではないはずですよ。かなり珍しいですね」

「ほう、そうなのかい？」

「ああ……。滅多にあるもんじゃねえ。被害状況を確認かめるためにもとつととギルドに向かうか」

遊撃士協会ツアイス支部

「ふむ、中央工房では大した被害はなかったと……。市街も大した騒ぎにはなっていないのでご安心を。ええ、その件についてはよろしくお願いします。それでは」

キリカが通信器を置いた。

「ふふ……。妙なタイミングで到着したわね」

キリカが振り向いた。

「よく来たわね。エステル、アガット。発着場ではさぞ驚いたでしょうっ？」

「あ、あはは……。お久しぶり、キリカさん」

「つたく、相変わらず見透かしてやがるな……。まあいい、よろしく頼むぜ」

「こちらこそ助かるわ。そちらの3人が姫殿下とオリビエさんとレ

インさんね。私はキリカ。ツアイス支部の受付を勤めている。以後、お見知りおきを」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

「よろしく願います」

「フツ、それにしても予想以上の佳人ぶりだ。このオリビエ、貴女のために即興の曲を奏でさせてもら……」

「ジャンによれば、貴方たちは正式な協力員になったそうね？協力員は、遊撃士と同じように上の休憩所を自由に利用できるわ。待ち合わせに使つといいでしょう」

「はい、わかりました」

「ありがとうございます」

「えーと、即興の曲を……」

「リユートを奏でたいなら上の休憩所で、どうぞご自由に。ただし、常識の範囲内をお願いするわ」

「シクシク……分かりました」

「（シエラ姉より確かに容赦がないかも……）」

「はあ、とりあえず……。溜まっている仕事の状況を早速、教えてもらえるか」

「掲示板の仕事は溜まっているけど、今のところ緊急の仕事はないわ。貴方たちのやりやすいように片付けてくれて結構だけど……」。

キリカが突然口を閉じた。

「????どうしたの、キリカさん？」

「これは通常の依頼ではなくギルドからの要請なのだけど……。貴方たちを、《結社》の調査班と見込んで調べて欲しいことがあるの」

「なに……?」

「い、いきなり直球で来たわね」

「あの……どういう事なんでしょうか？」

「調べて欲しいのは他でもない。先ほど起こった『地震』について」

「地震について調べる？それって被害がどの程度かみんなに聞いて回るってこと？」

「それもあるのだけれど……。実は3日ほど前、ヴォルフ砦で同じように地震が発生したらしいの。時間でいうと10秒くらい。特に被害はなかったらしいわ」

「なるほど……。さっきの地震と似ているな」

「ただ、奇妙なことが1つ。ヴォルフ砦で地震が起きた時、ツァイス市は全く揺れなかった」

「え……」

「それは妙ですね。地図で見るとヴォルフ砦とツァイス市はそれほど離れていないはずです。ヴォルフ砦で地震が起こればこちらにも揺れは来るはずなのに……」

「ごく小さなものだったから気付かなかったのかもしれない。ただ、そうね……。虫の知らせというのかしら。何となく嫌な感じがするのよ」

「言いたいことは分かるかも……。幽霊騒ぎもそうだったけど変な現象はあたしも気になるわ」

「いいだろう、引き受けた。ツァイス市とヴォルフ砦の双方で聞き込みをした方が良さそうだな」

「よろしく願いますわ。ただし、市内についてはマードック工房長にお願いして情報を集めてもらっているの。そちらが期待できるから省いてしまっても構わないわ」

「なるほど……。最低限、ヴォルフ砦で聞き込みをすればいいのね？」

「まあ、気になる程度だから緊急性はないと思ってちょうだい。掲示板の依頼をこなしながらゆっくり進めてくれても構わない。それに……挨拶したい人たちもいるでしょう？」

「あ……。うん。新しい《ゴスペル》の件もあるし博士とティータに会わなくちゃ」

「そうですね……。その方がいいと思います」

「フツ、ギルドの仕事をするのは挨拶をしてからということだね、では、ティータ君と再会するためいざ出発するとしようかっ」
「なんてでめえがいきなり仕切ってやがる……。まあいい、ラッセル工房に行くぞ」
エステルたちはラッセル工房に向かった。

第8章 荒ぶる大地（5）

ラッセル工房 リビング

「さてと……。博士とティータはいるかしら。」

「もしかしたら中央工房に行ってるかもしれないな。」

エステルたちが玄関で話をしていると、

「おじいちゃん。2階のお片付けは終わったよ。」

「おう、すまんな。それじゃあ、そっちの部品の整理をしてくれんか？」

「はい。」

隣の部屋から声が聞こえてきた。

「ふふっ、2人とも研究所の方にいるみたいね。」

「ああ、行ってみるか。」

ラッセル工房 研究所

「んしょ、んしょ……。」

ティータが棚の整理をしていた。

「よう、邪魔するぜ。」

「あ、アガットさん！えへへ、いらっしやい。今日はどうしたんですか。」

「なんじゃ。来たのか、不良青年。」

「来ちゃ悪いかよ。しかし、相変わらずゴチャゴチャした工房だな。どうせさっきの地震で部品の山が崩れたんだろっ？」

「えへへ……。よく分かりましたね……。」

「2人とも、お久しぶり。」

「あ……。」

遅れてエステルたちが入ってきた。

「えへへ……。ご無沙汰してゴメンナサイ」

「おお、エステル……」

「お、お姉ちゃん……。エステルお姉ちゃんっ！」

「わわっ、ティータ？」

ティータがエステルにしがみついた。

「エステルお姉ちゃん……。よかった……。本物のお姉ちゃんだよ」

「……」

「な、なによ本物って……」

「だってだって……。ヨシユアお兄ちゃんがなくなっちゃったって聞いて……。エステルお姉ちゃんまで外国のどこかに行ったって聞いて……。このまま会えなかったらどうしようって、わたし……ずっと不安だったの……」

「そっか……。ごめんね……。挨拶もしないで遠くに行って」

「確か、レマン自治州にある訓練場に行っておったそうだな。いつ帰国したんじゃ？」

「帰ってきたのは少し前かな。今までルーアンで仕事をしててツァイスに到着したばかりなのよ」

「そうじゃったか。おや、お前さんがたは……」

ラッセル博士がクローゼたちに目を向けた。

「お久しぶりです。博士、ティータちゃん」

「フッ、お邪魔させてもらうよ」

「私の場合は初めましてかな。レインと申します」

「クローゼさん……。それにオリビエさん……。えとえと、初めまして……。レインさん」

「3人とも、あたしたちの調査に協力してくれてるの。ルーアン地方で色々あってね」

「ふむ、そっか……。こんな所で立ち話もなんじゃ。居間の方に移るとするか」

ラッセル工房 リビング

「クーデターの黒幕どもがすでに活動を始めていたか……。しかも再び『ゴスペル』を持ち出してきたとはもう……。」

「空間投影装置が生み出した映像を遠く離れた座標に転送する……。そ、そんなことどうやったら可能なんだろ……。」

ティータが驚いている。

「空間投影装置そのものは決して不可能じゃないはずじゃ。ワシもいずれは造ってみようと思ったからな。じゃが、生み出された映像を遠くの座標に転送するのは……。ううむ……。さっぱりカラクリが判らんわい」

「敵の男は『新型ゴスペル』の実験をしてたって言ってたのよね。

確かに、一回り大きかったし導力停止現象は起きなかったけど……。」

「そういえば、クーデターの時に使われていた『ゴスペル』はどうなんだ？ちったあ何か判ったのかよ？」

アガットが以前、工房で『ゴスペル』の実験したときのことを尋ねた。

「むう……。それがな。解析を進めれば進めるほど奇妙なことが分かってきてな……。」

「奇妙なこと？」

「うむ、結論から言うとな……。あの『ゴスペル』そのものに『導力停止現象』を起こす機能があるとは思えなくなってきたんじゃ」

「へ……？」

「で、でも……。実際に、あの黒いオーブメントが導力停止現象を起こしたのですよね？」

「うむ、あくまで表面的には。じゃが、先ほど言ったように内部の結晶回路を解析してもそんな事ができるとは思えんです。『導力場の歪み』らしきものを発生させるのは確かなんじゃが……。」

「『導力場の歪み』……。」

「えと、『導力場』というのは導力エネルギーの周囲に形成される

干渉フィールドのことを言います。大抵は、一定の法則で力線が描かれるんですけど……。おじいちゃんが解析した結果、《ゴスペル》が生み出す導力場はこの法則から外れているらしくて……」

「むむ、ちよつと話が専門的になってきたかな」

オリビエもよく判らないらしい。

「あたしもチンプンカンプン……」

「ふむ、つまり《ゴスペル》は一般のオーブメントと違い、特殊な力を持っているということですね？」

「ありていに言うとそうじゃな。じゃが、導力場というのはあくまでも一定の時空間における導力エネルギーの在り方にすぎん。方向性が与えられない限り、『導力停止現象』のような具体的な作用が起こるはずがない……。正直、困り果てていたんじゃがルーアンでの事件を聞いて新たな可能性が開けたかもしれん。知らせてくれて礼を言っぞ」

「あはは……。どこがどう役に立ったのかいまちピンとこないけど」

「敵が使っていた投影装置は王国軍が調査しているはずだ。興味があるなら連絡してみろや」

「うむ……。そうさせてもらおうかの。そういえば、お前さんたちはこれからどうするつもりじゃ？しばらくツァイスで仕事をすることもりなのか？」

「あ、それなんだけど……」

エステルたちはギルドの要請で、地震について調査することになった経緯を説明した。

「ほう……。先ほどの地震についてか。確かにリベールで地震が起きることは滅多にない。しかも3日前に、ヴォルフ砦で同様の地震が起こっていたのか……」

「3日前……。うーん、ツァイスの市内は揺れたりしなかったと思っよ。確かにちよつとヘンかも……」

「自然現象だし《結社》が関係してるか判らないけど……。調べる

だけは調べてみるわ」

「ふむ、地震か……。ひよっとしたらアレが使えるかもしれないな」
「え……」

「まゝたケツタイな発明を持ち出すつもりかよ？」
アガットが渋い顔をした。

「うむ、数年前に造ったある装置があるんじゃないが……。あれにトランスミッターを付けて《カペル》に解析させられれば……。ふむふむ……イケるかもしれないの！」
ラッセル博士が1人頷いてる。

「もう、博士つたら1人で納得しないでよ」

「いや、お前さんたちの調査に協力してやろうと思つてな。お前さんたちはヴォルフ砦に調査に向かうがいい。その間に『良い物』を用意しよう」

「そ、それは助かるけど……。『良い物』って一体何なの？」

「むふふ。それは後のお楽しみじゃ。それではさっそく中央工房に行こうかの。ティータも手伝ってくれんか？」

「あ、うん……。ごめんなさい。お姉ちゃん、アガットさん。せつかく久しぶりに会えたのに……」

「あはは、いいつて。とりあえずティータの顔を見ただけでも嬉しかったしね」

「エステルお姉ちゃん……」

「ま、しばらくツアイスを拠点に仕事をするだろうからな。ゆっくりできる機会はあるだろ」

「エへへ、そうですね。あのあの、みなさんもお構いできなくてごめんなさい」

「ふふ、とんでもないです」

「お仕事、頑張ってください」

「フツ、機会があったらまた寄らせてもらつよ。その時はぜひともボクのことをお兄ちゃんと……」

「だゝから、アンタはやめい！」

「あ、あはは……それじゃあ、またあとで！」

「準備ができしだい、ギルドに連絡するからの！」

ラッセル博士とティータは中央工房に向かっていった。

「うーん……相変わらずな2人ねえ」

「しかし、あの年頃から機械いじりとはな……。微妙に先行きが不安になるぜ」

「うーん、確かにもうちょっと子供らしくていい年頃かもね。でも、ティータに限って心配する必要はないんじゃない？」

「ふん……。本当ならあいつの両親が心配すべきなんだろうが。外国にいるってことなら仕方ねえ。今度、機会があつたら爺さんにも注意しとくか」

「おや、アガット君。ずいぶんお兄ちゃん的な発言をしてくれるじゃないか？」

「は……？」

「もしくはパパ的発言か……。フフ、世の男どもが聞いたらさぞや羨ましがれるだろうね」

「よくわからんが……。ひょっとしてケンカ売ってるか？」

「いやあ、とんでもない。ただ、あんな子に慕われて2人ともうらやましいなあって」

「ふふ、オリビエさんの気持ちもちよっと判ります。私もティータちゃんともっと仲良しになりたいな」

「もう、クローゼまで……。心配しなくてもオリビエ以外ならすぐに仲良しになれるわよ」

「エステル君、ヒドイッ！」

「ったく……付き合いきれねえぜ。まあいい、さっさとギルドの仕事を始めろぞ」

「うん、そうね。他の仕事をこなしながらヴォルフ砦に調査に行きましょー！」

第8章 荒ぶる大地（6）

ヴォルフ砦

「ヴォルフ砦か……。カルバードとの国境なのに相変わらずのどかな場所ねえ」

「リベール王国とカルバード共和国は切迫した状況を起こしたことはありませんからね」

「同じ国境ゲートでもハーケン門とは大違いだねえ。フツ、さすがボクの祖国エレボニアと違ってリベールの友好国だけはある」

「つたく……。なに他人事みたいに言っただけだ」

「共和国と友好関係にあるからというのもあると思いますけど……。この先は、峠道になっていて軍隊が通りにくくなっているんです」

門としての規模が小さいのはそのあたりが理由かもしれませんが」

「なるほど、広い街道に面したハーケン門とは違うわけだね」

「ふむ、納得です」

「ま、だからといってニワトリがうるついているのはどうかと思うけどな。まあいい、さっそく『地震』の聞き込みを試してみよう。まずは守備隊長に挨拶だ」

「うん、了解！」

「おや、君たちは遊撃士だな。ギルドから連絡があったよ。『地震』の調査に来たんだろう？」

どうやらベイス隊長はキリカからの連絡を受けていたようだ。

「うん、そうだけど……。ほんと、キリカさんって根回しがいいわねえ」

「はは、彼女にはいつも色々世話になっているよ。君たちの調査にも、できるだけ協力させてもらおうつもりだ」

「助かるぜ。まずは地震の発生状況を詳しく聞かせてもらおうか」
「そうだな……。地震が発生したのは3日前の午後5時くらいだ。大した揺れではなかったし、10秒ほどの短い時間だったが……。地震など滅多に起こらないから部下たちも動揺していたようだ。そしてその夜、レイストン要塞に定時連絡をした時、ようやく奇妙な事実が判明したんだ」

「他の場所では、地震など起こっていなかったのですね？」

「ああ、その通りだよ。レイストン要塞はもちろん、セントハイム門も揺れなかった。ツァイス市とエルモ村にも問い合わせたが結果は同じだった」

「なるほど……。ちなみに今日、ツァイス市でも地震があったことは知ってる？」

「ああ、そうらしいな。だが今回は、こちらの方はまったく揺れなかったと思うよ」

「極めて局地的にして場所を移動する地震現象か……。何とも自然極まりないねえ」

「地震の発生状況はわかった。それ以外に、何か気になる事件とか起こらなかったか？怪しいヤツを目撃したとかな」

「ふむ……。大した報告は入っていないが。だが、ひよっとしたら部下たちに何か心当たりがあるのかもしれない。よかったら聞いてみるといい」

「お言葉に甘えさせてもらうわ。早速、兵士さんたちに話を聞かせてもらいましょ」

ケルヴィン副長の話

「なんだ、遊撃士のものか」

「うん、そうよ。ちょっと調査に協力して欲しいのよね」

「構わないが……。できれば手短に頼むぞ」

エステルたちは地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。

「地震というところ……。3日前の地震のことか。ふむ、地震があった他は普通の1日だったと思うぞ。もし不審なことがあったらとつくに報告しているはずだ」

「そっか……」

「ふむ、どうやら空振りのようだね」

「ご用はそれだけかな？」

「ああ、もう十分だ。職務中に悪かったな」

「それはお互い様だろう。では、失礼させてもらおう」

↳ 兵士プラムの話

「ふわわ〜っ……。ん、どうかしたのかい？」

「えっと……。遊撃士協会の者なんだけど」

「少しの間、調査に協力していただけませんか？」

「あ、いん、いいけど……」

エステルたちは3日前の地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。

「ああ、あの地震ね。寝てたらいきなり揺れたから副長にどやされたかと思っただ。でも、辺りを見回しても誰もいない……。あとで地震だっってわかったけど最初は誰かのイタズラかと思っただね」

「それ、奇妙な出来事っていうよりあなたの勤務態度の問題なんじゃない……」

さっきのあくびといい、職務怠慢にも程がある。

「フツ、立ったまま寝られるとは大した特技だ。かくいうボクも、ソファに寝ころんだままフルコースを平らげることができるけどね」

「何の自慢にもならねえな」

「そ、それ以外に何か気づいたことはありませんか？」

「……そうだなあ。そういや、ヘニングのやつが変なことを聞いてきたけど……」

「変なこと?」

「地震があった前日のことなんだけど……。同僚のヘニングが、誰かが門を通らなかつたかって聞くんだ。通ってないって答えたらしきりに首をかしげてたんだけど……」

「どついう事なんでしょう?」

「気になる話ですね」

「何か心当たりがあるのかも。その兵士さんに話を聞いた方が良さそうね」

↳ 兵士ヘニングの話

「なんだ、どうしたんだい?」

「遊撃士協会の者だ。3日前の地震についてちよいと聞きたいことがあつてな」

「ああ、あれか……。かなりビビらされたよな。地震なんて初めてだったから何が起こったのか判らなかつたし。で、何について聞きたいんだい?」

「うん、実はプラムさんから話を聞いたんだけど……」

「門番のプラムから聞いた情報をヘニングに説明した。」

「なんだ、その話が……。ああ、確かにあいつにそついう質問をしたけど」

「確か、『門を通過した人がいなかったか』という話でしたね」

「ああ。4日前……。つまり地震があった日の前日か。見張りを終えて、休憩序に入る時、街道から奇妙な男が来るのを見たんだ」

「奇妙な男?」

「それ、ひょっとして仮面をつけた白づくめの男だったりしないかい?」

「か、仮面？いくらなんでもそこまで怪しいヤツじゃなかったけど。黒いスーツを着たかなり背の高い男でさ。黒い眼鏡をしてたんだ」
「黒い眼鏡……。それって、フレームが黒かったっていう意味？」
「いや、そうじゃなくてさ。ガラスの部分が真っ黒な色をしてたんだよ」

「そ、それじゃあ前が見えないんじゃない？」

「そいつは多分、サングラスってヤツだな。強い日光を避けるためのものらしい。ちなみに前はちゃんと見えるらしいぞ」

「ボクも知っているがあまり見かけたことはないねえ。帝都の暗黒街のボスが付けていたのを見かけたくらいかな」

「マフィアのたしなみ品といったものかもしれない。」

「ちょ、ちょっと物騒な雰囲気ねえ。ていうかアンタ、どうしてそんな危険人物を知ってるのよ？」

「フツ……。蛇の道は蛇と言うやつだよ」

「まあ、今は関係ないでしょう。話を続けましょう」

「ふーん、あの黒い眼鏡、サングラスっていうのか。とにかく、この休憩所に入る時、そいつが街道から来るのを見てさ。ここを通る旅行者は大抵、この酒場を利用するから後から入ってくると思ったんだ」

「ですが……。現れなかったんですね？」

「ああ、その通りさ。プラムのヤツに聞いてみたけど誰も通ってないって言うし……。あいつ、居眠りばかりしてるけどさすがにゲートを素通りさせるほどマヌケなヤツじゃないからなあ」

「フム、ならば兵舎の方に用があっただけかもしれないよ？隊長さんに話があったとかね」

「俺も気になったから隊長と副隊長に聞いてみたよ。そしたら、その時間帯には誰も訪れなかったみたいだし。それじゃあ、俺が見たあの男はいつたい何しにここに来たんだ？そんな事を考えてると何だか頭が混乱しちゃってね」

「うーん、確かに怪しいヤツね。これはキリカさんに報告しといた

「ほうがいいかも」

「ああ……その方が良さそうだな。情報提供、感謝するぜ」
「いやいや。話を聞いてもらえてこちらもスッキリしたよ」

「ルンファの話」

「やあ、ようこそ。何の変哲もない酒場へ」

「あの、ちよつといい？」

「はい、なんでしよう？」

「えっと、あたしたち遊撃士協会の者なんだけど。ちよつとだけ調査に協力してほしいのよね」

「ええ、構いませんよ。どうせお客はゼロですから」

「さらりと悲しいことを言うルンファ。エステルは構わず地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。

「いや、地震のことしか思い出せませんね」。グラツと来た瞬間にみんなビククリしちゃってねえ」

「地震の前後に何か気になる出来事ありませんでしたか？」

「うーん、特に変わったことは無かったと思いますよ。いえ、なにしろわたしはずっと店の中にいるもんでね」

「あ、それはそっか」

「……どうやら何もご覧になってないようですね」

「お役に立てず申しわけない」

「ううん、気にしないで。じゃ、ご協力ありがと」

これで、ヴォルフ砦の人たち全てに対して聞き込みは完了した。

ヴォルフ砦 兵舎

「やあ、君たち。部下たちから何か聞けたかい？」

「うん、実は……」

エステルたちはサングラスをかけた男が目撃されていたという情報を伝えた。

「ふーむ、ヘニングのやつ、そんな男を見かけていたのか。地震と関係あるかどうかは分からないが、確かに怪しい男だ。一応、私の方からもレイストーン要塞に報告しておこう」

「ああ、よろしく頼むぜ。さてと……ここでの調査はこんな所か。

一旦ツァイスに帰ってキリカに報告しちまうぞ」

「うん、了解」

エステルたちはツァイス市に向かった。

第8章 荒ぶる大地（7）

トラット平原

エステルたちがヴォルフ砦を出た途端、

「おい、君たち！」

ペイス隊長がエステルたちに声をかけた。

「よかった、間に合ったようだね」

「あれ、隊長さん？」

「どうなさったんですか？」

「実は、先ほどの話をレイストーン要塞に連絡したんだが意外な情報を聞かされてね。君たちにも知らせねばと思ったんだ」

「意外な情報……？」

「俺たちに知らせるってことは、まさか……」

「地震関連の情報ですか？」

「ああ……」

「つい今しがた、セントハイム門で局地的な地震が発生したらしい」

「あ、あんですって〜！？」

報せを聞いたエステルたちは至急、セントハイム門に直行した。

セントハイム門

「まったく……遊撃士というのは訳が判らん。見ての通り、地震の後片付けでみな忙しくしているのだ。調査なら後にしてもらえないか」

エステルたちはセントハイム門に着いた後、隊長に調査の許可をもらおうとしたが、嫌な顔をされた。

「悪いが、こちらも仕事でな。片付けの邪魔はしねえから聞き込みを許可してもらえねえか？」

「ふう、司令部からの指示がなければ断っているところだが……。私は急ぎの仕事があるので地震の発生状況についてはタルバウト副長から聞きたまえ。すぐその部屋の奥にある倉庫で片付けをしているはずだ」

「了解、タルバウト副長ね」

「他の者の後片付けの邪魔はできるだけしないでくれたまえ。それでは私は失礼する」

デイル隊長は去っていった。

「ふう、何だか大変そうね。あたしたちも片付けの手伝いをした方がいいのかしら？」

「余計なおせっかいは止めておけ。曲がりなりにも軍事施設だ。機密書類なんかもあるかもしれん」

「うーん、それもそっか」

「それにしても被害状況がツアイス市の地震と違いますね。あの時は、こんなに物が散乱してませんでしたけど……」

「ふむ、そのあたりの違いは確認した方がいいかもしれないね。あとは怪しい人物の目撃情報かな」

「例のサングラス男ですね」

「まずは副長っていう人に詳しい事情を聞いてみましょう」

「タルバウト副長」

「やれやれ……。全部片付けるのは一苦労ですね。夕方までには終わらせないと……」

「えっと……。お忙しいところ失礼します」

「おや、あなた方は……」

エステルたちは遊撃士であることを名乗ってから、地震の調査に来たことを説明した。

「そうですね、ご苦労さまです。地震の発生状況をお知りになりた

いんですか？」

「ああ、詳しく頼むぜ」

「承知しました。地震は昼の1時ごろ……たいだい2時間前に起きました。積み上げた木箱が崩れるくらいの大い揺れで30秒ほど続いていましたね」

「あれ、それじゃあヴォルフ砦の地震と比べると……揺れの強さが強いし、揺れの時間も長いんじゃない？」

「そうですね……。揺れの強さも大きいし、時間も長くなっています」

「そして俺たちも出くわしたツアイス市の地震だが……。強さにしても時間にしてもその中間くらいだったはずだ」

「つまり、この局地的な地震は回を増すことに危険になっている。そう言えるのかもしれないね」

「となると、次が起きた場合、かなり危険なことになりますね」

「確かに由々しき事態ですね……。しかし、自然現象である以上防ぐ手だてもなさそうです……。遊撃士協会には何か対策がおりなんですか？」

「うーん、確信はないけどちょっと心当たりがあつてね。ところで地震の前後に奇妙な出来事が起こらなかった？不審人物が目撃されたとか」

「不審人物……。確か昨日、チェスリー君が奇妙な男を見たと言っていましたね。屋上で片付けをしていますから詳しく聞いてみるといいでしょう」

「わかった。屋上にいるチェスリーだな」

「協力、どうもありがとう」

「いえいえ。お役目ご苦労さまです」

エステルたちは屋上に向かった。

セントハイム門 屋上

「あれ……君たちは？」

屋上で片付けをしていた兵士チェスリーに声をかけた。

「あなたがチェスリーさんね」

「遊撃士協会のモンだ。さっきの地震について聞きたいことがあるんだが」

エステルたちは、チェスリーが見かけたという怪しい人物について尋ねた。

「ああ、昨日の話か。うーん、さすがに地震とは関係ないと思うんだけど……。ここで、黒い眼鏡をかけたやたらと背の高い男を見かけたんだ」

「やっぱりか……」

「ヴォルフ砦でも目撃されたサングラスの男性ですね……。その方、何をなさっていたんですか？」

「いや、ここに登ってきてしばらく景色を眺めていってから下に降りていつちゃったよ。黒い眼鏡なんて見たことないからすごく気になっちゃったけど……。向こうも話しかけてこなかったし声をかける機会を無くしちゃってさ」

「そっか……。他に、その黒眼鏡の男を見かけた人っていないのかな？」

「それが変なんだよな。あまりに変わったヤツだったんで夕食の時に話題に出したんだけど……。他のみんなは、そんなヤツ、見かけなかったか言うんだよ。唯一、食堂で働いているタミイって娘が見たらしいけど」

「ふむ、ヴォルフ砦と違って、この関所は人通りも多そうだな。それにも関わらず目撃者はたったの2人だけ……。少し不自然なものを感ずるね」

「念のため、その娘にも話を聞いてみることにするか。食堂にいるタミイだったな」

「ありがと、助かったわ」
「お役に立てて何よりだ。調査、頑張ってくれよ」

セントハイム門 食堂

「は、ようやく片づいたわ。あら……？」

「あんたがタミイだな？遊撃士協会のモンだ」

「実はちよつと聞きたいことがあるんだけど……」

タミイが目撃したというサングラスの男について尋ねた。

「ああ、あの人ね！昨日の休憩時間に2階の廊下ですれ違ったの。

多分、屋上から戻ってきた帰りなんだと思うんだけど……」

「兵士君の証言と一致するね。それでキミ、すれ違っただけで言葉は交わさなかったのかい？」

「一応、挨拶はしたわよ。そしたらその人、ニヤリと笑って『よお』って一言返事をしたの。それがまたワイルドな感じでしびれちゃったのよね」

「ワイルドっていうと……このアガツトみたいな感じ？」

「なんだそりゃ……」

「うーん、そこのお兄さんより背は高かったと思うわ。着ていた服は黒いスーツだけど胸元を開けて着こなしていたのよね。あと、両方の手に黒いグローブを填めていたかも」

「サングラスに、黒いスーツ。そして黒いグローブときたか。メチャクチャ怪しいわねえ」

「怪しいっていうか、獰猛で危険な薫りのする人だったわ。うふ、危ない魅力っていうやつ？」

「そ、それはともかく……。すれ違った後には見かけてないわけね？」

「ええ、その通りよ。追いかけてお近づきになろうとしたんだけど……変な場所で見失っちゃってね」

「変な場所……?」

「うーん。見てもらった方が早いわね。ねえ、サンジツトさん。ちよつと外に出てもいい。」

「まゝ、仕方ねえやな。仕込みまでには戻ってこいよ。」

エステルたちはタミイに案内してもらった。

セントハイム門 2階廊下

「ちようどこでその人とすれ違ったのよね。で、その人はそのまま向こうに歩いて行って……。あたしは彼に話しかけるべく廊下を引き返したわけなのよ。」

「ふむふむ……」

タミイは廊下を引き返していった。

「そして角を曲がったところでその扉が閉まるのを見かけたの。だからあたし、てっきり彼がここから外に出たと思ったのよね。」
「話しかけるチャンス!」とその後を追いかけたんだけど……」

タミイは扉を出た。

「いざ外に出てみると彼の姿がどこにもなくてね。つまり、この場所で見失っちゃったってわけなのよ。」

「み、見失ったって……」

そこはセントハイム門の門壁の行き止まりだった。

「ここ、行き止まりですよね?」

「うん、まさかこの高さから飛び降りたとも思えないし。多分、こっちに来たっていうのはあたしの勘違いだったと思うわ。結局、他の場所を探したけど彼の姿は見つからなくてね。ちよっぴりブル」
「だったわ」

「フツ、可哀想な仔猫ちゃんだ。よかつたらボクがそんな男のことは忘れさせて……」

「えーい、混ぜっ返すなっ!」

「なるほど……。だいたい状況は掴めたぜ。すまねえな、助かった」
「ふふ、どういたしまして。それであの人……。やっぱりお尋ね者なのかしら？遊撃士協会に追われる凄腕で冷血の暗殺者とか？」

「そ、それは判らないけど……。注意すべき人物なのは確かね。もし、見かけたとしても近寄らない方がいいと思うわよ」

「うーん。カツコイイけど仕方ないか。あたしは仕込があるからこれで失礼しちゃうわ。頑張つてね、遊撃士さんたち！」
タミイは食堂に戻っていった。

「『この高さから飛び降りたとも思えない』……。……。エステルさん。誰かを思い出しませんか？」

クローゼがエステルに言った。

「うん……」

エステルの頭にグランセル城女王宮でのことが思い浮かんだ。

「女王宮から飛び降りた銀髪男　　ロランス少尉ね。確かに、あいつと同じレベルならここから飛び降りても平気かも……」

「ああ……。これでサングラス野郎の正体は決まったと考えてもいいだろう」

「怪盗に続く第2の《執行者》　　つまり、そういうことだね」

「ええ、おそらく間違いありませんね」

「ああ。ここでの調査は終了だ。ギルドに戻って報告をするぞ」

エステルたちは遊撃士協会に向かった。

第8章 荒ぶる大地（8）

遊撃士協会ツアイス支部

「あれ……。どうしたの、2人とも？」

ギルドには珍しいことにラッセル博士とティータが来ていた。

「あつ……。お姉ちゃん、アガットさん！」

「おお、ちょうどいい所に戻ってきたな」

「地震の調査を終わらせて戻ってきたところなんだが……。なんだよ、そのガラクタは」

受付には妙な機械が3台置かれていた。

「ガラクタとは失礼な。これが約束していた『良い物』じゃよ」

「まあ、その説明は追々してもらおうとして……。セントハイム門の地震も一応調べてくれたみたいね。ヴォルフ砦の調査と合わせて報告してもらいましょうか」

キリカは先に地震の調査の報告を優先した。

「うん、それなんだけど……」

エステルたちはセントハイム門での調査結果について報告した。

「なるほど……。地震の規模が大きくなつとるか。思ったよりも事態は深刻じゃな」

「う、うん……。今度また、ツアイス市内であれ以上の地震が起こつちゃったら大変なことになつちゃう……」

「そして、両方の場所で見撃されたサングラスの男……。ツアイス市内で見撃されたのと同じ人物みたいね」

「そっか……。やっぱり市内にも現れたんだ」

「ええ、マードック工房長が市内の情報を集めてくれたの。確かにその男が《結社》の人間である可能性は高そうね。こうなった以上、博士の実験に全面的に協力した方がいいでしょう」

「実験……。この装置を使うのか？」

「うむ、その通り。これはわしが数年前に開発した『七耀脈測定器』

でな。地面に設置することで『七耀脈』の流れをリアルタイムに感知・測定することができるとのじゃ」

「えーと……。毎度ながら聞くんだけど……。『七耀脈』ってナニ？」
エステルは『七耀脈』が何なのか分からないようだ。

「『七耀脈』とは地下深くに存在する七耀石が採れる鉱脈のことです。この地脈は莫大なエネルギーを持っていて、大地を少しずつ動かしています」

「『地脈』、『霊脈』なんて表現されることもあるらしいね。東方では『龍脈』だったかな？」

「あら、よく知っているわね。東方では昔から、龍脈の集う場所に都が造られたという歴史があるわ。大地のエネルギーを国の力に取り込むという発想ね」

見かけによらず博識のオリビエであった。

「へー、そうなんだ。ちよつと勉強になっちゃった」

「それで、その装置を使えば地震を止めることが出来るんでしょうか？」

「いや、流れを見るだけです。だから実際に地震を止めることは無理ですわい。じゃが、ゼムリア大陸の地震は七耀脈の流れが地層を歪めることで起きるものと言われてましてな。ですから、その流れを調べれば何か解けるかもしれんですわい」

「なるほど……。では、次に地震が起きるまでに準備をする必要があるわけですね」

「装置が3つあるってことは設置する場所も3箇所か？」

「うむ、地図を見てくれ」

ラッセル博士が地図を広げた。

「設置して欲しい場所はツァイス地方の3箇所になる。まずは、トラット平原のストーンサークルがある場所じゃ。次は、カルデア隧道中間地点。ツァイスから歩いて最初の橋付近。最後に、レイストン要塞前じゃ」

ラッセル博士が地図の3箇所に印をつけた。

「 以上の3箇所を設置してもらいたい」

「うん……。だいたい手順は判ったわ。ところで、測定器の設置ってただ置くだけでもいいわけ？」

「いや、そう単純ではない。測定用の検査針を正しい角度で地面に差し込む必要があるし、アンテナの設定も必要じゃ」

「アンテナというのは導力通信用の装置のことだね。すると、測定した情報をどこかに送るといっわけなのかい？」

「ほう、なかなか鋭いのう。外付けのアンテナで、測定数値を演算オーブメントの《カペル》に届けて七耀脈の動きを分析させるのじや。3箇所のポイントの情報リアルタイムに分析できるのでかなり正確なことが判るはずじゃよ」

「うーん、なんだか凄そうな実験ね。それじゃあ、ラッセル博士も装置の設置についてくるわけ？」

「いや、わしは《カペル》の調整があるから手が空かなくてな。代わりにティータを連れて行ってくれ」

「えへへ……。よろしくお願いします」

「そっか。ティータなら百人力よね。……アガット。文句言ったりしないわよね？」

あらかじめ釘を刺そうとするエステル。

「仕方ねえな……。ただあんまり機械いじりに夢中になりすぎるんじゃないねえぞ。ほっといたら、魔獣が現れても気付かずに熱中してそっだからな」

「うつつ……。アガットさんのいじわる……。でもでも、そうなくてもきつと助けてくれますよね？」

「……ったく、甘ったれが」

「あはは。やっぱりアガットの負けね」

「それでは、わしはこれから《カペル》の入力調整を始める。全ての測定器を設置したら中央工房の演算室に来てくれ」

「うん、わかったわ！」

「おじいちゃんも頑張ってね」

ラッセル博士は中央工房に向かつていった。

「次の地震が起きるまでに全部設置しなくちゃね……。さっそく出發しますか！えっと、測定器を設置するのは隧道の途中、平原の外れ、レイストン要塞前の3箇所よね。うーん、どつう順番で設置していけばいいのかしら？」

「それは貴方たちに任せるわ。レイストン要塞には私の方から連絡しておく。ゲートの門番に事情を話せば設置を許可してくれるでしよう」

「うん、わかつた」

「よし、そろそろ出發するか。ティータ。ちゃんと付いて来いよ」

「はいっ」

エステルたちは測定器の設置に向かつた。

第8章 荒ぶる大地（9）

トラット平原 ストーンサークル

「あ……」

エステルが声をあげたその先には、意味ありげな石柱が立っていた。「ストーンサークル」っていうから何かと思っただけど……。うーん、意味ありげな石柱ねえ」

「この石柱のことは私も本で読んだことがあります。ゼムリア文明よりも前に造られたものらしいですけど……」

「ゼムリア文明……。古代に栄えた導力技術文明か」

「あの『四輪の塔』や城の地下にあった『封印区画』もそのゼムリア文明の産物なのよね？」

「ああ、そうらしい。確かに、そのあたりとは全く関係なさそうな代物だな」

「おじいちゃんが言うにはこの場所は七耀脈の流れが強く測定される場所らしいです。この石柱が建てられたのも何か宗教的な意味があるかもしれないって言ってました」

「なるほど、七耀脈の流れを調べるにはうってつけなわけね。でも、測定器を設置するとしたらどのあたりがいいのかしら？」

「うーん、そうだね……」

ティータは辺りを調べ始めた。

「地面もしっかりしてるし、遺跡の基盤もなさそう……。方位の確認も……ヨシ」

ティータはある一点を確認した。

「お姉ちゃん。ここで大丈夫だと思うよ。さっそく設置しちゃうか？」

「うん、頼んだわ」

「それじゃあ設置作業を始めちゃうね。ちょっとだけ待ってて」
ティータは測定器を設置し始めた。

「うん、これでよしっ」と

「へえ、組み立てるとこんな感じになるんだ。ところで……このお皿みたいなもの、ナニ？」

エステルが測定器についている円盤状の物を指した。

「パラボラアンテナっていつて導力波を集中するアンテナなの。強い導力波が送れるからかなりの距離まで届くし……。カルデア隧道みたいな場所でも届いちやうって言つてたかな」

「あの、ティータちゃん。導力波は遮蔽物しゃへいぶつがあると弱まるって聞いたことがあるんですけど……。洞窟みたいな場所でもちゃんと届くのですか？」

クローゼが疑問を口にした。

「えっと、このアンテナは導力波に指向性を持たせて届けることができるんです。洞窟みたいな場所でも壁を反射させていくことで出口まで到達できるそーです」

「なるほど……。やっぱりラッセル博士は天才の名にふさわしいですね」

「うーん、いまいち凄さが理解できないんだけど……。一応これで地震の情報を送れるようになったわけね？」

「あ、ううん。まだ起動してないから。今、スイッチを入れちゃうね……」

ティータがスイッチを入れようとした時、

「らあっ！」

アガットが魔獣 ヒツジンの気配に気付いて向かってきた魔獣を斬り伏せた。

「ふえっ！？」

「なっ！？」

「皆さん、気をつけてください。一匹だけではなさそうです！」

エステルたちが驚いているうちに、ヒツジンたちに囲まれてしまった。

「囲まれてしまいましたね……」

「どうやら装置の中の結晶回路が目当てらしいな。蹴散らすぞ!」

「はあ……何とか追い払ったか。うーん、見たこともない色のヒツジンだったけど……」

通常、ヒツジンは白色だが、今回のヒツジンは紫色と変わっていた。

「多分、エルナンが言ってた新種の魔獣だろうな」

「こ、恐かった……」

「ティータちゃん、怪我はないですか？スリ傷とかあったら手当するから遠慮なく言ってくださいね」

「えへへ、大丈夫ですよー。みんなが守ってくれましたから。それよりも……早くスイッチを入れなくちゃ」

ティータは測定器のスイッチを入れた。

「ふう、起動完了です」

「お疲れ、ティータ。でも、さっきみたいな魔獣に装置が襲われたらどうしよう?」

「あ、それは心配しないで。一応、街路灯みたいに魔獣除けの機能はあるから」

「そっか、だったら安心ね」

「よし、この調子で残りの測定器も設置しまつぞ」

「了解!」

第8章 荒ぶる大地（10）

レイストーン要塞

「レイストーン要塞……。何だかすごく懐かしいわね」

エステルはレイストーン要塞を前にして言った。

「えへへ……。わたしもそんな気がする。お姉ちゃんたちと別れた時は夜だったから印象が違うけど……」

「ま、前回は潜入なんていう口クでもない用事だったからな。その分、懐かしさが増すんだろ」

「そんな事があったんですか……。この難攻不落の要塞によく潜入することが出来ましたね」

「見たところ、侵入できそうな場所が見当たりませんね。よく潜入できたものですね」

「えへへ……。ちょっと裏技を使ってね。それよりも、さっそく測定器を設置しちゃおうか？」

「いや、まずは門番に設置許可を取った方がいいな。キリカが連絡したはずだから多分、すぐに話は通るだろ」

「うん、オツケー！」

エステルたちは許可をもらうために門番に話しかけた。

「ここは王国軍の本拠地、レイストーン水上要塞だ。民間人の立ち入りは遠慮してもらっている。お引き取り願おうか」

「えっと、あたしたち遊撃士協会の人間なだけだ」

「おお、あんたたちがそうか。司令部から話は聞いている。何かの装置を設置するらしいな？」

「話が早くて助かるぜ。早速、設置したいんだが勝手にやっちゃまってもいいのか？」

「ああ、許可が出ているから好きなように設置するといい。ただ、舗装路の上には設置しないようにしてくれ。車両が通る時に困るからな」

「うん、わかったわ。それじゃあ、適当な場所を探しましょ」

「うん、そうだね」

「さてと、ティータ。どのあたりに設置しちゃう？」

「うん、ちよつと待ってて。うーん、舗装路以外で置ける場所っていったら……」

ティータが適当な設置場所を探し始めた。

「……近くに照明があるけどこれだけ離れていれば大丈夫かなあ。

ツアイスはあつちだから……。うん、方角も問題ナシ。看板の目の前になつちやうけどこのあたりがいいと思うよ。さっそく測定器を設置しちゃう？」

「うん、お願い」

「それじゃあ、設置作業を始めるね。ちよつとだけ待っててティータが測定器を設置し始めた。

「うん、設置完了だよ」

「それじゃあ、後はスイッチを入れるだけね」

「うん、すぐに入れちゃうね」

ティータは測定器のスイッチを入れた。

「うん これで起動も終わりだよ」

「おう、ご苦労」

「おお、やっているようだな」

「へ……」

不意に男性の声が聞こえてきた。しかも聞き覚えのある声だった。

「父さん!？」

「オッサン……！」

エステル之父、カシウスだった。

「久しぶりだな、エステル。遅くなってしまったが強化訓練、ご苦労だったな」

「も〜！ご苦労だったじゃないってば！なによ父さん。どうしてこんな所にいるの？」

「はは、これでも軍の一員だ。作戦本部の拠点もあるし、ここに詰めていることは多いぞ」

「そうだったんだ……」

「確か、作戦本部長に就任したそうじゃねえか」

「ああ、モルガン將軍に何度も何度も説得されてな……。最後は根負けという感じさ。おかげで休むヒマもない毎日だ」

「へッ、そりゃあ日頃の行いのせいだろ」

「あはは、ご愁傷さま。でも、父さんの軍服姿って最初は違和感あったけど……。あらためて見るとけっこう板についてるじゃない」

「フフン、あたり前だ。これでも昔は、王国軍きつての伊達男で鳴らしたくらいだったからな。リシャルルなど目じゃなかったぞ」

「もう、すぐに調子に乗る。エへへ……でも良かった。忙しいって聞いたからちよっと心配だったんだけど思ったより元気そうじゃない？」

「ま、今のところはな。それよりも……ギルドからの報告書を読んだぞ。早速、ルーアンで現れたそうだな」

カシウスが何を言っているのかはすぐに判った。

「あ……うん。《身喰らう蛇》の手先ね」

「報告書の通り、予想以上にヤバイ連中だぜ。軍では対策を立てないのか？」

「うむ、早く情報部に代わる機関を立ち上げられればいいのだが……。ようやく正規軍と国境師団の再編成が終わったばかりでな。今のところ、調査に関してはギルドに頼らざるを得ない状況だ。今回の奇妙な地震についてもお前たちの調査をアテにしているぞ」

「まったく……。そんな事だろうと思っただけ」

「ま、父さんに頼られるなんて滅多にあることじゃないしね。ここは親孝行をしてあげますか」

「フツ、言うようになったな。新しい服も似合っているし、少しは女っぷりも上がったようだ。ヨシユアが見たら驚くだろう」

「あ……。えへへ、そうだといいんだけど」

「カシウス准将！」

「あ……。シード少佐！？」

やってきたのはシード少佐だった。

「こらまた久しぶりだな」

「はは、久しぶりだね。ラッセル博士の誘拐事件では君たちに色々迷惑をかけた。いずれきちんとした形でお詫びしたいと思っただんだ」

「あはは、いいってば。代わりに逃がしてくれたんだし」

「あのあの、助けてくれて本当にありがとうございます」

「そうか……。そう言ってもらえると助かるよ」

「ちなみにシードはクーデター鎮圧時での活躍でこの度、中佐に昇格したんだ。これからはシード中佐と呼ぶといい」

「じゅ、准将……」

「へへ、そうなんだ。おめでと、シード中佐！」

「おめでとーございます」

「はは、よかったじゃねえか。あんたみたいな人間は評価されてしかるべきだぜ」

「その……。ありがとう。当り前の事をしたただけだから少しばかり目映ほゆいんだがね」

「またまた……。ホント、謙虚なんだから」

「うむ、シードにはもう少し前に出ることを期待したいな。でないとな、俺がいつまで経っても引退できなくて困る」

「お言葉ですが、あなたに簡単に引退されては困ります。少なくとも、モルガン將軍が退役なさった後にしてください」

「ふう、いつの日になることやら。そういえば、シード。俺に用事があるんじゃないのか？」

「はい、実はモルガン将軍が予定よりも早く到着なさるそうです。あと半刻ほどで発着場に到着するのではないかと」

「やれやれ……。あの方もせっかちな。……そういうわけでこれからさっそく軍議がある。本当に済まん、エステル」

「ううん、気にしないで。少しでも話せて嬉しかったわ」

「ああ、俺もさ。アガツト。すまんがエステルを頼んだぞ。正遊撃士になったとはいえ、経験不足なのは確かだからな」

「ああ、任せとけ」

「ティータもずいぶん頑張っているようじゃないか。不肖の姉貴分ですまないがよろしく手伝ってやってくれ」

「えへへ、わかりました。それと《ゴスペル》の解析のことなんですけど……思わぬヒントが見つかったっておじいちゃんがはしゃいでいました」

「そうか……。それは期待できそうだな。博士によろしく伝えてくれ」

「はいっ」

「姫殿下も、不肖の娘を手伝っていただき感謝します。ただいづれ、ご自身の考えを周囲に説明した方がいいでしょう。陛下はともかく、ユリア大尉やモルガン将軍など気が気ではない様子でしたぞ」

「……はい。いずれきちんと説明して判っていたかどうかと申すていいます。私が私を見出すために必要な旅であるということ……」

「フフ、殿下ならば必ずや見出せるでしょう」

「ありがとうございます……。そう言って下さると心強いです」

「それと……」

「初めまして、カシウス・ブライトさんですね。あなたのご武勇はかねてより存じていますのでお会いできて光栄です。私はレインと申しまして、この度はエステルさんたちの協力員として共にさせて頂いています。本当はあなたと話したいことが多くあるのですが……」

「…」

「………………。そうか…………。こちらとしても話したいことはあるのだが……。また次の機会ですな。エステルのこと頼みましたよ」

「はい、任せてください」

「…………さてと、それではな。なかなか直接、手助けはできんがギルドの手に負えないことがあればいつでも連絡してくるといい。できる限りの力になれるはずだ」

「うん、アテにさせてもらうわね。父さんもお仕事、頑張ってね！」

「はは、モルガン将軍にどやされん程度にはやるさ。行くぞ、シード」

「ド」

「はっ！」

カシウスとシード中佐がレイストン要塞に戻っていった。

「は、思った以上に父さんたちも忙しそうね。こりゃあ、ギルドとしても負けてはいられないわね」

「ああ、そうだな。きっちり結果を出してオッサンの鼻を明かしてやるか。よし、これで2個目だな。ラスト1つ、設置しに行くぞ」

「オツケー！」

最後の1つの測定器を設置するため、カルデア隧道に向かった。

第8章 荒ぶる大地（11）

カルデア隧道

「えっと……カルデア隧道途中にある最初の橋ってここでいいのよね？」

「うん、どちらかの岸に設置しちゃえばいいと思う。えと……」

ティータは辺りを見回した。

「こっちは回復装置があるからやめておいた方がいいかな。とする
と……」

ティータが反対側の岸に移動した。

「えっと、アンテナをツァイス方面に向けるとしたら……。うん……大丈夫かな。お姉ちゃん。このあたりがいいと思うよ。さっそく測定器を設置しちゃおう？」

「うん、お願いするわ」

「それじゃあ設置作業を始めちゃうね。ちょっとだけ待ってて
ティータが測定器を設置し始めた。

「うん、これでよしと」

「それじゃあ後はスイッチを入れるだけね」

「うん、ちよつと待ってて……」

ティータが起動スイッチを入れた。

「ふう、起動完了だよ」

「おう、ご苦労」

「あーっ！エステルちゃん！？」

「え……！？」

聞き覚えのある声が聞こえてきたと思うと、アネラスとシエラザードがやってきた。

「アネラスさん！それにシエラ姉も！」

「えへへ、久しぶりだね。こんな場所で再会できるなんて思ってもみなかったよ」

「ふふ、何の偶然かしらね。あら……そこにいるのはお姫様？」

「お久しぶりです。シエラザードさん。エステルさんのお手伝いをさせてもらうことになりました」

「そっか、ありがとう。エステルの力になってくれて」

「ふふ、とんでもないです」

「それと、その男の方は……」

「あ、レインさんっていつて、ギルドの協力員として手伝ってもらっているの」

「初めまして。レインと申します」

「（あら、けっこうイイ男じゃない。どこで知り合ったの？）」

「（またそこでつつかかってくる……。うーん、最初に会ったのは王都だけど……）」

「？」

「ああ、ごめん。これからもエステルのこと頼んだわ」

「ええ、もちろんです」

「あのあの……。お久しぶりです、シエラさん」

「ハッ……」

アネラスが息を上げた。

「あらら。ティータちゃんも一緒だったのね。そういえば、キリカさんが地震の調査でラッセル博士の協力を仰いだって言ってたわね。それで手伝ってくれてるの？」

「えへへ、そうなんです」

「……………」

「アネラスさん？どうしたの？ボーツとしちゃって」

「……………だめ……もうガマンできない！」

「へ？」

アネラスはいきなりティータに抱きついた。

「ああん、カワイイ〜！あまりにも可愛すぎて抱き締めずにはいられないよ〜！」

「はわわっ!?!？」

「（そ、そういえば……。たしかアネラスさんって無類の可愛いもの好きだったっけ）」

「ティータちゃって言ったっけ？わたし、アネラス・エルフィード！アネラスお姉ちゃんって呼んでね！」

「ふ、ふええええ〜……」

ティータはいきなり抱かれて困惑している

「ああああっ！ふにやっとした顔も可愛すぎる〜！シエラ先輩！お持ち帰りしてほしいですか!?!？」

「気持ち分かるけど我慢なさい。そこにいるお兄さんが恐いわよ」
そう言っつてシエラザードがアガツトを見た。

「……なんで俺に振りやがる」

「ところでシエラ姉。どうしてこんな場所にいるの？ひょっとしてあたしたちを捜してたとか？」

「いや、ただの偶然なのよ。ちょうど空賊団と特務兵の手がかりを追っている最中でね」

「え!?!空賊と特務兵って……。逃亡している残党のこと?？」

「確か、まだ王国軍も捕まえていなかったはずだな。何か手がかりを見つけたのかよ?？」

「それがギルドに何件か目撃情報が入ってきてるんですよ。どれも信憑性は低そうなんですけど」

「一応、その中から気になる情報だけでも確かめようと各地を回っている最中ってわけ。それよりも……聞いたわよ。《身喰らう蛇》の手先がルーアン地方に現れたそうね」

「う、うん……。《怪盗紳士》とか名乗っている仮面をかぶった変なヤツだったわ」

「キテレツな格好はともかく、相当腕の立ちそうなヤツだった。まともにやり合ったらかなりヤバかったかもしれないねえ」

「むむ、アガット先輩にそこまで言わせるなんて……。《身喰らう蛇》 かなり危険な組織みたいですね」

「危険というよりも得体が知れないと言った方が正しいかもしれないわね……。もし、あたしたちの力が必要なら遠慮なく言ってちょうだい。ギルドを通せばすぐに連絡がつくと思うから」

「うん、そうさせてもらおうわね。シエラ姉たちこそ、何かあったらあたしたちにも連絡してよね。すぐに飛んでいくから」

「ふふ、アテにさせてもらうわよ。せつかく再会できたけどこんな場所で話すのも何だし……。あたしたちはここで失礼させてもらうわ」

「あ、うん……。残念だけどしょうがないよね」

「軽く見るわけじゃねえが、それでも女だけの2人旅だ。あまり無茶はするんじゃねえぞ」

「わわ、アガット先輩が気遣ってくれるなんて……。どっという風の吹き回しですか？」

「……ケンカ売ってんのか、コラ」

「えへへ……。冗談ですってば」

「ふふ、そうね。忠告は受け取っておくわ」

「アガット先輩、お元気で！ エステルちゃん、ティータちゃん。今度会ったら一緒に遊びに行こうね！」

「うん、喜んで！」

「えとえと、さよーなら！」

シエラザードとアネラスは行ってしまった。

「は、こんな所でシエラ姉たちには会えるとは思ってもみなかったな。ティータ、大丈夫だった？ アネラスさんに思いつきり抱き締められてたけど……」

「えへへ、大丈夫だよ。……ちょっとだけビツクリしちゃったけど……」

「あ、悪い人じゃないからカンベンしてあげてね。それにしても空賊と特務兵の残党か……」

「どちらも《結社》らしき影が背後に見え隠れしていた連中だ。あいつらの頑張り次第では重要な手がかりに繋がるかもな」

「これは、あたしたちも負けてはられないよね。とりあえず……この場所はもうOKよね？」

「ああ、これで全ての測定器を設置し終わったな。爺さんの待つている中央工房の演算室に向かうぞ」

「オツケー。中央工房の5階だったわね」

エステルたちは中央工房5階の演算室に向かった。

第8章 荒ぶる大地（12）

中央工房5階 演算室

「ラッセル博士。1番の接続、成功しました」

トランス主任が接続の成功をラッセル博士に伝えた。

「そのようじゃな。さっそく情報が入ってきた。うむうむ……今のところ安定しておるようじゃ。そのまま2番、3番の接続を開始」

「了解しました」

ラッセル博士は測定器とカペルの接続を試行していた。

「やってるやってる」

「まったく……。相変わらずケツタイな部屋だぜ」

「おお……。エステル君、来たか」

「あ、マードック工房長」

「お久しぶり。生誕祭の時以来だったっけ」

「ああ、そうなるかな。色々あったそうだが……元気そうで何よりだよ」

「あはは……。ありがと、工房長さん。あたしたち、博士に頼まれて測定器を置いてきたんだけど……」

「ああ、そうらしいね。ちょうど、各地の測定器から情報が届き始めているらしいよ」

「それじゃあ《カペル》の調整の方も終わったんですね？」

「ああ、博士が専用のプログラムを走らせたばかりさ」

「2番、3番の接続にも成功です」

「おお、こちらも確認した。よしよし……どちらも安定しておる。これで1番から3番まで全ての情報が入ったな」

そこでようやくラッセル博士がエステルたちに目を向けた。

「おお、やっと戻ってきたか。見ての通り、お前さんたちのおかげで無事に情報が届いたわい。本当にご苦労じゃったのう」

「あはは、あたしたちは測定器の部品を運んだくらいよ」

「それに、この一件はこちらが頼んでいる事だからな。装置の起動まで全部やったあんたの孫をねぎらってやんな」

「い、いいんですよ。大したことはしてないし……」

「いやいや。お前もよく頑張ったのう。トランスミッターの設定も完璧じゃ。ちゃんと情報が入ってきておるぞ」

「えへへ、よかった。それじゃあ、準備はぜんぶ終わっちゃったの？わたし、手伝うことないかな？」

「いや、これで準備は完了じゃ。七耀脈の流れに乱れが起きたら《カペル》が自動的に解析を始めるようにプログラムしておる。あとは、どこかの場所で地震が起きるのを待つだけじゃよ」

「そっか……。一応、一段落ついたわけね。でも、どこかで地震が起きるのをただ待つのも落ち着かないかも」

「確かにそうですね。もしかしたら、ツァイスで再び地震が起きるかもしれませんし」

「そうなった場合の対策は何か立てているのですか？中央工房は機械設備が多くありますし」

「一応、転倒しそうな装置は固定するようにしておいたよ。ただ、それでも前回以上に大きな地震が起これたら厳しいな。設備のダメージは避けられないだろう」

「その意味では、ここにある《カペル》なんかも同じじゃ。揺れで誤作動を起こしたら実験が失敗に終わる可能性が高い。みんな、女神に祈っておいてくれ」

「はあ……。ちょっと不安になってきたわ」

「ふふ、最新技術でも神頼みは大切なんですね」

「えへへ、技術者のヒトって意外と信心深いですよ。わたしも難しい作業の時にはよく女神さまにお祈りするし……」

「確かにそれはあるかもしれんね。私なんて、初の導力飛行船を博士が開発していた時なんか1日に3回は教会に行ってたよ」

「なんじゃ、失礼な奴じゃのー」

「39回も実験が失敗したらそうしたくなるのも当然です」

「あはは……。昔からそんな感じなんだ」

「うん……そーみたい」

「しかし、そういう事ならどこかで時間を潰すとするか。一旦、ギルドに戻って報告しとくのもいいだろう」

「おお、そうするがいい。何か動きがあったらすぐにでもギルドに連絡……」

その時、ラッセル博士のプログラムが情報を急速に処理し始めた。

「え……」

「ひよ、ひよっとして……」

「どこかで地震が起こったのですか!？」

「……ギルドに戻る必要はなくなったようじゃのう」

「1番から3番までの全ての測定器に変化あり!地下の七耀脈の動きが活発になっているようです!」

「うむ、そのままモニターを続けるがいい。通信が遮断した時には報告」

「了解しました!」

「3地点からの情報をリアルタイムに解析開始……。現時点での最

大の地震波収束地点を検索……。座標【12、73、378・02】

。ほほう……そうきたか」

ラッセル博士がカペルを操作した。

「ど、どうしたの?」

「今現在、地震が発生している場所が分かった。レイストン要塞じや」

「!?!?!」

「なんだと!？」

同時刻 レイストン要塞 中庭

「な、なんだ!？」

「敵の爆撃!?」

演習中の兵士たちが地震で慌てふためいている。

「お、落ち着け!ただの地震だ!列を乱さずに待機!」

レイストン要塞 司令部室

「准将、これは……!」

「ふむ、読みが当たったか。念のため、発着場の作業を止めておいたのは正解だったな」

「むむ、まさかお前の言った通りに揺れるとは……。カシウス……どんな魔法を使ったのだ?」

「なに……。相手の立場で考えただけです。3回の『予行演習』の後……次の標的はどこが効果的かとね」

中央工房 演算室

「工房長!レイストン要塞から連絡です!つい今しがた、中規模の地震が発生したそうです!」

受付嬢のヘイゼルが演算室に駆け込んできた。

「やはりか……」

「ひ、被害はどうなったの!?!」

「幸い、ケガ人は殆ど出なかつたそうです。どうやら、前もって地震に備えていたようですね」

「よ、よかつたあ……」

「さすがはカシウス。危機管理は万全じゃったか。さてと……。こちらの解析も終了したか」

ラッセル博士はディスプレイに映った解析結果を確認していった。

「ふむ……なにになに……。ほうほう……。これは興味深いのう……」

「な、なにか判った?」

「まあ、そう焦るでない。これによると、地震の直前に七耀脈の流れに異常が生じておる。そして、歪められた流れが要塞の地下に集束することで局地的な地震が発生したらしい。かなり浅い地下で発生したから他には影響しなかったようじゃな」

「それが地震の正体か……」

「そ、それってつまり……何者かが七耀脈を操って地震を起こしているってこと!？」

「『地震兵器』……そう呼べるかもしれませぬ」

「うむ、まさしくそんな所じゃろう」

「で、でも、おじいちゃん。七耀脈の流れを操ることなんてそんなことホントにできるの?」

「ううむ、最新の土木技術でもそんなことは不可能のはず……」

「それに関してはわしも同感じゃ。じゃが、認めたくはないが……それを可能にした者がいるらしい」

「上等じゃないの……!」

「ラッセル博士、1つ気になったことがあるのですが……。『カペル』で地震をどこで発生させているか判りませんか?」

「あ……!」

「それだ!」

「なるほど……。そいつは盲点じゃったな」

ラッセル博士がカペルを操作し始めた。

「3箇所における七耀脈の流れの歪みを解析……。逆算することで歪みの発生源を割り出すと……。出た……。座標【165、88、

288・35】……」

「え……」

ティータが声を上げた。

「ティータ、わかるの?」

「う、うん……」

ティータが地図を取り出した。

「座標はツァイス中心のセルジュ単位だから……。ツァイス市から

東に12セルジユ、北に378セルジユの地点がレイストン要塞とすれば……東に165セルジユ、南に228セルジユの地点は……」

「まさか、エルモ温泉!？」

「う、うん。たぶんこのあたりになるはずなんだけど……」

エルモ村の温泉地の奥が座標の示す場所だった。

「あ……」

「完全に盲点だったな……」

「エルモ村……。どうやら、あの温泉地の奥が本当の『震源地』みたいですね」

「なるほど。人目が付かない場所で地震を発生させていたのですね」

「断言はできないがその可能性は高そうじゃ。どうする、お前さんたち?」

「決まってるわ!すぐに調べに行かなくちゃ」

「ああ……。急ぐ必要がありそうだ」

「そうか……。ならばこのままティータを連れて行くといい。この子の知識と技術はきつと調査に役立つはずじゃ」

「あ……。うん、きつと役に立つから!」

「うーん……。危険かもしれないけど……。でも、あたしたちが守つてあげれば大丈夫かな」

「つつたく……。仕方ねえな。おいチビスケ。絶対に無理すんじゃねえぞ」

「はいっ!」

「それでは私の方からエルモ村に連絡をしておこう。マオさんに協力を頼めば君たちの調査もはかどるだろう」

「うん、そうしてくれると助かるわ」

「ヘイゼル君。通信の用意をしてくれたまえ」

「かしこまりました」

「わしはここで《カペル》による解析を続ける。何か判つたら宿に連絡を入れよう」

「うん、お願い。あたしたちも、何か判つたら中央工房に連絡させ

てもらおうわ」

「うむ、頼んだぞ」

「よし……。それじゃあエルモ村に行くぞ！」

エステルたちはエルモ村に向かった。

第8章 荒ぶる大地（13）

エルモ村

「おお、よく来てくれたね」

「マオおばあちゃん！」

マオ婆さんがエステルたちを迎え出てくれた。

「やあ、ティータ、エステル。さつき、工房長さんから宿に通信で連絡があつたよ。何でもツアイスのあちこちで妙な地震が起こってるらしいね？」

「そつか……。うん、それなら話は早いわ」

「実はついさつき、こっちでも奇妙なことが起こっちゃってね。それこそ遊撃士協会あたりに連絡させてもらおうと思ったのさ」

「ふえっ……。！？」

「もしかして、地震！？」

「あいにく地震じゃないんだが……。百聞は一見に如かずだ。さ、その目で確かめておくれ」

マオ婆さんが温泉の貯水池に案内した。

「こ、これって……。！」

「煮えたぎっちゃってる……」

そこでは温泉をくみ上げる貯水池が沸騰していた。

「一体全体、どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも……。工房長さんの連絡があつた矢先にいきなり表が騒がしくなつてさ。何だと思って見に来たらすでにこの有様だつたんだよ」

「ひよ、ひよっとしてポンプ装置が壊れちゃつたの？どこかが発熱しているとか……」

「いや、さつき見てきたがいつも通りちゃんと動いていたよ。おそらく、源泉の温度が突然、高くなつちまつたに違いない」

「それって珍しいことなの？」

「ここに移り住んで50年、こんな奇妙なことは初めてさ。何かこう、イヤな予感がするよ」

「突然、源泉の温度が上がったとなると今回の地震が関係しているのは間違いないかもしれませぬ。七耀脈の活性化　これにより源泉の温度を上昇させた可能性があります」

レインが推測しながら言った。

「そ、その可能性はすっごく高いと思います。このまま温度が上昇したら大変なことになっちゃうかも……」

「た、大変じゃない……。すぐに原因を突き止めなくちゃ！」

ティータの言葉を聞いてエステルが焦った。

「おい、婆さん。源泉ってのはどこにあるんだ。この目で確認できるモンなのか？」

「そう来ると思ってこれを用意して待ってたのさ。さ、受け取ってくれ」

マオ婆さんがエステルに木戸の鍵を渡した。

「これって……」

「ポンプ小屋の左手にある裏手の木戸を開くための鍵さ。その奥に、エルモ温泉の源泉が湧き出た洞窟があるんだ」

「ホント!？」

「そんな洞窟があつたんだ……」

「へへ、用意が良くて助かるぜ」

「なんの。お願いするのはこっちの方さ。こんなに沸騰してたらすぐには客を入れられないし、かけ流しだってできないからね。地震の調査と合わせてそっちも頼んだよ」

「うん、任せて！」

マオ婆さんが宿に戻っていった。

「地震の震源地と思しき源泉が湧いた洞窟ですか……。万全の準備をしてから入った方が良さそうですね」

クローゼが神妙に言った。

「ああ……。十中八九、敵がいるはずだ。気合いを入れていくぞ」

温泉の源流

「うわ……。かなり沸騰しちゃってるわねえ」

「はわわ、落ちたりしたらゼツタイに火傷しちゃいそう……」

「沸騰した湯もそうですが……。高熱の蒸気も危険そうですね。下手をすれば火傷程度では済まないかもしれません」

「高熱の間欠泉ですか……。しかし、常時吹き出しているわけではなく、一定間隔で吹き出しているようですね」

「ああ……。その通りだ。タイミングを見て通り抜けるしかねえだろう」

「ん、オツケー！」

温泉の源流 最奥

「な、なにこれ……。地面いっぱい広がって……」

「エネルギーの脈……。これって、ひよっとして……」

そこには青白い筋状の線が地面いっぱい広がっていた。

「……クク……。ずいぶん遅かったじゃねえか」

「あ……！」

エステルたちが声の先を見ると、全身黒ずくめの男が立っていた。

「サ、サングラスの男……！」

「あれは……。《ゴスペル》月の杭か……？」

「よう、小娘ども。わざわざご苦労だったな。せいぜい歓迎させてもらっぜ」

「あんた……。《身喰らう蛇》の人間ね！」

「クク……。執行者N.O.？。《痩せ狼》ヴァルター。そんな風に呼ばれているぜ」

「やはりか……。ツアイスでの一連の地震も全部てめえの仕業つてわけだな」

「クク、あたり前のことをわざわざ確認してんじゃねえよ。こいつは《結社》で開発された七耀脈に干渉するための『杭』でな。本来、真下にある七耀脈を活性化させるだけの装置なんだが……。《ゴスペル》を付けることで広範囲の七耀脈の流れを歪ませて局地的な地震を起こすことができた。ま、そんな実験をしていたってわけだ」

「過去形ということはもう実験は終わったんですか？」

「まーな。本当は建物が崩れるくらいド派手なのをぶちかましたかったんだが……。そこまでの力は出せなかったな」

「そ、そんな……。建物が崩れちゃったりしたら住んでる人が危ないですっ！」

「クク、だからいいんだよ。瓦礫に手足を潰されてブタのように泣き叫ぶヤツもいるだろうし……。脳味噌とハラワタぶちまけてくたばるヤツもいるだろう。よかったら嬢ちゃんもそんな目に遭ってみるかいい？」

「ひっ……………」

「こ、こいつ……………」

「クク、そう恐い顔するなって。俺はな、潤いのある人生には適度な刺激スパイスが必要だと思ふのさ。いわゆる、手に汗握るスリルとサスペンスってやつだ。いつ自分が死ぬとも分からない……。そんなギリギリの所に自分を置く。どうだ……。ゾクゾクしてこねえか」

「自分個人がスリルを感じるのは構いませんが、他人を巻き込むようなものは御免ですね」

「ケッ……………マゾ野郎が。だが、これでようやく判ったぜ。てめえ俺たちを誘き寄せやがったな？」

「え……………!？」

「思わせぶりな各地の目撃情報……。要塞で地震があった直後に工ルモの源泉が沸騰し始めたこと……。全て露骨な誘導情報だったんですね」

クローゼが説明した。

「そんな……」

「ま、半分正解ってとこだな。それじゃあ早速、味見をさせてもらうぜ……。てめえらという刺激スパイスをな？」

ヴァルターが指を鳴らすと、地面から巨大なミミズが何匹も出てきた。

「やああん!？」

「な、なにコイツら!？」

「このあたりに棲息しているミミズさ。七耀脈が活性化したことでここまで馬鹿でかくなりやがった。ま、せいぜい遊んでやってくれや」

「ふ、ふざけんじゃないわよ!この卑怯者!正々堂々と勝負しなさいよね!」

「ほっとけ!今はこいつらの相手が先だ!」

「……来ます!」

「何とか追い払った……」

「こ、恐かったあ……」

「ふう……。手強い相手でしたな」

「んー、こいつはちよいと見込み違いだったか……?もうちよいマシかと思っただが」

「ケツ、見くびるんじゃないやねえぜ。あの程度の魔獣なら今まで何度も倒してるっての」

「……。ダメだ、萎なえたわ。まさかここまで甘ちゃんだったとはな」

「なに……!？」

「ボケが……見込み違いはてめえらだ!」

「えっ……!？」

その瞬間、ヴァルターがエステルたちの目の前に一瞬で移動し、攻撃した。

「くっっ！」

「きゃあっ！」

「あっっ！」

「くっ！」

エステルたちは一撃で倒された。

「……クソが。ったく、レーヴェのやつ適当なことを抜かしやがって……。なぐにが《剣聖》以外にも手応えのありそうな獲物がいるだ。ただの青臭えガキどもじゃねえか」

「クソ……馬鹿な……」

「（……レーヴェ……まさか……？）」

「フン、こうなったら仕方ねえ。教授と直談判して漆黒のコゾーを狩るとするか。そうすりゃ、少しはゾクゾクさせてくれるだろ」

「……ま……待ちなさいよっ！」

「あん？」

「このグラサン男……いい加減にしなさいよ……。漆黒のコゾーっていうのがもしヨシユアのことだったら……。狩らせるなんて……絶対にさせないんだから……」

「エステルお姉ちゃん……」

「俺の一撃を食らって立てたのは誉めてもいいが……。やめとけや。完全にヒザが震えてるぞ」

「だからどうしたってのよ……。あたしは絶対に……ヨシユアを見つけるんだから……。あんたたちなんか邪魔なんてさせないんだからっ！」

「エステルさん……」

「よく言えました……」

「……言っておくが、俺は女子供の区別はしねえ」

「武術家なら、敵に得物を向ける時の覚悟はできてるな？」

「当然……！やれるもんならやってみなさいよ！」

「クク、上等だ……。その度胸に免じて一撃で終わらせてやるよ」

エステルは怯まなかった。

「やだやだ！エステルお姉ちゃん！」

「エステル、逃げるツ！！」

「死ね」

ヴァルターがエステルに攻撃しようとした時、

「ぬッ！？」

エステルたちの後ろからヴァルターに向かって何かが飛んで来た。

「え……？」

「はああああっ！」

東方風の巨漢　ジンだった。

「……………」

「フッ……。間に合ったようだね」

ついでに、オリビエも。

「オリビエ！それに……。ジンさん！？」

「よう、エステル。ずいぶん久しぶりだな。もっと早く来るつもりだったが向こうの仕事が長引いて……。だが、何とか間に合ったようだ」

「まったく……狙ったようなタイミングで現れやがって」

「ククク……。レーヴェの報告にあったカルバードのA級遊撃士……。ジン、てめえのことだったか」

「まあ、そういうことだ。まさか、こんな場所であんたと再会するとはな……。いつから《結社》なんぞに足を突っ込んでいやがるんだ？」

「クク、あの後すぐにスカウトされちゃってな。なかなか刺激的な毎日を送らせてもらってるぜ」

「馬鹿なことを……。あんた、自分がいったい何をしているのか判っているのか！？そんなんじゃ師父せんせいはいつまで経っても浮かばれ……」

「……」

「おいおい、綺麗事を抜かすなよ。てめえは知ってるはずだ。俺がどんな道を選んだのかをな。ふざけた事を抜かすと……殺すぞ？」

「……………。だったら……あんたは知っているのか？ツアイスの街にキリカがいるのを」

「なに…………？」

その言葉を聞いた途端、ヴァルターの目つきが変わった。

「2年くらい前からギルドの受付をしているそうだ。どうやらそれまでは大陸各地をまわっていたらしいな」

「……………チツ……………。まさかりベルくんだりに流れていたとはな……………。あの馬鹿、何を考えてやがる」

「さあな、俺にも分からんよ。だが、あいつは間違いなくあんたと会いたがっているはずだ。《結社》のことはともかく一度くらい顔を見せてやったら……………」

言いかけた途端、ヴァルターがジンに鋭い蹴りを入れた。

「グツ……………」

「ふざけた事を抜かすと殺すと言っただろうが……………。まあいい……………。キリカのこととはともかくてめえと会えたのは幸運だった。今回の計画……………とことん楽しめそうだぜ」

ヴァルターは杭から《ゴスペル》を抜き取った。

「おい、ヴァルター！」

「クク、次会う時までせいぜい功夫クシフを練っておけ。じゃあな」

「ヴァルター！！」

ジンは追いかけてよとしたが足を止めた。

「……………」

「えっと……………。助けてくれてありがとう。でも、どうしてジンさんたちがおここに？」

「ツアイス支部に顔を出したらいきなりキリカに急かされたんだ。

お前さんたちを助太刀しにエルモに向かえってな」

「フツ、それでボクも付き合うことにしたのだよ」

「そうだったんだ……………。ありがとう。本当に助かったわ」

「本当にあの時は私も焦りましたよ」

「それはともかく……。あんだ、あの野郎とどういう知り合いなんだ？」

「……ま、昔馴染みさ。詳しい話はここを出て宿の風呂に入ってからにしよう。龍脈の乱れは収まったからじきに温泉も元に戻るだろうぜ」

エルモに戻ったエステルたちは紅葉亭の風呂で身体を温めてからツアイス支部に戻ることにした。

第8章 荒ぶる大地（14）

遊撃士協会ツァイス支部

「そう……。やはりサングラスの男はヴァルターだったのね」

キリカはヴァルターのことを聞いても取り立てて驚かなかった。

「ああ　　っておい？やはりっことは予想していたってことか？」

「服装と風体を聞いてひょっとしたらとは思っていたわ。それよりも迂闊だったわね。どうして彼にそのまま《ゴスペル》を持ち帰らせたの？」

「仕方ねえだろ……。そこまで大層なモンとは思わなかったんだ。

第一、そのあたりの事情をロクに説明もしないでエルモに急がせたのはお前だろうが」

「ええ、私の判断ミスね。そのくらい説明しなくても察してくれると思っただけだ」

「グツ……。可愛くねえやつだな」

「ともかく、これで地震の調査は終了ね。調査に対する報酬を渡しておくわ」

エステルは査定と報酬を受け取った。

「ありがと、キリカさん。でも結局、あのグラサン男、2人のどういいう知り合いなの？」

「そうだな。何て説明すりゃあいいか……」

「端的に言っと、かつての同門の弟子同士ね。私とジンとヴァルター……。彼が一番年上でいわゆる兄弟子だったわ」

「同門の兄弟子……。武術の先輩ってことか」

「まあ、正確に言えばキリカは弟子じゃないんだがな。リュウガ師父の……」

ジンが言いかけた時、キリカが割り込んだ。

「私のことはどうでもいいわ。とにかく、その男は《泰斗流》の門

下だった。そして6年前、道場を出奔して《身喰らう蛇》にスカウトされた。簡潔にまとめるところなるわね」

「キリカ……」

「それだけ聞けば十分だ。しかし、アンタらと同じ《泰斗流》の使い手か……。化物じみた強さも肯けるぜ」

「道場にいた時よりもさらに凄みを増していやがった。達人クラスと言ってもいいだろう」

「危険な男であるのは確かね。ただこれ以上、例の局地地震が起きる可能性は少ないでしょう。警戒は緩めてもいいかもしれない」

「ああ、そのようだね。市民と職員に伝えておこう」
マードック工房長は胸をなでおろした。

「しかし、またしても《ゴスペル》が使われておったか。しかも七耀脈を活性化させる装置と合わせて使っていたとは……」

「学園地下の投影装置にも使われていたことを考えると……。導力器の機能を飛躍的に高めるブラックボックスと言えそうですね」

「うむ……。まさにその通りですわい。空間投影装置にしても七耀脈の活性化装置にしても決して実現不可能な技術ではない。じゃが、《ゴスペル》による現象は現在の導力技術の常識を超えておる。わしはもちろん、他の名だたる技術工房でも造れるとは思えんです」

「そうですね……。共和国のヴェルヌ社や帝国のラインフォルト社……。さらに戦術オーブメントを開発したエプスタイン財団でも無理でしょう」

「それだけ結社の技術力がハンパじゃないってことね……」

「うむ、とんでもない天才がいる可能性が高そうじゃのう。むふふ……。これは負けてはおれんわい！」

対抗心を燃やすラッセル博士。

「お、おじいちゃあん……」

「はあ、仕方ありませんね……。新型エンジンもようやく完成しましたし……。中央工房も《ゴスペル》の解析に最優先で協力させてもらいますよ」

「わはは、当然じゃ」

「確かに、『ゴスペル』の正体が判明したら助かつちゃうかも……。今後、どういった形で使われるか判ったもんじゃないし」

「それにあの連中、『実験』とか抜かしていやがったな。2度あることは3度ありそうだぜ」

「『ゴスペル』の分析は引き続き博士たちにお問い合わせして……。

貴方たちは、そろそろ次の場所に移った方がいいかもしれないわね」

「うん、そうね。犯人は捕まえられなかったけど、地震の一件は片づいたみたいだし。次に行くとしたらどこが良さそう？」

「ちょうど王都支部から応援要請が入ったばかりよ。何でも王国軍から正式な依頼が来たらしいわ」

「王国軍からって……父さんからの依頼ってこと？」

「詳しいことは判らないわ。ただ、貴方たちをわざわざ指名してくるくらいだから結社関係である可能性は高そうね」

「確かに……」

「へッ……。行ってみるのかなさそうだな」

「それじゃあ決まりだな。ツァイスでの用事を済ませたら王都行き
の定期船に乗るとしよう」

「オツケー……って。ひょっとしてジンさんも付き合ってくれるの？」

「おいおい、どうして俺がわざわざ戻ってきたと思ってる。ヴァル
ターの件もあるしヨシユアだって見つけるんだろ？とことん付き合
わせてもらっぜ」

「ジンさん……ありがとう」

「正直、あんたが協力してくれると助かるぜ。あのグラサン野郎に
は痛い目に遭わされたからな……。よかったら稽古をつけてくれ」

「はは、お前さんにしちゃあずいぶんと謙虚な発言だな。あの威勢
の良さはどうしたんだ？」

「ふん、テメエの実力が判らないほどガキじゃねえさ」

「お姉ちゃん、アガットさん。わたしも……付いて行っちゃダメで

すか？」

「えっ……！？」

「な、なにい！？」

「えっと、これからも《ゴスペル》とか変な装置が使われることがあると思うんです。わたし、そんな時だったら少しは役に立てると思うから……。お願い、連れて行ってください！」

「で、でも……」

「……。爺さんの意見はどうだ？」

「ふむ、祖父としては渋い顔をせざるを得ないが……。こつ見えてティータは頑固じゃし、なるべく孫の希望は叶えてやりたい。じゃから、わたしはあえて反対せんよ」

「おじいちゃん……」

「結社とやらが、想像以上の技術力を持っているのは確実じゃ。その意味では、今後の調査にティータは絶対に役立つはずじゃ。お買い得であるのは間違いないぞ」

「そんな、新製品の売り込みじゃないんですから」

「うー、確かにティータが手伝ってくれと助かるけど……。でも、またあの男みたいな危ないヤツが現れたとしたら……」

「……。いや、いいだろう。あんたの孫娘、預からせてもらっせ」

アガットが意外にも反対しなかった。

「ふえっ！？」

「ほっ……」

「ど、どうしちゃったの？ てつきりアンタが一番反対するかと思っただけど」

「地震の一件を見ても《結社》が民間人の安全を考えているとはとても思えねえ。その意味じゃ、ここにいた所で確実に安全とは限らないだろう。だったら、本人の希望通りせいぜい役に立ってもらっさ」

「アガットさん……」

「なるほど……。そういう考え方もあるな」

「フフ、それ以上に目の届くところで守りたい。そんな思惑も感じるねえ」

いやらしい目つきでオリビエはアガットを見た。

「なっ……………」

焦るアガット。

「あ、図星って顔してる」

「あのあの……。それ、ホントですか？」

「真に受けるなっっの。言っておくが、自分の身は自分で守るのが基本だからな。機械いじりばかりしてボケツとしてんじゃねえぞ」

「エへへ……………気を付けます」

「はは……………。話がまとまって何よりだ」

「ふふっ、ますます賑やかになりそうですね」

「ティータや。気を付けて行ってくるんじゃぞ。お前ががんばっている間、わしも必ずや《ゴスペル》の謎を解き明かして見せるからな！」

「うん……………楽しみにしてるね！」

「博士のことは心配しないでくれ。事故を起こしたりしないよう私が責任をもって監視するからね」

「えへへ……………。よろしく願いますっ」

「まったく……………どこまでも失礼なヤツじやの」

「ふふ……………。王都のエルナンさんには私の方から連絡しておくわ。女神の加護を。気を付けて行ってきなさい」

エステルたちは王都支部に向かうことになった。

第8章 荒ぶる大地（14）（後書き）

今回で第8章は終了です。コメント・一言等お待ちしております。

第9章 狂ったお茶会（1）

レイストン要塞

中央工房から派遣されたアルセイユの整備隊がレイストン要塞に到着した。

「おお、アルセイユは先に到着してたようだな。かゝ、いつ見てもゾクゾクする機体だねえ」

グスタフ整備長はアルセイユを見ながら言った。

「本当に……。ホレボレしちゃいますよね。あんな船を毎日整備できたら整備士冥利に尽きるんですけど」

「へッ、そりゃあ俺の台詞だよ」

「やあ、グスタフ整備長。忙しい所をよく来てくれたね」

シード中佐がグスタフ整備長の所に来た。

「よお、シード中佐。またあんたの出迎えかい。偉くなって、この守備隊長はお役御免になったんじゃないかねえのか？」

「はは、そうなんだけどね。実はこの後、部下と共に警備艇で出発する予定だね。準備が済むまでヒマなので出迎えさせてもらったのさ」

「はは、ご苦労さんなこった。そういや、こつちの方でも地震があったそうじゃねえか？まさか、アルセイユが壊れたりしてねえだろうな？」

「いや、アルセイユが到着したのは地震の起こった後のことだね。

地震自体も、万全の備えだったからほとんど被害は出なかったんだ。こここの施設もそのまま使えるはずだ」

「そりゃあ助かるぜ。さっそく今からでも入っちゃみたいところだが……。親衛隊の連中はどこにいるんだ？」

「ああ……。案内しよう。今行けば、面白いものをお見せできると思うよ」

「はあ？」

グスタフ整備長はシード中佐に連れられて中庭に案内された。

レイストン要塞 中庭

そこではカシウスとユリア大尉が向き合っていた。どうやら、模擬訓練をしようとしているようだった。

「両者、構え！」

カシウスとユリア大尉が武器を構えた。

「始めいっ！」

モルガン將軍の掛け声で訓練が始まった。

「やああああっ！」

先に仕掛けたのはユリア大尉だった。しかし、カシウスはその攻撃を全て簡単にかわし、カウンターを叩きこんだ。

「くっ……」

「どうした！？動きが直線的すぎるぞ！細剣だからこそ可能な攻めの流れが作れるはずだ！教えたことを思い出せ！」

「ハッ……。……はいッ！」

ユリア大尉は先ほどの動きと違い、カシウスを囲むように動き、背後から攻めたてた。

「それでいい……。ではこちらからも行くぞ！」

カシウスは縦横無尽の動きでユリア大尉の攻撃をかわし、連続で蹴りを入れた。

「くっ……」

「守りも基本は同じだ！相手の動きを取り込みつつ、攻守の流れをイメージしろ！」

「はいっ！」

ユリア大尉は攻守のバランスを考えカシウスと対峙した。ユリア大尉の剣とカシウスの棒が相対し、互角の動きとなった。しかし、均衡を破ったのはやはりカシウスの方だった。ユリア大尉はカシウス

の一撃を食らい膝をついた。

「うむ、そこまでだ」

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

「ふふ、さすがだな。昔、お前に教えたのはほんの基礎だけだったが……。よくぞ独力でここまで鍛えた」

「い…………いえ…………。まだまだ未熟です」

「なかなか良い仕合だったぞ」

「將軍、ですが……………」

「正直、おぬしがここまでやるとは思いもしなかった。相当な使い手でもカシウス相手では数合ほどで剣を弾かれてしまっただろう。若手最強と言われるのも肯ける」

「きよ、恐縮です…………。ですが、滅多にない機会…………。できれば叩きのめされるまでお付き合い願えないでしょうか？」

「フハハハハ！なかなか頼もしいな。さて、どうするかシウス？」

「ふふ、付き合ってやりたいのは山々ですが…………。どうやら客人のようですね」

「は、こりゃあ凄いモンを見ちまったなあ」

「2人ともお疲れさまでした。シユバルツ大尉。本当に見事だったよ」

「シード中佐…………。それにそちらの方は……………」

「中央工房から派遣されたグスタフっていう者だ。よろしく頼むぜ、隊長さん」

「こ、これは失礼した。王室親衛隊、中隊長。ユリア・シユバルツ大尉です。こちらこそよろしくお願いします」

「ふむ、どうやらこれでお開きのようだな」

「みんな、余興はおしまいだ。それぞれの持ち場に戻ってくれ」

「イエス・サー！」

模擬戦闘を見ていた兵士たちは持ち場に戻っていった。

「さてと、早速で悪いが機関部を見せてくれるか？できれば今日中に目処をつけちみたいからな」

「ええ、了解しました。それでは失礼します！准将、指南していた
だきありがとうございます！」

「なんのなんの。こちらも良い運動になった」

「整備長、大尉。アルセイユを頼んだぞ」

「は！」

「どんとお任せあれ」

コリア大尉とグスタフ整備長はアルセイユに向かっていった。

「ふふ……。さすがですね、彼女は。これから更に伸びそうです」

「ああ、そうだな。お前やりシャルルまであと1、2歩といったところだろう」

「ふむ、ああいう若者を見るとこの老体にも沸き立つものがあるな。
カシウス、後で付き合わんか？」

「將軍……。さすがにお歳を考えた方がよろしいんじゃないませんか？」

「むむっ……」

「聞けば、去年の武術大会ではかなり大暴れしたそうですね？少し
は若い者に花を持たせてやらなくてはいかんでしょう」

「ふん、だからこそお前に司令の座を委ねたのだ。そこまで言った
からには文句を言わずに勤めてもらおうぞ？」

「おっと、ヤブ蛇でしたか」

「ふふ……」

「そうだ、シード中佐。今日には出発するそうだな？」

「はい、正午には。警備艇2隻を率いて3個中隊を率いる予定です」

「調印式にはワシも参加するが、それまでは身動きが取れん。王都
の守りは頼んだぞ」

「よろしくお任せください。遊撃士協会と協力して事に当たらせて
もらいます」

「う、うむ……。あまり愉快ではないが今回はかりは仕方ないだろ
う」

「ふふ、將軍のギルド嫌いも徐々に治りつつあるようですね」

レイストン要塞 外

「監視塔に導力センサー……。水中には機雷群を設置……。やはり、守りは完璧ですわね……。フン、仕方ない……。やはり連中の言う通りあれを使うしかないわね……」

木の陰からカノーネがレイストン要塞を伺っていた。

「閣下……。もうすぐです。どうか待っていてください」

第9章 狂ったお茶会(2)

ツアイス市 市街区

ツアイスでの一連の事件が解決した翌日、エステルたちは王都グランセルへ向かう準備をした。

「さてと……。次は王都グランセルね。一通り準備を済ませたらさっそく発着場に行こっか？」

「軍から依頼があるみてえだし、急いだ方がいいかもしれんな。ただ、請負中の仕事があるなら片付けちまってもいいだろう」

「うん、了解」

ツアイス発着場

「よ、いらっしやい。グランセルに向かう遊撃士さん御一行だよな？」

「あ、うん、そうだけど」

「キリカさんからすでに運賃はもらってるぜ。さっそく乗船手続きするかい？」

「手続きをしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうツアイス地方でやり残したことはねえだろうな？」

「うん、大丈夫よ。手続きをしてちょうだい」

「よしきた。それじゃ、ギルドに連絡して他のお仲間さんも呼んでやるよ」

エステルたちは乗船手続きをしてから定期船の到着を待つことにした。

定期船セシリア号

「アガット・ティータ

「あ、お姉ちゃん！」

「なんだ、エステル。まゝた船内をウロウロしてんのかよ」

「もう、人をノラネコみたいに言わないでよ。じつと待ってるのって何だか落ち着かないんだもん」

「お前、ルロツクルの訓練場に行ったんだろ？飛行船でも半日はかかるし、さぞ退屈だったんじゃないか？」

「それが、行きも帰りもすぐに寝ちゃったんだよね。行きは緊張で寝不足だったし、帰りは訓練で疲れてたし……」

「つたく、仕方ねえな」

「くすくす……。お姉ちゃんらしいかも。でも、わたしも一度は外国に行ってみたいなあ。そしたらお父さんとお母さんに会いに行けるかもしれないし……」

「あ、そっか。ティータのお父さんとお母さん、仕事で外国に行ってるんだっけ？」

「うん……。オーブメントの普及してない国に技術指導をしに行ってるね……。もう2年近く帰ってきてないの」

「うーん、結構長いわね。手紙のやり取りはしてるの？」

「うん、月に1度ね。この前、お姉ちゃんたちのことを書いたら返事が返ってきてね……。よろしく伝えてくれたって」

「えへへ、そっか。ところでティータのご両親ってどんな感じの人なの？お母さんはやっぱりティータ似？」

「うーん、どうなのかな？性格は、とつても元気でパワフルな感じかなあ。すぐにおじいちゃんと取っ組み合いのケンカをしちゃうの」

「と、取っ組み合いって……」

「あ、べつに仲が悪いわけじゃないんだよ？お父さんは、あれも親子のあいじょー表現だつて言ってたから」

「そ、そっか。それじゃあお父さんはどんな人？」

「えとね、物静かだがっしりとした人なの。10年くらい前まで遊撃士をしてたんだって」

「えっ、そうなんだ!？」

「爺さんから聞いたがかなりの凄腕だったそうだけ。ケガで引退してから設計技師に転職したらしい」

「へへ、そうだったんだ。うーん、帰ってきたら2人とも会ってみたいわね」

「うん、紹介したいから帰ってきたら遊びに来てね あ、もちろんアガットさんもですよ？」

「ハア? 待て、なんで俺が!？」

「だってアガットさん、おじいちゃんとも仲がいいし……。それにアガットさんのこともいろいろ書いたら、ぜひ会いたいって返事に書かれていたんです」

「……マジかよ……」

「あはは、こういうのも年貢の納め時ってやつ？」

「あのあの、ダメですか？」

「いや……。ダメってこたあないが……。ま、仕事でツアイスに寄ったらついでに挨拶させてもらうぜ」

「えへへ、はいっ」

く
ジン

「……」
ジンは窓を見たまま遠い目をしていた。

「……ジンさん？」

「おお、エステル。どうした、俺に用か？」

「あ、ううん。特に用事はないんだけど……。考え事、してたみたいね？」

「ああ……。昔のことを、ちよいとな」

「それってやつぱり……。あのグラサン男のこと？」

「ああ……。最後に別れてから6年……。長いようで短かったと思

つてな」

「そうなんだ……。あの男って、ジンさんの兄弟子にあたるんだっ
たよね？どんなタイプの武術家だったの？」

「そうだな……。一言で言うところ『天才』だった。圧倒的な格闘セン
スと反射神経。パワーとスピードを併せ持つ肉体。そして爆発的な
”気”の使い方。どれをとってもズバ抜けていた」

「確かに、あの動きは凄かったわ……。単純な力と速さで言うなら
あのロランス少尉以上だったかも」

「……そうかもしれんな。道場にいた頃、俺はあいつの強さに憧れ
ていたものだった。6年前　あいつが師匠であるリュウガ師父せんせい
を手にかけるまではな」

「!!!!自分の先生を……!?!」

「と言っても、お互いが納得しての仕合だ。師父はずいぶん前から
あいつの心の闇を見抜かれていた。己の圧倒的な力に酔いしれなが
ら更なる力を貪欲に追い求める……。そんな危うさをたしなめ、事
あるごとに武術の心を説かれた。戦いを通じて精神を高め合う、泰
斗流の『活人拳』の精神をな」

「『活人拳』……。なんだかカッコイイ響きね」

「だが結局、その精神はヴァルターには届かなかった。そして奴は、
魅入られるように武術の暗黒面に入り込んでいった」

「ぶ、武術の暗黒面……?」

「武術が戦いの技術である以上、決して否定できない面の極み……。
己を鬼と化し、相手の命を刈り取ることを目的とした拳。すな
わち、『殺人拳』だ」

「あ……」

「そして、それを追求するため道場を出奔しようとしたあいつに師せん
父は仕合を挑み……。死闘の末、命を落としました。……俺は仕合の見届
け人として眺めていることしかできなかった」

「……ジンさん……」

「まあ、そんな事情があつて俺はずっとヴァルターの行方を捜し続

けた。それがまさか、このリベールで再会することになるうとは……。これも女神の導きかもしれんな」

「……」
「おっと、悪い。つまらねえ昔話を聞かせちまったみてえだな」

「うづん……。聞かせてくれてありがとう。でも、ジンさん……。あの男を捜しているのはお師匠様の仇を討つためなの？」

「はは、さつきも言ったようにお互い納得しての仕合の結果だ。仇討つてのはスジが通らねえさ」

「そ、そっか……。そうだよな。でもそれじゃあ、どうしてあの男を捜しているの？」

「……。ああ……。確かめたいことがあつてな」

「確かめたいこと？」

「はは、言葉に出しちまうと照れくさいから止めておくれ。いずれにせよ、それを確かめるためには俺もまだまだ未熟すぎる……。お前さんに協力することでせいぜい修行させてもらおう」

「そっか……。わかった。あたしもジンさんの足を引っ張らないように頑張るわ！」

「おう、お互い精進しようぜ」

くクローゼ・オリビエ

「やあ、エステル君。このオリビエ・レンハイムの独奏会にようこそ」

オリビエがリユートの演奏を止めて言った。

「なにカッコ付けてんだか。クローゼもわざわざ付き合ってることないのに」

「ふふ、甲板に出たら演奏してらっしゃたので勝手に聞かせていただきました。とっても素晴らしかったです」

「フツ……。お誉めにあずかり光栄至極。どうだろう、殿下。王都に

到着したら是非とも2人きりで音楽談義などを……」

オリビエの目が邪に輝いた。

「ピュ〜イ？（ジロリ）」

ジークがオリビエのことを睨んだ。

「はっ……」

オリビエがその視線に気づきとつさに口を塞いだ。

「えっと、ジーク君。これは社交辞令と言ってね……」

「あら、社交辞令なんですか？」

「フツ、それは勿論スキあらばあの手この手で落とさせて頂きます

よ……」

「ピュイー!!」

ジークがその言葉に反応し、オリビエの周りを激しく飛び回った。

「わわっ……。止めたまえ、ジーク君！ごめんなさい！ボクが悪う

ございました！」

「ああは、ジークつてばちゃんと護衛してるじゃない」

「はああ……。ひ、酷い目に遭った……」

「うふふ……。ごめんなさい、オリビエさん。でも、今みたいなの

もジークの愛情表現なんです。オリビエさんにじゃれついているん

ですよ」

「ピュイ？」

「やれやれ、それは光栄の至り。しかし、リベールと同じように殿

下のガードはなかなか堅そうだね」

「ふふ……。相手にもよると思いますけど」

「ホント、見境なしなんだから……。あんだ、王都に着いたらちよ

つとは控えた方がいいわよ。ユリアさんとかあんまり冗談通じなさ

そうだし」

「おお、あの凜々しい女むすめか。ああいうマニッシュむすめで凜とした女性に

も憧れてしまっつね。フツ、機会があればお近づきになりたいものだ

よ……」

「……………」

クローゼはオリビエの言葉に反応しなかった。

「お、おや？」

「どうしたの、クローゼ？」

「あの、確かにユリアさんにその手の冗談はご法度かもしれませんが、以前、王城のパーティで酔っ払って私たちに絡んできた男性がいたんですけど……。ユリアさん、その方の服を、剣で……」

「へっ……」

「えっと……。……全裸？」

エステルが顔が赤くなった。

「（コクン）」

それはクローゼも同じようだ。

「ガクガクブルブル……。くっ、さすがは王室親衛隊にその人ありと謳われた女騎士だ……。だが、ボクの情熱の炎はそのくらいで消えたりはしない！ いざとなったら全裸でリユートを奏でて彼女への愛を歌わせてもらおうっ！」

「うえ、想像しちゃったわ……」

レイン

「ふう、風が心地いいですね」

「うん、そうね。そういえば、どうしてレインさんは執行者のことを知っているの？」

「以前、ある事件があつて、それを解決した話はしましたね。そして、その事件の中、結社のある人物が自らを執行者と名乗ったものでしたから」

「そうなんだ……」

「私もあれから結社について調べようと思いましたが、彼らは秘密裏に行動するため、なかなか情報を得られません。判っているのは、

《盟主》を頂点とし、《使徒》と呼ばれる幹部が《執行者》という

戦闘のエキスパート集団を率いているということだけです。行動の目的などは一切わかっていません」

「それじゃあ、今回の目的も全く分からないわね……。正直、あんな化物みたいな執行者をあたしに止められるのかしら？」

「大丈夫ですよ。エステルさんはヨシユアさんを絶対に捜すと決めたのでしょう？その気持ちがあればまだまだ強くなります。お互い頑張りましょうね」

「あ……。うん、そうね。もっとしっかりしなくちゃ。ありがとう、レインさん」

「いえいえ、どういたしまして」

「……お待たせしました。まもなく本船は王都グランセルに到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」

エステルは船内放送を聞いて席に戻った。

第9章 狂ったお茶会(3)

王都グランセル

「さてと……。また王都に戻ってきたわね。何はともあれ、まずはギルドに行こっか?」

「ああ、軍の相談つてのをエルナンから聞いちまおう」

「そういえば、今日は発着場にあの白い船が泊まっていけないね。確か、《アルセイユ》といったかな」

「え?」

エステルが反対側の着陸場に目を向けた。

「あ、ホントだ」

「確か、王家の巡洋艦だったか。どこかに任務で出かけてるんじゃないのか?」

「アルセイユはちょうどレイストーン要塞に行っています。そこで完成したばかりの新型エンジンを搭載するそうです」

「あ、整備長さんたちも工房船でレイストーン要塞に出かけたって言ってました」

「へー、そうだったんだ。ってことは、あのカツコイイ船がさらにパワーアップするのよね?どんな風になるのか楽しみかも」

「エンジンを交換するだけだから外装は変わらないと思うけど……。でも、間違いなく世界最速の船になるはずだよ」

「なるほど、是非とも一度は乗ってみたいものですね」

遊撃士協会グランセル支部

「皆さん、よく来てくれました。ルーアンとツァイスでの報告書は読ませていただきましたよ。本当にご苦労さまでしたね」

「うーん、《結社》にしてみれば小手調べだとは思うんだけど……。

仮面男も、サングラス男も本気を出してなかったみたいだし」

「それでも《結社》が現実にも動いていることが判っただけでも大きな収穫と言えるでしょう。今後は、王国軍との協力もスムーズに出来ると思いますよ」

「で、その軍の相談ってのはいつたいどういうものなんだ？ やっぱアガットが本題を切りだした。」

「それなんですけど……。どうも通信では相談しにくい内容らしいんです。ですから直接、軍の担当者が来て事情を説明してくれるそうです」

「ふむ……。通信では相談しにくい内容か。ひょっとしたら盗聴を警戒してるのかもしれないね」

オリビエが推測しながら言った。

「と、盗聴！？」

「その可能性は高いでしょう。導力通信は便利ですが傍受される危険もあります。ギルド間の通信であれば盗聴防止用の周波変更機能スクランブルが使えるんですけどね……」

「その盗聴防止の機能は軍との通信には使えないんだ？」

「軍は軍で、独自の通信規格を採用しているので無理なんです。通常通信しかできません」

「そうなんだ……。うーん、どうせだったら同じ規格にしちゃえばいいのに」

「まあ、協力しているといっても一国の軍隊と国際的な民間組織だ。情報保全の独自性は避けられんさ」

「同感ですね。軍と民間組織の一線と言えるでしょう」

「しかし、エルナン。どうやらあんたは、軍の相談が何なのか見当がついてるみてえだな。でなけりゃ、わざわざ俺たちをツアイスから呼んだりしねえだろ」

アガットはエルナンの心中を読み取ったようだ。

「おや、見抜かれましたか。これは私の読みですが……。どうやら」

不戦条約』に関する話である可能性が高そうですね」

「『不戦条約』……それって最近、色々な所で耳にしているけど……。具体的にどんな内容の条約なの？」

「女王陛下が提唱されたりベール、エレボニア、カルバードの3ヶ国間で締結される条約なんです。国家間の対立を武力で解決せず、話し合いで解決すると謳うたっています」

クローゼが条約のあらましを説明してくれた。

「え……！それじゃあ戦争がなくなるってことなの！？」

「いえ、そうではないはずです。この条約には拘束力　つまり守らなくてはならないという決まりがないのですよね？」

「ええ、確かにそうですね……。それでも抑止力にはなりませんし、国民同士の友好的なムードにつながるとお祖母様は考えていらっしやるそうですね」

「そっか……」

「さすがはアリシア陛下だ。いい目の付け所をしてらっしゃる」

「3つの国が仲良くできるきっかけになるといいですね」

「その不戦条約が、来週末に《エルベ離宮》で締結されます。外国の要人も集まりますしメディアにも注目されるでしょう。そんな状況で、もしも《結社》が何かを企んでいるとしたら……」

「確かに……。シャレにならないわね」

「フン……結構シビアな話になりそうだ。で、その担当者が来るまで俺たちはここで待てばいいのか？」

「そうですね。約束の時刻まで時間はありますし自由になさって結構ですが……」

その時、ギルドの通信器が鳴った。

「おや、失礼」

エルナンは通信器を取った。

「こちら、遊撃士協会。グランセル支部です。はい……はい……。

……。なるほど……。そうですね。ふむ、確かにそれは困ったことになりましたね。少々お待ちください……」

「もしかして王国軍から？」

「いえ、エルベ離宮からです。何でも、観光客の子供らしき迷子を保護したそうですが……保護者が見つからずに困っているとのことですよ」

「あらら」

「まあ……」

「その子の保護者を見つけてほしいとの要請なんです……。軍の担当者が来るまで時間もありませんし協力していただけませんか？」

「そりゃあモチロン、引き受けさせてもらっわ。アガットもいいよね？」

「じゃあねえな。とっとと離宮に行くとするか」

「助かります」

エルナンは再び話し始めた。

「ええ、ちょうど手の空いた遊撃士がいたのでそちらに向かわせませう。貴方のお名前は……はい……了解しました。それではお待ちください」

エルナンは受話器を置いた。

「エルベ離宮に勤めているレイモンドさんという執事がその迷子を預かっているそうです。離宮に着いたら訪ねてみてください」

「うん、わかったわ。……って、レイモンドさんってどこかで聞いたことのある名前ね」

「んー、あの若い執事じゃないか？離宮解放の時にカウンターの下に隠れていた」

「そっか、ナイアルの友達だっていうあの人か！」

ジンに言われて思い出したエステル。

「お知り合いならなおさら話が早そうですね。それではよろしくお願ひします」

エステルたちはエルベ離宮に向かった。

第9章 狂ったお茶会（4）

エルベ離宮

「エルベ離宮……何だか妙に懐かしいな」

ジンが感慨深げに言った。

「うん……。でも、何だか普通の人もいるみたいなんですけど……」
離宮は家族連れなど一般人が多くいた。

「普段は市民の方々にも開放している場所なんです。ちょっとした憩いの場所といったところでしょうか」

「へー、そうなんだ。言われてみると確かに家族連れとか多いみたいね」

「迷子というのもあるという家族連れの客の可能性が高そうだな。とにかく、あのレイモンドっていう執事の兄さんを捜してみようぜ」

「オッケー」

「はあ、参ったなあ。そろそろ遊撃士が来るのにどこに行っちゃったんだろう」

「あの〜」

「あ、はいはい。どうかありませんでしたか……」

「あれっ！？確かあんたたちは……」

執事レイモンドはエステルたちを一目見て気付いたようだ。

「よう、久しぶりだな」

「えへへ、こんにちは。覚えててくれたみたいね」

「はは、忘れるわけないさ！何とんでもエルベ離宮を解放してくれた恩人だから……。あれ、そちらの君は……」

執事レイモンドはクローゼを見て何か疑問に思ったようだ。

「どうかなさいましたか？」

「いや、はは……。そんな訳ないよな。他人の空似に決まってるか」
「ふふ、ひよつとして恋人さんと間違えました？」

「と、とんでもない！えつと、それじゃあ君たちが依頼を請けてくれた遊撃士かい？」

「うん、そうなんだけど……。いったいどうしたの？何か困ってるみたいだけど」

「それが……。その迷子の子なんだけど」

「いきなり『かくれんぼしましょ』って居なくなっちゃってさ……。必死に捜している最中なんだよ」

「あらら……」

「す、すぐに見つけるから君たちは談話室で待っててくれ。場所は知ってるだろう？」

「それは覚えているけど……。苦戦しているみたいだしあたしたちも捜すの手伝おうか」

「え……。いいのかい？」

「ま、これも乗りかかった船ってやつだ。ガキの名前と特徴を教えるや」

「た、助かるよ。白いフリフリのドレスを着て頭に黒いリボンをつけた10歳くらいの女の子だけど……。ちよつと名前は分からないんだ」

「名前が分からない？」

「いくら聞いても『ヒ・ミ・ツ』とか言っただけで教えてくれなくてね……。家族と一緒に来たと思うんだけどそれらしい人も見つからないし……。ほとほと困り果ててギルドに助けを求めたんだ」

「そ、そうなんだ。でも、かくれんぼといいわりと元気な女の子みたいね？」

「うーん、元気というか……。おませで、おしゃまな気まぐれ屋って感じかな。大人をからかって楽しんでいるような気もする」

「うーん、いわゆる悪戯好きの仔猫って感じ？」

「そう、まさにそれだ！はあ、ホントにどこに行っちゃったんだ

る。多分、この建物からは出てないと思うんだけど……」

「ということは、中庭を含めた部屋の全てが搜索対象だな。確かに、かくれんぼにはもってこいの場所かもしれん」

「僕はいったん、談話室に戻ってあの子のことを待っているよ。見つけたら連れてきてほしい」

「うん、わかったわ」

執事レイモンドは談話室に戻っていった。

「さーて、逃げた仔猫ちゃんを捜してみるとしましょうか。白いフリリのドレスに黒いリボンって言うてたわね」

「ふふ、すぐに見つかりそうな外見ですね。どんな子なのか楽しみです」

「……………それはどうでしょうか？」

「え？」

「外見は派手ですぐに分かるとは思いますが……………今回の搜索はかなり難しいと思いますよ」

「レインさん、どうしてわかるの？」

「……………いえ、何となくですよ」

「今、ゴチャゴチャ言ってたってしょうがねえ。とりあえず一通り建物の中を捜してみるぞ」

「（まさか、彼女が……………。だとしたら何の目的で……………？）」「
エステルたちは搜索を始めた。

第9章 狂ったお茶会(5)

エルベ離宮 中庭のベンチ

「ベンチと植え込みの隙間にもいないか……。はっ、ひよっとして
植え込みの中にいたりして！」

エステルのアホ発言。

「おいおい……。本物のネコじゃあるまいし」
「やっぱダメ？」

ダメです。

エルベ離宮 展示室

エステルは大きな緋色の壺を見た。

「離宮解放の時は、この底にスペアキーが貼ってあったのよね。か
なり大きな壺だし、ひよっとしてこの中に隠れて……」

「さすがにそれはねえだろ。第一、その小さい口からどうやって入
るつもりだ？」

「えへへ、それもそっか」

あたり前です。

エルベ離宮 応接室

「まさか、この下に隠れているってことは……」

エステルは会食用の大きなテーブルの下を探した。

「……。はは……。さすがにいないわよね」

「おいこら、エステル。スパッツじゃねえんだから気軽にしゃがんで
んじゃねえ」

「あ……」

エステルはすぐさま起き上がった。

「えへへ、申しわけない」

「ったく……」

デュナン公爵専用謹慎室

デュナン公爵が部屋をせわしなくウロウロとしていた。

「遅い！遅すぎる！フィリップめ……。雑誌とドーナツを買うのに
どれだけ時間をかけているのだ！」

その時、扉が開く音が聞こえたのでフィリップと思い、振り向いた
のだが……。

「これ、フィリップ！私をどれだけ待たせれば……」

入ってきたのはエステルたちだった。

「へ……」

「あ……」

エステルとクローゼは啞然とした。

「そ、そ、そ……そなたたちはあゝっ!？」

「なんだあ？この変なオツサンは」

「デュナン公爵……。こんな場所にいたんだ」

「小父様……。その、お元気ですか？」

クローゼはかける言葉に戸惑っている。

「ええい、白々しい！そなたたちのせいで、そなたたちのせいでは
……。私はこんな場所で謹慎生活を強いられているのだぞっ！」

「うーん、あたしたちのせいって言われてもねえ……。リシャル
大佐の口車に乗った公爵さんの自業自得だと思っただけど」

「ま、謹慎程度で済んで幸運だったと思うことですな。他の国なら、
いくら王族と言えど実刑は免れんでしょう」

「くっ……。フ、フン……。確かに陛下を幽閉したことがやり過ぎ

であったことは認めよう。リシャルに唆そそのかされたとはいえ、それだけは思い止まるべきだった」

「あれ、なんだか殊勝な台詞ね？」

「フン、勘違いするな。私は陛下のことは敬愛してある。君主としても伯母上としても非の打ちどころのない人物だ」

デユナン公爵はアリシア女王を恨んでいたのではないと言う。

「だが、クローディア！そなたのような小娘を次期国王に指名しようとしていたのはどうしても納得がいかなかったのだ！」

「……………」

クローゼはデユナン公爵に罵られても反論しなかった。

「ちょ、ちょっと！聞き捨てならないわね！クローゼは頭が良くて勉強家だし、人を引き付ける器量だってあるわ！公爵さんに、小娘とか言われる筋合いなんて……………」

「………… エステルさん、いいんです」

クローゼはエステルを制した。

「前にも言ったように私は………… 王位を継ぐ覚悟ができていません。

小父様が不快に思われるのも当然と言えば当然だと思います」

「クローゼ……………」

「ふん、殊勝なことを。昔からそなたは、公式行事にもなかなか顔を出そうとしなかった。知名度というなら、私の方が遙かに国民に知れ渡っているだろう。すなわちそれは、そなたに上に立つ覚悟がないということの現れだ」

「……………」

「聞けばそなた、身分を隠して学生生活を送っているそうだな。おまけに孤児院などに入り浸っているそうではないか。そんなことよりも、公式行事に出て広く国民に存在を知らしめること…………。それこそが王族の役目であろう！」

「………… それは……………」

クローゼはデユナン公爵のもっともな言葉に全く返すことができなかった。

「………………。あたしは王族の役目とかぜんぜん詳しくないから……。ひょっとしたら公爵さんの言うことも一理あるかもしれない」

「わはは、当然だ」

「でも、これだけは言えるわ。クローゼは今、悩みながらも答えを出そうと頑張っている。少なくとも、謹慎を理由に何もしてない公爵さんよりもね！」

「な、なにイ!?!」

「エステルさん……。……。あの、デユナン小父様。私は今、エステルさんのお手伝いをさせて頂くことで自らの道を見出そうとしています。私に女王としての資格が真実、あるのかどうなのか……。近いうちに、その答えを小父様にもお見せできると思います。ですからそれまで……。待っていただけられないでしょうか？」

「クローゼさん……。よく言えました」

「ぐっ……。ふ、ふん、馬鹿馬鹿しい。ええい、不愉快だ!とつと部屋から出ていけ!」

「言われなくても!」

エステルはさっさと部屋を出て行こうと思ったが、

「…………。あ、その前に。ここに白いドレスを着た女の子がたずねてこなかった?」

少女の搜索を思い出した。

「なんだそれは……。わたしはここにずっとおる!そんな小娘など知らんわ!」

「あっそ、お邪魔しました」

「…………。失礼しました」

「まったく……。なんなのよ、あの公爵は!自分のことは棚に上げてクローゼをけなしてさ!」

「いえ、小父様の非難も当然と言えば当然だと思います。王族としての義務……それは確かに存在しますから」

「で、でも……」

「ふむ、共和国では選挙で大統領が選ばれますからな。王族の義務というのは自分にはピンと来ませんが……。だが、あの公爵閣下の場合、悪い知名度が高まってしまった。もはや、彼が貴女よりも次期国王にふさわしいと考える者はリベールには存在せんでしょう」

「それは……確かにそうなのかもしれませんが。ですが、私の覚悟については小父様のおっしゃる通りです」

「クローゼ……」

「私、ここで小父様とお会いできて良かったです。改めて、私に足りない部分について気付かせていただきました」

「そっか……。よし！迷子探し、再開しようか？」

「はい」

エステルたちは気を取り直し、少女の搜索を再開した。

第9章 狂ったお茶会（6）

エルベ離宮 紋章の間

エステルは演壇の中を覗いてみたが誰も隠れていなかった。

「むう……。ビンゴだと思ったんだけど」

「ふふ、なかなか手強い仔猫ちゃんですね」

エルベ離宮 談話室

「どうだい、見つかったかい？」

「ううん、残念ながら。怪しそうな場所は一通り調べてみたんだけど」

「も、もしかして……。エルベ離宮の外に出ちゃった可能性は……。執事レイモンドは身を震わせた。」

「チツ……。そりゃあ、やっかいだな」

「うーん、かくれんぼだし、それはないと思うけど……。普通に
行ける範囲に隠れるのがルールだもん。多分、思いもよらない場
所に隠れている可能性が高いわね」

「なるほど、たまには鋭いことを言うじゃねえか。もう少し探して
みるかよ？」

「うーん、煮詰まってきたし素直に降参した方がいいかも」
「降参っていうと？」

「まあ、かくれんぼで鬼が素直に降参するっていったら……。『鬼
泣いて負けけた！かくれんぼ終わり！』って言いながら歩き回れ
ばいいわ。そうしたら、その女の子もきつと出てきてくれると思う」
「な、なるほど……」

「ふふ、ちよっと恥ずかしいですけど……。出てきてもらうために
は仕方ありませんよね」

「いえ、それには及びませんよ」

「えっ……」

「かくれんぼにおいて、隠れる側は『できるだけ開始場所から遠い場所に隠れる人が多いのです。近くだとすぐに見つかるかもしれないと不安に感じますからね。今回みたいにかくれんぼが本当に強い人は、鬼は近くを探さずに遠い場所から探すことを理解して逆に近い場所に隠れるのです。この談話室で隠られる所といえばすなわち……」

レインが談話室のカウンターを覗きこんだ。

「ふみゃ〜ん……。あーあ、レンの負けね」

レインの推測通り、少女がカウンターから出てきた。

「ええっ!?!」

「もしかして……エア＝レットンで会った?」

「ふふっ、やっぱりレンちゃんだったか」

「うふふ……。お姉さん、お久しぶりね。ちゃんとレンのこと覚えてくれてうれしいわ。それと、お兄さん。レンのことを見つけるなんてなかなかやるじゃない?」

「いえ、そうでもありませんよ。私もかくれんぼは得意ですからね」

「いや〜、まさか君たちが知り合いだとは思わなかったよ。えっと君……名前はレンちゃんていいのかな?」

「ええ、そうよ。レンはレンっていうの。ごめんなさい、秘密にしてて」

「はは、気にしていないよ。でもどうして突然、かくれんぼなんか始めたんだい?」

「だって、お姉さんが来てくれるって聞いたから……。一緒に遊ぼうと思ってがんばって隠れていたのよ」

「あはは、そうなんだ。でも、よくあたしたちが来るなんて分かつ

たわね？」

「だってお姉さん、遊撃士さんなんでしょう？レン、遊撃士さんが来てくれるって聞いたから」

「いや、そうなんだけど……。遊撃士はあたしだけじゃないし他の人が来たかもしれないわよ？」

「でも、レンは信じてたわ。お姉さんが来てくれるって。その証拠に、ほーら、ちゃんと来てくれたでしょう？」

「う、うーん……確かに」

「ま、そいつはともかく……。父ちゃんと母ちゃんはいつたどこに行っただ？どうしてこんな場所で一人で遊んでやがる？」

「ジー……」

レンはアガツトを鋭い目つきで睨んだ。

「な、なんだよ？」

「お兄さん、ダメダメねえ。レディに対する口のきき方がぜんぜんわかってないみたい」

「ムカツ……」

「まあ、レンはレディだしカンダイな心で許してあげるわ。それで、パパとママがどこに行っただかなんだけど……。レンにもよく分からないの」

「分からない？」

「レン、パパとママといっしょにここに遊びに来てただけ。お昼を食べたあと、パパたちがまじめな顔でレンにこう言ったの。『パパたちは大事な用があつてレンとお別れしなくちゃならない。でも大丈夫、用が済んだら必ずレンのことを迎えに行くからね。パパたちが帰ってくるまで良い子にして待っていていられるかい？』」

「そ、それって……」

「ふふつ、レンはもう11歳だから『もちろんできるわ』って答えたわ。そうしたら、パパとママはそのままどこかに行っちゃったの」「おいおい、冗談だろ……」

「えーと……。そんな事情とは思わなかった。どうしよう？保護者

を捜すっていう話じゃなくなってきた気がするんだが」

「うーん……。アガット、いいかな？」

エステルはアガットと目配せした。

「仕方ねえ……。これもギルドの仕事だ」

「執事さん、心配しないで。この子はあたしたちが責任をもって預かるから」

「えっ……？」

「ね、レンちゃん。お姉さんたちと一緒に王都のギルドに行かない？すぐに、パパとママを見つけてあげられると思うわ」

「そうなの？でもパパたち、大事な用があるって言ってたのよ？」

「大丈夫、大丈夫。絶対に見つけてあげるから。お姉さんを信じなさいって！」

「うーん……。それじゃあレン、お姉さんといっしょに行くわ。よろしくお願いするわね」

「うん！こちらこそよろしくね」

「ふう……。本当にすまない。その子のこと、よろしく頼んだよ」

「ああ、任せておきな。よし……とつとつとギルドに戻るぞ」

デュナン公爵専用謹慎室

「……なんだ、まだいたのか？」

「ジー……」

レンがデュナン公爵のことを不思議そうに見ている。

「な、なんだそなたは？」

「ねえ、お姉さん。このオジサン、どうしてこんな面白い髪型をしてるのかしら？」

「な、なんだとっつ！？」

面白い髪型と言われて怒るデュナン公爵。

「ま、まあまあ。子どもの言うことだから……。ちなみに、このオ

ジサンが面白いのは髪型だけじゃないの。服装と性格も面白いのよね〜」

「うふふ、そうなんだ」

「何のフォーローにもなつとらんわ〜っ！！ええい、その小娘を連れてとつとと部屋から出ていけっ！」

とにかくバカにされがちのデュナン公爵だった。

第9章 狂ったお茶会（7）

キルシエ通り

「おや、貴方がたは……」

エステルたちがエルベ周遊道を抜けてキルシエ通りを歩いていると執事フィリップに出会った。

「あれ……？」

「まあ……。フィリップさん。お久しぶりですね」

「お久しぶりです。クローディア殿下、エステル様。エルベ離宮に行ってらしたのですか？」

「うん、そうだけど……」

「フィリップさんは王都に御用があつたのですか？」

「ええ、公爵閣下のお申し付けで買い物などをしておりました。…

…ひよつとして離宮で閣下とお会いになられましたか？」

「う、うーん、まあね」

「久しぶりに挨拶をさせて頂きました」

「……その様子では、やはり心ないことを言われたようですね。誠に申しわけありません。臣下としてお詫び申し上げます」

執事フィリップは頭を下げた。

「ふふ、とんでもないです。謹慎されていると聞いたので少し心配だったのですが……お元気そうで安心しました」

「そう言つて頂けると助かります。それでは私はこれで……。皆様、失礼いたします」

執事フィリップは行つてしまった。

「は、相変わらず苦労をしょい込んでるわね。あの公爵が小さい時から世話をしているらしいけど……」

「世話役としての経歴は20年以上だそうですね。何でも、その前には親衛隊に勤めていたとか」

「え、そうなの!? うーん、まさに人は見かけによらないわね」

「………………。今のオジサン…………タダ者じゃないと見たわ」

レンが唐突に口を開いた。

「へっ…………。どうしたのよ、いきなり？」

「だって、あんな風に目をつぶって歩けるんですもの。レンにはゼツタイにできないわ」

「うーん、あれは目をつぶっているんじゃないかと細目なだけだと思うけど…………。ちなみに驚いていた時はちゃんと目を見開いてたわよ？」

「あら、そうなの？うふふ、驚いたお顔も見てみたくなっちゃったわ」

第9章 狂ったお茶会(8)

王都グランセル

「さてと……。急いでギルドに戻りましょ。レンちゃんのことについてエルナンさんと相談しなくちゃ」

「それもあるが、そろそろ軍の担当者つてのが来る時間だ。忘れてんじゃねえだらうな？」

「あ……」

どうやら、すっかり忘れていたらしいエステル。色々あったのだから仕方のない面もある。

「つたく、仕方ねえな」

「あら、どうしたの？たしか、ギルドつていう所にレンを案内してくれるのよね？」

「あ、うん、もちろんよ。それじゃあレンちゃん。遊撃士協会に行きましょう」

「ええ、お願いね」

遊撃士協会グランセル支部

「ただいま、エルナンさん……。……。あ！」

「あ、エステルお姉ちゃん！」

エステルが目にしたのはレイストーン要塞で会つて以来のシード中佐だった。

「やあ、エステル君。先日顔を合わせて以来だな」

「あれれ……。シード中佐じゃない!？」

「そうか、軍の担当者つてのはあんたの事だったのか。レイストーン要塞から来たのか？」

「ああ、その通りだ。つい先ほど、警備艇で王都に到着したばかり

でね」

「そうなんだ……。ちょうどあたしたちも仕事から戻ってきたんだけど」

「おや……。？そちらのお嬢さんはひよっとして例の……」

エルナンがレンに目を向けた。

「あ、うん、そうなのよ。ちよつと事情があつて連れてきちゃったんだけど……。えつと、レンちゃん。お姉さんたち、少し話があるから2階で待つててくれないかな？」

「あら……。ひよつとしてお仕事の話？」

「う、うん……。ごめんね」

「別にいいけど……。お仕事、お仕事つてまるでパパみたいな感じ。レン、そういうのあんまりスキじゃないわ」

レンが不快感をあらわにした。

「うっ……」

言葉に詰まるエステル。

「あ、あの……。レンちゃんつて言ったかな？わたしと一緒におしやべりでもしない？わたし、レンちゃんのこと色々知りたいな」

「あなたと？うーん、そうね。おしゃべりしてもいいわよ」

「えへへ、ありがとう。それじゃあお姉ちゃん。わたしたち2階で待つてるね」

レンとティータは2階に行った。

「はあ……。助かつちやったわ」

「ふむ、どつう事情かは後ほど聞くとしましょうか。まずは、シード中佐の話を先に聞いていただけますか？」

「あ、うん、いいわよ」

「さつそく聞かせてもらおうじゃねえか」

「すまない。こちらも急ぎなものでね。まず、この話は王国軍からの正式な依頼と考へてもらいたい。君たちに、ある件の調査と情報収集をお願いしたいんだ」

「ある件の調査……？」

「『不戦条約』は知っているね？実は、その条約締結を妨害しようとする脅迫状が各方面に届けられたんだ」

その言葉に一同が驚いた。

「きよ、脅迫状！？」

「それは……穏やかではありませんね。一体どんな内容なんですか？」

「……これをご覧ください」

シード中佐が一通の手紙を差し出した。

「『不戦条約』締結に与する者よ。直ちに、この欺瞞きまんと妥協くみに満ちた取決めから手を引くがよい。万が一、手を引かぬ者には大いなる災いが降りかかるだろう」

「うわ……」

「なるほど、脅迫状だな。内容はこれだけか？」

「ああ、これだけだ。そしてお気づきのように差出人の名前も書かれていない。正直、悪戯の可能性が一番高いと思われるんだが……」

「単なる悪戯とは思えない気がかりな要素がある。そういうわけだね？」

「ああ……。脅迫文が届けられた場所だ。まずはレイストン要塞の司令部。続いて飛行船公社、グランセル大聖堂、ホテル・ローエンバウム、リベール通信社。そして帝国大使館、共和国大使館、グランセル城、エルベ離宮。全部で9箇所だ」

「そ、そんなに！？」

「なるほど……。ただの悪戯にしちゃ大規模だな。軍が気にするのにも無理はない」

「しかし、飛行船公社に七耀教会、ホテルにリベール通信か……」

「一見、条約締結には関係なさそうな所に見えるがな」

「その場所に条約締結に関わる人物がいるということですか？」

「ああ、その通りだ。まず飛行船公社は帝国・共和国関係者を送迎

するチャーター便を出す予定でね。同じくホテルもすでに関係者の宿泊予約が入っている状況だ。さらに大聖堂のカラント大司教は女王陛下から条約締結の見届け役を依頼されているそうだし……。リベール通信は不戦条約に関する特集記事を数号前から連載している。「うーん、どこも何らかの形で条約に関わっているってことね。いったい何者の仕業なのかしら」

「フム……。これは一筋縄ではいかないね。国際条約である以上、妨害しようとする容疑者は色々と考えられるだろう」

「そうだな。共和国か帝国の主戦派……。もしくは3国の協力を歓迎しないまったく別の国家の仕業か……。」「オリビエとジンが色々と考え始めた。」

「……もちろん王国内にも容疑者は存在すると思います」

「そして……最悪の可能性が《結社》ね」

「で、軍としては俺たちに何を調べさせたいんだ？」

「君たちにお願ひしたいのは他でもない……。脅迫状が届けられた各所で聞き込み調査をして欲しいんだ。具体的には エルベ離宮とレイストン要塞を除いた7箇所だ」

「飛行船公社、グランセル大聖堂、ホテル・ローエンバウム、リベール通信社、帝国大使館、共和国大使館、そしてグランセル城ですね」

「フツ、どこも制服軍人が立ち寄ると目立ちそうな場所だね。情報部を失った今、聞き込みをギルドに頼るのも無理はないかな」

「恥ずかしながらご指摘の通りだ。そして新しい司令官殿の方針でギルドに回せそうな仕事は片っ端から回せとのことだね。それを実践させてもらったよ」

カシウスの方針か……！

「まったくもう……。父さんも調子いいわねえ」

「ケツ、いかにもオッサンの言い出しそうな台詞だぜ……」

「ふふ、君たちに依頼したのはあくまで私の一存さ。この度、条約調印式までの王都周辺の警備を一任されてね。警備体制を整えるた

めにはなるべく多くの情報が欲しいんだ。どうか引き受けてもらえないかな？」

「う、うーん……。引き受けたいのは山々なんだけど。もう一つ、片付けなくちゃいけない事件が起きちゃって……」

「先ほどのお嬢さんの件ですね。かいつまんで説明していただけませんか？」

エステルたちはエルベ離宮で、レンが両親に置き去りにされたらしいことを説明した。

「なるほど……。それは放っておけないな。しかし、あんな年端もいかない子供を置き去りにするとは……」

「前に、その親御さんと少し話したことがあるんだけど……。とても真面目そうで娘想いのご両親って感じだったわ。何かのつぴきならない事情があるんだと思うんだけど……」

「ふむ、そうですね。何かの事件と関わって娘さんを巻き込まないようにしたのかもしれませんが。しかし、それでしたら一石二鳥かもしれないですよ？」

「へっ？」

「どうやらレンさんのご両親は外国人でいらっしやるそうです。なら、大使館やホテルなどに問い合わせた方がいいでしょうね」

「あ、なるほど！」

「どちらも脅迫状が届けられた場所ってわけか。あと、飛行船公社にも乗船記録があるはずだぜ」

「王国軍も、各地に通達を回して親御さんの捜索に協力しよう。関所を通ったのなら分かるはずだ」

「ありがとう、シード中佐！」

「ふふ、どうやらこのまま話を進めても良さそうですね。具体的な調査方法と分担はこちらに任せて頂くとして……。やはり、調査結果の報告は文書と口頭がよろしいですか？」

「ああ、盗聴を避けるためにも導力通信は使わないでほしい。実は本日から、エルベ離宮に警備本部が置かれる予定だね。ご足労かと

は思うがそちらにお願いできるかな？」

「うん、わかった。それじゃあ、調査結果の報告はエルベ離宮に直接届けるわね」

「よろしく頼むよ」

エステルたちはシード中佐を見送ってから、調査方法と分担について話し合った。

その結果、エステル、ジン、オリビエ、クローゼ、レインが両国の大使館とグランセル城、リベール通信社を回り……アガットがそれ以外の場所を1人で調査するという分担になった。

「それじゃあ、あたしたちちょっと出かけてくるわ。ティータ、レンちゃん。悪いけどお留守番頼むわね？」

「それなんだけど……。レンはティータと一緒に買い物に行くことにしたわ」

「へっ!？」

「ご、ごめんね、お姉ちゃん。レンちゃんがどうしても百貨店に行きたいらしくて……」

「あら、心外ね。ティータも、ぬいぐるみとか見てみたいって言うてたじゃない」

「あう……。レンちゃんったらあ」

「う、うーん……。いつレンちゃんのパパたちの情報が入るか分からないから待ってて欲しいんだけど……」

「ジー……」

「じー……」

レンとティータがうらめしげにエステルを見た。

「うっ……。ダブルでその目はズルイわよ」

「いいんじゃないの？ティータが付いてりゃ買い物くらい大丈夫だろ」

「それにじつとさせておくのも酷でしょうからね」

アガットとレインは構わないと言った。

「うーん……それもそっか。ティータ、レンちゃん。あたしたちも夕方には戻るからそれまでには戻ってきなさいよ？それに王都は広いから、迷子にならないよう気を付けるように」

「うん、まかせて それじゃあレンちゃん。さっそく出かけようか？」

「ええ、もちろんよ。お姉さんたち、またね」

ティータとレンはギルドを出ていった。

「ふふ、すぐに仲良くなっちゃったみたいですね」

「うん、さすがに年齢が近いだけはあるわね。でも、レンちゃんとティータの組み合わせかあ」

「あら、どうしてですか？」

「いや、だって……。ティータって押しに弱そうだし。レンちゃんに色々と振り回されそうな気がしない？」

「確かに……」

「そっぴやエルナン。あの子の両親の名前はちゃんと聞き出せたのか？」

「ええ、何とか。クロスベル自治州に住む貿易商のご夫妻のようですね。名前は、ハロルド・ヘイワーズとソフィア・ヘイワーズだそうです」

「クロスベルの貿易商、ハロルド&ソフィア夫妻と……。うん、手帳にメモしたわ」

「こちらもおーケーだ。脅迫状の調査と合わせて聞き込みを始めるとするか」

「打ち合わせ通り、エステルさんは帝国・共和国大使館とグランセル城、リベール通信社を当たってください。各大使館については、ジンさん、オリビエさんに協力をお願いします」

「フツ、任せたまえ」

「要するに、大使さんに紹介すりゃあいいわけだな」

「グランセル城については殿下、お願いします。エステルさんに、

しかるべき方を紹介してあげてください」

「はい、分かりました」

「リベール通信社については、言うまでもなくエステルさん自身が一番の適任ですね」

「うん、ナイアルに聞いてみるわ」

「残りの大聖堂、飛行船公社、ホテル・ローエンバウムですが……。アガットさんにまとめて調査をお願いします」

「ああ。その方が効率がいいだろう」

「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

エステルは調査を開始した。

第9章 狂ったお茶会（9）

グランセル南街区

「さてと……。聞き込みを始めますか。えっと、どこから行くのか？」

「ま、どこからでもいいだろう。カルバード大使館だったら俺はフリーパスになっている。すぐにお前さんたちを紹介してやれるはずだ」

「ボクはエレボニア大使館だね。門番の兵士に取り次げば丁寧に案内してくれるはずさ」

「グランセル城でしたら私がいればそのまま入れます。お祖母さまに相談してみるのが一番いいかもしれませんね」

「リベール通信社も特に問題なさそうだし……。まあいいわ、片っ端から訪ねてみることにしましょう」

共和国大使館

「よう兄さん、久しぶりだな」

「あれれ、ジンさんじゃないツスカ！またリベールに遊びに来てくれたんスか？」

「はは、まあそんなところだ。挨拶がてら、エルザ大使に相談があつて来たんだが……。今、いるかい？」

「外出はされてないからいらっしやると思うツスカよ。ところで、そちらの方々は？」

「ギルドの仕事仲間だね。ウチの大使さんに紹介しようと思ってるんだ」

「へー、そうツスカ。ま、ジンさんの連れなら通しちゃっても大丈夫ツスカね」

兵士タクトは門を開けた。

「どうぞお通りくださいッス。あ、大使館の敷地内は治外法権になつていますから。くれぐれも不審な行動は慎んだ方がいいッスよ」

「だつてさ、オリビエ」

エステルは真つ先にオリビエを見た。

「やれやれ、信用がないねえ」

エステルたちは大使館の中に入つていった。

「ほう、これはこれは……」

「へへ、これがカルバード大使館なんだ。さすが立派で豪華な雰囲気ね」

「それに、どことなく異国情緒のある内装ですね」

「その国の特徴を表していますね」

「ま、東方からの移民を受け入れてきた国だからな。ちなみにエルザ大使の部屋は2階の奥にあるぞ」

「うん、わかった」

「エルザ大使の部屋」

「ここが大使の部屋だ。早速、話を聞いてみるか？」

「うん、お願い」

「よし、それじゃあお前さんたちを紹介しよう」

ジンは扉をノックした。

「……？どうぞ、入っていいわ」

「……失礼しますぜ」

ジんたちは部屋に入った。

「あら、ジんさんじゃない！先日帰国したばかりなのに、またリベ

「ルに来たのかしら？」

「いやあ、ギルドの仕事でやり残したことがありますね。またしばらくの間はリベールに滞在しようと思ってます」

「フフ、さすがはA級遊撃士。何かと忙しいというわけね。ところで、そちらの方々は？」

「えつと、初めまして。遊撃士協会に所属するエステル・ブライトといいます。こちらの3人は協力者のクローゼとオリビエとレインです」

「フツ、よろしく大使殿」

「お初お目にかかります」

「よろしく願います」

「よろしく。カルバード共和国大使のエルザ・コ克蘭よ。どうやら面倒な話があつて訪ねてきたみたいね？」

「ええ、実は……」

エステルたちは、大使館に届けられたという脅迫状について尋ねてみた。

「あの脅迫状の件か……。それじゃあ、貴方たちは王国軍の依頼で動いているの？」

「一応そういう事になります。ただ、遊撃士協会としても見過ごせる話じゃありません。それを踏まえて協力していただけませんか」

「……ま、いいでしょう。我々にも関係あることだしね。それで、何を聞きたいの？」

「えつと、まずは脅迫者に心当たりがないでしょうか？共和国に、条約締結に関する反対勢力が存在するかとか……」

「それは勿論いるわよ。例えば私なんてそうだしね」

「ええつ？」

その言葉にエステルたちは驚いた。

「ちよいと大使さん……。あんまり若いモンをからかわないでくれないませんか？」

「あら、事実は事実だもの。私のエレボニア嫌いは貴方も知ってい

るでしょう?」

「そりゃまあ……」

「ふふ、勘違いしないで。すでに大統領が決定して議会も承認した案件だからね。個人的な感情は抜きにして話は進めさせてもらっているわ」

「そ、そうですか……。それじゃあ他の反対している人たちは?」

「いるにはいるけど少数派ね。それらの勢力も本気で反対しているわけじゃないし」

「本気で反対していない?」

「あのね、そもそも不戦条約って実効性のある条約ではないの。『国家間の対立を戦争によらず話し合いで平和的に解決しましょう』って謳っているだけなのよ。そういう意味では条約というより共同宣言ね」

「その気になれば、いつでも破れる口約束に過ぎないということだね」

「ふふ、そういうこと。まあ、確かにここ十数年、カルバードとエレボニアの関係は冷えきっていたから……。今回のような機会を通じて話し合いの場が設けられるのは意義のあることだとは思っけどね」

「う、うーん……。確かに脅迫状を出してまで阻止するほどの話じゃないか」

「あの、エルザ大使」

「クローゼがいきなり口を開いた。

「カルバードの関係者が脅迫犯ではないとするなら……。誰が怪しいと思われませんか?」

「ふふ、そうね。個人的な先入観でいえばエレボニアの主戦派あたりが限りなく怪しいと思うけど……。新型エンジンの件もあるしその可能性も低そうなのよねえ」

「新型エンジンって……。もしかして《アルセイユ》用の?」

「そう、そのサンプルがカルバードとエレボニアの双方に贈呈さ

れることになっているの。不戦条約の調印式の間でね」

「あ……！」

「フツ、さすがはアリシア女王。まんまと帝国と共和国を手玉に取ったということだね」

「ええ……。悔しいけど大したお方だね。新型エンジンは、次世代の飛行船の要とも言える存在よ。それがサンプルとはいえ手に入るチャンスなんですもの。いくら帝国の主戦派にしたって水は差したくないでしょうね」

「な、なるほど……」

「ふむ、ということとは……。帝国・共和国共に不戦条約を妨害する可能性はかなり低いということですかね」

「そうなるわね。お役に立てなくて申しわけなかったかしら」

「ううん、そんなことないです。容疑者が減っただけでも状況が分かりやすくなっただし。あ、それとは別にお尋ねしたいことがあるんですけど……」

エステルはレンの両親たちについて、エルザ大使に尋ねてみた。

「クロスベルの貿易商、ハロルド・ヘイワーズ……。ふむ、心当たりはないわね。少なくとも大使館を訪れてはないと思うわ」

「そうですか……」

エステルは肩を落とした。

「クロスベルといえば帝国と共和国の間にある場所よ。帝国大使館にも問い合わせてみた方がいいかもしれないわね」

「はい、わかりました。えっと、色々と教えてもらってどうもありがとうございました」

「あら、どういたしまして。ところであなた……エステル・ブライトと言ったわね。もしかしてカシウス准将の娘さん？」

「あ、知ってるんですか？」

「ふふ、あたり前よ。かつて帝国軍を破った英雄にして王国軍の新たな指導者ですもの。娘さんがいるとは聞いていたけど、こんな形でお目にかかれるとはね」

「えつと、あたしはただの新米遊撃士なんですけど……」

「ええ、分かってるわ。ウチの大使館もギルドには色々とお世話になってるの。今後、ウチの依頼があつたら請け負ってくれると嬉しいわ」

「あはは……。機会があつたら是非。それじゃあ、失礼しました」
エステルたちは共和国大使館を出て、次に帝国大使館へと向かった。

第9章 狂ったお茶会（10）

帝国大使館

「やあ、兵士君。元気でやってるかい？」

「オ、オリビエさん！？今まで何をしてたんですか」

門番の兵士ベルガンが慌てている。

「おや、どうしたんだい？」

「どうしたもこうしたも……。エルモに湯治に行っただけり行方をくらましたそうですね？ミユラーさんが怒っていましたよ」

「フツ……。相変わらず可愛い男だな」

「って、オリビエ……。まさかあんな、あたしたちと一緒に行動していることを大使館に知らせてなかったの？」

「ハツハツハツ。愛を求めて彷徨う旅路は忍ぶものと決まっているからねえ。それはともかく……。中に通してもらえるかな？」

「構いませんが……。ええと、そちらの方々は？」

「遊撃士協会の人間よ。こちらの大使さんにちよつと話が聞きたくてね。それで、このお調子者に紹介してもらおうと思ったの」

「なるほど、そうでしたか。身分も確かのようにすしお通しできると思います……。大使館の敷地内は治外法権となつていますのでくれぐれもお気をつけて」

「うん、わかつたわ」

エステルたちは帝国大使館の中に入った。

「ほう……。こりやまた立派な建物だな」

「うわ……。カルバード大使館に負けず劣らず豪華な雰囲気の内装ねえ」

「壮麗にして力強い雰囲気……。帝国風の調度で内装が統一されて

いるようですね」

「帝国のお国柄をこの大使館に圧縮している感じですね」

「フツ、帝国の威光をアピールする舞台だからね。残念ながら役者の方がやや見劣りしているようだが」

「何を不穏なことを抜かしているか」

「近くの部屋からミューラーが出てきた」

「おお、親愛なる友よ！久しぶりだね。元気にしてたかい？」

「貴様というヤツは……。あれほど常に所在を連絡しろと言いつけておいたにもかかわらず……」

「フツ、これも恋の駆け引きさ。離れているからこそ募る思いもあるものだからねえ」

「……エステル君、感謝する。どうやら、このお調子者が迷惑をかけてしまったようだな」

「あはは……。ま、それほどでもなかったわ。比較のおとなしくしてたしね」

「まあ、その変人は放置しておくとして……。どうやら帝国大使館に用があつて来たみたいだな？」

「あ、うん。実は、ここの大使さんに話を聞きにきたんだけど……」
「エステルたちは、脅迫状の一件を聞きたため帝国大使に面会に来たことを説明した。」

「あの脅迫状か……。自分も気にはなっていたがギルドが動くとは思わなかった。王国軍の依頼ということかな」

「一応、そうだけど……。できるだけ中立の立場で調べさせてもらうつもりよ」

「ふふ、いい心がけだ。それでは、自分の方からダヴィル大使に紹介しよう。そのお調子者よりは信用してもらえははずだ」

「え、いいの!？」

「いやあ、助かるぜ」

「ありがとうございます」

「よろしく頼みます」

エステルたちは喜んだ。

「えっと……。そんなにボクって信用ない？」

「え……。あっても思ってたの!？」

「まあ、お前さんの紹介だと余計な誤解を招きそうだしな」

「えっと……。ごめんなさい、オリビエさん」

「信用は築きにくく、崩れやすいものだと考えてください」

「シクシク……」

「賢明な判断だ。ダヴィル大使は2階の執務室にいる。確認を取ってくるからしばらく待っていてくれ」

「うん、オツケー」

ミュラーは先に2階に向かった。

「えっと……。ここが執務室なのかな」

「フツ、その通りさ。それでは華麗に乱入して大使殿を驚かそうじゃないか」

こんなことばかり言うので信用されないオリビエ。

「ミュラーさんにぶん殴られるわよ」

その時、ちょうどミュラーが執務室から出てきた。

「待たせたな。大使がお会いになるそうだ」

「あ、うん。それじゃあ失礼します」

エステルたちは執務室に入った。

「ようこそ。エレボニア大使館へ。私は駐リベール大使のダヴィル・クライナツハだ」

「えっと、遊撃士協会のエステル・ブライトです」

「ジン・ヴァセック。同じく遊撃士協会の者だ」

「ジェニス王立学園2回生、クローゼ・リンツと申します」

「遊撃士協会協力員のレイン・アクアライトと申します」

「そして愛と平和の使者、オリビエ・レンハイムさつ！」

「フン……君か。何でもエルモ村に行つたきり行方をくらましていたそうだな。あまりミユラー君に心配をかけるのはやめたまえ。もちろん、私にもな」

オリビエのノリは無視し、ばつさり切り落とすダヴィル大使。

「フツ、これは手厳しい」

「それはともかく……。例の脅迫状の一件で話を聞きに来たそうだな。どんなことが知りたいのかね？」

「えつと、それじゃあ単刀直入に聞きますけど。大使は脅迫者に心当たりはありませんか。たとえば、帝国内で条約締結に反対する勢力とか」

「はは、率直な物言いだ。しかしあいにくだが全くもって心当たりはないな。皇帝陛下も条約締結には随分と乗り気でいらつしやる。それに異を唱える不屈き者など我が帝国にいるはずがなからう？」

「そ、そう断言されると身も蓋もないんですけど……。それじゃあ大使さんは帝国以外の人間の仕業だと？」

「当然、そうなるな。おおかた、カルバードあたりの野党勢力の仕業だろう。衆愚政治の弊害というやつだ」

「そりゃ、どうかと思いますぜ。確かに共和国の与党と野党は毎度のように対立してますが……。たとえ条約が阻止されたとしても大統領の責任になるとは思えない」

「フン、詳しいことは知らんよ。確実に言えるのは、脅迫者が帝国の人間ではありえないことだ。それだけ判れば十分ではないかね？」

「う、うーん……」

エステルは言葉に詰まった。

「……あの、ダヴィル大使。オズボーン宰相閣下は不戦条約について、どのように受け止めてらつしやるのですか？」

「なに……!？」

クローゼの言葉にダヴィル大使は驚いた。

「ほう……」

「フフ……。なかなか鋭い質問だね」

ミュラーとオリビエも同じのようだ。

「えっと……。そのオズボーンさんって？」

「帝国政府の代表者、《鉄血宰相》オズボーン。『国の安定は鉄と血によるべし』と公言してはばからないお方でね。帝国全土に導力鉄道を敷いたり幾つもの自治州を武力併合したりとまあ、とにかく精力的な政治家さ」

「そ、そんな人がいるんだ……」

「こ、こらオリビエ君！自国の宰相を、批判めいた言葉で語るのは止めたまえ！」

「フツ、別に批判をしているつもりはないけどね。ただ、もう少し協力的になってもバチは当たらないんじゃないかな？先ほど、共和国のエルザ大使から色々話を聞かせてもらったが……。あちらの方が遥かに協力的だったよ」

「な、なに！？」

「このままだとエレボニアという国の度量が疑われてしまうことになる……。それがボクには耐えられないのさ」

「むむむ……」

共和国と比べられて悩むダヴィル大使。

「ダヴィル大使。その件に関しては秘匿すべき情報はありません。率直な事情を説明しても問題ないのではありませんか？」

「……ふん、まあよかるう。先ほどの質問だが……。陛下と同じくオズボーン宰相も条約締結には極めて好意的だ。むしろ宰相の方から陛下に進言したと聞いている」

「まあ……」

「ほう……」

「ふむ……。それは条約締結の場で、新型エンジンが手に入るからですかね？」

「いや、彼が陛下に進言したのは新型エンジンの話が出る前らしい。」

まあ、事情はどうであれ私としては妙な圧力がかからずにホッとしているというのが本音だ」

「ふむ、なるほどな……。こりゃあ、帝国関係者もシロの可能性が高そうだけ」

「うん、そうみたいね。大使さん、教えてくれてどうもありがとうございました」

「ふ、ふん……。どうだ。私が最初から言った通りだろう。犯人探しがしたければさっさと他を当たるんだな」

「あ、ちよつと待った！えっと、実はもう1つ聞きたいことがあるんですけど……」

レンの両親たちについて、ダヴィル大使に尋ねてみた。

「そうか……。それは不憫なことだな。うーむ、帝国商人なら時々この大使館を訪れるが……。さすがにクロスベルの貿易商には心当たりがないな。ミュラー君の方はどうだ？」

「いや……。自分も記憶にはありません」

「そっか……。うーん、こっちも前途多難な雰囲気ねえ」

「しかし、脅迫犯と迷子の親を同時に捜しているとはな……。月並みな言い方にはなるがあきらめずに頑張るといい」

「あ……。はい！」

「では、自分が門まで送ろう」

エステルたちは執務室を後にした。

「ミュラーさん、ありがとう。おかげで大使さんから色々聞くとができたわ」

「いや……。大したことはしてないさ。それに本来、3ヶ国の問題だ。協力するのは当たり前だろう」

「はは、違うない」

「何とか解決できるといいんですけど……」

「……………」

「あれ……。どうしたの、オリビエ？」

「いや……。少し考え事をね。脅迫事件の話じゃないから気にしないでくれたまえ」

「う、うん……？」

「……………」

「……………」

「オリビエ、王都にいる間は大使館に泊まるんだらうな？」

「フツ、もちろんさ。いつものように君のベッドで甘い夢を見させてもらおうよ」

「ええっ!？」

「まあ……………」

「……………」

「お嬢さん方が信じるからくだらない冗談をさえするな。あまり冗談が過ぎると簀すま巻きにして床に転がすぞ」

「いやん、それっていわゆる緊縛プレイ？」

「お望みとあらばな。ミノムシのように窓から吊るしてやってもいい」

「ごめんなさい。調子に乗りました」

「うーん、さすが幼なじみ」

「はは、何だかんだ言ってバツチリ息があっているな」

「長年の付き合いがなせるものですね」

「おぞましいことを言わないでもらいたい。まあいい……………俺はこれで失礼しよう。調査の方、頑張ってくれ」

「うん、ありがと」

「ミユラーは大使館に戻っていった。

「大使館を2つ片付けたからあとはお城とリベール通信ね。手がかりがあるといいんだけど」

「そうですね……………。とにかく行ってみましょう」

次にエステルたちはグランセル城を目指した。

第9章 狂ったお茶会（11）

グランセル城

「おや？」

「貴方たちは…… 武術大会で優勝した？」

グランセル城門番の兵士ダンと兵士アルツがいつものように立哨していた。

「えへへ、お久しぶりね」

「その節は世話になったな」

「はは……。今日はどうしたんだ？ 誰かに面会したいんだったらすぐに取り次がせてもらうぜ」

「それとも城内の見学を希望ですか？」

「うーん、今日は遊撃士のお仕事で来たんだけど……」

「お久しぶりですね。ダンさん、アルツさん」

クローゼが一歩前に出て言った。

「ひ、姫様！？」

「クローディア殿下！ お帰りとは知りませんでした！」

あわてて背筋を正すダンとアルツ。

「ふふ、今回は別の用で立ち寄ったんです。エステルさんたちを城内にご案内したいんですけど……通していただけますか？」

「もちろんですとも！」

「殿下の命とあらば！」

「（さ、さすがだわ……）」

「（うーん、大した人望だねえ）」

「（こりゃ、公爵がひがむわけだ）」

「（比べるまでもないことですけどね）」

「クローゼ殿、並びにエステル殿ご一行がご来場！ 開門！」

兵士アルツがグランセル城の門を開けた。

「さあ、お通りください！」

「ふふ……お役目ご苦労様です。エステルさん。それでは入りましよう」

「うん、うん」

エステルは少しばかり緊張しながらグランセル城に入った。

「さてと……お城での聞き込みだけど。とりあえず女王様には挨拶がてら相談するとして……。えっと、確かユリアさんって留守にしているんだっただけ？」

「ええ、アルセイユの試験飛行でレイストーン要塞に出張中です」

「そりゃ残念だな。あの姉さんがいたら、さぞかし力になってくれそうだったか」

「それじゃあ他に相談できそうな人はいるかな？」

「やはりヒルダ夫人にも相談してみるべきだと思います。レンちゃんのご両親がグランセル城を訪ねていたらきっとご存じのはずですよっし」

「確かにヒルダさんだったらお城のことは何でも知ってそうね。それじゃあ早速、女王様とヒルダさんを捜すことにしますか」

「お祖母様は、この時間でしたら女王宮にいらっしやると思います。ヒルダ夫人は……そうですね。そのメイド室で聞けば、どこにいらっしやるか分かります」

「うん、了解。それじゃあメイド室と女王宮に行ってみましょ」

メイド室

「エステル様！？クローディア様とジン様も！？し、失礼しました……。永らくご無沙汰しております」

メイドのシアがあまりのことに取り乱した。

「ははっ、久しぶりだな」

「うんうん、シアさんにメイド服を着せてもらったことを思い出すなあ」

これにいち早く飛びついたのがオリビエだった。

「ほう……エステル君がメイド？」

「うん、女王様に会うためにね。そうそう、ヨシユアにも無理やりメイド服を着せてシアさんに化粧してもらったのよ。あの時のシアさんったらもうノリノリだったんだから」

「まあ……」

「きよ、恐縮です……」

「セシリア姫を見事に演じたヨシユア君の侍女姿……。おお、さぞかし可憐なものだった事に。つくづく公爵の晩餐会に参加できなかったことが悔やまれるよ」

「ふふ……。そうそう、シアさん。ヒルダさんがどちらにいらっしやるかご存じないでしょうか？」

「あ、女官長でしたら今は資料室にいらっしやると思います。確か調べたいことがあるとおっしゃってましたから……」

「資料室ね、オツケー」

資料室

「クローディア様！？それにエステルさんも……」

シアの言った通り、ヒルダ夫人は資料室にいた。

「ヒルダさん。ただいま戻りました」

「えっと、お久しぶりです」

「ええ、本当に……。様がエステル殿に協力的なさっていることは私も存じ上げております。2人と……ご無事で何よりでした」

「ヒルダさん……」

「ふふ、ありがとう。実はここに戻ってきたのはギルドの調査を兼

ねてなんです。ヒルダさんに少々お聞きしたいことがあります」「私でよければ何なりと。ですが、ここで話すのはいささか人の目がありますね。客室を使わせていただきましょう」

客室

「なるほど……。例の脅迫状の調査をなさっているのですか。では、お知りになりたいのは犯人の心当たりでしょうか？」

「はい、正にそれです。とりあえず脅迫状の届いた所を一通り回ってみることに……」

「それはご苦労様です。ですが、心当たりといってもさすがに見当も付きませんわね。城の人間がやったのではないことだけは自信をもつて断言できますが……」

「うーん、やつぱりそうよね」

「城に届いた脅迫状は誰に宛てたものだったのですか？」

「恐れながら女王陛下に宛てたものでした。陛下宛ての不審な手紙は検め^{あつた}させていただいていますから私も内容は存じております。まったく、恐れも知らぬ不届き者がいたものですね」

「ちよいと失礼……。他に、城に届けられた手紙で不審なものはありませんでしたかね。王室に対する批判めいた内容の文書とか」「ジンがヒルダ夫人に尋ねた。

「それは……」

答えてよいのか分かりかねるヒルダ夫人。

「ヒルダさん。私の方からもお願いします。できるだけ多くの判断材料が欲しいんです」

クローゼもヒルダ夫人にお願いした。

「そこまで仰られるなら……。幾つか無記名の文書が届いているのは事実です。ただ、王室に対する批判というものではありません。リシャル大佐の減刑を嘆願するものが多いですわね。おそらく一

部の王都市民によるものではないかと……」

「そ、そうなんだ……」

「ふむ、さすがボクがかつてライバルと目した人物だ。逮捕されてもなお人気とはね」

「大佐が有能な人物であったのは誰もが認める所でしょうから……。それを惜しむ人がいても何ら不思議ではないでしょうね」

「しかし、そうした手紙と脅迫状は関係なさそうですね。どうやら王室を動かすことが目的というわけではなさそうですね」

「うーん、それが分かっただけでも良しとしますか。そうそう、ヒルダさん。もう1つ聞きたいことがあるんですけど……」

エステルはレンの両親たちについて、ヒルダ夫人に尋ねてみた。

「クロスベルの貿易商、ハロルド・ハイワーズ……。ええ、存じていますわ」

「ええっ!？」

「ヒルダさんのお知り合いですか？」

「いえ、数日ほど前に城内の見学を希望された方です。たまたま手が空いておりましたので私が案内させていただきました。確かに、奥様とお嬢様をお連れになっていましたね」

「そ、そういうことね……」

「両親がどこに行っただかの手がかりにはならなさそうですね」

「ただ……少々気になることが」

「気になること？」

「お嬢様の方は、とても楽しみに見学してらっしゃったのですが……それと対照的に、ご両親の方は心ここに在らずといった雰囲気でした。私と話すときは普通にしていましたが多分、無理をしていたのかも知れません」

「ここを初めて見学したにも関わらず心ここに在らずという雰囲気か……。悩みごとがあった可能性は高そうですね」

「そうですね……。その時点で、何かのトラブルに巻き込まれていたのかも知れません」

「ふむ、そのあたりに行方を捜す手がかりがあるのかもれないね」
「あとは、飛行船会社の記録でどこに行ったのか分かりそうですね」
「ヒルダさん、ありがとうございます。結構いいヒントを聞かせてもらっちゃいました」

「それはようございました。ところで姫様、それに皆様……。今夜は当然、グランセル城にお泊りになられるのですよね？」

「へっ……？」

「私は王都に滞在している間はやかいになるつもりですが……。皆さんはどうなさいますか？」

「先ほど言ったようにボクはエレボニア大使館でやかいになるつもりだね。ご好意だけ受け取っておくよ」

「俺もカルバード大使館に泊まらせてもらっつもりだ。謹んで辞退させてもらおう」

「うーん、レインさんはどうする？」

「私はレンさんのご両親の情報がいつ入ってくるのか分からないのでギルドにいるつもりですが……。エステルさんの好きにしたらいいと思いますよ」

「うーん、そうね。アガットとティータにも相談してみないと決められないわね」

「それでは、いつお泊りになって頂いても構わないようお部屋の準備をさせて頂きます」

「ありがとうございます、ヒルダさん」

「よろしく願います」

「お任せください。私はメイド室に戻りますが皆さんはどうぞごゆっくりなさってください。それでは失礼します」

ヒルダ夫人は客室を出ていった。

「さてと……。次は女王様に会わなくちゃ。女王宮にいらっしやるんだっけ？」

「はい、多分そちらだと思います」

「フツ、それでは挨拶させていただこうか」

エステルたちは女王宮へと向かった。

第9章 狂ったお茶会（12）

女王宮 テラス

「ふふ……。やっと来てくれましたね」

アリシア女王がまるで来るのが分かっていたようだ。

「へ……」

「お祖母様……？」

「ピューイ！」

「あれ、ジーク？」

「なるほど……。ふふ、ジークが気を利かせてくれたんですね」

「ええ、貴方たちが来ることを教えてくれました。お帰りなさい、クローディア。そしてエステルさん……。よく来てくださいましたね。事情はカシウス殿から一通り聞かせてもらいました。本当に……。色々大変でしたね」

「あ……。えへへ、気遣っていたいただいてどうもありがとうございます。でも、やるべき事は見えているしクローゼたちも助けてくれます。だから、あたしは大丈夫です」

「そう……。ふふ、しばらく見ないうちに本当に頼もしくなりましたね」

「オリビエさんもジンさんもようこそいらっしやいました。どうぞ、部屋にお戻りください。紅茶の用意をさせていただきます」

「そう……。脅迫状の件で来たのですか。まさか、各国の大使館や教会にまで届いていたとは……。単なる悪戯とは思えなくなってきましたね」

「はい、そうなんです。そこで、関係者から話を聞いて脅迫犯についての目星をつけようということになって……」

「お祖母様は、今回の件に関して何か心当たりはありませんか？特に国内に関してですけど……」

「そうですね……。クローディア。あなた自身はどう思いますか？アリシア女王は逆にクローゼに尋ねた。」

「私……ですか？」

「あなたも王位継承者ならば日頃から国内情勢について考えを巡らせているはず……。それを聞かせてもらえますか？」

「は、はい……。……」

クローゼはしばし考えを巡らせた。

「不戦条約そのものに関して国内で反対する勢力はほとんどないと思います。ですが、クーデター事件後、極右勢力が追い詰められているという話を聞いたことがあります。それが脅迫状という形で現れた可能性はあるかもしれません」

「ふふ……さすがね。私の意見も大体同じです」

「えっと、どういう事ですか？」

「リシャル大佐以外にも軍拡を主張していた人々は少なくありませんでした。ですがクーデター事件後、そうした主張は完全に封じられた形になっています。さぞかし不安と不満を募らせていることでしょうね」

「えっと、要するに……リシャル大佐以外の軍拡主義者の嫌がらせですか？」

「そう言っても差し支えないかもしれませんが。もしそうだとしたら……それは彼らの罪というより他ならぬ私の責任でしょうね。リベールでは言論の自由が認められているのですから……」

「お祖母様……」

「あんまり同情する必要はないと思うんですけど……」

「軍縮、軍拡両方の政策を取ることはできません。必ずどちらかの意見は封殺されることになるのですから」

「いえ、言論の自由というものは何よりも増して貴いものです。軍拡論にしても、愛国の精神から来ているのは間違いありません。そ

うしたものをすべて検討しつつ国の舵取りをしていくこと……。それが国家元首の責任なのです」

「ふむ、しかしそうなる……実際に条約が阻止される危険は低いということですかね？」

「脅迫犯が軍拡主義者ならばそう言えるかもしれませんが。リシャール大佐が逮捕された今、彼らに事を起こす力はありません。問題は、それ以外の人間が脅迫犯だった場合なのですが……。その可能性については私にも見当がついていない状況です」

「そうですね」

「アリシア女王。1つお聞きしてもよろしいか？」

「ええ、何なりと」

「陛下はなぜ、今この時期に不戦条約を提唱されたのですか？何しろクーデター事件の混乱も完全に収まりきってはいない状況だ。今は国外よりも国内のみに目を向けるべきだと思うのですが」

「ちよつとオリビエ……」

「ふふ、オリビエさんの仰る通りかもしれませんが。ですが不戦条約に関してはクーデター事件よりも以前に両国の政府に打診していました。それを遅らせたとあつては国家の威信にも関わるでしょう。それに『クロスベル問題』も再び加熱しているようですね」

「ほう……」

「クロスベルって……レンちゃんの住んでる自治州？」

「ええ、帝国と共和国の中間に存在している自治州です。近年、この自治州の帰属を巡って両国は激しく対立してきました」

「ま、帝国と共和国のノドに刺さった魚の骨みたいなもんだ。それに関するイザコザをひっくるめて『クロスベル問題』って言われている」

「そっか……そういう場所だったんだ」

「つまり、不戦条約を通じてリベールが魚の骨を抜く……。それを狙ってらっしゃるのですね」

「一朝一夕に片づく問題ではないでしょう。ただ、そのきっかけを提供できればと思っていました。そしてそれは、大陸西部の安定とリベールの発言権を高めることにも繋がるはずです」

「フツ、お見せしました。どうやらリベール侵攻は想像以上の愚行だったらしい。それを改めて痛感しましたよ」

「今さら何を言ってるんだか……。あ、そうだ。ちよつと話は変わりますけど」

エステルはレンたちの両親について、アリシア女王に尋ねてみた。

「まあ……そんなことが」

「さすがに女王様には心当たりはないですよねえ？」

「ええ……申しわけありませんが……。グランセル城を訪ねていたらヒルダ夫人が知っているとありますが……。もう訪ねてみましたか？」

「はい……」

「ヒルダさんにも心当たりはないそうです」

「そうですか……。お望みでしたら、クロスベルの自治政府に連絡を取りましょう。いつでも相談してください」

「あ……はい！」

「お祖母様。ありがとうございます。そろそろ私たち次の調査に向かいますが……。あの……」

「ふふ、分かっています。今夜はグランセル城に泊まっていってくれますね？その時に、あなたの考えをじっくり聞かせてください」

「はい……。よろしく願います」

「いやはや、大したお方だ。あの絶妙のバランス感覚は大陸きつてというしかないね」

「ああ……まさに理想の君主だな。リベール国民が羨ましいぜ」

「あのようなお方ばかりでしたら、世の中平和でいられるのですが」

ね

「ふふん、あたり前よ。何て言ったってあたしたちの国の女王様だもん」

「……………」

ただ一人、クローゼのみがうかない顔をしていた。

「どうしたの、クローゼ？」

「あ、いえ……。お祖母様の凄さを改めて実感してしまって。やはり私など足元にも及びませんね……………」

「あ……………」

「ふむ、姫殿下。女王陛下は幾つの際に即位されたんだったかな？」

「あ、はい。20の時だったと思います」

「で、姫殿下は幾つだい？」

「16になります……………あ……………」

「フツ、そういうことだ。陛下も即位された当初から今の政治手腕を振るってきたわけではないだろう。まして今の貴女は、陛下が即位した時よりも若いんだ。比べても仕方ないだろう？」

「武術における『理』の境地は『器』のあるものにしか至れない。

その『器』を持っていても一歩一歩の積み重ねがなければ絶対に到達することはできない。そして、陛下はあなたに『理』に至る『器』を見出した。焦ることはないと思いますぜ」

「今は自分にできることをひたすらすればいいだけです。いきなり完璧なことを目指す必要はありませんよ」

「皆さん……………ありがとうございます」

「ふふ、3人ともいいこと言うじゃない。伊達に年は食ってないわね」

「失敬な……………。ボクはまだ25歳だよ？ジンさんよりも5歳も若いのだからね」

「失敬なのはお前さんの方だろう……………」

「私の年齢は24ですよ。まだまだ老けてはいませんよ」

「クスクス……………。とりあえず、これでお祖母様とヒルダさんから話

が聞けましたね」

「うん……。そろそろ市街に戻るっか？」

「ええ、そうですね」

エステルたちはグランセル城を出た。

第9章 狂ったお茶会（13）

グランセル城 外

「ほう、もう夕方か……。時が経つのは早いものだね」

「あと回っていないのはリベール通信社だけでしたね」

「うん、そうなるかな」

「時間も時間だ。とっとと訪ねてみるか」

「日が暮れるまでに話を済ませましょう」

リベール通信社3階 資料室

「あ、いたいた。おゝい、ナイアル。こんにちは」

「あん……。？なんだなんだ！お前さんたちかよ！」

「こんにちは、ナイアルさん」

「フツ、お邪魔させてもらうよ」

「は、姫殿下に演奏家に『不動のジン』までいるのか。ずいぶん賑やかじゃねえか」

「この人がエステルさんの知り合いの記者さんですか？」

「うん、ナイアルっていうの」

「エステル、そちらさんは誰だ？」

「初めまして。遊撃士協会の協力員のレインと申します。リベール通信は毎号読ませて頂いてますよ。情勢がよく分かるように書かれていて楽しんで読んでいますよ」

「おお、そう言ってくれると嬉しいぜ。これからもよろしく頼むぜ」

「ナイアルは市長選の取材、無事終わったみたいじゃない？」

「フフン、あたぼうよ。それで今日はどうした？何か美味しいネタでもあるかよ」

「いや、どちらかというとなたしたちの方が知りたくてねここに届

けられた脅迫状について聞きたいことがあるんだけど……」

「なんだ、お前らもそいつを追ってやがるのか？ てつきり王国軍が調べてると思っただが……」

「うん、その軍からの依頼で調査を手伝っているんだけど……。何か情報は入ってないかな？」

「うーん、俺の方も王都に戻ってきたばかりで大した情報は入ってねえんだ。どちらかというとお前らに聞きたいくらいだぜ」

「なんだ、仕えないわね」

「君もマスコミの間人だろう。犯人の見当くらい付いてるんじゃないのかね？」

「ぐっ……失礼な連中だな」

「お2人とも、失礼ですよ。あの、ナイアルさん。無理を承知でお願いします。ささいな情報でも構わないので教えて頂けないでしょうか」

「ちょ、ちよつと姫殿下！ 頭を下げないでくださいよ！ ああもう……仕方ねえなあ」

ナイアルは頭をかいて話し始めた。

「これはオフレコだが……脅迫状がどうやらここだけじゃないらしい。まずはレイストン要塞……そして大聖堂に飛行船会社にホテル・ローエンバウム……さらには帝国と共和国の大使館にグランセル城、エルベ離宮……。全部で9箇所も届けられたらしい」

エステルたちはそれを黙って聞いていた。

「ん、どした？」

「あの、ナイアル……。その情報ならとくに軍の人から教えてもらったんだけど……」

「なぬっ！？ し、仕入れたばかりの最新のネタだっつーのに……」

「こりゃ、聞くだけ無駄か」

「うん、他を当たった方がいいかもしれないわね……」

エステルたちが帰ろうとした時、ナイアルが引き留めた。

「ちょっつと待ったあっ！ そこまでコケにされちゃありべールきっ

ての敏腕記者、ナイアル・バーンズの名がすたるぜ。いいだろう…
…現時点での俺様の推理をお前さんたちに聞かせてやるよ！」

「ふーん……」

「フツ、手短に頼むよ」

あまり乗り気でないエステルたち。

「ぐつ……いいかよく聞け。俺はな、今回の事件は愉快犯の仕業だと睨んでいる」

「うーん、それはあたしたちも考えたけど」

「そう確信する理由を聞かせてもらいたいもんだな？」

「記者としての経験から言うと……あの脅迫状にはリアリティがないのさ。そもそも脅迫状つてのは具体的かつ現実的な要求を掲げて初めて意味があるもんだ。だが、あの脅迫状にはそれが無い」

「フム、確かにそれはそうだね。単に『災いが起こる』だけじゃ関係者としても対応しようがない」

「そういうことだ。とても本気で、条約そのものを妨害するつもりだとは思えねえ。誰だか知らんが、世間を騒がして喜んでいるだけだと思うのさ」

「な、なるほど……」

「一理ありそうですね。ただ、脅迫状が9箇所にも届いたのが気になるんですけど……。どれも条約に関係している所ばかりのようですよ」

「確かに、ただの愉快犯にしちゃ事情を知りすぎているようだ」

「うーん、それを言われると……。ただ、そうした事情つてのはその気になれば調べられるもんだ。とりあえず、俺は愉快犯の前提で情報を集めてみようと思っている。お前さんたちは、別の視点から動いてみるのもいいだろうさ」

「うん、そうね。ありがと、ナイアル。結構、貴重な意見だったかも」

「フフン、そうだろ？まあ、何か分かったらお互い情報交換するでしょうぜ。俺も不戦条約の締結までは王都に腰を据えるつもりだし

な」

「あ、そうなんだ。そういえば……ドロシーはどうしてるの?」

「ああ、あいつならボースに出張中さ。ちよいと写真を撮ってきてもらいたくてな」

「特集?」

「王国軍関連の特集さ。空賊どもが使っていた中世の砦があっただろ?今、あそこは王国軍の訓練基地になっているんだ。飛行船の操縦訓練なんかが行われているらしいぜ」

「へえ、そうなんだ。それじゃ、その基地の取材に行ってるわけね」

「まーな。いまだに1人に任せるのはちよいと心配なんだが……」

「うーん……確かに否定できないわね。あ、そうだ。ナイアルに聞きたいことがもう1つあるんだけど」

「あん?」

エステルはレンの両親たちについて、ナイアルに尋ねてみた。

「クロスベルの貿易商、ハロルド・ハイワーズ……。うーん、聞いたことねえな。ウチの『尋ね人』欄にも載せてなかったと思うぜ」

「そっか……」

「ま、サービスのついでだ。どうしても見つからなかったら俺の方でも力になってやるよ。『尋ね人』欄に載せるなりクロスベル方面の知り合いに聞いてみるなりできるだろ」

「ありがと、ナイアル。えへへ、なんだか今日はいつもよりも頼もしいわねえ。ちよっぴり見直しちゃったわ」

「そーだろ、そーだろ。つて、いつもは頼もしくないとってことかよっ!?!?」

「やゝねえ。言葉のアヤだつてば」

「よし、それじゃあそろそろギルドに戻るか。アガットのやつも戻ってきてるだろう」

「フツ、そうだね」

「ナイアルさん。どうもありがとうございました」

「これからも頼みますよ」

「おう、こちらこそ頼んだぜ」

エステルたちは一通り回り終えたのでギルドに戻った。

第9章 狂ったお茶会（14）

遊撃士協会グランセル支部

「ただいま」

「おっと、戻ってきやがったか」

アガットはすでに戻っていた。

「ゴメン、ゴメン。ちよつと遅くなっちゃった。えつと……ティー
タとレンちゃんは？」

「つい先ほど戻ってらっしゃいましたよ。今は2階で、お買物の
戦果を見せ合っているみたいですね」

「そっか。楽しんできたみたいね。えつと、それじゃああたしたち
も報告しようかな」

「ええ、よろしくお願いします」

エステルたちは集めてきた情報をエルナンとアガットに説明した。

「なるほどな……。ずいぶん色々な情報を掴んできたじゃねえか」

「まあ、決定的なことは何も分かってないけどね。アガットの方は
どうだった？」

「正直、どこもハズレでな。大聖堂、ホテル、飛行船公社……どこ
も脅迫状を送ってきた犯人の心当たりはないそうだ。飛行船公社は、
空賊事件みたいに後からミラの要求があることを警戒しているみて
えだが……。今の所、その要求もないらしい」

「そっか……。結局、犯人の可能性は色々と考えられるんだけど……
……。《結社》の仕業って可能性はどこまであるのかしら？」

「……何とも言えませんね。これまでの事件を見る限り、彼らは今
のところ《ゴスペル》の実験以外の活動はしていません。そして、
《ゴスペル》は普通では考えられない現象を引き起こすことが分か
っています」

「フム、その意味で今回の脅迫事件は確かに毛色が違っていきそうだね」

「現時点で、結社の関与を示す兆候は見られないってことだな」

「うーん……。警戒のしすぎなのかしら」

「いえ、警戒しておくに越したことはないと思います。とりあえず、今できる調査は全てやったと考えていいでしょう。皆さんの報告は私の方でレポートとしてまとめておきます。明日、それをエルベ離宮にいるシード中佐に届けてもらえますか？」

「うん……。結局、犯人は分からなかったから申しわけないけど、仕方ないよね。そういえばアガット。レンちゃんの方はどうだった？」

「そっちは幾つか判ったことがある。まずはホテルだが……。あの子と両親は2週間ばかり王都に滞在していたようだな。その間、ずっとホテルの同じ部屋に泊まっていたらしい。で、ようやく今朝、チエックアウトしたそうぞ」

「なるほど……」

「次に大聖堂だが……。滞在中、何度か大聖堂に礼拝に来ていたみたいだな。で、対応した司祭が言うには両親の様子が変わったそうだ。礼拝中、上の空だったらしい」

「ヒルダ夫人の話と同じですね」

「うん……」

「最後に飛行船会社だったが……。……実はな。見つからなかったんだ」

「へ……。何が？」

「もしかして乗船記録がですか？」

「ああ。ここ半年くらいの乗客名簿には該当者が見当たらなかったんだ」

「ええっ!？」

「フム……。ミステリーだね。となると、陸路を通ってリベールに来たということかな？」

「そ、そんなはずないわよ。だって初めて会った時、飛行船で到着したとか言ってた覚えがあるもん」

「ああ、エアレットンでか。たしか大きな湖が見えたとか言ってるやがったな」

「ふむ、そうでしたか。だとすれば、ご両親が偽名を使っていたのかもかもしれませんね」

「ぎ、偽名……」

「後ろ暗いことがあったのか、トラブルを恐れていたのか……。いずれにせよ、旅に出る前から危険は予測していたみたいだな」

「……………」

「レンさんのご両親については各地のギルドにも連絡しました。今はあせらず、情報が入るのを待った方がいいかもしれませんね。とりあえず、レンさんですが……しばらくギルドで預かった方がいいかもしれません」

「うん……トラブルに巻き込まれる危険もあるしね。えっと、よかつたらあたしに預けてくれない？他人事とは思えないし……」

「そう言ってもらえると助かります。王都滞在中、皆さんの宿泊はギルドが手配させていただきます。レンさんの宿泊費も持たせて頂くのでご安心を」

「正直、助かつちゃうわ。あ、そういえばヒルダさんの話があったっけ？」

エステルはアガットに王城に泊まってはどうかという申し出があったことを説明した。

「ほう、そんな話が……」

「……俺は遠慮するぜ。何度も泊まるにはさすがに堅苦しそうだ。ホテルの方が、何か起こった時ギルドと連絡が付きやすいしな」

「それは確かにそうかも……。レンちゃんの両親の連絡が入ってくるかもしれないし。クローゼ、悪いんだけど……」

「ふふ、お気になさらずに。ヒルダさんの方には私の方から説明しておきます」

「ボクとジンさんはそれぞれの大使館泊まり。姫殿下はグランセル城泊まり。君たち3人と年少組はホテル泊まりというわけだね。その前にどうだろう。せっかくだから、酒場で一緒に夕食を共にしないかい？」

「あ、いいかもね。オリビエのピアノも久しぶりに聞いてみたいし」「フツ、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。エステル君もようやく大人の味が判ってきたようだね？」

「いかがわしい言い方するんじゃないわよ」「しかし、そういう事ならすぐに出かけた方がいいな。これだけの大所帯だ。席がなくなる可能性もある」

「よし、チビたちを呼んでとっとと酒場に向かうとするか」

その晩、エステルたちはレンと共に《サニーベル・イン》で夕食を取るようになった。その内、当然のように酒盛りとオリビエのピアノ演奏が始まり……：しまいにはナイアルとミユラーまで酒場に呼び出されて参加する始末……：。王都の夕べは、そうして楽しく過ぎていった。

王都グランセル 北街区

「さてと……あたしたちはここまでね。クローゼ。気を付けて帰ってね」

エステルたちは、ホテルの前でクローゼと別れることになった。

「ふふ、近くですから大丈夫ですよ」

「あら、お姉さん？このあたりに住んでいるの？」

「え、ええ。親戚の家に泊まるんです。それでは皆さん、失礼します」

「ああ、また明日な」

「クローゼさん、さよーなら！」

「また明日、お会いしましょう」

クローゼはグランセル城に帰っていった。

「それにしても……。やたらと盛り上がったわねえ。オリビエに呼び出されてミユラーさんまで来ちゃうし」

「そういうお前だってあの記者を呼んだじゃねえか」

「あはは……どうせだったらと思ってるね。レンちゃんの方はどうだった？」

「うふふ、楽しかったわ。お料理も美味しかったし、面白い話もいっぱい聞けたし。ピアノも凄くステキだったわ」

「うんうん、オリビエさんってピアノがとっても上手なんだね。ちよっとビツクリしちゃった」

「ま、一応演奏家を名乗っているくらいだからね。アガツトの方は切り上げてよかったの？まだジンさんたちは盛り上がったみたいだけど」

「あいつらに付き合ってたらいつまでもキリがねえからな。散々歩き回って疲れたし、とっとと休むことにするぜ」

「そっか……。レインさんはよかったの？」

「私も明日が早いので休もうと思います」

「それじゃ、あたしたちもホテルの部屋を取りますか」

エステルたちはホテルに入ってしまった。

第9章 狂ったお茶会（15）

ホテル・ローエンバウム

「遊撃士協会の方ですね？お話は伺っております。生憎ですが、5人全ての方が泊まれる部屋はありませんので……。2人部屋を2つ、1人部屋を1つという形でお願いできませんでしょうか？」

「あ、そうなんだ。アガツト。どういう風に分かれる？」

「俺はどこでもいい。お前らで好きなように決めろや」

「私は1人で構いませんよ」

「だったらレンはお姉さんと一緒にいいわ。ずっとお仕事ばかりであんまり話せなかつたんだもの」

「あ、レンちゃんズルい。私もお姉ちゃんと一緒に部屋がいいのに

……」

「ふふん、言った者勝ちよ。何だったら一緒にベッドに寝てもいいけど？」

「えへへ、うそうそ。今夜はレンちゃんにお姉ちゃんを譲ってあげる」

「うふふ。ありがと、ティータ」

「うーん……。譲られちゃったわ」

「だったら俺はチビスケと同室か。はは、爺さんと3人で潜伏してた時を思い出すな」

「あ……。えへへ、そーですね」

↳ エステルとレンの宿泊部屋

「わあ、パパたちと一緒に泊まった部屋とは違うわね。むこうの窓からはおっきな建物が見えるし……」

「あ……」

エステルに頭にヨシユアとホテルに泊まったことが浮かんだ。

「どうしたの、お姉さん？」

「あ、うん、ちょっとね。それよりも……レンちゃん、ごめんね。パパとママのことなかなか見つけれなくて」

「ううん、いいの。だってパパたち、ちゃんと迎えに来てくれるってレンに約束してくれたもの。別にお姉さんたちが無理をして捜すことないわ」

「でも……」

「レンのパパとママはかくれんぼが上手だったの。もちろん、レンほどじゃないけどね。だから簡単には見つからないと思うわ」

「あはは、そっか。それじゃあ無理はしないでノンビリ捜すことにするわね」

「ええ、それがいいわ。それよりも……レンお姉さんに2つお願いがあるんだけど」

「お願い？なに？」

「あら、だめよ。お願いを聞いてくれるって約束してくれなければ言えないわ」

「そうきたか……。あたしに出来ることなら何でも叶えてあげるわよ」

「ほんと？うれしい！最初のお願いはね……レンのことは、レンって呼んで」

「???ああ……！呼び捨てでいいってこと？」

「ええ、そうよ。ティータは呼び捨てなのにレンだけ“ちゃん”付けなのはちょっと納得いかないわ」

「あはは……そういうもん？うん、別にいいけど……。何だったらあたしのこともエステルって呼び捨てにする？」

「お姉さんを？エステル……エステル……うん、いいかもしれないわ」

「あはは……だったらそう呼んでよ。よろしくね、レン」

「よろしく、エステル。うふふ……うれしいな」

「ふふ、そっかそっか。それでレン。もう1つのお願いって?」

「ええ、あのね……。さつき、部屋に入った時驚いた理由を教えてください?」

「あ……」

「エステル、ちょっとだけ哀しそうな顔をしてたわ。だから気になっちゃたの」

「……そっか。前にね、この部屋にある人と泊まったことがあるの。その人のこと、ちょっと思い出しちゃってね」

「わあ!それってやっぱり恋人!??」

「ふふ……残念ながらそうじゃないわ。家族として一緒に暮らしていたあたしの兄弟みたいな人かな。今はちょっと一緒にいないんだけど……」

「ふーん……。その人ってどういうお兄さんなの?名前は?見た目は?」

レンは興味津々に聞いてくる。

「あ、うん……。ヨシユアっていうんだけど。黒髪に琥珀色の瞳をしててかなりのハンサムだったかな。んー、ハンサムっていうより美人って言うべきなのかしら」

「美人さん?」

「ふふ、だってお芝居とかでお姫様の格好とかしちゃってね。これがまた、恐いくらいに似合っちゃうようなヤツなのよ」

「うわあ、いいわねえ〜。レンもその人に一度会ってみたいわ。ねえねえ、いつ会えるの?」

「あ、うん……。それはちょっと分からないな」

「……。ひょっとして、いつ会えるか分からないから哀しいの?」

「……ううん、それは平気。何年かかっても絶対に連れ戻すって決めているから」

「それじゃあ、どうして?」

「きつと今ごろヨシユアは無理をしていると思うから……。なのに

……支えてあげられないのが……ちょっと哀しいかな」

「あはは、ゴメンゴメン。こんな話、事情を知らないレンには面白くないよね」

「ううん、そんなことないわ。そのヨシユアってお兄さん、本当にステキなヒトみたいね」

「素敵ねえ……。けっこう酷いヤツだと思っけど。あんな勝手な別れ方をして……。あ、あたしの初めてを……」

「？初めて？」

「わわっ、何でもない！今日は疲れちゃったしそろそろ寝るとしましょ！」

「あゝ、ごまかした！もう、全部聞き出すまでゼツタイに眠らないんだから！」

「うう、しまったなあ……」

その後、エステルとレンはベッドに入ってから他愛のないお喋りをしていた。やがて、レンがうつらうつらとして穏やかな寝息を立て始めた頃……疲れの溜まっていたエステルも瞬く間に意識を失っていった。

第9章 狂ったお茶会(16) (前書き)

200話到達です！

第9章 狂ったお茶会（16）

ラヴェン又廃坑

真夜中のラヴェン又廃坑に複数の特務兵が入っていった。その様子を陰からシエラザードとアネラスが見張っていた。

「ふふっ……ビンゴみたいですね」

「ええ……ようやく尻尾を掴んだわ。それにしてもラヴェン又廃坑とはね。上手い場所に目を付けたもんだわ」

「確か、空賊団が定期船の荷物を奪うために利用した場所でしたね？」

「ええ、そうよ。途中にある露天掘りの場所で空賊団の一味と交戦したわ」

「とすると……。そこをアジトにしている可能性が高そうですね。どうします？このまま踏み込みますか？」

「ええ、ギルドと軍に連絡しているヒマはないわ。とりあえず潜入して残党の規模を確かめるわよ」

「ラジャーです」

シエラザードとアネラスはラヴェン又廃坑に入っていった。

ラヴェン又廃坑の露天掘りの場所にたどり着いたシエラザードとアネラス。しかし、2人はその場所に違和感を感じていた。

「おかしいわね……。予想通りのアジトみたいだけど……。人の気配が感じられないわ」

「そ、そうですね……。さっきの兵士たち、どこに行っちゃったのかな？」

「さて……気付かれたか、あるいは……。まあ、いいわ。とにかく慎重に調べましょう」

シエラザードとアネラスはテントの中を調べ始めた。

「ダメですねえ。もぬけの殻って感じですよ。先輩の方はどうですか？」

「こつちも同じよ。留守中なのか、あるいは拠点を移った直後なのか……。せめて行き先が分かるような手がかりがあるといいんだけど」

「えっと、行き先の手がかりにはならなさそうですね……。あつちのテントでこのファイルを見つけました」

「あら、見せてみて」

アネラスはシエラザードにファイルを渡した。

「ふーん……。妙な図面が書かれているわね。《オルグイユ》開発計画……。何かの乗物の設計図みたいね」

「《オルグイユ》……。ちよつとオシャレな名前ですね。やっぱり飛行船なんでしょうか？」

「うーん、専門家じゃないからちよつと判りかねるけど……。……あら？」

シエラザードがページをめくっているうちに声を上げた。

「どうしたんですか？」

「ページの間にメモがあつたわ。『招待状は配り終わった。テーブルとイスも用意した。お茶会の準備はこれでお仕舞い。あとはお茶菓子を焼いてお客様が集まるのを待つだけ』」

「へー。ほのぼのとした内容ですねえ。何だか絵本の一節みたい」「ふむ……。どうやら何かの符牒ひらふみたいね。問題は何を意味しているメッセージかなんだけど……」

その時、シエラザードが何かに気付いて叫んだ。

「散って！」

「え……。！」

シエラガードたちに向かって銃弾が撃たれた。その場を囲んでいたのはラヴェン又廃坑に入っていた3人の特務兵だった。

「うそ……いつのまに」

「ふふ、ずいぶんとアジな気配の消し方をしてくれるわね。あのアツシユブロンドの少尉さんにも習ったの？」

「……………」

しかし、特務兵たちは何も答えずに、シエラガードたちに近寄ってきた。

「（シエラ先輩…………）」

「（ええ…………どうやら普通じゃないわね。連携で一角を崩してそれぞれ残りを片付ける。できるわね？）」

「（お任せあれ！）」

「それじゃあ　行くわよ！」

「はいっ！」

シエラガードたちは特務兵たちと交戦した。

第9章 狂ったお茶会（17）

「ふう、何なのこいつら……。倒したはいいけど……。どうにも奇妙な手応えだわ」

「うーん、何か危ない薬でもやってるんじゃないんですか？前にルーアンの不良グループが薬で操られていたって聞きましたけど」

「エステルたちが解決したっていう事件ね。でも、そういうのもまた違った手応えだったわ。まるで石か木を打ったような……。その時、背後から拍手の音が聞こえてきた。」

「あはは、スゴイスゴイ。お姉さんたち、なかなか優秀な遊撃士だねえ」

現れたのはピンク色の服に黄緑色の髪をした奇抜な青年だった。

「あなた……」

「うふふ……。執行者N.O.O。《道化師》カンパネルラ。《身喰らう蛇》に連なる者さ」

青年は隠そうともせず名乗った。

「あ……」

「とうとう現れたわね……」

シエラザードとアネラスは武器を構えた。

「あなた……何でこんな場所にいるの？特務兵の残党と一緒に何をしようとしているわけ？」

「うふふ、今回の僕の役割はあくまで『見届け役』なんだ。具体的な計画のことを僕に尋ねるのは筋違いだよ。というか僕も知らないしね」

「『見届け役』ですって？」

「ま、『お茶会』に参加するなら急いだ方がいいかもしれないよ。

どこで開かれるかは知らないけど少なくともここじゃないのは確かさ。それとも、ここで僕と一緒に夜明けのコーヒーでも飲もうか？」

「……………」

「え、えつと君……。まだ若いみたいだけど本当に《結社》の人間なの？悪いことは言わないからそんなの止めちゃったほうがいいよ」「うふふ、優しいお姉さんだなあ。でも、道化師のことを笑い者にするのならともかく……。心配するのはマナー違反だね」

「え……」

道化師カンパネルラが指を鳴らすと、背後で倒れていた特務兵たちが起き上がった。

「う、うそ！？」

「そんな……。完全に戦闘不能にしたはずよ！」

「うふふ、だから君たち遊撃士つてのは甘いんだよね。やるんだつたら徹底的に壊すつもりじゃないと？」

再び道化師カンパネルラが指を鳴らすと、特務兵たちが炎に包まれ砕け散った。

「くっ……」

「あうっ……」

バラバラになった特務兵たち。

「な、なんてことを……！」

「ひどい……。こんなのって……」

「あはは、驚いた？なかなかよく出来たビックリ箱だろう？うふふ、これにて今宵のシヨウはおしまいさ。それでは皆様、ご機嫌よう」「待ちなさいッ！」

シエラザードは鞭を振りかざしたが、道化師カンパネルラは一瞬にして姿を消した。

「……………」

「……………。シエラ先輩……。あの……………」

「…………ええ……。苦痛を感じずに逝けたのならいいんだけど…………。いずれにせよ…………このままにはしておけないわね。アネラス、悪いんだけどシーツを調達してきてくれる？」

「は、はい…………！あれ…………？」

アネラスは転がっていた特務兵の腕を拾った。

「ちよ、ちよつと!？」

「あの、シエラ先輩……この腕……作り物みたいなんですけど」
「えっ……!？」

シエラザードも特務兵の残骸を調べた。

「歯車にゼンマイ……それに結晶回路の破片……。ひよつとしてこれ……」

「自律的に行動する導力人形……いわゆる人形兵器ってヤツやろうね」

テントの後ろから現れたのはケビン神父だった。

「えっ……」

「あなた、確か……!」

「おっと、オレのこと覚えとってくれたみたいやね。改めて

七耀教会の巡回神父、ケビン・グラハム言いますわ。シエラザード・

ハーヴェイさんとアネラス・エルフィードさんやね?者は相談なん

やけど……お互い、情報交換せえへんか？」

第9章 狂ったお茶会（18）

アンセル新道

深夜の道路を特務兵たち（人形兵器）が集団で行動していた。その特務兵たちを空賊団たちが待ち伏せていた。

「どりゃあああああつ！」

木の上で待機していたドルンが飛び降り、導力砲を撃った。

「キール、お次だ！」

「任せろ、兄貴！」

木の陰からキールが爆弾を投げた。

「ジヨゼット！」

「オツケー！」

ジヨゼットも同様に爆弾を投げて銃を放った。

「ヨシユア！」

特務兵の背後から音もなくヨシユアが姿を現し、

「……………」

流れるような動きで一閃にして切り伏せた。

「へへ、相変わらず見事なてなみじゃないか」

「………… 貴方たちこそなかなか見事な連携だった。おかげで一気にケ

リがついたよ」

「フ、フン………… おだてても何も出ないからね。これで10体目だよ？あと、どれだけ狩ればいいのさ？」

「そうだな………… そろそろ狩りつくしたと思う。王国軍も動くだろうし、このあたりが引き際だろう」

「そっか…………」

「しかし、結社っていうのは何を考えてるのか判らねえな。どうして、あの黒坊主どもの人形なんざ徘徊させているんだよ？」

「そう、正にそれだぜ。本物の特務兵の残党たちは一体どこに行っちゃまったんだ？」

「多分、あのメモにあった『お茶会』の可能性が高い……。人形兵器は、そこから軍の目を逸らすために使われたんだろう」

「なるほどな……。どこで何をするかは知らんが、どうにもキナ臭い雰囲気だぜ」

「まあ、俺たちが手を貸す義理なんざ無いんだが……。その『お茶会』ってのは放っておいてもいいのかよ？」

「………………。今ごろ、遊撃士たちがあの廃坑を捜索しているはずだ。このまま軍とギルドに任せよう」

「そうそう、メモと設計図を残しただけでも十分だってば。こうしてギルドに代わって人形退治だつてしてるんだし。あとは、あの脳天気女たちに任せとけばいいんじゃないの？」

「……………」

「ふ、ふん、何だよ。今さら昔の仲間が心配なの？」

「いや……。もう僕には関係のない人達さ。『お茶会』が始まれば軍の警戒もそちらに向かう。その機を逃さずに動こう」

「おうよー！」

「さーて、忙しくなりそうですぜ」

第9章 狂ったお茶会（19）

エルベ離宮 紋章の間

翌朝、エステルたちはエルベ離宮にいるシード中佐に脅迫状に関する調査報告書を届けた。

「なるほど……。これは充実した報告書だな。本当に助かった。よくここまで調べてくれたね」

「う、うーん……。犯人を特定できなかったのが正直、心残りなんだけど……」

「調査報告としては十分すぎるさ。この段階で脅迫犯が見つかるのはこちらも考えていなかったからね。どちらかというと、今後の警備の参考にするために必要だったんだ」

「そう言ってくれると助かるぜ。で、王国軍の方ではあれから進展はあったのかい？」

「まあ、昨夜のうちに警備体制の第一段階を完了したくらいかな。以後、条約調印式が終わるまでこのエルベ離宮が警備本部となる」

「それで兵士さんたちがけっこう詰めてるんだ。そういえば、周遊道にも魔獣がほとんどいなかったわね」

「今朝、大規模な掃討作戦が実施されたばかりだからね。条約調印式までの間、定期的に行おうと思っている」

「普段からそうしてくれるとウチとしても助かるんだがな」

「はは……。そう言われると耳が痛いな。そうだ、昨日言ってた女の子のご両親についてだが……。各地の関所に通達は出したがいまだ情報が入っていないくてね」

「そっか……。気長に待つしかないのかな」

「こちららも情報が入り次第、ギルドに知らせることにしよう。とりあえず、脅迫状の調査はここまでやってくれれば充分だ。後でギルドに報酬を振り込ませてもらうよ」

「うん、よろしく。でも……。これから先はどうするの？あしたたち

も、このまま王都で警戒に当たった方がいいのかな？」

「もし、王都に残るのであれば協力してもらえると助かるな。ただ、君たちが忙しいのは我々も理解しているつもりだ。無理を言いつつもりはしないよ」

「うーん……。レンの件もあるし、エルナンさんに相談してみる？」

「ああ、そうしてみるか」

「……………失礼します！」

突然、ベルク副長が部屋に入ってきた。

「なんだ、どうした？」

「えっと……………」

ベルク副長がエステルたちを見た。

「問題ない、彼らは協力者だ」

「は、それでは……。先ほど、レイストーン要塞から導力通信で連絡がありました。どうやらボース地方に情報部の残党が現れたようです」

「えええっ!?!」

「なんだと!?!」

「ふむ、詳しく話してくれ」

「それが、最初に発見したのはギルドの遊撃士だったらしく……………」

正確な現地の状況ははまだ掴めていないようですね。とりあえず、司令部からは全王国軍部隊に第2種警戒体制に入るようにと指示がありました」

「そうか、分かった。……………どうやらお互いに忙しくなるかもしれないな」

「ああ、そうだな。エステル。急いでギルドに戻るぞ」

「うん……………！シード中佐。警備のお仕事、頑張ってね！」

「ああ、そちらも頑張っしてくれ」

「あ、エステル！」

紋章の間を出たところで、中庭で遊んでいたレンとティータが戻ってきた。

「お姉ちゃん、アガットさん。どうもお疲れさまでした」

「ふうん、ずいぶん早くお話が終わったみたいね」

「だから言ったでしょ？調査の報告書を渡すだけだった。素直にギルドで待つてくれればいいのに」

「まあ、ひどいわ！レンはエステルと一緒にいただけなのに……。ほら、ティータも何とか言っただけさいな」

「わ、わたし？うーん、お姉ちゃんたちと一緒にいたいのは確かだけど……お仕事だし、あんまりワガママは言えないかなあ」

「ふーん、そう。だったらエステルのことはレンが取っちゃうことにするわ。ティータは仲間外れなんだから」

「あう……レンちゃんひどいよ」

「ほらほら、ケンカしないの。ティータはお姉さんだから少しは大目に見てあげないと」

「で、でもでも……。いつの間にかお互い呼び捨てになってるし……。お姉ちゃん……わたし、いらぬ子なの？」

「もー、そんなことあるわけじゃないの」

エステルはティータを抱き締めた。

「ほれほれ、どうだ？そんな顔していると抱き締めちゃうよ？」

「あん、もう。お姉ちゃんったらあ」

「ああっ！ティータ、ずるいわ！」

「やれやれ。付き合ったらんねえな。それはともかく……とつとつギルドに戻るぞ」

「あ、そうだったわね」

エステルはティータから離れた。

「えっと……何かあったんですか？」

「ああ……。どうやらボース地方で特務兵の残党が現れたらしい」

「ホ、ホントですかっ！？」

「うん、詳しいことはまだ分からないんだけど……。とりあえずギルドなら情報が入っていると思うし」

「そ、それじゃあ確かに急いで戻らないとダメだよな」

「む、すぐにレンに分からない話をする」

「あはは、ごめんごめん」

「とりあえず、用事があるからとっととギルドに戻るってことだ」

「あら、そうなの。残念ねえ、こんなにたくさんの方士さんがいたらくれるのも楽しいと思うのに。隠れているのは、このあたりの森全部っていろいろはどうかしら？」

「ふえ、……すぐダイナミックだね」

「そ、それはさすがにカンベンして欲しいかな……。それじゃあ、さっそく王都に戻ることにしましょ」

エステルたちは急ぎギルドに戻ることになった。

第9章 狂ったお茶会（20）

王都に戻ろうとしたのだが……。

「あれ……？」

エステルがエルベ離宮の入口でデュナン公爵を発見した。どうやら何か揉めているようだ。

「どういうことだ、これは！？この最高位の王位継承権を持つデュナン・フォン・アウスレーゼを馬鹿にしておるのかっ！？」

「め、めっそうもありません。実は今朝、エルベ周遊道で魔獣の掃討作戦がありました……。ですから護衛の数はこれだけでも充分かと存じます」

王国軍士官がたじろいだ。

「そういう意味ではない！私ほどの重要人物に対して護衛が3人のみとは無礼千万！せめて10名は用意するのだ！」

「し、しかし……」

「閣下……あまり無理を申されては。せつかく陛下のお許しが出たのです。それだけでも僥倖うちはらだと思いませんと……」

「黙れ、フィリップ！そもそも処分そのものが不当極まりなかったのだ。ならば親衛隊の全隊士をもって出迎えるのがスジであろう」「えっと、親衛隊全員とはさすがにいかないんだけど……。よかつたらあたしたちが一緒に付いてつてあげようか？」

そこでエステルが話に入った。

「そ、そなたたちはッ！？」

「おお、皆さん……」

「まったくもう……公爵さんも相変わらずねえ。あんまりワガママ言ってみんなを困らせたらダメじゃない」

「き、気安く公爵さんなどと呼ぶでない！どうしてそなたらがこんな場所にいるのだ！？すでに民間人の立ち入りは禁止されたのではないのか！？」

「ここの警備責任者さんに届けものがあつて来ただけよ。で、公爵さんたちはこれから散歩にでも行くの？」

「ふ、ふん。聞いて驚くでないぞ……。私を縛りつけた不当な戒めがついに解かれることとなったのだ！」

デユナン公爵が胸を張って言った。

「不当な戒めが解けた……？」

「ひよつとして謹慎処分が解かれたのか？」

「はい、今朝がた、陛下からの連絡がございました。離宮を辞し、グランセル城に戻ってくるようにとのお言葉です」

執事フィリップが説明してくれた。

「やれやれ……。お人好しな婆さんだな」

「へ、でもまあ良かったじゃないの。もう2度と利用されないように自分をしっかり持たなくちゃね」

「なぬ……？」

「うーん、やっぱり生活態度を見直した方がいいんじゃない？公爵さんってだらけきった生活してそうだし。運動なんかお勧めするわよ？」

エステルという言葉に周りが沈黙した。

「あれ？あたし変なこと言った？」

「いえ……。エステル様のおっしゃる通りかと思えます。そもそも閣下が自分をしっかりお持ちでいればリシャル大佐に利用されることなどなかったはず……。このフィリップ、今一度その事を進言させて頂きたく……」

「ええい、説教はたくさんだ！もうよい、このような場所に一秒たりとも長居できるものか！とっとと王都に向かうぞ！」

「おお……」

王国軍士官がほつとした。

「あれ？付き合わなくてもいいの？」

「いらぬ！行くぞ者ども！」

デユナン公爵は王国軍士官と兵士3人を引き連れて行ってしまった。

「エステル様、毎度ながら本当にありがとうございます。何とお礼を言っていていいか……」

「あはは、いいってば。でも、フィリップさんもたまにはちゃんと叱らなくちゃ。叱ってくれる人がいないからああなっちゃったんじゃないの？」

「え……」

「根は悪人じゃないと思うし、その気になれば立ち直れるわよ。要はきっかけじゃないかしら？」

「エステル様……。その言葉、このフィリップ、胸に染み入りましてぞ……」

執事フィリップが感動した。

「フィリップ！何をしておるのだ！グズグズしていると置いて行ってしまうぞ！」

「は、はい、ただいま。それでは皆様……わたくしめはこれで執事フィリップは急いでデユナン公爵のところに向かった。」

「んー、やっぱり一緒の方がよかったと思うんだけどなあ」

「……なんと言うか。正直、お前のそういうところは真似できねえぜ」

アガットがエステルに言った。

「えっ？」

「えへへ……。やっぱりお姉ちゃんは凄いな」

「初めて会った時からそんな気はしてたんだけど……。エステルって、限りなくお人好しさんなのねえ」

ティータとレンも同感のようだ。

「お人好しって……なんで？」

ただ一人、エステル本人が自覚していなかった。

「あー、分からないならそのままでもいいっての。とにかく王都に戻るぞ」

気を取り直して王都に戻るエステルたち。

第9章 狂ったお茶会（21）

遊撃士協会グランセル支部

「ただいま〜！」

「おお、戻ってきたか」

「皆さん、お帰りなさい」

「どうもお疲れさまでした」

ギルドで待機していたジン、クローゼ、レインが出迎えてくれた。

「ご苦労さまでした。報告書は渡せたようですね」

「うん、そっちは問題なく」

「つい先ほど、王国軍から報酬の振り込みがありました。取り急ぎ、それをお渡ししておきましょう」

エステルは報告書の政策に関する報酬を受け取った。

「さすがシード中佐。仕事が早いわね。それよりも……ボース地方に特務兵どもが現れたって聞いたんだけど」

「やはり離宮の方にも連絡が行ったみたいですね。ちょうどその話をしていたところなんです」

「発見したのはギルドの人間らしいな？」

「ええ……。シエラザードさんたちです」

「シエラ姉たちが!？」

「ラヴェン又廃坑の内部でアジトを発見したそうです。生憎、すでに引き払った後だったみたいですが……」

「ラヴェン又廃坑の内部……空賊たちと戦った場所か」

「チツ、盲点だったな……。引き払ったってことはすでに別の地方に行ったのか？」

「それが、ボース地方の各地で特務兵の姿が目撃されたらしく……。現在、国境師団が総力を挙げて調査をしているみたいですね」

「そ、そうなんだ……。あたしたちもボース地方に助っ人に行った方がいいのかな？」

「いえ、陽動の可能性もあります。現地の状況が分かるまで迂闊に動かない方がいいでしょう。それにどうやら……《結社》も動いているようです」

「え……！」

「なんだと……！」

これにはエステルとアガットが驚いた。

「シエラザードさんたちが廃坑のアジトで遭遇したそうです。《道化師カンパネルラ》 《執行者》の1人みたいですね」

「フン、また新顔か……」

「更にアジトで奇妙なものが発見されたそうです。まずは《オルグイユ》という導力駆動の乗物の設計図……そして《お茶会》という符牒で語られた謎の計画メモです」

「《オルグイユ》 《お茶会》……。うーん、訳が判らないわね」

「2つに共通するものは見当たりませんね」

「導力駆動の乗物って何なのかな……？」

「お茶会というのも何だか気になりますね」

一同が首をひねった。

「チツ、さすがに落ち着いていられねえな」

「まあ、焦るなって。現地で軍とギルドが頑張っているみたいだからな。じきに状況も分かるだろうさ」

「ええ、気は逸るでしょうが王都に留まっています。今のところは各自、自由になさって結構ですよ」

「うーん、そう言われても……」

そこでエステルがあたりを見回した。

「あれ、そういえばオリビエはどうしたの？」

「それが、帝国大使館から先ほど連絡がありました……。野暮用ができたと仰ってお出かけになりました。すぐにギルドにお戻りになるそうです」

「ふーん、どうしたのかしら？……あれ？レンはどうしたの？」

「ふえっ……？」

ティータが後ろを振り返ったが、レンの姿は見当たらなかった。

「あ、あれ……。さっきまではちゃんとしたんだけど」

「もしかして……。話が退屈だったから遊びに行っちゃったとか？」

「そいつはありそうだな」

「も、しょうがないわねえ。でも、もし王都を離れるとしたらレンのことも何とかしないと……。……あたし、ちょっとあの子を捜してくるわ」

「あ、わたしも！レンちゃんが行きそうなところ分かるかもしれないし……」

「そっか、助かるわ。エルナンさん。そういうことなんだけど……」

「ええ、お願いします。私の方は、各地の支部と残党の行方について情報交換をしましょう」

「さてと……。あの子の行き先なんだけど。ティータ、心当たりある？」

「うーん……。昨日は東街区を色々と回ったから……。そのうちのどれかかも」

「色々と回ったって？」

「えとね、まずは百貨店でお買い物してね……。それから歴史博物館に行つて……。最後に時計台の近くにあるアイスクリーム屋さんに行つたの」

「なるほど、色々ね。ティータも結構、ノリノリだったんじゃない？」

「えへへ……」

「まずは、その辺りを探した方がよさそうですね」

「あの服装ですから誰かに聞いたらすぐに分かるでしょう」

「ああ。とっとと連れ戻すぞ」

エステルたちはレンの捜索を開始した。

第9章 狂ったお茶会（22）

エーデル百貨店

「あ……」

エステルは百貨店からレンが出ていくのを発見した。

「あ、いたいた！」

「お、追いかけてくちや」

エステルはレンを追いかけて百貨店を出た。しかし、外で周りを見渡してもレンの姿は見当たらなかった。

「うーん……見失っちゃったわね」

「まったく、チヨロチヨロしやがって……」

「たしかこの百貨店は彼女がティータちゃんと一緒に寄った場所でしたね？」

「あ、はい。ひょっとしたら他の場所に行っちゃったのかもしれないせん」

「まあ、まだそんなに遠くには行ってないはずだし。この東街区を中心に捜してみますか」

「ティータさん、確か百貨店の次には歴史資料館に行っただけと言いましたね。そこを探してみるのはどうでしょう？」

「あ、それかもしれません！」

「じゃあ、そこを行ってみますか」

エステルたちは歴史資料館に向かった。

歴史資料館

「こんにちは。来場者の方ですか？」

「えっと、人探しをしているんですけど……」

エステルは受付のリシアに、レンの姿格好を説明した。

「あら、昨日、そちらのお嬢様と一緒にいらした白いドレスのお嬢様でしょうか？」

「あ、そーだと思えます。覚えていてくれたんですか？」

「ふふ、お嬢様がた2人はとっても目立っていましたから。そのお嬢さんでしたら先ほどお見えになりました。館内のどこかにいらっしやると思えます」

「あ、そうなんだ！」

「よし、とつとと捕まえるぞ」

エステルは1階を捜して、2階に上がった。

そこで、男性にレンのことを尋ねた。

「……白い服の女の子？それならそこに……」

男性は辺りを見回したが、レンはいなかった。

「うお、いないんだな！でも、さっきまではここにいたから遠くには行っていないと思うよ」

エステルは再び1階に下りた。

「あれっ？」

エステルが受付でレンがリシアと話しているのを見つけた。

「ねえ、お姉さん。色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる？」

「え……」

「うふふ、さようなら」

レンはそれだけ言う外に出ていった。

「はっ……。あの、お嬢様！お知り合いの方が……」

しかし、その声は届かなかった。

そして、すぐさまエステルたちが駆けつけた。

「ち、ちよつとレン！」

「レンちゃん、待って！」

エステルたちは慌てて外に出た。

「ま、また居ないし……」

「も、申しわけありません。お引き留めしようと思ったんですけど

……」

受付のリシアが謝りに出てきた。

「ううん、気にしないで。それよりもあの子と何か話していなかった？」

「は、はい……。不思議な事を尋ねられました。『色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる?』と」

「へっ?」

「意味深ですね……。ひよっとしたら謎かけじゃないかしら」
クローゼがつぶやいた。

「な、謎かけ!？」

「つまり、謎々を解いて追いかけてくるように誘っているのかも……」

「あ、あんですって!?!それじゃあ今もワザとあたしたちから逃げたわけ!？」

「うーん……。そういうことになりますね」

「じよ、上等じゃない……。その手の遊びだったらこっちだって負けないわよ」

闘争心全開のエステル。

「あのな……。そういう問題じゃねえだろ」

「と、とりあえず……。『色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる?』だよ」

「うん、そのヒントを元にあの子の行き先を突き止めましょ」

「が、頑張ってくださいね」

リシアはただそれだけしか言えなかった。

「さて……。エステルさん。レンさんの行き先には目星がつかまりましたか?」

レインがエステルに尋ねた。

「うーん、さっぱり。『色の無いお魚さん』なんていないはずだし」

「ああ。何かの喩えなのかもしれないな」

「そうですね。私の考えが正しければ、『釣公師団本部』だと思います」

「へっ、なんで？」

「まあ、行ってみれば分かりますよ。とにかく行きましょう」
エステルたちはレインの言う通りに釣公師団本部に向かった。

釣公師団本部

「エステルさん、そのショーケースを見てください」
レインがショーケースを指差した。

「あっ……！」

「なるほど、魚拓かよ」

「おや、その魚拓に興味を持ったのであるか？それは吾輩が勝ち取った輝ける栄光の証なのである。よかったら、その武勇伝を聞かせてやってもいいのだが」

釣公師団の本部長のフィツシャーが楽しそうに言った。

「えっと、それはまたの機会にしましょうと……。ここに白いドレスを着た女の子が来なかった？」

「おお、訪ねてきたが……。吾輩におかしな質問をしてそのまま去っていきおったぞ」

「やっぱりか……」

エステルは肩を落とした。

「あのあの。どーいう質問でしたか？」

「うむ、確かこんな質問だった。『辛くて苦くて美味しいお店ってどこにあるか知っている？』だったぞ」

「まさに謎々ですね」

「『辛くて苦くておいしいお店』って。それじゃあ、そのお店を捜してみましょ」

エステルは次の目的地を探し始めた。

「今回もよく分からないわね……」

エステルはしきりに頭をひねっている。

「エステルさん、落ち着いて考えてみてください。このグランセルにお店というのは屋台を除けばそれほど多くありませんよ。しかも今回は『辛くて苦い』というのですから、飲食店のはずです。この王都に飲食店は、居酒屋の《サニール・イン》とコーヒーハウスの《パラル》です。そこで『辛い』ものと『苦い』ものを中心に置いている店は……」

「あ、分かった！コーヒーハウスの《パラル》ね！」

「ええ、おそらくそうです。さつそく向かいますよ」

エステルたちは《パラル》に向かった。

コーヒーハウス《パラル》

「ねえ、マスター。ここのお勧めって何だっけ？」

「そりゃあもちろん、コーヒーに決まってるさ。ドラゴンビーンズをブレンドしたサイフォンで淹れる自慢の一品だね。あと、スパイスをふんだんに使ったライスカレーはかなりの人気だよ」

マスターのパラルは自慢げに言った。

「辛いカレーと、苦いコーヒー……」

「『辛くて苦くて美味しいお店』だね」

「なあ、白いドレスを着たガキンチョが来なかったか？」

「ああ、さつき来たよ。カフェオレを頼んで美味しそうに飲んでくれたね。そういえば私に奇妙な質問をしてきたけど……」

「どんな質問でしたか？」

「『ほつとくと無くなるお菓子はどこで売っているの?』だったかな」

「『ほつとくと無くなるお菓子』……。……。よし、メモしたわ。うーん、そろそろ追いつきそうな気がするけど」
めげずに探し続けるエステルたちであった。

「えっと……。レインさん、もう分かっちゃった?」

「ええ、分かりましたよ」

「ひょっとしてこういうの得意だったりする?」

「得意というか、こういった謎かけは以前よくしたものですから慣れているといった感じですかね。とにかく、今回は『ほつとくと無くなるお菓子』でしたね。普通のお菓子がほつといて勝手になくなるはずがありません」

「まあ、そうよね」

「とすれば、時間が経てば形が失われるものと考えられます。この王都でそういったお菓子を売っているのは……。東街区のアイスクリーム屋だと思います」

「なるほど!それじゃあ行きましょ」

東街区 アイスクリーム屋

「あら、昨日のお嬢さん。ついさっき、お友達がアイスを買っていききましたよ。今日は一緒じゃないんですね?」

「やっぱり……。えっと、あの子、謎々を言ってますでした?」

「謎々?そんなこと言ってたかしら。『お姉さんと空港で待ち合わせをしているの』と楽しそうに言ってましたけど」

「お姉さんたちってやっぱりあたしたちのことよね。は、やっ

謎々は終わるか」

「しつつかし、随分と振り回されたもんだぜ」

「まったくもぅ……心配かけてくれちゃって。これは見つけたらお説教をしてやらなくちゃね」

「あ、お姉ちゃん。あんまり怒らないであげて。きつとレンちゃん、寂しかったんじゃないかな？わたしたち、お仕事の話ばかりしちやってたし」

「ええ……そうかもしれませぬ」

「う……それを言われると。まあ、とりあえず空港に迎えに行きましょ」

エステルたちは空港に向かった。

第9章 狂ったお茶会(23)

「あれ……?」

「お!」

空港に向かおうとしたエステルの前に現れたのはグスタフ整備長とフェイだった。フェイはなにやら大きな機械を乗せて運んでいた。

「整備長さん、フェイさん!」

「あれれ、ティータちゃん!?」

「おう、ティータ坊!それに……久しぶりだな、エステル!」

「あ、うん!整備長さんたちも元気そうね!でも、どうしたの?珍しい所で会うじゃない」

「へへ、こいつを運んできたってわけさ」

グスタフ整備長は後ろの機械を指差した。

「うわ、なにこれ!?!」

「あのあの、ひよつとして……」

「アルセイユ用の新型エンジン、『XG-02』のサンプルだ。サンプルといってもほぼ実機と同じ性能だがな」

「へ、これがそうなんだ」

「うわあ、信じられない……。こんなコンパクトなのにあの出力が実現できるなんて……。デザインも機能的で可愛いし……。はう、すごいよ……」

ティータはエンジンを見てうつとりとしている。

「ちよつとちよつと、ティータ」

「はあ……ま、我を忘れやがったか」

「これが王都に運ばれてきたということは……例の、帝国と共和国に贈られるサンプルでしょうか?」

「おお、よく知っているな。やっとアルセイユへの組み込み作業が終わったからこっちに届けに来たというわけだ」

「そうですか……本当にお疲れさまでした」

「あ、ああ……？えっと、お嬢さんは？」

「申し遅れました。クローディア・フォン・アウスレーゼと申します」

「アウスレーゼって……まさか王家の！？」

「うん、女王様のお孫さん」

「アルセイユは一応、王家の所有する船ですから。陛下に代わってお礼を言わせてください」

「こ、こりゃどうも」丁寧

「あはは、いきなり言われたらさすがにビックリするかもね。ところで、このエンジン、どこに運んでいくつもりなの？」

「ああ、港の倉庫街にな。条約の調印式までそっちで保管するらしい」

「へえ、そうなんだ」

「あの、整備長さんたちはいつツアイスに戻るんですか？」

「ああ、これを届けたらすぐに出発しちまうさ。ティータ坊。くれくれも元気だな」

「あ、はいっ！整備長さんたちもお元気で！」

「エステル……それにアガットって言ったか。ティータ坊を頼んだぞ」

「うん、任せといて」

「ま、心配すんな」

「じゃあね、遊撃士さんたち」

グスタフ整備長とフェイは行ってしまった

「は、あれがアルセイユ用のエンジンか。よく分からないけどやたらと凄そうな機械よね」

「うん……ビックリしちゃった。わたしも将来、あんなスゴイ機械が造れるようになりたいな」

「やれやれ……メカフェチ一直線かよ。ま、目標があるのは良い事か」

「えへへ……」

第9章 狂ったお茶会(24)

グランセル空港

「ツアイス方面行き定期飛行船、《リンデ号》まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください」

飛行場でアナウンスが流れた。その場にはオリビエとミュラーがいた。

「それではな、オリビエ。俺が留守のあいだ、問題を起こしてくれるなよ」

「フツ、安心してくれ。このボクが、愛しいキミに心配をかけたことがあつたかい？」

「今更すぎて心配する気にもなれん。せめて問題は起こしてくれるな」

「うーん、善処しましょ」

そうして、ミュラーを乗せた《リンデ号》は離陸した。

「おーい、オリビエ！」

「おや、君たち。ひよつとしてボクが恋しくてここまで捜しに来てくれたのかい？」

「なわきやないでしょ。それよりも……今のミュラーさんよね？」

「なんで帝国軍人が定期船なんか使ってるんだ？」

「ああ、何でも軍務でポーヌ地方に行くそうだよ。空賊団が使っていた飛行艇があつただろう？あれを回収するつもりらしい」

「空賊団の飛行艇ってあの緑色の小型艇よね。でも、なんでミュラーさんが？」

「知っているかもしれないが、あの飛行艇はエレボニア製でね。それを使った空賊団はいまだ捕まっていけないらしい。帝国政府としては証拠を回収して犯人調査に協力したい……そう王国に打診したそうだよ」

「ふん？よく分からない理屈ね」

「ま、空賊団がエレボニアの元貴族だったというのはあまり外聞が宜しくないからね。できれば不戦条約締結の前にはうやむやにしておきたいんだろう。共和国あたりが突っ込む前にね」

「空賊団が元帝国貴族って……。ええっ、あのボクっ子たちが！？」
エステルはあまりの事実に驚いた。

「あれ、知らなかったのかい？カプア男爵家と言って帝国北部の小領主だったそうだよ。数年前、莫大な借金を抱えて領地を手放したそうだがね」

「そ、そんな事情があったんだ……。なんて言うか……微妙に可哀想な連中ね」

「ケツ、だからといってまったく同情の余地はねえな」

「まあ、そういうわけでボクは見送りに来たんだが。君たちはどうして空港に？」

「あ、実はレンを捜しに来ただけ……。オリビエ、見かけなかった？」

「レン君？って、そこにいるのはレン君じゃないのかい？」

「へ……」

エステルたちが振り返ると、レンが立っていた。

「うふふ」

「レ、レンちゃん！？」

「い、いつのまに……」

エステルはレンに近寄った。

「こら、レン！まったく、いきなり居なくなったらダメじゃない！しかも色んな人を巻き込んであたしたちから逃げたりして〜！」

「ごめんなさい……。だって退屈だったんだもの。あのね、百貨店で紅茶とクツキーを買ったのよ？みんなの分もあるからおねがい、機嫌をなおして？」

「う……」

「ふふ、私たちも結構楽しませてもらいましたし……。おあいこでい

「いんじゃないでしょうか？」

「クローゼが後押しした。」

「はあ、しょうがないなあ。お小言はこれくらいで勘弁してあげる」

「ホント!？」

「ふふ、よかったね」

「さてと、それじゃいったんギルドに戻るか。何か情報が入ってる
かもしれねえ」

「うん、そうね」

「おや、何かあったのかい？」

「ちよつとボース地方で事件が起こったらしくてね。って……そう
いえばミュラーさんってボース地方に行ったんだっけ？」

「ああ、その通りさ。ふむ……詳しく聞きたいところだね」

「ま、ギルドに戻ったら一通り説明してやるよ」

遊撃士協会グランセル支部前

「ねえ、エステル……」

「エステルがドアに手をかけた瞬間、レンが唐突に話しかけてきた。」

「ん、どうしたの？もう怒ってないから安心していいわよ」

「うふふ、そうじゃないわ。だいいちエステルが怒ってもゼンゼン
恐くないんだもの」

「むぐつ……言うじゃない。それじゃ、どうしたの？」

「あのね……実はエステルに預りものがあるの」

「預りもの？」

「うん。ビックリしないでね？」

「レンはエステルに一通の手紙を渡した。」

「へ……？何これ、あたしに？」

「ええ、そうよ」

「誰から？」

「うふふ、読んでみたらきつと分かると思うけど」
「そ、そう?」

エステルは手紙の封を切った。

エステルへ

散々迷ったけれどどうしても君に伝えなくてはならない用事ができてしまった。あんな別れ方をして虫のいい話だとは思っけど2人きりで会えないだろうか?今日の夕方、グリユーネ門側のアーネンベルクの上で待っている

「……………え……………」

「うふふ、分かったみたいね?レンも話を聞いたからピンと来ちゃったもの」

「こ、これって……………。これを渡した人って!??」

「真っ黒い髪と、琥珀色の瞳のハンサムなお兄さんだったわ。空港の待合所でエステルたちを待っている時に渡して欲しいって頼まれたのよ」

「……………あ……………」

「あの人が、エステルの言ってたヨシユアってお兄さんでしょう?」
「う、うん…………。筆跡も似ているし、ま、間違いないと思う…………。」

夕方、グリユーネ門側のアーネンベルクの上…………。夕方って…………もうそろそろじゃない…………。」

「おい、何をしてる?エルナンが各地の情報を説明するみたいだぞ?」

アガットがエステルが入って来ないので、ギルドから出てきた。

「アガット…………。どうしよう…………あたし…………。」

「へっ…………。お、おい、どうした?」

エステルは無言でアガットに手紙を見せた。

「………………。これは……ヨシユアか？」

「うん……そうみたい。レンが、それらしい人から受け取ったんだって…………」

「なるほどな……。いいぜ、行ってこい」

「え…………？」

「いいからとつとと行け。他の連中には俺の方から適当に言っておく」

「あ……。ありがと、アガット！それにレンも…………教えてくれてありがとうとね！」

「あ…………」

エステルは一目散にグリユーネ門に向かった。

「行っちゃった……。そんなにその人と会いたかったのかしら？」

「ああ…………だろうな。へへ、どうやって他の連中をごまかすかね」

「はあはあはあ……。グリユーネ門のアーネンベルクの上……。早く行かなくちゃ…………！」

第9章 狂ったお茶会(25)

グリユーネ門

エステルがグリユーネ門に着いたときにはすでに夕方になっていた。
「もう夕方……！アーネンベルクの上つて……つまり長城の上つて
ことよね。早く行かなくちゃ……！」

アーネンベルク

「……あ……」

アーネンベルクに一人の人影をエステルは見つけた。

「一方 王都グランセル

「ヒック……。フィリップのやつ、小言ばかり抜かしおつて……。
私をいつたい誰だと思っておるのだ……。最高位の王位継承権を持
つ……。デュナン・フォン・アウスレーゼだぞ……」

デュナン公爵は酔っ払っているのか足元がふらふらとしていた。

「うーい……。少しビールを飲み過ぎたか……。しかし、あのライス
カレーというのはなかなかの美味であった……。たまには庶民の味
も悪くない……」

またふらふらと歩き始めるデュナン公爵。

「……くそつ……。クローディア……。それに遊撃士の小娘め……。
どうしてこの私が……。あんな小娘どもに……。あんな小娘どもの
言葉に……。心を乱さねばならぬのだ……」

「公爵閣下のご心痛、お察し申し上げますわ」

デュナン公爵の前に現れたのは、リシャル大佐の副官カノーネだ

った。

「な……。お前はリシャルの……」

「ええ、副官のカノーネです。公爵閣下におかれましてはお元気そうで何よりですわ。ふふ、あまりご機嫌は宜しくないようですけど……」

「な、何の用だ……。お前たちはたしか指名手配されている身では……」

デュナン公爵は一步後ろに下がったが、背後から特務兵がやってきた。

「ひっ……！？」

「ふふ、そう警戒されると傷ついてしまいますわ。わたくしたちはただ……公爵閣下のお手伝いがしたいだけ。さあ、一緒に来て頂きますわよ」

グリユーネ門

「ヨ、ヨシユ」

エステルが走り寄ったが……

「あ……？」

「へっ……？」

そこにいたのは、ヨシユアではなくケビン神父だった。

「エステルちゃんか……？」

「ケビンさん……。ど、どうしてここに……？」

エステルは辺りを見回したが、ヨシユアの姿はどこにもなかった。

「い、いない……」

「いや、ひさしぶりやなあ。しかし、こんな所で再会するなんてオレら、やつぱり縁が」

「ねえ、ケビンさん！ここで誰か他の人に会わなかった!？」

「へっ……誰かって。まさかエステルちゃんもここで待ち合わせし

とんの?」

「う、うん……。……って、ケビンさんも?」

「ああ……。手紙に呼び出されてな」

「あ、あたしもだ。えへへ、面白い偶然もあるもんね」

「はは、そうやねー。……って、そんな偶然あるかいっ!」

「や、やっぱり?それじゃあケビンさんもヨシユアに呼び出されて

……」

「ヨシユア?それって……。例のカレシやったっけ?」

「う、うん……」

「し、知らなかったわ……。ヨシユア君って実はいい年したオッサンやったんか。そりゃ、愛があれば年の差なんて問題あらへんけど……。それやったらオレかて充分チャンスは……」

「あー。微妙に話が噛み合っていないんですけど。ケビンさんは誰からの手紙で呼び出されたわけ?」

「ああ、グランセル大聖堂にオレ宛ての手紙が届けられてな。届けたのは、身なりの良さそうな中年男性だったらしけど……」

「ヨ、ヨシユアはあたしと同年だってば!オジサンなはずないでしよっ!」

「あ、やっぱり?やゝ。オレもなんかおかしいと思ったんよね」

「よく言っつわよ……。でも、それって一体どういことなの?」

「……。お2人を始末するための罠でしょうね」

「誰やっ!?!」

「レインさん!?!」

「どうやらまだ無事だったようですな。安心しましたよ」

「ど、どうしてレインさんが……」

「あれ、エステルちゃんを知り合い?」

「うん、レインさんと言っつてね……。……って、今はそついう場合じゃないわ。どうしてレインさんがここにいるのよ!?!」

「エステルさんが途中でいなくなっただけですから、ギルドから抜け出してエステルさんの後を追いかけてきました」

「そ、そんなことしてバレなかったの？」
「ええ、さりげなく抜けてきました。それよりも……これは間違いなく罠ですね。その証拠に……」
「エステルたちの元に空中から機械兵器が寄ってきた。」
「チツ、人違いですって雰囲気でもなさそうやな……」
「来ます！お2人とも、準備はよろしいですか！？」

「こ、こいつら……！？」
「……！」

機械兵器はそのまま逃げ去っていった。

「あつ……！？な、なんだったのよ……。それに今の……」
「ああ、城の封印区画にいた人形兵器と同じみたいやね。もっともアレとは違って最近造られたものみたいやけど」
「それってどういうこと？」
「封印区画のアーティファクト人形兵器が古代遺物の一種とするなら……」
「オーブメント仕掛けの現代のカラクリ人形……というわけですね？」

「ビンゴ！そういうことや」
「な、なるほど……。……どうしてケビンさんが封印区画のことを知ってるわけ？」

「……ギク」
「おい、何をしている！？」
「あ、兵士さん……」
「何やら騒がしいと思ったら……。お前たち、いったいここで何をしていたんだ！？」
「ちよ、ちよつと待って！あたしたち、ここで変な機械に襲われただけで……」

「変な機械だと……？」

「ああ、お騒がせしてエライすんませんでした。実は彼女、ギルドに所属する遊撃士でしてなあ。とある連中を追って捜査中の身つてわけですわ」

「へっ?」

「遊撃士……本当なのか?」

「ほら、エステルちゃん。ブレイサー手帳を見せてやり?」

「あ、うん……」

エステルは促されるままブレイサー手帳を提示した。

「……なるほど、本当らしいな。とある連中と言ったが、一体どういふ奴等なんだ?」

「それが《結社》とかいう正体不明な連中であ。各地で妙な実験を色々としとるらしいですわ。そいつらの手がかりを追ってここに来てみたらケツタイな機械に襲われたんです」

「……………」

「……………」

「そついえば司令部から《結社》とかいう連中について注意のようなものが来ていたな……。とすると周遊道に現れたのはその《結社

》の者たちなのか……………」

「え、ちよつと待つて!周遊道に現れたつて一体何が起こつたの?」

「ああ、先ほどエルベ離宮の警備本部から連絡があつてな。何でも武装した集団が離宮を襲撃してきたらしい」

「あ、あんですつて!?!?」

「……………」

「幸い、シード中佐によつて難なく退けられたらしいがな。現在、周遊道を封鎖してその集団を追っているところらしい」

「は。エライことが起こつたなあ。こりゃオレらもギルドに戻つた方がええかもな」

「え、あ……………」

「ああ、ひよつとしたら君たちが追っている連中と同じなのかもしれない……。よし、付近の警備はこのまま我々が当たるとしよう。

君たちは急いで王都のギルドに戻るといい」

「おおきに！ほな戻るとしよか」

「ちょよ、ちょっと……」

「エステルさん、聞きたいことは後にしましょう」

「ちょっと待って！一体どうということなの！？」

「あ……。やっぱり納得せえへん？」

「あ、あたり前でしょ！あなた……いつたい何者なの！？あたしたちの動きとか《結社》のこととか知ってたり……。本当にただの神父さんなわけ！？」

「ケビンさん、正体だけでも隠さず話してもらえますか？エステルさんが納得しないので……」

「そうやな。正真正銘、七耀教会の神父やで。まあ、確かに……ただの神父とはちゃうけどな」

「それってどういうこと？」

「その説明はまた後でな。さつきも言ったけど今はギルドに急いの方がええ。ひよっとしたらとんでもない騒ぎが起こるかもしれん」

「とんでもない騒ぎって……ああもつ……アタマがグチャグチャになりそう！なんで……なんでヨシユアに会えるはずがこんな事になっちゃうのよ……」

「そのカレシからの手紙なんやけど……。それ、本当にカレシからか？」

「えっ……？う、うん。手紙を預かった子の話ではヨシユアとしか思えないし……」

「その子はカレシのことを知つとるわけないんやな？だとしたら、似たような特徴の別人を用意させた可能性もある」

「で、でも……ヨシユアの字に似てるし……」

「筆跡なんちゅうもんはある程度似せられるもんや。動揺しとる人

間を簡単に騙せるくらいにはな。ちなみにオレが大聖堂で受け取った手紙はコレやで」

ケビン神父は懐ふくから一通の封筒を取り出した。

「あ……………」

「これは……………」

「へへ、どうやら同じ種類の封筒らしいな。ちなみに手紙の中身はオレが調べていることについての情報を提供するって申し出やった」ということは……………同じ連中の仕業ってこと？一体誰が、どうして！？」

「それは俺にも分からんわ。確実に言えるのは……………お互いハメられたってことやね」

「……………けんじゃ……………わよ」

「へ？」

「エステルさん？」

「何者が知らないけどふざけてんじゃないわよ……………。ヨシユアを騙かたつて……………あたしを呼び出したですって？許せない……………絶対に許さないんだからあつ！」

「ひえっ……………落ち着き、エステルちゃん。ここで熱くなったらまさに相手の思っツボやで」

「とにかく、ギルドに急いで戻りましょう」

「わかった……………。だけど、ケビンさんのこと……………完全に信用したわけじゃないわ。騙したりしたら……………本気でぶっ飛ばすからね？」

「ああ、かまへんで。エステルちゃんにぶっ飛ばされるなら本望や。惚れた女のためなら身体を張る覚悟はできとるしな」

「な、なに言ってるのよ。まったくもう……………調子狂っちゃうわね」

「和み系目指しとんねん」

「お2人とも、そこまですておきましょうか。早く戻りましょう」

「おお、そやったそやった」

「うん、急ぎましょ」

第9章 狂ったお茶会(26)

王都グランセル

王都に着いた頃にはすでに夜になっていた。

「ふう……日が暮れちゃったわね。エルベ離宮の方はどうなっているのかしら」

「ま、ギルドの方に連絡が入ってるかもな。はよ、行ってみようや」
「……………」

「あれ、レインさん、どうしたの」

「いえ、何でもありませんよ。気にしないでください」

「うん……？」

「エステル様……………」

突然、執事フィリップがやって来た。

「あれ、フィリップさん？」

「ど、どうも。今朝は大変失礼しました。あの、エステル様……………どこかで公爵閣下を見かけていませんかでしょうか？」

「へ……………朝に会ったきりだけ……………。公爵さん、どうかしたの？」
「昼過ぎに街に出かけたきり城にお戻りになっていないのです。閣下が行きそうな場所は一通り捜してみたのですが……………」

「ああもう、この忙しい時に何をしてるんだか……………。フィリップさん。これからギルドに戻るから一緒に付いて来て。公爵さんが迷惑をかけてたら連絡が入ってるのかもしれないし」

「そ、そうですね……………。それでは同行させて頂きます。……………と、こちらの方は？」

「あ、七耀教会の巡回神父、ケビン・グラハム言いますわ。どうぞ、よろしくー」

「これはご丁寧に。私は公爵閣下の執事を務めてさせて頂いているフィリップと申す者です……………」

「あー、挨拶はあとあと。とっととギルドに戻りましょー!」

遊撃士協会グランセル支部

「エルナンさん、ただい……」

エステルが受付を見ると、エルナンが倒れていた。

「エ、エルナンさん!？」

「なんと……!？」

「クソ、そう来たかい!」

エステルたちはエルナンの元へ寄った。

「エルナンさん!？エルナンさんってば!」

「呼吸は安定しとる……。どうやら眠っとるみたいやな。この人が

王都支部の受付か?」

「う、うん……。みんな!？」

エステルは2階に向かった。

「あ……」

2階では全員が倒れていた。

「アガット、オリビエ、ジンさん!」

机の上に倒れているアガット、オリビエ、ジン。

「ティータ、クローゼ!」

ティータとクローゼは本棚の横で倒れていた。

「あっちゃあ……。全員やられたみたいやね」

レイン、ケビン神父、執事フィリップが上がってきた。

「どや、無事そうか?」

「う、うん……。眠ってるみたいだけど……。一体全体、どうなっ

ちやってるのよ!？」

「ふむ、どうやら一服、盛られてしまったようですな。皆さん、急

に睡魔に襲われ崩れ落ちたように見受けられます」

「た、確かに……」

「おお、鋭いですやん」

「エステルさん、これを……」

レインがエステルに手紙を渡した。

「あれ、この手紙……」

「その机にあったものです」

「ちよつと待て……。それ、俺らが受け取った封筒と同じとちやうか!？」

「う、うん!」

エステルは封を切つて手紙の中身を確認めた。

娘と公爵は預かった。返して欲しくば『お茶会』に参加せよ。

「あ、あんですつて〜!？」

「こ、公爵閣下が……!？」

「『お茶会』の場所はやっぱり王都やったか……。そこに書いてある娘つてのは誰か分かるか？」

「はっ……!」

エステルは辺りを見回した。

「レン!? レン、どこにいるの!？」

エステルは3階に上がった。

「どうやらその子が掠さらわれたみたいやな……。エステルちゃんの仲間か？」

「ううん、ある事情で預かっている子なんだけど……。よりにもよつてこんな事に巻き込んだんじゃうなんて……!」

「エステルちゃん……」

「エステル様……」

「……………」

「ごめん、フィリップさん……。ひょっとしたら公爵さんもとばっちりを受けたのかも……」

「いえ、そうとは限りません。仮にそうだとしてもこんな時間まで1人きりで遊び呆けている閣下の責任です。どうかご自分を責めないでください」

「そうやで、エステルちゃん。まずは手紙の『お茶会』が何なのか突き止めるのが先や！」

「う、うん……」

エステルは手紙を読み直した。

「そういえば『お茶会』って特務兵の残党の話が出たときにエルナソンさんが言ってたような……。……って、ケビンさん。さっき手紙を読んだとき、『やっぱり王都やったか』とか言ってたな？」

「なんや、聞こえてたんか。んー、実はちよつとした事情があるんやけど……」

「……その事情はあたしから説明させてもらおうわ」

2階から上がってきたのは、あるうことがシエラザードだった。

「お、ナイスタイミング！」

「へ……シエ、シエラ姉!？」

「久しぶりね、エステル。ずいぶん大変なことになっているみたいじゃない?しかしケビンさん。お互い間に合わなかったみたいね」

「ええ、面目ないですわ」

「ど、どうしてシエラ姉がここに……。それになんでケビンさんと話を通じちゃってるわけ!？」

「あたしとアネラスが特務兵のアジトを発見したのは聞いていると思うんだけど……。ちょうどその時、この人と知り合ってたね。消えた残党の捜索に今まで協力してもらってたのよ」

「そ、そっか……。だから事情に詳しくかったんだ」

「へへ、そういうことや」

「シエラ先輩！」

アネラスが走って下から上がってきた。

「あ、アネラスさん!？」

「エステルちゃん!よかった、無事だったんだ!それにケビンさん

もこつちに来てたんですね!？」

「ああ、オレの方も間に合わへんかったけどな」

「で、下の通信器はどうだった？」

「駄目です……。パーツが抜き取られたらしくてすぐには使えそうにありません」

「とすると……」

シエラザードが3階の予備の通信器を確かめた。

「駄目ね、こつちも同じだわ」

「それって……『敵』が壊したってこと？」

「間違いないわ。一体、何を狙ってこんな事をしたのか……」

「そうだ、シエラ姉!この置手紙なんだけど……」

エステルはシエラザードたちに先ほどの手紙を見せながら事情を説明した。

「『お茶会』……。ようやく全てが繋がったわね。その子と公爵を掠ったのは特務兵の残党に間違いないわ。しかも背後には《身喰らう蛇》がいるはずよ」

「うん、あたしたちも変な機械に襲われたし……。でも『お茶会』に来い』ってどこに行ったらいいの……」

「とにかく心当たりを捜してみるしかないわね。アネラス。一つ頼まれてくれない？」

「はい、何ですか？」

「《エルベ離宮》の警備本部にこの事を連絡してきてほしいの。周遊道に現れた武装集団はおそらく陽動に間違いないわ」

「なるほど……」

「やはり狙いは王都やね」

「わかりました!それじゃあ離宮までひとつばしりしてきます!」

「アネラスさん、気を付けて!」

「うん、エステルちゃんもね!」

アネラスは急いでエルベ離宮に向かった。

「執事さんは悪いんだけどギルドで待機していてくれる?公爵閣下

は必ず取り戻すから」

「……かしこまりました。待機している間、皆さんの介抱をさせて頂きましょう。どうか閣下をお願いします」

エルベ離宮

「現在、周遊道北西エリアで第1〜第2小隊が展開中。まもなく包囲が完了します」

「南東エリアでは特務兵数名がロマル池のさらに向こうに逃亡中。第3〜第4小隊が追撃を続けています」

王国軍兵士がシード中佐に現状を報告した。

「ご苦労。現状を維持しつつ両集団の確保に努めてくれ」

「は！」

「しかし解せませんねえ……。一体、何を考えているのやら。まさか陽動のつもりですかね？」

ベルク副長が難しい顔をした。

「グランセル城には一個中隊を配備している。我々をここに留めたところで彼らに制圧するのは不可能だ。それとも我々の知らない切り札があるというのか……？」

「切り札、ですか？」

「失礼します！」

またも王国軍兵士が入ってきた。

「どうした？」

「要塞司令部への連絡は完了。ただ、遊撃士協会の王都支部への連絡ですが……。何かトラブルでもあったのか先方に通じない状態です」

「なに……？」

「いかがしますか？」

「ふむ、そうだな……。念のため保険をつかわせてもらうか。

副長、ここは任せた。私はしばらく通信室に詰める

「了解しました。して、どちらに連絡を？」

「もう一度、要塞司令部だ」

第9章 狂ったお茶会(27)

王都グランセル 南街区

「『お茶会』って……一体どこでやるんだと思う？」

「一番あり得そうなのはグランセル城だけ……。確か、かなりの数の兵士が詰めているはずよ。他を当たってみた方がいいわね」

「うーん、そうは言ってもこの街はごつつ広いしなあ。おおよその見当は付けないと……」

「一般人に知られない所だとは思いますが……」
全員が首をひねっている。

「あ……！」

突然、ジークがエステル元へやって来た。

「ジーク！」

「わわ、何や!？」

「ふふ、助っ人参上ね！」

「ピュイピュイ!ピュイ！」

「よ、よく判らないけど……。あたしたちを案内してくれるつもり？」

「ピュイ！」

ジークは西街区の方に向かった。

「西街区方面ってことね……」

「うん、行ってみましょ！」

「は……。自分ら、何か凄いなあ」

「まあ、私も最初は驚きましたけどね」

王都グランセル 波止場

「はっ……！」

シエラザードが急に足を止めた。向かってきたのは特務兵率いる軍用犬だった。

「や、やけに凶悪そうなワンちゃんたちやねえ……………」

「特務兵の軍用犬……………」

「こんなものを飼い馴らすとは、つくづく特務兵というのはワケのわからない集団ですね……………」

「……………来るわ!」

「は、ビックリした。でも『お茶会』の場所はここで間違いないみたいやね」

「ええ、相手がそれを証明してくれましたね」

「うん……………そうね!」

「さあ、慎重に進むわよ!」

波止場の倉庫

「お、お前ら……………。一体どういうつもりだ!こんなことをしてタダで済むと思っているのか!??」

倉庫の番をしていたダンケとフィリオが特務兵に脅されていた。

「フツ、元より覚悟の上だ」

「ケガをしたくなければ大人しくしているがいい。我々は一般市民に危害を加えるつもりはない」

「ただし……………邪魔をしなければ、だかな」

「ひ、ひいつ。命ばかりはお助けをつ!」

「一般市民以外には危害を加えるつもりってわけね」

エステルたちが倉庫に突入した。

「なっ……………」

「貴様ら……遊撃士か!？」

「一名は違うけどな」

「ケビン神父……私も遊撃士ではなく協力員という立場ですが……」

「あれ、そやっただけ？」

「やっど、見つけた……。ずいぶんと引っ張り回してくれたわね。

教会規約に基づき、騒乱・破壊活動などの容疑であなたたちを逮捕するわ!」

「さっさと降伏した方が身のためよ!」

「クソ……どうして気付かれた!？」

「まあいい、片付けるぞ!」

「おお!」

「ま、まあいい……。これで時間は稼げた……。あとは大尉殿にすべてをお任せするだけだ……」

「え……」

「じよ、情報部に栄光あれ……」

そのまま特務兵は気絶した。

「ちよ、ちよっと!？」

「アカン、気絶してもうた」

「ねえ、シエラ姉。『大尉』ってもしかして……」

「ええ……あのしぶとい女でしょうね」

「あんなたち……本当によく来てくれた!」

「ありがとう……君たちは命の恩人だよ」

ダンケとフィリオが感謝した。

「えへへ……どういたしまして。あれっ……」

エステルが奥に置かれていた新型エンジンに気が付いた。

「ああっ!」

「どうしたの、エステル?」

「なんかゴツそうなおーブメント装置やねえ。何に使うもんなんや？」

「これはアルセイユ用に開発された新型エンジンのサンプルです。不戦条約締結の時に帝国と共和国に渡されるので2つこちらに持ち込まれたのですが、この場に1つしかないということは……」

「ああ、こいつらの仲間が運搬車で持っていったんだ。この先にある波止場の方に……」

「あ、あんですって〜!？」

「嫌な予感がするわね……。波止場に急ぐわよ!」

「了解っ!」

「よしきた!」

「急ぎましょう!」

「フン、やはり来たわね」

カノーネ大尉がエステルたちを待ち構えていた。

「カノーネ大尉!」

「フン、元大尉ですわ。犬どもが騒がしかったからもしやと思って出てみれば……。遊撃士というのはよっほど鼻が利くみたいね」

「なめんじゃないわよ!あんな真似をしておいて!しかも関係ない子まで……。絶対に許さないんだからね?」

「何を言ってるのかしら?私はただ、公爵閣下の王位継承をお手伝いするだけ。部外者はすっこんでいなさい」

「はあ!?公爵さん!?あんたまた馬鹿なことを……」

「だ、誰がこのような無謀な計画に荷担するかっ!こ、こやつらは私のことを利用しようとしているだけだ!」

「うーん、何か本気で嫌がっつるみたいやねえ」

「元大尉さん、いい加減本音を言ったらどうかしら?本当の目的はリシャール大佐の解放でしょう?」

「ええっ!？」

「うふふ、そこまで判っているなら話が早い……。これより『再決起作戦』を開始する!あなたたち!2分間だけ持たせなさい!」

「イエス・マム!」

カノーネ元大尉たちが倉庫の中に入っていった。

「こら、待ちなさいよ!公爵さんとはもかくレンは解放してくれても……」

「エステルさん、それはひどいですよ……」

エステルが倉庫に突っ込もうとしたが、特務兵たちに阻まれた。

「大尉殿の決意と覚悟、邪魔させるわけにはいかん!」

「来い、ギルドの犬ども!」

「こ、この……」

「いい度胸ね……可愛がつてあげるわ!」

「く、くそっ……」

「何て奴等だ……」

「往生際が悪いわよ!ほら、とつとどきなさい……」

その時、倉庫の扉が内側からへこんだ。

「わわっ……」

「な、なんや!？」

「まさか……これが設計図の……」

「ははは……間に合ったようだな……」

「じよ、情報部に栄光あれ!」

そして、扉が吹っ飛んだ!

「きゃああっ!」

「こ、こいつは……」

中から出てきたのは戦車だった。

「せ、戦車……!?!」

「これが《オルグイユ》……」

「これはまた厄介なものを持ち出してきましたねえ……」

「どうかしら……この《オルグイユ》は？情報部が独自に開発していた最新鋭・高機動の導力戦車よ。火力は帝国製戦車の2倍
ほぼ警備飛行艇に匹敵するわ」

「なるほど……分かりました。グランセル城の会計士が言っていた
消えた予算はこれに使っていたのですね。しかし、今まで使えなかつたのは……」

「うふふ、お察しの通りこれを動かせるだけの高出力なエンジンが
なかったので完成一步手前で保管されたけど……。まさか《アルセイユ》の新型エンジンが手に入るなんてね。うふふ、空の女神はわたくしに微笑んだみたいね」

「ちょ、ちよつと……。そんなものを使って何をするつもりなのよ
っ!?!」

「言ったでしょう。公爵閣下の即位を手伝つと。そのためには女王
陛下に認めていただかなくてはねえ」

「ま、まさか……」

「狙いは城の女王様!?!」

「ははは!今ごろ気付いても遅いわ!この《オルグイユ》ならたやすく城門も粉碎できる!城詰めの部隊も敵ではない!お前たちはせいぜい指をくわえて見ていなさい!」

《オルグイユ》はグランセル城に向かって進んでいった。

「し、しまった……!」

「追いかけるわよ!」

エステルたちは《オルグイユ》を追いかけた。

「ふふ……完全に引き離せたようね。このまま城を占拠して女王陛下

下を拘束できれば……」

その時、《オルグイユ》に向かって砲弾が撃ち込まれた。

「な……！？」

「ふう……どうやら間に合ったようだな」

「お、王室親衛隊……！それに……ユリア・シュバルツッ！」

「久しぶりだ、カノーネ。まさかお前とこんな場所で相見えることになるうとはな」

「あなたたち……どうしてここに！？レイストーン要塞で飛行訓練をしていたのではなくて！？」

「シード中佐から緊急の応援要請があつてね。どうやらグランセル市街で変事が起こるのを読まれていたらしい。そこで我々が飛んで来たわけさ」

「くっ……ただの昼行灯かと思えば……」

「中佐はリシャル大佐と同じくカシウス准将の元部下だからな。侮ったお前のミスということだ」

「どうやらそのようね……。それで、あなた達。何をしようというのかしら？」

「なに……？」

「アルセイユに搭載された移動式の導力榴弾砲……。そんなものでこの《オルグイユ》に対抗できるとでも思つて？」

「対抗できぬまでも足止めくらいはできるさ。じきにシード中佐の部隊もこちらに到着するはずだ。投降した方が身のためだぞ」

「うふふ……。アーハッハッハッ！」

「……なにがおかしい」

「相変わらずね、ユリア……。真っ直ぐで凜とした気性は士官学校の頃のまま……。昔から顔を合わせるたびにいがみ合ってきたけれど……。わたくし、あなたのそういう所は決して嫌いではなかったわ」

「カノーネ……。それは私の方も同じだ」

「でもね……。リシャル閣下の解放を邪魔するなら容赦しないわ

「！」

「！！！」

「仕方ない……。1番、2番共に発射用意！戦車の足を止めるぞ！」

「イエス・マム！」

王室親衛隊隊士が導力榴弾砲にエネルギーを充填した。

「撃て」

コリア大尉が号令した時、周りの導力が全て停止した。戦車に積まれた《ゴスペル》の効果だった。

「な……。！？」

「だ、だめです！機能停止しました！」

「くっ……。導力停止現象か！？だが、そんな事をすれば肝心の戦車だって……」

しかし、《オルグイユ》の機能は停止していなかった。

「ば、馬鹿な！どうして動ける！？」

《オルグイユ》は導力榴弾砲に向かって砲弾を放った。

「なっ……」

「周囲の導力器を停止しながらも接続した機体は動かせるユニット……。うふふ……。予想以上の力ですわね」

「くっ、カノーネ……。その《ゴスペル》はいい……」

「うふふ、ある筋から入手したのよ。『実験』を手伝つのと引き換えにね」

「な、なによあれ！？」

「新型ゴスペルを使った《身喰らう蛇》の実験……。！こ、こんな形でやるなんて！」

「ちっ……。マズいな。アレが動いている間はアーツの類も使えへん。こうなったら……。奥の手を使っしかなさそっや」

「へっ……。！？」

「何か秘策があるのですか？」

「エステルちゃん、シエラの姐さん、それにレインの兄さん。今からやる事が成功すれば少しの間だけ《ゴスペル》を停止させることができるかもしれない。そのスキに戦車を足止めするで」

「なんですつて!？」

「そ、そんなことできるの!？」

「確率は五分と五分……。せいぜい3人とも女神に祈つといてくれ」
ケビン神父は懐から杖を取り出した。

「あ……。それって確か!？」

「『封じの宝杖』……。ダルモア市長が持ってたご禁制のアーティファクトや!」

ケビン神父は《オルグイユ》に突進した。

「喰らえッ!」

そして《ゴスペル》に『封じの宝杖』を叩きつけた。

「きゃあああつ!」

まばゆい光が辺りを包む。

「しよ、照明が戻った……。導力停止現象が止まったのか!」

光が消えた時にはあたりの導力が戻っていた。

「そ、そんな……。あなた、一体何をしたの!？」

「へへ、大したことはしてへんよ。アーティファクトが壊れる時に解放される膨大な導力を叩きつけてやっただけや。さすがのゴスペルもショートしたみたいやね」

「ば、馬鹿な……」

「ケビンさん、ナイス!」

「やったわね、神父さん!」

「見事な判断でした」

「いや、それほど」

「くっ……。だからどうしたというの!ゴスペルなど使えなくてもお前たちごとき敵ではない!《オルグイユ》の力見せてやるわ!」
再び《オルグイユ》を動かすカノーネ。

「ユリア大尉！ゴスペルがショートした影響で戦車の機能も低下し
とるはずや！足止めするなら今しかない！」

「そうか……わかった！」

「ユリアさん、よろしく！」

「先生直伝の剣技、見せてもらおうわ！」

「頼みましたよ、ユリア大尉！」

「フツ……心得た！」

《オルグイユ》の破壊作戦が始まった。

第9章 狂ったお茶会(28)

「や、やった……!?!」

「ああ……。完全に足止めできたようだ」

「くっ……。やってくれたわね……」

「カノーネ、お前の負けだ。今度こそ潔く投降してくれ」

「ふざけるなッ!こんな事で閣下の解放を諦められるものですかッ!」

カノーネは自ら戦闘することを挑んだ。

「ユリア!遊撃士ども!これで最後よ!いざ尋常に勝負なさい!」

「戦車まで使っておいてムシがいい気がするけど……。いいわよ!やってやるうじゃない!」

「お前との決着を付ける時が来たようだ……。……行くぞ、カノーネ!」

「くっ……。うっ……。リシャール閣下……。申しわけ……。ありません」

「はあはあ……。こ、これで決着だ……」

「さ、さすがにクタクタ……」

「はあはあ……。れ、連戦やったもんなあ」

「ふう……。何とかなつたみたいね……」

「お、終わったのか……?」

デュナン公爵が《オルグイユ》から出てきた。

「あ、公爵さん……?」

「なんや……。戦車に乗せられてたんか?」

「うむ、まあ……。今回ばかりはお前たちに礼を言わねばなるまいな……。感謝の証に、私の秘蔵する傑作劇画セットを譲ってやる

う！」

「え、遠慮しときマス……。でも、まさか公爵さんに感謝されるなんてね」

そこでエステルはあることに気付いた。

「レンは！？レンは無事なの！？」

「い、いきなり何なのだ……。何だ、そのレンというのは？」

「女の子よ！白いドレスを着た！戦車の中にはいないの！？」

「そ、そやつら以外には私しか居なかったが……」

「ちよつと！レンをどうしたのよ！？どこに閉じ込めてるの！？」

「……？なにを言っている……？」

「こ、この期に及んですつとばけるんじゃないわよ！あんた達がギルドから掠った女の子に決まってるじゃない！」

「エステルさん、彼女に聞いたところで戻っては来ませんよ」

「え……？何を言っているの、レインさん……」

「レンさん！そこにいるのでしょうか！？出てきてはどうですか！」
レインが倉庫の上に向かって叫んだ。

「うふふ。エルベ離宮のかくれんぼの時といい、なかなか鋭いのね、お兄さん」

「……………え」

「うふふ、こんばんは。月がとつてもキレイな晩ね。今宵のお茶会は楽しんでいただけましたかしら？」

「レン……。な、なんでそんな所に登ったりして……。あ、危ないじゃないの！？」

「……………」

「まったくもう……。ほんとネコみたいなんだから。今、助けてあげるからちよつとそこで待ってて……」

「エステルさん……。いいですが、よく聞いてください。レンさん

は 《結社》の一員です」

「……………うそ」

「うふふ、本当よ。《執行者》No. XV。《殲滅天使》レン

そんな風に呼ばれているわ。ちょっと品がなくてあまり好きじゃないけど」

「……………」

「クスクス。お兄さん、あなただけはレンのことに気付いていたよ
うね？それに……………ずいぶんと《結社》のことを追いかけている
ようね？何が目的なの？」

「……………。レンさん、あなたは……………6年前のあ
る教団の事件を知っていますよね？あなたはその関係者だったので
すから……………」

「……………」

「私はその事件をずっと追いかけているのです。そのために《結社》
《のある人物》あなたもよく知っている人物を捜しているの
ですよ」

「そう……………。でもレンは何も話す気はないわ」

「ええ、構いませんよ。最初からあなたに聞くつもりはありません
でしたからね。しかし、どうしてあの時以来《結社》に……………いえ、
これも聞かないことにしましょう」

「うふふ、あなたは《結社》のことについてよく知っているみたい
ね。でも、《結社》の計画は知らないようだし、知ったとしても止
められないわよ？」

「それについては否定しましょう。何があっても止めて見せますよ」

「クスクス。言うじゃない。あなたたちに私たち《執行者》を止め
られるかしら？」

「こ、こんな子供が《身喰らう蛇》の一員だと!？」

「うふふ。《結社》に子供も大人もないわ。使えるか使えないか、
それだけ。レンはとっても使えるの。昔の《漆黒の牙》みたいだね」

「……………」

「そ、そんじゃあ……………アレか？オレに手紙を出したのは嬢ちゃんや
って言うんか!？」

「ええ、レンよ。脅迫状を9通。教会のお兄さんに1通。情報部の

お姉さんに一通。そして、エステルに一通。全部で12通　　う
ふふ、何だか手紙を書いてばかりね。レーヴェ、誉めてくれるか
しら」

「……！今、『レーヴェ』と言いましたね。彼はどこにいるのです
!？」

「うふふ。それは教えられないわね」

「こ、この状況を全部作り上げたというの……」

「だってレンは、みんなをお茶会に招待した主人だもの。出席して
くれたお客様を退屈させるわけにはいかないわ。とつても頑張った
んだから」

「……だったら……。だったら、パパとママは？レンのお父さん
たちは一体どうしちゃったのよ!？」

「???ああ、何だ。まだ気付いてなかったのね。うふふ、実はレ
ンってけっこう凄いのかも……。それともエステルたちがニブイだ
けなのかしら。そこのお兄さんを除いて」

「あ、あんですってえ」

「うふふ、怒っちゃイヤよ。……これの事でしょ?」

レンの隣にハロルド夫妻が現れた。

「あ……」

「こんなのレンのパパとママじゃないわ。もう用済みだから……こ
うしちゃおっと!」

レンは持っていた大鎌でハロルド夫妻の胴体を切り裂いた。

「なッ!？」

「ああ?あ、あ、あなた……。何をやってんのよおおおっ!」

「エステル、落ち着きなさい!血が出てないでしょう!」

「え……あ……」

エステルはハロルド夫妻を調べた。

「……………ホ……………ホントだ……………」

「《結社》が造った自動人形……………しかも人間そっくりなヤツか……………。とんでもないで、ホンマ……………」

「うふふ、レンが側にいないと人間らしく操れないんだけどね。でも『人形の騎士』のペドロにも負けない自信はあるわ。あ、でも今回は、ユーカイされたりお茶会の主人になったりしたから……………ティア姫の役も多かったかしら?」

「じよ、冗談キツイで……………」

「さてと、ほんとのパパとママを呼ばなくちゃ。来て　　《パテルⅡマテル》」

レンがそう言うと同時にどこからともなく轟音が響き渡った。

「な、なにこの音……………」

「皆さん、上に気を付けてください!」

そしてすぐに巨大なロボットが地上に降り立った。

「なああっ!?!」

「ひいっ!?!」

「何て大きさ……………!」

「な、なんやコイツ!?!」

ロボットは《オルグイユ》から《ゴスペル》を取った。

「あっ……………」

「《ゴスペル》を!?!」

「これがレンのパパとママ。パパのように大きくなってママのように優しいの。それ以外のパパとママなんていない」

「あなたは……………」

レインが口をかみしめた。

「も、目標を発見!」

「わわっ、何あれ!?!」

すると、眠らされていたギルドのメンバーとシード中佐率いる王国軍兵士が到着した。

「きよ、巨人!？」

「まさか……!？」

「ど、どうなつてやがる!？」

「レ、レンちゃん……!？」

ギルドのメンバーとシード中佐たちは困惑している。

「みんな……」

「うふふ、睡眠薬の効果も時間ピッタリだったみたい。昔ヨシユアに教わった通りね」

「!!!!!!」

「ホントはね、エステルのこと殺しちゃおうかなつて思ったの。だって教授が、ヨシユアが帰つてこないのはエステルのせいだって言つたから」

「え……」

「でも、楽しかつたから今回だけは許してあげるわ。うふふ、特別なんだからね?」

「ま、待つて、レン!」

「レ、レンちゃん!どーいうことなのっ?」

「うふふ、テイータもバイバイ。なかなか楽しかつたからまた一緒にアイスでも食べましょ。それでは皆様……今宵はお茶会に出席して頂き、まことにありがとうございます」

レンがそう言うと《パテルⅡマテル》が深夜の大空に飛び立っていった。

「レーン!!!!!!」

ただエステルの叫び声がこだましていた。

その後、王国軍の警備艇によつて夜通しの搜索が行われたが……結局、少女を乗せた巨大な人形兵器の行方は掴めなかつた。

第9章 狂ったお茶会（29）

翌日 エルベ離宮

「カノーネ君。頼むから話してくれないか？あの少女はどういう形で君たちに接触してきたんだ？そして君たちは、どの程度《結社》の存在を知っている？」

シード中佐が一室でカノーネを尋問していた。

「……………」
しかし、カノーネはいつこうに口を開こうとはしなかった。

「カノーネ……。意地を張るのもいい加減にしろ。このままではお前はおろか、お前の部下たちの罪も重くなる。それは本意ではあるまい？」

「フン、彼らもわたくしもとつくに死ぬ覚悟は出来ている。その程度の脅しに屈するものですか」

「軽々しく死ぬなど言うな！お前も見ただろう！あの巨大な人形兵器を！あんなものを使う連中が王国に潜入しているのだぞ！？事態の深刻さが分からないお前ではあるまい！？」

「……………」
「カノーネ君……。リシャール大佐はある意味、高潔な愛国者だった。何者にもリベールの自主独立を脅かされなことを望んでいた。その事だけは私も真実だと思う。そして今、リベールに新たな暗雲が忍び寄ろうとしている……。彼がその事を知ったらどう思うか考えてもらえないか？」

「……………るさいですわ……………」
「なに？」

「……………うるさい、黙れ！」
カノーネが怒鳴った。

「リシャール閣下のお気持ちをもちともらしく語ったりするな！閣下を追い落とすことによってその地位を手に入れた輩がっ！」

「……………」

「カノーネ、貴様！」

「貴女もそうよ、ユリア！昔からのライバルが落ちぶれたさまを眺めるのじゃさぞかし愉快でしょう！？ならば笑いなさい！いい気味だと嘲笑うがいいわ！」

「……………」

「わたくしが今まで泥をすすって生きてきたのは閣下を助けるため！それが叶わなくなった今、わたくしが生きる意味などない！さつさと銃殺にでもするがいいわ！」

「おいおい…………。馬鹿なことを言いなさんな」

入ってきたのはカシウスだった。

「邪魔させてもらうぞ」

「准将…………！？」

「ど、どうしてこちらに……………」

「今回に事件について陛下と相談したいことがあってな。それとは別の用事があって先ほど王都に到着したばかりだ」

「そうでしたか……………」

「ご多忙の中、お疲れ様です！」

「カシウス・ブライト…………。諸悪の根源が現れたわね…………。貴方もわたくしを…………嘲笑いに来たというのかしら？」

「やれやれ、嫌われたものだ。これでもリシャールに負けなくらいの男前だと自負してるんだがなあ」

「ふ、ふざけるなアアツ！貴方さえいなければ…………閣下は…………リシャール閣下は……………」

「コホン、准将…………。あまり彼女をからかわないでもらえませんか？」

「え……………」

「今のは……………」

「ま、まさか……………」

カシウスの後に入ってきたのは、服役姿のリシャールだった。

「……………あ……………」

「リ、リシャール大佐!？」

「……………お久しぶりです」

「久しぶりだね。シード中佐、シュバルツ大尉。それに……………カノーネ君もな」

「あ……………あ……………」

「服役中の身であるが准将にわがままを言ってここに連れてきていただいた。どうしても君と直接、会って話がしたかったんだ」

「……………わたくし……………と?」

「ああ……………。すまない、カノーネ君。私の傲慢と視野の狭さが君たちを巻き込んでしまった。前途有望で有能な若者たちを犯罪行為に荷担させてしまった。そのことをずっと謝りたくてね」

「おやめください、閣下! わたくしたちは自分の意志で……………」

「いいや、これは私の責任だ。君たちは、私の方針の元、動いてもらっていたに過ぎない。その意味では今回の事件も私の責任と言ってもいいだろう」

「そ、そんな……………」

「だから……………ここに改めて宣言しよう。只今をもって王国軍情報部は解散する。以後、その任務は軍司令部に引き継がれることになるだろう。カノーネ君……………今まで本当にご苦労だったね」

「……………あ……………」

「これでもう……………君が無理をする必要はない。私など助けるために命を賭けなくてもいいんだ。だから死ぬなどと……………哀しいことを言わないでくれ」

「リシャール……………閣下……………。……………うつつ……………あああ……………。うあああああ……………!」

遊撃士協会グランセル支部

「そうですね……。ええ……。わかりました。それでは宜しく願います」

「どうだった、エルナンさん？」

「ええ、カノーネ元大尉が事情聴取に応じたそうです。詳しい事情が分かったらギルドにも教えてくれるでしょう」

「そっか……」

「あの強情そうな女が話をする気になったなんてね。どんな手を使ったのかしら？」

「ま、そっちの調査は王国軍に任せておきましょう。俺たちは俺たちで情報を整理したいところだ」

「そうですね……。では、まずは今回の仕事の報酬をお渡しするとしましょう。細々とした依頼への対応も併せて査定しておきましたよ」

エステルは仕事の報酬を受け取った。

「あの、エステルさん。本当にレンちゃんは《結社》の……」

クローゼがエステルに尋ねた。

「うん……。《執行者》の1人で《殲滅天使》って名乗ってた……。本人が言ってたから間違いないわ」

「そうですね……」

「……………」

クローゼとティータはそれ以上聞かなかった。

「で、でもあんな女の子が《結社》の手先だなんて……。しかも《執行者》ってものすごい使い手なんだよね？何かの間違いじゃないかな？」

「ううん、ホントだと思う。ヨシユアも同じくらいの歳で《執行者》だったみたいだから……」

「……………」

「少し《結社》についてお話ししましょう。《結社》というのは《盟主》という人物を筆頭とし、7人の《使徒》と呼ばれる幹部がいま

す。その幹部の下に戦闘のエキスパートの《執行者》がいるのです。しかも《執行者》の年齢は様々……レンさんのように若い者もいます」

「そんな……」

「レンさんも言っていた通り、《執行者》は戦闘能力が秀でた者を抜擢していきます。お分かりのようにあの歳で《執行者》になれたのは彼女が天才だったからです」

「……。前に『ある人物』を捜しているって言ってたよね？それで《結社》について詳しいのは分かるけど、どうしてそんなにレンについて知っているの？」

「……」

「ねえ、答えてよ、レインさん！」

「彼女は、レンさんは私が追っている事件の被害者なのです……。これ以上はどうしても言えません……。それはあなたたちのためでもあり、彼女のためでもあるのです……」

「レインさん……あなたは……一体何者なの……？」

「それについては自ずと判ることになるでしょう。今はただ協力員として手助けさせてください」

「……」

「今は、この状況を整理するのが先決だ。人には話したくないものがあるだろ？」

「うん、わかった……」

「しかし、徹底的に振り回してくれたわね。カノーネに《ゴスペル》を渡して戦車を使った再決起を唆したのもあの子だったみたいだし……」

「各方面に脅迫状を送ったのもあの子だったらしいな……。一体何のためだったんだ？」

「なんとなく、だけど……。そうした方が面白そうだったからじゃないかな？」

「なに……？」

「レンは今回の実験を『お茶会』に見立ててたわ。そしてあたしたちを含めた大勢の人間を参加させるために色々準備して招待した……。そんな気がするのよね」

「……マジかよ。脅迫状の一件があったから王都に来たのは確かだが……」

「それすら彼女は読んでいたということになりますね」

「ふむ、あの仔猫ちゃんならそのくらいはやりかねないね。ボクたちを眠らせた睡眠薬の量もコントロールしていたみたいだし」

「ちょうど俺たちがあのタイミングで波止場に到着できるようにだな……。ふざけたマネしやがって……」

「えっと、やつぱりみんなあの子に眠らされちゃったわけ？」

「ええ……恐らく。レンちゃんが百貨店で買ってきたクツキーを頂いた直後でしたから……」

「そういえばレインさんは途中で抜けたんだよね？もしかして、睡眠薬が入っていたのを……」

「……正直に言いますよ。実は、分かっていました」

「おい、テメエ。なぜ分かっていたながら俺たちを止めなかったんだ。アガットがレインの襟首を掴んだ。」

「その事については謝ります。しかし、あの場で止めてしまったら全員、彼女に殺されてしまうかと思って……」

「はあ!？」

「なるほど……。もし眠らずに全員波止場に駆けつけていたら全員まとめて殺されていたのかもな」

「ええ、彼女も『お茶会』に参加させるのが目的であって私たちを殺すのが目的ではなかったはずですよ」

「ケツ、そこまで判っていないながらあえて言わなかったのかよ……」

「しかし……痛い失態だったな。彼女が殺すつもりで毒でも使われていたら全員死んでいたのかもしれない」

「あ……」

「それは……俺たちの判断ミスだったな」

「いえ、それに関しては私の失態です。皆さんをバックアップする身としてもう少し気を付けるべきでした。本当に申しわけありません」

エルナンが謝罪した。

「や、やだな、エルナンさん。今回ばかりはあたしたち全員の責任だと思う。まさか《結社》があそこまでとんでもない連中だったなんて……」

「あの大きな人形兵器……。あんなの、おじいちゃんでも造るのは難しいと思う……。造れたとしても……。あんな風に動かせるなんて……」

「……しかも……。あのレンちゃんが……」

「ティータ……。もう、元気出さないよ！今度会ったら、絶対にあの子を《結社》から抜けさせるんだから！」

「ふえっ……？」

「ちよ、ちよつと待て！」

「5年前、父さんはヨシユアを《結社》から抜けさせた……。だって娘のあたしが同じことできないはずがない！首根っこ掴んでも絶対に抜けさせてやるんだから！」

「お、お姉ちゃん……。うんっ、そうだよね！」

「ふふ……。さすがエステルさん」

「うんうん、その意気だよ！」

「フツ、気持ちいいくらいのおっぱいな前向きさだねえ」

「ったく……。軽く言っただけじゃねえぞ」

「ふふ、いいじゃないの。これがエステルなんだから」

「そうですよ、アガットさん。この前向きさがエステルさんなのですから」

「こつという前向きさは旦那以上かもしれないなあ」

「うーん、ええなあ。ますます惚れてしまいそうや」

突如ギルドに入ってきたのはケビン神父だった。

「あ……！」

「ケビン神父。お待ちしていましたよ」

「やー、遅れてスンマセン。今までカラント大司教にこっぴどく説教されてましてなあ。それで遅れてしまったんですわ」

「……………」
エステルはじつとケビン神父の顔を見ていた。

「どした？オレの顔に何かついとる？」

「あの一、今更といえは今更な質問なんですけど……………。結局ケビンさんって何者なの？」

「ええ、それがあつたわね。あたしたちも結局、はぐらかされたままだわ」

「もちろん普通の神父さんじゃないんですよね？」

「そやな…………。改めて自己紹介しようかな。七耀教会《星杯騎士団》に所属するケビン・グラハム神父や。以後、よろしく頼みますわ」

「《星杯騎士団》…………？」

「ほう、これは恐れ入った。まさかキミみたいな若者が《星杯騎士》だったとはね…………」

「オリビエ、知ってるの？」

「アーティファクトが教会に管理されているという話は聞いたことがあると思うが…………。その調査・回収を担当するのが《星杯騎士団》と呼ばれる組織さ。メンバーは非公開ながらかなりの凄腕が選ばれるらしい」

「へえ、詳しいですよん。残念ながらオレは騎士団でもペーパーの新米でしてなあ。凄腕ちゆうのは過大評価ですね」

「アーティファクトの回収…………。それじゃあ、あの時使ったダルモア市長の杖って…………！」

「ああ、あれは王国軍から正式に引き渡されたもんや。教会とリベールの間にはアーティファクト回収の盟約が結ばれているさかいな。それを無断で壊してしもうたんで大司教さんに説教されたんやけど…………」

「そ、そうだったんだ…………。でもあの場合、ああするしか方法はな…………」

「かったと思っただけど」

「ええ、手段を選んでいる場合じゃなかったと思っわよ」

「へへっ。そう言ってくれると助かるわ。まあ、そんなわけでこれからもよろしく頼みます。《身喰らう蛇》について何か判ったら情報交換してや」

「えっ……!?!」

「オレがリベールに来たのは《結社》の調査のためやからね。正確に言つと……連中が手に入れようとしとる《輝く環》の調査なんやけど」

「!?!」

「《輝く環》……!」

「女神が古代人に授けた《七の至宝》の一つ……。グランセル城の地下に封印されていると思われていた伝説のアーティファクトですね」

「ええ、そうですね。どうもここ最近、大陸各地で《七の至宝》に関する情報を集めとる連中がいるらしくて……。教会としても、その動向にはかなり目を光らせていたんですわ。そんな折、リベールの方から《輝く環》の情報が入ってきた。そこで、真偽を確かめべく新米のオレが派遣されたわけです」

「そうだったんですか……」

「それじゃあ《輝く環》って本当にリベールにあるわけ？封印区画に無かつたってことはただの伝説だと思つてたけど……」

「そもそも、どういう物かも判つてねえそうじゃねえか？」

「ま、そのあたりの真偽を調べるのもオレの仕事なわけや。今日来たのは、こちらの事情を説明してもらおと思つてな……。つまり、また何かあつた時はお互い協力しようつてこつちゃ」

「なるほどね……。うん、こちらも望むところよ」

「そうだな。こちらとしても助かるぜ」

「これも何かの縁だし、困つたことがあつたら連絡して」

「おおきに！ほな、今日のところはこれで失礼させてもらいますわ。」

またなく、みなさん！」

ケビン神父はギルドを出ていった。

「行っちゃった……」

「オリーブ工とは違った意味で毒気を抜かされる神父さんね」

「フツ、ボクに言わせればまだまだ修行不足かな。もう少し優雅さが欲しい所だね」

「あんたの世迷言のどこに優雅さがあるってゆーのよ」

「しかし《輝く環》ですか……。《結社》が各地で《ゴスペル》を使った実験をしているのと何か関係があるのでしょうか？」

「そうですね……。その可能性は否定できません。ちなみに、今回の事件で彼らは3つの地方で《ゴスペル》の実験を行ってきたことになりました。この分だと、残りの地方でも実験が行われるかもしれないね」

「そっか……。王都での騒動も片づいたし移動した方がいいのかしら」

「てことは、ロレント地方かボース地方になるな……」

その時、ギルドの通信器が鳴った。

「はい、こちら遊撃士協会、グランセル支部です。……」

「……。なんと、そうですね。……了解しました。こちらも注意しておきます。ええ、それでは」

「エルナンさん、どうしたの？」

「あの雌ギツネの取り調べでも終わったか？」

「いえ、それとは別件です。どうやら昨夜、ボース地方に空賊団の残党が現れたそうです」

「ええっ!？」

「また残党騒ぎですか……」

「情報部に空賊団……やたらと忙しい夜だったんだ。で、一体どこに現れたんだ？」

「以前彼らがアジトにしていた《霧降り峡谷》の砦だそうです。現在、軍の飛行訓練場として使用されているそうですが……。彼らは

そこに保管されていた空賊艇を奪って逃走したそうです」

「なんですって……！」

「ほほう、ミユラーが受け取りに行ったあれか……」

「ちょ、ちょっと待ってよ。何だかあまりにもタイミングが良すぎない？もしかしてそれも《結社》が絡んでいるとか？」

「可能性は否定できませんね。その意味では、この次に皆さんに向かっていただくのはボース地方がいいのかもしれない」

「確かに……」

「いいんじゃないかしら。現時点ではロレントとボースのどちらで事件が起こるのか判らないしね」

「うん……。って、シエラ姉も一緒に来てくれるわけ？」

「情報部の残党のケリがついてあたしたちの仕事も一段落したわ。敵は相当強いみたいだしあたしも助太刀しようと思ってる」

「やった！」

「へッ、《銀閃》の手並み、とくと拝見させてもらっぜ」

「ふふふ、シエラ君がついにボクの元に来るんだね」

「シエラザードさん。よろしく願います」

「頼りにしていますよ」

「ええ、こちらこそよろしくね」

「あ、もしかして……アネラスさんも一緒とか？」

「えへへ……私は残念ながら。そろそろクルツさんたちが強化訓練から帰ってくるんだ。そちらのチームに入れてもらっつもりなの」

「そうなんだ……」

「チームってことはやはり《結社》対策かい？」

「はい、《結社》の拠点を搜索することになりますと思います」

「拠点の搜索？」

「これまでの動きから見て《結社》は国内の何らかの拠点を築いている可能性は高そうです。そこを叩かない限り、根本的な解決にはなりません。今後は王国軍と全面協力して搜索活動を行う必要があるでしょう」

「確かにあの大きな人形兵器はメンテナンスが絶対に必要だし……。ちやんとした施設がどこかにあると思います」

「へっ、結社対策チームがもう1つ必要になるのも当然か」

「うーん、そうなるとクルツさんのチームにも戦力が必要になりそうだし……。アネラスさんを取られちゃうのも仕方ないかあ」

「えへへ、ごめんね。《結社》の拠点を見つけたらエステルちゃん
の力も借りることになると思うから。その時に一緒に戦おう？」

「うん……そうね！」

リベール王国某所

「うふふ、イノシシみたいな飛行艇はぜんぶ振り切れたわね。ありがとう、《パテル」マテル》」

「よく帰ったな、レン」

「レーヴェー！」

やってきたのは銀髪の青年だった。

「うふふ、ただいま。言われた通りちゃんと実験してきたわ」

「ああ、ご苦労だった。しかしずいぶんと派手にやったものだな」

「だって今回は、人を殺しちゃダメって言われたんですもの。つまらないからせめて賑やかにさせてもらったの。おかげでとっても楽しいお茶会が開けたわ」

「ふふ……そうか。実験の成果はどうだった？」

「そうね。悪くないんじゃないかしら。教会のお兄さんの裏ワザに邪魔されちゃったけど……。動作も安定していたし充分実戦で使えると思うわ」

「ふむ、そうか」

「でも《ゴスペル》って量産はできないんでしょう？兵器として使えるかどうかはちょっと微妙だと思っただけど」

「量産する必要はないからな。今回の実験にしてもあくまで新型の

《ゴスペル》の潜在能力を測るのが目的だ。別に兵器を造ることが目的じゃない」

「あら、そうなの。まあいいわ。あんまり興味はないしね。ねえ、それより……ヨシユアはまだ見つからないの？」

「ああ……。攪乱用に放たれた人形がすでに何体もやられたそうだ。おそらくあいつの仕業だろう」

「ふーん、さすがね。レンもかくれんぼは上手だけどヨシユアには敵わないし……。あーあ、つまんない。どうして意地を張って結社に帰ってこないのかしら？」

「さてな……」

「そういえば教授がエステルでヨシユアが帰ってこないって言うてたけど。エステルも、ヨシユアのこと捜してるみたいなのよね。どういうことなのかしら？」

「レン……。あまり教授の言うことを鵜呑みにしない方がいい」「どうして？」

「真実というのは見方によって変わるものだ。たとえば月の顔が様々な形に喩えられるように」

「ウサギさんとか、カニさん？」

「ああ。教授が語る真実とレンにとっての真実は別物だ。実際に見て、感じたことからレンなりの真実を掴むといい」

「うーん、難しくてよく分からないけど……。レン、エステルたちのことわりと気に入っちゃったかも。こんど会ったとしてもいきなり殺したりはしないわ」

「それでいい」

銀髪の青年はレンの頭を撫でた。

「偉いぞ、レン」

「えへへ……」

「フフ、ご苦労だったね」

「教授……。それにカンパネルラ！」

「ご機嫌よう、レン。どうやら王都でかなりお楽しみだったみたい

じゃない？」

「うふふ、まあね。あなたが来るって分かっていたら絶対に招待してあげたのに。とっても盛り上がったのよ」

「ふふつ、それは残念だなあ。僕の方は、遊撃士のお姉さんたちに人形劇を見てもらったけど……さすがに君のお茶会ほど盛り上がりはしなかったかな」

「はは、またの機会に誘ってもらおうといいだろう。しかしレン……随分とエステル君のことを気に入ったみたいじゃないか？」

「うふふ、まあね。教授の言っているようなイヤなお姉さんじゃなかったわ」

「はは、私は別に、イヤな人間とは言っていないさ。むしろ、とても好感が持てる魅力的なお嬢さんだと思うよ。ただ、ヨシユアが戻ってこないのは彼女が原因であるのも確かだね。そうだろう、レーヴェ？」

「確かに……一因であるのは否定しない」

「どうだろう、レン。エステル君が仲間になったら君は喜んでくれるかな？」

「な……」

「エステルを仲間……うふふ。いいわ、とっても楽しそう！かなりの実力不足だけど鍛えればモノになると思うし……。それにエステルがいたらヨシユアも戻ってくるわよね？」

「フフ、もちろんさ」

「あはは、さすが教授。ホントいい趣味してるよね」
カンパネルラが愉快に笑った。

「戯れが過ぎるぞ、教授……。いくら貴方といえど、本人の意志を無視して結社に入れることなどできないはずだ。それが《盟主》の定めた《身喰らう蛇》の掟だろう」

銀髪の青年が教授を睨んだ。

「フフ、言われるまでもない。《蛇の使徒》たるこの私がそんな事をするとも思つかい？君やヨシユアにだって決して強制はしな

「ただらうっ？」

「……………」

「第一、そんなことをしてはせつかくの楽しみが台無しだ。あくまで自発的に仲間になってもらわないとね」

第9章 狂ったお茶会(30) (前書き)

この話で『第9章 狂ったお茶会』が終了します。いかがだったでしょうか？

第9章 狂ったお茶会（30）

朝 王都グランセル南街区

「さてと……次はボース地方ね。一通り準備を済ませたらさっそく発着場に行こっか？」

「まあ、空賊の事件については王国軍が捜査しているはずだ。緊急性も無さそうだしすぐに行く必要はねえだろう」

「なるほど。残った仕事を片付けてから出発してもいいってことね
エステルたちは残った仕事を片付けてからグランセル空港に向かうことにした。」

グランセル空港

「いらつしゃいませ。ボース市に向かう遊撃士様御一行ですね？」

「あ、はい、そうです」

「エルナン様からすでに運賃は頂いております。乗船手続きをなさいますか？」

「手続きをしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうグランセルでやり残したことはねえだろうな？」

「うん、大丈夫よ」

「かしこまりました。では、ギルドに連絡して他の方も呼びますね」

エステルたちは乗船手続きをしてから定期船の到着を待つことにした。

セシリア号が到着してエステルたちが船に乗ろうとした時、

「間に合ったか……！」

走ってやって来たのはナイアルとドロシーだった。

「あれ、ナイアル……それにドロシーじゃない？」

「エステルちゃん……」

こころなしかドロシーの顔は浮かなかった。

「は、ギルドを訪ねたらすでに出発したって聞いてな。慌てて追いかけたんだがなんとか間に合ってよかったぜ」

「えっと、どうしたの？ 昨晚の事件についてなら一通り話したはずだけど……」

「いや……。ちょいと個人的にお前に知らせたいことがあってな。

離陸までの時間、俺たちに付き合ってくれねえか？」

「あたしと？ えっとシエラ姉……」

「いいわよ。話してらっしゃいな。あたしたちは先に席を取っておくから」

「うん、よろしく」

「ごきげんよう。ナイアルさん、ドロシーさん」

「さよーなら！」

エステルを除くギルドのメンバーが船に乗り込んでいった。

「それじゃあ時間もないし話を聞かせてもらおっかな……」

エステルが背後に気配を感じて振り返るとオリビエが立っていた。

「って、何でオリビエがちゃっかりと残っているわけ」

「フツ、ボクのこととはそこらへんに転がっている石コロだと思ってくれたまえ。さ、話を始めるといい」

「この男は……」

「ずいぶん自己主張の激しい石コロだな」

「姿が見えないと思ったたらやっぱりね」

シエラザードがすかさずやってきてオリビエを掴んだ。

「ちょ、ちよつとシエラ君……」

「はいはい、さっさと座席につきましようね」

ずるずるとオリビエを引きずって行ってしまった。

「何というか相変わらずな兄さんだな……」

「あはは、まあね」

「……………」

ドロシーはずっと黙っている。

「ドロシー。何だか元気なさそうね。確かポーヌ地方に取材に行つてたんだっけ？」

「う、うん……。今朝戻ってきたんだけど……。あ、あのね、エステルちゃん」

「あ、思い出した！たしか霧降り峡谷にある空賊のアジトに行つたのよね。今は軍が飛行訓練の基地に使っているという……。あれ、それって……………」

「ようやく気付いたか。昨夜、空賊団の残党に襲撃された基地つてわけだ。こいつ、ちょうど空賊艇が奪われる現場にいたらしくてな」

「そ、そうなんだ……。それじゃあ、わざわざ情報提供に来てくれたのね？えへへっ、気が利くじゃない」

「ま、確かに情報提供ではあるんだが……………」

「へ？」

「まあいい。ドロシー、渡してやれ」

「は、はい……。あのね、エステルちゃん。あんまり悪いように考えたらダメだからね？写真つて、全ての真実を映しているわけじゃないから」

「ど、どうしたのよ？真面目な顔しちゃって……………」

「これ……。わたしが昨日撮った写真」

エステルはドロシーから1枚の写真を受け取った。

「これって……。空賊艇とあのボクっ子よね。で、こっちにいるのは……………」

そこでエステルの言葉が止まった。

「……………」

エステルが黒髪の少年の姿に目を疑った。

「……………」

今の所、この写真は王国軍には提出しないつもりだ。もちろん、誌面に載せる気もない。どうするかはお前の判断に任せるぞ」

第10章 インターミッション ヨシユア(1)

霧降り峡谷 王国軍飛行訓練場

「どうぞ、こちらです」

守備隊長がミュラーを案内していた。

「……ほう」

ミュラーが空賊団の飛行艇、《山猫号》を見て驚いた。

「ふむ……手入れが行き届いている。王国軍の方でしたっけりと整備してくれたようですね」

「はは、何度か飛行訓練に使用させてもらいましたから。私も2回ほど操縦しましたよ」

「いかがかな？実際に操縦してみたの感想は」

「いやあ、速度と機動性は我が軍の警備飛行艇以上です。確か、3年前に発表されたラインフォルト社製の高速飛行艇でしたな。失礼ながら、飛行艇といえばリベル製と思っていたので正直驚かされましたよ」

「帰国の警備艇と比べると装甲は心もとないし、武装も多く積みませんがね。かといって偵察機にするには製造コストがかかりすぎる。正直なところ、あんまり軍用には向かない船ですよ」

「ほう、そうなのですか。ふむ……いい船なのにもったいない気がしますな」

「本国ではもっぱら、貴族や資産家の道楽として使われているそうです。例の空賊団も、元々は同じ事情だったのでしょう」

「確か……《カプア男爵家》でしたかな？」

「元、男爵家です。借財で領地を失ったことにより既に爵位も剥奪されています。実は、この船も抵当に入っており債権者が引き渡しを要求していましたね」

「な、なるほど……。色々と事情があるそうですね」

「いずれにせよ、元帝国貴族が貴国で悪行を犯したのも事実。申し

わけなく思っています」

「はは、お気になさらずに。ところで、引き取りはいつ頃になりそうですか？」

「早ければ数日中に。もつとも、そちらも色々忙しそうな様子ですが」

「はは……。クーデター事件の残党ですね。所詮は逃亡者たちの最後の悪あがきにすぎません。心配なさらずともすぐに逮捕できるでしょう」

「うわ、前来た時と少し雰囲気違いますね」

突然、階下から賑やかな声が聞こえてきた。ドロシーの声だった。

「ああっ、空賊艇！？へ、まだこんな所に置かれていたんですね」

すかさずカメラを取り出すドロシー。

「ん、いいですね。夜の照明に照らされた姿もとってもキュートです」

そしてシャッターを連射した。

「おいおい、嬢ちゃん。できたら撮影する前に許可を取っちゃくれねえか？」

「ああっ！」

全く無視して別のところに走るドロシー。

「月明りに照らされた真夜中の霧降り峡谷……。ん、なんて幻想的で可愛いのかしら。はい、チーズ？」

「だ、だからよ……」

兵士も呆れている。

「……彼女は？」

「はは、マスコミの人間ですよ。先ほど、この訓練場に押しつけてきたんです。確かに予約は入っていたんですがこんな時間に訪ねてくるとは……」

「なるほど……」

「ああああっ！？」

2度目のドロシーの驚き。

「へ〜、見たことのない軍服を着てらっしゃいますね〜。それに背もおっかしいですし〜。」

「どちらの部隊に所属されているんですか〜?」

「……いや、自分は……」

「あつ、申し遅れました〜。《リベール通信》っていう雑誌のカメラマンをしているドロシー・ハイアットです。雑誌の特集で、この訓練場の写真を撮りに来たんですよ〜」

「……エレボニア帝国軍所属、リベール駐在武官のミュラーだ」

「エレボニアの軍人さん!? うわ〜、お目にかかるのわたし初めてです〜。10年前の戦争では王都に住んでいましたから〜」

「そ、そうか……」

「隊長、よろしいですか」

王国軍兵士が守備隊長のもとにやってきた。

「なんだ、どうした?」

「司令部からの連絡です。例の残党の動きについて大きな進展があったそうです」

霧降り峡谷 飛行訓練場の裏口

「はあ〜、眠い眠い。早く交替時間にならないかね」

裏口を守っていた兵士の2人が暇を持て余していた。

「第2種警戒体制つてのがこんなにヒマだったなんてな。さっきの嬢ちゃんがまた来てくれるといいんだが」

「あのメガネの子かよ? お前、変わった趣味してんなあ」

「確かにユニークだったけど、なかなか可愛かったしさ……。お近づきになりたいな〜って」

「はは、だったら休憩時間に声をかけてみるよ。しかし……情報部の残党つてのは何を考えてるのかね。何でもラヴェン又廃坑に隠れ

ていたそうじゃないか」

「さーな。元エリート部隊の考えている事なんて俺たちなんかに判るわけないって」

「……ご苦労、2人とも」

「こ、これは隊長」

「見回りご苦労様です」

「ああ、そのまま聞いてくれ。どうやら情報部の残党がグランセルに現れたらしい。カノーネ元大尉を始めとする全メンバーは逮捕されたそうだ」

「へえ、そうでしたか!」

「それじゃあこれで警戒体制は終わりですね?」

「いや、それなんだが……。『空飛ぶ巨大人形』というのが王都に現れたらしくてな。その捜索が行われているらしい」

「そ、空飛ぶ巨大人形!?!」

「なんです、そりゃあ?」

「私にも分からんよ。いずれにせよ、夜明けまでは警戒体制を続けるとの指示だ。悪いがこのまま宜しく頼むぞ」

「うっ……はい」

「……了解しました」

残念そうに答える兵士。

「はあ……。まったく冗談じゃないぜ。なんなんだよ……。『空飛ぶ巨大人形』ってのは」

「さあな……。ま、いずれにせよもう襲撃の危険はないだろう。後は交替時間まで適当に立っていればいいさ」

「そうだな……。あれ?」

1人の兵士が何かに気付いたようだ。

「なんだ、どうした?」

「いや、何か聞こえたような……」

周りを見渡し、警戒したが……

「あ……」

もう一方の兵士が睡眠薬を嗅がされ倒れた。

「お、おい！どうしたんだ……。う……。う……」

振り返った兵士も同じく眠らされた。

「……………」

睡眠薬を嗅がせたのはヨシユアだった。

「へへ、やるじゃねえか」

「お見事。あつという間だったな」

「ふ、ふん……。なかなかやるじゃない」

隠れていたカプア3兄妹がヨシユアの前に出てきた。

「……大したことじゃないさ。気が緩んだ兵士を眠らせるなんて造作もない」

「あー、はいはい。あんたに可愛げを求めたボクが馬鹿だったよ」

「しかし、本当に《山猫号》はここに置かれてるんだろっな？つきり例の要塞あたりに運ばれたと思っただろっな？」

「調べた限り間違いない。飛行訓練に使われているから整備もされているはずさ」

「へへっ、ありがたいね。ただ、機体を動かすには《山猫号》の起動キーが必要だ。手に入れるアテはあるのか？」

「たぶん、先ほどの守備隊長が持っていると思う。帝国軍に飛行艇を渡す時に一緒に渡すつもりだろうっからね」

「力づくで取り戻すわけだね」

「ただし、殺さない方向で。必要以上に王国軍を敵に回さない方がいい。巡回中の兵士についてもなるべく隠れてやり過ごそう」

「まったく……。無茶言ってくれるよね。まあたしかに、ボクも殺しは反対だけど」

「へへ、当たり前だ。俺たち《カプア一家》に殺しと暴行はご法度だからな」

「はあ、ホント俺たちって悪党になりきれないと言っか……。あの少尉の言った通りかもな」

「……………ふふ」

「な、何がおかしいのさ？」

「いや……あまり時間はない。そろそろ始めよう」

「う、うん……」

「いよいよだな……」

「おーし……気合を入れるぜ！」

カプラー家とヨシユアの《山猫号》奪還作戦が幕を開けた。

第10章 インターミッション ヨシユア(2)

守備隊長の部屋

「ここは……俺らが使っていた部屋だな」

「へえ……通信器なんか設置したのか」

「誰もいない……。ちよつと不用心だね」

「どうやらここが守備隊長の部屋みたいだ。ここで待ち構えていれば……」

その時、ヨシユアが気配を察知した。

「……戻ってきた。入ってきた所を叩くよ」

「え……」

そしてすぐに守備隊長たちが入ってきた。

「な……」

「え……」

「……遅い」

ヨシユアたちが先制攻撃を仕掛けた。

「あつた……これだ」

ヨシユアが守備隊長の懐から山猫号の起動キーを取り出した。

「おお、呆気なく見つかったな！」

「さ、さすがに冷や汗をかかされたけど……」

「……ねえ、ヨシユア。前にボクたちと戦った時、あんた、手加減していたわけ？」

「?どつという意味だい？」

「だってあんた、めちゃくちゃ強いじゃん。正直、あの時とは比べ物にならないくらいにさ」

「別に手加減はしていない。“スイッチ”が入っていないから」

いさ」

「スイッチ?」

「詳しい説明は省くけど……そのスイッチが入ると僕は極限まで目的合理的な思考・行動をすることが出来る。ただ、それだけの違いなんだ」

「う、うーん……。判ったような、判らないような」

「使える力は同じ……。ただ、その力をケタ違いに有効活用できるってわけか」

「そう思ってくれて構わない」

「ヘッ、大したもんだぜ。今のお前なら、あの特務兵の隊長ともやり合えるんじゃないか?」

「《結社》の手先だったっていうロランズ少尉のことだな」

「いや……。それはありえない」

ヨシユアがきつぱりと否定した。

「僕的能力は隠密活動と対集団戦に特化されている。一対一の戦いで《剣帝》に敵うはずがない」

「《剣帝》……?」

「それってあの少尉のこと?」

「ああ……。彼がいる限り、僕は決して正面から《結社》に挑めない。《漆黒の牙》の名の通り……。暗闇から牙を突き立てるだけさ」

「……あ」

「おめえ」

「何と言つか……。ずいぶんハードな話だな」

カプア一家が目を伏せた。

「……つまらない話をした。時間が無い、先を急ごう」

第10章 インターミッション ヨシユア(3)

地下2階 兵士の詰所

「さてと……。そろそろ交替の時間かねえ」

「ぼちぼち出かけるとするか」

兵士たちが部屋から出ようとしていた。

「(おい……。どうだ?)」

「(まずいな……。キールさん、僕が渡したS2弾を1つくれないか?)」

「(お、おお……)」

キールがヨシユアに怪しげな弾薬を渡した。
そしてヨシユアが部屋にそれを投げ入れた。

「んっ?」

「な、なんだ?」

たちまち白い煙で部屋が満たされた。

「う、うおっ!?!」

「うわっ」

そして、兵士たちが次々と倒れていった。

「だめだ……。気が遠く……」

どうやら即効性のある睡眠弾だったようだ。

「す、すごい威力……」
「S2弾……睡眠ガス弾かよ」
「普通に出回っているものよりかなり即効性が強いみたいだな。中身は独自にブレンドしてるだろ？」
「……まあね。調合法は企業秘密だけど」
「ケチ」
「まあいい。とっとと先に行こうぜ」

地下1階 一室

「は、こんなご馳走が取材で食べられるなんて。ドロシー、めちゃ感激です」
ドロシーとミユラーが食事をしていた。
「へへ、そう言ってくれると腕を振るった甲斐があるぜ。エレボニアの旦那はどうだい？」
「ああ……文句なく美味い。帝国軍で出る食事と比べたら天地の差と言えるだろうな」
「ほう、そうなのか。エレボニア軍ってのはどんなモンが出るんだい？」
「そうだな……。塩辛いだけのコンビーフ。煮崩れした味気のない豆。カビの生えかかった黒パン。この3つは必ず出でくるといってほしい」
「うへえ……」
「うわ、可哀想ですね。そんな料理ばっか食べてるから戦争しなくなっちゃうんですか？」
「む……」
「わはは。嬢ちゃん何気にキツイなあ」
「まあ、さすがにそれはないと信じたいところだが。ただ、巨大な兵力を維持するために糧食の質を必要最低限に抑える……そういう

発想は確かにあるだろう」

「は、厳しいんですね……」

「あんたらも苦勞してんだねえ」

「……………」

「??? (ねえ、どうしたの?)」

「(ああ……どうやら食事中みたいだ。しばらく動かないだろうし、

このまま通り過ぎよう)」

「(うん、わかったよ)」

「(とつと先に進むか)」

地上

「おお……!」

ついに《山猫号》を見つけたヨシユアたち。

「愛しの《山猫号》……ホント会いたかったぜ〜!」

「見た感じ、ちゃんとメンテナンズされてるね!」

「へへ、さすがリベール軍。飛行船の扱い方が判ってるな」

「嬉しいのは分かるけど、あまり時間がないからね。起動キーも手に入れたし発進準備をしてくれないかな」

「はいはい、分かってるって」

「つつたく……。少しくらい浸らせろよ」

「それじゃあ中に入るっか」

ヨシユアたちは《山猫号》に乗ろうとしたが、

「……………いたぞ!」

王国軍の兵士が追い付いてきた。

「げげっ……………!」

「チツ、気付かれたか！」
「空賊ども!？」
「い、いつの間に……」
「こいつらが隊長たちを気絶させたのか!？」
「仕方ない……」
「おねんねしてなよ！」
ヨシユアたちは力づくで解決することにした。

「ふう、一丁あがりだね」
「すぐに後続が来るはずだ。ここで食い止めるから貴方たちは発進準備を頼む」

「おお！」
「任せときな！」
ドルンとキールが《山猫号》に乗り込んだ。

「ジョゼット……君は行かないのか？」
「《山猫号》の発進なら兄貴たちがいればできるさ。ボクはここでアンタのサポートをしてやるよ」

「だが……」
「へへっ……。クールに振る舞ってるけどアンタ、やっぱり甘いよね」

「え……」
「今までも、何だかんだでボクたちを助けてくれたし……。ここでアンタを見捨てて逃げるとか思わなかったわけ？」

「……これでも人を見る目はあるつもりだよ。特に、君たちみたいなお人好しの人間に関してはね」

「お、お人好しはアンタだろっ」

「やれやれ……。騒がしいので来てみれば」

「え……」

「《カプア空賊団》……。このタイミングで現れたか。しかも君が同行していたとはな」

現れたのはミュラーだった。

「……覚えていましたか」

「こ、こんな所にエレボニアの軍人が!? あんたの知り合いなの!?」

「……顔見知り程度だよ。多分、不戦条約の前に船を引き取りに来たのだろう」

「お察しの通りだ。その船を奪われようが我々としても痛くもないが……。こうして居合わせた以上、見過ごすわけにもいかない」

ミュラーが剣を引き抜いた。

「改めて名乗らせてもらおう。帝国軍第7機甲師団所属　ミュラー・ヴァンダール少佐だ」

「くっ……!!」

「気を付けて……。一筋縄じゃいかなさそうだ」

「君ほどではないと思うがな。行くぞ!」

ミュラーと交戦!

「はあはあ……。な、何で倒れないのさ!？」

「^{マスター}達人クラス……。しかも姓がヴァンダールか。オリビエさんの正体、大体、見当がつかましたよ」

「それを言うなら君の正体もなかなか驚きだ。ハーメルの遺児、ヨシユア・アストレイ君」

「……!!」

「え……?」

「やはりか……。あのお調子者のカンもたまには当たるらしい」

「……」

「ヨ、ヨシユア!？」

「聞かせてもらいましょうか……。どうして貴方たちがそれを知っているのかを……」

「どうやら本気にさせてしまったようだ……。ならば俺も全力で応えよう」

ヨシユアとミユラーの闘気がぶつかった。

「ちよ、ちよっと……!!」

その時、《山猫号》の発進準備が整ったようだ。

「準備完了だ! 2人とも飛び乗れ!」

「うんっ!」

ジヨゼットが《山猫号》に飛び乗った。

「ほら! 何やってんのさ!」

「……………くっ……………」

ヨシユアが口をかみしめて飛び乗った。

「な……………!!」

「に、逃がすな!」

兵士たちが発砲した。

「はわわ、シャッターチャンスです!」

ドロシーは飛びゆく《山猫号》に対してシャッターを切った。

「くそっ!」

「隊長殿はどうした!?!」

「ハーケン門に連絡を取れ!」

兵士たちはせわしなく動き始めた。

「あれれ……………? 今の男の子ってどこかで見たことあるようなく」

ドロシーがカメラをチェックした。

「はわわっ、どういうこと!? ナ、ナイアル先輩に相談しなくち

やっ……………!!」

「命拾いしたのは果たしてどちらの方が……。ふふ、まだまだ俺

も未熟だな」

ミユラーは階段を降りながら独り言を言っていた。

「しかし《ハーメル》か……。どつやらあのお調子者の手伝いをするしかなさそうだ」

第11章 霧魔の標的(1)

定期船 《セシリア号》

「ふう……。……はあ……。」
エステルは船の外でドロシーから渡された写真を見ながらため息ばかりついていた。

「（これって……やっぱりヨシユアだよな……。マフラーなんかしちゃってなくにカツコつけてんだか……。ちゃんとご飯とか食べてるのかな……）」

エステルは顔を上げた。

「（やっぱりヨシユアはリベールのどこかにいる……。空賊たちと協力しながら何かをしようとしている……。でも……だったらどうして……。どうしてあたしを……あたしたちを頼ってくれないの？）」

そして再び写真に目を落とした。

「（ヨシユアのバカ……。軍の基地を襲撃するなんて無茶なことをしちゃって……。こんなに冷たい……出会った時みたいな目をして……。それに……。それに……）」

そこでエステルは写真から目を背け、

「どうしてボクっ子なんかと仲良さそうに映ってるわけ!?!」

エステルが絶叫した。

「エステル?」

「ふえっ!?!」

エステルが反射的に写真を隠した。

「シエラ姉……」

「なんだ、ここにいたんだ。フラツといなくなるから心配しちゃったじゃない。どうしたの? 乗り物酔いでもした?」

「あ、うん……心配しないで。体調が悪いわけじゃないから」

「そっか。ふう、今日もいい天気ね。こんな穏やかな空の下で怪し

げなことを企んでいる連中がいる……。まったく馬鹿げた話だわ

「うん……」

「……ね、エステル。一人で無理する必要はないのよ？」

「え？」

「記者さんたちの話は何だったかは聞かないけど……。今のあなたには頼っていい仲間が何人もいるわ。もちろん、あたしも含めてね」

「……………」

「もちろん、あんたが一人で心の整理をつけるのもいいわ。ただ、あたしたちは全員、あんたの力になりたいと思ってる。それだけは忘れないで」

「シエラ姉、あたし……………」

「ふふ、話はそれだけよ。ボースに到着するまではまだまだ時間はあるけど……。途中でロレントに着陸するときにはちゃんと席に戻るよようにね」

「うん……………」

そうしてシエラザードは船内に戻っていった。

「頼る、か……。ちよつとみんなと話をしてみようかな……………」

くアガット

「エステル……………どうした？」

「あ、うん。いつもの船内散策よ」

「そうか……。ヘッ、いつもいつもよく飽きねえもんだな」

「ふんだ、いいじゃない。ボースまではまだ時間があるんだし」

「ま、一眠りするくらい時間はあるかもしれないねえな。しかし、次はボース地方か……。ルーアン、ツァイス、王都と来て今度は何が起きることやら」

「うん……。何も起こらないのが一番だけど、それも行かなさそうだし……………」

「ああ……。とりあえずボースに着いたら空賊どもの調査でも始めるか」

「えっ……!?!」

「……何を驚いてやがる。連中が結社の手先っていう可能性はゼロじゃねえだろう。お前が言い出したことだぜ?」

「あ、うん、そうだけど……。よ、よくよく考えてみたらその可能性は低そうかなって」

「……………」

「ほ、ほら、あたしって何回か連中とやり合ってるし。結社の手先になるほどの悪党じゃないかなって……」

「……ま、いいけどな。詳しい話はボースに着いたらルグラン爺さんから聞けるだろ」

「うん……そうね」

くジン

「おお、エステル。どこに行ってたんだ」

「あ、うん……。ちよつと風に当たりにね」

「そうか。そういえば、次に着陸するのはロレントって町らしいが……。確かお前さんの家があるんじゃないかったか?」

「あ、うん。正確に言つと、町中じゃなくて町外れに家が建ってるんだけどね。父さんのこだわりだったみたい」

「ほう、そうなのか。しかし、旦那が建てた家ってことはさぞかし粋な佇まいたたずなんだろうな」

「うーん……。どうなのかな? 粋かどうかはともかく住み心地はいいと思うけどね。あたしと父さんとお母さんと……。ヨシユアの思い出が詰まっているし」

「……………」

「……………」

ジンはヨシユアと聞いて目を伏せた。

「や、やだなあ、ジンさん。そんな顔しないでよ。ロレントで降りるんだっいたらジンさんを招待するところだけど……またの機会ということで」

「ああ、そうだな。……ところでエステル。ボースって街に着いたら俺の稽古にでも付き合わんか？」

「へ……突然どうしちゃったの？」

「王都じゃ眠らされてロクに働けなかったからな。なまった身体をほぐしたいんだ」

「あはは、そっか。うーん、ジンさんの稽古相手が務まるかどうか分からないけど……。あたしでよければ喜んで」

「おう、よろしく頼むぜ」

くクローゼ

「エステルさん……」

クローゼは展望室にいた。

「クローゼ。こんな所にいたんだ」

「はい……いい眺めだったので。エステルさんの方はまたお散歩みたいですね」

「あ、うん、何となくね。……」

「……」

そこでお互い黙ったが、先に口を開いたのはクローゼの方だった。

「……ヨシユアさん、どうかなさったんですか？」

「ええっ！？ど、ど、どうして！？」

「クス……やっぱり。ナイアルさんたちの話はそういう内容だったんですね」

「……。カマ、かけられた？」

「ふふっ……これでも女王候補ですから。駆け引きのたぐいはちょっとぴり通じているんです」

「はあ、敵わないわね。うん……確かにヨシユアの話だったわ」
「……ヨシユアさんは無事でしかもリベール国内にいる。でも、それを素直に喜べない何らかの事情がある……。そんなところでしょうか？」

クローゼは的確にエステルの内を当てた。エステルはただ茫然と聞いている。

「えっと、当たりました？」

「クローゼ……。洞察力、良すぎだつてば。充分、立派な女王様になれると思うんですけど」

「ふふつ、恐れ入ります。……でも、良かった。ヨシユアさんはご無事なんですね。それが分かっただけでも嬉しいです」

「うん……あたしはそれは嬉しいけど……」

……

「エステルさん？」

「ダルモア市長逮捕の時……市長が銃で脅した時のヨシユアの態度、覚えてる？」

「……はい」

「ヨシユアが今、あの時みたいな目をしてるって言ったら……クローゼ、どう思う？」

「あ……。……」

「ごめん、クローゼ。ちゃんと打ち明けられないのに思わせぶりなことを言っちゃって」

「いえ……いいんです。エステルさんの悩み、少し分かった気がしますから」

「そっか……。……。そ、それとは別にね……」

……

「え？」

「た、大した事じゃないのかもしれないけど……。こっちが散々心配してるのに女の子と一緒にって、どう思う？」

「……。その子の年齢は？」

「あたしと同じくらい」

「……………。何だかこ

う、納得のいかない気持ちが沸き起こってきますね」

「そ、そうだよね！？やっぱり納得いかないよね！？」

「ええ、もちろんです。ヨシユアさんたら……………一体何をやってるのかしら」

「まったくもう……………小一時間問い詰めてやりたいわ」

女性陣に変な誤解を持たれているヨシユアであった。

「ぷっ……………」

「ふふっ……………」

お互い顔を見ながら笑いあう。

「ありがと、クローゼ。ちょっとだけ気持ちがラクになった気がするわ」

「ふふ、どういたしまして。お役に立てたのなら嬉しいです」

「気持ちの整理がついたらみんなにもちゃんと話すから。それまで待っていてくれる？」

「はい、もちろん。……………それでは私、そろそろ席に戻りますね」

「うん、また後でね」

クローゼは座席に戻っていった。

く ティータ

「……………」

「ティータ。こんな場所でどうしたの？」

「あ……………エステルお姉ちゃん。あのね、ちょっと考え事をしちゃって……………」

「考え事？」

「うん……………。ねえ、お姉ちゃん。わたし、やっぱり頼りにならないのかなあ？」

「へっ……?」

「お姉ちゃん、なんだか悩んでるみたいだったから……。それって、わたしじゃお手伝いできないこと?」

「あ、うー……。参ったなあ。ティータにも見抜かれてたか」

「やっぱりそうなんだ……。わがまま言っただけで付いてきたのにわたし、何の力にもなれなくて……。……レンちゃんのこと引き留められなかったし……。わたし……。やっぱり足手まといだよね」

「ティータ……。バカね。そんなこと気にしてたの?」

「で、でも……」

「あたしは……。悩んでるっていうよりはちょっと混乱してるだけだから。他の人に頼っても何の解決にもならないから……。だから今はちよつと……。一人で考えさせてほしいんだ」

「お姉ちゃん……。わたしが今、お姉ちゃんの力になれることってないの?」

「もちろんあるわよ」

エステルがティータを抱き締めた。

「ふえっ?はわわっ、お姉ちゃん!？」

「ん、やっぱり落ち着くわね。あつたかくてスベスベで、何とも絶妙な抱き心地じゃのう」

「はう……。エステルお姉ちゃんってばあ」

「あたし……。ティータがいてくれて助かってるよ。もちろん、機械に詳しいとか専門的なことに関してだけでも……。……。ティータが笑ってくれるだけで頑張ろうって気分になれるのよね」

「え……」

「レンだって、ティータと一緒に楽しそうに遊んでいたじゃない? ひよつとしたら、あたしたちを騙す演技だったのかもしれないけど……。でも、全部が全部、ウソじゃなかったと思うんだ。きつとあの子に届いていると思う」

「そ、そうなのかな……。だったら……。わたしも嬉しいな」

「ふふっ。ようやく笑ってくれたわね。うんうん。やっぱりティー

夕は笑顔が一番！たまに見せるベソかいた顔も可愛いと言えば可愛いんだけどね」

「も、もう。お姉ちゃんだったら……。ありがとう、お姉ちゃん。そんな風に言ってくれて……。わたし、そろそろ席に戻るね」

「うん、また後でね」

レイン

「おや、エステルさん。どうしました？」

「うん、またちょっと風に当たろうと思って……」

「そうですね……」

そこでレインがエステルに唐突に尋ねた。

「エステルさん。本当にレンさんを結社から抜けさせる気なのですか？」

「えっ……？」

突然の質問にエステルは答えられなかった。

「あの波止場の時、彼女は6年前の事件の被害者だということを知っていましたね？詳しいことは言えませんが、彼女はその時、結社に拾われたのです。それ以来彼女がどう過ごしたか知りませんが、今や執行者となっています」

「そ、そんな……」

「その事件の後、私はレンさんについて調べました。彼女はその事件の関係者だったので重要なことが分かればいいと思ったのです。そこで私はレンさんの過去に衝撃を受けました。この先は非常に話しづらい事ですが……。……レンさんの両親は……。レンさんを捨てたのです……」

「！……！」

「どのような状況でそうなったのか判りませんが、今、レンさんには両親が存在しないのです。そんな彼女の苦しみは計り知れません。」

そのような過去がある以上、結社はレンさんにとっては唯一の居場所なのでしよう。今一度、問いましよう。エステルさん、本当にレンさんを結社から抜けさせる気なのですか？」

「……………」

エステルは言葉が出なかった。

「……………レンがどのような過去があったのかあたしには分からないけど……………。でも、今結社にいることは間違っていると思う。結社にいくことがレンのためには絶対にならない……………。レンが結社から抜けるつもりがないなら、レンのためにもあたしが無理やりでも抜けさせてやるわ！」

「そうですね……………。ふふ、やはりあなたは素晴らしい人ですよ、エステルさん」

「えへへ……………。大きなこと言っちゃったけど、どうしたらいいか分からないけどね」

「それでもいいのですよ。その気持ちがあれば、すぐには伝わらなくてもいずれ必ず届くはずですよ。頑張ってください」

「うん、ありがとう」

「……………レンさんもこれをきっかけに変わってくれればいいのですがね。今はただエステルさんを信じましようか」

第11章 霧魔の標的(2)

「……お待たせしました。まもなく本船はロレント市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」
「あ……」

「ほら、エステル。さっさと座りなさい。立ってたら危ないわよ」
「ん、そうね」

エステルは座席に座った。

「本日は飛行船公社をご利用いただき、まことにありがとうございます。ました。ロレントでお降りになるお客様はお忘れ物がないかご確認
きやつ」

客室乗務員の驚き声が聞こえると、いきなり飛行船の窓の外が白く
なった。

「えっ!?!」

「これは……」

「な、なんだこれは!どうしてこんな低い高度で雲の中に入ったり
するんだ!?!」

ペトロフ船長が突然の出来事に焦っている。

「い、いえ……これは雲というよりも……」

「管制塔より連絡がありました!どうやらロレント市一帯に突然、
濃霧が発生したようです」

「なんだと……!?!」

「な、なんなのこれ……」

「わあ……真っ白……」

「ふむ……雲の中にも入ったのかな？」

「そうかもしれないけど……。その割には高度が低いわね」

「飛行船の着陸時にはこういうことがよくあるのか？」

「いや、珍しいと思うぜ。少なくとも俺には経験がねえ」

「私もです……」

「……皆様、どうぞ落ち着いてください。管制塔からの連絡でロレント市一带に濃い霧が発生している事が判明しました。現在、着陸時の視界確保のため夜間のサーチライトの準備を発着場の方で行っております。今しばらくお待ちください」

「霧って……。確かにロレントにも霧が出るけどせいぜいモヤくらいだったよね？」

エステルがシエラザードに尋ねた。

「ええ……。こんな濃いのは記憶にないわ。……イヤな予感がするわね」

ロレント市

「うわ……真っ白だわ……」

「うん……。町の方が全然見えないね」

「定期船も霧が晴れるまで出航を見合わせるそうですね」

「この様子では霧が晴れるのはかなり時間がかかりそうですね。と
いうことは、ここで足止めということになりますね」

「ふむ……。ここはいったん降りてギルドに向かった方がいいわね」

「へッ、そうだな」

「えっ……。ど、どうして？」

「地元のお前さんたちが訝いぶかしがるような異常な濃霧……。《結社》
が絡んでいる可能性もあるだろう」

疑問に思うエステルにジンが説明した。

「あ……」

「フツ……。残る地方はボースとロレント。そして次はボースではなくロレントだったということかな？」

「ええ……。おそらく間違いないと思います」

遊撃士協会ロレント支部

「ふふ、まさかこんな時にあなた達が来てくれるなんて。確かボース支部に向かう途中だったのよね？」

「ええ、その通りよ。狙ったタイミングで足止めを食らっちゃたわ」「おかげでウチはとつても助かったけどね。それにしても……エステルと会うのは訓練場に行く時以来かしら？新しい仕事用の服もだいぶ板に付いたみたいね」

「そ、そっかな……」

「ジンさん、クローディア殿下、ティータさん、レインさんとは初めてよね？私、ロレント支部の受付を務めるアイナといいます。よろしくお願ひしますね」

「はい、こちらこそ」

「どうぞ、よろしくお願ひします」

「あのあの……よろしくお願ひします」

「はは、お前さんの噂は色々と聞かせてもらってるよ」

「あら……そうなんですか？ところでオリビエさん。そんな所でどっしたのかしら？」

オリビエは依頼の掲示板に身を隠してアイナと視線を合わせようとしなかった。

「ハッハッハッ……き、気にしないでくれたまえ。決してあの夜のことフラッシュバックするとかそういう訳ではないんだからね？」

「????？」

「ふふ……そっとしておいてあげなさい。そういえばアガットはア

イナと面識あるのよね？」

「まあな。ロレントにはあまり寄らねえから何度か会った程度だが」

「ふふ、今回はよろしくね。挨拶はこれくらいにして早速、状況を説明させてくれる？」

「ええ、お願いするわ」

そして、アイナが今のロレントの状況を説明し始めた。

「……霧が発生したのは今日の明け方くらいになるわ。最初はうっすらとモヤがかかった程度だったけど……みるみるうちに濃くなつて視界を遮るかきこもほどになったの」

「どういう原因で発生したのか現時点では分かりませんか？」

「ええ、今のところは。ロレント市の全域を覆っているのは確かですが……」

「霧にも色々種類があるからな。沖合いで発生して海岸に流れてくるものもあれば、盆地で発生するものもある」

「ふむ……王都地図を見るとロレントは盆地にあるようだね？」

「ええ、どちらかと言うと。単なる自然現象である可能性も否定できないわね」

「どちらにせよ……警戒はした方がいいみたいね。ポー入行きは中断してこのままロレント地方で様子を見た方がいいんじゃないかしら？」

「その方が良さそうだな。どのみち霧が晴れるまでは定期船も動かねえみてえだし」

「あ……その……」

「なんだ、エステル？」

「例の空賊事件はどうするのかになって……」

「そいつは元々、他に手がかりがなさそうだから調べてみようって話だっただろ？調査自体は王国軍がやってるし、俺たちが無理に行く必要はねえだろ」

「で、でも……」

「……なんだ。気になることでもあるのか？」

「あ、ううん……。そういうわけじゃないんだけど。でも……あたし……」

「……エステル。あんたの心当たりが何なのかは知らないけど……少し冷静に考えてみなさい」

「え……?」

「空賊艇の奪還事件はある意味、終わった事件よ。人質が取られたのならともかく、ギルドが動く緊急性もない。そもそも空賊がボース周辺に留まっている可能性も低いしね」

「そ、それは……」

「一方、こつちの異常現象は今、起こりつつある事件だわ。もしも《結社》の仕業だったらさらに何か起きる可能性もある。さあ……どちらを取るのが正しいの?」

「……………」

「……エステルさん」

クローゼは心配そうにエステルを見ている。

「あ、あの、シエラさん! たぶんお姉ちゃんにも事情があるんだと思うんです。だから、その……」

「……ううん、ティータ。シエラ姉の言う通りだわ」

「お姉ちゃん……」

「ゴメンね、シエラ姉……。あたし、ちょっと周りが見えていなかったみたい」

「謝ることなんてないわ。周りが見えなくなることは誰にだってあることだしね。あたしだってそうだし、そのアガツトなんて特にな」

「んだとオ?」

「でも、己を見失わずに常に最善の道进行搜索するのも遊撃士には必要な心構えよ。言うは易し、行つは難しなんだけどね」

「そのあたりに関しては俺もまだまだ修行中の身だな。旦那の足元にも及ばんだらう」

「そ、そうなの!??」

カシウスの娘であるエステルが驚いた。

「どんな逆境でも己を見失わずユーモアすら漂わせる芯の強さ……。以前、旦那がカルバードに来た時、何度も死地を助けられたもんだぜ」

「そうなんだ……」

「まあ、あのオヤジの域なんざ簡単に届くわけはねえからな。俺たちは俺たちなりに一歩ずつ進むしかねえだろう」

「焦る必要はないのですよ、エステルさん」

「うん……そうだね。アイナさん、ごめん。話を脱線させちゃって「ふふ、いいのよ。それでは話を進めさせてもらっけど……。現時点であなたたちに要請したい仕事は特にないの。何か起こった時のために待機してくれるだけでいいわ。家で待っていてくれてもいいのよ?」

「あ、うん。家には戻るつもりだけど……。それ以外に気を付けておくことってない?」

「うーん、そうね。強いて言うなら、街道の様子を調べてきてほしいくらいかしら」

「街道の様子を調べる?」

「さつきも言った通り、霧はロレント市全域を覆っているんだけど……町外れの方にも結構、広がっているみたいなの。今後のことを考えると発生範囲がどのくらいか知っておきたいのよね」

「ふむ、このまま定期船が使えない状態が続けば陸路を確保する必要があるわけか」

「ええ、そういうこと。南のエリース街道、西のミルヒ街道、北のマルガ山道。この3つの道で、どこまで霧が続いているか確かめてきてくれる?」

「了解。そのくらいお安い御用だわ」

「さて、そうなるか……。今回は、あたしとエステルが案内役になった方がいいみたいね」

「うん、そうね。ロレント地方なら大体知ってるし」

「仕方ねえ……とつと同行者を選びな」

「はあ……それにしても凄いわね。知り尽くしている町なのに迷っちゃいそうな気がするわ」

「そうならないように地図とコンパスがあるのよ。方向を見失ったら参照しながら進みましょう」

「うん、そうね。とりあえず、それぞれの道で霧の範囲を調べるとして……。クローゼ、ジンさん、レインさん。一度、家の様子を確かめに行ってもいいかな？」

「はい、お付き合いしますね」

「はは、早速招待させてもらうことになりそうだな」

「どのような家なのか、楽しみですね」

「さてと……。それじゃあ出発するわよ」

第11章 霧魔の標的(3)

ブライト家

「うーん……ここもかなり霧が出てるわねえ」

「あ……ここがエステルさんのお家ですね」

「はは、予想していた通り、何とも趣のあるたたずまいだな」

「ええ、家自体にその人の柄が現れているようです」

「うーん……そういうもんかしら。お茶くらいご馳走するからよかつたら上がっていつてよ」

「お茶の用意はあたしがするわ。あんたは屋根裏部屋に上がった方がいいみたいね」

「屋根裏部屋……なんで？」

「ほら、あれよ」

シエラザードが屋根裏部屋の天窓を指した。どうやらエステルがロレントに帰ってきて以来、天窓を開けっ放しにしていたようだ。

「あ……そっか。さすがにこの霧じゃ家の中が湿っちゃうわね」

エステルはすぐに屋根裏部屋に上がって天窓を閉めた。

「はあ……やっぱり家は落ち着くわ。外が霧だらけだから余計にそう思うのかもしれないけど」

エステルたちは紅茶を飲みながらテーブルで一息ついた。

「ふふ、それはあるかもね」

「しかし、シエラザード。なかなか勝手知りたる雰囲気じゃないか」
「ふふっ、そうね。この家とはずいぶん長い付き合いだし」

「あたしのお母さんが生きていた頃から……もう10年以上になるかな」

「ええ、そうなるわね」

「たしかシエラザードさんは旅の一座にいらつしやったとか。どんな風にエステルさんとお知り合いになつたんですか？」

「ふふ、それはね……」

「ちよ、ちよつとシエラ姉」

「いいじゃないの、昔の話だし」

シエラザードはエステルに構わず話し始めた。

「あれは12年前……。うちの一座がロレントに興行に来た時だったかしら。その頃のエステルは、今以上に好奇心旺盛な恐いもの知らずでね。興行の後、1人であたしたちの天幕に遊びに来ちゃつたのよ。……旅芸人の一座なんていわば『ヨソ者』じゃない？普通、興行以外で地元の人が近寄るなんてなかったから最初はみんな戸惑つてたけど……。まあ、とにかく物怖じしない子でね。毎日遊びに来るうちに、すぐにみんなに気に入られちゃつたわ。もちろん、あたしを含めてね」

「まあ、今のエステルさんを見れば充分頷けますね」
レインが笑った。

「うっ……」

「そんなある日、日が暮れてからエステルが帰ることがあつて……。仕方なく、あたしが家まで送つていったのよ。カシウス先生とレナさん エステルのお母さんと知り合つたのはその時だったわ」

「はは……そんなことがあつたのか」

「あ、あはは……。さすがに4歳の時だからあんまり覚えていないんだけど……。でも、その時からシエラ姉、巡業でロレントに来るたびにウチに遊びに来るようになったのよね」

「ふふ、そうだったわね」

「しかし、シエラザード。旅の一座にいたお前さんがどうしてリベールで遊撃士に？」

その言葉を聞いてシエラザードの顔が曇った。

「……色々と事情があつてね。8年前、遊撃士になろうと思つた時カシウス先生を頼ることにしたの。それ以来ずっとリベールにいる

わね」

「なるほど、そういついことか」

「あ、そういえば……。あの、その頃にはもうヨシユアさんもいたんですか？」

「あ、ううん……。ヨシユアが引き取られたのはその3年後くらいかな。シエラ姉が正遊撃士になるために王国中を回ってた頃だったよね？」

「ええ、そうだったわね。旅から帰ってきたら見知らぬ男の子を紹介されてね。さすがにちょっとビックリしたわ」

その後、エステルたちは雑談や世間話に花を咲かせ……。最後にお茶のお代わりをしてからブライト家を後にすることにした。

「さてと……。それでは再び街道の様子を調べに行きましょうか」
「うん、そうね」

「あ……」
エステルたちがエリーズ街道を進んでいくと、ある所で急に霧が晴れた。

「ほう……いきなり明るくなったか」

「霧の発生範囲はここまでのようですね」

「ふむ、ここの地点を記録すればいいですね」

「エリーズ街道、ロレント市からおよそ60セルジユの地点と……。霧の範囲内に魔獣はいないし、何とか安全は確保できそうね」

「うん、そうね。他の街道もこの調子で調べて行けばいいわけね」
次にエステルたちはミルヒ街道に向かった。

「あれ……そこにいるのは先輩たちですか」

前からやって来たのは、ロレント支部所属の遊撃士リッジだった。

「あら、リッジじゃない」

「リッジさん、お久しぶり」

「やあ、エステル。訓練場を出発して以来だね。アイナさんから聞いたよ。大変な仕事をしてるんだって？」

「うん、まあね。リッジさんの方は、ひよっとして護衛の仕事？」

「ああ、こちらのお客さんたちが王都に急用があるらしくてね。このままだと今日は定期船が運航しそうにないから僕が送っていくことになったのさ」

「なるほど、そうなんだ」

「ふふ、ご苦労さま」

「先輩たちの方こそ、霧の調査、ご苦労さまです。街道の状況はどうですか？」

「エリーズ街道の方はあまり霧は広がってないわ。少し歩いたらすぐに視界が開けるはずよ」

「ふう、助かりました。それじゃあ僕はこれで失礼します」

リッジは護衛の依頼人たちに声をかけた。

「それでは皆さん。王都に向けて出発しましょう。僕から離れないでくださいね」

「おお、よろしく頼むぞ」

「頼むわよ、遊撃士さん」

リッジは依頼人を率いて行ってしまった。

ミルヒ街道

「ふむ……霧が晴れたか」

「ミルヒ街道、ロレント市からおよそ80セルジュの地点と……」。

霧の範囲内に魔獣が徘徊してるから結構危険な状況かもしれないわ」

「一般人は街道に出ない方がいいかもしれません」

「うん……アイナさんに報告しましょ。さてと、これで残るはマルガ山道方面だけね」

マルガ山道

「やつと霧が晴れましたね」

「マルガ山道、ロレント市からおよそ140セルジュの地点と……」。

広範囲に発生してる上に魔獣も徘徊してるから危険だわ」

「うん、確かに。これで3つの街道で霧の発生範囲を調べたし……」。

そろそろギルドに戻ってアイナさんに報告しよっか？」

「ええ。そうした方が良さそうね」

エステルたちはギルドに戻ることにした。

第11章 霧魔の標的(4)

ロレント市

エステルたちがロレント市に到着した時、エステルが何かに気付いた。

「あれ……？」

エステルが周りを見回した。

「今……鈴の音が聞こえなかった？」

「ええ。遠くから聞こえてきましたね」

「ふむ……。なかなか雅な響きだな」

「誰かがどこかで鳴らしたのでしょ」

「うんうん。ウツトリしちゃったわ」

「……………」

しかし、シエラザードは何も言わずに驚いた顔で口を開けたままだった。

「あれ……。どうしたの、シエラ姉？」

「あ、ううん、何でもないわ。綺麗な音色だったから聞き惚れちゃっただけよ」

「なんだ、シエラ姉もか。鈴の音なんて珍しいけど、リノンさんの雑貨で新しく仕入れたのかしら？」

「そうかもしれないわね。それはともかく……これで霧が発生した範囲はだいたい掴めたわ。そろそろギルドに戻りましょう」

「あ、うん。アイナさんに報告しなくちゃ」

遊撃士協会ロレント支部

「みんなご苦労さま。まずは、報酬を支払わせてもらっつわね」

エステルは調査の報酬を受け取った。

「しかし、もつと漠然とした報告になると思ったんだけど……。そんなにはつきりと霧の境界が出来ていたなんてね」

「ええ……不自然と言えば不自然ね」

「実際、地図だとどんな風に広がってるの？」

「……ちよつと待ってて」

アイナは王国地図を取り出した。

「エリーズ街道方面に60セルジュ、ミルヒ街道方面に80セルジュ、マルガ山道方面に140セルジュ……」

アイナがエステルたちの情報を元に境界を書き込んだ。

「……こんな感じじゃないかしら」

境界はロレント市を中心に円状に広がっていた。

「うーん、これだとさすがに何も分からないか」

「そうですね……。霧の広がり方は、発生原因や風の流れで変化するそうですから」

「しかし、どうにもハッキリしねえ状況だな。結局、ここで待機しつつ有事に備えるしかねえってことか」

「うーん、そうなるわね。現状では王国軍も出動を決めかねてるみたいだし」

「あ、そういえば……。ねえ、ティータ！『霧除去装置』みたいな発明品、博士が造ったりしてないかな！？」

「ふえっ……！？うーん、えっと……。前に『除湿器』っていうのをおじいちゃんが発明したことがあったけど……」

「『除湿器』 名前の通り湿気を取り除く装置ってわけね。それって使えそう？」

「うーん、たぶんムリだと思うよ。屋外の大気进行处理するには何百台も必要になっちゃうし……。それだけ用意できたとしても一時しのぎにしかないかも」

「はあ……そう都合よくは行かないか」

「せめて『結社』が絡んでいる証拠でもあればいいんだが。連中の仕業にしては中途半端な感じもするしな」

ジンが腕を組んで悩んだ。

「中途半端っていうと？」

「これまでの事件だと《ゴスペル》が使われた時には『ありえない現象』が起こっていた。だが、今回の霧はそこまで大それたものとは思えなくてなあ」

「それは確かに……」

「フツ、それともう一つ。彼らは毎回、何らかの形で『メッセージ』を発していた。しかし、今回はまだそれが見受けられないようだね」

「メッセージ？」

「亡霊騒ぎ、サングラスの男、そして各方面に送られた脅迫状……。こちらに『怪しい』と思わせる挑発的なサインがあったということ」

「な、なるほど……」

「ふむ……確かに中途半端な気がするわね」

「……」
「シエラザードさん、さっきから浮かない顔をしています何か気づいたことでもありましたか？」

「……そのメッセージだけど。もしかしたら既に受け取っているかもしれないわ」

「え……？」

「ど、どういうこと？」

「た、大変じゃあ〜っ！」

突然、クラウス市長が慌てて駆け込んできた。

「し、市長さん!？」

「せいせい、はあはあ……。お、おお、エステル君……ずいぶん久しぶりじゃのう……」

「あ、うん。どうもお久しぶりです。でも、どうしたの？そんなに慌てちゃって……。……って、前にも似たようなやり取りがあったよ」

「市長さん、まずは落ち着いてちょうだい。何があったの？」

「あ、あつたもなにも……。ふむ、君たちの方は大丈夫だったよう
じゃな」

「?????」

「あの、どういふ事ですか？」

「……先ほど、うちのリタ君がいきなり倒れてしまったんじゃ。し
かも、同じようにいきなり倒れた市民が他にもおるらしい」

「!!--!!」

「なんですって!!--?」

第11章 霧魔の標的(5)

七耀教会 ロレント礼拝堂

エステルたちとクラウス市長はデバイン教区長に相談をして倒れた人たちの様子を見てもらった。

「一通りの家を回って見ましたがやはり全員、症状は同じですな……。呼吸も安定していますし、瞳孔にも異常はみられませんでした。ほとんど睡眠中と同じ状態ですのですぐに容態が悪化することはないでしょう」

「そ、そうですか……。不幸中の幸いと言つものじゃ」
クラウス市長は胸をなでおろした。

「ですが、このまま眠り続けたら体力の低下は避けられません。早急に対策を考えなくてはなりませんね……」

「うむ……」
「……」
エステルは真つ青な顔でうつむいていた。

「おい、大丈夫か？ひどい顔色をしているぜ」

ジンがエステルのことを気づかった。

「あ、うん……。まさかエリツサのお母さんやルックまでが倒れるなんて……。ちよつと驚いちゃって……」

「エステル……。気分が悪いんだつたらギルドに戻ってもいいのよ？それとも家に戻つて休んでる？」

「ううん……。へこんでられないもん。それで教区長さん。昏睡の原因は分かりそう？」

「残念ながら、今のところは……。ただ、教会秘伝の気付けが効かなかったことを考えると、毒や病気の類ではなさそうです。あえて言うなら何かに魂を囚われたような……。そんな印象を受けましたね」
「何かに魂を囚われた……」

「……」

シエラザードが目をつむりながら考え込んだ。

「とりあえず、昏睡した人の家を一通り訪ねた方がよさそうね。どのような状況で彼らが昏睡状態に陥ったか……。家族から聞いてみたら何か掴めるかもしれないわ」

「あ……。うん、分かった」

「エステル君、シエラザード君。今回の件は、ロレント市から正式にギルドに調査をお願いする。どうか原因を突き止めてみなを不安を取り除いてほしい」

「うん……。任せて」

「微力を尽くさせてもらおうわ」

「ねえ、みんな……。やつぱり……。《結社》の仕業だと思う？」

エステルが礼拝堂を出たところで尋ねた。

「ああ……。その可能性は高くなったな」

「協会の方にも判らない原因不明の昏睡状態……。『ありえない現象』と言えるかもしれませんね」

「しかも一度に4人もの人たちを昏睡状態に陥らせるとは……。到底考えられないことですね」

「やつぱりそうだよ……。それじゃあ、ひよっとして『メッセージ』もあるとか？」

「ええ……。確かめる必要があるわね。倒れた人たちのリストはちゃんと手帳にメモしてある」

「あ、ちよっと待って……」

エステルはブレイサー手帳を開いた。

「その4人の関係者を中心に街で聞き込みをしてみるわよ。一通り回ったらギルドに戻ってアイナに報告をすればいいわ」

「うん……！」

エステルたちは4人の昏睡者の関係者の聞き込みに向かった。

第11章 霧魔の標的(6)

市長邸 メイドのリタ

「まあ、エステル……それにシエラザードさん」

クラウス市長の妻ミレーヌがリタの介抱をしていた

「こんばんは。ミレーヌおばさん。市長さんから話は聞いてる？」

「ええ、今回の事件の調査をして下さるそうね。私でよかつたら何でも聞いてちょうだい」

「助かります。それではまず……リタさんの容態はどうですか？」

「ええ……まったく目を醒まさないわ。このまま朝になったら自然に目を醒ますといいのだけど……。今は様子を見るしかないわね」

「そっか……。リタさんが倒れたのはいつ、どのような状況ですか？」

「そうね……。あれは夕方の方の5時前だったかしら。私が下の台所から出ると玄関でリタさんが倒れていてね。慌てて書斎にいた主人を呼んでベッドまで運んでもらったのよ。でも、他にも同じようなことになった人たちがいたなんてねえ……」

「玄関で倒れていた……。その時、鍵はかかっていたの？」

「たしか……掛かっていなかったはずよ。霧の対策を相談するため主人を訪ねる人も多かったから」

「うーん……。おばさんが仕込みをしていたのはどのくらいの時間だったの？」

「そうね……30分くらいかしら」

「なるほど……。だいたい事情は分かりました。最後に1つだけ……。リタさんが倒れる前後……変わったことはありませんでしたか？」

「変わったこと……？」

「見知らぬ人が訪ねてきたとか、変な物音を聞いたとか……。思いつくならなんでも結構です」

「そうね……。変わったことというよりも印象的な事があったけど。台所で仕込みをしている時、かすかに鈴の音が聞こえたのよ」

「鈴の音……」

「それって……。あたしたちも聞いたアレ？」

「とつてもキレイな音色でリタさんが鳴らしたのかと思ったのだけど……。そういえば見当たらないわね。どこにやつちやつたのかしら？」

「……色々参考になりました。また何かあったらギルドに連絡をください」

「ええ、分かったわ。あなたたちも……。くれぐれも気を付けるのよ？」

「うん、分かった。ありがとね、ミレー又おばさん」

居酒屋 《アーベント》 トルタ

「あ、エステル。それにシエラザードさん？」

「エリツサがトルタの介抱をしていた。」

「こんばんは、エリツサ。どう、おばさんの様子は？」

「うん、気持ちよさそうに眠ってるだけなんだけど……。揺すつても声をかけてもぜんぜん起きないんだよね。教区长様は心配ないうって言うってくれたんだけど……」

「そっか……」

「あたしたち、市長さんの依頼で今回の事件の調査に来たの。協力してもらえないかしら？」

「あ、はい、もちろんです。何でも聞いちゃってください」

「それじゃあ……。まず、おばさんはいつどこで眠っちゃったわけ？」

「あ、うん……。時間は夕方の方の5時くらいだったかなあ。私とお母さん、外のテラスの椅子とかを片付けてたのね」

「テラスの椅子を？」

「ええ。この霧だと湿気で痛みそうじゃないですか？せつかく1階を目張りしたから椅子だけでも仕舞おうと思ってる」

「なるほど……」

「そうして片付けてる途中で私、お父さんに呼ばれちゃって。戻ってきたら、お母さんが椅子にもたれて眠っちゃってたの」

「そっか……。眠った現場は見えないわけね」

「うん……。それで私、お母さんに声をかけたんだけど起きなくて……。慌ててお父さんたちを呼んで2階のベッドに運んでもらって……。それで……。それで……」

エリツサは耐えられなくなり、下を向いて半泣きになった。

「エリツサ……」

エステルはエリツサを優しく抱き留めた。

「えへへ、ごめんね……。エステルたちが来てくれたから、ちょっと気が緩んじやって……」

「うん……。分かってる。大丈夫だから心配しないで」

「うん……。ありがと、もう大丈夫だよ。何か他に聞きたいことはない？」

「うーん、そうね。シエラ姉、何かある？」

「そうね……。お母さんが眠った前後に何か変わったことはなかった？見知らぬ人が訪ねてきたとか、変な物音を聞いたとか」

「見知らぬ人……。そういえば、お父さんに呼ばれて中に入る時なんですけど……。時計台から、女の人が出てくるのを見たんですよ」

「女の人……。ロレントの人間かしら？」

「うーん、霧が立ち込めてたから顔は分かりませんでしたけど……。不思議なデザインの服だったし、旅行者じゃないですかね」

「不思議なデザインって……。どういう所が不思議だったの？」

「うーん、黒くてゆつたりしててドレスみたいな服だったような……。やっぱり霧で霞んでいたから詳しくは分からないんだけどね」

「そっか……。でも重要な目撃情報かも。アイナさんに報告しなく

「ちゃね」

「ええ……そうね。ありがとう、エリツサ。色々話を聞かせてくれて」

「あ、いいえ。お勤めご苦労様です」

「おばさんのことはあたしたちに任せて。絶対に原因を突き止めて目を醒ましてもらうから！」

「うん……ありがとう、エステル」

アストン家 ルック

「あ……エステルお姉ちゃん」

「おやまあ……。ブライトさん家のエステルちゃんじゃないか」

「パットとマギー婆さんがルックの介抱をしていた。」

「えっと、こんばんは。ルック……大変だったみたいだね」

「うう、お姉ちゃん……。エステルお姉ちゃん!!」

いきなりパットがエステルに抱きついてきた。

「わわっ……。どうしたの、パット？」

「無理もないさ……。倒れたルックを見つけたのはこの子だったらしいからね」

「そうなんだ……。パット……大変だったね」

「うつく……。えつく……」

「マギーさん。お孫さんの様子はどうですか？」

「ああ、今のところグスリと眠ってるだけさ。なあに、心配せずとも朝になれば起きてくるだろう。何たって元気だけが取り柄の腕白小僧だからねえ……。このまま目を醒まさないなんてそんな馬鹿げたことがあるもんか……」

言葉の裏に不安を隠せないマギー婆さん。

「マギーさん……」

「……。ねえ、パット。ルックが眠った

時のこと、あたしに教えてくれないかな？」

「…………え…………」

「あたしたち、市長さんに頼まれて今回の事件の調査を調べているの。パットが手がかりを教えてくれたら事件解決に一步步近づけると思う。だから…………お願い」

「お姉ちゃん…………。…………うん…………。ボク…………ちゃんと話すよ」

「ありがと、パット。それじゃあ、ルックはいつ、どこで眠っちゃったの？」

「あ、うん…………ルックを見つけたのは時計塔の上だったんだ。時間は5時過ぎくらいだったと思う。その時、ボクたち霧の中でかくれんぼをしててさ…………。ボクが鬼で、隠れてるルックを探している最中だったんだ。でも、やっと見つけたと思ったらルックが眠りこけちゃって…………。仕方ないから起こそうとしたらぜんぜん起きてくれなくて…………」

「そっか…………。ところで、ルックのことは誰がここまで運んでくれたの？」

「あ、うん。時計台守のパンデユ爺ちゃん。ボクが困ってるところにちょうど上に登ってきたんだ。霧で時計の調子が悪くなってないか確かめにきたみたい」

「そっか…………。パンデユ爺さんらしいな。うん、大体状況は分かったわ」

「…………ねえ、パット君。かくれんぼをしている時、他に変なことは起こらなかった？」

「変なこと…………」

「見かけない人を見たとか、変な物音を聞いたとか。何でも構わないわよ」

「うーん…………。霧で真っ白だったこと以外はあんまり覚えてないかも…………。発着場に誰もいなかったのがちょっと怖かったくらいかなあ」

「そっか…………」

「特に不審なことは起こらなかったみたいね」

「ええ……そうね。2人とも、ありがとう。色々と参考になりました」

「そうかい……それは何よりだよ」

「エステルお姉ちゃん……。ルック、大丈夫だよな？」

「うん……。もちろんよ。パットもこれ以上、ベソかかないようにね。ルックが起きたときにかかわれちゃうわよ？」

「う、うん……。そうだね。ボク、もう泣かないよ」

ラオじいさんの家

「おや、君たちは……」

「たしかエステルちゃんと……。シエラザードさんだったかしら？」
フリオとエウリがラオじいさんの介抱をしていた。

「ええ、こんばんは」

「市長さんに依頼されて事件の調査にきたんだけど……。ラオじいさんの容態はどう？」

「ええ……。変わりないわ。よく眠ってるみたいだけど何をしても全然起きなくて……」

「やっぱり、このまま朝になるまで様子を見るしかないのかな……？」

「ええ……。今のところはそうした方がいいわ。それで幾つか聞いた
いことがあるんだけど構わないかしら？」

「ええ、もちろんよ」

「僕たちに答えられることなら何でも構わない」

「ご協力、感謝するわ。まず、ラオさんがいつどこで眠ってしまったか教えてくれる？」

「時間は……。5時半くらいだったかしら」

「場所は……。その扉の向こうになるかな」

フリオが入口の扉を指差した。

「扉の向こうって……つまり廊下ってことよね？」

「ああ、扉を叩く音と一緒に『帰ったぞ』って声が聞こえてね。鍵を外して出迎えようとしたらお義父さんが倒れてたんだ」

「父さん、酒場に行ってたから酔い潰れたのかと思っただけど……ぜんぜん酒臭くなかったから今日は飲まなかったみたいなの」

「それなのに目を醒まさないからさすがに変だと思っただけ……。教区長さんに相談に行ったのさ」

「なるほど……だいたい状況は分かったわ。最後に1つだけ……ラオさんが眠る前に何か変なことはなかった？」

「変なこと？」

「この霧のことかい？」

「ううん、それとは別に。見知らぬ人を見かけたとか、変な物音を聞いたとか」

「そういえば……お義父さんを運び込む時……」

「ああ……あなたも気付いたんだ？ゴタゴタしてたから今まで忘れちゃってたわね」

「えっと……どういうこと？」

「倒れたお義父さんをベッドに運ぼうとした時なんだけど……かすかに鈴の音が聞こえたんだ」

「……………」

「ここでも鈴の音……」

「すぐくキレイな音色だったわ。たぶん、誰かが外で鳴らしたんだと思うけど……」

「……ありがとう。色々と参考になったわ。もし他に何か思い出したらギルドに連絡してもらえるかしら？」

「ええ……わかったわ」

「それじゃあ失礼します。また明日、様子を見に来るね」

「ああ……よろしく頼むよ」

一通り聞き込みを終えたエステルたちはギルドに戻ることにした。

第11章 霧魔の標的(7)

遊撃士協会ロレント支部

「クラウス市長の依頼で昏睡事件の調査を始めたそうね。どう、聞き込みの様子は？」

「あ、うん。昏睡した人の家族から一通り話は聞いてきたけど……。」

「分かったわ。それではみんなを呼んでいったん情報を整理しましょう。」

「……なるほど。色々調べてきてくれたわね。特に、昏睡した人たちの関係者の証言は興味深いわ。とりあえず、全ての証言において完全に一致している箇所がありそうね。」

「あ、それって……目撃者が有無？」

「ええ、まさにその通りね。4人の件に共通すること……それは、昏睡した瞬間を目撃した人がいないという事よ。」

「へッ、なるほどな。まるで狙ったかのタイミングで眠ったわけか。」

「その意味では、この霧も一役買っているみたいですね。これだけ視界が狭いと目撃者も限られるでしょうし。」

「霧の中から人知れずあらわれて犠牲者の魂を食らう悪魔……そんな妖しくも美しいイメージが浮かんでくるねえ。」

「ふえええ〜っ……。」

「うっ、ゾツとしないわね。」

「そうなつてくると……その悪魔を特定するのに有効な証言がありそうね。」

「それは『鈴の音』とエリッサさんの証言の『黒衣の女性』ですね。」

「鈴はともかく、黒衣の女の人を見たのって確かエリッサだけだよ。」

ね。偶然って可能性はないのかな？」

「いえ……それはないわ。その女性が現れた場所で何があったかを考えるとね」

「あ……。ルックが昏睡した時計台……！」

「そう。黒衣の女性が出てきたのは時計台から……。そこでパット君がルック君を見つけたのよね」

「た、確かに……。偶然であるわけないか。それじゃあやっぱりその黒衣の女の人が……」

「ああ、間違いあるまい。どうやらまた新たな《執行者》が現れたようだ」

「チツ……。やはりか」

「原因不明の霧と昏睡が今回の『あり得ない現象』。そして鈴の音が『メッセージ』なんですわね」

「これでようやく敵の姿が見えてきたわね。私はこれから、各地の支部と王国軍に連絡するけど……。みんなはどうする？」

「そうね……。このままだと、またいつ他の市民が狙われるとも限らないわ。夜通しでパトロールすべきね」

「うん、あたしも賛成。交替でやれば少しは休めるはずだし」

「ああ、その必要はないぞ」

「えっ……？」

「夜間のパトロールは俺たち野郎どもに任せとけ。お前らはまとめ家でゆっくり休んどけや」

「で、でも……」

「そうね、エステルも今日は疲れたでしょう。姫様とティータちゃんを家まで案内してあげなさい」

「あ……。うん、分かった」

「あのな、シエラザード。何を他人事みたいに言ってる。パトロールは野郎どもに任せとけって言っただろっが」

「え……」

「お前とエステルには調査で頑張ってもらったからな。代わりと言

「つちゃあ何だが、今夜はゆっくり休んでくれや」

「ちよ、ちよっと待って……。ランクBの遊撃士にそんな気遣いは無用だわ！」

「シエラザードさん。ここは意地を張るところではありませんよ。本当は疲労がたまっているのが目に見えていますよ。遊撃士なら休むところは休まないといつ休めるか分かりませんか？」

「……………そうね」

「シエラ姉……………」

「ジンさん、アガット、レインさん。夜間のパトロール、よろしく願いますわ」

「ああ、任せとけ」

「その代わり、明日の朝からキッチリ働いてもらっせ」
「それではお休みなさい」

「フツ、今夜はもう遅いからすぐに休んだ方が良さそうだね。それではエステル君。家まで案内してもらおうか！」

「つて……………どうしてアンタが来るわけ？」

「ハツハツハツ。そう警戒することはないさ。このオリビエ、たとえばハーレム状態でも節度は守る紳士だからねえ。ムフフ……………」

「あ、あう……………」

「オリビエさん……………目がヨコシマですよ」

「まったく、このまま簞す巻まきにしてやるうかしら……………」

「こら、スチャラカ演奏家。こんな所で何してやがる。とっととパトロールの順番を決めちまうぞ」

「え……………。ハツハツハツ。アガット君ったらお茶目さん。パトロールは、君とジンさんとレイン君の3人でやるって話だろう？」

「そんな事は一言も言っただけだ。俺たち野郎どもに任せとけっただけだ」

「へっ……」

「おら、とつとと来やがれ」

「ア、アガット君。ちよつと待つてくれないか？こんなハーレム状態なんて滅多にあることじゃないんだよ？君の分まで楽しんでくるからどうか見逃して……」

「あー、とつとと始めるぞ」

アガットは嫌がるオリビエを引きずってギルドの中に入っていった。「うーん、オリビエ馴らしにはああいうのが一番みたいね……。しかもホントに緊張感のないヤツ」

「ふふ、本気なのか冗談なのかいまいち判りにくい人ですよね」

「100%本気だと思っけど……。とりあえずティータの教育に良くない存在であるのは確かね」

「そ、そんなこと言ったらオリビエさんが可哀想だよ」

「ふふ……」

「シエラ姉？」

「ううん、何でもないわ。オリビエの言葉じゃないけど今夜は早目に休みましょう」

「うん、そうだね。ティータ、クローゼ。案内するから付いて来て」

第11章 霧魔の標的(8)

ブライト家

「……………あ……………」

エステルが物音で目を醒ました。

「今の……………扉の音よね……………」

エステルはベッドから降りて様子を確かめることにした。

「……………ん……………。ふえ……………。おねえちゃん……………どうした

のお……………?」

「ごめん、起こしちゃったね。戸締りが気になったからちょっと確かめてくるわ。すぐに戻るから眠ってて」

「……………んう……………わかった……………。おねえちゃん……………はやく戻ってきてね……………」

「ふふっ……………可愛い。うーん、なんだが無性にホッペをつつきたくなるわね。……………おっと、イカンイカン」

ティータに布団をかけ直してエステルは部屋を出た。

「(シエラ姉かクローゼのどちらかだと思っただけ……………。一応、戸締りも確かめよう……………)

ヨシユアの部屋

「すー……………すー……………」

クローゼが安らかな寝息を立てて眠っている。

「よく寝てるみたい……………。ふふ、クローゼってばヨシユアの部屋に案内したら慌てまくってたわね……………。ちよっと可愛かったかも」

「……………ん……………。先生……………みんな……………私は……………ど

うしたら……………。……………。すー……………すー……………」

「クローゼ……………。……………お互い、頑張ろうね」

テラス

「はあ……相変わらずスゴイ霧ねえ。……………」
エステルは頭の頭にヨシユアと過ごしていた日が浮かんだ。
「さてと……1階を確認しよつと」

1階

「……………」
シエラザードがテーブルの上にタロットカードを並べていた。

「シエラ姉……………」

「あら……エステル、どうしたの？」

「うん、物音がしたからちよつと目が醒めちゃって。シエラ姉だつたわけね」

「そうだけど……。ふふ、気配を感じて起きるなんて正遊撃士らしくなつたじゃない？」

「えへへ……ちよつと緊張してるのかも。なんか色々あつてアタマが混乱しちゃつてるし」

「そっか……………」

エステルがシエラザードの向かいの椅子に座つた。

「ねえ、何か見えそう？」

「そつね……………」

シエラザードがカードを一枚めくつた。

「逆位置の『皇帝』。慈悲、共感、信用、障害、未熟さ。……
そして敵に対する困惑」

「な、なんか、思わせぶりなカードね。敵に対する困惑ってのはちよつと納得できないけど……………」

「ふふ……。今はエステルを占ったわけじゃないわ」
「え」

「ふふ、あなたの方にも思い当たるフシがあるみたいね。例の記者さんの一件？」

「あ……。……」
「急かしてるわけじゃないわ。ただ、気持ちの整理がついたら話してみるのもいいかもね」

「……。シエラ姉……。相談、乗ってくれる？」
「あなたはあたしの妹分。そして姉貴分ってのいうのはこういう時のために使うものよ」

「シエラ姉……。これ、見てくれる？」
エステルはドロシーの写真をシエラザードに差し出した。

「写真……。？」
……。なるほど、ね。こりゃ、あなたがへこんじゃうわけだわ」

「うん……」
「さしずめ隠密活動のための隠れ蓑みのといったところかしら……。なるほど、遊撃士の身では使えない方法かもしれないわね。ふむ……。狙いは何なのかしら？」

「シエラ姉……。驚かないの？」
「正直、もつとハードな事してるじゃないかと思つたわ。でも、空賊艇の奪還事件って兵士が気絶しただけみたいだし。ヨシユアらしい手際の良さだと思つたわよ」

「ま、まあね……。」
「ただ、写真を撮られたのはちょっと迂闊うかつだったわね。あの子らしくもないわ」

「それはまあ……。相手があのドロシーだから。ことカメラに関して
は天才的な運と実力みたいだし」

「なるほど、あの眼鏡の子か」

「……。ねえ、シエラ姉。この写真って……。ギルドに渡すべきだと思
うっ」

「前提として、遊撃士に課せられる義務はただひとつ。不当に傷付けられている民間人を助けるだけのことだよ。ヨシユアが空賊とつるんで民間人を傷付けたりすると思う？」

「そ、そんなことヨシユアがするわけないってば！」

「だったらわざわざ報告する義務はないってこと。あたしもわざわざ報告するつもりはないしね。結局、あんたがヨシユアを信じていればそれでいいわよ」

「……………」

「それとも……信じられない？」

「信じてる……信じてるけど……。でも……不安なの……。あたしの知らないところで冷たい瞳で……。無茶をして……。自分のことなんてどうでもいいって考えてるみたいに見えちゃって……。いっそ父さんに相談して何とか保護してもらうべきかなって……」

「……エステル……」

「でも、だったらあたしは何のためにここまで来たわけ？ヨシユアをあたし自身の手で連れ戻すためじゃなかったの？……そこまで考えたらなんか頭が混乱しちゃって……」

「そっか……。でもね、エステル。焦らないでも答えは見つかると思っわよ」

「……………え……………」

「今のあんたは、自分の気持ちがちゃんと把握できていると思う。ただ何をしたいのかそれを見失ってしまっただけ。焦らないでもきつと答えが出てくるはずよ」

「シエラ姉……………」

「船を降りた直後と比べるとずいぶん落ち着いたみたいだし。少なくとも、今やるべきことはちゃんと見えてるみたいじゃない？」

「う、うん……。ルックやエリツサのお母さんが倒れちゃった事を知った時……へこんでなんかいられないって逆にやる気が出てきちゃってね。そしたら、モヤモヤした気持ちも小さくなっていったって……。あたし……やっぱ単純なのかな？」

「ふふ、そんなことないわよ。ただ、あんたはどうやら動いていた方がいいみたいね。前に前に進んでいくことで答えを見つけるタイプだと思う」

「うう……イノシシみたいであんまり嬉しくないんだけど。でも、ありがとシエラ姉。何となく……答えが見えてきた気がする」

「ふふ……大したことはしてないわ。それにしても……ヨシユアもなかなかやるじゃない。まさかあの空賊娘とよろしくやってるなんてね？」

「そ、そつちに来たか……。ま、まだそういう関係だって決まったわけじゃないってば！」

「あら、そう？たしかちよつと気が強くてボーイツシュな子だったわね。それでいて、どことなく品の良さも感じさせるし……。なかなかいい線行ってるかも？」

「シエラ姉、オヤジ……」

「一緒に危機を乗り越えるうちに愛が芽生えちゃったりして……。あ、でもエステル。心配することないんだからね？たとえヨシユアを取られても奪い返してやればいいんだから！」

「……今度こそシエラ姉にはこんりんざい相談しない……」

「ウソウソ、冗談だってば。ま、ヨシユアについて悩むのはその手の話にした方がいいかもね。その方が年頃の女の子らしいわよ？」

「それはそれでけっこう複雑なんですけど……。……そうでなくてもクローゼのことだってあるし」

「え？」

「な、なんでもない。なんか変に落ち着いたからあたし、そろそろ寝直すけど……シエラ姉はまだ起きてるの？」

「ううん、あたしももう寝るわ。せっかくアガットたちが気を使ってくれたしね」

「そっういえば……」

「なに？」

「……シエラ姉の方こそ何か悩みでもあったりする？」

「そうね……あるにはあるわ。でも、2、3日中にはみんなにも話せると思う」

「そっか。うん、だったらあたし、余計な心配はしないから。でも……無茶だけはしないでよ？」

「ふふ、心配無用よ。手にかかる妹分の面倒も見なくちゃならないしね」

「もう……。まあいいわ。おやすみなさい、シェラ姉」

「おやすみ、エステル」

エステルは席を立って2階に戻った。

「逆位置の『皇帝』。慈悲、共感、信用、障害、未熟さ。そして敵に対する困惑。何をしたいのか見失ってるだけ、か……。ふふ……誰のことなんだか」

第11章 霧魔の標的(9)

ブライト家

エステルたちが家を出ると、昨日よりあたりが真っ白になっていた。

「うわ……昨日よりも凄くない?」

「ええ……確実に濃くなってますね」

「アガツトさんたち、大丈夫だったのかな……」

「うーん、確かに。パトロールだけとはいえちよつと心配かも……」

「とりあえずギルドに行きましよう。昨夜のことも含めて色々話が聞けるだろうし」

「うん、そうね」

遊撃士協会ロレント支部

「おはよー!」

「おはよーございます」

「あら、おはよう」

「おはようございます」

「おう、来やがったか」

「ゆうべは眠れたかい?」

「あ、うん。疲れはすっかり取れたわ」

「3人ともありがとう。夜のパトロール、大変だったでしょう?」

「あのあの。お疲れさまでしたっ」

「なあに、交替しながら仮眠は取ったから大丈夫だ」

「約1名、今もホテルで爆睡してるヤツがいるけどな」

「あ……オリビエさんですか?」

「へえ、オリビエも一応、パトロールに参加したんだ?」

「ははは、まあな。ブツクサ文句は言ってたがやる事はちゃんとや

つてたぞ」

「ふふ、後で礼を言っておかなくちゃね。それで……状況はどうなっているの？」

「パトロールの甲斐あつてか新たに昏睡した人は出ていないわ。ただし、昨日昏睡した人は今朝も目を醒ましていない状況よ」

「そつか……」

「心配だね……」

「霧の方はどうなの？昨日と比べると深くなってる気がするけど」

「ええ……濃度が上がったみたいね。それと合わせて発生範囲も広がったみたい。マルガ山道に至ってはほぼ全域が霧に閉ざされたわ」

「そ、そうなんだ……」

「いよいよ大変な事態になってきましたね」

「悪いニュースばかりじゃないわ。うちからの報告を受けて軍が部隊の派遣を決定したの。ロレント市を警備するためにね」

「ほんと!？」

「ええ、すでにヴェルテ橋方面から2個小隊がこちらに向かっていくわ」

「それは心強いわね。街を軍に任せられるならあたしたちも自由に動けるし」

「ああ、その通りだぜ。早く《結社》の連中を捜してブチのめしてやらないとな」

「ふむ、ロレント近郊に潜伏しているんだろうか……。今のところ、見当も付かんな」

「ロレント地方は狭いけど、それでも隅々までは調べられないし……。うーん、何か具体的にできることって無いのかしら」

「それなんだけど……。まずは民間人の避難を手伝ってくれないかしら」

「民間人の避難？」

「昏睡事件は霧の発生範囲で起こされている可能性が高いわ。そして今朝、その発生範囲はさらに広がってしまった……。パーゼル農

園やマルガ鉱山が覆われてしまっくらいにね」

「あ……」

「なるほど……。農園の一家と、鉱員さんの安全を確保するというわけね」

「ええ、これはギルドに課せられた義務でもあるわ。敵の居場所を探す前に引き受けてもらえないかしら？」

「仕方ねえ……。どうやらそっちが優先だな」

「鉱山と農園というのはロレント市から離れた場所にありますが、このまま2手に分かれた方がいいかもしれませんね」

「ええ、その方が効率的ね」

「だ、だったらあたしたちが農園じゃダメ？友達の家族がやってるし……」

「ほう、そうなのか。それなら俺たちが鉱山の方に行くってくるか」

「ああ、決まりだな。オリビエのヤツを起こしてとつとと出発するとしてようぜ」

「フツ、呼んだかい？」

リュートを鳴らしながらオリビエが入ってきた。

「おお、起きたか」

「なんでリュートをわざわざ鳴らすんだか……」

「ハツハツハツ。今朝もあいにくの天気だからね。せめてボクの華麗な演奏で雰囲気明るくしてあげたい……そんなステキで心憎い演出だと思ってくれたまえ」

「つたく、朝からテンションの高いヤツだな」

「元気があるだけ結構じゃないですか」

「でも、オリビエってばちゃんと見回りしたみたいね。ちょっと見直しちゃったわ」

「ふふ、そうね。ご苦労さまだったわ」

「ハツハツハツ。紳士として当然の義務だよ。本当はパトロールがてらエステル君の家にお邪魔しようと思ったんだがね。思った以上に視界が悪くて泣く泣く諦めてしまったのさっ」

「まったくもう……見直したと思ったら」
「さてと、オリビエさんにも手短かに事情を説明するわね」

「ふむ、いかにも遊撃士協会らしいしごとだね。いいだろう、ボクも手伝おうじゃないか。それではキミたち。農園に案内してくれたまえ」

「だ〜からお前は俺たちと一緒にいたいよね。わざと間違ってるだろ、コラ？」

「いやん、そんなにボクと一緒にいたいよね。アガット君ってばカワイイ？」

「おぞましい事を抜かすな！」

「はわわっ……そ、そーだったんですかっ!？」

「だーっ！お前も信じるなっつーの！」

「ああ、どんどん緊張感が……」

「ふふ……深刻になるよりいいじゃない。でもお互い、さっさと済ませた方が良さそうね」

「ああ、そうだな」

「それじゃあ俺たちは鉾山の方に行ってくるぜ」

「フツ、しばしのお別れだ。ボクの愛しい仔猫ちゃんたち」

「あなたたちも気を付けて行ってきてくださいね」

男性陣が先にマルガ鉾山に出発した。

「さてと、あたしたちもパーゼル農園に出発しようか」

「ええ、そうですね」

「えっと、お姉ちゃんのお友達のお家なんだよね？」

「うん、ティオって言って日曜学校からの親友なの。おじさんとおばさんと双子の姉弟の5人家族かな」

「護衛対象に子供もいるし気が抜けない仕事になりそうね。それじゃあアイナ。あたしたちも行ってくるわ」

「ええ、よろしくお願いね」
エステルたちはパーゼル農園に向かった。

第11章 霧魔の標的(10)

ミルヒ街道

「あ……！」

エステルたちの前方から王国軍の部隊がやって来た。

「おや……。……みんな、止まれ」

その部隊を率いていたのはロレントに住むアストン隊長だった。

「アストンさん、お久しぶり！」

「久しぶりだね、エステル君。それにシエラザード君だったか。ギルドの仕事の途中かな？」

「うん、そうだけど……。もしかしてロレントを警備してくれる部隊って……」

「ああ、私たちだ。ハーケン門からの増援と共にロレント市を守らせてもらうよ」

「そっか……」

「本当に助かります」

「とんでもない。市民を守るのは王国軍の義務でもあるからね。ロレントの状況はどうか？」

「うん、霧は深くなっただけど昨日みたいに昏睡事件は……。あ、あの、アストンさん！」

「……ああ、ルックのことだね。眠りから覚めただけで命に別状はないと聞いている。そんなに気を使わないでくれ」

「で、でも……」

「今はお互い、自分の責務を果たすことだけを考えよう。それが恐らく、ルックたちを助けることにも繋がるはずだ」

「アストンさん……」

「ええ、その通りだね。アストン隊長。街はよろしくお願いします」

「ああ、任せたまえ。そろそろロレントだ！到着次第、すぐに警備体制に入る！」

「イエス・サー！」

王国軍はロレントに向けて再び進んでいった。

「今の隊長さんって眠っちゃった男の子の……？」

「うん……ルックのお父さん。本当は心配でたまらないはずなのに

……」

「強い人……ですね」

「そうね……あたしたちも頑張らないと。パーゼル農園に急ぎましょう」

パーゼル農園

「テイオの家……なんだかちょっと懐かしいな。それにしても……ここもかなりの霧だわ」

「とりあえずご主人に事情を説明するわよ。まさかこの霧の中、配達には行ってないわよね？」

「う、うーん……それはないと思うけど」

その時、農園に鈴の音が響き渡った。

「い、今のって……」

「……まさか……！」

「シエラ姉っ！」

「急ぐわよ！」

エステルたちは家へと急いだが……

「えっ……！？」「こいつら！？」

「霧の魔物……！？」

「ふええっ！？」

「迷ってるヒマはない！撃破するわよ！」

「や、やっつけた……？」

「ええ……でも今のは足止めだわ。早く家の人を捜さないと」
「う、うん！」

「あ……。フランツおじさん！？チエル、ウイル！？テリオ！ハンナおばさん！」

テリオの家族たち全てが昏睡していた。

「……うそ」

「ダメ……眠らせてしまっています」

「うん……この子たちも……」

「……っ……。また……間に合わなかった……」

エステルは膝をついた。

「エステルさん……」

「お、お姉ちゃん……」

「ダメね……まんまと逃げられたわ。あたしたちの動きを完全に読んでいたみたい」

「『黒衣の女性』ですね」

「……ええ、間違いないわ。エステル……とりあえずベッドに運ぶわよ。部屋に案内して」

「あ……うん……」

「何とかベッドに運んだわね。ふう……これからどうしたもんだか」
「……」

「エステル……。ショックなのは分かるけど気持ちを切り替えなさい。でないと、この人たちを助けることなんてできないわよ」

「……でも……あたしが未熟だったから……。父さんの足元にも及ばないから……。テリオたちをこんな目に遭わせちゃったのかもしれない……」

「……」

「今まで散々……強気なことを言ってたけど……これじゃあ……ただの強がりだよ……！こんなことじゃ……答えを見つけないなんて……あたし……あたし……」

「……………エステル」

シエラザードがエステルの頬を叩いた。

「え……」

「シエラザードさん！？」

「お、お姉ちゃん！？」

クローゼとティータが部屋に入ってきた。

「……………未熟なお互い様よ。あたしだって先生の足元にも及ばないけどいつも足掻き続けているわ。アガットだって、ジンさんだって、それからカシウス先生だって……。みんな力不足を痛感しながら必死になって頑張り続けている」

「と、父さんも……？」

「覚えているでしょう？先生がレナさんの死に際に間に合わなかったこと……」

「……………あ……」

「でも先生は……レナさんの死を乗り越えて遊撃士としての道歩き始めた。決して立ち止まることなく大切なものを守り続けてきた。王国軍になった今もそれは変わっていないと思う。エステル……あなたは、どうしたいの？」

「……………」

「難しく考える必要はないわ。自分の奥底にある素直な気持ちを見つめなさい」

「……………答えは……出てないけど……それで……もあたし……前に進みたい。大切な人たちを守るためにも……。自分が未熟だからといって立ち止まってなんかいたくない！」

「ふふ……ちゃんと分かっているじゃない」

「ごめんね、シエラ姉……。なんかあたし……手間のかかる妹だよ」

「それもまた姉冥利に尽きるってもんよ。手間のかかる子ほど可愛
いっていうしね」

「むっ……」

「くすくす……」

「ふふっ……」

「あ……ごめん。心配、かけちゃったかな？」

「うん、ビックリしたけど……。お姉ちゃんとシエラさんってホン
トに仲がいいんだね。えへへ……ちよつと妬けちゃうかも」

「ふふ、とっても良い場面を見せていただいた気分です」

「も、もう……。でもシエラ姉、どうしよう。ギルドに戻って報告
したいけどテイオたちも放っておけないし……」

「そうね……。あたしかあんだのどっちかが残るしかなさそうだけ
ど……」

「その必要はないで」

唐突に声が聞こえたと思うとケビン神父が入ってきた。

「あ……」

「ふえっ……」

「あら……」

「や、どもども。七耀教会のケビンですわ。この前、王都で別れ
たばかりやのにこんな早く再開できるなんてなあ。やっぱり女神のお
導きを感じるわ」

「な、な、な……。なんでいきなりケビンさんが現れるのよ!？」

「あー、話は単純でな。昨夜、デバイン教区長から昏睡事件につい
ての報告が王都の大聖堂に届けられたんや。そこで《星杯騎士》と
していつちよ確かめたると思ってな。霧だらけの街道を通って今朝
ロレントに到着したわけや。んで、ギルドを訪ねたらエステルちゃ
んたちがこつちに仕事で行つとるって聞いて」

「あー、はいはい。だいたい事情は分かったわ。ていうか全然、女
神様のお導きなんかじゃないじゃない」

「なはは、バレたか」

「しかしケビンさん。さっき『その必要はない』って言ってたけど、
どういう意味なの?」

「ああ、姐さんとエステルちゃんのどっちかがここに残るって話や。
ここは俺に任せて2人ともギルドに戻るとええやろ」

「ええっ!?!」

「あの、宜しいんですか?」

「これも神父のお仕事ですわ。医術の心得も多少はあるし、どうか
任せたくください」

「あのあの……ありがとうございます!」

「ふふ、ありがたくお言葉に甘えさせてもらっわ。みんな、ロレン
トに戻るわよ」

「う、うん!ケビンさん……ティオたちのこと、よろしくね!」

「おう!大船に乗ったつもりで任せとき」

エステルたちはケビン神父にティオたちの介抱を任せてロレントに
戻った。

第11章 霧魔の標的(11)

遊撃士協会ロレント支部

「へっ、やっと帰って来たか」

「どうした？やけに遅かったじゃないか」

アガットたちはすでにギルドにいた。

「ええ、色々あってね」

「アガットたちはもう鉱山に行ってきたの？」

「ああ、すでに向こうに連絡が行ってたらしくてな。すぐに出発してきたから意外に早くかえってこれたぜ」

「ただ、帰る途中で奇妙な魔獣が現れてな。その事を話していたんだ」

「奇妙な魔獣？」

「霧の中から現れて倒すと消滅する魔獣だね。『霧魔』とも言うべきかな？」

「そ、それって……！」

「あの魔獣と同じですね……」

「もしかして、エステルさんのところにも？」

「うん……」

「ケガはしてねえだろうな？」

「えと、私たちは大丈夫なんですけど……」

「……………」

「????」

「何かあったみたいね。報告してもらえるかしら？」

「ええ、実は……」

農園で起こった出来事について一通り報告した。

「そう……一足遅かったみたいね」

「……あたしの失態だわ。もう少し上手く立ち回れば犯人を捕まえられたのに」

「うづん……。シエラ姉は全然悪くないよ。悪いのは、肝心な時に動けなかったあたしだもん」

「気にすることはないわ。どうやらあなた達は、罠にかけられたみたいだし」

「わ、罠!?!」

「農園に入ったと同時に聞こえてきた鈴の音……。待ち伏せしていた霧の魔獣、そして鍵のかかった正面玄関……。ギリギリのタイミングでお前さんたちが間に合わないよう計算された感じだな」

「た、ただの偶然じゃないの?」

「いえ、それはありませんね。今までのことを考えると、『黒衣の女性』は私たちの行動を全て監視しているようです。飛行船でボースに行こうとした矢先に霧でロレントに足止めたこともそうです」「う、うーん……。『黒衣の女』と言われても心当たりは全然ないし……。挑発される覚えはなんだけど」

「ふう、ただいま戻りました」

ギルドに入ってきたのは王都に依頼人を送っていたリッジだった。

「あれ、リッジさん?」

「そういえば護衛で王都まで行ってたのよね」

「ええ、朝早くに向こうを出てやっと戻って来られましたよ。それにしても……。いったい何があったんですか?霧の範囲は広がってるわ、街を兵士が巡回しているわ……」

「実は昨日の夕方頃から色々大変なことが起こってね」

アイナは昨日から今日にかけての出来事をかいつまんでリッジに説明した。

「うわ……。そんなことになってたんですか。マズイ時に出かけちゃったなあ」

「うづん、気にしないでよ。定期船が止まっている以上、護衛だつて大切な仕事なんだし」

「あたし達が、そういう仕事を請けている余裕はないからね。フォ

「ローしてくれて助かるわ」

「こ、光栄です。そういえば……その『鈴の音』なんですけど。それって霧の向こうから聞こえてくるんですよね？」

「ええ、そうよ」

「何のために鳴らしているのかはつきりしてないんだけどね」

「そうか……」

「何か心当たりでもあるの？」

「さっき、エリーズ街道を通っていた時なんですけど……。かすかに鈴の音を聞いたんです」

「あ、あんですって!？」

「エリーズ街道のどのあたりで聞こえたの？」

「え、えっと……。グリユーネ門から出てわりとすぐだったから……。ミストヴァルトの方ですね」

「ミストヴァルト……」

「たしかロレント地方の南東に広がる森だったな」

「最初、誰かいるのかと思って聞こえてきた方角に向かって大声で呼びかけてみたんですよ。でも、何の返事もないから気のせいかと思っちゃって……」

「ふむ……。ボクたちに伝わるのを見越してわざわざ鳴らしたのかもしれないね」

「今までのことを考えると間違いないでしょう」

「挑発……ということですか」

「ケツ、舐めやがって……」

「……。シエラ姉……。どうする？」

「そうね……。罨の可能性は高いけど飛び込んでみるしかなさそうね。招待に応じさせてもらいましょう」

エステルたちはミストヴァルトへと向かった。

ミストヴァルト

「……ここも完全に霧に覆われちゃってるね」

「ええ……。元々暗くて視界が悪いから歩きにくいことこの上ないわね」
「気を抜いたらすぐに迷ってしまいそうです」
「ちゃんとコンパスを確認した方が良さそうだな」
「気をつけて進んで行きましょう」

しばらく進んでいくと、鈴の音が鳴り響いた。それと同時にあたりがいきなり白くなった。

「わわっ……………」

「むっ……………」

「くっ……………」

「これは……………」

そして、しばらくしてから視界が元に戻った。

「な、なんなの今の……………」

「鈴が鳴った途端、濃い霧に包まれたけど……………」

「皆さん……………辺りを見てください」

レインが皆に注意を呼びかけた。

「こ、こっちは……………」

「へっ……………」

そこは全く知らない場所だった。

「！？こ、こっ……………どこ！？」

「……………いつのまにか景色が変わりましたね」

「まさか……………奇門遁甲きもんとんこうの類か？」

「いえ、これは幻術の類でしょうね。どうやら私たちを試しているようです」

「シエラ姉……………ど、どうしよう？」

「落ち着きなさい、エステル。これが敵の仕業なら……………必ず抜ける方法はあるはず。まずはそれを探してみるわよ」

「う、うん……………」

しばらくエステルたちが進んでいると、進むたびに響き渡ってくる鈴の音が大きくなっていた。

「ねえ、シエラ姉……。さっきから鈴の音が大きくなっている感じがしない？」

「ええ、間違いないわ。ひよっとしたら……。そこにヒントがあるのかも」

ある所でひときわ大きな鈴の音が響き渡り、濃い霧に包まれた。

「またっ……………」

「はっ……………」

「……………抜けたみたいね……………」

「も、戻った……………」

「ここは……………セルベの大樹の近くみたい。どうやら《結界》に取り込まれていたみたいね」

「け、結界って……………」

「多分、この先にカラクリがあるんだろう。準備を整えた方が良さそうだ」

「心して行きましょう」

第11章 霧魔の標的(12)

セルベの大樹

「あっ!？」

「やはり《ゴスペル》……」

セルベの大樹に《ゴスペル》が埋め込まれていた。

「水面から沸き起こる霧……。ひよっとして、ここから霧が生まれ
ているのかも……」

「だ、だったら早く《ゴスペル》を外さなきゃ!」

「エステル、待ちなさい!」

「え……」

エステルが《ゴスペル》を外そうと樹に向かった時、

「わわっ……!？な、なにコイツら!？」

霧の中から魔獣が現れた。パーゼル農園で現れたものと異なり、巨
大だった。

「農園で戦った連中とは格が違うみたいね……」

「……来ます!」

「はあはあ……。と、とんでもなく強かったですけど……」

「気を抜かないで!今のはただの使い魔よ!操っていた術者がどこ
かにいるはずだわ!」

「へっ……」

「ふふ……なかなか頑張ったわね。それではみんなにご褒美をあげ
ましょう」

どこからともなく女性の声が聞こえてきた。

「!?!?!」

そこで、《ゴスペル》が黒い光を放った。

「な……!?!」

「しまった……！」

「あ……」

目を開けるとエステルの前に自分の家が見えた。

「ここって……家？」

改めて周りを見渡してもまぎれもなく自分の家だった。

「あたし……ミストヴァルトにいたのに。それに……いつの間に霧が晴れたの？」

エステルは自分の敷地に足を踏み入れた。

第11章 霧魔の標的(13)

「ふう……こんなものか」

家の外でカシウスが薪を割っていた。

「と、父さん……?」

「おお、エステル。どうした? ずいぶん早起きじゃないか」

「へ……」

「ハハ、そうかそうか。俺が久しぶりに帰ってきたから甘えたくてしょうがないんだな? よーし、いつものように父の胸にどーんと飛び込んで来い!」

「こ、子ども扱いしないでよつ。忙しいとか言ってたのにいつの間暇を取ったの? 言ってくればあたしだって都合を合わせられたかも」

「あらあら。朝からにぎやかですね」

家の中から出てきたのは女性だった。しかし、その女性は

「……………」

「おお、レナ。薪割りをしてたらエステルが起きてきて……。父娘のスキンシップを行おうとしていたところなんだ」

「ふう、そうなんですか? そのわりにはエステル、戸惑ってるみたいですよ。あんまり強引にすると嫌われちゃったりして……」

「な、なぬ……! お、おい、エステル……まさか父さんのことキライになつてないよな!? そりゃあ、普段は仕事でなかなか帰ってやれないが……。父さん、エステルのことを世界で一番愛しているんだぞ!」

「ちょ、ちよつと……」

「うふう……。久しぶりにあなたに会えて照れているだけでしょう。そうよね、エステル?」

「あ、あの……ひよ、ひよつとして……。……………」

……………お母さん……………?」

「あらあら、変な子ね。お母さんの顔、忘れちゃった？」

「あ……。おかーさん……。ホントにおかーさんだ……。うづうづう……」

「あら……？」

「おかーさああん！」

「あらあら……。どうしたの、エステル？怖い夢でも見ちゃった？」

「ひっく……。ひっく……。あ、あんまりおぼえてないけど……。あのね……。おかーさんがどこかに行っちゃって……。帰ってこないよな……。そんなユメを見たの……」

「そう……。ふふ、大丈夫よ。お母さんはここにいるわ。どこにも行ったりしないから。だから安心していいのよ」

「うん……。うんっ……」

「えっと……。父さんちよつとだけ寂しいなあ、なんて……」

「あらあなた、いたんですか？」

「レナさん、ヒドイっ」

「うふふ、冗談です。……。ほら、あなた」

「う、うむ」

「ぐすっ……。えへへ。おはよ、おとーさん！」

「おっと、いいタツクルだ。よし、今日は父さん、エステルの好きな遊びに付き合ってやるからな」

「ほんとー？」

「男カシウス・ブライトに二言はないっ！オママゴトでも何でも付き合ってやるうじやないか！」

「んー、そうね……。だったらあたし、おサカナ釣りがいいっ！」

「おお、さすが俺の娘。いい趣味してるじゃないか……。って、釣りにて男の子の趣味だと思っただが。オママゴトの方が良くないか？」

「や、おサカナ釣りがいいのっ」

「うーむ……。いいのかなあ」

「ふふ、好きなことをさせてあげるのが一番ですよ。どちらにしても……。先に朝ごはんを済ませた方がいいんじゃないやありませんか？」

「おお、そうだな」

「ゴハン!? おかーさん! あたしおなかペコペコ! 早く食べたいからあたしも手伝っちゃう!」

「ふむ、俺もコーヒーくらい淹れさせてもらおうか」

「ふふ、2人ともありがとう。ただしその前に……手を洗ってきてくださいね?」

それは 幸せな日々だった。

家族3人で食卓を囲む朝……

両親に見守られながら自然の中で戯れ……

時には家事を手伝い……

そして夜は、母のぬくもりに包まれながら眠りに落ちていく……

哀しいことなど何も無い、優しく綴られていく日々……

それは確かに 満ち足りた時間であった。

「……それじゃああたし、これで帰りますね。エステル。今度は春に遊びに来るからね?」

「うん……待ってるけど……。せっかく遊びに来たのにもう帰っちゃうなんて……。もう1日くらい泊まっていけばいいのに」

「うーん、あたしもそうしたいのは山々だけど。一座のみんなが待ってるしね」

「むー、つまんない」

「ほらほら、無理言わないの。シエラちゃん、ありがとうね。エステルのためにいつも遊びに来てくれて」

「ううん。あたしも楽しいです。それに、レナさんのご飯、美味しいから楽しみなんです」

「あらあら。嬉しくなっちゃうわね」

「また是非、遊びに来てくれ。よかつたら俺の秘蔵のブランデーでもご馳走するぞ」

「うわっ、ホントですか!？」

「あゝなゝたゝ？」

「じよ、冗談です、ハイ」

「シエラちゃんもダメよ?いくらお酒に強くたってあなたはまだ12歳なんだから。大人になるまでほどほどにしておきなさい」

「えゝ、でもゝ……」

「シエゝラゝちゃん?」

「あわわ、わかりました……。で、でもあたし言うほど飲んでいませんよ。座長はともかくお姉の目が厳しいですし」

「ふふ、それならいいんだけど。それじゃあシエラちゃん。一座の皆さんによろしくね」

「今度はみんなと遊びに来るといい。この庭だったらバーベキューでもできるしな」

「はい、伝えておきますね。それじゃあエステル。……いい子にしてるんだよ?」

「うんっ!シエラ姉、バイバイね!」

シエラザードはロレント市に帰っていった。

「ふふ……寂しくなってしまうね」

「ま、春になったら遊びに来ると言ってたしな。俺も休暇を取るから盛大にパーティーでもやるか」

「ふふ、そうですね」

「おとーさん、おかーさん。あたし……キョウダイが欲しいな」

「な、なぬ?」

「あらあら……」

「だってシエラ姉とはたまにしか遊べないし……。あたし、いつもいつしよのキョウダイが欲しいなあ」

「お、お前ねえ……。そういうことは何というかデリケートな問題

があつてだな」

「うふふ…… エステルは兄弟が欲しいのね。でもね、こればかりは必ずあげるとは約束できないわ。女神様がお決めになることだから」

「そーなの？」

「ええ、女神様が夜中、キャベツ畑に赤ちゃんを置いてね……。それをお父さんとお母さんが見つけてくるの」

「そーなんだ……。だったらあたし、女神さまにお祈りするっ！」

「ふふ、それもいいけど……。エステルがいい子にしていたら女神様のご褒美に赤ちゃんを置いてくれるかもしれないわね」

「だったらあたし、いい子になる！」

「やれやれ……。相変わらず見事な手並みだねえ」

「あらあら、他人事みたいに言わないでくださいな。あなたにも一生懸命頑張ってもらわないとね」

「う、うむ。よし、それじゃあ早速今から部屋で頑張ろうじゃ……」

「ただし常識の範囲内で。私はこれから晩ご飯の支度があります」

「……ハイ」

「????？」

「うふふ、それじゃあ私は台所に戻りますね。あなたたちはどうするんですか？」

「そうだな……。エステル、また父さんと釣りでもして遊ばないか？」

「うーん……。今日はいいや。ひとりで遊びたいきぶん」

「ガーン。仕方ない……。部屋で本でも読んでるか」

「ふふ。フラれちゃいましたね。エステル。気を付けて遊ぶんですよ？」

「1人だから、なるべく池には近寄らないようにな」

「はい」

レナとカシウスは家に入っていった。

第11章 霧魔の標的(13) (後書き)

久しぶりの投稿です。大学の実験というのは面倒ですね……。教授に実験報告書の内容で思いつきり絞られました……。A4用紙30枚の報告書を3回も作り直しとは鬼畜ですね……。

第11章 霧魔の標的（14）

くレナ

「そうね、昨日はシチューだったから……。うん、今夜はオムライスにしましょう」

「ホント！？わーい！おかーさんのオムライスあたし、だいすきー！」

「あらあら。そんなに嬉しいの？ふふ、お母さんもお父さんも好物だし、オムライス大好き一家ね」

くカシウス

「どうした、エステル？やっぱり父さんと一緒に遊びたくなっただか？」

「ううん、べつに」

「そうか……」

「おとーさんはなに読んでるの？」

「これか？『フレイサーギルド各国の遊撃士協会』だ」

「ぶれいさー？」

「エステルにはちょっと難しいご本だな。そうだ。母さんみたいに絵本でも読んでやろうか？」

「んー、今はいいや」

「そ、そうか……」

2階

一番奥の部屋には鍵がかかっていた。

「あれ……。ここって何の部屋だっけ？うーん……」
しばらく考えるエステル。

「……わかんないや。おとーさんたちに聞いてみようかな……」

くカシウス

「ねー、おとーさん。2かいの奥にある部屋ってなにがあるの？」

「ああ、あそこは物置として使っているぞ」

「モノオキ？」

「ふだん使わない物が色々としまったあるんだ。ここ最近使っていないからクモの巣のだらけかもしれんな」

「ふーん……。あそこのカギってどこに置いてあるの？」

「ああ、それなら……。……ちょっと待てあそこで何をするつもりだ？」

「んー……。タンケンでもしようかなって」

「うーむ、まあいいか。カギなら母さんがどこかに保管してるはずだ。聞いてくるといい」

「うん、わかった！」

くレナ

「ええと……。確かタマネギの残りがここにあったよつな……」

レナは外で食品保管箱を探していた。

「おかーさん。ここにいたんだ」

「あら、エステル。うふふ、ひよっとしてもうお腹空いちゃったの？」

「あ、ううん。まだガマンできるけど……。それより、おかーさんに聞きたいことがあるの」

「？」

エステルは2階の物置部屋の鍵を探していることを説明した。

「あらあら……物置部屋を探検するの？うーん、ホコリだらけだし汚れちゃうと思うけど……」

「だめ？」

「………………。うん、まあいいでしょう。お母さんたちのベッドの横に小さな戸棚があるでしょう？その1番上の引き出しに鍵が入っているはずよ」

「ありがとう、おかーさん！」

書斎

「えつと……1ばん上の引き出しだよ。うんしょ、うんしょ……。あ……あつたあ！」

エステルは物置部屋の鍵を手に入れた。

2階 物置部屋

エステルは鍵を使って扉を開けた。

「うわぁ……いろんなものが置いてある！あれ……でも……」

エステルは物置部屋を見渡した。

「おかしいなあ……。なんでこんなにムネのあたりがモヤモヤするんだろ……」

エステルはもう1度辺りを見渡し、奥にあつた箱を開けた。

その中にはハーモニカが入っていた。

「うわぁ、キレイ……。これって……吹く楽器だったよね。ちょっとだけ吹いてみよっかな？」

エステルはハーモニカを吹いてみた。

「キレイな音だけど……ちょっとむずかしそう。でも、おかしいな……。この音……どこかで聞いた気がする」

カシウス

「おや、どうしたんだ？ ずいぶん綺麗なハーモニカじゃないか」

「モノオキ部屋にあったの。これっておとーさんのじゃないの？」

「いや、違うが……。レナの物とも思えないし誰が使ってたんだろうな？ん……ちょっと見せてくれ」

「あ、うん」

エステルはカシウスにハーモニカを手渡した。

「リーヴェルト社……こいつは帝国製じゃないか。こりゃ、ますます誰が使っていたか判らんなあ」

「????」

カシウスはエステルにハーモニカを返した。

「まあ、お前がそれを見つけたのも何かの縁だろう。よかったら吹いてみるといい」

「うん……」

レナ

「あらあら……綺麗なハーモニカね。ひよつとして物置部屋で見つけたの？」

「えへへ……。これっておかーさんのもの？」

「ううん。お母さんの物じゃないわ。お父さんもハーモニカなんて吹いていなかったし……。誰が使っていた物かしらね？」

2階 テラス

エステルはハーモニカを吹いてみた。

「うーん……うまく吹けないなあ。このハーモニカってなかなかクセモノよね。カントンに吹けそうなのになちょっとムズカシすぎるよ」

『君がやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……。要は集中力の問題だと思うよ』
脳裏に声が響いた。

「ふえっ……？」

『でも、ホント良い曲よね。明るいんだけど、どこか切なくて……。他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな。あれ……何て名前だったっけ？』

「………………。えっと……たしか……」

エステルはもう1度ハーモニカを吹いてみた。

「うっん……そうじゃない……。そう……こんな感じだったはず……」

「ねえ、ヨシユア……。『星の在り処』……初めてちゃんと吹けたよ」

「ふふ、とっても素敵な曲ね」

暗くなった空間にレナが立っていた。

「……………お母さん……………」

「正確に言うと……私はあなたの母親ではないわ。あなたの思い出から構成された擬似的な人格と言うべきかしら。今までの出来事は

すべてあなたの夢の中での出来事なの」

「そっか……。でも、夢の中だろうとお母さんはお母さんだよ。すごく楽しくて……幸せな毎日だった」

「ふふ……私もよ。それでも……あなたは行ってしまうのね？」

「……うん。今のあたしが戻るべき場所を思い出しちゃったから……」

「そっ……。ヨシユア君と言ったわね？うふふ、なかなかカッコイイ男の子みたいね」

「お、お母さんってば……」

「あらあら。真つ赤になっちゃって。ふふ……不思議ね……。私は本物のレナではないけれど今、とても安らぎを感じている……。小さかったエステルがこんなに大きく頼もしくなって……。そして真剣に恋をしている……。母親として……これほど嬉しいことはないわ」

「……お母さん……。あたし……あたし……」

「ほらほら。そんな顔しちゃダメよ。戻るべき場所を思い出したんでしょ？」

空間に光る扉が現れた。

「あれが夢の終わり……。今のあなたが生きている時間と空間への出口よ。さあ……胸を張って行きなさい」

「うん……。えへへ、最後にお母さんのオムライスが食べたかったな」

「あらあら……。でも、食べたくなったら自分で作ってみるといいわ。あなたが作ったオムライスは多分、私と同じ味の筈だから」

「え……？」

「家庭の味というのは母から子に受け継がれるもの。ちゃんと教えていなくても好みや味覚のような形でね。ちゃんとあなたにも受け継がれていると思うわ」

「そっか……。うん、それを聞いて何だか安心しちゃった。お母さん……あたし、そろそろ行くね」

「ふふ、お父さんとヨシユア君によろしくね」

「う、うん！またね……お母さん！」
エステルは振り返らずに扉をくぐった。
「さようなら……私の可愛いエステル」

第11章 霧魔の標的(15)

「エステル！しっかりしなさい！」
女性の声が頭に響く。

「ん……」

エステルは目を開けた。

「あれ……シエラ姉……」

「エステル！？よかった……起きてくれたのね！」

「あ……うん……。何だかとても長い夢を見てた気がする……」
そう言っつて体を起こした。

「そっか……。……これのおかげで……」

エステルはカバンの中のハーモニカを握りしめた。

「2人とも！幸せなだけの時間は終わりよ！今の現実に戻ってきて
！」

エステルはいまだ寝ているクローゼ、ジン、レインに向かって怒鳴
った。

「エ、エステル！？」

しばらくして3人が体を起こした。

「あ……エステルさん……」

「そっか……。夢に囚われていたか」

「相手の術中に嵌^{はま}ってしまつとは……。私も修行が足りませんね……」

「よかった……。みんな目を醒ましたわね」

「はあ……。あなたには驚かされるわ。自力で起きたばかりか他の人
まで起こすなんてね。さてと、それはともかく……」

シエラザードがセルベの樹にむかつて叫んだ。

「いるんでしょ！ルシオラ姉さん！」

「え……」

「ふふ……。やっと呼んでくれたわね」

鈴の音が鳴り響くと黒衣の女性が現れた。

「なっ……………!?!」

「……………やっぱり……………」

「久しいね、シエラザード。8年ぶりになるかしら?」

「ええ……………そうね。まさか姉さんがこんな事をしてるなんて……………」

「いったい、どういう事なの?」

「ちょ、ちょっと待って!この人……………シエラ姉の知り合いなの!?!」

「ふふ……………つれないわね、おチビさん。あなたとも何度か会ってるはずなのだけど」

「へっ?」

「一緒にタロット遊びをした幻術師のお姉さんのこと……………覚えていないかしら?」

「……………!」

エステルに記憶にハーヴェイ一座の人たちが浮かんだ。

「あ、あそこにいた……………。たしか……………ルシオラお姉ちゃん!」

「ふふ、正解よ。執行者No.?. 《幻惑の鈴》ルシオラ。今はそう呼ばれてるけどね」

「ど、どうして……………」

「ふふ、シエラザード。あなたは気付いていたみたいね?」

「鈴を使った幻術……………。姉さんの十八番だったから。ロレントで発生した霧も幻術とか言わないでしょうね?」

「ふふ、まさか。あれは今回の実験のため、《ゴスペル》が起こした現象よ。人々の夢に干渉するための触媒といったところかしらね」

「触媒……………。まさか《ゴスペル》というのは人の精神にも干渉する……………というの!?!」

「ふふ、そうみたいね。私の鈴はあくまで誘導……………。幻術とは比べ物にならないリアルな夢を構築するわ。苦しみも哀しみもないただひたすら幸せな夢をね」

「……………」

「ふむ、なるほどな……………」

「……………くっ……………」

「ねえ、ルシオラ……………さん。どうして《結社》ってこんな事ばかりするわけ？こんな実験を繰り返して何をしようとしているの？」

「私はただの《執行者》。《使徒》の手足として動くもの。その意味では、今回の計画の手伝いをしているに過ぎないわ。詳しいことは教授とレーヴェに聞きなさい」

「……！」

レインがその言葉に反応した。

「教授、レーヴェ……………。何度か聞いた名前だけどそれっていったい誰なの？」

「時が来れば分かるでしょう。ちなみに2人とも、あなたと面識があると聞いたのだけど」

「えっ……………」

「……………。……………ルシオラ姉さん。これだけは言わせてくれる？」

「あら……………何かしら」

「最初、あたしはリベルに長居をするつもりはなかった……………。姉さんが帰ってくるまでの間、身を寄せるだけのつもりだった。でも、あれから8年が過ぎた。今の私には、友人や仲間たち、家族同然の人たち、そして誇りに思っている仕事がある。もう……………ハーヴェイ一座の踊り子シエラザードじゃない」

「シエラ姉……………」

「…………………………」

「この新たな故郷……………仇なすならたとえ姉さんでも許さない！」

「ふふ……………それでいいわ。あなた達にとって《結社》はあまりにも強大よ。全力で立ち向かってきなさい」

ルシオラがゴスペルを取り鈴を鳴らすとルシオラの姿が霞んだ。

「あっ！」

「姉さん!？」

「ふふ……近いうちにまた会えるわ。つもる話はその時にでも……」
シエラザードがルシオラのところに行ったが、ルシオラは姿を消した。

「……………」

「シエラ姉……………」

「……………ふう、まったく。また逃げられたけど……………事件はこれで解決のはずよ。昏睡した人たちもじきに目を醒ますでしょう」

第11章 霧魔の標的(16) (前書き)

今回で『第11章 霧魔の標的』が終了します。

第11章 霧魔の標的(16)

ロレント市

ルシオラが去った後、ロレント市の霧が晴れ、昏睡した人たちも目を醒ました。

遊撃士協会ロレント支部

「そう……そんな事があったなんてね」

「ごめん、アイナ。もっと早く心当たりについて話しておけばよかったけど……」

「ふふ、気にしないで。あなたの知り合いと分かってもなにか出来たわけじゃないしね。今度オゴってくれればいいわ」

「ええ、お安い御用よ」

「うーん、2人の飲みっぷりだと全然安くないような気が……」

「ガクガクブルブル……」

オリビエが2人の光景を想像して身震いした。

「霧もすっかり晴れたし昏睡していた人も目を醒ましたわ。みんな本当にご苦労さまでした。今回は依頼が複数になったけどまとめて報酬を渡しておくわね」

エステルは報酬を受け取った。

「でも、やっぱり今回も根本的な解決じゃないよね。今度のゴスペルは人の精神まで干渉してきたし。それってやっぱり、今の技術じゃ説明できないの？」

「う、うん……。今までで1番説明できないかも。あとでおじいちゃんに報告書を送っておかなくちゃ」

「ま、《ゴスペル》については爺さんの解析を待つしかねえだろ。それより、やっと《結社》の勢力が見えてきた気がするな」

「ふむ、今回の件と合わせると……。5人の《執行者》が確認されたことになるのか」

「ええ……。No.？ 《怪盗紳士》ブルブラン。No.？

《瘦せ狼》ヴァルター。No. XV 《殲滅天使》レン。

No.？ 《幻惑の鈴》ルシオラ。No. 0 《道化師》

カンパネルラ。そして、この5人に加えて『教授』と『レーヴェ』という未確認の人物がいるみたいね。ひよっとしたらどちらかが口ランス少尉かもしれないわ」

「うん……。その可能性は高いかも。2人とも、あたしの知ってるヤツだつて言つてたし……」

「確かに、ロランスという名前が偽名である可能性はありますね」

「しかし、たった7人ごときでここまでやってのけるとはな。ったく、やっかいな連中だぜ」

「そうね……。あたしたちも、これまで以上に覚悟を固める必要がありそうだわ」

「シエラ姉……。いいの？」

「ふふ、言つたでしょう？リベールは新たな故郷だつて。故郷を守るのに理由はいらないわ。たとえ、昔の故郷の思い出と戦つたことになつたとしても」

「シエラ姉……」

「なあ、シエラザード。最初から答えを決める必要はないと思うぜ」
ジンがシエラザードの言葉に口を開いた。

「え……」

「俺とヴァルターは互いに戦つたことを納得している。もう、拳と拳を通じてしかお互い何も伝えられないんだ。だが、お前たちは必ずしもそうと決まつたわけじゃあるまい？」

「それは……」

「ジンさんの言う通りだと思う。シエラ姉がどうしたいのか、これから見極めればいいわよ。あたしだつて……。やっと思つつけられたんだし」

「え……」

「ねえ、みんな。こんな時に何だけど……見て欲しいものがあるの」「あん……?」

「エステルさん……?」

「エステル、まさか……」

「うん……。これ、雑誌社の人たちにもらった写真なんだけど……」
エステルはドロシーが撮った写真をみんなに見せた。

「こいつは……空賊艇の奪還事件のブツか」

「なるほど……こんなものがあつたのか」

「ふむ、左にいるのが武術大会にも出場していた空賊団の娘だな。そして右にいるのが……」

「あ……」

「なるほど……」

「ヨ、ヨシユアお兄ちゃん!？」

「えっと……今まで黙っててゴメン。ちょっと動揺しちゃってなかなか言い出せなくて……」

「お姉ちゃん……」

「エステルさん……」

「ヨシユアが何をするつもりかあたしには分からないけど……。多分、ヨシユアなりの方法で《結社》に迫るつもりだと思う。空賊たちと一緒に悪さはしないとと思うんだけど……」

「ええ、分かっているわ。写真も顔半分が隠れているから決定的な証拠にはならないしね。この情報はギルド内に留めておきましょう」

「ありがと、アイナさん」

「で、でも……エステルさんはいいんですか?せっかくヨシユアさんの手がかりが見つかったのに……」

「うん……。あたしがあたしである限り、ヨシユアとの絆はなくならない。そう思えるようになったからあんまり焦らないようにしたわ」

「あ……」

「違う道歩いているけど目指す場所はきつと同じだから。だから今は……自分自身の道を行こうと思う。そうじゃないとあたしはあつたとして強くなれないから」

「エステルさん……」

「えへへ……なんてカツコ付けてるけど……。ヨシユアとボクつ子の関係とかやつぱり気になるのよね。まだまだ修行が足りない証拠だわ」

「ふふ……エステルさんったら」

「ふふ、ちゃんと答えを見つけれなかったじゃないの。どうやら森で見た夢が良い方向に働いたみたいね？」

「うん……。ヨシユアとの絆を改めて確かめられたし……。お母さんのぬくもりを思い出すこともできたわ。今回ばかりは《ゴスペル》に感謝してあげてもいいかも」

「ふふ、お姉ちゃんつてば」

「つつたく……。やつぱりお前、大物だわ」

「フツ、エステル君にかかつては《ゴスペル》も形無しみたいだね」

第12章 守るべきもの(1)

翡翠の塔

「《翡翠の塔》 どうやら……報告通りみたいね」

ルシオラが《翡翠の塔》に来ていた。

「王城の封印区画と連動した《デバースタワー》の一角……。表と裏を利用した《第二結界》……。ふふ、教授もよく調べたものね」
その時、飛行艇の影がルシオラの上をかすめた。そして、塔の横にとまった。

「よお、待たせたな」

「ふふつ、お疲れさまだったね」

赤い飛行艇の中から現れたのは《痩せ狼》ヴァルターと《道化師》カンパネルラだった。

「あら……貴方たちが来るなんて。てつきりレーヴェが迎えに来ると思ったのだけど。どういう風の吹き回しかしら？」

「ふふ、レーヴェなら教授のお供をしているところだね。そこで僭越ながら僕たちがお迎えに参上したというわけさ」

「まー、次の段階までやる事も無くなっちゃったしな。ヒマ潰しに来させてもらったぜ」

「ふふ、物好きなこと。しかし、教授とレーヴェが同行しているということは……。ついに最後の実験が行われるということかしら？」

「クク、らしいな。『福音計画』もいよいよ次の段階ってわけだ」

「人形と猟兵の仕上がりも上々だ。これで《》が完成したらずいぶん忙しくなると思うよ」

結社飛行艇内

「最後の実験ということは『あれ』が相手だったかしら。さ

さすがに教授やレーヴェでも一筋縄では行かないでしょうね」

「クク、そうかもな。なんとと言っても伝説の存在だ。強さの次元が違っただろうぜ。……しかしカンパネルラよ。てめえらしくねえじゃねえか」

「あらら、何がだい？」

「いつものためえだったら喜んで教授に同行してるはずだ。それをしないってことは他に面白いネタがあるんだろう？とつと吐いちまいな」

「やだなあ、ヴァルター。僕ってそんなに信用ないかな？」

「クク、信用してるさ。てめえのナンバーと同じくらいな」

「No.0 ふふ、信用ゼロというわけね」

「やれやれ、2人ともキツイなあ。ま、見物したいのは山々だけどあいにく急ぎの用事があつてね。あの方に《方舟》の使用許可を頂くつもりなのさ」

「クハハ！マジかよ！よりもよってあんな化物を投入するとはな！」

「《紅の方舟》 グロリアス。まさかとは思うけど……リベールを焦土と化すつもり？」

「ふふ、それは教授とレーヴェ次第だと思うよ。そんな訳で、この後すぐに出かけなくちゃならなくてね。実験の顛末は、帰ったらゆつくり聞かせてもらおうさ」

第12章 守るべきもの(2)

霧降り峡谷

ワイスマン教授とレーヴェエが霧降り峡谷を登って最奥に入っていた。

「……これは……」

レーヴェエが目の前の存在に圧倒されていた。

「フフ……。やはりここにいたようだね。見たまえ、レーヴェエ。何とも優美な存在じゃないか」

「……。本当にこんなものを使って『実験』を行うというのか？」

「君の危惧も当然だ。だが、《》を仕上げるにはどうしても必要なデータだからね」

ワイスマン教授とレーヴェエが話していると、声が響いた。

「……おぬしらは……」

「おお……起こしてしまったようだね。20年ぶりのお目覚めかな？」

「……」

「お初お目にかかる。私の名は、ゲオルグ・ワイスマン。《身喰らう蛇》を管理する《蛇の使徒》を任されている」

「……。去れ……。おぬしが漂わせるその力……。どことなく懐かしい気がするが……。おぬしの目は気に入らぬ……。昏い悦び（ひくび）にしか生を見出せぬ……。歪んだ魂（しん）の匂いを感じるぞ……」

「フフ、お誉めにあずかり光栄だ。しかし残念ながら貴方に拒む権利はないのだよ。女神の至宝に関わる話だからね」

「……なに……？」

「レーヴェエ、見せてやりたまえ」

「……」

レーヴェエが《ゴスペル》を取り出した。

「……………それは……………!!」

「1200年前の記憶が甦ったかね？レプリカに過ぎないがなかなか良く出来ているだろう？」

「……………おぬしら……………。……………まさか《輝く環》を!!」

「フフ、そのまさかだ」

ワイスマン教授が杖を取り出した。

「それでは　最後の『実験』を始めよう」

第12章 守るべきもの(3)

ロレント市

「さてと、最初の予定通りボース地方に向かわなくちゃね。まだ《実験》が行われていない唯一の地方になったわけだし」

「ええ、そうね。ただ現状で、ボース地方では妙な事件は起きていないそうよ。ある程度、ロレントの仕事を手伝ってから出発してもいいわね」

「うん、分かった。一通り用事を済ませたら発着場に行くつもりよ」

ロレント発着場

「やあ、エステル。もう出発しちゃうのかい。せっかく帰ってきたんだからゆっくりして行けばいいのに」

「うん……色々と忙しくてね。今の仕事が一段落したら帰ってゆっくり休むことにするわ」

「うんうん、そうするといい。さてと、アイナさんからすでに運賃は貰っているんだ。さっそく乗船手続きをするかい？」

「手続きしたら、船が来るまでここで待った方がいいわね。もうロレントでやり残したことはない？」

「うん、大丈夫よ」

「よしきた。それじゃあ、ギルドに連絡して他のメンバーも呼んでおくよ」

エステルたち乗船手続きをしてから定期船の到着を待つことにした。

一方、ツァイス市 ラッセル工房

「なるほど、今度の《ゴスペル》は人の精神にも干渉してきたか……。そして霧の粒子を媒介に広範囲を掌握・コントロールする。ふむ……これで決まりじゃな」

ラッセル博士はティータから送られてきたロレントでの報告書に目を通していた。

「博士、お邪魔しますよ」

「おお、カシウス。1ヶ月ぶりくらいじゃの。レイストーン要塞から来たのか？」

「ええ、ようやく仕事が一区切りついてくれたのでね。陣中見舞いにお邪魔しました」

ラッセル工房に入ってきたのは珍しくもカシウスだった。

「それは……お孫さんのレポートですか？」

「うむ、今朝ほどロレントから届けられてな。このレポートのおかげでようやく確信が持てたわい」

「《ゴスペル》の正体ですか」

「うむ、あくまで仮説だがな。思考実験と《カペル》を使ったシミュレーションは千回以上行った。聞くか？」

「是非とも」

「うむ、それでは」

ラッセル博士が《カペル》に設置していた《ゴスペル》を取った。

「この《ゴスペル》が起こす『導力停止現象』じゃが……。お前さん、あの現象がどのようなものだど理解しておる？」

ラッセル博士がカシウスに『導力停止現象』について尋ねた。

「《ゴスペル》の周囲にあるオーブメントに連鎖して起こる機能停止現象……。そのように捉えています」

「半分正しくて半分間違っておる。お前さんが言った現象はどちらかというと導力魔法の『アンチセプト』に近い。内部の結晶回路をショートさせ一時的にオーブメントを働かせなくしておるわけじゃ。じゃが、《ゴスペル》が起こす現象はそれとは根本的に異なってい

てな……。オーブメント内で生成される導力を根こそぎ奪い取るのじゃ」

「つまり、『導力停止』ではなく、『導力吸収』ということですか……」

「うむ、内燃機関でいえばガソリンを抜き取るわけじゃな」

「ふむ、確かにそれなら『アンチセプト』との違いも説明できそうですが……。いや……待てよ。それなら奪われた導力は《ゴスペル》に蓄積されるはず」

「うむ、良い所に気付いたの。結論から言ってしまうえば、周囲から奪われたはずの導力は《ゴスペル》内部に存在しなかった。それこそIEPたりともな」

「周囲に拡散した可能性は？」

「無い。キレイサツパリとどこかに消えてしまふのじゃよ」

「……………」
「そして、エステルたちが出くわした一連の《新型ゴスペル》じゃが……。最新の導力技術では説明できない『あり得ない』現象を引き起こした。そのような現象をどうやって引き起こすのかは不明じゃが……。1つ確実に言えることがある」

「それは……？」

「小さすぎるのじゃ。これまで起きた大規模な異常現象を発生させる機構を、掌大に収めるのは物理的に不可能だと断言できる。たとえば《結社》とやらが我々より遙かに進んだ技術を持っていてもな」
「なるほど……。何となく掴めてきましたよ。つまり、この《ゴスペル》は《端末》に過ぎないわけですね？」

「うむ……。まさにその通り！《ゴスペル》そのものには異常な導力場の歪みのようなものを発生させる機能がある。その歪みは共鳴するように広がり、周囲のオーブメントから導力を奪う。そして奪われた導力は、歪みの中に吸い込まれて消滅する。いや、正確には消えたのではない。別の空間に送られたというわけじゃ」

「そして、その別の空間にはあり得ない異常を引き起こせる『何か』

が存在している……。つまり、そういうことですか」

「うむ、間違いあるまい。《結社》は《ゴスペル》を通じてその『何か』が持っている力を引き出すことができるのじやろう。まったく《福音》^{ゴスペル}とは良く言ったものじやよ」

「………………。だとしたら……『何か』の正体が気になりますね。遙かに進んだ技術で作られたオーブメントか、それとも……………」

「それに関してはお手上げじや。色々な可能性が考えられるが、現状ではこれ以上確かめられん。さてカシウス　　10年前と同じことを聞くぞ。この現状を踏まえてわしに今後、何をして欲しい？」

「はは、警備飛行艇の完成をお願いした時と同じ言葉ですか。ふむ、そうですね……………」

しばらくカシウスは思考を巡らせた。

「《ゴスペル》が発生させるといふ異常な導力場の歪み　　その共鳴現象を防ぐ手段を開発して頂けないでしょうか？」

「ふふ、そう言うと思ったぞ。今取りかかっている発明もそろそろ完成する頃合いじや。それさえ終わればすぐにも始められるじやろう」

「ティータ

「あ、お姉ちゃん。またお散歩してるの？」

「うん、まあね。そういえばティータってボースは初めてなんだっけ？」

「うん、初めてだよ。すごくおっきなお店があるって聞いたんだけど……」

「あ、ボースマーケットね。王都にある百貨店をさらに大きくした感じかな。色々な店が入っていてすごく賑やかなんだから」

「ふえ〜、すごいね。えへへ……早くボースに着かないかな。そういえば、お姉ちゃん。ラヴェン又村って行ったことある？」

「うん、前に仕事で行ったわよ。たしか……アガットの故郷なのよね？」

「うん、ミーシャさんっていう妹さんが住んでいるんだよ。アガットさん、妹さんに顔を見せるために年に何度か村に帰るんだって」

「へえ、そうなんだ。しかしアガットの妹かあ……。あんな無愛想な兄貴を持つてさぞかし苦労してそうよね」

「もー、お姉ちゃんたら。アガットさん、ぶつきらぼっただけどっても優しい人だと思うよ？」

「あー、はいはい。不器用で照れ屋なのはあたしも認めるけどね」アガットのいない所で言いたい放題の2人。

「えへへ……。わたし、ミーシャさんってすごく良い人だと思うんだあ。アガットさん、ミーシャさんの話をした時、とっても優しい目をしてたから……」

突然、ティータの口が止まった。

「?どうしたの?」

「ううん、なんでもない。ただちょっと……胸のあたりがモヤモヤして……。えへへ、どうしてかなあ?」

「(うーん……これはヤキモチみたいね)」

くジン

「よう、エステル。今回はお疲れさんだったな。また一步、遊撃士として成長したように見えるぞ」

「えへへ……まだまだ未熟よ。棒術の腕だって父さんの足元にも及ばないし」

「はは、あんまり旦那を意識する必要はないと思うぜ。Sランクの遊撃士っていうのは『理』に至った達人ばかりだからな。正直、俺なんざ一生かかっても辿り着けるかどうか怪しいところだ」

「そ、そうなんだ……。父さんが具体的にどう凄いかいまだにピョンと来ないけど……。その『理』ってどういう意味なの？」

「ふむ……。そうだな。かつて旦那は『剣聖』と呼ばれる卓越した剣の使い手だったそうだ。しかし今では、慣れ親しんだ剣と同じように棒を自在に振るう。何故それができると思う？」

「えっと、物凄く練習したから？」

「勿論、それもあるだろう。だがそれ以上に、棒術の本質を即座に掴むことが出来たからだ。型の反復や反応、筋力や錬気を越えた所にある絶対的な次元……。あらゆる物事の本質を捉え、自在に操ることのできる境地……。それこそが『理』に他ならない」

「物事の本質……」

「恐らく、旦那が《百日戦役》で帝国軍を退けた知略も同じはずだ。戦争という物事の本質を掴めたからこそ、あんな大胆な反攻作戦を立案・実行できた。敵に回したらこれほど恐ろしい人はいないだろうな」

「な、なるほど……。でも、その父さんもある意味、《結社》に出し抜かれたのよね。クーデター事件の時に国外に誘き出されたみたいだし」

「ああ、恐らく旦那に匹敵する人物がいるのは間違いない。それが『レーヴェ』なのか『教授』なのか判らんがな」

「えっと、あたしたちが戦った『ロランス少尉』なんてどう？」

「ヤツか……。凄腕には違いないだろうが旦那に匹敵するかどうかは判らん。それに、ヤツの強さは『理』から来ているのではない。ような気がする。冷たく研ぎ澄まされ、鍛え抜かれた何者にも侵さることのない刃……。そんなものを感じたな」

「……うん。言いたいことは分かる気がする。あれから姿を見せてないけどいったい何をしているんだか……。……ヨシユアも拘ってみたいだし」

「ああ、『結社』時代の因縁があるのかもしれんな。俺といい、シエラザードといい、どうも妙な因縁が多すぎるようだ。これもひょっとしたら……。女神の導きによるものかもしれん」

「あ、そういえば……。ジンさんもあの時、眠らされちゃったよね。やっぱり何かの夢を見たわけ？」

「ああ……。道場にいた頃の夢を見たぜ。キリカが今とほとんど変わってなかったのに気付いてな。夢の中で思わず笑っちゃったよ」

「へへ、キリカさんって昔からあんな感じだったの？」

「ああ、あんな感じだった。あれでよくヴァルターと付き合ってたもんだと……」

「えっ……。！？」

「……口が滑っちゃったな。悪い、今は忘れてくれ」

「う、うん」

くクローゼ

「エステルさん。またお散歩ですか？」

「えへへ、まーね。それよりゴメンね。ヨシユアのこと打ち明けるのが遅れちゃって」

「ふふ、とんでもないです。それにしても、ヨシユアさんに同行している女の子というのは空賊団の人だったんですね」

「うん、ジョゼットっていうやたらと生意気で挑発的な娘よ。自分のことをボクって言うからボクっ子とか呼んでるけど」

「そうなんですか……。でも、写真で拝見した限りだとなかなか魅力的な方みたいですね」

「むー、口を開かなかつたら可愛いってというのは認めるわ。最初に出会った時は完璧にお嬢様を演じてたし……」

「???」

エステルはロレントの市長邸でジョゼットと初めて出会った時のことを話した。

「まあ、そんなことが……。ずいぶん器用な人なんですね」

「何でもエレボニアの元貴族出身みたいだからね。ネコをかぶるのは得意みたい。地はさつきも言ったように生意気で挑発的な性格だけど」

「ふふ、でも聞いた限りだと何だか憎めない人みたいですね。話してみたら意外と気が合いそうな予感がします」

「うーん、あたしはダメかも。なんか性格的にウマが合わない気がするわ」

「ふふ、そういうのってどうしてもありますよね」

「そういえば……。クローゼもあの時、眠らされちゃってたよね。やっぱり何かの夢を見たわけ？」

「ええ……。《百日戦役》の時の夢を」

「《百日戦役》の時って……。そっか、確かクローゼってその時にテレサ先生と……」

「はい、先生たちに保護されてしばらく一緒に暮らしていました。でも……。うふふ」

急にクローゼが笑い出した。

「ど、どうしたの？」

「いえ、10年前の話なのになぜか途中でクラム君やジルたちまで

登場したのです。あのまま見続けてたらエステルさんやヨシユアさんも出てきたのかもしれない」

「あはは、さすが夢だけあって脈絡がないところもあるわけね」

「はい。でも……今考えると少し恐いんです」

「え……？」

「夢の中の私は本当に幸せで……。ずっとこのままで居たいって心の底から思っていました。でも、それって何かの間違っていている気がするんです」

「うん……言いたいことは分かるよ。良い夢を見れてラッキーっていうのは確かにあるけど……。また見たいかって言われたらちよつと躊躇ためらっちゃうよね」

「はい……。《ゴスペル》の持っている別の意味での危険性……。それを垣間見た気がします」

くアガット

「……………」

アガットは珍しく座席に座らずに別の場所にいた。

「あれ……。どうしたの、アガット？」

「……何でもねえ。お前の方はまた船内散策か？」

「うん、まあね。そういえば、アガットってラヴェン又村出身なのよね。久々の里帰りじゃないの」

「まあ、しばらくぶりだな。生誕祭が終わった後、一度、帰っちゃいるんだが　って、待てやコラ。なんで俺が里帰りするのが前提になっっているんだ？」

「照れない照れない。たしかアガット、妹さんが故郷にいるって言うってたよね？むふふ、さぞかし可愛がってるんじゃないの？」

「あのな……………」

「そういえば、アガットの家ってラヴェン又村のどこにあるんだっ

け？前に空賊事件の調査で寄った時はそれらしい子に会わなかったのよね。ルウイ君と一緒にいた女の子はちょっと小さすぎる感じだったし……」

「……ま、ミーシャについては近いうちに紹介してやるよ。村による機会があったらな」

「あ、うん、よろしくね。しかしそうになると……ティータも連れてかなくちゃね」

「な、なんでそうなるんだ？」

「だってティータ、アガットにずいぶん懐いてるみたいだし。紹介してあげなかつたらガツカリしちゃうと思うわよ？」

「……」

「あ、分かった！アガット、妹さんとティータを会わせたくないんでしよう？」

「なッ……」

「あはは、図星か。アガットをめぐってお互いやキモチ焼きそうだしね。いや〜。お兄ちゃんはツライわねえ？」

「なんだ……そういう意味かよ」

「???まあ、心配しないでまあたしがフォローしてあげるわ。だから安心してティータを妹さんに紹介してあげなさいよね」

「へッ……そうだな。その時はよろしく頼むぜ」

くシエラザード

「あら、エステル」

「シエラ姉、ここにいたんだ。えっと……ひよっとして邪魔かな？」

「ふふ、なに遠慮してるのよ。ルシオラ姉さんについて聞きたいことがあるんでしょ？」

「あ、うん……。昔会ったことがあるみたいだけど、ほとんど覚え

ていなくて……。どんな人だったのかなあつて」

「そうね……。《幻惑の鈴》ルシオラ。鈴と扇を使った『舞い』によって観客に幻を見せることのできる人……。あたしのいた一座の目玉と言うべき芸人だったわ」

「そうなんだ……。その幻つて、オーブメントを使っているの？」

「いいえ、古くから伝わる《幻術》という技術みたいね。姉さんは元々、そういう家に生まれたみたいだったから」

「元々……？」

「旅芸人をやっている人間つて大体、2種類に分かれているの。訳あつて故郷を捨てた人間と身寄りのない天涯孤独の人間……。ルシオラ姉さんは前者で……。そして……。あたしは後者だった」

「あたしがハーヴェイ一座に拾われたのは7つくらいの時だったかしら。その頃のあたしは、街のスラムで荒みすさきつた暮らしをしていたわ。スリ、置き引き、かっぱらい……。ほんと、ロクな事をしてなかった。そんなあたしに手を差し伸べてくれたのがハーヴェイ座長と姉さんだった。他人を信じきれないあたしに家族の暖かさを教えてくれて……。自分の居場所を作れるようになって様々な芸や技術を教えてくれた。踊り、猛獣使い、タロット。全て姉さんから教わったわ。でも……。8年前。事故で座長が亡くなってから一座はバラバラになってしまった。あたしは姉さんに付いて行くつもりだったけれど……。『やる事がある』と言い残して姉さんは居なくなってしまった。途方に暮れたあたしは座長や姉さん以外で唯一頼りになる人に相談してみることにした。そう　　すでに遊撃士として活躍していたカシウス先生にね』

「そんな事があつたんだ……」

「あたしが遊撃士を目指したのは少しでも強くなりたかったから。」

姉さんが帰ってくるまでの間、1人で真つ当に生きて行けるように。でも……あれから8年経った。自分の道を見つめ直すには良い機会なのかもしれないわね」

「シエラ姉……」

「ふふ、そんな顔しないの。ジンさんに言われたように問答無用で戦うつもりはないわ。ただ、一度きちんと姉さんから話を聞きたいと思っている。どのような理由があつて《結社》に与くみしているのかをね」

「うん……そうだね。シエラ姉、ファイト！あたしも出来るだけ協力するわ！」

「ふふ、ありがと。しかしエステル……あなた、本当に成長したわね」

「な、なによ、やぶから棒に」

「さすがは先生の娘つて今までずつと思つてたけど……。ちよつと認識を誤つていたかもしれないわ」

「へ……どうということ？」

「あなたの強さは先生の強さとは少し違うみたい。先生は、海のように懐が深くて雄大な強さを持っているけど……。あなたはそうね……自分も他人も輝かせるような、太陽みたいな強さを持っているわ」

「え……」

『僕のエステル……お日様みたいに眩しかった君』

エステルの頭にヨシユアの言葉が浮かんだ

「……………」

「みんな、あなたのそういう所に惹きつけられているんだと思う。あたしもそうだし……もちろんヨシユアもね。先生のことをプレッシャーに感じる必要なんてないと思うわよ」

「うん……。えへへ、やっぱりシエラ姉つてあたしのお姉さんだよ

ね。いつもいつも……励ましてくれてありがとう」
「ふふ、どういたしまして。代わりと言ったらなんだけど今度、飲みに付き合いなさい。正遊撃士になったからにはお酒にも強くなるいなとね？」
「それは激しく関係ないと思うんですけど……」

レイン

「あれ、レインさんはまた外？」

「ああ、エステルさんですか。ええ、こうやって風にあたるのが好きですから」

「そう……」

「そうしたのですか？もしかしてあの時のことが気になりますか？」

「あの時のことって？」

「夢の話ですよ。どうです、聞きたいですか？」

「あ、うん。レインさんが良かったら……」
「私は構わないのでお話しますよ。夢の内容は私が幼かったときの思い出でしたよ。貧しくも苦しくなく楽しかった頃の……。そう、あの日を境に私の人生の歯車が狂い始めた時までの……」

「え……」
「ちょっと口が出すぎましたね。少し私の半生についてお話ししましょう」

『私はレミフエリア公国のある裕福な家に生まれました。幼少の頃
夢で見た時期でしたが 何不自由なく楽しく日々を過ご
していました。ところが、16年前 8歳の時 父が突然
家を出ていってしまいました。残された母は何とか仕事を探し、食

べていくだけの生活費を稼いでいました。とても貧しかったのですが、母が優しくかったので苦しくはありませんでした。しかし、私が12歳の時、生活に疲れたのか……母が自ら命を絶ちました。父に家を出て行かれ、母が自殺した……。私は世の中が嫌になりました。その後、アルテリアの七耀教会に引き取られ生活していました。ただただ時間が流れていく中、ある教会の女性が私に剣術を教えてくださいました。『君も男の子なんだから武術の心得が一つくらいあった方がいいだろう』と言われましてね。それから、剣の腕を磨くことに打ち込みましたね。この剣術を活かすために、私はアルテリアを出て様々な地方で魔獣退治などをすることにしました。そして6年前、何度も話した『ある事件』に出くわしたのです』

「これが私の半生です。これ以降は前に話した通りですよ」

「レインさん……」

「そう哀しそうな顔をするものではないですよ。確かにつらい出来事でしたが、今の自分があるのもその出来事のおかげです」

「で、でも……」

「エステルさん。今回の夢について考えてください。人は楽しい時間が過ぎ去っていくのを恐れます。その後の苦しいことを考えてしまうからです。しかし、人は苦勞無くして前には進めません。楽しい時間ばかり過ごすことは、時が止まった空間で過ごすのと同じです。何不自由ない生活をしていると、貧しくなるのを恐れます。そのためにさらに豊かになろうという欲望が生まれます。もし、私があのまま裕福な生活を送り続けていたら私もそうなっていたでしょう。不幸なことが起こってしまい悲しいですが、世界に対する視野が狭くならず良かったとも思っていますよ」

「……レインさんは強いね」

「いえ、エステルさんほどではありませんよ。さて、ボース地方までもう少しですし、私は席に戻りますね」

「うん、また後でね、レインさん」

第12章 守るべきもの(5)

エステルが船内に入ると、アナウンスが流れた。

「……お待たせしました。まもなく本船はボース市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早目に座席にお戻りください」

「ボース市 遊撃士協会ボース支部

「いや、ロレントからわざわざご苦労じゃったな。しかし……《不動》《銀閃》《重剣》に加えて期待のルーキーの揃い踏みか。何とも豪華なメンバーじゃのう」

受付のルグラン爺さんが感心した。

「期待のルーキー？」

エステルがキョトンとした。

「わはは、お前さんのことじゃよ4つの地方で《結社》の陰謀を立て続けに阻止した驚異の新人……そんな風に噂されておるようじゃ」「じよ、冗談！陰謀を阻止したなんて買いかぶりもいいところだわ。いつも《実験》が終わってから余裕で逃げられちゃってるし……」「でも、ロレントではいい働きをしてくれたじゃない。胸を張ってもいいと思うわよ」

「あ、あれはその、偶然が重なったっていうか……」

「はは、照れるなつての。要は評判に見合うだけの働きをすりゃあいいんだからな」

「もう、簡単に言わないでよ。それはともかく……ボースでの状況はどうなの？」

「うむ、今のところ《結社》が関与していると思しき事件は起こっておらんよ。例の空賊艇の奪還事件以来、軍の警戒も厳しくなっておるしな。あえて言うなら……手配魔獣が増えておるくらいか」

「フン……そうか」

「ポーヌって、手配魔獣が現れるのが他の地方よりも多い気がするわね。前に来た時もそうだったけど何か原因でもあるの？」

「元々ポーヌ地方は広いし、険しい地形に囲まれておるからの。そういう場所から凶暴な魔獣が降りてくることが多いんじゃないか……。それにしても今月に入ってからすでに10件も報告されておってな」「それは多いわね……。ステイングさんあたりが頑張ってくれてるのかしら？」

「うむ、それとクルツたちも先日立ち寄ったついでに何匹か退治していつてくれた。できればお前さんたちにも手伝ってもらいたいんじゃないが」

「ふむ……そうした方が良さそうだな。凶暴な魔獣の増加にしても《結社》が絡んでいるのかもしれない」

「うんうん、このまま放っておくと危ないし、ここは退治を優先しちゃいませよ」

「……」
しかし、アガットは反応を示さなかった。

「????アガットさん。どーしたんですか？」

「あれ、どうしたの」

「いや……何でもねえ。とりあえず、今報告されてる手配魔獣を片っ端から退治するか」

「……」
アガットだけでなくレインも何か思い悩んでいた。

「……失礼しますわ」

「メイベル市長……それにリラさんじゃない！」

ギルドに入ってきたのはメイベル市長とリラだった。

「うふふ、ご機嫌よう。エステルさん。ようやく再会できましたね」

「……ご無沙汰しております」

「うわゝ、何だか久しぶりねえ。生誕祭の時以来だったっけ？」

「ええ、そうなりますわね。エステルさんのお噂は色々な所で耳に

していますわ。他の皆さんもお久しぶりです。クローゼは……もう休暇に入ったのかしら？」

「いえ、実は一足先に休学にさせて頂いたんです。メイベル先輩とリラさんもお元気そうで何よりです」

「メイベル……先輩？」

「あ、王立学園の先輩でいらっしやるんです」

「ふふ、公の場以外では威張らせてもらってるわけですよ」

「あはは、そうなんだ」

「それと……アガット・クロスナーさん。お久しぶりですよわね」

「……まあな」

「あれ、アガットって市長さんと顔見知りだったの？」

「何度か依頼を通じてお世話になっていきますわ。それと10年前に

……」

「おい……嬢さん」

「……失礼しました。今日のところは、皆さんがいらっしやったと聞いたので挨拶に伺わせていただいたのです。聞けば、王国全土を騒がす国際犯罪組織を追ってらっしやるのだとか？」

「こ、国際犯罪組織……」

「少し雰囲気は違うけれど、そう思ってくれて構わないわ」

「ボース市としても犯罪組織の暗躍は他人事ではありません。可能な限りの協力をさせて頂きますわ」

「うん、その時はよろしく願います」

「フン……ま、せいぜい期待してるぜ」

「では、わたくしたちはこれで失礼させていただきます。何かありましたら市長邸までいらしてくださいね」

「……失礼します」

リラが一礼すると、メイベル市長とリラがギルドを出ていった。

「やれやれ、アガット。お前さん、もう少し愛想良くはできんのか？」

「悪いが、これが地だね。サービス業じゃねえんだ。その辺は勘弁

してもらっぜ」

「うーん、確かにアガットって誰に対しても横柄だけど……それでも対応そのものは割と丁寧な感じがするのよね。でも、さっきの市長さんには素っ気なく感じたんだけど」

「……………」

「……………エステルさん。あまり人の感情に突っ込むものではないませんよ。人それぞれ何かしらあるものですから」

「へッ、そうだった」

「うーん……………」

「それよりも、さっさと手配魔獣を退治しまっぞ。爺さん、一通り教えるや」

「うむ……。報告されているのは3件じゃ。まずは、クローネ峠に出没する『ブレードファング』。そして、霧降り峡谷に出没する『ゴーストエピタフ』。最後に、琥珀の塔に出没する『オクトボーン』じゃ」

「うん……………ちゃんとメモしたわ」

「よし、魔獣退治ってことは俺の『重剣』の出番のようだな。今回は俺に仕切らせてもらっぜ」

「へっ……………」

「ま、ボース地方はあんたの故郷でもあるしね。今回は適任じゃないかしら」

「ああ、俺も異存はないぞ」

「へッ、決まりだな。それじゃあエステル。とっととメンバーを選ぶぞ」

「むー、なんか強引ね」

「さてと、手配魔獣については各地に行ってみるとして……。せっかくだからラヴェンヌ村にも寄っちゃっぞ」

「あのな……定期船でも言ったはずだろうが。ラヴェンヌ村に寄るのはボースの事件が一段落してからだ」

「もう、ケチくさいわね」

「ふふ、アガットさんの言う通りかもしれないね。ティータちゃんを差し置いて私たちが寄るわけにもいきませんし」

「あ、それもそっか」

「そこで納得すんじゃないか」

第12章 守るべきもの(6)

「は、これでラストね。それにしても……何だか様子が変わらない？何か魔獣が怯えていたみたいだし」

「ああ、どの魔獣も様子がおかしかったな。やたらと凶暴化していたり、パニックに陥っていたり……」

「私も……そんな印象を受けました。どういう事なんでしょうか？」

「……」

「?どうしたの?」

「いや……ひよっとしたら何かの前触れかもしれねえ」

「前触れ……。ひよっとして《結社》の!?!」

「それは判らねえが……。前にも似たような事があった。いつになく魔獣どもが騒がしい日が続いてな……。そのすぐ後に……」

「……」

「????」

「……」

「(やはり、アガットさんは……)」

「ま、今はその話はいいだろう。とにかく、動物つてのは人よりもある種のカンには優れている。何が起こっても対処できるよう気を引き締める必要がありそうだ」

「うん……分かった。それじゃあ……一旦ギルドに戻ろっか?」

「ああ、そうするか」

遊撃士協会ボース支部

「ただいま、ルグラン爺さん。手配魔獣は全部片付けたぞ」

「おお、ご苦労じゃったな。どれ、では先に今回の報酬を渡しておくか」

エステルは報酬を受け取った。

「ふむ、かなり凶暴だったらしいが問題なく退治できたようじゃな」
「うーん、それなんだけど……。ちよつと気になることがあってね」
「？気になることじゃと？」
「ああ、実はな」
「エステルたちは一連の魔獣退治での魔獣の様子を話し始めた。」

）同時刻 ポース市街

「ご機嫌よう、ヤハトさん」

「おお、市長じゃないかね。教会に礼拝に行くのかね？」

「いえ、マーケットの視察に行くつもりですの。礼拝はその後するつもりですわ」

「お嬢様……。先日も、そんな事を仰いながら結局お行きになりましたが」

「もう、リラったら。つまらないことを覚えてるわね。今日は絶対に寄りますわよ」

「ふおお、仕事も結構じゃが日々の生活を大切にする事じゃ。あんたみたいに責任のある立場にいる人間ならば特にな」

「ええ、肝に銘じておきます。それではわたくしたちはこれで失礼しますわ」

「失礼します」

メイベル市長とリラはポースマーケットに入っっていた。

「お父上が亡くなった後、すぐに市長に立候補した時はどうなるかと思っただが……。今ではすっかり一人前の市長の顔になったのう。」

「ふむ、もう少し肩の力を抜いた方がいいと思うが」

ヤハト老人がふと顔を上げると、何かを見つけた。

「……なんじゃ、あれは？」

「ふむ、魔獣が怯えたり、やたらと暴れておったか……。何とも気になる話だのう」

「うん、何だか不気味よね。そういえばアガット。前にもボース地方で同じようなことがあったとか言ってたよね？」

「む、そうなのか？」

「ああ……。まあな。爺さんがボースに来る前の話さ」

「あれ、ルグラン爺さんって前からここにいるんじゃないの？」

「わしがこの街に来たのは《百日戦役》が終わった後じゃよ。かつてリベールの遊撃士協会はグランセルにしかなくて……。各地方に支部が作られたのは戦争が終わってからなんじゃ。ちなみにわしは、10年前までは王都支部の受付をしてたんじゃよ」

「へえ、そうだったんだ」

「……その《百日戦役》の直前だ。魔獣の様子がやたらとおかしかったっていうのはな」

「へ……？」

「なんじゃと……？」

その時、外から轟音が響いた。

「な、なんじゃあ！？」

「な、なに今の！？」

「外だ……確かめるぞ！」

第12章 守るべきもの(7)

「ああっ!?!」

エステルたちが目にしたのは、ボースマーケットの上に巨大な竜が乗っていた。

「な、何なの!?!」

「はわわっ……………」

「なんて大きさ……………」

「こいつは……………竜か!?!」

「まさか、これが伝説の……………」

「はい……………古代竜です!昔からリベールのどこかに棲息していると伝えられていましたが……………」

「いやはや、たまげたねえ」

「まさか……………こいつも《結社》の仕業か!?!」

「……………まあ、否定はすまい」

ボースマーケットの上に銀髪の青年がいた。

「あ……………!」

「てめえは……………!?!」

「特務部隊隊長、ロランス・ベルガー少尉!」

「フフ、それはただの偽名だ。執行者N0.?. 《剣帝》レオンハルト。以後、そう呼ぶといいだろう」

「《剣帝》……………レオンハルト」

「なるほど……………」獅子レオンの果敢ハルト』か。すると『獅子レイヴェ』というのはキミの愛称だったわけだね」

「あ、あんですって!?!」

「貴方が《レイヴェ》……………」

「……………いささか不本意だが、仲間内ではそう呼ぶ者は多いな。まあ、お前たちも好きなように呼ぶがいい」

「……………舐めやがって……………」

「……自己紹介は終わりましたか？」

「む？」

「私のことは覚えていますか、レーヴェ？」

「フツ、今までコソコソと《結社》のことを嗅ぎまわっていたと聞いていたが……。どういう用かな、S級遊撃士　　《劍皇》レイ
ン「アクアライト」

「えっ……？」

「……。さすが、情報部幹部の腕は伊達じゃありませんね」

「フフ、見くびってもらっては困るな」

「別にみくびってなどはいませんよ。今こそ教えてもらいましょうか、6年前の『教団殲滅事件』の裏事情を！」

「6年前……？ああ、あの時のことか。話せと言われて話すと思うか？」

「あなたがその気なら力づくで聞き出すまでですよ」
レインが剣を抜いた。

「止めておけ。貴様がどの程度の実力を持つか知らないが、この現状を見捨てるつもりか？」

ボースマーケットから大勢の逃げる人たちがいた。

「くっ……」

その時、古代竜の口から火が吐かれた。

「ああっ！？」

「街を焼くつもり……！？」

「……やれやれ。手間をかせさせてくれる」

《劍帝》レーヴェが古代竜の背に乗った。

「ま、待てやコラ！」

「……今回の実験は少しばかり変則的だな。正直、お前たちの手に負える事件ではない。王国軍にでも任せて大人しくしておくのだな」
そう言い残して、《劍帝》レーヴェは去って行った。

「ど、どうしよう……。このままだと逃がしちゃう！」

「……俺はこれからあのデカブツを追跡する。お前らは軍が来るまで被害状況を確認してろや」

「えっ……!!?」

「アガット?」

「後でまた連絡する!」

アガットは古代竜を追って走っていった。

「アガットさん!?!」

「ちょ、ちよつと!?!」

「しまった……!!」

「き、君たち!いい所にいてくれた!」

ボースマーケットから1人の男性が走ってきた。

「頼む、手を貸してくれ!瓦礫の下敷きになった人や逃げ遅れた人がいるんだ!」

「なに!?!」

「あ、あんですって!?!」

ボースマーケット

「ひ、酷い……!」

ボースマーケットの中は惨状と化していた。

「……まずは、役割分担を決めなくちゃ!」

「シエラ姉!クローゼとティータと一緒に逃げ遅れている人たちを誘導して!」

「ええ、分かったわ!姫様、ティータちゃん、西口の方に向かうわよ!」

「はい!」

「わ、わかりましたっ!」

「ジンさん、レインさん、オリビエ!あたしたちは瓦礫の撤去を手伝いませよ!」

「おお！」
「了解です！」
「フツ、了解だ」

「お願い！返事をしてちょうだい！」
メイベル市長が

「くっ……駄目だ……」

「僕たちだけの力じゃ……」

「メイベル市長！」

「き、君たちは……！」

「エ、エステルさん！」

「手伝いに来たわ！誰か下にいるのね！？」

「リ、リラが……。リラがわたくしをかばってこの瓦礫の下に……」

「……！」

「このくらいだったら一人で持ち上げられるだろう。ちよいとそ」
から離れてくれ」

「あ、ああ……」

「た、頼みます」

ジンが瓦礫の下に手を入れた。

「……フンッ！」

ジンが瓦礫を持ち上げた。

「リラ！？」

「う……あ……。お嬢……さま……」

「おお、生きてるぞ！」

「ああ、リラ……」

「オリーブエ！リラさんを運ぶのを手伝って……」

「フツ、任せておきたまえ」

「では、私は他に誰かいないか見てきます！」
「ええ、お願い！」

第12章 守るべきもの(8)

遊撃士協会ボース支部

「……とりあえず、みんな、ご苦労じゃったの。ハーケン門の王国軍部隊がすぐに駆けつけるそうじゃ。ボースマーケットの管理はそちらに任せるといいじゃろう」

「う、うん……。でもまさか、あんな化物を持ち出してくるなんて……。しかもあのロランズ少尉が……」

「執行者N.O.?。《剣帝》レオンハルト。通称、《レーヴェ》か……」

「フツ、とうとう正体が明らかになったということだね」

「グランセル城で会った時は、このような非道なことをする人には見えませんでしたか……」

「ふむ……」

「……彼の實力は恐らく執行者の中で一番でしょう。私は今から1人でアガットさんとレーヴェを追います。すいませんが、この場はお任せします」

そう言つとレインはギルドを出ていった。

「え……。ちょ、ちょっと……」

エステルがレインを追いかけてしようとしたが、それをシエラザードが止めた。

「待ちなさい、エステル。彼は考えがあつて行動しているのでしょうから行かせてあげなさい。私たちは状況を把握するのが先よ。しかし、あの人も素性を隠していたなんてね。まさか遊撃士で先生と同じS級なんてね……」

「うむ、信じられんな……」

「父さんと同じSランクの人がこんな身近にいたなんて……。しかも、《剣帝》レーヴェと知り合ってたなんて」

「遊撃士協会には4人のS級遊撃士があるが、4人以外にいたとは

のう……。いつたいどういうわけか……」

ルグラン爺さんが首をひねる。

「あ、あの、ルグランお爺さん……。アガットさんからまだ連絡はありませんか？」

レインのことで悩む一同にティータがたまりかねてアガットからの連絡がないか聞いた。

「ああ……。うむ……。残念ながらの。あの鉄砲玉め……。いつたい何をしておるのじゃ」

そこで、ギルドの通信器が鳴った。

「あ……」

「ひょっとして……！」

全員がアガットからの連絡と期待した。

「こちら遊撃士協会、ボース支部じゃ……。おお、あんたか。一体どうしたんじゃ……。……」

……。なんじゃと！？」

「（ど、どうしたのかな……）」

「（ただ事じゃない雰囲気ね……）」

「うむ、了解した。すぐに他の連中を送ろう。うむ、うむ、気をしつかりな」

ルグラン爺さんが受話器を置いた。

「……。ラヴェン又村のライゼン村長からの連絡じゃ。先ほど、あの竜がラヴェン又村を襲ったらしい」

「！……！」

「何ですって!？」

「竜は果樹園を焼き払ってからすぐに飛び去ったらしい。その直後、アガットが現れて消火活動を手伝ったそうじゃが……」

「分かった！あたしたちも行ってみるわ！」

「お、お姉ちゃん！私も連れて行って！」

ティータがすぐさま名乗りを上げた。

「えっ……!？」

「空飛ぶ竜が相手だったら導力砲が役に立つと思うし……。それに……それに……」

「……うん、分かった。でも……無茶をしたらダメだからね？」

エステルは意外に早く承諾した。

「はいっ！」

その後、エステルたちはジンとクローゼを連れてラヴェンヌ村に向かった。

第12章 守るべきもの(9) (前書き)

どうもお久しぶりです。大学での試験でM y研究室に籠っていたので更新できませんでした。使われなくなった研究室を改造して自分専用試験対策室としたのですが、これは失敗でしたね。そこいらが薬品の匂いで充満して……処理に時間がかかりました。その話はさておき、これからまた再開しますので、どうぞお楽しみください。

第12章 守るべきもの(9)

ラヴェン又村

ラヴェン又山道を抜けて、アガットの故郷にやって来たエステルたち。ラヴェン又村は凄惨^{せいさん}たる光景だった。

「あ……」

ラヴェン又村の命とも言える果樹園が全て焼かれていた。

「こ、これって……」

「ひ、ひどいよ……」

エステルとティータはその光景を目の当たりにして言葉を失った。

「……とりあえず、連絡を下さった村長さんを捜してみましよう。竜とアガットさんの行方をご存じだと思います」

「うん、……そうね」

エステルは悲しみをこらえてラヴェン又村の村長を探した。

「村長さん！」

エステルは果樹園の中にいたライゼン村長に声をかけた。

「おお……いつぞやの。ボース市のギルドからわざわざ来てくれたんじゃない？」

「うん、そうだけど……。あたしの事、覚えててくれたんだ」

「うむ、空賊事件の時には軍隊までやって来たからのう。忘れろと言う方が無理な話じゃよ」

「そっか……。そ、それはともかく！竜はどこに行ったの!？」

「そ、それにアガットさんはどこに行っちゃったんですか？」

エステルとティータがやつぎはやに尋ねた。

「う、うむ……。果樹園を焼き払ってから竜は北に飛び去って行った。その直後、アガットが現れて消火を手伝ったんじゃないが……。火

が消えたあと、いつの間にかいなくなってしまったんじゃない？」

「!!!!」

「それって、妹さんの所に行ってるだけなんじゃない？この村には住んでいるんでしょ？」

「.....」

エステルという言葉にライゼン村長は何も答えなかった。

「そうか.....アガットはそう言っておったか」

どこか寂しそうにつぶやいたライゼン村長。

「????」

「あのあの.....どーいうことですか？」

「先ほど確認したが、アガットはミーシャの側にはおらんのだ。もちろん、あやつの家にもな」

「そ、そうなんだ.....。それじゃあやつぱり、また竜を追いかけたわけか」

「ここから北というと.....かつて七耀石の鉱山があった場所ですね」「ふむ.....ご老人。何か手伝うことはあるかい？」

「ああ、気を遣わんでくれ。何とか火は消し止めたし、後片付けをしとるだけじゃ。それよりも.....どうかアガットのことを頼む。あの思い詰めた様子ではどんな無茶をしないと限らん」

「わ、分かったわ。みんな、急いで北の山道を探してみましょー！」

「う、うんー！」

く ラヴェンヌ村 墓地

エステルが墓地の石碑に目を向けた。

『七耀暦1192年、戦火によって失われし善良なる魂、ここに眠る。レフ、アベル、ニコル、ヴィム、イレーナ、ミーシャ。女神の御許おんもとにて、どうか安らかに』

「(っつて、ちょっと待ってよ……！ミィシャって……さつき村長さん
んが言ってた……)」

「どうしたの、お姉ちゃん？」

ティータが不思議そうにエステルに声をかけた。

「う、ううん、何でもないわ」

慌てて取り繕うエステル。

「(き、気になるけど……今はアガットを追いかけないと……)」

第12章 守るべきもの(9) (後書き)

実は今日、作者の誕生日です。

第12章 守るべきもの(10)

廃坑

「あ……！」

エステルが声をあげた先には、廃坑の扉が開かれていた。

「ここつて……廃坑の入口だったよね。扉が開いているってことはひょっとして……」

ティータが何かに気付いて廃坑の鎖を調べた。

「お、お姉ちゃん！この落ちてる鎖……ついさっき外されたみたい！」

「や、やっぱり……！」

「奴さんの仕業だろう。どうやら中に入ったらしいな」

「急いで追いかけないと……！」

「オッケー！」

「はいっ！」

廃坑 露天掘り場所

そこでは、剣帝レーヴェが古代竜と共にいた。古代竜はそこでも暴れていた。

「……………」
剣帝レーヴェは《ゴスペル》を取り出し、古代竜を静めた。

「よし……それでいい。ふむ、データを取るにはまだしばらくの時間が必要か。まったく、面倒な仕事を押しつけてくれるものだな」

「……………何が面倒だと……？」

「お前は……」

剣帝レーヴェのもとに現れたのはアガットだった。

「その金色の剣……やっぱりあの時の赤い隊長か。ずいぶん久しぶりじゃねえか」

「ランクC《重剣》、アガット・クロスナー。いや、クーデター事件の後、Bに昇格したそうだな」

「ヘッ……さすがは元・情報部だ。あの時はネズミみたいにコソコソしてやったが……。今回はまた、ずいぶんと派手にやらかしたもんだぜ」

アガットが自慢の重剣を構えた。

「……今度ばかりは逮捕だの悠長な事を言つつもりはねえ。その澄ましたツラごと八つ裂きにしてやるよ……」

「威勢のいいことだ。だが、あの程度の被害、派手というほどではあるまい？10年前……お前が見た光景に較べればな」

その言葉にアガットは動揺した。

「この国の遊撃士の経歴は一通り調べさせてもらった。フフ、やはりお前はどこか俺と似ているようだ」

「………………。クク……似てるだと？何も知らねえ野郎が適当な事を抜かすなああッ！」

アガットが一気に剣帝レーヴェに飛びかかった。

「……腕の差が歴然なのは前の手合わせで分かっている筈だ。加えて竜の脅威もあるだろう。なのに何故、あえて1人で挑む？」

「勝算なんざ知ったことか……。てめえは気に食わねえ……ただ、それだけなんだよッ！」

「やれやれ……その程度か。これでは竜を使うまでもない」

「なに……!?!?」

剣帝レーヴェが一瞬で3発斬り込んだ。

「うおッ！」

「似たところもあるが……俺とお前は決定的に違っている。それは剣を振るう理由だ」

「な、なんだと……？」

「俺が剣を振るうのは人を捨て修羅となるがため……。しかしお前は、己の空虚を充たすがために振るっている」

「……………」

「重き鉄塊を振るうことで哀しき空虚を激情で充たす……。怒りで心を震わす間は哀しさから逃れられるからだ。だが、それは欺瞞に過ぎない」

「…………… やめろ……………」

「そして、欺瞞を持つ者が前に進むことはありえない。《理》に至ることはおるか《修羅》に堕ちることもない。今のままでは……………お前はどこまでも半端なだけだ」

「黙りやがれええッ！！！！」

（ 廃坑内 ）

「ア、アガツトさんの声！？」

「この響き方だと露天掘りの場所みたいね。とにかく急ぎましょ！」

第12章 守るべきもの(11)(前書き)

読者の皆様、夏バテしてませんか？

第12章 守るべきもの(11)

「ッらああああッ！」

アガットが剣を振りかざすが、剣帝レーヴェはそれを全てかわす。

「ク、クソが……」

「無様だな……。せめてもの情けだ。そろそろ終わらせてやる。はあああああッ……」

剣帝レーヴェが剣を構え、力をこめた。

「クッ……」

アガットも一歩退き、剣を構え直そうとしたが、

「せいッ！」

それよりも速く、剣帝レーヴェが一気に間合いを詰めアガットに斬り込んだ。

「……かはッ……」

アガットの重剣は真つ二つに折られ、アガットもその場に崩れ落ちた。

「……………」

崩れ落ちたアガットを尻目に剣帝レーヴェは剣をしまつ。

「さてと……そろそろ時間のようだな。今のうちに《ゴスペル》の制御式を調整しておくか……」

「……ま、待ちやがれ……」

崩れ落ちたアガットが折れた剣を剣帝レーヴェに向け立ち上がった。

「ま……まだだ……。まだ終わっちゃいねえぞ……」

「この期に及んで砕けた鉄塊にすが縋るとは。いいだろう。至らぬ身のまま果てるがいい」

「……そこまですよ」

「む？」

「ここから先は私がお相手しましょう」

「また、お前か……。いつまでも俺を追いかけずに他のことをした

らどうだ?」

「それはできませんね。あの事件は人道に関わるものですから。真相が闇に葬られるのは私としては耐えられません。あなたもそうではありませんか、10年前のように」

「クツ………………。よく調べたものだ。だが、教える気はない。どうして、そこまでこだわる必要がある?お前には直接関係のある事件ではないだろう?」

「確かにそうです。しかし、関わってしまった以上放っておく気はありません」

「使命感、というやつか。そのような中途半端な心持ちでは何一つやり遂げることはできない。所詮、そのやつと同じだ」

「それはどうでしょうか。彼はまだ心の整理がしていないだけです。いずれ乗り越える時が来るでしょう。中途半端なのはあなたの方ではないですか?」

「何?」

「どうしたらいいのかわかっていないのはあなたの方でしょうか?」

「黙れ!大切なものを失ったことのないお前に何が分かるという!

?もう何も語ることはない!この場で2人ともども果てるがいい!

「(まずいですね…………。私1人なら防ぐことはできるのですが、それではアガットさんが…………)」

「あ、あれは…………!」

ようやく露天掘りの場所に到着したエステルたち。

「ア、アガットさん!」

「ティーター!?」

「だめー!!」

ティータがアガットの前に立った。

「チビスケ……」

「ティータさん……」

「お前……なんで……こんな所にいやがるッ……」

「なるほど…… エステルさんたちと一緒に来たのですね」

レインが露天掘りの入口を見た。

「ティータ!!」

エステルたちがアガットたちの所に走り寄ってきたが、

「……留める」

剣帝レーヴェが《ゴスペル》を取り出し、古代竜で足止めした。

「くっ……!!」

「チッ、やっかいな……」

エステルたちはなすすべもなく立ち止まるしかなかった。

「……………」

エステルたちを留めた剣帝レーヴェはアガットたちの所に歩み寄った。

「こ、来ないでくださいっ!」

ティータが導力砲を構えた。

「ティータさん!」

「ば、馬鹿野郎……。そんな物が通用するかっ! いいから……とつとと逃げる……!」

「ラッセル博士の孫娘、ティータ・ラッセルか……。天才少女と聞いていたがいささか無鉄砲が過ぎるな。女子供を手にかけるのは趣味ではないが 必要とあらば斬る。大人しくそこをどくがいい」
剣帝レーヴェがティータの眼前に剣を据えた。

「くっ……」

「き、貴様ああっ!」

「ど、どきませんっ」

その言葉に3人は驚いた。

「わたし……アガットさんに助けてもらってばかりだから……。こ
ういう時くらいしかお返しすることができないから……。うっん……
違う……。ぶっきらぼうで……。フキゲンな顔ばかりして……。いっ
つもわたしのことチビスケって子ども扱いするけど……。本当はと
つても優しく……。いつも見守っていてくれて……。大好きで……
大切な人だからっ！」

ティータが導力砲を置き、アガットを庇う。

「だからわたし……。ゼツタイにどきませんっ!!」

「……あ……」

「ティータさん……。よく言いました」

「フツ、健気なことだ。その半端者に、そこまで慕う価値があると
も思えないが……」

剣帝レーヴェが剣をしまった。

「邪魔も入ったようだし、今回はこれで退いてやるっ」

「え……」

突然、古代竜に砲弾が浴びせられた。モルガン將軍率いる警備艇が
やってきたのだ。

「フツ……。ようやくのお出ましか。これで最後の実験を始めるこ
とができそうだ」

剣帝レーヴェが古代竜の背に乗った。

「あ……」

「くっ……。今度は何をやる気ですか!？」

「ま、待ちやがれ……。ッ!」

「忘れるな。アガット・クロスナー。欺瞞を抱えている限り、お前
は何者にもなれない。大切なものを守ることもな」

「……………」

「そして、レイン・アクアライト。真実を知りたくば、お前の使命
感をもって俺を追い詰めてみせる。その時に話してやる」

「……その言葉、忘れないでくださいよ」

「フツ……………」

「ま、待ちなさいよつ。黙って聞いてたら勝手なことをペラペラと！絶対に逃がさないんだからっ！」

「エステル・ブライト。お前は心しておけ」

「へ……」

「今回の実験が終われば計画は次の段階に移行する。気を引き締めなければ必ずや後悔することになるぞ」

剣帝レーヴェはそれだけを言い残し、古代竜と共に去ろうとした。

「ちょ、ちよつと！それって一体……」

「おのれ竜め！逃がしてなるものかっ！総員、射撃開始！撃って撃つて撃ちまくれ！」

モルガン将軍が王国軍兵士に命令を下す。

「フツ、伝説の古代竜にそのような攻撃が効くものか。行くぞ

《古代竜レグナート》」

古代竜は警備艇の砲撃や銃をもともせず、飛び去っていった。

第12章 守るべきもの(12)

数時間後

「 ちよ、ちよつと待ってよ！手を引けつてどういこと！？
將軍つてば、また遊撃士を目のカタキあたしたちにしているわけ！？」

エステルたちはモルガン將軍から古代竜の搜索から手を引いてほし
いと伝えられた。

「そうは言っておらん。だが、警備艇の導力砲ですら傷付けること
が困難な魔獣だ。おぬしらにいったい何ができる？」

「そ、それは……」

「確かに、警備艇を持たない私たちには搜索ができない。仮に見つ
けたとしても対処のしようがない……」

エステルたちは何も言い返せなかった。

「將軍……」

「……たとえ姫様といえどこればかりは譲れませぬぞ。 勇気と蛮勇
は異なるもの。 姫様もボースやラヴェン又村の被害をご覧になった
でしょう。 これは最早、戦争と言っても過言ではありませんまい」

「ええ……そうですね」

「餅は餅屋とも言う。 戦争ならば我々プロに任せておくがいい。 お
前たちは、そうだな……《身喰らう蛇》の拠点搜索に集中してもら
うと助かる」

「で、でも……！」

「……ざけんな……」

怪我の手当てをされていたアガットが足を引きずりながらモルガン
將軍のもとにやってきた。

「アガット……！？」

「ア、アガットさん！」

ティータが慌てて駆け寄ってきた。

「手当てしたばかりだから無理しちゃダメですよ」

「……………」

「……おぬしは……《重剣》のアガットと言ったか。威勢のいい若手遊撃士だとカシウスから聞いたことがある」

「オッサンの事はどうでもいい……。なあ……將軍閣下よ……。餅は餅屋……戦争はプロに任せろだと……？そりゃ……本気で言ってるのか？」

「……無論、本気だが。人を守るだけの遊撃士と違って我々は国を守らねばならん。この場合、国とは民と国土の両方を指している。それができるのは軍だけだ」

「クク……民と国土を守るか……」

アガットが突然モルガン將軍の襟首を掴んだ。

「笑わせるんじゃないええッ！……！」

「ぐっ……………」

「ちょ、ちょつと！？」

「ア、アガットさん！？」

「いつもいつも！てめえらは間に合わねえ！でかい図体を素早く動かせず！足並みを揃えることばかり考えて！命令なしじゃあ何もできず！守れるはずのものを守れねえ！今回も！10年前の戦争でもなあッ！……！」

「……！もしかおぬし、あの時の……」

「ケッ……誰がてめえらだけに任せておけるかってんだ……。今度は……今度こそは……。俺は……この手で……ミーシャを守らなくちゃ……………」

そこでアガットはその場に崩れ落ちた。

「アガットさんっ！？」

「ちょ、ちょつと！？」

「……ふむ、傷口が開いたということはなさそうだ。気力と体力が尽きて気絶しただけのようだな」

「……アガットさん……………」

「ま、まったくもう、人騒がせなんだから……………」

「とりあえず、きちんとしたベッドに寝かせた方がよからう。こやつの家もあることだし、ラヴェンヌ村まで送るとするか」

「あ、うん、お願いします。………。って、どうしてラヴェンヌ村にアガットの家があることを知ってるの？」

「……こやつに一度だけ会っていたのを思い出してな。あの時の少年が……ずいぶんと大きくなったものだ」

「あの時？」

「《百日戦役》が終わった直後……。こやつと妹と村人たちの墓碑が建てられた時のことだ」

「……！」

「あ……！」

エステルの頭にラヴェンヌ村の墓碑のことが浮かんだ。

第12章 守るべきもの(13)

ラヴェン又村 村長宅

「なるほど……。そんな事があったのか。エステル殿、將軍閣下。色々と面倒をかけたのう」

「ううん……。結局、竜の暴走を食い止められなかったし……。あんまりお役に立てなくて申しわけないんだけど……」

「まあ、そう気落ちするな。結果はどうあれ、おぬしらが早めに動いてくれたのは助かった。マーケットでの人命救助といい、果樹園での消火活動といい、な」

「あ、あはは……。將軍さんに誉められると何だかこそばゆいわね。それはともかく……。アガットのことなんだけど。妹のミーシャさんって本当に10年前の戦争で……？」

「うむ……。帝國軍と王国軍の戦闘が村の近郊であって……。その時、帝國軍の焼夷弾しょういだんがいくつか村に届いたのじゃ」

ライゼン村長が重苦しく当時の様子を語り始めた。

「その結果、民家が焼かれ犠牲者を出すこととなった。ミーシャもその1人じゃ」

「……………」
「……それはある意味、我々王国軍の失態でもあった。村を守るための防衛線が帝國軍の苛烈な攻撃を招き……。結果的に甚大な被害をもたらしたのだからな」

「あ……………」
「そして、その防衛線の構築はわしの指示によるものだった。全てはわしの責任と言えるのだ」

「……將軍閣下。あまりご自分を責めなさるな。あの時、王国軍はあくまで使命を果たしたただけじゃった。結局、幾つかの偶然が重なって起きた被害でしかないんじゃないよ」

「いや、どうか庇ってくれるな。肉親を亡くした者にそのような理

屈は通用しない。あの赤毛の若者のようにな」

「……………それは……………」

「村の犠牲者の葬儀が行われた時、わしは軍の代表として出席したが……………。その時会った、赤毛の少年の目を今でもはっきりと覚えておる。底知れぬ哀しみを、怒りでねじ伏せるような……………そんな痛々しい眼差しをな。そんな目をさせたのは……………やはり、わしなのだろう」

「……………いや。そうではないのじゃ。アガットが本当に責めていたのは帝国軍でも、ましてや閣下でもない。他ならぬ自分自身だったのじゃ」

「……………？」

「ど、どうということ？」

「詳しいことは話せぬが……………。アガットは、ミーシャの死を自分の責任のように感じていた。決してそんな事はないんじゃないが、そう思い込んでしまったんじゃない。そして激しく自分を責めた挙句、村から飛び出してしまった。どうすればミーシャに償えるか、その答えを探すために。おそらくルーアンで荒れた日々を過ごしていたのも、その答えが見つからなかったからじゃろう」

「……………」

「その後、良い導きがあつて遊撃士の道を志したようじゃが……………。どうやら未だ、あやつは答えを見つけてはおらぬらしい。10年前と同じように深い哀しみと、自分への怒りに囚われてしまつておるようじゃ」

「……………やり切れぬ話だ」

「……………ねえ、將軍さん……………。やっぱりあたしたちも、竜対策に協力させてくれない？」

「なに……………？」

「遊撃士には軍にはない強みが確実にある。フットワークの軽さとか、市民との距離の近さとか……………。軍人さんが普段入らないような奥地にも出かけたりするしね。きつとお役に立ってみせるから」

「だが……」

「アガットが遊撃士になったのはそうした所に可能性を感じたからじゃないかと思うの。どうしたら妹さんに償えるか、その答えを見つける可能性を……。……その意味では、アガットが父さんに誘われて遊撃士になったのはすごく納得できると思う。父さんも、お母さんを亡くしたことがきっかけで遊撃士になったから……」

「遊撃士の可能性をもう一度、確かめるためにも……。何よりも、目の前で困っている人たちの力になるためにも……。あたしは、今の自分にできる精一杯のことはしておきたい。だから……。どうか協力させてください」

「エステルさん……」

「ふふ、よく言ったな」

「モルガン將軍……。今は軍も遊撃士も関係ありません。今一度考え直してはくれないでしょうか」

「……。10年前、ボース地方にも遊撃士がいればあるいは……」

「へ？」

「いや……。何でもない。多忙なカシウスに代わって今回の竜対策の指揮はわしが行うことになった。そろそろハーケン門に戻って軍議を始めなくてはならん。おぬしの提案はその時に検討させてもらおう」

「そ、それじゃあ……!」

「早とちりするでない。あくまで検討するだけだ。今夜中に、軍議の結果をボース支部に連絡しよう。約束できるのはそのくらいだ」

「……。うん、分かりました」

「連絡、お待ちしてませう」

「それではわしはこれで失礼させてもらおう。村長殿、お邪魔したな」

「いやいや。また来てくだされよ」

モルガン將軍は控えていた兵士と共に退席した。

「さてと、あたしたちもそろそろボースに戻らなきゃ。アガットは……まだ動かさない方がよさそうね」

「あの傷だと2、3日は安静にした方がいいと思います。今夜はゆっくりと寝かせてあげましょう」

「うん、そうね。じゃあ、様子を見るついでにティータと話をしておきましょう。……村長さん。大変な時に申しわけないけどアガットの事、お願いします」

「フフ、あやつは元からわしらの身内じゃからな。それに大変と言つても10年前に較べればマシじゃ。死者が出なかつただけでも女神に感謝しなくてはのう」

エステルたちはライゼン村長に礼を言つて、アガットの家に向かつた。

第12章 守るべきもの(14)

アガット宅

「あ、お姉ちゃん……」

ティータはアガットの介抱をしていた。

「ティータ、ご苦労様。どう、アガットの調子は？」

「うん……深く眠っているみたい。でも、顔色は良くなってきたし、ゆっくり寝たら大丈夫だと思うよ」

「そっか。それにしても……ここがアガットの家なんだ」

「小さくても暖かい、居心地の良いお家ですね」

「ここで妹と2人で暮らしてたってわけだな」

「あれ……？この写真って……」

エステルが窓際に置かれた写真を手に取った。

「これって、アガットが子供だった時の写真よね。それじゃあ、この女の子が……」

「うん……。ミーシャさんじゃないかな」

「可愛い女の子……。さぞかしアガットさんと仲が良かったんでしょね」

「えへへ、そーだと思えます。アガットさんもミーシャさんもとっても良い顔してるから……」

「うん……。ホントそうね。歳は、アガットが14くらいでミーシャちゃんが12くらいかな？アガットってばいかにも腕白小僧って顔してるし。ふふ、ちょっと面白いかも」

「あまり人の聞いていないうちに言うのはよした方がいいですよ」

「ま、男の昔の写真をあまり詮索してくれるな。気恥ずかしいモンだからな」

「あはは……そんなもの？」

エステルは写真を置いた。

「それにしても……。どうしてアガット、妹さんのことを黙ってた

のかな？まるで生きてるかのようには話してた気がするんだけど……」
「うん……でもね。考えてみたらアガットさん、ミーシャさんが生きているなんて一言も言っていなかった気がするの。』たまに顔を見せに帰る』ってお墓参りのことだったと思うし……」

「言われてみれば……。でも、あたしたちが勘違いしているってことはアガットにも分かっていたはずよね。どうして訂正しなかったのかな？」

「それは判らないけど……。でも、アガットさん、仕事が一段落したら紹介するって言ってくれたから……。その時に、ちゃんと本当のことを教えてくれるつもりだったと思うの」

「私たちに余計な心配をさせたくなかったのでしょうか」

「そっか……。そうだよ。ま、どういうつもりだったかはあらためて聞いてみるとして。あのね、ティータ。あたしたち、そろそろボースに戻らないといけないんだけど……」

「え……？」

エステルはギルドで王国軍の連絡を待たなくてはならないことをティータに説明した。

「そうなんだ……。あ、あのね、お姉ちゃん」

「おっと、みなまで言いなさんな。アガットの看病をするためにここに残りたいと言っただけでしょ？」

「ふえっ……！？」

「むふふ、お姉さんを甘く見るんじゃないわよ。妹分の考えていることなんかぜんぶお見通しなんだから」

「あ、あう……」

「ふふ、こちらのごとはどうか心配しないでください」

「お前さんはアガットが早く回復できるように心を込めて看病してやってくれ」

「ティータさんにしかできないことなのでよろしく頼みますね」

「お姉ちゃん……。みなさん……。あのあの……。ありがとうございます」

すっ!」

「も、別にお礼を言われることじゃないってば。アガットが目を覚ましたらさっきの話を伝えといてくれる?」

「あ、王国軍と協力して動くかもしれないってことだよな?」

「うん、それとアガットがまた無理をしようとしたら身体を張つても止めること。本調子にならない限り、絶対ベッドから出しちゃダメよ?」

「うん……がんばる!お姉ちゃんたちも……くれぐれも気を付けてね」

ラヴェンヌ村 入口

「さてと、日が暮れてきたようだし、そろそろボースに戻るか」

「うん、そうね。夜には將軍から連絡が入るから急いでギルドに戻らなくちゃ」

遊撃士協会ボース支部

「いやはや……本当にご苦労じゃったのう。しかし、アガットのやつにそんな過去があったとは……」

エステルたちはギルドのメンバーとルグラン爺さん、メイベル市長にラヴェンヌ村での経緯を話した。

「そうですね……。お話を聞いてようやく合点がいましたわ。

あの時、アガットさんがどんな気持ちでいたのかを……」

「あの時?」

「10年前……《百日戦役》が終わった直後に、アガットさんが、わたくしの家を訪ねてきたことがあったのです」

「ええっ!?!?」

「先輩のお家に、ですか？」

「ええ、当時市長だった父に凄い剣幕で喰ってかかったのです。ボ
ース市長は、地方全体を総括する責任を兼ね備えている……。なの
にどうしてラヴェン又村を見捨てたのかと」

「あ……」

「まだ子供だったわたくしは父を責めるアガットさんの顔を見てと
ても頭にきてしまつて……。それでつい飛び出して行って平手打ち
をしてしまったのです」

「あちゃあ……」

「ま、不幸な事件だったわけね」

「ええ……。結局、父はアガットさんの問いに答えることはできま
せんでした。代わりに、復興のための援助金を村に贈るつもりだと
説明したんです。それを聞いたアガットさんは父に向かって拳を振
り上げて……。でも、結局振り下ろせずそのまま走り去つて
しまいました」

「そんな事があつたんだ……。だからアガットさんと市長さん、お
互い妙な雰囲気だったわけね」

「……お互い、あの時のわだかまりがあるのでしょうか。でも、アガ
ットさんの妹さんが戦争で亡くなっていたなんて……。わたくし……
…あの方を誤解していたようですわ」

「まあ、それについては言わなかった本人の責任もあるし。市長さ
んが気にする必要ないつてば」

「そう……ですわね。……アガットさんのケガはどの程度のものな
のですか？」

「あ、うん、心配しないで。2、3日もすれば動けるようになる
と思うわ」

「ふむ……不幸中の幸いと言うべきか」

「ええ……大事に至らなくてよかった。……」

「そついえば先輩……リラさんのご容態はいかがですか？」

「……それが……。ケガの手当ては済んだのだけれどまだ目を覚ま

してくれなくて……」

「そう……ですか」

「ふむ……何とも痛ましいことだね。美しく可憐なお嬢さんはそれだけで世の宝だというのに」

「ふふ……リラが起きたらそのように伝えておきますわ。それにしても……モルガン將軍の話は僥倖じようひんでしたわね。軍とギルドが互いに協力できたらこれほど心強いことはありませんもの」

「まだ決定したわけじゃないから安請け合いはできないけれど……。できる限りのことはさせてもらうつもりよ」

その時、ギルドの通信器が鳴った。

「こちら遊撃士協会、ボース支部じゃが……。おお、將軍閣下。お待ちしておりますぞ」

「（来た来た）」

「（さて……どうなったかしらね）」

「ふむふむ……ほうほう。おお、そんな事になったとは！なるほど……明朝10時、国際空港で。あい分かった。しかと伝えておきましょう」

「どうだった!?」

「王国軍は明日、飛行艦隊を使った竜の捕獲作戦を決行するらしい。お前さんたちもオプザーバーとして軍艦に乗ってもらいたいそうじゃ」

「飛行艦隊を使った捕獲作戦!?」

「やれやれ……ずいぶんと豪勢な話だねえ。王国軍の最精鋭というわけか」

「オプザーバーということは実際には何もできないけれど……。近くで竜の様子が観察できるのは正直ありがたいわね」

「ああ、軍の作戦が失敗した時は俺たちの出番というわけだ」

「うーん……。気が抜けないことになりそうね」

「ふふ……。光明が見えてきましたね。……あ……」

……」

突然、メイベル市長の身体がよろけた。

「せ、先輩……？」

「ど、どうしたの、市長さん？」

「いえ……何でもありませんわ」

「今のは立ちくらみだろう？ 相当、疲れているようだね」

「……………」

「市長として今の現状を回復させようと奔走しているのは分かりませんが、身体が資本ですよ？」

「そうね、無理しすぎるのは良くないわ」

「フフ……無理などしてませんわ。《百日戦役》の時、父はあらゆる手段を用いてボース市民を守り抜きました。時には、帝国軍を騙すような危険な取引も行ったそうです。その時と較べたら……大したことはしてませんから」

「市長さん……………」

「メイベル先輩……………」

「エステルさん、皆さん。どうかよろしくお願いします。ボース市民とラヴェンヌ村の方々の不安を取り除いてあげてください」

「うん……………まかせて！」

第12章 守るべきもの(15)

「ねえ、お兄ちゃん……………。……………。お兄ちゃんってば……………。えへへ、今度のお誕生日、楽しみにしててね？お兄ちゃんが喜びそうな物をプレゼントしてあげるから」

「へえ……………。オレが喜びそうな物ねえ。なんか美味いご馳走でも作ってくれるのかよ？」

「もー、なんでそうなるのよう。お誕生日プレゼントっていったら形が残る物に決まってるじゃない」

「そういうもんか？うーん、形が残ってオレが喜びそうな物……………。狩りに使えるナイフとか」

「ナイフは村長さんからもらったばかりでしょー。答えは、わたしの手造りのアクセサリーです！まだ完成してないんだけどね」

「ちょ、ちょっと待てよ！アクセサリーって女じゃねえんだからさあ」

「もー、お兄ちゃん、遅れてるんだからあ。男の子だってワンポイントアクセサリーを付けたらとってもオシャレなんだよ？ぶあいそーなお兄ちゃんでもモテモテ間違いないんだから」

「あのなあ……………」

「…………。ダメ、かなあ？わたし、いつもお世話になってるお兄ちゃんにお礼がしたくて…………。一生けんめい作ってるんだけど……………」

「うぐつ…………。カ、カワイイのとか派手なのじゃねえだろうな？」

「えへへ、心配ご無用よ。お兄ちゃんにも似合うようなシンプルでカッコイイ形だから。お兄ちゃん、背が高いし、すっごく似合うと思っただあ」

「あー、分かった分かった。せいぜい楽しみにしてるから頑張って造ってくれよな」

「えへへ…………。うんっ！ね、アガットお兄ちゃん」

「なんだ、ミーシャ？」

「いつもいつも、ありがとう。わたしのことを守ってくれて……」

「あ……」

アガットが目を覚ます。

「……夢、か。ここは……」

「……うん、こんなものかな」

どこからか少女の声がした。

「ミーシャ……？」

アガットが声がした方を向くと、

「アガットさん！？よかった……目を覚ましたんですね！？」

調理場でティータが料理を作っていた。

「チビスケ……」

「あのあの、身体の方はだいじょうぶですか……？」

「ああ、別になんとも　痛っ……」

アガットは体を起こそうとしたが、傷がうずくようだ。

「ダ、ダメですよ！おとなしく寝てなくちゃ。まだ傷がちゃんと塞がってないんですから！」

「へッ、このくらいケガ、どうってこたあねえっての。ほっときやすぐに治るって……」

「ダ、ダメえ！」

ティータが両腕を広げてアガットがベッドから出るのを止めた。

「わたし、お姉ちゃんと約束したんですからっ！アガットさんが良くなるまで絶対ベッドから出さないって！」

「お、おい……」

「うっ……」

「わかった、わかったっの」

アガットはしぶしぶベッドに入った。

「……ほっ……」

「つたく……ムキになりやがって。そういや、もう夜なんだな。エステルたちはどうしたんだ？」

「えっと、お姉ちゃんたちは一旦ボースの街に戻りました。将軍さんの約束があるらしくて」

「将軍との約束だあ？」

「ティータはアガットに、エステルからの伝言を伝えた。」

「……なるほど、あのモルガンを動かしたか。それじゃあ、そろそろギルドに軍からの連絡が入ってる頃だな。よし、さっそく俺も……」

「……………（ジー）」

「……っと思つたが、さすがに今日は遅すぎるな。明日の朝にでもボースに戻るとしようぜ」

「で、でも……」

「たつぷり寝たから体力もかなり戻ってきた。怪我もカスリ傷ばかりだから普通に動いても勝手に治る。大丈夫、心配すんな」

「無理……してないですか？」

「あのなあ、俺は遊撃士だぞ？結社だの竜だのを相手に無理できるほど凶太くねえよ。……これ以上、お前を危険な目に遭わせるわけにもいかねえしな」

「え……」

「ま、おせっかいなお目付役を怒らせる度胸はねえってことだ。素直に信用してくれや」

「も、もう……アガットさんたら……。でも本当に元気そーな感じですね？」

「だから言っただろーが。てめえの身体はてめえが一番分かってるんだっての」

「えへへ……よかつたあ。……………あ……………」

「なっ、なんだあ!？」

「えくっ……………うくっ……………」

「ティータがいきなりすすり泣き始めた。」

「だ、だから本当に大丈夫だったの！女神に誓ってウソは吐いちゃいねえよ！」

「えくっ…………ち、ちがうんです…………。ホツとしたら…………わたし…………胸が一杯になっちゃって…………。うづうづ…………。うわあああああああん…………！」

「あ…………。まったく、仕方ねえなあ」

アガットはベッドから出てティータの頭を撫でた。

「…………悪い。色々と心配かけちゃったな。一人で突っ走った挙句、勝ち目のないケンカをやらかして…………。しまいにはお前にあんな無茶をさせちまうとはな」

「…………そうだよおっ！アガットさんのバカあつ！わたし…………わたし…………ホントに心配したんだからあつ！」

「ああ、そうだな…………。本当に…………大馬鹿野郎だぜ」
その後もティータは泣き続けた。

「…………落ち着いたか？」

「……………………（コクン）ご、ごめんなさい。いきなり泣いちゃって…………。まったく、あんまり驚かせるんじゃないかねえっての。銀髪野郎とやり合っつよりも肝が冷えたじゃねーか」

「えへへ…………。あ、そうだ。あのあの、アガットさん。お腹空いてませんか？村長さんに材料をもらってスープを作ったんですけど…………」

「…………。おお、道理で良い匂いがすると思ったぜ…………。って、ちょっと待て。どうして台所が…………」

「え…………？」

アガットが家の中を見渡した。

「よくよく見たら…………たまげたな。所々、違うところもあるがあの

頃とソックリじゃねえか」

そして、アガットはベッドの脇にあった写真に気が付いた。

「おまけにこんな物まで……。ヘッ……。よく残っていたモンだぜ」

「???」

「おっと、ワケ分からねえか。……実はこの家はな、10年前に全焼しているのさ」

「え……」

「帝国軍の焼夷弾が流れ弾になって降り注いで……。あつという間に火がついて黒コゲになっちまった。その後、村長たちが物好きで建て直したのは知っていたが……。まさか、家具や内装まで揃えたとは思わなかったぜ」

「……」

「俺も今まで中に入ったことは無かったんだが……。さすがに、ここまでされたら礼を言うしかなさそうだな」

「……。それ……。じゃあ……。その時に

……ミーシャさんは……」

アガットがベッドに腰をかけた。

「……。はは、バレちゃったか。……。俺の誕生日のな、プレゼントを用意していたんだ。手造りの……。俺に似合うアクセサリーってな。山道に避難する途中で、あいつそれを取りに家に引き返して……。そこに焼夷弾が落ちた」

「……」

「助けた時は……。ひどい火傷を負っていた。それでもプレゼントはしっかりと手に握りしめて……。金具はダメだったが石の部分は無事に残ってた。コイツがそうだ」

アガットが首に付けていた石のアクセサリをティータに見せた。

「……あ……」

「七耀石でも何でも無い、ただの綺麗な石コロさ。多分、この近くにある小川で見つけたんだろう。こんな物のためにとって何度思ったか分からねえが……。不思議とあいつを責める気にはなれなかった」

アガットが石を強く握りしめた。

「形見のつもりはなかったが……。戦争が終わって村を出て、荒れた暮らしをしていた時もこいつだけは捨てられなかった。ハハ……情けない話だろ？」

「そ、そんなこと……！」

「実際、情けないんだよ。コイツを眺めている間は俺は怒りを忘れられずにすんだ。あの時、あいつを助けられなかった不甲斐ないてめえ自身への怒りを……」

「あ……」

「そうしてかき立てた怒りを重剣に乗せて叩き付けることで……どうやら俺はてめえ自身を保っていたらしい。……欺瞞に陥って前に進めない半端者……。ククク……。あの野郎の言う通りじゃねえか」

「アガットさん……」

「いや……。もつとタチが悪いか。都合の悪いことから目を逸らして逃げているだけのクソ野郎……。俺が一番嫌いな負け犬ってわけだ。ハハハ、コイツは傑作だぜ！」

「アガット……。さん……。……」

ティータがアガットに近寄った。

「わたし……。アガットさんの気持ちはちゃんとは分からないけど……。どうして苦しんでいるのか分かってあげられないけど……。だけど、ミーシャさんの代わりにこれだけは言わせて欲しいです」

「……？」

「……。わたしの大好きなお兄ちゃんをバカにしないで！お兄ちゃんの良いところを、なんにも分かってないクセに！お兄ちゃんのことにはわたしが一番良く知ってる！悪く言ったりしたらたとえお兄ちゃん自身でも許さないんだからあつ！」

「な……」

そこで、ティータがアガットに抱きついた。

「……あ……」

「わたし、ミーシャさんには負けるかもしれないけど……。それでも、

アガットさんの良いところを一杯知ってます。だから、悪く言われ
たらすぐかなしーですし……。アガットさんのこと何も分かつて
ないクセにとっても腹が立ちます……。だから……。だから……」
「……………。はは……参ったな……。ミーシ
ヤそつくりの口調で啖たんか呵切りやがったと思つたら……。ガキのくせ
に、ずいぶんマセた真似をしてくれるじゃねーか……」
「こ、子ども扱いしないでください……。わたし……。わたし……。
ホントーに悲しくて怒ってるんですからあ……」

「……そうか……。俺は俺のことを何
も分かつちやいない、か……。……まったくその通りだぜ」
アガットがベッドから立ってティータの頭を撫でた。

「あ……」

「ありがとよ、ティータ。よく気付かせてくれたな」

「アガットさん……」

「……てめえのチンケな物差しでてめえ自身を計つても仕方ねえ。
だったらせいぜい足掻いてみるさ。怒りも哀しみも関係なく……答
えが見つかるまで、真っ直ぐにな。へへ、そうすりゃあ……コイツ
を持ち続けている意味もいつかは分かるだろうさ……」

第12章 守るべきもの(16)

翌朝 ボース市街

古代竜の騒動から一夜明けた朝、ボースマーケットに王国軍の付添いのもと、立入許可が下りた。マーケット関係者は壊れずに済んだ販売物などを運び出していた。

遊撃士協会ボース支部

「そっか、もうマーケットの修復作業が始まってるんだ」

「昨日の今日だというのにずいぶん手回しがいいのね」

「うむ、メイベル市長がずいぶん頑張っているようじゃ。ラヴェン又村への援助物資もすでに搬送されたらしい。みな、不安を感じながらも精一杯頑張っておるようじゃな」

「王都と連絡を取ったのですが昨夜、お祖母さまが声明を発表されたそうです。竜の脅威に対する速やかな対策と、被害地への援助を約束されました」

「そっか、さすが女王様！」

「フツ、帝国のお偉方にも見習ってほしいところだね。何しろ、民を安堵させるよりもパーティの方が大事と来ている」

「オリビエさん、自慢げに言うことではありませんよ……」

「ま、それを言うなら共和国も同じようなものだ。互いの縄張りを意識しすぎて役人の腰がどうも重いからな」

「ふふ、それが小国ならではのフットワークかもしれません。いずれにせよ……これで竜対策への準備は万全に整うと思います」

「まずは王国軍のお手並みを拝見ってわけね。えっと、あたしたちは国際空港にいけばいいのよね？」

「うむ、第1発着場に午前10時にこのことじゃ。今が9時くらい

じゃから買物をする余裕はあるじやろっ」

「そっか……」

「でも、ボースマーケットはさすがに営業していないのよね？」

「マーケットの商人は現在、ホテルに避難しておる。商いもしておるそうじやから買物はそこで済ませるがいい」

「ふふ、なるほどね」

「空港に向かう前に、訪ねてもいいかもしれんな」

ボース国際空港

「あつと……遊撃士の皆さんですよね？まもなく、軍の艦艇がこちらに到着する予定です。向かって右手にある第1発着場でお待ちください」

受付のテッドが案内してくれた。

第1発着場

「うーん、軍の飛行艇はまだ到着していないみたいね」

「一応、買物をするくらいの時間はあるみたいだけど……どうするの、エステル？」

「うーん、それじゃあ、軍艦が来るまで待たせてもらうことにしましょ」

エステルたちは発着場で待つことにした。

「迎えに来る軍の飛行艇ってあのゴツイ装甲の飛行艇よね？」

「警備飛行艇ですね。軍の主力艦艇ですから多分、そうだと思いません」

「火力、積載量、機動性の全てにおいて高い性能を持つ王国軍の警備飛行艇……。10年前に開発されてから様々な改良がなされたそ

うね？」

「はい、基本性能の向上に加えて様々な追加兵装を加えることが可能になっています。哨戒機、偵察機、攻撃機……。各艦艇の兵装を変えることで柔軟な艦隊編成を目指すという構想に基づいていると聞きました」

「ふむ……。さすがは飛行船先進国だ。共和国にも飛行艦隊はあるが、張子の虎に近いからなあ」

「フツ、それは帝国でも同じさ。飛行艦隊もあるにはあるが、やはり主力は戦車師団だからね」

「私の国はもともと小国ですからね。軍事力はありませんよ。でも、戦争がない分それでいいですけどね」

エステルたちが色々と話しているうちに飛行場にアナウンスが流れた。

「まもなく第1発着場に王国軍所属艦艇が着陸いたします。」

関係者以外の立ち入りはどうかご遠慮ください」

「おっと、来たわね。あ、あれ？なんか聞いたことのないエンジン音のような気が……」

「ふむ、普通のエンジンはもっと重低音がするはずですが……」

「これは……」

「あ！」

エステルたちが上を向くと、王室所属の巡洋艦、《アルセイユ》が降りてきた。

「あ、あはは……。あたしたちを乗せる船って《アルセイユ》のことだったんだ」

「昨日、ユリアさんに連絡した時はそんな話は出ませんでしたけど……」

「よお、エステル」

「みんな、久しぶりだね〜！」

《アルセイユ》が到着して中から出てきたのはナイアルとドロシーだった。

「へ……」

「あなた達は……」

「へへ、妙なところで再会するじゃねーか」

「よろしくね〜、エステルちゃんたち！」

「ど、ど、ど……どうしてナイアルたちがアルセイユに乗っているのよ!？」

「……それは私の方から説明させてもらおうよ」

「あ、ユリアさん！」

「ユリアさん……どうして。昨日は、アルセイユが来るなんて教えてくれませんでしたよね？」

「ふふ、殿下を驚かせたくて秘密にしておりました。どうも申しわけありません」

そういうユリア大尉の口は笑っている。

「もう……ユリアさんったら。では《アルセイユ》を使うのはお祖母さまの計らいなのですね？」

「ええ、ご推察の通りです」

「えっと……どうして女王様が？」

エステルがわけが分からずにユリア大尉に尋ねた。

「名高き新鋭艦を投入すれば竜の出現に怯える人々の不安を減じられるのではないか……。そのようなご配慮というわけだ」

「あ、なるほど」

「フツ、さすがはアリシア陛下だ。そちらの記者諸君がいるのも同じような理由なのかな？」

「ま、そういうことだ。今度の竜の出現はインパクトが大きすぎるからな。ウチの報道を通じて国民の動揺を防ぎたいらしい」

「ナイアル殿、くれぐれも……」

「わーってますって。機密は記事にはしませんよ。ただ、公正さを

保つためにもある程度は突っ込みますぜ」

「……了解した」

「フン……。時間通りに来たようだな」

「あ、モルガン將軍……」

「同行を認めてくださって感謝しているわ」

「まあ、女王陛下のご意向もあつたからな。誤解のないように言っておくが、おぬしらはあくまでオプザーバーの身にすぎん。基本的には、我々の作戦を眺めてもらうだけにしてもらつぞ」

「うん、それでいいわ。軍の作戦でケリが付くならそれはそれでオツケーだし」

「せいぜいお手並みを拝見させてもらいますぜ」

「フン……。まあいい。姫様、どうぞこちらへ。ブリッジに案内しますゆえ」

「ですが……」

「王家の船に、姫様を客人としてお乗せするわけには参りませぬ。クルーの士気にも関わりますよう」

「……分かりました」

クローゼはモルガン將軍に連れられて一足先にアルセイユに乗り込んだ。

「うーん、相変わらず素っ気ないヒトよねえ。いい加減、遊撃士を認めてくれてもいいのに」

「フフ、頑固な方だから態度をいきなり変えるのを良しとしないのだろう。君たちの案内は私がさせていただくよ。あらためて

ようこそ、遊撃士諸君！王室親衛隊所属、巡洋艦、《アルセイユ》へ！」

エステルたちが乗り込むとすぐさまアルセイユは空へ飛び立った。

「遅かったか……！」

「い、行っちゃった……」

アルセイユが出発した後発着場に駆け込んできたのはアガットとテ
イータだった。

「もう少し早めに起きて出発しとくんだったな。仕方ねえ、竜の観
察はエステルたちに任せておくか」

「そ、そーですね。でもでも……あうう。一度、《アルセイユ》に
乗ってみたかったなあ……」

「なんだ。またメカフェチかよ？」

「だってだって、見所が満載らしいんですよ？新型エンジン8基を
格納するエンジンルーム……。高度な情報処理機能を備えた次世代
型ブリッジ……。は、あこがれちゃいます」

「ったく……。目をキラキラさせやがって」

「えへへ……。でも、アガットさん。これからどうするんですか？」

「そうだな……。まずは代わりの重剣を調達しておきたいところだ」

「あ、そっか……。あそこまで折れちゃったら修理もできなさそー
ですね」

「ああ、買い換えるしかねえだろ。南街区の武器屋で同じ物を調達
しておくか」

「アガットさん！」

そこで、受付係のテッドが発着場にやってきた。

「よお、テッド」

「受付のお兄さん……？」

「あ、やっぱり間に合わなかったみたいですね。今なら導力通信
が通じますけど、《アルセイユ》に連絡しますか？」

「いや……別にいいさ。しかし、わざわざ俺たちが乗れたかを確認
しに来たのかよ？」

「あ、それもあるんですけど……。実は、昨日の最終便でアガット
さん宛の速達物が届いていたのを見つけたんです」

「俺宛ての速達物だと？」

「ええ、ラッセルという方からの小包なんですけど」

「お、おじいちゃんからの？」
「へっ……」

第12章 守るべきもの(17)

アルセイユ

「では、王国軍による、『竜捕獲作戦』の説明を始める」
会議室に集まったエステルたちはモルガン將軍から今回の作戦の内容を聞き始めた。

「本作戦は飛行艦隊によって遂行されるものだ。地上部隊はリベール各地の警戒・防衛に徹するのみとする」

「リベール各地ということはボース地方だけじゃないわけね？」

「昨日の一件で、竜の飛行能力がかなりのものであることが判明した。いつ他の地方が襲われぬとも限るまい」

「うん、確かに……」

「そこで今回の作戦には、この《アルセイユ》に加えて警備飛行艇12隻を投入する。これは全警備艇の5分の2に相当する数だ」

「あの警備艇が12隻も……」

「それは大盤振る舞いだねえ」

「なるほど……凄まじいですね」

「　　ユリア大尉」

「は」

ユリア大尉がモニターを表示させた。

「わわっ……」

モニターにリベール王国の全土が表示された。

「これは……今回の作戦行動図ですな」

「うむ、その通り。今、この《アルセイユ》はボース上空を巡航しておる。本作戦で《アルセイユ》は作戦司令部として機能する。そして実際の哨戒活動は……広域レーダーを搭載した警備艇8隻に当たらせる。竜が上空に現れたら確実に捕捉できるはずだ。そして竜が発見された場合……警備艇が急行し、ガトリング砲で牽制しながら竜をヴァレリア湖上空に誘導する。そして竜発見と同時に、麻酔

弾を搭載した警備艇がレイストン要塞から緊急発進し……。

追い立てられた竜を迎撃。ありつたけの麻酔弾をもって竜を沈黙させるというわけだ。これが『竜捕獲作戦』の概要だ」

「うわ……」

「さすがにギルドとは作戦のスケールが違うわね……。竜が麻酔弾で倒れなかった場合、捕獲から退治に切り換えるのかしら？」

「うむ……。全艦隊による集中砲火をもって撃破するしかあるまい。女王陛下は、退治よりも捕獲を優先して欲しいとの意向だが……」

「へ……どうして？」

「竜といえば、伝承にも登場する極めて珍しい生物だからな。退治は忍びないと仰っていた」

「そうですね……。『結社』に操られている可能性も高そうですし……」

「そっか……。確かに。そ、そういうば！竜を操っていたレーヴェって男、『ゴスペル』を持ってたわよ！」

「うむ……。導力停止現象の危険だな。ラッセル博士によれば導力停止現象の範囲はおよそアージユだという。故に各艦艇には10アージユ以上、竜に近づかないように徹底させる。そうすれば問題ないはずだ」

「な、なるほど……」

「うーん、恐れ入った。万全の対策というわけだね」

「我らも、伊達に『百日戦役』を経験したわけではないからな。まあ、この作戦が失敗したらさすがに打つ手に困るところだ。その時はよろしく頼むぞ」

「殊勝なこと言っちゃって……。作戦が失敗するなんて思ってもいないんじゃない？」

「フフン、当たり前だ。この作戦、問題があるとすれば竜が発見されるまで辛抱強く待たねばならんことくらいだからな」

「確かに……。無駄足だった場合はどうするの？」

「いや、これまでの『結社』の手口を考えたらそれはないだろう。」

必ずや、あの竜を使って何かしでかすつもりに違いない」

「私もジンさんの通りだと思いますよ。剣帝レーヴェが『最後の実験を始められそうだ』と言っていましたからね」

「そっか……確かにそうね」

「それでは遊撃士諸君……。竜が発見され次第、アナウンズでお知らせする。それまでは艦内でゆつくり寛くわがれるといいだろう」

シエラザード

「あ、シエラ姉。こんなところにいたんだ」

「あら、エステルは散歩？」

「うん、そんなところ。風にでも当たってたの？」

「ええ、いい天気だし、くつろがせてもらってるわ。出番に備えて休むことも私たち遊撃士の仕事よ。特に今回みたいに時間が空くときは尚更ね」

「うん、それは分かってるけど……。シエラ姉は今回の作戦が失敗すると思ってるの？」

「さあて、どうだろ……。ま、常識的に考えれば成功する可能性の方が高いわね。なにしろ、虎の子の警備艇が12隻も出撃してるんだもの。どれほど古代竜が凄くても、逃げ切れるとは思えないわ」

「うん……そうだよ。今回はモルガン将軍もすごく自信ありげだったし」

「でも、それはあくまで表向きの顔に過ぎないわ。遊撃士を乗せることには少なからず反対があったはず。それを振り切ってまで同乗を許可したってことは……」

「……モルガン将軍にも不安があるってこと？」

「そう考えるのが自然でしょう。ま、だからこそ今はリラックスさせてわけよ」

「ふう、なるほど納得。あたしも散歩を続けてこよっかな」

「ふふ、そうなさいな。王家の船に乗る機会なんてそうそうないんだから」

「ん……そうだよな。じゃ、シエラ姉」

「ええ、また後でね」

くローゼ

「あら、エステルさん。もしかして落ち着かないんですか？」

「うん、ちよつとね。じつとしてられなくて」

「そういえば、定期船でもいつもお散歩されてましたね」

「あはは……。言われてみれば確かに。行儀よく座ってるのってなんか窮屈なのよねえ」

「クスクス……。エステルさんらしいです。でも、《アルセイユ》ではそんな心配はいりませんよ」

「え、どういうこと？」

「王家の所有とはいえ、この船は巡洋艦ですから……。一般の飛行客船とは運動性能が段違いなんです。最大船速での飛行となれば立っているのも無理なくらいです」

「そ、そんなにすごい!?」

「ふふ、きつと驚かれますよ。まるで嵐に遭ったようですから」

「そ、そうなんだ……。じゃあ、さながら今は嵐の前の静けさってトコね」

「ええ、仰るとおり……。つかの間の平穏かもしれませんが。艦内をこ覧になるなら、今の内だと思えますよ?」

「あつと、言ってるわね。じゃ、あたしは散歩を続けるとするわ」

「はい、では後ほど」

くジン

「よう、エステルじゃないか。どうした、こんなところまで」

「ジンさんこそ。こんなところで何してるの？。あ、ひょっとして昼寝とか？」

「はは、そいつも悪くないが、少し稽古でもしようと思ってな。狭い所でじっとしているのはどうも落ち着かなくていかん。そういうお前さんも、散歩か何かの途中のようだが」

「あたしもじっとしてるのは何だか苦手なのよねえ……………」

「でも、稽古って言っても……………」

エステルが客室を見渡す。

「……………運動するには狭すぎるんじゃない？」

「なあに、動くばかりが稽古というわけじゃない。これだけの広さがあればできることはいろいろある」

「へへ、たとえば？」

「瞑想や呼吸法はもちろん、型の復習も重要な鍛錬になる。とかく俺たち遊撃士は実戦ばかりで崩れがちだからな。折に触れて基本に戻り、自らを正すことも重要だぞ」

「確かに、こここのところ型稽古なんてしてないわね。ジンさんに言われると何だか焦っちゃうかも」

「はは、そう気にするな。今のはあくまで一般論さ。だが、思うところがあるなら取り組んでみて損はないぞ。この俺でよければ、喜んで対戦の相手を務めよう」

「えへへ、その時はよろしくお願いするわね」

「おう、楽しみにしているぞ」

くオリビエ

「おや、エステル君。艦内の散策中かい？」

「ま、そんなとこだけ……………」

そこで、エステルはオリビエの手の中のワインに目をやった。

「つて、アンタ……作戦前に何飲んでるのよ」

「フツ、これは前祝の杯だよ。天才詩人と伝説の竜との運命的邂逅を祝っているのさ」

「天才詩人はともかく……伝説の竜……ねえ。もしかして帝国にも竜の話があつたりするの？」

「ああ、もちろんあるよ。ボース地方に程近い南部では竜の目撃談や伝承も多くつてね。《百日戦役》の前には帝国科学院の呼びかけで調査隊が計画されたこともある」

「へえ、本格的じゃない。やっぱり帝国人にとっても古代竜は未知の存在なのね」

「ふむ、おおむねはそう考えて正しいだろうが……。だが、帝国人の場合はもつと割り切った考え方をするかな」

「割り切った考え……？」

「リベール王国と比べるとずいぶんと即物的なんだよ。今回の事件が帝国で起きていれば即座に捕殺の命が下つただろう。外敵には敢然と立ち向かうのが帝国流のやり方だからねえ。竜だろうがなんだろうがお構いなしに叩き落とすはずさ」

「な、なんか殺伐としてるわねえ」

「武を以つて国を安んずるがエレボニア帝国の流儀だからね。愛と平和の使者たる詩人にとってはいささか悲しいところではあるよ」

レイン

「おや、エステルさん。どうしました？」

「うん、何か落ち着かなくて散歩してるのよ」

「そうですね。この船は素晴らしいですね。王国最新鋭の巡洋艦に乗ることができるなんて思ってもいませんでした。これが、作戦中でなければどれだけ素晴らしかったでしょうかね」

「うん、そうですね。レインさん……今回の作戦、成功すると思つ？」

「どうですかね。普通に考えたら、あの作戦は完璧だと思います。しかし、相手は未知の古代竜……。どうなるか先が見えませんか」「そっか……」

「そうそう。エステルさんに謝っておくべきことがありました。あの時、1人で行動してしまったこと、すいませんでした」

「えっ……」

「私1人でアガットさんを助けるつもりだったのです。剣帝レーヴェはあまりにも強い……。エステルさんたちに危険な目に遭わせたくなかったのです。しかし、それが裏目にでてしまいました。テイータさんまで巻き込むことになるとは……。これではS級遊撃士失格ですね」

「そ、そんなことないわよ。今までレインさんにはたくさん助けられてきたし、色々アドバイスをもらったわ。しかも、あの状況でレインさんがいなかったら、アガットがやられていたかもしれない……。決して、間違った行動じゃないわ」

「エステルさん……。ありがとうございます。しかし、剣帝レーヴェは非常に脅威です。彼が本気を出せば、私たち全てが一斉に取りかかって勝てるかどうか分かりません」

「そ、そんなに……」

「エステルさん、これからが《結社》が本格的に動き出すと思います。彼の言う通り、心すべき時だと思えます」

「うん……。わかったわ」

「今は目の前の竜に集中しましょう。それでは、また後でお会いしましょう」

「うん、それじゃあ」

第12章 守るべきもの(18)

エステルがアルセイユ内を歩き回っていると、ユリア大尉のアナウンスが流れた。

「哨戒艇、《メルダー号》より連絡！マルガ鉱山上空にて飛行中の竜を発見したとのこと！全クルーは直ちに持ち場へ向かえ！ギルド関係者はブリッジに急行されたし！」

「 来たわね！」

エステルはブリッジへと急いだ。

アルセイユ ブリッジ

「ねえ、どうなった!？」

「聞いての通り、竜はマルガ鉱山上空に現れた。ディスプレイを見るがいい」

モルガン将軍がディスプレイを操作した。現在の竜と哨戒機の場所が表示された。

「マルガ鉱山……ロレントに現れたんだ！」

「よく見つけたわね……」

「迎撃地点はどこに設定されますか？」

ユリア大尉がモルガン将軍に尋ねた。

「そうだな……。湖に誘導するとはいえ、王都に近づけるわけにはいかん。 迎撃地点はレナート川の河口付近に設定！哨戒艇は

川沿いに竜を誘導！攻撃艇は直ちに発進せよ！」

「アイサー！ こちら《アルセイユ》。作戦行動中の全艦艇に告げる。迎撃地点はレナート川の河口付近。全哨戒艇はフォーメーションBで川沿いに竜を迎撃地点へ誘導。全攻撃艇は直ちに発進し、迎撃地点に急行せよ」

ユリア大尉がモルガン將軍の作戦を無線で告げた。

レイストン要塞

カシウスは攻撃艇が発信するのを見送っていた。

「……まさか彼が奴等の手に落ちるとはな。いつそ俺の手でケリを……。……いかにかん。ここで俺が動いたら同じことの繰り返しだ。フフ、俺も彼も同じ立場というわけか。女神よ……^{エイドス}……混迷の大地に立つ我らをどうか導きたまえ」

アルセイユ

「全攻撃艇、発進しました。配置完了の予定は12:20です」
「うむ……」。《アルセイユ》発進。迎撃地点の南西へ急行せよ」
「アイサー。各部への導力伝達を再開。《アルセイユ》発進。レナ―ト川河口南西へ急行せよ」

数分後、レイストン要塞からの攻撃艇とアルセイユが迎撃地点で合流した。

「全攻撃艇、所定の配置に付きました。麻酔弾の装填も完了」
「よし、後は竜が現れるのを待つのみだ。全攻撃艇、撃ち方用意。号令と共に攻撃を開始せよ」

「アイサー！」

「ゴクッ……」

「いよいよですね……」

見ているエステルたちにも緊張が走る。

そして数分後、アルセイユと攻撃艇の前に竜が現れた。

「撃てい！」

モルガン將軍の号令と共に攻撃艇から無数の麻醉弾が竜に浴びせられた。

竜はそれらを身に受け、河口に身を落とした。

「うむ……!!」

モルガン將軍がその様子を見て満足げに頷いた。

「や、やった!？」

「……見事だわ」

「ふーむ、さしもの竜も手も足も出なかったか……」

「やれやれ……。スペクタクルだったねえ」

「……………」

エステルたちが喜ぶなか、レインだけは訝しげな顔いぶかをしていた。

「あれ、どうしたの、レインさん？」

「いえ、何でもありませんよ。それにしても見事なものでしたね」

「　　ヴァレリア湖上に竜が撃墜したのを確認!このまま予定通りワイヤーで拘束しますか？」

「うむ……。安全が確認され次第、《アルセイユ》も降下せよ。着水して調査を行うぞ」

「アイサー!」

ヴァレリア湖上

「《アルセイユ》着水完了。竜の反応、未だありません」

「よし……。この目で確かめるとするか。大尉、付いてくるがいい」

「は！」

「あ、ちよつと……」

モルガン將軍とユリア大尉がブリッジから出ていくのをエステルが引き留めた。

「ふふ、君たちも来るといい。伝説の古代竜だ。滅多に見れる機会はないだろう」

「う、うん」

アルセイユ 艦首

艦首ではドロシーが早くも古代竜を撮影していた。

「ふわ、おつきいですねえ。でもこの子、ハンサムなのに眠ってたらもつたいたいかも。早く目を覚まさないかな」

「だ、から、目を覚ましたらヤバイんだっての。しかし……何ともたまげた生物だぜ」

エステルたちも艦首に出て古代竜を見た。

「うわ、っ……」

「これは……凄いわね」

「あ、エステルちゃん！」

「へへ、お前らも来たのか」

「殿下……あぶのうございませすぞ。どうか船内にお戻りください」

「ふふ、大丈夫です。それにしても、間近で見ると本当に大きな生物ですね……」

「これって、本当に眠ってるの？」

「心音は確認されたから死んではないはずさ。まあ、普通の魔獣なら千匹は眠らせられる量の麻酔が撃ち込まれているからね。簡単には目を覚まさないだろう」

「そっか……。あれ、そういえば……。あのレーヴェって男はどうしちゃったのかしら？」

「ふむ、どこかに身を潜めている気配はなさそうだが……」

「『実験』の要となる《ゴスペル》はあのレーヴェ君が持っていたはずだね。それがここにはないということは……。『実験』を放棄したということかな？」

「竜を追っていた哨戒艇によると人の姿は確認できなかったそうだが、最初から乗っていなかった可能性は高いかもしれない」

「ふふ、無理もない。おそらく我々の作戦を知って恐れをなして逃げたのだろう」

「うーん、そんな殊勝な男とは思えないんですけど……」

「そうね……。油断はしない方がいいわ。ところで竜はこの後どこに運ばれるのかしら？」

「とりあえず、この状態のままレイストーン要塞まで曳航えいこうさせる。後の事は、陛下やカシウスと相談して決めるつもりだ」

「なるほど」

「あれ……？」

古代竜を見続けていたドロシーが声を上げた。

「なんだ、ドロシー？」

「また何か見つけたの？」

「うーん……。気のせいかもしれないけど。この子の額の部分、変な風に盛り上がってない？」

「へ……」

エステルたちが古代竜の額に注目した。

「ホントだ……。丸く盛り上がっているわね。切れ目があるみたいだから、ひよつとして目だったりして」

「まさか……。！皆さん、古代竜から離れてください！」

レインが声を上げた時、古代竜の額の切れ目から《ゴスペル》が現れた。

「！……！」

「まさか……！」

「そいつが本命か！」

気付いた時には遅く、《ゴスペル》から導力停止現象を引き起こす黒い光が放たれた。

「くっ……」

「ぬっつ……！？」

そして、古代竜の目が覚め、大空へと飛び去って行った。

「ああっ！？」

「おのれ……逃がすものか！《アルセイユ》、緊急発進だ！」

「了解！」

アルセイユが緊急発進し、古代竜に追い付き、誘導弾を撃つが全て外された。

「ダメです！誘導弾、ロックしません！熱源は探知しているのに！」

「何らかの妨害波を発しているということか……。ならば主砲に切り換える！」

ユリア大尉が号令したとき、

「竜の速度、さらに上昇中……！時速2300セルジユ 24
00、2500、2600……」

観測士エコーが竜の速度上昇を伝えた。

「クッ、何という化物だ。警備艇の最高速度を軽く上回るとは……」

「ですが、新型エンジンを搭載した《アルセイユ》なら追撃可能です！全クルーに告げる！これより《アルセイユ》は最大戦速

（3200CE/h）まで加速を行う！各員、Gに備えよ！」

「え、え、どういうこと！？」

「急加速のGがかかります！しゃがんで姿勢を低くしてください！
どうやら、急加速による慣性力に備えるということらしい。

「！分かった！」

エステルたちはかがんで姿勢を低くした。

「 加速開始！絶対に竜を逃がすな！」

「 アイマム！」

操舵士は加速レバーを一気に上げた。とたんに後ろに思い切り引張られるような力がエステルたちを襲った。

「 わわわっ……………」

しばらくして、アルセイユは古代竜の間近まで迫ったが、古代竜は雲の中に潜ってしまった。

「 ……竜、高度を下げました。このままではロストします」

「 ギリギリまで食らいつけ！……………くっ。まだ雲は切れないのか！」
通常なら雲はすぐに切れるはずなのだが、いっこうに切れなかった。

「 待って！ここはどの辺り！？」

シエラザードが何かに気付いたようだ。

「 ……？」

ユリア大尉がモニターにアルセイユの場所を示した。

「 霧降り峡谷か……………！」

「 ひよつとしたらもう霧の中に入ってるんじゃない？」

「 うぬっ……………」

「 竜、高度1200アージユまで降下！1100、1000、90

0……………。ロストしました」

「 くっ……………」

「 ユリアさん……………」

「 み、見失っちゃったの？」

「 ……ああ。霧降り峡谷の北西部……………霧の深い難所に逃げられた」

「 ……例の空賊アジトにアルセイユを止められるか？」

「 いえ……………アルセイユの大きさでは不可能です」

「 そうか……………。 作戦終了。後続している哨戒艇に峡谷周辺を

監視させる。《アルセイユ》はいったんボースに戻せ」

第12章 守るべきもの(19)

アルセイユ 作戦室

王国軍による作戦が失敗したため、エステルたちの出番となった。ボース市に到着した後、今後の方針を立てるため、ユリア大尉やモルガン將軍と話し合うことにした。

「竜が逃げ込んだのは霧降り峡谷の北西部……空賊アジトがあった場所より奥にある霧の深い難所です」

「つまり、飛行船を使った搜索は難しいということですね？」

「残念ながら……。地上から搜索部隊を派遣するしかないでしょう」

「ちょ、ちよつと待って！大勢の兵士を差し向けたらまた竜に逃げられちゃっわよー！」

「そうね……。ここは少人数で搜索して竜のスキを突いた方がいいわ」

「つまり、この先はおぬしらに任せるとのことか？」

「難所の搜索は、軍人よりも我々の方が慣れていきますからな。適材適所というやつでしょう」

「……ふむ……。だが、おぬしらとて搜索するアテはあるのか？たしか、峡谷の北西部には道らしき道もなかったはず。行き当たりばったりでは何日かけても終わりはせんぞ」

「そ、それは……」

「……それは任せとけ」

突然、作戦室に入ってきたのはアガットとティータだった。

「おぬしは……」

「アガット、ティータ!？」

「よお、邪魔するぜ」

「えとえと、失礼します」

「どうしてここに……。そ、それよりももう動いて大丈夫なの!？」

「怪我の方は心配ねえ。ただのカスリ傷だからな」

「……ティータ、ほんと？」

「う、うん……。アガットさん、無理はしてないと思うよ」

「そっか……。だったら良いんだけど」

「フン、体力だけは有り余っているようだな。任せると言っておつたが、作戦の顛末は聞いているのか？」

「ああ、ルグラン爺さんから大まかなことは聞いてきた。竜は霧降り峡谷の北西部に消えたそうだな？」

「うん、そうだけど……」

「霧降り峡谷について詳しいヤツを知っている。そいつに頼めば、竜の隠れた峡谷の北西部に渡れるだろう」

「ほう……」

「そ、それって誰なの？峡谷の東側に住んでいるウエムラーってオッサンだ。昔、道もない北西部に渡ったことがあるらしい」

「フツ、さすが遊撃士。日頃の地道な情報収集が実を結んだということだね」

「……。しかし、実際に竜を見つけたらどうするつもりだ？おぬしらだけで退治できるような生易しい相手ではないぞ」

「竜の額には《ゴスペル》が仕込まれていたそうだな？まずはそいつを何とかするのが先決だろう」

「ふむ……」

「考えてみれば、あれのせいで竜が暴れたかもしれないのよね。今までにも《ゴスペル》は色々な異常現象を起こしているし」

「《ゴスペル》を無力化できれば竜の暴走を止められるということですね。確かにそれは頷けますが……」

「《ゴスペル》の無力化というと、ケビン殿が使った方法を思い出すな。あの時はアーティファクトを《ゴスペル》に叩き付けることでショートさせていたが……」

「問題は、どう無力化させるかですね。私たちにはアーティファクトなどありませんし……」

「そんな悠長なマネはしないさ。フレームごと《ゴスペル》を破壊するだけだ」

「なに……!?!?」

「ちよ、ちよつと待って! 《ゴスペル》を壊すってそんなこと簡単にできるの? たしか物凄く硬いフレームで包まれてるんじゃないかな? たっけ?」

「それについてもなんとか目処が付いた。……コイツだ」
アガットが自分の重剣を見せた。

「それって……」

「根元に何かのユニットがはめ込まれているみたいね」

「今朝、ラツセルの爺さんが定期便で送ってきた新発明……。《ゴスペル》のフレームを破壊するためのユニットだ」

「ええっ!?!?」

これには全員が驚いた。超合金のカッターでも傷一つ付けられなかった《ゴスペル》を破壊することができると聞いたからだ。

「ふむ……。一体どういう仕組みなんだい?」

「えとですね……。このユニットが、フレーム素材のみ崩壊させられる波長の高振動をブレード部分に与えるらしいです。振動が原因で2、3回使ったら壊れちゃうそうなんですけど……。うまく刀身を食い込ませられれば《ゴスペル》を破壊できるそーです」

「よ、よく分からないけどメチャメチャ凄そうな発明かも」

「フツ……。さすがは王国一の天才学者だ」

「さつきティータに付けてもらったばかりだが、どうやら問題なく動きそうだ。あとは実際に竜を捜しだして額に喰らわせてやるだけだが……。どうだい、將軍さんよ?」

「まったく……。そこまで用意されたのでは認めてやるしかないではないか」

「それじゃあ……」

「俺たちに任せていいんだな」

「うむ……。やれるだけはやってみるがいい。ただし念のため、飛

行艦隊を峡谷の周りに展開しておく。おぬしらが竜を逃がした時、即座に対応できるようにな」

「へッ、上等だ。ムダ弾を撃たせないようせいぜい気張らせてもらうぜ」

「この後、《アルセイユ》はボース地方の上空を巡航する。竜の居場所が特定できたらよろしく連絡をお願いしたい」

「うん、任せて」

「竜の居場所が分かったらジークに伝えてもらいます。私が同行していない場合も、エステルさんの近くにいるようお願いしておきましたから」

「殿下、同行するならばくれぐれもお気を付けてください。……エステル・ブライト。それからアガット・クロスナー」

「へっ……？」

「……なんだ？」

「もし竜が峡谷から逃げたら軍が責任をもって何とかしよう。もう2度と、リベールの民を傷付けるようなことはさせぬ。だから、失敗を恐れずにやれるだけやってみるがいい」

「モルガン將軍……」

「……まさかアンタからそんな言葉が聞けるとはな。どういう風の吹き回しだい？」

「なに、ただの社交辞令だ。……大尉、出発するぞ」

「は！」

アルセイユは巡航に入るため、ボース発着場を飛び立っていった。

「さてと、霧降り峡谷にいるウエムラーって人を訪ねるのよね？」
「ああ、峡谷の東側の山小屋に住んでいるはずだ。それよりも……。
……やっぱり付いて来るつもりか？」
アガットは心配そうにティータを見た。
「えへへ、もちろんです。振動ユニットが故障したらその場で修理
できますし……。飛んでいる相手だったら導力砲が役に立つと思っ
んです」
「チツ……しゃあねえな。あまり無理をして足を引つ張るんじゃない
えぞ」
「はいっ」
「な、なにお姉ちゃん？」
「……何だってんだ？」
「いや、なんと言いますか。今まで以上に馴染んでるなあと思って思
つて」
「くす……良い事があったみたいですね」
「あなたが言わない限り、こちらも昨夜何があったかは聞きませ
んから安心してください」
「ふえっ……？」
「な、なに言ってるやがる」
「あはは、焦ってるやんの。でも……気持ちの整理は付けられたみた
いじゃない？」
「……まあな。もう1人で突っ走って自滅するようなマネはしねえ
さ。またどこぞのチビスケに怖い顔で叱られたくねえしな」
「あう……アガットさんったらあ」
「ふふ……そっかそっか。よし、それじゃあ霧降り峡谷に急ぎま
しよー」
「うんっー」
「おうー」

第12章 守るべきもの(20)

霧降り峡谷

霧降り峡谷に着いたエステルたち。

「さてと……。まずは峡谷の東側にある山小屋を訪ねるのよね?」

「ああ、急ぐぞ」

霧降り峡谷東部 ウェムラーの山小屋

「む……。お前たちは」

「あのあの、お邪魔します」

「えつと、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど」

「ああ、そのようだな。そこにいる赤毛の小僧はいささか知らんわけでもない」

「フン、小僧とは言ってくれるじゃねえか。久しぶりだな、ウェムラーのオツサン。元気にしてたかよ?」

「ふふ、まだまだ若い者に負けるつもりはないからな。それよりも、どうした?何か用があつて来たようだが」

「うん、実は……」

エステルたちはポーヌ地方に現れた竜が峡谷の北西部に消えた事を説明した。

「フン……。なるほどな。道理で先刻まで外が騒がしかったわけだ」

「なあ、オツサン。あんた、前に北西部に渡ったとか言ってたよな?俺たちに、そのルートを教えてもらいてえんだ」

「……断る」

「ええつ!?!」

「ちよつと待て!いきなり断るはねえだろ!?!」

「1つ聞くが……。お前たち、竜を見つけていたいどうするつもり

だ？」

「う、うーん……。操られているだけみたいだから、できれば退治はしたくないけど……」

「だが、『ゴスペル』を破壊しても暴れたら退治するしかねえだろ。背に腹は替えられねえってヤツだ」

「やれやれ……。話にならん。どうやら竜を、図体のでかい魔獣と同じくらいにしか考えていないようだが……。あれは断じて魔獣などではない。『大崩壊』前から生き続けている神獣というべき存在なのだぞ」

「『大崩壊』前から……。ええっ!？」

「そ、それじゃあ1200年以上前から……」

「はは、んなワケはねえだろ。長生きはしてるみてえだがいくらなんでも……」

「いえ、あり得ると思えます。竜の目撃記録は、900年前のリベル建国まで遡さかのぼりますから。当時は今よりも頻繁に姿を現していたそうです」

「私も文献で見たことがあります。何でも、女神の使いだとか」

「……マジかよ」

「た、確かに普通の魔獣とは一緒にしない方がいいかも……」

「そんな存在を退治するなど自殺行為以外の何物でもない。まあ、王国軍に任せて大人しくしていることだ。軍もアテにはならんが、あの男ならあるいは……」

「えっ……?」

「……とにかく、若い連中を死地に追いやる趣味はない。悪いが力にはなれんな」

「で、でも……」

「……。なあ、オッサン。アンタの気遣いは有り難いが、ちよいと的外れじゃねえか？」

「……む」

「俺たちはすでにシヤレにならない敵には何度だって出くわしてい

る。たとえば情報部だったり、古代の人形兵器だったりな。だが、
そいつらも危険だからって見過ごせる相手じゃなかった。無い知恵
絞りながら力を合わせて何とか乗り越えてきたんだ」

「……………」

「今度の竜だつて同じことだ。見過ごせる相手じゃねえが闇雲に突
つ込むつもりじゃねえ。だから……頼む。俺たちに手を貸してくれ」

「アガツト……」

「アガツトさん……」

「ふふ……。なかなか良い面構えをするようになったじゃないか。

そこまで言われたら俺も手を貸すしかなさそうだ」

「！」

「ほ、ほんと！」

「あ、ありがとーございます！」

「なに……大したことをするわけじゃない。俺は準備のため、一足
先に向かうとしよう。西側の一番奥だから後から追いかけてくるが
いい」

「後から追いかける？」

「おい、北西に行けるルートを教えてくれるんじゃないか？」

「教えるだけではたぶん見当も付かんだろう。とにかく、峡谷の西
側に出てから歩いて行ける一番奥に来るんだ。待ってるぞ」

ウエムラーは先に行ってしまった。

「ちよ、ちよっと……！！」

「……仕方ねえ。オッサンの言う通り、行ってみるしかねえだろう」

「そ、そうね……。えっと、峡谷の西側に出てから歩いて行ける一
番奥だっけ？」

「ああ。入り組んだ地形だから迷わないように気を付けるぞ」

「……何とかここまでたどり着けたようだな」

「オッサン……」

「ひよっとして、その橋を渡ったら……」

ウエムラーは先回りして橋をかけてくれたようだ。

「ああ、まっすぐ進めば大きな岩山があるはずだ。中は空洞になっていて、奥に進んでいけば上の方に登れるようになってる。竜はその先にいるだろう」

「そっか……」

「恩に着るぜ、オッサン」

「さてと……。俺はいったん小屋に戻るぞ。そうそう、岩山の空洞には危険な魔獣が徘徊していたはずだ。危なくなっと思ったたら、思い切って引き返すがいい。小屋に来れば休ませてやるぞ」

「うん、ありがとう！」

「せいぜい気を付けるぞ」

ウエムラーが小屋に帰るのを見送り、エステルたちも北西部へと足を進めた。

第12章 守るべきもの(21)

霧降り峡谷北西部

「ここが竜のいる岩山……」

エステルたちが道なりに進んでいると洞穴の穴を見つけた。

「くっ……」

「ヘッ、どうやら気合いを入れる必要がありそうだな」

「あ、待ってください。そろそろ《アルセイユ》に連絡した方がいいと思います」

「そっか、それがあつたわね」

クローゼがペンと紙を取り出し、現状についてしたためた。

「ジーク、来て！」

「ピユイピユイ」

「ふふ、ご苦労様」

「ありがとね、ジーク！」

「はあ、何度見ても驚きますね」

「つたく、相変わらず常識外れなハヤブサだぜ」

クローゼはジークの脚にメモを括り付けた。

「それじゃあ、ジーク。《アルセイユ》への連絡、お願いするわね？」

「ピユイ！」

ジークは頷くと、アルセイユへと向かっていった。

「さてと……。これで準備は終わりですね」

「うん……。気合いを入れていきましょう！」

「うんっ！」

「おお！」

「はい！」

エステルたちは洞窟の中へと踏み入った。

ボース地方 上空

「ジーク！」

「おお、来たか！」

ボース地方上空で待機していた《アルセイユ》のもとにジークが到着した。

「ピューイ！」

ユリアはジークの脚からメモを取り外した。

「……エステル君たちが無事、竜のいる岩山に到達しました。これから内部を通り抜けて竜のいる場所を目指すそうです」

「そうか……。……全艦艇に到達！徹甲弾を装填した上で所定の位置に待機せよ！万が一、竜が逃げ出しても絶対に包囲を突破されるな！」

「イエス・サー！」

霧降り峡谷北西部 最奥頂上

霧降り峡谷北西部を登り続けたエステルたち。ついに、竜の棲む洞穴を見つけた。

「（ああ……）」

「（いたか……！）」

「（ね、眠ってるのかな？）」

「（……そうみたいです）」

「（それに、剣帝レーヴェの気配も感じられません）」

「（これはチャンスかも……。アガット、どうする？）」

「（まずは俺一人で接近する。うまく行きゃあ、そのまま《ゴスペル》を破壊できるだろう）」

「（そっか……。分かった）」

「（アガットさん……）」

「（大丈夫だ、心配すんな。失敗した時は援護を頼むぞ）」

「（はいっ……！）」

「（気を付けてね……！）」

アガットは重剣を取り出し、岩陰に身を隠した。

「（あれか……）」

《ゴスペル》を確認し、重剣についたユニットの電源を入れた。

「（……行くぜ！）」

アガットは竜に向かって一気に走った。

「らあああっ！」

ありったけの力で竜の額に重剣を食い込ませた！《ゴスペル》にヒビが入る音がした。

「やったか……！？」

しかし、《ゴスペル》から黒い光が放たれ、竜が目覚めてしまった。

「チツ……浅かったか！」

「アガットさんっ！」

ティータが竜に向かって導力砲を放った。

「アガット！」

「ヒビは入ったが破壊までではできなかった！こうなりやもう1度チャンスを作るしかねえ！手を貸してくれ！」

「もちろん！」

「はいっ！」

「……行きます！」

「古代竜が相手ですか……。相手としては十分すぎますね」

竜を戦闘不能にしたはずのエステルたち。しかし、竜は倒れなかつ

た。

「あ、あう……」

「くっ……。倒したはずなのに!？」

「無限の生命力……。伝承の通りです!」

「まずいですね……。このままでは逃げられてしまいます!」

その時、アガットは高台を見つけた。

「ティーター！閃光弾を持つてるか!？」

「ふえっ……はいっ!」

「そいつで竜のスキを作れ！エステル、姫さん、レイン！一瞬でいい、動きを止める!」

「ええっ!？」

アガットは高台へと登っていった。

「あ……」

「なるほど……。そういうことですか!」

「あの高さならいけますね」

「ティーター！当てないで撃ち上げちゃって！あたしたちで動きを止めるから!」

「うんっ……!」

ティーターが閃光弾を撃った。

「（………今だ!）」

エステル、クローゼ、レインは竜の脚に集中攻撃した。竜が地面に倒れる。

「………………。うおおおおおっ!」

アガットはアクセサリーの石を握りしめ、その隙に、アガットは高台から竜の額の《ゴスペル》目がけて、重剣を叩き込んだ。さすがの《ゴスペル》も完全に砕け散った。

「やった……!」

「《ゴスペル》が壊れた……!」

「ふう……。ヒヤヒヤしましたよ」

「アガツトさんっ！アガツトさん！だいじょうぶですかっ!？」

「ああ……大丈夫だ。どうやら……上手くいったみてえだな」

「うんうん！大成功よ！」

「アガツトさん……凄いです！」

「見事な一撃でしたよ」

「へへへ……。竜も何とか倒せたし、一件落着といった所か」

「……見事だ……」

突然、頭の中に声が響いた。

「え……」

「い、今の声は……」

「どこから聞こえてきた!？」

「ま、まさか……」

「竜、から……?」

竜が再び起き上がった。

「見事だ……人の子たちよ。我が名は《レグナート》。この地に眠る竜の眷族だ」

「あ……」

「これは……お前が喋っているのか!？」

「私は、おぬしらのような発声器官を持っていない。故に『念話』

という形で語らせてもらっている。おぬしらはそのまま声に出して

語りかけるがいい」

「そ、そうか……」

「ふええ……」

「まさか、竜と語る機会まで来るとは……」

「こ、言葉が通じるのなら確認したいんだけど……。もう、あたし

たちと戦うつもりはないのよね？」

「うむ、あの機（まき）に操（あそ）られていただけだからな。よくぞこの身を戒め

から解き放ってくれた。礼を言わせてもらっぞ」

「あはは……ど、どういたしまして」

「フン……礼はいい。俺たちがここまで来たのはためえを解放する

ためじゃねえ。これ以上の被害を防ぐためだ」

「私が被害を与えてしまった街や村の事だな……。意志を奪われていたとはいえ、確かに私にも責任があるだろう。さて……。どう償ったものか」

「ま、まあ、悪いのは《結社》の連中なんだし……。ケガ人は出ちゃったけど、亡くなった人もいなかったし……。誠意さえ伝われば許してもらえと思うわよ？」

「……………」

「ふむ、誠意か……。このような物で伝わるか自信はないのだが……。人の子よ、もう少しこちらに近付いてはもらえまいか？」

「う、うん？別にいいけど……………」

「……………ったく、何だってんだ」

古代竜レグナートはエステルとアガットの手に何かを出した。

「な……………」

「わあ……………！」

「これって……………七耀石の結晶!？」

「金色の輝き……。空の力を秘めた^{コルディア}金耀石の結晶ですね」

「これは……………驚きです」

「私が付けた爪痕の償いだ。どうか、おぬしらの手から街と村の長に渡してもらえぬか？」

「な、なるほど……。うん、そういう事なら……………」

「……………駄目だな」

「ちよ、ちよつと!？」

「アガットさん……………」

「ふむ、やはり物では誠意は伝わらぬという事か？」

「そういう意味じゃねえ。この大きさだと……………1つ、1千万ミラと行ったところか。1万分の1でいい。これと同じ結晶を寄越しな」

「へ……………?」

「犯罪でも絡まない限り、遊撃士を雇うのは有料でな。品物の運搬料だったら1000ミラ貰えりゃ充分だ。それさえ払えば引き受け

「やるよ」

「あ……」

「まったくもう……。素直じゃないんだから」

「ふむ、そういう事か。それでは受け取るがいい」

レグナートは再び結晶を出した。

「よし……契約成立だな。この2つは、責任をもって村長と市長に届けてやるぜ」

「うむ、頼んだぞ。ふふ……しかし、先ほどの一撃は中々だったぞ。銀の剣士と戦っていた時は何とも頼りなかったが……。一皮剥けたようではないか」

「なっ……」

「は、廃坑の事を覚えているんですか？」

「操られてはいたが、意識は残っていたからな。小さき娘よ。おぬしの勇気と健気さにはなかなか感服させられた。ふふ……だから人間というのは面白い」

「あ、あう……」

「あはは、意外とお茶目な所があるじゃない」

「ふむ、そしておぬしは……。なるほど、道理で覚えのある匂いがあるわけだ。《剣聖》の娘だな？」

「へ……！？」

「おいおい、どうしてオッサンを知ってやがる！？」

「20年前、眠りにつく時、最後に会った人間の1人だ。剣の道を極めると言って無謀にも挑んできたのだが……。いまだ壮健でいるのか？」

「う、うん……。ピンピンしてるけど。……まさか竜とまで知り合いたとは思わなかったわ」

「ふふ……さすがカシウスさんですね」

「あ、そういえば……。ねえ、《レグナート》。ちょっと聞いてもいいかな？」

「ふむ、なんだ？」

「あなたに《ゴスペル》を付けたのは、あのレーヴェって男なのよね？《実験》とか言ってたけど……一体、何の実験だったか分かる？」

「ふむ……誤解を解いておくが。漆黒の機はたらきを私に付けたのは、あの銀の剣士ではない。『教授』と呼ばれていた得体の知れぬ力を持つ男だ」

「ええっ！？」

「なんだと……！？」

「銀の剣士は、『教授』の供としてここに現れた。そして私が暴走してからは、被害が大きくなりすぎぬよう様々な手を尽くしたのだ。彼が暴走を押さえなければ私は街や村を破壊し尽くすまで止まらなかったに違いない」

「う、うそ……」

「野郎……どういつつもりだ」

「……」
「そして、『教授』の目的はただ一つ。あの機はたらきが私に効くかどうかを見て完成度を確かめたかったのだらう。《輝く環》の《福音》としてな」

「な……！？」

「か、《輝く環》！？」

「ちょ、ちょっと待って！もしかして《輝く環》がどういう物か知ってるの！？」

「……」。それは、何処おもむくにもないが遍く存在しているものだ。無限の力と叡智と共に絶望を与える存在でもある。それを前に出した時……人は答えを出さなくてはならぬ」

「へ……」

「それは……どういう意味なのでしょう？」

「私から言えるのはここまでだ。これ以上の関与は古の盟約により禁じられている。おぬしらを助けることも彼らを止めることもできない」

レグナートは翼をはためかせた。

「わわっ……………」

「お、おい!？」

「さらばだ、人の子たちよ。おぬしらが答えを出した時、私はもう一度姿を現すであろう。その時が来るのを祈っているぞ」

レグナートは空へ飛び去っていった。

ボース地方上空

モルガン將軍、ユリア大尉、ナイアル、ドロシーが《アルセイユ》の艦首で待っていた。

「ずいぶん遅いですねえ。エステルちゃんたち、大丈夫なのかな」

「まさか、返り討ちにあつたんじゃねえだろうな……………」

「その場合、危機を知らせにジークが戻ってくるはずだ。今は彼らを信じて待つしかない」

「ですがねえ……………」

「………………。夕刻まであと1時間…………それを過ぎたら突入を開始する。大尉、準備をしておけ」

「了解しました……………」

「その必要はない」

突如、4人の頭の中に声が響いた。

「な、なんだあ!？」

「今のは…………!？」

「どこから聞こえたのだ!？」

「あれ?？なんか大きいのが下から上がってきますよ?？」

「なにっ!？」

《アルセイユ》の前に古代竜レグナートが現れた。

「リベールを守る兵たちつわものに告げる。我が名は《レグナート》。古よりこの地に眠る竜の眷族だ。悪しき者に操られていたが遊撃士たち

によって解放された。詳しい事情は彼らから聞くといい」

それだけを言い残し、レグナートはさらに上空へと上っていった。

「……………」

「はわわ〜……………。見えなくなっちゃいましたねえ」

「えっと……………。追いかけないんですかい？」

「……………。あの高度まで行かれましたらお手上げだ。《アルセイユ》が無事でも我々の方が窒息してしまうだろう」

「やれやれ……………。これは、あやつらから徹底的に顛末を聞き出さなくてはならんな」

こうして、ボース地方を騒がせた古代竜の騒ぎは幕を閉じた。

エステルたちは、モルガン將軍に詳しい事情の説明を求められ……………

ようやく解放されてから、竜から預かった金耀石の結晶を市長と村長にそれぞれ届けた。

第12章 守るべきもの(22) (前書き)

今回で第12章『守るべきもの』が終了します。

第12章 守るべきもの(22)

1週間後 ラヴェンヌ村

アガットとティータはミーシャの墓参りをしていた。

「あ……」

「あなた……」

モルガン将軍が石碑の前に立っていた。

「おぬしらか……」

「まさかあなたがこんな所にいるとはな。どういつ風の吹き回しだ？」

「なに……ただの気まぐれだ。妹御に供えるのであろう？わしはこれで失礼しよう」

「おいおい。邪魔なんて言ってねえだろ。その花は……あなたかい？」

「……まあな。こんな事になるのであれば別の彩りを考えたのだが、毎年、俺と同じ花を捧げているヤツがいるとは思ったが……。あなたとは思わなかったぜ」

「さて、どうかな……。わしもいいかげん歳だ。どうだったか忘れてしまった」

「ヘッ、よく言うぜ」

「クスクス……。あの、わたしもお花、供えていいですか？」

「おお……」

「ああ、頼む」

ティータとアガットは石碑の前に花を供え、しばしの間、黙禱をさげた。

「ふう……。悪かったな、ティータ。わざわざ付き合わせちゃって」「ううん、私も一度、ちゃんとミーシャさんに挨拶したかったですから……。ありがとう、アガットさん」

「おいおい。礼を言うのはこっちだろ。それに、仕事が一段落した

ら会わせるって約束だったしな」

「えへへ……そーでしたね」

「ふふ……。竜にも言われたそうだがおぬし、変わったようだな。落ち着きのようなものを感じさせるようになったぞ」

「よせよ、まだまだ未熟さ。だが、ためえの未熟さとまっすぐ向き合うだけの覚悟はできた気がするぜ。全てはここからだ」

「ふむ……。……おぬしの言っていた軍という組織の弊害だが……。改めて考えたら、おぬしの言葉も一理あると思ってな」

「あれはその……単なる八つ当たりだ。別に軍が間違ってるとかそんな風には思っちゃいないさ」

「まあ、聞け。今回の顛末で分かったのが、人と組織は異なるという事だ。軍の組織力が役立つこともあれば、遊撃士のフットワークが良い結果を導き出すこともある。どちらが欠けても今回の事件は解決できなかったと思わぬか？」

「……まあな。あんたらの作戦があったから竜の居場所が分かったわけだし」

「リシャルルの言葉ではないが……オープメントが発明されてから物と情報の流れは、早く大きくなった。それを効率的に処理するために組織というものは、巨大化しながら細分化されることを余儀なくされている」

「……軍がその良い例だな。国境師団、飛行艦隊、王室親衛隊、王都警備隊、情報部……」

「うむ……。そしてそれは、時代の流れに対応するための進化と見えよう。そこから抜け落ちるものが少くないとはいえ……もはや後戻りはできないのだ」

「……」
「だからおぬしは……おぬしたち遊撃士は我々とは違うやり方で守るべきものを守るといい」

「……え……」

「互いの守るもののために時には対立し、時には協力し……そうす

ることで互いを補い、正しくあらんと確かめ合う。それが、わしらの関係の正しい在り方だとは思わぬか？」

「……へへッ、違いない。ま、これからもせいぜい突っ込ませてもらうからな。覚悟しとけよ？」

「フッ、それはこちらの台詞だ。軽はずみな事をしないよう日頃から心がけておくのだな」

「クスクス……」

「フフ……。和やかな所を悪いが少し邪魔させてもらうぞ」
後ろから声が聞こえたと思うと、剣帝レーヴェが立っていた。

「！！！！」

「ふえっ……」

「おぬしは……」

「將軍閣下とはこれが初めてか。《身喰らう蛇》の執行者　レ

オンハルトという者だ。以後、お見知りおきを願おう」

「なにっ!？」

「……てめえ……どういっつもりだ」

アガットが剣帝レーヴェに剣を向けた。

「ここは死者の眠る場所。するべきことは一つだろう。お前こそ、先日の続きをここで繰り広げるつもりか？」

「グッ……」

「アガットさん……」

「……わかつてる」

アガットは剣をしまった。剣帝レーヴェは石碑の前に花を供え、静かに黙祷した。

「……」

「レオンハルト……《剣帝》レーヴェと言ったか。わしも死者の眠る場所を騒がしたくないのは同じだが……。ひとつ、聞かせてもらおうか」

「ご随意に……」

「今回の事件で、おぬしは被害が大きくなりすぎないよう竜の暴走

を抑えたそうだな。今も、死者を悼むためにそうして祈りを捧げている……。そんな者がどうして破壊と混沌を招こうとする？ なにか……避けられぬ事情でもあるのか？」

「……フ……………」

「竜の暴走を抑えたのは《実験》を正確に行うためだ。それ以外の意図はない」

「だが……………」

「……俺は俺の命ずるまま《結社》の手足として動いている。何者の意志にも左右されずにな。《ハーメル》の沈黙を強いられたあなた方と一緒にしないでもらおう」

「……！」

その言葉にモルガン將軍は驚愕した。

「《ハーメル》だと？ どうしてその名前が……………」

「さてと……………。アガット・クロスナー。覚悟が固まったからといって実力が伴わなければ意味はない。今度は、剣が砕けるだけで済まされるとは思わないことだ」

「ヘッ…………。上等だ。てめえこそ、いつまでも余裕ぶってられると思うなよ。すぐに追い上げてやるから覚悟してるや」

「フツ…………。楽しみにしてるぞ」

剣帝レーヴェは去っていった。

「……あのおにーさん。寂しそうな目をしてました。お祈りしている間、ずっと……………」

「……………。おい…………。將軍。《ハーメル》ってのは国境を越えたところにある帝国側の村のことだよな？」

「おぬし…………。その名を知っているのか」

「戦争前は、ラヴェンヌ村とたまに交流があったはずだ。今じゃあまったく途絶えちまつてるらしいが…………。どうしてもその名前が出てくる？」

「……………。…………。その事についてはわしの口から言うことはできん。国家間の問題に絡むのでな」

「なに……！？」

「ただ、これだけは言える。もしも、わしの想像が当たっているの
であれば……。……あのレーヴェという男、よほどの地獄を見たに
違いない」

第13章 絆の在り処(1)

山猫号

「あれ……?」

ジヨゼットが誰かを探していた。

「なんだ、こつちにいたんだ」

「……こちら側の方が月がよく見えるからね。風の流れも肌で感じられる」

ヨシユアは山猫号の入口の裏側に座っていた。

「あはは、まゝたカツコ付けちゃってさ。……よつと」

ジヨゼットがヨシユアの横に腰を下ろした。

「カツコ付けているわけじゃないか……。必要なんだよね、それも?」

「月明かり、雲の位置、風の流れがけっこう重要になってくるから。失敗の可能性はなるべく下げておきたいんだ」

「な、なるべくって……。あんなねえ……。できる限りって言いなよ

!失敗したら死んじゃうんだよ!」

「大丈夫、失敗の可能性は軽微だ。この程度のミッション、昔は毎日こなしていたからね。むしろ危険なのは……ミッションが成功し
てからだ」

「……。ね、ヨシユア。本当にあんたが
そこまでやる必要があるわけ?」

「え……?」

「あんたもボクたちと同じエレボニア生まれなんだよね。そりゃあ
お互い、事情があつて故郷に帰れないかもしれないけど……。だから
らといって、この国に義理立てする必要ないじゃない?《結社》が
何をしようが放っておけばいいんだよ」

「……。ね、今ならまだ引き返せるよ。このまま、ボクたちと一緒にリベ

ールを離れてさ……どこかの自治州あたりでパーツと一旗揚げてみない？空賊稼業が気に喰わなければ他の仕事を探してもいいんだし。アニキたちとも話したんだけど、この船のスピードを活かした運送業なんていいと思うんだよね」

「飛行船を使った運送業か……。今後も需要は増えそうだし、なかなか有望なビジネスかもね。少なくとも空賊よりは確実に稼げると思うよ」

「そ、それじゃあ！」

「そうだね……。《結社》の計画を潰して僕が生き残ることができたら考えさせてもらおうかな」

「……………」

「ああ、心配しなくても僕たちの契約はこれで終わりだ。この作戦に協力してくれたら貸しは帳消しという約束だからね。いつでも出発してくれる構わない」

「……………もういい」

「え」

「バカ！誰が貸し借りの話をしてるのさ！もういい！あんななんか知るもんか！勝手に危険に飛び込んで勝手にくたばっちゃえばいいんだ！」

ジヨゼットは山猫号の中へと走っていった。

「……………ごめん、ジヨゼット」

「まったく……鈍いフリも楽じゃないねえ」

「……………キールさん」

見張り台からキールが顔を出した。

「あいつもいい加減、ガキっばさが抜けないんだが……。それでも今のはやっぱりお前の言い方が悪いと思うぜ」

「……………そうだね。謝るつもりはないけどすまないとは思っている」

「やれやれ……。それがお前なりの気遣いだとは分かつちやいるんだけどな。まあ、さっきの話は真剣に考えておいてくれや。全てのケリを付けた後、あの遊撃士の嬢ちゃんの元に帰るつもりがないん

「だつたらな」

「はは……それは無いよ。所詮、僕と彼女は生きている世界が違いすぎる。もう交わることは無いはずだ」

「ふーん……ま、いいけどな。だつたら尚更悪い話じゃないだろう？」

「そうだね……。前向きに考えておくよ」

その時、山猫号が何かを探知したようで、サイレンが鳴った。

「おいでなすったか！ 兄貴、来たのか！？」

「おお！ 小僧の読み通りだ！ 北東の方からぐんぐん近付いているぜ！」

「聞いている通りだ。すぐにブリッジに来な」

「分かった」

ヨシユアは山猫号の中に入った。

山猫号　ブリッジ

「おう、来やがったか」

「……………」

「ジヨゼットはふてくされた顔をしていた。」

「状況は？」

「ヨシユアはその顔も気にせずドルンに首尾を聞いた。」

「ヘッ、おめえの読み通りだ。来な。こっちのディスプレイだ」

「ヨシユアが小型のディスプレイを覗き込んだ。」

「高度1560アージユ、時速21000セルジユの速度で北北東からリベール領に潜入……。高度・速度共に普通の船じゃないのは確かだぜ。おめえが付けた特殊レーダーがちゃんと効いているみてえだな？」

「いや、まだ分からない。帝国あたりの偵察艇かもしれないからね。キールさん、目視は？」

「……捉えた！映像をそつちに回すぞ！」

映像には赤い飛行艇が映っていた。

「……間違いない。今回のターゲットだ」

「へへ……これで舞台は整ったか。ゾクゾクしてくるねえ」

「おーし、おつ始めるか！小僧！心の準備はできてるだろうな！？」

「問題ない。僕が位置に付いたらすぐにでも始めてくれ」

ヨシユアがブリッジから出て行こうとした。

「あ……」

「ドルンさん、キールさん、それからジヨゼット……。今までありがとう。契約上の関係だったとはいええ、本当に感謝している」

「え……」

「へっ……」

「はあ！？」

「本当なら作戦が終わった後に言うべきかもしれないけど……機会がないかもしれないから今のうちに言っておくよ。それじゃあ、元気で」

「あいつ……」

「つたく……。最後の最後でそう来たかよ」

「……っ……！」

ジヨゼットは慌ててヨシユアを追いかけた。

「え……」

ヨシユアが外に出たところでジヨゼットに抱き締められた。

「最後の最後までホント可愛くないやつ！しおらしい顔で、なぐりが『今までありがとう』だよっ！そんなの聞いたってボクは嬉しくともなんともない！そんな言葉、ボクは欲しくない！」

「……ジヨゼット……」

「……約束、してよ。あんまり無茶はしないって……。必ず生きて

戻ってくるって……」

「………………。相手が相手だけに安請け合いはできないよ」

「……………」

「でも、これだけは約束する。たとえ、僕の目的が果たせなかったとしても……生きて帰って、いつの日か君たちに改めて礼を言おう」

「あ……………」

「……………それでいいかな？」

「うん…………。忘れるなよ！絶対に約束だからね！」

赤い飛行艇

「……………高度1559アージユ。北北東よりリベール領内に潜入。

このままヴァレリア湖上空まで針路を固定しろ」

「了解」

紅蓮の兵士が3人、航空していた。

「リベールの警備艇には気付かれなかったようだな。『ステルス機能』か…………。便利な装置を積んでいるものだ」

「まあ、そんな機能でもないと大騒ぎになるだろうからな。この船はともかく、あの化物が侵入した日には」

「ハハ、違いない」

その時、外から砲撃音が聞こえた。

「な……………！」

「敵襲か!？」

「うるたえるな！レーダーはどうした!？」

「レーダーに反応！4時方向から小型艇が接近！」

「データベース照合……………出た！帝国ライフォルト社製、『カプア

空賊団』所属《山猫号》！」

「空賊だと!？」

山猫号がギリギリまで赤い飛行艇に近付き、

「………………。よし…………！」

ヨシユアが山猫号から赤い飛行艇に鎖をひっかけて飛び乗った。

「やった…………成功だよ！」

「おお！やりやがったか！」

「よーし！俺たちもずらかるぞ！」

「空賊艇、離脱したぞ!？」

「どうする、追撃するか!？」

「いや…………放っておけ。王国軍の警備艇ならともかく、小物に構っている場合じゃない」

「そうだな…………」

「今は《グロリアス》の航路確保が優先だ」

「…………いったん帰投する。空賊どもに関してはカンパネルラ様に報告しよう」

「へへっ…………あっちも退きやがったか。何から何まで小僧の読み通りだったな」

「…………うん……………」

「ジョゼット、心配するな。あいつのことだ。きっと無事に戻って

くるね」

「うん……そうだよね。約束したんだもん……。ちゃんと帰ってく
るって」

第13章 絆の在り処(2)

遊撃士協会ポース支部

ギルドに戻ったアガットとティータはラヴェンヌ村で起きたことを話した。

「そっか……。そんな事があつたんだ」

「《剣帝》レーヴェ。とんでもなく大胆な男ね」

「ああ、まったくだ。そんな訳で、みすみす敵を見逃しちまってな……。すまん、弁解の余地もねえ」

「いや、その場合は見逃すのが正解じゃろう。墓地で騒ぎを起こすわけにもいかんからな。それにしても……。その『ハーメル』という名は妙に気になるのう」

「その名前、前に女王宮でロランス少尉と戦った時にも出てきた気がするのよね。クローゼ、何か知らない？」

「いえ……。残念ながら。たぶんお祖母さまは何かご存じだと思うのですが……。国家間の問題と言うからには教えて下さらないかもしれません」

「そっか……。オリビエはどう？エレボニアの村なんでしょ？」

「ふむ……。『ハーメル』か。それはまた奇妙な名前が出てきたものだね」

「奇妙？」

「『ハーメル』というのは帝国最南端にあつた村だが……。現在、その名前は帝国の地図には載ってないんだ」

「ええっ!？」

「載ってないって……。どーしてなんですか？」

「何年前に、山崩れがあつて、かなりの死者を出したそうだね。今では廃村となっているらしい」

「廃村……」

「……。そうだったのか」

「で、でも、かなりの死者が出たって……」

「軍が災害救助に出動したから詳しい話は知らないんだが……。一説では、全滅に近かったと言われているそうだよ」

「ぜ、全滅……」

「確かに、ひどい山崩れだと村が丸ごと呑み込まれることもあるらしい。『山津波』と言ったそうだよ」

「なるほど、言い得て妙ね」

「でも、それがどうしてリベールの女王様と將軍に関係してくるのかしら……」

「さて、今のところ全く見当も付かないねえ」

「……。まあ、今は気にすることではないでしょう」

「ふむ、わしの方から帝国のギルドに問い合わせたその辺りの事情を聞いておくか。まあ、『ハーメル』についてはそのくらいにしておくとして……。まずはお前さんたちに今回の報酬を渡すでしょう」
エステルは報酬を受け取った。

「今回の竜騒ぎは本当にご苦労じゃったな。まさに遊撃士協会の面目躍如といった感じじゃぞ」

「えへへ……そっかな？」

「だが、『実験』そのものは阻止できなかったから……。あんまり威張れやしねえさ」

「それに、これで王都を含めた5つの都市全てで『実験』が行われたことになるわ。次に《結社》がどう動くか、すぐに見極めないといけないわね」

「それなんじゃが……。お前さんたち、ここらで少しばかり骨休みをせんか？」

「へ……」

「骨休みって……どういうことだ？」

「そのままの言葉じゃよ。ルーアン地方から始まって立て続けに5つの事件じゃ。ここらで休んでおかんと身も心も疲れ果ててしまう

ぞ

「で、でも……」

「また連中が何か起こしたら俺たちが出向く必要がある。オチオチ休んでられねえと思うんだがな……」

「今回の竜の一件で王国軍の警戒も厳しくなった。その分、こちらに余裕ができたと考えてもよかるう。それに……どうやらクルツたちが目星を付けたらしいのじゃ」

その言葉に一同が驚いた。

「ええっ!?!?」

「目星というと……《身喰らう蛇》の拠点!?!?」

「うむ、数日中に確かな情報が入りそうじゃ。もし、連中のアジトが判明すれば一気に忙しくなるに違いない。じゃから休めるうちに休んでおいて欲しいんじゃよ」

「そっか……」

「ふむ、そういうことならお言葉に甘えさせてもらうべきだろう。コンディションの調整も遊撃士の仕事と言えるからな」

「確かに……」

「ここいらで軽く一休みも悪くねえか」

「フツ、いい感じに話がまとまってきたじゃないか。しかし、ご老人。骨休みを勧めるということは何か心当たりがあるのかな?」

「ふおふお。鋭いのう。実は、メイベル市長からいい物を貰っておるんじゃよ。竜事件の報酬とは別にな」

「市長さんから……いい物?」

「ずばり、南の湖畔にある《川蝉亭》の特別チケットじゃ。お前さんたち全員が3日ほどタダで泊まれるぞ」

「ほ、ほんと!?!?」

「おお……。さすがは名高きボース市長だ」

「ふふ……先輩らしい心遣いですね」

「えとえと、それって……。みんなでどこかに出かけてお泊まりするってことですか?」

「ふふ、そうよ。ヴァレリア湖畔にある眺めのいい宿屋さんでね。お酒も料理も美味しいし、舟遊びとかも出来ちゃうわよ?」

「わあ……………」

「ふむ……………そいつは中々良さそうだ」

「へッ、確かにあそこならいい気分転換にはなるかもな」

「疲れを癒すには最適でしょう」

「うんうん!どうせだったら思いっきり羽根を伸ばしちゃいませよ!」

「さてと、あたしたちは一足先に《川蝉亭》に行ってるからね」

シエラザード、オリビエ、ティータは先に《川蝉亭》に行き、他のメンバーは用事をこなしてから行くことにした。

「うん、分かったわ。チェックインの方はよろしくね」

「ルグラン爺さんが連絡したから、部屋が取れないことはねえだろ」

「はいっ、任せてくださいっ!」

3人は《川蝉亭》へと向かっていった。

「さてと、ギルドの掲示板を一応は確認した方がいいよね?ボース地方で、竜の騒ぎが収まっているかも気になるし……………」

「ま、爺さんがせっかくあんな風に言ってるんだ。程々にして湖畔に向かうぞ」

「それは確かに……………。うん、とにかく用事を済ませたらヴァレリア湖に向かいますよ!」

「はい!」

第13章 絆の在り処(3)

ヴァレリア湖畔

「お、ようやく来たみたいやね」

「あれ……!?!」

シエラザードたちと共にいたのは、あるうことかケビン神父だった。ど、どうしてケビンさんがこんな所にいるわけ!?!」

「いや、それには海よりも深い事情があつてやね」

「ここに来る途中、街道で出くわしたのよ。で、ついでに宿まで来てもらったわけ」

「街道の途中って……どうしてそんな所で出会うの?」

「はつきり言ってしまうと、目的は《琥珀の塔》の調査でな。実はオレ、ロレントでエステルちゃんと別れてから一通り《四輪の塔》を調べてたんや」

「四輪の塔を……!?!」

「つてことは……他の3つの塔も調べたのか?」

「ま、そういう事ですわ。おかげでこつちも竜騒ぎが完全にノータツチになつてしもて。ここらで情報交換しようつと、そう思つて参上した次第なんや」

「それは構わないけど……。えつと、それじゃあ早速ここで情報交換をする?」

「ああ、できれば夕食の時間がええかな。その方がお互い落ち着いて話をできるんとちゃう?」

「あ、それもそうね。……つて、ケビンさんもここに泊まるつもりなわけ」

「なはは、聞けばこつてわりと有名な宿やそうやんか?せつかくやからオレもエステルちゃんたちの休暇にご相伴させてもらおと思つてな」

「い、いきなりねえ。でもまあ、ケビンさんには何度もお世話にな

「つてるし……。みんな、どうかな？」

「あー、いいんじゃないかねえのか」

「ふむ、確かにこのあたりで借りを返しておきたいところね」

「えへへ、わたしも賛成です」

「フツ、ボクも異存はないよ」

「ふふ……。これも何かの縁でしょうし」

「ま、せっかくだから楽しくやるうじゃないか」

「私も構いませんよ」

「おおきに！お礼と言ってはなんやけど、まだ用があるなら付き合
うで。思う存分コキ使ってくれや」

「うーん、そうねえ。せっかくだけど、あたしたちもそろそろ荷物
を置いて休みたいかも」

「なんや、そうなんか。残念やな、せっかく身体でご奉仕できる
と思っただのに」

「まったくもう。調子いいんだから」

「クスクス……」

「よし、それじゃあ部屋に案内してもらおうぜ」

「本日は当館をご利用いただき、誠にありがとうございました。さ
つそくお部屋のご案内をさせていただきますね」

「うん、お願いします」

「まず、こちらが女性の方々のお部屋になります」

「わあ……。落ち着いた雰囲気のあるお部屋ですね……」

「ここ、あたしたちが前に通された部屋だったわね。空賊アジトに
潜入して結局泊まられなかったけど……」

「ふふ、そうでしたわね」

「フツ、ちなみにボクはベッドで一休みしたけどね」

「あれはシエラ姉に酔い潰されただけでしょーが」

「ふふ、今回は思う存分堪能させてもらいましょうか」

「こちらが男性の方々に使っていたたくお部屋ですが……。2人部屋ですので隣の2つの部屋と合わせてお使いください」

「あ、オレは飛び入りですから皆さんの都合優先で結構ですわ」

「ふむ、どうする？俺は何でもいいが」

「俺は1人でも構わんぜ」

「では、私はケビンさんと話したいことがあるので同室をお願いします」

「おつ、兄さんひよつとしてオレに興味ある？」

「そういうわけではありません」

「なんや、つれないな」

「フツ……。ならばボクとアガット君を同室にしてみらおうかな」

「……。ちよつと待て。なんで脈絡もなく俺を指名しやがるんだ？」

「ハツハツハツ。決まってるじゃないか。あの夜、村に残ったキミとティータ君の間にどんな事があったのか……。一部始終、懇切丁寧に教えてもらおうと思ってるね」

オリビエの頭の中では妄想がフル回転しているようだ。

「ふえっ？」

「なっ……！」

「なんて悪趣味なヤツ……。まー、あたしも少し興味があったりするけどね」

「で、でも……。ただお話したただけだよ？」

「そのお話っていうのが大事だったりするのよねえ。こちらも寝る前にじっくりと聞かせてもらっちゃおうかな？」

「あ、あう……」

「もう、2人とも……。あんまりからかったらティータちゃんが可哀想ですよ」

「では、ジンさんは1人と泊まっていたことになるんですが……」

「ああ、俺は構わんぞ」

「ふふ、では隣の2つの部屋にも案内させてもらいますね」

エステルたちは他の2つの部屋を見に行った。

「こ、こら！ 妙な所で話を切るんじゃないやねえ！」

第13章 絆の在り処(4)

川蝉亭 夕食時

「なるほど。ゴツツイ事があったもんや。まさか伝説の古代竜がリベールに棲息していたとはな。しかも《輝く環》について警告してどこかに飛び去ったときたか……」

エステルたちはボース地方で起きた竜騒ぎの顛末をケビン神父に話していた。

「うん、色々ありすぎて頭が処理しきれない感じかも。どうして竜が《輝く環》について口を閉ざしたのかも分からないし」

「実は、教会の聖典にこんな一節が存在してな……。『至宝授けし女神、聖獣を遣わして人の子らの行く末を見届けさせん』」

「『至宝』に『聖獣』……。それぞれ《輝く環》と《竜》に相当しそうですね」

「しかも『見届けさせる』という文句がポイントかもしれないね。ただ見守るだけで、手助けをしてくれるわけじゃないらしい」

「ヘッ、ケチくせえ話だぜ」

「いずれにせよ、これで《輝く環》が実在する可能性はかなり高くなった。オレが調べた事と合わせると色々と推測できると思うんやけど……」

「ケビンさんが調べた事って《四輪の塔》についてよね。何か分かったことでもあるの？」

「まあな。4つの塔の頂上にある用途不明の古代装置やけど……。あれが今、光が灯って動いとるんは知っとるか？」

「そういえば、琥珀の塔で魔獣退治をした時にも光ってたわね。でも、それが《輝く環》とどういう関係があるわけ？」

「これは、あのユリア大尉から教えてもらうたんやけど……。城の《封印区画》の最奥で巨大な機械の化物が現れる直前に妙な出来事があったそうやな？」

「あ、うん……。確か、《ゴスペル》が使われた直後、遺跡の照明が全部消えちゃって……。その後、警告の音が聞こえてから周りの柱が下に降りたのよね」

「警告の内容は 『第1結界の消滅』 と 『デバイスタワーの起動』 だったわね」

「そうそう、それです。で、目撃情報とも合わせて分かったんが……。4つの塔で装置が動き始めたのが、まさに《封印区画》で《ゴスペル》が使われた時間うちゅうことですわ」

「あ、あんですって〜!？」

「そ、それじゃあ、警告にあつた『デバイスタワーの起動』って……
「『第1結界の消滅』とは『封印区画の装置の機能の消滅』のこと、
『デバイスタワーの起動』とは『四輪の塔の装置の起動』、ということになりますね」

「ええ、それ以外に考えられへんと思います」

「ふむ、状況を整理すると……。グランセル城の地下遺跡には《第1結界》なるものを作りだす機能が備わっていた。だが、大佐に《ゴスペル》が使われてしまったことによって《第1結界》は消滅してしまつた」

「そして、その代わりに《デバイスタワー》が起動した……。ひよつとしたら《第2結界》と呼ばれるようなものを発生させるためかもしれません」

「《第2結界》……」

「へッ、第1があれば第2があるのも道理だな。問題は、その結界つてのがどういふ代物だつてことだが……」

「それなんやけど……。多分、《輝く環》の在り処を隠しておくよ
うな代物やと思う」

「そっか、《輝く環》は封印区画には存在しなかつた……。このりべールのどこかに隠されているって話だったわね？」

「そゆこと。そして、仮に結社の目的が《輝く環》の入手なら……
連中の『実験』とやらもその目的を遂行するための手段と考えた方

「がいいやろね」

「う、うーん……」

「《輝く環》、《ゴスペル》、《結社による実験》……。フフ、どうやら全てが繋がってきたみたいだね。そして、その絵を描いているのが《教授》と呼ばれる人物なわけか」

「うん……。そうね。竜の額に《ゴスペル》を埋め込んでボース地方を襲わせた張本人……。そして……。……。……。エステルは急に黙り込んだ。

「……お姉ちゃん？」

「なんや、どうしたん？」

「うん……。その《教授》なんだけど。ヨシユアが居なくなった原因を作った人物じゃないかと思うの」

「え……」

「それって……。5年前、あの子が先生に引き取られることになった原因を作った黒幕ね？」

「うん……。それから、リシャル大佐やクルツさんたちの記憶を操作した人物とも同じだと思う」

「なに！？」

「ふむ、確かに記憶操作の一件ははまだ解決されていないが……。どうしてそう思ったんだ」

「うん、あのね……」

エステルはヨシユアが消えた日の夕方、出会った人物のことを思い出せないことを説明した。

「そんなことが……」

「お前……。今まで抱えてやがったのか？」

「そういうわけじゃないけど……。……ゴメン、話すのが遅れたかも」

「でも……。間違いなさそうですね。その人が、様々な事件の元凶である可能性は高いと思います」

「ふむ、かなりエグい性格をした人物のようだねえ」

「ああ……。注意する必要があるそうだけ」

「あつと……。ゴメン、ティータ。せっかく遊びに来たのにイヤな話をしちゃったわね」

「うっん……。気にしないで、お姉ちゃん。ただ、どうしてその人はそんな事ができるのになって……。みんなにイヤな思いをさせてヨシユアお兄ちゃんを苦しめて……。わたし……。分からなくて」

「も、そんな歪んだやつ事なんか分かってあげる必要ないってば。ティータはティータらしくが一番！ね、アガット？」

「だ、だから！なんで俺に振りやがるんだ！」

「クスクス……」

「ふふ……。いいオチが付いたわね」

「……………」

ケビン神父は何も言わず、エステルたちの話を聞いていた。

「ん？どうしたの、ケビンさん？」

「いや……。何でもなくて。とりあえず、情報交換はこのあたりにしとこうか？せっかくの料理が冷めてしもうたら勿体ないし」

「うん、それもそうね」

「フッ、そういう事なら話は早い。思う存分、酒池肉林を楽しむとしようじゃないかっ！」

「あら、ホントにいいの？」

「……………ごめんなさい。無礼講くらいで許してください」

こうして……。エステルたちは束の間の休暇を楽しむこととなった。

第13章 絆の在り処(5)

川蝉亭 初日の夜

「いや、腹いっぱい食った。ここの料理はメツチャ美味しいな。そう思うやろ、レイン君」

「ええ、そうですね。お酒の方も良かったです」

「うんうん、ホンマ満足やわ。……で、いきなりやけど、話の方は？」

「本当にいきなりですね。あなたの方も私が何を聞くのか気付いているではありませんか？」

「……まあな。大方、オレの正体とか本当の目的といったところちやうか？」

「正解です。どうも、あなたの行動に不自然なところがあつてこの機会に聞かせてもらおうと思つたのです」

「………。君は相当キレる頭の持ち主みたいやな。本当はすでに見当がついてるんちやうか？」

「いえ……まだ全て分かつたわけではありませんよ」

「じゃあ、どの程度気付いてるん？」

「……あなたがただの星杯騎士団ではないことと、目的がただ単に《結社》の《輝く環》の入手の阻止ではないという事です」

「ふん……」

「どうですか、私の読みは？」

「いや、お見事！としか言いようがないな。その通りやで。オレはただの星杯騎士団やないし、目的もそれだけじゃない。なんで分かつたん？」

「あなたは以前、『新米の星杯騎士団』と言いましたね。新米の星杯騎士団が《結社》の調査に1人だけで派遣するとは考えられません。目的については、今日の夕食時、《教授》の話が出てきた時です。あなたがその話を聞いている時、何か心当たりがありそうな顔

をしていました。恐らくあなたの目的は……」

「ああ、それ以上はストップ！堪忍して、ホンマ。そうそう、君の想像通りやで」

「ご心配なく。このことは私の胸に留めておいて、誰にも話すつもりはありません」

「は、想像以上の人物やな、S級遊撃士、《剣皇》レイン・アクアライトつちゆう人はな」

「へえ、あなたも相当調べましたね」

「あら、あんま驚かんなあ。これじゃあ肩すかしくろうたみたいや」

「まあ、あなたの情報収集能力も優れたもののようにですから想像の範囲内でしたよ」

「そうか……」

「これ以上話をすると休暇に来た意味がありませんからね。このあたりにおきましよう。……お互い言えるのは『特定の人物に『執心』』といったところでしょう」

「ホンマその通りやで。お互い大変な目的を持ったもんや……」

第13章 絆の在り処(6)

日々の緊張から解放され、寝心地のいいベッドで爽快な朝を迎える朝……

午前中は、ボートを借りて湖上で水遊びを楽しみ……

お昼は、皆でランチを囲んだ後、腹ごなしの運動を楽しみ……

そして午後は、釣り糸を垂れながらゆったりと時間を過ごす……

楽しくも穏やかな時間はあっという間に過ぎていった。

川蝉亭 3日目の夕方

「は、遊んだ遊んだ？」

「えへへ……。とっても楽しかったあ」

「ふふ、心身共にリフレッシュできましたね」

「いや、お酒も飲まずに楽しめたのは久しぶりだわ」

「とか言っちゃって……あたしたちが釣りをしている間、果実酒とか飲んでなかった？」

「あら、あんな軽いの酒のうちに入らないわよ。ねえ姫様、ティータちゃん」

「あ、あはは……」

「ふふ……。コメントは控えておきますね。それにしても……イステルさんって釣りが本当にお上手なんですね」

「えへへ、そうかな？」

「うんうん！次々と釣っちゃうんだもん」

「ふふ、小さい頃からのこの子の趣味だからね。そういえば……ケ
ビンさんも好調だったわね」

「あ、うん。けっこう好きみたい。ロッド捌きとかもなかなか堂に
入ってたし。もう少し腕を磨けばあたしの良いライバルになるかも
しないわね」

「まったくもう……。すーぐ調子に乗るんだから」

「クスクス……」

「ふふ……。それにしても……。もうすっかり夕方ですね」

「あ……」

エステルは外に目をやった。

「……………」

そのままエステルは呆けるように外を見続けた。

「？」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「あ、うん……。あたし……。ちょっと外で散歩してくるね。夕食ま
では戻るから」

「そっか……。遅くなったら、あなたの分は山分けにさせてもらう
わよ？」

「あはは、分かってますって。それじゃあ、また後でね」

エステルは部屋の外へと出ていった。

「あ……。シエラさん、あの……………」

「大丈夫よ、テイータちゃん。できれば今はそっとしておいてあげ
て」

「もしかして……。ヨシユアさんの事ですか？」

「あ……」

「ふふ、よく分かったわね。そういえば、あの時も……。こんな風に
夕日が綺麗だったわね」

棧橋

「は〜……ほんと綺麗な夕焼けね〜。あの時と同じだわ……」
エステルは頭に空賊事件の時に泊まりに来た情景が浮かぶ。

「……………」
エステルは鞆からヨシユアのハーモニカを取り出した。

「空も水も夕焼けもあの時と同じなのに……。みんなと一緒にいて
すごく楽しいのに……。やっぱり……。全然違うよね」

深くため息をつくエステル。

「あーあ、ダメだな……。自分のペースで追いかけるってせつかく
答えを出したのに……。これじゃあ、ヨシユアにもお母さんにも笑
われちゃうよね。……。そうね。夢の中で、一度だけ間違わずに吹け
たし……。また、練習してみようかな？」
そう言つて、ハーモニカで『星の在り処』を吹き始めた。

吹き終わると同時に、拍手の音が聞こえた。

「え……………」

背後を振り返ると、ケビン神父が立っていた。

「へへ、いいモン聞かせてもらったわ」

「ケビンさん……………」

「しっかし、誰が吹いとるのかと思って来てみれば……。まさかエス
テルちゃんだとは思わへんかったわ。釣りとスニーカー集め以外に
も意外な趣味を持つてるんやな？」

「エへへ……。あたしのキャラじゃないかな？」

「や、そんな事ないで。まー正直、釣りの方が得意そう見たいやけ
ど……………」

「あはは、正直に下手って言っちゃっていいわよ。自分でもあんま
り向いてると思ってるないし」

「うーん、確かにつたない所もあったけど……。音楽で大事なのは

ハートや。さっきの演奏、エステルちゃんの気持ちはばっちり伝わってきたで」

「そ、そっか……………」

「隣、行ってもええか？」

「え…………。あ、うん、どうぞ」

ケビン神父はエステルの隣に立った。

「…………ひとつ、聞きたいんやけど。エステルちゃん、カレシに会ってどないするんや？」

「え…………」

「聞けば、それなりの事情で君らの前から姿を消したそうやな。再会できても、そんな相手にどんな言葉をかけられるのか…………考えたこと、あるかな？」

「……………。ひっぱたいても連れ戻すって思い込んだこともあるけど…………。さすがに、そんな無茶が本当にできるとも思えないし…………。正直言うと、あたしの言葉はヨシユアに届かないかもしれない」

「それが分かっても…………カレシを追いかけらんやね？」

「うん…………。ヨシユアの背負った事情とかあたし自身の至らなさとか色々なことを考えたんだけど…………。結局、いくら考えてもヨシユアに何て言ったらいいか思いつかなかったの。だから　その言葉は会ってから見つけることにする」

「へ…………」

「だって、あたしの想いはあたしだけのものじゃないから。ヨシユアと一緒にいる間に自然と育ってきたものだから。だから…………ヨシユアに会えたら初めてそれは浮かんでくると思う。あたしだけが伝えられるヨシユアへの言葉を　」

「……………」

「だから、会えないうちからウジウジ悩むのは止めにしたの。えへへ、さつきみたいに感傷にひたることはあるけど…………。それは乙女の特権ということだ」

「……はあ、参ったなあ。こっちの考えていた段取りがメチャクチャやんか」

「へ……？」

「？感傷にひたるエステルちゃん。？オレの鋭いツツコミに戸惑い悩むエステルちゃん。？オレからのナイスフォロー。？エステルちゃん、立ち直る オレの株、赤マル急上昇！ ってな必勝の段取りを用意して挑んだんやけど……。？、？をいきなりすつ飛ばされてしまうたわ」

「あはは、ゴメンゴメン。でも、ケビンさんってけっこう立派な神父さんよね。あたしみたいに悩んだり困ったりしている人をいつも気にかけてくれるし……」

「ガクツ……。まあ、確かにそれも神父のお仕事なんやけど……。エステルちゃんには半分以上、プライベートな理由で気にかけてるんやけどなあ」

「え……。？それってどういう」

「……ちよっと待った」

ケビン神父が急にエステルの話をさえぎった。

「????どうしたの、いきなり？」

「いや、向こうの方からボートが来とるんやけど……。なんかその上で人がぶっ倒れてるみたいや」

「へ！？」

エステルたちのいる栈橋でボートが止まった。

「ク、クルツさん！？」

意外だったのは、その上で倒れていたのはクルツだった。

第13章 絆の在り処(7)

川蝉亭

「応急治療はしたけど、かなりのケガを負つとるな。しばらくは動かさん方がええやろ」

「そつか……」

「まさかクルツのやつがここまでやられるとはな……。一体、何があつたんだ？」

「確か、クルツさんのチームはもう少しで《結社》の拠点を突き止められるって話だったよね。という事は、アネラスさんやカルナさんも一緒だったはず……。あ……。！」

「……まずいな」

「一応、宿の通信器でルグラン爺さんに連絡したわ。すぐに各地のギルドと王国軍にも連絡が行くはずよ」

「で、でも……。！下手をしたらアネラスさんたちが……。！」

その間にアネラスたちが結社にやられてしまう可能性があるだろう。「ええ……。分かつてる」

「俺たちも出来る限りのことをやっといた方がいいだろう。問題はクルツを乗せたボートがどこから流れてきたかだが……」

「ふむ、確かヴァレリア湖には島や岩場は無かったはずだね？」

「はい、水深が深いので……」

「ならば、湖岸のどこかから流れてきたのは間違いない。その場所を特定するのはなかなかやっつかいそうだが……」

「うん……。かなり大きな湖だもんね。軍の警備艇にも搜索を頼めるといいんだけど……」

「う……」

エステルたちが話している時に、クルツがうめき声をあげた。

「クルツさん！？」

「こ……。ここは……。エステル君……。それにアガットたちも……」

……
「どうやら目が覚めたみたいだ。」

「ここはボース地方南部、湖畔の《川蝉亭》だ。あんた、ボートに乗ってここまで流れてきたんだぜ」

「そ……そうか……。たしか他のメンバーたちと《結社》の拠点に乗り込んで……。それで……」

そこからクルツは黙り込んでしまった。話そうにも話せないようだ。
「ク、クルツさん……?」

「まさか……」

「クツ……何てことだ……。1度ならず2度までも……記憶を奪われてしまうとは……」

「や、やっぱり……」

「どうやら《教授》とやらに記憶を封じられたみたいだねえ」

「た、頼む……ジンさん！以前やってもらったように『気』を自分に当ててくれ……。このままではグラッツたちが……!」

「……あれはあくまで対症療法にすぎんからな。暗示によって封印された肝心の記憶は蘇らないはずだ。それに、今の傷ついたあんたには負担が重すぎる」

「だ、だが……」

「……それやったらオレが何とかしてみますわ」

ケビン神父が自ら名乗りを上げた。

「へ……」

「……君は……?」

「七耀教会の《星杯騎士》、ケビン・グラハムいますわ。アネラスちゃんから話は聞いてへんですかね?」

「おお……君が……」

「で、でも、ケビンさん。暗示の解除なんてできるの?」

「まー、深層心理にまで喰い込んだエグいになると無理やけど……一時的に封じられた記憶なら何とかなると思うで?まだ、掛けられて時間も経ってへんみたいやし」

「そうなんだ……」

「ふむ、教会に伝えられるという門外不出の法術ということかな？」

「ま、そんな所ですわ。多少、精神的なダメージを喰らうかもしれ
へんですけど……それでも構わへんですか？」

「問題ない……是非ともお願いする」

「承知」

ケビン神父が星杯の紋章が入ったバッジを構えた。

「空の女神の名において聖別されし七耀、ここに在り」

ケビン神父が呪文を唱えるとバッジから光が放たれた。

「（わわっ……）」

「（わぁ、キレイ……）」

「識の銀耀、時の黒耀　その相克をもって彼の者に打ち込まれ
し楔、ここに抜き取らん……」

呪文を唱え終わると、一際光が大きくなり消えた。

「……ッ……！」

クルツが苦しそうに呻く。

「大丈夫、クルツさん!？」

「ああ……大丈夫だ……。霧が晴れたよ
うに色々……思い出してきた……」

「霧が晴れるのに任せてゆっくり心を落ち着けて下さい。その向こ
うにある暗闇は覗き込んだりせえへんように」

「ああ……分かった。ふふ、精神的なダメージというのがどうい
う物か分かったよ……。あれは……私のエゴというわけか」

「あら、分かります？」

「これでも瞑想などをたしなむ方なのでね……。……」

クルツが目を閉じたまま心を落ち着けた。

「……もう大丈夫。必要な情報は思い出せた……」

「ホ、ホント!？」

「ふむ……見事な術だ」

「ヘッ、ただの不良神父じゃなかったみてえだな」

「ふふ……良くやってくれたわね」

「なはは、どういたしまして。それでクルツさん。必要な情報つちゆうのは？」

「ああ……。《結社》の拠点はヴァレリア湖北西の湖岸……。そこに彼らの研究施設が秘密裏に建造されていた……」

「け、研究施設!？」

「そんな物をいつの間……」

「ヴァレリア湖北西といえば人里離れた場所ですけど……。それも警備艇による搜索が行われているはずですが……?」

「奴等は特殊な方法で施設を隠しているようでした……。上空にダミー映像を展開して空からの搜索を防ぐような……」

「あ、あんですって!？」

「そりやまた……。とんでもない技術のようだねえ」

「げ、原理的には可能ですけど、ちよつと信じられないです……」

「ふむ……。幻術かもしれませんね」

「そして地上に関しては……。接近すると、周囲に濃霧が発生するようになっているらしい……」

「霧……」

「ロレントの事件を思い出すな」

「我々のチームは霧を抜けて研究施設に潜入したんだが……。《執行者》と名乗る手練たちの待ち伏せにあった……。完全に隙を突かれて我々は総崩れとなつてしまい……。ボートに辿り着いたところで私は気を失ってしまった……。くっ、仲間を残して自分だけ逃げ延びることになるとは……」

「クルツさん……。安心して! アネラスさんたちは絶対に助け出してみせるから!」

「エ、エステル君……?」

「ヘッ、そこまで分かっているならいくらでもやり様はあるだろう」

「そうね。軍の支援も期待できそうだし」

「後は俺たちに任せておきな」

「あ、ありがたい……。すまない……。よろしく頼む……」
クルツは気を失った。

「ちょ、ちよつと!?!」

「大丈夫、気を失っただけや。しかし……。一刻の猶予もないみたいやね」

「うん……。！王国軍が動く前にあたしたちも動かなくちゃ！」

「エステル、言わなくても分かっているとと思うけど……」

「うん……。分かってる。今までの任務とはケタ違いに危険ってことよね。でも、いずれこういう形で《結社》とは対決することは覚悟していたし……。それが早まっただけだと思う」

「エステル……。ふふ、短い休暇だったわね」

「へッ、充分だろ。せいぜい腹を括るとしようぜ」

「だが、全員で乗り込んだらかえって目立ってしまうだけだ。ここは数を絞るべきだろう」

「うん……。そうね。ねえ、みんな。あの時みたいに……。あたしが選んでもいいかな？」

「あの時という……。封印区画の搜索のことね」

「ああ、それで構わんだろう」

「ま、俺を選ばなくても恨みつこなしにしてやるぜ」

「フツ、ボクは選んでくれると確信しているけどね」

「回復役が必要ならぜひ連れて行ってください」

「わ、わたしも機械の事とかきつとお役に立てると思う……!」

「みんな……」

「あー、水差して悪いんやけど。まずはオレをメンバーに選んでもらえへんかな？」

「へっ……」

「どうやらアネラスちゃんたちは《結社》の手に落ちたみたいや。助けた時、さつきみたいな術を掛けられていたらどないする？」

「あ……」

「なるほど、道理だな」

「仕方ねえ……。お前はメンバー確定だ」

「へへっ、おおきに」

「もう、お礼を言うのはこっちの方だってば。それじゃあ……残り
のメンバーを選ぶわね」

エステルはジン、クローゼ、レインを連れてヴァレリア湖へと向か
った。

第13章 絆の在り処(8)

ヴァレリア湖

真夜中、エステルたちはボートで《結社》の拠点を目指していた。

「ふう……静かね。そろそろ向こう岸が見えてもおかしくないけど……」

「ふむ……方向はあっているはずだ。焦る必要はないだろう」

「は、それにしてもお月様がキレイやねえ。こういう夜は、本当なら彼女を連れてデートでもしたいところや」

「また呑気なことを……。でもケビンさんってちゃんと彼女いるんだ？」

「フツ、これでも大陸各地の街に1人ずつ恋人候補がおってな……」

「候補ってことは要するにフリーなわけね」

「ガクツ……もう少し引つ張らせてや」

「エステルさんのツツコミも厳しくなりましたね」

「ふふつ……」

「……でも、ケビンさんってどうして1人で行動してるの？《星杯騎士団》ってそんなに人手不足なんだ？」

「ま、今回の件については色々と事情があってな……。結果的にオレ1人が派遣されたんやけど……。状況次第では他の連中もこっちに来るかもしれない」

「そうなんだ……。えつと《星杯騎士団》って古代遺物の回収がお仕事だとか言ってたよね？」

「正確には、調査・管理・回収やね。そのうち回収に関しては主に個人所有のブツに関してや。稼働するアーティファクトを個人が勝手に所有することは教会によって禁じられてるからな」

「でも、どうして取り締まる必要があるわけ？」

「アーティファクトの種類は色々なものがあるんやけど……。それがどのような原理で作動するのか誰にも分からへん。そのくせ、使い

方次第では途轍もない力を發揮してしまふ。そんな代物を個人が持った時、どういふ事が起こりがちやと思ふ?」

「う、うーん……。どうなっちゃうのかしら?」

「大抵の場合、魅入られてしまふ。力の誘惑に逆らえずに口クでもないことに使ふんや」

「そ、それってほんと?」

「残念ながら歴史的にも証明されてる事実で……。エステルちゃんたちもダルモア市長は知つとるやろ?」

「あ……」

「確かに、あの時の市長はとても残忍だった気がします。操られていふよりも歯止めをなくしているような……」

「絶対的な力を所有することは人に歪んだ自信を与え、自制心をなくさせてしまふ……。それを未然に防ぐというのも《星杯騎士団》の使命でな。ま、綺麗事ばかりやないけど」

「そ、そうなの?」

「ま、遊撃士協会にだって公に出来ないことはあるやろ?それと同じようなもんや」

「う、うーん……。確かに否定はしないけど」

エステルたちが話していると、突然、視界が真っ白になった。

「あ……!」

「どうやら敵の拠点に近付いてきたようだな……」

「なら、このまま真っ直ぐ進んでいくのかなさそうや」

「うん……。待ち伏せの可能性もあるから気を引き締めて行きましょ」

ボートの速度を上げて一気に進んだ。

湖畔の研究所

しばらく進むと霧が晴れて研究施設が見えた。

「……抜けたみたいやね」

「よし……到着ね」

ボートを岸に停め、岸に降りた。

「とりあえず、この辺りには人の気配は無さそうだけど……」

「油断は禁物や。とにかく上の建物を慎重に調べるしかないやろ」

「それに、相手が相手だ。危険だと思ったら迷わずここまで撤退するぞ」

「うん……そうね！」

エステルたちは準備を整え、研究施設に向かった。

エステルが研究施設の扉を調べると、固く閉ざされていた。

「ダメか……」

「どうやらこの扉は中からロックされているようです」

「別の入口を探すしかなさそうやね」

研究施設1階

裏口から潜入したエステルたち。その中では驚くべき物が作られていた。

「な、なによここ……」

「何ともケツタイな場所に出たもんやな……」

「ふむ……。人の気配は無さそうだが……」

しかし、人の代わりに自動の哨戒機が出てきた。

「こ、こいつら!?!」

オーバーマベット

「まさか……人形兵器!?!」

「話は後です！先に破壊しましょう！」

「は、ビックリした。でもこれって……《結社》の人形兵器ってこと？」

「ああ……。アーネンベルクに現れたのと同じ、現代の導力技術で造られたヤツや」

「でも、不思議ですね……。あれだけ騒いだのに人が集まる気配がありません」

「確かに……。……。アネラスさんたち本当にここに捕まってるのかな」

「多分、こいつらは自動巡回中の人形兵器やろ。とにかく他のエリアも調べるしかなさそうやね」

1階 最奥

「あれ……！？」

部屋に立っていたのはグラッツだった。

「グラッツさん！」

「……………」

しかし、グラッツは後ろを向いたまま振り向かなかった。

「よかった、無事だったんだ！クルツさんに事情を聞いてあたしたちも来たんだけど……………」

「待った……様子が変やで」

「へ……………」

グラッツは振り向くとエステルたちに向かって剣を抜いた。

「……………」

「あ……………」

「……やられたか！」

「そんな……！」

「……やるしかなさそうですね」

何とかグラッツを止めたエステルたち。

「はあはあ……。さ、さすがに……。かなり手強かったわね」

「……灯台で操られていた《レイヴン》の方々と同じですね」

「さてと……」

ケビン神父はクルツの時と同じように暗示を解除した。

「ぐっ……」

グラッツは

「……悪い……。迷惑をかけたみたいだな」

「グラッツさん……！」

「どうやら状況は分かっているようだな？」

「ああ、顔は思い出せないが何者かに意識を奪われて……。ここで新たな侵入者を撃退するように命じられたんだ……」

「例の《教授》ね……。アネラスさんとカルナさんがどこにいるか知ってる？」

「いや……。別々に捕まったからな。たぶん、俺と同じようにどこかに捕まってるはずだが……。くっ……」

グラッツは立とうとして膝を落とした。

「だ、大丈夫！？ほら、肩を貸して。崖の下にボートがあるからそこまで案内するわ」

「だ、大丈夫だ……。建物の構造は分かっているから1人でも脱出できる……。これ以上、お前たちの足を引っ張りたくはねえしな……」

……。代わりと言っちゃあ何だが、カルナとアネラスを頼むぞ……」

「グラッツさん……。うん……。任せといて！」

グラッツは再び立ち上がると部屋を出ていった。

「だ、大丈夫かな……」

「今はあの兄さんを信じて先に進むしかないで。あと2人残つとんのやる？」

「うん……」

「急ぐ必要があるそうだな……」

2階 最奥

「あ……！」

そこでカルナがグラッツと同じく操られていた。

「……」

「やっぱりカルナさんも……」

「やるしかなさそうだな……」

「さ、さすがに苦戦させられたかも……」

「よし、オレの出番やな」

ケビン神父がカルナの暗示を解除した。

「くっ……。あ、あんたたち……こんな所までよく来てくれたねえ……」

「カルナさん、大丈夫!？」

「ああ……大丈夫さ……。それよりも……他の連中は見つけたかい？」

「さっきグラッツさんを解放したばかりよ。アネラスさんはまだだけど……」

「そうかい……。例の《執行者》どもには出くわさなかったのかい？」

「ううん、人形とは何体も戦っているけど……。そもそも人の気配

「がぜんぜん無いみたいなのよ」

「妙だね……。他にも兵士や研究員が何十人もいたはずなんだが……。もしかしたらもう……。引き払った後かもしれない」

「ふむ……。油断は禁物だがあり得るかもしれない」

「あたしは何とか1人で脱出できる……。アネラスのこと……。一刻も早く見つけておくれ」

「うん……。任せて！」

カルナは立ち上がると部屋を出ていった。

2階 とある部屋

その部屋には、《封印区画》で出てきた《環の守護者》トロイメライがあった。

「あ、あの時の機械獣!？」

「は、確かに城の地下にあったのと同じタイプやねえ」

「ど、どうしてこんな物がここに……。ていうか、あんな化物がどうして2体もいるわけ!？」

「それは分らんが……。どうやら予想以上にやばい施設だったようだな」

3階 開発室

ケースの中には大きな《ゴスペル》があった。

「え……。これって新型ゴスペルじゃない？」

「どうやら間違いないようですね」

「……。新型ゴスペルはこの施設で造られてたんだ」

「まさか、《ゴスペル》がリベールで製造されとったとはね」

もう一方のケースの中には、『杭』の形をした装置があった。
「え……これってもしかして……」
「ふむ、ヴァルターが使っていた『杭』と同じ物のようだな」
「……あの装置までここで造ってたんだ」

3階 最奥

「……！」
エステルたちの予測通り、アネラスがいた。
「やっぱりアネラスさんも……！」
「とりあえず、いったん抑えるしかないで！」

「ア、アネラスさん……。なんかメチャクチャ強くなってるんですけど……」
「よし……起こすとするか」
ケビン神父がアネラスの暗示を解除した。
「あうっ……。えへへ……。エステルちゃん……。それにケビンさんも……助けに来てくれてどうもありがとね……」
「アネラスさん……。身体の方は大丈夫？」
「う、うん……。バッチリだよ……。それよりも……カルナさんたちは……？」
「大丈夫や、全員解放した。アネラスちゃん最後まで最後までわけてや」
「そ、そうなんですか……。良かったあ……。ゴメンね、エステルちゃん……。せっかく一緒に戦おうって約束したのに、こんな事になっ
て……」

「うづん、気にしないで。アネラスさんたちのおかげでこの場所だつて分かったんだし。充分、拠点探索のお仕事を果たしてくれたと思うわ」

「エステルちゃん……。そ、そうだエステルちゃん！私……。伝えなくちゃいけない事があつたんだ……。！」

「へ……。なに？」

「あのね……。あのね……。に、逃げている最中にヨシユア君を見かけたの……。！」

「！……！」

「あ……。！」

「……。そいつは……。！」

「見間違えとかではないのですか？」

「うづん……。私が兵士に追い詰められた時、いきなり現れて包围を崩してくれて……。見覚えのある服と黒髪だったから間違いないと思うんだけど……。！」

「……。！」

「エステル……。ちゃん？」

「……。あ。うん、ゴメン……。そ、それでアネラスさん！ヨシユアはどこに行ったの！？」

「分からない……。わたしもその場は逃れたけど結局は捕まっちゃったから……。でも……。ひよつとしたら屋上に向かったのかもしれない」

「屋上？」

「この建物……。屋上に飛行艇の発着場があるみたいなの……。ここにいた兵士と研究員はそっちに向かったみたいで……。！」

「そっか……。分かった！」

「アネラスちゃん。1人で脱出できるか？」

「うん……。大丈夫です。この先もまだ……。何かあるかもしれない……。みんな……。くれぐれも気を付けてね！」

アネラスは立ち上がると部屋を出ていった。

「……」
「まさか、ヨシユア君がここに来とったとはな……。とにかく屋上を指すとするか！」
「……うん！」

4階 最奥

部屋に入ると人が1人倒れていた。その人物は……。ヨシユアだった。
「ヨシユアっ!？」

エステルたちはヨシユアの元に向けよった。

「ヨシユア!ねえ、ヨシユアってば!な、なんでこんなに身体が冷たいのよう……。起きて……。起きてっばあ！」

「そ、そんな……」

「……」
「……」
「……」
「……」

「ヨシユア!？」

「……エ……。エステル……。どうして君が……。こんなところに……」

「よ、よかった……。無事……。だったんだ……。待ってて、すぐに手当てを……」

「!いけません、エステルさん！」

レインがエステルを突き放してヨシユアの剣を受け止めた。

「くっ……」

「えっ……。!？」

「ヨ、ヨシユア……」

エステルやクローゼはヨシユアの反応に驚いた。

「これは……。ヨシユアさんではありません……」

「……」

ヨシユアが顔を上げると、顔は真っ白だった。

「!!!!」

「人形……!」

「小癩な……!」

さらに、どこからともなく同じ人形が2体現れた。

「はあはあ……」

「くっ……さすがにキツイな……」

突然、奥から拍手が聞こえてきた

「あ……!」

暗闇の中に3人の人物がいた。

「クスクス……」

「……………」

「はは、偽物と気付くのが少しばかり遅すぎたようだね。今回のゲームは私の勝ちにさせてもらおうよ」

男性が指を鳴らすと、目の前にガラスの壁が現れ、閉じ込められてしまった。

「なっ……!」

「ヤバイ……!」

部屋にガスが放たれ、エステルたちの意識が遠のいていった。

「あ……」

「……こいつは!」

「クッ……意識が……」

「簡単すぎるゲームだったが、君の反応はなかなか楽しかった。お礼と言っては何だが……面白い場所に招待させてもらおうよ」

「うー……」

「むっ……」

「あ……」

「くっ……」

しばらくして、3人が起き上がった。

「え、えらい目に遭ったわ……。エステルちゃん、大丈夫か」

「！しまった……！」

「……どうしましたか？」

「エステルちゃん！？お、おい、冗談やろ……」

周りを見渡してもエステルの姿はなかった。

「皆さん、こちらに階段があります！おそらく、上に行ったと思います！」

「！……！」

研究施設 発着場

ケビン神父たちが発着場に出た時、飛行艇が出る瞬間だった。

「しもた……！」

「あ……！」

「逃がすものですか……！」

レインが剣を抜き、ワイスマン教授たちに飛び掛かった。しかし、剣帝レーヴェに止められた。

「見苦しいよ、S級遊撃士レイン君。今回は私の勝ちなのだよ。エステル君は私が預かるう」

「くっ……」

飛行艇が高度を上げ、そのまま飛び去っていった。

「エステルちゃん……！」

ケビン神父の声はむなしく夜空に消えていった。

第13章 絆の在り処(9)

「……………ここ……………は……………」

「……………エステル……………」

どこからともなく声が聞こえてきた。

「ヨシユア!？」

振り返るとヨシユアが立っていた。エステルはヨシユアに向かって走ったが、いくら走ってもヨシユアの元に行けなかった。

「な……………なんで……………?」

「いいんだ……………。……………もういいんだよ……………」

すると、ヨシユアの右腕が取れた。

「ああつ……………!」

「元々……………僕は壊れた人形だから……………」

次には左腕も外れた。

「人間には戻れないから……………」

ついには、ヨシユアの身体が完全にバラバラになってしまった。

「だから……………もういいんだよ……………」

「……………あ……………」

エステルはヨシユアの頭を拾い上げた。

「ありがとう……………。さよならエステル……………」

ヨシユアの目が閉じられた。

「いや……………いや……………。いやああああつ!」

「……………あ……………」

エステルはベッドの上で目を覚ました。どうやら夢だったらしい。

「ビックリした……………。エステル、大丈夫?」

ベッドの脇にはレンが立っていた。

「レン……。よ、よかった……。夢だったんだ……」

「うふふ……。怖い夢を見ちゃったのね？」

「うん……。もう最悪な夢……。だいたい、あんな人形なんか出てくるから変な夢を」

そこでエステルは飛び上り、身構えた。

「……。ちよ、ちよっと！どうしてレンがこんな所にいるのよっ!？」

「うふふ……。驚くタイミングがズレてるわよ。エステルったら相変わらずノンキなんだから」

「わ、悪かったわね、ノンキで……。って、ここ……」

エステルは周りを見渡した。

「ここにレンがいるのは別におかしい事じゃないわ。だって、レンたちの新しい拠点なんだもの」

「新しい拠点……」

「うふふ……。その窓から見てみれば？」

「……。エステルはレンに言われた通りベッドから降りて窓から外を見た。

「な……!」

その光景にエステルは驚愕した。なぜなら、巨大な赤色の飛空艇の中にいて空中にいたからだ。

「……。 (パクパク) 」

「《紅の方舟》グロリアス……。これ一隻で、一国の軍隊を圧倒することが可能よ。うふふ、なかなか面白そうなおモチャでしょう？」

「あ、あんたたち……。こんな物を持ち出して何を……」

「やあ、お目覚めのようだね」

部屋のどこからか男性の声が聞こえてきた。

「ようこそ、エステル君。寝心地はいかがだったかな？こんな場所に連れて来られてさぞかし混乱しているだろう。だが、我々は君に対して危害を加えるつもりはない。安心してくれて結構だ」

「……。 どうだろう、一度ゆっくり話してみるつもりはないかね？結社の

こと、我々の目的、そして共通の友人について……。色々な疑問に答えてあげられると思うよ」

「……いいわ。聞かせてもらおうじゃない」

「よろしい、待っているよ。レン、エステル君を案内してあげてくれたまえ」

「うふふ、分かったわ。それじゃあ、エステル。《聖堂》に行きましょ」

「《聖堂》……?」

「この艦の最上階にあるなかなかステキなお部屋よ。そこで《教授》が待ってるわ」

「……………分かった。案内してもらおうじゃない」

「うふふ、そんなに緊張しなくてもいいわ。多分、エステルにとってもきつと悪くない話だから」

「へ……………どういこと?」

「お楽しみは後でね。ほら、レンに付いてきて」

エレベータに乗って最上階に着いたエステル。

「うふふ……………ここが教授のいる《聖堂》よ。ここから先はエステル1人で行くといいわ」

「……………ねえ、レン」

「なあに?」

「研究所で、ヨシユアの人形を操っていたのはレンなのよね?」

「ええ、そうよ。《教授》に頼まれたんだけどなかなか面白かったでしょ?」

「はあ……………。……………どうやらあんたも《結社》の被害者みたいね」

「え……………?」

「……………ま、今はいいか。それじゃあ行ってくるわね」

「うふふ、行ってらっしゃい」

聖堂

聖堂ではワイスマン教授がパイプオルガンを弾いていた。エステルが来るとその手を止めた。

「ようこそ……《紅の方舟》グロリアスへ。久しぶりだね、エステル君」

「アルバ教授……。やっぱりあなただったんだ。さっき声を聞いてようやく思い出せたわ」

「フフ、さすがは《剣聖》の娘といったところかな。軽くとはいえ、封鎖された記憶を自力で思い出してしまふとはね」

「……」
「ちなみに本当の名前は、ゲオルグ・ワイスマンという。《身喰らう蛇》を管理する《蛇の使徒》の一柱を任されている」

「《蛇の使徒》……。《結社》の最高幹部ってどこ？」

「まあ、そのようなものだ。さてと　先ほど言ったように私は君の疑問に答える用意がある。何か聞きたいことはあるかね？」

「……聞きたいことがあり過ぎて何から聞こうか迷うんだけど……」

「焦ることはない。ゆっくりと考えたまえ。よかつたら一曲、弾かせてもらおうか？」

「結構よ。ていうか、そんな趣味を持つてる人とは思わなかったんだけど……。貧乏な考古学者ってというのは完全に嘘っぱちだったわけね」

「フフ、貧乏はともかく考古学を研究してるのは本当さ。ちなみにパイプオルガンは教会にいた頃、嗜^{たしな}んでいたものでね。あの帝国人ほどではないが、それなりの腕前だっただろう？」

「きよ、教会にいた……？」

「いわゆる学僧というやつさ。《盟主》と邂逅したことで信仰の道は捨ててしまったが……。その時に学んだ古代遺物の知識は今もそれなりに役立つている。そう、今回の計画においてもね」

「……。大佐をそそのかしてクーデターを起こさせたのも……。各地で《ゴスペル》の実験をして色々な騒ぎを起こさせたのも……。全部……。あんただったわけね」

「その通り 全ては《福音計画》のため」

「『福音計画』……。あの研究所のデータベースにもそんな項目があったけど……。要するに《輝く環》を手に入れる計画ってわけ？」
「手に入れるというのはいささか誤った表現だが……。まあ、そう思ってもらっても構わないだろう」

「《輝く環》って何？女神の至宝って言われているけど具体的にはどういうものなの？」

「《輝く環》の正体に関しては現時点では秘密にさせてもらおう。

せつかくの驚きを台無しにしたくはないからね」

「驚きって……」

「計画も第3段階に移行した。もう少して、その正体は万人に遍くあまね知れ渡ることになる。フフ……。その時が楽しみだよ」

「……………」

「そして《環》が現れたその時……。我々は、人の可能性をこの目で確かめる事ができる」

「人の可能性……。《レグナート》もそんな事を言っていたような……………」

「ほう、あの聖獣からそこまでの言葉を授かったか。ふむ、あなたがちお父上の七光りだけではないようだね」

「お世辞は結構よ。何よ……。色々質問したってはぐらかしてばかりじゃない」

「これは失礼……。そんなつもりじゃなかったのだが。だが、君が一番聞きたい質問にははっきり答えられると思うよ」

「……………」

「おや、何をそんなにためらっているのかな？ 恐れることはない。勇気をもって訊ねてみたまえ」

「………………。ヨシユアは…………どこにいるの？」

「フフ…………それは私にも分からない。どうやら空賊たちと一緒に何かを画策しているようだが…………。いまいち動きが掴めなくてね。今のところ、生きているのは間違いないだろう」

「そ、そうなんだ……………」

「ヨシユアの能力は、隠密活動と対集団戦に特化されている。そのように調整したのは私だが予想以上の仕上がりだったようだ。フフ…………どこまで頑張ってくれるか楽しみだよ」

「あんた……………」

「ああ、そんなに怖い顔をしないでくれたまえ。私の元に預けられた時、ヨシユアの心は崩壊していた。そんな心を再構築するなど私にも初めての試みだったのだ。その成果を気にかけるのは研究者として当然とは思わないかね？」

「………………。あの生誕祭の時、ヨシユアに何を言ったわけ？」

「封じた記憶を解除して真実を教えてあげただけだよ。君の家に引き取られた彼が無意識のうちにスパイとして《結社》に情報を送っていたこと…………。そして、彼の情報のおかげでリシャール大佐のクーデターが成功し、我々の計画の準備が整った事をね。そのご褒美として、改めて《結社》から解放してあげたんだ」

「………………。やっと分かった…………。ヨシユアがどうして…………あの夜…………姿を消したのか…………。どうしてあんな顔で…………さよならって言ったのか……………」

「いや、それについてはさすがに遺憾に思っているよ。自分を取り戻したヨシユアが君たちの前から姿を消すとはね。そのまま素知らぬ顔で君たちと暮らしていくといいと勧めておいたのだが…………。フフ、親切心が仇になったかな？」

「よくも…………そんな事が言えるわね…………。そんな道を選ぶしかない

ようヨシユアを追い詰めたくせに……。あんな顔をして……。ハーモ
ニ力をあたしに渡して……。さよなら……。エステルって……。」「
エステルは武器を構えた。

「全部、全部ッ！あんたのせいじゃないかああ！」

そして、ワイスマン教授に殴りかかったが、剣帝レーヴェがワイスマン教授の前に現れ、エステルを弾き飛ばした。

「あつっ……」

「《剣帝》レーヴェ……。い、一体どこから現れたの……」

「……最初からここにいた。お前が気付かなかっただけだ」

「やれやれ……。何とも品のない振る舞いだ」

男の声が聞こえてきたかと思うと、怪盗紳士ブルブラン、痩せ狼ヴァルター、幻惑の鈴ルシオラたち《執行者》が現れた。

「やれやれ、私の挑戦をあれだけ潜り抜けたのだ。無様な姿を晒すのはやめてほしいところだ」

「クカカ、そう言うなよ。《白面》に殴りかけられるなんざ並の度胸じゃできねえはずだぜ」

「ふふ、腕はともかく度胸だけは大了なものね。それとも鈍いだけなのかしら」

「あ……う……」

エステルは思わず後ずさりした。

「ウフフ……君が《剣聖》のお嬢さんか」

「フフ、初めましてかな。執行者N.O.O 《道化師》カンパ

ネルラさ。以後、ヨロシク頼むよ？」

「くっ……」

「もう、みんなでエステルを脅かしたらダメじゃない」

「レン……」

「うふふ……心配しなくてもいいわ。別にエステルを殺すために集まったわけじゃないから」

「へ……」

「ねえ、教授。早く例の話を一ステルにしてあげて？」

「フフ……そうさせてもらおうか」

ワイスマン教授が数歩前に出た。

「どうだろう、エステル君。《身喰らう蛇》に君も入ってみる気はないかね？」

「へ……。……ごめん。聞き違いちゃったみたい。もう一度、言ってくれない？」

「君も《身喰らう蛇》に入ってみる気はないかと言った。まずは《執行者》候補としてね」

「あ、あ、あ……あんですってー!？」

「フフ、そんなに驚くことではないだろう？ 考えてもみたまえ。君が《結社》に入ればヨシユアも意地を張らずに戻ってくるとは思わないかね？」

「あ……」

「エステルの望みはヨシユアと再会することよね？ 《結社》に入りさえすればその望みはすぐにも叶うわ。うふふ……考えるまでもないわよね」

「……で、でも……。……あたし……」

「フフ、ゆつくりと考えたまえ。この後、我々はしばらく艦を留守にする必要があつてね。帰ってきたら、その時にでも返事を聞かせてもらおうか」

ワイスマン教授が指を鳴らすと、紅蓮の兵士が2人現れた。

「申し訳ないが、それまでは君の自由は制限させてもらうよ。足りないものがあれば彼らに希望を伝えるといい」

第13章 絆の在り処（10）

エステル監禁室

部屋ではエステルが1人思い悩んでいた。

「（《結社》に入ればヨシユアと再会できる……。確かにその可能性はかなり高いのかもしれない……。それに、何も本当に仲間になる必要はないよね……。？仲間になったフリをして内情を探ってもいいんだし……。あたしの演技力じゃ厳しいけど、ここに閉じ込められるよりは……。）」

エステルは椅子から立ち上がり、窓から外を眺めた。

「（でも……。何だか違う気がする……。それは……。あたしのやり方じゃない）」

「……邪魔するぞ」

ドアがノックされ、剣帝レーヴェが入ってきた。

「あ……。）」

「フ……。そう警戒するな。先ほどのような考えなしの行動をしない限り、お前に危害が及ぶことはない」

「悪かったわね、考えなしで。なによ、あんたたち、どこかに出かけるんじゃないの」

「俺はただの留守番だ。出かけるのは教授と他の《執行者》たちになる」

「……。一体、何をするつもり？」

「それが知りたければ教授の誘いに応じたらどうだ？一通りの情報が分かるだろう」

「……。）」

「フフ……。答えは出ているが迷いがあるといったところか？」

「！……！」

「俺個人の意見としては、お前は到底《結社》に向いているとは思えない。能力的にも、性格的にもな」

「うぐっ……。そうはつきり言われるとけっこう傷付くんですけど……」

「まあ、能力については可能性は秘めているだろう。だが、性格に関しては……《結社》と関わるにはお前の闇はあまりに小さすぎる」
「闇……」

「《結社》に属する者はみな、何らかの闇を背負っている。俺、教授、他の執行者……。そして無論、ヨシユアもな」

「……。ねえ《剣帝》……。あなたとヨシユアって一体、どういう関係なの？」

「ヨシユアはずっとロランス少尉のことを気にしてた。顔は分からないのに誰だか知っているみたいで……。それでいて正体を知ろうと必死になっていた気がする」

「フツ……。無理もない。あいつは記憶の一部を教授によって封じられていた。《結社》の手を離れた瞬間から具体的な情報が思い出せなくなるよう暗示をかけられていたはずだ。自分が《結社》でどんなことをしていたか覚えていても関係者の名前は思い出せない……。そんなジレンマがあっただろう」

「あ……」

「幼い頃の記憶も同じ。恐らく、カリンは覚えていても俺の記憶は曖昧になっていたはずだ」

「そっか……。それで……。って、『カリン』ってどこかで聞いたことがあるわね？」

「……。……」
剣帝レーヴェはエステル隣の隣に寄った。

「カリン・アストレイ。俺の幼なじみでヨシユアの実の姉だ。10年前に亡くなった」

「!?!?!」

「お前の持つハーモニカは元々はカリンの物だった。それを形見としてヨシユアが受け取り……。それをお前が受け取ったわけだ」

「ヨシユア……お姉さんがいたんだ……。……
……。あの……。どうして……。カリンさんは……。お姉さんは亡くなった
の?」
「……。それを知ったらお前は真つ白のまままで居られなくなる。ヨシ
ユアや俺たちの居る闇の領域を覗き込むことになる。その覚悟はあ
るか?」
「……。……うん、教えて。覚悟があるかど
うかはちょっと分からないけど……。あたしは……。ヨシユアの辿っ
てきた軌跡をどうしても知っておきたい。その気持ちは本当だから」
「……。いいだろう」
剣帝レーヴェが過去のことを話し始めた。

あれは10年前……。俺たちのいたハーメル村がまだ地図にあった頃
のことだ。

ハーメルは小さな村で……。子どもが少なかったこともあって俺
たちはいつも一緒に過ごしていた。俺はいずれ遊撃士になることを
夢見てヒマを見つけては剣の練習をし……。それをカリンと小さなヨ
シユアが眺めているのが日課になっていた。

……。練習が終わった後、俺とヨシユアは、カリンの奏でるハーモニ
カの旋律に耳を傾けた。カリンは何でも吹けたが、俺たちの一番の
お気に入りは一昔前に流行った『星の在り処』だった。そんな日が
いつまでも続く……。そう俺たちは信じて疑わなかった。

村が襲われたのは、そんなある日のことだった。王国製の導力銃を
携えた黒装束の一団……。彼らは村を包囲した上で住民たちをなぶ
り殺しにしていた。ただ一人の例外もなく、年寄りから赤子に至
るまで。一息で殺された者はまだ幸せだったかもしれない。……。女
たちの運命はさらに悲惨だった。

俺たちは　その地獄の中を必死に逃げた。家族とみんなの断末

魔を聞きながら『逃げる！』という声に押されてただひたすらに村外れを目指した。そして、村外れに出たところで俺は追っ手を攪乱かくらんすることにした。すぐに追いつくと言い聞かせてカリンとヨシユアを先に行かせた。

だが……襲撃者たちは想像以上に用意周到だった。逃げた村人を始末する者を待機させていた。

俺が追い付いた時、その場は奇妙に静かだった。喉を撃ち抜かれた男の死体……。銃を握って呆然とするヨシユア……。肩から背中を切り裂かれながらヨシユアを抱き締めるカリン……。カリンは……まだ辛うじて息が残っていた。

なぜかカリンは……穏やかで満ち足りた表情を浮かべていた。愛用のハーモニカをヨシユアに託し、ヨシユアのことを俺に頼んで……。そして　　静かに逝った。

「……………。……………なん……………で……………。……………どうして……………」

そんな事が……………」

「帝国軍がリベールに侵攻したのはその直後のことだ。王国製の導力銃を携えた襲撃者によって起こされた国境付近での惨劇……。それは侵略戦争を始めるにはあまりにも格好の口実だった」

「……………そんな……………。本当にリベールの兵隊が……………？」

「軍に保護された俺たちは最初そのように聞かされていた。だが数ヶ月後……帝国軍の敗退で戦争が終わった時、俺たちはまったく別の説明を受けた。村を襲った者たちは猟兵団くずれの野盗たちだった。そして、決して襲撃のことを口外しないように俺たちを脅して……。軍は、土砂崩れが起きたと発表し、ハーメルに至る道を完全に封鎖した」

「ちよ、ちよっと待って！？なんでわざわざ嘘をつく必要があるわけ？それじゃあまるで……………」

「クク……。全ては帝国内の主戦派が企てたりベールを侵略するた
めのシナリオだったというわけだ。戦争末期、その事が露見し、帝
国政府は慌てふためいたという。なりふり構わず停戦を申し出、首
謀者たちを悉く処刑じゅくごすることで事件を無かったことにした。これが
『ハーメルンの惨劇』の真相だ」

「……」
「そんな日々の中……ヨシユアの心は完全に壊れた。姉の死、親の
死、隣人の死、初めて人の命を奪ったショック、そして欺瞞きぼんに満ち
た世の中……。6歳の子どもの心が壊れるには充分すぎるほどの出
来事だった」

「……」
「多分、その先のことはヨシユアから聞いているだろう。心が壊れ
たヨシユアはハーモニカ以外に興味を無くし、次第に痩せ衰えてい
った。そんなヨシユアと俺の前にあのワイスマンが現れて……。俺
は彼にヨシユアを預けて《身喰らう蛇》に身を投じた。そしてその
2年後……。教授に調整されたヨシユアも俺と同じ道を辿ることに
なった」

「……」
「これが闇だ。エステル・ブライト。お前とヨシユアの間
にどんな断絶があるのか……。ようやく理解できたか？」

「……。うん。やっと、ヨシユアが居な
くなった本当の理由が見えてきた気がする」
「なに……？」

「教授の誘いは今ここで断らせてもらうわ。あたしは絶対に
《身喰らう蛇》には入らない。《結社》が好きか嫌いかそういうの
とは関係なく……。あたしがヨシユアを追い続ける限り、絶対にね」

「……」
「せっかく仲間に誘ってくれたレンには申し訳ないけど……。ま、
謝れば許してくれるよね？」

「フツ……。おかしな娘だ。今話を聞いて逆に迷いを吹っ切るとは

な。どうやら、ただ《剣聖》の娘というわけでは無さそうだ」

「そ、そう？よく分からないけど……。そういうあなたこそただヨシユアの昔の仲間ってだけじゃなかったわけね。お兄さんの存在だったんだ」

「……。誤解のないように言っておくが俺があいつの兄代わりだったのは10年前までだ。今の俺にとって、あいつは排除すべき危険分子に過ぎない」

「え……」

「教授はヨシユアを泳がせて楽しんでいるようだが……。俺の考えは教授とは異なる。いずれ近いうちに俺自身の手で始末するつもりだ」

「ちょ、ちよつと！どーしてそうなるのよ！？カリンさんに……。ヨシユアのお姉さんに頼まれたんでしょっ！？」

「俺は俺の、選んだ道がある。その道を遮るものは如何なるものも斬ると決めた。たとえそれがカリンの願いであってもな」

「そんな……」

その時、《グロリアス》のどこかが開く音がした。

「あ……」

赤い飛行艇が5隻、飛んでいった。

「あれって……」

「教授と他の連中だ。計画の第三段階がいよいよ実行に移される」「だ、第三段階って……」

「フツ……。お前がそれを知る必要はない。事が成ったら、父親の元に返してやることもできるだろう。それまではせいぜいここで大人しくしているがいい」

剣帝レーヴェは部屋を出て行くこととした。

「ちょ、ちよつと！？」

「言っておくが……。逃げようなどと考えるなよ。地上8000アージユの高みだ。どこにも逃げ場などないぞ」

それを言い残して剣帝レーヴェは部屋を去った。

「………………。逃げようなどと考えるな、か。そう
言われたらかえってやってみたくするのが人情よね。幸い、教授や
レンたちは出かけちゃったみたいだし……。よし……そうと決まれ
ば！」

エステルは部屋の隅々を確認した。そして、窓の所で立ち止まった。

「………………。タイミングが命だけどそれさえ見極
められれば……。油断させるために2時間ほど大人しくして……。

…………。うん！試してみる価値はありそうね」

エステルは懐からハーモニカを取り出した。

「…………。お姉さんの形見の品だったなんてね。ヨシユアのバカ……そ
んなもの簡単に渡さないでよ」

第13章 絆の在り処（11）

数時間後

「交替の時間だぞ。小娘の様子はどうか？」

エステルの監禁室の前で見張っていた強化猟兵のもとに交替の猟兵が現れた。

「はは、大人しいもんだ。いくら遊撃士とはいえ、所詮は子どもと
いうことだな。恐くてベッドで震えているんだろっさ」

「フン……。ガキの見張りで留守番とはな。まったく、つまらん任
務だ。俺も機動作戦に参加したかったぜ」

「そうボヤくなよ。レオンハルト様の命令なんだから」

その時、部屋の中から何かを叩く音が聞こえてきた。

「……………ん？」

「なんだ、この音は？」

強化猟兵はドアを叩いた。

「おい！ いったい何をしている！？」

そして、ガラスか何かが壊れる音が響いた。

「おい、まさか……………」

「脱走か！？」

2人は部屋の鍵を開けて中に入った。

「や、やられた……………」

「ば、馬鹿な！ ここをどこだと思っている！ あの娘、自殺でもする
つもりか！？」

窓から下を見下ろしたが、エステルの姿はなかった。

「………………。駄目だ、落ちたかもしれん……………」

「おいおい、勘弁してくれよ……………。レオンハルト様になんて言い訳

をすりやいいんだ？あのクソガキが……余計な面倒を起こしやがって！」

「だ〜れがクソガキですって？」

エステルが窓の上から現れ、猟兵の1人を足で吹っ飛ばした。

「き、貴様っ!？」

「甘いわよ、オジサン！」

猟兵の銃弾をかわし、棒で猟兵を壁に叩き付けた。

「ぐはっ、ゲホゲホ……」

「ふふん。遊撃士をナメないでよね。だいいち、失礼が過ぎるわよ？乙女をクソガキ呼ばわりなんて」

「ひ、人違いだ……。俺はそんな風に呼んでないぞ……」

「あれ、そうだったっけ？まあいいや、オジサンも同罪。しばらくオネンネしてなさいよね」

エステルは猟兵の頭を思いっきり棒で叩いて気絶させた。

「……う〜ん……」

「さ〜とと……。すぐに増援が来るだろうし、とっとと逃げるとしますか。何とか脱出方法を見つけないと……」

エステルは拳を握りしめ、心の中で叫んだ。

「（あたしは諦めない……。もう一度ヨシユアに……。あのバカに会うまでは……。絶対に諦めないんだから!）」

グロリアス 甲板

「ああっ……!」

エステルが出た所は、甲板の上だった。

「マズったなあ……。つい甲板に出ちゃったみたい。それにしても……馬鹿馬鹿しいほどの大きさね」

改めて《グロリアス》の大きさに驚くエステル。

「脱出するためにはパラシュートを探るか飛行艇を乗っ取るしかない

い……。とにかく先に進まなくちゃ！」

エステルが甲板の上を進んでいると、下の階から兵士がやってきた。

「いたぞ！」

「しまった……！」

慌てて引き返そうとしたが、

「くっ……」

すでに包囲されていた。

「フッ……ここまでだよだな」

「さすがS級遊撃士、《剣聖》カシウスの娘か。こんな状況で脱走とは恐れ入る」

「……………」

「抵抗しても無駄なことは分かっているはずだ。大人しく投降するがいい」

「はは、無様だな。エステル・ブライト」

4人に包囲されて追い詰められているエステルの元にもう1人の兵士がやってきた。

「……………」

「フッ、この状態では僕のことから分からないか。仕方ない。特別に顔を見せてあげよう」

兵士が仮面を取った。

「へ……………！？」

「フフ……。ようやく思い出したようだね。こんな所で僕と会えるとは夢にも思っていなかっただろう？」

「えっと……………見覚えはあるんだけど。どちらさま……………だっけ？」

その言葉に青年がキレた。

「ダルモア市長の元秘書、ギルバードだ！自分が逮捕した人間くらいちゃんと覚えていたまえ！」

「だ、だって意外過ぎるわよ！第一あんた、王国軍に引き渡されたはずでしょ！？なんでこんな所にいるわけ！？」

「フツ、クーデター事件の時、混乱のスキを突いて脱走してね。その後、《結社》に拾われて忠誠を誓うことになったのさ」

「た、たくましいというか諦めが悪いというか……。そんな格好してるけど、まさか戦ったりするわけ？」

「僕が戦ったらおかしいか？フツ、秀才の僕ではあるが、これでも文武両道なのでね」

「でも灯台で、特務兵に撃たれてものすごい悲鳴を上げてたし……。あんまり戦いとかには向いてないんじゃないかなって」

「う、うるさいッ！《結社》に加わってから僕は戦闘強化プログラムを受けた！身体能力は大幅に強化され、最高レベルの戦闘技術も習得した！遊撃士風情が勝てると思うなよ！」

ギルバードが銃を構えた。

「やれやれ……」

「仕方ない……少し付き合おうとするか」

「さあ……エステル・ブライト。跪いて許しを乞うがいい。そうすれば許してやらないこともないぞ？」

「そりゃどうも。嬉しくって涙が出てきちゃう。でも悪いんだけどあたし、諦めが悪いのよね」

エステルが棒を振り回した。

「う……」

「《執行者》ならともかく雑魚なんかに負けるもんですか。さあ

かかって来なさいよっ！」

「バ、バカな……。これだけの人数を相手に……」

「はあはあ……。遊撃士の力、思い知った！？」

「さすが《剣聖》の娘……。少々見くびっていたようだ」

「…………どうやらリミッターを解除する必要があるそうだな」

倒された4人の兵士が一斉に立ちあがった。

「はは、驚いたかい？我々は《結社》の技術力で身体能力を強化されていてね。常人より遥かにタフなのだよ」

「くっ…………」

「…………間に合ったか！」

その時、エステルの背後から1人の兵士がやってきた。

「苦戦しているようだな。俺も助太刀させてもらうぞ」

「はは、その必要はないさ。しぶとい小娘だが屈服するのは時間の問題だ。君はそこで眺めていたまえ」

余裕面をかますギルバード。

「…………あなたに言ったんじゃないよ」

「へ…………」

やってきた兵士が双剣を構えた。それを見て他の4人の兵士が慌てた。

「…………遅い」

4人の兵士は一瞬で切り捨てられた。

「な、な、なんだあつ!？」

「…………え…………」

「な、なんだよお前!？どういうつもりなんだ!？」

「悪いけどあなた…………向いてないと思うよ」

「ぶぎゃー!」

兵士はギルバードを思いつきり殴り飛ばした。

「………………………………」

「…………まったく。どういうつもりなんだ」

兵士が仮面を取ると黒髪が現れた。

「正遊撃士になったのに相変わらず無鉄砲とはね…………。あの場で意地を張るメリットが一体どこにあるっていうんだ」

「…………あ…………。あはは…………ヨシユアだ…………。えっと…………夢じゃないよね?」

「夢だつたらどんなに気楽でいいだろうけどね……。……どうやらそんなに都合よくは行かないみたいだ」

「え……」

「フフ……ようやく姿を現したか」

奥からやってきたのは剣帝レーヴェだった。

「……久しぶり、レーヴェ。僕が潜入していたことを予想していたみたいだね」

「お前の能力を考えれば充分ありえる話だからな。一体、どんな手段を使った？」

「この船が来る直前に航路確保の偵察艇を狙った。《執行者》もいなかったからわりと簡単に潜入できたよ」

「……教授が方舟を呼び寄せることまで読んだか。《執行者》としてのカン是完全に取り戻せたようだな」

「おかげさまでね。いつレーヴェたちに発見されるかヒヤヒヤさせられたけど」

「フツ、お前の隠形を見破れる者はそうはいない。だが、隠形というものは一度認識されたら終わりだ」

剣帝レーヴェが剣を構えた。

「お前は最大の武器を失った。この《剣帝》相手にいったい何をするつもりだ？」

「……………」

「ちょ、ちょっと……！念のために言っておくけどあたしだって動けるんだから！いくらあなたが強かったってそう簡単には……」

「……下がって、エステル。レーヴェは強い。僕と君を合わせたよりも」

「う……………」

「それが分かっているながらお前はこの場に現れたわけだ。別にその事を甘いと言つつもりはないが……。ならば、どうしてお前はその娘の前から姿を消した？」

「……………」

「あ……」

「守るなら守る。切り捨てるなら切り捨てる。そう徹底しろと俺はお前に教えたはずだな？」

「うん……そうだね。教授の調整が終わった直後……初めての訓練で教えてくれた」

「本当にその娘が大事なら、お前は消えるべきではなかった。罪悪感に苛まれながらもそばに居続けるべきだった。お前がそうしなかったのはただの逃避　欺瞞にすぎん」

「分かってる……。レーヴェに言われなくてもそんなの分かっているさ……」

「……」

「ヨシユア……」

「でも……だったらレーヴェはどうなの……？　本当なら、僕だけが払うべき代償だったはず……。なのに《結社》に入って《剣帝》なんて呼ばれて……。どうして今も教授なんかに協力しているのさ……」

「……」。俺が教授に協力するのはお前の件と

は一切関係ない。あくまで俺自身の望みのためだ」

「レーヴェの望み……。それってやっぱりカリン姉さんの……？」

「復讐してもカリンが戻ってくるわけではない。だから俺は……この世を試すことにした。それが教授に協力する理由だ」

「この世を試す……」

「さて……お喋りはここまでだ。お前の選択肢は3つある。娘と共に投降するか。娘を守ってここで果てるか。娘を見捨てて一人逃れるか。さあ　選ぶがいい」

「ヨ、ヨシユア……」

「……。悪いけど、4つ目の選択肢を選ばせ

てもらおうよ」

「なに……」

突然、《グロリアス》が大きく揺れた。

「なっ!?!」

「これは……」

「……導力機関に細工させてもらった。放っておいたらこの船は海の藻屑と化すだろうね」

「あ、あんですって!?!」

「……やってくれたな。まさか認証が必要な機関部に侵入するとは……」

「22基のエンジン全てに異なる仕掛けを施している……。教授やレンたちがいない今、解除できるのはレーヴェだけだ」

「計画を阻止するための最後の切り札というわけか……。それをこのタイミングで切ってしまうという意味……。その欺瞞からいつまで逃げるつもりだ?」

「……っ」

「フフ、今度会う時までには答えを用意しておくがいい。楽しみにしているぞ」

剣帝レーヴェは戻っていった。

「……」

「あの、ヨシユア……。あたし……。あたし……」

「……話は後だ。脱出用の飛行艇を一隻確保しておいた。この先の階段を降りて船倉の格納庫を目指そう」

「あ……。うん……。分かった」

第13章 絆の在り処(12)

格納庫

「す、すごい……。船の中にこんな大きな発着場があるなんて……」

「《結社》の誇る戦闘空母、《紅の方舟》グロリアス。12隻の飛行艇を格納することが可能だ」

「と、とんでもないわね……」

「脱出用に確保した船がある。一番奥の格納庫だ」

「うん、分かった！」

「うふふ……。遅かったじゃないか」

一番奥の格納庫に行ったところで、《道化師》カンパネルラが現れた。

「あ、あんた……!？」

「……カンパネルラか」

「つれないなあ、ヨシユア。レーヴェとだけ話して僕には何の挨拶もなしかい？」

「君が船に残っているとは思わなかったからね……。僕の動きを読んでいたのか？」

「あはは、僕はこれでも『計画』の見届け役だからね。他の連中よりも色々気付くことが多いだけさ」

「……」

「ふふ、それにしても……。5年ぶりに会ったら君もずいぶん変わったねえ。なかなか男前になったじゃない？」

「そういう君は全く変わっていないんだな。その外見のまま歳を取っていないみたいだ」

「うふふ、お肌の手入れは毎日欠かしていないからねえ。君もよく

女装するらしいし、いい化粧品を紹介しようか？」

「あーもう、じれったいわね。ここで待ってたってことはあたし達と戦うつもりでしょ！？さっさと構えなさいよ！」

「あはは、威勢のいい女の子だな。ヨシユアの彼女っていうからどんな子かと思つてたけど……なかなかお似合いなんじゃない？」

「か、彼女って……」

「おっと、彼女というのは空賊の女の子なのかな？モテモテだね、ヨシユアきゅん？」

「……………」
「エステルが目が厳しい。」

「…………… 戯言はそのくらいにしてほしいな。どうしてジヨゼットのこ
とまで知っているのかしらないけど……………」

ヨシユアが武器を構えた。

「君の戦闘力は僕と同じくらいのはずだ。それでもやり合つつもり
かい？」

「あはは、そんなつもりはないよ。さっきも言ったように、僕は『
計画』の見届け役だね。積極的に君たちを捕まえる義務はないんだ」

「……………」
「ふーん、そうなんだ。だったらどうしてこんな所で待ってたわけ
？」

「うふふ、そりゃあ勿論、君たちに挨拶するためさ。でも、ただサ
ヨナラじゃあまりにも芸がないからねえ。君たちの脱出劇を少し
ばかり盛り上げてあげようと思つたんだ」

カンパネルラが指を鳴らすと、エステルたちの元に銃弾が飛んでき
た。

「な、な、な！？」

目の前に現れたのは機械兵器だった。

「高機動飛行人形、『ペイルアバッシュ』！もうロールアウトして
いたのか！」

「かくして再会した2人の前に新たな障害が立ち塞がるのでした。ああ、少年少女の運命やいかに！」

「あはは、やるじゃない。ヨシユアは当然だけど、お姉さんの筋も悪くないね」

「あ、あんたね……。悪ふざけも大概にしなさいよ！」

「怒らない、怒らない。さて、出番が終わった道化師は退場しようかな」

「!?!」

「うふふ……。それじゃあ2人とも。近いうちにまた会おう」
道化師カンパネルラは炎に包まれて消えた。

「き、消えた……。幻術の一種だ。気にするほどじゃない。それよりも早く」

「おい、本当にこっちに来たのか!?!」

「ああ……。間違いない!」

後ろから兵士の話し声が聞こえてきた。どうやら追いついてきたらしい。

「エステル、急いで!」

「う、うん!」

エステルたちは確保しておいた飛行艇に乗りこんだ。

「扉をロックして。すぐに船を発進させる」

「わ、分かった!」

「（起動キー認識……。認証コード入力……。……よし！）」

ヨシユアは飛行艇に導力を伝わらせた。

「わわっ……………」

「遠隔操作でハッチを解放する。すぐに発進するから席に座って」

「……………うん！」

「お、おのれ……………！」

「撃て！絶対に逃がすな！」

兵士たちが追い付いた時にはハッチが解放される時だった。そして、そのまま船はハッチから発進した。

「お、落ちるっ！？」

「大丈夫、すぐに安定させるから。……………よし！」

「くっ……………。このまま逃がすものか！」

「我々も飛行艇で出るぞ！」

「わわっ……………。これってレーダーよね。光が3つ、近づいてきてるわよー！」

「ああ、追っ手だ。何とかして撒く必要がありそうだな」

「ヨシユアって……………飛行艇の操作ができたんだ？」

「一通りはね。ただ、この船には武装が積まれていないんだ。あま

りいい状況じゃない」

「そっか……。って、なんでわざわざ武装がない船にしたの？」

「……この船だけ整備中でセキユリテイが甘かったんだ。緊急の事態だったから選んでいる余裕がなくてね」

「緊急の事態って……。あの……。ひよっとして……。あたしが《グロリアス》に捕まっちゃったこと……。？」

「……。……。お喋りは終わりだ。揺れるから気を付けて」

突然、エステルたちの船に向かって銃弾が撃たれる音がした。

「わわわっ……。？」

「くっ……。まずいな」

「追撃してきているヤツ、なかなか上手いわね……」

「《結社》の強化プログラムで操縦技術を修得したんだろう。応用は利かないけれど一方的な展開になると手強い」

「そっか……。でも、応用が利かないってことは何かアクセシデントが起これば」

その時、外で一際大きな銃弾の音がした。

「あ、当たった!？」

「いや……。この船じゃない!」

エステルが外をのぞくと、空賊団の船、《山猫号》がいた。《山猫号》が銃弾を撃ち込み、敵の飛行艇を撃墜していた。

「あ、あれって!？」

「《山猫号》……。どうして?」

「……。ヨシユア!そこにいるのはヨシユアだよね!？」

スピーカーから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「（この声……）」

途端にエステルが不機嫌になった。

「ああ……ここにいて！どうして君たちがこんな所にいるんだ！？
とつくにリベールを発つたと思ったのに……！」

「へへ、あんたが困ってないか兄貴たちが心配しちゃってさ。それ
であのデカブツの様子を遠くから伺っていたんだ」

「へへ、よく言うぜ。必死な顔で頼んできたのは誰だったかなぐつ
と」

「キ、キール兄！」

「ま、俺たちも《結社》には色々と借りがあるからな。リベールを
発つのは借りを返してからにするぜ」
カプア空賊団の3人だった。

「……そうか……。ありがとう、助かるよ」

「へへっ……せいぜい感謝しなよね！」

「しかし、さつきから見ると反撃してないみたいだな。何か問題
でもあるのか？」

「武装を外した船しか調達できなくてね。ちょっと困っていたんだ」

「そうか」

「ど、どうしよう……」

「……よし、こうなったらこのまま二手に分かれるぞ！一隻だっ
たら振り切れるな？」

「うん……問題ない」

「おーし、女神の加護を！」

「ヨシユア……気を付けてよね！」

第13章 絆の在り処（13）（前書き）

今回で「第13章 絆の在り処」が終了します。如何だったでしょうか？

第13章 絆の在り処(13)

数十分後

「エステル、レーダーは？」

「うん……もう光は消えたみたい。完全に振り切れたみたいね」

「そうか……」

「……」
2人の間に沈黙が続いた。どちらもどう声をかけていいのか分からないようだ。

「え、えつと……。あの空賊たち、けっこう気のいい連中だったみたいね。まさかあのタイミングで助けに来てくれるなんて……。すごく見直しちゃったわ」

「そうだね……。契約上の関係だと割り切っていたけど……人と人の関係はそう単純じゃないらしい」

「あはは……今さら何を言ってるんだか。顔を突き合わせてれば仲良くなったり、ケンカしたり、色々とあるわよ。それが人の付き合い合いでしょ？」

「ああ……。でもそれは、僕の生きてきた世界では当たり前じゃなかった」

「あ……」

「殺すか、殺されるか。奪うか、奪われるか。僕は君と出会ったまでそんな事ばかり繰り返し返してきた」

「で、でも……。お姉さんとレーヴェと一緒にいて幸せだった頃もあるのよね……？」

「……レーヴェが話したのか。……。……。……。その記憶はあるけどまるで他人事みたいなんだ……」

「え……」

「心が壊れた時……僕はハーメルンの思い出は自分の物じゃなくなつた。人であることを辞めて人形になったからだと思う」

「姉さんが死んだ時の記憶もはつきりと覚えてはいるんだ。あの時、僕と姉さんは待ち伏せしていた男に襲われた。男は僕を殴り飛ばして……姉さんの上にのしかかった」

「……ッ」
「幼い僕は、それが意味することは分からなかったけど……それで、も嫌な感じがして男の背中に掴みかかっていた。もみくちゃになった拳銃、すぐに弾き飛ばされたけど……。いつの間にか、僕の手には男の銃が握られていた」

「……」
「思えば、あの時から僕には人殺しの才能があったんだろう。教わりもしないのに銃のセーフティを外した僕はためらうことなく引金を引いた。喉に穴を穿たれた男は不思議そうな顔をしてから口から血を吐いてうずくまった。そこで僕は、ようやく自分が人を撃つたことに気付いた」

「……」
「でも、男はまだ死んでいなかった。血走った目でヒュウヒュウと喘ぎながら軍刀を抜いて躍りかかってきた。獣に襲われた時のように僕は身を竦めて目を閉じたけど……衝撃はなく、柔らかいものにぎゅっと抱きしめられていた」

「……」
「目を開いた時、そこには微笑む姉さんの顔があった。いつの間にか男は倒れ……呆然としたレーヴェがいた。レーヴェに支えられた姉さんはハーモニカを僕に渡して……そしてゆっくりと目を閉じた」

「……」
「……よく覚えているだろう？でも、こんな風に話しても僕はあんまり哀しくないんだ。他人の日記を読んでいるような……そんな不思議な違和感しかない。そしてそれは……君と一緒にいる時も同じだった」

「……え……」

「君の暖かさに触れて確かに僕は変わったと思う。君と共にいることに喜びを覚え、君を愛しく思うようにもなった。だけど僕は、どこかそれを他人事のように感じていたんだ」

それは多分……本当の僕が感じていたんだと思う。虚ろで空っぽな……できそこないの人形みたいな僕が。

ルーアン地方　メーヴェ海道

砂浜に降り立ったエステルとヨシユア。

「……お別れだ、エステル。もう僕のこととは追いかけて欲しくない」
ヨシユアはすぐさまエステルから別れようとした。

「……」
「君ともう一度会えてとても嬉しかったけど……それでもやっぱり僕たちは一緒にいるべきじゃない。僕みたいな人間がいたら君のためにもならないし……正直、君がいても足手まといになるだけだから……」

「……嘘つき」

「え……」

「ね、ヨシユア。あたし、色々と話を聞いて分かったことがあるのよね。どうしてヨシユアがあたしの前から消えたのか……。多分、ヨシユア自身も気付いてない本当の理由をね」

「……」

「心が壊れているからあたしといると苦しい？あたしと一緒にいても他人事にしか感じられない？ヨシユアがいたらあたしのためにならない？あたしがいても足手まといになるだけ？そんなの全部、嘘っぱちね」

「嘘なんかじゃ……！」

「いいから聞いて。あのね……ヨシユアは恐かっただけよ」

「え……」

「自分のせいでお姉さんが亡くなったと思ひ込んで……同じことがあたしの身に起きることが耐えられなくて……。だからあの夜、ヨシユアはあたしの前から逃げ出したのよ。それ以外の理由は後付けだわ」

「……。はは、何を言ってるんだか……。教授に調整されてから僕は恐怖を感じたことがないんだ。任務の時の邪魔にならないよう感じなくされたみたいだね。君の指摘は……的外れだよ」

「うづん、そういう表面的な事じゃないわ。……ねえ、ヨシユア。お姉さんが亡くなったことをどうして他人事みたいに感じちゃうのか……その理由が分かる？」

「それは……。僕が……壊れているから……」

「うづん、違う。ヨシユアは……お姉さんを亡くした時のシヨックを思い出したくないだけ。無意識のうちに、他人事みたいに思ひ込もうとしているのよ」

「……！」

「さつき、あたしを助けてくれたことだって同じよ。あの戦艦に忍び込むのに相当、苦労したんでしょう？なのに迷いもせずにあたしを逃がしてくれた……。まるであたしを一刻も早く危険から遠ざけるようにね」

「……」

「ヨシユアは壊れてなんかない。ただ恐がりで……自分に嘘をついているだけ……。今のあたしには自信をもって断言できるわ」

「そんな……。でも……」

ヨシユアは何も言えずエステルに背を背けた。

「どうして君は……そんなことまで……」

「前にも言っただけど、あたしはヨシユア観察の第一人者だから。ヨシユアの過去を知った今、あたしに敵う相手はいないわ。教授にだって、レーヴェにだって絶対に負けないんだから」

「……………」
「恐がりて勇敢なヨシユア。嘘つきで正直なヨシユア。あたしの…
…大好きなヨシユア。やっとあたしは…ヨシユアに届くことがで
きた」

エステルはヨシユアを後ろから抱き締めた。

「……………」

「でもあたしは…守られるだけの存在じゃない。遊撃士を続ける
限り、危険から遠ざかってばかりはいられない。ヨシユアがいよう
がいまいが、その事実は変わらないんだよ。だってそれは、あたし
があたしであるための道だから」

「……………」

「だから…だからヨシユア、約束しよう」

「……………」

「お互いがお互いを守りながら一緒に歩いていこうって。これでも
ヨシユアの背中を守るくらいには強くなった。ヨシユアが側にい
てくれたらその力は何倍にも大きくなる。《結社》が何をしようと
絶対に死んだりしないから…。だからもう…恐がる必要なんて
ないんだよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

見ないであげるから…そのまま泣いちゃうといいよ…。
こうしてあたしが…抱き締めててあげるから…

「えへへ…な、何だか照れるわね」

「うん……そうだね」

「あ……そうだ！これ、返すからね」

エステルはハーモニ力を取り出し、ヨシユアに渡した。

「あ……」

「まったくもう……お姉さんの形見なんですよ？簡単に人に渡すんじゃないわよ」

「うん……。確かに軽率だったかな」

「お姉さんって……どんな人だったの？」

「うん……そうだな……。気立てが良くて優しいけどどこか凜としていて……レーヴェとすごくお似合いで子供心に少し妬いていたよ」

「気立てが良くて優しくて凜としたタイプ……。それって……クローゼみみたいな感じ？」

「はは……そうだね。顔立ちとかは違うけれどタイプは似ているかもしれない」

「……」

「……エステル？」

「な、何でもないっ！……言っとくけど、クローゼも、他のみんなもすごく心配してたんだからね。帰ったらちゃんと謝りなさいよ」

「エステル……僕は……」

「戻る資格がないとか言っちゃって聞かないからね？教授のスパイをしたって言っても無意識のうちなんでしょ？空賊艇の奪還事件だって潜入捜査の一環みたいなもんだし。《結社》の計画についての情報を父さんにでも話したらチャラよ。いわゆる司法取引ってやつ？」

「ちよつと違うと思うけど……」

「それに《結社》を止めるにしたって、もうあの船に潜入するのは無理よね？だったらあたしたちと一緒に行動するしかないじゃない」

「……そもそも君が掠われなければ予定通り《グロリアス》を爆破できたんだけどな……」

「うぐつ……悪かったわね。って、爆破なんて物騒なこと言わないでよ。いくら《結社》だからって皆殺しにするつもりだったの？」

「……そうでもしないと教授やレーヴェは倒せないからね。まあ、爆破したところで倒せる可能性は低かったけど……」

「はあ、まったくもう……。あたし、やっぱり捕まってよかったかも。あやうくヨシユアにとんでもないことをさせるところだったわ」

「ふふ……」

「あーっ、今あたしのこと『また甘っちょろいこと言っつて』とか思っただでしょー!？」

「いや、しばらく見ないうちに大人っぽくなったみたいだけど……エステルはやっぱりエステルだなんて思っつてさ。すごく嬉しかったんだ」

「うっ……」

とっさに背を向けるエステル。

「(こ、こらあたし!今さらヨシユアの笑顔になにドキドキしてるのよ!ああでも久しぶりだから結構クルっっていうか……)……」

「?エステル?」

「ね、ねえ……。ヨシユア、あのボクっ子とけっこう仲良くなったのよね?」

「ボクっ子……ああ、ジョゼットのことが。そうだね、最初はずいぶんと嫌われていたみたいだけど……。最後はわりと打ち解けることができたかな」

「打ち解ける……。……。キスとか、した?」

「は?」

「いいから答えてっ!」

「あ、ああ……。もちろんしてないけど」

「そ、それじゃあ……」

エステルはヨシユアに向き直った。

「ここで……あの夜のやり直しを要求してもいいよね……?」

「あ……」

「や、やっぱり初めてって女の子には大切なものだし……。ヨ、ヨシユアのせいで台無しになったんだから……責任……取ってくれるよね？」

「エステル……」

エステルは目を閉じてヨシユアを待った。

「（……エステル……。……）」

ヨシユアはエステルを抱き寄せ……唇を重ねた。

「（……あ……）」

「おい、ヨシユア！」

声が聞こえて慌てて離れると、上から《山猫号》が降りてきた。

《山猫号》が着陸すると、ジョゼットが走って出てきた。

「ボ、ボクっ子!？」

「なんだ、あんたもちやつかり脱出してたのか。まったく……あのまま捕まっていればいいのに」

「あ、あんですって〜!？」

「こら、ジョゼット。ケンカうるんじやないっての」

「遊撃士の嬢ちゃんもこの場は休戦で構わねえな？」
「続いてキールとドルンも出てきた。」

「うん、まあ……さっきは助けられたしね。改めてありがとう。本当に助かった」

「がはは、いいってことよ」

「フンだ、あんたを助けたつもりはないんだから。感謝される筋合いはないね」

「ぐっ……1人だけでも捕まえたくなくてくるわね」

「それよりヨシユア。この後どうするんだ？」

「え……」

キールの言葉に驚くエステル。

「俺たちと一緒に来ないか改めて誘いに来たんだが……。ま、その様子じゃ聞くまでも無さそうだな？」

「うん……ごめん。先のこととはどうなるか分からないけど……今はエステルと一緒に戻ろうと思っている」

「ヨシユア……」

「へッ、そうか」

「……。ま、いつか。まだチャンスはありそうだし」

「え」

「ヨシユア、覚えといて！その脳天気女に愛想つかしたらボクたちの所に戻ってきなよね！歓迎するからさ！」

「だ、誰が脳天気女よ！」

「はは……ありがとう、ジョゼット！ドルンさん、キールさん！本当にお世話になりました！」

「へッ、こつちこそな！」

「じゃあな！機会があったらまた会おうぜ！」

3人が乗り込むと《山猫号》は飛び去っていった。

「……ねえ、エステル」

「なに……？」

「……敵はあまりにも強大だ。多分、教授がエステルを掠ったのも僕を^{いぶ}焼きだすためだったと思う。留守中に《グロリアス》を墮とされないようにするためにね」

「あ……」

「レーヴェだつて、あの場で僕たちを始末してからエンジンの暴走を止められたはず。そうしなかったのは……僕があまりにも不甲斐なかったから情けをかけたんじゃないかと思う」

「……………」

「他の執行者についても同じ……。単純な戦闘力でいったら僕を上回っている達人ばかりだ。正直、苦しい戦いになるだろう」

「うん……………」

「でも……………約束するよ。もう2度と……………現実から逃げたりしないで。君と一緒に……………最後まで歩いていくって」

「ヨシユア……………。うん……………あたしも誓うわ！」

第14章 四輪の塔(1)

翡翠の塔

「こちら、《怪盗紳士》。設置は完了した。儀式開始まで待機する」

紅蓮の塔

「《痩せ狼》だ。こちらも完了だぜ。とっとと始めてくれや」

紺碧の塔

「こちら《幻惑の鈴》。《》の設置を完了しました」

琥珀の塔

「うふふ……《殲滅天使》よ。レンの準備も終わり。いつでも始めてくれていいわ」

ヴァレリア湖 上空

「刻は至った。これより『福音計画』の第3段階を開始する」
ワイスマン教授が杖を出す。そして、目の前の《》の付いた装置にかざした。

「七耀の届かぬ闇の狭間に封結されし《環》よ　　汝が《福音》

を通じて現世の有様を眺めるがよい」

装置から黒い光が溢れ、空間が歪んだ。

「見るがいい！四方にそびえし《杭》を！あれなるは汝を闇に繋ぐ最後にして最大の楔くわなり！されどかの楔、人の手により偽りの相にて現世に現れり！全てを律するその手をもつていざ、真なる相を暴くがよい！」

空間の歪みから光が放たれ、《四輪の塔》の装置から幾何学的な模様が現れた。そして、塔の頂上を黒い光が包んだ。

「さあ諸君！祝祭の準備は整った！存分に楽しんできたまえ！」

「 承知！」

「我ら《執行者》一同」

「大いなる盟主の代行者たる《蛇の使徒》の指示により」

「これより《杭》の解錠を始める！」

同時刻 グランセル城 謁見の間

「 以上が、これまでの顛末と《方舟》潜入時に掴んだ情報です」

エステルとヨシユアがアリシア女王とモルガン將軍にこれまでの顛末を説明していた。

「むむ……なんたる事だ。そんな化物じみた巨船がリベルに潜入していたとは……。そんなものを持ち出して一体何をするつもりなのだ……」

「『福音計画』の全貌はとうとう掴めませんでした。ですが、彼らはすでに次の行動を開始しています」

「たしか……第3段階とか言ってたわよね」

「大変な事態になりましたね……。モルガン將軍。王国軍の対応はどのように？」

「昨夜のうちに、この2人からカシウスに連絡が行ったようでした」

な。すでに彼の指示で、全王国軍に第1種警戒体制が発令されてお
ります。さらに飛行艦隊を出動させて王国全土の哨戒に当たらせま
した」

「そうだったのですか……。エステルさん、ヨシユア殿。本当にご
苦労さまでしたね」

「い、いえ。当然の連絡をしただけです」

「正直……。もう少し早い段階で連絡すべきだったかもしれません。
空賊艇奪還事件の件を含めて本当に申し訳ありませんでした」

「ちょ、ちよつとヨシユア」

「いいんだ、エステル。裁きを受ける覚悟はできているから」

「ふむ……。陛下、如何いたしますか？」

「そうですね……。超法規的措置にはなりますが。今回、ヨシユア
殿が明らかにした《結社》に関する様々な情報……。それをもって過
去の行為は不問としましょう」

「ホ、ホントですか!？」

「ですが……」

「いいのです、ヨシユア殿。この程度の裁量……。《ハーメル》の遺
児たる貴方への償いにもならないでしょうから」

「え」

「……………」

「……どうやらご存じだったようです。わたくしがあの虐殺事件
を知りながらも今まで沈黙してきたことを……」

「ええっ!？ど、どういふ事ですか!？」

アリシア女王からその言葉が出ることを予想もしなかったエステル
が驚いた。

「戦争開始時、エレボニアは宣戦布告をリベールに行ったが……。そ
の時、ハーメル村の虐殺が王国軍によって起こされたという断固と
した指摘がなされていたのだ。しかし終戦間際、帝国政府は突如と
してその指摘を撤回し、即時停戦と講和を申し出てきた。……。ハー
メルの一件について一切沈黙することと引き替えにな」

「……！」

「……前後の事情を考えると、帝国内部でどんな事があつたのか臆おぼろげながら想像が付きましました。ですが、反攻作戦が功を奏したとはいえ、帝国軍は未だ余力を残していました。帝国本土から増援があつたら王国は再び窮地に陥ることになる。そう判断したわたくしは……その条件を呑むことに決めました」

「あ……」

「……」

「……自国の安寧を優先してわたくしは真相の追及を放棄しました。背後にいるはずの被害者たちの無念を切り捨ててしまったのです。かつてロランス少尉がわたくしに告げた『哀れむ資格はない』という言葉……あれは真実、的を射っていたのです」

「女王様……」

「……どうかご自分をお責めにならないでください。そもそも虐殺に関わりがない上に自国の平和がかかっていましたのです。国主としては当然の判断でしょう」

「ヨシユア殿……」

「このリベールという国は僕の凍てついた心を癒してくれた第2の故郷ともいう地です。その地を守った陛下のご決断、感謝こそすれ、恨みなどしません」

「ヨシユア……」

「ありがとうございます……ヨシユア殿。そう言って頂けると胸のつかえが取れた気がします」

「エステルさん、ヨシユアさん！」

「あ……！」

「みんな……」

ギルドのメンバー全員が謁見の間に来てきた。

「エステルさん、よくご無事で……。それに……ヨシユアさんも……」

「よ、よかったあ……。2人とも帰って来てくれて……！」

「クローゼ、テイータ……」

「2人とも……心配をかけちゃったみたいね」

「まったくもう……。肝を冷やしてくれるじゃない」

「へへっ……。だがまあ、家出息子を連れ戻せて何よりだったな」

「シエラさん、アガットさん……」

「2人とも……よく無事に戻ってきたな」

「フツ、これも女神のお導きというものだろうね」

「えへへ……心配かけてゴメンなさい」

「まったくもってその通りやで」

「ちよつと、ケビンさん。いきなりそれはないでしょう。気持ちは分かりませんが……」

「あ、ケビンさん、レインさん！」

「エステルちゃんが掠われた時は目の前が真っ暗になったわ。ホンマにもう……あんまり心配させんといてや」

「でも、本当に無事で何よりです」

「うん……ゴメンなさい」

「んで、こっちが例の……」

「初めまして、ケビン神父、レインさん。ヨシユア・ブライトといいます」

「うぐっ……予想以上のハンサム君やね。って、オレのこと知ってるの？」

「これは……驚きですね」

「あなたたちの存在については僕の情報網にも入っていました。エステル危ない所を何度も助けてくれたそうですね。ありがとうございます……感謝します」

「むむむ……まあええか。仲直りしたんやったらオレから言うことは何もないわ」

「そうですね。私もエステルさんの悩みが解決して何よりです」

「ただな……」

ケビン神父がヨシユアにそつと耳打ちした。

「（……あんまり可愛い彼女を放っておいたらアカンで。オレみたいな悪い虫にコナかけられたくなかったらな）」

「（……肝に銘じます）」

「?どうしたの?」

「いやあ、ちよいとな」

「男同士の話をね」

「なんかヤラしいわね……」

「失礼します、陛下」

エステルたちの父、カシウスが入ってきた。

「あ……」

「父さん……」

「カシウス殿、ご苦労様でした」

「各方面への指示は完了したのか?」

「ええ、先ほど終わらせてこちらの方へ飛んできました。そこで少々、父親としての義務を果たさそうと思ひまして」

「え……」

カシウスがヨシユアの前に立った。

「……昨日、通信で話したが実際に顔を合わせるのは久々だな」

「うん……そうだね。……ごめん。心配をかけてしまつて」

「お前の誓いを知っていた以上、俺も共犯みたいなものさ。謝る必要はないが……義務は果たさせてもらつぞ」

カシウスはヨシユアの頬を叩いた。

「っ……」

「きゃっ……」

「ちょ、ちよつと父さん!?!」

「……いいんだ、エステル。家出息子には……当然のお仕置きだからね」

「そういうことだ。思っていた以上に皆に心配をかけていたこと……ようやく実感できたようだな?」

「……うん。僕なんかのために

なんて思つたら駄目なんだよ

ね

「ああ……。人は様々なものに影響を受けながら生きていく存在だ。逆に生きていくだけで様々なものに影響を与えていく。それこそが『縁』であり、『縁』は深まれば『絆』となる」

「……『絆』……」

「そして、一度結ばれた『絆』は決して途切れることがないものだ。遠く離れようと、立場を違えようと何らかの形で存在し続ける……。その強さ、思い知っただろう？」

「うん……。正直悔っていた。確かに僕は……。何も見えてなかったみたいだ」

「ヨシユア……」

「フフ、それが見えたのなら家出した甲斐もあっただろう」
カシウスはヨシユアを抱き締めた。

「ヨシユア……。この馬鹿息子め。本当によく帰ってきたな」

「父さん……」

「グス……。えへへ……」

「フツ、親馬鹿が……」

「ふふ……。本当に良かった」

「失礼します！」

大急ぎで入ってきたのはユリア大尉だった。

「ユリア大尉……」

「王都を除いたら大都市の近郊に正体不明の魔獣の群れが現れました！報告から判断するにどうやら人形兵器と思われまます！」

「あ、あんですって〜!？」

「動き出したか……」

「どうやら、思っていた以上に第3段階は大きなものようですね
……」

「それと、各地の関所に装甲をまとった猛獣の群れと紅蓮の兵士たちが現れました！現在、各守備隊が応戦に当たっております！」

「そうか……」

「急いでハーケン門に戻る必要があるそうだな……」

「そ、それと……」

「なんだ、まだあるのか？」

「詳細は不明なのですが……《四輪の塔》に異変が起きました。得体の知れぬ『闇』に屋上部分が包まれたそうです」

「!!!!」

「まさか、《四輪の塔》を用いるのが第3段階……」

「チツ……嫌な予感が当たりよったか」

「なお、哨戒中の警備艇が調査のため接近したそうですが……すぐに機能停止に陥り、離脱を余儀なくされたことです」

「『導力停止現象』か……」

「地上からの斥候部隊は？」

「すでに派遣されたそうですが……」

「も、申し上げます！」

王国軍士官が慌てて報告に入ってきた。

「各地の塔に向かった斥候部隊が撃破されてしまったそうです！信じ難いことですが、どの部隊もたった1人によって蹴散らされてしまったとか……」

「なに……!？」

「そ、それって……!」

「ああ……《執行者》だろうね。父さん……彼らは一般兵の手に余る。ここは僕に行かせてほしい」

「ふむ……」

「ちよつとヨシユア……なに1人で行くつもりなのよ。昨日の約束をもう忘れたの？」

「エステル、でも……」

「《結社》が動き始めた以上、遊撃士としても放っておけない。絶対に付いて行くからね」

「エステル……」

「エステルだけじゃないわ。あたしも付き合わせてもらおうわよ。個

人的な因縁もあるしね」

「ああ、俺も同じくだ」

「シエラさん、ジンさん……」

「ま、拘りがあるのはお前だけじゃねえってことだ。抜け駆けはナシにしようぜ」

「そ、そうだよお兄ちゃん！こーいう時こそみんなで力を合わせなくちゃ！」

「アガツトさん、テイータ……。……ありがとうございます」

「決まりのようだな。遊撃士協会にお願いする。《四輪の塔》の異変の調査と解決をお願いする。これは軍からの正式な依頼だ」

「うん……。分かったわ！」

「しかと引き受けました」

「……。お祖母様。私に《アルセイユ》を貸していただけませんか？」

「へっ……。！？」

「で、殿下！？」

「ふふ……。確かに一刻を争う事態です。わたくしも《アルセイユ》を提供しようと思いましたが……。そう申し出たということは覚悟が固まったという事ですか？」

「いえ……。まだです。ですが、船をお返しする時には必ず答えを出す約束します」

「ふふ……。いいでしょう。リベールの希望の翼、好きなように使ってみなさい」

「ありがとうございます。ユリア大尉、発進の準備を。可及的速やかに《四輪の塔》へ向かいます」

「承知しました！」

こうして……。リベールは《百日戦役》以来の未曾有の事態を迎えた。王国軍の全部隊を指揮するためにカシウスとモルガンはそれぞれレイストン要塞とハーケン門に戻り……。エステルたちは《アルセイユ》で各地にある塔に向かうことになった。

第14章 四輪の塔(2)

グランセル発着場

「うーん、まさかオリビエが帝国に帰っちゃうなんて……」

「ホント、随分いきなりね」

オリビエが急にエレボニア帝国に帰国しなければならぬと《アルセイユ》に乗る前に言い出した。

「いや、本当はもう少し前に帰国する予定だったのだがね。エステル君が掠われてしまったので予定を伸ばして滞在していたのだよ」

「そうなんだ……。ゴメンね、あたしのせいで」

「フツ、気にすることはない。君の帰りを待ったおかげで愛しのヨシユア君とも再会することができたしね」

「はは、相変わらずですね。……あの、オリビエさん」

「おや、なんだい？」

「貴方は……。……いえ、何でもありません。今までエステルの旅を助けてくれて感謝します」

「フツ、望んでいたことなのだから水臭いことは言いつこナシだよ。だが、そこまで言うのならお礼に熱いベーゼでも……」

「えーかげんにしなさい。もう……。最後くらいちゃんとお別れしようよ」

「はは、ボクはいつでも真面目なつもりなんだがねえ。エステル君、ヨシユア君。シエラ君に他のみんなも……。色々大変だろうが気を付けて行ってくるといい。このオリビエ、帝国の空からキミたちの幸運を祈っているよ」

「うん、ありがとー！」

「ふふ……。あなたの方こそ気を付けて」

「……。どうかお元気で」

「また機会があったら呑もうや」

「今度はその変人っぷりをちったあ直してきやがれよ」

「あはは……。あのあの……。さよーなら！」
「またすぐに会えるような気がします……。その時までお元気で」
「いや、短い付き合いでしたけどごつつ楽しかったですわ」
「お元気で……。色々とお世話になりました」

アルセイユ ブリッジ

「あ……」

「お、おじいちゃん!？」

ブリッジではラッセル博士が待っていた。

「久しぶりじゃの。ティータや。元気にしておったか？」

「えへへ……。うんっ！」

「おいおい、爺さん。なんでアンタがここにいる？」

「ま、色々あって数日前から乗り込んでおったんじゃ。それよりも……エステル、ヨシユア。2人とも本当によく無事で戻ってきたのう」

「あはは……。うん、何とか」

「……。心配をかけて申しわけありませんでした」

「なに、戻ってきたのならそれで万事オツケーじゃよ。しかし、《四輪の塔》に異変が生じたとは……。こりゃわしも、気合いを入れて調査する必要があるじゃな」

「うん、頼むわね。ところで……。どの塔から行けばいいのかな？」

「そうだね……。距離的なことを考えたら《琥珀》か《紅蓮》が近いけど……」

「《アルセイユ》の速さならどの塔でもあまり変わらないさ。敵の情報分かっている所を優先した方がいいかもしれない」

「敵の情報？」

「先ほど、《翡翠の塔》に向かった斥候部隊から続報が入ってきた。現れたのは、仮面を付けた白装束の怪しい男だったそうだ」

「あの怪盗男！」

「斥候部隊とはいえ、たった1人で撃破するなんて……」

「ヘッ、ただの変な野郎じゃなかったみてえだな」

「《怪盗紳士》ブルブラン……。分身や影縫いを始め、トリッキーな技を使う執行者だ。一筋縄では行かないと思う」

「そっか……。でも、敵の正体が分かっただけ、他の塔よりはマシだと思うし……。うん！まずは《翡翠の塔》に行きましょう！」

「了解した。発進準備！これより本艦は、ロレント地方、《翡翠の塔》に向かう！」

《アルセイユ》が飛び立つのを見届けたオリビエ。

「フツ……。これで猶予期間モラトリアムも終わりか……。いや、まだ最後のチャンスが残っているかな」

「ま、待って〜！」

「おや、君たちは……」

発着場に走ってきたのは、リベール通信のドロシーとナイアルだった。

「ああ、行っちゃった……」

「せいぜい……。ま、間に合わなかったか」

「どうしたんだい、記者諸君？また竜事件のように乗り込むつもりだったのかな？」

「ああ、それとヨシユアが帰ってきたって聞いたんでな。まあいい、ドロシー。急いで《アルセイユ》を撮れ！望遠レンズを使えばそこそこ使える画が撮れるだろ」

「アイアイサー！」

「フフ……」

オリビエはその場を静かに去った。

「……挨拶は済んだのか？」
発着場の出口ではミユラーが待っていた。

「フツ、一応ね。そちらの準備はどうだい？」

「叔父上の方は何とかなつた。宰相閣下も、むしろ好都合だと判断されたようだ」

「確かにあの人なら王国人受けしそうだからね。フフ……楽しくなりそうだ」

「まったく……何という悪趣味なヤツだ。彼らの驚愕した表情が今から目に浮かぶようだぞ」

「ハツハツハツ。まさにそれが狙いだからね」
オリビエは空を見上げた。

「（今度、相見えた時にはお互い敵同士というわけだ。くれぐれも《結社》ごときに遅れを取らないでくれたまえよ）」

第14章 四輪の塔(3)(前書き)

第1の塔、《翡翠の塔》編です。

第14章 四輪の塔(3)

翡翠の塔 上空

「《翡翠の塔》上空に到着した」

「は、さすがに速いわね。到着まで30分もかからなかったんじゃない？」

「えへへ、そのくらいだと思うよ。定期船の3倍近くのスピードが出ているはずだから」

「なるほど……」

「《翡翠の塔》の屋上はどのようになっていますか？」

「今、ディスプレイに出そう」

ユリア大尉はディスプレイに《翡翠の塔》の屋上の様子を映し出した。

《翡翠の塔》の屋上は黒い球体に包まれていた。

「な、なにあれ……」

「例の《ゴスペル》が生み出す黒い波動に雰囲気は似とるが……」

「じゃが、波動と違って広がらずに塔の屋上を包み込んでおる。いずれにせよ、これ以上は近づかない方が賢明じゃろう」

「ユリアさん。地上に降りるにはどうすればいいんですか？」

「あいにく《アルセイユ》が着陸できそうな場所がなくてね。滞空状態でリフトを降ろすからそれに乗って降りてほしい」

「リフト？」

「榴弾砲を出す時などに使われる貨物用のリフトです。船倉に設置されているんですよ」

「そっか……」

「それじゃあ、塔の内部を調査するメンバーを選ぼうか」

エステルはケビン神父とクローゼを選んだ。

「わしはしばらく、下の工房に詰めておる。塔の調査中、オーブメントの整備やクオーツが必要になったら来るがいい」

「うん、そうさせてもらうわね」

「……敵の目的も未だはつきりしておらん。気を付けて行ってくるがいい」

ラッセル博士は工房室に戻っていった。

「さてと、準備を整えたらすぐに地上に降りなくちゃ」

「ああ、船倉のリフトだったね」

アルセイユ 船倉

「やあ、来たね」

「あれ、フェイさん？どうしてアルセイユにいるの？」

中央工房にいるはずのフェイがアルセイユに乗っていたので驚いた。

「ラッセルの爺様と一緒に乗り込んだのさ。何でも整備士の手が足りないらしくてね」

「ふーん、そうなんだ」

「ま、今はヒマだから船の手伝いをしてるんだ。それで……早速リフトで降りるかい？」

「うん、頼むわ」

「ん、わかった。それじゃあ早速、リフトの上に乗っちゃって」

「オツケー」

エステルたちはリフトの上に乗った。

「それじゃあ降ろすよ。安定してるとは思っけどくれぐれも落ちないようにな」

翡翠の塔 近辺

「さてと……いよいよ調査開始ね。とにかく急いで屋上に向かわなくちゃ」

「うん……でも様子が変だな」

「えっ？」

「あ、あんたたちは……！」

目の前から王国軍兵士が慌てて寄ってきた。

「ひよ、ひよっとして連絡にあった遊撃士かい？」

「うん、そうよ」

「あなたは斥候部隊の？」

「あ、ああ……。あんたらに塔の状況を説明するために残っていたんだ」

「何でも仮面の男にやられたそうやね？」

「そ、そうなんだけどそれだけじゃあないんだ。何と言つか……明らかにおかしいんだよ」

「おかしいって……何が？」

「み、見れば分かる。とにかく入口に来てくれ」

兵士はうまく説明できないと言っているので、塔の入口に向かった。

「えっ……！？」

翡翠の塔の入口が奇妙な色の結界らしきもので塞がれていた。

「あ、あれって……」

「何かの結界……！？」

「俺たちが到着した時は既にこうなっていたんだ……。で、調べようとした矢先に例の仮面の男が現れて……」

「……。中に入ることはできないんですか？」

「仮面の男はそのまま入っていったから大丈夫だとは思っけど……。追いかけてよとも思っただけど仲間が全員やられちゃって……」

「そっか……。ここはあたしたちに任せてあなたは部隊に戻って」
「わ、わかった……。女神の加護を！」

王国軍兵士が戻るのを見送って、エステルたちは翡翠の塔に入った。

翡翠の塔 異空間

「へっ……。!?」

「ここは……」

翡翠の塔の内部は、通常の物と違って封印区画のような風貌になっていた。

「ちよ、ちよっと待って……。あたしたち、確かに塔の中に入ったはずよね!？」

「空間転位……。どこか別の場所に飛ばされたみたいやね」

「あ、あんですって!?!?そ、それじゃあ塔の屋上に登るなんて無理なんじゃ……!」

「落ち着いて、エステル。ブルブランが現れたということは必ず道はあるはずだよ」

「た、確かに……。……うん!とにかく慎重に進みましょう!」

「あっ……」

翡翠の塔を進んでいると、三角錐の形をした装置を見つけた。

「これって……。何かの装置みたいね」

「ふーむ、見たところ何かの端末見たいやけど」

「……調べてみようか」

ヨシユアが装置を調べた。

「……。……これだ」

ヨシユアがスイッチを押すと、装置の上半分が浮き上がり、空間に

映像が映し出された。

「わわっ……………！」

「どうやら情報が記録された端末みたいだ。内容を確認してみよう」
エステルたちは情報を確認して、端末のメモリーである『データクリスタル』を取り出したが、文字は最初の『セレスト・D・アウスレーゼ』という言葉以外ほとんど読める状態になかった。

「なによ、最初以外は読めなくなってるじゃない……………って、この『アウスレーゼ』って」

「はい……………リベール王家の姓です。縁ゆかりのある方かもしれません」

「……………どうやら重大なことが記されている可能性が高そうだ。何とかして読めればいいんだけど……………」

「うーん……………そうね。ま、役に立つかもしれないし一応取っておきますか」

エステルたちはさらに4つのデータクリスタルを回収し、屋上を目指した。

翡翠の塔 屋上

「こ、こっつて……………!?!」

「塔の屋上みたいやけど、こいつは……………」

「屋上を包んだ《結界》の内側ということか……………」

塔の屋上は、通常の時と同じ景色だった。

「フフ……………なかなか早かったようだね」

予測通り、《怪盗紳士》ブルブランが屋上で待ちかまえていた。

「やっぱり来てたわね……………この変態仮面」

「フツ、はしたない物言いだ。それはさておき……………ずいぶん久しぶりだね。《漆黒の牙》 ヨシユア・アストレイ」

「……………そうだね。何故あなたが教授の計画に協力しているのか疑問だけ……………」

「フフ、他の者はさておき私の場合は趣味を兼ねていてね。このリベールという国は不思議な気品に満ち溢れている。人も、土地も、空気すらも。その気品が本物かどうか見極めてみたいと思ったのだよ。困難に直面した時、それは一層輝くものだからね」

「なるほどね……。ある意味、あなたは教授と似ているのかもしれない」

「はは、私が求めるのは美だが、教授の場合は明らかに違う。それは君も知っているはずだ」

「……………」

「しかし、まさか姫殿下がこの場に来られたとは……。私の崇拜を受け入れる気になったと考えるとよろしいかな？」

「残念ですが……。私は貴方の期待に応えられるような人間ではありません。真に気高き人間であるならどうして迷ったりするでしょう。」

《アルセイユ》を陛下に返す時、私は答えを出さなくてはいけません。私は……。その時が恐いのです」

「クローゼ」

「……………」

「フハハ！その恐れこそが気高さの証！地を這う虫けらが焦がれて止まぬ翼の輝きなのだ！」

怪盗紳士ブルブランがステッキを振ると、2体の巨大な人形兵器がエステルたちを取り囲んだ。

「！」

「わわっ!?!」

「強襲用人形兵器、《バランシングクラウン》！」

「さあ、見せてくれたまえ！影横たわる地すら照らし出すその輝きを！」

「ふむ……。思っていたよりもやる。ならばこちらも本気で」

その時、塔の屋上の装置から出ていた幾何学的な光が消え、
「む！？」

「！」

屋上を覆っていた黒い光も消え失せた。

「あ……！」

「元に戻ったんか……！？」

「ふむ、どうやら役目はこれで終わりのようだな。……仕方あるまい。引き上げるとしようか」

「へっ……」

怪盗紳士ブルブランがステッキを振った。どうやら逃げる気らしい。

「ちよ、ちよつと！？」

「ま、待つてください！」

「八八、殿下は勿論だが遊撃士諸君の戦いぶりにも輝きを感じさせてもらった。それが真実であるかは次の機会に確かめさせて頂こう。それでは諸君、失礼する」

怪盗紳士ブルブランはそのまま消えた。

「に、逃げられた……」

「……………」

エステルたちは古代装置に残された《 》を調べた。

「これが《 》……………。《結社》が造ったゴスペルの最終型か。今までの新型よりもさらに一回り大きいみたいだ」

「塔の屋上が元に戻ったのはいいんだけど……………。問題はこれを使って何をしていたのかってことよね」

「今まで動いていた装置もまた止まってもうたみたいや。何かイヤな予感がするわ」

「それに、先ほどまで屋上を包んでいた結界……………。あれは何だったのでしょう」

「……………。とりあえずこれでこの塔は元通りに

なったと思う。一旦、《アルセイユ》に戻ろう」

「うん……………。戻って博士に報告しないとね」

アルセイユ 作戦室

「なるほど……。そんな事があったのか」

「とりあえず、その《》は博士に渡しておくわね。あ、それと塔の中でこんなのを見つけたんだけど」

エステルは翡翠の塔で入手したデータクリスタルを渡した。

「ほう……古代導力文明で使われていた情報を保存するための記録媒体か」

「内部のデータが破損してしまっているのですが、何とか復元はできませんか？」

「そうじゃな……。モノ自体は結晶回路と同じ七耀石素材を使っておるようじゃ。時間はかかるが《カペル》なら何とか解析できるかもしれない」

「お願いしちゃってもいい？」

「うむ、任せておくがいい。しかし、『裏の塔』とも言うべき別の空間に広がる内部構造か……。うむむ……わしも付いて行けばよかった」

「お、おじいちゃあん……」

「おそらく、あれこそが《四輪の塔》本来の姿でしょう。《輝く環》を封印する《デバスタワー》としての」

「それが元に戻ったことは安心してほしいハズやけど……屋上の装置も止まったのはちよいとばかり気になるなあ」

「ふむ……確かにな」

「いずれにせよ……このまま《結社》の連中を放っておくわけにはいかないわ。急いで次の塔に向かわなくちゃ！」

「ユリアさん。他の塔の情報は入っていますか？」

「先ほど、ツァイス方面の斥候部隊から情報が入りました。《紅蓮の塔》に現れたのは黒眼鏡をかけた男だったそうです」

「あ……………」
「《瘦せ狼》か……………」
「へへ…………」。やっと直接、やり合えるチャンスが巡ってきたか」
「ジンさん……………」
「エステル、ヨシユア。《紅蓮の塔》には俺も付き合わせてもらおうぜ」

トラット平原道

平原道で王国軍の守備隊が《結社》の人形兵器を撃退せんと防衛線を敷いていた。

「…………来たようだな。榴弾砲、撃ち方用意！」

王国軍士官が懸命に指揮をする。

「撃て！」

しかし、人形兵器はものともせず守備隊のもとに迫っていた。

「撃ち方止め！総員突入！一匹たりとも街に近付けるな！」

「イエス・サー！」

遊撃士協会ツァイス支部

キリカが無線器で誰かと通信していた。

「…………なるほど。だいたい状況は分かったわ。こちらは軍の守備隊が先ほど作戦を開始してみたみたい。万全の態勢だったからギルドの援護は不要でしょう………………。そう、次は《

紅蓮の塔》に向かうのね。分かった…………武運を祈るわ」

キリカは受話器を置いた。

「…………相変わらず隠し事が下手な人。全然変わっていないわね。さて…………そうになると色々忙しくなりそうね」

第14章 四輪の塔(4) (前書き)

第2の塔、《紅蓮の塔》編です。

第14章 四輪の塔(4)

アルセイユ

「《紅蓮の塔》 上空に到着した。やはり屋上部分は漆黒の結界に覆われている」

「それじゃあ《翡翠の塔》と同じように……」

「内部が別の空間になっている可能性は高いだろうね」

「おう、待たせたな」

ジンが準備から戻ってきた。

「あ、ジンさん。キリカさんからの連絡って何だったの？」

「ああ、こちらの状況がどうなっているのか聞いてきた。《翡翠の塔》であった事を一通り話しておいたぜ」

先ほどの通信はキリカとジンのものだったらしい。

「そっか……」

「ご苦労さまでした」

「よし、それじゃあ早速、《塔》に乗り込むとするか」

エステルはあと1人にケビン神父を選び、《紅蓮の塔》に降りた。

紅蓮の塔

《紅蓮の塔》も《翡翠の塔》と同じく、結界で入口が塞がれていた。

「《翡翠の塔》と同じね……。やっぱり、あの訳の分からない場所に繋がっているのかな？」

「本来の姿である『裏の塔』やね」

「ええ……間違いないでしょう」

「まあ、一筋縄じゃないかな場所のはずだ。気合いを入れていくとしょっ」

紅蓮の塔 異空間

エステルたちは《紅蓮の塔》でも4つのデータクリスタルを入手した。

紅蓮の塔 屋上

「や、やつと着いた……」

「思ったよりも時間がかかったな……」

「クク……そろそろ来る頃だと思っただぜ」

装置の所でヴァルターが待ち構えていた。

「ヴァルター……」

「ジン……やはりてめえが来たか。それと《漆黑》の小僧。ずいぶん久しぶりじゃねえか」

「……そうだね。でも、貴方とジンさんが同門だったとは知らなかったよ」

「クク、俺は《泰斗流》以外にも様々な流派を取り込んでいる。どうすれば人を壊せるか、その窮極の境地に届くためにな。気付かないのも無理はねえ」

「ヴァルター、あんた……」

「てめえの方はどうだ……ジン？いまだに《泰斗流》なんていう古くせえ流派にしがみついているのか？」

「……俺は不器用だからな。師父せんせいに追いつくことが精一杯でそれ以外に目を向ける余裕はないさ」

「チツ……つまらねえ奴だ。まあいい、さっきからどうにも退屈だったからな。ここらへんで死合といこうじゃねえか」

ヴァルターが指を鳴らすと装甲獣が3匹現れた。

「わわっ……！」

「《ステイールクーガー》……」

「《結社》の装甲獣かい！」

「クク、ガキどもはそいつらと遊んでいやがね。ジン……見せてもらうぜ。この6年間でてめえが練った功夫クシフをなあっ！」

「……望むところだ！」

「くっ……」

「さすがに手強い……」

ヴァルターを止めたものの、エステルたちの身体は一戦するだけで疲弊してしまった。

「……どうやら功夫だけはそれなりに練っていたようだな。だが、動きが愚直すぎるぜ。古ぼけた《泰斗流》なんぞにいつまでも固執してるからだ」

「ふふ……」

「……何がおかしい？」

「あんたは確かに天才だが、肝心な事が分かっていないな。師父もさぞや無念だっただろう」

「ほう……。てめえ、ジジイの代わりに俺に説教しようつてのか？」

「そんな大それた事は考えちゃいないさ。だが、拳を交えてみて一つ分かったことがある。今の俺が、あんたに勝つのは難しいだろうが……代わりに負けもしないだろう。あんたの拳じゃ俺は倒せんよ」

「……。クク……。面白れえ。まさかてめえの

口からそんな台詞を聞けるとはな。ヒマつぶしに味見するだけのつもりだったか、気が変わった」

ヴァルターが気を練り始めた。

「構える、ジン……。格の違いつてヤツを思い知らせてやる……」

「ジンもそれに応えるように気を練る。」

「(ど、どうしよう!?)」

「(これは……入り込めなさそうだ)」

そして、ジンとヴァルターのサシ一対一の勝負が始まった。

屋上の柱を壊しながら互角の勝負が行われた。

「クク……でかい口を叩くだけあってなかなか粘るじゃねえか……」

「あんだこそ……それだけの天賦の才を持ちながらどうして武術の闇に引きずられた!そのまま師父の元で励めば正道の極みに至れただろうに!」

「フツ、てめえがそれを言うか。どうやらジジイの死んだ原因がてめえだと分かっているねえようだな」

「……な……!?!」

「クク、顔色が変わったな。万が一、お前が勝ったらそのあたりの話をしてやろう。賭けるのはてめえ自身の命だ」

ヴァルターがさらに気を練り始めた。

「……………。……いいだろう。この命、賭けさせてもらうぞ」

ジンは全ての力を振り絞るように気を練り始めた。

「(ジ、ジンさん……)」

「(だめだエステル……これは止められない)」

「コオオオオオオツ……!」

「はあああああっ!」

2人が激突しようとした瞬間、何らかの武器が2人の間に割って入った。

「なに……!」

「えんげつりん 偃月輪……まさか!」

塔の屋上に登ってきたのはキリカだった。

「キ、キリカさん!?!」

「どうしてここに……」

「ツァイス市の防衛戦がやっと終わってくれたから。受付をウォンに頼んで少し様子を見に來ただけよ」

「よ、様子を見に来たって……」

「あの『裏の塔』を1人で登ってきたんか……」

「キリカ、お前……」

「クク……相変わらずだな。様子を見に来たついでにジジイの仇を討ちに来たのか？」

「まさか……。勝負の結果だったのでしょうか。どうして私が父の決意を踏みにじらなければならないの？」

「……………」

「キリカ……」

「私がここに来たのは6年前、居なくなった誰かに伝えるべき言葉があつたから。ただ、それだけのためよ」

「伝えるべき言葉……だと？」

「ええ……。ねえ、ヴァルター。どうして私を私として見てくれなかつたの……？」

「！……！」

キリカの言葉にヴァルターは驚いた。

「貴方が父に何を言われたのか詳しいことは分からない。でも、それは私たちの付き合いに何の関係もなかつたはずだわ。ましてや、ジンには尚更ね」

「！？」

「……………」

「……やっぱりそうだったのね。ヴァルター……馬鹿なひと。父がそういうことを考える人だとも思つたの？」

「ジジイは関係ねえ……。俺自身のケジメの問題だ」

「ちょ、ちよつと待て……。ヴァルター！師父に何を言われたんだ！？それと俺と何の関係がある！？」

ジンには2人の話が全く分からなかつた。

「るせえ……。てめえに教える義理はねえ」

「ええ、ジンには関係ない。でも……私に話す義務はあつたはず。そうしないで消えたのは怠慢以外の何物でもないわ」

「……………」
「私は……私を私として見られない人に未練なんてない。何処へなりと消えればいいし、墮ちるなら墮ちればいい。私はあくまでギルドの人間として対処させてもらおう」

「……ククツ……。アーツハツハツハツ！」
ヴァルターが高笑いを上げていると、《翡翠の塔》の時と同じく、装置の機能が止まった。

「あ……………」
「戻るのか……………」

そして、結界は解け、屋上に風が吹いた。

「クク…………… 今回のお役目は完了か。…………… キリカ。最後に会えて嬉しかったぜ」

「私は嬉しさ半分、憂鬱半分ね。もう会うこともないでしょう」

「ああ…………… 後は俺とコイツの問題だ。しかしお前、こんな時くらいしおらしく振る舞えねえのか？最後までキツく当たりやがって」

「ふふ…………… そこに惚れていたのでしょうか？」

「クク…………… 違いない」

「お、おい！？」

「…………… ジン。どうして俺とジジイが死合うことになったのか…………… それが知りたければ俺を打ち負かしてみせと。ジジイがためえに遺した『活人拳』をもってな」

ヴァルターはためらうことなく塔から飛び降りた。

「なっ……………！」

「ちょ、ちよつと！？」

エステルたちは慌ててヴァルターの飛び降りた所に向けよった。

「……………」
「じよ、冗談でしょ！？《執行者》ってこの高さから落ちてても平気なの！？」

「全員が全員じゃないけど…………… 彼ほどの使い手なら無事でいても不思議じゃない」

「ああ、外壁を抉^{えぐ}ることで落下速度を落とすやがった。凄まじい硬功と化勁だぜ」

「まったく……人騒がせにも程があるわね」

「キリカ……。どうしてヴァルターがここに来てると分かった？」

「分からないでも思った？まったく……貴方といいヴァルターといい。男っていうのはどうしてこんなに不器用なんだか」

「うぐっ……」

「……………(じー)」

隣のヨシユアをじとつとした目で見るエステル。

「……反省してるからそんな目で見ないで欲しい」

「うーん……耳の痛い話やねえ」

「さて、私用も済ませたし、私はそろそろツァイスに帰るわ。……武運を。次の塔でも気を付けなさい」

「キリカさん……」

「ああ……分かってる」

アルセイユ 作戦室

「なんと……。たった1人で乗り込んだとは。いつもながら大した娘じゃわい」

「ツァイス支部のキリカ殿といえば非常に優秀な女性だと聞いています。一度会ってみたいものだ……」

「(うーん……ユリアさんとキリカさんか)」

「(優秀さでは良い勝負かもしれないね)」

「それはともかく……。今回も、塔は元に戻ったが屋上の装置も止まっちゃまったな」

「ええ……そうですね。屋上に現れた結界の正体もまだに分かっていませんし……」

「問題は、何のために屋上を覆っているのかですけど……」

「ま、悩むのは後だ。とにかく今は次の塔に急ぐしかねえだろ」
「うん……そうよね。ユリアさん。他の塔からの続報はある？」
「ああ……。今度は《紺碧の塔》だ。現れたのは鈴の音を響かせる黒衣の女性だったそうだ」

「あ……」

「《幻惑の鈴》ルシオラ……。たしかシエラさんの知り合いだったんですよね？」

「ええ、昔馴染みよ。次はあたしの出番みたいね」

「シエラ姉……」

エステルは不安そうな顔でシエラザードを見た。

「そんな顔しなさんな。姉さんは姉さん、あたしはあたしだわ。あくまで遊撃士としての使命を果たすだけよ」

メーヴェ海道

王国軍兵士がマーシア孤児院のテレサ院長と子供たちをマノリア村に送り届けようとしていたが、《結社》の人形兵器がしつこく追跡していた。

「くっ……まだ追ってくるのか」

「もう少しでマノリアの守備隊と合流できるのに……」

「ひるむな！必ず無事に届けるんだ！」

兵士たちは追跡してくる人形兵器を必死に牽制した。

「せ、先生……」

「大丈夫……心配いりません。あなた達には指一本触れさせませんから」

「さすがにピンチなの」

ポーリイが後ろを振り返った。

「！……」

前からも人形兵器が現れ、挟み撃ちにあってしまった。

「な……！」

「反対からだと!？」

これでは3人の兵士では到底相手できなかつた。

「ふええええん！」

「こ、こうなつたらオイラだつて……！」

「いけません!下がつていなさい！」

テレサ院長が子供を守るように前に出た。

「(女神よ……無力な我らを救いたまえ)」

その時人形兵器に銃弾が浴びせられ、その隙にクルツ、アネラス、グラッツが一掃した。

「あ、あんたたちは!？」

「も、もしかして……！」

「遊撃士さん……!？」

「へへっ、待たせたな」

「大丈夫?ケガはないかな？」

「う、うんっ……！」

「平気なのー」

「ふふ……間に合つて何よりだ」

「まあ、カルナさん……！」

茂みから銃弾を浴びせたカルナが姿を現した。

「久しぶりだね、院長先生。マノリアに避難する途中かい？」

「ええ、軍の方々に送つて頂いてたんですが……！」

「軍の方々!ここは我らが引き受けた！」

「子供たちを連れてマノリアに急いでください！」

「か、かたじけない！」

「みんな!我々に付いてきてくれ！」

「うんっ！」

「了解なの〜」

王国軍兵士たちは子供たちを連れて先へと進んでいった。そして、人形兵器たちは数を増やしてクルツたちに迫ってきた。

「さうと。なかなか骨が折れそうだな」

「だが……やるしかなさそうだね」

「大丈夫、何とかありますよ！《塔》に向かっているエステルちゃんたちに比べればこんなの軽いもんです！」

「ふふ、そうだな。彼らが心置きなく戦えるよう最善を尽くさせて

もらおう。方術 貫けぬこと鋼の如し。いくぞ、みんな！」

「おおっ！」

第14章 四輪の塔(5) (前書き)

第3の塔、《紺碧の塔》編です。

第14章 四輪の塔(5)

アルセイユ

「ルーアン地方か……。テレサ先生やあの子たちは今ごろどうしているのかな」

「多分、軍の部隊に守られて避難している頃だと思います。無事だといいですけど……」

「大丈夫、心配いらないよ。父さんの指示で、軍とギルドが協力して鎮圧に当たっているから」

「ヨシユアさん……」

「確かに、あの父さんに限ってその辺は抜かりはないかもね」

「ああ……あり得ねえな」

「遊撃士諸君。あと5分もしたら《紺碧の塔》上空に到着だ」

「シエラ姉……」

「ええ……。到着しだい出発するわよ」

エステルはもう1人にケビン神父を選び、《紺碧の塔》に向かった。

紺碧の塔

「《紺碧の塔》……。今度はどんな場所に飛ばされちゃうのかな」

「入ってみないと分からないだろうね。『表の塔』と違って、空間的な制約を受けないから内部構造はかなり違うみたいだ」

「は、落ち着かん話やね」

「とにかく……。入ってみるしかなさそうね。慎重に、そして確実に進むわよ」

紺碧の塔 異空間

《紺碧の塔》は一直線だった。エステルたちが進んでいると情報端末を見つけたので、データクリスタルを取ろうとしたその時、鈴の音が聞こえてきた。

「えっ……」

「今のは……」

「……下がって！」

上から人形兵器が降ってきた。

紺碧の塔 屋上

その後も、情報端末の前で2度戦闘があり、《紺碧の塔》でも4つのデータクリスタルを手に入れ、屋上に到着した。

「ふふ……少々、遅かったみたいね」

「姉さん……！」

「いらつしゃい、シエラザード。それからヨシユア……久しぶりに会えて嬉しいわ」

「ルシオラ……どうして貴女が教授に協力しているんだ？それほど教授と親しくはなかったと思っていたのに……」

「ここは私にとっても巡業で訪れた懐かしい地だから……。つい興が乗ってしまった、といったところかしら」

「な、懐かしい場所だっというのにどうしてこんな事してるの！？シエラ姉の気持ちも考えないで……！」

「エステル……いいわ。言葉で尋ねるだけじゃ姉さんは何も答えてくれない。答えるに値する実力をあたしが証明しない限りね」

「あら……うふふ。さすがに私のことをよく分かっているみたいね」「芸を覚えてくれた時はいつもそうだったから……。だから姉さん

……約束して。あたしが力を証明できたら《結社》に協力する理由を教えてくれるって……！」

「ふふ……いいでしょう」

幻惑の鈴ルシオラが式神を召喚した。

「で、出た……！」

「善鬼と護鬼　　陰陽司る式神たち！」

「東方の符術を私なりにアレンジしたものだ。シエラザード。見せてもらいなさい。私の元を離れてからあなたがこの地で得た力をね」

「……分かった。《銀閃》の力、とくと見てもらうわ！」

「あら……私の式神が倒されるなんて。《剣聖》の指導の賜物かしらっ？」

「はあはあ……」

「姉さん……どう!？」

「ふふ……頑張ったご褒美に教えてあげる。私が《結社》に入ったのは……自分の闇を見極めたかったからよ」

「え……」

「8年前……座長が崖から転落して亡くなった事は覚えているわね?」

「あ、あたり前じゃない。あの事故がきっかけであたしたちのハーヴェイ一座は……」

「そう……一座は解散してバラバラになってしまった。でも、どうして座長が一人であんな人気ひとけのない場所にいたのかとうとう誰にも分からなかった……。一体、どうしてだと思っ？」

「ど、どうしてっ……」

「答えは簡単……。あの時、座長は一人きりで崖の近くにいたのではないの。私が座長の側にいて……そしてあの人を突き落したのよ」

「……なに……何を言ってるの姉さん?」

ルシオラの言葉が理解できないシエラザード。

「ふふ、だから言ったでしょう。ハーヴェイ座長は私がこの手で殺したの」

「あはは……冗談キツイよ。だってあの時、姉さんは……」

「自分の手で座長を殺してから何食わぬ顔でみんなの元に戻る。そしてその場で鈴を鳴らして座長の叫び声の幻聴を聞かせる。」

私の幻術を使えば造作もないトリックだったわ」

「やめて……やめてよ！姉さんは座長を殺したなんて……そんな事あるわけないじゃない！本当の親子みたいに……それ以上に仲が良かったのに！」

「だからこそ赦せなかつた。あの人が私たちの元から去って行くこととしたことが……」

「え……」

シエラザードが驚いた時、

「また……！」

「戻るんか……！」

《紺碧の塔》が他の塔と同じく元に戻った。

「ふふ……どうやら時間切れのようね」

「ね、ねえ……。ここにあった結果って何のために張られていたの？《結社》は一体、何をしようとしているわけ？」

「残念だけど、私たちも詳しい事は教わっていないの。教授に指示された通りのことをやっていただけだから。ただ、隠された塔の内部を見て何となく見当はついたのだけど」

「え……」

幻惑の鈴ルシオラが鈴を鳴らすと、その姿が薄らいだ。

「待って姉さん！まだ全部答えてもらってない！どうして姉さんが座長を殺さなくちゃならなかったの！？……あんなに優しくかった……みんなの親代わりだった人を……！」

「ふふ……悪いけど今回はここまでよ。今度会えた時に続きは全部教えてあげるわ。それまで良い子にしてなさい」

そのまま幻惑の鈴ルシオラは消えてしまった。

「姉さん……！」

「あ、あの、シエラ姉……」

「シエラさん……」

「……大丈夫、心配しないで。あたしは姉さんの真実に一歩、近づくことができた。今は……それだけで充分よ」

「姐さん……」

「《四輪の塔》もこれで3つ……。《アルセイユ》に戻って最後の塔に向かいますよ」

エステルたちが《四輪の塔》の事件を解決している間、王国軍警備艇が《結社》の飛行艇を追いかけていた。

「ふん……往生際の悪い。多少、速力で勝ろうとも包囲網から逃れられるものか。そのまま追い詰めて拿捕せよ！」

「イエス・サー！」

王都グランセル

王都周辺の人形兵器を掃討した兵士たちをシード中佐とベルク副長が見守っていた。

「やれやれ、何とか夕刻までに人形どもを掃討できましたねえ。ようやく一息つけそうです」

「そうだな……兵たちも疲れているだろう。後の警備は後詰めに任せて今日はゆっくり休ませてやれ」

「了解ッ」

レイストン要塞

指令室で王国軍士官がカシウスに現状を報告していた。

「以上をもちまして各方面からの報告は終わりです。《アルセイユ》の遊撃士も含め、おおむね順調と言っていていいかと」

「ふむ……そうか」

「しかし、《結社》と言っても所詮は犯罪者の集まりですな。王国軍の敵ではなさそうです」

「油断するな。例の《方舟》が残っている。警備艇には引き続き王国各地の哨戒に当たらせる。なお、緊急指令は全部隊に徹底させるように」

「了解しました！」

王国軍士官が出ていくと、カシウスは一息ついた。

「緊急指令……異変時における行動指令書か。杞憂に終わってくればいいのだが……」

カシウスは立ち上がると無線器を手に取った。

「ご苦労。カシウス・ブライトだ。突然ですまないが彼をここに呼んでくれ」

第14章 四輪の塔(6) (前書き)

第4の塔、《琥珀の塔》編です。

第14章 四輪の塔(6)

アルセイユ

「《琥珀の塔》上空に到着した。斥候部隊からの続報もようやく入ってきたところだ。……塔から現れた襲撃者は巨大な鎌を持つ少女だったそうだ」

「そっか……予想はしてたけど」

「……レンちゃん……」

「《殲滅天使》レン……。僕が結社にいた頃はまだ《執行者》候補だったけど……。まさか、あの《パテルⅡマテル》を動かせるようになっていたとはね」

「ヨシユア……あの巨大人形を知ってるの？」

「結社ラボで開発された戦略級の巨大人形兵器だった。制御が困難で、開発計画は凍結されたはずだったけれど……」

「それをあの嬢ちゃんは楽々使いこなしてたんか……。未恐ろしいチビッコやで」

「……」

ティータの顔がどんどん曇っていった。

「大丈夫、ティータ。そんな顔しないでっば。絶対にあの子の目を覚まさせてあげるから！」

「お姉ちゃん……」

「……」

「えっと……ちょっと楽観的すぎるかな？」

ヨシユアが何の反応も示さないので少し不安になるエステル。

「……いや。ひょっとして君ならあの子の心に届くかもしれない。

一緒に呼びかけてみよう」

「……うん！」

「すいません、話に水を差すようですが、私も付いて行って構いませんか？」

「へっ……?」

「レインさん?」

「私としても彼女に聞きたいことがあるのですよ。それを今、話すことはできませんが……」

「うーん……どうする、ヨシユア?」

「………………。別にいいんじゃないかな」

ヨシユアはレインを一瞥するとそう言った。

「そうね、うん、頼りにしてるわ」

「ありがとうございます」

こうして、エステル、ヨシユア、レイン、ティータの4人で《琥珀の塔》に向かうことになった。

琥珀の塔

「いよいよ最後の塔か……。前みたいに一本道だったら迷わなくていいんだけど……」

《紺碧の塔》のことを思い出すエステル。

「手強いガーディアンに立ち塞がれるのも大変だけどね。もうすぐ日が暮れる……なるべく急いだ方が良さそうだ」

「うん、レンを止めなくちゃね。みんな……気合いを入れていきましょー!」

「うん……!」

「了解です!」

琥珀の塔 異空間

《琥珀の塔》は想像以上に複雑だったが、何とか屋上に辿り着いたエステルたち。

「もう……待ちくたびれちゃったわ」

「レン……！」

「うふふ。エステルってば悪い子ね。レンが留守にしている間に《方舟》から逃げちゃうなんて。でも、まあいいわ。こうして遊びに来てくれたんだし」

「レ、レンちゃん……」

「うふふ、ティータも遊びに来てくれたのね？アイスクリームはこ馳走できないけど、ゆっくりしていくといいわ」

「あ、あう……」

「それから……うふふ。やっと姿を見せてくれたわね。会いたかったわ、ヨシユア」

「……まさかこんな所で君と再会できるとは思わなかったよ。大きくなったね……レン」

「うふふ、当然よ。レンはもう11歳なんだもの。ヨシユアも、しばらく見ないうちにすごくハンサムになったのねえ。冷たい瞳をしていないのはちょっと変な感じがするけど……。でも、今のヨシユアも悪くないわ」

「そうか……ありがとう」

「まったくもう……相変わらずマセてるんだから。……あのね、レン。あたしたち、《結社》の計画を阻止するためにここに来たのよ」「うふふ、そうみたいね。レンも退屈なのはイヤだし、付き合っただけてもいいわよ」

レンが大鎌を取り出した。

「クスクス……楽しませてちょうだいね？」

「……レン……」

「悪いけど、あたしはレンと争うつもりはないわ。それよりも……話をしに来たの」

「お話？わあ、ひよっとしてお伽話でもしてくれるの？」

「ううん……《結社》の仲間になるって話。せっかく誘ってくれたんだけど、改めて断らせてもらおうと思って」

「ま、ヨシユアと再会できたし、仕方がないかもしれないわね。でも、考え直した方がいいわよ？ エステルたちが頑張ったって《身喰らう蛇》は止められない。それはヨシユアが一番よく分かっているはずよね？」

「……………それは……………」

「それに《結社》に入ればエステルはもつと強くなれるわ。そうすればレンと同じ《執行者》になれるのよ？ うふふ、ステキだと思うわない？」

「うーん、強くなれるっていうのは心惹かれないでもないんだけど……………。でも……………それは本物の強さじゃないと思う。少なくともあたしにとつてはね」

「……………え……………」

「あたしは確かに強くなりたい。お母さんみたいに大切な人を守れるくらいに。ヨシユアを心配させないように自分自身を守れるくらいに」

「エステル……………」

「でも、《結社》に入ったりしたらあたしはあたしじゃなくなっちゃう。本当の自分として強くなれなくなる。それじゃあ意味がないと思うんだ」

「……………分からない。エステルの言っていることはレンにはちつとも分からないわ。本当の自分ってなに？ それってどういうものなの？ エステルが一步前に踏み出す。」

「あたしは……………レンのことが好きだよ。マセてて、イタズラ好きで意外と思いやりもあって……………。色々と騙されちゃったけどあなたのことは憎めないのよね」

「……………エステル……………」

「でも、だからこそ……………だからこそあたしはレンに《結社》に居て欲しくない。大人になって、自分自身の意志で選ぶならともかく……………子供のあんたが、そんな場所にいること自体間違ってると思う。」

このまま大人になったら取り返しがつかなくなるから……………。だから

「……」

「………………。気が変わったわ」

「え……」

「……ッ……！」

レンがエステルに向かって鎌を振ったが、すんでのところでヨシユアが弾き返した。

「……！」

「ふふ……さすがヨシユア。なかなかの反応速度だったわ」

「君こそ……大したものだ。どうやら《殲滅天使》の異名は伊達じやなさそうだね」

「そう、レンは強いわ。闇に紛れて動くしかない《漆黒の牙》よりずっとね」

「ちよ、ちよつとレン！いきなり何をやるのよ！？」

「うふふ、気が変わったの。レンの仲間に入らないんだつたらエステルなんか死ねばいいわ。ヨシユアも、他の人たちも全員ね」

「っ……死ねばいいなんて物騒なこと言うんじゃないわよ！もく、アツタマきた！お尻百叩きにしてやるんだから！」

「エステル、落ち着いて。彼女を甘く見たら」

「ヨシユアは黙ってて！子供のしつけと同じよ！」

「クスクス、甘いわね。エステルのそういうところ、わりと好きだったけれど……。今は大嫌い」

突然、エステルたちの周囲を人形兵器が取り囲んだ。

「No, XV 《殲滅天使》レン。これより敵集団の殲滅に入るわ」

「あら、連れてきた子が全部やられちゃうなんて……。クスクス、結構やるじゃない」

「い。いい加減にしなさいよ！こんな事ばかりして本当にレンは楽

しいわけ!？」

「うふふ、もちろんよ。レンはね、人が苦しむ姿を眺めるのがとっても好きなの。ぼっかり空いた胸の穴が埋まっていく感じがするから。レンはね、人が痛がる声を聞くのがとっても好きなの。夜、ぐっすり眠れるから」

「……………」

「そうか……………君は今でも……………」

「……………ヨシユアは黙ってて」

「ねえ、エステル。レンには小さな頃、ニセ物のパパとママがいたわ」

「え……………」

「ニセ物のパパとママ。2人とも大好きだったけどお仕事が失敗しちゃってね。レンのこと、悪い大人たちに引き渡しちゃったのよ。」

『必ず迎えに行くからね』って泣きながら何度も繰り返してね」

「そ、それって……………」

「その人たちに引き取られた後、レンは色々なことをやらされた。大抵のことはすぐに慣れたけど痛くされるのだけは慣れなかった…。同じくらいの子たちもいたけどすぐに具合が悪くしちゃって居なくなっちゃうことが多かった。そんな生活が半年くらい続いたわ」

「……………くっ……………」

「……………レン……………ちゃん……………」

「……………それは、ある教団の仕業ですね。6年ほど前から子どもたちが大勢消える事件がありました。彼らはその子どもたちを使って人体実験をしたそうです。あなたもその1人ですね？」

「あら、お兄さん。その事を知ってるの？」

「ええ、私はあの教団を長い間追っていますからね。色々調べさせてもらっています。そして6年前のある日。教団が壊滅状態に陥った時、《結社》はあなたを引き取った……………」

「うふふ、その通りよ。ヨシユアとレーヴェがレンを迎えに来てくれたのよ」

「え……」

エステルがヨシユアを見た。

「……《結社》はたまに下劣な犯罪組織を潰すことがある。もちろん正義のためじゃなく自らの秩序に組み込むためにね。そんな任務の1つだったんだ」

「《結社》に引き取られてからレンは色々なことを学んだわ。ヨシユアからは隠形術を、レーヴェからは武術を教わった。他の人たちも、それぞれ得意とする分野を教えてくれた。そして《十三工房》では人形とお友達になる方法を教わって……。そこでレンは本当のパパとママに出会った」

上空からパテル「マテルが轟音と共に降りてきた。

「あ……！」

「あの時の人形ですね……」

「な、なんて大きさ……」

「ゴルディアス級戦略人形、《パテル「マテル》……！」

「子供のレンが《結社》にいること自体間違っている……？このまま大人になったら取り返しがつかなくなる……？」

レンがパテル「マテルに飛び乗った。

「そんなのウソ！《結社》に引き取られてからレンは本物のパパとママに会えた！この世で一番幸せな女の子になれた！」

「……レン……」

「それを否定するならエステルはレンの敵よ……。パパとママに潰されて苦しみながら死ねばいい……」

何とか《パテル「マテル》を退けたエステル。

「ふう……さすがに硬い装甲ですね」

「パワーも装甲も《パテル「マテル》以上だなんて……」

「……しぶといわね。いいわ、もう飽きちゃった。《パテル「マテ

ル』！出力全開でエステルたちを　」

レンが叫んだその時、装置が機能停止した。

「あ……」

境界が解けて空が見えたが、すでに夕方だった。

「も、戻った……」

「《塔》が解放されたのか……」

「……つまらないわ。もう少し保ってくれたらまとめて皆殺しにできたのに」

「ちょ、ちよつと!?!」

「うふふ……レンは《グロリアス》に戻るわ。《》が役目を果たしたら戻ってくるように言われたの」

「きよ、教授が!?!」

「《》が役目を果たした……? 《塔》が元通りになるのも計画の一部だったというのか!?!」

「さあ? レンも詳しくは知らないわ。ただ、ここを包んでいた境界は《環》の“手”だって聞いたけど」

「《輝く環》の……手!?!」

「クスクス……どういう意味なのかしらね? うふふ、それじゃあまたね。今度会った時は　まとめて殺してあげるから」

レンは《パテル》《マテル》に乗って去っていった。

第14章 四輪の塔(7) (前書き)

『第14章 四輪の塔』が終了します。いよいよ女神の至宝、
《輝く環》が現れる！

第14章 四輪の塔（7）

夜 アルセイユ

「各地に現れた人形や装甲獣はひとまず退治されたとのことです。警戒体制こそ続いていますますがじきにそれも解除されるでしょう」

「そうですか……」

「色々分からねえこともあるが《塔》の異変も収まったし……一息つけそうな感じだな」

「そうね…… そうだといいんだけど」

「だが…… どうにも敵の意図が見えんな」

「……………」

「エステルちゃん。なんか元気あらへんなあ。あのチビっ子のことか？」

「…………… うん……。あの子の事情も知らないで余計なおせっかいを焼いて…… 酷いこと言ったのかなって……………」

「お姉ちゃん……………」

「エステルさん……………」

「それに関しては私が彼女のことを教えなかったせいですね……………」

「うっん、レインさんのせいじゃない。あたしなんか、人生経験もないしみんなに守られてばかりで……………。そんなあたしが、あの子のこと救ってあげようだなんて…………… ムシが良すぎたのかもしれない……………」

「……………」

「…………… それは違うよ」

「え……………」

「レンはね…………… 本当の意味での天才なんだ。あらゆる情報を瞬時に吸収して自分の力として取り込んでゆく……………。どんな環境にも即座に適応して自分と周囲を制御してゆく…………… そんな能力を生まれながら持っていたらしい」

「そうなんだ……………」

「《結社》に引き取られる前、あの子が置かれていた環境はとても酷いものだったけど……。でも、僕と違ってあの子の心は壊れなかった。どんな環境すら、対処すべき環境変数として把握できたから……。だから自分を保ったままでいられた」

「で、でもそれって……！」

「うん……そうだね。いくら感情を制御できても心が痛くないはずはないと思う」

「……………」

「僕が知っている限り、レンがあんな風に昂ぶったのは見たことがない。それは多分、君の言葉がレン自身も気付かないような本当の部分に届いたからだと思う。……君だから出来たことだよ」

「ヨシユア……。……そういう事ならへこんでばかりもいられないか。見てなさいよ、レン！今度会った時は、本当のあんたと徹底的に向かい合ってやるんだから！」

「お、お姉ちゃんてば……」

「ふふ、やれやれ……」

「ははっ、それでこそエステルちゃんやで」

「ま、それはともかく……。とりあえず、これからどうする？《結社》の意図が分からない以上、王都に戻るのも何だと思うし……」

「それなんだが、今日のところはレイストン要塞に寄ってはどうか？そうすればカシウス准将と今後についても相談ができるだろう」

「あ、確かに……」

「そうした方が良さそうですね」

「それでは、ユリアさん。レイストン要塞に向かってください」

「了解しました」

「た、大変じゃあ！」

突然、ラッセル博士がブリッジに駆け込んできた。

「お、おじいちゃん？」

「ど、どうしたの？そんなに慌てちゃって……」

「お前さんたちが塔で見つけたデータクリスタルじゃが……その1

つを、たった今、《カペル》が解析したんじゃない！」

「えっ……」

「何が記されていたんですか？」

「《デバイスタワー》の機能じゃ！4つの塔は、《輝く環》を異次元に繋ぎ止めておくために建造されたものらしい！」

「い、異次元……？」

「そんな所に《輝く環》が！？」

「ちょ、ちょっと待ってや！それじゃあもしかして、あの《裏の塔》の空間は……」

「うむ、その次元に属していた空間なんじゃろう。そして《ゴスペル》の正体は……」

「ええ。《輝く環》の『端末』です」

いきなり、モニターが動き、ワイスマン教授が映し出された。

「！！！！」

「きよ、教授！？」

「なにッ！？」

「こ、この人が……」

「……………」

「ど、どうして勝手に……。リオン！一体どうなっているんだ！？」
ユリア大尉が通信士リオンに尋ねた。

「わ、分かりません！先ほど通信が入ったと思ったらいきなり制御が奪われて……」

「ハッキングというやつか……。高度な情報処理システムが仇になっってしまったようじゃの」

「フフ……初めまして、ラッセル博士。それだけのシステムを自力で実現されたとは驚きです。さすが、かのエプスタイン博士の直系の子の1人だけはある」

「ふん、イヤミか。言っておくが、航行制御はシステムから独立しておる。操ろうとしてもムダじゃぞ」

「いえいえ。そんな事はしませんよ。せっかくの決定的な瞬間を見

逃して欲しくなかったのですね。わざわざ連絡しただけなのです」

「なに……?」

「決定的な瞬間……まさか!」

「フフ、その位置だと前方甲板に出るといいだろう。それでは皆さん、よい夜を」

ワイスマン教授はそれだけを言い残し、通信が切れた。

「ヨシユア……!」

「ああ……甲板に出よう!」

アルセイユ 甲板

「ど、どこ……!?!」

「前方甲板から一番よく見える方向……」

「……あれや!」

ケビン神父がヴァレリア湖の方向を指さした。

ヴァレリア湖上空に一閃の光が走ったと思うと空間が割れ、巨大な輝く浮島のような物が現れた。それはまさに『浮遊都市』というにふさわしいものだった。

「な、な、な……」

「まさかあれが……あの巨大な都市が……」

「うん……間違いない……」

「《輝く環》……オーリオールつちゆう事か!」

「……いかん。ユリア大尉!急いで艦を降ろすんじゃ!」

ラッセル博士が我に返って叫んだ。

「……え……」

「カシウスが伝えた緊急指令があったじゃろ！急がんと手遅れになるぞ」

「……！！」

しばらくして《輝く環》から黒い光　　導力停止波が放たれ、王国中の光が消え失せた。

紅の方舟 《グロリアス》

「おお……！！」

「これは……」

「クハハ……マジかよ！」

「うふふ……ステキね」

「あはは！確かにこれはスゴイや！教授が勿体ぶってたのも納得だ！」

「フフ……お気に召したようで何よりだ。《輝く環》は永きに渡って異次元に封印されていた……。だが端末たる《福音》があればこちらの次元にも干渉できる。問題はレプリカの精度をどこまで上げられるかだったのだ」

「そして幾度もの実験を経て真なる《福音》は完成した……。《環》はそれらを通じて己を繋ぐ《杭》を引き抜き……。そして今、昏き深淵より甦った。それが第3段階の真相か」

「ククク……その通り」

諸君の働きのおかげで第3段階は無事完了した！これより『福音計画』は最終段階へと移行する！

第15章 混迷の大地（1）（前書き）

『第15章 混迷の大地』 始まります。

第15章 混迷の大地(1)

山猫号

「あ、ありえない……」

ジヨゼットが望遠鏡で《輝く環》を目の当たりにして驚愕していた。「な、なんなのアレっ!?あの大きさ……メチャクチャすぎるよっ!」

「ありゃあ、間違いなく5千アージユ以上はあるな……。巨大な浮島ってところかよ……」

「いや……基本は人工物みたいだな。島っていうよりは浮遊都市って言うべきかもしれん……」

「ふ、浮遊都市……」

「……こうしちゃいられねえ……」

ドルンは船全体に指示を出した。

「……よし、野郎ども!このまま浮遊都市に乗り込むぞ!」

「あ、兄貴!?!」

「ほ、本気なの!?!」

「本気も本気、大本気だぜ!もしも《結社》の連中がアレを甦らせたってんなら……ドデカイお宝がわんさと眠ってるに違いねえ!」

「か、勘弁してくれよ……。さすがにアレは俺たちの手に負えないぜ!ジヨゼットもそう思うだろ!?!」

「う、うーん……。ボクも、ここまで来た以上色々確かめてみたいかも……」

「ガクッ……」

「ま、まあ、昨夜から様子が変わだし用心はした方がいいと思うよ。導力通信も全然入ってこないし……」

「確かに、軍やギルドはともかく民間の通信も入らねえってのは……」

その時、金色の光の波が山猫号に差し込んだ。

「うおっ……」

「な……」

「ひ、光の波……?」

光の波が消えたかと思うと、山猫号のモニター、レーダーなどの導力で動くものが全て機能停止した。

「ええっ!?!」

「何だ、故障かよ!?!」

「お頭、大変だっ!」

空賊団員が血相を変えてブリッジに入ってきた。

「導力機関、飛翔機関共にいきなり停止しちゃったあ!」

「な、なんだとく!?!」

「ど、どうなってるわけ!?!」

「……こりゃあマズいな……。飛翔機関による反重力フィールド低下……。ついでに舵も無反応ときた」

「ちょ、ちよつと待て!?!」

「な、何とかならないの!?!」

慌てても何もできないこの状況。

「………………。この段階で俺たちに出来ることは1つしかない」

「それって!?!」

口を揃えてキールに尋ねるジョゼットとドルン。

「このまま天に召されないよう女神に祈ることくらいかな……」
そして、山猫号は重力に任せて落下していった。

昨夜の導力停止現象で各地は混乱状況にあった。

ツアイス中央工房

市民たちは中央工房に押し寄せ、事情の説明をマードック工房長に求めていた。

ミルヒ街道

突然の導力停止現象により王国軍の警備艇が街道の真ん中に墜落していた。

ヴァレリア湖上

間一髪で墜落を免れたアルセイユ。甲板ではユリア大尉とラッセル博士が今後の方針を話し合っていた。

遊撃士協会ボース支部

「ふむ、四輪の塔でそんな事があったとはな……。まったくご苦労じゃったな。ともあれ、お前さん達には報酬を渡しておくでしょう。エステルは報酬を受け取った。」

「……しかし、とんでもない事態になってしまったものじゃ。まさか、オーブメントが使えなくなってしまうことがこれほどの混乱を呼ぶとはの……。」

「うん……。日頃どれだけオーブメントの恩恵を受けていたのか思い知らされたわ……。」

「そうだね……。通信、交通、国防、生産ライン……。国家機能がマヒしたのと同じだからね。」

「市民にとって心配なのは照明と暖房でしょうね。昨日の夜はずいぶん街が混乱したんじゃないの？」

「うむ……。ギルド、工房、市長邸に市民が押し寄せて大変じゃった。何が起きているのか聞かれてもこちらも答えようがないの

う。おかげで寝不足じゃよ、ふう」

ルグラン爺さんは頭を押さえた。

「そっか……お疲れさま」

「例の浮遊都市の件もあるし、かなりマズイ状況みたいだな。パニック一歩手前ってところか」

「まあ、リベールは治安がいいから暴動の心配はなさそうだが……

この状況が続けば皆、参ってしまうかもしれない」

「うむ……早急に対策を取らなくてはな。で、お前さんたち

ラッセル博士から託された起死回生の策というのは何かね？」

「起死回生というほど大げさなものじゃないけど……」

「ラッセル博士が、新発明の試作品を提供してくれたんです」

昨夜 アルセイユ 作戦室

「これが試作品の『零力場発生器』じゃ」

「零力場……発生器？」

「簡単に言つと、《ゴスペル》が発生させる特殊な波長の導力場……。それによる共鳴を相殺する力場を発生する回路というわけじゃ

「……ちつとも簡単に聞こえないんですけど……」

「それはもしかして……『導力停止現象』を阻止できるということですか？」

「ええっ!？」

「ほ、本当ですか!？」

「うむ……その通りじゃ。結局、『導力停止現象』とは《ゴスペル》を通じてオーブメントの導力が吸収されるといふ現象じゃ。『何処へ』というのが謎じゃったがここへ至ってようやく明らかになった」

「あの浮遊都市……《輝く環》ということですね」

「うむ、その通りですわい。《輝く環》は、異次元から《ゴスペル

《という穴を通じて『導力停止現象』を起こしていた。その穴は余りに小さかったため影響範囲は狭くてすんでいたが……。《輝く環》が解放されたことでその範囲は一気に広がってしまった。それこそ王国全土を巻き込んでしまつくらいにな」

「王国全土……」

「それが今回の現象ですか……」

「うむ、おそらく王国にあるありとあらゆるオーブメントが動かなくなってしまうのはず。じゃが、この『零力場発生器』は《環》の干渉を阻止できる働きがある。言い換えれば、これの側にあるオーブメントは問題なく動くということなんじゃ」

「わあ……！」

「す、凄いじゃない！」

「へッ、そいつを使えば万事オツケーってわけか」

皆の顔が華やいだ。

「いや……そこまで都合は良くない。まず第一に、この試作品が守れる対象は限られておつてな。せいぜい両手で持てる大きさくらいのオーブメントくらいなんじゃ」

「両手で持てる大きさ……」

「むっ、そうなるのかなり限られてきちまうな……」

「第二に……数に限りがあるということじゃ。カシウスに頼まれていたとはいえ、16個しか完成できなかった」

「16個……結構多いと思うんだけど。って、父さんに頼まれていた？」

「うむ……しばらく前にわしの所に来て開発を依頼していったんじやよ。その時は、こんな騒ぎになるとは夢にも思っておらんかったが……」

「そ、そうなんだ……」

「さすが旦那。先の先まで読んでいたわけか」

「しかしそうなる……16個の使い方というのはほぼ決まっていますね」

レインが腕を組みながら言った。

「ほう……お前さん、なかなか鋭いな」

「え、え、どうということ？」

「王国全土のオーブメントが止まってしまっているという事は、当然通信網が断たれているということです。もし、ある地方で騒動が起こってしまった時、通信網がないと応援を呼ぶこともままなりません。これは物資などにも言えることです。つまり、情報交換ができるというのが混乱を抑える最善の方法なのです。これを考えると16個の使い方は……」

「各地にある通信器を回復させるために使う……つまり、そういう事ですね？」

「ええ、その通りです」

「そっか、確かに……」

「軍としても、導力銃や飛行船が使えなくなったのは致命的だが……。司令部や各部隊との連絡が途絶してしまったのも深刻だ。特に王城、ハーケン門、レイストン要塞の間の連絡は早急に回復しておきたい」

「ギルドにしてもそれは同じ……。支部間の連絡が取れなかったら何か起こっても対処できないわ」

「ふむ、異存はないようじゃの。それではユリア大尉。王国軍には10個の『零力場発生器』を渡そう。それだけあれば、アルセイユ、王都、レイストン要塞、ハーケン門、各地の関所がカバーできるじやろ」

「……かたじけない。早速、伝令を出して各地に届けさせるよう手配します」

「そして遊撃士協会には6つの『零力場発生器』を渡そう。各地のギルドにある通信器を回復させられるはずじゃ」

「うん……分かったわ！」

「間違いなく届けます」

「なんと……通信器が使えるようになるか！それは助かる！早速、その『零力場発生器』とやらを試してもらえんかね？」

「オツケー」

「ティータ、お願いできるかな？」

「うん。ちよつと待っててね」

ティータは通信器の蓋を開いて、『零力場発生器』を中に入れた。

「……………うん。これで設定は完了だよ」

「なんだ、えらく早いな？」

「えへへ、通信器の中に固定しちゃうだけですから。それじゃあ…

…」

ティータは通信器のスイッチを入れた。すると、通信器の電源が灯った。

「おお……！」

「やった……！」

「ふふ、どうやら本当に『導力停止現象』の影響を受けずに済むみたいね」

「えつと、それじゃあ続けてちゃんと通信が届くかテストしてみますね。アルセイユに残っているおじいちゃんに連絡してみます」

ティータは通信器のダイヤルを回した。

「もしもし……。あ……おじいちゃん！？うん！今、ボースのギルドにいるの。だいじょうぶ。ちゃんと動いているから。……うん…

…うん。おじいちゃんも頑張ってるね！」

どうやらちゃんと通信できているようだ。

「えへへ……ちゃんと通信も繋がりました」

「やった！」

「さすが博士の新発明だね」

「いやはや、博士には何とお礼を言ったらいいものか。ところで、ラッセル博士はアルセイユに残ったようじゃが……。姫殿下やケビ

ン神父はどうしたのかね？」

ルグラン爺さんが2人の姿が見えないことに気付いた。

「あ、その2人なら親衛隊の隊士さんたちと一緒に朝一番で王都に向かったわ。クローゼは女王様と、ケビンさんは大司教さんと、それぞれ話し合うつもりみたい」

「なるほど……。王家には王家の、教会には教会の有事における務めがあるようじゃな」

「それと、王都のギルドに『零力場発生器』を届けるのはその2人が引き受けてくれました。しばらくしたら、こちらにも連絡が入ってくるかもしれません」

「そうか……。助かるわい。では、お前さんたちはこれから残りの3つのギルドを回ってくれるというわけじゃな？」

「うん、そのつもり。……。本当なら、あの浮遊都市を何とかしたいところなんだけど……」

「そうね……。すでに《結社》の連中は乗り込んでるみたいだし……」

「だが、飛行船が使えねえんじやあ手も足も出ねえから……。へッ、どうにも歯がゆい状況だぜ」

「……………」

「ま、焦っても仕方あるまい。今は自分たちが片付けていくしかないだろう」

「だな……………」

「え……………気合いを入れていきましょう！」

「さてと……………当然、飛行船が使えないから徒歩での旅になるんだけど。ロレント支部とルーアン支部、どちらから回った方がいいかな？」

「そつだね……………どちらから回っても構わないと思う。大変なのはど

の地方も同じだからね」

「そっか……確かに」

「ま、こんな状況だ。どちらに行くにせよ、各地の様子を確かめながら移動する必要はあるかもな」

「恐らくどの地方にも何らかの問題は出ていると思います」

「ああ、困っている連中がいたら力になってやらんとな」

「うん……そうね！」

エステルたちはロレント支部から回ることにした。

第15章 混迷の大地(2) (前書き)

地方都市ロレント編です。

第15章 混迷の大地(2)

遊撃士協会ロレント支部

「あら……」

「どうも、アイナさん」

「……お久しぶりです」

「良かった……無事だったのね。あなた達が《塔》に行ってる時に異変が起きたから心配したのよ」

「うん、危なかったけど何とか大丈夫だったわ。そっちの方こそ大変だったんじゃない？」

「そうね……さすがに騒ぎは起きたけど大事には至らなかったわ。クラウス市長やデバイン教区長が混乱を治めてくれたのが大きいわね」

「そっか……」

「それはともかく、ヨシユア。本当によく戻ってきたわね」

「はい……。色々と心配をおかけして申し訳ありませんでした」

「ふふ、いいのよ。受付にとって遊撃士というのはある意味、子どもと同じようなもの。まして最初のブレイサー手帳を渡した相手なら尚更だわ。戻って来てくれて本当に良かった」

「アイナさん……」

「えへへ……よかったね、ヨシユア。そうだ、アイナさん。実は色々と話しておかなくちゃいけないことがあるんだけど……」

「ええ……あの浮遊島についてね。くわしい事情を知っているなら教えてくれるかしら？」

「はい、それでは」

エステルたちは《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。

「そっ……あれが《輝く環》。想像していたものからはかなり違っていたけれど……いずれにせよ、今の私たちがどうこうできる相手

ではなさそうね」

「ああ……ム力つくことにな。まずは体勢を立て直すしかねえだろ」
「ええ、その意味でも通信器が使えるようになるのは助かるわ。さつそく、その装置を設置してもらえるかしら？」

「ええ、それじゃあ……」

ヨシユアが『零力場発生器』を通信器に取り付けた。

「……これで大丈夫です」

そして、電源を入れると通信器が復活した。

「動いた……」

「これで通信器は使用可能になりました。ただし、先方の通信器が直っていることが前提ですが」

「助かるわ……本当に。ありがとう、みんな。この借りはきつと返すわね」

「もう、アイナさんってば水臭いこと言わないでよ」

「僕たちの仕事にも関わりがあることですから」

「まあ、この調子で残りのギルドの通信器も直していくつもりだが……他に手伝うことはあるかい」

「そうですね……。掲示板に出ている仕事は一応チェックしてくれますか？それと、ロレント近郊で問題が生じていないか確かめてもらえると助かります。特にリッジが行っているマルガ鉱山は気になりますね……」

「え、鉱山で何かあったの？」

「いえ、事件ではなく警備の仕事よ。以前の落盤事故で、坑道の一部が魔獣の巣と繋がったことは覚えている？数日前に本格的な封鎖工事を始めた矢先だったのよ」

「そんな時にこの異変が起きたわけか……。……確かに気になりますね」

「ええ、時間があるならぜひ様子を見てきてちょうだい」

「うん、了解よ。テイオの家とか鉱山とか人がいそうな場所を回ってみるわ」

「そうだね……なるべく気を付けておこう」
「ふふ、よろしく頼むわね」

マルガ鉱山

「ううむ……。こりゃあ、参ったぞ」

鉱員のラングがエレベーターの前で1人唸っていた。

「あの、どうかしたの？」

「おお、誰かと思えば遊撃士の姉ちゃんたちか。いつぞやは世話になっただねえ」

「あはは、懐かしいわね」

「七耀石の運搬に来て、落盤が起きた時のことだね。確かに懐かしい話だけと思いい出話をしている場合じゃないよ」

「おっと、そうね」

「ああ、実はエレベーターが動かなくなっちゃってよ。坑道にいる親方たちと交代もできねえ状態なんだ」

「坑道では工事をしていたと聞いたが？」

「ああ、例の落盤で空いた穴を塞ぐ作業をやっているところだったんだ。骨組みはもう入れちまったけど、地盤を固める処理がまだだよ」

「例の落盤で開いた穴って……」

「うん、僕らが来た時に魔獣の巣と繋がった所だね」

「おう、その穴のことさ。あの後すぐ親方が発破で埋めちまったんだが……。魔獣の巣に繋がっている物騒な場所だからなあ。きちんと工事をしようってそういう話になったわけさ」

「なるほど……。それでリッジさんに警備を要請したんですか」

「でも、そんな工事の最中に停止現象が発生したわけよね。……何も起きてないといけど」

「ヤバそうな状況だな……。ここは下に降りて状況を確認した方が

いいぜ」

「おう、もちろんそうして欲しいトコだが……。でも、どうやって下に降りるつもりなんだ？肝心のエレベーターが動かねえんだぜ？」

「む、むう……。そういえばそうだったわね」

「あれもオーブメントで駆動している機械だからね」

「他に下に降りる道はないのか？」

「何言つてやがる。あれば俺がとっくに使ってるぜ」

「おっと、そりゃあそうだな」

「でも、だからって諦めるわけにはいかないわ。こうしてる間も鉱員さんは地下で待つてるんだから」

「そうだね。ここはどうにかしないと……。すまねえが、知恵を貸してくれ。きつと親方たちも助けを待っているはずだ」

エステルがエレベーターのスイッチを押したが反応がない。

「やっぱり動かない……」

「エレベーターの制御キーは挿してある。機能しねえのは導力停止現象の影響だな」

「導力停止現象の影響……。もしかすると……」

レインが独り言のようなことをつぶやいた。

「レインさん、どうかしたの」

「このエレベーターの導力で動く部分はさほど大きくないようです。それならば、ラッセル博士の『零力場発生器』を使えば……」

「あっ……！」

「なるほど……。このエレベーターは駆動部を内蔵したタイプですよね？」

ヨシユアが鉱員ラングに尋ねた。

「え……。？あ、ああ……。確かにその通りだぜ」

「そうですか……」

ヨシユアはエレベーターの駆動部を覗き込んだ。
「制御キーの差込口はここ……。……とすれば、駆動用のオープン
ントはその直下か」
ヨシユアが零力場発生器をエレベーターの操作盤に押し当てた。す
ると、《ゴスペル》から放たれる黒い光 《環》の干渉波が放
たれた。
「う、うおっ!？」
「あ……。こ、この光って……」
「あのゴスペルと同じ光だな……」
「大丈夫……導力波が干渉しているだけです」
「ということは……」
しばらくすると干渉波が消えてしまった。
「き、消えちまったぞ……」
「いえ、これでいいと思います。私の考えが正しければ干渉波が消
えたことで導力が回復すると思います」
「……………」
スイッチを押すと、エレベーターが下がった。
「う、動いたっ!？」
「よし……導力が戻った!早く乗って!行くなら今しかない」
「おっ!」
「お、俺も行くぜ!」
「おじさんダツシュ!」
「降下開始します!」
「わわっ……。わ、わ、わ、わ……」
エレベーターは下がったり止まったりの繰り返して動きはぎこちな
かった。

「ふう……」

「な、なんでこんなにガタつくのよ……」

「たぶんオーブメントの導力が十分じゃないんだろ。ともかく降りて状況を確認するでしょうか」

「おっと、灯りが用意してあるじゃねえか。……坑道の方も静かなもんだ。もしかすると、俺たちの考えすぎだったかも……。……おんやあ？」

「どうかしましたか？」

「あ、誰かこつちに来るんだよ。おお、なんだよ。ありゃあテイントの奴じゃねえか。おい、テイント！そんなところでどうしたあ？」

「お、おい……。何を焦ってやがる？」

「う、うしろ……」

テイントは来た方向を指差した。

「……は？」

「だ、だから後ろだってば！」

ラングが振り向くと、魔獣の群れがラングに迫っていた。

「ふ、ふおおおおっ！！」

エステルたちがラングの間に割って入った。

「チッ、いきなりお出ましかよ」

「はは、大歓迎ってとこだな」

「まさか、また魔獣の巣が？」

「だと思っけど……。考えてる暇はどうやらなさそうだね」

「何とか撃退できたわね……」

「思ったより手強かったな」

「ええ、油断は禁物ですね」

「お、おい……。遊撃士さん」

「も、もう出て行っても大丈夫？」

「あ、うん、大丈夫よ」

後ろで震えあがっていた2人はホツとした様子だった。

「はあくありがとう助かったよ。君たちのおかげでおいしくゴハンが食べられるさ」

「こら、バカ。なに悠長なこといつてやがる。親方たちはどうした？まずそいつを教えやがれ」

「うん、とにかく今は状況を把握することが先決ね」

「やはり事故が起きたんですか？」

「う、うん…… そうなんだ。昨日の工事中に魔獣除けの導力灯が消えちゃってね。仕方ないから工事を中断してここで待機してたんだよ。そしたら今朝、現場から魔獣の大群が溢れ出して……。ブルル……ぼ、僕も危うく食べられちゃうところだったよ」

「ちよつと待った。ギルドから警備に来た遊撃士がいたはずでしょ？」

「あ、ああ……。そのお兄さんが僕らのために時間を稼いでくれたんだ。けど、最後にはあの人もま、魔獣の群れに飲み込まれて……」

「……」

「……」

「マズイな……」

「……すぐに行動すべきですね」

「とにかく、鉱員を探した後に遊撃士の救出に向かいましょう。まずは鉱員の方たちが先ですね。」

「……ん、了解よ。心配だけど、それがあたしたちの使命だもんね」
「ぼ、僕はお腹が減っちゃって飛び出してきちゃったけど……きつと親方たちはまだどこかに隠れているはずだよ」

「ここには全部で何人いる？」

「あと4人いるはずだ。遊撃士の兄ちゃんを入れれば5人さ」

「了解したわ。すぐに搜索を始めましょ」

「うん、急ごう！」

「は、早く戻って来てくれよ」

「く、くそ、テイントのヤツ、1人で逃げるなんてズルイぜ。の、残された俺が寂しすぎるじゃないかよ……」

鉱員のポンズがぼやいている時、背後から魔獣の群れがやってきた。

「うっ……やばい……」

慌てて逃げようとしたが、前からもやってきて逃げ道が塞がれてしまった。

「げげっ！？や、やばい！！絶体絶命じゃねえか！うわ、だ、誰か……！！」

エステルたちが慌てて駆け込んだ。

「あ、あんたたちは！？」

「その質問は後でね！」

「すぐに助けますから！」

「はあ、はあ……。あ……。死ぬかと思った」

「ふっ、何とかやつつけたわ……」

「ギリギリのタイミングだったね」

「ひゅっ……。ほんと間一髪だったな」

「まったく……。心臓に悪いですね」

「あれ、もしかして君たち……落盤事故で助けてくれたあの遊撃士さんたちかい？」

「うん、ご名答」

「もつとも、当時の僕らはまだ準遊撃士でしたけど」

「へ、それじゃあ無事正遊撃士になれたわけか。んー、そう言われてみると何か風格が出てきた気もするね」

「えへへ、本当に？……なーんて、なごやかに談笑してる場合じゃないわね」

「うおっと……そ、その通りだね。で、これから僕はどうすればいい？」

「すぐにエレベーター前に避難してください。魔獣に見つからないよう迅速にお願いしますよ」

「う、うん……わかった。それじゃ、君たちも気を付けてな」

「おお、女神エイドスよ……。我らにどうか救いの手を……」

「シーツ、静かにしろい！なにブツブツ言ってるやがる。魔獣が寄ってくるだろうが！」

「ふん、この前の落盤の時だってこのお祈りで助かったんだぞ。君もちよつとは信仰心を持ったらどうだい」

「鉦員2人がヒソヒソと話し合っていた。」

「あ、あんたたちは！？」

「遊撃士協会の者です。みなさんの救助に来ました」

「2人とも、怪我はない？」

「あ、ああ……何とか……」

「おお、女神よ……」

「信仰深いのは結構だが、感謝を捧げるには早すぎるぞ。今は一刻も早くここを脱出するでしょう」

「確かに……少し早かったみたいですね」

「エステルたちの後ろから魔獣の群れがやってきた。」

「う、うわっ！？」

「女神よ、ご慈悲を！」

「来るぜ！気をつける！」

「よし、撃退したわよ」
「ブルブル……。おお、女神よ……」
「冷や汗もんだったな……」
「すぐエレベーター前に避難してください。魔獣がいる可能性もあるので迅速にお願いします」
「お、おう！了解したぜ！」
「君たちにも女神のご加護があらんことを」
「鉦員の2人は逃げるように避難していった。」

「あつ……。！？」
「あれは……」
エステルたちの先ではガートン親方が魔獣の群れに囲まれていた。
「ち、畜生……。魔獣をこっちにひきつけたまでは良かったが……。う、うーむ……」
ガートン親方の後ろに逃げ道はなかった。
「……。こりゃあ、どうやらやりすぎちまったようだな。アーニヤ、フリッサ……。すまねえ……。どうやら俺はここまでらしい」
「親方さん！」
エステルたちが飛び出した。
「お、お前さんたち！」
「諦めないで！ぜったい助けるから！」
「正攻法では間に合わん。一気に血路を開くぞ！」
「はい！」

「ふう、なんとか……」

「……片づいたみたいだね」

「大丈夫か、オッサン？」

「お、おう……。この程度はカスリ傷だ。いやあ、それにしても良く駆けつけてくれたな。たまには事故以外で会ってみたいもんだぜ」

「あはは、確かに……。なぜかいつも鉱山に來ると緊急事態になっちゃうわね」

「ふう、まったくです……。でも積もる話はまたの機会にしましょう。今は一刻も早く避難してもらわないと……」

「おっと、そうだったな」

「テイントさんたちはエレベーター前にいるわ。とりあえずそこまです避難してちょうだい」

「おう、そうさせてもらうぜ」

ガートン親方が避難しようとした時、エステルたちに振りかえった。

「……そついや、おまえさんたち。支部から警備に來てくれた遊撃士の兄ちゃんだが……。あいつはもう避難したのか？」

「あ、リッジさんのことね……」

「いえ、残念ながら……。僕らもまだ姿を見ていないんです」

「やっぱりそうか……。もし見つからなかったら工事現場に行ってみてくれ。あの兄ちゃんはおそこで時間を稼いでいたんだ」

「……ん、わかった」

「うむ、参考にさせてもらおう」

「さてと……。これで全員よね？」

「うん、鉱員さんたちはすべて救助できたはずだよ」

「となると、後はリッジか……。今まで調べた場所にはどうやらないようだな」

「確か、親方さんは現場に行けって言うてたわね。リッジさんはそこにひとりで残ってたって……」

「考えてる場合じゃねえな。手遅れになる前にその現場とやらに行くぞ」

「落盤現場はこの北西のはずです」

「よし！行きましょ！」

落盤現場

「この先が魔獣の巣……」

「こりゃひでえな……。魔獣の匂いしかしねえぞ」

「踏み込んだらもう後には退けない……。エステル、装備の確認は大丈夫？」

「うん……準備OKよ」

「よし、それじゃあ行こう！」

魔獣の巣

「うっ、うっ……」

そこではリッジが1人で魔獣の群れと戦っていた。

「ぐあっ……！う、うっ……」

しかし、体力は限界で成す術がなかった。

「リッジさん！」

「大丈夫ですか！」

エステルたちが突入し、リッジをかばった。

「あ、あれ……エステルにヨシユア。な、なんで……こんな場所に……？」

「もちろん、助太刀に来たのよ」

「後は僕たちに任せてください」

「そ、そうか……助かるよ。で、でも、気を付けて。敵は目の前だ

「けじゃ……………」

「そこでリッジは気を失ってしまった。」

「むっ……………。いかん、退がれ！」

「ジンが叫ぶと、巨大な魔獣が上から現れた。」

「な、なによアレ！」

「俺が知るか！」

「はは、これはたまげたな」

「正体はともかく……………歓迎されていないのは確かだね」

「！？」

「やれやれ……………。ここは私1人に任せてエステルさんたちはリッジさんを連れて避難してください」

「な、何を言うの、レインさん！？」

「これだけの数を相手にするのは無茶です！」

「なに、これでもS級遊撃士の端くれです。今はリッジさんを避難させるのが先です。事態は一刻を争いますから早くしてください」

「で、でも……………」

「確かに……………リッジさんやエレベーター前に避難している鉱員の皆さんが心配だ。エステル、ここは……………」

「……………っ……………。わかった、レインさん、無事でいてね」

「こんな所でくたばるんじゃねえぞ！」

「鉱員の所はまかせておけ！」

「ええ、よろしく頼みますよ！」

「エステルたちはリッジを連れて避難していった。」

「さて……………。巨大魔獣が1匹と、取り巻きが10匹ですか。面倒ですが、相手ではありませんね」

「レインが剣を構える。」

「全てまとめて私の剣の錆にしてあげましょう」

エレベーター前

「レインさん……大丈夫かな？」

「今は無事を信じるしかないね」

エステルたちが心配そうに待っていた時、

「いえいえ、心配しなくても大丈夫ですよ」

「あつ、レインさん！」

「無事でしたか……。しかし、こんなに早く帰ってくるとは……。さすが、S級遊撃士ですね」

「そんな事はありませんよ。しかし、こちらは無事のようにですね。

あまりこのような所に長居したくありませんから、早く上に上がりましょうか」

「うん、そうね」

導力停止現象に端を発したマルガ鉱山の危機はこうして無事に終結を迎えた。

鉱員たちと無事を喜び合い、彼らを地上へと脱出させた後……

リッジを町に送り届けるため、事件の報告に向かう鉱山長と共に一路ロレントを目指すことになった。

遊撃士協会ロレント支部

「なるほど、そんな事が。一步間違えればひどい結末を迎えていたかもしれないわね」

「ああ、俺たちが助かったのはここにいる姉ちゃんたちのおかげさ。前に助けてもらった時は危なっかしく感じたもんだが……。今日は落ち着き払ってて別人を見ているみたいだったぜ」

「え？そ、そうかな……。べ、別にそんなに変わってないと思うけ

ど」

「謙遜することあねえぞ。こいつあ、俺が感じた本当の話なんだからな」

「謙遜というか……エステルの場合、本当に気付いてなさそうだけど」

「違いねえぜ。こいつは単純だからな」

「でも、それがエステルさんの良いところでもありますけど」

「む、むう……。ほめられてるハズなのに何だかうれしくないわね」

「誰しも自分自身の変化には気づき難いものよ。少しずつ、時間をかけて変化していくものだから」

「ああ、俺は久々だったから気付いたのかも知れねえな。ともかく、遊撃士として立派な働きだったぜ」

「エステルにヨシユア。それにジンさん、アガット、レインさん……。本当によくやってくれたわね。私もギルドの一員としてあなたたちを誇りに思うわ」

「うん、どういたしまして」

「これからもよろしくお願いします」

「まあ、使命を果たしたまでさ」

「へっ、これくらい当然だぜ」

「ええ、当然のことをしたまでです」

「さそれと、まだきちんと礼をしてないのに悪いが……。そろそろ鉱山の方に戻らせてもらおうとするぜ。事故があった後とはいえ、一応は操業を続けてるんでな」

「あれ、そうなんだ」

「ああ、上層の坑道でも十分仕事はできるからな。警備に来てくれた兄ちゃんにもよろしく言っておいてくれよ。あいつ、大丈夫だったのか？ ひどくやられていたようだ……。」

「ええ、あちこち痛めているけど遊撃士にとってはかすり傷よ。もう意識を取り戻して今はホテルで休んでいるわ」

「そうか……。それなら一安心だな。そいじゃあ、これで失敬する

ぞ。まったく今日は助かったぜ」

「親方さんも気を付けてね」

「お仕事がんばってください」

「おう、またな」

ガートン親方はギルドを出ていった。

「さて、これで一件落着ね。リッジもあなた達も、今日はよく働いてくれたわ。これからもその調子で活躍を続けてちょうだい」

「はい！」

エステルたちは次にルーアン支部に向かうことにした。

第15章 混迷の大地(3) (前書き)

海港都市ルーン編です。

第15章 混迷の大地(3)

遊撃士協会ルーアン支部

「やあ、何かお困りの事でも あれっ……!？」

「どうも、ジャンさん」

「……ご無沙汰しています」

「エステル君……それにヨシユア君も……!そうか……みんな無事で何よりだよ。君たちが《塔》に行ってる時に例の現象が起こったからさすがに大丈夫か心配だったんだ」

「あはは……心配してくれてありがとう」

「こちらは何とか大丈夫です。ルーアンの方こそなかなか状況は厳しそうですね」

「ああ……かなり混乱している最中さ。あの貝殻みたいな巨大な物体が湖の上に現れたかと思ったら全ての導力器が動かなくなったんだ。新市長のノーマン氏もさすがに対応しきれなくてね。正直、《レイヴン》のメンバーや七耀教会の人たちがいなかったら市内はパニックに陥っていたと思う」

「え……」

「《レイヴン》の連中が……何だってえ？」

なぜここで《レイヴン》の名前が出てくるのか不思議で仕方ないエステルたち。

「例の導力停止現象の直後、パニックが起こりそうになった時に率先して混乱を収拾してくれたんだ。今も有志としてギルドに協力してくれているよ」

「マジかよ……」

「そっか……やっとやる気を出したんだ」

「さらに面倒なことが1つ。よりもよって跳ね橋が上がっている時に例の異変が起きてしまったね……。おかげで手漕ぎのボートでしか街区の移動ができなくなってしまったんだ」

「そうなんだ……。確かにそれしか方法はないもんね」

「ただまあ、いつまでもこの状況が保つとは思えない。各地の支部や王国軍と協力して対策を立てていきたいんだけど……。通信器も使えないから連絡が滞っている有様でね……」

「安心して、ジャンさん！あたしたちが良い物を持ってきてあげたから！」

「良い物……？」

「はい、実は……」

「エステルたちはジャンに《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。

「そうか……。やはり巨大な物体は《結社》の仕業だったんだな。でも、通信器が使えるのはとんでもなく助かつちゃうよ！さっそく設置してくれるかい？」

「はい、それでは」

ヨシユアが通信器に『零力場発生器』を付けた。

「……これで設置は完了です」

そして、通信器の電源を入れた。

「おお〜！？」

「これで通信器は使用可能になりました。ただし、先方の通信器が直っていることが前提ですが」

「いや、それでも大助かりさ！この状況で、情報があるのとないのとでは天地の差だからね。ラッセル博士と君たちにお礼のキスをしたい気分だよ！」

「あはは……気持ちだけ受け取っておくわ」

「まあ、この調子で残りのギルドの通信器を直していくつもりだが……他に手伝うことはあるかい？」

「そうですね……。一応、掲示板に出ている仕事をチェックしておいてください。それと、ルーアン近郊で民間人がいそうな場所の様子を確かめに行ってくれると助かります」

「確かに、こんな状況だしパトロールは必要かもね」

「できる限り気を付けて回ってみることにします」
「ああ、よろしく頼むよ」

ヴィスタ林道

「うわあああ〜っ!!」

奥の方から少年の声が聞こえてきた。

「今のは……!？」

「急ごう、エステル!」

「あつっ……。く、くそ……。どうしてこんな事に……。は、早く報告せなくちゃ」

ジェニス王立学園の生徒、ミックがヴィスタ林道を走っていると、装甲獣が追いかけてきた。

「ひっ……」

装甲獣がミックに飛び掛かった時、エステルがそれを弾いた。

「あ、あんたら……!？」

「話は後で!こいつらを追い払うから!」

「下がってて。巻き込まれると危険だ」

「なんでこんな場所に装甲獣がいやがる……!」

「……来るぞ!」

「ふう……。さすがに手強かったわね」

「ああ……。何とか間に合って良かった」

「た、助かった……。エステル……。それにヨシユアだったな。すま

ねえ……危ない所を助けてくれて……」

「ま、それがあたしたちのお仕事みたいなもんだから」

「それよりも……いったい何があったんだい？今の魔獣、このあたりで普通にいるヤツじゃないよ？」

「そ、それが……。学園が……。王立学園が襲われたんだ！」

「なっ……！？」

「……詳しく話せ」

「あ、うん……。俺……。いつものように校舎裏で授業をサボってたんだけど。紅い装甲の兵士たちがいきなり正門から入ってきたんだ。用務員のオツサンが止めようとしたんだけど……。そ、そいつらが銃で……。オツサンを、う、撃って……」

「そ、そんな……」

「まずいな……」

「それを見て俺……。頭が真っ白になっちゃってさ……。何とか助けを呼ぼうとここまで逃げてきたんだけど……」

「……事情は分かった。このままルーアンに行ってギルドに伝えてくれるかい？僕たちはこのまま学園の近くまで行ってみるから」

「わ、分かった……。あいつら、今の魔獣以外にもでかい人形みたいなのを連れてた……。くれぐれも気を付けてくれ！」

ジェニス王立学園前

エステルたちはシェラザードとティータを呼び寄せた。

「話を聞いて飛んで来たはいいけど……。かなり危険な状況みたいね」

「い、一応ジャンさんが王国軍に連絡したけど……。応援が来るにしてもちよつと時間がかかるかもって……」

「そっか……」

「どの道、導力兵器が動かない以上、軍の部隊もアテにならないだろう。白兵戦に慣れている俺たちがケリをつけるしかなさそうだ」

「ただ、学園の関係者が捕まってる可能性が高いだろう。迂闊に動くのもヤバイぞ」

「確かに……。何とか内部の状況が分かるといいんだけど……」

「………………。少しだけ待ってて。学園内の様子を調べてくるよ」

「ヨ、ヨシユア！？」

「……………どういうこと？」

「偵察などの隠密行動は僕が最も得意とする分野です。敵戦力と人質たちの状況を一通り調べられると思います」

「なるほどな……」

「ふむ、それが可能なら是非ともやってほしいところだが」

「で、でも！それって危険なんじゃ！？」

「大丈夫、もつと厳しい状況で潜入活動をしたこともあるから。心配はいらないよ」

「で、でもでもっ！」

「……………ヨシユア。どうしても1人で行くつもり？」

「私も手伝いたいと言いたいところですが……。潜入活動は1人の方が動きやすい上に見つかりにくいですからね」

「ええ、その通りです。だから1人で行かせてほしい」

「そっか……。……………1つだけ確認。あの時の約束……。ちゃんと覚えているよね？」

「最後まで一緒に歩いていく、だね。大丈夫　絶対に忘れないから」

「うん、それならよし！ヨシユア……。くれぐれも気を付けてね」

「うん、分かってる。それでは行ってきます」

ヨシユアは学園内に潜入した。

「おい……………いいのか？」

「……………うん。この状況で付いていったらかえって足手まといになるし。それに……………ヨシユアを信じているから」

「お姉ちゃん……………」

「ふふ……いい女になったじゃない」

ジェニス王立学園

「……………」
ヨシユアは建物に身を隠し、中庭の様子をうかがった。

「（……どうやら建物の裏手を移動した方がよさそうだ。あとは建物にいる人質と大体の敵戦力さえ掴めれば……）」
まずはすぐ側の男子寮を確認した。

「（男子寮内の敵兵は2名……。こんな風に、全ての建物を一通りチェックしておこう……）」

男子寮

「（男子生徒2人と撃たれた用務員の人か……。あの様子だと致命傷じゃなさそうだ。まずは一安心かな……）」

次に食堂・クラブハウスに向かおうとしたがかなりの距離があった。

「（……仕方ない。一気に駆け抜けるか）」

ヨシユアは得意の隠形術で一気に駆け抜けた。

クラブハウス

「（敵兵士は4名……。何か起こった時のための待機要員といったところか。もしかしたら2階には人質がいるかもしれない）」

学園本館

↳ 学園長室

「ギルバード君……。一体どういふつもりだ。何故このような狼藉を働く？」

「フフ……。目的は2つです。まず我々は、王国内に更なる混乱をもたらすよう上から指示されていましてね。そこで我が懐かしの母校を舞台に選ばせてもらったんですよ」

「……変わったな、ギルバード君。学生時代の君はあんなにも熱心に政治への道を志していたのに……。いつから君の情熱は失われてしまったのかね？」

「理想は理想。現実とは醜いものですよ。ミラと権力こそ全て……。ダルモアの秘書をしていた時に僕はその真実を悟ったんです。いずれは市長を追い落とし後釜に座るつもりでしたが……。遊撃士どものおかげで目論見がパーになりましたね。そこで、別の形で権力を掴むことにしたのです」

「愚かな……」

「クク……。何とも言うがよいでしょう。そしてもう一つの目的は……。リベール王家の姫君ですよ」

「！」

「噂によると、この学園に在籍なさっているようですね。どの生徒がそうなのか教えて頂きましょうか？」

「……何を言っているのかさっぱり分からないな。確実に言えることは……。この学園にそのような娘は存在していないということだ。君の完全な見込み違いだぞ」

「はは、あくまでトぼけるおつもりですか。まあいい、時間はたっぷりある。じっくり見定めるとしましょう」

「くっ……」

「（彼が今回の首謀者か……。そういえば学園のOBという話だったな）」

〈職員室

「（教師の姿が見当たらない……。多分、別の場所で監禁されているのだろう）」

〈受付

「（死角になって分からないけど廊下の方から気配がする……。多分、見張りの兵士だろう）」

〈教室

「（あ……）」

中にはジルとハンスを含めた人質の生徒がいた。ヨシユアが窓をノックして

「なんだ……？」

「今……何か音がしなかった？」

窓の方からノックの音が聞こえた。

「……こっちか？」

ハンスが窓際に寄った。

「なっ……!!」

「（……静かに、ハンス。大声を上げたら見張りに気付かれるよ）」
「（わ、分かった……。……しかしお前ねえ。この状況で大声を出すなんてかなり無茶なこと言ってるぜ?）」
「（はは……。ゴメン）」

「（ちょっとハンス……。窓の外に誰がいるわけ?）」
ジルが興味深げに寄ってきた。
「（おい、押すなって。あのな……。絶対に大声上げるなよ）」
「（はいはい。この生徒会長のジル様がそんじょそこらのことで大声を上げるわけが……。）」
とはいうものの、ジルが叫び声を上げそうになり、ハンスがとっさにジルの口を覆った。
「（~~~~っ!~!~!）」

「（やっぱり大声を出しそうになったな……。）」
「（そ、そりゃ驚きもするわよ!何よヨシユア君!どうしてそんな所にいるの!?)」
「（久しぶりだね、ジルさん。時間がないから手短かに説明するけど……。）」
ヨシユアは今までの経緯とミックの報せで学園の異変を知ったことを説明した。

「なるほどな……。要するに、学園を解放するためにギルドが動いているってわけか」

「そういう事。他のみんなが動揺しないよう君たちには伝えようと思っただけ」

「（そっか、助かるわ。他にあたたちで協力できそうなことはある？）」

「（そうだな……。現在、学園内にいる生徒と職員のリストが欲しい。救出時の助けになるからね）」

「（なるほど）」

「（オツケー。メモに書くから待ってな）」

ジルとハンスは、現在学園にいる生徒と職員の名前を書き、窓の間からヨシユアに手渡した。

「（……ありがとう。一時間もしないうちに本格的に動き始めると思う。それまで我慢して欲しい）」

「（ええ、分かったわ）」

「（お前らの方こそくれぐれも気を付けてくれ。それと……無事片付いたら学食でメシくらい付き合えよ？今まで何をしてたのかみっちり話してもらおうかな）」

「（はは……分かった。お手柔らかに頼むよ）」

講堂

「（控室の方からも人の気配はしない……。どうやら無人のようだな）」

一室

「(女の子が3人か……。他の子たちは本校舎の方かな?)」

入口

「(見張りの敵兵が2名……。他の部屋にいる気配もなさそうだ)」

裏門

「(この先は旧校舎か……。そうだな、念のため)」

ヨシユアはツールを取り出して素早く鍵穴に差し込んだ。すると、鍵が開いた。

「(これで一通り調べたか。この程度の戦力ならなんとか僕1人でも……。いや……。今はまだその時じゃない。急いでみんなの所に戻ろう)」

ジエニス王立学園前

「……以上が偵察で判明した学園敷地内の大まかな状況です」

「そうか……。良く調べてきてくれたな」

「ああ、これで何とか作戦が立てられるってモンだ」

「しっかし、あのギルバードが学園を襲った張本人だなんて。しかもクローゼのことを狙ってたみたいですよ？ 《方舟》で会った時、足腰が立たなくなるくらいぶっ飛ばしておけば良かったわ！」
エステルは怒り心頭のようにだ。

「かつて有能な市長秘書で、今は《結社》の使い走りか……。挫折して根性が歪んじゃった元エリート的典型って感じね」

「うん、まさにそんな感じ。……でも、どうしよう。兵士の数もそれなりだし、人形兵器や装甲獣もいるのよね？」

「それに人形兵器を動かしてるってことは……《結社》の人たちは、この状況でオーブメントが使えるってことだよな？」

「あ……」

「どうやら博士の発明した『零力場発生器』と同じような技術が使われているみたいだ。しかも数に制限はないらしい」

「ってことは、連中の方は銃もアーツも使い放題か……。さすがにちよいと厄介だな」

「ま、定番かもしれないけどここは二手に分かれるべきね。正面から戦力を誘い出して裏から別動隊が突入するみたいな」

「だが、それをするにはちよいと戦力が不足してるな。正面からの攻め手は6人くらいはほしいところだ」

「そうですね……。それだけいれば待機中の兵士をこちらに引き付けられそうです」

「でも6人と1人しか裏から回れないじゃない。このまま王国軍の部隊が到着するのを待つしかないわけ？」

「いえ、それだけの時間はないでしょう。仕方ありません……。こうなれば私1人が正面で敵を引き付けましょうか？」

「……その必要はない。それについては自分たちが補わせてもらおう」

後ろから声が聞こえてきたので振り返ると、クルツチームの4人がやってきた。

「あ……」

「ああ〜っ！アネラスさんたち!？」

「はは、何とも絶妙なタイミングで来てくれたな」

「へへ、ついさっきルーアン支部に到着してね」

「ジャンから話を聞いて慌てて駆けつけてきたわけさ」

「まったく……これ以上ないくらいの援軍だわ」

「……エステルちゃん。湖畔で助けてもらって以来だね。あの時は

ありがとう。危ない所を助けてくれて。あの後、エステルちゃんが掠われちゃったって聞いて私、ホントに申し訳なくて……」

「あはは、いいってば。こうしてちゃんと無事だったし。それに……ヨシユアも戻って来てくれたしね」

「そっか……。えへへ……。久しぶりだね、ヨシユア君！お姉さんのこと覚えているかな？」

「はい……。もちろん。僕がいない間、エステルがお世話になったそうですね。どうか礼を言わせてください」

「ふふ、お世話になったのはむしろ私の方なだけだね。それよりも私としては、君がいない間、エステルちゃんがそれだけ寂しそうにしてたか教えてあげたいんだけど……」

「ちよ、ちよっと〜!？」

「えへへ、冗談だってば。……どうやらあんまりゆっくりできない状況みたいだし」

「うん……。実はそうなのよ。ヨシユア、もう一度、学園内の状況を話してくれる？」

「了解」

ヨシユアはクルツたちに学園内の状況を説明した。

「なるほど……。そういう状況か。確かに、二手に分かれて迅速に事を運ぶ必要があると思うだ」

「そうなると11人いるから……。正面6人、裏手5人に分かれるのがいいんじゃないか？」

「ま、妥当な線だろうな。問題はこういうメンツで分かれるかってことだが……」

「あ、それならあたし、裏手から突入する方にするわ。この学園のことだったら他の人より詳しいと思うし」

「僕も同じく。と言うか、ついさっき偵察してきたばかりですから」

「それじゃあ私も裏手からの突入班に参加してもいいかな？前にエステルちゃんと一緒に戦おうって約束したしね」

「アネラスさん……」

「フットワークの軽さを考えると妥当なところでしょうね。ただ、あなたたちは3人とも前に出て戦うタイプだから……。サポートできる人間が1人は欲しいわね」

「ならば自分が務めさせてもらおう。方術でエステル君たちをバツクアップできるはずだ」

「クルツさん……」

「よろしく願います」

「それならあと1人の別動隊は私でいいですか？サポートも攻撃もできますし……」

「レインさん……」

「それなら、お願いします」

「ヘッ、どうやら決まりだな。そっぴやカルナ……あなた、得物は大丈夫なのか？」

「ああ、導力銃のことだね。さすがに困り果てたんで、こんな物を調達したよ」

カルナは普段の導力銃よりも数段大きい銃を見せた。

「な、なにそのゴツイ銃！？」

「あ、それってもしかして……！」

「ふふ、ラインフォルト社製の火薬式アサルトライフルさ。武器屋のイーファさんがコレクションしていた年代物だね。無理言っただけしてもらったのさ」

「そいつはまた珍しい物を……」

「確かに火薬式の銃なんて最近じゃ全然見かけないわね。って、テイタちゃんも火薬式のガトリング砲を持っていたっけ？」

「えへへ、はい。おじいちゃんが貸してくれた秘蔵のコレクションなんです」

「正直、導力銃と比べると重いし、すぐに弾切れするしで使い勝手

が悪いんだけどね。威力だけは大した物だから充分、これで戦えると思うよ」

「ふむ、これで正面からの陽動班も問題なさそうだな。早速、作戦を始めるとするか」

「オッケー！」

「頑張ります！」

こうしてギルドによる学園解放作戦が始まった。

アガット、シエラザード、ジン、カルナ、グラッツ、ティータの6人は正面から強化猟兵を誘き出し……エステル、ヨシユア、アネラス、クルツ、レインは裏から突入して人質を解放することになった。

王立学園内の中庭では猟兵が雑談をしていた。

「……ギルバードのヤツは何を考えているんだ？こんな所を占拠したってガキどもをビビらせるのが関の山じゃないか」

「確かに王国内を混乱させるなら都市を狙った方が良さそうだが……。ただ、この学園には各界の良家子女が集まっているらしい。噂じゃ、リベール王家の姫君がお忍びで在籍してらって話だぞ」

「王家の姫君……クローディア姫のことか！？」

「はは、それはないさ。王城で暮らしているという話だし。ただ、《怪盗紳士》がご執心だという娘がこの生徒でしかも王族であるのは確からしい。ギルバードは、それが誰なのか突き止めるらしいぞ」

「なるほど……それが本当ならいい点数稼ぎにはなりそうだな。しかしそうになると、軍やギルドが本気でかかってくるかもしれない。警戒する必要があるぞうだ」

「なに、占拠したばかりだしすぐには気付かれないだろう。それに連中は俺たちと違って導力兵器が使えないんだ。火力を集中すれば撃退できるぞ」

「ふむ、確かに……」

その時、門の前から弾丸を打つ音が聞こえてきた。

「か、火薬式の銃器だと！？骨董品を持ち出しやがって……」

「このままだと突破される……。待機している連中を呼ぶぞ！」

その隙に、エステルたち別動隊は旧校舎から潜入した。

「……始まったわね！」

「うん、私たちも急がないと！」

「この先の裏門の鍵は先ほど外しておきました。すぐに開くと思います」

「分かった。速やかに各施設に潜入し、拘束された人々を救出する。

救出した者は『人質リスト』でチェックしていくことにしよう」

「了解ッ！」

「レッツ・ゴーですね！」

男子寮

「……お前は？」

「チツ、まだ捕まえてない生徒がいやがったのか」

呑気に話している見張りがエステルたちを面倒くさそうに見た。

「そ、その紋章は……」

「ゆ、遊撃士だと！？」

「然りだ」

「よろしく覚悟、しちゃってください！」

見張りを倒し、エステルたちはヨシユアが確認した部屋に入った。

「お、お前ら……！」

「エ、エステルさんにヨシユアさんじゃないですか！」

「2人とも、お久しぶり」

「手短に事情を説明させてもらうよ」

ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。

「そ、そうだったのか……。くー、やっぱり遊撃士ってスゲー格好いいよなあ！」

「ど、どういたしまして。　　って、それより用務員さんは大丈夫なの？撃たれたって聞いたけど……」

「撃たれた傷はそれほど深くはなかったんですが……。手当てをした直後に疲れて眠られてしまったんです。新学期が始まったばかりで忙しくされていたらしくて……」

「そっか……」

「顔色が良くないのは疲労も原因みたいだね」

「ふむ……少々いいかな」

クルツが用務員の側に寄った。

「方術　　穏やかなること白波の如し」

「わわっ……」

「回復系の方術、ですか」

「相変わらずお見事ですな」

「えへへ、先輩のこの術にはいつもお世話になってるんだよね」

「確かにオツサン、さっきよりも顔色がいいな」

「ええ、このままゆっくり寝かせておいてあげましょう。　　皆

さん、どうもありがとございます。僕たちにお手伝いできることは何かありませんか？」

「悪いけど、安全になるまでここで待って欲しいんだ。まだ外は

危険だからね」

「そうですか……分かりました」

「くれぐれも気をつけるよ!」

エステルは人質リストからロディー、ロイス、パークス用務員の名前をチエックした。

クラブハウス 2階

「な!？」

「お前たちは……!」

2階では見張りの兵士が2名いた。

「居たわね!」

「行つくよー!」

↓女子ロッカー

「おや、あんたたちは……!？」

「エステルさんにヨシユア君……どうしてこんな所にいるの!？」
中には3人の職員がいた。

「あはは……ビックリさせちゃったかな」

「実は……」

ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。

「そう、あなたたちが……。ありがとね、助けに来てくれて」

「それで……学園内の様子はどうかしら？まだ戦闘は続いているの？」

「正門付近での戦いを含めていまだ予断を許さない状況だ。先生方も、安全が確認できるまでここで待機をお願いしたい」

「そう……仕方ないわね」

「先生たちのこと……どうかよろしく願います」
エステルは人質リストからデポラ、ヴィオラ先生、ミア先生の名前をチエックした。

男子ロッカー

「お前たちは……!？」

「エステル君とヨシユア君!？」

「えへへ、お久しぶり」

「ご無沙汰しています」

2人にギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。

「そうだったのか……」

「すまん……感謝するぞ。俺たちも、生徒を助けるために何か協力できることはないか？」

「気持ちは分かるが、敵はプロの傭兵部隊だ。安全が確認できるまでここで待機をお願いしたい」

「そうか……分かった」

「生徒たちのこと、よろしく願います」

「ええ、任せてください!」

エステルは人質リストからラティオ先生、エフォート先生の名前をチエックした。

本館

「貴様ら……!？」

「ゆ、遊撃士だと!？」

目の前から兵士が2人やってきた。

「出たわね！」
「……制圧するよ！」

〈学園長室

「おお……！」

「皆さんは……！」

「えへへ、助けに来ました」

「……ご無沙汰しています」

「エステル君、ヨシユア君。君たちが来てくれるとは……。後ろの諸君もギルドの遊撃士のような？」

「はい。クルツ・ナルダンと申します」

「初めまして！アネラス・エルフィードです」

「お初お目にかかります。レイン・アクアライトと申します」

これまでの経緯と、学園解放作戦について2人に説明した。

「そうか……感謝する。兵士を率いているのが誰なのかは知っているかね？」

「元市長秘書のギルバードでしょ？あいつ、クローゼのこと狙ってるって聞きましたけど……」

「ああ、ただ、クローゼ君が王家の姫君であるということは気付いていないようだ。そういった人物が学園にいるという情報だけをどこかで入手したらしくてね」

「そ、そうなんだ……。あの怪盗男のことを考えたら知っててもおかしくなさそうだけど」

「執行者とただの戦闘員では権限に天地の差があるからね。多分、余計な情報は知らされてないんだと思う」

「なるほど……」

「でも、そうなると……他の女の子がとばかりを受ける可能性は高そうですね」

「ああ、危険かもしれないな」
「私もそれが心配でね……。すまないが、そのあたりも気を付けておいてくれないか？」
「うん、分かりました！」
エステルは人質リストからコリンズ学園長、ファウナの名前をチェックした。

2階 渡り廊下

「おい……。近くで銃声が聞こえなかったか？」
「……お前も聞こえたか？」
「見たところ、正門の防衛戦は突破されていないみたいだが……」
兵士が窓から様子をつかがった。
「あ、そっちは陽動だから」
「なッ……!!」
「ば、馬鹿な！どうして侵入者が!？」
「フッ、答えは簡単……」
「それは私たちが遊撃士だから！」
「（答えになっていないような……）」

社会科教室

「き、君たちは……!？」
「エステルさんにヨシユアさん!？」
「えへへ、お久しぶり」
「久しぶりだね、みんな」
「ど、どうして君たちがこんな所にいるんだ。はっ、もしかしてあの連中の仲間なのか!？」

「もー、ロジック君ったら。そんなことありえないでしょ？」
「ふむ、さしずめ遊撃士として助けに来てくれたということか」
「うん、そういうことなの」
ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そ、そうか……。私としたことが早とちりとは……。それで君たち！我々はどうすればいいんだ!？」
「今はまだ外で戦闘が行われています。安全が確認できるまでここで待機をお願いします」
「だ、だが、ここにいてまた連中に捕まったら……。！」
「うーん、その可能性もあるけど外に出るよりは安全だと思うよ？」
「流れ弾に当たっちゃったり、猛獣にパクツとされたくないでしょ？」
「あ、あう……。！」
「もー、アネラスさん。脅かしたりしちゃダメじゃない」
「そんな訳で、しばらくの間、ここで待機してもらえるかな？」
「はい……。分かりましたわ」
「頑張つてね、遊撃士さんたち！」
エステルは人質リストからロジック、アジル、モニカ、セルマの名前をチエックした。

自然科学教室

「あなた方は……」
「みんな、大丈夫!？」
「ケガをしている人は……。うん、いなさそうだね」
「エステル……。それにヨシユア!?なんでこんな所にいるんだ!？」
「うん、それがね……。！」
これまでの経緯と作戦についてジノキオたちに説明した。
「なるほど……。そんな事があつたんですか。これはミック君にも

感謝しなくてはなりませんね」

「ふ、ふん……。授業をサボった拳句に自分1人逃げただけじゃないか。これだから落ちこぼれは」

「よせよ、デニス」

「この状況に限って言えば彼の行動は正当かつ有意義です。おかげでエステルさんたちがここに来てくれたのですから。不当な侮辱と非難は貴方自身の価値を下げますよ」

「むぐっ……」

「まあまあ、みんな落ち着いて」

「とにかく安全が確認できるまでここから動かないで欲しいんだ。お願いできるかな？」

「で、でもよ……」

何か言いたそうなジノキオだったが、皆に見られて

「……分かった、了解だ」

撤回した。

「……他の生徒のことはくれぐれもお願いします」

「うん、任せといて！」

エステルは人質リストからジノキオ、パトム、デニス、レイナの名前をチエックした。

1階 人文科教室

「来たわね、2人とも！」

「や、今か今かと待ちくたびれちゃったぜ」

「えへへ……。ゴメンね、待たせちゃって」

「あれから状況に変わりは？」

「うん、実はね……」

ジルとハンスがエステルたちに小声でささやいた。

「(さっきギルバードが来て王家の姫がないか聞いてたのよ。素

直に名乗り出れば特別待遇にしてやるとか抜かして)」

「（あっちゃあ〜……）」

「（……見込み違いもいいところだね）」

「（ま、何とか俺たちで適当にあしらうといたけど……。ありゃあ、業を煮やしたら何をするか分からねえぞ）」

「（うん、そつちは何とかする）」

「な、なあ……」

「それで、私たちはどうすればいいのでしょうか？」

他の生徒が不安そうに尋ねてきた。

「あ、ゴメンゴメン。悪いんだけど、安全になるまでここで待っていてくれる？まだ外で戦闘が続いているから」

「了解しました」

「ふう……。もうカンベンして欲しいよ」

「こ、心細いですけどがんばって待ってます！」

「ごめん、なるべく早くケリをつけるつもりだから。ハンス、ジルさん、君たちも……」

「はいはい、分かっていますって。下手に動いてあんたたちの足手まといにはならないわ」

「ケリが付いたら来てくれ。その後の対応は俺たちがさせてもらうからさ」

「うん、その時はよろしく」

「それじゃあ、また後でね！」

エステルは人質リストからジル、ハンス、カンノ、アリス、パープルの名前をチェックした。

女子寮

「な、何だ貴様ら!？」

「どうしてこんな所に!？」

「それはこっちの台詞。あんたたちみたいなおジサンがよりにもよってこの場所に居座っていいとも思ってたんの？」

「な、なに……！？」

「女子寮といえば花も恥じらう乙女の園……。せめてリボンでも付けて出直してきてほしいですねえ」

アネラスの台詞に兵士が脳内で妄想した。

「ふ、ふぎけるな！」

「お、思わず想像しちまっただろうが！」

「あ、あなた方……！」

「エステルに、ヨシユア君！？」

「えへへ、お待たせ」

「手短に事情を説明させてもらおうよ」

ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。

「そうだったんですか……。はふう……。気が抜けちゃいました」

「そ、それでわたくし達はどうすれば？」

「他のみんなと合流できそう？」

「うーん……。まだ戦闘が続いているからちょっと待ってて欲しいかな」

「必ず全員救出するから安心して待っていて欲しい」

「そっか……」

「……分かりました。どうかよろしくお願いします」

エステルは人質リストからニキータ、フラッセ、ティラの名前をチエックした。

「いや〜〜っ!」

どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「今の声……!」

「この方向は……学園の裏手からだ!」

「リストの残りは1人……その人物ということか!」

「急ぎましょう!」

旧校舎

「やはり君たちが……」

ギルバードが少女を人質に待ち構えていた。

「ギルバード……あんた!」

「おっと、それ以上は近づかないでくれたまえ。このお嬢さんを傷付けたくなかったらな」

ギルバードが少女に銃を突きつけた。

「い、いやっ……」

「(あ……!クローゼの後輩の……)」

「(フェンシング部に所属している子だったね……)」

「いつもいつも君たちは僕の邪魔ばかりしてくれる……。だがッ! 今度ばかりはそうはさせないッ! この娘を手土産に、僕は《結社》の階段を上り詰めるのだからねッ!」

「へ……!?!」

「どうやら《身喰らう蛇》は想像以上に巨大な組織らしい。今、リベールに来ているのもあくまで氷山の一角……。おそらくその影響力は大陸全土に及んでいるはずだ。フフ、さぞかし出世のしがいがあるに違いない」

「なるほど……そういう発想もあるんだ」

「頭の中は天晴れというしかありませんね」

「何て言うか……いじましいまでの上昇志向ね」

「黙りたまえッ！元々、リベールなんていう小国ごとき僕には狭すぎたのだッ！《身喰らう蛇》こそ僕が上り詰めるのに相応しい舞台ッ！君たちなどに邪魔はさせないッ！」

「まあ、せいぜい頑張つてと言いたいところだけど……。その子を掠ったところで出世の役には立たないと思うわよ？」

「フツ、どうやら君たちは何も知らないみたいだな……。この娘が、身分を隠したりリベール王家の姫であることをッ！」

「だ、だから違つて言ってるじゃないですかあ！」

「フツ……。しらばっくれるのは止めたまえ。僕が聞いたところによると、その姫は細剣をよく使うそうだ。そして現在、フェンシング部の女生徒は君しかないという……。ならば君以外にあり得まいッ！」

ギルバードがどうだと言わんばかりに叫んだが周りは呆れ果てた。

「そ、それって……」

「はあ……。何と云うか」

「思い込み、ここに極まりだね」

「どうやら想像以上に目出度い人物のようですね」

「な、なんだその反応は……」

「あのねえ……。あんた、前にバレン又灯台で逮捕された時のことを覚えてないの？」

「わ、忘れるはずがないだろうッ！あの時のことを思い出すと今でも腸が煮えくり返るくらいだッ！」

「だつたら僕たちに同行していた女生徒のことも覚えていますよね？一応、面識もあつたみたいですし」

「……。ああ、クローゼ君のことか。そういえば拘束した生徒の中には見かけなかつたような……。え」

ようやくギルバードは気付いたようだった。

「そういう事。灯台でもクローゼ、細剣を使つていたでしょ？」

「そういえば……。い、いやッ！そんな馬鹿な事はありません」

「ここまでやったのに無駄足だったなんてことは……」

「うーん……現実逃避を始めましたねえ」

「……哀れな」

「だ、黙れッ！どの道、人質を取っている以上、僕が有利なのは同じことだッ！傷付けられなくなったら全員、すぐに武装解除しろッ！」

「ひっ……」

「（……なんか本気でぶっ飛ばしたくなってきたわね）」

「（何とか隙を突ければ……）」

「ど、どうしたッ！言う通りにしないんだっいたらこの可愛い顔に傷をつけて」

その時、ジークが飛んできてギルバードを吹っ飛ばした。

「ぐあッ！」

「リチエル、こっちよー！」

エステルがすかさず手招きした。

「は、はいっ！」

「ピュイ！」

「な、な、な……」

「ジーク……どうしてここに！？」

「もしかしてクローゼに頼まれたのかい？」

「ピュイ？」

「はは、これは参った」

「スゴい！スゴすぎるよ！」

「ば、馬鹿な……。そんな馬鹿なああッ！？」

エステルたちが喜ぶ中、ギルバードは地面を叩きつけた。

「さてと、それじゃあ……」

「お仕置きと行きますか」

「……あうあう……」

呆気なく倒されたギルバード。

「お、願います……。命ばかりはお助けを……」
何をするかと思えば土下座して命乞いを始めた。

「まったくもう……。いきなり卑屈にならないですよ」

「あはは、最後は何だか弱い者イジメみたいだったね」

「自業自得というものだ。それでは協会規約に従い、君の身を拘束させて」

クルツがギルバードを拘束しようとした時、

「それは困っちゃうなあ」

どこからともなく声が聞こえてきたかと思うと、道化師カンパネルラがエステルたちの前に現れた。

「あ、あんた……！」

「廃坑に現れた……！」

「……カンパネルラか」

「ウフフ、ごきげんよう。君たちが学園に突入するあたりから見物させてもらったけど……。いや、これが面白いの何のって！まさかあのタイピングで飛び入りの役者が登場するとはねえ」

道化師カンパネルラがジークをちらりと見た。

「ピュイ？」

「カ、カンパネルラ様……。助けに来てくれたんですね？」

しかし、ギルバードの問いかけに道化師カンパネルラは何も答えなかった。

「……ねえ、ギルバード君。僕、王家の姫君を掠えなんて命令した覚えはないんだけどなあ？」

「ッ」

「そりゃあ、現場には現場の判断があるからね。あんまり細かいことを言うつもりはないんだけどさ。……でも、それで失敗したら意味ないよね？」

「ひっ……ひいッ……」

道化師カンパネルラの冷笑にギルバードが後ずさった。

そのギルバードに道化師カンパネルラは指を鳴らすと、ギルバードの身体が炎で拘束された。

「ひああああッ……!!?」

「な、なんなの!?!」

「炎の舌……。ルシオラが使うのと同じ攻性幻術の一種か」

「うふふ、さすがに彼女ほど上手くはないけどね。でも、これくらいなら操れる」

そついうと、ギルバードの身体が持ち上がった。

「うわあああああッ!!!?」

「ま、ギルバード君の道化つぷりもなかなか愉しませてもらったし。今回だけは死なない程度のお仕置きで勘弁してあげようかな」

道化師カンパネルラはギルバードへの幻術を解いた。

「……つづつ……」

そして、そのまま去ろうとした。

「ちょ、ちよつと!?!」

「ま、また逃げるの!?!」

「あはは、まあ今回は申し訳なかったと謝っておくよ。今後、《結社》がこの学園に手出しすることはないと誓おう。それでは皆様

お騒がせさま」

道化師カンパネルラとギルバードは消えてしまった。

「ま、また……」

「逃げられちゃったねえ……」

「今回は人質も助かったことだし、仕方がないでしょう」

「《道化師カンパネルラ》……何とも得体の知らない少年だな」

「ええ……そうですね。ですが、彼の約束はある程度信用できると思います」

「そうか……」

「まあ、心残りはあるけど……。これで一応、一件落着と言っているのかな?」

「うん、いいんじゃないかな?」

「ピュイ」

こうして強化猟兵たちによる学園占拠事件は幕を閉じた。

王国軍が到着した頃には学園の内外にいた猟兵たちはことごとく撤退してしまい……

学園長やジルたちの働きによって生徒の動揺も収まっていた。

「クルツさん、アネラスさん。カルナさんにグラッツさんも。今回は本当に手伝ってくれてありがとう」

「あはは……水臭いこと言いつこナシ！」

「ああ、これも同じ遊撃士としての務めさ」

「フフ、やっと湖畔での借りを返せた気分だよ」

「また何かあったらいつでも力になるからな」

「ふふ、期待してるわね」

「皆さんはこの後、どちらに向かう予定ですか？」

「クローネ峠を抜けてポース方面に向かうつもりさ。今回のような事件が起きないよう各地の見回りをしながらね」

「そうか……」

「ご苦労さまです」

「あのあの……気を付けてくださいね」

「はは、お前さんたちもな」

「この状況が続く以上、地道にやるしかないからね」

「ああ、せいぜいお互い気張るとしようや」

「そうだ……ねえ、エステルちゃん」

「ん、なに？」

「今回一緒に戦っていて感じたことなんだけど……。エステルちゃ

んの動き、迷いがなくてのびのびしてた。まっすぐに成長してるなあって正直、感心させられちゃったよ」

「や、やだな。おだてても何も出ないわよ？それにアネラスさんだって凄く腕が上がってたじゃない」

「そりゃあ実戦を繰り返せばね。でも、エステルちゃんの場合、武術の腕だけじゃなくて心の芯まで強くなった気がする。それは多分ヨシユア君を捜す旅の過程で自分の道を見つけたからだと思う。本当に……強くなったね」

「アネラスさん……」

「えへへ、ライバルとして私も負けてられないかな。機会があったらまた一緒に戦おうね？今度は私がエステルちゃんをビックリさせてあげるから！」

「あはは……うん！楽しみにしてるからね！」

その後、シエラザードとティータも一足先にルーアン支部に戻り……

王都から来てくれたジークも再びクローゼの元に帰っていった。

エステルたちは、学園のみんなに挨拶してから出発することにした。

第15章 混迷の大地(4) (前書き)

工房都市ツァイス編です。

第15章 混迷の大地（4）

遊撃士協会ツアイス支部

「ふう……思ったより遅かったわね」

キリカは振り向きもせず、エステルたちを迎えた。

「って、お前なあ……。どうして俺たちが来るのを読んでやがるんだ？」

「今回の導力停止現象はあの浮遊都市が原因でしょう？直接、手出しが不可能になれば各地の様子を確かめるしかできることはないはずだから」

「むむっ……」

「あはは、確かにそうね」

「へっ……相変わらず頼もしい女だぜ」

「とりあえず、こちらの状況は想像している通りだと思うわ。リベール^{いち}、導力化が進んでいた街だけあって余計に混乱が大きかったみたい。マードック工房長が頑張ってくれているけれど市民の不安は収まっていないわね」

「そっか……。工房長さん、大丈夫かしら」

「何かお手伝いができればいいんですが……」

「まあ、話くらいは聞いてあげるといいでしょう。それと……もう1つの問題はカルデア隧道よ。照明が消えてしまったために通行が困難になってしまったの」

「うん……。あたしたちも、そこを通過してツアイスに来ただけど」

「確かに視界が狭くてかなり危険な状況でした」

「あとはそうね……。エルモのポンプ装置が止まって温泉に入れなくなつたと聞いたわ」

「そうなんだ……」

「マオさんもさぞかし気落ちしているでしょうね」

「……そんな所かしら。さて、今度はそちらの話をお聞かせしてもらい

ましようか。《紅蓮の塔》で別れた後、一体どんな事が起こったの？」

「ああ、実はな……」

エステルたちはキリカに《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。

「なるほど。やはりあれが《輝く環》……。恐らく彼らに《塔》が奪われた時、この事態は決定していたのでしようね」

「ああ……だろうな」

「そう考えると《塔》に向かったのは無駄足だったってことか……。さすがにへこんじゃうわね……」

「過ぎたことを後悔しても意味はないわ。《塔》に行ったことで新たに見えた真実も結構あるじゃない。大切なのは、そこから何を見出して未来に活かせるかよ」

「キリカさん……」

「……というわけで早速、通信器を直してもらえるかしら？より良い未来を導くためにもね」

「ガクツ……。いい話をしてたんだからそんな風に繋げるなよ」

「あはは……分かった」

「それじゃ早速、『零力場発生器』を設置します」

ヨシユアは『零力場発生器』を通信器に設置した。

「……これで完了です」

そして、電源を入れると通信器が復活した。

「……さすがラッセル博士。いい仕事をしてくれたわね。あなた達もご苦労様。さすがに助かってしまっわ」

「えへへ、どういたしまして」

「はは、何だよ。ずいぶんと素直じゃないか」

「それは心外ね。私ほど素直な女はそうはいないと思うけど？」

「素直っていうより遠慮がないだけだろうか。まあいい、これで全ての地方支部の通信器が直ったんだ。各地の状況と合わせて任務の報告をさせてもらっぞ」

エステルたちはこれまでの報告をした。

「ふふ、お疲れさま。これでようやく迅速な対応ができそうだね」

「他に手伝うことはあるか？」

「レイストン要塞が近くにあるから治安の方は問題ないけど、一応、掲示板はチェックしておいて。あと、余裕があったら中央工房やエルモの様子を確かめておくといいでしょうね。何か困っているかもしれないし」

「うん、分かったわ！」

「心に留めておきます」

エステルたちがギルドを出ようとした時、通信器が鳴った。

「あ……」

「早速、連絡がきたみたいね」

キリカが通信器の受話器を取った。

「こちら遊撃士協会、ツァイス支部ですが……。ああ、貴方だったの。こちらも今しがた直ったばかりだね。……ええ、そうよ。ちょうど目の前にいるわ」

「（あたしたち……？）」

「（どうやら話がありそうだね）」

「……ふむ……ふむ……。……分かったわ。本人たちに伝えておくわね。こちらの状況についてはまた後で連絡させてもらうわ。……そうね。お互い頑張るしかないわね」

キリカが受話器を置いた。

「キリカ。どこからの連絡なんだ？」

「王都支部のエルナンさんよ。何でも、アリシア陛下があなた達に話があるらしいわ。グランセルに寄ったら王城を訪ねてほしいですって」

「女王様が！？」

「そりゃあ驚きだな……。一体何の話なんだ？」

「詳しくは聞いてないわ。ただ、導力通信では話にくい内容みたいね」

「通信では話にくいこと……。そっか、導力通信だと傍受される危険があるから……」

「どうやら機密性の高い話があるみたいね」

「ただ、今すぐ来てほしいという訳ではないみたい。王都に立ち寄ったらでいいそうよ」

「そっか……。分かったわ」

「折を見て訪ねてみるさ」

中央工房 工房長室

「おお……。エステル君にヨシユア君」

「工房長さん、お久しぶり」

「ご無沙汰しています」

「うむ、無事に戻ってくれて何よりだ。博士の新発明はお役に立っているかね？」

「あの発生器のこと？もっちゃん、大助かりよ」

「むしろ僕らよりも王国軍の方が感謝しているかもしれません。通信が回復するまでは多くの拠点が孤立していましたから」

「ふむ、なるほど。まずは予想通りの効果を発揮しているようだね」

「うん、それは良かったんだけど……。それより、工房長さん。…

…中央工房は大丈夫なの？」

「この状況では活動の再開は難しそうですね」

「ああ……。非常に厳しい状態だよ。山積みになった問題に対応するだけで手一杯さ。実は今もその問題の処理に当たっていたところなんだ」

「そっか、大変そうね……」

「僕らにできることなら何でも協力しますから。困ったことがあればギルドに連絡してください」

「うむ、ありがとう。君たちも気を付けてな」

エステルたちは街を確認した後、王都グランセルへと向かった。

第15章 混迷の大地(5) (前書き)

王都グランセル編・前編です。

第15章 混迷の大地（5）

キルシエ通り

エステルたちがキルシエ通りを歩いていると、上空から機械音が聞こえてきた。

「あれ……これって」

「なんだ、飛行船のエンジン音じゃねえか……」
しばらく5人が考え込んだ。

「ちよ、ちよつと待って!？」

「この状況で飛べる飛行船ってことは……!」

「あれだ……!」

ヨシユアが上を指すと、3隻の《結社》の飛行艇が王都に向かって飛んでいった。

「《結社》の飛行艇……。ど、どうしてこんな所に!？」

「まずい……。あの方向は王都だ!」

「まさか王都を……」

「冗談じゃねえ!とつとと追いかけるぞ!」

王都グランセル前

1隻の飛行艇から4人の執行者が飛び降りた。

「さて……それでは始めるとしようか」

「つたく、《剣聖》がいればちったあ楽しめたものを……。銃が撃てない兵士なんざ肩慣らしにもならねえぜ?」

「うふふ、いいじゃない。デクノボーさんたちを倒しながら歩いていくのも楽しいと思うわ」

「では、パテル＝マテルは呼ばないようにしておきなさい。皆、あつという間に逃げてしまおうでしょから」

「あら、つまらないわね。せつかくあのキレイなお城を粉々にできると思っただのに」

「壊れゆく美か……。それもまた悪くなさそうだ」

4人が談笑していると市街地から王国軍兵士たちが駆けつけた。

「貴様らは《身喰らう蛇》！おのれ……この状況で飛行艇を使うとは……」

「フフ、お初お目にかかる。我が名は《怪盗紳士》ブルブラン」

「クク……《痩せ狼》ヴァルターだ。せいぜい足掻いてもらうぜ」

「《幻惑の鈴》ルシオラ。短い間ではあるけど、どうかお見知りおきを……」

「クスクス……《殲滅天使》レンよ。みんなどんな声で鳴いてくれるのかしら？」

4人は顔色一つ変えずに自己紹介をした。20人ほどの兵士などでは相手にならないと言いたげのように。

「な、名乗りとは悠長なことを……！総員構え！突撃イイッ！」
ルシオラ、ヴァルター、レンが8人ずつ一瞬一撃で兵士たちを蹴散らした。

「……え」

王国軍士官はただただその様子を見て啞然とするしかなかった。

「ゆめまぼろし所詮この世は夢幻」

「ひっ……」

怪盗紳士ブルブランが王国軍士官の背後から現れ、あわてて振り返った。

王国軍士官も一瞬のうちに倒され、グランセル市前は地獄絵図と化した。

その場で、《執行者》たちは物足りなさそうに不満を漏らした。

「チツ、雑魚どもが……」

「んもっ……ちよつと脆すぎるわ」

「ふふ……贅沢は言わないの。まあ、女王陛下の親衛隊ならば少しは楽しめるのではないかしら？」

「ふむ、そう願いたいものだな。……さて」

怪盗紳士ブルブランは後ろに控えていた獵兵たちと人形兵器に指示を下した。

「執行者はこれよりグランセル城に向かう！諸君は予定通りグランセル市街を制圧せよ！」

「了解！！」

しばらく後、エステルたちはグランセル市前に到着し、地獄絵図を目の当たりにした。

「あ、あれは……！」

「……急ごう！」

「こ、こいつは……」

「どうやら手当てをした方が良さそうだ」

「そ、その必要はない……」

かすかに意識を残していた王国軍士官がエステルたちに言った。

「だ、大丈夫！？」

「あ、あんたたちは遊撃士だな……。今しがた……《結社》の執行者どもがここを通っていったばかりだ……。どうやら狙いは……」

…グランセル城にあるらしい……」

「やはり……」

「その他の敵部隊は市街を制圧しているらしい……。……頼む……街と城を……」

それだけを言い残し、王国軍士官は気絶した。

「エステル……！」

「うん……！兵士さんたちには悪いけど先を急がせてもらいましょ！」

王都グランセル

エステルたちがグランセル市街に入った時には、すでにあちこちから火の手が上がり、戦場と化していた。

「ひ、ひどい……！」

「ほぼ無差別か……！」

「クソが……！」

「……どうやら私たちも歓迎されているようですね」
レインが剣を抜くと結社の人形兵器がやってきた。

「はあはあ……ど、どうしよう……。こんな状況じゃいたい何をしたらいいのか……！」

「皆さん!?!」

ギルドから受付のエルナンがエステルたちの元にやってきた。

「エルナンさん！」

「いい所に来てくれました！女王陛下の用件で王都に来てくれたんですね!?!」

「はい……状況は？」

「現在、軍の守備隊が東街区と西街区で交戦中です。かなり厳しい状況ですが今は任せるしかありません。皆さんは、城に向かった執行者たちを追ってください」

「で、でも！」

「市街の方はいいのか？」

「この付近の街路にいた人々はギルドに避難してもらいました。他の街区でも、軍の部隊が避難誘導をしているはずですよ」

「そうなんだ……。……だったら申し訳ないけど城の方に急がせてもらつわね！」

「ええ、よろしくお願いします。武運を……くれぐれも気を付けて

「ください」
エルナンはギルドに戻っていった。エステルたちもグランセル城へと急いでいった。

グランセル城前

「あら……城門が閉じちゃっているわね」
「ふむ、古い城のようだから人力でも開閉可能なだろう。かなり大変ではあつただろうが」
「ふふ……ご苦労様といったところかしら」
「どうする？ やっぱリパテル、マテルを呼ぶ？」
「おいおい。あんなデカブツ呼ばれたら俺たちが楽しめねえだろうが。ここは俺に任せとけや」
「どうするの？」
「クク……ま、見とけて」
ヴァルターは城門に手を当てると気を練り始めた。
「コオオオオオオツ……」
すると、城門の一枚が見る間に瓦解した。
「わあ……！ 凄いわ、ヴァルター！」
「泰斗流の奥義……寸勁ね」
「フフ……相変わらず見事な技だ」
「ククク……大道芸みたいなものさ。さて、もう一枚行くとするか」

グランセル城内

城の中では王室親衛隊と王家の人たちが様子を見守っていた
「まさか城門が……」
「くっ、もう保たんか……。クローディア！ 女官長！ い、急いで陛

下を女王宮にお連れするがいい！」

「お、小父様……」

「デュナン……貴方」

「わ、私とてリベール王家の一員だ！その権威を侵そうとする者を黙って見過ごすことなどできぬ！ユリアがおらぬ今、ここの指揮は任せてもらおう！」

「で、ですが……」

「ええい、グズグズするな！きゃつらは、陛下とそなたの身柄を奪おうとしておるのだ！女王と王太女の身柄をな！」

「……！」

「今、そなたが優先すべきは陛下とそなた自身を守ること！己の使命を全うするがいい、小娘！」

「小父様……分かりました。お祖母様、ヒルダさん！急いで女王宮に向かいますよう！」

「ええ……分かりました。デュナン……くれぐれも無事で」

「ハハ、神をも恐れぬ狼藉者、返り討ちにしてご覧に入れよう」

「……どうかご武運を。フィリップもどうか気を付けてください」

「お気遣い、痛み入れます」

アリシア女王とクローディア姫、ヒルダ夫人の3人は女王宮へと急いだ。

「……閣下、お見事でした。このフィリップ、今この時ほど閣下にお仕えして良かったと思つたことはありませんんだぞ」

「ふ、ふん、大げさなヤツめ」

その時、もう一枚の城門が破壊され、執行者たちが入ってきた。

「き、来おつたか……！」

「ふむ、何という鬼気……。どうやら魔人の類いのようですな。閣下……わたくしが倒されたらどうか構わずにお逃げください」

「なに……！？」

執事フィリップが2階から飛び降り、執行者たちの前に立ちふさがった。

「フイ、フィリップ殿!？」

いきなり執事フィリップが現れたことに王室親衛隊が驚いた。

「あら、細目のオジサン？」

「なんだア、てめえは？」

「デユナン公爵閣下の執事にして元・王室親衛隊大隊長、フィリップ・ルナルと申します」

執事フィリップが剣を抜いた。

「昔取った杵柄……どこまで通用するかは分かりませぬがせめて――
太刀は浴びて頂きますぞ」

「ほう……」

「はは……これは面白い！」

「フフ……少しは楽しませてくれそうね」

城門前へと着いたエステルたち。

「こ、これって……」

「これは……多分素手で壊した跡だ。恐らく《瘦せ狼》の絶招技……」

……

「ああ……ゼロ距離からの寸勁だろう」

「マジかよ……」

「なんていうか……。強さの次元が違うんですけど……。……って
感心している場合じゃないわ！何とか連中に追いつかないと」

「エステル！」

ヨシユアが叫ぶとエステルたちに向かって銃弾が撃たれた。

「こんな所で……!」

「時間稼ぎが狙いのようですね……」

「ブチ壊すぞ！」

「はあはあ……じよ、冗談じゃないわよ！」
「時間がない……とにかく中に入ろう！」

グランセル城 エントランス
入口では王室親衛隊が全滅していた。

「こ、これって……」

「王国軍きつての精鋭部隊までもかよ……」

「エ、エステル様……」

「フィ、フィリップさん！？それにデユナン公爵も……」

「もしかして……彼らを食い止めようとして？」

「は、恥ずかしながら……。ですが歳ですか……さほど時間は稼げませなんだ……。こ、公爵閣下のご様子は……？」

「心配ない。当て身をくらっただけのようだ」

「あ、安心しました……。陛下たちは女王宮に……。どうかお急ぎください……」

執事フィリップはその場に倒れおちた。

「フィ、フィリップさん！？」

「大丈夫、気絶したただけだ。急ごう……クローゼたちが危ない」
「う、うんっ！」

空中庭園

「ふむ……あれが女王宮のようだ」

「つまり、終点というわけね」

「他愛もねえ……。齒ごたえがあったのはあのジジイくらいじゃねえか」

「ふふ、確かに……。なかなかの達人だったわね」

「でも、レンたち4人相手に勝ち目があるわけないじゃない。おバカさんもいいところだわ」

「フフ、そう言うものではない。誇り高き忠義とは彼のような者を言うのである。それにデュナン公爵とやらも少々噂とは違っていたようだ」

「そうね、少なくとも放蕩者には見えなかったわ。すぐに気絶してしまったのはご愛敬だったけれど……」

「き、来たぞ……」

女王宮から王室親衛隊が展開された。

「くっ……ユリア大尉がいてくれたら！」

「弱音を吐くな！親衛隊の誇りを見せろ！」

「チツ……雑魚どもが」

「……さすがに興醒めね」

「うふふ、そうだね。誰が一番早く女王様たちを捕まえるか競争しない？」

「ほう、それは面白い」

「クカカ、乗ったぜ」

「では　始めましょう」

執行者たちは8人もの親衛隊を一蹴し、女王宮になだれ込んだ。

「ほう……君たちか」

エステルたちが女王宮に着いた時、すでにアリシア女王たちは囚われの身だった。

「クローゼ！女王様！」

「エステルさん……ヨシユアさん……」

「皆さん……よく来てくださいましたね」

「クソッ……」

「……間に合わなかったか」

「あ、あんたたち……一体どういつつもりなの！？クローゼたちを放しなさいよ！」

「うふふ、それはダメよ。だって教授に、個人的に頼まれちゃったんですもの」

「きよ、教授に？」

「個人的にということとは……『福音計画』には関係ないのか？」

「うふふ、そうみたいね。思っていた以上にみんなの元気がいいから色々試してみたくなっただんですって」

「げ、元気がいいって……」

「各地の通信を部分的に回復させたみたいだけど……。どうやら教授はそれがお気に召されなかったらしくてね。あなたたちの苦しむ姿をもう少し見たいのだそうよ」

「……っ……！ふ、ふざけんじゃないわよ！そんな事のために王都を襲わせたっていうの！？」

「……あの人らしい」

「クク……確かに悪趣味だとは思っぜ。ただ、浮遊都市の制圧がレィヴェー1人に任されてな。ヒマになったから引き受けたってわけだ」
「ヴァルター……貴様」

「……話は分かりました。ならば、わたくし1人を虜囚にすれば済むことでしょう。どうかクローディアは解放していただけませんか？」

アリシア女王が自らが人質となることを申し出た。

「いけません、お祖母様！囚われるならば私が……」

「ふむ、確かに教授の注文はどちらか1人だったはず……。さてさて、如何したものか」

怪盗紳士ブルブランはアリシア女王とクローディア姫を交互に見た。

「あら、たしか貴方は姫殿下にご執心ではないの？」

「フフ、籠の中の鳥にはいまいち魅力は感じなくてね。まあ、囚われていてもなお輝く気品を見てみたい気もするが……」

「……………」

「あ、あんたたち……いい加減にしなさいよね……。そんなこと……絶対にさせないんだから！」

「クク、笑わせるな。仮に人質がいなかったとしても俺たち全員に勝てると思うのか？」

「うふふ、今度会った時にはまとめて殺してあげるって約束したわよね？ちようどいい機会だし……ここで殺しちやおうかしら」

「くっ……………」

怯むエステルにヨシユアがささやいた。

「（……抑えて、エステル。彼らの言う通り……戦力差はどうしようもない。ここは勝機を窺うしかない）」

「（で、でも…………）」

「フフ、無駄だヨシユア。あるいは君の隠形なら我らのスキを突けただろうが…………」

「そうして姿を見せた状態では私たちの隙を突くのは不可能よ。いくら《漆黒の牙》でもね」

「…………そうだね。でも隙を突くのは僕がする必要もなさそうだ」

「なに……………」

突然、執行者たちの横から1人の男が襲いかかった。しかし、その攻撃はレンによって防がれた。

「えっ……………!?!?」

「やあ、みんなご苦労だったね。陛下、殿下。遅くなって申し訳ありませんでした」

強襲したのはシード中佐だった。

「シード中佐……………」

「…………よく来てくれました」

「ほう…………《剣聖》に連なる者が」

「うふふ…………惜しかったわね。あともうちちょっとでレンたちのスキが作れたのに」

「ああ、正直ショックだよ。まさか今の打ち込みが返されてしまう

とはね」

「クク、いいねえ。せっかくだから俺たちとこのまま遊んでいくかよ?」

「いや、遠慮しておこう。自分はいくまで囮に過ぎないからね」

「なに……」

「!?!」

その瞬間、ジークが飛んできて

「……っ」

「チイツ……」

軍服の男が幻惑の鈴ルシオラと痩せ狼ヴァルターをアリシア女王たちから引き離し、

「くっ……」

「きゃあっ……」

シード中佐がその隙に怪盗紳士ブルブランとレンに一太刀浴びせ、4人を完全に隔離させた。

「間に合ったか……」

「あ、貴方は……」

「おいおい……」

「なんとまあ……」

「リ、リ、リ……リシャル大佐っ!?!」

軍服の男性はリシャル大佐だった。

「はは……久しぶりだ、エステル君。だが、今の私は、階級を剥奪された服役中の国事犯にすぎない。大佐と呼ぶのは止めてくれたまえ」

「や、止めてくれたまえって……」

「リシャル殿。……お久しぶりですね」

「……陛下と姫殿下も壮健そうでなによりです。すでに准将から話は聞いておられるとは思いますが……。どうか一時の間、この逆賊たちに御身を守らせて頂きますよう」

「ふふ、もちろんです」

「よろしくお願いしますね」

「……ありがたき幸せ」

「も、もう何がなんだか……」

「僕たちが知らない間に事態が動いていたみたいだね」

「さすが《剣聖》というわけですね」

「《剣聖》を継ぐ2人……。それに《漆黒の牙》とS級遊撃士、さらに腕利きの遊撃士たちか」

「ふふ……少し遊びすぎたかしら」

「フツ……こちらとしては助かったがね。ちなみに市街の方も既に手は打たせてもらったよ」

「えっ……!？」

グランセル市街地

「これより人形兵器と猟兵団の掃討を始める！市民の保護、及び正規軍の支援は最優先で行いなさい！」

「イエス・マム！」

カノーネ率いる元情報部の特務兵たちが市街地で交戦を繰り広げていた。

「おいおい、マジかよ！どうして特務兵がいきなり現れやがるんだ！？しかも《結社》の手先を攻撃しているみたいだが……」

ナイアルとドロシーが茂みに隠れてその様子を取材していた。

「うふふ、きつと反省して助けに来てくれたんですよ。こういうのって汚名挽回っていうんですけどっけ？」

「汚名を挽回してどうする……。それを言うなら汚名返上だろ。ああ、もうどうでもいい！せっかくカメラが使えるようになったんだ

「約束の時間が来るまで撮って撮って撮りまくれ！」
「アイアイサー！」

「わわっ……。獵兵たちが押されてる!？」

「ああ、さすがだね」

「へっ……。やるじゃねえか」

「さて、どうする。《身喰らう蛇》の諸君?この期に及んで我々とやり合うつもりはあるかな？」

「……チツ」

「……気に入らないわ。こうなったらパテルマテルを呼んで

」

「止めたまえ、レン。我らは機を逃したのだ。これ以上拘るのはいささか美しくなかるう」

「女王陛下と姫殿下の確保も可能ならばという条件よ。2人とも、

ここは退きましよう」

「フン……。仕方ねえな」

「……」

「それでは諸君……。我々はこれで失礼しよう。だが次なる試練は君たちの前に控えている。気を抜かないようにしたまえ」

「次なる試練……」

「な、なによそれ!？」

「ふふ……。すぐに分かるでしょう。それでは皆様、ご機嫌よう」
執行者たちは消えてしまった。

「あ……!」

「退いてくれたか……」

「ふむ、これで獵兵どもも市街から撤退を始めるだろう。深追いができないのが残念だがまあ、贅沢は言うまい」

「うん……。って、それよりも!どうして大佐がこんな場所にいるわ

「け！？服役中じゃなかったの！？」

「だからもう大佐ではないんだが……まあいい」

「とりあえず今はこの混乱を収めることが先決だ。君たちも手伝ってくれないか？」

「う、うん……それはもちろん」

「まずは消火と怪我人の手当てをする必要がありますね」

こうして……《結社》による王都侵攻作戦は辛くも食い止められた。エステルたちは、軍の部隊と共に消火と混乱する市民へのフォローに回り……

その内に、連絡を受けて駆けつけた仲間たちとも合流することができた。

第15章 混迷の大地（6）（前書き）

！
《結社》の侵略は防げたものの、新たな試練が王国に襲いかかる

第15章 混迷の大地（6）

グランセル城 謁見の間

「先ほど話に出たように全てはカシウス准将の指示でね。王都に危機が訪れることを前もって察知されていたんだ。だが、導力兵器が主武装である正規軍では守りきれそうにない……。そこで白兵戦の経験が豊富な特務兵の投入を決断されたわけだ」

「無論、服役中の我々を投入するための名目は必要だ。そこで我々は、王都へ護送中に今回の騒動に巻き込まれて、結果的に市街を守った形になる」

「な、なるほど……。って、どう考えても無理があると思うんですけど」

「どうやら陛下たちはご存じだったようですね？」

「ええ、この件に関してはカシウス殿と話し合いましたから。後々、様々な批判を受けてしまうとは思いますが国民の安全には代えられません。何よりも、リシャル殿の愛国心をわたくしは信じることにしました」

「……もつたいないお言葉」

「そっか、そういう事なら……。そういえば……。あたしたちをお城に呼んだのはその事と関係していたんですか？」

「ええ、それもあります……。実は、クローディアのことでお伝えしたいことがあったのです」

「えっ……？」

「……クローゼの？」

エステルとヨシユアはクローゼに視線を向けた。

「はい、実は……略式ではありますが、今朝、立太女の儀を済ませました。今の私は、リベール王国の次期女王という身分になります」

「ええっ!？」

「わぁ……!」

「……よく決心したね」

「いえ……ただの我がままなんです。エステルさん、ヨシユアさん。それから他の皆さんも……。学園のみんなを助けてくださったそうですね。本当にありがとうございます」

「あ……うん。でも、協力してくれたのはあたしたちだけじゃないわ。アネラスさんたちやジークも助けてくれたしね」

「ピユイ」

「ふふ、そうみたいです。事件のことを知った時、私は自分に何ができるのかを真剣に考えさせられました。大切な人たちを守るために自分が何を果たせるのかを……」

「それが……王位を継ぐことだったんだね？」

「はい。未熟な私には、王国全てを背負える力も自信ありません。それでも、私が王位を継ぐことで大切な人たちを守るのなら……。そして、その事が結果的に王国を守ることに繋がるのなら……。」

「そう思い至ったんです」

「そっか……」

エステルはクローゼの手を握った。

「クローゼ、おめでとう！とうとう自分の道を見つけることができただんだね！」

「エステルさん……ありがとう。でも、まだまだ未熟ですし、自分に何ができるのかも判りません。困った時は……力をお借りしてもいいですか？」

「あはは！そんなの当たり前じゃない！第一、未熟なのはあたしたちも同じなんだし」

「君が今まで僕たちを助けてくれたのと同じように……必要な時はいつでも力になるよ」

「エステルさん、ヨシユアさん……。……本当にありがとう」

「（……自分の愚かさが今更ながらにこたえるな。未来を担う若者たちの可能性に気付くこともなく、あんな事をしでかしたのだから……）」

「（リシャルさん……）」

「（ふふ、何を言っているのです。貴方だって、未来を担う若者のうちに入るでしょうに）」

「（陛下……）」

「（ご、ご冗談を……）」

「も、申し上げます！」

いきなり、王室親衛隊の1人が声を張り上げながら入ってきた。

「どうした？市街で何かあったのか？」

「い、いえ、そちらの方は何とか收拾が済みました。獵兵たちもここごとく王都から撤退した模様です」

「ならば、どうした？」

「さ、先ほどハーケン門と連絡が取れたのですが……。国境近くに、帝国軍の軍勢が集結し始めているのだそうです！」

その連絡に一同が驚愕した。

「ええっ!？」

「やはり来たか……!」

「……軍勢というのはどの程度の規模なのですか？」

「現時点で集結しているのは1個師団程度なのですが……。ど、どうやらその中に戦車部隊が存在するらしく……」

「なんだと!？」

「ちょ、ちょっと待て!導力停止現象の中でどうして戦車が動かせる!？」

「まさか《結社》と同じ技術を使っているの!？」

「いえ……どうやら導力機構を搭載していないタイプのようです。

観察した限りでは『蒸気機関』で動いているとか……」

「蒸気……機関？」

「えとえと……内燃機関よりも原始的な蒸気の使用を発動機だけど……。オーブメントの普及と共にすぐに廃れてしまった発明なの」

「蒸気機関は非常に効率の悪いものですからね。今この時代で、そのような古い技術を使うことなど考えられませんか……」

「……そんな物で動く戦車などの国も保有しているはずがない。導力戦車と比較するとあまりに経済効率が悪いからな」

「ならば答えは一つ……。秘密裏に帝国内で製造されていたわけですね」

「そ、それって……」

「……この事態を見越していたということか。では、結社の連中が言っていた『次なる試練』というのは……」

「ええ……恐らくこの事だと思えます。そして彼らは、今度の事件で王都を人質に取ってしまった」

「その気になればいつでも王都を狙える……そういう意図もあったわけか」

「加えてもう一つ……。恐らく父は、あなたの存在を隠し札として考えていたはず。緊急事態が発生した時に自分の代わりに派遣できるとっておきのジョーカーとして。ですが、そのカードはすでに切られてしまいました」

「……………」

啞然とするリシャル。

「《身喰らう蛇》……そこまで狙っていたのか」

その場の全員が沈黙する中、クローゼが緊縛を破った。

「……お祖母様。どうか私をハーケン門に行かせてください」

「ええっ!?!」

「クローゼ……」

「ここで動かなかつたら私たちを逃がすために負傷した小父様たちに申し訳が立ちません。必ずや、お祖母様の代理として帝国軍との交渉を成し遂げてみます」

「……分かりました。不戦条約が締結されたとはいえ、王国と帝国の間の天秤はいまだ不安定と言えるでしょう。今回の事件は、さらに大きな揺り戻しにつながりかねません。その天秤のバランス取り……どうかよろしく頼みましたよ」

「……はい!」

アリシア女王とクローゼが話し合っている間、エステルたちはお互いに目配せを行った。

「あの……。だったら、あたしたちも一緒に付き合ってもいいですか？」

「え……」

「王太女殿下をハーケン門まで無事、送り届けさせて頂きます」

「それと万が一、戦争が起こりそうになったら出来るだけの協力はしてやるぜ」

「無論、ギルドの規約により戦争には協力できませんが……」

「中立的な立場からの仲裁なら幾らでもさせてもらいましょう」

「国の安定を図る思いは同じですからね」

「皆さん……」

「ふふ……。願ってもないことです。どうかよろしくお願いします」

「はい！」

「どうかお任せください」

「……エステル君、ヨシユア君。《結社》の動きに関しては我々に任せておいてくれたまえ」

「たとえ、あの巨大人形が王都に現れても対処できるよう万全の体制を整えておくつもりだ」

「2人とも……」

「よろしくお願いします」

こうしてエステルたちはクローゼたちを護衛しながら一路ハーケン門を目指した。

グリユーネ門を越え、ロレント地方をできる限りの早さで通過してから……

エステルたちはついにハーケン門に辿り着いた。

第15章 混迷の大地(7) (前書き)

王都グランセル編・後編です。次回、SC最終章『第16章 空の軌跡』が始まります。

第15章 混迷の大地（7）

王国・帝国国境付近

「説明してもらおうか！ゼクス・ヴァンダール中将！何故、このような場所に帝国軍の師団がやって来る！？締結されたばかりの不戦条約、よもや忘れたとは言わさんぞ！？」

モルガン将軍が帝国のゼクス中将と言い争っていた。

「モルガン将軍……。説明していただきたいのはむしろこちらの方です」

「なに……。！？」

「先日より、帝国南部の街で導力器が働かなくなるという異常現象が続いている状態です。そしてそれは、謎の巨大構造物が貴国の湖上に現れてからという確かな報告が届けられています。これは一体どういう事ですか？」

「……。どういふ事も何も今、お主が言った通りだ。我々も、突然現れた災厄に混乱しきっている状態にある」

「どうやらその様ですな。そしてその災厄が帝国領土を侵しているのも事実。ならば、我々がここに在る理由も理解して頂けると思っておりますが」

「おぬしら……。我らの弱味に付け込むつもりか？」

「そのつもりはないと一応、言っておきましょう。異常現象に乗じて怪しげな犯罪組織が王国内で跋扈しつぱしていると聞いています。不戦条約を結んだ同盟国として何とか力になれないか……。帝国政府としてはそのような意向のようです」

「戯言を……。ならばその戦車は何だ！？蒸気によって動く戦車などわしは今まで聞いたことがない！どうしてそんな代物をこの状況で都合よく連れてきた！？」

「それは……。軍事機密と申し上げておく。だが、この戦車があればこそ市民たちの不安を和らげられるし、帰国の窮状を救うことも適かな

いましょう。どうかご理解いただけませんか？」

「くっ……」

「……お気遣いとても嬉しく思います」

「！？」

モルガン将軍が振り返ると、クローゼとエステルたちがこちらに向かって来ていた。

「な……！」

モルガン将軍はひどく驚いたようだ。

「（ひ、姫様！？どうしてここに！？）」

「（モルガン将軍、ご苦労様です。どうかこの場の交渉は私に任せていただけませんか？）」

「（で、ですが……。それにどうしておぬしらまでいるのだ！？）」

「（一応、クローゼの護衛なの）」

「（それと、いざという時には仲裁をさせてもらうつもりです）」

「（むむ……）」

「（未熟な私に交渉役は務まらないかもしれませんが……。ですが、王太女としての務めを果たすべき時だと思つのです。どうか……お願いします）」

「（……分かり申した。ですが、いつ牙を剥くか判らぬ軍勢の前です。いざという時はすぐに門に逃れる準備をして下され）」

「（……分かりました）」

「（どうやら交渉相手が変わつたようですね。見ればやんごとなき身分のお方とお見受けいたすが……）」

「お初お目にかかります。わたくしの名は、クローディア・フォン・アウスレーゼ。リベール女王アリシアの孫女にして先日、次期女王に指名された者です」

「！……これは失礼いたしました！自分の名は、ゼクス・ヴァンダー。エレボニア帝国軍、第3師団を任されている者です」

「あなたが……御勇名は耳にしております」

「（あのオジサン、有名なの？）」「
エステルがヨシユアに尋ねた。

「（『隻眼のゼクス』……帝国でも5本の指に入る名将だ）」

「しかし以前、殿下のお姿を写真で拝見したことがあるのですが……。お髪をお切りになられたのですな？」

「恥ずかしながら……立太女の儀を済ませたばかりの身。身に余る重責に立ち向かうための小娘の決意の表れとお考えください」

「いや、しかしそのお姿もとても良く似合っただけです。改めて……王太女殿下におかれましては誠におめでとうございます」

「ありがとうございます、中将」

「して……王太女殿下がどうしてこのような場所に？モルガン將軍と同じように我々に抗議するおつもりですか？」

「いえ……そのつもりはありません。帝国南部の方々もさぞかし不安な思いをなされている事でしょう。夜の闇、寒さ、情報の途絶……。どれも不安をかき立てるのに充分すぎる出来事でしょうから」

「……」
「ですが、考えて頂きたいのです。このまま貴国の軍隊が我が国に入ってきた場合の問題を。ただでさえ、貴国以上に全土が混乱しきっている状況です。そこに他意は無いとはいえ、動揺する市民は少なくないはず……。貴国の善意が誤解されてしまうのはたくし、余りにも忍びないので」

「で、ですが……」
「目下、わたくしたちはこの異常現象を解決する方法を最優先で模索しております。また、件の犯罪組織についても自力で対処できている状況です。不戦条約によって培われた友情に無用な亀裂を入れないためにも……。どうか、わたくしたちにしばしの時間を頂けないでしょうか？」

「……………むむ……………」

「……………残念だが、それはそちらの事情でしかない」

ゼクス中将の後ろから金髪の青年　オリビエが現れた。

「……………皇子……………」

「ここは私が引き受けよう。下がってたまえ、中将」

「は……………」

「……………へっ……………」

「まさか……………」

「冗談だろ……………」

「お初お目にかかる。クローディア姫殿下。エレボニア皇帝ユーゲントが一子、オリヴァルト・ライゼ・アルノールという」

「……………！！（皇帝の一子って……………お、皇子様ってこと！？シエラ姉、知ってたの！？）」

「（し、知るわけないじゃない！てつきり帝国から派遣された諜報員だと思ってたわよ……………）」

「オリヴァルト皇子……………名前だけは存じていましたが」

「フフ、皇子とはいってもしがなき庶子でしかないのですね。公式の場に出ることも少ないから顔を知らなくても不思議はない。そかし、そうは言っても少しばかりシヨックではあるな。縁が無かったとはいえ、かつての縁談相手の顔くらいご存じかと思ったのだから」

「!?(あ、あんですって!?)」

「(そうか……大佐が進めていた話か)」

「そうでしたか……。存じなかった事とはいえ本当に申し訳ありません」

「まあ、女王陛下の与^{あずか}り知らぬところで進められていた話とは聞いている。その事は別に気にしていないが……。だが……。今回の事態は見過ごせないな」

「……………」

「クローディア姫。今、帝国本土でどのような噂^{うわさ}が囁^{ささや}かれているかご存じかな?」

「……………いえ、寡聞にして……………」

「ならば、教えてあげよう。彼方に見えるあの巨大構造物……あれが王国軍の新兵器という噂だ」

「……………」

「『リベル軍が導力を止めてしまう画期的な新兵器を実用化したそうだ。彼らはそれを使って10年前の復習を企てているらしい』」

「こんな噂がまことしやかに流れているのだよ」

「そ、そんな……。誤解です!わたくしたちはそんな……………」

「ならば……誤解である事を証明できるかね?」

「……………」

クローゼは何も言えずに口を閉じてしまった。

「出来ないのであればこちらもそれなりの対応をさせてもらうしかないわけだ。それどころか、噂の通りならば不戦条約を隠れ蓑にした重大な背信とすら言えるだろう。フフ……正当防衛もやむをえまいと思わないかね?」

「いい加減にしなさいよ!」

「エステル……………」

「お、お姉ちゃん!?!」

エステルがたまりかねてクローゼの前に出た。

「さつきから聞いてれば勝手なことをペラペラと！オリビエだつてこっちの事情は大体分かつてるんでしょ！？どうしてそんな意地悪なことばかり言うわけ！？」

「エ、エステルさん……」

「おや……何だね君は？私のことを知っているようだが、どこかのパーティで会ったかな？」

オリヴァルト皇子は顔色一つ変えずにエステルを見た。

「へっ……」

「いや、貴族にはいささか品位に欠けるな……。ふむ、どこからどう見ても庶民の娘でしかないようだ。で、何者なのだね？」

「……上等じゃない。あくまでシラを切るわけね。そっちがそのつもりならあたしだって考えがあるわよ？」

「ほう……？」

「あたしの名前はエステル・ブライト！リベル遊撃士協会に所属するA級遊撃士よ！あくまで中立の立場からこの問題に介入させてもらうわ！」

「エステルさん……」

「ほう……遊撃士だったのか」

オリヴァルト皇子はそれを聞いても何の反応も示さなかったが、

「（A級遊撃士といえば大陸でも有数の遊撃士じゃないか。フフ……エステル君もやるものじゃないか）」

心の中では笑っていた。

「それで、中立の立場からというのがこの状況で何をするつもりかね？」

「あの浮遊都市がリベルの兵器じゃないことをここでははっきりと宣言するわ！『支える籠手』の紋章に賭けて！」

「ほう……大きく出たものだ。確かに遊撃士協会の発言には無視できぬ影響力があるが……。果たしてその宣言にどれだけの根拠があるのかね？」

「根拠も何も、あたし達がこの目で見てきたことだもの。浮遊都市を出現させたのは今もリベールで暗躍している《身喰らう蛇》という結社よ。あたし達は、王国軍として彼らの陰謀を止めるために戦ってきた。何だったら、詳細な報告書を帝国政府に提出したっていいわ」

「ふむ……。そのように言われては少々考えざるをえないが……。どうやら肝心な事が抜け落ちていのではないかな？」

「え……」

「仮にその結社とやらが犯人だったとして……この異常現象を止める方法が果たして君たちにあるのかね？」

「そ、それは……」

《結社》を止めたとしても導力停止現象が解決するという根拠がないエステルは押し黙ってしまった。

「ないのであれば、我々としてもてをこまねいているつもりはない。幸い、蒸気戦車に搭載しているのは火薬式の大砲だね。あの浮遊都市を落とすにはもってこいだとは思わないかね？」

「じよ、冗談でしょ！？大砲なんかで、あの巨大な都市を落とせるはずないじゃない！」

「フフ……やってみなくては分かるまい。いずれにせよ……一つ、確実に言えることがある。君たちには、我々の善意と正義を退けるだけの根拠も実力もないということだ」

「くっ……」

「……。ならば……証明すれば宜しいのですね？」

「ほっ……？」

「この状況にあってあの浮遊都市を何とかする可能性を提示できれば……。わたくしたちにしばしの猶予を頂けるのですね？」

クローゼは自信をもって言った。

「ふむ、そうだな……。一時的ではあるがそうせざるを得ないだろう」

「（お、皇子……！？）」

「（落ち着け、中将。不戦条約を結んだ相手に当然の礼儀というものだろう。それに証明できれば、だ）」

「（……は）」

「それでは……。君たちが可能性を提示できたら一時的に撤退することを約束しよう。『黄金の軍馬』の紋章と皇族たる私の名に賭けてね」

「その言葉、しかと聞きましたぞ」

突然、どこからか男性の声が聞こえてきた。

「い、今の声は……！」

「ひよっとして……！」

「ああ……間違いない」

「おいおい、マジかよ！」

「……父さん」

上空から導力停止現象の状態にもかかわらず動いているアルセイユが降りてきた。

「これが現時点で我々が提示できる可能性です。どうぞじっくりとご覧あれ」

「父さん……！」

「カ、カシウス・ブライト！？」

「ゼクス少将、久しぶりですな。おっと……今では中将でしたか？」

「そんな事はどうでもいい。ど、どうしてこんな所に……。それよりもその船は何なのだ！？どうしてこの状況で空を飛ぶことができる！？」

「それは国家機密と申し上げておきましょう。貴国がどうして蒸気戦車を保有しているのかと同じようにね」

「ぐっ……」

「ふむ……。これが噂の《アルセイユ》か。そして貴公が、かの有名なカシウス・ブライト准将なのか？」

「お初お目にかかります、殿下。何やらどこかでお会いした事があるような気もいたしますが……」

「奇遇だな、准将・私もちょうど同じ事を感じていたところだね」

「それはそれは……」

「まったく……」

そして2人は笑い合った。

「お、皇子！」

「クローディア姫、エステル君。私も誇り高きエレボニア皇族だ。

先ほどの約束は守らせてもらおう。すぐにでも、この付近から帝国軍の全部隊を撤退させる」

「オリビエ……」

「……感謝いたします」

「しかし、そうだな……。可能性を示されただけでは我が帝国市民も納得すまい。ここは一つ、私自身がアルセイユに乗せてもらって視察するというのはどうだろうか？」

「お、皇子ツ！？」

オリヴァルト皇子の言葉にゼクス中將は驚いた。

「ふむ、皇子自らの視察とあらば帝国政府も納得しましょう。如何です、クローディア殿下？」

「勿論、願ってもないことです。リベルとエレボニアの友情もさらに固く結ばれる事でしょう。歓迎いたします。オリヴァルト皇子殿下」

「……皇子！一体どういうおつもりか！久々に顔をお見せになったかと思えばこ、このような猿芝居を……！」

ゼクス中將は納得いかんとばかりにオリヴァルト皇子に詰め寄った。

「ハツハツハツ。やっぱりバレちゃった？」

「当たり前ですッ！よもや皇子がリベールでこのような事を企んでいたとは……。ミュラー！お前が付いていながら何事だ！」

「お言葉ですが叔父上……この男が、俺の言うことなど素直に聞くとお思いですか？」

「ぐっ……」

「それに俺も少々、納得がいかないこともある。『ハーメルの惨劇』……今度の一件で初めて知りましたよ」

「……！」

ミュラーの言葉にゼクス中将顔色が一変した。

「……やはりご存知でしたか」

「ハハ、先生があ的事件を知らないはずがないだろう？当時からすでに軍の重鎮だったのだからね」

「……」

「いやいや、先生。あなたを責めるつもりはないよ。一部の主戦派が企てただけで、先生たちは一切関与していなかったという話だからねえ。あまりに酷いスキヤンダルゆえ、徹底的に行われた情報規制……。賛成はしかねるが、納得はできる。臭い物にはフタを、女神には祈りを。国民には国家の主義をと言っわけだ。だが……」

オリヴァルト皇子はゼクス中将を見据えた。

「同じような欺瞞を繰り返すことは許さない」

「……ッ」

「先生、あなたも本当は気付いているはずだ。唐突すぎる蒸気戦車の導入……。そして不自然極まるタイミングでの出勤命令……。全ては《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの描いた絵であることを」

「……！」

「今回の事で確信したよ。彼は間違いなく《身喰らう蛇》と通じている。その事が、帝国にとってどのような影響をもたらすかは何とも言えないが。いずれにせよ、一国の宰相にふさわしい振る舞いではあるまい？」

「………………。皇子、まさか貴方は……………」

「フフ、そのまさかだ。10年前に頭角を現して帝国政府の中心人物となった軍部出身の政治家……………。帝国全土に鉄道網を敷き、幾つもの自治州を武力併合した冷血にして大胆不敵な改革者。帝国に巣食うあの怪物をボクは退治することに決めた。今度の一件はその宣戦布告というわけだ」

「……………何ということ。皇子、それがどれほど困難を伴うことであるのか理解しておいでなのか？」

「そりゃあ勿論。政府は勿論、軍の7割が彼の傘下にあると言っている。先生みたいな中立者を除けば反対勢力は衰え始めた諸侯のみさらに夕チが悪いことに父上の信頼も篤いときている。まさに怪物というべき人物さ」

「ならばなぜ……………！」

「フツ、決まっている。彼のやり方が美しくないからさ」
オリヴァルト皇子はきっぱりと言い張った。

「!?？」

「リベールを旅していてボクはその確信を強くした。人は、国は、その気になればいくらでも誇り高くあれる。そしてボクの祖国と同胞にも同じように誇り高くあつてほしい。できれば先生にもその理想に協力して欲しいんだ」

「………………。皇子。大きくなられましたな」

「フツ、男子三日会わざれば括目して見よ、とも言っからね。ましてや先生に教わった武術と兵法を教わっていた時から7年も過ぎた。少しは成長したということさ」

「フフ……………そうですね……………撤退に関しては了解しました。ただし、我が第3師団はあくまで先駆けでしかありません。すでに帝都では宰相閣下によって10個師団が集結しつつあります。今日を入れて3日……………それ以上の猶予はありませんまい」

「ああ……………心得た」

「ミユラー。お前も皇子に付いて行け。危なくなったら首根っこを

掴んででも連れて帰るのだぞ」

「ええ、元よりそのつもりです」

ゼクス中将は後ろを振り返ると帝国軍兵士に指示を出した。

「全軍撤退！これより第3師団は、パルム市郊外まで移動する！」

「イエス・サー！」

「やれやれ……。これで少しばかり時間は稼げたか。それにしてもホント、ボクって信用ないんだねえ」

帝国軍が引き上げていくのを見て、オリヴァルト皇子は一息ついた。「……当たり前だ、阿呆。正直、ここまで大げさにやらかすとは思わなかったぞ」

「どうせやるなら派手な方がいいしね。それに君だって律儀に準備を進めてくれただろう？言わば、甘い蜜を吸い合った相思相愛の共犯者というわけだ」

「おぞましいことを言うなっ」

「オリビエっ！」

2人が雑談している所にエステルたちがやってきた。

「やあ、エステル君。ご苦労様だったねえ」

「ご苦労様じゃないわよ！一体、何がどうなっているわけ!？」

「どうしたもこうしたも、まあ、見た通りのまんまさ。帝国内で怪しげな陰謀が進行していたものだからね。ちよつと一芝居をうつて出鼻を挫いてやったわけだ」

「一芝居って……。あんたね」

「敵を欺くためにはまず味方からと言うからねえ。君たちとの本気の交渉を経てあのタイミングでアルセイユが来る……。これが今回、ボクとカシウスさんが考え出したシナリオだったのさ」

「や、やっぱり……」

「そつだと思いましたよ」

「……ま、そういう事だ」

「父さんくっ!？」

カシウスがノコノコとやってきた。

「そう恐い顔をするな。導力通信で聞いていたがなかなかの交渉ぶりだったぞ。おかげでアルセイユの登場が効果的に演出できたからな」

「導力通信で聞いてたって……」

「まさか……あのアーティファクトで？」

「おっと、シエラ君。それは言わなくてくれたまえ。彼に聞かれると少しばかり面倒だからね」

「……何を白々しい。今さら隠したって遅いですわ」

カシウスに続いてやってきたのは、ケビン神父たちだった。

「ケ、ケビンさん!？」

「お、おじいちゃん!」

「ユリアさんも……」

「殿下……。王都での襲撃は聞きました。本当に……ご無事でよかった」

「ごめんなさい……。心配をかけてしまいましたね」

「いや、アルセイユの改造がもっと早く終われば王都の危機にも駆けつけられたんじゃないが……。思っていた以上に時間がかかってしまったのう。じゃが、皆無事で良かったわい」

「そ、そっぴや……。どうしてアルセイユが空を飛んでやがるんだよ!？」

「ひょっとして……『零力場発生器』の大型版なの」

「うむ、その通りじゃ。お前さんたちに渡したのは大型版を開発するために試作したプロトタイプでな。今までアルセイユに閉じこもってようやく完成にこぎつけたんじゃない」

「そうだったんですか……」

「要するに、何もかもが父さんの差し金だったわけね？」

「人聞きの悪いことを言うな。俺はただ、皆が動きやすいようにお

膳立てをしただけにすぎんさ。お前たちも自分自身の意志で今まで行動してきたんだらう？」

「そ、それはそうだけど……。そういえば、ケビンさんがどうしてここにいるわけ？」

「ああ、ぶつちやけ大聖堂に騎士団本部からの連絡が届いてな。《輝く環》がどういう物で、どうすれば災厄を抑えられるか大体のところが分かってきたんや。それをカシウスさんに話してたらこんな所まで付き合わされてな」

「ええっ!？」

「《輝く環》の正体……ですか？」

「ああ……。《輝く環》つちゆうのはあの浮遊都市そのものやない。都市全体に導力を行き届かせてコントロールする古代遺物らしい。」

そして、その端末がああ《ゴスペル》だったわけや」

「都市をコントロールする古代遺物……」

「で、でもどうしてそんな物が導力停止現象を？」

「これは推測やけど……。《環》は外界に存在する異物を排除する働きを備えてるらしい。この場合、異物つちゆうんは現代に造られた新たな導力器 すなわちオーブメントってことや」

「影響範囲内にある異物をことごとく無力化する……。いわば防衛機構といったところか」

「その可能性は高いじゃろう。そしてそれが本当なら一条の光明が見えてくる。あの巨大さゆえ、都市そのものをどうにかするのは困難じゃが……。都市のどこかにあるという《環》の本体さえ発見できれば対策の立てようもあるはずじゃ」

「なるほど……。そういうことですか」

「本体を叩いて全てを無力化するというわけですね」

「た、確かに光明かも……」

「ふむ、いい感じで最終目的が定まってきたようじゃないか。それでは早速、《アルセイユ》であの浮遊都市を目指すわけだね？」

「それを決めるのは《アルセイユ》を所有するリベール王家になり

ますな。姫殿下……どうかご決断を」

「……分かりました。これより《アルセイユ》はヴァレリア湖上に現れた古代の浮遊都市へと向かいます。ユリア大尉、発進の準備を」「了解しました!」

「そして遊撃士の皆さん……。どうか窮地にあるリベールに皆さんの力をお貸しください。恐らく、この件に関しては最後の依頼になると思います」

「ふふ……そうね」

「ま、答えは決まっているようなもんだが……」

「ここはひとつ代表者に答えてもらおうとしようか」

「ん……代表者?」

「あのな……エステル。お前の事に決まってるだろ?」

「ええっ!?!」

「ふふ……何を面食らってるんだか。確かに、それぞれ個人的な因縁は持っているけれど……。でも、何だかんだ言っただけは皆、あなたの旅に付き合わされたようなものよ」

「その意味では、エステル。お前さんは間違いなく俺たちのリーダーってわけさ」

「あ、あうあう……」

「やれやれ……。まだ荷が重いんじゃないか?」

「……そんな事はないよ。どんな時もエステルは前向きに、決して希望を諦めずにくれた。その輝きはどんな時でも僕を……僕たちを導いてくれた。だから……エステルじゃなきゃ駄目なんだ」

「ちょ、ちよつとヨシユア!」

「えへへ……お姉ちゃん、真っ赤だよ?」

「恥ずかしがることはありませんよ、エステルさん。自分の思いを言えばいいだけなのですから」

「~~~~~。あーもう、分かったわよ!クローゼの依頼……つつしんで請けさせてもらっわ!必ずや、あの浮遊都市にある《輝く環》を見つけ出してこの事態を解決してみせるから!」

「ふふ……よろしく願いますね」

「やれやれ……何とか話がまとまったか。これで俺もようやく司令部に戻る事ができる」

「父さん……やっぱり付いてきてくれないんだ？」

「ああ……悪いな。一時的に撤退したとはいえ帝国軍の脅威は無視できん。ハーケン門だけではなく、海からの侵攻の可能性もあり得る。もちろん王都で起こった《結社》の襲撃も予想できるだろう。

この状況で王国軍を留守にするわけにはいかんのだ」

「うん……わかってる。あたしはあたしで頑張ってくる。ヨシユアと……それからみんなと一緒にね。だから父さんも……倒れない程度に頑張ってるね」

「ああ……任せておけ。ヨシユア……お前にはこれを渡しておこう」
「え……」

カシウスはヨシユアに一通の手紙を手渡した。

「これは……？」
「ま、ちょっととした親心さ。男と男の話だからエステルには刺激が強すぎるかな」

「な、なによそれ……」

「……分かった。後で読ませてもらうよ」

「ああ、そうするといい」

「まったくもう……。男っていうのはこれだから」

「まあ、そう拗ねるな。全てのケリが付いたら俺も休暇を取るつもりだ。その時は久しぶりに家でのんびりと過ごすとしよう。その時は、エステル。またあのオムライスを作ってくれ」

「あ……。……うん、任せといて！」

「……………」

カシウスはモルガン將軍と共に門の上から《アルセイユ》を見送っ

ていた。

「いいのか……カシウス？そんなに心配ならば行っても良かったのだぞ？」

「いや、いいんです。例のワイスマンという男……。思っていた以上に危険極まりない。私が同行していた場合、恐らく手段を選ばないでしょう」

「確実に抹殺してくるか……。……やれやれ。お前も随分買われたものだな」

「まったく、えらい迷惑ですよ。ですが、逆にそこに付け入る隙が出てくるでしょう」

「虚実入り混じった読み合いか……。《鉄血宰相》の方はどうだ？」「あちらもあちらでやっかいな御仁ですが……。まあ、こちらがこれ以上隙を見せなければ大丈夫でしょう」

「ふむ、そうか……。全ては《アルセイユ》の一行にかかっているというわけだな……」

「ええ……」

カシウスは空に向かって祈りを捧げた。

「レナ……。それに空の女神よ……。あの子たちの足元をどうか照らし出してくれ……。この大いなる空の下……。自らの道を見つけれよう」

第16章 空の軌跡(1) (前書き)

いよいよSC最終章、『第16章 空の軌跡』が始まります！

第16章 空の軌跡(1)

アルセイユ

「安定翼、格納完了。そのまま最大戦速まで加速しつつ、湖上の浮遊都市に向かえ」

「イエス・マム」

「敵の迎撃があった場合は？」

「砲術士として座っていたミュラーがユリア大尉に尋ねた。

「……そうですね。困難ならば強行突破を行います、都市への着陸を最優先とします」

「了解した。ちなみに、自分に敬語は無用だ。階級はともかく、こうして砲術士として手伝っている以上、貴官の指揮下にあるのだからな」

「……了解した」

「へえ、ミュラーさんって砲術士なんかもできるんだ？」

「帝国軍で最も導力化された機甲師団で鍛えられたからねえ。顔に似合わず、その手の業務は一通りこなせるわけさ」

オリビエが笑いながら言った。

「……顔に似合わずは余計だ」

「なるほど、そういう事か。ところでオリビエってばいつの間に着替えちゃったの？」

いつの間にか軍服から普段の軽装に着替えていたオリビエ。

「帝国皇子として視察するんじゃないんですか？」

「ハッハッハッ。そんなのただの建前さ。これが終わったら、ボクの自由で優雅な時間は終わりを告げてしまうからねえ。せめてそれまでは気楽な格好でいさせてもらおうよ」

「はは……最後のモラトリアムというわけか」

「はあ、エレボニアの国民が知ったらどう思うことやら……」

「ボクとしては知られても一向に構わないのだがねえ。どうだい、

記者諸君たち。リベール通信でスツパ抜いては？」

後ろに立っていたナイアルとドロシーに振り返った。

「おっと、いいんですかい？」

「だったらバンバン写真撮っちゃいますけど」

「頼むから、そいつの戯言をいちいち真に受けなくてくれ……」

「えっと、それはともかく……。どうしてナイアルたちがいつの間
に船に乗っているわけ」

「竜事件の時のようにお祖母様が手配したんですか？」

「ええ、お察しの通りです。陛下がカシウス准将に口添えをしてく
れましてね。従軍記者扱いで乗艦させてもらったんですよ」

「ハーケン門での、姫様たちのカツコイイ姿も撮っちゃいました
現像、楽しみにしてくださいね？」

「あ。ありがとうございます」

「やれやれ……。どうにも緊張感がねえな」

「でも、緊張で気疲れするよりかはマシだと思えますよ」

「あ、あはは……。そういえば、おじいちゃん。『零力場発生器』
の調子はどう？」

「うむ、今のところ順調じゃ。何も起きなければ浮遊都市に着陸す
るまでは持つてくれるじゃろ」

「ちよ、ちよっと待った。ってことは……。何か起こったらヤバイと
か？」

「うむ。問答無用で墜落じゃろうな」

「サラッと言わないでよ……」

途端に背中に冷や汗が伝わった。その時、レーダーに反応が起こっ
た。

「レーダーに反応あり……。！ステルス化された艦影がらつ、急速接
近してきています」

「来たか……」

「《グロリアス》に搭載された高速艇みたいですね……」

「ふむ、敵のステルスも何とか見破れたようじゃの」

「どうやら、『零力場発生器』以外にもラッセル博士は新発明をしていたようだ。」

「主砲展開用意！最大戦速のまま強行突破する！立ち塞がる艦のみ撃破せよ！」

「イエス・マム！」

「1番、2番、5番を撃墜。3番、4番も完全に引き離しました」「やった！」

「ああ、見事だ！」

「いやはや……これが最先端の空中戦か」

「ふむ……。この主砲は素晴らしいな。かなりの威力のはずだが、大した精度と反動の小ささだ」

砲台を操作していたミユラーが絶賛した。

「わはは、当然じゃ。本来なら、レーダーと連動した迎撃砲も付けたかったが……。ま、それは次の課題じゃの」

その時、さらにレーダーが反応を示した。

「レーダーに反応あり……！」

「8時の方向から全長250アージユの超弩級艦が接近中……！」

「そ、それって……！」

「例の《方舟》ってヤツか……」

「……ヨシユア君。《グロリアス》の基本性能と武装は分かるか？」「機動性、最大戦速共に《アルセイユ》には及びません。ですが、強力な主砲に加え、無数の自動砲台に守られています。攻撃・防御ともに完璧でしょう」

「そうか……。4時方向へ全速離脱！敵戦艦の追撃をかわしながら浮遊都市の上空を目指せ！」

「アイ・マム！」

雲の切れ間から《グロリアス》が現れ、《アルセイユ》に向かって

大量の砲弾を撃ってきた。

《アルセイユ》は急旋回することで全ての砲弾をかわし、最大戦速のまま《グロリアス》との距離を引き離れた。

「……………《グロリアス》の射程圏内から離脱しました」

「ふう……………」

「こ、恐かった……………」

「さすがに緊張したわね……………」

「うん、もうドキドキだわ。でも、これで敵の妨害は全部かわせたんじゃないかな」

「いや……………油断しない方がいい」

「ああ、常識は通用しねえ相手だ。最後の最後まで気を抜かねえ方がいいだろ」

そしてまたレーダーに反応があった。

「前方に雲の切れ目……………！浮遊都市の上空へ出ます……………！」

《アルセイユ》が雲を抜けると、巨大な浮遊都市の全貌が見えた。

浮遊都市は緑豊かな庭園であり、まさに空中庭園の名にふさわしかった。

「と、都市上空に到達しました……………」

「……………すごい……………」

「これが……………古代ゼムリア文明の精華ですか……………」

「……………想像以上の代物やな」

「ふむ……………向こうの方に巨大な柱のようなものが見えるな。おそらく、この都市にとって重要な施設の一つであるはずじゃ。着陸するならまずはあの近くがいいかもしれん」

「了解しました。エコー、周囲の状況はどうだ？」

「……はい。50セルジユ以内に敵艦の反応はありません。《グロリアス》も完全に引き離れたと思われます」

「よし……。ルクス、速度を落としながら前方の《柱》付近に着陸するぞ」

「アイマム」

「あれ〜？」

突然、ドロシーが声を上げた。

「どうしたの、ドロシー？」

「なんだ？ 感光クオーツでも切れたかよ？」

「あ、ううん。それは大丈夫ですけど。なんか、向こうの方から変なものが近づいて来るな〜って」

「なに!？」

「う、うそ!？」

エステルたちは慌てて前を振りかえった。

「な、なんだあれは!？」

「この気配は……まさか剣帝レーヴェ!？」

前方から黒い竜の形をした人形兵器の上に剣帝レーヴェが乗っていた。

「さあ、見せてもらおうか。希望の翼が折られた時……お前たちに何が示せるのかを」

そして、《アルセイユ》に急接近すると左翼のエンジンを切り裂いた。

エンジンの一方を壊された《アルセイユ》は安定を失い、瞬く間に

墜落していった。

第16章 空の軌跡(2)

「……………エ……………テル……………。……………エス……………ル……………起きて

……………」
「大丈夫か……………エス……………ちゃん……………」

「……………エス……………さん……………起きて……………さい……………」

誰かが私を呼ぶ声が聞こえる。

「……………ん……………」

エステルは目を覚ました。

「あ……………」

「よかった……………目え覚めたか」

「大丈夫？どこかケガしていない？」

「あ……………うん……………」

エステルは体を起こして立った。

「……………ちよっとヒジを擦りむいたくらいだけど……………。……………みんなは……………？」

「ま、なんとか無事だぜ……………」

「……………あ、あつう……………」

「だ、大丈夫……………です……………」

「やれやれ……………スリル満点だったねえ……………」

「ふう……………さすがにダメかと思ったわ」

「九死に一生を得たといったところか」

「……………周りにいた全員が無事のようなだったが、ドロシーだけは……………」

「……………えへへ……………。そんなにたくさん……………食べられないですよ……………」

……………」
寝ぼけていた。

「はあ……………つたく。こらドロシー！もう朝だぞ！」

「ほえ……………ナイアル先輩……………？」

ドロシーは慌てて飛び起きた。

「そちらの方はどうだ？」

ユリア大尉はミュラーたちに声をかけた。

「……問題ない」

「な、何とか無事じゃ」

「……問題ありません……」

「こ、こちらは何とか……」

「し、死ぬかと思いましたが……」

ミュラーたちも無事のようだった。

「……まさに奇跡だな。それとも……ただ手を抜かれただけなのか

……」

「そ、そうだ！」

「さっきアルセイユを攻撃した黒いヤツに乗ってたのって……」

「……ああ。間違いなくレーヴェだと思う」

「近づいてきた時に見ましたが、剣帝レーヴェでした」

「……野郎か」

「となると確かに手を抜かれたのかもしれない。奴さんがその気だ

つたら完全に撃墜されていただろう」

「……なんか複雑ね」

「……」

「そういえば……私たち、どこに落ちたのでしょうか？」

「浮遊都市の周縁部のようですが……。まずは外に出て状況を確認した方が良さそうですね」

エステルたちは外に出て周りを見渡した。

リベル＝アーク市

「こ、ここって……」

「うわぁ……キレイ……」

「こ、これはもう撮って撮って撮りまくるしか……！」

ドロシーはなりふり構わず写真を撮り始めた。

「おいおい……。感光クォーツを使い切るなよ？」

「しかしここは……。えらく浮世離れた場所やね。都市っちゅうよりは庭園といった方が良さそうや」

「そうですね……。大都市における公園のような場所なのかもしれません」

「た、確かにそんな雰囲気だけど……。それにしても、同じような場所が遠くまで続いているんですけど……」

「やれやれ……。とてつもないスケールだねえ」

その時、鳥の鳴き声がした。

「ジーク!?」

「ピューイピューイ!!」

ジークはクローゼの肩に停まった。

「よかった……。はぐれたのかと思ったわ。大丈夫……。私たちも平気よ」

「ピューイピューイ!ピューイピューイ!」

「そう……。分かったわ。どうやら私たちは、浮遊都市の最西端に不時着したようです。そして《グロリアス》はちょうど反対側の東側に停泊しているみたいですね」

アルセイユ 作戦室

「アルセイユの損傷はそこまで深刻なものではない。導力機関はほとんど無傷じゃし、反重力発生機関の損傷も軽微じゃ。じゃが、スタビライザーをはじめ、細かい導力系統に不具合が生じておる。このままでは、まともに浮き上がることもできんじやろう」

「そうですね……」

「とにかく人手をかき集めて修理を始めるしかないだろう。及ばずながら自分も協力させていただく」

「……かたじけない」

「アルセイユはそれでいいとして問題は、この都市のどこかに存在する《輝く環》の方だろうね。どうやら《結社》の方は着々と準備を進めているようだ」

「はい……。彼らの手に《輝く環》が渡ったらどのような事になってしまうか……」

「まあ、どう考えてもロクな事にはならないでしょうね。今までの事から判断する限り」

「ヘッ……違いねえ。こりゃ、すぐにでも動いた方が良さそうだな」

「だが、闇雲に動いたらかえって混乱を招く恐れがある。ここはやはり、探索班を組むべきだろうな」

「確かに……。まずは移動ルートを確保しないと《輝く環》も探しようがないしね」

「……………」

「どうしたの、ヨシユア？」

「いや……何でもないよ。とりあえず、探索班にはバツクアツプも必要だと思います。アルセイユに戻ってきたらすぐに交替できるようにするのが望ましいかもしれません」

「そうだな……。私も探索に加わりたくところだが、今はアルセイユの修理が急務だ。当面の役割分担を話し合う必要があるな」

「それならば、探索班を決めた後、残りの方たちがアルセイユの修理班にすべきですね。修理班の方たちは順次休憩を取りながら探索班の方たちと交代を繰り返すといったような方式を取りましょう」

「うん、それがいいかもね」

話し合いの結果、エステルたち5名が探索班になり、それ以外のメンバーは修理班となった。

「それではエステル君以下、5名のメンバーに探索をお願いします。」

何が起こるか分からないからくれぐれも無理はしないでくれ」

「大丈夫、心配しないで」

「まずは移動ルート確保を優先的に行います」

「よろしく願います。残りの者は待機メンバーとして船体の修理を手伝ってもらいたい」

「はいっ！」

「……おっと、そうじゃ。ちなみに朗報が1つあってな。どうやら浮遊都市の上では《導力停止現象》は起こらんらしい。アルセイユから離れていても戦術オーブメントが使えるはずじゃ」

「ほ、ほんと!？」

「ど、どうして分かるの?」

「実は、例の『零力場発生器』が不時着の衝撃で壊れたんじゃが……。それにもかかわらず、艦内の装置を問題なく動かすことができたんじゃ。どうやらケビン神父の推測がおおよそ当たっていたようじゃな」

「どういうこと、ケビンさん?」

「《環》は外界に存在する異物を排除しようとする機能を備えている……。つまり、都市の中にいる限り、オーブメントは異物としては認識されんちゅうわけですな?」

「うむ、そういうことじゃ」

「は、良かった。さすがに探索している時にアーツ無しじゃキツそうだし」

「それでは、艦内にある工房施設も使えそうですか?」

「うむ、そちらも問題ない。更なるオーブメントの改造も可能じゃから立ち寄るがいい」

「了解!」

「分かりました」

「さてと……。早速、艦の外に出て搜索活動を始めちゃおうか？」
「ええ、そうですね」
「……ごめん、エステル。色々と装備を切らしていて補充しなくちゃいけないんだ。少し待っててくれるかな？」
「あ、そうなんだ」
「おっと、それやったらオレも準備があるから付き合っわ。エステルちゃんたちはその休憩室で待つといてや」
「そっか……。分かった」
「では、お待ちしています」
エステル、クローゼ、レインは休憩室に入ってしまった。
「まったく……。君もいいかげん罪作りやね」
「……すみません」
「謝るんならエステルちゃんに謝り。……ホンマにええんか？」
「もう、決めた事ですから。ケビン神父……。どうかよろしくお願いします」
「まったく、しゃあないな……。よし、時間もないことやしとっとと医務室を借りるか」

しばらくした後、ヨシユアとケビン神父が帰ってきた。
「あ、ヨシユア、ケビンさん」
「……お待たせ」
「おや、スマン。遅くなってしもうたわ」
「それはいいけど……。……2人とも、なんだか疲れた顔してない？」
「……そうですね。特に、ヨシユアさんの顔色が良くないですね」
「へっ……」
「細々とした補充にけっこう手間を取られてね。大丈夫、探索には支障ないよ」

「そ、そうそう！めっちゃ役に立ってみせるで〜！」

「それならいいけど……。よし。それじゃあ出発しますか！」

エステルたちは《アルセイユ》を出て、浮遊都市の搜索を始めた。

第16章 空の軌跡(3) (前書き)

データクリスタル編、第1回目です。
今回は#0～#3です。

第16章 空の軌跡(3)

『封印機構について(1/4)』

私の名は、セレスト・D・アウスレーゼ。

『封印機構の』の設立者にして『封印機構』の実行責任者である。後世、塔による《第二結界》が発動し、異次元に封印された《環》が甦りそうになった時のために幾つかの情報断片を残すものとする。もし、このメッセージを読む者が《環》の復活を阻止するつもりならば参考にしてもらえれば幸いである。

だが、《環》の復活を望む者ならばどうか今一度考え直してもらいたい。

《環》の力は余りにも強く、人の子に扱える存在ではないのだ。それを受け入れてしまった時、我々は昏き煉獄に繋がれるであろう。

『封印機構について(2/4)』

本機構は、《環》による干渉を無くすことによって、人の実存を守るために設立されたものである。

ここで注意しておきたいのは《環》そのものに、人を支配する意志は全くないということだ。全ては《環》に頼ってしまう我らの弱さに起因するものである。

大いなる至宝は、未熟な魂には余りにも過ぎた力だったのである。故に、女神の慈悲と全能はいささかも揺らぐことはないのだ。

『封印機構について(3/4)』

封印機構の目的は、いわゆる民主主義の理念からは完全に逸脱する

ものであった。

我々の中にすら、無限の力を持つ《環》を有効利用するべきであるという意見が少なからず存在していたのだ。

だが、自律性を持ち始めてから、《環》は社会と市民生活の双方をすさまじい勢いで変えようとしていた。あろう事か、物質面の充足だけでなく、精神面の充足にまで着手していたのである。

『封印機構について（４／４）』

例えば、《環》は《ゴスペル》を通じて多幸感をもたらす仮想現実を市民に見せ、時には脳内物質の制御までやってのけた。

それは強力極まる麻薬や幻覚剤がいつでも摂取できることと何ら変わりない。しかも質が悪いことに、その薬には生理面での副作用が存在しないのだ。

そのような恩恵が、人の実存にどれほど深刻な影響を与えることか

……

すでに影響は多くの市民に現れており、残された時間は余りにも少なかった。

故に我々は、意見の対立を乗り越え、様々な困難を覚悟した上で『封印計画』の実行に着手したのである。

第16章 空の軌跡(4) (前書き)

浮遊都市編・第1話です。

第16章 空の軌跡(4)

公園区画・カルマーレ

公園区画には至る所から水が流れていて癒しの場と思われる場所だった。

「綺麗……」

「は、大したモンやね」

「な、なんていうか……。とても空の上にあるとは思えないんですけど……」

「これも全て《輝く環》の力というわけですか……」

「古代ゼムリア文明……。単に技術が発達していただけの社会じゃなかったみたいだね」

西カルマーレ駅

導力技術による乗物で上に辿り着くと、浮遊都市の全貌が見渡せた。

「すごい……！」

「圧巻の一言やね……」

「こ、こんなに大きな都市だったんだ……。さすがに……住んでいる人はいないよね？」

「うん……。多分ね。どうやら異次元に封印された時、住民のほとんどが退去したらしい。多分、リベール国民のルーツはその人たちなんじゃないかな」

「そ、それって……。あたしたちのご先祖様たちがこの都市に住んでいたってこと!？」

「……可能性は高いと思います。リベールだけに限らず、大崩壊以前の文明の痕跡は驚くほど少ないそうですから……」

「はー、なるほどな……。地上に痕跡がないのは空で暮らしてたか

らってわけやね」

「な、なんか途方もない話になってきたわね……。それにしても……
…やたらと見晴らしがいいけど、ここってどういう場所なんだろう？」
「ただの展望台かもしれないけど……。向こうに端末みたいなものがあるから調べてみようか」

エステルたちが端末を操作すると画面に情報が映し出された。

《レールハイロウ》 西カルマーレ駅

現在、《レールハイロウ》の運行に大幅な制限が加えられています。お手数ですが、当端末から可能なサービスを手動で入力してください。

非常時につき、《ゴスペル》による市民IDの認証は必要ありません。

《リベル＝アーク》市・交通管理センター

「な、なにこれ……。気になる単語が幾つも出てきたんですけど……」

「《レールハイロウ》……。何かの交通機関みたいだね。そしてどうやら、この浮遊都市は《リベル＝アーク》という名前らしい」

「《リベル＝アーク》……」

「おそらく、リベル王国の名前の元になったものようですね」「な、なるほど……」

「それから《ゴスペル》だけ……。どうやら、ここの市民にとっ

てなじみのある物だったみたいだね。公共サービスを受けるのに必要な身分証明を兼ねた携帯端末……かな」

「ああもう、頭が混乱してきた……。とにかく《ゴスペル》がなくてもできることはあるのよね？早速、色々調べてみましょう！」

「了解　可能なサービスの一覧を出すよ」

エステルたちはまず、非常通路のゲートのロックの解除を選択した。すると、

「当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道78号の利用が可能です」
との知らせが表示された。

さらに、《レールハイロウ》の非常運行モードを選択すると光の道のようなものが現れた。

「あ、あれって……」

「……何か来る……」

西カルマーレ駅にきた物体は、何かの乗物のようなだった。

「な、なにこれ……！？」

「どうやらこれが《レールハイロウ》みたいですね。どういう仕組みなんでしょうか……」

「一部の国で運用されとる鉄道を進化させた感じやね。透明なレールっていうのが無性に不安を誘うけど……」

「これだけの広さを移動するのは大変だったでしょうから、市民の通常の移動手段だったのでしょうか」

「うーん、よく分からないけど移動手段として使えるんだっいたら試してみたい手はないよね。早速、乗ってみるとしましょ！」

「ちよつと待つてください。おそらくまだこの《レールハイロウ》は使えません」

「え、どうして、レインさん」

「たった今、この西カルマーレ駅の非常運行モードを選択したばかり

りです。他の駅の非常運行モードを選択しない限りはどこにも行けないはずです。まあ乗ってみれば分かると思いますが……」
レインが《レールハイロウ》に乗り込もうとすると、
「現在、非常運行モードが起動されている駅が他にありません。《レールハイロウ》は利用できません」
というアナウンスが流れた。

「ほ、本当だ……。じゃあ、どうすればいいの？」

「端末で地下道のロックを解除しましたので、そこから他の区画に行きましょう。そこにも同じ端末があると思われる」

「そっか、それじゃ地下道を探していきましょう」

居住区画

「は、やつと外に出たわね」

「……ここは……」

見渡す限り、家らしきものが立ち並んでいた。

「綺麗な街並み……。どうやら古代人が暮らしていた場所みたいですね」

「確かに、不時着した場所よりかは人が住んでた雰囲気があるかな」

「うん……。静かで良い感じの雰囲気かも。でも……なんで昔の人たちはこんな立派な街を捨てちゃったのかな？」

「……調べて行けば当時の状況が分かるかもね。新たなルートを探す必要があるし、さっそく周囲を探索してみようか？」

「ん、オッケー」

「ヨシユア、あれ……！」

「……………うん。どうしてこんな所に……………。！！！」

隣の街区に入ると、ジヨゼットが人形兵器に囲まれていた。

「そ、それ以上近寄るなっ！これ以上《山猫号》を傷付けたら絶対に許さないんだから！」

ジヨゼットが銃で人形兵器を退けていたが、一際大きな人形兵器がジヨゼットに攻撃を食らわせた。

「あつっ……………！うっ……………キール兄……………ドルン兄……………。……………ヨシユア……………」

「ふふん、お困りみたいね？」

「ノーテンキ女！？……………そ、それに……………」

「だから、誰がノーテンキよっ！」

エステルはいきなりノーテンキと言われ、人形兵器に構わず口論をしそうになった。

「話は後だ！まずはこいつらを片付けるよー！」

「う、うんっ！」

「まったくもう……………ブツブツ」

「ふう……………何とか片づいたわね。大きいヤツはやたらと固かったけど……………」

「結社の重人形兵器、《レオルガンイージー》だ。普通は拠点防衛用に使われることが多いんだけど……………」

「何にせよ、このような場所に振り撒くのは止めてもらいたいですね……………」

「まあとにかく……………本当に無事で良かった。でも、なんで君たちがこんな場所にいるんだい？」

「う、うん……。ボクたち、あんたと別れた後、国境近くに潜伏してただけど……。いきなり空に変な物が現れたから近寄って様子を見ようとしたら山猫号の導力が止まっちゃって……」

「それで墜落しちゃったわけね。あれ、そういえば……。……あんたのお兄さんたちはどうしたの？姿が見えないけどどこかに出かけちゃってるのか？」

「……。うっ……。うっ……。うぐっ……」

ジヨゼットがその言葉を聞いて泣き始めた。

「わわっ、な、なんなのよ!？」

「ジヨゼット……落ち着いて。ゆっくりでいいから事情を話してもらえるかい？」

「うっ……。ヨシユア……。ヨシユアああっ!」

ジヨゼットは泣き叫びながらヨシユアの胸に飛び込んできた。

「……。あ……」

「あらま……」

「な、な、な……」

「け、結社の連中に兄貴たちが捕まったんだ!ボクを逃がすためにみんなで囷になって……。ねえヨシユア……。ボク、どうしたらいいの!？」

エステルたちはひとまず無人の家でジヨゼットから詳しく話を聞くことにした。

「……。ごめん……。驚かせちゃったみたいだね。もう落ち着いたから大丈夫だよ」

「まったくもう……。色々な意味で驚いたわよ」

「ジヨゼットさん。それでどのような事があったのですか？結社にお兄さんが連れ去られたと言いましたが……」

「あ、うん……。って、あんた誰？どうしてボクの事を知ってるの？」

「おっと、申し遅れましたね。私はレインと申します。エステルさんから色々と話で聞かせて頂いてたので知っていますよ」

「ふうん……ま、今はどうでもいっか。それで、どのような事を聞きたいの？」

「そうですね。他の人たちが捕まった時の状況をもう少し詳しく教えてくれますか？」

「……うん……。ボクたち、ここに墜落してから、すぐに《山猫号》の修理を始めたんだ。エンジンは何とか無事だったけど、それ以外の装置は壊れちゃってさ……。修理に使えそうな材料がないかこのあたりを探索してたんだけど……」

「オレらとほぼ同じ状況やね」

「……3日後くらいかな……。足りなかった材料も揃って本格的に修理しようとした矢先にタコみたいな人形兵器が現れてさ……。ボクがそいつを撃った後で紅い飛行艇が飛んで来たんだ……。着陸するなり、例の猟兵たちがわらわら降りてきちゃって……」

「哨戒中の《ヴォーグル》を倒してしまったのか……。多分、破壊された時に発せられる緊急信号が敵に伝わったんだろう」

「やっぱりそうなんだ……。ど、どうしよう……。ボクが余計な事をしたせいで兄貴やみんなが……」

「ジヨゼット……」

「破壊しなかったとしても、いずれは結社の連中がやってきたと思いますよ。結社は邪魔者は誰であれ排除しようとするはずですから」

「で、でも……」

「あゝもう！そんな顔するんじゃないわよ！捕まってるんだったら助ければいいだけじゃない！」

「え……」

「いくら犯罪者といえど不当に監禁されているんだつたら遊撃士の保護の対象だわ。どうせ《結社》とは決着を付けなくちゃいけないんだし……。あなたのお兄さんたちもついでに助けてあげるわよ」

「エステル……」

「ちょ、ちょっと待ちなよ！どうしてボクたちが遊撃士なんかに助けられないといけないのさ！？」

「へ、なんか」にねえ。だったらあんた、自分一人で助けられるわけ？」

エステルはここぞとばかりに嫌味たっぷりと言った。

「うぐっ……………」

「それに、あなたたちには《グロリアス》を脱出する時に助けもらっちゃったし……………。ここらで借りは勝手に返させてもらうからね……………」

「ジョゼット……………。エステル言う通りだよ。君が一人でここに居たって何の解決にもならないはずだ。それは分かるよね？」

「……………」

「よかったら、しばらくの間、アルセイユで待っているといい。多分、キールさんたちは《グロリアス》に捕まっているはずだ。このまま探索を続ければ停泊場所へのルートが見つかるかもしれない。その時は必ず君に伝えるから」

「……………。……………。……………。分かった。ヨシユアがそう言うなら。でも、ただ世話になるのはカプア一家の名折れだからね！探索だろっつが、船の修理だろっつがきっちりと協力させてもらっつよ！」

「あー、はいはい。ほんと素直じゃないんだから」

「ふ、ふん……………。どこかのお人好しみみたいに単純にできてないもんね」

「あ、あんですつてー！？」

「ふう、まったくもう……………。…………。何が原因か知らないけど少しは仲良くできないのかな」

「あのねえ、ヨシユア……………」

「……………あんたがそれを言っつ？」

「え……………？」

「(アカン……………踏んでしもつたか)」

「……………鈍感)」

「（仲良くできないのはあなたが原因の1つだというのに……）」
「ねえ、ジヨゼット……。ここは一時休戦にしない？」
「……そうだね。どうやら当面の敵はお互いじゃあなさそうだし」
「えっと、その……。打ち解けられたのはいいんだけど……何かマズイことを言ったかな？」
「ううん、ちつとも」
「気のせいじゃないの？」
「そ、そう……。目が笑ってないんですけど……」

「さてと、それじゃあこのエリアの探索を再開しますか。ジヨゼットの言うには他の場所に通じている出口はまだ見つかっていないそうだけど……」

「ああ、隣の街区に渡る橋も完全に落ちているみたいだね。とにかくもう一度、街の中を一通り調べてみよう。ひよっとしたら何か手がかりがあるかもしれない」

「了解」

エステルたちはさらに居住区画を探索することにした。

第35クレイドル市役所

「皆さん、こちらで《ゴスペル》の再発行ができるそうですよ」
レインが装置を調べていた。

「えっ、そうなの？」

「しかし、登録された氏名と生体パターンが一致しないと再発行ができないようです」

「それじゃあ意味がないんじゃない？ここに住んでた人の名前はもちろん、その人の生体パターンなんて……」

「いえ、そうでもないと思いますよ。名前は分かりますし、生体パターンももしかすると一致するかもしれませんが」

「どうして分かるの？」

「以前、『翡翠の塔』の端末にあった『セレスト・D・アウスレーゼ』という名前は覚えていますか。それをこちらに打ち込んで、その縁のある人が認証を受ければあるいは……」

「そうか、なるほど！ここはクローゼの出番だね」

「え、私が……？」

「『アウスレーゼ』は王家の姓だつてクローゼが言つてたよね？もしかすると一致するかもしれないよ」

「……なるほど。では試してみますね」

クローゼが端末を操作した。

「氏名……………該当者アリ。生体パターン……………」

…73%合致。申請者本人を『セレスト・D・アウスレーゼ』であると暫定確認しました。『ゴスペル』の再発行を行います」

端末の前に『ゴスペル』が現れた。

「あ……………」

「わわっ……………！」

「空間転位か……………」

オリジナル・ゴスペルを手に入れた。

「……………どうやら大昔に使われていた本物の『ゴスペル』みたいです
ね」

「うん……………。『結社』が造つたレプリカと雰囲気似てるかも」

「まさか、生体パターンが私と似ていたなんて……………。さすがに偶然によるものだと思いますけど……………」

「えへへ、偶然じゃなくて女神様のお導きだったりしてね。とりあえず、持っていたら何かの役に立つかもしれないし……………ありがたく貰っちゃいませよ」

「うふふ、そうですね」

第35クレイドル駅

「来た……！」

エステルたちが《レールハイロウ》の非常運行モードを起動させると、あの乗物がやってきた。

「さてと、これでやっとこの乗物が使えるのよね？」

「今は乗っても戻ることしかできませんから、もう少し先に進んでからにしましょう」

「うーん、仕方ないわね」

そして、ゲートのロックを解除しようとしたが、《アクシスピラー》の指示により認証が必要になったとの警告が出た。

「って、何よそれ……」

「どうやら前のようにには行かなくなったみたいだね」

「しかし、さっきは可能だったのに《アクシスピラー》からの指示によって止められるとは……。おそらく、《結社》の仕業でしょうね」

「そ、そんな……」

「いえ、心配はいりませんよ。さっき手に入れた《ゴスペル》をこの端末の前で使ってみてください」

「う、うん……」

「当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道125号の利用が可能です」

「やった……！」

「これで他の区画に行けるようになるね」

「これからもこの《ゴスペル》が必要になってくるでしょう。大切に持っておきましょう」

エステルたちは地下道へと進み、先の区画を目指した。

第16章 空の軌跡(5) (前書き)

データクリスタル編・第2回目です。
#4と#7です。

第16章 空の軌跡(5)

『湖岸の地下施設について(1/4)』

『封印機構』を形あるものにするには莫大なエネルギーと大がかりな施設の両方が不可欠であった。

我々は、エネルギーの抛り所としてまず、《環》そのものの利用を検討した。

《環》は人の願いに反応し、恩恵を与えてくれる すなわち願うことで、必要とするエネルギーを《環》から引き出せないかと考えたのだ。

……だが、それは叶わなかった。《環》が自律を得たしばしその後、その恩恵は人々の願いに関係なく、ただ一方的に与えられるようになったのである。

『湖岸の地下施設について(2/4)』

《環》の力を利用することは叶わない。

都市の外に目を向けた我々は、大地の地下深くに眠る七耀脈にエネルギーを、そしてその場所に施設の建造を求めた。

だが、我々はすでに《環》の監視下に置かれていた。どうやら《環》は、都市の存続を第一とし、そのために邪魔となる要素は全て排除するという思考に至ったようなのだ。

それゆえ、施設の建造は《環》を欺くため、七耀脈を観測するという名目で進められた。

『湖岸の地下施設について（3 / 4）』

施設はヴァレリア湖南東の岸辺の地下500アージュに建造された。そこは調査によると、七耀脈が効率よく集まる場所であった。

都市の下に広がる大地はうっそうたる原生林に包まれていた。人の営みは一切なく、建造に際立った障害はなかった。

我々は《環》の監視を逃れながら、持てる技術の全てを結集し、地下施設の完成を急いだ。

『湖岸の地下施設について（4 / 4）』

地下施設の建造を進める間、我々は《環》に知られることなく、その地上の周辺に2種の巨大建造物を築き上げた。

その内壁が等しく《環》の方向を向く《アーネンベルク》。そして《環》を取り囲むようにしてそびえる4つの《デバスタワー》。

これら2つの建造物は計画においてそれぞれに重要な役目をもっており、地下の施設と同様、『封印機構』に欠かせない存在であった。

第16章 空の軌跡(6)(前書き)

浮遊都市編・第2話、《グロリアス》潜入編です。

第16章 空の軌跡(6)

工業区画 ファクトリア

「ここは……」

「かなり広い場所に出たね……」

「こらまた、見渡すかぎりゴツツイ建物が並んどるな」

「道もかなり広いですし……一体どういふ場所なんでしょう？」

「おそらく、工業エリアでしょう。これだけの水を必要とするのは工業としか考えられません」

「なるほど、確かに言えてるかも。……よし、さっそく探索を始めますか」

第7ファクトリア駅

「えっと、これで3つの駅が使えるようになったのよね？」

「うん……かなり便利になったね」

「パ、パスワードって……」

「ネットワークを管理する中枢から操作されたということか……」。

「どうやら《結社》は都市機能をかなり掌握しつつあるみたいだ」

「パスワードを手に入れるまで、今は放っておくしかなさそうですね……」

第3ファクトリア

「まさか、こんな所まで連れて来られちゃうなんてな。これから俺たち、何をさせられるっていうんだ？」

「さあな……。ただ、教授と執行者が揃って出かけたことを考える

と大した任務は残っていないだろうさ。せいぜい、空賊のような連中を捕まえる程度じゃないか？」

「そういえば……たしかリベールの飛行船が不時着していたはずだろう。そちらへの対応はいいのか」

「教授たちが戻るまでは放置しておけとの命令だからな。ま、船を修理するまでは連中だって何もできないだろうさ」

「（《グロリアス》……こんな所に停まってたんだ）」

「（ジークの言っていた通り浮遊都市の東側でしたね……。それにしても、なんて大きい……）」

「（しかし……どうやらチャンスみたいやね）」

「（教授と執行者たちが出払っているようですからね）」

「（空賊団の救出もあるし思い切って突入してみようか？）」

「（ちょ、ちょっと待って。突入するのはいいけど、ジョゼットに声をかけた方がいいんじゃないの？あの子のお兄さんたちを救出するわけなんだし……）」

「（エステル……）」

「（か、勘違いしないでよ？別にあの子を気遣ってるとかそういうわけじゃなくて……その……遊撃士としての仁義をねえ）」

「（エステルさん、言葉に出ていますよ……）」

「（うふふ……エステルさんらしいです）」

「（よっしゃ、そういう事なら一旦アルセイユに戻るとしよか）」

「（も、もう……）」

「（それじゃあ急いで《レールハイロウ》を使おうか）」

「（ん、そうね）」

西カルマーレ駅

「な、何だかあっという間に到着しちゃったわね……」

「かなりのスピードだったのにほとんど揺れなかったし……。正直、大した技術だと思うよ」

「それはそうだけど……。せっかくの景色なんだからもう少しゆっくり走って堪能させてほしかったかも……」

「うふふ……確かにそうですね」

「しかし、コイツのおかげでぐっと搜索がラクになりそうや。新しい駅を見つけたらすぐに使えるようにせんとな」

「そうですね。これなら、探索班の交代も楽にできそうです」

第7ファクトリア

ジヨゼットを連れて再び《グロリアス》にやってきたエステルたち

「（一度、艦内に入ったらキールさんたちを救出するまで脱出している余裕はない……。《グロリアス》に突入するかい？）」

「（オツケー！ジヨゼット……ちゃんと付いてきなさいよ？）」

「（それはこつちの台詞だよっ）」

「（しかし、見張りに騒がれると面倒な事になりますね。ここは私に任せてください）」

「（えっ、どうするつもりなの？）」

「（なに、一瞬で口を塞がせてもらうだけです。では行ってきますね）」

レインは言うが早いか、一瞬で見張りの所まで近づいた。

「な、なんだ貴様は！？」

「どこから来た！？」

「遊撃士ですよ。《アルセイユ》からここまでやって来ました。あなたたちには少しばかり眠っていたいただきます。それでは……」

「ぐはっ……」

見張りが武器を構えるよりも早く、レインは流れるような動きで見張りを気絶させた。

「ふう……。中に入ってからこんな事ばかりしなければならぬのでしょね」

見守っていたエステルたちがレインの元にやってきた。

「す、すい……」

「……見事なお手前です」

「へえ……やるじゃん」

「あまり悠長に話している暇ありません。さっそく突入しましよ
う」

「あつと、そうね」

エステルたちは《グロリアス》に突入した。

《グロリアス》艦内

「こ、これが《グロリアス》の中……」

「……とても船の中とは思えない広さですね……」

「まー、実際ウンザリするほど広いわよ。それに結社の人形兵器があちこちに放たれてるだろうし」

以前、脱出したエステルが面倒だと言いたそうだ。

「……。あんなたち、この艦から脱出したことがあるんだよね？ 兄貴たちの居場所、見当はつく？」

「あ、うん……。そうね。あたしが最初に閉じ込められていた船室あたりかもしれないけど……」

「いや……。あそこは一応、客室だからね。多分、監禁用の牢屋に閉じ込められているはずだ」

「か、監禁用の牢屋……!？」

「そ、そんな物まであるんだ。前に脱出した時には見かけた覚えは

なかつたけど……」

「あの時は、脱出防止用の電磁バリアが展開されていたから行ける場所が制限されていたんだ。今はまだ、電磁バリアが展開されていないみたいだから……ドルンさたちを助けるチャンスかもしれない」「そ、それで……その牢屋はどこにあるの!？」

ヨシユアがあたりを見回した。

「……この先の通路に下の階に続く小階段があった。そこを降りれば牢屋のはずだよ」

「牢屋に降りる小階段ね……。よし、まずは調べてみましょう!」

グロリアス監禁室

「みんな!」

監禁室に辿り着くとカプア一家と空賊団が閉じ込められていた。

「なっ……!?!？」

「ジョゼット……それに小僧じゃねえか!」

「お、お嬢!？」

「ど、どうしてここに!?!？」

「よ、良かった……みんな無事だったんだね……。今、助けてあげるから待っててよ!」

「た、助けてあげるって……。……おい、ヨシユア! いったいどうなってるんだよ! と言うか、どうしてお前らまでこの浮遊都市に来てやがるんだ!?!？」

「うん、実は……」

空賊たちに今までの経緯をかいつまんで説明した。

「なるほど……そんな事があったのかよ」

「あのなあ、ジョゼット……。俺たちはお前を逃がすために身体を張って捕まっただんだぞ? それなのにお前ときたら……」

「か、勝手なこと言わないでよ! 独りぼっちになっただけでボクは助

かりたくなんかない！兄貴たちと一緒に捕まった方がまだマシだったよ！」

「馬鹿、お前は女だろうが！少しは自分の身の安全を心配しろっての！」

「そ、そんな言い方はズルイよ！だいたいキール兄はいつも都合のいい時だけボクのことを女扱いしてさっ！」

「（な、なんか……すっごく仲がいいわねえ）」

「（ふふ……ちょっと羨ましいです）」

「仲睦まじいところすいませんが、あまり時間がないのでそこからで止めていただけますか？」

「その兄ちゃん言う通りだぜ。ったく2人とも……いつまで経つてもガキのままだな」

「ドルン兄……」

「で、でもよ……」

「来ちまったものは仕方ねえ。一緒に脱出するしかねえだろう。それで小僧……どうやって俺たちをここから出す？」

「……そうだね。どうやら、このエネルギー障壁は完全にロックされているみたいだ。プロテクトを外すのは正直、難しいかもしれない」

「……なるほどな」

「そ、そんな……」

「うーん、カづくでこじ開けられない？爆弾か何かを使っちゃうとか」

「いや、このエネルギー障壁は普通の爆弾じゃ傷一つつかない。かといって強力すぎる物を使ったらキールさんたちが危ないだろうしね。ここは、最新のセキュリティカードをどこから調達するしかないさそうだ」

「セキュリティカード？」

「そ、それを使えばこの障壁を消せるの！？」

ヨシユアが側にあつた端末を見た。

「たしか、あの端末にカードを通せば障壁が解除されるはずだ。僕が潜入時に入手したものはもう使えなくなっているはずだから、最新のカードが必要だけどね」

「な、なるほど……」

「それで、最新のカードってどこに置いてあるものなの？」

「前方区画の第二層　　前に君が監禁されていた部屋の周辺に保管されているはずだ」

「そっか……」

「早速、調べに行った方が良さそうですね」

「キール兄！ドルン兄！それからみんな！そういう事だからもうちよつとだけ待っててね！すぐにカードを見つけて戻ってくるから！」

「はあ……仕方ねえな」

「小僧……それに遊撃士の嬢ちゃんたち。その跳ねっ返りが無茶をしないように頼んだぜ」

「ああ、任せて」

「ま、ちゃんと手綱を握つとくから安心してて」

「ふ、ふん……。ボクなんかよりも遥かに無鉄砲なクセに良く言うよね」

「あ、あんですって〜？」

「はいはい、その位で。　　それじゃあ、いったん出口付近にまで戻ろう。前方区画の第2層に行くには反対側にあるエレベーターを使う必要があるからね」

「わ、分かった」

「では、行くとしますか！」

前方区画第2層

「えっと、確かこのあたりがあたりが捕まっていた区画よね」

「うん、前方区画の第2層だ。猟兵たちに作戦を伝えるためのミー

ディングルームとしても使われている。最新のセキュリティカードはこのあたりに保管されているはずだよ」
「そ、それじゃあさっそく調べてみようよ!」
「ジョゼットは早く助け出さたくて気が焦っている。
「はいはい、分かっています。とりあえず、部屋を1つ1つ調べていきましょう」

「ひょっとしてそれが……!」
「さっき言っていた最新のセキュリティカード?」
「うん……間違いない。これを牢屋の端末に通せば障壁を解除することができるよ」
「やった!」
「よかった……これで……」
「ふふ……急いで牢屋に戻りましょうか」

エステルたちが監禁室に向かってっていると、突然、エネルギー障壁が起動した。

「な……!?!」
「ど、どうなってるの!?!」
「クク……やっと捕まえたよ」
目の前からやってきたのはギルバードだった。

「ギ、ギルバード!?!」
「まあ……先輩?」
「……艦内にいたのか」
「やれやれ……艦に侵入した連中がいてどんな愚か者かと思っただが……。やはり君たちだったわけか」

「あれ……。……ねえコイツ、あんたたちの知り合いなの？」
事情を知らないジヨゼットが尋ねてきた。

「ええ……。王立学園のOBですが……」

「学園を襲った時点でOBの資格なんか無いってば。汚職市長の元
腰巾着であたしたちが捕まえたんだけど……」

「クーデターの時の混乱で脱走して《結社》に身を投じたらしい」

「あはは、やつぱりそっか。ボクたちと同じく、レイストーン要塞の
地下に捕まっていた市長秘書だよな？ 『僕は無罪だ！』とか言っ
て泣き喚いでいたからよく覚えてるよ」

「なっ……。！？」

「まあ……」

「え、えーっと……。まあ、そんなに気にする必要はないと思うわよ
？ そういう情けない経験を糧にして人って成長するもんだと思うし
……。……そんな格好をしてる時点で糧にはなっていないみたいだ
けど……」

エステルは笑いをこらえながら言った。

「……。エステル。全然フォローになってないよ」

「き、き、貴様ら、どこまで僕をコケに……。いいだろう……。もう
手加減などしてやるものか……。この新・ギルバードの力、思う存
分見せつけてくれるわッ！」

ギルバードが手を上げると、奥から獅子の形をした人形兵器が現れ
た。

「！……！」

「な、ななななっ！？」

「き、機械仕掛けの獅子！？」

「《十三工房》の新型か……！」

「八八八、獅子型人形兵器、《ライアットアームズ》だ！ その驚異
の性能に戦慄するがいいッ！」

「ば、馬鹿な……。この僕が……新・ギルバードが……」

「あ、あの、ちよつといい？確かに今までの人形兵器より段違いに強力だったけど……」

「でもそれって、あんた自身が強くなったわけじゃないんだよね？」

「え……」

「確かに、『新』というのは少し違うような気が……」

「……ぎゃふん」

ギルバードはその場に崩れ落ちた。

「あ」

「え」

「まあ……」

エステルたちは少しばかりその場に立ち尽くした。

「さ、さ〜と。急いで牢屋に戻ろっか？」

「そ、そうですね……」

「うんうん。兄貴たちを助けないと」

「（さすがに可哀想かな……）」

「（いえ、彼はこの程度で理想を諦めたりはしないでしょっから大丈夫でしょう。今は放っておきましょう）」

「 認証しました。ロックを解除したい障壁の番号を選んでください」

エステルがヨシユアが1番を選択すると、空賊団たちの目の前から障壁が消えた。

「おお……！」

「た、助かった……！」

「キール兄い、ドルン兄い！」

「ジョゼット……」

「へへッ……。お前らにも、でかい借りを作っちまったようだな」
「いや、お互い様だよ」

「そうそう、前に脱出した時にはこちらが助けてもらったんだし」
その時、《グロリアス》内に警報が鳴り響いた。

「やばっ…………！」

「どうやら僕たちの動きが完全に掴まれたみたいだ……。みんな、
急いで脱出しよう」

「う、うん…！」

「よし……………いっちょ逃げるとするか！」

「野郎ども、遅れるんじゃないぞ」

「アイアイサー！」

エステルたちは急いで《グロリアス》から脱出した。

グロリアス 聖堂

聖堂では、道化師カンパネルラがモニターでエステルたちの動きを見ていた。しかし、ただ見ているだけで何の動きも示さなかった。

「フフ、なかなか楽しませてくれるじゃないか。あの様子だったら
今日中には《中枢塔》まで辿り着けそうだな。でも、ここまで予定
通りだと『見届け役』の意味ってないよねえ」

道化師カンパネルラは溜息をついた。

「真の最終幕が上がるまでもう少し時間がありそうだ……。それま
でシルバード君でもいじって愉しませてもらおうかな？」

こうして、エステルたちは空賊団たちと共に《グロリアス》から脱
出の成功を果たした。

途中、追っ手の強化猟兵と何回か交戦を繰り返したあと…………

エステルたちは追撃を振り切って何とか居住区画まで戻ってきた。

第35クレイドル 空き家

「そんなわけで俺たちは《山猫号》の修理をとっとと始めちまうつもりだ。幸い、材料は調達してあるから何とかなるとは思うんだが……」

「機体はともかく問題は例の『導力停止現象』だ。要するに、無理して飛んだとしても都市から離れた途端に墜落するんだろ？」

「うーん……。『零力場発生器』の大型版がないとそうなっちゃうと思うわ」

「アルセイユのラッセル博士に応援を頼んでおこうか？」

「ま、都市の中なら導力通信も使えるみたいだから必要ならこちらから連絡するさ。それよりも、お前らの方はこのまま《輝く環》を探すのかよ？」

「うん、そのつもりだよ」

「それがこの浮遊都市に来たあたしたちの本当の目的だし」

「あ、そういえばそんな事も言ってたっけ……。宝探しとかじゃなかったんだ？」

「あのね……あなたたちと一緒にしないでよ」

「……だったら、ジョゼット。お前、このままヨシユアたちと一緒に行動したらどうだ？」

「えっ……！？」

キールの言葉にジョゼットは驚いた。

「《山猫号》の修理は俺たちだけでも充分だからな。お前にはどちらかっていうと情報収集をしてもらいてえのよ」

「あ、なるほど……」

「確かにこうなった以上、アルセイユと山猫号の間の連絡役も必要になりそうだし……。いいかもしれないね」

「うん、あたしも同感。《結社》に対抗するためには味方には一人でも多い方がいいね。ジヨゼットだったらサポート役としても信頼できるし、来てくれたら助かったわ」

「……………」
ジヨゼットはエステルの言葉に驚いたのか口を開けたまま何も言わなかった。

「あれ、どうしたの？」

「いや、その、何て言うか……………」

ジヨゼットは困ってヨシユアに耳打ちした。

「（……………ねえヨシユア。これって本気で言ってるわけ？）」

「（はは……………そういう子だからね）」

「（アタマ痛くなってきた……………）」

「な、なによ。その微妙に呆れた顔は？」

「いや、微妙じゃなくて思いつきり呆れてるんだけど」

「あ、あんですって〜!？」

「ガツハツハツ。どうやら話はまとまったか」

「それじゃあ俺たちは《山猫号》に戻るぜ。ジヨゼット。くれぐれも気をつけるよ」

「あ、うん……………。兄貴たちも気を付けてよね。また《結社》の連中が襲ってこないとも限らないし」

「ガハハ、心配するなって!」

「ま、せいぜい気をつけるさ」

ドルンとキールは山猫号に戻っていった、エステルたちも少し休んでからさらに別の区画を目指した。

第16章 空の軌跡(7) (前書き)

データクリスタル編・第3回目です。
#8〜#11です。

第16章 空の軌跡(7)

『《環》の封印について(1/4)』

地下施設の完成があとわずかに迫った頃、不覚にも我々は、《環》に『封印計画』の存在を知られることになる。

同胞の1人が《環》の甘い誘惑に落ち、その精神に介入されたことが原因であった。

しかし、その同胞が計画の全容を知る立場になかったことは不幸中の幸いであった。

《環》の目は、《アーネンベルク》と《デバイスター》に向かうことはなく、湖岸にある地下施設のみを捉えたのだ。

『《環》の封印について(2/4)』

我々の計画を知った《環》が取った手段は強行的なものだった。

《環》は自らの守護者として《トロイメライ》という存在を幾体か生み出すと、施設にいる我々の元へそれを差し向けたのだ。

しかし、施設が地下に建造されていたことが幸いであった。

地上と施設を繋ぐ経路はわずか1本。《トロイメライ》の攻撃が地下500アージュまで届くことはなかったのだ。

だが、《トロイメライ》の攻撃は昼夜を問わず執拗に続く。その内に我々の堅固な防衛線にも限界が迫った。

『《環》の封印について(3/4)』

《トロイメライ》の攻撃を受ける中、施設はついに完成に至るが、七耀脈から計画に必要なエネルギーを確保するにはまだ時間がかった。

だが、施設が完成したことで油断を覚えてしまったのか　我々は《トロイメライ》の一体に施設内部の侵入を許してしまう。

一度内部に侵入されると、その侵攻を止めるのは容易ではなかった。《トロイメライ》はあつという間に最深部までやってきたのだ。

まさに間一髪であった。最深部に来た《トロイメライ》が破壊活動に及ばんとしたその時、必要分のエネルギーはついに集まり、我々はすぐさま《第一結界》を起動させたのだ。

『《環》の封印について（４／４）』

施設より放たれた光が《アーネンベルク》を介して増幅され、空に浮かぶ《環》を捉える。

すると、《環》は我々の前から姿を消し、《トロイメライ》も動きを止めた。

こうして《第一結界》は無事その発動が確認されたのだ。

《環》は《七の至宝》の内、空間を司る至宝である。空間の絶対支配という力を持った《環》を無力化するためには必要とされること

それは《環》による空間への干渉、更には時間への干渉を一切断つということであった。

我々が苦心して生み出した『封印機構』は《環》の都市ごと異次元へと送り込み、『時間凍結』させることに成功したのである。

第16章 空の軌跡(8)

山猫号

「そうだ……一つ忘れてた。お前たち、『O・R・P・H・E・U・S』って言葉をどこかで聞いたことはないか？」

キールが唐突に意味ありげな言葉を言い出した。

「な、なにそれ？」

「ORPHEUS……オルフェウスって読むのかな？」

「……その言葉がどうしたの？」

「いや、俺たちを見張っていた猟兵どもの会話に出てきたんだ。妙に意味ありげな言葉だったから覚えておこうと思ったんだが……」

「そうなんだ……」

「うーん……確かに気になるわね。(あ、ひょっとして!)」

「エステルさんも気がつきましたか？」

「うん、工業区画の端末のパスワードね」

「ええ、おそらくそうでしょう」

「?どういうことだ？」

工業区画の駅の端末で、新たな地下道のゲートを開くためのパスワードを要求されたことをキールに説明した。

「なるほど……そいつは確かにクサイな。試してみる価値はあるんじゃないか？」

「えへへ、やっぱり？」

「ありがと、キール兄!」

「早速、確かめてくるよ」

第7ファクトリア駅

エステルが端末に《ゴスペル》をかざすと端末から合成音が流れた。

「ゴスペルによる認証を確認しました。お手数ですが、コンソールからパスワードを入力してください」

キールから教えられたパスワードを入力すると

「パスワードを確認しました。当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道246号の利用が可能です」

地下道のロックが解除された。

「やりましたね、エステルさん」

「うん、これで先に進むことができるわ」

アクセスヒラー
中樞塔前

「ま、まぶし……。あれ、ここって……」

「エステル……。あれ！」

地下道から出たエステルたちが目にしたのは、《アルセイユ》が本来到着するはずだった所の《塔》の近くだった。

「あれが《中樞塔》かい……」

「遠くから見てもかなりの大きさでしたが……。ここまで大きな塔だったんですね……」

「ええ、それだけこの都市にとって重要な役割を果たす建造物なのでしょう」

エステルがしばらく《中樞塔》を見上げてヨシユアに尋ねた。

「……ねえ、ヨシユア。あそこにレーヴェエや教授たちがいるのかな？」

「……可能性は高いと思う。どうやら都市の中樞を司る場所みたいだ。《輝く環》の手がかりだってあるのかもしれないからね」

「そっか……。……どうする？このまま突入しようか？」

「……レーヴェエたちがいるなら、今までとは比較にならないほど厳しい戦いになると思う。一度、《アルセイユ》に戻ってから万全の準備をすべきかもしれない。ユリア大尉にも探索状況を報告してお

きたいしね」

「うん……そうね」

「そんなら早速、駅を探すとしようや」

アクシスピラー前駅

エステルたちが《レールハイロウ》の非常運行モードを起動させる
と、乗物がやってきた。

「よし……。これで《カルマーレ》から《アクシスピラー》まで簡
単に行き来できるようになったね」

「はあ……長い道のりだったわ」

何時間も探索を続けて全ての駅を結びつけたエステルはさすがにお
疲れのようだった。

アルセイユブリッジ

ユリア大尉に報告に向かったエステルたち。

「……ああ、諸君。探索の方はどうだろうか」

「うん、えっと……」

エステルたちはこれまでの探索の経緯と、これから《中枢塔》内部
の探索に入ることを説明した。

「……そうか……」

「……ええ、これから《中枢塔》内部の探索に入るところです」

「《中枢塔》……都市機能を統括している場所のようだな。《輝く
環》、そして、我々の敵がそこにいるのは間違いないだろう」

「……よし。私も探索に参加しよう」

ユリア大尉が立ち上がると自分も探索に参加したいと名乗り出た。

「えっ………?」

「私も自分の足で外の状況を把握しておきたい。それに……どうやら《中枢塔》からは様々な都市機能に干渉できるようだ。何もせず、このまま放置しておくのも危険だろう」

「でもユリアさん、アルセイユの方は……？」

「ふふ、大きな作業はあらかた片づきました。飛翔機関のテストも必要な指示は出してあります。後は博士やクルーたちに任せておけば問題ないでしょう」

「そ、そっか……。うん、ユリアさんが手を貸してくれるなら大いに心強いわね！」

「……ならば自分も協力させてもらおう」

側で話の始終を聞いていたミュラーもユリア大尉と同じく搜索の参加に名乗り出た。

「しょ、少佐……？」

「この付近の安全は確保できたのだろう。ならば自分がここにいてもできることは少ない。武人は武人らしく、役立たせてもらおう」

「で、ですが少佐の手をお借りするのは……」

ユリア大尉が畏れ多いと遠慮がちに言った。

「……いらぬ氣遣いだ。正直に言わせてもらえば、あのお調子者を外に出すのが些ちひか心配ということだからな」

「少佐……」

「……というわけだ。我々の手を借りたいときはいつでも言ってくれ」

「うん、分かったわ」

「こちらこそ、宜しくお願いします」

エステルたちはパーティと準備を整え、《中枢塔》へと向かった。

第16章 空の軌跡(9) (前書き)

データクリスタル編・最終回です。

#12～#15です。

第16章 空の軌跡(9)

『デバイスタワーについて(1/4)』

《第一結界》は無事発動し、《環》を異次元において『時間凍結』させることに成功した。

だが、その名が示す通り『封印計画』における結界はこれだけではない。

『封印計画』の最後の砦、《第二結界》。

それは4つのデバイスタワーが鍵を握るのだ。

『デバイスタワーについて(2/4)』

この機構は《第一結界》が解除され、《環》が再び時を刻みだす時にこそ、その発動を開始する。

この《第二結界》は又の名を『重力結界』といい、異次元において重力を発生させるといふ機能を持つ。

もしも《環》がその活動を開始した時、重力の楔で異次元に繋ぎ止めることで、現世への出現を防ぐことが目的なのである。

『デバイスタワーについて(3/4)』

《第二結界》が発動する時、《環》はすでにその動きを開始している。

よってその端末たる《ゴスペル》を使えば、その力を自由に引き出

すことも可能なのだ。

《リベル・アーク》内に残る《ゴスペル》は《環》と同じく封印されている。

だが、後世において《ゴスペル》に代わるものが生まれれば、《環》はその力を現世に及ぼすであろう。

『デバイスタワーについて（4 / 4）』

我々は《環》を封じることには成功したが、無論その力が消え去ったわけではない。

我々はこの地に根付き、《環》を見守っていくつもりである。

そしてこの記録が誰の目にも触れないことを祈る。

しかし、同時に我々はそれが叶わないであろうことを予見する。

《環》が再び現世に現れる時、後世に生きる人々はいかなる選択をするのであろうか

人が再び過ちを犯すことなく、《環》から解き放たれる時を信じ、この記録を後世に託すものとする。

第16章 空の軌跡(10)(前書き)

アクセスプレイヤー編第1話です。

第16章 空の軌跡（10）

中枢塔第一層

まずはエステル、ヨシユア、クローゼ、オリビエのパーティで向かった。

中枢塔は見上げても上が見えないほど高く、下は青白く光る液体で満たされていた。

「ほう……これが《中枢塔》の内部か」

「まるで大きな装置の中にいるみたいですね……」

「それに、この光る液体はいったい何なのかしら……。得体の知れない感じだけど……」

「……高圧の導力に満ちた液体かもしれない……。直接手に触れるのは止めておいた方が良さそうだ」

中枢塔第二層

「あ……！」

「外に出たね……」

中枢塔の外に出たエステルたちが周りを見渡すと相当な高さにいるのが思い知らされた。

「どうやらかなりの高さまで登ったみたいね……。あれ……？」

エステルたちの先の広場には何やら装置みたいなものがあった。

「あれって……何なのかな？」

「ほう……。何かの端末みたいだがずいぶん思わせぶりだねえ」

「どうやら調べてみる必要があるそうですね」

「いや……それは後回しにしよう」

「え……？」

「フフ。さすがは《漆黒の牙》。気配を断つということは隠れた気

配を察するのと同じか」

広場に現れたのは怪盗紳士ブルブランだった。

「か、仮面男……！」

「ブルブラン……貴方が」

「ようこそヨシユア……それにエステル・ブライト。そしてまさか、我が姫と好敵手までいるとは……。この怪盗紳士、最高の歓びをもつて諸君らを歓迎させていただこう」

「か、歓迎って……」

「フツ、なかなか芝居がかった登場をしてくれるじゃないか」

「……どうやら貴方が最初の障害のようですね」

「フフ……最初にして最後の障害だ。ここにあるのは、《中枢塔》上層に通じるゲートをロックするための端末だね。これが働いている限り諸君は永遠に《環》に辿り着けないだろう」

「あ、あんですって……！」

「……ブルブラン。貴方は、今回の計画のためリベールに来た執行者の中ではもつとも因縁の薄い人物のはずだ。この上、教授に従って僕たちと戦う理由はどこにある？」

「フフ……別に私は教授に従っているわけではない。知つての通り、我々、《執行者》は望まぬ命令に従う義務などないのだ。《使徒》はもちろん、たとえ《盟主》の命であってもね。フフ、教授の人形だった君は少々事情が違っていたようだが」

「……」

「ヨシユア……」

「私が拘る理由はただ一つ……。そこに盗む価値のある美しい物があるかどうかだけだ。だからこそ私はここにいる」

「盗む価値のある美しい物……」

「ふむ、いったいそれは何だい？」

「フフ……それは諸君の『希望』だ」

「……？」

「逆境であればあるこそ『希望』という物は美しく輝く。その煌め

きを見るために私はこの場で諸君を待っていた。その結果、夏の花火のように『希望』が消えてしまっても……私はその極みが見てみたいのだ！」

怪盗紳士ブルブランがステッキを振り、人形兵器をエステルたちの周りに出現させた。

「さあ、見せてくれたまえ！希望という名の宝石が砕け散るときの煌めきを！」

「か、勝手なことを抜かしてるんじゃないわよ！」

「ならば逆に証明しましょう……。絆が生み出す希望というものが決して砕け散りはしないということを！」

「そして愛があれば、希望の灯火は永遠に燃え続けるということをして！」

「……………馬鹿な……………。よもや私の仮面に……………ヒビを入れようとは……………」

怪盗紳士ブルブランは割れた仮面を押さえながらひざまず跪いた。

「はあはあ……………。どう……………思い知った!？」

「……………砕け散ったのは貴方の傲慢だったみたいだね」

「絆が生み出す希望の強さ……………分かっていただけましたか？」

「フツ……………そして希望の灯火を燃やし続ける愛の偉大さ、思い知っただろう」

「……………よからう……………ここは大人しく退いておく。だが、教授のゲームはまだ始まったばかりでしかない。今回のような幸運は、これ以上続かぬものと覚悟した方がよからう」

「忘れるな……………。諸君はこの私を退けたのだ……………。立ちふさがる絶望の壁を乗り越えて必ずや美の高みへと至るがいい。……………それでは、さらばだ」

「あ……………」

「……………どうやら……………完全に手を退いたみたいだ。誇り高い人だから約束は違えないと思うよ」

「そっか……………」

「フツ……………敵ながら天晴じゃないか」

「……………安心しました」

「それじゃあ奥の端末を停止させてしまおう。上層に行くためのゲートを開けることができるはずだよ」

「うん……………了解！」

エステルは奥にある端末を操作した。

「上層エリア方面への隔壁および、転位ゲートのロックを解除します」

案内が発せられると、扉の隔壁が消えて開き、転位ゲートが使えるようになった。

第16章 空の軌跡(11)(前書き)

アクセスプレイヤー編第2話です。

第16章 空の軌跡（11）

アクシスピラー第三層 外

第3層からはエステル、ヨシユア、ジン、ケビン神父で向かった。

「クク……待ちくたびれたぜ」

「サングラス男！」

第二層の時と同じく、端末の前には執行者が待ち受けていた。今回は痩せ狼ヴァルターだった。

「《痩せ狼》か……」

「……ヴァルター」

「クク……よく来たじゃねえか。ここに来たってことは覚悟はできたみてえだな？」

「ああ……師父せんせいから継いだ《活人》の拳。あんたの邪拳を打ち砕くために振るわせてもらうつもりだ」

「……クク……。どうやらジジイの目論見通りになったようだな」

「師父の……目論見通り！？どういうことだ、ヴァルター！あんたと師父が仕合ったのは、やはり俺が関係しているのか！？」

「ハハ……だから言っただろう。もし、それが知りたかったら俺を打ち負かしてみせるツてな」

痩せ狼ヴァルターが指を鳴らすと、装甲獣の《ステイルクーガー》が現れた。

「腑抜けた拳を振るったら、その場で終わらせてやる……。さあ、死合つとしようぜ！」

ヴァルターを退けたエステルたち。

「クツ……。てめえ……。いつの間にかそこまでの功夫を……」

「ヴァルター……あんたは確かに天才だ。だが、その才能ゆえにどうしても積み重ねが欠けるんだ。そして功夫とは、愚直なまでの繰り返し鍛錬で積まれてゆく……。だからこそ格下の俺の拳があんたにも届くんだ」

「………………。ククク……格下か。ジジイのやつはそうは思ってたみたいだぜ？」

「…………え……………」
「ジジイは俺に言ったのさ。活人、殺人の理念に関係なく……素質も才能も……てめえの方が俺よりも上だとな」

「なつ…………！？」
「そしてジジイは、より才能のある方に『泰斗流』を継がせるつもりでいた。……それが何を意味するのか鈍いてめえにも分かるだろうが？」

「だ、だが……。俺があんたよりも格上なんてそんなの冗談もいところだろう！？それに師父が、キリカの気持ちを無視してそんなことをするはずが……………」

「…………ククク……だからてめえは目出度いんだよ。流派を継ぐわけでもないのに、師父の娘と一緒に……。そんなこと……この俺が納得できると思うか？」

「……………」
「だから俺は、てめえとの勝負で継承者を決めるようジジイに要求した。だが、ジジイはこう抜かしやがったのさ。『ジンは無意識的にお前に対して遠慮をしている。武術にしても、女にしてもな。お前が今のままでいる限り……あやつの武術は大成せぬだろう』と」

「……………な……………」
「クク……俺も青かったから余計に納得できなかったわけだ。そしてジジイは、てめえの代わりに俺と死合うことを申し出て……そして俺は……ジジイに勝った」

「……………」

「ククク……これが俺とジジイが死合つた理由だ。お望み通り答え
てやったぜ」

「……………。俺はずっと確かめたかった……………。師
父がなぜ、あなたとの仕合いに立ち合うように言つたのかを……。
ようやく…………その答えが見えたよ」

「……………なんだと？」
「ヴァルター……………あなたは勘違いをしている。これは俺も、後でキ
リカに教えてもらったことなんだが……………。あの頃、リュウガ師父は
重い病にかかつていたそうだ。悪性の腫瘍だつたと聞いている」

「……………な……………！」
「だからこそ師父はあなたとの仕合いを申し出た。無論、あなたの
武術の姿勢を戒める意味もあつただろうし……………未熟な俺に、武術の
極みを見せてやるつもりでもあつたのだろう。だが、何よりも師父
が望んだものは……………武術家としての生を一番弟子との戦いの中で全
うしたいということだつたんだ」

「……………。クク……………なんだそりゃ……………。そ
んな馬鹿な話が……………あるわけねえだろうが……………。じゃあ何だ？
俺は体よく利用されただけか？そうだとしたら……………俺は……………」

「確かにそれは……………身勝手な話なのかもしれん。だが、強さを極め
るということは突き詰めれば利己的な行為なんだろう。それが、俺
たち武術家に課せられた宿命といえるのかもしれない。だからこそ
師父は……………あえて己の身勝手さをさらけ出した。そうする事で、あ
んたや俺に武術の光と闇を指し示すために……………」

「……………」
「……………ヴァルター、構えろ」

ジンが話し終えると、戦う構えを取つた。

「なに……………？」

「師父とあなたから学び、遊撃士稼業の中で磨いてきた『泰斗』の
全てをこの拳に乗せる。そして、修羅となり闇に堕ちた不甲斐ない
兄弟子に活を入れてやる。多分それが、あなたの弟弟子として俺が

できる最後の役目のはずだ」

「……………ケツ……………ずいぶん吹くじゃねえか……………。だったら俺は、結社で磨いた秘技の全てを拳に込めてやる……………。『泰斗』の全てを葬るためにな」

「……………」

「……………」

「はああああああっ……………！」

「こおおおおおっ……………！」

2人が同時に気を練り始めると周りの空気が大きく震えた。

「(す、すごい……………)」

「(このままだと片方は……………)」

2人の様子を見ていたエステルたちにもその威圧感で飛ばされそうになっていた。

「おおおおおおおっ!!」

「らああああああっ!!」

そして2人の攻撃が同時に交差した。

「……………」

「……………」

「……………くっ……………」

先に膝をついたのはジンだった。

「あ……………」

「ジ、ジンさん!?!」

「ククク……………仕方ねえやつだ……………」

ヴァルターがジンの方を振り返り、煙草に火をつけた。

「……………それだけの功夫を宝の持ち腐れにしたとはな……………。クク……………ジジイの言うことが……………ようやく分かったぜ……………。……………ふう……………」

……美味え……。本当に……。タバコが……。美味え……。
ヴァルターの手から煙草が落ちると、糸が切れたように倒れてしま
った。

「も、もしかして……」

「うん……。ジンさんの勝ちみたいだね」

「いや〜！ごつつ凄かったですわ！」

「うんうん！まさか、このとんでもない男に真剣勝負で勝っちゃう
なんて！」

「……いや……」

ジンがゆっくりと立ち上がった。

「勝てたのは、俺が『泰斗流』を背負っていたからに過ぎんさ。も
しあいつが『泰斗』の正当な使い手としてこの勝負に臨んでいたら
……倒れていたのは多分、俺の方だっただろう」

「も〜、そんなことないってば。それよりジンさん……。ケガとかし
てるんじゃない？」

「手当、しておきましょうか？」

「いや……。大丈夫だ。……。ヴァルターのやつもしばらくは目を覚ま
さんだろっし、このまま放っておいていいだろう。今はとにかく上
を指すぞ」

「……うん！」

「それじゃあ奥にある端末を操作しましょう」

エステルたちは端末を操作し、扉の隔壁を消した。そして一度、《
アルセイユ》へと戻り。パーティと準備を整えた。

第16章 空の軌跡(12)(前書き)

アクセスプレイヤー編第3話です。

第16章 空の軌跡（12）

アクシスピラー 第四層 外

第四層からはエステル、ヨシユア、シエラザード、ケビン神父で向かった。

エステルたちが外に出ると、鈴の音が響いた。

「フフ……よく来たわね」

待ち構えていたのは、幻惑の鈴ルシオラだった。

「あ……！」

「《幻惑の鈴》……貴方が」

「ルシオラ……姉さん」

「ブルブランとヴァルターを破ってここまで辿り着くなんて……なかなかやるわね、貴女たち」

「姉さん……約束を果たしてもらおうわ。今度会った時には、ハーヴェイ座長のことをちゃんと話してくれるって……」

「ああ……彼を殺した理由だったかしら？」

「……………」

「そうね……………」

幻惑の鈴ルシオラはしばしの間、黙った。

「……ねえ、シエラザード。貴女にとって、座長はどんな人だったかしら？」

「そ、そんなの決まってるじゃない！孤児だったあたしを拾って育ててくれた恩人よ！あたしは両親の顔なんて全然知らないけど……お父さんってこういう感じなのかなってずっと思っていた………なの………それなのにどうして……！」

「そう……暖かくて優しい人だったわね。でもね、旅芸人の一座なんて優しいだけじゃやって行けないの。汚い取引をしたり、女の芸人に客を取らせたりするところもあるわ。でも座長は……あの人は一切そんなことをしなかった。そうして私財を使い果たして……莫

幻惑の鈴ルシオラは式神を繰り出した。

「姉さん……！」

「私ごときを倒せないようではこの上で待ち受ける者たちには遠く及ばないでしょう。《幻惑の鈴》の舞……見事、破ってごらんない」

「フフ……なるほど。これならば……上に進む資格があるかもしれ
ないわね」

「……姉さん。ひとつだけ訂正させて。あたしは姉さんを恨むこと
なんてできないわ。あたしの元を去ったことも、座長を殺めてしま
ったことも。ただ……どうしようもなく哀しいだけよ」

「シエラ姉……」

「……シエラザード……」

「それに、やっぱり信じられない。姉さんがそんな理由で座長を殺
めてしまったなんて……。あたしたちのことを思って辛い選択を
した座長のことを……」

「……ふふ……さすがに誤魔化せなか
ったか」

「え……」

「さっきの話にはね……続きがあるの。あの人を説得しようとして
それでも決意が固いと知った時……私は、ずっと秘めてきた想いを
あの人に打ち明けてしまった」

「……！姉さんが……座長のことを……。……そう……だったんだ
……」

「ふふ、親子ほども離れていたから想像できなかったでしょうね。
そして……それはあの人にとっても同じだった。娘のように大切に
思っているけど想いに応えることなど考えられない。一時の感情に
流されず、相応しい相手を見つけるといい……。……そう、諭すよ

うに拒まれたわ」

「拒まれたこともショックだったけど、私はそれ以上に怖くなってしまった。私を惑わせないように……相応しい相手を見つけられるように。あの人が、本当の意味で私から離れていってしまう可能性が」

「あ……」

「……そう悟った瞬間、私の奥底で何かが弾けていた。……離れていけないように……永遠に私のものにするために……。その囁きに従って……あの人をこの手にかけていた」

「……ルシオラ……姉さん……」

「自分の中に潜んでいた闇に気付いたのはその時からよ。私は、その闇に導かれるように《身喰らう蛇》の誘いに応じて……。いつの間にか……こんな所にまで流れてきてしまった。フフ、そろそろ潮時かもしれないわね」

「え……」

幻惑の鈴ルシオラは後ろを向いたまま飛び降りようとした。

「姉さん、だめええっ！」

シエラザードは鞭を使ってすんでのところで落ちようとしていた彼女の身体に鞭を巻きつけた。しかし、シエラザードも重みに耐えられず塔から落ちそうになっていた。

「くっ……」

「ふふ……なかなか鞭さばきも上達したじゃない。最初の頃はあんなに不器用だったのにな」

「シエラ姉！」

「エステル、ヨシユア……。少しの間でいいから……このままこの娘と話をさせて」

幻惑の鈴ルシオラはぶら下がったまま上に上がるつもりはなかった。

「で、でも……！」

「ルシオラ……貴女は……」

「は、話なんかしてる場合じゃないでしょう!? 引つ張り上げるから掴まって!」

「ねえ、シエラザード……。あの人を手にかけてた事は今でも後悔していないけれど……。唯一、気がかりだったのが貴女の元を去ったことだった。貴女がどうしているか、それだけが私の心残りだった。でも、私がいなくても貴女はしつかりと成長してくれた。自分の道を自分で見つけていた」

「姉さん……。お願いだから……」

「それが確かめられただけでもリベールに来た甲斐があったわ。本当は貴女に私のことを裁いてほしかったのだけど……。さすがにそれは……。虫が良すぎる話だったわね……」

「……。お願いだからちゃんと掴まっていてよおっ!」

「フフ、お酒もいいけど……。程々にしておきなさいね。さようなら……。私のシエラザード」

「ルシオラ姉さあああんっ!」

幻惑の鈴ルシオラは扇でシエラザードの鞭を切ると、そのまま落下していった。最後に聞こえたのは鈴の音だけだった。

「……………」

シエラザードはしばらく塔から下を見下ろしていた。

「シエ、シエラ姉……」

「シエラさん……」

「……………大丈夫……。あの姉さんが落ちたくらいで死ぬはずない。いつの日かきつと……。きつと……。また会えるわ」

「う、うん……。きつとそうよ! だって、あんな凄い式神とか転位術とか使える人なんだもん! 絶対に……。絶対に大丈夫だってば!」

「ふふ……。そうね……」

「姐さん……。あまり無茶せんとき。一旦、アルセイユに戻った方が……………」

ケビン神父がシエラザードの顔色がよくないのを察し、気遣った。
「ううん……。その必要はないわ。……。ここでへこたれてたら姉さん

に笑われてしまうから……。だから、今は先に進みましょう」

「シエラ姉……。うん……。分かった」

「それじゃあ……。端末を解除しましょう」

エステルたちは端末を解除し、一度アルセイユに戻った。

第16章 空の軌跡(13) (前書き)

アクセスプレイヤー編第4話です。

第16章 空の軌跡(13)

アクシスピラー第五層 外

第五層からはエステル、ヨシユア、テイータ、レインで向かった。

「クスクス…… やっぱりここまで来たわね」

待ち構えていたのは予想通りレンだった。

「あ……」

「……レン！」

「やっぱり君か……」

「あの3人を倒すのはけっこう大変だと思ったけど……。でも、レンは信じていたわ。エステルとヨシユアがレンの所に来てくれるってね」

「レン……」

「それでも…… 君は戦うつもりなんだね？」

「うふふ、どうしようかしら。せっかく約束していたのにお城であった時には殺しそこねちゃったし……。エステルの態度次第では見逃してあげてもいいわよ？」

「あたしの…… 態度？」

「うふふ…… 簡単なことよ。この間、レンに言ったことを取り消すだけでいいわ」

「へ!？」

「前に、レンが《結社》にしているのが間違ってるって言ってたわよね。あの言葉を取り消すだけでレンはこの場を退いてあげるわ。どう、悪い取引じゃないでしょう?」

「……」

「レンちゃん……」

「レン…… そんな取引は間違っている。たとえ望んだ言葉を引き出せても本心が違っていたら何の意味も……」

「ヨシユア…… いいの。ここは…… あたしに任せてくれないかな？」

エステルはヨシユアを制した。

「エステル……。分かった……。頼む」

「……ありがとう」

エステルがレンの前に一歩進み出た。

「うふふ、やっとその気になってくれたみたいね？さあ、言っただろう。レンが《結社》にいることは間違っただけなんかないんだって」

「レン……。甘ったれるのもいい加減にしなさいよね」

「……え」

期待していたものとは違うエステルの言葉にレンは驚いた。

「世界はレンを中心に回っているわけじゃないわ。レンのために都合よく変わってくれるものでもない。たとえレンが、物凄く大きな力を持っていたとしても……。あの大きなパテル「マテル」が助けてくれたとしても……。それでも……。人の心までは自由にはできない」

「……」

「レンに結社にいて欲しくないのはたしかにあたしのエゴかもしれない。だから無理強いするつもりはないけど……。でも、できればレン自身に気付いてほしいと思う。いつでもヨシユアみたいに後戻りができるんだって……」

「……エステル……」

「……。そう……。せつか

くチャンスあげたのに棒に振っちゃうんだ……。救いようのない大バカねえ」

レンが大鎌を取り出し、パテル「マテル」を呼び寄せた。

「……みんな、ゴメン。ひよっとしたら避けられた戦いだっただかもしれないけど……」

「……謝る必要はないよ。君は……。僕が言いたいことをあの子に全て伝えてくれた」

「わ、わたしもお姉ちゃんの言う通りだと思う。レンちゃんがこのままなんて……。そんなのイヤだから……」

「ええ、彼女はまだ戻ることができません。彼女を救うためにも戦いは避けられません」

「みんな……」

「……気に入らないわ……。本当の本当に気に入らない……。《パテルⅡマテル》！リミッターを解除しなさい！出力全開でエステルたちを殲滅するわよ！」

レンとパテルⅡマテルを退けたエステルたち。

「ど、どうして……。どうしてエステルたちなんかに《パテルⅡマテル》が負けるの!？」

「ゴルディアス級の人形兵器はまだ制御系が不安定らしいからね……。関節部分に負荷がかかって作動不能になったのかもしれない」

「……そんな……。《パテルⅡマテル》！ねえ、早く立ち上がって！早くエステルたちを皆殺しにしちゃってよぉ！」

レンの悲痛な叫びにパテルⅡマテルが立ち上がるうとしたが右足が動かずに止まってしまった。

「……あ……」

レンはパテルⅡマテルが動かなくなるとその場に崩れ落ちた。

「……」

「レン……」

エステルたちがレンの元に寄った。

「なによぉ……。エステルたちの勝ちなんだからもうどうでもいいじゃない……。さっさと端末を解除して上に行っちゃいなさいよぉ……」

「……そっちも大事だけど後回しにするわ。今はあんたの方が大事だからね」

「なによぉ……。エステルなんてレンのこと何も知らないくせに……」

「!どうしてそんなに……。構ってくるのよぉ……。!」

「フフン、決まってるじゃない。あたしがレンのこと、好きだからよ」

「……！」

「だからこそ……あたしはレンにやっておかなくちゃならないことがある。悪いけど、軽く行かせてもらおうよ」

「え……」

エステルがレンを立たせるとレンの頬を叩いた。

「……あ……ぶった……」

「悪いことしたらぶたれるのは当たり前よ。じゃないと、他の人の痛みが感じられなくなっちゃうからね。あたしも小さい頃は父さんに散々ゲンコをもらったんだから」

「エステルも……同じなんだ……。痛がってるのに……ぜんぜん止めてくれなかった……。レンを……。レンに酷いことをした……。あの人たちと同じ……」

「同じかどうかはレンが自分で考えてみて。どう……本当にそう思う？」

「……わから……ない……」

「だったら……これならどう？」

エステルがレンを抱きしめた。

「……あ……」

「あたしは何も言わない……。レンが自分の心で感じるままに判断しなさい」

「……。頭がモヤモヤしてなんだか良く分からないけど……こんな風に抱きしめられるのは……キライじゃない……かも……」

「そっか……」

「……。帰る……」

「え……」

「《パテル＝マテル》！関節部のアクチュエーターを止めてブースターのみで姿勢制御して！」

レンの声に反応してパテル「マテルが立ち上がると、レンはパテル
「マテルの手に飛び乗った。

「レン……！」

「頭がこんがらがっちゃったから1人でゆっくり考えてみる……。
エステルたちはこのまま屋上まで登っていけばいい……。レーヴェ
が待つてるはずよ……」

「あ……」

「……そうか。教えてくれてありがとう」

「大丈夫なの……。ヨシユア？レーヴェって本気で通せんぼするみ
たいだけ……」

「うん……分かってる。でも、僕の方ももう覚悟はできているから
……。だから……心配はいらないよ」

「そう……。じゃあ、レンは行くわね」

「レンちゃん!？」

「レン……待つて！」

「……じゃあね。エステル、それにティータ。レンはもう行くけど
……。死んだりしたら許さないんだから！」

「……。これで……。良かったのかな？」

「うん……大丈夫。色々なことが起こりすぎてあの子も混乱してる
だけだと思う。すぐには無理だと思うけど……。いずれ自分で答えを
出せるはずだ」

「そっか……」

「えへへ……。また会えるといいな」

「うん……。そうね……。……。さてと……。気
持ちを切り換えなくちゃ。端末を停止させて先に進みましょう」

「うん……。そうだね」

ヨシユアの顔に少し不安の表情が見えた。

「あ、そっか……。屋上でレーヴェが待つているって言ってたわね」

「うん……。執行者N.O.?。《剣帝》レオンハルト。《執行者》
たちの中でも一、二を争う戦闘力の持ち主だ。万全の準備をして屋

上に向かおう」

「……了解！」

エステルたちは一度、《アルセイユ》に戻り、準備を整えた。

第16章 空の軌跡（14）

中枢塔 屋上

「……来たか」

屋上では剣帝レーヴェが待ち構えていた。

「レーヴェ……」

「……意外と早かったな。もう少しばかり待たされるかと思っていたぞ」

「ま、あたしたちも少しは成長してるってことよ。さすがに、あなたのお仲間にはかなり手こずらせてもらったけど」

「フフ……言うじゃないか。だが、この《剣帝》を彼らと同じには考えないことだ。正面からの対決において俺を凌駕する者はそうはいない。たとえS級遊撃士や《蛇の使徒》といえどな」

「ケツ……吹いてくれるじゃねえか」

「……あなたの強さはイヤと言うほど分かっているわ。でも、あたしたちも理由があつてこんな所までやってきた。《輝く環》による異変を止めて混乱と戦火を防ぐために……。沢山の人たちに助けられてあたしたちは今、ここにいます……。だから……。退くつもりはないわ」

「フ……理由としては悪くない。だが、レイン・アクアライトはともかく、ヨシユア。お前の理由は違うようだな？」

「え……」

「お見通し……。みたいだね。僕は……。自分の弱さと向き合うためにここまで来た。あの時、姉さんの死から逃げるために自分を壊したのも……。教授の言いなりになり続けたのも……。全部……。僕自身の弱さによるものだった。それを気付かせてくれた人に報いるためにも……。大切な人を守るためにも……。僕は……。正面からレーヴェや教授に向き合わなくちゃいけないんだ」

「ヨシユア……」

「……。巢立ちの時か。もうカリンの代

わりに心配する必要もなさそうだ」

剣帝レーヴェが剣を構えた。

「……これでようやく手加減する必要はなくなった。本気で行かせてもらおうぞ」

「ちょ、ちよっと！どうしてそうなるのよ！？ヨシユアのことを心配しておいてどうして」

「いいんだ、エステル。覚悟を決めただけではレーヴェは納得してくれない。その覚悟を貫き通せるだけの力が伴っていないと駄目なんだ」

「フフ、そういうことだ」

剣帝レーヴェは2体の獅子型人形兵器、《》を呼び寄せた。

「俺にも俺の覚悟がある。もし、お前たちの覚悟が俺の修羅を上回っているのなら……力をもって証明してみるがいい！」

「うん……！」

「……望むところよ！」

「へッ、今までの借り利子付けて返してやるぜ……」

「真実を闇に葬らせないためにも……貴方に問い質させてもらいます！」

剣帝レーヴェを跪かせたエステルたち。

「や、やった……！」

「へッ……見たか！」

「いえ……まだのようです」

「えっ……？」

「……なかなかやるが、俺の修羅を止めるほどではない」

剣帝レーヴェはまだ余力を残しているようで、すぐさま立ち上がった。

「ど、どうして……！？」

「所詮、お前たち遊撃士は人を守るだけの存在だ。『理』に至りもしなければ『修羅』に届く道理はない。小手調べはここまでそろそろ全力で潰してやろう」

剣帝レーヴェは再び剣を構えた。

「くっ……」

すでに体力を使い果たしたエステルたちに勝機はないに等しい。

「……だったら、レーヴェ。ここから先は僕1人で挑ませてもらうよ」

しかし、ヨシユアが意外なことを言い出した。

「ほう……」

「ヨ、ヨシユア……!？」

「無理を言わないでください、ヨシユアさん!あなたのダメージは軽くはないはずです。ここは私が……」

「大丈夫、エステル、レインさん。確かにレーヴェは強すぎるけど、それでもレーヴェにもダメージは効いている。あとは……僕にやらせてほしい」

「ヨシユア……」

「……仕方ありませんね。本当は私が戦いたいところでしたが……」
「へッ、本当なら俺も落とし前を付けたいところだが……。仕方ねえ、お前にだったら譲ってやってもいいぜ。その代わり……絶対に負けるんじゃないぞ!」

「はい、必ず」

エステルたちはヨシユアを見守るべく後ろに退いた。

「フフ、確かに今の戦闘で俺の機動力は幾らか落ちている。その一点においてのみ、勝機があるかもしれないが……それでも勝率は限りなく低いぞ?」

「……分かってる。姉さんが救い、教授が繕い、父さんが解き放ち、そして今、エステルと共にあるこの魂……。遊撃士としての心得と《漆黒の牙》としての技……」

ヨシユアが双剣を構えた。

「その全てをもつて……《劍帝》に挑ませてもらう！！」

「いいだろう……」

劍帝レーヴェも剣を構え直した。

「来い……《漆黒の牙》！」

先に仕掛けたのはヨシユアだった。得意の隠形術で劍帝レーヴェの背後から攻撃を仕掛けたが、それを簡単にかわされた。

避けた劍帝レーヴェにさらに追い打ちをかけようとしたヨシユアだが、逆に隙を作ってしまった劍帝レーヴェが一閃を食らわせようとした。

しかし、ヨシユアは一瞬で姿を消し、危機を脱出した。

カウンターを食らわせようと一瞬で間合いを詰めたヨシユアだが、劍帝レーヴェはその剣を跳ね返し、逆に間合いを詰めた。

ヨシユアの拳動も早く、近くの柱を利用し、間合いを詰める劍帝レーヴェを分身で包囲しようとした。対する劍帝レーヴェは慌てもせず一斉に仕掛けてきたヨシユアの分身を一太刀で切り捨てた。

分身を消されたヨシユアは背後から襲いかかったがかわされてしまい、遠距離から小太刀を投げた。

劍帝レーヴェはそれらを避けながらヨシユアとの間合いを詰め、剣を振り下ろしたが、その隙を突いてヨシユアは再び分身を出し

劍帝レーヴェに一閃を食らわせることに成功した。

「フフ……やるな。……ならばこちらも全開で行かせてもらうぞ」
「……！」

劍帝レーヴェが剣を構え直し、気を練って一気にヨシユアとの間合いを詰めると　一閃を食らわせた。

そこからは圧倒的だった。ヨシユアは防ぐのが精いっぱいの状態だった。

「くっ……！」

劍帝レーヴェの剣を押しとどめるヨシユア。

「どうした、ヨシユア！唯一勝るスピードを活かさずにどうやって勝機を掴むつもりだ！？」

本気を出せばこの程度かと言う剣帝レーヴェ。

「……………。……………。ねえ、レーヴェ。1つだけ答えたいんだ。どうして教授に協力してこんなことをしているのか……………」

ヨシユアの言葉に剣帝レーヴェの顔色が変わった。

「前に……………カリン姉さんの復讐が目的じゃないって言ったよね。☐

この世に問いかけるため……………それは一体……………どういう意味なの？」

「……………。……………大したことじゃない。人という存在の可能性を試してみたくなっただけだ」

「人の可能性……………」

「時代の流れ、国家の論理、価値観と倫理観の変化……………。とにかく人という存在は大きなものに翻弄されがちだ。そして時に、その狭間に落ちて身動きの取れぬまま消えていく……………。俺たちのハーメル村のように」

「……………」

「この都市に関しても同じことだ。かつて人は、こうした天上都市で満ち足りた日々を送っていたという。だが、《大崩壊》と時を同じくして人は楽園を捨て地上へと落ち延びた。そして都市は封印され……………人々はその存在を忘れてしまった。まるで都合が悪いものを忘れ去ろうとするかのように……………」

「……………」

「真実というものは容易く隠蔽され、人は信じたい現実のみを受け入れる。それが人の弱さであり、限界だ。だが《輝く環》はその圧倒的な力と存在感をもって人に真実を突きつけるだろう。国家という後ろ盾を失った時、自分たちがいかに無力であるか……………自分たちの便利な生活がどれだけ脆弱なものであったか……………。そう……………自己欺瞞によって見えなくされていた全てをな」

「それを……………それを皆に思い知らせるのがレーヴェの目的ってこと……………？」

「そうだ。欺瞞を抱える限り、人は同じことを繰り返すだろう。第

2、第3のハーメルンの悲劇がこれからも起こり続けるだろう。何人ものカリンが死ぬだろう。俺はそれを防ぐために《身喰らう蛇》に身を投じた。そのためには……修羅と化しても悔いはない」

「………………。それこそ……欺瞞じゃないか」

「………………。なに？」

「僕も弱い人間だから……レーヴェの言葉は胸に痛いよ。でも……人は大きなもの前で無力であるだけの存在じゃない。10年前のあの日……僕を救ってくれた姉さんのように」

「………………。ッ」

「そのことにレーヴェが気付いていないはずがないんだ。あんなにも姉さんを大切に想っていたレーヴェが……。だったら……やっぱりそれは欺瞞だと思う」

「………………。クッ」

剣帝レーヴェがヨシユアの剣を押し返した。

「カリンは特別だ！あんな人間がそう簡単にいてたまるものか！だからこそ人は試されなくてはならない！弱さと欺瞞という罪を贖あがなうことができるのかを！カリンの犠牲に値するのかを！」

「だったらそれは僕が証明してみせる！姉さんを犠牲にして生き延びた弱くて、嘘つきなこの僕が……。エステルたちと出会うことで自分の進むべき道を見つけられた！レーヴェのいるここまで辿り着くことができた！人は人の間にある限りただ無力なだけの存在じゃない！」

「…………！」

その言葉に驚き隙を見せた剣帝レーヴェのもとにヨシユアは一気に間合いを詰め、すべての力をもって剣帝レーヴェの剣を弾き飛ばした。

「あ…………」

剣を落とされた左手をみつめる剣帝レーヴェ。

「はあっ…………はあっ…………はあっ…………はあっ…………」

その前で荒く息をつくヨシユア。

「や、やった……」
「へっ……勝負アリ、だな」
「なかなかの作戦でしたね」

「ふうっ……はあっ……ふうっ……ふうっ……」
「俺に生じた一点の隙に全ての力を叩きこんだか……。まったく……
……呆れたヤツだ」

「はあ……はあ……。……ダメ……かな……？」

「フッ……。《剣帝》が剣を落とされたのではどんな言い訳も通用
しないだろう。素直に負けを認めるしかなさそうだ」
「そういう剣帝レーヴェはどこか楽しそうだった。」

「……あ……」

「やったあああっ！」

「すぐさまエステルたちが駆けつけた。」

「凄い！凄いやヨシユア！あの《剣帝》に勝ったんだよ！しかも……
……剣だけを弾くなんて！」

「そうでもない限り……。万に一つの勝ち目もなかったからね。な
るべく相手を傷付けずに無力化することを優先する……。父さんに
教わった遊撃士の心得が役に立ったよ」

「そっか……」

「なるほどな……。《教授》に仕込まれた技術と《剣聖》から教わ
った心得……。その2つを使いこなせば俺が敗れるのも道理か……」

「レーヴェ……」

「……。俺は人という存在を試すために《身
喰らう蛇》に協力していた。その答えの一つを出した以上、もはや

協力する義理はなくなった。そろそろ……抜ける頃合いかもしれないな」

「あ……！」

突然、ヨシユアが剣帝レーヴェに抱きついた。

「良かった……本当に良かった！……レーヴェが……レーヴェが戻って来てくれた！」

「お、おい……」

「父さんに引き取られてからもずっと気にかかっていたんだ……」

……声や顔は思い出せるけど誰なのかぜんぜん思い出せなくて……。やっと思い出せたと思ったら……敵として立ち塞がっていて……

……ずっと……不安だったんだ……」

「そうか……」

「あ、あの……」

割り込めない雰囲気戸惑うエステルたち。

「（ここはそつとしておいてあげましょう。兄弟の本当の再開とと言えるのですから……）」

「（やれやれ……。マセても、まだまだ甘えたい盛りのがキってところか）」

「（そ、そうなのかなあ？）」

「ご、ごめんエステル……何だかはしゃいじやって……。まだ何も解決してないのに……」

「ヨシユア……。もう、そんなことでいちいち謝らなくていいわよ。久しぶりの仲直りなんですよ？ いっぱいお兄さんに甘えなくちゃ！」

「あ、甘えるって……」

「フフ……。エステル・ブライト。……お前には感謝しなくてはな「ふえっ……！？」

「レンといい、こいつといい……。俺には出来なかったことを軽々とやってのけたのだから。そして、様々な者たちを導いてここまで辿り着いた……。フフ……。本当におかしな娘だ」

「な、なんか全然、感謝されてる気がしないんですけど……」

「アガット・クロスナー。竜気をまといし必殺の重剣技、なかなかどうして大したものだ。フフ……少しは前に進めたようじゃないか？」

「お、おう……。って、したり顔で分かったような口利いてんじゃねえっての！ オッサンそっくりだぞ、あんた！」

「フ……。剣聖に似ているとは光栄だ。……それと……。レイン・アクアライト」

「……いよいよ、教えてくれる気になりましたか？」

「そうだな……。教えてやりたいところだが、生憎俺は教団について詳しくは知らない」

「……どういうことですか？」

「《身喰らう蛇》は時として下劣な集団を潰すことがあることは知っているとと思うが……。俺はただ一部の《ロツジ》を潰しただけであつてその全貌を知っているわけではない」

「そんな……」

「期待に応えられず申しわけないが……。これだけは言えるだろう。

あの教団は確かに壊滅状態に陥つたが、まだ水面下で復活を画策している者がいるだろう」

「やはりそう思いますか……。おそらく生き延びた幹部クラス的人物がどこかに潜伏しているのでしょう」

「ああ。あれから6年経つたが、あと数年の間に何か行動を起こすかもしれない。用心しておくことだな」

「ええ……」

「えつと……」

あまりよく理解していないエステルたちは気まずそうだった。

「おっと、すいません。先にこの事件を解決しなくてはなりませんね」

「うん。そういえば……。どうしてレーヴェはここにいたの？ まさか、この魔法陣みたいなのが《輝く環》ってことはないわよね？」

「いや、これは単なる光学術式だ。《根源区画》より送られた力を

“奇蹟”に変換するためのな……”

「！！！！」

「《根源区画》……そこに《輝く環》があるんだね？」

「ああ……。この《中枢塔》はいわば、《環》の力を都市全域に伝えるためのアンテナ兼トランスミッターにあたる。その直接的な影響範囲はおよそ半径1000セルジュ。端末である《ゴスペル》を中継すればリベルはおるか、大陸全土にも影響を及ぼすことができるそうだ」

「と、とんでもないわね……。それじゃあ、異変を止めるには《根源区画》にある《輝く環》をどうにかする必要があるのよね？」

「そういうことだ。だが、《環》はそう簡単にはどうにかできる代物ではない。アーティファクトの一種らしいが、自律的に思考する機能を備え、異物や敵対者を容赦なく排除する。1200年前、《環》を異次元に封印したりベル王家の始祖もさぞかし苦労させられたそうさ。そしてお前たちは、その苦労に加えて《白面》も相手にしなくてはならない」

「！！！！」

「……当然、そうなるだろうね。でも、レーヴェが協力してくれたら教授にだって対抗できる気がする」

「こいつめ……。俺が付いて来るのを当然のようにアテにしてるな？」

「へへ……」

「フフ……仲直りしたようで結構だ。しかし少々、打ち解けすぎではないかな？」

突然、ワイスマン教授があらわれ、杖から電撃を放ち、剣帝レーヴェを吹き飛ばした。

「ガッ……」

「あ……」

「レーヴェ……！！」

ヨシユアが慌てて剣帝レーヴェにかけよった。

「フフ……ご機嫌よう。見事、試練を乗り越えてここまで辿り着いたようだが……。こつというルール違反は感心しないな」

「な、なにがルール違反よ！あたしたちは正々堂々と執行者たちと戦ったわ！そしてヨシユアは……レーヴェとの勝負に勝った！変な言いがかりを付けてるんじゃないわよ！」

「フフ、まだまだ今回の計画の主旨に気付いてないようだね。結社に属する者は皆、それぞれ何らかの形で《盟主》から力を授かっている。そのような存在が君たちに協力してしまったら正確な実験は期待できないだろう？」

「じ、実験……？」

「……まさか……。僕たちがここに来たことすら計画の一部だったというのか！？」

「フフ……幾分、私の趣味は入っているがね。少なくとも計画の主旨の半分を占めているのは間違いない」

「やはり『福音計画』は《輝く環》を手に入れるだけではなかったようですね……。手に入れるだけならこのような遠回りな事はしませんからね」

「クク……全ては《盟主》の意図によるもの。その意味では、ヨシユア。君も実験の精度を狂わす要素だ。非常に申し訳ないが……そろそろ私の人形に戻ってもらうよ」

「……！」

ワイスマン教授が指を鳴らすと、ヨシユアの肩にあった《結社》の刺青が反応を示し、ヨシユアが苦しみ始めた。

「ぐっ……！」

「ヨシユア!？」

「……！」

一瞬にしてヨシユアの姿が消えたかと思うと、ワイスマン教授の隣にヨシユアが立っていた。

「……！」

「……！」

「野郎……!!」

「まさかあの刺青は……! 深層意識の最下層に埋め込んだ暗示の……!!」

「フフ……さすがS級遊撃士。教会関連に関しても知識があるとはね。ではこの《絶対暗示》がどういった物か見当はつくだろう」

「くっ……」

「ヨシユア……嘘だよ……。ねえ……こっちに戻って来てよ……」

しかし、ヨシユアは何の反応も示さない。

「お願いだから……そんな目をしないでよおおっ!!」

「フフ、無駄なことは止めたまえ。かつて私は、壊れたヨシユアの心を修復するために《絶対暗示》による術式を組み込んだ。その時に刻んだ『^{ステイグマ}聖痕』がいまだ彼の深層意識に眠っていてね。その影響力は大きく、働きかければたやすく身体制御を奪い取ってしまう」

「……そんな……」

「ああ、ちなみにヨシユアの肩にある紋章は刺青ではなくてね。私
が埋め込んだ『聖痕』に対するヨシユアのイメージが現出したもの
だ。フフ……記憶が戻ったのと同時に現れたから彼もさぞかし不安
に思っただろうね」

「……。……嘘、だったんだ。ヨシユアを散
々苦しめた拳句に自由にしてやるって言うておいて……。それすら
も……嘘だったんだ……」

「別に嘘は言っていないさ。君と共にヨシユアがこんな所まで来さ
えしなれば私もここまでしなかつただろう。クク……全ては君た
ちが選んだ道というわけだ」

「っ……ふざけんじやないわよ! あんたなんかあたしたちの歩い
てきた道をとやかく言われたくなんかない! ヨシユアを操ったから
って今更へこんだりするもんですか! あんたなんかぶっ飛ばして絶
対にヨシユアを取り戻すんだから!」

「フフ……そう来なくては。だが、私もこれから外せない大切な用

事があつてね。《根源区画》で待っているから是非とも訪ねてきてくれたまえ」

ヨシユアはワイスマン教授と共に消えてしまった。

「ああっ……………」

「《根源区画》ですか……………。一体どこから行けば……………」

「……………奥にある……………大型エレベーターを使え……………」

倒れていた剣帝レーヴェが苦しそうに言った。

「レーヴェ……………！よかった、無事だったんだ！奥にあるエレベーターって……………」

エステルの中には大きなプレートがあつた。

「まさか……………あの大きなプレート!?」

「《環》が眠る《根源区画》に……………降りることができはるはずだ……………。急げ……………もう時間がない……………」

「わ、分かつた!」

エステルたちはすぐさまエレベーターに乗ろうとしたが、2体の巨大な機械人形が現れた。

「チツ……………アルセイユを撃墜した……………!」

「《トロイメライッドラギオン》……………。ワイスマンめ……………俺の機体以外にも用意していたのか……………」

「この忙しい時に厄介な相手ですね……………。こうなったら、私が1人で受け持ちますからエステルさんたちは先に……………」

「……………いや、ここは我々が引き受けよう」

後ろを振り返ると、アルセイユのメンバーに加え、カプア空賊団のメンバーも来ていた。

「ユリアさん、ミユラーさん!それにみんなも……………」

「皆さん、どうしてここに……………」

「ふふ、アルセイユの修理がそろそろ完成しそうなのでね!動けるものを集めた上で加勢しに来たというわけだ!」

「わしはオマケじゃが……………こりゃ、凄い所に来たのう!」

ラッセル博士は目の前の機械人形に感心していた。

「フフン、言っとくけどボクたちも忘れないでよね！」
「ま、山猫号の修理もそろそろ終わる頃合いだからな」
「お前さんたちの様子をちょいと見に来たってわけさ」
「そっか……」
「とにかくここはあたしたちに任せなさい！」
「エステルさんたちは早くヨシユアさんの所に……！」
「みんな……ありがとう！」
「行け……！エステル・ブライト……！……その輝きをもってヨシ
ユアを取り戻すがいい……！」
「……うんっ……！」
「行くぞ、みんな！」
「二手に分かれて撃破する！」
「おおっ！」

エステルたちは仲間任せてエレベーターへと急いだ。

第16章 空の軌跡(15)(前書き)

もうすぐ最終決戦!

第16章 空の軌跡（15）

「まさかエレベーターシャフトだったとはな……。一体どこまで降りるんだ？」

「中枢塔の高さよりも遥かに深いようですね……。浮遊都市全体の中心にあるようです」

「……………」
エステルはヨシユアの事が心配で一言も話さなかった。

「エステルさん、心配する必要はありません。ヨシユアさんと共に歩いていくと決めたのでしょうか？ 私たちも協力しますので……………」

「レインさん……………ありがとう。そうだよね……………約束、破るヤツじゃないし。それにあたしを差し置いてあんな眼鏡男の好きなようにさせてたまるもんですか……………。乙女パワーで取り戻すっ！」

「へッ、その意気だ」

その時、上から轟音が響いてきた。

「な、なにこの音……………」

「まさか……………あの機械人形ですか！？」

エステルたちの頭上から《トロイメライ》《ドラギオン》が降りてきた。

「も、もう一体いたなんて……………。くっ……………こんな所でどうすれば……………」

「ここは私に任せてくれませんか？ エステルさんたちにここで体力を使わせるわけにはいきませんから……………」

「えっ……………でもレインさん1人じゃ……………」

「私のことは心配いりません。……………一瞬で決めますから」

言うが早い、レインは1人《トロイメライ》《ドラギオン》の前に対峙すると、

「驟雨一刀流、三の型 《氷雨》」

レインの姿が消えたかと思うと、次の瞬間、目の前の《トロイメラ

『イ・ドラギオン』が凍りついて粉々になり、氷の粒となって下に落ちていった。

「なっ……………」

「さて……………あとはこのまま降りるだけです。さすがにもう一体来るなんてことは遠慮してほしいですが……………」

「ちょ、ちよつと……………。圧倒的じゃない、レインさん」

「てめえ、今まで手加減してきたつての……………」

「少々違いますね。今の技は体力を使いますから使わなかっただけです。いざという時のためのものですね」

「そっか……………。でも、そんな技を今使ったんじゃ……………」

「いえ、まだいけますよ。こんな所で休むわけにはいけませんからね」

「へっ、そう言ったからには途中でへばるんじゃないぞ」

エステルたちはそのまま最下層へと降りていった。

「な、何とか…………… 終点まで辿り着けたわね。ここが…………… 《根源区画》なのかな？」

「ええ…………… 奥の方から凄まじい力が感じられます。どうやら間違いなさそうですね」

「つまり《輝く環》がこの先にあるってことか……………」

…………… 多分、これが最後の戦いになると思う。《輝く環》を何とかして異変を食い止めるために…………… 。

あの《白面》からヨシユアを取り戻すためにも……………。2人とも…………… 最後の力をあたしに貸して！」

「言われるまでもねえ！」

「もとより承知です！」

エステルたちはヨシユアを取り戻し、異変に終止符を打つため、《輝く環》のもとへと向かった。

第16章 空の軌跡（16）

「ようこそ……大いなる秘蹟の源たる場所へ」

そこには金色に光り輝く幾何学的な輪があり、ワイスマン教授とともにヨシユアがいた。

「ヨシユア……！」

しかし、依然としてヨシユアは何も話さず無表情のままだった。

「フフ、最後の試練も何とか潜り抜けたようだね。それでこそ《環

》の復活に立ち会う資格があるというものだ」

「そんなものに興味はないわ！あたしが望むのは今回の異変を終わらせること！それと……あんたがヨシユアを解放することよ！」

「フフ……残念だが、それは無理だな」

「……！！」

「君たちが幾ら取り繕ってもヨシユアの心が造り物であるのは否定できない事実なのだ。この肩の『聖痕』がその証……《身喰らう蛇

》の 私の所有物である証明なのだよ」

「……あんた……」

「フフ、あるいはヨシユアが自分の意志で『聖痕』を消せたら真の解放もありえたのだが……。残念ながら今回は、そこまでは至らなかったようだ。今しばらく私の研究素材として在り続けてもらおうとしよう」

「……」

「人間がここまで外道になるとは俄かに信じられませんか……」

「舐めやがって……」

「やれやれ、人聞きが悪いな。おそらくヨシユアは、肩にある『聖痕』の意味に気付いていたに違いない。そして、この事態が起こり得ると予想して悩んでいたことだろう」

「……！！」

「にもかかわらず、彼は君たちに一言も相談しなかったようだ。そして君たちもまた彼の悩みを察してやれなかった。クク……君たちの『絆』などその程度ということではないかね？」

「……………」

「……………チツ……………」

「……………」

その言葉に3人は黙らされてしまった。

「まあ、そう悲観することはない。ここに辿り着けた時点で君たちには資格が与えられた。後は正しい選択をするだけだ」

「……………資格……………選択……………。それって……………どうということなの？」

「フフ、君たちはどの程度知っているのかな？　この《輝く環

》を巡って1200年前に何が起きたのかを……………」

「あ……………」

「やっぱりそれが《輝く環》か……………」

「その通り……………。無限の力を生み出し、奇蹟へと変換することのできる究極のアーティファクトの1つだ！しかし、古代人は1200年前、この大いなる至宝を封じてしまった！一体、どうしてだと思っ？」

「く、詳しいことは分からないけど……………。人や社会の在り方が悪い方向に変化したからだって裏の塔の記録には残されていたわ」

「ほう、あれを解析したのか。フフ……………ならば話は早い。その真相を君たちに教授しよう」

ワイスマン教授はエステルたちにこれまでの歴史を話し始めた。

「……………数千年前。女神は人に《七の至宝》を授けた。それらは『世界の可能性』をそれぞれ異なる方法で利用することで奇蹟を起こすアーティファクトだった。そして至宝ごとに七派に分かれた古代人たちは様々な形で『理想』を追い求めた。その一つこそが、《輝く環》を中心に建造されたこの実験都市、《リベル・アーク》だ。汎用端末の《ゴスペル》を通じてあらゆる願いが《環》に叶えられる人の手によって築かれた空の楽園……………。そこで人は、一切の争い

のない豊かな生活を享受できるはずだった。しかし人は《ゴスペル》を通じて《輝く環》がもたらす人工的な幸福に次第に魂を呑み込まれていった。物質的快樂はもちろん、《環》が構築する夢

仮想現実に精神的な充足すら見出してしまったのだ。……そして人は麻薬のように奇蹟に依存することで破滅への道を歩き始めてしまった。倫理と向上心を失い、精神的に失調してゆく市民たち……。

出生率が低下する一方、自殺・異常犯罪は増加し続け、社会全体が緩慢な死に向かい始めた。しかし《環》は我関せず、求められるまま奇蹟を与えてしまう。そうして空に築かれた楽園は、虚ろで醜悪な培養槽と化していった。リベール王家の始祖たちが《環》を封印する計画を立てたのはそうした背景があつてのことだ。《環》が妨害のために放つた《守護者》に苦しめられながらも封印区画とデバイスタワーを建造し……そして遂に、《環》は浮遊都市ごと異次元に封印されることとなった」

「それが……1200年前に起こつた事……」

「……とんでもねえ話だぜ」

「確かに、王家の始祖たちは良くやつたと言つてもいいだろう。

しかし、考えてもみたまえ。その代償として、人は混沌の大地へと放り出され一からやり直すことになつたのだ。そして今も、覇権を巡つて飽くなき闘争を繰り返している……。果たしてそれは正しい選択だつたのだろうか？」

「……それは……」

「そして一方で人はオーブメントという技術を手に入れ、再び豊かな生活を享受し始めている。だが、今のままでは行き着く先は2つしかあり得ない。飽くなき快樂を求め、自ら律することも叶わぬまま世界を巻き込み滅びてゆくか……。もしくは古代人のように全てをシステムの管理に委ねることで家畜のような生を続けてゆくか……。物質的な破滅か、精神的な破滅か、どちらかしかあり得ないのだよ」

「……………」

「それを防ぐためには、人自身が進化するしか道はない。いかなる誘惑、逆境にも揺らぐことのない絶対の理性！感情に囚われることなく、正しい答えを出せる究極の知性！その両者を兼ね備えた段階に人という種を導いてやること……。まさにそれこそが『福音計画』の最終目的なのだ！」

「……どうかしてるぜ……」

「そのようなことができるはずがありません。できたとしても……それは正しいものではないでしょう」

エステルたちは信じられないという目でワイスマン教授を見た。

「クク……そんな誇大妄想狂をみるような目で見ないでくれたまえ。人は想像を絶する事物に直面した時、畏れとともに変革を余儀なくされる生き物だ。その意味で《輝く環》はまさに格好の存在と言えるだろう。私はこの巨いなる至宝をもって人を正しい進化に導いて見せる……。それこそが《盟主》より授かった《使徒》としての使命なのだ！」

「はあ……。正直、余計なお世話なんですけど」

エステルはワイスマン教授の大仰な言葉にため息をついた。

「……………」

「いかなる誘惑、逆境にも揺らぐことのない絶対の理性？感情に囚われることなく、正しい答えを出せる究極の知性？そんなものにどんな価値があるっていうの？」

「……君は人の話を聞いていなかったようだね。物質的、もしくは精神的な破滅を避けるために人は進化するしか……」

ワイスマン教授が繰り返し同じことを言おうとしたが、エステルの言葉に遮られた。

「そんな話をしてるんじゃないわ。あたしが言いたいのは……そんなご大層な存在になる前に出来る事があるんじゃないかってこと」

「……………」

「ヨシユアも言ってたけど……あたしたちは無力な存在じゃない。今回の異変に当たって、みんな最初は戸惑いながらも次第に協力し

て前に進もうとしていた。王国各地を巡って……あたしはそれをこの目で確かめた。別に進化しなくなつて何とかやっついていけると思わない？」

「……群れて生き延びるのは獣や虫ですらやっていることだ。その程度の行動をもつて君は人の可能性を語るつもりかね？」

「別に同じでもいいじゃない。あたしたちだつて生き物であるのは確かなんだし。それが生きているってことの強さなんじゃないかな？」

「なに……？」

「もちろん人は……それだけの存在じゃないと思う。そうした命の輝きを原動力に自分らしく生きて行こうとする……そんな存在だと思ふの。でも、それはあんたの言うような万能超人である必要なんなくて……みんなが、ちょっととした思いやりでお互い助け合うだけでいいんだと思う」

「……………」

「多分……《輝く環》を封印した人たちも同じ考えだったんじゃないかな？奇蹟に頼りきつちゃうことも良くないことかもしれないけど……それ以上に、人と人がお互い助け合う余地がなくなることが何よりも良くないことだつて……」

「エステル……」

「人は、人の間にあつてこそ真に人として立つことができる……。まさにその通りですね」

「クク……何を言うかと思えば助け合いか……。そのような事は、歴史を振り返つてから言いたまえ。例えば幾度となく繰り返されてきた戦争という名の巨大なシステム……。その狭間において、人の絆は無力な存在でしかなかったらどう？」

「……そんなこと、ない！」

エステルはその言葉を真つ向から否定した。

「お母さんは戦火の中、命がけであたしを守ってくれた！その事がきっかけで、あたしは遊撃士の道を志してそして今……ここに立つ

ている！この異変を止めて戦火を未然に防ぐために！それでも……人は無力だと言えるの！？」

「フン……。ああ言えばこう言う……」

「もし、あなたが本気で人が無力だと信じてるのなら……。だから進化させる必要があるんだと思い込んでるなら……。だとしたら、あなたはとっても可哀想な人だと思う」

「！！！」

「だって信じ合って、助け合うことの喜びを知らないんだもの。あたしたちが……。人が足掻いているのを見ることにしか喜びを見出せないなんて……。そんなの……。寂しすぎるよ」

エステルはワイスマン教授を哀れみの目で見た。

「……………」

「でも、あたしは遊撃士だから……。あなたが、自分の事情にみんなを巻き込むことは見過ごせない。悪いけど……。力づくでも止めさせてもらうわよ」

エステルたちは武器を構えた。

「………………。クク……。無知な小娘が大層な

口を利く……。ならば、その身をもって己の言葉を証明したまえ」

ワイスマン教授が指を鳴らすとレインとアガットの動きが止まった。

「か、身体の自由が……。！？」

「まさか、これは聖典にあった《魔眼》……。！！」

「なっ……………」

「フフ、君たちはそこで大人しく見ていたまえ。さぞかし面白い見物になるだろう」

「あ、あんですって……」

「…………。ヨシユア。少し遊んであげたまえ」

ワイスマン教授がヨシユアにつぶやくとヨシユアが武器を構えた。

「……………」

「ヨ、ヨシユア…………」

「クク、エステル君。是非とも私に見せてくれたまえ。絶望の中、

人という存在がそんな強さを見せてくれるのかをね」

「くっ……！」

するとヨシユアがエステルに飛び掛かり、一太刀でエステルを切り伏せた。

「……………」

「……………」

「ほう……なかなか見事な技だ。どうやら《剣聖》の所に預けた甲斐があったみたいだね。これでまた、私の作品の完成度が上がったというわけだ」

どこまでも卑劣な言葉を浴びせるワイスマン教授。

「あ、あんた……！」

「さて……真の余興はここからだ。ヨシユア、彼女を無力化したまえ」

「……………」

ワイスマン教授の言葉でヨシユアはエステルの上に乗りかかった。

「あうっ……………」

「エステルさん……！」

「エステル！」

レインとアガットは成す術もなく見る事しかできない。

「フフ、どうやら君では人の強さを証明できないようだね。だが、私も学者の端くれとして実証の必要性は理解しているつもりだ。だから君の代わりに……ヨシユアに証明してもらおうとしよう」

「……………」

「なに、簡単な実験だ。……このままヨシユアに君の息の根を止めてもらう。しかる後、暗示を解いて元に戻してあげるといっただけさ」

「……………」

「フフ……果たしてヨシユアはどんな表情を浮かべるのだろうか？ゾクゾクするとは思わないかね？」

ここまでいくと悪趣味の域を超えて存在を否定したくなるような言葉だった。

「ふ、ふざけんじやないわよっ！そんなことになったらヨシユアは……ヨシユアは……」

「はは、今度こそ完全に心が碎け散ってしまいかもしれないね。だがそうになったら、また私が新たな心を造ってやれば済むことだ。そしてもう一度、同じように人に戻るチャンスを与えよう。フフ……今から楽しみだよ」

「やめて………そんなの………酷すぎるよ………」

「ワイスマン………それ以上ふざけた真似をすると………貴方を殺します………」

レインは殺気立たせ動くこうとするがしかし動けなかった。

「ククク………動かぬ身では何を言っても無駄だ。それではヨシユア………止めを刺してあげたまえ」

「………」

ヨシユアは剣をエステル喉の上に持ち上げた。

「……ヨシユア………ア………。ごめんね………絶対に死なないって言ったのに………。ごめんね………一緒に歩くって約束したのに………」

「ヨシユアあつ！とつと目を覚ましやがれえっ！」

「でも………あたしは………信じているよ………。ヨシユアは絶対に………負けないって………。あたしが居なくなっても………現実から逃げたりしないって………」

「……ごめん。ちょっと自信はないかな」

そこで今まで何も話さなかったヨシユアから言葉が漏れた。

ヨシユアがエステルから離れるとワイスマン教授に攻撃を仕掛けた。

「な………!?!」

ワイスマン教授は驚愕して飛びのいた。

「おお………」

「《魔眼》が………解けましたか」

「……ヨシユア………?」

「……ごめん、エステル。ずいぶん辛い思いをさせてしまったみたいだね」

「ば、馬鹿な……。あの状態から意志を取り戻せるはずが……」
ワイスマン教授はそこでヨシユアの肩にあった暗示の紋章にないことに気付いた。

「待て……。！お前……。肩の『聖痕』はどうしたのだ！？」

「……。もう僕の深層意識に貴方が刻んだ『聖痕』はない。たった今、砕け散ったからね」

「な、なにッ！？」

「『聖痕』のある一点に、暗示の楔を打ち込んでもらったんだ。そして、そこに負荷がかかった時、『聖痕』が崩壊するような自己暗示を僕はずっと繰り返し返してきた」

「！……！」

「あ、暗示の楔……」

「このままだと君との約束が果たせなくなりそうだったからね。都市に不時着した直後にケビンさんをお願いしたんだ」

「ケ、ケビンさんが！？」

「なるほど……。あの時の疲れがその結果だったのですね」

「あ、あはは……。そうだったんだ……」

「ケビン・グラハム……。騎士団の新米と侮っていたが小癩な真似をしてくれる……」

「そうなるにあの助言者がきっかけだったようですね」

「な、なに……」

その言葉にワイスマン教授はすぐに思い立った。

「まさか……。カシウス・ブライトの入れ知恵か！」

「あ……」

エステルはアルセイユに乗り込む前にカシウスがヨシユアに渡していた手紙を思い出した。

「そっか……。あの時の……」

「うん……。手紙にはこうあったんだ。『お前の呪縛を解く鍵はケビン神父が持っているだろう。だが、その鍵をどうやって使いこなすかはお前自身の問題だ。ワイスマンとやらの行動を見抜いて自由を

勝ち取ってみせる』ってね」

「へへ……あのオッサンらしいぜ」

「まったくもう……ほんと父さんらしいわ」

「……………」

ワイスマン教授は歯を噛みしめた。

「正直……かなり悩んだよ。再び僕を操った貴方が一体、何をやらせるだろうと。そして僕は……その一点に全てを賭けてみた。貴方が、僕が最も恐れることを僕自身の手で行わせる可能性にね」

ヨシユア自身の手でエステルを殺させるという予想通りだったのだ。

「そして貴方はその通りに命じ、結果的に『聖痕』は砕け散った。

もう僕は……完全にあなたから自由だ」

「ヨシユア……………」

「……愚かな……。このまま私に従っていけば遥かな高みに登れたものを……。新たなる段階へと進化させてやったものを……………」

「エステルと同じく……僕もそんなものに興味はない。それに道とというのは……他人から与えられるものじゃない。暗闇の中を足掻きながら自分自身の手で見出していくものだ」

「はは……それが出来れば世話はない！人の歴史は、闇の歴史！大いなる光で導いてやらねばいつまで経っても迷ったままだ！」

「違う　　！人は暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして共に歩んでいくことができる！それが……今ここにいる僕たちの力だ！」
そういうヨシユアに迷いはなかった。

「ヨシユア……………」

「……クク……出来損ないの執行者風情がずいぶん大きな口を叩くものだ。ならば見せてみるがいい……。闇の中でも輝くというお前たちの光とやらをな……………」

ワイスマン教授は杖を振るうと、高機動兵器、《戦術殻》を出現させた。

「《盟主》の忠実なる僕　　《蛇の使徒》が一柱、《白面》の力、見せてやるう！」

「……望むところよ！」
「全力で行かせてもらうよ！」

第16章 空の軌跡（17）

「ほう、これは驚いたぞ。まさか貴様らがこころまで食い下がるとは……」

エステルたちに敗れたワイスマン教授。

「はあはあ……。教授ってば、どンドン口調がぞんざいになってるんじゃない？」

「ヘッ……余裕がないんじゃないかねえのか？」

「ククク……哀れなことだ。自分たちが既に死地にいるとも気付かず……」

ワイスマン教授は敗れたのにも関わらず、笑みをこぼす。

「え……」

すると、ワイスマン教授は《輝く環》の真下に移動した。

「あ……！」

「……どうするつもりだ!？」

「このまま《盟主》に献上するつもりだったが気が変わった……」。

貴様らが歯向かった相手がどのような存在かを思い知るがいい」

そのままワイスマン教授が《輝く環》の中心に入り込んだ。

すると、《輝く環》から波動が流れ始めた。

「な、なんなの……」

「こ、これは……」

「まさか、《輝く環》と融合する気ですか!？」

エステルたちは何もできないまま、しばらくするとワイスマン教授は《輝く環》と融合し、異形の姿、《アンヘルIIワイスマン》へと変わり果てた。

「あ……」

「こ、こいつは……!？」

「こ、この霊圧は……!」

「ククク……この感覚……思った以上に悪くない……。さて……ま

ずは試させてもらおうか……。人を新たな段階へと導く《天使》の巨いなる力をね……！」

エステルたちは《輝く環》と融合したワイスマン教授、《アンヘル・ワイスマン》に立ち向かったがこちらの攻撃を一切受け付けなかった。

「フフ…… やつと思いつたようだね。これが真の力というものだ」「そ、そんな……。何でこっちの攻撃がぜんぜん当たらないのよ……」

「何らかの障壁を展開し続けているんだ……。でも……ここまで通用しないなんて……」

「クク、七至宝の中でも《輝く環》は空間を司る存在……。導力魔法とは比べ物にならない圧倒的な『絶対障壁』を展開できる。もはや私と君たちとは存在の次元が違いすぎるのだよ」

《アンヘル・ワイスマン》は《魔眼》でエステルたちの動きを封じ込めた。

「うぐっ……」

「こ、この状況で魔眼ですか……」

「チツ…… サド野郎が……！」

「ワイスマン…… 貴方は……」

「クク…… その目…… やはりお前は殺すには惜しい……。じっくり調整しながら再び『聖痕』を埋め込んでやる……。そしてまた希望を与えてからその芽を摘み取ってやる……。希望が絶望に変わる表情…… 今から楽しみだよ…… ククク……」

「やれやれ……。もはや悪趣味と言うより病気と言った方が良さそうだな」

エステルたちの頭上から突然聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「！？」

現れたのはドラギオンに乗った剣帝レーヴェだった。

「あ……！」

「レーヴェ！？」

剣帝レーヴェはドラギオンを操り、《アンヘル＝ワイスマン》の『絶対障壁』に攻撃を加え始めた。

「フン……止めを刺しておくべきだったか。しかしレーヴェ。君が来たところで何ができる？いかにドラギオンといえど《環》の障壁を破ることは不可能だ」

「……だろうな。ところでワイスマン。一つ聞いておきたいことがある。『ハーメルの悲劇』……貴様ほどの程度、関与していた？」

「！？」

剣帝レーヴェの口から『ハーメルの悲劇』という言葉が出てきてヨシユアは驚いた。

「おお、人聞きの悪いことを言わないでくれたまえ。あれはあくまで帝国内の主戦派が企てた事件だろう？どうして私が関与するのかね？」

「それは貴様が“蛇”だからだ。弱味を持つ人の前に現れて破滅をもたらす計画を囁く……。そして手を汚すことなく、自らの目的を達成してしまう……。……それが貴様のやり口だろう」

「あ……」

「実際、主戦派の首謀者たちは当時あったという政争に敗れて後がない者たちばかりだったと聞く。もし、10年前の戦争すら今回の計画の仕込みだったのなら……全てのことに説明がつくと思っただい剣帝レーヴェの考えは、《百日戦役》を引き起こすことによって、リベール王国の軍事力の弱さをリシャル大佐に考えさせ、《輝く環》の第一結界を解くことへと繋げたということだ。

「ククク……なるほどな。まあ、おおむね君の指摘通りと言えるだろう」

「……」

「もつとも私がやった事は、彼らに獵兵くずれを紹介してハーメルの名を囁いただけさ。それだけで事態は動きだし、瞬く間に戦争へと発展してしまった。クク……人間の業を感じさせる実験結果だったよ」

ワイスマン教授は戦争で亡くなった人たちを全く顧みなかった。

「……貴様……。……貴様のせいで……。ミーシャは……。俺の妹は……」

「あまりのことに言葉も出ませんね……」

「……吐き気がしてきたわ」

「なるほど……。大方、予想通りということか」

「……おや、意外と冷静だね。私としてはもう少し、憤って欲しいところではあるが」

「フフ、俺の心はとうに冷め切っているから……。しかし先ほどの、貴様に背後から昏倒させられた失態、《剣帝》としては屈辱の極みだ。その借りだけは返させてもらうぞ」

「なに……」

剣帝レーヴェは自らの剣を《輝く環》の『絶対障壁』に叩き付けた。

「くっ……」

すると、何物をも寄せ付けない『絶対障壁』にひびが入った。

「ば、馬鹿な……。《環》の絶対障壁が……。!!!そうか……。その剣は!」

「そう……。俺が《盟主》より授かった剣……。貴様の杖と同じく、『外』の理で造られた魔剣だ……」

「クッ……迂闊であったわ……。……ええい……。離れる……。離れる……。この痴れ者がッ!」

ワイスマン教授は剣帝レーヴェに容赦なく連続で攻撃を浴びせた。

「ゲウツ……。フフ……。もう遅い……」

しかし、剣帝レーヴェは退くことなく剣を叩き付け……。自らが吹き飛ばされると同時に『絶対障壁』を壊すことに成功した。

「ああッ……!!」

「レ、レーヴェっ!?!」

「俺に構うな……。!道は拓いた……。!……。あとはお前たちが切り拓け……。!!」

「くっ……」

「……やってくれたな……。まあいい……。絶対障壁など《環》の力のほんの一端だ……。……。全ての力を解放して貴様らに絶望を味わせてやる……。」

「それはこっちの台詞だッ……！」

「遊撃士として！リベールの市民として！そして何よりも人として！」

「ワイスマン……。僕たちは貴方を倒す！」

「貴方の全てを今ここで！壊させて頂きます！」

エステルたちは全てを終わらせるために《アンヘル》ワイスマン《へと立ち向かった。

第16章 空の軌跡（18）

死闘の末《アンヘル》《ワイスマン》を倒したエステルたち。

「ここまで粘るとは……。だが所詮……。無駄な足掻きというものだ。無限の力を秘めた《環》の前では」

だがそこで《アンヘル》《ワイスマン》の身に異変が起こった。

「な、なんだ……。？《環》が……。私の中の《環》が……。！」

その時、地下から蛇のような生命体が登ってきて《アンヘル》《ワイスマン》と一体化した。

「ぐっ……。おおおおおっ……。！」

それにより、《輝く環》と融合した《アンヘル》《ワイスマン》の姿はさらに変化し、凄まじい力が迸ほとほとった。

「な、なんて圧迫感なの……。！」

「このままでは……」

「ここから先は私が1人で相手します。皆さんは早く剣帝レーヴェの元へ！」

「そんな……。無茶よ！あれだけの戦闘をした後に、しかも1人でなんて！」

「そうです、レインさん！ここは僕たちも……」

「ならば、エステルさんたちは剣帝レーヴェを見捨てるというのですか？」

「それは……」

「私のことは気にしないで剣帝レーヴェの元へ行ってください。私は必ず無事で戻ると約束しましょう」

「……。分かったわ。でも必ず約束は守ってね！」

「どうか！無事で……！」

「ヘッ、何だかんだでめえは必ず1人で無茶しやがるな。だが、こんなやつに負けるんじゃないぞ！」

「はい、必ず」

エステルたちは急いで剣帝レーヴェの元へと向かっていった。

「ククク……。何をするかと思えば、1人で私に挑む気か。しかし、もはやレーヴェは助かるまい」

「ええ、あれだけの重傷を負ったのですからおそらく助かりはしないでしょう。しかし、それでも最期くらいは見届けさせてあげるべきでしょう」

「S級遊撃士、《水の剣神》レイン・アクアライトか。いかなお前の力をもってしても今の私には敵うまい。すぐにレーヴェと同じところに送ってくれる」

「それはご遠慮願いたいですね。私にはまだまだやるべきことがありますのですから。あなたの方こそ、今この場所で葬り去ってください」

「ハハ、貴様の剣ごときでこの《輝く環》と融合した私を倒せるものか」

「果たしてそうでしょうか？」

レインは腰に差したもう1本の剣を引き抜いた。

「黒耀石で造られた《時の魔剣》……。これをもって貴方を倒します」

「ほう……。まさか貴様がアーティファクトを持っているとはな。

しかし、それは使用者の移動速度を速めるかわりに身体を傷付けてゆく物。面白い、自らの剣で果てるがよいわ！」

「いいえ、私はここで死ぬつもりはありません！ワイスマン、死ぬのは貴方です！」

ワイスマン教授は胸元から光を放ち、レインとともに異空間へと移動した。

今、《アンヘル＝ワイスマン》とレインの決闘の幕が開けた。

「行きますよ、《光連斬》！」

レインは刹那の内に姿を消し、神速のごとき太刀筋で《アンヘル＝
ワイスマン》を斬った。

「ほう……なかなかやる。しかし、その程度では先に貴様が死ぬぞ
？」

「くっ……」

確かに攻撃は効いているが、レインの身体からは血が流れ出ていた。
「ならば、仕方ありません。私のほぼ全ての体力をもって、一撃で
倒させてもらいます」

「ハハ、できるものならやってみるがいい。倒せなかった時が貴様
の最期だ」

「剣技、夢幻泡影！」

レインは《アンヘル＝ワイスマン》の周囲を分身で取り囲み、全身
を斬った。

すると、《アンヘル＝ワイスマン》の斬られた所が凍りつき、崩れ
落ちっていった。

「なっ、なんだと……！？」

「これで終わりです！」

最後に、《アンヘル＝ワイスマン》の胸元を斬ると、光の塊が出現
し、強く光り輝いた。

光が消えると、元の空間に戻ったが、その時にはワイスマン教授の
姿が元通りになり、《輝く環》は消えていた。

「そ……そんな……。《輝く環》が……き、消えてしまっただと……
……。馬鹿な……。そんな馬鹿なあああ……！！」

ワイスマン教授は杖を振りかざすと姿を消した。

「逃げましたか……。しかし、彼はもうお終いですね……。それよ
りも……」

レインは血だらけになった身体を押してエステルたちの元へと向か
った。

「レーヴェ……しっかりと！今……手当てをするから……」
「……その必要はない……。お前なら……判るはずだ……。助かる傷ではないことを……」
「イヤだ……そんなのイヤだ！レーヴェまで……姉さんみたい……！そんなの酷すぎるよ……！」
「フフ……そんな顔をするな……。……幼い頃のような……泣き虫に戻ったみたいだぞ……」
「そうだよ！僕は弱くて……甘ったれで……。まだまだ……レーヴェが必要なんだ……。だから……お願いだから……」
「……やれやれ……。なあ……ヨシユア……。……納得できないのなら……お前は俺たちのようなになるな……。大切なものを……守るために死ぬのではなく……。……守るために……生きる……」
「……！」
「エステル・ブライト……。……頼みがある……」
「うん……なに……？」
「こいつは強いようで……。……芯が脆いところがある……。……全ての呪縛が解けた今……。……本当の意味で……。……強くなる必要があるだろう……。……だから頼む……。……これからもこいつを……。……俺たちの弟を……。……支えてやってくれ……」
「えへへ……。言われなくてもそうするつもりだったけど……。……でも……。……今ここでちゃんと約束する。だから……。……どうか安心して……」
「……すまない……。……そして……。……レイン・アクアライト……。……」
「えっ……。……！」
エステルたちが振り返ると、レインが血を流しながらそこに立っていた。
「エステルさん……。……約束通り、戻ってきましたよ……。……」
「ちよつ、ちよつと……。……！どうしてそんなに傷ついているのよ……！」
「ふふ、かなり激しい戦いでしたからね……。……まだ生きていますから……。……大丈夫ですよ……。……」

「そ、それじゃあ、早く手当を……」

「それは後回しで構いません。……それよりも……剣帝レーヴェ……」

「ああ……。お前はこれからも……真実を追い続けるのだろう……。それならば必ず……見つけてみせる……。真実を……明るみにしてみせる……」

「ええ、必ず……」

「……ふふ……。しかしやっと……分かったぞ……。……あの時……カリンが……なぜ……微笑むように逝ったのか……。こんなにも……満たされた……気持ち……だったん……。……だな……」
そのまま剣帝レーヴェの頭が崩れ落ち　静かに逝った。

「……」
「レ……レーヴェ……?」

ヨシユアは剣帝レーヴェを抱きかかえ呼びかけたが反応はない。

「……」
「じよ、冗談はやめてよ……。ちゃんと……聞こえるんだよね……?」

「……」
「……」
「だってそうだろう……!? やつとまた会えたのに……!……やつとまた……笑顔で話せるようになったのに!」

「……」
「頼むから……頼むから返事してよおおおっ!」

「ヨシユア……」

「勝ち逃げ………されちまったか……」

「惜しいことです……」

「おーい……!」

エステルたちがうなだれているとユリア大尉たちがやってきた。

「あ……」

「よかった……無事だったか」

そこでユリア大尉が亡くなった剣帝レーヴェを見た。

「……ひよつとして彼は……」

「……うん……」

「そつか……」

ユリア大尉はそれ以上何も聞かなかった。

「……君たちが降りた後、新車の機械獣が何匹も現れてな……。絶体絶命に陥った時、彼がその機会竜を呼んで戦況を覆してくれたんだ」

ミュラーは剣帝レーヴェがここに来る前に助太刀してくれたことを説明した。

「そうだったんだ……」

「……ワイスマンと《輝く環》はどうしたんじゃ？」

ラッセル博士があるべきはずの《輝く環》がないことに気づき、尋ねた。

「……ワイスマンはどこかに逃げてしまいました。さらに《輝く環》は消失してしまったようです……」

「なに……消えたじゃと？うむ……それはマズイかもしれんな……」

……

「え……」

その時、急に建物が揺れ始めた。

「こ、この揺れって……」

「……《輝く環》は、浮遊都市を維持してきたエネルギー源でもある。それが無くなってしまったら……じきにこの都市は崩壊するじやろっ」

ラッセル博士の言葉にエステルたちに焦りの表情が浮かんだ。

「そ、それでは……！」

「急いで《アルセイユ》に戻った方がよさそうですね……」

「うむ……。すぐに導力が尽きることはないが急いだ方がいいじやろっ。おまえさんたちの船はどうじゃ？」

すぐそばにいたカプア三兄弟に船の修理が終わっているか尋ねた。

「ああ、今ごろ完全に修理が終わっているはずだ」

「戻ったらすぐに飛べるだろうぜ」

「よし……それでは皆、これより撤退を開始する！」

「エレベーター近くに転位用のゲートがあった。順次、それを使って《中枢塔》より脱出するぞ！」

「それとレイン君。君はその様子では歩けまい。誰かに運ばせようか？」

「すみません……。正直……助かります……」

そう言うレインはその場に倒れ落ちた。

「わわっ……レインさん！？」

「大丈夫だ。気力と体力を完全に使い果たし、気絶したようだ。これだけの重傷を負って生きているとは凄まじい身体だな……。ここは俺が運ぼう」

ジンはレインを抱え上げ、アルセイユのメンバーたちは急いで脱出口に向かった。

しかし、ヨシユアは剣帝レーヴェから離れずつつむいたままだった。

「……………」

「ヨシユア……その……。つらいとは思うけど……。早く行かないくちや……………」

「ごめん……。エステル……。頼むから先に行って……。僕のごことは……気にしないでいいから……………」

「……………」

そう言うヨシユアにエステルが近づき、立たせると平手打ちを食らわせた。

「あ……………」

「ヨシユア……しっかりして！レーヴェが言ったこと、ぜんぜん判ってないじゃない！守るために生きろって……。そう言われたんじゃないの！？」

「……………」

「あたしは忘れない！」

「ヨシユアを支えるってこの人と約束したことを！絶対に、忘れな

「いんだから!!」

「エステル……。……ごめん……。本当に僕は……。弱虫だな」

ヨシユアは剣帝レーヴェの使っていた剣を拾った。

「あ……」

「レーヴェ……。これ……。預かっておくよ。ハーメルに……。姉さんにちゃんと届けるからさ」

「……ヨシユア……」

そこで、アガットとユリア大尉がエステルたちを探しにやってきた。

「エステル!ヨシユア!」

「時間がない!とにかく急いでくれ!」

「う、うん……!」

「すみません……。今行きます」

ヨシユアは最後に剣帝レーヴェに別れを告げた。

「(……。……。……。さよなら……。……。レーヴェ)」

第16章 空の軌跡（19）

中枢塔

そこではワイスマン教授が傷を押さえながら独り言を言っていた。

「……馬鹿な……そんな馬鹿な……。こんな事態……《盟主》の予言には無かった……。……ま……待てよ……。た、試されたのは……私も同じだったということか……。くっ……。戻ったら問い質さなくては……」

「悪いけど、それは無理やね」

前からやってきたのはケビン神父だった。

「ケビン・グラハム……。いつの間にこんな所に……。どけ……。貴様のような雑魚に関わっている場合ではない……」

ワイスマン教授が杖を振りかざし、ケビン神父に《魔眼》を使ったが、ケビン神父は星杯の紋章を掲げると《魔眼》を無効化した。

「……貴様……《魔眼》が効かないのか！？いくら星杯騎士とはいえ新米ごときに防げるわけが……」

「あー、スマン。ちよいと三味線弾いてたわ。オレは騎士団の第五位。それなりに修羅場は潜つとる。ま、それでも本調子のおんたに勝つのは難しかったけど……。今なら付け入る隙があるからな」

「なに……」

ケビン神父はワイスマン教授に向かってボウガンを放った。

「くっ……」

ワイスマン教授は避ける暇なくその矢をまともに食らった。

「……オレの本当の任務は《輝く環》の調査やない。最悪の破戒僧、ゲオルグ・ワイスマン　あんたの始末というわけや」

「クク……なるほどな……。だが、この程度の攻撃でこの《白面》を滅するなど……」

その時、ワイスマン教授の身体に異変が起こり始めた。

「な……なんだ……」

瞬く間にワイスマン教授の身体が白く固まり始めた。

「し、『塩の杭』……。かつてノーザンブリア北部を塩の海に変えた禁断の呪具……。私一人を始末するためにこんなものまで持ち出したのか！」

「あんたは少々やりすぎた。いくら教会が中立でも、もはや見過ごすわけにはいかん。大人しく滅びとき」

ケビン神父は塩へと変わっていくワイスマン教授に冷たく言い放った。

「おのれっ……。狗がああっ！」

最期の叫びをあげワイスマン教授は完全に塩の塊と成り果てた。

「狗か……。ま、その通りなんやけどね。……………」

……。ヨシユア君、君は運がいいで。オレなんかと違ってまだまだやり直せるんやから」

「ウフフ……。それってジエラシー？」

突然現れたのは道化師カンパネルラだった。

「《守護騎士》第五位 《外法狩り》ケビン・グラハム。うふふ……噂に違わぬ冷酷ぶりじゃない」

「君は……。たしか《道化師》やったな。悪いけど……。彼の方は手遅れやで」

「フフ……。聞いているかもしれないけど僕の役目は『見届け役』なんだ。計画の全プロセスを把握し、一片の例外もなく《盟主》に報告する。教授の自滅も単なる結果であって防ぐべき事態じゃないんだ」
「なるほどな……。《身喰らう蛇》 まだまだ謎が多そうや」

「フフ、君たち騎士団だってそれは同じだと思っけどねえ。さてと……これで僕の役目も終了だ。落し物も回収できたし、そろそろ帰るとしようかな」

「なに……。！？」

道化師カンパネルラは指を鳴らすと塩となったワイスマン教授が崩れ去った。

「あはは！それではどうもご機嫌よう！また次の機会に会えること

を祈っているよ！」

そして、道化師カンパネルラはワイスマン教授の杖とともに消え去っていった。

「落し物って……まさか……。……。……。……。……。まあいい……。これ以上はオレの権限外や。急いでエステルちゃんたちと合流せんとな……。」

ケビン神父は最後にワイスマン教授を一瞥すると、エステルたちと合流するため急いで引き返していった。

第16章 空の軌跡(20)

……こうしてエステルたちは断続的に発生する揺れの中、《中枢塔》から脱出した。

急激な導力低下のためか《レールハイロウ》は完全に使用不可能となっており……

エステルたちは地下道を通って公園区画に停泊するアルセイユを指すことにした。

エステルたちは急いで地下道を走っていたが、ヨシユアが突然崩れ落ちた。

「ぐっ……」

「ヨシユア!? だ、大丈夫!? どこかケガしていたの!？」

「いや……何でもないよ。ちょっと……目眩めまいがしたただけだから……」

「目眩って……ど、どうしていきなり……」

「……たぶん《聖痕》が消滅した後遺症やろね」

「え……」

突然、ケビン神父がエステルたちの所に駆け寄ってきた。

「何しろ、意識の根っこに巢食つてた部分や。それを取り除いたら、何らかの形で揺れ戻しが起こる。目眩、頭痛、吐き気……しばらくの間は悩まされるやろ」

「そ、そんな……」

「いいんだ、エステル……。全部覚悟した上で……ケビンさんにお願ひしたんだから……」

「……ヨシユア……」

「おーい! 何をやっとなるんじゃ! 急がんと置いていくぞ!」
奥からラッセル博士のはやし立てる声が聞こえてきた。

「あ……うん！もう走れる、ヨシユア？」

「ああ、問題ないよ」

「よし、そんなら急ぐで！」

エステルたちは再び走り始めた。

しかし、走っている途中、ヨシユアが何かの気配に気づき、

「エステル！」

後ろを追いかけてきていたエステルを抱え後ろへと飛びのいた。

その後すぐ、エステルたちの前の通路が落石により破壊され、ケビン神父たちと分断されてしまった。

「……………あ……………」

「さっきの揺れで脆かった部分が崩れたんだ……………」

「だ、大丈夫か！？」

先を走っていたケビン神父が心配そうに言った。

「う、うん……何とか！」

「エステルさん……！？」

「……………ヨシユア……………！？」

先を走っていたメンバーも騒ぎを聞いて引き返してきた。

「お姉ちゃん！お兄ちゃん！」

「チツ、何てこった……………。他に通り道はねえのかよ！」

「《中枢塔》に向かう通路はここだけだったはずよ……………。……………くっ

……………何か方法は……………」

「え、えつと……………。あたしたちに構わずにみんな先に脱出してよ」

「僕たちは何とかして脱出の方法を見つけますから」

「馬鹿言うんじゃないわよ！」

シエラザードが突然、声を荒げた。

「ここであんた達を置いていったら先生にどう顔向けすればいいの！いいから何か方法を考えるわよ！」

「シエラ姉……………」

「すみません……………」

「実際問題、ジャンプして飛び越せる距離じゃない……………。となると

……別のルートを探すしかなさそうだ」

「それならあります……」

レインがジンの肩の上で目を覚ました。

「この地下道は他の地下道と繋がっています。《中枢塔》の前に一つ……開いていなかった地下道がありました。確かあの地下道は《カルマーレ》に通じる非常用避難通路だったはずです……。おそらくこの揺れの影響でそのロックが外れたと思います……。そこに辿り着ければ……」

「なるほど……！」

「エステルちゃん、ヨシユア君！もう他に選択肢はなさそうや！そっちの方から《アルセイユ》に戻るんや！」

「うん……！」

「分かりました……！」

「き、気を付けてね！お姉ちゃん、お兄ちゃん！」

「待っています……《アルセイユ》で！」

「うん！みんなも気を付けて！」

先に行っていたメンバーも先へと急いだ。

「さあ……僕たちも急ごう。どうやら崩壊まであまり時間はなさそうだ」

「うん……了解！《中枢塔》前にある緊急用の避難通路よね！」

地下道を抜け、何とか外へと脱出できたエステルとヨシユア。

そのまま《カルマーレ》をめざし、外郭を走っていたが

「きゃあっ……！」

「……くっ……！」

一際強い揺れが起こり、目の前の通路がひびが入り、崩れ始めた。

「……あっ……！」

「しまった……！」

エステルとヨシユアは慌てて進もうとしたが目の前で通路は完全に崩壊した。

「ああつ……………」

「戻ろう、エステル！」

2人はすぐさま戻ろうとしたが、揺れで脆くなっていた通路は戻ろうとした矢先に崩壊した。

結果、2人は1本の梁の上にある柱に取り残された。

「………………。戻れなく…………。なっちゃったね」

「うん…………。多分、下の細い梁じゃここは支えきれないだろう」

「そっか……………」

「ごめん、エステル…………。僕があの時、足をもつれさせなければ…………」

「…………」

「そういう事は言いつこなし。あたしだって岩の下敷きになるところをヨシユアに助けてもらったしね」

「でも……………」

「えへへ…………。何でかな。こんな状況なのにちっとも怖くないのよね。」

ヨシユアはどう？

「あ…………。うん…………。そうだね。僕もぜんぜん、怖くないかな」

そして、下の梁に亀裂が入り始めた。

「ね…………。ヨシユア。2つ、お願いしてもいい？」

「いいよ」

「1つ目は…………。あたしのこと、抱き締めててくれる？」

「喜んで」

ヨシユアはエステルを抱き締めた。

「えへへ……………」

「…………。それから？」

「えっと、その…………。しつこいって思われたらちよつとイヤなんだけど…………。やっぱりその…………。悔いは残したくないっていうか…………。」

エステルは恥ずかしそうで言葉が続かなかった。

「…………ごめん。その先は僕に言わせて」

代わりにヨシユアがエステルと言いたいことを察した。

「エステル……キスしてもいいかな？」

「あ……。……うん……！」

2人が向き合いキスをすると、そのまま梁の限界がきて、2人は

落下していった。

その直後、中枢塔に亀裂が入り、そこを中心として浮遊都市、《リベル・アーク》が大きく崩れ始めた。

一度崩れ始めるとそこからはものすごい速さで崩れていった。

瓦礫が落下していく中、アルセイユと山猫号はこれ以上待つことは不可能と判断し、エステルたちを取り残したまま浮遊都市を周回しつつ離れていった。

山猫号

「お願い、キール兄！このままじゃヨシユアたちが……！」

「駄目だ、ジヨゼット……。……あの様子じゃ、もう……」

「そんな……」

「……クソツ……。最後の最後で……。こんな時に……。女神は一体何やってやがる！」

アルセイユ

「そ、そんな……」

「ま、間に合わんかったか……」

「う、嘘だろ……」

「や、やだ……。そんなのやだあああつ！」

「ユリアさん！どうかお願いします！避難通路の方向から考えてエステルさんたちは北西の端にいるはずです！どうかアルセイユをそこへ！」

クローゼは必死にユリア大尉に懇願した。

「……申し訳ありません……。いくら殿下の命令でもそれは……従いかねます」

「……アルセイユの推力も完全には戻っていない状態だ。今、再び都市に近付けば間違いなく崩壊に巻き込まれる。そうですね、ラッセル博士？」

「……その通りじゃ」

「……そ、そんな………」

「はは……参ったな……。場を和ませようと思っても頭が真っ白だよ

……」

「……ああ、俺もだ」

「くっ……私がおめおめと生き残るとは……」

「あいつら……うっ……。これからだってのに……こんな事になっちまって……」

「エステルちゃん……。……ヨシユア君……。あれ……。？」

皆が悲しみに暮れる中、ドロシーが声を上げた。

「おい……。ドロシー……。こんな時くらい……。大人しくしてろっての……」

「いえ、その……。……なんだかジーク君が嬉しそうに飛んでいったなあって」

「へ……」

「あ……」

その時、ユリア大尉が何かを発見したようだった。

ジークが飛んでいった先には 古代竜レグナートに乗っていた
エステルたちがいた。

加えて、カシウスも乗っていた。

「ちょ、ちよっとレグナート！どうしてあなたがこんな所に……。
それにどうして父さんまでここにいるのよっ！」

「なに、王国全土の導力がようやく回復してくれたんでな。モルガ
ン将軍に後事を任せてこうして彼に乗せてもらったんだ」

「の、乗せてもらったって……」

「さすがに驚いたよ……。……初めまして、レグナート。あなたの
事はエステルから聞いています。危ないところを助けて頂いて本当
にありがとうございます」

「フフ、礼には及ばぬ。新たな風が吹いたので……。そのついでに
翼を運んだだけだ」

「えへへ……。でも、本当に助かったわ。あれ、そういえば……。確か
あなたって、人を見守るだけの存在なのよね？あたしたちを助けて
よかったの？」

「それは《輝く環》を前におぬしらが答えを出すまでのことだ。そ
して答えが出された今、古の盟約は解かれ、禁忌も消えた。ゆえに
《剣聖》の頼みに応じ、こうして迎えに来たというわけだ」

「古の盟約……」

「訳、分からないんですけど……」

「安心しろ、俺にも分からない。何しろこの堅物ときたら肝心な事は
口々に喋ってくれないのだからな」

「フフ、許せ。竜には竜のしがらみがある。ただ一つ言えることは
運命の歯車は、今まさに回り始めたばかりということだ。そして、
一度回り始めた歯車は最後まで止まることはない……。心しておく
ことだな」

「そうか……」

「ちょ、ちよっと待って……！」

「また同じようなことがリベールで起こるといふの？」

「いや、その運命は別の場所で、別の者たちが引き受けることになるだろう。とにかく今回はお前たちも本当によくやった。今はただ何も考えず、ゆっくり休むといいだろう。かけがえのない仲間と共にな」

「あ……」

そして、エステルたちは甲板に出た仲間と再会することとなった。

ここに今、エステルたちはベールの異変を完全に終結させることに成功したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3106/>

英雄伝説 空の軌跡 - ソラノキセキ - FC・SC・the 3rd

2011年10月28日13時14分発行